

平成 26 年度 博士学位論文  
沖縄県立芸術大学大学院

# 組踊台本の基礎的研究

A Fundamental Study on a KUMIODORI script.

鈴木 耕太

# 組踊台本の基礎的研究

## 【目次】

第一章	はじめに――本研究の意義――	1頁	
第一節	「組踊本」校合の必要性	1頁	
1	組踊と台本、その書写関係について	1頁	
2	組踊「テキスト」の構成について	9頁	
3	校合の必要性 (組踊のテキスト「組踊本」研究史を通して)	13頁	
第二節	「組踊本」にみられる表記の異同のもたらす問題	25頁	
1	着付について	25頁	
2	詞章について	26頁	
3	音曲について	27頁	
4	ト書きについて	28頁	
5	小括	29頁	
第三節	まとめ	29頁	
	【第一章 参考資料】	33頁	
第二章	「組踊本」の校合		
第一節	校合の対象となる組踊作品	41頁	
1	はじめに	41頁	
			2 冊封使録にみえる組踊作品 41頁
			3 琉球側の冊封史料にみえる組踊作品 44頁
			4 小括 49頁
			第二節 『尚家旧蔵組踊集』と諸家・地方伝来組踊集の校合 50頁
			1 はじめに (『尚家旧蔵組踊集』と王府関係の組踊台本) 50頁
			i 王府と関係のある組踊集について 50頁
			ii 『尚家旧蔵組踊集』について 53頁
			iii 『尚家旧蔵組踊集』の体裁について 55頁
			iv 『尚家旧蔵組踊集』における問題 55頁
			2 『尚家旧蔵組踊集』収録作品の対校本について 57頁
			i 『尚家旧蔵組踊集』収録作品の対校本 57頁
			ii 諸家・地方伝来組踊集について 60頁
			3 『尚家旧蔵組踊集』収録作品と 諸家・地方伝来組踊集の校合 71頁
			i 辺戸之大王 71頁
			ii 執心鐘入 77頁
			iii 銘苅子 96頁
			iv 大川敵討 120頁
			v 義臣物語 228頁



第五章 全体のまとめと今後の課題  
参考文献・参考資料

校合資料

(附) 組踊台本の基礎的研究校合資料

1 (446) 441 437  
頁 頁 頁 頁

---

## 凡例

- 本論文の章・節の表記は「第〓章」、「第〓節」とした。項の表記は大項目を「1」「2」…とし中項目は「i」「ii」…とした。
- 各章の注および参考資料は章末に記した。
- 論文中に引用した資料・参考文献などの書誌情報については論文末に「参考文献・参考資料」としてまとめた。
- 論文内で引用した校合データについて、各組踊作品の詞章を巻末に載せた「校合資料」のデータを参照する際、本文は縦書きであるが、データ番号のアラビア数字の桁が最大で4桁になるため、体裁上、そのまま縦書きで掲載した。例（No. 2039）
- 論文中に引用した資料の漢字表記は旧字体・異体字ともに資料のままとした。
- 論文中で何度も引用する書籍の略称については各章で示した。例（『尚家本』『戯曲集』）
- 論文中に出てくる人名については敬称を略した。

## 組踊台本の基礎的研究

### 第一章 はじめに — 本研究の意義 —

#### 第一節 「組踊本」校合の必要性

##### 1 組踊と台本、その書写関係について

組踊が玉城朝薫によつてはじめて創作されたことは周知の事実である。朝薫は一七一八（康熙五七）年、国王の命を受け冠船躍奉行に任命され、その翌年の尚敬王の冊封の時、重陽宴の舞台で正使海宝・副使徐葆光らを迎えた宴席で組踊を上演したのである。初演の演目は「二童敵討」と「執心鐘入」であった。

冊封は琉球国にとつて最も重要な行事の一つであった。中国皇帝が琉球国中山王を封ずる事を第一の目的とし、冊封には七つの大宴が催される。これを「七宴」という。七宴はまず先王を悼む論祭宴が那覇の崇元寺で行われ、その後は首里城の正殿に特設の舞台を設け国王を封ずる冊封宴、中秋宴、重陽宴、拝辞宴、餞別宴が行われる。そして最後に冊封使一行の宿泊していた那覇の大使館での望舟宴を終えて、冊封使一行は帰途に就く準備をする。冊封は宗主国である中国から新しい国王への勅書と王冠（皮弁冠）と王衣（御蟒緞）が与えられ、琉球国王を権威づける行事であるためにとっても重要であ

った。冊封使一行は琉球国王へ冠を与えるため琉球へとやってくるため、琉球ではその船や冊封行事を「御冠船」（ウクワンシン）と形容した。明代は中国から皮弁冠と御蟒緞が与えられていたが、清代になるとそれが与えられなくなった。しかし、琉球は明代に与えられていた皮弁冠と御蟒緞を独自に仕立て、清代に至つてもなお冊封の際に使用していたのである。「御冠船」という名称に象徴されるように、王冠と王衣が「与えられる」という事を琉球は何よりも大切にしたのであった。すなわち、冊封の際に舞台上演された芸能の事を「御冠船芸能」と呼んだということは、琉球国で最も大切な芸能であり、「御冠船芸能」は現在も伝承されるべき「古典芸能」となっているのである。

組踊は一七一九年に初演された後、冊封が行われる度にその舞台芸能として冊封使や国王の前で上演され、また冊封を終えたあとには「御膳進上」や「お祝い上げ」と呼ばれる冊封終了後の国内行事の舞台上国王や薩摩在番、琉球士族らの前で上演された。組踊は琉球国の重要な行事の舞台に供され、尚敬王以降の冊封の宴席には欠かせない、まさに「国劇<sup>注二</sup>」であった。

朝薫が創作した組踊という芸能には「台本」が存在する（ここでは仮に「テキスト」とする）。池宮正治は組踊という演劇が、発生した段階で高度な演劇である事を説明するために、朝薫が組踊を創

作したその時点で「テキスト」が存在したと言及している<sup>(注三)</sup>。しかし、残念ながら朝薫の時代の組踊の「テキスト」は現存していないのである。ここでいう組踊の「テキスト」とは、台詞はもちろん、使用される音曲、そして上演のために必要な約束事などが記載されており、劇を上演する場合にはなくてはならないものである。しかし、朝薫が作った組踊の「テキスト」は現存していないので、初めて創作された時の組踊の「テキスト」がどのような内容であったのか、というのは謎のままである。

一般的に組踊の「台本」と呼んでいるものは、おもに詞章と音曲、ごく少数のものにはト書き、着付、当時の配役が記載されているものである。近世末期から戦前にかけてかなりの数が書写・出版されたと思われる、現在も戦火をくぐり抜けて多く現存している<sup>(注三)</sup>。組踊は上演するために、詞章を中心とした「テキスト」を作り、それは演ずる者たちのテキストとして活用されたと考えられる。朝薫の作った「テキスト」が、現在見ることできる多くの筆写された「テキスト」と同じようなものであったか、また、ト書きや舞台での様子を書き込んだ、より上演の手引きとなるようなものであったかどうかはわからない。しかし、現存している組踊「テキスト」の多くは、舞台上での動きを指示するト書きが書かれているものは少なく、「テキスト」そのものだけでは、舞台上の役者の動きや登退場の場

所、また、役者の立ち位置などがわからないのが現状であり、「テキスト」そのものを読むだけでは舞台の状況が想像しにくいものになっている。その面からいえば、組踊においての「テキスト」は言い換えれば詞章と音曲を書き留めたものであり、一般的な「台本」と呼ぶにふさわしいものなのかさえも一考する余地がある。本研究では、その呼称についても、次項「2 台本の構成について」において考察を試みる。そして、この「テキスト」は王府だけでなく士族層も所持しており、組踊を上演する機会が恐らく多かった者達によつて、現在まで遺されてきたのであることが想像できる。

組踊は王府の行事に上演される芸能であり、一八三八年に行われた尚育王の冊封の『躍方日記』を見ると、躍奉行という王府が臨時に設けた奉行の管理のもとで、稽古・上演されてきたことがわかる。一九〇八（明治四一）年生まれの高武良章の話によると、首里の士族たちは日常的に組踊を稽古し、素謡のように詞章を詠む、座敷での組踊も行われていた<sup>(注四)</sup>。また、同じようなことは、真境名安興も「組踊と能楽との考察」で述べている<sup>(注五)</sup>。組踊は「国劇」であるからこそ、士族たちの重要な教養として学ばれたことが分かる事例であろう。

しかし、ここで一つの疑問が残る。士族たちはどのようにして組踊の「テキスト」を手に入れ、日常的に稽古をしたのであろうか。

組踊は王府によって創られた芸能である。たとえば伊波普猷が編んだ『校註 琉球戯曲集』<sup>(注六)</sup>（以下『戯曲集』）でわかるように、王府所蔵で実際の冊封の中秋宴・重陽宴での上演に沿った記録が存在し、伊波普猷はそれを底本として『戯曲集』を編集している。一八三八（道光十八）年（以下、戊年とする）の冊封の『躍方日記』には、具体的に組踊の「テキスト」を集めた『組踊集』というタイトルの書物や、『戯曲集』の底本のようなスタイルの記録を作製したという記述は見られないが、「一 同時躍番組、躍組に相見得候付略す<sup>(注七)</sup>」や「一 同時躍番組之義、躍組に相見得候付略<sup>(注八)</sup>」（傍線は筆者による）と記載される「躍番組」の記載された「躍組」となるものが存在しているようである。

「躍番組」という記録のスタイルは本田安次の『南島探訪記』<sup>(注九)</sup>に収録されている、同治六（一八六七）年のものが参考になる。ここには佐敷按司の生年祝いのために準備した舞踊が記載されており、次のように舞踊名、採物、節名、歌詞が記載されている。

若 衆 躍 両 扇 子 舞  
こてい節

一 常盤なるまつのかわるこていさめ  
いつも春くれば いろとまさる

このような記載は、『戯曲集』とほぼ同じである。『戯曲集』には当

時行われた舞台の演者の名前と着付が記されており、先に示した「躍番組」より詳細な記載となっている。しかし、踊りの節名、さらには歌詞も『南島探訪記』と同じように記されている。仲秋宴に供された「扇子をどり」を例に見てみよう。

扇子をどり

安里里之子 佐渡山松金

名嘉地眞蒲戸 粟國眞三郎

着付、髪半向頭巾、金花並金銀水引差、板縮緬振袖袷衣裳、裏紕さや錦之引羽織、紕さや足袋、長巾に而都而助有る。

歌 こてぶし

一 常盤なる松の

かはることないさめ

いつも春くれば

いろど まさる

先に引用した『南島探訪記』より記述内容が細かく、情報量が多いが、踊りのタイトル、節名、歌詞が同じように記載されている。

「躍組」には「躍番組」が記されている、ということは先の記述からわかることである。『戯曲集』のように詳細な記載であったかは不明であるが、少なくとも『南島探訪記』に収録されている「躍番組」のように、踊りの名前や節名、歌詞は記載されていたであ



う。先の『躍方日記』の引用部分は、前者が中秋宴の当日であり、後者の引用部分は重陽宴の当日のものである。この記述から戌年の躍方では『戯曲集』のような上演プログラムや、現存しないが『踊方日記』でいう「躍組」と捉えられるような「躍番組」が記された資料を作っていたことが考えられる。『躍方日記』を見ると、冊封の行われる前年（一八三七年）の二月二日の項に「申年組躍」「辰年組躍」として上演したとみられる組踊の演目が記載されている。「申年」は一八〇〇年に行われた冊封で、「辰年」は一八〇八年に行われた冊封である。どちらも行われた年の干支を通称としている。戌年の上演演目は、前回・前々回の冊封に上演された演目に準じて決められており、その演目を『躍方日記』に記載している。これによると前回、前々回の冊封の演目を王府は記録しており、その資料を参考に、上演する組踊の演目を決めていたことがうかがえる。また、同じような事例は『演戯故事』という、冊封使に渡す組踊の荒筋・舞踊の詞章を漢訳した資料からもうかがえる。『演戯故事』にみられる組踊の演目を、戌年と寅年で比較すると、戌年が「孝行之巻」「義臣物語」「二童敵討」「大城崩」「大川敵討」「瀬長按司」であるのに対し、寅年（一八六六年）はその中から「瀬長按司」だけ省かれており、体裁・記載ともにほとんど同じである。したがってこの結果からも、前回の冊封の資料（『演戯故事』）を臨写・書写し

たと考えられる。蛇足ではあるが『演戯故事』の作成は久米士族がその作業にあたったと思われる記事が、蔡氏家譜の十六世、蔡修の家譜に見られる。そこには辰年の冊封が行なわれるにあたり「首里那覇之戯本」を「編成」するよう任命されている<sup>注10</sup>。この「戯本」を「編成」することが『演戯故事』を作成した、という確証にはならないが、可能性としては高いだろう。この事例が『演戯故事』作成のものであるとすれば、少なくとも王府は冠船のために、前回の冊封の資料を書写するための役職を作っていたことがうかがえる。

『躍方日記』の内容、『演戯故事』の記載内容から、「御冠船」の芸能に関する資料は前回の冊封の記録から写す、という作業が行われていたと推測できよう。つまり、この冊封関係文書を通して考えられることは、琉球では前回・前々回の内容を踏まえ資料を作成する、換言すれば、今回も前回の内容をコピーし、いらぬものは削除し、新たな内容を付け加える。といったように資料を作成することということである。『演戯故事』のように一字一句丸写しであることから、組踊の「テキスト」もまた同じように編集されたという可能性も考えられる。このような考えからは、『戯曲集』の底本となるような資料が冊封の度に毎回作成されており、作成する際には前回の内容を一字一句写すということが推測できる。

この事を鑑みれば、王府所蔵で組踊の「テキスト」を含んだ資料

があり、それを行事ごとに写して使用していたと考えることができよう。

繰り返しになるが、組踊は王府の命によって玉城朝薫が創作した演劇である。『球陽』には「首里の向受祐（玉城親雲上朝薫）は、博く技芸に通ず。命じて戲師と為し、始めて本国の故事を以て戲を作り、人に教へ、次年演戲して冊封天使の宴席に興せしむ。其の戲、此れよりして始まる<sup>（注二）</sup>」と記載されており、王府が朝薫を「戲師」に命じ、王府からの命によって朝薫は組踊を創作したのである。よって、組踊は私的な創作意欲から生まれた芸能ではなく、国家を媒介にして生まれた芸能であるのであって、王府のオフィシャルな芸能、言い換えれば「国劇」であることが言えるのである。初演されたのは冊封の宴である。国王の一世一代の重要な行事の宴席に供された。したがって、組踊の資料を考える上で、王府の資料は第一級のものであると考えられるのである。

このような考えがあるからこそ、伊波普猷は士族家に書写された組踊集や沖縄県立沖縄図書館に所蔵されている『組踊集』を底本とせず、王府に所蔵されていた「テキスト」（ここではもともと王府が所蔵していた『羽地本』『小禄本』を指す。伊波普猷が使用したのは、すでに沖縄県立沖縄図書館に寄贈された後の同書を用いた）を底本として『戯曲集』を編んだのである。

以上のことから、王府に所蔵されている組踊の「テキスト」は、組踊の「テキスト」を考える上でよりよいものであると考えられるのである。現存する、王府が所蔵していた組踊集は、近習方に収められているものが一冊だけである。『演戲故事』のように、組踊を演じる際に資料は古い物から書写して使用している事を考えると、王府に所蔵されていた組踊集は、上演のたびに古いテキストから書写されたことも推測できる。「戊年」の御冠船を『躍方日記』からみていくと、「戊年」の冊封使に披露した組踊の演目は、一代前の冊封である「申年」の演目と完全に一致する<sup>（注三）</sup>。また、『躍方日記』には演目だけでなく事務的な事柄に対しても「先例之通」という言葉が散見される<sup>（注三）</sup>。これは、躍方の資料の作成に関して「先例」が第一に重んじられていることが推測できる。数十年に一度の行事で、なおかつ国王一世一代の行事である。「先例」を踏まえミスを少なくしたい、と考えるのは官僚として当たり前のことである。したがって、冠船の資料も「先例」に従って製作されていると考えられ、芸能関連の資料もまた「先例」に倣い、書写されたと考えることができる。

すなわち、組踊の台本は『戯曲集』の底本のように、王府の躍方が作成したものがよりよいものであると考えられる。現存する王府所蔵の組踊集は先に挙げた近習方の所蔵であったものが一冊だけ残

されているだけであるが、前述の『戯曲集』も活字化はされているが、底本に王府の「テキスト」を用いている点から、王府所管の資料に近いものということが言えるのである。

では、『今帰仁御殿本組踊集』などに代表されるような、士族階級の所持していた『組踊集』はどうだろうか。首里士族の中には「組踊集」を書写して持っていた家があった。『沖縄の組踊(Ⅱ)』には個人や公共機関に所蔵されている「組踊集」が報告されており、その中には表紙に「今帰仁御殿」と明記された『今帰仁御殿本組踊集』や『恩河本小禄御殿本組踊集』、『具志頭本組踊集』などの収録演目などが調査されている。ここに挙げたのはいずれも五作品以上の組踊が収録されている冊子であり、いくつかの組踊「テキスト」がまとめられているため「組踊集」とよばれ、どれもタイトルは「組踊集」であるため、写本を区別するために所蔵元の名を冠して「○○家本組踊集」と呼ばれている。仲吉良光の聞き書きによれば、躍方に任命されると「その按司家には、御評定所本、その他民間からもいろいろな組踊本が集まってきた<sup>(注一四)</sup>」という。この聞き書きは、先に指摘した躍方が編集した組踊集が王府に存在していたこと、また近世の士族階級の家には組踊台本が書写されていたことを示唆しており、興味深い。仲吉良光が「御評定所本」としているのは、冠船躍方関係の資料は躍方が臨時奉行職であったので評定所がその

文書を管理していた、と推測できる。最後の冊封である寅年の躍奉行、小禄按司の日記『冠船躍奉行小禄按司日記』もその表紙の左下に「評定所」と記載されており、評定所が踊奉行の資料を管轄していたことがうかがえる<sup>(注一五)</sup>。

仲吉良光の聞き書きはさらに「(集まってきた組踊の作品の中には…筆者註)余り好評でない『孟母三遷の巻』という作もあったらしい。それを精選して選ばれた舞台に立つ出演者及び予備員、地謡の音楽家等何千人かに分与、必死の舞台稽古を命じた」とある。このことから、躍奉行の按司奉行を務める家には、王府所管の「テキスト」が集まってきて、それはさらに出演者らにも書写されて分与されていたことが示唆されている。躍方には按司奉行だけでなく多くの士族が参加する。参加する琉球の士族階級にも格差があり、躍奉行の按司奉行を歴任している人物は士族の中でも上級の家柄ばかりである。それ以外の出演者の家にも「テキスト」は分与されたのであろうか。

金武良章によると、按司奉行以下の家でも組踊が演じられ、台詞の朗唱が行われていたことがうかがえる<sup>(注一六)</sup>。金武良章によると明治後期から大正期に浦添御殿で組踊の朗唱が行われた際、集まった者は「曲目がどれであれ、すべての台詞をそらんじて」いた<sup>(注一七)</sup>とあり、この時の浦添御殿の全ての出席者は明らかではないが、寅

年の躍奉行であった安室親雲上や金武良仁らが、組踊の詞章を暗記しており、その様子が当時子どもであった金武良章の目には「遊びとは見えなかった」(注一八)と写っており、「お気持ちとしては、まだお城勤めがつづいていた」(注一九)と語っていることから、彼ら士族は王府の重要な仕事として芸能・組踊を位置づけており、当時の士族は日頃から組踊を稽古していたことがうかがえる。また、このような事例は真境名安興の論考「組踊と能楽との考察」にも取り上げられている。それによると「組踊は舞臺で演ぜないでも、同好の人々が集つて朗唱するだけで、その使命が達せられたもので即ち秋の夜長の夜伽などに能く斯やうな催しがあつたもので、今日でもその朗讀會がある(注二〇)」としていて、昭和初期(真境名のこの論文の初出は昭和三年の『南島研究』第二輯である)においても組踊の朗讀會が行われていたことがわかる。

真境名の事例は新しいものであるが、金武良章の話を含めて考えると、もともと琉球の士族の生活の中に、組踊を朗読したり稽古することが普通に行われていたということが言えるであろう。そして、当然ではあるが、その稽古のために組踊「テキスト」を書写していたと考えられる。大正期には活版本の組踊の台本集が刊行され(注二一)、また新聞にも組踊の詞章が掲載され(注二二)、一般の人でも組踊の詞章を見ることができるようになるが、琉球処分以前は士族どうしで台

本を書写することは、稽古する前の大前提であったと考えられる。仲吉の聞き書き、金武や真境名の報告からは、士族家が所蔵している筆写本は、組踊を稽古する、あるいは組踊を稽古する前(する目的)に筆写したと考える方が自然である。首里の士族達が組踊を日常的に稽古している事例は述べたが、組踊の写本は先島地方にも残っている。特に石垣島には多くの写本が残っており、写本を所有していたのは大浜家や石垣家、豊川家というような八重山士族であった。

石垣家を例にみると、『石垣市史 八重山資料集1 石垣家文書』には、文化面では謡曲・立花・作庭・乗馬法・示現流剣法・弓道などの文書が石垣家で保存されている。近世の琉球士族が様々な事を学ばなければならなかったことは、『羽地仕置』(注二三)や『阿嘉直識遺言書』(注二四)にすでに示されているが、八重山士族においても同様に諸芸を嗜むために学んでいたことがうかがえ、その中に組踊も位置づけられていたことがうかがえるのである。

このように、首里の士族だけでなく、八重山士族においても組踊は学ぶべき教養の一つであったと思われる。士族を中心に組踊の「テキスト」が残されていることなどを考えると、「テキスト」の書写ルートは「王府 ↓ 躍奉行の按司奉行や出演者 ↓ 一般士族 ↓ 先島の士族」というふうに応用されていったものと推測できるの

ではないか。王府の「テキスト」（行政文書）から、歴代の躍奉行の按司奉行へ、按司奉行から出演する士族や一般士族へ、さらに先島に住む士族達が首里奉公の際に書写する、といった流れである。このような流れから「テキスト」は広まり、現在みられるように、沖縄本島北部・周辺離島・宮古（厳密に言えば多良間島）・八重山・与那国といった先島まで組踊の「テキスト」は伝播していったと考えられないか。もちろん、この流れは必ずしも王府から八重山の士族まで直線的に流れるわけではなく、「テキスト」を書写した士族から別の士族が借りて書写する、といったように書写の流れは横にも広がりながら伝播していったと考えられよう。しかし、一番大事なものは組踊が王府の命によって創作された芸能である、ということである。王府によって作られた組踊の「テキスト」や資料がなければ、士族家に所蔵された「テキスト」は生まれなかったと考えることができると思われる。

このような組踊の「テキスト」の書写ルートが正しいのであれば、組踊には伊波普猷の『戯曲集』の底本として使用された王府で管理した組踊の「テキスト」があり、それをもとに、出演する者たちが書写し、各士族の家で格護される「組踊集」となった、と考えることができる。理由としては、実際に現存する「組踊集」の名前には「今帰仁御殿」「小禄御殿」などのように、所蔵しているその家の

名前を冠しているものが多い。士族の所有している「テキスト」が多く現存しているのである。また、八重山では豊川家が大浜家にある組踊の「テキスト」を書写していると思われる事例<sup>（注三五）</sup>もあり、前述したような組踊の台本が士族から士族へと伝播していった、ということが推測できるのである。この事例では前述した書写ルートの中で最後の部分にあたる、先島の士族層へ伝播したあと、島内において先島の士族どうしで組踊の「テキスト」を書写していたことが明らかとなっている。残念ながら、大浜家には「高山敵討」の写本が見つかっていないため、豊川家の「高山敵討」と比較検討することができないが、士族同士で組踊の「テキスト」を書写している貴重な事例である。

士族層以外が所持していた「テキスト」の中で、沖縄本島に見られるものは、各地域の公民館や青年団（二才中ともいう）が所蔵しているものである。その中には組踊の現存最古のものである、宜野座村の松田（旧古知屋部落）に伝わる「本部大主」（一八一八年の写本）のように、貴重なものも多い。地方に遺された組踊の「テキスト」は松田以外にも、名護・恩納・読谷など様々な地域にある<sup>（注三六）</sup>。松田に伝わった「本部大主」の事例からは、士族以外にも地方の人々に組踊の「テキスト」が伝わっており、組踊が初演されて一〇〇年経った頃にはすでに、地方に組踊の「テキスト」が伝えられていた

ということがあがる。

現在でも尚家旧蔵の組踊集や、士族家所有の組踊集、また地方の自治会が所有するものなど、沖縄本島だけでなく、八重山・与那国島まで組踊の「テキスト」が確認されており、現存する作品数も約七十作品<sup>(注二七)</sup>と、組踊は沖縄の古典芸能の中でも一番多くの演目が現存していると言っても良い。これだけ多くの演目が遺っているということは、組踊が「テキスト」を持っていたからである、ということも過言ではなからう。

さらに、一七一九年、冊封の宴席に供するために誕生した組踊は、明治の商業芝居の時代を経て、沖縄戦など伝承に関わる危機を凌ぎながら、現在まで遺され、伝承されてきた古典芸能であり、その保存や、上演には「テキスト」が大きな役割を担っているとについても過言ではない。実際に、近世期や戦前にも舞台上演が確認できない組踊も、「テキスト」が現存していることで「復活上演」が行われた作品も少なくない<sup>(注二八)</sup>。

このように、沖縄戦をくぐり抜けてきた組踊の「テキスト」は、現在まで多く残されているが、「テキスト」についての体系的な研究はまだまだ途上の段階である。これまでの組踊の「テキスト」研究については、「三 校合の必要性」で言及する。では次に、組踊の「テキスト」の構成について見ていこう。

## 2 組踊「テキスト」の構成について

組踊の「テキスト」は、①着付、②役名と詞章、③音曲、④卜書き、というように大きく分けると四つの要素で構成されている。

まず①着付には、上演に欠かせない役者の衣装と採物(小道具)が記されており、非常に重要なものである。『尚家本組踊集』の「執心鐘入」の中城若松の着付を例にすると以下のように記載されている。「若松<sup>a</sup>半向頭巾天鷲織花金銀水引はさら<sup>b</sup>花笠<sup>c</sup>板<sup>d</sup>縮緬振袖裕衣裳脚胖足袋<sup>e</sup>杖」(傍線は筆者による)。aが役名、bが髪型と髪に飾るものなどを指定しており、cが被るものの指定、dが身に着ける衣裳、e小道具となっている。着付はほぼこのような記載であるが、この記載がみられる「テキスト」は極端に少なく、現在では王府所蔵(であった)の「テキスト」に見られる。旧士族の所蔵していた「テキスト」や地方に所蔵されている「テキスト」には、ごくわずかしみられないものである。

②役名と詞章であるが、図1a(以下、図はすべて章末の「参考資料」を参照)で示したように役名はほとんどの「テキスト」において台詞の右肩に記載されており、どの台詞がどの役者のものなのかはつきりわかるようになってきている(図1a参照)。また、台詞は役名の左側から「一」と続けられている。図1aのように別の役者

の台詞になると改行している「テキスト」と、紙幅の関係なのか、  
図1bに示した『恩河本小祿御殿本組踊集』のように続け書きにな  
っているものがあるが、役ごとの台詞はわかるようになってい  
るので、実際の上演には大差はないと思われる。だが、図2のように、  
同じ役者が続けて台詞を述べる際にも、「同」や役名が書かれていな  
い状態で改行している場合がある。この場合は詳細な検討が必要だ  
が、前の台詞(図2三行目の同人の台詞)と後の台詞(図2七行目  
の同人の台詞)は続けて台詞を唱えるのではなく、何らかの間や所  
作があったことが考えられる。実際に図2で掲げている「大川敵討」  
では、前の同人の台詞では倒れている母親の側で台詞を唱え、後の  
同人の台詞では、乙樽が子供の乙松を抱いて、母親から離れた場所  
で台詞を唱えており、間が空いている。図3の天願若按司敵討の方  
は若按司の台詞が続けられているが、Aは道行の途中、Bは宿を乞  
う家の前、と場面が異なっている。

③音曲は、図4のように歌詞を伴わない演奏のみの音曲(手事)  
と、歌詞の伴った節歌に分けられ、前者は現在の上演では「按司手  
事」「大主手事」「若按司手事」「連れ弾き」と呼ばれる四曲が伝承さ  
れており、これらは登場人物の登退場曲として用いられている。こ  
れらの音曲(手事)は、右の呼び名の通り、按司・大主・若按司が  
舞台上に登退場する時や間の者の登退場に演奏されるが、この表記は

図4にみられるように『戯曲集』にしかなく、「手毎」と表記されて  
いる。また、『戯曲集』でも、按司が登退場する際に「手毎」の記載  
がみられないものもある(注二五)ので、他の「テキスト」同様、考察が  
必要である。

節歌は歌詞を伴うもので、登場人物の心情を表現するために歌わ  
れることが多いが、劇中に舞われる舞踊曲としても歌われる。登場  
人物の心象表現として歌われる際に前奏(ウタムチ)が入ることは  
稀で、そのため琉球舞踊の場合の舞踊曲とは異なる部分がある。節  
歌の記載は台詞と同様で、右肩に節名、それに続けて「一」と歌詞  
が書かれている(図1aに「女出羽干瀬節」とある)。また、節名  
以外に登退場などを指示している場合もあり、その場合は「若松道  
行歌 金武ぶし 橋掛より出る(注三〇)」という風に「役名+行動(出  
羽・道行など)+節名+登退場の場所」のように記載される。図1  
bの『恩河本小祿御殿本組踊集』では「若松出羽金武ぶし」とある  
ように、どの「テキスト」でも必ず役名が最初に記載され、行動以  
下の順番は「テキスト」によって異なる。

④ト書きが記載されている「テキスト」は非常に少ない。また、  
図5・図6のように記載のある「テキスト」でもその内容は非常に  
情報が少なく、役者の具体的な所作や舞台上での位置などを知らせ  
るものではない。

また、「テキスト」の中には台詞を区切るための「点(・)」や「丸(○)」(句点記号よりもやや大きい場合もある)という記号が付されているものもある。これらの句読点は書写した段階で入ったものではなく、いったん書写し終えた「テキスト」を読んだ上で、台詞の区切りを入れたように思われる。図1・図2・図6などは「丸」記号が朱で記されているので書写段階で入れたとは考えにくい。

以上が組踊の「テキスト」の特徴である。さて、前述したように一般的に言われている「台本」という名称について考えてみたい。通常、演劇の「台本」といえば、上演に則したものをさす。『広辞苑』よると「台本」は「台詞の書いてある本。脚本。シナリオ」<sup>(注三)</sup>とある。また『演劇大百科事典』には、「台本」はなく、「台帳」とあり、特に「歌舞伎の毛筆で書かれた写本の事」とある。『日本国語大辞典』には「演劇や映画の仕組み、舞台装置、俳優のせりふ、動作などを書いた、上演のもとになる本。脚本。シナリオ」<sup>(注三)</sup>とあり、組踊の「テキスト」は『広辞苑』の示すような広義の意味の「台本」とは言えるが、『日本国語大辞典』にみられるような、上演のもとになる「台本」と同意のものとして考えるのは若干の保留が必要と考えられる。

これまで述べてきたように、組踊の「テキスト」は主に詞章と音曲が記載されており、舞台上での役者の所作などを記したト書きは

少ない。したがって、現代演劇のように完全に舞台を再現することができる「台本」とはいえない。上演に際しては必ずさまざまな完全な部分(特に所作や登退場の場所、舞台における登場人物の位置など)を補わなくてはならないのである。その意味では簡単に「台本」というタームで組踊の「テキスト」を捉えてはいけないのである。図7a・図7bは現在の国立劇場おきなわで使用されている「上演台本」である。上段に役者の舞台上の位置、中段に詞章、音曲、下段に訳が記載されている。このように舞台を詳細に表す内容が記載されてこそ、「上演台本」と呼べるのではないか<sup>(注三)</sup>。ここで示した「上演台本」と組踊の書写本、活字本、さらには『戯曲集』とは記載が異なる。前者は舞台に出演する者にとって必要な情報が記載されており、作品を初めて演ずる者でも「上演台本」を読めば場面展開や役者の立ち位置、舞台に何人の役者がいるかなど、舞台構成をある程度把握できるものである。しかし、後者はあらかじめ作品全体が分かる者にしか舞台構成の詳細を把握することができないのである。したがって後者は組踊を知る者の音曲と詞章だけをメモしたような「テキスト」とも捉えられる。このように前者と後者の「テキスト」を読んだ際には立ち位置や出入りなどの舞台構成の認識に大きな差があるにもかかわらず、「テキスト」を簡単に「台本」とは呼ぶことはできない。



「台本」そのものの名称において、浄瑠璃・歌舞伎などでは「台本」のことを「台帳」「根本」「正本」といい、作品すべての内容が記載されているものを「丸本」、一段または一部分だけを抜き出したものは「抜本」、稽古用のものは「稽古本」などと云っている<sup>(注三四)</sup>。組踊の「テキスト」は、形式としては浄瑠璃・歌舞伎の筆写本（版本もある）である「正本」の要素が強い。なぜならば、作品全体が収められており、組踊には一部分、あるいは一場面だけを取り出した浄瑠璃・歌舞伎で言うところの「抜本」は確認されていないからである。しかし「正本」には、この台本が誤りなく正しいものであると言うことを示すための役者の奥書がされているが組踊にはそのような奥書は一切見られない。よって、記された形式が似ているからといって、歌舞伎や浄瑠璃と同じタームで組踊の「テキスト」の名称を考えてはいけないのである。

組踊の「テキスト」は主に役名と詞章と音曲で成り立っている。そして舞台上の間や所作事など舞台空間での動きに関しては記述されない。現代演劇や本土芸能の「台本」とは異なり、独自の形式で記載されているものである。伊波普猷は『戯曲集』の「凡例」において「冠船渡來毎に首里王府で編纂した組踊本即ち校註 琉球戯曲集のテキストは、五六種もあつた<sup>(注三五)</sup>」と述べている。伊波は、組踊のテキストのことを「組踊本」と称し、「台本」と表現はして

いない。奇しくも、仲吉良光も組踊のテキストを「組踊本」と言っている。そして、前述してきたように組踊のテキストがまとまったものは、そのタイトルに「組踊集」と名のついているものが殆どである。したがって、本研究では伊波の考えを踏まえ、組踊の詞章（音曲なども含む）の書かれた「テキスト」と、上演を再現する事のできる「上演台本」とを区別するため、組踊の「テキスト」を伊波普猷のいう「組踊本」というタームを用いて考察を行うこととする。そして、「組踊本」をまとめたものを「組踊集」とする。

近年の組踊研究では、さまざまな組踊集が発見され、このことから近世末期の琉球では、我々の考える以上に組踊が隆盛していたことがうかがえる。だが、さまざまな「組踊本」が発見されている中に、『日本国語大辞典』の示すような「台本」と呼べる「組踊本」は存在しない。したがって「組踊本」のなかで、上演に最も適したものとは書きや着付が記載されているものであることがいえる。

「組踊本」は近世末期から明治にかけて多く書写されてきた。多くの個人や地方自治会に大切に保管されてきた「組踊本」は先行研究<sup>(注三六)</sup>で明らかにされてきている。これだけ多くの「組踊本」が現存する理由としては、第一に組踊は王府で最も重要な行事である冊封の宴席に供される芸能であるということがあげられる。上演のためには稽古が必要であり、出演者は立方、地謡ともに内容を理解し

なければならぬ。よって王府の編集した詩歌本を、稽古のために写さねばならない。第二に、金武良章の『御冠船夜話』には琉球処分以降の旧士族層が、「御主御奉公」として組踊を稽古していたことが述べられており<sup>(注三七)</sup>、組踊は近世琉球士族の重要な教養のひとつであったことがいえる。現存する「組踊本」もその多くが旧士族の家が所蔵していたものであり、多くの写本には「○月吉日写之」などの書写した日付の記載があり、「写之」の記載からは他の「組踊本」から書写されたことがうかがえる。

本研究では、この「組踊本」どうしを校合し、「組踊本」はどのように書写されたのか、また、「組踊本」には系統や種類があるのかを考察することを主眼とし、後述する「組踊本」の諸問題についても言及したい。

### 3 校合の必要性（組踊のテキスト「組踊本」研究史を通して）

「組踊本」は戦前に書写されたものが多く存在する。その中でも現存するものは明治以降のものが多い。所蔵元は大きく三つに分けられ、王府が保管していたもの、士族が所有していたもの（現在は図書館などに寄贈されているものが多い）、公民館など地方の自治体で保管しているもの、に分けられる。もっと厳密に分けると、士族が所有していたものには、首里士族、先島の士族など、所有してい

る士族の家柄にも違いがある。もともと組踊は冊封使を迎えた宴席で上演されるのを目的として、士族たちによって上演されてきた。単純に考えるのであれば、王府で作成した「組踊本」が、士族や地方人士に書写され、伝播していったと考えることができよう。実際に現存しているもののほとんどは、士族が所有していたものである。だが、「組踊本」の書写系統は不明な点が多く、現在まで「組踊本」の体系的な研究はなされていないのが現状である。

組踊の研究、特に「組踊本」の紹介は明治期より始まる。明治期におけるその内容は、単に日本の南の島にある古典芸能である組踊を紹介するという形でおこなわれてきた。現在確認できる一番古いものは、一八八九（明治二二）年に東京で松山伝十郎が出版した『琉球浄瑠璃』であろう。著者の松山伝十郎という人物は、新城栄徳氏によれば、福島県出身で明治期には浅草区所属の東京市会議員であったという<sup>(注三八)</sup>。その他の松山伝十郎の詳細は『下谷浅草自治功績録』に掲載されている記事によると、一八六六（慶応二）年に福島県の郡山市に生まれ、小学校教員の資格をとり、漢学、英語をさらに学び、一八八三（明治十六）年に上京。青山小学校の教員となり、沖縄県立小学校教員、共立女学校教員時代に自費で教育雑誌を発行。その後、萬朝報へ入社し従軍記者を終え、一九〇九（明治四二）年にはまた自費で雑誌『實力』を発行。『實力』誌の社長となる。後

年、東京の市会議員や、居住していた浅草区寿町の町長を務めた人物である<sup>(注三九)</sup>。『琉球浄瑠璃』の巻頭に「美妙齋主人」の序文があり、そこには「琉球浄瑠璃といふもの、些しハ世の中に見かけますが、いづれも註釋のある物でありません。この度の松山君のこの著述は君が久しく琉球の内地を履んだ上の仕事で而も文學上の眼で之を評しまた解したのは餘人の出来ぬ事です<sup>(注四〇)</sup>」と記しており、この文面から、松山の沖繩県立小学校赴任が、本書を著すきっかけとなつてゐることは疑う余地はない。しかし、実際の組踊を見た上で本書を編集していることははっきり分からない。また、松山の沖繩県立小学校の任期も不明であり、さらには出版以前の芝居小屋の上演内容などの状況が分かる資料がないため、本書の出版に際して、芝居小屋や沖繩側の人間が関与していたのかなどの詳細は不明である。

『琉球浄瑠璃』という書籍は、その「凡例」に「一、琉球国に組躍と名つくる歌舞伎狂言あり」<sup>(注四一)</sup>とあるように、組踊を「沖繩の歌舞伎狂言」という位置づけで紹介した本である。また、「凡例」には続けて「其の種類三百以上に達す、而して其の最著名なるもの五つあり、村原<sup>①</sup>と云ひ、八重瀬<sup>②</sup>と云ひ、忠心身代卷<sup>③</sup>と云ひ、姉妹鬻討<sup>④</sup>

と云ひ、久志の若按司<sup>⑤</sup>と云ふ、本書は、則此五大書の一なる久志の若按司を評釈せしものなり<sup>(注四二)</sup>（傍線、番号は筆者による）と記されている。ここに出てくる「村原」は「大川敵討」のことを指し、「八重瀬」「忠心身代卷」は「忠臣身替の巻」であり、「姉妹鬻討」は「姉妹敵討」である。「五大書」とあるが、合計すると四つしか組踊のタイトルが確認できない。それから、「最著名」である「五大書」と聞けば、普通は朝薫の「五番」を言うか、少なくとも朝薫の作品・朝直の作品が出てきても良いと思われるが、朝薫や朝直の作品のタイトルがみられないことから、「凡例」の記述からは松山は組踊を詳しく取材しなかつたか、もしくは沖繩出身者から聞いた組踊の情報をそのまま載せたのか、という疑問が挙げられる。しかし、「補綴」には久志の若按司道行口説について「本歌舞伎中久志の若按司主従道行の條は殊に壯快の感あるを覺ゆ」とあるので、松山が仲毛芝居でこの演目を見た可能性がないとは言いつれない。さらに、松山がこの時に沖繩の誰と交流を持って、本書が執筆される経緯となつたか、という疑問も残る。ともあれ、この書は「久志の若按司」の原文に日本語訳を付けて紹介している（図7参照）のである。序文を寄せた「美妙齋主人」は山田美妙の号で、本名は山田武太郎である。日本語の辞書『日本大辞書』の編纂者でもあり、言

文一致の運動でも知られている通り、序分も言文一致で書かれている。著者の松山の経歴は『下谷浅草自治功績録』に掲載されていることしかわからないので、山田美妙との交流や、沖縄に行った経緯などは不明である。また、いつごろ沖縄に滞在していたかも不明であるが、琉球処分が断行されてまだ間もない、旧慣温存期の沖縄に滞在していることを考えると、かなり早い時期に沖縄を訪れ、琉球芸能についてまとめていることは研究史上、貴重なものであると言ふべきである。この時期に沖縄を訪れている人物は田代安定くらいで、笹森儀助、鳥居龍蔵よりも早い訪問である。松山に関して資料が少ないため、どのようなきっかけで沖縄での職に就くことになったのか、また、彼が本書を著す経緯についてこれ以上は論ずることができない。

では、『琉球浄瑠璃』の内容を見ていこう。本文の掲載方法としては、まず組踊の詞章を載せて、その後訳文と解説を載せるという体裁である。長い詞章は幾つかに切って掲載し、短い詞章は役柄の一つの詞章ごとに翻訳を行なっている。なお、翻訳には「沖縄對話、沖縄縣地誌畧、沖縄志、弓張月、南嶋記事、三才圖會、中山傳信録、球陽、組躍叢書類、及び著者が私稿に係る琉球巡遊日記等」などを用いたと「凡例」にあり、自身の日記だけでなく、琉球語の辞書や琉球の歴史書も参考にしたことがうかがえる。組踊関係でいえば「組

躍叢書類」と資料が出ているが、現存していないためどのようなか知ることにはできない。しかし、翻訳にあたって、組踊の「叢書」、つまり組踊の資料をまとめたもの、もしくは組踊の「テキスト」などをまとめたものを利用していた事が言える。「組踊叢書類」というのはもしかすると「組踊集」の可能性もある。

『琉球浄瑠璃』は組踊を翻訳して提示した資料のなかでも研究史上、初期ものであることがいえる。また、活字の組踊の資料としても現在のところ一番古いものといえる。詞章だけでなく、挿絵には舞台を写したと見られる、按司、若按司、大主と供とみられる絵や、「二童敵討」の鶴松・亀千代があまおへの前で踊る様子が描かれている。巻末の部分には「補綴」として仲毛芝居小屋の舞台、収容人数、木戸賃、俳優の日当、使用される楽器、音楽などが記されており、初期の沖縄芝居の芝居小屋の様子を知る上でも重要な資料である。松山はこの本を「組踊」を内地の人々に紹介する、という形で編集しているが、『琉球浄瑠璃』には組踊の詞章やその訳文だけでなく、組踊の一場面の挿絵や舞台の図、木戸賃、役者の日当など、現地で取材しなければ分からないような内容が収められていることを考えると、「凡例」の記述内容には朝薫の「五番」が挙げられていなかったり、「忠臣身替の巻」と「八重瀬」という同じ作品を別の作品という形で挙げていたり、組踊作品の理解に少々問題があるが、

『琉球浄瑠璃』は松山が沖縄滞在中に、芝居小屋や組踊を取材し、なおかつ沖縄の書物も参考にしながらまとめた、組踊の初期の研究書であると位置づけることができよう。

一八九三（明治二六）年には村崎長昶（奇峰子）、豊好戛郎（東洋史）が『琉球踊狂言』を出版する。内容は、「姉妹敵討」「手水の縁」「護佐丸敵討」「執心鐘入」と、付録として「琉球口説歌」が収録されている。タイトルの右肩に「奇峰子譯述」とあるように、組踊の本文は載せず、舞台の状況がわかるようなト書きと、役名の後に台詞を候文で和訳した内容となっている（図8参照）。組踊「姉妹敵討」では「出様来る者や 宜野湾の城主 神山の按司の 頭役謝名の 大主（注四三）」と始まるが、同書では「罷出たる 某（それがし）は宜野湾の城主（かみやま）（筆者注・ルビ表記ママ） 神山の按司の 頭役謝名の 大主（あじ）にて候（おふぬし）」となっている。また、亀松乙鶴の出羽仲間節の歌詞「照月の清らさうしふ汲むてやり 押列て浜に 出ていきゆむ（注四四）」は「此時 羽（マ）ハタマ節といふ歌につれて亀松乙鶴の二人花道より出で来る」とあり、「歌 意譯 さやかに照す月影に。潮汲む業も面白や。／姉妹手に手を引合て。伊佐の濱邊に出て行く。」と七五調の歌意で訳している。節名は異なっているが、見事な和訳がなされている。この書は凡例に「譯者琉球に遊び好て彼地の演劇を見傍ら其筆記に就て之を譯したるものなり」とあるように、松山の著した『琉球浄瑠璃』の

ように、実際の舞台を沖縄で見て訳したものである。したがって、そのト書きは、明治期における実際の舞台の様子を知るための資料としての価値は高いが、テキストの研究ではなく、当時の沖縄の演劇である組踊を本土に知らせるための資料であると位置づけることができる。

一八九四（明治二七）年には、田島利三郎の書写した『語学材料第二』がある。この書には組踊六作品が収録されている。田島はこの本の書写元となった写本を明記してはいない。しかし、「組踊集」という書名は付けず『語学材料』としているのは、田島が琉球文学を研究するために収集した資料の一つとして付けたものであるといえる。

実際、琉球大学附属図書館伊波文庫に所蔵されている、田島利三郎筆写『おもろさうし』の第一巻の表紙見返には、墨書で「明治廿八年三月十四日／随々菴主／語学材料 第六」と書かれており、『混効験集』の表紙見返にも「明治廿八年五月廿九日／随々菴主／語学材料 第拾式」とある、さらに『琉球大歌集』の内表紙には「明治三十一年正月二十日／随々菴主／語学材料 第拾八」とあって、おもろや南島歌謡など、琉球文学関係資料を自身が写したものに「語学材料」と記していることがわかる。このことから、田島は自身の沖縄研究の一つとして組踊を書写したと考えられる。田島の琉球文学

に対する研究については、齊藤郁子氏の論考<sup>注四五</sup>が詳しい。齊藤氏の論考は言語資料、特に『おもろさうし』の辞書である『混効験集』についての田島の研究と、それを受けた伊波の研究を軸に論じており、田島の研究から、伊波がどのように『混効験集』をまとめたかが垣間見られて興味深い。しかし、この論考の中では組踊については言及していない。

少し私見を述べたいと思う。田島の琉球言語研究の資料の一つとして組踊も収録されている田島の「語学材料」であるが、琉球大学の伊波文庫に収められている「語学材料」シリーズは数巻欠落しており、その全貌は不明のままである。前掲の齊藤氏の論考や山下重一氏の論考<sup>注四六</sup>によって、田島がどのような資料を集め、また、当時の沖繩において熱い情熱をもって研究に勤しんでいたのかの一端を知ることができるが、まだまだ謎は多い。組踊について焦点を当てると、田島は一九〇〇（明治三三）年二月、雑誌『國光』に「琉球語研究資料」を投稿している<sup>注四七</sup>。この論文の内容は『おもろさうし』や南島歌謡、琉歌、組踊を紹介した琉球文学史総論である。日本の学会誌に組踊が紹介されるのは、この「琉球語研究資料」が確認できる初めてのものである。その中で紹介している組踊の作品は「女物狂」である。紹介の方法は、原文を載せてその後には訳文を載せるといった『琉球浄瑠璃』と近いものであった。しかし、「女

物狂」は『語学材料 第二』に収録されていない。田島は一八九七（明治三〇）年頃には上京<sup>注四八</sup>していたといわれているため、当時の東京には組踊だけではなく、琉球文学の資料は少なかったのではないかと推察する。推察を逞しくすると、「琉球語研究資料」という論文は、上京した田島の手元にあった資料（田島のノート「語学材料」を基に執筆されたと考えることができないか。さらに、『語学材料 第二』に収録されている作品を見ると（二五）萬歳敵討／（二六）義臣物語／（二七）孝行ノ巻／（二八）北山若按司敵討／（二九）巡見ノ巻／（三〇）忠臣身替」と各タイトルの上に番号が振られている。単純に考えれば『語学材料 第二』は「第一」からの続きであり、「第一」には（一）から（四）までの組踊が収録されていたことが推察できるのである。つまり、『語学材料 第二』以外にも田島が組踊を書写していた可能性があるのである。

田島利三郎という研究者は、周知であるが、伊波普猷の師として知られる人物で、琉球文学史上では『おもろさうし』の校合を行った最初の人物である。田島は『おもろさうし』の「琉球史料本」を書写し、それと安仁屋正・副本と校合して丹念に異同を記入している。研究の方法やその成果の正確さから、『語学材料 第二』の底本も、おそらく王府のものに近いテキストから書写したであろう、と推測することのできる資料である。この『語学材料 第二』や『琉

球大歌集(語学材料 第拾八)などには田島の朱書きや書き込みは見られないが、それだけで資料の価値を下げるものではないはずである。『おもろさうし』や『混効験集』に多く書き込みが見られることから考えると、組踊や琉歌よりも田島の関心は専ら『おもろさうし』にあったことが強調されるのではないだろうか。

一九〇〇(明治三三)年八月・九月には、岡倉由三郎が『言語学雑誌』に「銘苺子」を二ヶ月にわたって掲載する。岡倉は美術研究者の岡倉天心の弟で英語学者である。帝国大学ではB.H.チェンバレンより英語を学んだことが有名である。一八九七年には日本語文法を説いた『日本文典大綱』を著し、一九〇〇年には『日本語学一斑巻の一』という言語学入門書を発刊している(注四九)。このようにもともと言語学(日本語学)の研究者である岡倉は、『言語学雑誌』に「銘苺子」を紹介するにあたって、組踊の詞章が独特であることに着目している。また、解説の部分では自身も師事したチェンバレンと、田島の「琉球語研究材料」について以下のように紹介している。

この文を讀まるゝ人は、本年(筆者注…明治三三年)一月の『女鑑』の付録に出た、田島利三郎氏の『琉球語研究資料』を、合せて見らるゝと都合(マ)かよい。因に言ふ。琉球語の原文を掲げて、組踊の紹介をする事は、明治二十年頃に、松山傅十郎氏が譯文を添へて世に出した、『久志の若按司(カ)』廿八年中にチ

ヤムブレン氏が、其『Essey in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language』の中に揚げられた『Uyamma Cho-ging』前述の『琉球語研究資料』の中に載せてある、『女物狂』とこの『銘苺子』と、今日まで前後僅に四度に止まると思ふ(注五〇)

この文章からは、岡倉も師事したチェンバレンの「うやんまあ狂言」と田島の「琉球語研究資料」、松山の「琉球浄瑠璃」をとりあげ、自身の研究以前に、琉球語を紹介した先行研究を提示している。この引用の前半部分からは、とりわけ田島の「琉球語研究資料」を組踊研究のための手引きとなる論考であると評価している事がうかがえる。岡倉は「琉球語研究資料」が『女鑑』の付録」に掲載されている、としているが、これは誤りで、正しくは『國光』の明治三三年二月十一日号である(注五一)。

岡倉は「銘苺子」の冒頭に「主に本島語(やまとぐち)と琉球語との違ふ様子を知らせたく思ふ」(注五二)と述べているように、「本島語(ヤマトグチ)」と「琉球語(ウチナーグチ)」の違いを明らかにすることを目的に、言語学の観点から組踊を紹介している。また、組踊の原文は東京の人が発音することが困難な語があるので、ローマナイズして読みやすくする、という事を考え、「銘苺子」の体裁として、「Diyocharu munu ya」という読み方のローマ字に、「罷り出たる者は」という

ように日本語の訳文がルビのように入っているという形式を使っている（図9参照）。松山や田島と異なるのは、漢字かな混じりの組踊の原文を掲載していない、というところである。また、「銘苅子」の底本も明らかにはしていない。しかし、言語研究の視点からまとめられているということがわかる部分は、ある程度の組踊の詞章を訳した後、註がつけられており、たとえば冒頭の部分の註には

「*Diyocharu* は原文に『出様來る』とあるが、『出逢うたる』の轉ではないかと云ふ説がある／＼*ka*は『井』の事で『川』の事ではない。

川をは彼の國では『カーラ』と云ふ」<sup>（注五三）</sup>など言語語について注釈を施している。主眼は琉球語を訳することであり、組踊の内容などには触れられていない。しかし、語注や解説は、八月に掲載した前半部分に集中しており、翌月に掲載した後半部分にはほとんどそれが見られない。なにも解説らしいものがないので理由は不明であるが、前半部の語注や解説は本土の言語学研究者が紹介したものとしては初めてのもので、岡倉のこの研究は後年、伊波普猷が編んだ『戯曲集』にもローマナイズという詞章の読みの部分の記載方法として引き継がれていく。研究史上でも伊波に影響を与えたものとして評価できるものである。

組踊は手元にテキストがあっても、表記と読みが異なる。では岡倉が「銘苅子」の発音を誰から習ったのか、というのが疑問に残る。

推測であるが、この頃すでに田島利三郎は上京しており、伊波普猷は京都において遊学している頃である。したがってこの時代に東京にいた田島利三郎と関係があるか。先の解説でも田島の論考を掲げているし、田島の『語学材料 第拾四（中山傳信録所載字母及琉球語）』は岡倉が所蔵していて、後に東京教育大学附属図書館（現在は筑波大学附属図書館）に所蔵されている。もしかすると田島の上京時に岡倉と交流があり、明治三十三年までにこの書は田島の手から岡倉へ渡り、その際に組踊の写本なども岡倉へ渡ったか。憶測の域を超えないが、何らかの関係があったものと思われる。

一九〇二（明治三五）年『國學院雜誌』に実相寺一二三が「久志の若按司」を「琉球戯曲の久志の若按司」と題して五月・六月・八月号に掲載する。五月号には、実相寺による短い組踊の解説も載せられている。「久志の若按司」を「最著名なるものゝ一」として紹介し、紹介する理由としては、「単に一片の仇討物譚には過ぎざれども、よく吾が戯曲に似たるところあり、或は彼の特有なる点あり、如何に琉球の人格が思想の上に映じ出たされしか、との点に至りては、吾国従来の諸戯曲と対象して合せ考ふべき所ならむ」と、日本の芸能と琉球の組踊とを対照させて、琉球の人々の考えや思想などを考察しようと考えているのである。続けて「今日の琉球は昨の琉球にあらず、今や彼と我とは同胞の位置に立てり」としていること



ろからも、「日琉同祖論」のまなざしから、組踊を紹介している部分  
がみられる。組踊の詞章そのものは記載がなく、訳文だけ掲載して  
いる。また、紹介文の中に『琉球浄瑠璃』と同じく、組踊の種類が  
約三百種としている所と、「此久志の若按司を説かむとするに當りて、  
余は嘗て松山いろは氏の著になれる、琉球浄瑠璃による所多し」と  
いう記述から『琉球浄瑠璃』を参考に行っていることは明らかだが、  
冒頭は「第一段／演ぜられむとする場内に、顕れたる一人の武士は、  
是を前に述べたる天願城主の家老たる、謝名の大主となす、彼は彼  
の名を名告りて猶語を繼ぎて曰く、／『我は謝名の大主（大主はう  
ふぬしと訓む、爵名なり）とも言はるゝ身なるに、口惜しや（後略）』  
と解説とすぐに訳文が始まっている。『琉球浄瑠璃』では「楽屋の囃  
子に連れて、苛めしき武者一人舞臺の正面に現れ出で、／武『出様  
來者や、天願の按司の頭役しゆたる謝名の大主。／罷り出でたる某  
ハ、天願城主の家老職を相勤むる謝名の大主にて候。』」となってお  
り、両書は訳文と掲載されている文章が異なることから、実相寺が  
自ら組踊の詞章を訳したか、実相寺の周りにいる沖縄関係者によつ  
て訳されたとも考えられる。

一九〇六（明治三九）年には、沖縄に教員として赴任した加藤三  
吾の『琉球の研究』が出版される。加藤は同書を明治三九〜四〇年  
にわたって上中下の三冊に分けて出版し、下巻に「手水の縁（一名、

波平山）」を紹介している。「手水の縁」には詞章のあとに短い逐語  
訳がなされているが、具体的にどの「組踊本」からの書写であるか  
が記載されていない。そして一九七五年に一冊にまとめられた同書  
には、新たに「義臣物語」が加えられており、加藤は沖縄滞在中に  
いくつかの「組踊本」を書写していた可能性がうかがえる。組踊の  
詞章と逐語訳、という体裁で書かれたものの中では一番古いもので  
あり、加藤のこの体裁は、これ以降に紹介する諸本の形式の魁とな  
ったものである。

一九〇七（明治四十）年には『琉球新報』に「大川敵討」「銘苺子」  
「執心鐘入」が掲載される。この時掲載された組踊本は序文を正覚  
坊（大田朝敷）が担当し、「大川敵討」を瓢痴（富川盛睦）、「銘苺子」  
を物外（伊波普猷）、「執心鐘入」を梅山（当間嗣合）が担当して、  
四月四日から五月十九日まで、十五回に分けて掲載されている。詳  
述すると、四月四日から「大川敵討」を十回、五月二日から「銘苺  
子」を三回、五月十八日から「執心鐘入」を二回というように掲載  
している。当時の知識人達が組踊を新聞紙上で紹介したのは、現存  
している紙面では初めての事である。それぞれ第一回目は作品の短  
い解説を各執筆者が行なっている。内容は詞章と音曲を紹介したも  
ので、論考というものは書かれていない。この他に組踊の内容を紹  
介した新聞は、一九一〇（明治四三）年の『琉球新報』に掲載され

た「花売の縁」「護佐丸敵討」「巡見官」の三作品、一九一五（大正十四）年は『琉球新報』に「忠孝婦人」などが掲載される。しかしいずれも逐語訳などはつけられておらず、詞章と音曲を紹介したものである。

一九二九（昭和四）年、伊波普猷の『戯曲集』が東京の春陽堂から出版される。そこには組踊という戯曲の発生論を説いた折口信夫の「組踊り以前」を始め、日本の古典芸能である能楽と組踊の作品比較を行った真境名安興の「組踊と能楽との考察」、末吉安恭の「組踊小言」、組踊の演出についての一考である太田朝敷の「組踊の型」、東恩納寛淳の「道成寺と執心鐘入」などの組踊の論考が収録されている。これらは戦前における、まとまった組踊研究論文集であり、折口の論考などは今なお検討せねばならない重要な問題を提起した内容である。そして、伊波普猷は当時の県立図書館に所蔵されていた尚家の旧所蔵本である「羽地本」を底本として、民間流布のその他「組踊本」と校訂を行った「組踊本」を掲載した。「羽地本」という資料は、一八三八年の冊封の際の踊奉行の按司奉行の名前を冠しており、戦前の沖縄県立沖縄図書館には「羽地本」という資料は見られない。このことから、伊波の参考とした「羽地本」や「小禄本」そのものを再考する必要がある。この書が出版される以前は、「組踊本」を紹介するというのが主な研究であったが、『戯曲集』は校訂を

行い、研究論文も巻末に収録し、「組踊本」の研究としても先駆的なものであり、琉球芸能研究の先駆の書でもある。だが、『戯曲集』の残した問題も多い。たとえば、「羽地本」を底本とし、その他の「組踊本」を用いて校訂しているとあるが、詞章のどの部分をその本を用いて校訂したのが不明である。また、「羽地本」をどの程度反映しているのかも明記されておらず、詞章の記載に関しても漢字を当てていると思われる箇所や、句読点が施されている。そして、「補遺」の部分は「羽地本」以外のテキストを参考にしていると思われるが、それも明記されていないのである。このような問題については後述することとする。

校合を含めた「組踊本」の先行研究は、伊波普猷の『戯曲集』がその始まりと思われる。前述したように伊波普猷は「羽地本」と「小禄本」外民間流布の二三異本を用いて校訂し、その際に「異本」と頭注を入れている。たとえば執心鐘入の「推参な小僧」<sup>（注五四）</sup>や「孝行之巻」の時の大屋子の役名<sup>（注五五）</sup>などである。しかし、伊波は校訂もとの「組踊本」を明記してはいないので、頭注のない部分には「小禄本」外民間流布の二三異本との異同はみられなかったのかさえも確認できていない。伊波の研究は、頭注などにみられる若干の校訂結果から興味深い指摘（特に「異本には…」という他の「組踊本」と校合したと思われる頭注）もうかがえるが、伊波の示す「異本」

の典拠を示していないため完全とは言えない。

以上が戦前の組踊の主な研究である。戦後の「組踊本」の研究は一九六五年頃から始まる。そのなかで代表的なのは、当間一郎の「台本」研究である。当間は沖縄各地から古い組踊の写本を「発掘」し、紹介することを主とし、この「紹介」が戦後の研究の第一歩である。当間は発掘した台本を翻刻、検討し、『組踊選集』(注五六)『組踊の世界』(注五七)『沖繩の芸能』(注五八)などを著した。このころの研究は、組踊の内容を紹介する程度にとどまり、「組踊本」の関係や、「組踊本」がどれだけ遺されているのか、また、作品がどの程度あるのかなど、「組踊本」の現存状況ははっきりしておらず、まさに草創期の研究であった。当間は『沖繩の芸能』で『今帰仁御殿本組踊集』や『具志頭家本組踊集』などの「組踊本」から詞章に異同がある箇所をあげているが、書写が不統一であることに触れるだけで、詳細な校合は行っていない。しかし、「組踊本」の表記の異同についていち早く紹介しており、重要な研究である。

さらに当間は一九九九年に『組踊写本の研究』(注五九)をまとめる。これまでの「組踊本」の研究は翻刻と紹介であったが、同書は様々な「組踊本」を検討するものであった。第一章の「三、組踊五写本の特徴」で『今帰仁御殿本組踊集』『恩河本小禄御殿本組踊集』『語学材料』『西公民館本組踊集』『伊舎堂用八本組踊集』という「組踊

本」を取り上げて、各組踊集の体裁の特徴を挙げ、さらに『今帰仁御殿本組踊集』の「巡見の官」で『共 御共なゆるものもふくらしやとあやへいる』の次は四行空白になっている」と詞章の有無を指摘していたり、同じ写本の「姉妹敵討」の後半に具体的なト書きがあることを挙げたりしている。しかし、五冊の写本間の校合を行ったわけではなく、目に見えるト書きや詞章の異同を、その「組踊本」の特徴として挙げているだけである。また、『伊舎堂用八本組踊集』にみられる「未生の縁」「月之豊多」「北山崩」「仲村渠真嘉戸」「身替忠女」の五作品が他の「組踊本」にみられないことを強調し、この「組踊本」の貴重さを中心に論を進めている。さまざま「組踊集」を用いて「組踊本」の内容を紹介してはいるものの、それぞれの共通性や類縁性、諸本における同一作品間の違い・校異については言及していないので、ここでも諸本校合の作業はなされていない。

大城學は『沖繩芸能史概論』(注六〇)の第二章において、「組踊本」について以下のように述べている。

組踊の台本には写本資料と活字資料がある。写本資料は筆写年代が記されず不明なものが多く、ほとんどの写本について、どの台本からの筆写なのかわからない。それゆえに、写本の系統を明らかにすることは困難で組踊の校本作りの研究が行き詰

る大きな原因となっている

ここで大城は明確ではないが、写本の系統を明らかにする事の必要性を述べている。そして文中にある「組踊の校本」は今なお世に出ていないので、問題を提起しているだけにとどまっている。しかし、大城は具体的に「執心鐘入」について、三回目用いられる干瀬節の下旬が「いくつかの台本には下旬を『述懐節で歌う』と記されている」と異なることを示唆している。自身が複数の「組踊本」を確認し、実際の異同を明示しており、「校本」という研究成果は示していないものの、次の研究につながる道筋を示した点はとても評価できるものである。

そして『沖縄文化』一〇六号においては、『戯曲集』の「執心鐘入」と、一九二五（大正十四）年に『琉球新報』に掲載された「執心鐘入」を校合し、その異同について言及している。このことから大城は多くの写本間での校合は行なっていないが、自著で提起した問題について、少しずつ解決しようとしている様子がうかがえる<sup>(注六)</sup>。さらに、「組踊台本は如何にして筆写されてきたのか」という論文では、『戯曲集』を中心とした「戌の御冠船」のテキスト間に異同があることを示唆し、①『戯曲集』の「女物狂」に示された頭注の「異本には…」と書きから、『戯曲集』の「女物狂」は田島利三郎が表した『琉球文学研究』に収録されている「女物狂」と比較している

ものである事を証明し、②『戯曲集』に収録されている「執心鐘入」と真境名安興が新聞に掲載した「執心鐘入」、尚家本の「執心鐘入」の三つを校合し、その異同が見られることに対して「試行錯誤を繰り返しながら新たな台本を作成したのではないか」、もしくは名護市宮里の例を挙げて、「組踊本」の「詞章を暗記していて、その記憶を筆写している」のではないか、という二つの結論を導き出している。

「組踊本」を筆写するにあたり、新たに編集しながら製作した、もしくは口承文芸的に、記憶に頼り、忘れた部分を「組踊本」で補いながら作成した、という二つの大きな問いを投げかけており、今後の琉球芸能文学の研究に大きな問いを投げかけている。

矢野輝雄は『組踊を聴く』の中で「組踊本」の詞章の異同について触れているが<sup>(注六)</sup>、一部の詞章のみに留まっている。こちらでも大城と同様に、問題提起として「組踊本」の校合が必要である事を示唆しているが、実際に本人の研究は行っていない。

このように、各研究者は多くの「組踊本」を発掘し、紹介しているが、その書写関係については問題提起のみであり、大城の論文が「筆写の過程・方法」について論じてはいるものの、「校本」についての研究までは進めてはいない。ちなみに、「組踊本」の校本づくりについては、以下の戦後の新聞資料にも言及されている。

一九六六年十一月に東京の国立劇場が開場した。それを受けて翌

年の一九六七年一月に国立劇場の小劇場にて琉球芸能公演が開かれることとなった。沖縄の新聞ではその後、国立劇場公演関連の記事が紙面を賑わせたが、その公演に寄せて幾つか組踊のテキストについて書かれた記事がある。一九六六年十月十六日の『琉球新報』には文化財保護委員会が組踊をカラーフィルムで保存する動きが報じられ、「組踊の脚本は多種で定本がないため、この際『定本作成委員会』を設けて、フィルムだけでなく脚本も統一したものを作ることにした」と記されている。この「定本」はその後記事に登場しなため、どうなったかは不明であるが、伝統組踊保存会が作成した『伝統組踊保存会 組踊上演台本資料集(一)』を見ると、その台本の中に典故が明記されているものは『戯曲集』だけであるので、おそらく「定本」事業は実現しなかったと思われる。また、一九六七年三月八日と九日の両日、『琉球新報』に福地唯方の「国立劇場公演を終わって」という短評が掲載されている。そこにも当時市販されていた『戯曲集』と『組踊全集』における「二童敵討」の詞章の違いをとりあげ、上演の際に「組踊は最初にテキストとして使用の脚本を明記すべき(中略) 御冠船もトラ年とイヌ年の脚本では若干相違があるとのこと(中略) テキストが変わるとしたがってその演技も変わるのが当然です」としている。この二つの記事からは、実演家や一般の観客も台本間に相違があることを理解しており、それは

上演に直接関係することと考えているのがうかがえる。

組踊のテキストに関わる研究史を概観すると、戦前は新しく日本の一部となった琉球の特異な演劇、「組踊」という言葉は用いられず、「琉球浄瑠璃」や「琉球戯曲」などと題されて紹介され、また琉球語の研究対象として紹介されることが初めてであった。その後、『戯曲集』の出版や一九三六(昭和十一)年に行われた日本青年館での琉球芸能公演などで注目を浴び、雑誌『日本民俗』では座談会が企画され、その様子が掲載されるなど、「組踊」という芸能が少しずつ認知されていく。しかし、その後は太平洋戦争が近づき、資料も現存するものが少ないので、戦後、一九六〇年代までの研究史は詳らかにできない。

戦後は、當間一郎に代表される「組踊本」ならびに組踊集の現存調査がその柱となる。沖縄県教育委員会でも組踊の「台本」調査は行われ、多くの「組踊本」が現存していることが明らかとなる。大城學や矢野輝雄は一部の作品において、自身で「組踊本」を校合し、異同があることを示している。

研究者以外の事例では、一九六〇年代後半の沖縄県内新聞において、「組踊本」の同一名称作品の内容が別々の「組踊本」において異なることが指摘され、伝統組踊保存会は「定本」製作を行うことが報じられるが、それは実現されずに、国立劇場おきなわを始めとし

た劇場において組踊の上演は続いている。

以上のように、組踊の校本づくりや諸本間の異同について、これまで一部において問題にされることはあったが、研究として行われてきたのはごく僅かである。校合の底本となりうる資料もこれまで提示されて来なかった。そこで本研究は、二〇一〇年に公開され、現在のところ、唯一現存している尚家旧蔵の組踊集を基に、士族や地方に遺された写本を校合することで、「組踊本」の関係や、より良い「組踊本」がどれなのか、ということ明らかにしようとする試みるものである。そして、本研究の校合で得られる結果を基に、最終的には「組踊本」の校本作りを目標としている。

## 第二節 「組踊本」にみられる表記の異同のもたらす問題

前節では、「組踊本」には大きく三つのものがあり、それは王府で保管されていたもの、士族の家に保管されていたもの、地方の自治会（公民館）などに遺されているもの、であることを述べた。ここではそれぞれの「組踊本」の表記の異同の中から、特徴的なものを取り上げて異同のもたらす問題について考察する。

### 1 着付について

「組踊本」のいくつかには「着付」と呼ばれる、登場人物の服装

の指定を記載しているものがある。それは、王府の所蔵していた「組踊本」等や、御殿・殿内に所蔵されていたものに見ることができる。同じ組踊作品の場合、登場人物は同じであるので、衣裳の異同はないと思われるが、実際には以下のような違いがみられる。「大川敵討」の泊という役の着付を参考に以下に挙げる。

『尚家本組踊集』（以下『尚家本』）

泊井緋西洋巾黒木綿衣裳脚絆足袋

『戯曲集』

泊、髪緋縮緬巾にて、請八巻、玉色染木綿衣裳、脚絆、足袋、

先ず役名が『尚家本』には「泊井」、『戯曲集』には「泊」とある。

つぎに頭巾など頭の着付けは『尚家本』には「緋西洋巾」、『戯曲集』には「緋縮緬巾にて、請八巻」とあり、『尚家本』では緋色の巾（サージ）、『戯曲集』では緋色の縮緬素材の巾（サージ）で、向こう鉢巻きをすることが明記されている。次に衣裳が『尚家本』には「黒木綿衣裳」、『戯曲集』には「玉色染木綿衣裳」とあり、『尚家本』では黒の木綿素材の衣裳、『戯曲集』では「玉色（注六三）」の木綿素材の衣裳となっている。

例にあるように、ここでは役名の表記、八巻の有無、着物の色、素材まで異なることがうかがえる。この「大川敵討」以外にも着付を『尚家本』と『戯曲集』で比較するといくつか異なった記載が見

られる。異なる点は衣裳の素材や色など、細かい点において顕著であり、登場人物の衣裳が増えたり、陣羽織を着ている者が着なかつたりなどというような大幅な変更はない。王府でまとめられた「組踊本」でも、時代が変われば衣裳の素材等に変化が見られる事がうかがえる。

## 2 詞章について

詞章や歌詞の違いはかなりの頻度で見られる。例えば、「執心鐘入」にかぎってみてみると、『尚家本』の若松の台詞では「男生まれても義理しらぬものや おれと世の中の地獄たひもの」となっているが、『戯曲集』では「女生まれても、／義理知らぬものや／これど世の中の／地獄だいの。」と、「男」と「女」という詞章の違いがみられる。文字ひとつの異同であるが、その違いは大きい。両者を意識すると『尚家本』が「男に生まれても義理を知らない」というのは、これこそ世の中の地獄である事よ」という意味になり、『戯曲集』では「女に生まれても義理を知らない」というのは、これこそ世の中の地獄である事よ」となる。矢野輝雄は『組踊への招待』で、「男」と「女」の表現の違いについて『男生まれても』と言いかけられて『女生まれても』と受けるのはおもしろく、ここには機知の巧みさを感じられる。それに対して、『男生まれても』とそのまま受けて切り返すほ

うが、拒否の気持ちが強いように思われる<sup>(注六四)</sup>と解釈している。矢野のこの解釈からは、芸能としてのおもしろさを含めた上で、意味の上では「男」とした方が宿の女に対して若松の拒否の気持ちが強く、宿の女の逆上を買うという事を指している。

これに対して當間一郎は「組踊諸本の考察」において、「前者（筆者注…女生まれても）は男が言い寄る女に対して、痛烈な批判をして、その態度を反省させようとせまる内容であり、後者（筆者注…男生まれても）は自分自身に対して、強くいいきかせる内容になっている<sup>(注六五)</sup>」として、矢野の解釈とは異なる解釈をしている。この論の背景にあるものは、この論より先に出された當間の『執心鐘入』の地獄について<sup>(注六六)</sup>という論文である。この論文では伊波普猷が『戯曲集』の「執心鐘入」の頭注で「地獄、淫売婦、国語を輸入せしもの」としていることに疑問をもち、結果として淫売婦として「地獄」という言葉は使われていなかったことを組踊が創作される前後の大和芸能・文学を用いて論じている。當間は「地獄」という言葉が淫売婦という意味を持っていない、すなわち、女性を罵る限定された言葉ではない事を理由に含め、「男」「女」の言葉の違いにおける意味の違いを解釈しているのである。

矢野、當間の論は立場が違えど、「男」「女」の言葉ひとつで作品の表現・解釈が異なることを示唆している。このように、詞章の異

同はたった一文字の違いであっても、内容が大きく異なる例が見られるのである。

それから、ある「組踊本」に記載されている台詞が、他の「組踊本」には記載されていなかったり、「組踊本」によって、台詞を唱える役柄が異なったりする場合がある。

「大川敵討」を例にすると、乙樽が谷茶の城に到着した際、門番が乙樽に対して「拝れよめしやいん あれに居やうれ」という台詞が『尚家本』や『戯曲集』には見られるが、八重山博物館に所蔵されている『新本家本組踊集』や『喜舎場孫進所蔵本組踊集』にはみられず、すぐ谷茶の台詞となっている。また、その後に谷茶が乙樽を詰問する「糾の場」とよばれる場面で、谷茶が石川の比屋に乙樽を白状させるよう命令する。『尚家本』や『戯曲集』では石川の比屋の「一 拝むちゆめやへて、やあよしれとる女出す〜、」という台詞となっているが、八重山博物館に所蔵されている『新本家本組踊集』や『喜舎場孫進所蔵本組踊集』では、この台詞は満納の子の台詞となっている。このような台詞を述べる役が異なるといふ事例は、いずれも作品の内容が変わってしまう異同である。

### 3 音曲について

音曲について異同が多いのはその節名である。多くは作品の一番

最後、「踊て戻ら」という台詞に続いて歌われる曲の異同が挙げられる。例えば、「義臣物語」では「立雲節」という節名が『尚家本』では「清屋節」となっている。文字の記載ではたった数文字の違いであるが、実際の音楽は「立雲節」が短く、「清屋節」の方は一分ほど演奏時間が長い（参考資料・添付のCD）。添付の資料では、最初に「清屋節」、続いて「立雲節」を収録した。歌詞は義臣物語の最後に使われる「一、けふの誇らしや、なをにきやなたてる つほてをる花の 露きやたこと」である。曲想は「立雲節」が二揚、「清屋節」は本調子であり、調弦が異なるということは、二揚の曲は「第一弦（低音弦）から『ドミファソ：』と始まる琉球音階が、五度高い第二弦（中音弦）から『ドミファソ：』と始まる音階に移動する（注六七）」ので音域が五度高くなる。よって本調子よりも二揚の曲の方が音域が高くなり、より華やかな曲の印象となる。

また歌詞の異同では、例えば「執心鐘入」で、『尚家本』では若松の出羽の歌詞が「照てたや西にぬのたけになても 首里みやたりやととひちゆひ登る」となっているものが、『戯曲集』では「照るてだや西に／布だけになても／首里みやだいらやてど／ひちより行きゆく」となっている。「登る」と「行きゆく」という詞章の違いがみられる。

このような「組踊本」における音曲・歌詞の異同は、「登る」「行



きゆる」のような、歌詞のニュアンスの違いから、節名・楽曲、いわば文字の違いだけではなく、曲調や曲想の違いで演奏時間もかわってしまふ、という作品の演出に関わるものまで、程度は様々であるが随所にみられる。

音曲の異同について諸本を概観すると、「大川敵討」の乙樽の道行で歌われる「金武節」が『豊川善包所蔵本組踊集』や『喜舎場孫進所蔵本組踊集』では「伊野波節」、同じく「大川敵討」で乙樽が若按司をつれて逃げる場面で使われる「早作田節」が『豊川善包所蔵本組踊集』や『喜舎場孫進所蔵本組踊集』では「池武当節」となっており、音曲の異同が同じ「組踊本」が複数存在する。このことから、音曲の異同を検討することで、「組踊本」の書写系統がうかがえる可能性がみえる。詞章の異同と同じく、音曲も重要な要素であることが言える。

#### 4 ト書きについて

「組踊本」の中でト書きが記載されているものは少ない。また、ト書きが記載されている台本も、ト書き自体は登場人物の動きに関するものではなく、「橋掛より出る」「南表の幕より出る」といったような登退場の場所を示したものや、「大川敵討」の「拍子木打候得者琴三味線手毎にて村原出る。敵討之時大鼓ひやうちやこ打、ぼ

らがい吹く。」のように音曲・音響の指示が記載されているものが多く、登場人物の動きを具体的に記載しているものは少ない。

写本にはト書きが記載されている「組踊本」が少ないため、異同を比較すると言うよりは、有無を確認することが主である。例えば、『戯曲集』の「銘苅子」の「上使」の登場の際には何もト書きがみられないが、台湾大学（旧台湾帝国大学）に所蔵されている『琉歌大観』（注六八）には「上使（笛太鼓拍子一段取出つ橋掛より）」と記載されており、笛と太鼓の音曲とともに登場することがうかがえ、同じ底本を書写したと思われるものでも、異同が見られる。

版本におけるト書きは『渡久地活版所 組踊集 第一編』の「執心鐘入」に次のようにある。「（小坊主の頭をたたく）」「失恋の怨恨死物狂ひの体にて舞台の中央にうつむいて両足を前に出して座す」「此のさはぎに座主急ぎて登場す」「鐘中の若松を出して裏より逃走せしむ」。以上のト書きは登場人物の動きを示したものである。これは、具体的な表現であることと、『尚家本』や『戯曲集』などの王府関係の「組踊本」や、『今帰仁御殿本組踊集』のような御殿・殿内関係の「組踊本」にもみられないことから、『渡久地活版所 組踊集 第一編』の底本となった「組踊本」（写本）に記載されているとは考えられず、実際の上演を見て記載されたものと考えられる。

## 5 小括

以上、「組踊本」にみられる表記の異同を一部、例を挙げて示したが、その中でも特に詞章の異同と節名の異同については、作品の上演や内容全体に関わる大きな問題である事が言えるだろう。詞章が変わる事で物語の内容が変化し、音曲が変わる事で場面の曲想に伴う表現や、上演の際には所作が変化するのである。また、「組踊本」の表記の異同をみることで、異同の結果が同じものについては、同じ系統の「組踊本」を底本にしている可能性があることが推測できると思われる。

### 第三節 まとめ

組踊は創作された当初から「台本」すなわち本研究でいう「組踊本」を持っていたと考えられており、土族を中心にその「組踊本」は書写され、現在は沖繩本島だけでなく、先島まで戦前に書写された「組踊本」が存在する。王府の重要な芸能であり、国劇と形容される「組踊本」は、その台詞や音曲などが各「組踊本」によって異同があり、以前から「定本」の作製や、写本間の系統が不明であることが問われてきた。現在、尚家に所蔵されていた組踊集が発見され、それを元に「組踊本」の校合ができる環境が整っている。

組踊の研究史は、明治二二年からスタートする。最初は琉球の言

葉で書かれている戯曲であるため、それを本土に紹介することから始まり、岡倉由三郎が詞章の発音をローマ字表記したことで、『戯曲集』にその表記法は引き継がれる。伊波は『戯曲集』で組踊の詞章を琉歌形式の「八・八・八・六」調に区切り、その後の研究でも伊波の区切り方は踏襲された。また、昭和初期には組踊と能楽などの比較研究も行われ、組踊の研究は内容の考察まで行われるようになった。戦後に入り、沖繩県による組踊の「台本調査」や、當間一郎による「台本調査」が行われ、多くの「組踊本」が発見された。それとともに、「組踊本」どうしの書写系統や、「組踊本」が如何にして書写されてきたのが問題となってきた。

実際に「組踊本」を校合すると、詞章の異同だけでなく、節名の異同、着付の有無、音響効果の異同など、「組踊本」によって様々な異同が見えてくる。王府の台本を中心にして、具体的に一つの作品ごとに「組踊本」を校合することによって各「組踊本」の特性や、作品によっては「組踊本」の書写系統や、系統と言わないまでも類縁性がうかがえる可能性がある。

次章からは第一章第二節で触れたように、個々の作品で校合を行い、異同がある箇所について検討して、「組踊本」間の類縁性や、「組踊本」の性格を明らかにしていく。

(注二) 近世期に「国劇」の用例は見られないが、明治期の新聞、その他には組踊を「国劇」と形容する文章が見られる。

(注三) 池宮正治『琉球文学論』沖縄タイムス社 一九七六年(二四六頁)

(注三) 沖縄県教育庁の行った組踊台本調査によると、組踊の台本は書写本が三十五冊、活版本が十六冊、新聞・雑誌に掲載されたものが二冊ある。『沖縄の組踊(II)』また、それ以外に、當間一郎氏が『組踊写本の研究』で紹介した『伊舎堂用八所蔵組踊集』(筆写本、書写年代不明)や、恩納村名嘉真の「姉妹敵討」(筆写本、明治四十二年書写)、与那国の(活版本、昭和十六年出版)など現在もお戦前に書写・出版された組踊の台本は見つかっている。

(注四) 金武良章『御冠船夜話』若夏社 一九八三年(二九—三〇頁)

(注五) 『校註 琉球戯曲集』所収。七一—九頁。

(注六) 伊波普猷『校註 琉球戯曲集』春陽堂 一九二九年

(注七) 『躍方日記』八月十三日の項目。

(注八) 『躍方日記』八月廿四日の項目。

(注九) 本田安次『南島探訪記』明善堂書店一九六二年(三八七頁)

(注一〇) 蔡氏家譜、十六世蔡修の嘉慶十三年の項目には「嘉慶十一年丙寅六月初一日蒙 憲令為漢文組役並作為總師寄役至於十三年戊辰閏五月因 冊使臨國拜作表奏咨文之外又編成首里那覇之戲本至十四年己巳六月朔日公務全竣退職(在職四年)」とある。『那覇市史 家譜資料(二)』(久米系) 那覇市企画部市史編纂室 一九八〇年(二七〇頁)

(注一一) 球陽研究会 編『球陽 読み下し編』より。一九七四年

(注一二) 演目については崎原綾乃が「御冠船芸能の躍奉行と演目の全貌—戌の御冠船を中心に—」(『沖縄文化』一〇—一〇号収録)に一八〇〇年代の演目を詳しく紹介しているためここでは割愛する。

(注一三) たとえば、戌八月二十七日の項には「先例之通」りに望舟宴の通訳として久米村の人を雇ったり、「先例之通」りに躍道具の移動

のために村吏を使ったりしていることが記されている。

(注一四) 一九七一(昭和四十六)年四月二十九日付『沖縄タイムス』文化面 「組踊恩河本は小祿御殿本なり—仲吉良光—」より。

(注一五) 尚家文書『冠船躍奉行小祿按司日記』那覇市博物館蔵

(注一六) 前掲注四『御冠船夜話』に同じ。

(注一七) 前掲注四『御冠船夜話』(二一九頁)

(注一八) 前掲注四『御冠船夜話』に同じ。

(注一九) 前掲注四『御冠船夜話』に同じ。

(注二〇) 真境名安興「組踊と能楽との考察」『校註 琉球戯曲集』収録。(七一—八頁)

(注二一) 現存するところで大正九年には山城徳助の編んだ『琉球脚本組踊集』下巻が発行され、大正十一年には大城彦五郎が『組踊』というタイトルで活版本を第二巻から四巻まで刊行している。大城は同じタイトルで内容の異なる『組踊』を大正十四年に第一巻と第二巻、昭和三年に第三巻を発行している。

(注二二) 明治四十年から四十三年にかけて琉球新報に「大川敵討」など九作品、大正十四年には「手水の縁」など七作品が掲載されている。

(注二三) 『羽地仕置』(『沖縄県史料』前近代1 二四頁)には一六六七年末四月廿三日の覚に「一学文之事 一算勘之事／一筆法之事 一謡之事／一医道之事 一庖丁之事／一容職方之事 一馬乗方之事／一唐樂之事 一筆道之事／一茶道之事 一立花之事」と上記十二の項目のうち一つでも嗜まない者は登用しない、と触れている。

(注二四) 『阿嘉直識遺言書』(『東恩納寛惇全集 5』四〇九頁)には、直識が十三歳の頃から謡の稽古を始め、十五歳からは漢学、十七歳からは和学、二十歳からは和歌の手ほどきを受けたことが記され、また、自身の息子にも三線の稽古や、空手についても記されている。

る。

(注二五) 豊川善豊所蔵の「高山敵討」には「道光三拾年庚戌〔欠字〕正月十四日大浜親雲上御宅にて〔欠字〕」と大浜家から台本を書写したと思われるような書き込みがある。

(注二六) 『沖繩の組踊(Ⅱ)』には、名護市の久志公民館・宮里公民館、浦添市の勢理客公民館、竹富の仲筋公民館、与那国の西公民館・比川公民館などに所蔵されている組踊の台本が明記されている。また、筆写の調査では、恩納村名嘉真(玉村の若按司敵討)「姉妹敵討」、恩納村恩納(「忠臣身替」)、読谷村渡慶次(「大川敵討」)などにも写本が残っている。

(注二七) 章末「参考資料」の表①「組踊異表題一覧表」参照。

(注二八) 平成十二年五月二十八日、県立郷土劇場にて行われた沖繩伝統組踊保存会特別公演「組踊復活公演」では「西南敵討」と「孝女布晒」が上演された。また、平成十三年六月三日、県立郷土劇場にて行われた沖繩伝統組踊保存会特別公演「組踊復活公演」では「忠臣義勇」と「智取敵討」が上演された。国立劇場おきなわが開場してからは、同劇場での組踊の復活上演もしばしば行われている。

(注二九) たとえば、「大川敵討」の谷茶の登場では「按司手事」が演奏されるが、『校註 琉球戯曲集』にはその記載が見られない(三五三頁)。しかし、現在の伝統組踊保存会の監修した台本『伝統組踊保存会 組踊上演台本資料集(一)』には「音曲『按司手事』」と記されており、按司手事が演奏されることが明記されている。

(注三〇) 『校註 琉球戯曲集』(五八頁)

(注三一) 『広辞苑 第六版』岩波書店 二〇〇八年

(注三二) 『日本国語大辞典』小学館 一九七四年

(注三三) 国立劇場おきなわの上演台本には、役者の登退場、ト書き、舞台の配置など、細かな情報が記載されている。(平成二十四年二月二十九日上演台本より)

(注三四) 『新版 歌舞伎事典』平凡社 二〇一一年 「台帳」「正本」

「根本」の項目より。

(注三五) 『校註 琉球戯曲集』凡例一頁。

(注三六) 一九八六年に行われた沖繩県の組踊調査『沖繩の組踊(Ⅰ)』では、沖繩各地に伝承されている組踊を調査し、翌八七年の同調査では、沖繩県内や本土、ハワイ大学の宝玲文庫などに現存する戦前の組踊台本を調査し、『沖繩の組踊(Ⅱ)』がまとめられている。

(注三七) 金武良章『御冠船夜話』若夏社 一九八三年(二九頁)

(注三八) 一九九五年五月十八日『琉球新報』夕刊「明治35年発刊『琉球浄瑠璃』」松山伝十郎著／著者は福島出身で東京の市会議員―新城栄徳さんが東京朝日新聞で確認―より。

(注三九) 藤本富十郎編『下谷浅草自治功績録』日出新聞社 一九二七年(一六〇頁)

(注四〇) 松山伝十郎『琉球浄瑠璃』いろは家 一八八九年 序より。

(注四一) 松山伝十郎『琉球浄瑠璃』いろは家 一八八九年 凡例より。

(注四二) 松山伝十郎『琉球浄瑠璃』いろは家 一八八九年。

(注四三) 今帰仁御殿本組踊集より。詞章は読みやすいように筆者が区切った。

(注四四) 前注『今帰仁御殿本組踊集』に同じ。

(注四五) 齋藤郁子「田島利三郎の沖繩研究―言語資料について―」『沖繩文化』九〇号

(注四六) 山下重一「田島利三郎の生涯」『沖繩文化』六九号

(注四七) この論文は後(大正十三年)に伊波普猷が田島の論文をまとめて出版した『琉球文学研究』に収録されている。

(注四八) 前掲の山下の論文に同じ。

(注四九) 吉岡英幸「岡倉由三郎と日本語教育」『講座日本語教育』早稲田大学日本語研究教育センター 一九九七年

(注五〇) 『言語学雑誌』第一巻七号 言語学会編 一九〇〇年八月(四頁)

(注五一) 前掲の山下論文による。

- (注五二) 『言語學雜誌』第一卷七号 言語学会編 一九〇〇年八月(三頁)
- (注五三) 前注『言語學雜誌』(六頁)
- (注五四) 『校註 琉球戲曲集』(八一頁)
- (注五五) 『校註 琉球戲曲集』(二八二頁)
- (注五六) 『組踊選集』沖繩風土記社 一九六八年
- (注五七) 『組踊の世界』錦友堂写植 一九七二年
- (注五八) 『沖繩の芸能』オリジナル企画 一九八二年
- (注五九) 『組踊写本の研究』第一書房 一九九九年。第一章など。
- (注六〇) 大城學『沖繩芸能史概論』砂子屋書房 二〇〇〇年。(二七五頁、二七六頁)
- (注六一) 大城學「組踊『執心鐘入』の台本―伊波本と真境名本の比較―」『沖繩文化』第一〇六号 二〇〇九年
- (注六二) 矢野輝雄『組踊を聴く』瑞木書房 二〇〇三年。第三章・二節「(2) 詞章」より。(二二三頁)
- (注六三) 池宮正治にインタビューしたところ、「玉色」は水色である、  
とされている。しかし、『沖繩語辞典』『沖繩古語大辞典』などには記載が見られない。
- (注六四) 矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社 二〇〇一年(一八五頁)
- (注六五) 前掲注『沖繩の芸能』(二七五頁)
- (注六六) 前掲注『組踊の世界』(二五八頁)
- (注六七) 金城厚『沖繩音楽入門』株式会社音楽之友社 二〇〇六年(五九頁)
- (注六八) 『琉歌大観』は真境名安興らが企画して、沖繩の琉歌やオモロ、組踊など琉球文学を収録した書籍として大正時代に出版の動きがあったが、出版されず、その草稿を写したものが台湾大学に所蔵されている。本書に収録されている組踊は「執心鐘入」「銘荊子」の二作品で、底本は『戯曲集』と同じ一八三八の御冠船のものが使わ

れている。

【第一章】 参考資料

図 1 a : 今帰仁御殿本組踊集 下巻「執心鐘入」

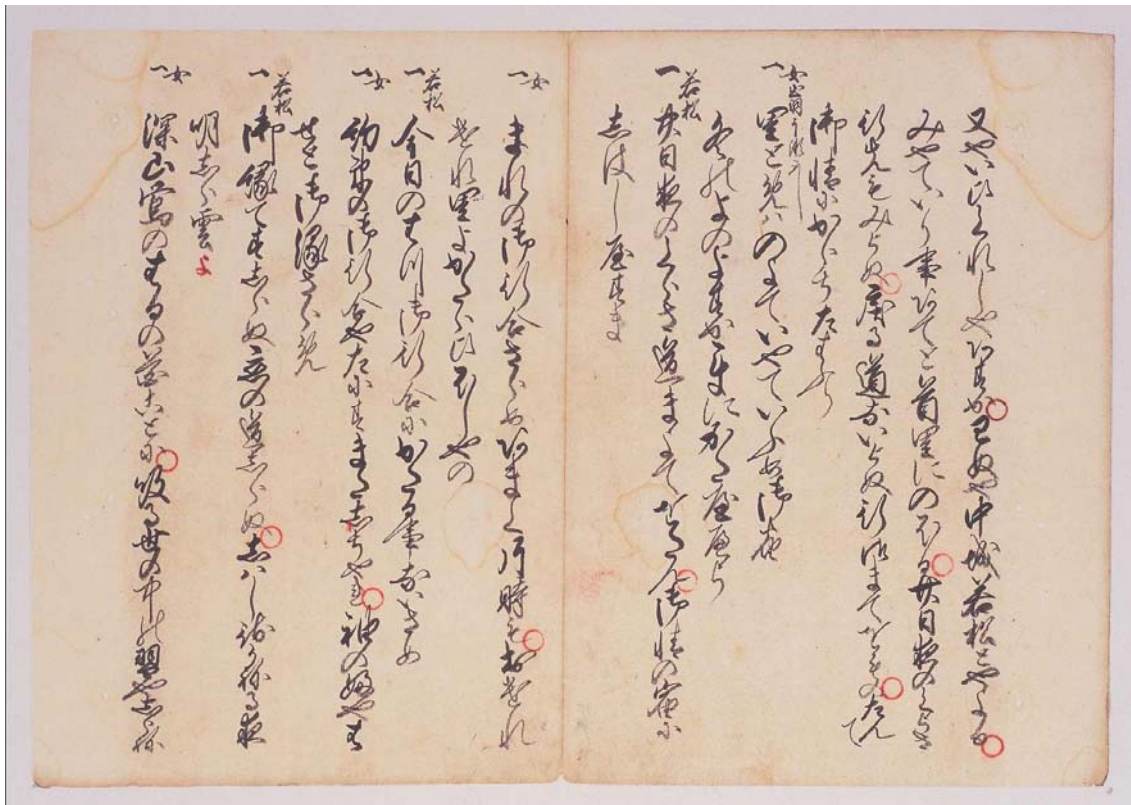


図 1 b 恩河本小禄御殿本組踊集 「執心鐘入」

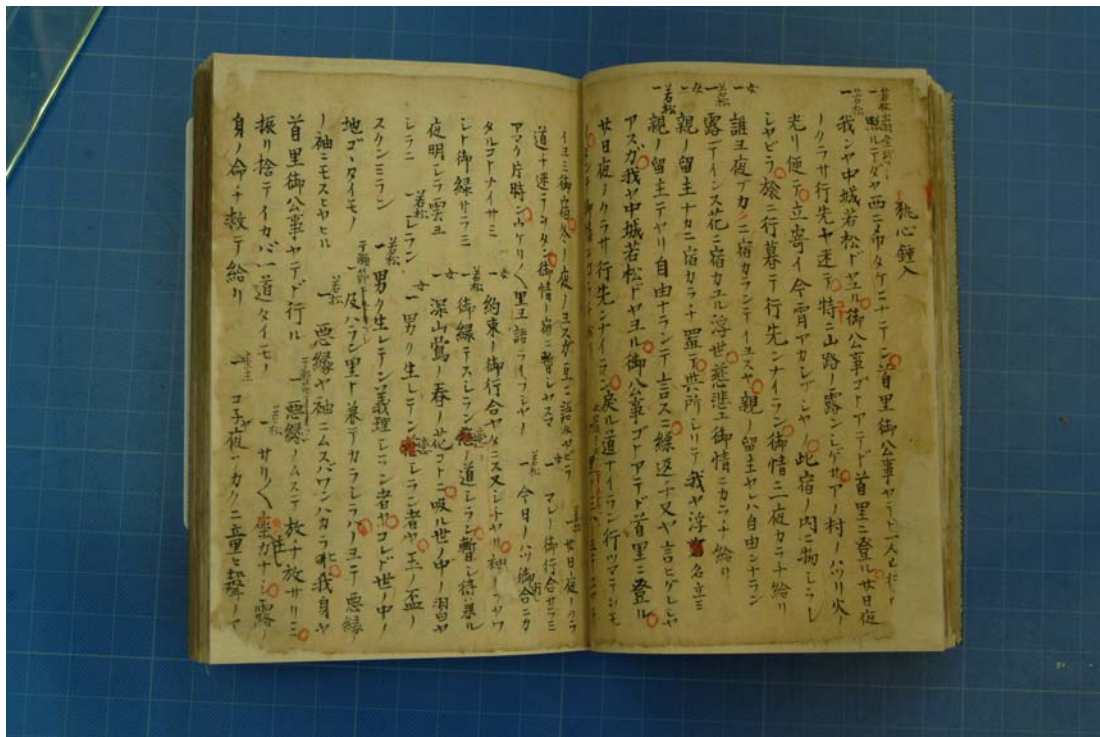


図2：今帰仁御殿本組踊集 上巻「大川敵討」

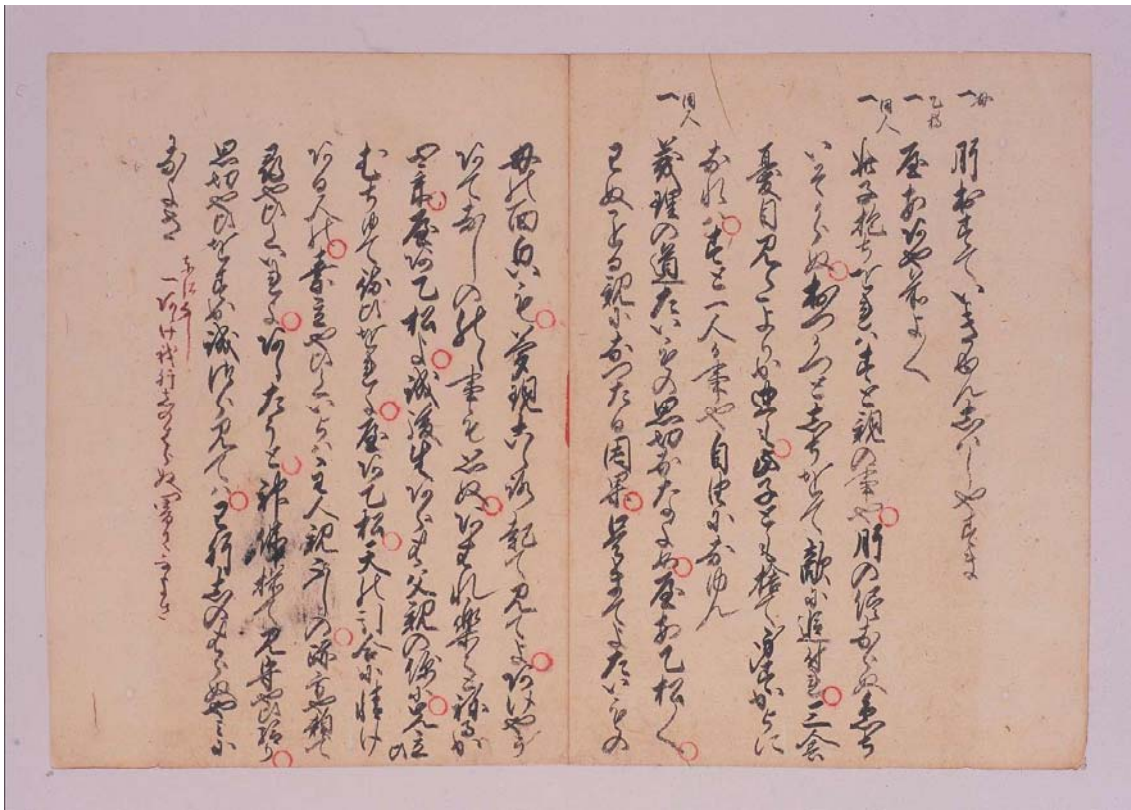


図3：尚家本組踊集 「天願若按司敵討」

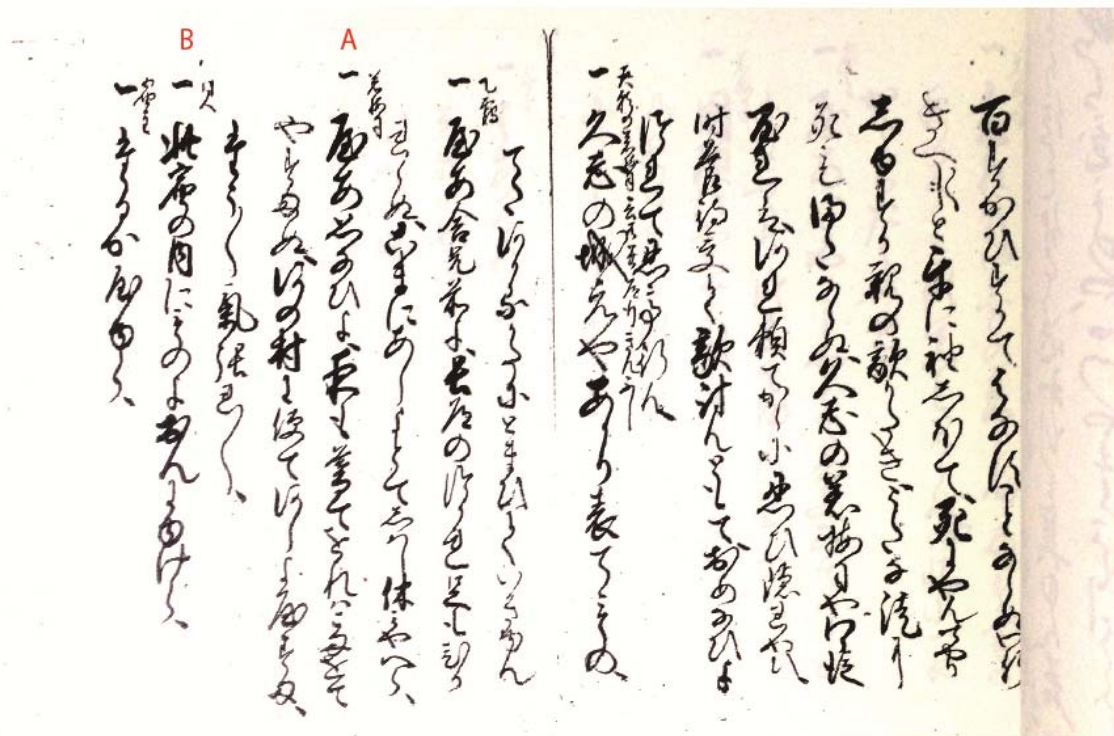


図4：校註琉球戯曲集 「大川敵討」

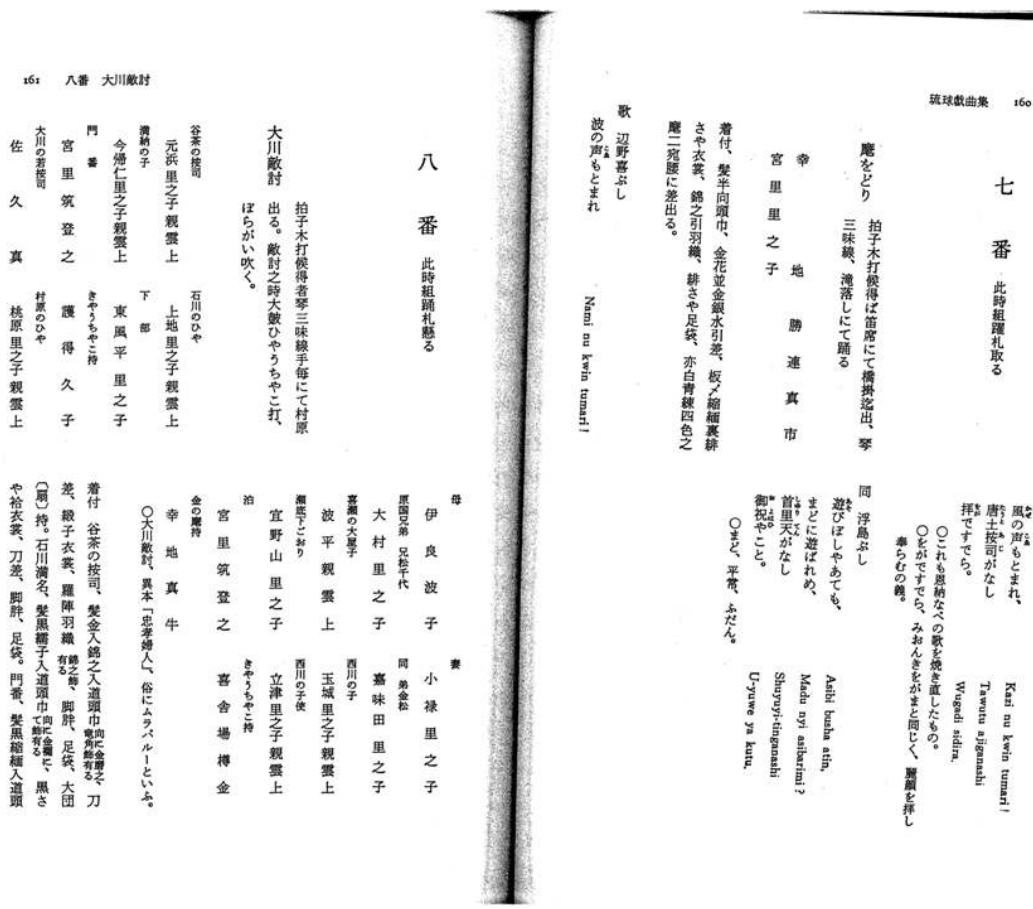


図5：尚家本組踊集「執心鐘入」

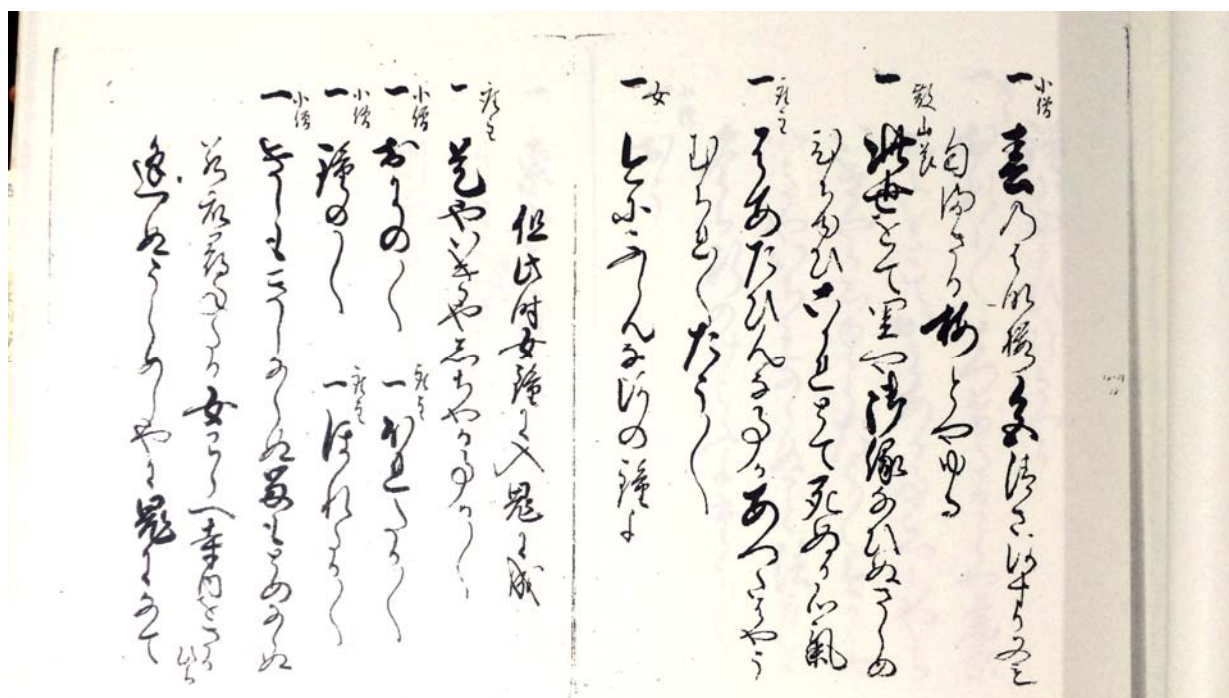




図6：今帰仁御殿本組踊集 下巻「姉妹敵討」

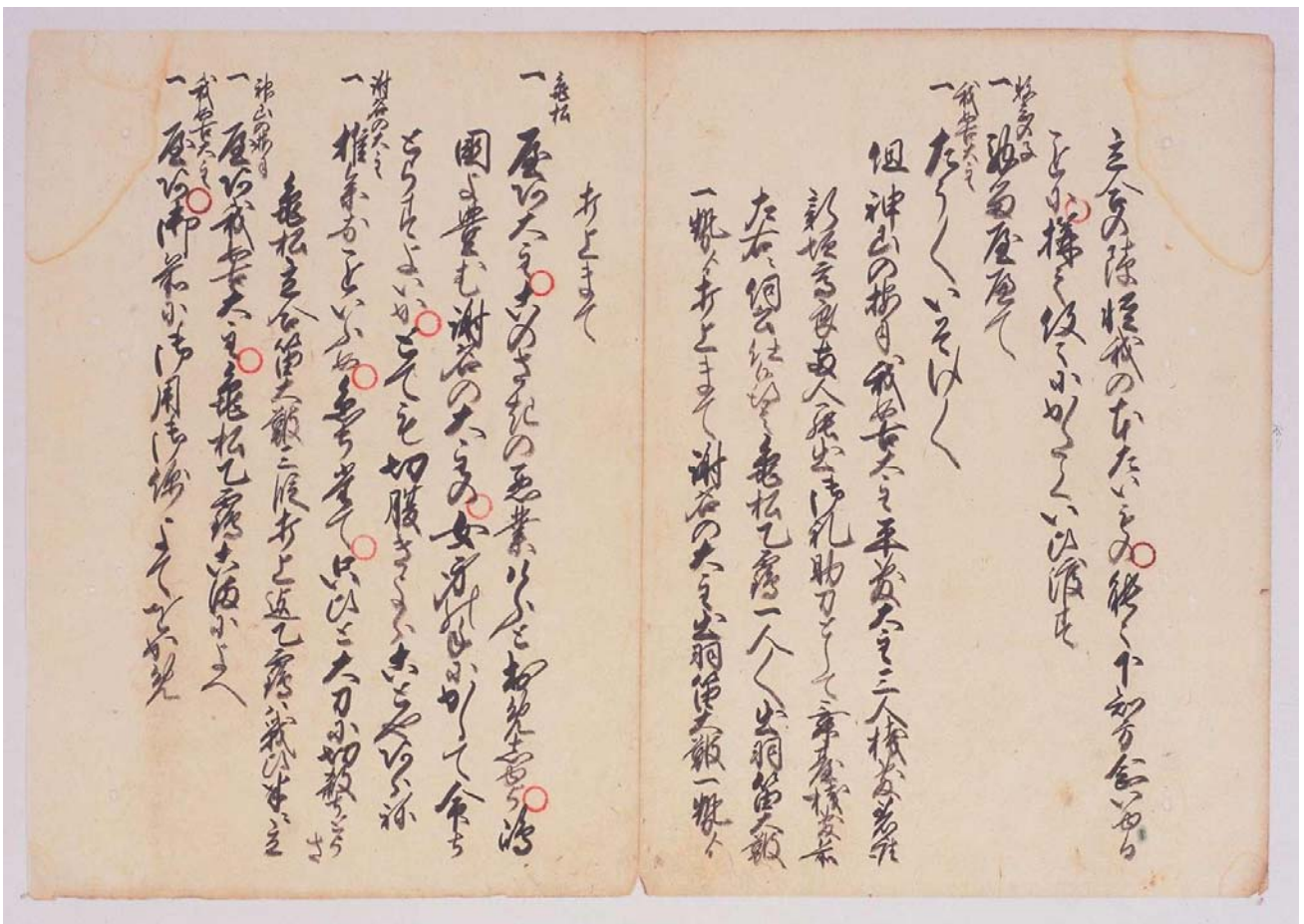


図7 a：国立劇場おきなわ上演台本「二童敵討」

平成二十四年二月二十九日(土) 午後二時 開演

(配役)

龜千代	岸本隼人
母	海勢頭あける
あまおへ	旗境名正兼
供一	宇座仁一
供二	宮里敬雄
供三	山入海賢
きやうちやこ持	比嘉克之

(地謡)「歌・三條」

一 華	照喜名朝・照喜名進・照喜名朝國
二 笛	大城智史
三 胡弓	宇保朝輝
四 太鼓	與那國大介

買数さやか

【二童敵討】

拍子木

音曲「按司手事」

あまおへ

出陣ちやる者や、  
屋良のあまんぎやな、  
勝運のあまおへ。

あゝ、天の雨風や  
絶ゆるとも、人の  
望み事絶らぬ。

此世界の習や  
あゝ、にやや  
首里城誂ほすば、  
此天の下や、  
我自由しち遊で、

まかり出た者は  
屋良の天降り加那  
勝運の阿麻和利である  
あゝ、天の雨風は  
絶えても、人の  
望み事は絶えない。

この世の習わし  
あゝ、もはや  
首里城を誂ほせば  
この天下は  
私の思い通りに振る舞い

-2-

-1-

図7b：国立劇場おきなわ上演台本「二童敵討」

<p>着物を供三へ渡す 二童、踊る あまおへ一行、踊り出す あやうちやこ神ち、供三 人、踊りながら下手入</p> <p>たう、これも取らさうよ。 またも踊らしやうれ。 踊らしやうれ。</p> <p>供(三) これこれ、またも踊て みおうめかけやうれ。</p> <p>鶴松・亀千代 戻せはやるまい。</p> <p>歌「津堅節」 勝連の按司や だんじゆ(ヨウ)とよ(ヨウ) まれる(ヨウ) たけほ(ヨウ)ども姿(ヨウ) 人に(ヨウ)替て(サユウウナ)</p> <p>鶴松</p> <p>さあ、これもあげよう もつと踊らせなさい 踊らせなさい</p> <p>これこれ、また踊つて 御覧に入れなさい</p> <p>戻すまい</p> <p>勝連の按司は 誠に名高い</p> <p>背丈も容貌も 世間の人とは違つて立派だ</p> <p>護佐丸の遺児だ わかつたか 阿麻和利達がすまい</p> <p>朝に夕に 寝ても忘れられない 親の敵仇を 討ち取つたことは 夢であるうか</p> <p>鶴松 かたき討ちとたる けふの嬉しさや 過し父親も 知ゆらと思は。</p> <p>音曲「三線ジャンジャン」 太鼓さざみ打ち</p> <p>亀千代 朝夕さも 寝ても忘れらぬ 親の敵かたき 討ち取たることや 夢がやゆら。</p> <p>仇を討ち取つた 今日の嬉しさを 亡き父親も 知ると思うと</p>	<p>あまおへを遣い二童、下手入 二童、下手出</p> <p>護佐丸の遺児だ わかつたか 阿麻和利達がすまい</p> <p>朝に夕に 寝ても忘れられない 親の敵仇を 討ち取つたことは 夢であるうか</p> <p>鶴松 かたき討ちとたる けふの嬉しさや 過し父親も 知ゆらと思は。</p> <p>音曲「三線ジャンジャン」 太鼓さざみ打ち</p> <p>亀千代 朝夕さも 寝ても忘れらぬ 親の敵かたき 討ち取たることや 夢がやゆら。</p> <p>仇を討ち取つた 今日の嬉しさを 亡き父親も 知ると思うと</p>
---	--

図7：松山伝十郎『琉球浄瑠璃』

琉球浄瑠璃  
久志元若按司  
東京、松山いろは著

琉球浄瑠璃の正面目を現れ出で  
出様來者や天願の按司の頭役をゆたも謝名の大主  
罷り出でたる某、天願城主の家老職を相勤ひる謝名の  
大主よて候。

「出様來者や」とい現れ出でたる者い云ぬとよてしゆた  
るとはして居ると云ぬとなり。

琉球國の當時一地方毎に城廓を築き、按司を配置し、以て  
其の地一般の政務を管理せしむ、猶本邦幕府時代に大名

各地に置き、以て其の配下の政治を可らしめたるが如  
き、故に琉球の按司は恰本邦の大名と同じく、一國一城の  
主なりと知るべし。

天願城ハ中頭地方具志川間切と地勢は依國頭中頭日島間切又  
之を小頭とす此地那覇の二色及び三十五天願川流れ二里廿七町と亘る  
の傍にあり、城址今猶存す。

頭役は本邦の家老の如く、按司即城主に次ぎての役柄に  
て大主の其の符ありと知るべし。

嗟、淺ましや此身黒髪は雪の積る年までん人の下知請  
けて朝夕胸中一煙たのひび主人打ち果ち按司の身  
になや夢の間の浮世樂をらんとひて色慾ゆすゝみ  
あちま伺やひ打ち取らんとひて様々にしやすが聞ち

図8：『琉球踊狂言』

# 琉球踊狂言

奇峰子 東洋史譯述

## 姉妹敵討

樂屋の囃子につれて殿めしき侍、供二人を従へ舞臺の正面に現れ出で

罷出たる某は宜野灣の城主神山の按司の頭役謝名の人主にて候、今夜は名高き秋の十三夜月見の爲に伊佐濱に罷越した。ヤア宇地泊のヒヤ空も隈なく澄み渡り月影の好さ。

宇地泊 仰の通り雲霧もはれてさやかな月でんるいさこなたに休息ありて御覽候おそばせ。

謝名 ヤヤ、あなたは牧港此方は砂邊村灣渡具知幾波神まで一面に見渡し、浦々の釣舟は漁火の影に目の前に引寄せ詠め見飽かぬ此の景色。

喜友名の子 仰の通り浦々の景色の面白さ。お氣晴らしにゆるりと御覽候へ

宇地泊 ヤア喜友名の子御酒を上げられよ

喜友名 御酌致しませう

謝名 サア一つ酌け

喜友名 お加へなさらませ

謝名 盃に移る月影の美しくさ。今夜は飲み明すぞ宇地泊のヒヤーン持て。

宇地泊 頂戴仕ります

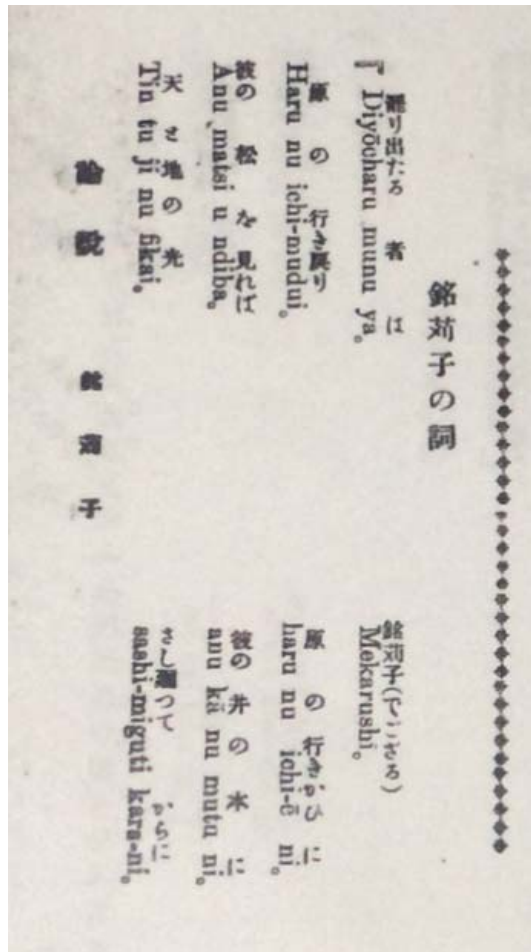
謝名 喜友名の子一つ持て

喜友名 頂戴仕ります

歌 意譯 さやかに照す月影に。 潮汲む葉も面白や。 此時羽ハタ、節といふ歌につれて龜松乙鶴の二人花道より出で来る

謝名 アレ、二人連に潮汲める娘、容姿の美しさに呼べ。

図9：『言語學雜誌』掲載の「銘苺子」



1	阿波樞					
2	糸納教討					
3	大漣教討	高山教討				
4	大川教討	忠孝婦人村原組				
5	大城大軍1*					
6	大城大軍1*					
7	大漣教討	久良薬大主2*	藏波大主			
8	女物狂討	深久地本・兼島本：人盗人				
9	鏡の割					
10	栗刺幡佐丸公					
11	勝連の組					
12	奇縁の巻					
13	藤巨物語	国吉の比屋				
14	具志川大軍					
15	賢母三婆之巻					
16	孝行の巻					
17	孝行竹巻之巻3*					
18	季女布晒					
19	黄金の羽笠・黒川の子					
20	藤原丸忠薬伝	忠臣康佐丸				
21	藤原丸忠薬伝	二齋教討				
22	崎原の按司					
23	志摩真父子	官野湾教討				
24	志摩真父子	官野湾教討				
25	熱心婦人	中城若松				
26	凧見の官	徳見官	伊佐の大主			
27	百南教討					
28	大南山					
29	高那教討					
30	多田名大主	多田名組				
31	探義伝教討	嶋義伝				
32	月之巻多4*					
33	忠孝教討	高山期				
34	忠孝天婦忠義					
35	忠士身替之巻	忠臣身替	八重瀬	伊舎堂本：八重瀬の組立		
36	忠臣義勇					
37	忠臣組					
38	忠臣仲宗松豊見親	仲宗松豊見親組揃集	多津山教討	多津山の按司		
39	忠臣反閨の巻					
40	東辺名夜討					
41	貴孝夫人	波平山戸				
42	手水の縁	久志の若按司	久志山教討			
43	天降若按司教討	久志山教討				
44	中村廣真善戸4*	華島本：南山小				
45	二山和徳	桑川の子				
46	花栗の縁					
47	花城若松					
48	徹行の巻					
49	父子忠臣之巻					
50	天婦縁組の巻					
51	伏山教討	長者の大主				
52	辺戸の大主					
53	北山崩4*					
54	万機教討					
55	身替忠女4*					
56	未生の縁4*					
57	聖取教討					
58	鮫対子	恩河本：川松之縁	北山若按司教討	北山之若按司教討	北山崩（譲得久本）	
59	本部大主					
60	本部大腹					
61	矢藏の比屋					
62	屋敷名大主教討					
63	伊祖の子					
64	伊祖の子					
65	曹弘					
66	曹弘（重草志康忠）					

表の作成にめいた身相讓の照題Ⅱを参考として、所収されてない戦前の台本である『工四附組揃集』と筆者年代不明の伊舎堂用八所蔵本組揃集『大里村史』からも作品を揃った。

【表①】組踊異表題一覧表

- 1\*『大里村史』にて内容を確認済み。  
 2\* 他の組踊集にこの外題がみられないが、地方の組踊台本にて同作品であることを確認済み。  
 3\* 『工四附組揃集』のみみられる組踊作品。  
 4\* この作品はすべて『伊舎堂用八所蔵本組踊集』にのみ所収されている。  
 上記異表題一覧は、また原本の確認を終えていないものもあるため、今後変更となる可能性がある。

## 第二章 「組踊本」の校合

本章では、現存する組踊集の中から、校合の対象となる組踊集や「組踊本」を選定し、底本・対校本を決めて「組踊本」の校合を行う。

### 第一節 校合の対象とする組踊作品

#### 1 はじめに

現在、組踊集などにみられる組踊作品の総数は、異なる外題をまとめると六十六作品となる（四十頁「組踊異表題一覧表」参照）。その中で本論文での校合の対象とする作品は、首里王府で演ぜられたことが記録に見られる作品を対象とする。理由としては、「組踊本」は王府で初めに制作され、王府での行事（おもに冊封）の余興として組踊が上演されてきたという事実からである。

冊封の諸宴で組踊が演ぜられたのは一七一九（康熙五十八）年の尚敬王の冊封から、一八六六（同治五）年の尚泰王の冊封までの六回である。一七一九年と一七五六年の上演作品は正確には分からないが、一八〇〇年の冊封以降からの四回の冊封にどの作品が上演されたかというものはある程度分かっている。また、組踊は冊封諸演以外に「弁ヶ嶽遊覧」や冊封使の帰国後に行われる御膳進上などでも演じられているので、ここで演じられた作品も対象とする。一八〇

〇年から一八三八年までの演目は一八三八年の「躍方日記」に拠り、一八六六年の演目は「演戯故事」に拠った。また「躍方日記」には一八三八年の重陽宴の演目が載っていないため、伊波普猷の『校註琉球戯曲集』（以下『戯曲集』）で補った。以下に考察を行う。

#### 2 冊封使録にみえる組踊作品

琉球側の冊封関係資料以外に、中国側で編集された冊封使録の中から、芸能の記事を抜き出し、そこから冊封に供された組踊作品名を明らかにする。

一七一九（康熙五十八）年の冊封は冊封副使である徐葆光の著した『中山伝信録』よって、供された芸能の一部をうかがい知ることができる。それによると、芸能の記事がみえるのはそれ以前の冊封と同じく中秋宴からである。中秋宴では「神歌祝頌」から始まり、「笠舞」「花索舞」「籃舞」「拍舞」「毬舞」「桿舞」「竿舞」そして「庭中設烟火數十架又令數人頭戴火笠騎假馬頭尾烟爆齊發奔走庭中以為戲樂」（注二）とあり、花火と奏樂で宴が終わっている。ここで演じられた花火を原田禹雄は「數人が頭に火笠をいただき、木馬にのり、頭と尻尾から爆竹が一せいに爆発して、庭中を走りまわる。『戲樂』である」（注三）として「戲樂」を演目名としているが、ここでの「以為戲樂」の「戲樂」には「戯れたのしむ」（注三）という意があるので「戲樂を為す」として訳したほうがよく、したがって演目名で

はない。そしてこの中秋宴には組踊は上演していない事がわかる。

重陽宴は龍潭での「龍舟の戯」があり、それを見終ってから、場所を首里城北殿に移して踊りなどが行なわれる。ここで徐葆光は「演劇六折アリ。略記スルコト後ノ如シ」<sup>〔注四〕</sup>として演目を挙げている。

第一（折）に「老人祝聖ノ事ノ為」として、現在の長者の大王<sup>〔注五〕</sup>のような演目から始まり、その中で「一ハ團扇ノ曲、「六童舞フ」一ハ掌節ノ曲、「三童舞フ」一ハ笠舞ノ曲、「四童舞フ」一ハ籃花ノ曲、「三童舞フ」<sup>〔注六〕</sup>という舞踊を上演する。第二（折）に「鶴亀二兒、父ノ仇ヲ復スルノ古事」、第三（折）に「鐘魔ノ事」、第四（折）に「張孫太平ノ歌」として五〇人余りが輪をなして交互に踊るといふ。「張学礼録」（これ以降、冊封使録を挙げる際には同じタイトルの使録もあり、便宜上「冊封使十録」「例…徐葆光録」という形で記載する）が「幼童百餘人」、「汪楫録」が「七十餘人」と時代が下ることに人数が減少しているが、ここでも入子躍が行われたことがうかがえる。入子躍は若衆が踊りの中心をなす芸能で、円陣を作って、音楽や太鼓に合わせて踊られる舞踊である。第二と第三には「二童敵討」と「執心鐘入」の上演があったことがわかる。「徐葆光録」の記述では以上の内容が「四折」までとして記されているが、「四折」で演じられた内容を正確に分けると、第一（折）で踊りが五、第二（折）と第三（折）で組踊が二、第四（折）で入子躍の合計八演目である。「折」は国語でいうと時期や機会、又は一つの切れ目を表すが、漢語ではその様な意味ではなく「折」で元雑劇的一幕、一くぎり<sup>〔注七〕</sup>を意味し、『漢語大辞典』にも「戏曲名词。元明杂剧结构的一个段落

称折。「中略」明清传奇剧一般分“出(齣)”，也有写作“折”的。其可单独演出的叫折子戏。后亦指歌舞剧的一幕。」<sup>〔訳〕</sup>戯曲名詞。元明の雑劇の構造的な一段落を折と称す。「中略」明清の伝奇劇は一般的に分けると「出(齣)」、または「折」と書かれる。其中、単独で演出できるものは「折子戯」と呼び、後または「歌舞劇」の一幕を指す。<sup>〔注八〕</sup>とある。「折」は演劇を示す語であるのだ。組踊は踊りと曲、台詞が組み合わさったものであるから「折」と記載し、ここでの組踊以外の演目にはいくつかの踊りや音楽が合わさったものが演じられている事から、それも「折」と数えたのである。そのうちの四つのみ「略記」し、残りの二つは略したのである。残りの二折が組踊だったか、それ以外の芸能であったかは記されていないので分からないが、この重陽宴で組踊が初演され、それ以外には舞踊が宴に供された事がうかがえる。

餞別宴では「儀禮前ノ如シ。又國中ノ故事、一二齣ヲ増シテ樂ミヲ爲ス」<sup>〔注九〕</sup>とあるので「國中ノ故事」を「一二齣」演じたということから、中秋宴・重陽宴などに供したような演目に加えてさらに組踊が一、二番多く演じられていることがうかがえる。この記述から中秋宴・重陽宴同様に舞踊や組踊が供されたことが推測できる。拝辞宴は「儀禮戲樂ヲ増スコト前ノ如シ」<sup>〔注一〇〕</sup>とだけある。組踊や舞踊が行なわれたのであろう。望舟宴は「国王天使館ニ至ツテ宴ヲ設ク」<sup>〔注一一〕</sup>とあり、那覇にある天使館で行なわれた。そこでは「禮前儀ノ如シ」とある。天使館で舞踊や組踊を上演したということがうかがえる。餞別宴・拝辞宴・望舟宴ではそれぞれ中秋宴・重陽宴

と同じような内容の踊りや組踊が上覧されたことがうかがえるが、その演目まではわからない。だが、史料からは拝辞宴で組踊が演じられていたことまでは明らかである。

その次の冊封の一七五六（乾隆二一）年には、尚穆王の冊封使として正使全魁・副使周焯が来琉している。この時の周焯の著した『琉球国志略』には、「徐葆光録」と同じく各宴の内容が記されている。中秋宴の舞踊の内容は老人と童子数名が「神歌」を歌い、その後「笠舞」「花索舞」「花籃舞」「竹拍舞」「武舞」「獅毬舞」「桿舞」を演ずる。舞踊の内容は「徐葆光録」とほぼ同じであるが「竿舞」がない。そして、「張録に走馬・弄刀・刺鎗・擊劍・足鞠・走索の諸戲有り。今悉く之無し。」（原漢文）<sup>（注二二）</sup>とあることから、ここでは以前の冊封（「張学礼録」）での芸能とは全く違ったものが供されたことを示唆している。また踊りの後に「後に雜劇を演ず。悉く其の國中の故事」（原漢文）<sup>（注二三）</sup>とある。「雜劇」とは宋代の演劇で内容は滑稽なものを主としたが、形式的には詠誦・せりふに重点を置き、歌舞も含まれ、物語を上演した。中国演劇は元の時代になって開花時代をむかえる。文学においては唐の詩・宋の詞・元の曲といい、元の曲というのは詩・詞を受け継ぎ発展したもので、曲は上演するために作られた。つまり演劇である。元曲は元の雜劇であり、中国古典劇の代表となった。周焯は中秋宴で観た組踊を、その形式と琉球国の故事を用いた国劇という意味から、自国を代表する戯曲である「雜劇」と表現したのである。この「雜劇」については犬飼公之も同様の考えを示している<sup>（注一四）</sup>。

また、重陽宴では龍潭で「龍舟の戲」を観、その後で「龍舟の戲終り、仍ち王府に於て開宴す。座次、演劇、中秋宴と同じ。烟火は設ず」（原漢文）<sup>（注二五）</sup>とある。爬龍船競漕の記事は「汪楫録」と同様である。しかし後半の芸能については詳細な記事はない。ここでも「演劇」があったことが記されているので、組踊や舞踊が行なわれた事をうかがわせる。

餞別宴は「演劇前の如し」とだけあり、拝辞宴でも「前儀の如し」である。望舟宴は「国王天使館に至りて宴礼を設ける。前儀の如し」と記され、三宴ともに芸能の詳しい記述はみられない。

一七〇〇年代の冊封使録でうかがえる諸宴は、一六〇〇年代を踏襲して、琉球側で芸能を準備し上演したのは中秋宴のからというのが通例となった。中秋宴を比べると、「徐葆光録」は未だ舞踊のみで構成されているのに対して、「周焯録」では組踊が上演されたことがうかがえる。また、重陽宴以降は「徐葆光録」から組踊がはずれの宴でも演じられたことがうかがえる。一七〇〇年代の使録では組踊の記載が「演劇」「雜劇」とされ、その数え方も「演劇六折」「國中ノ故事、一二齣」と表されている。犬飼公之は「演劇」について冊封使は「組踊を含む催しの全体は等しく『演劇』ととらえられたといえよう」<sup>（注一六）</sup>と述べている。組踊のみの場合に「雜劇」と記されているのは揺るがないが、犬飼のいうように舞踊と組踊を含めて「演劇」のではなく、舞踊の場合は「笠舞」のように舞踊名を記している。「徐葆光録」の中秋宴、「周焯録」の重陽宴にみられるように、いくつかの歌や踊り（そのほかに入子踊などにみられる神歌なども



含める)が組み合わせられた芸能を「演劇」とし、同様に踊りと曲、台詞が組み合わさって構成される組踊も「演劇」としているとも考えられないか。冊封使録の「雑劇」という記載から、冊封使は組踊を中国の正式な戯曲として訳している事がうかがえるのである。

一八〇〇(嘉慶五)年、一八〇八(嘉慶一三)年、一八三八(道光一八)年、一八六六(同治五)年の四回の冊封の諸宴に、どの組踊作品が上演されたかというのは、各冊封使録には記載が無い。

それから、冊封使録全体を通して見た際に、作品内容が具体的にみられる組踊作品は、「徐葆光録」の重陽宴に上演された「護佐丸敵討」「執心鐘入」の二作品だけであった。しかし、具体的な演目がみられない宴でも「演劇前の如し」と記されているということは、組踊が上演されたということが言えるだろう。次に琉球側の冊封史料から、上演された組踊作品をみていこう。

### 3 琉球側の冊封史料にみえる組踊作品

一八〇〇年(以下、申年とする)、一八〇八年、(以下、辰年とする)一八三八年(以下、戌年とする)、一八六六年(以下、寅年とする)の四回行なわれた冊封の諸宴の舞台に、どの組踊作品が上演されたかというのは、それぞれの冊封史料が琉球に残っているわけではなく、詳細を窺い知ることができるのは、戌年の『冠船躍方日記』(以下『躍方日記』とする。)だけである。『躍方日記』には申年・

辰年・戌年の演目が記されている。そして寅年については、『躍方日記』のような史料は現存していないが、その他の御冠船史料でうかがい知る事ができる。

申年は乾隆帝崩御のために琉球側では芸能を準備していたが、中秋宴・重陽宴などの芸能上覧を副使である李鼎元の記録を見ると、断っていることがうかがえる(注一七)。よって『躍方日記』の申年の演目は上覧に供されず、上演予定演目であった事がわかる。『躍方日記』を見ると申年の冊封に倣って辰年・戌年の演目を決めているので、戌年の資料ではあるが、そこに記された前二回の記録は信頼性が高いと思われる。ただ、演目が冊封諸宴のどれで演じられたかという詳細な記載は戌年以外見当たらない。しかし、共通して言えることは、どの年も冊封諸宴と御膳進上で上演される組踊の演目を分けて記載している。さらに、『躍方日記』には戌年の冊封諸演以外に弁ヶ嶽遊覧や御膳進上の演目まで記されており、戌年の冊封における諸宴以外での組踊の上演の場を知ることができ、貴重である。以下『躍方日記』に見られる組踊の作品名をみてみよう。

#### 申年諸宴

銘苺子	忠孝婦人	執心鐘入
北山崩(注一八)	巡見官	万歳敵討
義臣物語	女物狂	護佐丸敵討
孝行之巻	大城崩	忠士身替之巻
東辺名夜討(注一九)		

御膳進上之時

辺土の大主 銘苺子 我数之子  
 孝女布晒 護佐丸敵討 孝行之卷  
 姉妹敵討

辰年諸宴

銘苺子 執心鐘入 忠士身替之卷  
 護佐丸敵討 花売之縁 孝行之卷  
 大川敵討 巡見官 万歳敵討  
 女物狂 大城崩 久志之若按司敵討  
 義臣物語

御膳進上之時

辺土の大主 姉妹敵討 本部大主  
 孝女布晒 義臣物語 執心鐘入  
 大川敵討(注二〇)

戌年諸宴(注二)

天縁奇遇児女承慶 銘苺子  
 婦人設計救君討敵 忠孝婦人  
 淫女為魔義士全身 執心鐘入  
 夫婦約別得財再合 花売之縁  
 兒子至孝双親免罪 巡見官  
 設計戲芸為父報仇 万歳敵討

児被賊却狂婦苦尋 女物狂

兄弟報仇忠孝並全 護佐丸敵討

孝感除蛟姉弟興家 孝行之卷

母子義情感動敵人 大城崩

君爾忘身救難雪仇 忠士身替之卷

幼君得救報仇継業 天願若按司敵討

一人忠義再興基業 義臣物語

弁ヶ嶽遊覧

花売之縁 万歳敵討

末吉社壇遊覧

義臣物語 女物狂

御膳進上之時(注二)

辺土の大主 執心鐘入 姉妹敵討  
 銘苺子 本部大主 孝行之卷  
 東辺名夜討

申年・辰年・戌年の演目を表A(以下、表は三八九頁以降を参照)にまとめると、共通して冊封諸宴には十三演目、御膳進上には七演目上演していることがわかる。『躍方日記』にみられる申年の演目は、「嘉慶四年「中略」の踊方の一節として、次の記録がある」として「當間一郎も紹介している。それには「新古組踊番敷御用ニ付書調先達而評定<sup>(マ)</sup>江差置候<sup>(マ)</sup>処今日左之通拾参番仕組方被仰付候事／一 銘苺子 玉城親方、一 執心鐘入 玉城親方、一 巡見官 平敷親雲上、

一 義臣物語 田里親雲上 一 忠孝婦人 久手堅親雲上、一 北山崩 田里親雲上、一 萬歳敵討 田里親雲上、一 女物狂 玉城親方 一 護佐丸敵討 玉城親方、一 孝行之巻 玉城親方、一 大城崩 田里親雲上、一 束辺名夜討 徳嶺親雲上、一 忠臣身替之巻 辺土名親雲上<sup>(注三)</sup>とあるが、引用した文献名は記されていない。体裁は若干異なるが、真境名安宜が一九三四(昭和九)年の『琉球新報』に載せた申年の躍方日記の記述<sup>(注四)</sup>と内容が同じであり、これに拠ったと思われる。この資料の番組数と演目が同じである事からも、『躍方日記』にみる申年の演目は間違い無い。冊封の際に演じられる十三演目・御膳進上の七演目というのは申年から通例となり、後の辰年・戌年と踏襲されているのである。

辰年の演目は、申年と比べて「北山崩」と「束辺名夜討」が諸宴で除かれ、新たに「花売の縁」と「天願若按司敵討」が加えられている。御膳進上では「我数之子」が除かれている。申年から作品の出入りがあるが、作品数は同数である。

戌年の演目は、諸宴は辰年と全く同じ内容であり、その演目名はまず中国語訳で書かれ、その後琉球側の演目名が書かれるといった体裁で記載されている。この中国語訳の表題は冊封使に渡す「演戯故事」に書かれている組踊の表題の中国語訳と同じである。そのため、冊封使が帰国した後に行われる御膳進上で上演する作品には中国語訳の記載がない。

戌年は多くの御膳進上の上演演目が確認できるが、中秋宴・重陽宴・拝辞宴(『躍方日記』では「御暇乞宴」と記載されている)・餞

別宴・望舟宴(『躍方日記』では「天使館御旅送宴」と記される)での上演演目が共通して、「一 同時躍番組躍組に相見得候付略す」として記載されていない。諸宴は前記の一三演目から上演して、別に各宴の躍番組を『戯曲集』のような形でまとめたと思われる。ここでは諸宴以外に弁ヶ嶽遊覧・末吉社壇遊覧での演目が記載されている。これも諸宴で演じる作品と重なっている。

御膳進上には稽古をするために挙げられている七演目<sup>(注五)</sup>以外に、薩摩在番・御茶屋御殿で実際に上演した演目がわかる。以下に記す。

大和衆へ上覧した演目<sup>(注六)</sup>

銘苺子 執心鐘入 姉妹敵討  
義臣物語 万歳敵討 孝行之巻

御茶屋御殿での演目<sup>(注七)</sup>

辺戸の大主 護佐丸敵討 久志の若按司  
姉妹敵討 本部大主 義臣物語  
大川敵討 束辺名夜討

御膳進上の舞台で演じる演目は、冊封諸宴で演じられた演目と重なっている。もちろん前二回の冊封も同様である。だが、驚くのは実際の御膳進上が終わって行われる国内での上演演目は、冊封諸宴の演目数と同じであるということである。この記録から、前二回の御膳進上・終了後の国内上演も実際の上演演目数では本宴とほぼ同

数の組踊を上演していたことが推測できるのである。

最後の冊封が行なわれた寅年の演目は、躍方の記録が残っていないため、『丙寅冊封諸宴席前演戯故事』（以下、『寅年諸宴演戯故事』とする）や、池宮正治の論考<sup>（注二）</sup>などから演目がうかがえる。池宮は寅年の演目を、「孝行の巻・義臣物語・二童敵討・大城崩・忠孝婦人・奸臣叛主終逢裁判（瀬長按司）・銘苅子・忠臣身替の巻・万歳敵討・花売之縁・執心鐘入・天願若按司敵討・伊祖の子・女物狂」の十四演目としている。ここでの「奸臣叛主終逢裁判」という演目は、現存する組踊に同じ内容のものがみられないため、池宮は「瀬長按司」と訳題を括弧で括っている。池宮は『寅年諸宴演戯故事』をもとに寅年の演目を挙げているが、漢文の表題を戌年の組踊演目にある漢文の表題とを照合すると、池宮の挙げた番組数は同じであるが「伊祖の子」としている演目を確認してみると、池宮のいう「伊祖の子」としている演目は内容を見ると「巡見官」であり、「昔、宜野湾に伊佐の大主という者がいて、前妻との間に亀寿という子があり、後妻との間に一男一女を生んだ。弟の名前は松金という」（原漢文）<sup>（注二五）</sup>という書き出しである。伊祖と伊佐という類似した地名と、両作品とも孝行物であり筋が似ている部分もあることから、「伊祖の子」と「巡見官」とを誤ったと思われる。

また、この年の冊封諸宴の芸能に関わる尚家史料に、『丙寅冊封那覇演戯故事』（以下、『寅年那覇演戯故事』とする）というものが那覇市に寄贈されている。この史料は『寅年諸宴演戯故事』の次に収録されていることから、寅年冊封の史料であることはいうまでもな

い。だが、具体的な宴の内容を記してはいないので冊封七宴のどの宴に関係がある史料なのか断定できないが、その史料名にみられるように「那覇」の「冊封」ということから、おそらく那覇の天使館で行なわれる七宴の最後、望舟宴で演じられる芸能の内容であると推測できる。そこには二十三演目という多くの舞踊と、組踊の演目が三番、漢文で確認できる。池宮はいち早くこの史料を論文の中で紹介しているが、その内容については細かく触れていない。池宮はこの史料に対して「冊封使が滞在する那覇では、これ（首里躍のこと。筆者注）とは別に古くから那覇躍があつて、躍奉行を別途任命し、天使館内に設置された舞台で組踊や舞踊を提供していた。ここでも首里躍とほぼ同規模の出し物が用意されていたようである」<sup>（注三〇）</sup>という見解を示しているが、『躍方日記』をみると戌八月二十七日に「一 来月二日於 天使館御旅送宴之時／躍被仰付候付人数八拾八人差越申候間／先例之通此方様子次第炬五拾結無／遅滞差出候様親見せ江被仰付可被下候」とあるので、望舟宴は那覇の天使館に踊奉行が出向いて行ったと思われる。ということであれば踊り手はすべて首里の人間である。確かに「那覇躍奉行」という役職は、那覇・泊系の家譜に見られるが、家譜の記事からは年忌の躍奉行であるの<sup>（注三一）</sup>、冊封の際にも任命されていたかは不明である。池宮のいう「那覇躍」というのは、池宮が述べている「首里躍」に対しての「那覇士族で構成された踊奉行」もしくは「那覇で演じられる踊りや組踊」という意味なのであろうか。望舟宴は首里から踊奉行が派遣されているので、『寅年那覇演戯故事』という資料は望舟宴ではなく、

その他に那覇で行われた芸能の記録とひとまず仮定する。

那覇で用意された組踊は、「継母妬忌女兒払雪」「手水佳偶契如日月」「伏山報讐忠孝両全」であり、それぞれ「伊祖の子」（雪払い）・「手水の縁」・「伏山敵討」である。この「継母妬忌女兒払雪」の内容は「昔、首里の伊祖という者に前妻の子で思鶴という娘と亀寿という子がいた」（原漢文）<sup>（注三三）</sup>という書き出しから始まっており、この演目が伊祖の子（雪払い）である事は相違無い。また、「手水の縁」が冊封の舞台に供されたことは、池宮以外には示唆しておらず<sup>（注三三）</sup>、また、その史料もいまままで提示されてこなかった。他の年に編纂された「那覇演戯故事」と記される史料は見つかっていないが、『躍方日記』の記事にみえるように、一八〇〇年代の冊封が、ある程度、前回の冊封の内容を踏襲することから、この『寅年那覇演戯故事』という史料の存在で、寅年以前の冊封でも、那覇で上演する組踊の漢訳である「演戯故事」が別で編集されていた事も推測できよう。『寅年諸宴演戯故事』『寅年那覇演戯故事』によると、寅年の諸宴と冊封に関わる舞台に供された演目は以下の一七作品である。

孝行之巻	義臣物語	護佐丸敵討	大城崩
忠孝婦人	銘苅子	忠士身替之巻	万歳敵討
花売之縁	執心鐘入	天願若按司敵討	巡見官
女物狂	瀬長按司	伊祖の子	手水の縁
伏山敵討			

そして寅年の御膳進上の舞台の為に準備された組踊は池宮によると「辺戸の大主・義臣物語・大川敵討・久志の若按司・二山和睦・執心鐘入・銘苅子」<sup>（注三四）</sup>である。この年も戌年同様、この七演目を中心に、諸宴で演じた作品も織り交ぜながら御膳進上の舞台に組踊を供したのであろう。

一八〇〇年代は中秋宴から最後の望舟宴まで組踊が演じられ、戌年の御膳進上には合計すると諸宴と同等数の作品が上演されていた事がうかがえる。表Bにまとめると（三八九頁以降を参照）冊封諸宴の舞台に供される組踊の数は、合計すると申年・辰年・戌年が一三、寅年が一七、御膳進上の舞台に供するために準備する演目は申年から寅年まで共通して七である。だが、戌年の『躍方日記』には、実際に御膳進上の舞台で演じる際は諸宴で演じた作品も演じられるため、その実数は諸宴とほぼ同等になるようである。他の年の躍方日記が現存していないので詳しくはわからないが、戌年以外も同様に、御膳進上の舞台では準備する演目以外に、諸宴で演じた組踊も上演していたという推測ができる。

以上の結果から、冊封で演じられた作品総数は以下の二十五作品である。

銘苅子	執心鐘入	護佐丸敵討	孝行之巻
女物狂	万歳敵討	義臣物語	大城崩
北山崩	大川敵討	巡見官	忠士身替之巻
東辺名夜討	辺土之大主	我数之子	孝女布晒
姉妹敵討	花売之縁	天願若按司敵討	本部大主

瀬長按司 二山和睦 伊祖の子 伏山敵討

手水の縁

#### 4 小括

冊封使録からうかがえる芸能の記述は、一七一九年の徐葆光録になって初めて仲秋宴に舞踊と重陽宴に組踊が記録される。一七五六年には仲秋宴から組踊が演じられ、それは一八六六年に行われた最後の冊封まで踏襲される。

組踊は初演された一七一九年こそ、正確には二作品しか作品名を確認することができないが、一八〇〇年の申年の冊封になると冊封で上演される作品は一三作品という数が固定され、戊年まで踏襲される。最後の寅年には一九作品という、前三回よりも多い演目が上演され、またこの年に新たに見られる組踊が五作品あることが確認でき、組踊の隆盛をみることができ、一七一九年から寅年の冊封にいたるまでの冊封諸宴と冊封に関わる舞台で確認できる組踊の総数は二五作品にも及ぶ。

これまでは平敷屋朝敏作と伝えられる「手水の縁」は池宮や矢野が指摘するように<sup>(注三五)</sup>、「平敷屋・友寄事件」の経緯から、その上演は王府で行われることはなく、この組踊は王府での上演は禁じられ、地方に伝わっていたというのが通説となっていた。しかし、事実は寅の冠船の資料の中にその漢訳が見られることから、冊封の舞台に供されていたことがわかった。そして「手水の縁」の現存する最古の「組踊本」は多良間村教育委員会所蔵のものであり、各地方

に伝わっている「組踊本」は、その内容に異同がみられる。そのため、作者だけでなく、「組踊本」や演出についても不明な点が多かったが、今後『寅年那覇演戯故事』の内容を詳細に検討することで、地方にみられる「組踊本」のうち、どの「組踊本」の内容が王府で演ぜられた内容に近いものであるかを明らかにすることができると思われる。また、平敷屋朝敏の作ということが疑われていたが、みてきたように申年から冊封諸宴・御膳進上に上演される組踊作品はある程度前年を踏襲していることから考えると、寅年以前の望舟宴でも「手水の縁」は演じられた可能性が考えられる。もしも「手水の縁」の作者が平敷屋朝敏であった場合、組踊がはじめて上演された一七一九年から上演されている事も考えなければならぬし、一八〇〇年代に入って上演されはじめたのであれば、その作者についても一考せざるを得ないであろう。この点については稿をあらためて論じたいと思う。

現在確認できる組踊の数はおよそ七十作品である。冊封使録や冠船の記録から、冊封にはその約三分の一の作品が上演されたことがわかった。王府上演が確認できない演目に対しても、今後の資料の発掘で、近世に演じられたことがうかがえる組踊が増えることはまちがいなさそうである。また、組踊が演ぜられる前の時代の芸能には、龍潭での「龍舟の戯」や入子躍のような舞踊、さらには「張学札録」にみられるような曲芸のようなものまで供されている。組踊の成立を考えるときに、これまでのような中国演劇や能楽との考察<sup>(注三六)</sup>も必要であるが、組踊以前に冊封諸宴に演ぜられた芸能が、ど

のように組踊に関わっているのかも考えねばならない。

次節では、本節で得られた王府上演の確認できる組踊二五作品の中から、尚家所蔵の組踊集に収録されている、「辺戸之大王」「執心鐘入」「銘苺子」「大川敵討」「義臣物語」「天願若按司敵討」「二山和睦」の七作品を校合し、尚家所蔵の「組踊本」と諸本の関係性を探る。

## 第二節 『尚家旧蔵組踊集』と諸家・地方伝来組踊集の校合

### 1 はじめに（『尚家旧蔵組踊集』と王府関係の組踊「組踊本」）

本節では校合を行う底本と対校本について、その基本的な部分や諸々の事項について説明しておきたい。

#### i 王府と関係のある組踊集について

『尚家旧蔵組踊集』は尚家に所蔵されていた組踊集で、現在、那覇市立歴史博物館に所蔵されている。タイトルは『組踊集』とだけあるので、便宜上『尚家旧蔵組踊集』（以下『尚家本』とする）と呼ぶことにする。

王府の「組踊本」は『校註 琉球戯曲集』の凡例に見えるように「羽地本」と小禄本<sup>注三七</sup>という二冊だけが戦前に利用できる状況であったと思われる。「羽地本」が一八三八年の冊封の史料であり、「小禄本」は一八六六年の冊封の史料である。それぞれ冊封の踊奉行に任

命された按司奉行の名をとって名付けられている。このような王府に所蔵されていた「組踊本」は戦前までは存在していた。それは『校註 琉球戯曲集』が出版された一九二九年の、沖縄県立沖縄図書館（現在の沖縄県立図書館）が発行した『郷土志料目録』<sup>注三八</sup>に戌年の『冠船踊』一冊と、寅年の『冠船踊』上中下の三冊が所蔵されていることからうかがえる。その他の戌年と寅年の冠船史料は目録からは日記類しか見られないため、おそらくこの『冠船踊』が伊波の言う「羽地本」と「小禄本」である可能性があるが、資料が現存していないため断定することはできない。伊波は沖縄県立沖縄図書館に所蔵されていた「羽地本」を底本として『校註 琉球戯曲集』を編んだのである。

また、「羽地本」を書写したとみられる「組踊本」は、台湾大学に残されている『琉歌大観』に収録されている「執心鐘入」「銘苺子」と、『琉球新報』の一九二五（大正十四）年三月十四日以降に、シリーズ掲載された組踊の「組踊本」（宮城真治資料<sup>注三九</sup>）にある「執心鐘入」「銘苺子」とがある。

『琉歌大観』は、真境名安興が中心となり、明治末から大正期にかけて構想された、沖縄の「琉歌」やその他の歌謡をまとめ、出版しようとしたものである。その内容は『おもろさうし』の代表的な歌が五十編、琉歌が三千首、口説、南島歌謡のクエーナやテイルク

グチ、宮古島の歌、奄美大島の歌など膨大なもので、その中に組踊も前述の二作品が含まれているのである。この「琉歌大観」は、昇曙夢の序文に「大正六年九月<sup>注四〇</sup>」とあることから、一九一七（大正六）年ごろに出版しようとしたと思われる。しかし、一九二五（大正十四）年に出版された『琉球文学研究』の序文「田島先生の旧稿琉球語研究資料を出版するにあたって」に、伊波普猷が「先達琉球情調を味つて帰つた詩人佐藤惣之助氏は真境名君と二人で編纂した『琉歌大観』の出版を引き受けようといつた位だ<sup>注四一</sup>」と述べており、この時期にも出版のチャンスは数回あったと思われるが、それは実現せずに、草稿も行方不明となっていた。だが、草稿の写しが台湾大学図書館に所蔵されている事がわかり、現在確認することのできる貴重な資料となっている。その後、島袋盛敏が琉歌を集めた『琉歌大観』を一九六四（昭和三九）年に出版したので、それと分けるため本研究では『台湾本琉歌大観』と呼ぶこととする。

また一九二五年、『琉球新報』に掲載された「組踊本」は、この時期の『琉球新報』が現存していないため、元々どのような体裁であったかは推測することしかできないが、一作品の「組踊本」を数日に分けて掲載している。大きさは新聞一面のおよそ八分の一程度で、「組踊本」が掲載されている部分を切り取って小冊子にできるよう、紙面の中央から半分に折り、紙面の両端には穴を開ける部分の印が

ある。すべてをまとめると袋とじの組踊集ができるように仕立てられている（図1参照）。演目は「手水の縁」「忠孝婦人」「花売の縁」「姉妹敵討」「執心鐘入」「銘苺子」「忠臣身替」の七つが掲載されている。

この二つの資料にある「執心鐘入」と「銘苺子」は同じものから書写された可能性がある。その理由として『台湾本琉歌大観』の「執心鐘入」の書き出しに

此組踊は斯道の開祖朝薫が作りし所謂五段の一にて謡曲道成寺より翻案構想せしものと称せらるる原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使翰林院修撰正使林鴻年及翰林院編修副使高人鑑を首里城に招請せしとき宴せしものに依る（尚育王時代）而して文句は現代のものとは少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならん歟欄外の記事参照

とあり、『琉球新報』の「執心鐘入」の冒頭には

本組踊は斯道の開祖玉城親方朝薫作として所謂五段の一にて謡曲道成寺よりほん案構想せしものと称せらるる原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使かん林院修撰正使林鴻年及びかん林院編修副使高人鑑を首里城に招請せし時宴せしものによる（尚育王時代）而して文句は現代のものとは少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならん（傍点筆者）



と記載されている。少々記載が異なる部分は傍点で示したが、大筋の意味は同じであるため、この二つは同じ文章であると言える。

それから、『琉球新報』が「組踊本」を編集する際、シリーズ一作目の「手水の縁」について真境名安興は「かくの如き長編の代表的脚本が紹介されることは吾人の最も歓迎する美挙である」と、『琉球新報』で組踊の「組踊本」を連続掲載することを賞賛しているばかりでなく、シリーズ二回目の「忠孝夫人」を掲載するにあたって、以前から問題となっているこの作品の作者について、真境名は「組踊『忠孝夫人』について」という論文を寄稿している。さらに、シリーズ三作目の「花売の縁」の巻末には「作者の事や其他歴史的に観察した本組踊の事に就ては何れ真境名安興氏が書いて下さる事になつてゐる」と、編集者のコメントが掲載されている。ここでも真境名安興が関与しているのである。おそらく、この企画が新聞社から依頼され、真境名が、「執心鐘入」「銘荊子」の「組踊本」(ここでは『台湾本琉歌大観』の草稿か)の写しを『琉球新報』に提供したものと推測できるのだ。この『台湾本琉歌大観』と『琉球新報』の校合は第二章第三節「『校註 琉球戯曲集』と諸本の校合」で試みるとして、この二つの「組踊本」は沖縄図書館の「羽地本」を使用していることが想像できる。この新聞記事が掲載される一年前、真境名安興は大正十二年に沖縄図書館の二代目館長に就任しており、伊

波普猷が図書館長をしていた時代から、沖縄図書館には出入りしていたと考えられ、「羽地本」を写写することは容易であつたと思われる。

「小禄本」を使用した可能性が考えられる「組踊本」は、一九三九(昭和十一)年に日本青年館で行われた「琉球舞踊公演」のパンフレット(注四)である。『日本民俗』12号には「てきすと」として島袋全發が「執心鐘入」「二童敵討」「銘荊子」「花売之縁」の「組踊本」を載せている。これらは『戯曲集』を参考にしていとされている(注四)が、島袋全發はパンフレットでこのことを明記していない。そして、詞章の最後の部分に「玉城朝薫は、みせせりなどといふ古語を復活させて最初の組踊りを書いたと言はれてゐるが、その原本はまだ発見されてゐない。現在用ゐてゐるのは最後の冠船踊りに用ゐたもので、此外にまう二種のてきすとが発見されてゐる(注四)」とあり、この記述から、パンフレットの「組踊本」は寅年のものを使用した可能性が考えられる。もし、寅年のテキストを使用しているとすれば、おそらく「小禄本」を底本として利用したと思われる。

このように王府で編集された組踊集は、躍奉行を勤めた按司奉行の家で書写され、それは戦前、沖縄図書館に所蔵されていた。そしてその按司奉行の名前を冠した「組踊本」を用いて活字資料が作られている。このように躍奉行ゆかりの「組踊本」から活字になった

資料も少ないが、なにより、現存する王府ゆかりの「組踊本」は、目下のところ先述した『尚家旧蔵組踊集』だけなのである。

当時、組踊集が少なかったわけではない。先述の『郷土志料目録』には、書写年代不明として三冊本の『組踊集』が二つ所蔵されている。その他には、同じく書写年代不明の『組踊』が一冊ある。さらに、『台湾本琉歌大観』には、参考資料として「組踊集（二十三號）」「冠船之時組踊及踊 一」「組踊 向朝選 一」と多くの琉歌の参考資料の中に三つの組踊関係資料が見える。書名の下にある数字は冊数を示している。「組踊集（二十三號）」というように組踊集を号数で記載しているのは、組踊集が多くの琉歌集と同じく、固有のタイトルを持っていないからであろうか。同じくここに挙げられている琉歌の資料には「古琉歌集（三十三號）」「古琉歌集（三十四號）」「琉歌集（二號）」「琉歌集（二十號）」「琉球歌選（七號）」など歌集に特定の書名が無いものについて、すべて同書名に号数をつけて管理していたことがうかがえる。しかし、組踊の「一号」や「二号」などがあったとも証明できない。ひとまず所蔵していた資料すべてに連番の号数を付けて管理していたと考えた方が穏当か。また、「冠船之時組踊及踊」という資料は、どのような資料であったのか不明であるし、「組踊 向朝選」の「向朝」という人物がいったい誰であるのか、というのも不明である。いずれにせよ、『台湾本琉歌大観』

からは、当時の沖縄には参考資料以外に多くの組踊集があったことがうかがえ、それらは残念ながら現存していないのである。さらには、士族が所蔵していた現存する組踊集、地方に流布している組踊集がある、このことから、当時はたくさんの組踊集があったことがうかがえるが、宮里朝光氏によれば、組踊集は「士族の家にはほとんどあつた<sup>注四五</sup>」らしい。また、宮里氏は「首里の人はみんな組踊が好きで、座つたまままで台詞を読むだけの組踊をすることがあつた」と戦前の様子を語っている。ここで言いたいのは、たくさんの組踊集があつた時代に、真境名や伊波は組踊のテキストについて王府ゆかりの「組踊本」を使用している、ということである。たくさんの組踊集が残されていた時代に、王府ゆかりの「組踊本」を使用して『戯曲集』や、『台湾本琉歌大観』などを編集したということは、真境名や伊波は王府の「組踊本」が組踊の最良なテキストである、と考えていたからだと思われる。

## ii 『尚家旧蔵組踊集』について

『尚家旧蔵組踊集』は組踊の「組踊本」として、王府に所蔵されていた唯一現存する組踊集である。一九八七年に行なわれた、沖縄県の組踊「組踊本」悉皆調査（調査報告書『沖縄の組踊（Ⅱ）』）の項目には「未調査の「組踊本」とあつて、これまでその存在は確認

されていたが、内容の公開はされてこなかった。那覇市歴史博物館が尚家より寄贈された資料の中に本資料があり、二〇〇九年に公開されたのである。

組踊は中国から来る冊封使を歓待する芸能として、一七一九年、玉城朝薫によってはじめて創作され、上演された。池宮正治の論考によれば、組踊はその初演からすでに「組踊本」を持った芸能である、と認識されている<sup>(注四六)</sup>。先学の認識からは、現存する一八三八年の「躍方日記」やこの『尚家旧蔵組踊集』のような、王府の御冠船資料としての組踊集や上演プログラムが、組踊初演の時点からすでに作成されたと推測できるが、先述してきたように、先の大戦で多くが灰燼に帰したために現存しておらず、現在では、先に挙げた二つの他に一九二九年に伊波普猷の著した、『校註琉球戯曲集』が王府上演の記録を残したテキストである。『校註琉球戯曲集』は一八三八年の冊封（通称、戊の御冠船）の中秋宴・重陽宴の上演プログラムを記したものであり、組踊の詞章や着付、舞踊の歌詞、当時の配役などを知ることができる貴重な資料である。そして成年の『躍方日記』や、『尚家旧蔵組踊集』が最近まで公開されなかったため、『校註琉球戯曲集』は現在まで組踊の「組踊本」としてまさに一級の待遇を受けてきた一冊である。

『琉球戯曲集』に関して當間一郎は「近年の組踊上演や研究のバ

イブル的存在になっている」とし、「御冠船芸能を考え、研究する上で、最もよりどころになる一冊である。現存組踊写本は、そのほとんどが明治二十年以降のもので、着付等の欠落、台詞やその記載等、この『戯曲集』に優るものはない<sup>(注四七)</sup>」と賞賛している。大城學は『琉球戯曲集』に対して直接的な評価に言及していないが、『着付』のことが書き記されている「組踊本」は、概して「組踊本」として優れたものが多く、代表的なものが伊波普猷著『校註琉球戯曲集』である<sup>(注四八)</sup>として、『琉球戯曲集』が優れた組踊の「組踊本」であることを言っている。矢野輝雄は『組踊を聴く』の『琉球戯曲集』の人々<sup>(注四九)</sup>に思<sup>(注五〇)</sup>う<sup>(注五一)</sup>において、『琉球戯曲集』の資料的価値と伊波普猷が『琉球戯曲集』を編んだ想いに迫っている。伊波普猷が『琉球戯曲集』を編むに至った背景や、収録論文のすばらしさ、収録している成年の仲秋宴・重陽宴の芸能資料について述べており、直接的な資料の評価をしていないが、文章全体を通して『琉球戯曲集』のすばらしさを説いている。

『尚家旧蔵組踊集』には、『戯曲集』と同様の「着付」が記載されており、そこから新たな事実も見えてきた。例えば「義臣物語」の着付は『尚家旧蔵組踊集』にしか見られないため、現在の舞台では「崎本の子」という人物は「供」の役柄のような着付をしているが、『尚家旧蔵組踊集』の記載では「白作ひけ」とあり、老人風の出で

立ちであったことがうかがえるのである。また、『琉球戯曲集』にはみられない詞章もあり、今後の組踊研究にたくさん情報を与えてくれることは間違いない。戦火を免れ、現在まで残っている組踊関係資料は少なく、また、先学たちが王府の「組踊本」を重要視したことからも、本資料は現存する組踊集との校合にあたって、底本となり得る重要な資料である。

本稿では那覇市立歴史博物館の作成した同書のマイクロフィルム複製本<sup>(注五〇)</sup>を底本として、収録されている「組踊本」の校合を試みる。

### iii 『尚家旧蔵組踊集』の体裁について

『尚家旧蔵組踊集』の表紙には見えづらいが「組躍集／御近習方／同治六年」の記載があり、最後の冊封（通称、寅の御冠船）が行われた翌年に作成されたものであることがわかる。またその所蔵は「御近習方」であったこともわかる。収録作品は、「辺戸の大主」・「執心鐘入」・「銘苅子」・「大川敵討」・「義臣物語」・「天願若按司敵討」・「二山和睦」の七作品である。全体での総数は一七四丁である。「辺戸の大主」・「執心鐘入」・「銘苅子」の三作品は基本的に一丁に一四行で書かれ、「大川敵討」以降は一丁に一六行で書かれている。最大の特徴としては、最後に収録されている「二山和睦」以外のすべて

に題目と着付が記載されている。また、「辺戸の大主」・「大川敵討」・「義臣物語」・「天願若按司敵討」には区切り点が振られており、これが書写された時のものか、それ以降に記されたものかをマイクロフィルムからは断定することができないが、詞章の面からうかがうと台詞の切れ目を表しているようであり、当たり前であるが、上演の為に必要な情報として記されていると考えられる。また、区切り点が振られているということは、一度書写した後に、その詞章を読みながらつけていった可能性も考えられる。

### iv 『尚家旧蔵組踊集』における問題

池宮正治は寅年の御膳進上の舞台に供された組踊の演目を「辺戸の大主・義臣物語・大川敵討・久志の若按司・二山和睦・執心鐘入・銘苅子」<sup>(注五二)</sup>であるとしている。だが、寅年冠船の御膳進上の舞台に供された演目を記載した資料は今のところ見つからない。池宮は寅年の演目の論拠を示してはいないが、収録順番は違うものの、『尚家旧蔵組踊集』に収録されている組踊作品と一致するため、おそらく『尚家旧蔵組踊集』を論拠としていられると思われる。

池宮の論拠となっているものが『尚家旧蔵組踊集』であるとすれば、『尚家旧蔵組踊集』が寅年冠船の御膳進上の舞台上演に使われた「組踊本」である可能性は現時点では低いと思われる。池宮の論を

支持できない理由は二つある。

ひとつは、寅年冠船の御膳進上の資料である『冠船付御膳進上日記』から当時の御膳進上の様子を知らることができる。この資料は、御膳進上が行われるまでの経緯が記録された資料であるが、こちらにも演目の詳細は見られない。しかし、寅年冠船の御膳進上の宴が行われた日付が記載されている。この資料によると、尚泰王の冊封における御膳進上は、翌年である卯年の三月十日・十一日・十九日・廿二日に行われている<sup>(注五)</sup>。先述したが、『尚家旧蔵組踊集』の表紙には「同治六年卯九月」の書き付けがあり、この記述から『尚家旧蔵組踊集』が寅年冠船の翌年の九月に書写されたことがうかがえる。御膳進上が終わった後に書写されていることが明白なため、『尚家旧蔵組踊集』を寅年冠船の御膳進上に使用された「組踊本」として位置づけるには疑問が残る。

御膳進上の舞台上演に準備した「組踊本」であるならば、事前に準備されるはずである。戌年冠船を例にみてみよう。戌年の場合、御膳進上が行われたのは十二月五日である。躍方への通達はその十二日前の十一月二三日。約二週間の期間しかないが、躍方は無事に役目を終えている<sup>(注五)</sup>。本宴の芸能稽古が約一年前から行われるのに対して、御膳進上は二週間の稽古で間に合ったのだろうか。推察すれば本宴の出演者が御膳進上にも出演し、本宴と同時並行で御膳

進上の演目の稽古を行えば可能であるように思える。

戌年の御膳進上の配役が記載された資料がある。それは『冠船付御書院日記』というもので、そこには御膳進上で踊られた全演目の出演者が記載されている。この資料と『琉球戯曲集』の配役とを比較してみると、本宴と御膳進上に出演している人物は栗国真三郎・武村子・宮里筑登之など、たった数名しかいない。その他の役に関しては本宴とは異なる役者の名前が見られる。実に、御膳進上だけで約百名の出演者である。

これらの出演者をたった二週間前の通達で任命し、その後稽古させ、舞台に乗せる、ということは現代でも不可能に近いだろう。冊封が終つてあとの行事とはいへ、国王一世一代の公式行事である。生半可な舞台上演では務まらないはずである。そのことから考えられることは、躍方への通達は二週間前に行われるが、その稽古は本宴と同時並行で行われたか、本宴の稽古とは別に事前に行われていた、ということが推察される。したがって、御膳進上の舞台上演に使用される「組踊本」は、御膳進上が行われる前には完成していた可能性があり、『尚家旧蔵組踊集』の記述からは、この本が寅年冠船の御膳進上の舞台上演に使用された「組踊本」である可能性は低いというほかないだろう。

『尚家旧蔵組踊集』が寅年冠船の御膳進上の「組踊本」であるこ

とが証明できないもう一つの理由は、本資料を所蔵していた王府の機関について問題があるからである。『尚家旧蔵組踊集』は冠船関係書類の所蔵されていた「評定所」ではなく、「御近習方」に所蔵されているのである。冠船関係資料については「躍方日記」「躍奉行日記」などが「評定所」に所蔵されているのに対し、『尚家旧蔵組踊集』が「御近習方」に所蔵されているという経緯は、本資料だけではうかがい知ることはできない。「御近習方」に所蔵されている本資料については、寅年の御膳進上が行われた時代が同じであることだけで、寅年の御膳進上の「組踊本」である、と位置づけることは性急であると思われる。

『尚家旧蔵組踊集』が寅年冠船の御膳進上の「組踊本」である最後の可能性としては、次の一つだけが理由として考えられる。御膳進上で使用された「組踊本」を近習方で書写した、という推論である。しかし、寅年冠船の御膳進上の「組踊本」を書写したとなれば、『琉球戯曲集』のように配役が記載されても良いはずである。しかし、『尚家旧蔵組踊集』にはそれが見られない。この推論も現時点では立証することは困難であろう。王府の資料収録のシステムが明確にならなければ、近習方に所蔵されていた『尚家旧蔵組踊集』についてまだまだ不明な点が多いとしか言いようがない。したがって、本論文では『尚家旧蔵組踊集』を寅年の御膳進上の舞台芸能や、そ

れに関する舞台芸能の「組踊本」と位置づけず、王府所蔵の組踊集と位置づけ、校合を行う。

## 2 『尚家旧蔵組踊集』収録作品の対校本について

ここでは、『尚家旧蔵組踊集』に収録されている各作品の対校本について言及する。

### i 『尚家旧蔵組踊集』収録作品の対校本

『尚家旧蔵組踊集』（以下『尚家本』とする）を底本として校合を行うにあたって、その校合本となる組踊集を選定する。組踊集にはどの「テキスト」を底本として書写したのか明記されていないので、基本的には戦前までに成立した筆写本を第一対校本とし、第一次対校本となる筆写本が二冊以上見られないものにかぎって、戦前までに出版された活版本を第二次対校本とし、校合を行う。また、王府の資料を写したとされる『琉球戯曲集』も活版本であるが校合の対象とする。次に各作品の対校本を挙げる。なお、各組踊集の詳細については、次項「ii 諸家・地方伝来組踊集について」で詳述する。

### 「辺戸之大王」

第一次対校本…兼島信備所蔵本

## 第二次対校本：琉球脚本組踊集

「辺戸之大主」は一八〇〇年から冊封の舞台上で上演が認められる作品ではあるが、収録されている組踊集は少ない。第一次対校本の筆写本は一九〇六（明治三九）年筆写の『兼島信備所蔵本』しかみられないので、第二次対校本も設定した。『琉球脚本組踊集』は現存する活字の組踊集の中で、出版が一番古く、一九二〇（大正九）年のものである。「辺戸之大主」は以上の二冊を校合対象として用いる。

### 「執心鐘入」

第一次対校本：今帰仁御殿本組踊集・恩河本小祿御殿本組踊集・兼島信備所蔵本組踊集・台湾本琉歌大観・比嘉信三所蔵本組踊集・琉球新報（大正十四年）宮城真治資料・校註琉球戯曲集・宮良殿内本組踊集・伊舎堂用八所蔵組踊集

「執心鐘入」は筆写本が八冊と多く残っているため、第一次対校本のみで校合を行う。琉球戯曲集は活字本であるが、王府の資料をもとに編んだものであるので校合の第一次対校本として扱う。『尚家本』の他に着付が記されている「組踊本」が三冊あり、筆写本のなかでも王府の資料から写された「組踊本」が多く遺されている演目でもある。

なお、「執心鐘入」は『具志頭家本組踊集』にも収録されている事

が矢野輝雄<sup>注五四</sup>や當間一郎の指摘からうかがえるが、所蔵している具志頭家へ資料の確認を行ったところ、現在の当主である具志頭朝昭氏によれば、「組踊集」は紛失している、とのことで対校本として使用することが叶わなかった。

### 「銘苺子」

第一次対校本：東京教育大学所蔵本・恩河本小祿御殿本組踊集・兼島信備所蔵本・台湾本琉歌大観・琉球新報（大正十四年）宮城真治資料・校註琉球戯曲集・伊舎堂用八所蔵本

「銘苺子」は以上の七冊の対校本で校合を行う。着付と配役の記されている「羽地本」系の「組踊本」（台湾本琉歌大観・琉球新報（大正十四年）宮城真治資料・校註琉球戯曲集）も残っている。なぜ「羽地本」系と定義しているかというと、「羽地本」を底本とした『琉球戯曲集』と台湾本琉歌大観・琉球新報（大正十四年）宮城真治資料の着付の記載、それから詞章の記載などが極めて近いという理由からである。「羽地本」系どうしの校合は第二章第三節で行う。

筆写本のうち、「伊舎堂用八所蔵本」は先島に所蔵されている「組踊本」である。対校本の数は少ないものの、資料的価値の高い「組踊本」との校合となる。

#### 「大川敵討」

第一次対校本：八重山博物館本（新本家所蔵本）・今帰仁御殿本・与那覇政牛所蔵本・恩河本小禄御殿本組踊集・兼島信備所蔵本・比嘉新三本・校註琉球戯曲集・豊川善包所蔵本・喜舎場孫進所蔵本・多良間村教育委員会所蔵本

「大川敵討」はその外題が「忠孝婦人」と書かれているものも多い。詞章の分量は組踊の中で最長であるが、筆写本には多く遺されている作品である。また、第一次対校本の中の、八重山博物館本（新本家所蔵本）・豊川善包所蔵本・喜舎場孫進所蔵本・多良間村教育委員会所蔵本の四冊は先島地域に遺されていた「組踊本」である。着付の記載がみられる「組踊本」は、『尚家本』以外に『琉球戯曲集』『多良間村教育委員会所蔵本』の二冊である。

#### 「義臣物語」

第一次対校本：久志村所蔵本・語学材料第二・恩河本小禄御殿本・兼島信備所蔵本・比嘉信三本・久志村所蔵本（三冊―2）

「義臣物語」は久志村所蔵本が二冊も残されている。しかし、両「組踊本」は一つが明治二四年のもので、もう一つは書写年代が不明である。おそらく、どちらか一方は古い方の写本であると思われるが、年代の明記がちゃんとされていないので、校合の際は別本と

して扱う。この作品は『尚家本』のみに着付がみられる。

#### 「天願若按司敵討」

第一次対校本：京都大学琉球資料・今帰仁御殿本・東京教育大学所蔵本・恩河本小禄御殿本・兼島信備所蔵本・豊川善包所蔵本・喜舎場孫進所蔵本・久志公民館本

別の外題は「久志の若按司」「久志の若按司敵討」などである。『尚家本』には着付けが見られ、他本では確認できない。

対校本のうち、『京都大学琉球資料』は、前後が欠けていて、一部分しか残っていない。その他の対校本は完全に残っているものである。「天願若按司敵討」は、『尚家本』以外、王府で編集した資料がないが、比較的多くの「組踊本」が残っている作品である。また、沖縄本島だけでなく石垣にも写本が数点残されており、「大川敵討」同様、校合することで、類縁性や八重山と首里の「組踊本」の特徴などが見える可能性が高い。

#### 「二山和睦」

第一次対校本：今帰仁御殿本・与那覇政牛所蔵本・恩河本小禄御殿本・兼島信備所蔵本・宮良殿内本

『尚家本』は、この「二山和睦」のみ、外題と着付が記載されて



なく、すぐ本文から始まっている。もともと外題と着付があり、冊子にまとめる際に落丁したのかは不明である。

対校本の内、『宮良殿内本』は後半部が欠落している。組踊の中では、琉球王国末期の成立と思われる、比較的新しい作品であるが、石垣島にも「組踊本」が残っていることから組踊の伝播の速さについても一考することができよう。

次に、対校本としてとりあげた各組踊集について概観する。

## ii 諸家・地方伝来組踊集について

対校本として挙げた組踊集は、各士族の家や地方の自治会にうつがれ、または大切に保管されているものである。対校本として挙げた組踊集を諸家に伝来されているものと、地方に伝来したものとに分け、書写年代の古い順↓書写年代不明の順で列挙すると左のようになる。

### 諸家伝来組踊集（十二冊）

八重山博物館本（新本家所蔵本）・京都大学琉球資料・今帰仁御殿本組踊集・東京教育大学所蔵本・与那覇政牛所蔵本・恩河本小祿御殿本組踊集・兼島信備所蔵本組踊集・比嘉信三所蔵本組踊集・伊舎堂用八所蔵組踊集・喜舎場孫進所蔵本・豊川善包所蔵本・宮良殿内本組踊集

### 地方伝来組踊集（二冊）

久志村所蔵本・多良間村教育委員会所蔵本

### その他（五冊）

上記以外に、活字として出版、発表された組踊集がある。もしくは出版されようとして草稿のままであった原稿を書写した組踊集である。以下に示す。

台湾本琉歌大観・琉球脚本組踊集・琉球新報（大正十四年）宮城真治資料・校註 琉球戯曲集

そして、研究者が書写して本土へ持ち帰った資料もある。

### 語学材料第二

本研究で対校本として取り扱う組踊集の多くは、士族家に伝わったものであり、数的にその次に多いのは活字化された組踊集である。地方伝来の組踊集は二冊にとどまった。これは、尚家本との校合、という限られた条件の中で出た結果であるが、基本的に、士族家へ伝えられた組踊集は、その収録作品の数が多く、地方へ伝来した組踊集は収録作品も少なく、時には一作品だけしか地方に伝来していない、という地域もある（『沖縄の組踊（II）』を参照）。これは、前節で述べたように、多くの士族は冠船渡来の際に、躍奉行のもとで芸能に参加しなければならぬ、という状況があることと、冠船の際に演じられる組踊の数は一八〇〇年代になると十三作品と多くの作

品が用意され、出演者する可能性のある士族は、前もって練習する必要があったため、複数の「組踊本」を所有していた、と推測することができるからである。したがって、士族家に多く組踊集が残り、なおかつ、士族家の組踊集には多くの作品が収録されている、ということと考えられる。

次に、校合の対象となる組踊集について、書者年代順に一冊ずつ概観する。

#### 八重山博物館本（新本家所蔵本）

八重山博物館に所蔵されている新本家文書に収められている「忠孝婦人」を本研究では対校本として扱った。表に「咸豊九年書之也」とあるので、この時に書写されたものと思われる。咸豊九年は一八五九年である。「忠孝婦人」の写本の中では、現存する最古のものである。書写元の「組踊本」はどのようなものかわからないが、その左上に「咸豊八年戊午九月／當歳二十四」とあるので、書写した人物の年齢と思しき情報が書かれている。表紙の中央には「組踊集忠孝婦人八重瀬」とある。しかし収録されているのは「忠孝婦人」のみである。「忠孝婦人」の末尾が欠落しているので、おそらく八重瀬は失われてしまったかと思われる。裏表紙の内側には「咸豊八年戊午十月吉祥日写之」が二度書かれており、外側には「咸豊八年書之也／組踊

集／大浜仁屋／新本仁屋」とあるが、書写年は表紙の咸豊九年と断定した方が良いか。不明な点が多いが、書写年代がある程度はつきりしており、なおかつ内容の大部分が残っているので貴重な写本である。

#### 京都大学琉球資料

収録されている組踊は「手水の縁」「久志之若按司」「忠臣身替の巻」「雪払」「本部大主」の五作品である。「組踊集」というタイトルではなく「琉球詞曲」となっている。やや完全に残っているのは「手水の縁」と「雪払」で、外題が確認できるのは「雪払」と「本部大主」だけである。そのうち「雪払」には、表紙に「大清光緒五年己卯三月吉日写之」とあり、書写年代が唯一わかる。しかも書写したのは「羽地田井等村／東江にや記」とあることから、羽地の役人である「東江にや」だということがわかる。つまり、「雪払」だけに限って言えば、地方役人が書写し、所有していた「組踊本」だと言うことができる。いくつかの「組踊本」を合冊しているとみられ、すべての作品が「東江にや」による書写であるとはいえない。光緒五年は一八七九年であるので、「雪払」はこの年に書写されたものであることがいえ、その他の作品はいつの書写なのか不明である。ちなみに、「東江にや」も『田井等誌』などに見られず、不明である。こ

のように書誌情報は不明な点が多い。しかし、田井等では古くは「水の縁」「大川敵討」が上演されており<sup>(注五五)</sup>、収録されている「水の縁」についても田井等の「東江にや」が書写した可能性も考えられる。

#### 今帰仁御殿本組踊集

明治二四（一八九一）年書写・上巻一四五丁・六作品、下巻二二一丁・五作品

法量は上巻が縦二六・五センチ、横一九・五センチ。下巻が縦二六・八センチ、横一九・五センチである<sup>(注五六)</sup>。上下巻ともに「明治廿四年卯十二月／組踊集／上（下）巻共二冊／今帰仁御殿」とあり、今帰仁御殿に所蔵されていたもの、もしくはその写しである。上下巻とも一面十六行、和装袋綴り。

書写の風月軒については、はっきりとした記録がなく、現在のところ不詳である。また、今帰仁御殿は鎌倉芳太郎のメモによると、首里の汀志良次にあつたとされるが、『首里の地名』やその他にみられないため、詳しくはわからない。今帰仁御殿はおそらく向氏具志川家が代々今帰仁王子・今帰仁按司を名乗るので、向氏具志川家の邸宅であつたのだろうと思われる。

上巻には「忠臣身替の巻」・「手水の縁」・「天願若按司敵討」・「雪

払」・「大川敵討」・「花売の縁」が収録されており、目次には「雪払」以外の作品の外題の下にそれぞれ別称が記されている。下巻には「姉妹敵討」・「執心鐘入」・「巡見官」・「本部大主」・「二山和睦」が収録されており、「執心鐘入」にだけ別称が記載されている。上下巻ともに台詞に○印で区切り点（読点）が付されている。この○印は朱書きでつけられているため、筆写した風月軒がつけたのか、後世誰かの手によってつけられたものであるかは不明である。

『今帰仁御殿本組踊集』は當間一郎によって一九九五年に『沖縄県史料 前近代 8 芸能 I』に翻刻されているが、前述した区切り点が一時空白を入れる事で採用してある。他の組踊集を翻刻する際には区切り点を「、」で採用しているので、何か意図があつたのかは凡例等に記載されていないため不明である。

#### 久志村所蔵本

久志村所蔵本はいくつかの「組踊本」をまとめた組踊集が三冊ある。そのうち、本研究では、道光年間に書写されたと思われる「久志之若按司」と明治二四年に書写されたと思われる「義臣物語」を対象とした。理由としては、どちらも現存写本としては古い方で、特に「久志之若按司」に関しては現存する「久志之若按司」の「組踊本」の中では一番古いものになる。また、「義臣物語」も、尚家本

を除く対校本の中では、現存するものの中で一番古いものである。このように、久志村にはかなり古い「組踊本」が残されており、組踊の地方への伝播を考える上でも興味深い組踊集である。

東京教育大学所蔵本

表紙に「琉球組踊」、中表紙に「時 明治廿有八年九月中元求／琉球組踊／金城村長門／新垣所有」とあり、最後に「此一冊は兼て依頼し置きたる首里の人新垣安一氏より求めいで得せしめられり物なり躰裁共「欠」可愛とや云はん兎角珍書と云ふべし」とある。もともと首里金城村の新垣安一氏が所有していた物を、この本の所有者何某が譲り受けたものであることがわかるが、新垣安一氏の詳細も掴めないため、もともとの所有者の詳細は不明である。したがって新垣安一が書写したもののなか、それとも新垣安一が誰かから譲ってもらったものなのかさえも不明である。

中表紙の記載からは、中元節に求めた、とあり、書写したとは明記されていないので、もともと新垣安一が所有していた組踊集を、明治二八年九月に譲ってもらった、とも解釈できるため、書写したのは一八九五（明治二八）年よりも古い可能性もある。収録作品は「雪払」「久志之若按司」「銘苅子」「手水の縁」「八重瀬」の五作品である。漢字片仮名混じりの体裁で、台詞の切れ目には「○」印の

読点が打たれ、訂正なども書き加えられている。また、「銘苅子」は漢字にルビも多く振られており、読み込んだ跡がうかがえる。もともどのような経緯で、新垣安一氏のもとにこの組踊集があったのか不明であるが、明治期の写本の中でも古いものに分類される組踊集である。

与那覇政牛所蔵本

二冊あり、一冊は「忠孝婦人」「二山和睦」「高山敵討」「本部大主」「忠臣身替」が収録されている。もう一冊は「大南山」「忠孝夫婦忠義」が収められている。本研究では前者を使った。後者の方はこの組踊集にしか収録されていない貴重なものである。

この与那覇政牛所蔵本は、もともと宮城嗣周が所蔵していたが、組踊は与那覇政牛氏へ渡した方が良い、ということから宮城嗣周から与那覇政牛氏に贈られたものだという<sup>(注五七)</sup>。与那覇政牛は一九六七年に沖縄芸能協会が設立された際、組踊部長を務めている人物でもある。宮城嗣周はその時、顧問を務めた。したがって、宮城嗣周は与那覇のこのような経歴からも、この組踊集を贈ったに違いない。余談であるが、与那覇政牛と宮城嗣周は、琉球放送の長寿番組「ふるさとの古典」の初代解説者を二人で務めている。

与那覇政牛本の最初には、「組躍 忠孝婦人 外三ヶ冊」と付箋が

つけられ、達筆な与那覇政牛の字で「忠孝婦人／二山和睦／高山敵討／本部大主」と書かれている。さらに捲ると「明治二十九年／十一月五日編成／忠孝婦人 全／二山和睦 全／高山敵討 全／本部大主 全／真栄城「以下不明」と書かれた内表紙がある。このことから、宮城嗣周が手に入れる前、この組踊集は真栄城某が明治二十九年に編成したものであるということがわかる。どちらの目次にも「忠臣身替」が抜けていることに疑問が残る。本文は漢字片仮名書きで、楷書体である。収録作品はどれも筆跡が似通っているので、おそらく前述した真栄城某が書写したものか。大きな欠損箇所もなく、良本であるといえる。

#### 語学材料第二

田島利三郎が写した組踊集である。表紙に、「随々菴主／明治廿九年十一月／語学材料 第二」とあることから、一八九六（明治二九年）のものであろう。収録内容は「(五) 萬歳敵討／(六) 義臣物語／(七) 孝行ノ巻／(八) 北山若按司敵討／(九) 巡見ノ巻／(十) 忠臣身替」である。漢字片仮名混じり、楷書で書かれている。特に注記や朱書きなどの書き込みも見られない。

田島が『語学材料第二』を書写した詳しい内容は、本研究の第一章第一節「3 校合の必要性（組踊のテキスト「組踊本」研究史を

通して）」で論じているのでここでは割愛し、書誌情報のみにする。

#### 恩河本小禄御殿本組踊集

一八九八（明治三一）年書写。現在、琉球大学附属図書館所蔵。書写したのは恩河朝祐（一八〇〇～一九一四）号は玉山。首里桃源出身。県立中学校を卒業し、那覇区役所、島尻郡役所の役人となった。その後県立中学校の書記を勤めたのち、台湾で生豚輸出業を営むが事業に失敗。帰沖後は、質屋・帽子業・移民事業などを行なうがいずれも成功しなかった。組踊を書写するところからも琉球芸能に造詣があったと思われるが、それは琉歌に対してもまたしかりで、『玉山集』という自作の琉歌集を出すほどでもあった。

『恩河本』が書写されたのは、恩河朝祐が首里から那覇若狭町に転出し、島尻郡役所の役人をしていく頃であり、その冒頭には「此ノ書吾ガ母ノ好ム所口愛スル／所口吾ガ子吾ガ孫其レ之／ヲ思ヘ矣／明治三十一年五月十七日／波上祭ヨリ帰リコレヲ録ス 朝祐」と記され、書写年と書写した目的が示されている。朝祐は自身の母のために組踊集を書写したとあるが、仲吉良光によれば、朝祐の母はその前年、ないし前々年に他界している。仲吉良光の話が事実であれば、朝祐は母親にこの組踊集を見せることができなかつたとも考えられる。だが、この組踊集の最後には「大清光緒九年癸未吉日写」

とあり、朝祐の筆写の目的が自身の母親のためであるとするならば、この光緒九（一八八三・明治十六）年が本来の書写年代と考えることもできよう。

『恩河本』には「小禄本」からの筆写であることが明記されていない。この事について当間一郎は、最後の躍奉行を勤めた小禄按司の写本であるなら、「羽地本」と同様に、上演プログラム形式でなければならぬはずであるとの見解を示し、「小禄本」からの書写ではないと判断している。だが、これに対して仲吉良光は書写した恩河朝祐の出身が小禄御殿のあった桃原村であることや、「小禄本」が「羽地本」と同じ体裁を取っているかは疑問であること、収録番組数が多いことを理由に、「恩河本」は「小禄本」である、と結論付けている<sup>（注五八）</sup>。ともあれ、「着付」などの王府ゆかりの「組踊本」に見られる記載は確認できないが、欠損している箇所もなく、良本であるといえる。

二十三作品の収録作品の中でひときわ特徴的なのは、「雪払」が二作品収録されている点である。また、いくつかの作品には外題の下に別称を記したこともある。以下に作品名あげ、別称は括弧にて表す。「巡見之官」・「義臣物語」・「孝行之巻」・「二童敵討」（護佐丸敵討）・「執心鐘入」（中城若松）・「大川敵討」（村原 忠孝婦人）・「川松之縁」（銘苅之子）・「姉妹敵討」・「天願之若按司敵討」・「萬歳敵討」・

「大城崩」・「女物狂」・「忠臣身替之巻」・「花賣之縁」・「東邊名夜討」・「北山之若按司敵討」・「二山和睦」・「孝女布晒」・「雪払」（伊祖の子）・「手水之縁」・「本部大腹」・「屋慶名大主敵討」・「雪払」

#### 兼島信備所蔵本組踊集

一九〇六（明治三九）年筆写。二十一の組踊を収録している組踊集である。収録作品の中には兼島本にしか収録されていない「具志川大軍」が収録されている。そのほかに特徴的なのは、収録作品のうち十の作品に別の外題が付けられており、中でも「二山和睦」に「南山小」、「手水の縁」に「波平山」と付けられているのは他に例を見ない。「花売の縁」「二山和睦」「姉妹敵討」「伏山敵討」「大川敵討」「辺土の大主」「本部大主」「孝行之巻」には下書きが一々数カ所見られ、他の組踊集より情報が多いことから、士族家に伝わった「組踊本」から書写した可能性も大いにあり得る組踊集である。

また、組踊の後に資料が書き残されており、興味深い。

銘苅子 執心鐘入 義臣物語 花売の縁 万歳敵討 大城崩  
大川敵討 辺戸ノ大主 女物狂 孝行ノ巻 巡見ノ官 雪払  
二童敵討

右ハ昔シ組踊俗二十三番と称ズ

本部大主 忠臣身替 姉妹敵討 久志ノ若按司 東辺名夜討

二山和睦 南山敵討 手水ノ縁 具志川大軍 矢蔵ノ比屋  
右ノ十組ハ中昔シ人ノ作りナリ  
父子忠臣ノ巻 奇童ノ巻 花露ノ縁 微行ノ巻 大浦敵討 竹  
求ノ巻 善豊ノ巻 孝女布晒 智入敵討 賢母三遷ノ巻  
右ノ十作ハ今ノ作りナリ

右の資料は組踊の創作された年代を示唆している資料で、特に「今ノ作り」とまとめられた作品は「奇童ノ巻」「花露ノ縁」「善豊ノ巻」と、内容も不詳な作品の名があるのが興味深い。問題点を挙げると、どの「組踊本」からの書写なのかが明記されていないことである。二十一もの膨大な作品がひとまとめになった組踊集から書写したもののなか、数冊の組踊集から書写したものは兼島本を見る限りではわからないのである。

#### 台湾本琉歌大観

マイクロフィルムに付いている台湾大学図書館の記録だと縦二七・五センチ、横二〇センチである。ペン書き、一面十三行、和装袋綴。

『琉歌大観』は、真境名安興によって編纂されたものであり、奄美大島や宮古島、八重山島を含めて琉球列島全島から集められた膨大な琉歌が紹介されている。明治四十二（一九〇九）年十二月七日

付の『沖縄毎日新聞』の記事に「琉歌大観の出版」と題してその内容が紹介されているので、構想はこのころからあったことがうかがえる。「琉歌大観」は真境名安興の死後遺族の手を離れて、昭和十五年ごろ神奈川県鎌倉の古書店、幽学荘舎から二百円という大金で売りに出されたとされる。

この台湾大学所蔵『琉歌大観』（以下「台湾本」とよぶ）は池宮正治によると「真境名安興の死後間もなく、台北帝大から沖縄県に人を派遣して『琉歌大観』を書写させている事実である。この時の仕事が台北に今日残っているものと判断してよいだろう。台湾本もこれらの記事に示された内容と矛盾しない。違いは記事や売り立て目録が六冊となっているのに、台湾本が五冊だという点である」（注五九）とあり、真境名の草稿が売りに出される以前に、数名の人を沖縄に派遣して書写させたものであるという。真境名の草稿が全六冊であるのに対して、台湾本は全五冊である。内用の異同はないが、台湾本は体裁が異なるということである。ということは、真境名の草稿は依然として行方不明ということになる。

台湾本は、巻によって字体がそれぞれちがうので、何人かで手分けして書写されたことがわかることから、先の池宮の指摘通りであるとおもわれる。その中の第四巻に組踊が二作品収録されている。収録作品は「執心鐘入」と「銘苺子」である。それぞれ着付・配役

ともに『琉球戯曲集』と同じであるため、当時、県立博物館に所蔵されていた羽地本を底本にしたことがわかる。また、台湾本には『琉球戯曲集』とは異なる頭注があり、そのほとんどは語句の意味と「ト書き」のような動きに対してのものである。

#### 琉球脚本組踊集（下巻）

原本はハワイ大学宝玲文庫蔵。一九二〇（大正九）年に山城徳助が発行している。収録作品は「矢蔵の比屋」「孝行の巻」「伏山敵討」「夫婦縁組の巻」「本部大主」「護佐丸忠義傳」「万歳敵討」「執心鐘入」「花城金松」「辺戸の大主」の十作品である。その中でも「夫婦縁組の巻」と「花城金松」は本書にしか収録されていない貴重な作品である。解説は一切なく、どのような経緯で出版されたのか、また、どの書を参考に編集したのかなどは不明である。ただ、表紙に「下巻」とあるので上巻があったはずであり、そこに解説などが記載されていたのであろうか。いずれにせよ、全貌を明らかにするためには、上巻が発見されるのを俟たねばならない。本書は活版本であるが、「辺戸の大主」を収録している活字本のうち、確認しうる最古のものであるので「辺土の大主」の第二次対校本として用いた。

#### 比嘉信三所蔵本組踊集

筆写年代は一九二二（大正十一）年。『沖縄の組踊（II）』によると、「もともとはウムサヤーのおじいさんの個人所有のもので、草書体で書かれていた。それを宇屋部の組踊指導者であった比嘉盛永さんの指導のもとに岸本津安さんが漢字片仮名混じり文に書写したものである。比嘉信三さんは昭和五、六年ごろ比嘉盛永さんから譲り受けた」とある。「国吉のひや」「執心鐘入」「大川敵討」「矢蔵之比屋」の四作品が収録されており、最初に収録されている「国吉のひや」の前半と、「矢蔵之比屋」の後半部分が欠落している。後半部は「矢蔵之比屋」までしか収録されていなかったのか、それとも数作品が欠落したのかは不明である。本書は特に「執心鐘入」の「干瀬節」が歌われる際に、下句を「述懐節」で歌っているという特徴的な異同が記載されている組踊集である。これは大正十四年に『琉球新報』に詳細されていた「執心鐘入」にも同じような記述があるため、もともと演出として上句と下句を別々の節で歌うという演出があった可能性も考えられ、この写本の親本が大変古いものであったことも考えられるのである。

#### 琉球新報（大正十四年）宮城真治資料

一九二五（大正十四）年の三月十八日から連載される組踊の詞章と解説である。この時期の琉球新報が現存しておらず、本資料は宮



城真治のスクラップしていた資料の中に入っていたものであるため、詳細はわからないが、最初の解説を真境名安興が行っているため、掲載にあたって真境名と何らかの関係があったと言うことができようである。

掲載作品は「手水の縁」「忠孝婦人」「花売の縁」「姉妹敵討」「執心鐘入」「銘苺子」「忠臣身替」の七作品である。そのうち「執心鐘入」と「銘苺子」は配役や着付など『戯曲集』と同じ記述がいくつも見られるので、戯曲集と底本が同じである可能性が考えられる。しかし、底本に何を用いたのかなどは記載されていないため不明である。

#### 校註 琉球戯曲集

伊波普猷『校註 琉球戯曲集』・昭和四（一九二九）年・八三四ページ・十一作品

伊波普猷が冠船渡来毎に首里王府で編纂した「組踊本」（伊波は「組踊本」のことを「琉球戯曲集」とよんでいる）を、昭和初年ごろに残っていた戊午（道光十三（一八三三）年）の躍方の上演「組踊本」を底本とし「小禄本外民間流布の二三本を参照」して校注したものを補遺の部分には「小禄本」の「組踊本」から「女物狂」・「萬歳敵討」・「手水の縁」・「花売の縁」の四作品を収録してあることになっ

ている。本文には着付・配役が記されているが、補遺の手水の縁だけにはみられない。また、台詞を八音で区切って記載されており、その下にはローマ字記載で読みを載せている。この体裁は岡倉由三郎の著した『言語學雜誌』の「銘苺子」が先行するものであるが、上演に役立つ記載である。

収録作品には語句の意味の頭注が附されており、また「異本には」というように他の「組踊本」との校合がみえる。その頭注は「護佐丸敵討」に一箇所、「執心鐘入」に二箇所、「銘苺子」に一箇所、「孝行の巻」に二箇所、「大城崩」に一箇所であり、「忠士身替の巻」と「大川敵討」にはみられない。また、補遺に収録されている「女物狂」に三十箇所、「手水の縁」に九箇所、「花売の縁」に六箇所あり、「萬歳敵討」にはみられない。このことから、校合は補遺の作品に集中していることが明らかである。補遺の作品は着付と配役が附されている事と、伊波の序文から寅の冠船の「組踊本」を使用したと思われるが、「手水の縁」だけはどの「組踊本」を採用したのかは不明である。

頭注が「女物狂」に集中していることは、大城學の指摘から、田島利三郎の『琉球文学研究』に収録されている「女物狂」と校合していることがうかがえる<sup>(注六〇)</sup>。このことから他の作品に頭注が少ないことが問題になるが、ここでは指摘だけにとどめて、稿を改めた

い。

そして、同書のとびらの次には「羽地本」と思われる影印がある。

この影印と該当部分の「執心鐘入」を校合すると、台詞の異同はみられないが、かな・漢字の記載の違いがみられる。伊波がこの影印に対して断っていないためはつきりとしたことは言えないが、この影印が「羽地本」であるとすれば、『校注 琉球戯曲集』には、翻刻の際に伊波の手が相当加えられていることになる。本書は「羽地本」を底本として編集されているテキストであるが、その体裁や編集過程についてはさらに研究を深めなければならぬものといえる。

#### 伊舎堂用八所蔵組踊集

筆写年代は不明。この組踊集は、十一の組踊が収められているが、そのうち「未生之縁」「仲村渠真嘉戸」「北山崩」「月之豊多」の四作品がこの組踊だけに見られる作品である。八重山に現存する組踊集の中にはこの四作品の一部すら見つからないので、どのような経緯で書写されたのかも不明な組踊集である。本書は、當間一郎が『組踊写本の研究』において考察を行っているが、その書写年代や伊舎堂家が所有するにあたった経緯などは不明のままである。いまのところ、収録されている「未生之縁」と「月之豊多」を『琉球戯曲集』の「琉球作劇の鼻祖玉城朝薫年譜―組踊の発生―」で伊波の

述べている「最早見出すことが出来ない」と言っていた「其他女身替他二組」の作品の「二組」であると主張しているが、その根拠は、組踊の内容と、冊封使録にある「人物」という琉球の人物の話を紹介している項目に、同じような話が載っている、というところからである。冊封使録と彼らの見た組踊の内容、また琉球側で冊封使に話して聞かせた内容は、慎重に考察すべきで、冊封に登場した、という根拠を正確にするのであれば、『演戯故事』などをまず参考にしなければならぬ。いずれにせよ、貴重な組踊が収録されている事には間違いない。

#### 喜舎場孫進所蔵本

喜舎場孫進所蔵組踊集は、現在、石垣市立図書館に寄託されている。表紙には「六組／古典 琉球組躍り／孫正」と書かれている。「六組」というのは収録内容のことである。「伊祖の子」「多津山敵討」「忠孝婦人」「久志之若按司」「八重瀬」「北山敵討」の六作品が収録されている。本研究では「忠孝婦人」と「久志之若按司」を扱った。初めの部分は日記が十丁あり、その後に文書が七丁綴られており、その後に「伊祖の子」から組踊の「組踊本」が綴られている。最後に収録されている「北山敵討」は後半部分を欠いている。役名と台詞の切れ目は朱で書かれており、全体的に一度書写した

後、朱書きで誤字や台詞の間違ひの訂正が入っている。「姉妹敵討」は墨で「多津山敵討」と書かれているが、下に朱で「姉妹敵討」と修正されている。ちなみに「多津山敵討」は「忠臣反間の巻」の別名であり、八重山の組踊集では『宮良殿内本』に収録されている。また、『宮良殿内本』には「姉妹敵討」が残欠も含め三つも収録されている。想像を逞しくすると、喜舎場本は『宮良殿内本』と書写関係にあるか。別の機会に校合を試みたい。

書写年代は不明であるが「北山敵討」以外は完全な状態で書写されているので、貴重な「組踊本」の一つといえる。

多良間村教育委員会所蔵本

多良間島には五冊の「組踊本」が伝わっている。「忠臣仲宗根豊見親組」「忠孝婦人村原組」「忠臣身替」「多田名組」「手水の縁」である。五冊のうち、「忠孝婦人村原組」と「多田名組」は書写年代が不明である。しかし、「忠孝婦人村原組」には「着付」が記されており、貴重である。本研究の校合の対象は「忠孝婦人村原組」のみである。

記載されている着付は、戊の御冠船の資料である『琉球戯曲集』と比べても異同が若干ある。また、尚家本とも異同があるため、どちらの組踊集の系統でも無い可能性がある。しかし、着付の記載がある組踊集は少なく、王府ゆかりの組踊集にしか今のところ見られ

ないことから、この組踊集も王府の資料をもとに書写された可能性を持っている。校合をすることで系統が明らかになるだろう。

豊川善包所蔵本

収録作品は「八重瀬」「銘苺子」「忠孝婦人」「高山敵討」「久志の若按司」である。この組踊集がどのような経緯で筆者されたかは不明である。また、「八重瀬」は「同治六年」、「高山敵討」は「道光三十一年」の年が著されている。特徴的なのは、「高山敵討」に「道光三十一年庚戌〔欠字〕正月十四日大浜親雲上御宅にて開〔欠字〕」と記されており、大浜親雲上の所有していた「組踊本」から書写したと推察できる内容が書かれている。もうひとつは、「銘苺子」の末尾に「銘苺子 識名親雲上／天女 義村里之子／おめない 美里真三郎／おめけい 幸地思武太／首里御使 東風平里之子」と配役が記されている点である。この配役されている名前は、八重山の士族の名ではなく、「義村」「美里」など上級士族の名前も見えるので、王府で使われた「組踊本」か、それを書写した系統のものとも思われる。しかし、通常であれば作品本文の前に記されるはずの配役が、本文末尾に記載されている点は注意しなければならない。本文と配役が同じ「組踊本」に依っているのかを慎重に考えなければいけないのである。しかし、豊川家本はかなりまとまった「組踊本」の一つと

言える。

#### 宮良殿内本組踊集

書写年代は不明である。琉球大学附属図書館の宮良殿内文庫に所蔵されている組踊集である。宮良殿内文庫は一九六二年に琉球大学附属図書館に設置され、資料のほとんどは八重山の行政文書である。例えば与世山親方が宮古・八重山の検使として派遣された時のものと思われる、租税関係を記した「八重山諸島御規模帳」、杣山の仕立て、抱護や職務に関して記した「八重山島杣山職務帳」、また、宮古・八重山に派遣された翁長親方が蔵元の行政組織をまとめた「八重山島蔵元公事帳」、そして宮良当親が咸豊九年に大目差役で沖繩へ上国したときの記録「八重山島地船上着公事帳并上国役人公事帳」など、近世末期の八重山行政を知る上で重要な文書がある中に、「諷」や「和歌集」、「琉歌集」、「大和歌集」、「琴工工四」など芸能に関する文書も多く残っており、「組踊集」も収められている。これらは近世の八重山士族の芸能や教養を知る上で多くの資料を残しており、貴重なものである。

組踊集の筆跡が作品によって異なるため、いくつかの写本を合綴してあるものと思われる。「姉妹敵討」「北山敵討」「多田名大主」「多津山ノ按司」「姉妹敵討」「仲城若松」「二山和睦」が収められている。

そのうち「北山敵討」は冒頭部分のみであり、「二山和睦」は後半部に欠落がみえる。「仲地梅金物也」とあるのでその中のいくつかはこの者が写したのもあろうか。

### 3 『尚家旧蔵組踊集』収録作品と諸家・地方伝来組踊集の校合

次に、尚家本に収録されている各作品と、諸本との校合を起こない、異同の部分を取り上げる。

ここでは『尚家本』と各対校本との校合を試みる。校合にあたっては、以下の点に注意した。『尚家本』と各対校本は、それぞれ体裁が共通していないため、詞章を「八・八・八・六」の琉歌形式に分ち、各行ごとに対校本との異同を確認した。基本的に台詞の意味が異なる部分を異同と捉え、漢字、仮名の記載が異なっても発音が同じであれば基本的に同じ台詞とみなした（例…為ゆめ〓なよめ、如何が〓いきやが、等）。また、『戯曲集』の体裁にあわせ、着付や配役の部分を除いた詞章の部分を一句毎に分ち書きにして、ト書き、節名なども一句として分けて校合を行った。詳細は別紙の資料を確認されたい。

#### i 辺戸之大主

#### ① 作者ならびに上演の歴史

戦前に編集された「辺戸の大主」を収録する「組踊本」のうち、現存しているものは三冊ある。そのうち、筆写本は『尚家旧蔵組踊集』『兼島本組踊集』の二冊で、活字本は『琉球脚本組踊集 下巻』の一冊である。いずれの「組踊本」にも作者名の記載はみられない。

戦後いち早く発行された組踊集である『中郷土古典芸能組踊全集』(以下「全集」とする)にも「長者の大主」は収録されている。「全集」には、各収録作品の目次欄に「作者」という項目があり、「辺戸の大主」の「作者」欄をみると「不明」とある。さらに、前掲の『兼島本組踊集』をもとに戦後再編集された活字本の『琉球古典基本組踊集』の目次にも、「作者」の欄があり、そこにも「不明」とある。現存する組踊集には「辺戸の大主」の作者が記載されていないのである。よって作者は未詳の作品である。しかし、伊波普猷はこの作者を「玉城朝薫」としており(注六二)、矢野輝雄も伊波のこの説を支持し「先例を第一とする宮廷の習いとしてその可能性は大きい(注六三)」としている。この二者の結論は、折口のいう「組踊以前の芸能」をうかがわせる内容である。しかし、以下に示すように、「辺戸の大主」が上演されたのは一七一九年以前にも確認ができない。さらに、朝薫の家譜、『球陽』『中山伝信録』などの資料にも作者について記載がない。朝薫が作ったのであればそこに何らかの情報が記載されるべきであり、冊封使も書く可能性はあったはずだ。しかし記載はない。そし

て「辺戸の大主」が上演されたのが確認できるのは一八〇〇年以降である。作者のことも含めて、以下に上演年代と形式から作者を探ってみることにする。

「辺戸の大主」は初演された年も未詳である。一八三八年に尚育王の冊封が行われた。この年の冊封は戊戌の年に行われたので、通称「戌の御冠船」と呼ばれている。その時の躍奉行の日記である『躍方日記』には、戌年の躍方の活動と、その前に行われた一八〇八年(辰年)と、さらにその前に行われた一八〇〇年(申年)の上演演目が記載されている。この『躍方日記』から「辺戸の大主」が上演された記録を抜き出してみると、一八〇〇年・一八〇八年・一八三八年の冊封に供された演目として記載されている(注六三)。いずれも、冊封使同席のもとに行われる、大宴(仲秋宴・重陽宴・望舟宴・餞別宴・拝辞宴)の舞台上上演されたのではない。冊封使帰国後に行われる、国内で国王誕生を祝う宴である、「御膳進上」、それから「御祝上げ」の舞台上上演されているのである。この記録が現在確認できる「辺戸の大主」上演年の最古のものであり、『躍方日記』によると「辺戸の大主」は一八〇〇年に上演されているので、この時期にはすでに創作されていたということがいえる。

最後の冠船である一八六六年(寅年)の冊封の舞台での上演作品は、踊奉行の日記や、その他の記録が現存していないため、「辺戸の

大主」が上演されたという詳細は得られない。だがしかし、冊封使へ組踊の内容を伝えるために、作品の内容を漢訳した資料である「演戯故事」は現存している。ところが、そこには「辺土の大主」の漢訳もみられないことから、本宴の上演演目としては準備されなかったようである。この年の御膳進上の芸能の演目を資料からうかがい知ることができないが、戊年の『躍方日記』からは、冠船における組踊の演目は、前回おこなわれたものを踏襲する傾向が見える。次の表は冊封の行われた年の御膳進上の舞台の上演演目を示したものである。(演目の順番は便宜上筆者が改めた)

護佐丸敵討	大川敵討	東辺名夜討	一八〇〇年	一八〇八年	一八三八年
孝行之巻	義臣物語	孝行之巻	辺土の大主	辺土の大主	辺土の大主
銘苅子	執心鐘入	執心鐘入	姉妹敵討	姉妹敵討	姉妹敵討
我数之子	本部大主	本部大主	孝女布晒	孝女布晒	銘苅子

表を見ると一目瞭然であるが、一八〇〇年から連続して上演されている。したがって、寅年の御膳進上の舞台でも上演されたことが推測できる。

王府の芸能に関する資料は少なく、それが初演や作者を未詳にしている大きな理由であるが、数少ない資料からうかがえる上演の記録からは、「辺土の大主」は申年の冠船の御膳進上・御祝上げの時の舞台には上演されていることは明らかである。しかも大宴には上演されなかったため、冊封使は使録に記載することができなかったであろう。

上演形態として考えると、大宴には「老人老女(注六四)」という演目がある。これは老夫婦が舞台に登場して、自身が一二〇歳を迎えたことを述べ、この豊かな御代と果報は国王の徳が素晴らしいものであるからだ、と言祝ぎ、かぎやで風節にのせて踊る。これは内容だけ見ると「辺土の大主」とほぼ同じである。言うなれば「辺土の大主」の簡略版と言ってもよからう。ここでは資料が十分でないため、「辺土の大主」の作者を立証することはできないが、「辺土の大主」はこの「老人老女」を劇化したものではないか、という推測だけのこしておく。いずれにせよ、朝薫以前の冊封の芸能や年忌の芸能、

その他王府の芸能の中で、古い時代から「老人老女」が演じられていることを突き止めることで、「辺土の大主」の成立背景や作者を立証することができると思われる。しかし、今のところいえることは、田里朝直以降に上演が確認できることから、組踊の中では成立が比較的古い作品として考えることができる。

## ② 内容について

この作品は沖縄各地の民俗芸能に残る「長者の大主」に似た内容である。大主の長寿を祝い、子や孫たちが芸能を見せ、大主も喜び、最後は自身も踊る、という芸づくしの要素がある。作品全体として祝儀的内容の組踊である。敵討・孝行の内容が多い組踊において、祝儀に一貫した内容の作品はこの作品だけである。

作品の表題も「辺戸の大主」であり、「長者の大主」と似通っている。「長者の大主」は、上演される各ムラの豊年祭などの村踊りで、幕開けとして上演されることが多い。これは、戌年の冠船の重陽宴に最初に踊られた「老人老女」にゆかりのある演目であるからである。「老人老女」は、自身が百二十歳の長寿者であることを述べ、それが徳の高い国王の御代であるからだ、と国王とその徳を褒め称える構造となっている。

ここで問題としたいのは、演目の表題になっている「辺戸」とい

う地名である。組踊が創始されたのは一七一九年。尚敬王の冊封の演目として生まれた。第二尚氏時代である。第二尚氏のゆかりの地は伊是名島である。国王自身の出自に関連を求めるとすれば「伊是名の大王」や、「鮫川の大主」といった表題でも良いと思うが、表題が「辺戸」である理由はどこにあるのであろうか。

王府と「辺戸」の関連を考える時に、まず想起されるのは、『琉球国由来記』にある辺戸の大川の「御水取り」であろう。『琉球国由来記』の巻一の中に「辺土之御水且吉方御水献上」(註六五)という項目があり、そこには「年内十二月廿日、御水取二時之大屋子一人罷越シ、辺土之巫、御崇有テ、御水取り来テ、同二十八日、当・勢頭御取次、御案内有テ、御水ヲ封ジテ御照堂へ召置、元日之朝、吉方二川之御水、俱ニウチユクイノ阿武志良礼、御取次献上也」(註六六)とある。年末の十二月二十日に、時之大屋子が辺戸に向かい、辺戸村のノロと供に二十八日に大川の水を汲む。元日の朝、その年の吉方にあたる二つの川から取ってきた水とともに、若水として使用したようである。辺土の水を汲んだ大川は、『琉球国由来記』の辺戸村「シチャラ嶽」の項によると「毎年五月・十二月、辺戸ノ大川ヨリ御水取ノ時、仙香一結宛。御花米九合宛・御五水三合宛・今焼マカリ二宛・下布一端宛、之を供し、御崇有也」(註六七)とあって、王府の行事のために十二月の他に毎年五月に辺戸の大川から水を汲んでいた様子がか

がえる。

五月は『琉球国由来記』巻一の「稲之穂祭」にみえる。「此時、辺戸大川<sup>ウチノカハ</sup>之水、三日前、時之大屋子汲来、首里殿内に置き于、吉方ト二川之水者、祭日早旦、時之大屋子、之点汲み来たりて、二水俱御中門より、之を献げ奉る也」<sup>(注六八)</sup>とある。王府の重要な行事である「稲之穂祭」と元旦の儀式に、辺戸の水は欠かせないものであったということがわかる。

辺土の大川の別名は『琉球国由来記』によれば「俗ニ大川ト云。神名アフリ川ト云」となっている。これによると、大川の方が別称で、川には神名が付けられている。この「アフリ川」の近くには「アフリ嶽」という御嶽も存在している。『琉球国由来記』の「アフリ嶽」の項をみると、アフリ嶽は辺戸村にあり、次のような伝説が記載されている。「アフリ嶽 神名 カンナカナノ御イベノ同村ノ昔、君真物出現之時、今帰仁間切アフリノハナニ冷傘立時、コバウノ嶽ニ冷傘立、又アフリ嶽ニ立ト、申伝也。ノ神道記ニ曰。『新神出給フ。キミテズリト申ス。出ベキ前ニ、国上之深山ニアフリト云物現ゼリ。其山ヲ即、アフリ岳ト云。五色鮮潔ニシテ、種々莊嚴ナリ。三ノ岳ニ三本也。大ニシテ一山ヲ覆尽ス。八九月ノ間也。唯一日ニシテ終ル。村人飛脚シテ王殿ニ奏ス。其十月ハ必出給フ也。時ニ、託女ノ装束モ、王臣モ同也。鼓ヲ拍、謳ヲウタフ。皆以、龍宮様ナリ。王

宮ノ庭ヲ会所トス。傘三十余ヲ立ツ。大ハ高コト七八丈、輪ハ径十尋余。小ハ一丈計」<sup>(注六九)</sup>辺土の「アフリ嶽」にキンマモンが出現する時に、必ず冷傘が立つ、と『琉球神道記』に記されている、という内容である。

また、この「アフリ嶽」は、『中山世鑑』によると、アマミク・シネリクの神が、沖縄島を創成する際、はじめに作った御嶽とされている。辺戸という土地は、琉球国において聖地とされていたのである。その聖地の水はまさしく正月元旦に浴びる「若水」にふさわしいものであったのである。琉球の聖地であるが故に、長寿者の名前にも取入れられ、組踊「辺土の大主」の表題の地名になり得たのである、と推測する。

### ③底本と対校本について

「辺戸の大主」の対校本は以下のとおりである。

第一次対校本…兼島信備所蔵本（以下「兼島本」）

第二次対校本…琉球脚本組踊集 下巻（以下「琉脚」）

一八〇〇年から上演が確認される比較的古い作品ではあるが、戦前に成立した筆写本・活字本に収録されているものは少ない。「兼島本」は一九〇六（明治三九）年に書写されたものであり、活字本の「琉脚」は一九二〇（大正九）年に出版されたものである。いずれも時



代は新しい。

#### ④校合結果

以下に『尚家旧蔵組踊集』（以下『尚家本』）との校合結果を載せる。

まず、『尚家本』にあり、対校本に見られない記載は、着付（資料参照 No.2～9）と作品の後半部に踊られる「はやひくわいにや」節の一節「九重のうちに 荅て露まちゆす 嬉しこと菊の はなとやゆる」（No.207～209）である。これは対校本両者とも欠いており、『尚家本』との大きな異同となっている。着付については『校註琉球戯曲集』のように王府ゆかりの「組踊本」に記載されている例があることから、着付が記載されている「組踊本」は王府の「組踊本」を写した可能性が高いことがうかがえる。今回の対校本にはそれが見られないことから、現段階では『尚家本』からの書写である蓋然性が低いと考えざるを得ない。

次に、対校本に記載のない「はやひくわいにや」節の一節「九重のうちに 荅て露まちゆす 嬉しこと菊の はなとやゆる」（No.207～209）であるが、対校本の両方に記載がないことから、対校本では全体で四節歌われる「はやひくわいにや」を三節に短縮した可能性が指摘される。また、この部分からも、両対抗本は同系統の「組

踊本」から書写されたことも考えられる。両対抗本の共通性は後の校合で更に詳しく考察していく。

対校本のみに見られ、『尚家本』に見られない記載は、「辺戸の大主」という役名の記載（No.192）と、前之浜の踊りの際の囃子部分（No.177・182）など、

『尚家本』なし

「兼島本」「ヤイ〜」

「琉脚」 「多い多い」

最後の記載（No.215）

『尚家本』なし

「兼島本」「辺戸ノ大主終」

「琉脚」 「おはり」

である。役名の記載（No.192）については、尚家本に収録されている「辺戸の大主」以外の作品でも、数箇所脱落が認められるため、尚家本の誤脱であることが考えられる。末尾の「終わり」を意味するト書きについては、「琉脚」は活字本であり、「琉脚」に収録されているその他の作品にも末尾にはすべて「おはり」の記載が見られるため、出版編集上、挿入した可能性が考えられる。だが、筆写本である「兼島本」以外で、他の筆写本である『恩河本小祿御殿本組踊集』などにも作品の末尾に「終わり」を意味するト書きが見られ

るため、筆写本にも入っていた可能性もある。しかし、この記載は明治以降の「組踊本」のみに見られる傾向であるので、近世の「組踊本」、すなわち両「組踊本」の親本にあたる世代の組踊集には記載がなかったことが推測されるのである。いずれにせよ、対校本どうしで共通の項目が『尚家本』には見られないのである。

次に踊りの囃子の部分についてであるが、『尚家本』に記載はない。これは省略と考えられる。同じような『尚家本』の省略については、役名のト書きから考えることができる。対校本は「辺戸の大主」「辺戸のひや」「辺戸の子」などと、役名のすべてを記載するが、尚家本は、はじめは「辺戸のひや」(No.10)、「辺戸の子」(No.34)などと対校本と同じように役名のすべてを記載している。しかし、後半部は「子」(No.91)、「ひや」(No.98) というように、共通している「辺戸の」を欠いている。このことから、共通した記載は省略する傾向にあることがいえる。これは『尚家本』に見られる特徴である。

次に「兼島本」に見られる特徴としては、役名の他に役の出入りを指定するト書きが見られる。それは「辺土ノ比屋言葉橋掛ヨリ出ル」(No.10)、「同人橋掛ヨリ出ル」(No.40)、「柳節橋掛ヨリ出ル」(No.93)、「早クワイニヤ節辺土ノ比屋以下手ヲ橋掛へ入ル」(No.196)の四例である。これは『尚家本』にも「琉脚」にもみられない。このような登場人物の登退場を指定したト書きは、『琉球戯曲集』などに

も見られ、上演には欠かせない大切な情報である。この記載が見られる「兼島本」は、王府の「組踊本」に近いものから書写されたことも考えられる。

また、舞踊の際に歌われる節にも追加でト書きが見られる。「金武節女孫六人ナル子持ち踊り」(No.138)、「チルレン節女孫兩人四ツ竹持踊」(No.154)である。こちらも『尚家本』、「琉脚」にはみられない。このことから、対校本の「兼島本」はト書きを詳細に記載している「組踊本」であることがうかがえる。『尚家本』にト書きが見られないことについて、対校本が少なく、検証することが困難であるが、他の作品を含めた校合結果全体を通して検討したい。

## ii 執心鐘入

### ① 作者ならびに上演の歴史

作者は玉城朝薫(一六八四～一七三四年)であり、初演は一七一九年の尚敬王冊封の重陽宴のときである。その後の一七五六年の冊封の舞台に供されたという記録はないが、一八三八年の『躍方日記』によると一八〇〇年・一八〇八年・一八三八年の上演が確認でき、一八六六年の『演戯故事』には漢訳がみられるため、上演の準備がされていた演目である。おそらく一七一九年以降のすべての冊封の舞台に供されている可能性のある演目である。現在もなお組踊の代

表的な演目として知られており、上演回数も多い演目である。

## ② 内容について

この作品は能の「道成寺物」と比較されることの多い演目である。研究史的に言えば、真境名安興の「組踊と能楽との考察<sup>(注七〇)</sup>」が最も有名で初期の研究である。真境名は「執心鐘入」は「道成寺と安達原の両方から採った合作のやうで<sup>(注七二)</sup>」ある、と評して、組踊と能のあらずじを比較したのち、似ている箇所を対照させて組踊と能楽とが似ていることを示した。これはあくまで内容が似ていることを論じたものであり、「執心鐘入」が能の翻案である、ということ説いた論文ではない。

東恩納寛淳は「道成寺と執心鐘入<sup>(注七二)</sup>」で組踊と伝説、能楽の道成寺の内容を比較しており、それぞれの話の材料を、男・女・二人の関係・破綻の原因・結末に分けて表し、道成寺と執心鐘入の共通点を上げている。そして、後半では執心鐘入の作品を作る材料として末吉の寺の鐘の歴史と、若松がオモロに「安谷屋の若松」と詠まれていることを挙げ、作者がこの二つを採用したことに加え、劇の最後の祈りの場面で終了している点を挙げ、「執心鐘入」が組踊の中で傑作であることを評している。全体的に、組踊「執心鐘入」の内容がどのようなようにして生まれたのかを概説している論文である。

池宮正治は「組踊の論理」で「道成寺」と似ていることを取り上げて入るものの、直接能に倣ったのではなく、『中山伝信録』の「鐘魔事」の内容を引用しながら、琉球在来の伝説を下敷きにして、能の手法を取り入れた、としている。

矢野輝雄は、『組踊への招待』で組踊と能楽の内容を比較して、能の内容が後日談の形式をとっている点、組踊と異なる事を示し、むしろ能の原典となっている『本朝法華経験記』や地歌の「古道成寺」のように現世の女との物語である事を述べている。また、その演出については元禄歌舞伎などからも影響を受けている事を示している<sup>(注七三)</sup>。

研究史を概観すると、「執心鐘入」という作品は、能楽との内容の対比にはじまり、琉球の伝説と能楽の影響、演出方法の影響など、他の組踊作品よりも研究の進んでいる作品といえよう。

## ③ 底本と対校本について

「執心鐘入」

第一次対校本：今帰仁御殿本組踊集（以下「今帰仁本」）・恩河本小禄御殿本組踊集（以下「恩河本」）・兼島信備所蔵本組踊集（以下「兼島本」）・台湾本琉歌大観（以下「台湾本」）・比嘉信三所蔵本組踊集（以下「比嘉本」）・琉球新報（大正十四年）宮城真治資料（以

下「新報・宮城」・校註 琉球戯曲集（以下『戯曲集』）・宮良殿内本  
組踊集（以下「宮良本」）・伊舎堂用八所蔵組踊集（以下「伊舎堂本」）

「執心鐘入」は尚家本を含め筆写本が八冊と多く残っているため、  
第一次対校本のみで校合を行う。『琉球戯曲集』は活版本、「琉球新  
報」は新聞であるが、王府の資料をもとに編んだものであるので校  
合の第一次対校本として扱った。底本の『尚家本』には着付が記載  
されているが、「羽地本」を底本としている「琉球新報（大正十四年）  
宮城真治資料」「台湾本琉歌大観」「琉球戯曲集」にも着付が記載さ  
れており、校合を行う十冊のうちの約半数が王府関係の「組踊本」  
である。その他の対校本も御殿・殿内に所蔵されていたもの、士族  
の所蔵しているものとなっている。『伊舎堂用八所蔵本』『宮良殿内  
本』は、対校本のうち、先島に所蔵されていた「組踊本」である。

#### ④校合結果

以下に『尚家旧蔵組踊集』（以下『尚家本』）との校合結果を載せ  
る。

まず、『尚家本』にあり、対校本に見られない記事・詞章について。  
校合を行った結果、尚家本のみに見られ、対校本すべてに見られな  
い、という記載はなかった。一部の対校本に記事・詞章が見られな

い部分について以下に挙げていく。

対校本に記載が見られないもので一番多かったのは「着付」（No.  
21～25）である。「着付」は「今帰仁本」「恩河本」「兼島本」「比嘉  
本」「宮良本」「伊舎堂本」にみられなかった。これは校合対象の九  
冊中のうち六冊である。

次に多かったのは、小僧の「小僧／おう」（No.346・347）という  
座主が祈りをしよう、と声をかける場面での台詞が「台湾本」「比嘉  
本」「新報・宮城」「宮良本」の四冊にみられない。王府系の「組踊  
本」が親本と思われる「台湾本」「新報・宮城」に見られないのは考  
察の余地がある。

小僧の台詞「小僧／とう／ゆるちみせら」（No.276・277）。これ  
は「比嘉本」「戯曲集」「宮良本」の三冊にみられなかった。また、  
経文の「ちやうかせつしやとく大ち多。」（No.357）は「兼島本」「宮  
良本」「伊舎堂本」の三冊にみられなかった。

座主が小僧たちに鐘の番を言づけた後の台詞「小僧／おう」（No.  
218・219）が「比嘉本」「宮良本」の二冊には見られなかった。

女が寺にやってくる場面で歌われる音曲名「女道行七尺ふし」（No.  
233）が「兼島本」と「宮良本」には見られない。また、「兼島本」  
はこの場面の歌の歌詞も欠落している。

以上は尚家本にみられ、複数の「組踊本」に共通して見られない

記載であった。次に、尚家本に見られ、個々の対校本に見られない記載を「組踊本」ごとに挙げる。

「今帰仁本」

前掲の「着付」(№11～15)のみ。

「恩河本」

前掲の「着付」(№11～15)

「兼島本」

前掲の「着付」(№11～15)

若松の台詞「御縁てすしらぬ／恋の道しらぬ／しはしまちかねる／夜明しら雲」(№97～100)

音曲の七尺節「露の身はやとて／自由ならぬよひや／里とまいて互に／一道ならに」(№233～237)

座主の台詞「たう〜」(№344)

経文「なまくさまんたはさらた。／せんたまかるしやた。／そはたやうんたうたかんまめ。／ちやうかせつしやとく大ち多。

／かじしつしや即身成佛」(№354～358)

「台湾本」

前掲の「小僧／おう」(№346・347)のみ。

「比嘉本」

前掲の「着付」(№11～15)

小僧の台詞「小僧／おう」(№218・219)

「小僧／とら〜ゆるちみせら」(№276・277)

「小僧／おう」(№346・347)

座主の台詞「耳の根よあさし／たによ聞とめれ」(№207・208)

「新報・宮城」

前掲の「小僧／おう」(№346・347)のみ。

『戯曲集』

前掲の「小僧／とら〜ゆるちみせら」(№276・277)のみ。

「宮良本」

前掲の「着付」(№11～15)・小僧の台詞「小僧／おう」(№218・219)

「小僧／とら〜ゆるちみせら」(№276・277)

「小僧／おう」(№346・347)

役名「女」(№43・53・83・91・101・251・261・307)

役名「若松」(№58・78・88・96・106・121・131・143・152・182)

役名「座主」(№147・167・187・206・302・311・317・321・

332)

役名「小僧」(№218・225・228・231・238・246・256・266・

271・276・278・283・285・290・292・315・319・323・346)

音曲名「中城若松出羽金武ふし」(No.19)

「女出羽干瀬ふし」(No.73)

「干瀬ふし」(No.126・136)

「女道行七尺ふし」(No.233)

「七尺ふし」(No.241)

「散山節」(No.297)

小僧一の台詞「うらめゆすきは」(No.267)

「しらぬふりしちをて／ゆるち見せら」(No.269)

座主の台詞「はあ／たひんな事があつた／はやうむちれ／

たう／」(No.303～306)

ト書き「但此時女鐘に入鬼に成」(No.310)

経文「東方に降三世明王」(No.349)「なまくさまんたはさらた。

／せんたまかるしやた。／そはたやうんたうたかんまあ。／ち

やうかせつしやとく大ちゑ。／かじしつしや即身成佛」(No.354

～358)

「伊舎堂本」

前掲の「着付」(No.11～15)

若松の台詞「しらぬ」(No.111)

座主の台詞「小僧共集め／番のしめさしやう」(No.199・200)

経文「かじしつしや即身成佛」(No.358)

対校本のみに見られ、『尚家本』に見られない記載のうち、一番多く見られたものは、若松が寺に助けを求め、座主が若松を鐘に隠したのちに、小僧たちを呼ぶ場面で、小僧たちが「ほう」と返事をする台詞 (No.204・205) である。これは、今回校合した対校本すべてに見られ、『尚家本』のみに見られなかった記載である。

また、若松が金武節で登場して台詞を述べる部分の役名「若松」(No.23) が『尚家本』と「宮良本」以外の八冊の「組踊本」に見られる。

次に多かったのは作品の末尾に、終わりを示す「中城若松終」「執心鐘入終」「をはり」「仲城若松寫完」といった記載が見られた (No.366)。これは順に「恩河本」「兼島本」「新報・宮城」「宮良本」の四冊に見られた。

次に多かったのは「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』にみられる「配役」(No.6～9) の記載である。これはこの三冊の「組踊本」の親本が同じ「組踊本」であることを示しており、他の対校本には見られない特徴でもある。また、最後の部分にあるト書き「附いのに取付候時、笛太鼓小鼓にて拍子有る。橋掛にをさまる。」(No.359) もこの三冊のみにしか見られない記載である。

また、「台湾本」「新報・宮城」には解説部分 (No.3) と「登場人

物と当時の演技者」(No.5)・「演技者の服装其他」(No.10)・「附り淫女容貌相変じ(略)」(No.17)・「第二幕」(No.142)と五ヶ所の同様な記載が見られる。

次に、対校本に見られ、尚家本に見られない記載を「組踊本」ごとに挙げる。

「今帰仁本」

前掲の役名「若松」(No.23)・小僧たちの台詞 (No.204・205)

役名「座主」(No.348)

「恩河本」

前掲の役名「若松」(No.23)・小僧たちの台詞 (No.204・205)

役名「座主」(No.348)

終わりを示すト書き「中城若松終」(No.361)

最後のメモ書きなど「桃原村／恩河朝祐／鬼速狂之極／心偏に

鬼は愧字なり愧心面に見はれ鬼の如くなる」(No.362～365)

「兼島本」

前掲の役名「若松」(No.23)・小僧たちの台詞 (No.204・205)

役名「座主」(No.198)

終わりを示すト書き「執心鐘入終」(No.366)

「台湾本」

前掲の「配役」(No.6～9)の記載・解説部分 (No.3)・「登場人物

と当時の演技者」(No.5)・「演技者の服装其他」(No.10)・「附り淫女容貌相変じ(略)」(No.17)・役名「若松」(No.23)・「第二幕」(No.142)・小僧たちの台詞 (No.204・205)・最後の部分にあるト書き「附いのりに取付候時笛大鼓小鼓にて拍子有る橋掛にをさまる」(No.359)

解説の後にタイトルと作者の記載「執心鐘入 玉城(親方)朝

薫作」(No.4)

役名「座主」(No.348)

「比嘉本」

前掲の役名「若松」(No.23)・小僧たちの台詞 (No.204・205)

役名「小僧」(No.220)

「新報・宮城」

前掲の「配役」(No.6～9)の記載・解説部分 (No.3)・「登場人物

と当時の演技者」(No.5)・「演技者の服装其他」(No.10)・「附り

淫女容貌相変じ(略)」(No.17)・役名「若松(うまば)」(No.23)・「第

二幕」(No.142)・小僧たちの台詞 (No.204・205)・最後の部分に

あるト書き「(附祈に取付候時笛大鼓にて拍子有る橋掛にをさま

る)」(No.359)

役名「若松(うまば)」(No.36)

役名「座主」(No.348)

『戯曲集』

前掲の「配役」(No.6~9)の記載・役名「若松詞」(No.23)・小僧たちの台詞(No.204・205)・役名「小僧(一)詞」(No.220)・ト書き「附 いのりに取付候時、笛太鼓小鼓にて拍子有る。橋掛にをさまる。」(No.359)  
「宮良本」

前掲の小僧たちの台詞(No.204・205)

若松の台詞「一 浮世恋テスヤ／聞ミテン知ン／「欠字」テ此事ヤ／ヨチ賜リ(注七四)」(No.112~115)

最後の附「一 附 三男小増ニサソへ入」(No.360)

終わりを示すト書き「仲城若松寫亮」(No.361)

親本の所有者と思われる記載「仲地小樽金物也」(No.366)

「伊舎堂本」

前掲の役名「若松言」(No.23)・小僧たちの台詞(No.204・205)

若松の台詞「浮世恋てすや／聞見ちんしらぬ／頼て此事や／ゆるちたふうれ」(No.107~110)

座主の台詞「このさ〜」(No.345)

次に、『尚家本』と対校本の移動が見られる個所が多い順に挙げる。座主の台詞「命もふりすて〜」(No.170)が、「今帰仁本」「兼島本」

「台湾本」「比嘉本」「新報・宮城」『戯曲集』「宮良本」「伊舎堂本」の八冊で「命ふりすて〜」となっている。

金武節の歌詞、『尚家本』の記載は「ひちゆひ登る」(No.22)とな

っているが「恩河本」「台湾本」「比嘉本」「新報・宮城」『戯曲集』

「宮良本」「伊舎堂本」の七冊が「行る」という記載になっている。

女の台詞「たそよ夜深さに」(No.44)が「今帰仁本」「恩河本」「兼

島本」「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』「伊舎堂本」の七冊で「誰

(たる)よ」となっている。

女の台詞「そゆるよの中の」(No.104)が「今帰仁本」「恩河本」「兼

島本」「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』「宮良本」の七冊で「吸る

(すよる)」となっている。

若松の台詞「おれと世の中の」(No.124)が「今帰仁本」「恩河本」

「台湾本」「比嘉本」「新報・宮城」『戯曲集』「伊舎堂本」の七冊で

「是と(これと)」となっている。

座主の台詞「むはていやんすれ〜」(No.179)が「今帰仁本」「恩河

本」「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』「伊舎堂本」で「むはていや

にすれは」となっている。

若松の台詞「行先もなひらぬ」(No.68)が「今帰仁本」『戯曲集』

「宮良本」の三冊で「見らぬ」、「兼島本」「比嘉本」の二冊で「迷て」、

「台湾本」で「行先もならぬ」となっている。



若松の台詞「男生れても」(No.122)が「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』で「女生れても」、「兼島本」「比嘉本」で「女生れとて」、「宮良本」で「男ク生トテ」、「伊舎堂本」で「生れても」となっている。  
干瀬節の歌詞「袖に結びやへか」(No.130)が「恩河本」「台湾本」「新報・宮城」で「袖に結びやへる」、「兼島本」で「袖に結まびが」、「宮良本」で「袖ニ結フ」、「伊舎堂本」で「袖にむすて」となっている。

座主の台詞「耳の根よあさて」(No.207)が「今帰仁本」「恩河本」「兼島本」「宮良本」「伊舎堂本」で「耳の根よ明(あけ)て」となっている。

座主の台詞「はやうむちれへ」(No.305)が「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』「伊舎堂本」が「早くにげれへ」となっている。

以下に各本ごとの尚家本との異同を挙げる。

「今帰仁本」

冒頭の若松の出羽の音曲名「中城若松出羽金武ふし」(No.18)が

「若松道行金武ふし」となっている。

若松の台詞「夜明しら雲」(No.100)が「夜明しら雲よ」となっている。

音曲名「干瀬ふし」(No.126・136)が「歌干瀬ふし」となっている。

若松の台詞「露の命ちを」(No.159)が「露の身の命を」となっている。

小僧の台詞「句やうつす」(No.230)が「句やうつる」となっている。

音曲名「女道行七尺ふし」(No.233)が「女道行歌七尺ふし」となっている。

小僧の台詞「女や法度へ」(No.239)「女ハ法度へ」となっている。

音曲名「干瀬ふし」(No.241)が「歌干瀬ふし」となっている。

七尺節の歌詞「禁止のませかきも」(No.242)が「禁止のませ垣や」となっている。

音曲名「散山節」(No.297)が「歌さん山ふし」となっている。

ト書き「但此時女鐘に入鬼に成」(No.310)が「但此時女鐘に入鬼と成る」となっている。

経文部分 (No.349～358) に多少の異同が見られる。

「恩河本」

冒頭の若松の出羽の音曲名「中城若松出羽金武ふし」(No.18)が

「若松出羽金武ふし」となっている。

金武節の歌詞「ぬのたけになても」が「布たけになてん」とな

っている。

音曲名「女出羽干瀬ふし」(No.73)が「女出羽干瀬ふしにいたりふし」となっている。

若松の台詞「夜明しら雲」(No.100)が「夜明しら雲よ」となっている。

座主の台詞「こねや夜ふかき」(No.148)が「こねや夜ふかくに」となっている。

若松の台詞「あとから追ひけて」(No.158)が「跡からうへつけ」となっている。

座主の台詞「小僧共集め」(No.199)が「小僧ども集」となっている。

座主の台詞「さかひさはもはからひ」(No.214)が「ちかさはんはからひ」となっている。

音曲名「女道行七尺ふし」(No.233)が「女出羽七尺ふし」となっている。

女の台詞「人のらめしや」(No.265)が「人の浦みしや」となっている。

小僧二の台詞「いや推参な小僧」(No.291)が「いや推参な小僧みう」となっている。

小僧一の台詞「寺内をさかひち」(No.328)が「寺内をちがち」

となっている。

座主の台詞「麿相にしちをとて」(No.335)が「麿相にしちよて」となっている。

小僧の記載が「大小僧」「大僧」「中僧」「中小僧」「小僧」となっている。

経文部分 (No.349～358) に多少の異同が見られる。

「兼島本」

若松の台詞「自由ならぬていふすに」(No.60)が「自由成らんで言すや」となっている。

若松の台詞「繰返ちまたや」(No.61)が「繰帰ち又」となっている。

女の台詞「たにす又しちやれ」が「たんす又しきやる」となっている。

女の台詞「おとこ生れても」(No.117)が「男生れとて」となっている。

音曲の「干瀬ふし」(No.126)が「干瀬節並女言ば」となっている。

座主の台詞「いとふしきたひもの」(No.150)が「事不思議だいのもの」となっている。

若松の台詞「露の命ちを」(No.159)が「露の身の命」となっている。

若松の台詞「頼まは終に」(No.163)が「頼で終に」となっている。

若松の台詞「頼てわなひきちやん」(No.184)が「頼で我ね言ちやん」となっている。

座主の台詞「いきやしかな童へ」(No.188)が「如何しが童び」となっている。

座主の台詞「恋のせめかこも」(No.193)が「恋のしみかたん」となっている。

座主の台詞「番のしめさしやう」(No.200)が「番のしめさしやうり」となっている。

小僧の台詞「ひちゆひしちならぬ」(No.227)が「引きよ引き済まん」となっている。

小僧二の台詞「女や法度く」(No.239)が「あゝ女禁止(はつと)く」となっている。

女の台詞「おもことあてと」(No.254)が「思事の有とて」となっている。

女の台詞「蟻虫の類ひ」(No.262)が「蟻虫な類ひ」となっている。

小僧二の台詞「石か朝夕さの」(No.274)が「石か麻(あさ)の」となっている。

散山節の歌詞「ひちゆひこかれとて」(No.300)が「引よ行くかとて」となっている。

座主の台詞「はあ」(No.303)が「あゝ」となっている。

女の台詞「あの鐘よ」(No.309)が「彼の鐘」となっている。

小僧の台詞「鬼になて鐘に」(No.330)が「鬼に成い鐘に」となっている。

小僧の台詞「まとひつきやる」(No.331)が「まとつ来る」となっている。

座主の台詞「かにある事しちやち」(No.336)が「斯(か)にやる事しきよて」となっている。

座主の台詞「いきやいちもならぬと」(No.340・341)が「言ん益／無らん」となっている。

座主の台詞「祈のけらふよ」(No.343)が「祈り除けら」となっている。

役名の「小僧」が「兄小僧」「次小僧」「三男小僧」と分けられている。

経文部分(No.349～358)に多少の異同が見られる。

「台湾本」

冒頭の着付 (No.115) の内容に異同が見られる。

冒頭の若松の出羽の音曲名「中城若松出羽金武ふし」(No.18)が

「第一幕 若松道行歌金武ふし(橋掛より出づ)」となっている。

女の役名に続いて、「(南表の幕内にて)」(No.43)というト書きがみられる。

若松の台詞「自由ならぬていふすに」(No.60)が「自由(じゆ)ならぬていふすも」となっている。

女の出羽の音曲名「女出羽干瀬ふし」(No.73)が「女 出羽歌、

干瀬にゐるとり節、南表の幕より出る」となっている。

女の台詞「ならひやしらぬ」(No.105)が「習(ならひ)やしらぬ」となっている。

音曲名「干瀬ふし」(No.126・136)が「歌 干瀬にゐる鳥節」となっている。

若松の役名に続いて、「(北表の幕前にて案内)」(No.143)というト書きがみられる。

座主の役名に続いて、「(北表の幕より出る)」(No.147)というト書きがみられる。

座主の台詞「恋のせめかこも」(No.193)が「恋のせめかこも」となっている。

座主の台詞「小僧共集め」(No.199)が「小僧ども集(しゆう)」となっている。

座主の台詞「人とまひてきゅん」(No.210)が「人とまひてきちん」となっている。

女の道行の音曲名「女道行七尺ふし」(No.233)が「女道行歌 七尺ふし 南表の幕より出る」となっている。

小僧二の台詞「女や法度〜」(No.239)が「女は法度〜」となっている。

音曲名「七尺ふし」(No.241)が「歌七尺ふし」となっている。音曲名「散山節」(No.297)が「歌さん山ぶし」となっている。

ト書き「但此時女鐘に入鬼に成」(No.310)が「但此時女鐘に入り鬼と成る」となっている。

小僧一の台詞「寺内をさかひち」(No.328)が「寺の内をさがち」となっている。

小僧一の台詞「まどひきやる」(No.331)が「まどひきちやる」となっている。

座主の台詞「いきやいちも」(No.340)が「いきやもいちも」となっている。

役名の「小僧」が「小僧(年長)」「小僧(中年)」「小僧(年少)」と分けられている。

経文部分 (No.349～358) に多少の異同が見られる。

「比嘉本」

冒頭の音曲名「中城若松出羽金武ふし」(No.18)が「金武ふし」となっている。

女の出羽の音曲名「女出羽干瀬ふし」(No.73)が「干瀬節」となっている。

若松の台詞「道迷てをたん」(No.80)が「道迷て居たす」となっている。

若松の台詞「しはしまちかねる」(No.86)が「頓て待兼る」となっている。

女の台詞「おとこ生れても」(No.117)が「男生れとて」となっている。

音曲「干瀬ふし」(No.136)が「干瀬節 下句より述懐となる」となっている。

干瀬節の歌詞「はなちはなされめ」(No.138)が「放ち放さらぬ」となっている。

座主の台詞「こねや夜ふかさに」(No.148)が「あゝこにや夜深かさに」となっている。

座主の台詞「童へ声のあすか」(No.149)が「童声のあすや」と

なっている。

座主の台詞「急ちきかに」(No.151)が「出て見だに」となっている。

座主の台詞「あゝ一だひんな事よ」(No.168)が「あゝ一大事な事よ」となっている。

座主の台詞「籠相にともおもな」(No.75)が「籠相にどもするな」となっている。

座主の台詞「助けほしやの」(No.191)が「救ととらさ」となっている。

音曲名「女道行七尺ふし」(No.233)が「七尺ふし」となっている。

七尺節の歌詞「里とまいて互に」(No.236)が「里とめて我身や」となっている。

小僧一の台詞「とまひてきちやか」(No.250)が「まどひ着ちやが」となっている。

女の台詞「とまひてきちやる」(No.255)が「尋めて着ちやん」となっている。

小僧一の台詞「ゆるち見せら」(No.270)が「免ち見せれ」となっている。

小僧二の台詞「慈悲しらぬものや」(No.273)が「恋知らぬ者や」

となっている。

小僧三の台詞「のよて寺内を」(No.281)が「のよて寺内よ」となっている。

音曲名「散山節」(No.297)が「散山」となっている。

散山節の歌詞「ひちゆひこかれとて／死ぬか心気」(No.300・301)が「振り捨てゝ行かば／一道でもの」となっている。

座主の台詞「はあ／たひんな事があつた」(No.303)が「あゝ／大事な事があつた」となっている。

女の台詞「今にふしんな」(No.308)が「今に不審の」となっている。

ト書き「但此時女鐘に入鬼に成」(No.310)が「但し此時女鬼になり鐘に入る」となっている。

座主の台詞「是や」(No.312)が「あゝ」となっている。

小僧一の台詞「寺内をさかひち」(No.328)が「寺内よとめて」となっている。

小僧一の台詞「まどひつきやる」(No.331)が「まどひ着ちやん」となっている。

座主の台詞「祈のけらふよ」(No.343)が「祈りのけろう」となっている。

経文部分 (No.349～358) に多少の異同が見られる。

「新報・宮城」

冒頭の着付 (No.11～15) の内容に異同が見られる。

冒頭の若松の出羽の音曲名「中城若松出羽金武ふし」(No.18)が「第一幕「若松出羽」歌 (金武ぶし) (附り橋掛より出場す)」となっている。

女の出羽の音曲名「女出羽干瀬ふし」(No.73)が「女出羽」歌 (干瀬ぶし) (附り南表幕より出場す)」となっている。

音曲名「干瀬ふし」(No.126・136)が「歌 (干瀬ぶし)」となっている。

干瀬節の歌詞「はなちはなされめ」(No.138)が「放ちはなさらぬ」となっている。

座主の台詞「こねや夜ふかさじ」(No.148)が「こねや夜ふかくに」となっている。

若松の台詞「あとから追いつて」(No.158)が「後から追いつけ」となっている。

若松の台詞「頼まは終に」(No.163)が「頼で終に」となっている。

座主の台詞「小僧共集め」(No.199)が「小僧とも集」となっている。

座主の台詞「人とまひてきゝゆん」(No.210)が「人とまひてき  
ゆん」となっている。

音曲名「女道行七尺ふし」(No.233)が「女道行」歌(七尺節)  
(附南表幕より出場)となっている。

小僧二の台詞「女や法度〜」(No.239)が「女は法度はつと」  
となっている。

音曲名「七尺ふし」(No.241)が「歌(七尺節)」となっている。  
女の台詞「慈悲も定めらぬ」(No.264)が「せひも定めらぬ」と  
なっている。

音曲名「散山節」(No.297)が「歌(さん山ぶし)」となっている。  
散山節の歌詞「死ぬか心気」(No.301)が「死にゆる心気」とな  
っている。

女の台詞「今にふしんな」(No.308)が「なまにふしんな」とな  
っている。

小僧一の台詞「寺内をさかひち」(No.328)が「寺内をさかち」  
となっている。

座主の台詞「いきやいちも」(No.340)が「いきやもいちも」と  
なっている。

役名の「若松」「女」「座主」の末尾にすべて「ことば」という  
記載がされている。

役名の「小僧」が「年長小僧」「中年小僧」「年少小僧」と分け  
られている。

経文部分(No.349〜358)に多少の異同が見られる。

また、いくつかの役名のト書きに「北表」「南表」などの登退場  
の場所の指示が記載されている。

#### 『戯曲集』

冒頭の着付(No.二〜15)の内容に異同が見られる。

冒頭の若松の出羽の音曲名「中城若松出羽金武ふし」(No.18)が  
「若松道行歌、金武ぶし、橋掛より出る」となっている。

女の出羽の音曲名「女出羽干瀬ふし」(No.73)が「女出羽歌、干  
瀬に居るとりぶし、南表の幕より出る。」となっている。

音曲名「干瀬ふし」(No.126・136)が「歌 干瀬に居るとりぶし」  
となっている。

若松の台詞「あとから追つけて」(No.158)が「後(あと)から  
追付(おつ)き」となっている。

座主の台詞「人とまひてきゝゆん」(No.210)が「人(ひと)と  
まいてきちも」となっている。

音曲名「女道行七尺ふし」(No.233)が「女道行 七尺ぶし 南  
表の幕より出る」となっている。

小僧二の台詞「女や法度く」(No.239)が「女(をんな)は法度(はつ)く」となっている。

音曲名「七尺ふし」(No.211)が「歌 七尺ぶし」となっている。

女の台詞「慈悲も定めらぬ」(No.264)が「是非(ぜひ)も定(さ)だめらぬ」となっている。

小僧二の台詞「いや推参な小僧」(No.291)が「いや、推参な小僧(こぞう)めが。」となっている。

音曲名「散山節」(No.297)が「歌 さん山ぶし」となっている。

女の台詞「あの鐘よ」(No.309)が「あの鐘。」となっている。

座主の台詞「ほれたかく」(No.318)が「ほれたか。」となっている。

小僧一の台詞「寺内をさかひち」(No.328)が「寺(てら)の内(うち)を探(さが)ち。」となっている。

役名の「若松」「女」「座主」の末尾にすべて「詞」という記載がされている。

役名の「小僧」が「小僧(一)」「小僧(二)」「小僧(三)」と分けられている。

経文部分(No.349～358)に多少の異同が見られる。

また、いくつかの役名のト書きに「北表」「南表」などの登退場の場所の指示が記載されている。

「宮良本」

タイトルが「仲城若松」(No.1)となっている。

若松の台詞「みやたりことあてと」(No.1)が「メヤデリ毎ヤテド」となっている。

若松の台詞「ことに山路の」(No.30)が「殊ニ山路ヤ」となっている。

若松の台詞「あの村のはつれ」(No.32)が「アノ村ノハヅシ」となっている。

若松の台詞「旅に行暮て」(No.39)が「旅ニ行暗テ」となっている。

若松の台詞「行先もなひらぬ」(No.40)が「行先ヤ見ラン」となっている。

女の台詞「親の留主なかに」(No.54)が「親ノ留主ナカヒ」となっている。

若松の台詞「自由ならぬていふすに」(No.60)が「自由ナランテ云スヤ」となっている。

若松の台詞「若松とやゆる」(No.64)が「ドヤヨル」となっている。

若松の台詞「みやたり事あてと」(No.65)が「メヤデリ毎アテル」



となっている。

干瀬節の歌詞「冬の夜のよすか／互にかたやへら」(No.76・77)が「冬ノ夜ドヨスガ／互ニ語ラ」となっている。

女の台詞「まれの御行合さらめ」(No.)が「稀ノ御行合定ミ」となっている。

女の台詞「御縁さらめ」(No.)が「御縁定ミ」となっている。

若松の台詞「夜明しら雲」(No.100)が「夜明白雲ノ」となっている。

女の台詞「おとこ生れても」(No.117)が「男ク生トテ」となっている。

若松の台詞「地獄たひもの」(No.125)が「地国サラミ」となっている。

干瀬節の歌詞「かねてからしらは」(No.128)が「兼テドンシラバ」となっている。

干瀬節の歌詞「のよて悪縁の」(No.129)が「ノヨ悪縁ノ」となっている。

若松の台詞「やてといきゆる」(No.135)が「アテド行ル」となっている。

若松の台詞「露の身の命ち」(No.145)が「露ノ身命」となっている。

座主の台詞「こねや夜ふかさに／童へ声のあすか」(No.148・149)が「ニニヤ夜深ニ／童声ノアスヤ」となっている。

若松の台詞「あとから追つけて」(No.158)が「跡トカラ追テ」となっている。

若松の台詞「露の命ちを」(No.159)が「露ノ身命チ」となっている。

若松の台詞「行末吉の」(No.161)が「行末添吉ノ」となっている。

座主の台詞「あゝ一だひんな事よ」(No.168)が「一大事ナ事ヨ」となっている。

若松の台詞「慈悲よわか命ち」(No.185)が「是非ニ我カ命チ」となっている。

座主の台詞「花の顔かくち」(No.189)が「花ノウモカヲノ」となっている。

座主の台詞「あけて開鐘かねの」(No.194)が「アケテ開鐘ノ」となっている。

座主の台詞「番のしめさしやう」(No.200)が「番テシミサシヤウ」となっている。

座主の台詞「花盛り女」(No.209)が「女花サカリ」となっている。

座主の台詞「人とまひてきゆん」(No.210)が「人トマヒテク  
ラバ」となっている。

座主の台詞「禁止よ此寺や」(No.211)が「禁止ド此御寺」とな  
っている。

小僧一の台詞「やかれよも座主か」(No.221)が「族ラモノ座主  
ガ」となっている。

小僧三の台詞「句やうつす」(No.230)が「句ヤ移ル」となっ  
ている。

七尺節の歌詞「一道ならに」(No.237)が「一道ナラナ」となっ  
ている。

小僧二の台詞「女や法度〜」(No.239)が「ハア女ハ法度」と  
なっている。

七尺節の台詞「禁止のませかきも」(No.245)が「禁止ノマシカ  
キヤ」となっている。

小僧一の台詞「女わら〜」(No.250)が「花ノ童部」となってい  
る。

女の台詞「蟻虫の類ひ」(No.260)が「蟻虫ノ数ン」となってい  
る。

女の台詞「慈悲も定めらぬ」(No.264)が「是非ヨ定ラン」とな  
っている。

小僧三の台詞「のよて寺内を」(No.281)が「ノヨデ寺内ニ」と  
なっている。

小僧三の台詞「句にひかされて」(No.288)が「句ニ引レル」と  
なっている。

小僧一の台詞「春のはな桜」(No.293)が「春ノ花ザカリ」とな  
っている。

小僧一の台詞「色清さあすか」(No.294)が「色清サアテド」と  
なっている。

小僧一の台詞「又も句まさる」(No.295)が「又ン句ニ増ル」と  
なっている。

散山節の歌詞「此世をて里や」(No.298)が「此世ヲテ里ト」と  
なっている。

散山節の歌詞「ひちゆひこかれとて」(No.300)が「一人焦リテ」  
となっている。

女の台詞「今にふしんな」(No.308)が「今ニシヂノアル」とな  
っている。

女の台詞「あの鐘よ」(No.309)が「鐘ヤ」となっている。

小僧一の台詞「きしもきしならぬ」(No.324)が「一 禁止ン聞  
チナラン」となっている。

座主の台詞「ならぬこと」(No.341)が「ナラン」となっている。

座主の台詞「祈のけらふよ」(No.343)が「イノリドケトウ」となっている。

経文部分 (No.349～358) に多少の異同が見られる。

「伊舎堂本」

冒頭の音曲「中城若松出羽金武ふし」(No.18)が「歌恩納ふし」となっている。

女の台詞「宿からんていふすや」(No.5)が「宿ならんていふす」となっている。

若松の台詞「自由ならぬていふすに」(No.60)が「自由ならぬ言すに」となっている。

音曲名「女出羽干瀬ふし」(No.73)が「歌干瀬に居鳥ふし」となっている。

干瀬節の歌詞「互にかたやへら」(No.77)が「互にかたら」となっている。

若松の台詞「しはしまちかねる」(No.99)が「しばし待兼か」となっている。

女の台詞「ならひやしらね」(No.105)が「ならひしらね」となっている。

音曲名「干瀬ふし」(No.126・136)が「歌干瀬に居鳥ふし」とな

っている。

座主の台詞「あゝ一だひんな事よ」(No.168・169)が「たい一たいんな事よ」となっている。

小僧二の台詞「あたら花盛り」(No.226)が「あたら花盛り」となっている。

小僧一の台詞「いやすすひさんな小僧」(No.232)が「いや、すすひさんな小坊」となっている。

音曲名「女道行七尺ふし」(No.233)が「歌七尺ふし」となっている。

七尺節の歌詞「露の身はやとて」(No.234)が「露の身はやとて」となっている。

小僧二の台詞「女や法度」(No.239)が「女は法度」となっている。

音曲名「七尺ふし」(No.241)が「歌七尺ふし」となっている。

女の台詞「蟻虫の類ひ」(No.262)が「あり虫のたぐひも」となっている。

女の台詞「慈悲も定めらぬ」(No.264)が「せひも定めらぬ」となっている。

小僧一・二の台詞「いや推参な小僧」(No.284・291)が「いや、すすひさんな小坊」となっている。

小僧一の台詞「又も句まざる」(No.295)が「またもにふひまたる」となっている。

音曲名「散山節」(No.297)が「歌さんやまふし」となっている。

座主の台詞「是や」(No.312)が「これは」となっている。

小僧一の台詞「留もとめならぬ」(No.325)が「とめもとらぬ」となっている。

小僧一の台詞「寺内をさかひち」(No.328)が「寺の内をさかち」となっている。

座主の台詞「法力を尽ち」(No.329)が「法力をつくし」となっている。

役名の「若松」「女」「座主」「小僧」の末尾にすべて「言」という記載がされている。

経文部分 (No.349～358) に多少の異同が見られる。

校合結果を概観すると、尚家本と異同が少ないのは「今帰仁本」「恩河本」「兼島本」である。王府の資料から書写した「組踊本」である『戯曲集』『台湾本』『新報・宮城』の三冊は尚家本との異同が確認されるが、三冊では非常に近い記載であることが、校合結果からうかがえる。「比嘉本」は異同の数は「恩河本」とあまり変わらないうが、その内容は他の「組踊本」に比べると、「比嘉本」だけにしか

見られない記載が多い。「宮良本」「伊舎堂本」は、異同が多く見られ、尚家本の系統の「組踊本」からの書写であるかは疑問が残る。

全体的に役名の部分で多くの異同が見られた。尚家本では「若松」「女」「座主」とシンプルに書かれているが、「新報・宮城」では「ことば」、『戯曲集』では「詞」、「伊舎堂本」では「言」と末尾にどちらもコトバという意味の語句が見える。また、「小僧」という記載については「兼島本」が「兄小僧」「次小僧」「三男小僧」、「台湾本」が「小僧(年長)」「小僧(中年)」「小僧(年少)」、「新報・宮城」が「年長小僧」「中年小僧」「年少小僧」、『戯曲集』が「小僧(一)」「小僧(二)」「小僧(三)」となっている、尚家本や他の「組踊本」が「小僧」とだけ記載されているのにもかかわらず、細かく役名を記している特徴が見られる。底本を含めた十冊の「組踊本」の半数以上が「小僧」とだけしか記載されておらず、多くの「組踊本」は配役が細かく分けられていなかった蓋然性が高い。今回校合を行った十冊のうち、「兼島本」を除く三冊の「組踊本」(羽地本の書写本系統の「組踊本」)は、底本が同じである可能性がある。よって底本と思われる羽地本にすでにその記載があったことも考えられるが、大正以降の書写・編集であるので、芝居小屋などで上演された舞台を意識して編集された可能性も否めない。結論から言うと、筆写本の多くは役名に続けて語句を付け加えることは少ないようである。校合か

ら得られた特徴などは次章にて検討する。

### iii 銘苺子

#### ① 作者ならびに上演の歴史

作者は玉城朝薫である。初演は一七一九年であるが、『中山伝信録』には上演の記録は見られない。演目の上演の初出は、成年の『躍方日記』に見え、申年・辰年・戌年と上演されている。申年の『躍方日記』が現存していれば、それ以前の上演も確認できたはずだが、現存していないためわからない。『中山伝信録』には演目の記述は無いが、重陽宴以降の大宴は、「禮前儀ノ如シ」と一様に記載されているため、組踊が上演された重陽宴と同様の芸能内容である事が推測できる。

#### ② 内容について

「銘苺子」の物語の背景にあるものは天人女房譚である。琉球で有名なのは『中山世鑑』『中山世譜』に見える、察度王の父にあたる奥間大親の物語や、『球陽』にみえる「安謝邑の茗苺子」の物語である。また、尚真王の夫人の一人が「茗苺子之女」であることから、元々の物語は近世の琉球士族、特に王家に近いものであれば知っていた物語であろう。池宮は朝薫が「銘苺子」を作った背景には、朝

薫と一緒に徳川家宣の慶賀使として一七一〇年に上江した、湧川親方朝略が関係している事を指摘している<sup>(注七五)</sup>。物語の茗苺子の娘は、「尚氏朝易に嫁す」と記され、向氏見里王子朝易の家譜の「室」のところには、「其母乃茗苺子遇天女為夫婦而所生者也<sup>(注七六)</sup>」と記載されている。朝略は朝易の九世の孫(向氏涌川家十一世)にあたり、またその子の朝喬は、一七三八年、銘苺子祠を改修している<sup>(注七七)</sup>。このように、琉球には天女の子孫、言い換えれば銘苺子の子孫が実在しており、朝薫は能の「羽衣」を翻案しながらも、内容は身近にある琉球の天女伝説、とくに自身と関わりの深い物語を劇化したと思われる。

#### ③ 底本と対校本について

「銘苺子」第一次対校本：恩河本小祿御殿本組踊集（以下「恩河本」・兼島信備所蔵本（以下「兼島本」）・琉球新報（明治四十年）（以下「新報」）・台湾本琉歌大観（以下「台湾本」）・琉球新報（大正十四年）宮城真治資料（以下「新報・宮城」）・校注琉球戯曲集（以下『戯曲集』）・東京教育大学所蔵本（以下「教育大」）・豊川家所蔵本（以下「豊川本」）・伊舎堂用八所蔵本（以下「伊舎堂本」）

「銘苺子」は「執心鐘入」と同じく、「羽地本」系の「組踊本」が多く残っている。「台湾本」「新報・宮城」「戯曲集」には着付けと配

役が記されており、登退場のト書きも見られる。また、「新報」には着付などは記載されていないが、掲載したのは「物外」、すなわち伊波普猷である。したがってこのテキストも羽地本を使用した可能性が考えられる。その他、写本は五冊残っており、そのうち「豊川本」「伊舎堂本」は八重山に残っている「組踊本」である。校合としては『尚家本』と「羽地本」系の「組踊本」、それ以外の「組踊本」の特徴がどのようなか、というところである。

#### ④校合結果

『尚家本』にみられて対校本にみられない記載のうち、対校本に共通して見られないものは、着付(No.11～16)である。この記載は、「恩河本」「新報」「教育大本」「豊川本」「伊舎堂本」の五冊で記載が見られない。また、「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』では記載があるが、内容が『尚家本』と異なる。それ以外の部分は数冊わたって共通してみられるのは見られなかった。また、「台湾本」は『尚家本』に見られて対校本に見られない記載はなかった。

次に、尚家本に見られ、対校本に見られない記載を「組踊本」ごとに挙げる。

「恩河本」

前掲の「着付」(No.11～16)のみ。

「兼島本」

前掲の「着付」(No.11～16)・役名の「天女」(No.68・210・214) 思けひの台詞「〜」(No.238)・思なひ思けひ両人の台詞「思姉思けひ／やあ母親よ／〜」(No.242～244)・思けひの台詞「やあ思なひよ／母親やあれよ〜」(No.247・248)・思けひの台詞「〜」(No.256)・音曲(東江節)「母見らぬ」(No.271)・思けひの台詞「やあ思なひよ／〜」(No.354・355)・銘苅子の台詞「あまおりしやる女」(No.404)。

「新報」

前掲の「着付」(No.11～16)・上使の台詞「御取立めしやいん」(No.477)。

『戯曲集』

子持節の歌詞「夜もくれていきゆひ／足本もやめは」(No.399・340)・上使の台詞「御素立よめしやいん」(No.478)。

「教育大本」

前掲の「着付」(No.11～16)・遊子持節の歌詞「おきざるししちやうん」(No.146)・天女の台詞「やあなし子／急ちねれよ〜」(No.211・212)・思けひの台詞「〜」(No.353)・思なひの台詞「やあ父親よ」(No.426)・思なひの台詞「思尽ちをても／此世をて母に／また拝むことの／ならぬてよやれは／いきやし

暮しやしゅゝか／思けひと我身や」(No.431～436)・役名「銘荊子」(No.438)・銘荊子の台詞「い言葉にわぬも／面影のまさて／うらめてもきやしゆか／我肝さらめ」(No.439～442)。

「豊川本」

役名「銘荊子」(No.19)・役名「思けひ」(No.253)・思けひの台詞「おめなひや急ち／戻よりはもとれ／わ身や母とまひて／いかんしゆもの」(No.296～299)・思なひの台詞「やあ思けひよ／母やしら雲の／かくち自由ならぬ明日や(押)列て／互にとまいらけふや急ち立(戻)て／父にかたら／てかよゝ」(No.301～308)・子持節(No.316～342)・役名「思なひ」(No.343)・思なひの台詞「やあ思けひよ／此間のつかれ／足もひかれらぬ／日本くらゝと／なるかしんき」(No.344～348)・役名「思けひ」(No.349)・思けひの台詞「やあ思なひよ／足まろひするな／急ち立おけれ／／／やあ思なひよ／／／のかす思なひや／ものい声もすらぬ」(No.350～357)・銘荊子の台詞「五ツ頃をひけひ／十にたらぬ姉／母に捨られて／別れやひをれば」(No.363～366)・思けひの台詞「すたし母親や／とまいればもをらぬ／おめなひとわ身や／いきやかしゆゝら」(No.392～395)・銘荊子の台詞「たによ聞留れ／けふからや明日からや／母の事思て／泣よ又するな」(No.398～401)・「天登てからや」(No.406)・「な

らぬ事思て／泣くらちをすや」(No.409・410)・「思けひよすかち／互におひたちやひ／首里みやたりしゆすと／按司みやたりしゆすと／子の道たいもの／親の為やこと／たによき／留て／肝に思染て」(No.413～420)・「母呼ひなぐな」(No.423)・思なひの台詞「思尽ちをても／此世をて母に／また拜むことの／ならぬてよやれば／いきやし暮しやしゅゝか」(No.431～435)・銘荊子の台詞「い言葉にわぬも／面影のまさて／うらめてもきやしゆか／我肝さらめ」(No.439～442)・上使の台詞「御取立めしやいん／御素立よめしやいん」(No.477・478)・「銘荊子かなし子／母にすてられて／朝夕親とまひて」(No.498～500)・「取沙汰のあとと」(No.504)・「なし子思鶴や／御城の内に／御素立よめしやいん」(No.510～512)・「御素御取立めしやいん」(No.515)・「首里のお多か／たへめしやいんてやりの」(No.520・521)・銘荊子の台詞「夢やちやうもむたぬ／もゝかほとつきやる／やあなし子／みすく聞拜め」(No.525～528)・「胸に思染れ／肝に思留て／けふからや明日からや／打笑て遊へ／うちほこて遊へ」(No.535～539)・「たう／／かほ事とやゆる／すてことよたひもの／押列て宿に／踊て戻ら」(No.549～553)・最後の音曲の立雲節「立雲ふし／夢やちやうもむたぬ／百かほのつきやす／あの松と川の／ゆへとやゆる／同ふし／百かほのあれば／あの松

と川や／むかしくりもち／見ほしやはかり」(No.554～563)  
「伊舎堂本」

前掲の「着付」(No.11～16)、銘苺子の台詞「まちとめてむたに」(No.39)、役名「天女」(No.120)、最後の音曲の立雲節「同ふし／百かほのあれば／あの松と川や／むかしくりもち／見ほしやはかり」(No.559～563)。

対校本にみられて『尚家本』にみられない記載のうち、各本に共通して見られたものは役名の「思けひ」(No.263)が対校本すべてに見られた。また同じく役名の「思なひ」(No.300)は「豊川本」を除く八冊に見られた。役名の「思けひ」(No.246)は、「豊川本」「兼島本」を除く七冊に見られた。次に多いのは天女の台詞と同じ歌詞で歌われる東江節「天女／寝なしちゆる内に／別れらな如何しゆが／うぞて百すがり／すがるとめば」(No.230～234)である。『尚家本』では「天女言葉并東江ふし」(No.224)として、天女の台詞と東江節をまとめて記載しているが、「新報」「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』の四冊では、台詞と東江節を別々に記載している。

次に、各「組踊本」ごとに『尚家本』に見られない記載を挙げる。  
「恩河本」

前掲の役名(No.246・263・300)、「組踊本」の最後の「銘苺子

終／桃原村 恩河朝祐」(No.564・565)。  
「兼島本」

前掲の役名(No.263・300)、役名の「上使」(No.543)「組踊本」の最後の「銘苺子終」(No.564)  
「新報」

前掲の役名(No.246・263・300)、前掲の東江節(No.230～234)、解説(No.4)、ト書き「第一幕」(No.18)、ト書き「第二幕」(No.119)、ト書き「第三幕」(No.311)、ト書き「(この管絃楽の調べと共に天女現る)」(No.45)、ト書き「この曲の賑ひにつれて天女羽衣を松が枝にかけて髪を洗ふ帰らんとする一刹那農夫がその羽衣を盗み去るを見てあはたゞしく」(No.56)、ト書き「銘苺子天女を携へて家に帰る」(No.114)、タイトル「〇組踊 銘苺子」(No.115・309)、ト書き「物外」(No.116)、ト書き「(天女子等の寝たる後愁然として独語)」(No.213)、ト書き「(この悲しき曲と共に高き松を通りて雲中に入り遙かに子等を見おろし涙に咽びて顔を拵ひ)」(No.229)、ト書き「(五歳の亀千代目覚めて起き上り四辺を見廻はしつゝ母の居らざるを見て)」(No.235)、ト書き「(と泣き叫ぶ、暫くありて亀千代母の雲中にあるを見)」(No.245)、ト書き「(と切なる情に胸迫る)」(No.262)、ト書き「(この時曲人の悲しき調べ)」(No.268)、ト書き「(慢に



哀れなる管絃楽にて幕明く」(No.312)´ト書き「(二人母の昇天せし処にて座して相抱いて泣く)」(No.358)。

「台湾本」

前掲の役名 (No.246・263・300)´前掲の東江節 (No.230～234)´配役 (No.5～9)´「演技者の服装其他」(No.10)´ト書き「第一幕」(No.18)´ト書き「第二幕」(No.119)´ト書き「第三幕」(No.311)´頭注 (No.235・358)。

「新報・宮城」

前掲の役名 (No.246・263・300)´前掲の東江節 (No.230～234)´解説 (No.4)´配役 (No.5～9)´「演技者の服装」(No.10)´タイトル (No.17・167・315・491)´ト書き「第一幕」(No.18)´ト書き「第二幕」(No.119)´ト書き「第三幕」(No.311)´天女の台詞「「天女」／今日のよかる日や／しちやの目もないらぬ／心安々と／洗つてのほら」(No.46～50)´ト書き「(附り橋掛に入る)」(No.117)´役名「思鶴」(附り母しに姉弟手を取りて出場)」(No.314)´解説 (No.235・358)´ト書き「(附り)二人の児の有様を見て同じく苦しむ)」(No.360)´役名「上使出羽」(附り大鼓拍子一段取り出づ橋掛より)」(No.447)´「組踊本」の最後「(をわり)」(No.564)。

『戯曲集』

前掲の役名 (No.246・263・300)´前掲の東江節 (No.230～234)´ト書き「銘苺子 拍子木一段取俟而銘苺子出る」(No.1)´配役 (No.5～9)´ト書き「\* \* \*」(No.118・157・310)。

「教育大本」

前掲の役名 (No.246・263・300)´役名「全人」(No.239)´末尾に、「組踊本」中に書き漏らし、後に挿入しようとした台詞 (No.564～580)。

「豊川本」

前掲の役名 (No.263)´遊子持節の歌詞「百隠ち隠し」(No.114)´役名「天女」(No.192・204)´天女の台詞「やあなし子／いそち寝りよ〜」(No.205・206)´思けひの台詞「やあ母親よ」(No.264)´思なひと思けひの台詞 (No.278～294)´銘苺子の台詞「玉こかね二人／母の事思し」(No.367・368)´「そかそわん鳴ん／朝夕さんし【欠】」(No.371・372)´役名「銘苺子」(No.383)´銘苺子の台詞「いま居【欠】」(No.386)´思けひの台詞「思なひ【欠】あまに／ねな【欠】らん」(No.390・391)´銘苺子の台詞「たう／いそち戻ら」(No.424)´思なひの台詞「母親の事や／世界の人あらん／白雲のかくち／自由ならん有は」(No.427～430)´「こちやかしよら」(No.437)´銘苺子の台詞「なし子云葉に／わ身む母親の／面影のまやい／わすりくれしや」(No.443～446)´上

使の台詞「なし[欠]り捨て／白雲に登り／なし子思つると／嫡子亀千代や／た[欠]わなち／朝夕鳴くらち居[欠]」(No.465～469)、「世の始や[欠]」(No.471)、「やあ銘荊子／なし子思鶴と／かめ十か事や」(No.495～497)、「御によかて」(No.503)、「銘荊子や／首里の御位／たへ免やん」(No.507～509)、「又娘思鶴や／御城の内に」(No.517・518)、「銘荊子の台詞「やあなし子／今日の哮らしや／者に立らり[欠]／互に押烈て／[欠]て遊ぶ」(No.544～548)、「今日の哮ら[欠]」／「[欠]」／「[欠]」おる花の／露きやたくと」(No.581～584)、「配役「天女 義村里之子／銘荊子 識名親雲上／思ない 美里真三郎／首里御使 東風平里之子／思けい 幸地思武太」(No.585～589)。

「伊舎堂本」

前掲の役名 (No.246・263・300)、「役名「天女」(No.204)、「天女の台詞「やあなし子／急ちねれよ〜」(No.205・206)。

次に、『尚家本』と対校本の記載が異なる部分について挙げる。

各対校本に共通してみられる異同は、『尚家本』の銘荊子の台詞「けふのよかるに」(No.34)が「今日の吉る日に」となっている。これは対校本すべてで同じ記載となっている。次に多いのは上使の台詞「御素御取立めしやいん」(No.515)が「おの御取立めしやいん」と

なっている。これは「豊川本」を除く八冊で同じ記載であった。また、音曲の早作田節の記載 (No.51)が「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」となっているのに対し、「兼島本」だけは「天女言バ早作田節」として、台詞を述べ、音曲が歌われる記載になっている。ほかは、欠落している「教育大本」を除くすべての「組踊本」で節名だけの記載となっている。

その次に多い異同は、思けひの台詞「ものい声もすらぬ」(No.357)が「物言声もないらぬ」となっている。これは「豊川本」「伊舎堂本」を除く七冊で共通している。また、上使の台詞「取沙汰のあてと」が「台湾本」「豊川本」以外の七冊で「取沙汰のあて」となっている。東江節の歌詞「母見らぬ」(No.271)が「兼島本」「台湾本」を除く七冊で「母や見らぬ」となっている。

次に多いのは銘荊子の台詞「天の引合よ」(No.108)に対して、「恩河本」「兼島本」「台湾本」「新報・宮城」『戯曲集』の五冊の「組踊本」では台詞の前に「はあ」、もしくは「あゝ」という感嘆詞が記載されている。

次に、「組踊本」(とくに『尚家本』)との異同箇所を挙げる。

「恩河本」

銘荊子の台詞「天と地に光り」(No.26)が「天と地ノ光リ」となっている。

天女の台詞「いきやる事あ<sup>と</sup>て」(No.56)が「イチヤル事ヤトテ」となっている。

天女の言葉「羽衣を<sup>と</sup>やひ」(No.61)が「羽衣トヤエ」となっている。

銘苅子の台詞「互にそ<sup>は</sup>に」(No.79)が「互ニ吸ニ」となっている。

遊子持節の歌詞「なくな<sup>やう</sup>」(No.137)が「ナクナ」となっている。

遊子持節の歌詞「ねなし起て啼<sup>な</sup>やう」(No.147)が「子ナシ起テ鳴ナ」となっている。

遊子持節の歌詞「なかならはくひゆん<sup>たう</sup>」(No.158)が「ナカナレバ呉ン」となっている。

遊子持節の歌詞「遊ははとくひゆん<sup>たう</sup>」(No.149)が「遊バト呉ン」となっている。

天女の台詞「なし子<sup>い</sup>言葉<sup>に</sup>」(No.174)が「産子言葉ニ」となっている。

天女の台詞「此事よ<sup>し</sup>らは」(No.185)が「此事知バ」となっている。

天女の台詞「急ちね<sup>れ</sup>よ<sup>く</sup>」(No.212)が「急チ子レヨ急チノ<sup>く</sup>」となっている。

思けひの台詞「母<sup>や</sup>を<sup>ら</sup>ぬ」(No.241)が「母ヤヲラン<sup>く</sup>」となっている。

思けひと思なひ両人の台詞「やあ母親よ<sup>く</sup>」(No.243・244)が「ヤア母親ヨ<sup>く</sup>」となっている。

思けひの台詞「母親<sup>や</sup>あれよ<sup>く</sup>」(No.248)が「母ヤアリヨ<sup>く</sup>」となっている。

思なひの台詞「まかひ<sup>い</sup>きゆ<sup>か</sup>」(No.252)が「マカイマイガ」となっている。

天女の台詞「是きやてよ<sup>と</sup>め<sup>は</sup>」(No.258)が「是ギヤデヨトメレ」となっている。

東江節の歌詞「あけやうお<sup>め</sup>けよ」(No.270)が「アケヤウ思ケイ」となっている。

子持節の歌詞「す<sup>か</sup>ら<sup>て</sup>も<sup>苦</sup>し<sup>や</sup>」(No.330)が「スガラリンクリシヤ。」となっている。

子持節の歌詞「こ<sup>か</sup>と<sup>き</sup>や<sup>て</sup>と<sup>ま</sup>ひ<sup>て</sup>」(No.335)が「コガトキウテトマイテ」となっている。

子持節の歌詞「ひ<sup>き</sup>ゆる<sup>足</sup>ひ<sup>か</sup>ら<sup>ぬ</sup>」(No.341)が「引ユル足引リラン」となっている。

思なひ「いきやし暮しやしゆ<sup>か</sup>」(No.435)が「イキヤシコロシヤビガ」となっている。

銘苺子の台詞「胸に思染れ」(No.535)が「胸ニ思染テ」となっている。

「兼島本」

銘苺子の台詞「天と地に光り」(No.26)が「天ト地ノ光リ」となっている。

銘苺子の台詞「しちやの髪ならぬ」(No.33)が「シギヤノ髪アラ  
ン」となっている。

早作田節の歌詞「こころやすくと」(No.54)が「涼々ト頭ヲ」  
となっている。

天女の台詞「いきやる事あとて」(No.59)が「如何ル事ヤトテ」  
となっている。

銘苺子の台詞「かけておちあか」(No.67)が「掛テ置ユガ」とな  
っている。

天女の台詞「ふやはちとめたる」(No.71)が「振合ト見キヤル」  
となっている。

銘苺子の台詞「互にそはに」(No.79)が「互ニ吸ワニ」となっ  
ている。

銘苺子の台詞「神の引合しよ」(No.109)が「神ノ御助カ」とな  
っている。

天女の台詞「あまおりしちわ身や」(No.121)が「天下リシ我身  
ヤ」となっている。

遊子持節の歌詞「六俣の蔵に／八俣の内に／稲束のしたに／粟  
束のうちに／置ふるみしちやうん／おきさるししちやうん」(No.  
140～146)の末尾に「ヤウ」という囃子が付いている。

天女の台詞「互になれそめて」(No.163)が「互ニ押レ染テ」と  
なっている。

天女の台詞「姉のとしよめは」(No.165)が「兄ノ歳ヨメバ」と  
なっている。

天女の台詞「をひけひとしことし」(No.168)が「ライケ歳ヨメ  
バ」となっている。

天女の台詞「五ツいつきやても」(No.169)が「五ツイツヂヤラ  
ン」となっている。

天女の台詞「飛衣やなひらぬ」(No.172)が「飛衣や取ラリ」と  
なっている。

天女の台詞「此事よしらは」(No.185)が「此事知ラバ」となっ  
ている。

天女の台詞「おしつれて遊は」(No.195)が「押列テ遊ビ」とな  
っている。

思なひの台詞(No.198～203)が思けひの台詞になっている。

思けひの台詞 (No.207～209) が思なひの台詞になっている。  
天女の台詞 (No.211～212) が思なひの台詞になっている。  
天女の台詞 (No.215～218) が思なひの台詞になっている。  
天女の台詞「ねなしちをるうちに」(No.225) が「寝ナシチュル内ニ」となっている。  
思けひの台詞「母やをらぬ」が「母ヤ居ラン〜」(No.241) となっている。  
思なひの台詞「まかひいきゆか」(No.252) が「マカイ行メガ」となっている。  
思けひの台詞「やあ母親よ」(No.255) が「ヤア母親」となっている。  
「子持ふし」(No.316) が「長子持節」となっている。  
子持節の歌詞「すからても苦しや」(No.330) が「スガラレノ苦シヤ」となっている。  
子持節の歌詞「夜もくれていきゆひ」(No.339) が「夜ン暮レテ行ン」となっている。  
子持節の歌詞「足本もやめは」(No.340) が「足本ンヤニヨイ」となっている。  
子持節の歌詞「ひきゆる足ひからぬ」(No.341) が「足ン引カレラン」となっている。

思けひの台詞 (No.388・389) が思なひの台詞になっている。  
思けひの台詞 (No.392～395) が思なひの台詞になっている。  
銘苅子の台詞「天登てからや」(No.406) が「天マ登リテカラヤ」となっている。  
思なひの台詞「此世をて母に」(No.432) が「此世居テ母ノ」となっている。  
思なひの台詞「また拝むことの」(No.433) が「又拝ム事」となっている。  
思なひの台詞「いきやし暮しやしゆゝか」(No.435) が「如何シ暮ラシヤビガ」となっている。  
上使の台詞「思けひや」(No.475) が「嫡子亀千代ヤ」となっている。  
上使の台詞「やあ〜銘苅し」(No.489) が「ヤア銘苅子、」となっている。  
銘苅子の台詞「胸に思染れ」(No.536) が「胸ニ思染テ」となっている。  
銘苅子の台詞 (No.549～553) が上使の台詞になっている。  
立雲節の歌詞「百かほのつきやす」(No.556) が「百果報ド着ヤル」となっている。

「新報」

「はるのゆつきやひに」(No.23)が「原の往来に」となっている。

「あの松を見れば」(No.24)が「あの松よ見れば」となっている。

「あの川の本に」(No.25)が「あの山井の辺に」となっている。

「天と地に光り」(No.26)が「天と地の光」となっている。

「通水ふし」(No.40)が「歌」となっている。

「かしらあらは」(No.44)が「髪洗らは(通ひ水ぶし)」となっ

ている。

「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」(No.52)が「歌」と

なっている。

「あらてのほら」(No.55)が「洗て昇ら(早作田ぶし)」となっ

ている。

「いきやる事あとして」(No.59)が「如何る事やとて」となってい

る。

「羽衣をとやひ」(No.61)が「羽衣取り」となっている。

「のよてはころもを」(No.67)が「のよで羽衣」となっている。

「ぶやはちとめたる」(No.71)が「振合ちと茂たる」となってい

る。

「やあ思鶴よ」(No.125)が「やヤ思鶴よ」となっている。

「思なひ」(No.130)が「姉思鶴」となっている。以下、すべての「思なひ」の記載はこの「姉思鶴」もしくは「思鶴」となっている。

「遊子持ふし」(No.135)が「子守歌」となっている。

「置ふるみしちやうん」(No.145)が「置き古みしちよん」とな

っている。

「なかならはくひゆんたう」(No.148)が「泣かなれば呉ゆんだ

う」となっている。

「遊ははとくひゆんたう」(No.149)が「遊ばはど呉ゆんたう(子

持ぶし)」となっている。

「なし子い言葉に」(No.174)が「産子言葉に」となっている。

「とひのやひいかに」(No.183)が「乗やり行かに」となってい

る。

「やあやあなし子」(No.193)が「ヤア産子」となっている。

「思けひ」(No.207)が「弟亀千代」となっている。以下、すべ

ての「思けひ」の記載が「弟亀千代」もしくは「亀千代」とな

っている。

「東江ふし」(No.219)が「歌」となっている。

「なし子ふやかれて」(No.220)が「産子別かれて」となってい

る。

「なきゆらとめは」(No.223)が「泣きゆらとめば(東江ぶし)」  
となっている。

「天女言葉并東江ぶし」(No.224)が「歌」となっている。

「ねなしちをるうちに」(No.225)が「寝なしちゆる内に」とな  
っている。

「すかるとめは」(No.228)が「すがるとめば(東江ぶし)」とな  
っている。

「思姉思けひ」(No.242)が「子二人」となっている。

「〜」(No.244)が「やア母親よ」となっている。

「母親やあれよ〜」(No.248)が「母やあれよ〜」となっ  
ている。

「まかひいきゆか」(No.252)が「まかいいまいが」となっ  
ている。

「東江ぶし」(No.269)が「歌」となっている。

「あけやうおめけよ」(No.270)が「あけやう思弟」となっ  
ている。

「母見らぬ」(No.271)が「母や見らぬ(東江ぶし)」となっ  
ている。

「互に立戻て」(No.275)が「直に立ち戻て」となっている。

「子持ぶし」(No.316)が「歌」となっている。

「十にたらぬうちに」(No.319)が「十に足らぬ」となっている。  
「すからても苦しや」(No.330)が「すがられの苦しや」とな  
っている。

「こかときやとまひて」(No.335)が「遠方来ゆて求いて」と  
なっている。

「ひきゆる足ひからぬ」(No.341)が「引ゆる足引れらぬ」とな  
っている。

「肝くれていきゆん」(No.342)が「肝暮れて行きゆん(子持ぶ  
し)」となっている。

「ものい声もすらぬ」(No.357)が「物言声も無いらぬ」とな  
っている。

「あの川の本に」(No.374)が「あの井戸の辺に」となっている。  
「夜も暮て行ん」(No.385)が「夜も暮れて行きゆり」となっ  
ている。

「いきやし暮しやしゆゝか」(No.435)が「如何し暮しやべが」  
となっている。

「取沙汰のあれは」(No.470)が「取沙汰よあれば」となっ  
ている。

「このみよんき拝て」(No.482)が「此の勅命拜で」となっ  
ている。

「高松の本も」(No.484)が「高松の下も」となっている。

「同人」(No.488)が「上使」となっている。

「やあ／＼銘苳し」(No.489)が「やア銘苳子」となっている。

「取沙汰のあてと」(No.504)が「取沙汰の有とて」となっている。

「なし子思鶴や」(No.510)が「思鶴や」となっている。

「御素御取立めしやいん」(No.515)が「おの御取立召ん」となっている。

「立雲ふし」(No.554)が「歌」となっている。

「ゆへとやゆる」(No.558)が「故どやゆる(立雲ぶし)」となっている。

「見ほしやはかり」(No.563)が「見欲しやばかり(立雲ぶし)」となっている。

「台湾本」

「銘苳子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳足袋扇子」(No.11)

が「銘苳子／髪金入錦入道頭巾 水色絵垣紗綾袷衣裳 足袋扇子持」となっている。

「天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨之柄杓」(No.12)が「天女／垂髪紫長巾 金銀水引熨

斗紙差 天冠琉縫薄衣裳 飛衣緋紗綾 足袋 金銀薄磨の柄杓持」となっている。

「娘作花巾無(垂力)時服<sup>同</sup>衣ひさ取裙足袋」(No.13)が「娘(思鶴)／髪作花差 巾無時服<sup>同</sup>衣裏緋紗綾 ひざ取裙緋ざや 足袋」となっている。

「男子はあゆひかしらい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物こほすい足袋」(No.14)が「男子(亀千代)／はあよひかしらへ金銀水引差 絹布緒付小袖単衣裳 緞子貫物子ぼすい 緋さや足袋」となっている。

「上使繻子入道頭巾緞子衣裳錦之陳羽織末広足袋」(No.15)が「上使／黒繻子入道頭巾 緞子衣裳 錦陳羽織 末広持 足袋」となっている。

「供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳

足袋」(No.16)が「供(従者のこと)／黒縮緬入道頭巾 黒さや袷衣裳 足袋」となっている。

「銘苳子」(No.19)が「銘苳子(橋掛より出づ)」となっている。「けふのよかるに」(No.25)が「けふのよかる日に」となっている。

「通水ふし」(No.30)が「歌 通水ぶし(橋掛より出づ)」となっている。



「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」(No.92)が「歌 早作田節」となっている。

「かけておちあか」(No.67)が「かけておきゆか」となっている。

「無理やあらぬ」(No.74)が「無理やあらぬ」となっている。

「無蔵と縁むすて」(No.78)が「無蔵縁むすて」となっている。

「銘苺子」(No.107)が「銘苺子(橋掛に入る)」となっている。

「天の引合よ」(No.108)が「はあ、天の引合よ」となっている。

「天女」(No.120)が「天女(橋掛より出づ)」となっている。

「あまおりしちわ身や」(No.121)が「あまりしちわ身や」となっている。

「思なひ」(No.130)が「思鶴(娘)」となっている。

「遊子持ふし」(No.135)が「歌 遊ひ子持ぶし」となっている。

「ねなし起て啼なやう」(No.147)が「寝なし起きてなくな」となっている。

「なかならほくひゆんたう」(No.148)が「なかなればくいよん」となっている。

「思なひ」(No.150)が「思鶴(橋掛に入る)」となっている。

「天女」(No.158)が「天女(橋掛より出づ)」となっている。

「姉のとしよめは」(No.165)が「姉(おみなひ)の年よめは」となっている。

「やあやあなし子」(No.183)が「やあなし子」となっている。

「思なひ」(No.198)が「思鶴」となっている。他四例。

「思けひ」(No.207)が「亀千代(男子)」となっている。

「東江ふし」(No.219)が「歌 東江ぶし」となっている。

「天女言葉并東江ふし」(No.224)が「同歌ぶし」となっている。

「ねなしちをるうちこ」(No.225)が「寝なしちゆる」となっている。

「思けひ」(No.236)が「亀千代」となっている。他四例。

「思姉思けひ」(No.242)が「思鶴亀千代二人」となっている。

「まかひいきゆか」(No.252)が「まかいいまい」となっている。

「東江ふし」(No.269)が「歌 東江ぶし」となっている。

「あけやうおめけよ」(No.270)が「あけやうおみけいよ」となっている。

「わ身や母とまひて」(No.298)が「我身や母とまひ」となっている。

「子持ふし」(No.316)が「歌 子持ぶし」となっている。

「ものい声もすらぬ」(No.357)が「物言声もないらぬ」となっている。

「やあ／＼なし子」(No.384)が「やあ産子」となっている。

「いきやし暮しやしゆゝか」(No.435)が「いきやし暮しやべが」となっている。

「上使」(No.448)が「上使(笛大鼓拍子一段取り出づ橋掛より)」となっている。

「取沙汰のあれは」(No.470)が「取沙汰よあれは」となっている。

「御素御取立めしやいん」(No.515)が「おの御取立みしやいん」となっている。

「胸に思染れ」(No.535)が「肝に思染て」となっている。

「立雲ふし」(No.554)が「歌 立雲ふし(橋掛へ入る)」となっている。

「同ふし」(No.559)が「同」となっている。

#### 「新報・宮城」

「銘苺子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳足袋扇子」(No.11)が「銘苺子／髪金入錦入道頭巾。水色絵垣紗綾袷衣裳。足袋。扇子持」となっている。

「天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨之柄杓」(No.12)が「天女／垂髪紫長巾。金銀水引熨斗紙差。天冠琉縫薄衣裳。飛衣緋紗綾。足袋。金銀薄磨の柄杓

を持つ」となっている。

「娘作花巾無(垂力)時服時服衣ひさ取裙足袋」(No.13)が「娘思鶴／髪作花差。巾無時。服どう衣裏緋紗綾。膝取りかゝん緋紗綾。足袋」となっている。

「男子はあゆひかしらい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物こほすい足袋」(No.14)が「男子亀千代／はあよひ頭へ。金銀水引差。絹布緒付小袖単衣裳。どん子貫物子ぼすい。緋紗綾足袋」となっている。

「上使縹子入道頭巾緞子衣裳錦之陳羽織末広足袋」(No.15)が「上使／黒縹子入道頭巾。どん子衣裳。錦陳羽織。末広持」となっている。

「供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳足袋」(No.16)が「供／黒縮緬入道頭巾。黒紗や袷衣裳。足袋」となっている。  
「銘苺子」(No.19)が「『銘苺子出羽』(附り橋掛より笛太鼓にて出場)」となっている。

「あの松尾見れば(尾は変体仮名と捉える)」(No.24)が「あの松よ見れば」となっている。

「天と地に光り」(No.26)が「天と地の光」となっている。  
「けふのよかるに」(No.35)が「今日のよかる日に」となっている。

「通水ふし」(No.40)が『天女出羽』歌(通水節)／(附り橋掛より出場)」となっている。

「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」(No.52)が「歌(早作田節)」となっている。

「天女」(No.52)が『天女』となっている。他七例。

「まかひいきゆか」(No.62)が「まあかひいまいか」となっている。

「銘苳し」(No.63)が『銘苳子』となっている。他九例。

「にや又自由ならぬ」(No.105)が「にや又自由ならぬ」となっている。

「天の引合よ」(No.108)が「はあ天の引合よ」となっている。

「天女」(No.120)が『天女』(附り橋掛より出場)」となっている。

「思なひ」(No.130)が『思鶴』となっている。他七例。

「遊子持ふし」(No.135)が「歌(あそび子持節)」となっている。

「ねなし起て啼なやう」(No.147)が「寝なし起きてなくな」となっている。

「なかならはくひゆんたう」(No.148)が「泣なれはくいよん」となっている。

「天女」(No.158)が『天女』(附り橋掛より出場)」となっている。

る。

「姉」としよめは」(No.165)が「おみないの年よめは」となっている。

「やあやあなし子」(No.193)が「やあ産子」となっている。

「思けひ」(No.207)が『亀千代』となっている。他五例。

「東江ふし」(No.219)が「歌(東江ぶし)」となっている。

「天女言葉并東江ふし」(No.224)が『天女』となっている。

「母やをらぬ」(No.241)が「母や居らぬをらぬ」となっている。

「思姉思けひ」(No.242)が『思鶴亀千代』となっている。

「まかひいきゆか」(No.252)が「まかいまいか」となっている。

「なし子ふやかれの」(No.260)が「産子ふやかれて」となっている。

「東江ふし」(No.269)が「歌(東江ぶし)」となっている。

「あけやうおめけよ」(No.270)が「あけやう思けいよ」となっている。

「母見らぬ」(No.271)が「母やみらぬ」となっている。

「けふや急ち立(戻)て」(No.306)が「今日や立戻て」となっている。

「子持ふし」(No.316)が「歌(子持ぶし)」となっている。

「十にたらぬうちに」(No.319)が「十にならぬ内に」となっている。

「すからても苦しや」(No.330)が「すがられのくれしや」となっている。

「ものい声もすらぬ」(No.357)が「物言声もないらぬ」となっている。

「夜も暮て行ん」(No.385)が「夜も暮ていきやゆん」となっている。

「いそちたちもとれ」(No.387)が「急き立ちもとら」となっている。

「いきやし暮しやしゆゝか」(No.435)が「いきやす暮しやへか」となっている。

「上使」(No.448)が『上使』となっている。他一例。

「取沙汰のあれは」(No.470)が「取沙汰よあれは」となっている。

「首里の御位」(No.480)が「首里御位」となっている。

「同人」(No.488)が『上使』となっている。

「取沙汰のあてと」(No.504)が「取沙汰のあて」となっている。

「御素御取立めしやいん」(No.515)が「おの御取立みしやいん」

となっている。

「首里のおゑか」(No.520)が「首里の親方へ」となっている。  
「たへめしやいんてやりの」(No.521)が「召しやいんてやりの」となっている。

「胸に思染れ」(No.535)が「肝に思染て」となっている。

「立雲ふし」(No.554)が「歌(立雲ふし)」となっている。

「同ふし」(No.556)が「歌(立雲ふし)」となっている。

#### 『戯曲集』

「銘苺子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷足袋扇子」(No.11)が「着付、銘苺子、髪金入錦入道頭巾、水引色絵垣紗綾袷、足袋、扇子持。」となっている。

「天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨之柄杓」(No.15)が「天女、垂髪、紫長巾、作花並金銀水引、熨斗低差、天冠、琉縫薄衣裳、飛衣、緋紗綾、足袋、金銀薄磨之柄杓持。」となっている。

「娘作花巾無(垂き)時服(ネ+同)衣ひき取裙足袋」(No.13)が「娘、髪作花差、巾垂時服(ネ+同)衣裏緋紗綾ひざ取裙、緋さや足袋。」となっている。

「男子はあゆひからしい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物

こほすい足袋」(No.12)が「男子、はあゆひ、かしらへ金銀水引差、絹布緒付、小袖草衣裳、緞子貫物小ほそい、緋さや足袋。」となっている。

「上使繻子入道頭巾緞子衣装錦之陳羽織末広足袋」(No.15)が「上使、黒繻子入道頭巾、緞子衣裳、錦陳羽織、末広持、足袋。」となっている。

、「供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳

足袋」(No.16)が「供、黒縮緬入道頭巾、黒さや袷衣裳、足袋。」となっている。

「銘苺子」(No.16)が「銘苺子詞 橋掛より出る」となっている。

「天と地に光り」(No.26)が「天と地に(の)光り」となっている。

「肝ふしき思て」(No.30)が「肝ふしきと思て」となっている。

「けふのよかるに」(No.34)が「けふのよかる日に」となっている。

「通水ふし」(No.40)が「歌 通水ぶし 橋掛より出る」となっている。

「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」(No.51)が「歌 は やつくてんぶし」となっている。

「天女」(No.51)が「天女詞」となっている。他六例。

「銘苺子」(No.63)が「銘苺子詞」となっている。他七例。

「里になれら」(No.106)が「里になれらぬ。」となっている。

「銘苺子」(No.107)が「銘苺子詞 橋掛に入る」となっている。

「天の引合よ」(No.108)が「はあ、天の引合せよ。」となっている。

「天女」(No.120)が「天女詞 橋掛より出る」となっている。

「思なひ」(No.130)が「おめなり詞」となっている。他四例。

「遊子持ふし」(No.135)が「歌遊び子持ぶし」となっている。

「ねなし起て啼なやう」(No.147)が「寝なせ、起きて泣くな。」となっている。

「なかならはくひゆんたう」(No.148)が「泣なれば、呉ゆんたう。」となっている。

「思なひ」(No.150)が「おめなり詞 橋掛え入る」となっている。

「天女」(No.158)が「天女詞 橋掛より出る」となっている。

「思けひ」(No.207)が「おめなり詞」となっている。

「東江ふし」(No.219)が「歌 東江ぶし」となっている。

「天女言葉并東江ふし」(No.224)が「天女詞」となっている。

「思けひ」(No.236)が「おめけり詞」となっている。他四例。

「思姉思けひ」(No.242)が「おめなり並おめけり詞」となっている。

いる。

「／＼」(No.244)が「／。」となっている。

「東江ふし」(No.269)が「歌東江ふし」となっている。

「あけやうおめけよ」(No.270)が「あけやう、おめけり、」となっている。

「母見らぬ」(No.271)が「母や見らぬ。」となっている。

「子持ふし」(No.316)が「歌子持ふし」となっている。

「十にみたぬ内に」(No.320)が「十に満ちぬ内に、」となっている。

「すからても苦しや」(No.330)が「すがられのくれしや、」となっている。

「ひきゆる足ひからぬ」(No.341)が「引きゆる足引かれらぬ、」となっている。

「ものい声もすらぬ」(No.357)が「物言ひ声も無いらぬ」となっている。

「上使」(No.448)が「上使詞」となっている。他一例。

「同人」(No.488)が「上使詞」となっている。

「取沙汰のあてと」(No.504)が「取沙汰のあとて」となっている。

「世に始やこと」(No.506)が「世にはじめてやこと」となっている。

いる。

「御素御取立めしやいん」(No.515)が「おの御取立めしやいん、」となっている。

「胸に思染れ」(No.535)が「胸に思染めて、」となっている。

「立雲ふし」(No.554)が「歌 立雲ふし 橋掛に入る」となっている。

「同ふし」(No.559)が「同」となっている。

「教育大本」

「天と地に光り」(No.26)が「天ト地ノ光リ」となっている。

「けふのよかるに」(No.34)が「今日ノ吉日ニ」となっている。

「通水ふし」(No.40)が「天女出羽通水ホシ」となっている。

「天の雨てすも」(No.88)が「天ノ雨デンス」となっている。

「神の引合しよ」(No.109)が「神ノオタスケヨ」となっている。

「ねなし起て啼なやう」(No.147)が「子ナシ起テ啼ナ。」となっている。

「なかならほくひゆんたう」(No.148)が「ナカナレバクイヨン」となっている。

「飛衣やなひらぬ」(No.172)が「羽衣ヤナラン」となっている。

「やあやあなし子」(No.193)が「ヤア産子」となっている。

「天女」(No.210)が「△」となっている。

「天女言葉并東江ふし」(No.224)が「全フシ」となっている。

「母やをらぬ」(No.241)が「母ヤヲラン〜」となっている。

「思姉思けひ」(No.242)が「思ナイ」となっている。

「〳〳〳」(No.244)が「〳」となっている。

「母親やあれよ〜」(No.248)が「母ヤアレヨ〜」となっている。

「母見らぬ」(No.271)が「母ヤ見ラン」となっている。

「すからても苦しや」(No.330)が「スガラリノクリシヤ。」となっている。

「夜もくれていきゆひ」(No.339)が「夜ンクレテイキユン」となっている。

「ひきゆる足ひからぬ」(No.344)が「引ヨル足ヒカリラン、」となっている。

「ものい声もすらぬ」(No.357)が「物言声ナラン」となっている。

「いそちたちもとれ」(No.387)が「急ヂ立戻ラ。」となっている。

「あま下りしやる女」(No.405)が「〜」となっている。

「思なひ」(No.425)が「◎」となっている。

「取沙汰のあれは」(No.470)が「取沙汰ヨアリバ、」となっている。

る。

「同人」(No.488)が「上使」となっている。

「取沙汰のあてと」(No.504)が「取沙汰ノアトテ」となっている。

「御素御取立めしやいん」(No.515)が「ウノ御取立召ン。」となっている。

「豊川本」

「あの川の本に」(No.25)が「あの川のも「欠」りに」となっている。

「しちやの事ならぬ」(No.29)が「下のかめならん」となっている。

「けふのよかるに」(No.34)が「今日のよかる日に」となっている。

「かたはらにかくれ」(No.36)が「側に立い」となっている。

「傍らにたちやひ」(No.37)が「かたわらに隠り」となっている。

「まちとめてむたに」(No.39)が「待請て「欠」」となっている。

「通水ふし」(No.40)が「女通水ふし」となっている。

「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」(No.51)が「はやちくてんふし」となっている。

「しらぬ思里か」(No.60)が「知らん思里よ」となっている。

「かけておちあか」(No.67)が「置ておちいか」となっている。

「わかものといふすや」(No.73)が「予か物てすや」となっている。

「天女」(No.80)が「女」となっている。

「わ身やこの世界の」(No.85)が「我身や此浮世の」となっている。

「天の引合よ」(No.108)が「天の引合か」となっている。

「神の引合しよ」(No.109)が「神の引合か」となっている。

「なし子わなひふたり」(No.124)が「なし子ふたり」となっている。

「遊てもとれ」(No.129)が「遊び戻り」となっている。

「てかよおめけひよ」(No.131)が「出かよ〜おめけい」となっている。

「遊子持ふし」(No.135)が「子抱哥」となっている。

「置ふるみしちやうん」(No.145)が「置ふるみしちいん」となっている。

「おきさるししちやうん」(No.146)が「さるししちやむ」となっている。

「ねなし起て啼なやう」(No.147)が「ねなしち起て」となっている。

いる。

「互になれそめて」(No.163)が「馴染て」となっている。

「此事よ聞は」(No.184)が「此事よ知らは」となっている。

「此事よしらは」(No.185)が「此事よ聞かは」となっている。

「つれてのほら」(No.191)が「烈り登ら」となっている。

「天女」(No.214)が「同人」となっている。

「天女言葉并東江ふし」(No.224)が「天女言葉并哥」となっている。

「思姉思けひ」(No.242)が「思なへ」となっている。

「わぬも列登ら」(No.254)が「我のん烈りて登ら」(注：思姉の言葉)となっている。

「やあ母親よ」(No.255)が「やあ母親よ」(注：思姉の言葉)となっている。

「<>」(No.256)が「<>」(注：思姉の言葉)となっている。

「母やしら雲の」(No.266)が「母親や白雲の」となっている。

「東江ふし」(No.269)が「兩人哥東江ふし」となっている。

「あけやうおめけよ」(No.270)が「あけやう思けい」となっている。

「母見らぬ」(No.271)が「母やめらん」となっている。



「互に立戻て」(No.275)が「互にするな」となっている。

「このことや急さ」(No.276)が「いそち立かけり」となっている。

「父にかたら」(No.277)が「〜」となっている。

「あの松の下に」(No.373)が「あの川のはたに」となっている。

「あの川の本に」(No.374)が「あのまつの下」[欠]」となっている。

「やあ〜なし子」(No.384)が「やあなし子」となっている。

「いそちたちもとれ」(No.387)が「たう〜いそち戻ら」となっている。

「思けひ」(No.388)が「かめ十」となっている。

「すたしはおや〜」(No.402)が「母親の事や」となっている。

「下ることならぬ」(No.408)が「戻る事ならん」となっている。

「上使」(No.448)が「首里御使」となっている。

「あゝ銘苅子とちや」(No.451)が「銘苅子妻や」となっている。

「あまおりしやる女」(No.452)が「あまおりしよる」となっている。

「思けひや」(No.475)が「嫡子亀千代や」となっている。

「ほと〜にならば」(No.476)が「をとく立め」[欠]」となっている。

「このみよんき拝て」(No.482)が「美御面事拝て」となっている。

「なまど行」(No.483)が「なまど行ん」となっている。

「高松の本も」(No.484)が「高松の下や」となっている。

「たつねやひむたに」(No.487)が「見」[欠]」となっている。

「同人」(No.488)が「御使」となっている。

「首里の御使とやゆる」(No.490)が「首里の御使にきいちゃん」となっている。

「上使」(No.494)が「首里之御使」となっている。

「啼暮ちをる事や」(No.501)が「鳴くらち居事よ」となっている。

「首里城までも」(No.502)が「首里までん」となっている。

「世にかはてをれば」(No.505)が「世の始やり」となっている。

「ほとほとにならば」(No.514)が「程立免やいん」となっている。

「先宿んかい」(No.541)が「先内むかい」となっている。

「おんつかいしやくら」(No.542)が「御つかいよしやくら」となっている。

「伊舎堂本」

「けふのよかるに」(No.34)が「けふのよかる日に」となっている。

「通水ふし」(No.40)が「歌通水ふし」となっている。

「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」(No.51)が「歌はやつくやうふし」となっている。

「天女」(No.57)が「天女言」となっている。他六例。

「銘苅し」(No.63)が「銘苅子言」となっている。他九例。

「思なひ」(No.130)が「おめない言」となっている。他六例。

「遊子持ふし」(No.135)が「歌あそひ子持ふし」となっている。

「なかなからはくひゆんたう」(No.148)が「なかなかれはくひよむ」となっている。

「此事よ聞は」(No.184)が「此事としらハ」となっている。

「此事よしらは」(No.185)が「此事よきかハ」となっている。

「思けひ」(No.207)が「おめけい言」となっている。他五例。

「天女」(No.214)が「歌東江ふし」となっている。

「かにある憂苦しや」(No.215)の天女の台詞が東江節になっている。

「たかしちやるゝとか」(No.216)の天女の台詞が東江節になっている。

「うらめてもきやしゆか」(No.217)の天女の台詞が東江節にな

っている。

「我肝さらめ」(No.218)の天女の台詞が東江節になっている。

「東江ふし」(No.219)が「歌右同」となっている。

「天女言葉并東江ふし」(No.224)が「歌右同」となっている。

「やあ思なひよ」(No.240)が「やあ思なひ」となっている。

「　　」(No.244)が「　　」となっている。

「天女」(No.257)が「歌東江ふし」となっている。

「是きやてよとめは」(No.258)の天女の台詞が東江節になっている。

「飛もとはれらぬ」(No.259)の天女の台詞が東江節になっている。

「なし子ふやかれの」(No.260)の天女の台詞が東江節になっている。

「もゝのくれしや」(No.261)の天女の台詞が東江節になっている。

「母やしら雲の」(No.266)が「母親や白雲の」となっている。

「東江ふし」(No.269)が「歌東江ふし」となっている。

「母見らぬ」(No.271)が「母やめらぬ」となっている。

「子持ふし」(No.316)が「歌子持ふし」となっている。

「すからても苦しや」(No.330)が「すかられんくれしや」とな

つてゐる。

「互におひたちやひ」(No.414)が「互おひたちやひ」となっている。

「いきやし暮しやしゆゝか」(No.435)が「いきやしくらしゆよか」となっている。

「上使」(No.448)が「上使言」となっている。他一例。

「このみよんき拝て」(No.482)が「みおうんき事拝て」となっている。

「同人」(No.488)が「上使言」となっている。

「取沙汰のあとと」(No.504)が「取沙汰のあとて」となっている。

「御素御取立めしやいん」(No.515)が「をの御取立めしやいん」となっている。

「此御恩たうとさや」(No.529)が「御恩たうとさや」となっている。

「胸に思染れ」(No.535)が「むねにおめそめて」となっている。

「おんつかいしやへら」(No.542)が「おんつかいよしやへら」となっている。

「立雲ふし」(No.554)が「歌立雲ふし」となっている。

「あの松と川の」(No.557)が「めくみある御代の」となっている。

る。

『尚家本組踊集』(以下『尚家本』)にみられて対校本にみられない記載は、天女の早作田節(No.50)の記載に「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」と所作を指示した内容が書かれているが、対校本は「兼島本」の「天女言バ早作田節」以外はすべて節名を記載しているだけである。それから、着付(No.116)が「教育大」  
「恩河本」「兼島本」「伊舎堂本」にはみられない。また、此の記載は『戯曲集』「台湾本」「新報・宮城」にみられる着付とは記載が異なる。

対校本にみられて『尚家本』にみられない記載は、『戯曲集』「台湾本」「新報・宮城」にみられる配役(No.59)は『尚家本』を含めた他本にはみられない。それから、役者の登退場を指示するト書き(No.19・40・112・115など)も『尚家本』を含めた他本にはみられない。これらは「羽地本」系統の「組踊本」の特徴といえる。

記載の異同がみられる部分は、『尚家本』が「天女言葉並東江ふし」として、天女の台詞を唱えた後に、東江節を同歌詞で歌うという記載(No.216)は、「兼島本」「恩河本」は『尚家本』をと同様であり、「伊舎堂本」「教育大」「台湾本」は「同節」系の記載、『戯曲集』「新報・宮城」は「天女詞」となっていて、記載にばらつきがある。ま

た、『戯曲集』「新報・宮城」はこの台詞の後に「東江節」(No.221)でこの詞章が記載されている。「台湾本」は「天女台辞東江節に同じ」(No.221)として詞章が記載されており、歌と台詞の順序が逆になっている。

上使の台詞にみられる「御素御取立めしやいん」(No.451)は、対校本はすべて「おの御取立めしやいん」の系統の記載となっている。

それから、銘苅子の台詞「胸に思染れ」(No.463)は「教育大」を除く対校本で「胸に思染て」の記載となっている。これらは『尚家本』の書き損じと思われる。「御素御取立めしやいん」(No.451)の場合、「御素御取立」の「御素」の意味が分からず、「おの御取立」であれば「その御取立」となって意味が通じる。「おの」という音と「御素(おそ)」という音も近い。そして「胸に思染れ」はその次の台詞が「肝に思留て」(No.464)となっており、『尚家本』とすべての対校本ともに記載が同じである。対語関係にある台詞であるので、この場合は「胸に思染て／肝に思留て」とした方がよい。したがって、『尚家本』の記載が誤っていると思われるのである。また、同様の表現は大川敵討にも、「我胸に留めて／我肝に染めて<sup>(注七)</sup>」とあることからここでは「留て」の方が良いと思われる。

対校本の特徴としてみられるものは、「新報・宮城」と「台湾本」には短い解説が二カ所記載されている。一つは(No.226)で、「新報・

宮城」に

(附りこのあがり江ぶしにつれて天女は高き松を上りて雲中に入り遙かに子供等を見下して涙に咽ぶとき五才の亀千代は目覚めて起き上り母の居らざるを見て四方を見廻し泣き叫んで母の雲中にあるを見母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰途につく処の場なり)

とあって、「台湾本」には頭注に

この悲しき東江節につれて天女は高き松を上りて空中に入り遙かに子供等を見おろし涙に咽ぶとき五才の亀千代は目覚めて起き上り母の居らざるを見て四方を見廻し泣き叫ぶ姑くして母の雲中に迫るを見、母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰途につく

とあり、ほぼ同じ文章である。それからもう一カ所は(No.326)で「新報・宮城」に

(附り 以上の台詞に列れて二人の孤児は母の昇天せし松の下に座し相抱いて泣く)

「台湾本」の頭注には

此の台辞につれて二人の孤児は母の昇天せし松の下に座して相抱いて泣くとき、父なる銘苅子は児等の有様をみてひとしほ腸もちぎるゝばかりに思ひ之れを賺しなだめて家に帰らんとす

とあって、この部分は「台湾本」の方が長いが、前半部分はほぼ同じ文章である。この解説は他の「組踊本」にはみられないことから、「新報・宮城」と「台湾本」は同じ人物によって書かれた「組踊本」であると思われる。他にも役名の書き方が、『尚家本』『戯曲集』『教育大』『伊舎堂本』が、「おめなり・おめけり」系の記載であるのに対し、「兼島本」「恩河本」は「おめなり」のところは「思鶴」と娘の名前で記載されており、「新報・宮城」「台湾本」は「思鶴・亀千代」と両方とも名前で記載されており、この二本の「組踊本」は共通点が多い。

前項で取り上げた「執心鐘入」でも共通点が多いことから、この二本は双子の関係にある「組踊本」であるといえる。

それから、最後に二節歌われる「立雲節」(No.477)は節名の異同は無かったが、「伊舎堂本」のみ一節しか歌われず、(No.482~486)を欠いている。また、一節めの歌詞が『尚家本』その他が「夢やちやうもむたぬ／百かほのつきやす／あの松と川の／ゆへとやゆる」であるのに対し「夢やちやうん見たぬ／百かふのつちやす／めくみある御代の／ゆへとやよる」となっており、三句目が異なっている。さらに、「教育大」は二カ所詞章が抜けており (No.203・No.384) 後に詞章が別筆で書き足されている。

全体的に「銘苅子」は他の「組踊本」に比べ、目立った異同がみ

られない作品である。しかし、「羽地本」系の「組踊本」と『尚家本』系の「組踊本」は記載が異なるということが明らかである。

#### iv 大川敵討

##### ① 作者ならびに上演の歴史

この作品は別名「忠孝夫人」とも呼ばれ、別名の方で親しまれている作品である。戊年の『躍方日記』には一八〇〇年から上演が確認できる。それ以前の上演の確認ができる資料が現存していないため、おそらくこの時が初演と考えられる。初演が一八〇〇であるというもう一つの理由は、「大川敵討」の作者が一七五六年の田里朝直ではなく、久手堅親雲上であるからである。「大川敵討」の作者について、戦前からさまざまな作者論が交わされてきた。一九〇七(明治四〇)年の四月五日付の『琉球新報』に「組踊本」が掲載される際に、「大川敵討は首里鳥小堀の古堅筑登之親雲上其他四五人の合作にて詞と云ひ脚色といひ彼の五番三番に多く譲らざる傑作なり」と正覚坊(太田朝敷)が記しているだけでなく、一九一五(大正十四)年三月十八日から『琉球新報』に掲載された「組踊本」のなかには、真境名安興が「組踊『忠孝夫人』について(下)」という文章を寄せている。そこで真境名は「作者は果して誰れであらうか色々言伝へはあるが余程し道に通曉した一才物であつたに相違ない或は二三名

の合作であるといふ説もあるが余り斧斤の痕も見えないやうである好し一人の作としても他山の石として衆知を集めて玉成されたといふことは適評であらう」と作者について言及しており、真境名もこの時点では「大川敵討」の作者はわからなかったようである。さらに一九一五（大正十四）年四月五日の琉球新報には「忠孝夫人の作者は誰か？」という見出しがあり、そこには「此の組踊は作者が何人なるか今日まで未だ判明してゐない丈に終始問題にされてゐる」と記され、先の真境名安興のコメントを引用した上で、記者は八重山在の長浜という老人の話しに、首里の崎山の老人たちの話では「丸屋伊佐」という麻氏の人物が作者である、と掲載している。そしてこの記事を読んだ読者からは「江洲親雲上」という人物が作者である、という異論まで飛び出している。いずれも作者について諸説あるが、この問題に決定的な資料で裏付けをとったものは、真境名安興の甥にあたる真境名安宜が一九三四（昭和九）年十一月十七日の『琉球新報』に掲載した『忠孝夫人』の作者は久手堅親雲上である。そこには真境名安興が「組踊『忠孝夫人』について（下）」を掲載して五、六年後に新資料を発見し、安宜に「忠孝夫人の作者が判明した事、従つて何日かのあの記事訂正しなければいけない」と言ったことが記され、安宜は嘉慶四年（一七九九年）に記された「冠船躍方日記」を引用している。この記事によって大川敵討の作者は

判明したが、太田朝敷や長浜翁の話に拠った作者説は戦後も信じられ、『沖繩郷土古典芸能 組踊全集』<sup>（注七九）</sup>や『沖繩の芸能』<sup>（注八〇）</sup>では摩文仁安祥や神谷厚順・数人合作など、誤った情報が記されている。池宮はこの作者について久手堅親雲上の琉歌が「天理本琉歌集」や『琉球大歌集』『古今琉歌集』に収録されている事を指摘し<sup>（注八一）</sup>、当時は「大川敵討」の作者が久手堅親雲上であるということを経験して、近代以降に忘却されたことを述べている。嘉慶四年の「冠船躍方日記」は現存していないので、真境名安宜の掲載した新聞記事が唯一の証拠である。久手堅親雲上はその唐名など不明な点が多く、どのような人物であるのか、という部分は未だ不明なままである。

大川敵討は一八〇〇年・一八〇八年・一八三八年・一八六六年の冊封における舞台上で上演の準備がされた事が確認できる組踊である。

## ② 内容について

「大川敵討」は、組踊作品の中でも詞章の分量が多い作品である。例えば、『戯曲集』を参考にして、「執心鐘入」は詞章を八・八・八・六音の琉歌形式に区切ると約三二七行となる。「大川敵討」は約一九六三行であり、その行数は実に六倍程である。そして使用される音曲は朝薫の作品（「執心鐘入」七曲・「銘苺子」九曲・「女物狂」六曲・

「孝行之巻」七曲・「二童敵討」九曲は平均して七〜八曲であるのに対し、「大川敵討」は十四曲とその倍近くの歌が歌われる。この数は「具志川大軍」の十六曲、「東辺名夜討」の十五曲に次ぐ数であり、詞章も音曲の数も組踊作品の中で多い作品なのである。前項で触れた作者の問題の中で「数人による合作」という説が生まれた背景には、このように作品自体の分量が多いことも理由の一つであると推測できる。

「大川敵討」は朝薫の作品と比べても役柄が一度に話す詞章が長い。「執心鐘入」は役柄どうしの対話に音曲を使用している。以下に『戯曲集』の該当部分を挙げる。

#### 女詞

をとこ生れても

恋しらぬものや

玉のさかづきの

底も見らぬ。

#### 若松詞

女生れても

義理知らぬものや

これど世の中の

地獄だいのもの。

歌 干瀬に居るとりぶし

及ばらぬ里と

かねてから知らば、

のよで悪縁の

袖に結びやべが。

#### 若松詞

悪縁や袖に

むすばはんばからひ、

わ身や首里みやだいら

やとど行きゆる。

歌 干瀬に居るとりぶし

悪縁の結で、

はなちはなされめ。

ふり捨てゝいかは、

一道だいのもの。

若松の台詞の台詞のあと、女の台詞はすべて干瀬節で歌われているのがわかる。しかし、「大川敵討」にはこのような形式は用いられず、むしろ台詞を長く、繰り返して述べるようになっていく。例えば村原が登場して大川城の動乱を語る台詞に

あゝ、谷茶あまやが

野心事巧で、  
何の事も思まぬ

大川の按司の

国々の按司部

討たんでやりしゆんで

嶋々よ廻て、

段々に言なち、

加勢頼入れ、

軍押寄せて、  
『戯曲集』三〇六頁

とあり、後に出てくる乙樽の台詞にも

谷茶あまやが

野心事巧で、

何の事も思まぬ

大川の按司の

国々の按司部

討たんでやりしゆんで、

嶋々よ廻て、

色々に言なち、

加勢頼入れ、

軍押寄せて、  
『戯曲集』三一頁

とあるように、まったく同じ内容の台詞が繰り返して別の役柄でも述べられている。作品としては、前半は乙樽、義母、子の道行で音楽が多用されているが、全体的に台詞に重きを置いたもので、「糺の場」など、長台詞の聴きどころもある。登場人物の台詞は、執心鐘入のように、八・八・八・六の琉歌形式で区切られる箇所は少なく、ほとんどはそれ以上長い、長歌形式の台詞である。組踊が台詞中心の演劇になっていく時代の作品と言える。朝薫、朝直の作品よりも、「大川敵討」や「花売の縁」「天願若按司敵討」「二山和睦」など、後世の組踊は台詞が長く、上演時間も長い作品に変化している。

### ③底本と対校本について

第一次対校本：八重山博物館本（新本家所蔵本）（以下「新本本」）・今帰仁御殿本（以下「今帰仁本」）・与那覇政牛所蔵本（以下「与那覇本」）・恩河本小祿御殿本組踊集（以下「恩河本」）・兼島信備所蔵本（以下「兼島本」）・比嘉新三本（以下「比嘉本」）・校註琉球戯曲集（以下『戯曲集』）・豊川善包所蔵本（以下「豊川本」）・喜舎場孫進所蔵本（以下「喜舎場本」）・多良間村教育委員会所蔵本（以下「多良間本」）

「大川敵討」は尚家本を含め筆写本が十冊と多く残っているため、



第一次対校本のみで校合を行う。『琉球戯曲集』は活版本、であるが、王府の資料をもとに編んだものである。校合の第一次対校本として扱った。底本の『尚家本』には着付が記載されているが、「多良間本』『戯曲集』以外の「組踊本」には着付けが記載されていなかった。また、「新本本」「豊川本」「喜舎場本」は八重山に残っている「組踊本」であり、「多良間本」は多良間島に残っている「組踊本」である。それ以外の対校本は御殿・殿内に所蔵されていたもの、士族の所蔵しているものとなっている。

#### ④校合結果

『尚家本』にみられて対校本にみられない記載のうち、対校本に共通して見られないもので一番多いのは、泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)である。『戯曲集』以外の九冊に見られない。その次に多いのが着付 (No.24～34) である。この記載は、「新本本」「今帰仁本」「与那覇本」「恩河本」「兼島本」「比嘉本」「豊川本」「喜舎場本」の八冊で記載が見られない。それから、村原の比屋の台詞「やあやあ、」(No.2050)は「新本本」「与那覇本」「比嘉本」「豊川本」「喜舎場本」の五冊に見られない。

次に、尚家本に見られ、対校本に見られない記載を「組踊本」ごとに挙げる。

「新本本」

前掲の「着付」(No.24～34)・乙樽の台詞「いらぬことめしやうな／後れてや済ぬ」(No.143～144)・役名「乙樽」(No.172)・音曲名「なかんかりふし」(No.175)・乙樽の台詞「我肝忍はらぬ／やみになゆき」(No.259～260)・役名「母」(No.372)・母の台詞「一 咲出ゆる花ハ／ワ身に思かへち、／の、肝のあとて／捨てあたか」(No.373～376)・役名「乙樽」(No.458)・乙樽の台詞「一 いちもやく立ぬ／事す又やらハ／わない、女やても／谷茶あまやに、／一刀も掛て／討死はすらな、／徒に命ち／なからへてのしゆか、／たう／ゆるちたはふれ、」(No.459～467)・音曲「母言葉并伊野波ふし／一 義理のみちやれハ／留てとめららぬ」(No.611～613)・門番の台詞「／、」(No.673)・役名「同人」(No.674)・門番の台詞「拝れよめしやいん／あれに居やうれ、」(No.675～676)・谷茶の按司の台詞「せめて有筋／白状よしめれ、」(No.723～724)・下部の台詞「御側よて拝め、」(No.735)・乙樽の台詞「一 の、こともおまぬ／女あてなしに、／罪科よかけて／うきくれしやしめゆすや、／村原かしワさ／恨めてとをゆる、／のよて身にかへて／実よかくしやへか、／此事やつく／とおもてたはふれ、」(No.813～822)・役名「石川」(No.878)・役名「満納」(No.948)・満納の子の台詞

「さあ〜」(No.974)・谷茶の按司の台詞「たう〜」(No.1002)・満納の子の台詞「人やたまそとも、／いきやし此満納／たまかしのなゆか、」(No.1027〜1029)・谷茶の按司の台詞「一 やあ石川、」(No.1176)・谷茶の按司の台詞「振合の袖に／糸の縁結て、／夢の間の浮世／語ひほしやあもの、」(No.1196〜1199)・谷茶の按司の台詞「一 いや〜、／今のこと愚痴に／かたまとるむさや、／素立ひやならぬ／急ち戻やうれ、」(No.1232〜1236)・谷茶の按司の台詞「ある間の浮世、／つらさ身に受て／思ひこかれやひ、／恋死はむくひ／たるにいきゆか、／たう〜／おれこれよおもて」(No.1307〜1313)・谷茶の按司の台詞「はあしたひ〜、」(No.1331)・谷茶の按司の台詞「ならぬ〜、」(No.1343)・乙樽の台詞「百といつまでも／揮てすてや〜、」(No.1358〜1359)・谷茶の按司の台詞「心へら聞こ、」(No.1370)・谷茶の按司の台詞「一 たう〜、／けふや道中の／草臥もあらたひもの、／若按司の側にむち／休息すれ、」(No.1407〜1411)・音曲「代もやすめて／上や〜ら」(No.1445〜1446)・泊の台詞「一 是や心入とやる、」(No.1489)・泊の台詞「主やまあからまあんかひ／まひか、」(No.1495〜1496)・役名「同人」(No.1523〜)・泊の台詞「大川の按司の、」(No.1550)・泊の台詞「あらやらぬ事、／色々にいひ立つ、」(No.1553〜1554)・泊の

台詞「ほんのむちや／しやものやすんつひてや、」(No.1602〜1603)・泊の台詞「たあ殺しゆるいきや／そつともなひらぬ、」(No.1640〜1641)・泊の台詞「もとよたる仕形や、／ほんの／をかしやとおほさる、」(No.1653〜1655)・泊の台詞「あはあ(高笑)〜／立羽失て／どつとさんぐな事、／あんしおれからや」(No.1658〜1661)・泊の台詞「みすく聞分て／肝出ち／死しいきゆる命／救てたはふれ〜むて、／段々折たうれ／しやつとちんや、／村原としや／分別なもの、／夫の仏事うちなち／御返事上らの／のふのくひのむて、／たん〜と云廻ちやれハ、／あゝ無蔵さ／縁のかたかしち／あかさくらさもわからぬ、／ほんの誠に／たんしひきつち、」(No.1663〜1679)・泊の台詞「あた果報とつきやる／果報なワ身や、」(No.1704〜1705)・泊の台詞「なつくわひしち／笑ひすひ〜／躍羽しち、／夜のねふしもねんたぬ、」(No.1710〜1713)・泊の台詞「ほんのをかしやどおほさる、／あんしました／満納の子や／度々御意見／おんにゆけゆんむて、／のふ目もみしらぬ／かひはうかつたん、／やつさ／【命】(人)の命てらもの／云んてとしゆる、／水つかゆすよか／あつまつさ／おそろしい畜生人、／また満納の子も／満納の子、／あて性もないらぬ／のふむて／おれほとしや(ち)／いか身からと／やひんしゆすか、

／得と思てむてゝ、／しゆかな／しい肝の／あちしやつ所か  
ら、／誠に満納の子とやゆる。」(No.1720～1744)・村原の比屋  
の台詞「やあ〜」(No.1752)・泊の台詞「たうごゆ」(No.1772)・  
泊の台詞「まあかひいかわん／かもてい」(No.1782～1783)・  
村原の比屋の台詞「いやゝまあむらの／何かしかやゆら」(No.  
1787～1788)・泊の台詞「一 むまやまあたやくるか」(No.  
1792)・泊の台詞「細々の次第／おんにゆけやくら」(No.1804  
～1805)・村原の比屋の台詞「たう〜／気張てくひれよ」(No.  
1827～1828)・松千代の台詞「父親の事と／按司添前みこし立」  
(No.1885～1886)・松千代の台詞「君親のかたき／打捕んとも  
む」(No.1891～1892)・松千代の台詞「此事や急ち／村原に  
つけて、／思子の前／とりかへち／敵討んともて、／肝勇ミい  
やて／むちていきゆん」(No.1909～1916)・役名「松千代」(No.  
1927)・松千代の台詞「一 やあ金松よ、／急ち内いやひ／村  
原のひや拝ま」(No.1928～1930)・役名「金松」(No.1931)・  
金松の台詞「一 たう〜／急ちをかま」(No.1932～1933)・  
村原の比屋の台詞「願たこと叶て／誇らしやとあゆる」(No.  
1946～1947)・役名「村原」(No.1954)・村原の比屋の台詞「内  
通のことむ」(No.1957)・村原の比屋の台詞「城の門閉て」(No.  
1992)・村原の比屋の台詞「やあやあ」(No.2050)・役名「惣人

数」(No.2061)・総人数の台詞「一 拜む留や〜」(No.2062)・  
谷茶の按司の台詞「一 いや供列もいらぬ／急け〜」(No.  
2129～2130)・役名「同人」(No.2134)・役名「谷茶」(No.2169)・  
谷茶の按司の台詞「一 いや、ちゆつかぬもたらぬ／すひさん  
なわらく」(No.2170～2171)・役名「兄弟」(No.2172)・原国兄  
弟の台詞「一 ひやひやひ」(No.2173)・音曲「東江ぶこ」(No.  
2194)・音曲「一 あけ夢かやゆら」(No.2195)・役名「村原」  
(No.2248)・音曲「こほらひふこ」(No.2264)・音曲「一 御代  
つきよめしやうち／本の御城に／おかけほさへめしやうれ／玉  
の思子」(No.2265～2268)。

「今帰仁本」

前掲の「着付」(No.24～34)・泊の台詞「大川の按司の」(No.  
1550)・泊の台詞「をなちやらも、されん、／たう〜側に／  
居よをれよ」(No.1614～1618)。

「与那覇本」

前掲の「着付」(No.24～34)・乙樽の台詞「一 やああや前よ、  
／頓て喜名村や／たよひ島たひもの、／御気張よめしやうれ／  
御供しやくら」(No.266～270)・乙樽の台詞「のゝおめのあ

ゆか／ワか命の外に、」(No.839～840)、役名の台詞「満納」(No.948)、満納の子の台詞「い、いや、おなためもしらぬ／こゝををゆめ、」(No.949～950)、音曲「きせるも宝蔵も／持つをやぐん」(No.1440～1441)、泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)、泊の台詞「ワか側にをらハ／をなちやらも、されん、」(No.1613～1614)、泊の台詞「ひしやの指まで／打かへし／しゆて、／むな待しゆらむておもれハ、／ほんのをかしやどおほさる、」(No.1717～1720)、泊の台詞「満納の子、」(No.1735)、泊の台詞「たうしゆ、」(No.1772)、松千代の台詞「とりかへち」(No.1912)、音曲「当るものなき其威勢／扱も／と一声に／てきや味方の目をさます」(No.1924～1926)、村原の比屋の台詞「やあやあ、／揃ておる人数／慥にきけ、／傍輩の中／不和にともならハ、／怪我事の基ひ／事障りたひもの、／腹の立まハ／短気するな、／多ひ／、能々勘忍／題目とやゆる、」(No.2050～2060)、役名「惣人数」(No.2061)、総人数の台詞「一 拝む留やへて、」(No.2062)、役名「同人」(No.2162)、役名「兄弟」(No.2172)、原国兄弟の台詞「一 ひやひやひ」(No.2173)、村原の比屋の台詞「やあ乙樽、」(No.2232)。

「恩河本」

前掲の「着付」(No.24～34)、泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)。

「兼島本」

前掲の「着付」(No.24～34)、役名「同人」(No.205)、役名「母」(No.372)、母の台詞「一 咲出ゆる花ハ／ワ身に思かへち、／の、肝のあとて／捨てあたか、」(No.373～376)、村原の比屋の台詞「誠村原か／とちの本意、／此外に手段／分別もならぬ、」(No.497～500)、満納の子の台詞「／、」(No.772)、泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)、役名「鬼瀬」(No.2084)、谷茶の按司の台詞「やあ／いそけ、」(No.2109～2110)。

「比嘉本」

前掲の「着付」(No.24～34)、乙樽の台詞「一 御気張よめしやうれ」(No.192)、乙樽の台詞「頓て夜もあける、」(No.193)、乙樽の台詞「一 義理の道たひもの／思きらな、ゆめ、」(No.219～220)、乙樽の台詞「ワぬ、とる親に／なやしたる因果、」(No.223～224)、乙樽の台詞「あけやうあてなしの、の、ハ、ともおまぬ、／哀れ楽々と／ねるか心気、」(No.229～232)、乙樽の台詞「あゝた【ち】(ウ)と、／神佛そろて／見守やひ

たはふれ、」(No.254～256)、乙樽の台詞「一 やああや前よ、  
／頓て喜名村や／たよひ島たひもの、／御気張よめしやうれ／  
御供しやくら、」(No.266～270)、村原の比屋の台詞「引取ん  
ともて、」(No.351)、乙樽の台詞「三人逃忍て／こまゝてやき  
やすか、」(No.384～385)、乙樽の台詞「親かなし事や」(No.  
388)、乙樽の台詞「我身に思つきやる／事の又あすや、」(No.  
411～412)、乙樽の台詞「命救てたはふれてやり／誠たん／  
と、／色々にいやは、／欲悪な谷茶／巧てをることの、／便り  
はしともて／疑ひやなひらぬ、／抱(かげ)置積り、／我肝落  
着やい／心ゆるさしやご、」(No.415～424)、母の台詞「思子為  
やれハ／おの筈とやすか、」(No.472～473)、役名「母」(No.  
510)、母の台詞「一 やあ乙樽、／思子為てやり／命ちふりす  
て、／今のこと云すや／誇らしやとあすか、／行先の定め／  
さたまらぬあれハ、／あけやう思盡す／かたもなひらぬ、」(No.  
511～519)、役名「乙樽」(No.520)、乙樽の台詞「一 人の願  
事の／あたに又なゆめ、／こころ安す／と／御待めしやうれ、」  
(No.521～524)、村原の比屋の台詞「一 やあ乙樽、」(No.526)、  
村原の比屋の台詞「腹立ぬことに／心しつめとて、」(No.529  
～530)、村原の比屋の台詞「多ひ能々分別／題目とやゆる、」  
(No.557～558)、役名「乙樽」(No.573)、乙樽の台詞「一 た

とひ事洩て／生殺しされててやり、／思子為やれは／残る事な  
ひらぬ、／心安す／と／極楽とやゆる、」(No.574～579)、  
役名「村原」(No.580)、村原の比屋の台詞「一 あゝいふる事  
よきけハ／肝にひし／と、／むかし物語り／聞ゆることに、  
／よの中の手本／沙汰と残る、」(No.581～586)、乙樽の台詞  
「ものしられしやくら、」(No.640)、乙樽の台詞「かゝる方な  
ひらぬ／すかる方なひらぬ、」(No.656～657)、役名「同人」  
(No.768)、谷茶の按司の台詞「一 さや／、」(No.1212)、  
谷茶の按司の台詞「みすく聞分て／肝もきもそへて、／頼て御  
情に／なれて給ふれ、」(No.1280～1283)、村原の比屋の台詞  
「これ／、」(No.1477)、村原の比屋の台詞「旅の上の御縁／  
をかむ御情に、」(No.1506～1507)、役名「同人」(No.1523)、  
泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)、  
泊の台詞「ほんの」(No.1654)、村原の比屋の台詞「一 やあ  
／、」(No.1774)、村原の比屋の台詞「たう／、」(No.1817)、  
役名「同人」(No.1836)、村原の比屋の台詞「取戻ちからに、  
／逃忍ふ時や／疑やなひらぬ、」(No.1840～1842)、松千代  
の台詞「君親のかたき／打捕んともひ、」(No.1891～1892)、  
松千代の台詞「肝勇ミいさて」(No.1914)、村原の比屋の台詞  
「天の引合か／神の御助か、」(No.1940～1941)、役名「村原」

(No.1954)・村原の比屋の台詞「敵の城元に」(No.1972)・村原の比屋の台詞「走通る後に、／道の口立ふさち、」(No.2005～2006)・村原の比屋の台詞「やあやあ、」(No.2050)・谷茶の按司の台詞「さあ／いそけ／」(No.2109～2110)・役名「同人」(No.2162)・村原の比屋の台詞「いやぬかすまひ、」(No.2163)・役名「兄弟」(No.2172)・原国兄弟の台詞「いやひやひ」(No.2173)・村原の比屋の台詞「過し按司添も／嬉しやめしやら、」(No.2199～2200)・乙樽の台詞「思て自由ならぬ」(No.2205)・役名「村原」(No.2248)・

『戯曲集』

泊の台詞「油断しや濟ぬ」(No.1471)。

「豊川本」

前掲の「着付」(No.24～34)・役名「乙樽」(No.172)・音曲「なかんかりふし」(No.175)・役名「乙樽」(No.177)・乙樽の台詞「かゝる方なひらぬ／行来しら玉の、」(No.178～179)・乙樽の台詞「やああや前よ、／」(No.203～204)・村原の比屋の台詞「引取んともつ、」(No.351)・音曲「母言葉并伊野波ふし／一義理のみちやれ／留とめららぬ、」(No.

611～613)・門番の台詞「／」(No.673)・役名「同人」(No.674)・門番の台詞「拝れよめしやいん／あれに居やうれ、」(No.675～676)・谷茶の按司の台詞「せめて有筋／白状よしめれ、」(No.723～724)・役名「下部」(No.732)・下部の台詞「御側よて拝め、」(No.735)・役名「満納」(No.948)・谷茶の按司の台詞「たう／」(No.1002)・谷茶の按司の台詞「いや／／今のこと愚痴に／かたまるとるむさや、／素立ひやならぬ／急ち戻やうれ、」(No.1232～1236)・谷茶の按司の台詞「人の肝尽ち、／祈る願事や／御助のあもの、」(No.1275～1277)・谷茶の按司の台詞「ある間の浮世、／つらき身に受て／思ひこかれやひ、／恋死はむくひ／たるにいきゆか、／たう／／おれこれよおもて」(No.1307～1313)・乙樽の台詞「百と／つまでも／拝てすてや／ら、」(No.1358～1359)・谷茶の按司の台詞「たう／、／けふや道中の／草臥もあらたひもの、／若按司の側にむち／休息よすれ、」(No.1407～1411)・泊の台詞「一是や心入とやる、」(No.1489)・泊の台詞「主やまあからまあんかひ／まひか、」(No.1495～1496)・泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)・泊の台詞「あらさらぬ事／色々にいひ立て、」(No.1553～1554)・村原の比屋の台詞「やあ／」(No.1752)・泊の台詞「まあかひいかわん」(No.1782～)・泊

の台詞「かもつら」(No.1783)、泊の台詞「一 むまやまあ  
たやくるか」(No.1792)、泊の台詞「細々の次第／おんにゆ  
けやくら」(No.1804～1805)、村原の比屋の台詞「たうく  
／気張てくひれよ」(No.1827～1828)、松千代の台詞「父親  
の事と／按司添前みし立」(No.1885～1886)、松千代の台  
詞「ふたり命はまて」(No.1893)、松千代の台詞「此事や急ち  
／村原につけて、／思子の前／とりかへち／敵討んともて、／  
肝勇いさて／むちていきゆん」(No.1909～1916)、役名「松  
千代」(No.1927)、松千代の台詞「一 やあ金松よ、／急ち内  
いやひ／村原のひや拝ま」(No.1928～1930)、役名「金松」  
(No.1931)、金松の台詞「一 たうく／急ちをかま」(No.  
1932～1933)、村原の比屋の台詞「願たこと叶て／誇らしやと  
あゆる」(No.1946～1947)、村原の比屋の台詞「一 やあ  
く、乙樽か兼て／内通のらど」(No.1955～1957)、村原  
の比屋の台詞「立よ出さ」(No.1961)、村原の比屋の台詞「城  
の門閉て」(No.1992)、村原の比屋の台詞「やあやあ」(No.  
2050)、村原の比屋の台詞「多ひく、能々勘忍／題目とやゆ  
る」(No.2059～2060)、谷茶の按司の台詞「一 いや供列も  
いらぬ／急けく」(No.2129～2130)、役名「若按司」(No.  
2188)、若按司の台詞「一 やあ村原よ」(No.2189)、音曲

「東江ふし」(No.2194)、音曲「一 あけ夢かやゆら」(No.2195)、  
役名「村原」(No.2248)。

「喜舎場本」

前掲の「着付」(No.24～34)、役名「乙樽」(No.172)、音  
曲「なかんかりふし」(No.175)、役名「乙樽」(No.177)、  
役名「乙樽」(No.202)、乙樽の台詞「一 やああや前よ、  
／く」(No.203～204)、乙樽の台詞「やあ乙松よ、／誠  
後生あらは、／父親の側に、／先立ひむちをて／まちやいを  
れよ」(No.237～241)、乙樽の台詞「我肝忍はらぬ／やみ  
になゆさ」(No.259～260)、村原の比屋の台詞「引取んと  
もて」(No.351)、役名「母」(No.372)、母の台詞「一 咲  
出ゆる花ハ／ワ身に思かへち、／の、肝のあとて／捨てあた  
か」(No.373～376)、音曲「母言葉并伊野波ふし」(No.611)、  
音曲「一 義理のみちやれは／留ととめらぬ」(No.612  
～613)、門番の台詞「く」(No.673)、役名「同人」(No.  
674)、門番の台詞「拝れよめしやいん／あれに居やうれ、」  
(No.675～676)、谷茶の按司の台詞「せめて有筋／白状よし  
めれ」(No.723～724)、役名「下部」(No.732)、下部の  
台詞「御側よて拝め」(No.735)、乙樽の台詞「一 の、

こともおまぬ／女あてなしに、／罪科よかけて／うきくれし  
やしめゆすや、／村原かしワさ／恨めてとをゆる、／のよて  
身にかへて／実よかくしやへか、／此事やつく／とおも  
てたはふれ、」（№813～822）、役名「石川」（№878）、  
役名「満納」（№948）、満納の子の台詞「さあ〜」（№  
974）、谷茶の按司の台詞「たう〜」（№1002）、満納の  
子の台詞「人やたまそとも、／いきやし此満納／たまかしの  
なゆか、」（№1027～1029）、谷茶の按司の台詞「一やあ  
石川、」（№1176）、谷茶の按司の台詞「一いや〜、／  
今のこと愚痴に／かたまとるむさや、／素立ひやならぬ／急  
ち戻やうれ、」（№1232～1236）、谷茶の按司の台詞「人の  
肝尽ち、／祈る願事や／御助のあも、」（№1275～1277）、  
谷茶の按司の台詞「ある間の浮世、／つらさ身に受て／思ひ  
こかれやひ、／恋死はむくひ／たるにいきゆか、／たう〜  
／おれこれよおもて」（№1307～1313）、谷茶の按司の台  
詞「はあしたひ〜、」（№1331）、谷茶の按司の台詞「な  
らぬ〜、」（№1343）、乙樽の台詞「百といつまでも／押  
てすてやへら、」（№1358～1359）、谷茶の按司の台詞「心  
くら闇に」（№1370）、谷茶の按司の台詞「一たう〜、  
／けふや道中の／草臥もあらたひもの、／若按司の側にむち

／休息よすれ、」（№1407～1411）、音曲「代もやすめて／  
上やへら」（№1445～1446）、音曲「御望の物や」（№1451）、  
泊の台詞「一是や心入とやる、」（№1489）、泊の台詞「越  
ん、／道中の重宝／仕合な事、／主やまあからまあんかひ  
まひか、」（№1492～1496）、役名「同人」（№1523）、泊  
の台詞「大川の按司の／あらさらぬ事ハ／色々にいひ立て、」（  
№1550～1554）、泊の台詞「降参しめらむて」（№1576）、  
泊の台詞「おの思子つかなてあん、／おの段村原か聞付て」（  
№1577～1578）、泊の台詞「ほんのむちや／むしやものや  
すんつひてや、」（№1602～1603）、泊の台詞「以外の、／  
村原のあやゝ／ちやあんなひらぬ」（№1634～1636）、泊  
の台詞「たあ殺しゆるいきや／そつともなひらぬ、」（№1640  
～1641）、泊の台詞「もとよたる仕形や、／ほんの／をかし  
やとおほさる、／あはあ（高笑）〜／立羽失て／どつとさん  
ぐ〜な事、／あんしおれからや／みすく聞分て／肝出ち／死  
しいきゆる命／救てたはふれ〜むて、／段々折たうれ／し  
やつとちんや、／村原としや／分別なもの、／夫の仏事うち  
なち／御返事上らの／のふのくひのむて、／たん〜と云廻  
ちやれハ、／あゝ無蔵さ／縁のかたかしち／あかさくらさも  
わからぬ、／ほんの誠に／たんしひきうち」（№1653～1679）、



泊の台詞「あた果報とつきやる／果報なワ身や、／なつくわひしち／笑ひすひ／／躍羽しち、／夜のねふしもねんたぬ、」(No.1704～1713)、泊の台詞「ほんのをかしやどおほさる、／あんしまた／満納の子や／度々御意見／おんにゆけゆんむて、／のふ目もみしらぬ／かひはうかつたん、／やつさ／【命】(人)の命てらもの／云んてとしゆる、／水つかゆすよか／あつまつさ／おそろしい畜生人、／また満納の子も／満納の子、／あて性もないらぬ／のふむて／おれほとしや(ち)／いか身からと／やひんしゆすか、／得と思てむてハ、／しゆかな／しい肝の／あちしやつ所から、／誠に満納の子とやゆる、」(No.1720～1744)、村原の比屋の台詞「やあ／」(No.1752)、泊の台詞「たうしゆ、」(No.1772)、村原の比屋の台詞「一やあ／」(No.1774)、泊の台詞「まあかひいかわん／かもて、」(No.1782～1783)、村原の比屋の台詞「いや／まあむらの／何かしやゆら、」(No.1787～1788)、泊の台詞「一むまやまあたやへるか、」(No.1792)、泊の台詞「細々の次第／おんにゆけや／ら、」(No.1804～1805)、村原の比屋の台詞「おのときに出ひ、」(No.1849)、松千代の台詞「父親の事と／按司添前みこし立、」(No.1885～1886)、松千代の台詞「君親のかたき／打捕んどもて、」(No.1891～

1892)、松千代の台詞「此事や急ち／村原につけて、／思子の前／とりかへち／敵討んともて、／肝勇ミいさて／むちていきゆん、」(No.1909～1916)、役名「松千代」(No.1927)、松千代の台詞「一やあ金松よ、／急ち内いやひ／村原のひや拝ま、」(No.1928～1930)、役名「金松」(No.1931)、金松の台詞「一たう／／急ちをかま、」(No.1932～1933)、村原の比屋の台詞「願たこと叶て／誇らしやとあゆる、」(No.1946～1947)、役名「村原」(No.1954)、村原の比屋の台詞「一やあ／、乙樽か兼て／内通のことに、」(No.1955～1957)、村原の比屋の台詞「城の門閉て、」(No.1992)、村原の比屋の台詞「やあやあ、」(No.2050)、村原の比屋の台詞「多ひ／、能々勘忍／題目とやゆる、」(No.2059～2060)、谷茶の按司の台詞「一いや供列もいらぬ」(No.)、／急け／、」(No.2129～2130)、役名「兄弟」(No.2172)、原国兄弟の台詞「一ひやひやひ」(No.2173)、役名「若按司」(No.2188)、若按司の台詞「一やあ村原よ、」(No.2189)、音曲「東江ふし」(No.2194)、音曲「一あけ夢かやゆら」(No.2195)、

「多良間本」

役名「石川」(No.878)、石川の比屋の台詞「一 さあ／＼／おんにゆけやうれ／＼」(No.879～881)、泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)、役名「同人」(No.2162)、村原の比屋の台詞「一 いやぬかすまひ」(No.2163)。

『尚家本』に見られて、対抗本に見られない箇所が一番多かったのは、泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)であった。『戯曲集』を除く九冊の対校本に見られなかった。次に多かったのは着付である。『戯曲集』と「多良間本」を除く八冊の対校本に見られなかった。特徴的であったのは、「新本本」、「豊川本」、「喜舎場本」に多く『尚家本』の記載が見られず、次いで「与那覇本」、「比嘉本」が多かった。また、八重山に伝わった写本は共通した部分が「組踊本」に記載されていないことがわかる。例えば、乙樽が義母に対して呼びかける台詞「一 やああや前よ、／＼」(No.204～205)、門番の台詞「同人／拝れよめしやいん／あれに居やうれ」(No.674～676)、乙樽の台詞「一 のゝこともおまぬ／女あてなしに、／罪科よかけて／うきくれしやしめゆすや、／村原かしワさ／恨めてとをゆる、／のよて身にかへて／実よかくしやへか、／此事やつく／とおもてたはふれ」(No.813～822)、谷茶の按司の台詞「一 たう／＼、／けふや道中の／草臥もあらたひもの、／若按司の側にむち／休息よす

れ」(No.1407～1411)、原国兄弟の台詞「松千代／一 やあ金松よ、／急ち内いやひ／村原のひや拝ま、／金松／一 たう／＼」(No.1927～1932)、など、まとまった台詞だけでなく、台詞の一箇所が共通して見られない箇所もある。また、義母の台詞「母／一 咲出ゆる花ハ／ワ身に思かへち、／のゝ肝のあとて／捨てあたか」(No.372～376)は「新本本」、「豊川本」、「喜舎場本」と「兼島本」に共通して見られない部分である。その他は対校本どうしで共通して見られる箇所は、村原の比屋の台詞「やあやあ、」(No.2050)が「与那覇本」、「比嘉本」、「新本本」、「豊川本」、「喜舎場本」。原国兄弟の台詞「兄弟／一 ひやひやひ」(No.2172～2173)が「比嘉本」、「新本本」、「豊川本」、「喜舎場本」の四つに共通して見られなかった。

次に対校本に見られ、『尚家本』に見られない記載を対校本ごとに挙げる。

「新本本」

役名「村原のひや」(No.35)、村原の比屋の台詞「大川の城／七重八重／取囲みかくて。」(No.53～55)、役名「乙樽」(No.93～)、乙樽の台詞「一 なし子わなひふたり／いちをいならん。」(No.145～146)、乙樽の台詞「たう／＼いらぬ事めしやうな／後りてやすまひ」(No.155～156)、乙樽の台詞「／＼」(No.222)、役名「同人」(No.286～)。

村原の比屋の台詞「取戻ちからに／時節待請て／敵打んともて」(No.352～354)、『母の台詞「事急ちするな」(No.470～)』、『役名「母」と台詞「一 義理のみちやれハ／留てとめらん」(No.608～610)』、『母 (No.609～)』、『音曲「歌仲間ふし／一 是迄かやよら／又拝もことも今日の出立や／定めくりしや」(No.623～627)』、『谷茶の按司の台詞「生責のたこい」(No.720)』、『谷茶の按司の台詞「生責よしやうれ」(No.722)』、『石川の比屋の台詞「同人」(No.727)』、『役名「案内聞」と台詞「一 拝留やひて」(No.730～731)』、『下部の「出うり／」(No.736～)』、『下部の台詞「さあ／居やうり／」(No.738～739)』、『乙樽の台詞「一 天のミちやたら／殺されてをらん／情け切族ら／大川の按司に／頼も方ないらぬ／村原か為に／包もかたないらぬ／お身の心ろ」(No.805～812)』、『役名「乙樽」(No.951～)』、『役名「案内者」と台詞「一 拝留や／」(No.1005～1006)』、『満納の子の台詞「なま「欠」族ら」(No.1030)』、『ト書きの台詞「☆御見合次第立方江打」(No.1071)』、『満納の子の台詞「やあ按司かなし」(No.1133)』、『石川の比屋の台詞「拝留や／」(No.1182)』、『役名「満納」と台詞「一 あゝ口惜や」(No.1191～1192)』、『谷茶の按司の台詞「一 いや推参な族ら」(No.1194)』、『谷茶の按司の台詞「童まゝ願や／進らんしゆ「欠」」(No.1200～1201)』、『谷茶の按司の台詞「なま愚痴の女／よるす事ならん」(No.

1237～1238)』、『乙樽の台詞「義理と人あらに」(No.1250)』、『乙樽の台詞「「欠」な事するな」(No.1252)』、『谷茶の按司の台詞「願事や聞よん／たう／」(No.1278～1279)』、『谷茶の按司の台詞「世界にある習／思ひ身余て」(No.1314～1315)』、『乙樽の台詞「願た事叶て」(No.1360～1361)』、『役名「あゝたうと」(No.1386)』、『役名「村原」(No.1419)』、『音曲「かふやいたふうり」(No.1444)』、『音曲「代もやすみて／売上ら」(No.1449～1450)』、『泊の台詞「あの支度やすん付てや」(No.1518)』、『泊の台詞「おつかつと「欠」すまん」(No.1520)』、『泊の台詞「村原のひやんて云すや」(No.1570)』、『泊の台詞「「欠」ふりてをたら／今のことしやすや／無調法至極／よるちたふうり／神仏てすん／願事や聞ん／御情に命ち／救てたふうり／／むて」(No.1643～1652)』、『泊の台詞「折たうりしやりハ／村原のあやゝ」(No.1680～1681)』、『泊の台詞「来る二月に／夫の三年忌の／吊濟ちから／谷悪の御返事／上らんむていちやりハ／又按司や／目はておとちやん／おり是もよるすならん事やらハ／逆も一刀に／殺ちたふうり／／んで／すいかゝりハ／おり是も濟ん／早晚迄も待ん／今月も過りて／二月も頓て／おりからや互に／枕ら打ならひ／浮世楽々と／暮そとみは」(No.1682～1701)』、『泊の台詞「天に飛登る／我身の心地／引寄てたふうり／御月うてたむて」(No.1706～1709)』、『村原の比

屋の台詞「御急ちんやゆら／尋やいめゆる」(No.1789～1790)、『泊の台詞』一 村原のあや前」(No.1793)、『村原の比屋の台詞』一 やあいや西村の／泊ひやあらに」(No.1795～1796)、『泊の台詞』「欠」ん付てや」(No.1810)、『村原の比屋の台詞』「万事いか事や／斗やいごさり」(No.1829～)、『役名「泊」と台詞』一 拝ん留やへて」(No.1831～1832)、『泊の台詞』細々の次第／耳のすけめしやいる」(No.1834～1835)、『村原の比屋の台詞』「戻」」(No.1856)、『役名「泊」』(No.1858)、『音曲「原国兄弟出羽口説』一 君と親との敵かたち／天のいたゝき兄弟の／岩やかん石やたんたい／只踏こづしふみ破り／いかな鬼神やたんたい／すたゝきさまな只置め／人の念力岩を通そ／誠むかしの物語り／聞ハ嬉しや有難や／兄弟心を打合ち／猪狩り人に身をやつし／勇ミ進て立出る」(No.1861～1873)、『松千代の台詞』「大川の城／仕合の時に／親の原国も／按司そへと共に」(No.1881～1884)、『松千代の台詞』「余「欠」しのはらん／打死と究め／嬉しさや二人／村原のひやに／尋着からに／忍ひ隠りやい／思子取戻ち／君親の敵や／おたんたい願て／忍て出る」(No.1889～1908)、『村原の比屋の台詞』「今日かたき打／おきよ出るに」(No.1948～1949)、『村原の比屋の台詞』「やあ朝夕忘れらん族ら」(No.1956)、『役名「鬼瀬」』と台詞』一 拝留やへて」(No.1979～1980)、『

役名「村原」(No.1981)、『村原の比屋の台詞』「城よ乗取て」(No.1994)、『役名「西川」と台詞』一 拝留やへて」(No.1997～1998)、『役名「村原」(No.1999)、『役名「瀬底」と台詞』一 拝留やひて」(No.2017～2018)、『役名「村原」(No.2019)、『役名「兄弟」(No.2029)、『ト書き』一 兩人一礼」(No.2030)、『役名「村原」(No.2031)、『役名「泊」(No.2047)、『泊の台詞』一 拝留やへて」(No.2048)、『役名「村原」(No.2049)、『喜瀬の大屋子の台詞』一 やあ思子我身や」(No.2085)、『谷茶の按司の台詞』「ふんのか〜」(No.2099)、『石川の比屋の台詞』「やあ按司かなし／敵の計得や／いか程かやゆら／用心「欠」すらぬ／追掛て済ん／こまからや戻て／おの計得しや〜ら」(No.2118～2123)、『谷茶の按司の台詞』一 いや臆病な事云な」(No.2126)、『役名「石川」と台詞』一 やあ按司かなし」(No.2127～2128)、『役名「谷茶」と台詞』一 いや」(No.2132～2133)、『役名「西川使石川のひや両勤」(No.2239)、『西川の子使の台詞』「城取戻ち」(No.2242)、『ト書きの台詞』「村原」と台詞「やあ思「欠」大やかなや／われ刀よ上て／御め「欠」しやうり」(No.2269～2272)

「今帰仁本」  
役名「村原のひや」(No.335)、『

村原の比屋の台詞「大川の城／七重八重／取囲みかこて」(No.633～55)、役名「乙樽」(No.93)、乙樽の台詞「同人」(No.218)、乙樽の台詞「〜」(No.222)、音曲「一 あゝけ」(No.262)、役名「同人」(No.737)、下部の台詞「一 たう〜むまに／居やうれ〜」(No.738～739)、役名「同人」(No.944)、役名「乙樽」(No.951)、役名「谷茶」(No.1386)、役名「谷茶」(No.1406)、役名「村原」(No.1419)、役名「西川の子使」(No.2239)、

「与那覇本」

役名「村原」(No.35)、村原の比屋の台詞「大川ノ城／七重八重／取囲メ囲デ」(No.53～55)、役名「乙樽」(No.93)、乙樽の台詞「タウ〜イラ事召キ／後レテヤ濟ン」(No.135～156)、乙樽の台詞「〜」(No.222)、役名「同人」(No.236)、役名「母」と台詞「一 義理ノ道ヤレバ／留テ留ラ、ン」(No.608～610)、役名「同人」と台詞「タウ〜ンマニ／イヤウリ〜」(No.737～No.739)、役名「同人」(No.944)、下部の台詞「〜」(No.947)、役名「乙樽」(No.951)、役名「同人」(No.1386)、役名「谷茶」(No.1406)、役名「村原」(No.1419)、泊の台詞「肝振テ居ヨラ／今ノ事シヤスヤ／無調法至極コク／ナイテタバウレンデイチ」(No.1643～1646)、泊の台詞「天ニ飛登ル／我身ノク、ッ」(No.1706

～1707)、泊の台詞「言ンデトシヨル」(No.1729)、役名「泊リ」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.1831～1832)、役名「喜瀬」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.1979～1980)、役名「村原」(No.1981)、村原の比屋の台詞「内ニ踏入ヤイ」(No.1993)、役名「西川」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.1997～1998)、役名「村原」(No.1999)、役名「瀬底」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.2017～2018)、役名「村原」(No.2019)、役名「兄弟」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.2029～2030)、役名「村原」(No.2031)、役名「泊リ」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.2047～2048)、役名「共」(No.2239)、

「恩河本」

役名「村原ノヒヤ」(No.35)、村原の比屋の台詞「大川ノ城／七重八重／取囲ミカクテ」(No.53～55)、役名「乙樽」(No.93)、役名「同人」(No.218)、乙樽の台詞「〜」(No.222)、音曲「一 ア、ケ」(No.262)、役名「同人」と台詞「一 タウ〜ンマニ／居ヤウリ〜」(No.737～739)、役名「同人」(No.944)、役名「同人」(No.1386)、役名「谷茶」(No.1406)、役名「村原」(No.1419)、役名「西川」(No.2239)、ト書き「大川敵討終」(No.2269～)、

「兼島本」

ト書き「第壹場」(No.2)、役名「村原ノ比屋」(No.35)、  
村原の比屋の台詞「大川ノ城ノ七重八重ノ取囲ミ困デ。」(No.63  
～55)、ト書き「第二場」(No.87)、音曲「一 ア、ケ」(No.262)、  
ト書き「第三場」(No.622)、下部の台詞「トウノ其処ニ居ヤ  
ウレノ。」と(No.738～739)、役名「乙樽」(No.766)、乙樽の台  
詞「無言」(No.767)、役名「乙樽」(No.876)、乙樽の台詞「一 無  
言」(No.877)、役名「乙樽」(No.942)、乙樽の台詞「一 無言」  
(No.943)、役名「下部」(No.944)、役名「乙樽」(No.951)、ト書  
き「仝人椅子ヲ離レ立テ独語」(No.1044)、ト書き「仝人元ノ椅  
子ニ着キ」(No.1066)、役名「谷茶」(No.1406)、役名「村原ノ比  
屋」(No.1419)、役名「西川ノ子使」(No.2239)、ト書き「大川敵  
討終」(No.2269)、

「比嘉本」

役名「村原」(No.35)、乙樽の台詞「ヤアアヤ前ヨノノ頓テ喜  
納村ヤノ便イ島デモノ御気張ヨ召レノ御供シヤベラ」(No.194  
～198)、乙樽の台詞「ノ」(No.222)、乙樽の台詞「アケヤウ  
アテナシノノノ事モ思マン」(No.250～251)、乙樽の台詞「寝  
ガ心気」(No.253)、役名「村原」(No.286)、村原の比屋の台詞「取  
戻チカラニ時節待受ケテノ敵打タントモテノ」(No.352～354)、

乙樽の台詞「欠」テ様出テノ逃忍ブ内ニ」(No.386～387)、乙樽  
の台詞「ア、トウト」(No.505)、役名「アヤ前」(No.563～572)、  
母と台詞「一 ヤア乙樽ヨノ女身ノ習ノ命振イ捨テノ今ノ  
如トヤレバノ誇ラシヤドアスガノ行先ノサダメノ定マランアレ  
ハノアケヤウ思ミ尽スノ方シ無ラヌノ一人ノ願事ノ仇ニ又  
ナヨメノ心安タトノ御待召レノヤアノ」(No.588～592)、役名  
「アヤ前」と台詞「一 義理ノ道ヤレバノ留テトメラ、ヌ」(No.  
608～610)、乙樽の台詞「案内ヨシヤベラ」(No.641)、役名「石  
川」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.683～684)、下部の台詞「ト  
ウノウマニノ居ヤウレノ」(No.738～739)、役名「欠」(No.  
944)、役名「乙ダレ」(No.951)、ト書き「谷茶」(No.1066)、谷茶  
の按司の台詞「トウノ」(No.1202)、谷茶の按司の台詞「トウ  
ノ」(No.1279)、谷茶の按司の台詞「オレ是レヨ思テノ死ノル  
我ガ命ノ頼デ御情ニノ救テ賜」(No.1284～1287)、役名「谷茶」  
(No.1406)、役名「村原」(No.1419)、泊の台詞「島国ヨ揃テノ崇  
メランシユモノ」(No.1615～1616)、村原の比屋の台詞「ヤア泊」  
(No.1818)、村原の比屋の台詞「奪取ヤイ逃ゲル」(No.1843)、松  
千代の台詞「二人命ハマテ」(No.1915)、役名「総人数」と台詞  
「一 拝留ヤビテ」(No.1952～1953)、村原の比屋の台詞「先立  
チヤイ」(No.1973)、役名「喜瀬」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.

1979～1980) 役名「村原」(No.1981) 役名「西川ノ子」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.1997～1998) 役名「村原」(No.1999) 村原の比屋と台詞「城ヨ立出ヂテ」(No.2004) 役名「瀬底」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.2017～2018) 役名「村原」(No.2019) 役名「原国兄弟」(No.2029～2030) 役名「村原」(No.2031) 役名「泊」と台詞「一 拝留ヤビテ」(No.2047～2048) 役名「村原」(No.2049) 役名「谷茶」(No.2160) 谷茶の按司の台詞「一 イヤ推参ナ事云ナ」(No.2161) 村原の比屋の台詞「残テ居ル者ヤ／居ラニ〜」(No.2181～2182) 乙樽の台詞「急チ急ガラヌ」(No.2206) 役名「西川ノ子使」(No.2239) 村原の比屋の台詞「ヤア喜瀬ノ大屋子／長刀ヨ上ゲテ／御先張シヤウレ」(No.2261～2263) 、『戯曲集』

ト書き「八番 此時組踊札懸る」(No.2) タイトル「大川敵討」(No.3) 、『ト書き』「拍子木打候得者琴三味線手毎にて村原出る。敵討之時大鼓ひやうちやこ打、ぼらがい吹く。」(No.4) 、『配役』「谷茶の按司 元浜里之子／石川のひや 上地里之子親雲上／満納の子 今帰仁里之子親雲上／下部 東風平里之子／門番 宮里筑登之／きやうちやこ持 護得久子／大川の若按司 佐久真／

村原のひや 桃原里之子親雲上／母 伊良波子／妻 小禄里之子／原国兄弟、兄松千代 大村里之子／同 弟金松 嘉味田里之子／喜瀬の大屋子 波平親雲上／西川の子 玉城里之子親雲上／瀬底下ごおり 宜野山里之子／西川の子使 立津里之子親雲上／泊 宮里筑登之／きやうちよこ持 喜舎場樽金／金の麿持 幸地真牛／」(No.5～23) 、『役名』「村原のひや詞 橋掛より出る」(No.35) 、『村原の比屋の台詞』「大川の城／七重八重／取囲みかこで、」(No.53～55) 、『ト書き』「\* \* \*」(No.87) 、『役名』「乙樽詞」(No.93) 、『役名』「乙樽詞」(No.218) 、『乙樽の台詞』「〜。」(No.222) 、『音曲』「あゝけ」(No.262) 、『役名』「母詞」と台詞「義理の道だいのもの／止めてとめらゝぬ。」(No.608～610) 、『ト書き』「\* \* \*」(No.622) 、『役名』「同人詞」と台詞「たう〜、むまに／居やうれ〜。」(No.737～739) 、『役名』「乙樽」(No.766) 、『乙樽の台詞』「……………」(No.767〜) 、『役名』「乙樽」(No.876) 、『乙樽の台詞』「……………」(No.877〜) 、『役名』「乙樽」(No.942) 、『乙樽の台詞』「……………」(No.943〜) 、『役名』「下部詞」(No.944) 、『役名』「乙樽詞」(No.951) 、『ト書き』「(谷茶独語)」(No.1044) 、『ト書き』「谷茶詞」(No.1066) 、『役名』「谷茶詞」(No.1386) 、『役名』「谷茶詞」(No.1406) 、『ト書き』「\* \* \*」(No.1412) 、『役名』「村原のひや詞」(No.1419) 、『ト書き』「\* \* \*」(No.1860) 、『

ト書き「\* \* \*」(No.1934)・ト書き「\* \* \*」  
(No.2073)・役名「西川の子使詞 橋懸より出る」(No.2239)・

「豊川本」

役名「村原」(No.35)・村原の比屋の台詞「大川の城／七重八重  
／取囲ミかこつ」(No.53～55)・乙樽の台詞「たう／いらぬ事  
めしやうな／後り」(No.155～156)・役名「乙樽」と台詞「一 掛  
るかたないらぬ／行来白玉の」(No.183～185)・乙樽の台詞「/  
」(No.222)・役名「乙樽」(No.242)・役名「同人」(No.286)・村  
原の比屋の台詞「取戻ちからに／時節待請て／敵討んともて」  
(No.352～354)・役名「母親」と台詞「一 義理のみちやれば／  
留てとめらん」(No.608～610)・音曲「仲間ふし」(No.623)・音  
曲「一 是迄か「欠」／「欠」／「欠」出立や／走くれしや」  
(No.624～627)・役名「同人」(No.638)・谷茶の按司の台詞「生  
責のたくひ」(No.720)・谷茶の按司の台詞「生責よしやうれ」(No.  
722)・役名「同人」(No.727)・役名「満納」と台詞「拜ん留やひ  
つ」(No.730～731)・下部の台詞「／」(No.736)・役名「同人」  
と台詞「さあ／居やうれ／」(No.737～739)・乙樽の台詞  
「一 天のむきやたら／殺されてをらぬ／なさけ切やから／大  
川の按司に／頼も方ないらぬ／村原か為に／包も方ないらぬ／

わ身のこゝろ」(No.805～812)・役名「乙樽」(No.951)・役名「案  
内者」と台詞「一 拜留やくて」(No.1005～1006)・満納の子の  
台詞「なまくちのやから」(No.1030)・ト書き「谷茶」(No.1044)・  
満納の子の台詞「やあ按司かなし」(No.1133)・石川の比屋の台  
詞「欠」ミ留やへて」(No.1182)・役名「満納」と台詞「一 あゝ  
口惜や」(No.1191～1192)・谷茶の按司の台詞「欠」まくちな女  
／よるす事ならぬ」(No.1237～1238)・乙樽の台詞「欠」するな」  
(No.1252)・谷茶の按司の台詞「欠」聞ん／た「欠」」(No.1278  
～1279)・谷茶の按司の台詞「世界に「欠」／「欠」身にあまつ」  
(No.1314～1315)・役名「村原」(No.1419)・音曲「欠」ふやい  
たふうれ」(No.1444)・泊の台詞「村原のひやなくくわい」(No.1570)・  
泊の台詞「肝狂てをたら／なまのこしやすや／無調法至極」  
(No.1643～1645)・泊の台詞「よるちたふうれ」(No.1647)・泊の  
台詞「むてしよたるが／あけや」(No.1656～1657)・泊の台詞「指  
の指折てむたらん」(No.1716)・泊の台詞「ふんのむきや」(No.1732)・  
村原の比屋の台詞「御急ちんやよら／尋やひみよる」(No.1789  
～1790)・泊の台詞「一 村原のあや前あゝ」(No.1793)・村原の  
比屋の台詞「一 やあいやゝ西村の／泊ひやあらぬ」(No.1795  
～1796)・泊の台詞「やすん付てや」(No.1810)・村原の比屋の台  
詞「萬いか事や／計やいひくひ「欠」」(No.1829～1830)・役名「泊」



と台詞「一 拝留や〜」(No.1831~1832)、役名「同人」と石川の比屋の台詞「細々の次第／耳[欠]」(No.1833~1835)、役名「泊」と台詞「一 拝留や〜」(No.1858~1859)、音曲「原国兄弟出羽口説／一 君と親とのてきかたき／天のいた〜ち兄弟の／岩やかん石やたんたい／只踏こつしふみ破り／いかな鬼神やたんたい／すた〜きさまな只置め／人の念力岩を通す／誠昔の物語り／聞ハ嬉しや有難や／兄弟心を合ち／しかり人に身をやつし／勇躍て立出る」(No.1861~1873)、松千代の台詞「大川の城／仕合の時に／親の原国ん／按司添と共に」(No.1881~1884)、松千代の台詞「あまれしのはらぬ／打死と究め」(No.1889~1890)、松千代の台詞「嬉しさや二人／村原のひや／尋着からに」(No.1901~1903)、松千代の台詞「思子取戻ち／君親の[欠]」(No.1905~1906)、松千代の台詞「願て出る」(No.1908)、村原の比屋の台詞「けふかたき打に／おきよ出る」(No.1948~1949)、村原の比屋の台詞「やあ朝夕わすらんやから」(No.1956)、役名「鬼瀬」と台詞「一 拝ん留や〜」(No.1979~1980)、役名「村原」(No.1981)、村原の比屋の台詞「城乗取つ」(No.1994)、役名「西川」と台詞「一 拝ん留や〜」(No.1997~1998)、役名「村原」(No.1999)、役名「瀬底」と台詞「一 拝ん留や〜」(No.2017~2018)、役名「村原」(No.2019)、役名

「原国兄弟」(No.2029)、原国兄弟の台詞「一 一礼」(No.2030)、役名「村原」(No.2031)、役名「泊」と台詞「一 拝ん留や〜」(No.2047~2048)、役名「村原」(No.2049)、喜瀬の大屋子の台詞「一 やあ思子我身」(No.2085)、谷茶の按司の台詞「ふんのか〜」(No.2099)、役名「同人」と石川の比屋の台詞「やあ按司かなし／敵の計や／いか程かやよら／用心のんすらぬ／追掛て済ん／こまからや戻て／おの計しや〜ら」(No.2117~2124)、谷茶の按司の台詞「一 いや臆病な事云な」(No.2126)、役名「石川」と台詞「一 やあ按司かなし」(No.2127~2128)、役名「谷茶」と台詞「一 ゝや」(No.2132~2133)、役名「若按司」と台詞「一 やあ村原よ」(No.2192~2193)、役名「西川」(No.2239)、西川の子使の台詞「城取帰ち」(No.2242)、

「喜舎場本」

役名「村原」(No.35)、村原の比屋の台詞「大川の城／七重八重／取囲ミかくて」(No.53~55)、役名「乙樽」(No.93)、乙樽の台詞「たう〜入らぬ事召うな／後りてや済ん」(No.155~156)、乙樽の台詞「〜」(No.222)、役名「同人」(No.236)、役名「同人」(No.242)、役名「同人」(No.286)、役名「同人」(No.291)、の台詞【「時節待請い」】(No.348)、村原の比屋の台詞「取戻ちから

に／時節待請て／敵討んともて」(No.352～354)、『母の台詞「事  
急ちするな」(No.470)、『役名「母／一 義理のみちやれば／留て  
とみらん」(No.608～610)、『音曲「仲間ふし／一 是迄かやよ  
ら／又拝む事ん／今日の出立や／定くれしや」(No.623～627)、『  
谷茶の按司の台詞「生責のたくひ」(No.720)、『谷茶の按司の台詞  
「生責よしやうり」(No.722)、『役名「同人」(No.727)、『役名「案  
内者」と台詞「一 拝留やひて」(No.730～731)、『下部の台詞「出  
やうれ／」(No.736)、『下部の台詞「さあ／居やうれ／」  
(No.738～739)、『乙樽の台詞「一 天の道やたら／殺ておらん／  
情切族ら／大川の按司に／頼方ないらん／村原か為に／包も方  
無らん／我身のこころ」(No.805～812)、『役名「乙樽」(No.951)、『  
乙樽の台詞「御難儀とやよる」(No.955)、『役名「案内者」と台詞  
「一 拝留やひて」(No.1005～1006)、『満納の子の台詞「なま愚  
痴の族ら」(No.1030)、『満納の子の台詞「やあ按司かなし」(No.1133)、『  
石川の比屋の台詞「一 拝留やひて」(No.1182)、『石川の比屋の  
台詞「満納いやる」と」(No.1190)、『役名「満納」と台詞「一  
あゝ口惜や」(No.1191～1192)、『谷茶の按司の台詞「一 いや推  
参な族ら」(No.1194)、『谷茶の按司の台詞「望俣願や／進らんし  
ゆもの」(No.1200～1201)、『谷茶の按司の台詞「なま愚痴の女／  
よるす事ならん」(No.1237～1238)、『谷茶の按司の台詞「願事や

聞よん／たう／」(No.1278～1279)、『谷茶の按司の台詞「世界  
にある習ひ／思ひ身に余て」(No.1314～1315)、『乙樽の台詞「願  
た事叶て／御拝と拝も」(No.1360～1361)、『役名「村原」(No.1419)、『  
音曲「代もやすめて／売上ら」(No.1449～1450)、『泊の台詞「あ  
の支度やすん付てや」(No.1518～)、『泊の台詞「おつかつといち  
や濟ん」(No.1520)、『泊の台詞「村原のひやむつ云すや」(No.1570)、『  
泊の台詞「たちすやしらん」(No.1637)、『泊の台詞「肝ふれてお  
たら／今のことしやすや／無調法至極」(No.1643～1645)、『  
泊の台詞「宥ち給り／神仏てすん／願事や聞ぬ／御情に命ち／  
救て給り／／むて」(No.1647～1652)、『泊の台詞「折たふりし  
やりハ／村原のあや／来る三月に／夫の三年忌の／吊濟から  
／よしあしの御返事／上らむていちやりハ／又按司や／目はて  
おとちゃん／是もよるせならん事やは／逆も一刀に／殺ち給  
ふり／／むて／すいち掛たれハ／おれ是も濟ん／早晚までん  
待ん／今月も過て／二月も頓て／おれからや互に／枕打並ひ／  
暮そとみは」浮世楽々と」(No.1680～1701)、『泊の台詞「天に飛  
登る／我身の心地／引寄て給ふり／御月うてたむて」(No.1706  
～1709)、『村原の比屋の台詞「御急ちんやよら／尋やひみよる」  
(No.1789～1790)、『泊の台詞「一 村原のあや前ある」(No.1793)、『  
村原の比屋の台詞「一 やあいや／西村の／泊やあらん」(No.

1795～1796)‘泊の台詞「やすん付てや」(No.1810)‘村原の比屋の台詞「萬いか事や／計や／呉り」(No.1829～1830)‘役名「泊」と台詞「一 拝留やひて」(No.1831～1832)‘泊の台詞「細々の次第／耳のすけみしやい／くり」(No.1834～1835)‘役名「泊」と台詞「一 拝留やひて」(No.1858～1859)‘(No.1859～)‘音曲「原国兄弟口説／一 君と親との敵かたき／天の多た／け兄弟の／岩やかん石やたんだひ／只踏崩しふミ破り／いかな鬼神やたんだひ／すた／割まなた置ミ／人の念力岩を通そ／誠むかしの物語り／聞ハ嬉しや有難や／兄弟心を合ち／猪狩人に身をやつり／勇ミ進て立出る」(No.1861～1873)‘松千代の台詞「大川の城／仕合の時に／親の原国も／按司添と共に」(No.1881～1884)‘松千代の台詞「余り忍らん／討死と究ミ」(No.1889～1890)‘松千代の台詞「嬉しさや双り／村原のひやに／尋着からに／忍ひ隠りやひ／思子取戻ち／君親の敵や／討んだひ願て／忍て出る」(No.1901～1908)‘村原の比屋の台詞「けふかたき討に／をきよ出る」(No.1948～1949)‘村原の比屋の台詞「やあ朝夕忘れらん族ら」(No.1956)‘役名「鬼瀬」と台詞「一 拝留やひて」(No.1979～1980)‘役名「村原」(No.1981)‘村原の比屋の台詞「城よ乗取て」(No.1994)‘役名「西川」と台詞「一 拝留やひて」(No.1997～1998)‘役名「村原」(No.1999)‘役名「瀬底」と台詞

「一 拝留やひて」(No.2017～2018)‘役名「村原」(No.2019)‘役名「兄弟」(No.2029)‘原国兄弟の台詞「一 巻礼」(No.2030～)‘役名「村原」(No.2031)‘役名「泊」と台詞「一 拝留やひて」(No.2047～2048)‘役名「村原」(No.2049)‘喜瀬の大屋子の台詞「一 やあ思子我身や」(No.2085)‘谷茶の按司の台詞「ふんのか／」(No.2099)‘石川の比屋の台詞「やあ按司かなし／敵の計ひや／いか程かやよら／用心もすらぬ／追掛て濟ん／こまからや戻て／おの計得しやひら」(No.2118～2124)‘谷茶の按司の台詞「一 いや臆病な事いふな」(No.2131)‘役名「若按司」と台詞「一 やあ村原よ」(No.2192～2193)‘役名「西川使」(No.2239)‘西川の子使の台詞「城取替ち」(No.2242)‘

#### 「多良間本」

役名「村原」(No.35)‘村原の比屋の台詞「大川の城／七重八重／取囲めかくて」(No.53～55)‘役名「同人」(No.218)‘乙樽の台詞「／」(No.222)‘音曲「東江ふし／一 衾楽／と／ねるか心気」(No.233～235)‘役名「同人」(No.944)‘役名「乙たろ」(No.951)‘満納の子の台詞「やあ按司加那志」(No.1133)‘役名「谷茶」(No.1386)‘役名「谷茶」(No.1406)‘音曲「／」(No.1418)‘役名「村原」(No.1419)‘泊の台詞「そんむて」(No.1552)‘泊の

台詞「手の指まで／打かへし／」(No.1714～1715)、村原の比屋の台詞「一 むゝ命ふり捨て／主人いさめよす」(No.1746～1747)、音曲「原国兄弟出羽／一 君と親との敵かたき／ともに天かめ地やふまん／いかな岩石やたんたひ／只蹈崩しふみやふり／いかな鬼神やたんたひ／すた／／きさまなたゝうちゆめ／人の念力岩をとそ／誠むかしの物語り／聞ハ嬉しや有難や／兄弟心を打合ち／しゝかり人に身をやつし／勇ミすゝむて立出る」(No.1861～1873)、乙樽の台詞「やあ／／親かなし／乙松か事や／いちやかあやひら」(No.2220～2223)、村原の比屋の台詞「一 母親ん乙松ん／替る事にやあらん／やあ乙樽」(No.2225～2227)、役名「西川の子使」(No.2239)。

次に、『尚家本』と対校本の記載が異なる部分について挙げる。各対校本に共通してみられる異同は、村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「請返答能う」となっている。これは『尚家本』以外のすべての「組踊本」で「請返答」となっていて、『尚家本』の書き損じであると思われる。また、泊の台詞「谷屋良村んかこ」(No.1491)が「北谷屋良村んかへ」となっている。これは「多良間本」が「小谷」となっている以外の対校本は「北谷」となっている。これも『尚家本』の書き損じであると思われる。また「多良間本」も、「北」と

「小」の草書が似ているため、書き損じたと考えられる。次に多いのが泊の台詞「扱も／／奇妙な事い」(No.1596)が「さても／／妙なもの。」となっている点である。尚家本の「い」は、一部筆が途切れているため、「の」である可能性もあるが、「与那覇本」が「妙ナ事」、「喜舎場本」が「神妙なもの」となっている以外は、おおむね「妙なもの」となっている。「おおむね」としたのは、欠字のある「組踊本」もあるためである。また、『尚家本』の書き損じと思われるが、谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(No.2136)が「恩儀忘却」となっている。「恩」という字を書きたかったと思われるが、字は「忍」になっている。これは「新本本」「恩「欠」も知らん」、「豊川本」「恩賞も知らん」、「喜舎場本」「恩賞も知らん」となっており、八重山系の「組踊本」が軒並み「恩賞も知らん」となっている以外は、すべて「恩義忘却」となっている。「此間の忍に」(No.2114)も、字は「恩」という字を「忍」に書き損じており、「今帰仁本」「与那覇本」が「此間の恩義」、「新本本」が「此間恩に」、「豊川本」が「此間の恩」、「喜舎場本」が「此間の恩や」としている以外は「此間の恩に」となっている。さらに、喜瀬の大屋子の台詞が「一 鬼瀬たやく」(No.2086)となっており、「る」の文字が落ちている。「新本本」「豊川本」「喜舎場本」は「鬼瀬大屋子たやひん」と「大屋子」が挿入されており、それ以外の対校本は「喜瀬だやべる。」となっている。八重山系の「組

踊本」のみ、尚家本と同じく「鬼瀬」となっている点も注目できる。

この尚家本との異同は、すべて尚家本の書き損じであると思われる。

記載の移動は、谷茶の按司の台詞「なやかやい<sup>を</sup>ても、」(No.1366)がすべての対校本で「なやがやり居すが、」系となっており、また、泊の台詞「頼まつて行ん、」(No.1470)は全ての対校本で「頼まつて居ん。」となっている。さらに村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235)が『戯曲集』「今帰仁本」「恩河本」「多良間本」で「敵の手に渡る」となっており、「与那覇本」「兼島本」「比嘉本」で「敵ノ手ニ渡テ」となっており、「新本本」「喜舎場本」で「敵の手に行い」となっており、「豊川本」で敵の手に」となっている。各対校本ともに、『尚家本』と同じ記載は見られなかった。それから、村原の比屋の台詞「思子の事と」(No.339)は、『戯曲集』以外で「思子の事や」となっており、乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)は、「比嘉本」に記載が見られない他は「我肝落付ちゆて、」となっている。さらに、乙樽の台詞「生れ日てやり、」(No.2209)は、「恩河本」「比嘉本」を除く対校本が「生れ日よてやり」よ助詞の「よ」が挿入されており、村原の比屋の台詞「一段な事よ〜、」(No.2247)は「与那覇」「比嘉本」「喜舎場本」以外で「一段な事〜。」と助詞の「よ」が欠落している。以下、各「組踊本」の異同を見ていく。

「新本本」

村原の比屋の台詞「あゝ谷茶あまやか」(No.43)が「はあ谷茶あまやか」となっている。

村原の比屋の台詞「大川の御運」(No.76)が「大川の武運」となっている。

乙樽の台詞「しらへのあれハ、」(No.111)が「しらし部のありは。」となっている。

乙樽の台詞「程程になさハ、」(No.152)が「程々にならは」となっている。

乙樽の台詞「君親の事も」(No.153)が「君親の事や」となっている。

乙樽の台詞「たう〜御気張よめしやうれ」(No.157)が「御気張よめしやうり」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.159)が「三人道行子持ふし仲間ふし」となっている。

音曲「道行なかんかりふし」(No.170)が「子持ふし」となっている。

役名「母」(No.180)が「歌 干瀬ふし」となっている。

音曲「子持ふし」(No.186)が「母」となっている。

乙樽の台詞「すと親のこども、」(No.207)が「姑親の事や」と

なっている。

乙樽の台詞「ワぬことる親に」(No.223)が「わんもある親に」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松」(No.243)が「やあ乙松よ」となっている。

乙樽の台詞「跡方ハ頼て」(No.248)が「跡方や頼て」となっている。

音曲「東江ふし」(No.261)が「歌 東江ふし」となっている。

乙樽の台詞「頼て喜名村や」(No.267)が「頼て喜名村」となっている。

村原の比屋の台詞「按司添と共に」(No.337)が「按司添と諸共に」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事と」(No.339)が「思子の事や」となっている。

村原の比屋の台詞「いきやし乙松」(No.370)が「いきやし乙松や」となっている。

乙樽の台詞「三人逃忍て」(No.384)が「三人共逃忍て」となっている。

乙樽の台詞「我身に思つききやる」(No.411)が「我身に斗とるとなっている。

乙樽の台詞「巧てをることのこと」(No.419)が「巧てをる事や」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やん」(No.423)が「我肝落着て」となっている。

役名「乙樽原」(No.437)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「義理のならひ」(No.441)が「義理の習や」となっている。

村原の比屋の台詞「末代の恥辱」(No.454)が「あゝ末代の恥辱」となっている。

村原の比屋の台詞「曾て此事や」(No.456)が「はあ曾て此事や」となっている。

母の台詞「一 あゝ事あらくするな」(No.469)が「一 やあゝ事あらくするな」となっている。

母の台詞「やあ乙樽」(No.471)が「やあ乙樽よ」となっている。

村原の比屋の台詞「女只ひちゆひ」(No.491)が「女只一人は」となっている。

村原の比屋の台詞「断やしちやる」(No.494)が「むはんやいちやる」となっている。

村原の比屋の台詞「今の心さし」(No.495)が「あゝ今の志」と

なっている。

村原の比屋の台詞「いちも盡さらぬ」(No.496)が「いちんつくさらへ」となっている。

村原の比屋の台詞「分別もならぬ」(No.500)が「分別やないらん」となっている。

乙樽の台詞「こころつくさ」(No.509)が「心尽しやへら」となっている。

乙樽の台詞「一人の願事の」(No.521)が「一人の願事や」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「請返答ゆう」となっている。

村原の比屋の台詞「切巧てをる次第」(切は見せ消ちカ)(No.546)が「巧てをる次第」となっている。

村原の比屋の台詞「多ひ能々分別」(No.557)が「能々分別」となっている。

乙樽の台詞「肝願よしちをて」(No.606)が「肝の願しちゆて」となっている。

乙樽の台詞「まちやひいまふれ」(No.618)が「御待めしやうれ」となっている。

音曲「伊野波ふし下句」(No.619～621)が「歌仲間ふし」とな

っている。

音曲「乙樽道行金武ふし」(No.628～632)が「乙樽道行饒波ふし」となっている。

乙樽の台詞「仕合の時(に)」(No.653)が「仕合の内に」となっている。

乙樽の台詞「すかる方ならぬ」(No.657)が「暮そ方ないらん」となっている。

門番の台詞「無蔵なもの」(No.670)が「無蔵な者のさらめ」となっている。

門番の台詞「待ひをれよ」(No.672)が「待より」となっている。

谷茶の按司の台詞「いきやあれはすにゆか」(No.681)が「いやあれは済め」となっている。

満納の子の台詞「一され按司かなし」(No.686)が「一やあ按司かなし」となっている。

満納の子の台詞「ああれほとの村原も」(No.691)が「はああれ程の村原も」となっている。

満納の子の台詞「扱々御果報」(No.701)が「さて〜此果報」となっている。

満納の子の台詞「多い事たやへる」(No.702)が「い多事とやよる」となっている。

谷茶の按司の台詞「一段な事よ」(No.704～705)が「一段な事」となっている。

谷茶の按司の台詞「やあ石川のひや」(No.706)が「やあ石川の比屋」となっている。

役名「石川」(No.725)が「満納」となっている。

役名「下部」(No.732)が「同人案内」となっている。

下部の台詞「さあ」(No.733)が「やあ」となっている。

満納の子の台詞「おかたちか巧ミ」(No.744)が「いかたちか巧ミ」となっている。

満納の子の台詞「直におの科」(No.748)が「直におの科や」となっている。

満納の子の台詞「責もさぬこと」(No.751)が「責もさんこと」となっている。

満納の子の台詞「島知行もとらち」(No.758)が「島知行とらち」となっている。

満納の子の台詞「おんにゆけやうれ」(No.765)が「おんによけれ」となっている。

満納の子の台詞「あ好てこのまらぬ」(No.769)が「はあ好て好まらん」となっている。

満納の子の台詞「聞答とやすか」(No.797)が「聞答とよか」となっている。

乙樽の台詞「たこともないらぬ」(No.844)が「たら事やないらぬ」となっている。

石川の比屋の台詞「のよおめのあゆか」(No.868)が「此外にあよミ」となっている。

乙樽の台詞「鬼のことめしやうち」(No.900)が「鬼のことしちよて」となっている。

谷茶の按司の台詞「あたになるやれは」(No.916)が「あたになるやらは」となっている。

谷茶の按司の台詞「かくさすに語れ」(No.922)が「真直に語り」となっている。

満納の子の台詞「いや、此上に又も」(No.924)が「此上に亦も」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこゝれしちをて」(No.932)が「たう／＼おのこゝりしゆて」となっている。

満納の子の台詞「多ひ差繩持ち」(No.934)が「やあ差繩も持い」となっている。

役名「下部」(No.938)が「案内」となっている。

満納の子の台詞「是と鬼やゆる」(No.973)が「是と鬼ぢらめ」



となっている。

役名「下部」(No.976)が「案内聞」となっている。

下部の台詞「一せめられる(う)の」(No.977)が「一せめられるわざの」となっている。

乙樽の台詞「按司がなし上に」(No.991)が「按司そへ前上に」となっている。

谷茶の按司の台詞「急ちときゆるす、」(No.1004)が「ふとちとらす」となっている。

乙樽の台詞「此御恩たうとさや」(No.1009)が「御恩たうとさや」となっている。

乙樽の台詞「我身よりも増て、」(No.1016)が「我んよいんまさる」となっている。

谷茶の按司の台詞「思案より外の」(No.1039)が「思案故外の」となっている。

谷茶の按司の台詞「雪のしらはくき」(No.1048)が「雪色の齒口」となっている。

谷茶の按司の台詞「物云さし聞ハ、」(No.1049)が「物云やし聞ハ」となっている。

谷茶の按司の台詞「ワ肝明々と」(No.1064)が「我肝明々と(ハリバリト)」となっている。

谷茶の按司の台詞「おかとしちすまぬ、」(No.1069)が「おつかつとしちらぬ」となっている。

谷茶の按司の台詞「けふや立別て」(No.1070)が「今日や立戻て」となっている。

谷茶の按司の台詞「思案しちからに、」(No.1072)が「思案しちをとて」となっている。

満納の子の台詞「めしやいること、」(No.1078)が「めしやいること」となっている。

満納の子の台詞「かたまゆる積り、」(No.1090)が「しよる積いやりは」となっている。

満納の子の台詞「牢に込置て」(No.1091)が「籠込よしちゆて」となっている。

満納の子の台詞「御思案の内や」(No.1099)が「先御思案の内や」となっている。

石川の比屋の台詞「責もさぬこと、」(No.1105)が「責もさんことに」となっている。

石川の比屋の台詞「先牢こめや」(No.1113)が「先籠込も」となっている。

石川の比屋の台詞「はからやいをれハ、」(No.1125)が「計得をりは」となっている。

満納の子の台詞「命ち限り、」（No.1132）が「命のある限り」となっている。

満納の子の台詞「みよんにゆけやや／＼か、」（No.1135）が「みおんにゆけや／＼ひすか」となっている。

満納の子の台詞「御肝きやさあら／＼、」（No.1137）が「御肝ちやさ有りハ」となっている。

満納の子の台詞「一 あ／＼按司かなし天の」（No.1156）が「一はあ按司かなし天の」となっている。

谷茶の按司の台詞「愚痴にかたまとめ、」（No.1169）が「愚痴にかたまよめ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なけすて／＼とらさ、」（No.1171）が「切捨てとらさ」となっている。

谷茶の按司の台詞「ワか下知に背く」（No.1177）が「主の下知聞ぬ」となっている。

谷茶の按司の台詞「気任のやから、」（No.1178）が「いか俣の族ら。」となっている。

乙樽の台詞「御ゆるせよめしやうれ、」（No.1210）が「よるちたふうり」となっている。

乙樽の台詞「ゆるちたはふれ、」（No.1245）が「よるたふうり」となっている。

谷茶の按司の台詞「頼て御情に」（No.1282）が「御情になりて」となっている。

谷茶の按司の台詞「なれて給ふれ、」（No.1283）が「よるちたふうり」となっている。

乙樽の台詞「道のあるひ、」（No.1300）が「道のあよめ」となっている。

谷茶の按司の台詞「恋忍ぶ道の」（No.1306）が「恋忍ひてすん」となっている。

乙樽の台詞「引されていきゆさ」（No.1324）が「ひかされて行く」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」（No.1339）が「おの内や気張て」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 いや／＼是や」（No.1342）が「一 いや／＼」となっている。

乙樽の台詞「一 おれこれもゆるし」（No.1345）が「一 おりしもよるす」となっている。

谷茶の按司の台詞「いつまでもまぢゆん、」（No.1351）が「早晩までん待ん」となっている。

谷茶の按司の台詞「このたけにワ身や」（No.1365）が「あ／＼」のたけにワ身や」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをても」(No.1366)が「なやかやいをすか」となっている。

谷茶の按司の台詞「よろこひもおくさ」(No.1379)が「嬉しさん大さ」となっている。

谷茶の按司の台詞「此内やとかく」(No.1388)が「此間や兎角」となっている。

谷茶の按司の台詞「此間のくつさ」(No.1392)が「此間の苦しや」となっている。

谷茶の按司の台詞「はあきよろさ」(No.1400)が「あゝ清さ」となっている。

乙樽の台詞「御側むちをかて」(No.1403)が「御側出ちをとて」となっている。

村原の比屋の台詞「物売にやつれ」(No.1429)が「物売に躍り」となっている。

音曲「さいんそるふし」(No.1431)が「村原道行哥」となっている。

音曲「持ちをやへん」(No.1439)が「持やひん」となっている。

音曲「きせるも宝蔵も」(No.1440)が「きせるも火縄も宝蔵も」となっている。

音曲「持つをやへん」(No.1441)が「持やへん」となっている。

音曲「持ちをやへん」(No.1443)が「持やいん」となっている。

泊の台詞「むちやん一ツ」(No.1461)が「御神一ツ」となっている。

泊の台詞「頼まつて行ん」(No.1470)が「頼まつてをん」となっている。

村原の比屋の台詞「御支度の御様子」(No.1484)が「御支度の様子」となっている。

村原の比屋の台詞「御中途の御用」(No.1485)が「御中の御用」となっている。

泊の台詞「谷屋良村んかい」(No.1491)が「北谷屋良村んかい」となっている。

泊の台詞「仕合な事」(No.1494)が「仕合とやよる」となっている。

泊の台詞「むゝたしかに村原のひややすか」(No.1517)が「確に村原の比屋やすか」となっている。

泊の台詞「しかつと見覚のなひらぬ」(No.1519)が「しかつと見分ないらん」となっている。

泊の台詞「むゝあゝ」(No.1531)が「あゝ」となっている。

泊の台詞「国々の按司部うたんで」(No.1551)が「国々の按司部」となっている。

泊の台詞「分別の分別ならぬ、」（No.1561）が「分別ならん」  
となっている。

泊の台詞「終にや思子や生捕られ、」（No.1566）が「終にや嫡  
子や生捕られ」となっている。

泊の台詞「行衛しれらぬ、」（No.1569）が「行衛知らぬあすか」  
となっている。

泊の台詞「共につかなてたはふれ〜むて」（No.1582）が「共  
に飼てこいりんて」となっている。

泊の台詞「満納の子なつくわひ」（No.1585）が「満納の子や」  
となっている。

泊の台詞「村原か計むて」（No.1587）が「村原か計事んて」と  
なっている。

泊の台詞「問尋掛引段々、」（No.1591）が「問掛引段々」とな  
っている。

泊の台詞「扱も〜寄妙な事い」（No.1596）（の力。一部筆が  
途切れている）が「扱も〜妙なもの」となっている。

泊の台詞「たあ按司や」（No.1604）が「按司や」となっている。  
泊の台詞「ちやむとうちほれて、」（No.1605）が「ちやん打振  
て」となっている。

泊の台詞「石川満納も追ぬけて、」（No.1610）が「石川満納追

のけて」となっている。

泊の台詞「むてしゆて」（No.1629）が「んて」となっている。

泊の台詞「わたの底まで」（No.1631）が「無蔵さわたの底まで」  
となっている。

泊の台詞「待と嬉しこと」（No.1702）が「あゝ待と嬉しこと」  
となっている。

泊の台詞「よろこひも大（ヲへ）さ」（No.1703）が「嬉さん大  
さ」となっている。

泊の台詞「ひしやの指まで」（No.1717）が「夜昼足の指まで」  
となっている。

泊の台詞「打かへし〜しゆて」（No.1718）が「折かへし」  
〜」となっている。

泊の台詞「むな待しゆらむておもれ、」（No.1719）が「待か  
んてしゆんてて」となっている。

泊の台詞「こまんまひら、」（No.1770）が「こまとん参らは」  
となっている。

泊の台詞「なあやのふしやる人か」（No.1780）が「一  
あのふしやる人。」となっている。

村原の比屋の台詞「一 細々の次第」（No.1785）が「一 やあ  
〜細々の次第」となっている。

村原の比屋の台詞「聞ほしやよあすか、」（No.1786）が「聞ふしやよあてと」となっている。

泊の台詞「さうひ拝んしやへらぬ」（No.1801）が「さり拝んしやへらん」となっている。

村原の比屋の台詞「気張て呉れ、」（No.1822）が「働ちやいこいりよ」となっている。

村原の比屋の台詞「かたきうちとらへ、」（No.1824）が「敵よ打取は」となっている。

役名「同人」（No.1836）が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「おのときに出て、」（No.1849）が「おの時に向て」となっている。

役名「原国兄弟」（No.1874）が「原国兄弟云葉」となっている。

松千代の台詞「一なま出る二人や」（No.1875）が「一兄弟の者や」となっている。

松千代の台詞「弟子金松、」（No.1880）が「弟子金松よ」となっている。

松千代の台詞「兼て聞及て、」（No.1888）が「聞ははかなさや」となっている。

松千代の台詞「ふたり命はまで」（No.1893）が「二人押烈て」となっている。

松千代の台詞「思子の前と」（No.1895）が「若按司の子や」となっている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」（No.1897）が「村原の比屋取留らんでの」となっている。

音曲「揚口説」（No.1917）が「道行口説」となっている。

音曲「たゞきりひらちわつて入」（No.1921）が「只切へらきわつと入」となっている。

音曲「首打落すその手並み」（No.1923）が「首打落すその手並みに」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ寔慈悲なさや」（No.1938）が「あゝ慈悲な」となっている。

村原の比屋の台詞「我按司の報ひ、」（No.1939）が「我按司の御果報」となっている。

村原の比屋の台詞「かたき討取ゆる」（No.1958）が「敵かたけ打取る時節」となっている。

村原の比屋の台詞「御運廻り来て、」（No.1959）が「武運廻り来て」となっている。

村原の比屋の台詞「けふのよかる日二」（No.1960）が「今日かたけ打に」となっている。

役名「原国兄弟」（No.1962）が「総人数」となっている。

原国兄弟の台詞「一 こつきやうの時節」(No.1963)が「一 肝要な時節」となっている。また、(No.1963～1966)まで「原国兄弟」ではなく「総人数」の台詞となっている。

村原の比屋の台詞「山に伏よかくれ」(No.1986)が「山に伏隠れ」となっている。

村原の比屋の台詞「城立出て」(No.1988)が「城よ立出」となっている。

村原の比屋の台詞「道の口立ふさぢ」(No.2006)が「道の口立よ塞き置」となっている。

村原の比屋の台詞「山路真中」(No.2007)が「山の真中」となっている。

村原の比屋の台詞「島国も崩す」(No.2011)が「島国よ崩す」となっている。

村原の比屋の台詞「若谷茶あまやか」(No.2013)が「若か谷茶か」となっている。

村原の比屋の台詞「うちよ留れ」(No.2016)が「打留り」となっている。

村原の比屋の台詞「城走登て」(No.2038)が「城よ走登」となっている。

村原の比屋の台詞「高らかにつけて」(No.2042)が「たから

かに上て」となっている。

村原の比屋の台詞「北の山道に」(No.2045)が「北の山道」となっている。

村原の比屋の台詞「案内しやしやうれ」(No.2046)が「案内よしやうれ」となっている。

村原の比屋の台詞「慥にきけ」(No.2052)が「たによ聞留り」となっている。

村原の比屋の台詞「傍輩の中」(No.2053)が「傍輩中」となっている。

村原の比屋の台詞「腹の立まゝに」(No.2057)が「はら立る俣に」となっている。

村原の比屋の台詞「ぬひく、能々勘忍」(No.2059)が「能々勘忍」となっている。

村原の比屋の台詞「急ち立向ら」(No.2071)が「急ち立出り」となっている。

村原の比屋の台詞「いそち打立に」(No.2072)が「急ち立寄り」となっている。

音曲「乙樽思子引取逃走はや作田ふし」(No.2074～2078)が「思子出羽いきんたうふし」となっている。

乙樽の台詞「一 思子取戻ち」(No.2080)が「一 思子取戻そ」

となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ、」（No.2081）が「明間斗やい」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「鬼瀬たや」（No.2086）が「鬼瀬大屋子たやひん」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「御供しやへら、」（No.2087）が「たう／＼御供しやひら」となっている。

泊の台詞「むゝにや時分たひらう」（No.2089）が「むゝにや時分たひらう」となっている。

泊の台詞「思子引取て」（No.2094）が「思子引烈りて」となっている。

谷茶の按司の台詞「あゝ扱も〜」（No.2098）が「あゝ扱も〜」となっている。

石川の比屋の台詞「やあ〜」（No.2112）が「はあ」となっている。

石川の比屋の台詞「御供しやうれ、」（No.2116）が「御供しやひら」となっている。

谷茶の按司の台詞「あれよ〜」（No.2135）が「あれ〜」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」（注、字は「忍」になっている）

（No.2136）が「恩「欠」も知らん」となっている。

乙樽の台詞「思子、御迎に」（No.2142）が「御迎に」となっている。

乙樽の台詞「忍てきちをゆん、」（No.2143）が「忍て着ん」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」（注、字は「忍」になっている）（No.2144）が「此間恩に」となっている。

役名「乙樽」（No.2151）が「鬼瀬」となっている。

乙樽の台詞「寄よらへよすれ／切はたちとらさ、」（No.2152〜2153）が鬼瀬の台詞「寄よらへ寄り／切捨てとらさ」となっている。

村原の比屋の台詞「廻てきちやめ、」（No.2159）が「廻て来たか」となっている。

役名「同人」（No.2162）が「谷茶」となっている。

村原の比屋の台詞「いやぬかすまひ、」（No.2163）が谷茶の台詞「いやのかすまい」となっている。

原国兄弟の台詞「待受てをす」（No.2167）が「待請てをたす」となっている。

原国兄弟の台詞「しつちをため、」（No.2168）が「知らんあたす」となっている。

原国兄弟の台詞「一 谷茶あまやや」(No.2175)が「一 いや  
谷茶あまやや」となっている。

役名「瀬底」(No.2183)が「谷茶供」となっている。

瀬底下庫理の台詞「降参たやへる」(No.2185)が谷茶供の台  
詞となっている。

村原の比屋の台詞「一 神妙なこと」(No.2187)が「一  
一段な事」となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ拝てなく事や」(No.2197)が「一  
あゝ拝てなつかしや」となっている。

村原の比屋の台詞「ゆめかややくら」(No.2198)が「夢か  
やゆら」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり」(No.2209)が「生れ日よてやり」  
となっている。

乙樽の台詞「けふ拝事や」(No.2218)が「又拝事や」となつて  
いる。

村原の比屋の台詞「美御迎しちゃん」(No.2231)が「美御迎  
もしちやる」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235)が「敵の手に行  
い」となっている。

西川の子使の台詞「一 され西川の子」(No.2240)が「一 さ

り」我身や」となっている。

西川の子使の台詞「使たやくる」(No.2241)が「石川の御使  
たやくる」となっている。

西川の子使の台詞「城乗取やくひ」(No.2243)が「城乗取て」と  
なっている。

西川の子使の台詞「美御迎たやくる」(No.2245)が「御待た  
やくる」となっている。

村原の比屋の台詞「一 一段な事よ」(No.2247)が「一  
一段な事」となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ思子も拝て」(No.2249)が「一 あゝ  
思子も拝み」となっている。

村原の比屋の台詞「ものにとららぬ」(No.2252)が「物に  
立てらん」となっている。

村原の比屋の台詞「たう」本の御城に」(No.2253)が「た  
う」本の御城」となっている。

村原の比屋の台詞「美よんつかい拝みやくら」(No.2254)が  
「美御つかへ拝ま」となっている。

若按司の台詞「一 嬉しさや互に」(No.2256)が「一 嬉しさ  
や村原」となっている。

役名「村原」(No.2258)が「総人数」となっている。



村原の比屋の台詞「うれしや踊羽」(No.2259)が「嬉しや事躍り羽」となっている。

「今帰仁本」

村原の比屋の台詞「軍押寄すて」(No.52)が「軍打寄て」となっている。

乙樽の台詞「人になちからや(に)」(No.122)が「人になちからに」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.159)が「村原母并妻なし子道行仲間ふし」となっている。

音曲「道行なかんかりふし」(No.170)が「三人道行なかんかりふし」となっている。

乙樽の台詞「すと親のことも」(No.207)が「すと親の事や」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松よ」(No.221)が「やあ乙松」となっている。

乙樽の台詞「なさつたる因果」(No.224)が「なつたる因果」となっている。

乙樽の台詞「跡方ハ頼て」(No.248)が「跡方や頼て」となっている。

いる。

村原の比屋の台詞「思子の事と」(No.339)が「思子の事や」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ此上とやすか」(No.401)が「あゝ此上やはり」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)が「我肝落つちゆて」となっている。

役名「乙樽原」(ママ) (No.437)が「村原」となっている。

乙樽の台詞「事す又やらハ」(No.450)が「事よ又やは」となっている。

母の台詞「思子までかゝて」(No.476)が「思子まで掛て」となっている。

母の台詞「はからやひくひれよ」(No.479)が「はからやくいれよ」となっている。

村原の比屋の台詞「腹立ぬこと」(No.529)が「腹立も事に」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「請返答よを」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」(No.534)が「了簡よすれよ」となっている。

村原の比屋の台詞「切巧てをる次第、」(切は見せ消ちカ)(No.556)が「巧てをる次第」となっている。

村原の比屋の台詞「失なワぬことに、」(No.554)が「うしないぬ事」となっている。

乙樽の台詞「御素立めしやうち、」(No.594)が「御素立よめしやうち」となっている。

音曲「伊野波ふし下句」(No.619)が「伊野波ふし母井村原南表の幕に入乙樽北表の幕二入」となっている。

満納の子の台詞「あゝあれほどの村原も」(No.691)が「はあれ程の村原も」となっている。

満納の子の台詞「わにやかけの内に」(No.693)が「わ繩かけの内に」となっている。

谷茶の按司の台詞「一段な事よ／＼、」(No.704～705)が「一段な事／＼」となっている。

満納の子の台詞「あゝ好てこのまらぬ」(No.769)が「はあ好てこのまらぬ」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれは、」(No.858)が「真実に言れず」となっている。

満納の子の台詞「多ひ差繩持ち」(No.934)が「多ひ差繩も持ち」となっている。

満納の子の台詞「近く寄てをとて、」(No.935)が「近く寄てからに」となっている。

乙樽の台詞「露程も思ぬ、」(No.984)が「露程も思も」となっている。

満納の子の台詞「御思案の内や」(No.1099)が「先御思案の内や」となっている。

石川の比屋の台詞「満納思寄も」(No.1102)が「満納思案も」となっている。

満納の子の台詞「みよんにゆけやや／＼か、」(No.1135)が「みよんにゆけやへすか」となっている。

満納の子の台詞「責さしゆることの」(No.1136)が「しめさせるゆることの」となっている。

満納の子の台詞「外の出入も」(No.1144)が「外の出入」となっている。

満納の子の台詞「是非共牢舎」(No.1165)が「是非共に籠舎」となっている。

谷茶の按司の台詞「素立ひやならぬ」(No.1235)が「素立ひもならぬ」となっている。

谷茶の按司の台詞「たるにいきゆか、」(No.1311)が「たるにいきやか」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」(No.1339)が「うの内や是非よ」となっている。

乙樽の台詞「一 おれこれもゆるし」(No.1345)が「一 おれこれもゆるそ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをても」(No.1366)が「なやかやひをすか」となっている。

音曲「さいんそるふし」(No.1431)が「哥さんそるふし」となっている。

音曲「持ちをやへん」(No.1439)が「持ちゆやへん」となっている。

音曲「持つをやへん」(No.1441)が「持つゆやへん」となっている。

音曲「持ちをやへん」(No.1443)が「持ちゆやへん」となっている。

泊の台詞「頼ま<sup>て</sup>行<sup>ん</sup>」(No.1470)が「たのま<sup>て</sup>を<sup>ん</sup>」となっている。

泊の台詞「谷<sup>谷</sup>屋<sup>良</sup>村<sup>ん</sup>か<sup>い</sup>」(No.1491)が「北<sup>北</sup>谷<sup>屋</sup>良<sup>村</sup>ん<sup>か</sup>い」となっている。

泊の台詞「む<sup>ゝ</sup>あ<sup>ゝ</sup>」(No.1531)が「む<sup>ゝ</sup>」となっている。

泊の台詞「打<sup>殺</sup>さ<sup>つ</sup>ひ<sup>つ</sup>」(No.1533)が「打<sup>殺</sup>て」となっている。

泊の台詞「扱<sup>も</sup>く<sup>寄</sup>妙<sup>な</sup>事<sup>い</sup>」(カ。一部筆が途切れている)(No.1536)が「扱<sup>も</sup>く<sup>妙</sup>な<sup>もの</sup>」となっている。

泊の台詞「さ<sup>つ</sup>たる<sup>仕</sup>形<sup>も</sup>を<sup>か</sup>し<sup>や</sup>」(No.1611)が「さ<sup>つ</sup>たる仕<sup>形</sup>の<sup>を</sup>か<sup>し</sup>や<sup>や</sup>」となっている。

泊の台詞「ワ<sup>か</sup>側<sup>に</sup>を<sup>ら</sup>へ」(No.1613)が「わ<sup>か</sup>側<sup>に</sup>を<sup>れ</sup>よ<sup>く</sup>」となっている。

泊の台詞「あ<sup>は</sup>あ<sup>(高</sup>笑<sup>)く</sup>」(No.1658)が「あ<sup>は</sup>く」となっている。

泊の台詞「分<sup>別</sup>な<sup>もの</sup>」(No.1670)が「分<sup>別</sup>な<sup>む</sup>さ<sup>の</sup>」となっている。

泊の台詞「あ<sup>ゝ</sup>無<sup>蔵</sup>さ<sup>ひ</sup>」(No.1675)が「あ<sup>ゝ</sup>無<sup>蔵</sup>さ<sup>ひ</sup>」となっている。

泊の台詞「打<sup>か</sup>へ<sup>し</sup>く<sup>し</sup>ゆ<sup>て</sup>」(No.1718)が「折<sup>か</sup>へ<sup>し</sup>く<sup>し</sup>ゆ<sup>て</sup>」となっている。

泊の台詞「水<sup>つ</sup>か<sup>ゆ</sup>す<sup>よ</sup>か」(No.1730)が「水<sup>つ</sup>か<sup>よ</sup>す<sup>か</sup>」となっている。

泊の台詞「あ<sup>つ</sup>ま<sup>つ</sup>さ」(No.1731)が「あ<sup>さ</sup>ま<sup>つ</sup>さ」となっている。

泊の台詞「お<sup>そ</sup>ろ<sup>しい</sup>畜<sup>生</sup>人<sup>」</sup>(No.1733)が「驚<sup>しい</sup>畜<sup>生</sup>人<sup>」</sup>となっている。

泊の台詞「おれほどしや(ち)」(No.1738)が「おれふとしやか」となっている。

泊の台詞「御使とやへる」(No.1813)が「御使たやへる」となっている。

村原の比屋の台詞「用心もすらぬ」(No.1845)が「用心のんすらぬ」となっている。

松千代の台詞「原国のひやか」(No.1878)が「原国のひやや」となっている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」(No.1897)が「村原のひや釣寄る」となっている。

松千代の台詞「かたへへのあらは」(No.1900)が「かたへやのあらは」となっている。

音曲「揚口説」(No.1917)が「原国兄弟口説」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ寔慈悲なさや」(No.1938)が「寔是非なさや」となっている。

原国兄弟の台詞「一こつきやうの時節」(No.1963)が「一こつきやうな時節」となっている。

村原の比屋の台詞「山に伏よかくれ」(No.1986)が「山に伏しかくれ」となっている。

村原の比屋の台詞「腹の立まゝに」(No.2057)が「腹立のまゝに」

となっている。

村原の比屋の台詞「忍ひく、能々勘忍」(No.2059)が「忍ひよくく、勘忍」となっている。

音曲「乙樽思子引取逃走はや作田ふし」(No.2074)が「乙樽思子奪取逃走はやつくたいんふし」となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ」(No.2081)が「明間計やい」となっている。

乙樽の台詞「ましり、出ん」(No.2083)が「まぎり出ら」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一鬼瀬たやく」(No.2086)が「一喜瀬たやへる」となっている。

泊の台詞「逃めしやいへひたん」(No.2096)が「逃めしやへたん」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は「忍」になっている)(No.2136)が「恩義忘却」となっている。

乙樽の台詞「原国のなし子」(No.2141)が「原国かなし子」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は「忍」になっている)(No.2144)が「此間の恩義」となっている。

役名「原国」(No.2164)が「原国兄弟言葉南表の幕より出ル」と

なっている。

原国兄弟の台詞「待受てをす」(No.2167)が「待受てをたす」となっている。

役名「兄弟」(No.2172)が「原国兄弟言葉北表の幕江谷茶追入ル」となっている。

原国兄弟の台詞「ひやひやひ」(No.2173)が「ひやあやひ」となっている。

役名「同人」(No.2174)が「同人同所より出ル」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり」(No.2209)が「生れ日よてやり」となっている。

乙樽の台詞「世話にとひかかて」(No.2210)が「世話に取懸て」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235)が「敵の手に渡る」となっている。

村原の比屋の台詞「一段な事よ〜」(No.2247)が「一段な事〜」となっている。

「与那覇本」

村原の比屋の台詞「段々にいなち」(No.50)が「色々ニイナチ」となっている。

村原の比屋の台詞「軍押寄すて」(No.52)が「軍サ打寄テ」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事や」(No.61)が「思子ノ事ド」となっている。

音曲「村原母妻子出羽散山ふし」(No.88)が「サンカマ」となっている。

音曲「夢の心地」(No.92)が「夢ノ心ル」となっている。

乙樽の台詞「島々よ廻て」(No.104)が「島々廻テ」となっている。

乙樽の台詞「しら〜のあれハ」(No.113)が「知シ日ノアリバ」となっている。

乙樽の台詞「たう〜落る露泪も」(No.125)が「タウ〜落る露泪」となっている。

乙樽の台詞「押はら〜」(No.126)が「打払エ〜」となっている。

母の台詞「あの世までも」(No.141)が「アノ世迄」となっている。

乙樽の台詞「たう〜御気張よめしやうれ」(No.157)が「御気張ユ召リ」となっている。

音曲「子持ふし」(No.186)が「子持」となっている。

音曲「一 冬の山嵐や」(No.187)が「一 冬ノ山嵐」となっている。

音曲「あけやういきやなゆか」(No.190)が「イキヤガナヨラ」となっている。

乙樽の台詞「すと親のことも」(No.207)が「スト親ノ事ヤ」となっている。

乙樽の台詞「夢現心」(No.227)が「現心ル」となっている。

乙樽の台詞「あけやうあてなしの」(No.228)が「アケヤウアテメシノ」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松」(No.243)が「ヤア乙松ヨ」となっている。

音曲「ワきもしのはらぬ」(No.263)が「我肝忍バラ」となっている。

役名「乙樽」(No.265)が「同人」となっている。

村原の比屋の台詞「やあ乙松」(No.292)が「ヤア乙松ヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「なすか心気」(No.298)が「ナリガ心気」となっている。

村原の比屋の台詞「母と乙樽も」(No.299)が「母ト乙樽ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「こかと山道に」(No.315)が「クガトウ」となっている。

母の台詞「一 やあ村原」(No.324)が「一 ヤア村原ヨ」となっている。

母の台詞「なる筈の者の」(No.326)が「成ル筈ナモノ」となっている。

母の台詞「主の恩忘ひ」(No.327)が「主ノ恩忘ス」となっている。

母の台詞「孝の道しらぬ」(No.328)が「孝ノ道スラ」となっている。

母の台詞「のゝつらのあとて」(No.329)が「モノ、ツラノアトテ」となっている。

母の台詞「しのはらぬあため」(No.334)が「忘ラ、モアタメ」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事と」(No.339)が「思子ノ事ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「村原も共に」(No.341)が「村原ン共」となっている。

村原の比屋の台詞「やあ乙樽」(No.369)が「ヤ乙樽」となっている。

乙樽の台詞「うつかつとしちをて」（No.393）が「ウツカツトシキ居トテ」となっている。

乙樽の台詞「欲悪な谷茶」（No.418）が「欲悪ノ谷茶」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」（No.423）が「我肝落ツキヨテ」となっている。

役名「乙樽原」（ヤマ）（No.437）が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「義理のならひ」（No.441）が「義理ノ習ヤ」となっている。

乙樽の台詞「一義理の道てすも」（No.443）が「一義理ノ道テスヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「女あてなしハ」（No.452）が「女アテナシノ」となっている。

乙樽の台詞「命のあるかきり」（No.508）が「命ノアル間ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」（No.533）が「請ケ返答」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」（No.534）が「了簡ヨスリヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「白状よすれ」（No.550）が「白状ヨスリヨ」と

なっている。

村原の比屋の台詞「あゝ繰返し〜」（No.551）が「ハア繰り返シ〜」となっている。

村原の比屋の台詞「思子引とゆる」（No.555）が「思子引チ取ス」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ口惜や」（No.562）が「ハア口惜ヤ」となっている。

乙樽の台詞「極楽とやゆる」（No.579）が「極楽トシヤビル」となっている。

乙樽の台詞「御素立めしやうち」（No.594）が「御素立ヨ召チ」となっている。

門番の台詞「たう〜、むまに」（No.671）が「タウ〜クマニ」となっている。

門番の台詞「あれに居やうれ」（No.676）が「アリニ居リヨ」となっている。

谷茶の按司の台詞「やあ石川のひや〜」（No.706）が「ヤア石川ノヒヤ」となっている。

谷茶の按司の台詞「白状よしめれ」（No.724）が「白状ヨスリヨ」となっている。

下部の台詞「御前寄て拝め」（No.734）が「御前ニ寄テ拝メ」と

なっている。

満納の子の台詞「殺される者も」(No.831)が「殺サレル者ヤ」となっている。

乙樽の台詞「たゞこともないらぬ」(No.844)が「タラ事ン無ン」となっている。

石川の比屋の台詞「一 はあ勘違するな」(No.848)が「一 ア、勘違スルナ」となっている。

石川の比屋の台詞「堅談合も」(No.852)が「堅ク談合」となっている。

石川の比屋の台詞「村原もすてゝ」(No.870)が「村原捨テ」となっている。

石川の比屋の台詞「真肝うちわれて」(No.872)が「真ト肝割テ」となっている。

役名「石川」(No.878)が「同人」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 むゝ尤な不審」(No.904)が「一 尤な不審」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこゝれしちをて」(No.932)が「タウ／＼肝ク、リシキヨテ」となっている。

満納の子の台詞「近く寄てをとて」(No.935)が「近く寄テカラニ」となっている。

乙樽の台詞「段々の御間ごと」(No.954)が「段々ノ御事」となっている。

満納の子の台詞「一 はあ、つらつきも替て」(No.967)が「一 ア、ツラズチン替テ」となっている。

満納の子の台詞「切支丹」(No.970)が「切リスタ」となっている。

満納の子の台詞「是と鬼やゆる」(No.973)が「是ド鬼サラメ」となっている。

乙樽の台詞「女あてなしは」(No.987)が「女アテナシニ」となっている。

乙樽の台詞「鬼無理にせまて」(No.988)が「鬼モレニ召チ」となっている。

乙樽の台詞「いきゆらたひいとめは」(No.992)が「イキヨラトメバ」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 はあ云る事よ聞ハ」(No.996)が「一 ア、言ル事ヨ聞バ」となっている。

乙樽の台詞「女身のわぬも」(No.1010)が「女身ノ我身ノ」となっている。

乙樽の台詞「我身よりも増て」(No.1016)が「我ノ敵モ増テ」となっている。



乙樽の台詞「百とまてちやうわれ」(No.1023)が「百年迄長マデ」となっている。

乙樽の台詞「拜てすてら」(No.1024)が「拜テスデヤビラ」となっている。

谷茶の按司の台詞「物云さし聞ハ」(No.1049)が「物イヨス聞バ」となっている。

谷茶の按司の台詞「おめと増る」(No.1053)が「思テ増ル」となっている。

満納の子の台詞「疲ゆる時と」(No.1096)が「疲リヨル時ヤ」となっている。

満納の子の台詞「有筋に白状」(No.1097)が「有筋白状」となっている。

満納の子の台詞「村原のひやに」(No.1117)が「村原ノヒヤト」となっている。

満納の子の台詞「あゝおとろしやもしらぬ」(No.1134)が「アノ驚(ウトラサ)シヤン」となっている。

満納の子の台詞「みよんにゆけややくか」(No.1135)が「美御ンノケヤビスガ」となっている。

満納の子の台詞「外の出入も」(No.1136)が「外ノ出入」となっている。

満納の子の台詞「おとろしやもしらぬ」(No.1160)が「驚シン知ラン」となっている。

満納の子の台詞「繰返し」(No.1161)が「クへ返し」  
となっている。

満納の子の台詞「是非共牢舎」(No.1165)が「是非共ニ籠合」となっている。

谷茶の按司の台詞「又事もいらぬ」(No.1170)が「又事モ言ラン」となっている。

谷茶の按司の台詞「気任のやから」(No.1178)が「気任シナヤカラ」となっている。

乙樽の台詞「御情に御側」(No.1207)が「御情ノ御側」  
となっている。

乙樽の台詞「おやくめさあもの」(No.1209)が「ヤグメサヨオモノ」となっている。

乙樽の台詞「御ゆるせよめしやうれ」(No.1210)が「御免シ召リ」となっている。

谷茶の按司の台詞「やくめさもいらぬ」(No.1213)が「ヤグメサンスルナ」となっている。

谷茶の按司の台詞「斟酌もするな」(No.1214)が「シンシヤクスルナ」となっている。

乙樽の台詞「義理曲てなれる」(No.1229)が「義理曲テ、ヤレ」となっている。

谷茶の按司の台詞「急ち戻やうれ」(No.1236)が「急チ戻リ」となっている。

乙樽の台詞「もの乞になても」(No.1242)が「物乞ニシキン」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 はあ肝ほれてをたら」(No.1270)が「一 ア、肝振テ居タラ」となっている。

乙樽の台詞「隠れやひをらぬ」(No.1292)が「隠ヤイ居ユン」となっている。

乙樽の台詞「道のあるひ」(No.1300)が「道ノ有ヨメ」となっている。

谷茶の按司の台詞「たるにいきゆか」(No.1311)が「誰ガ上ニイキヨガ」となっている。

乙樽の台詞「引されていきゆぢ」(No.1324)が「引カサレテ行ル」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 はあ果報もつきゆすかと」(No.1327)が「一 ア、果報ンツキヨスガド」となっている。

谷茶の按司の台詞「はあしたひ〜」(No.1331)が「ア、シタイ〜」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」(No.1339)が「ウノ間ヤ是非ヨ」となっている。

乙樽の台詞「一 おれこれもゆるじ」(No.1345)が「一 ウレクレン免ソ」となっている。

谷茶の按司の台詞「このたけにワ身や」(No.1365)が「此ノタケニ我身モ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをても」(No.1366)が「ナヤガイ居スガ」となっている。

谷茶の按司の台詞「氣に叶ふ女」(No.1367)が「氣ニ合ウ女」となっている。

谷茶の按司の台詞「二月も頓て」(No.1373)が「二月頓テ」となっている。

谷茶の按司の台詞「浮世楽々と」(No.1376)が「浮世楽々」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 はあきよらぢ〜」(No.1400)が「一 ア、清サ〜」となっている。

谷茶の按司の台詞「草臥もあらたひもの」(No.1409)が「草臥ンアタラ」となっている。

音曲「上やへら」(No.1446)が「売上ラ」となっている。  
泊の台詞「頼まつて行ん」(No.1470)が「頼テヨン」となっている。

いる。

村原の比屋の台詞「一 田舎江御通の」(No.1483)が「一 田舎御通りノ」となっている。

泊の台詞「谷屋良村んかい」(No.1491)が「北谷屋良村ンカイ」となっている。

泊の台詞「まひか」(No.1496)が「イマイガ」となっている。

村原の比屋の台詞「今度初て」(No.1500)が「今年始テ」となっている。

泊の台詞「むんあ」(No.1531)が「モノ」となっている。

泊の台詞「加勢頼て」(No.1555)が「加勢頼メ」となっている。

泊の台詞「御取込の最中」(No.1559)が「御込ノ最中」となっている。

泊の台詞「行衛しれらぬ」(No.1569)が「行衛知リラン」となっている。

泊の台詞「扱もく寄妙な事い」(の力。一部筆が途切れている)(No.1596)が「扱モく妙ナ事」となっている。

泊の台詞「たうく側に」(No.1617)が「我が側ニ」となっている。

泊の台詞「むてじゆて」(No.1629)が「ンデイチ」となっている。

泊の台詞「わたの底まで」(No.1631)が「ワタノ底マデモ」とな

っている。

泊の台詞「すひちかたき」(No.1639)が「シチカ、タン」となっている。

泊の台詞「あはあ(高笑)く」(No.1658)が「大笑」となっている。

泊の台詞「しやつとちんや」(No.1668)が「シヤ時ント」となっている。

泊の台詞「分別なもの」(No.1670)が「分別ナンザノ」となっている。

泊の台詞「夜のねふしもねんたぬ」(No.1713)が「夜ノネブル目ンニンダン」となっている。

泊の台詞「あんしまた」(No.1721)が「アンシ」となっている。

泊の台詞「満納の子や」(No.1722)が「満納ノ子」となっている。

泊の台詞「おんにゆけゆんむて」(No.1724)が「ウンニヨケヨンデ」となっている。

泊の台詞「かひはうかつたん」(No.1726)が「苺ヒハウカツテ」となっている。

泊の台詞「おれほとしや(ち)」(No.1738)が「ウレ程シヤガ。」となっている。

泊の台詞「いか身からと」(No.1739)が「イガ身ドカラド」とな

っている。

村原の比屋の台詞「やあ」(No.1774)が「ヤア」となっている。

泊の台詞「むまやまたやへるか、」(No.1792)が「ンノクマヤマアダヤビルガ」となっている。

泊の台詞「北表の山路」(No.1808)が「北表ノ山路ニ」となっている。

泊の台詞「逃めしやいへる筈」(No.1809)が「逃メセビクト」となっている。

泊の台詞「御使とやへる」(No.1813)が「御使ダヤビル」となっている。

村原の比屋の台詞「あ天の引合か」(No.1815)が「天ノ引合カ」となっている。

役名「同人」(No.1836)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「む是に思つきやる」(No.1837)が「是ニ思付ル」となっている。

松千代の台詞「弟子金松」(No.1880)が「弟子金松ヨ」となっている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」(No.1897)が「村原ノヒヤツリ寄ル」となっている。

松千代の台詞「思子の前」(No.1911)が「思子取戻チ」となっている。

村原の比屋の台詞「出様ちやる者や」(No.1936)が「一是ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「城の後ろの」(No.1985)が「城ノ山中ニ」となっている。

村原の比屋の台詞「山に伏よかくれ」(No.1986)が「伏ヨ隠リトテ」となっている。

村原の比屋の台詞「城立出テ」(No.1988)が「城ヨ立出テ」となっている。

村原の比屋の台詞「いきつきゆる時分」(No.1990)が「出テキヨル時分」となっている。

村原の比屋の台詞「若谷茶あまやか」(No.2013)が「若カ谷茶ガ」となっている。

村原の比屋の台詞「山道の中に」(No.2021)が「山道ノ中」となっている。

村原の比屋の台詞「伏よ隠れとて」(No.2022)が「伏隠トテ」となっている。

村原の比屋の台詞「オ十目図に躍出テ」(No.2024)が「査図ニ踊イ出テ」となっている。

村原の比屋の台詞「城走登て」(No.2033)が「城ヨ走登テ」となっている。

村原の比屋の台詞「案内しやしやうれ」(No.2046)が「案内ヨシヤウリ」となっている。

村原の比屋の台詞「一 はあ揃ておる人数」(No.2064)が「一ア、揃テ居ル人数」となっている。

音曲「風車とんも」(No.2076)が「花ノ風車ト」となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ」(No.2081)が「アチマ計ラヤへ」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一 鬼瀬たやく」(No.2086)が「一 喜瀬タヤビル」となっている。

泊の台詞「一 むんにや時分たひらう」(No.2089)が「一 ン、時分ダヒラウ」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 いや供列もいらぬ」(No.2129)が「一 イヤく、共烈モイラヌ」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は「忍」になっている)(No.2136)が「恩義忘却」となっている。

乙樽の台詞「忍てきちちをゆん」(No.2143)が「忍テキノヲモノ」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は「忍」になっている)(No.

2144)が「此ノ間ノ恩義」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 いや仕合とやゆる」(No.2149)が「一 イヤ村原ン共ニ」となっている。

谷茶の按司の台詞「村原もともに」(No.2150)が「仕合ドヤヨル」となっている。

村原の比屋の台詞「一 いやぬかすまひ」(No.2163)が「イヤノガス」となっている。

役名「瀬底」(No.2183)が「共」となっている。

村原の比屋の台詞「一 神妙なことく」(No.2187)が「一 神妙ナ事ヨく」となっている。

若按司の台詞「一 やあ村原よ」(No.2189)が「一 ヤア村原」となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ拝てなく事や」(No.2197)が「一 ア、拝テデナツカシヤ」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり」(No.2209)が「生日ヨテヤリ」となっている。

乙樽の台詞「夢かやゆら」(No.2219)が「夢ガヤノビラ」となっている。

村原の比屋の台詞「美御迎しちゃん」(No.2231)が「美御迎シキヤル」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡リ」(No.2235)が「敵ノ手ニ渡テ」となっている。

村原の比屋の台詞「一段な事よ〜」(No.2247)が「ア、一段ナ事ヨ〜」となっている。

音曲「しほらひぶし」(No.2264)が「立雲フシ」となっている。

「恩河本」

村原の比屋の台詞「欲悪なやから」(No.96)が「欲悪ノヤカラ」となっている。

乙樽の台詞「谷茶あまやか」(No.98)が「谷茶マヤアガ」となっている。

乙樽の台詞「しらへのあれハ」(No.111)が「シラシビノアレバ」となっている。

乙樽の台詞「人になちからや(に)」(No.122)が「人ニナチカラニ」となっている。

母の台詞「露なたやあられ」(No.181)が「露泪タアラリ」となっている。

乙樽の台詞「すと親のことも」(No.207)が「スト親ノ事ヤ」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松よ」(No.221)が「ヤア乙松」となっている。

る。

乙樽の台詞「やあ乙松」(No.243)が「ヤア乙松ヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「やあ母親」(No.321)が「ヤア母親ヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事ト」(No.339)が「思子ノ事ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「打果さむての」(No.352)が「打果ンデンノ」となっている。

村原の比屋の台詞「分別ハ出チ」(No.343)が「分別ヤ出キ」となっている。

村原の比屋の台詞「いきやし乙松」(No.370)が「イチヤシ乙松ヤ」となっている。

乙樽の台詞「抱(かげ)置積リ」(No.422)が「抱ミ置ク積リ」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)が「我肝ウテツチヨテ」となっている。

役名「乙樽原」(ママ) (No.437)が「村原」となっている。

乙樽の台詞「討死はすらな」(No.464)が「討死ユスラニ」となっている。

母の台詞「思子まてかゝて」(No.476)が「思子迄テ掛テ」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「請返谷(ママ)ヨヲ」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」(No.534)が「了簡ヨスレヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「切巧てをる次第」(切は見せ消ちカ)(No.536)が「巧テヲル次第」となっている。

村原の比屋の台詞「思子引とゆる」(No.535)が「思子引取ル」となっている。

乙樽の台詞「思子為やれは」(No.576)が「思子ノ為ヤレハ」となっている。

乙樽の台詞「御素立めしやうち」(No.594)が「御素立ヨ召チ」となっている。

乙樽の台詞「仕合の時(に)」(No.653)が「仕合ノ時時ニ」(ママ)となっている。

満納の子の台詞「引取んてやり」(No.688)が「引取ンテヤリノ」となっている。

満納の子の台詞「わにやかけの内に」(No.693)が「ワ縄ガケノ内ニ」となっている。

谷茶の按司の台詞「一段な事よ／＼」(No.704～705)が「一段ナ事／＼」となっている。

谷茶の按司の台詞「やあ石川のひやん」(No.706)が「ヤア石川ノヒヤン」となっている。

満納の子の台詞「合点とやゆる」(No.747)が「合点ドヤスガ」となっている。

満納の子の台詞「直におの科に」(No.748)が「真ニウノ科ニ」となっている。

乙樽の台詞「かめ願よしちをて」(No.783)が「神願ヨシチヲテ」となっている。

満納の子の台詞「肝のあくまゝや」(No.794)が「肝ノアルマ、ヤ」となっている。

乙樽の台詞「御返事御返答に」(No.845)が「御返事御返谷ニ」(ママ)となっている。

石川の比屋の台詞「今のこと細く」(No.857)が「今ノ如ト細ク」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれは」(No.858)が「真心ニ言レヌ」となっている。

石川の比屋の台詞「引よすてをとて」(No.864)が「引寄テヲトヲ」となっている。

谷茶の按司の台詞「素立ほしやあてと」(No.918)が「助ブシヤアテド」となっている。

谷茶の按司の台詞「細く問尋ね」(No.919)が「細く尋問」となっている。

満納の子の台詞「直に引立て」(No.927)が「真ニ引立テ」となっている。

満納の子の台詞「近く寄てをとて」(No.935)が「近く寄テカラニ」となっている。

乙樽の台詞「数ならぬワ身の」(No.982)が「数ナラン我身ヤ」となっている。

乙樽の台詞「気にかゝていきゆん」(No.994)が「気ニ遣テ行ン」となっている。

乙樽の台詞「時日移さすに」(No.1017)が「時日積サズニ」となっている。

谷茶の按司の台詞「夢のこの浮世」(No.1056)が「夢ノ間ノ浮世」となっている。

満納の子の台詞「あの女てすや」(No.1081)が「アノ女テスヤ」となっている。

満納の子の台詞「御思案の内や」(No.1099)が「先御思案ノ内ヤ」となっている。

石川の比屋の台詞「無理なものやても」(No.1109)が「愚痴ナモノヤテン」となっている。

谷茶の按司の台詞「愚痴にかたまとめ」(No.1169)が「愚痴ニカタマヨミ」となっている。

谷茶の按司の台詞「気任のやから」(No.1178)が「気任ナ族ラ」となっている。

谷茶の按司の台詞「をなちやらもされん」(No.1218)が「室ニサレン」となっている。

谷茶の按司の台詞「かたまとるむさや」(No.1234)が「カタマヨルンザヤ」となっている。

谷茶の按司の台詞「果報な我身や」(No.1330)が「果報ノ我身ヤ」となっている。

乙樽の台詞「おしやけんしゆもの」(No.1338)が「ウシヤゲラシシヨモノ」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」(No.1339)が「ウノ内ヤ是非ヨ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをても」(No.1366)が「ナヤカヤヒラスガ」となっている。

泊の台詞「頼まつて行ん」(No.1470)が「タノマツテ行ン」となっている。



泊の台詞「谷屋良村んかい」(No.1491)が「北谷屋良村ンカへ」となっている。

泊の台詞「まひか」(No.1496)が「イマヘガ」となっている。  
村原の比屋の台詞「きかちたはふれ」(No.1511)が「語テ給リ」となっている。

泊の台詞「行衛しれらぬ」(No.1569)が「行衛シラン」となっている。

泊の台詞「物種子にしち」(No.1574)が「物種子シチ」となっている。

泊の台詞「あゝむちや」(No.1584)が「アホンチチ」となっている。

泊の台詞「扱もく寄妙な事い」(のカ。一部筆が途切れている)  
(No.1596)が「扱ムく妙ナモノ」となっている。

泊の台詞「さつたる仕形もをかしや」(No.1611)が「サツタル仕形ノヲカシヤヒ」となっている。

泊の台詞「あはあ(高笑)く」(No.1658)が「アハく」となっている。

泊の台詞「立羽失て」(No.1659)が「ト立羽失テ」となっている。  
泊の台詞「分別なもの」(No.1670)が「分別ナンザノ」となっている。

泊の台詞「あゝ無蔵さ」(No.1675)が「アゝ無蔵サヤ」となっている。

泊の台詞「打かへしくじゆて」(No.1718)が「折カヘシくシユテ」となっている。

泊の台詞「あつまつさ」(No.1731)が「アサマツサ」となっている。

泊の台詞「おれほとしや(ち)」(No.1738)が「ウレ程シヤガ」となっている。

泊の台詞「しゆかなくしい肝の」(No.1742)が「シユカナくエイ肝ノ」となっている。

村原の比屋の台詞「あかと屋良むらに」(No.1776)が「アガト屋良村へ」となっている。

泊の台詞「御使とやへる」(No.1813)が「御使ダヤビル」となっている。

村原の比屋の台詞「谷茶あまや」(No.1844)が「谷茶マヤへ」となっている。

村原の比屋の台詞「打かへす御運」(No.1850)が「打カヘネ御運」となっている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」(No.1897)が「村原ノヒヤ釣寄ル」となっている。

松千代の台詞「肝勇いさつ」(No.1914)が「肝急子勇テ」となっている。

音曲「揚口説」(No.1917)が「原国兄弟口説」となっている。

村原の比屋の台詞「山に伏よかくれ」(No.1986)が「山ニ伏シ隠リ」となっている。

村原の比屋の台詞「谷茶あまやか」(No.1987)が「谷茶マヤアガ」となっている。

村原の比屋の台詞「谷茶あまやか」(No.2003)が「谷茶マヤアガ」となっている。

村原の比屋の台詞「島国も崩す」(No.2011)が「島国ヨ崩ス」となっている。

村原の比屋の台詞「若谷茶あまやか」(No.2013)が「若カ谷茶マヤアガ」となっている。

村原の比屋の台詞「案内しやしやうれ」(No.2046)が「案内シヤウリ」となっている。

村原の比屋の台詞「腹の立ままに」(No.2057)が「腹立ノ俣ニ」となっている。

村原の比屋の台詞「多おひく、能々勘忍」(No.2059)が「エイヨクく、勘忍」となっている。

村原の比屋の台詞「題目とやゆるく」(No.2060)が「題目ドヤル

ニ」となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ」(No.2081)が「明間計ヲヤヒ」となっている。

乙樽の台詞「ましり、出いん」(No.2083)が「マジリ出ラ」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一 鬼瀬たやく」(No.2086)が「一 喜瀬ダヤビル」となっている。

泊の台詞「谷茶(石川)、誘ひたさう」(No.2091)が「谷茶誘ヒダサウ」となっている。

泊の台詞「逃めしやいへひたん」(No.2096)が「逃ミシヤビタン」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は「忍」になっている)(No.2136)が「恩儀忘却」となっている。

乙樽の台詞「原国のなし子」(No.2141)が「原国ガ産子」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は「忍」になっている)(No.2144)が「此間ノ恩ニ」となっている。

乙樽の台詞「切はたちとらさ」(No.2153)が「切殺チトラサ」となっている。

原国兄弟の台詞「原国兄弟か」(No.2166)が「原国ノ兄弟カ」と

なっている。

原国兄弟の台詞「待受てをす」(No.2167)が「待受テヲタス」となっている。

役名「兄弟」(No.2172)が「原国兄弟谷茶追入」となっている。

原国兄弟の台詞「一 ひやひや」(No.2173)が「一 ヒヤアヒヤヒ」となっている。

原国兄弟の台詞「一 谷茶あまや」(No.2175)が「一 谷茶マヤアヤ」となっている。

乙樽の台詞「谷茶あまやあか」(No.2208)が「谷茶マヤアガ」となっている。

乙樽の台詞「世話にとひかかて」(No.2210)が「世話ニ取掛テ」となっている。

村原の比屋の台詞「おの手組しちおて」(No.2230)が「ウノ手段シチュテ」となっている。

村原の比屋の台詞「美御迎しちやん」(No.2231)が「美御迎ヨシチャン」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235)が「敵ノ手ニ渡ル」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ末代の手本」(No.2237)が「末代ノ手本」となっている。

村原の比屋の台詞「一 一段な事よ〜」(No.2247)が「一段ナ事〜」となっている。

「兼島本」

村原の比屋の台詞「あゝ谷茶あまやか」(No.43)が「噫谷茶マヤアガ」となっている。

乙樽の台詞「母やとちなし子」(No.97)が「母ト妻産子。」となっている。

乙樽の台詞「谷茶あまやか」(No.98)が「谷茶マヤアガ」となっている。

乙樽の台詞「しらへのあれハ」(No.111)が「知ラセ人(ビ)ノ有レバ。」となっている。

乙樽の台詞「残る者をらぬ」(No.150)が「残ル者居ラメ」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.159)が「道行仲間節」となっている。  
母の台詞「一 露なたやあられ」(No.181)が「一 露涙霰」となっている。

乙樽の台詞「すと親のことも」(No.207)が「姫(シト)親ノ事ヤ」となっている。

乙樽の台詞「むたよいかととも」(No.213)が「見ダヨリバ迎モ」

となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松よ」(No.221)が「ヤノ乙松」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松」(No.243)が「ヤノ乙松ヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「こねや夜深やに」(No.287)が「此様ル夜深ケニ」となっている。

村原の比屋の台詞「習ひやしらね」(No.305)が「風習ヤ知ラヌ」となっている。

母の台詞「主の恩忘ひ」(No.327)が「主ノ恩忘レ」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事ト」(No.339)が「思子ノ事ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「村原も共に」(No.341)が「村原ト共ニ」となっている。

村原の比屋の台詞「分別ハ出ち」(No.343)が「分別ヤ出ヂヤラ」となっている。

村原の比屋の台詞「いこと葉ハ飜て」(No.344)が「云言葉ヤ飾テ」となっている。

母の台詞「念の入れよ」(No.361)が「念ヨ入レヨ」となっている。

いる。

村原の比屋の台詞「いきやし乙松」(No.370)が「如何シ乙松ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「あ、此上とやすか」(No.401)が「一噫此上ヨヤレバ」となっている。

乙樽の台詞「あん前に名付」(No.413)が「乳母ニ名付」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)が「我肝落テ着キ居テ」となっている。

役名「乙樽原」(No.437)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「おの筈とやすか」(No.439)が「其ノ筈トヤスガ」となっている。

乙樽の台詞「わない、女やても」(No.461)が「我女ヤテン」となっている。

乙樽の台詞「谷茶あまやに」(No.462)が「谷茶マヤアニ」となっている。

乙樽の台詞「討死はすらな」(No.464)が「討死ヨ為ラナ」となっている。

母の台詞「おの筈とやすか」(No.473)が「其ノ筈トヤスガ」となっている。

母の台詞「思子まてかゝて」(No.476)が「思子迄カケテ」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手にやらす」(No.492)が「敵ノ手ニ遣ラチ。」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「受ケ返答能ウ」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」(No.534)が「料見ヨ為レヨ。」となっている。

村原の比屋の台詞「ならぬおの涯や」(No.542)が「成ラヌ其際ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「切巧てをる次第」(切は見せ消ちカ)(No.546)が「巧デ居ル次第。」となっている。

村原の比屋の台詞「白状よすれ」(No.550)が「白状ヨ為レヨ。」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ繰返し〜」(No.551)が「噫押シ返ス〜」となっている。

乙樽の台詞「御素立めしやうち」(No.594)が「御育テヨ召シヨレ。」となっている。

音曲「一義理のみちやれ」(No.612)が「一義理ノデモノ」となっている。

乙樽の台詞「城元につきやん」(No.635)が「城ニ着キヤン。」となっている。

乙樽の台詞「やあく、御取次頼ま」(No.639)が「サア〜御取次頼マ」となっている。

門番の台詞「たう〜、むまに」(No.671)が「トウ〜其処ニ」となっている。

満納の子の台詞「あくあれほと村原も」(No.691)が「ハア彼レ程ノ村原モ」となっている。

満納の子の台詞「扱々御果報」(No.701)が「サア〜御果報」となっている。

谷茶の按司の台詞「一段な事よ〜」(No.704〜705)が「一段ナ事〜」となっている。

谷茶の按司の台詞「やあ石川のひやん」(No.706)が「ヤア石川ノ比屋。」となっている。

石川の比屋の台詞「一々尤」(No.711)が「尤モ」となっている。

谷茶の按司の台詞「せめて有筋」(No.723)が「責テ有ル筋」となっている。

満納の子の台詞「おの御肝きや〜」(No.760)が「其ノ御肝如何」となっている。  
満納の子の台詞「あく好てこのまらぬ」(No.769)が「ハ

ア好デ好ラヌ」となっている。

満納の子の台詞「おんにゆけやうれ」(No.803)が「御入聞ヤラレ。」となっている。

乙樽の台詞「うきくれしやしめゆすや」(No.816)が「憂苦シヤ為スヤ。」となっている。

乙樽の台詞「たゝこともないらぬ」(No.824)が「陀羅(ダラ)事モ無ラヌ。」となっている。

石川の比屋の台詞「堅ク談合ヤ」(No.852)が「堅ク談合ヤ」となっている。

石川の比屋の台詞「しちあたんてやりか」(No.853)が「為チ有タイテイカ。」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれば」(No.858)が「真実ニ云ヤレス。」となっている。

乙樽の台詞「あゝ按司かなし御始」(No.895)が「噫按司加那志始メ」となっている。

谷茶の按司の台詞「細く問尋ね」(No.919)が「細々問ヒ尋ネ」となっている。

満納の子の台詞「胸腹よまでも」(No.929)が「胸腹迄モ。」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこゝれしちをて」(No.932)が「トウ

其ノ心シチュヨテ」となっている。

満納の子の台詞「多ひ差繩持ち」(No.934)が「差繩ン持チ来」となっている。

満納の子の台詞「近く寄てをとて」(No.935)が「近く寄テカラニ。」となっている。

下部の台詞「おんにゆけやうれ」(No.940)が「御入聞ウヤレ。」となっている。

満納の子の台詞「こゝてをゆめ」(No.950)が「含デ居テ居ヨメ」となっている。

乙樽の台詞「誠正直の」(No.958)が「誠正実ノ」となっている。

満納の子の台詞「夫喰る悪生」(No.969)が「夫喰ユル畜生」となっている。

乙樽の台詞「一ちりあくた心」(No.981)が「一塵芥(チリアクタ)意」となっている。

乙樽の台詞「女あてなしは」(No.987)が「女アテナシニ」となっている。

乙樽の台詞「按司かなし上に」(No.991)が「按司加那志天ニ」となっている。

谷茶の按司の台詞「せまてある繩も」(No.1003)が「縛テ有ル繩」となっている。

乙樽の台詞「よしれやひをれへ」(No.1011)が「参上レヤイ居モ  
ノ」となっている。

谷茶の按司の台詞「思案より外の」(No.1039)が「思案スル外ノ」  
となっている。

満納の子の台詞「ゆるち置ならぬ」(No.1086)が「許チ済マン」  
となっている。

石川の比屋の台詞「一 満納思寄も」(No.1102)が「一 満納思  
寄リモ」となっている。

石川の比屋の台詞「無理なものやても」(No.1109)が「愚痴ナ  
者ヤテン。」となっている。

満納の子の台詞「巧てをる事や」(No.1119)が「巧テ居ル事ノ」  
となっている。

石川の比屋の台詞「一 我々の一事」(No.1124)が「一 吾々一  
事」となっている。

石川の比屋の台詞「はからやいをれへ」(No.1125)が「計ヤラ  
イ居レバ。」となっている。

満納の子の台詞「みよんにゆけややくか」(No.1135)が「御入  
聞ヤベズガ。」となっている。

満納の子の台詞「大川のなし子」(No.1138)が「大川ノ産子タイ」  
となっている。

満納の子の台詞「あのやからものと」(No.1139)が「其ノ奴者  
(ヤカラモノ)ト。」となっている。

満納の子の台詞「おの手組しちをて」(No.1150)が「其手組ミ為  
チ居テ」となっている。

満納の子の台詞「盛衰の」(No.1157)が「盛衰ヤ」となっている。  
満納の子の台詞「是非共牢舎」(No.1165)が「是非共ニ牢舎」と  
なっている。

谷茶の按司の台詞「又事もいらぬ」(No.1170)が「又事モ無ラヌ」  
となっている。

石川の比屋の台詞「一 此涯よたひもの」(No.1173)が「一 此  
ノ際ヨデモノ」となっている。

石川の比屋の台詞「此世界にあゆめ」(No.1185)が「此世界ニ  
成ユメ。」となっている。

乙樽の台詞「楽も又すかぬ」(No.1226)が「楽ン我好カヌ」と  
なっている。

乙樽の台詞「わすたつれやても」(No.1227)が「我等達(ワシタ  
ダチ)ヤテン」となっている。

乙樽の台詞「義理曲てなれる」(No.1229)が「義理曲テ押レル」  
となっている。

乙樽の台詞「道のあゆめ」(No.1230)が「道ノ有ル乎(イ)」と

なっている。

谷茶の按司の台詞「素立ひやならぬ」(No.1235)が「育テモ成ラヌ」となっている。

谷茶の按司の台詞「急ち戻やうれ」(No.1236)が「急ギ戻レ。」となっている。

乙樽の台詞「もの乞になても」(No.1242)が「物云ヒニ成テン」となっている。

乙樽の台詞「無理な事めしやうな」(No.1251)が「義理ナ事召シヨナ。」となっている。

乙樽の台詞「死もしにやれらぬ」(No.1262)が「死ニモ死ナレラメ。」となっている。

乙樽の台詞「露程のいのち」(No.1265)が「露程モ命」となっている。

谷茶の按司の台詞「なれて給ふれ」(No.1283)が「押レテ給レ。」となっている。

谷茶の按司の台詞「恋忍ぶ道の」(No.1306)が「恋忍ブ事ノ」となっている。

谷茶の按司の台詞「おれこれよおもて」(No.1313)が「夫レ是レヨ思デ」となっている。

乙樽の台詞「引されていきゆ」(No.1324)が「引カサレテ行キ

ユル」となっている。

谷茶の按司の台詞「果報な我身や」(No.1330)が「果報ノ我身ヤ」となっている。

乙樽の台詞「すきし我か夫の」(No.1334)が「過世吾ガ夫ノ。」となっている。

乙樽の台詞「おしやけんしゆもの」(No.1338)が「御仕上(ヲシヤ)ゲラン為(シ)ユモノ。」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」(No.1339)が「其(ウノ)内ヤ是非ユ」となっている。

谷茶の按司の台詞「このたけにワ身や」(No.1365)が「此レダケニ我身ヤ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをても」(No.1366)が「成上(ナヤガ)ヤイ居スガ。」となっている。

谷茶の按司の台詞「天に飛登る」(No.1380)が「天ニ登ル」となっている。

谷茶の按司の台詞「我自由しち浮世」(No.1384)が「我自由シチ遊デ」となっている。

谷茶の按司の台詞「遊て暮さ」(No.1385)が「浮世暮サ。」となっている。

谷茶の按司の台詞「此内やとかく」(No.1388)が「此ノ門(ママ)



ヤ兎角」となっている。

谷茶の按司の台詞「うち晴て躍て」(No.1391)が「打揃テ踊テ」となっている。

音曲「あぶきおかむ」(No.1398)が「仰ギ拜マ。」となっている。

谷茶の按司の台詞「休息よすれ」(No.1411)が「休息ヨスレヨ」となっている。

音曲「御望の物や」(No.1451)が「御望者ヤ」となっている。

泊の台詞「頼まつて行ん」(No.1470)が「頼マテ居ん。」となっている。

泊の台詞「谷谷屋良村んか」(No.1491)が「北谷屋良村ンカイ」となっている。

泊の台詞「まひか」(No.1496)が「ノマヒガ」となっている。

泊の台詞「一 あいきやいは兄弟」(No.1524)が「一 噫合ハ兄弟」となっている。

泊の台詞「国々の按司部うたんて」(No.1551)が「国々ノ按司討ンデ」となっている。

泊の台詞「軍押寄たん」(No.1556)が「軍打寄タン。」となっている。

泊の台詞「ぬちやてひつしち」(No.1588)が「貫キ引キ」となっている。

泊の台詞「村原としも」(No.1592)が「村原ガ妻ン」となっている。

泊の台詞「扱もく奇妙な事い」(のカ。一部筆が途切れている) (No.1596)が「扱モく妙ナモノ」となっている。

泊の台詞「きことやてん」(No.1597)が「聞コトヤテン」となっている。

泊の台詞「さつたる仕形もをかしや」(No.1611)が「サツタル仕形ノ可笑」となっている。

泊の台詞「ワか側にをら」(No.1613)が「我ガ側ニ居レバ」となっている。

泊の台詞「きかならハそなた」(No.1626)が「ナラバソンアタ。」となっている。

泊の台詞「あはあ(高)笑く」(No.1658)が「アハく」となっている。

泊の台詞「分別なもの」(No.1670)が「分別ナンザノ」となっている。

泊の台詞「あた果報ときやる」(No.1704)が「アタ果報ト付」となっている。

泊の台詞「打かへしくこゆて」(No.1718)が「折返シくシユテ」となっている。

泊の台詞「おんにゆけゆんむて」(No.1724)が「御エユケウン  
デ」となっている。

泊の台詞「のふ目もみしらぬ」(No.1725)が「何目に見ラン」と  
なっている。

泊の台詞「おそろしい畜生人」(No.1733)が「驚ルシ、畜生人」  
となっている。

泊の台詞「おれほとしや(ち)」(No.1738)が「ウレ程シヤガ。」  
となっている。

村原の比屋の台詞「たんちゆ島国も」(No.1750)が「ダンジユ島  
国ノ」となっている。

村原の比屋の台詞「あかと屋良むらに」(No.1776)が「アガト  
屋良村へ」となっている。

泊の台詞「一むまやまあたやへるか」(No.1792)が「ンマヤ  
マアダカベルガ。」となっている。

泊の台詞「思子引取て」(No.1807)が「思子引取」となっている。

泊の台詞「めしやうれむての」(No.1812)が「召リデノ」となっ  
ている。

泊の台詞「御使とやへくる」(No.1813)が「御使ダヤベル。」と  
なっている。

村原の比屋の台詞「おの御取立や」(No.1825)が「其取立ヤ」と

なっている。

村原の比屋の台詞「谷茶あまやへ」(No.1844)が「谷茶マヤへ」  
となっている。

松千代の台詞「按司添前みこし立」(No.1886)が「按司添ノ前  
御腰立」となっている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」(No.1897)が「村原ノ比屋釣  
寄ル」となっている。

音曲「揚口説」(No.1917)が「原国口説」となっている。

村原の比屋の台詞「奪とやい逃る」(No.1976)が「奪イ取ヤ逃  
ル」となっている。

村原の比屋の台詞「谷茶あまやか」(No.1987)が「谷茶マヤガ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「谷茶あまやか」(No.2003)が「谷茶マヤガ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「若谷茶あまやか」(No.2013)が「若カ谷茶マ  
ヤアガ」となっている。

村原の比屋の台詞「城走登て」(No.2038)が「城ニ走登テ」とな  
っている。

村原の比屋の台詞「怪我事の基ひ」(No.2055)が「怪我ノ基ヒ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「多ひ、能々勘忍」(No.2059)が「エイ能々堪忍」となっている。

音曲「乙樽思子引取逃走はや作田ふし」(No.2074)が「乙樽思子奪取逃走出羽作田ン節」となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ、」(No.2081)が「透(アキ)間計ヒ。」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「鬼瀬たや」(No.2086)が「喜瀬タヤベル」となっている。

谷茶の按司の台詞「大川のなし子」(No.2105)が「ヤアく大川ノ産子」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は忍になっている)(No.2136)が「恩義忘却」となっている。

乙樽の台詞「原国のなし子」(No.2141)が「原国ガ産子」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は忍になっている)(No.2144)が「此間ノ恩ニ」となっている。

原国兄弟の台詞「待受てをす」(No.2167)が「待受テ居タス」となっている。

役名「兄弟」(No.2172)が「原国兄弟北表ノ幕へ谷茶追入」となっている。

原国兄弟の台詞「谷茶あまやや」(No.2175)が「谷茶マヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「過し按司添も」(No.2199)が「過世按司添ン」となっている。

乙樽の台詞「谷茶あまやあか」(No.2208)が「谷茶マヤガ」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり、」(No.2209)が「生レ日ニテヤリ」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235)が「敵ノ手ニ渡テ」となっている。

村原の比屋の台詞「一段な事よく、」(No.2247)が「一段ナ事く」となっている。

「比嘉本」

村原の比屋の台詞「今帰仁の城」(No.39)が「ア、今帰仁ノ城」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ谷茶あまやか」(No.43)が「谷茶アマヤアガ」となっている。

村原の比屋の台詞「野心事巧て、」(No.44)が「野心企チヤヒ」となっている。

乙樽の台詞「しらへのあれハ」(No.111)が「取沙汰ノアレバ」となっている。

乙樽の台詞「一人子乙松【か】(や)」(No.120)が「一童乙松ヨ」となっている。

乙樽の台詞「取素立く」(No.121)が「素立テ」となっている。

乙樽の台詞「人になちからや(に)」(No.122)が「程々ニナサイ」となっている。

乙樽の台詞「程程になさハ」(No.152)が「程々ニナラバ」となっている。

音曲「ひまもなひらぬ」(No.163)が「暇ノ無ラヌ」となっている。

音曲「肝もきもならぬ」(No.189)が「歩デ歩マラヌ」となっている。

乙樽の台詞「うつかつとしちをて」(No.210)が「ウカツトシチユテ」となっている。

乙樽の台詞「身すからになれハ」(No.215)が「身スガラニナラバ」となっている。

乙樽の台詞「自由になゆん」(No.217)が「自由ニナヨラ」となっている。

乙樽の台詞「起てむてよハ」(No.228)が「起テ見レヨ」となっている。

いる。

乙樽の台詞「やあ乙松」(No.243)が「ヤア乙松ヨ」となっている。

乙樽の台詞「素立やひ呉らハ」(No.246)が「素立イ呉ラハ」となっている。

乙樽の台詞「跡方ハ頼て」(No.248)が「跡方ヤタンデ」となっている。

乙樽の台詞「誠つらむてはハ」(No.258)が「誠ト面ラ見レバ」となっている。

村原の比屋の台詞「ねふる夜もねらぬ」(No.284)が「夜昼モカキテ」となっている。

村原の比屋の台詞「こねや夜深さに」(No.287)が「ア、コニヤ夜深クニ」となっている。

村原の比屋の台詞「いや、無常の此世界の」(No.304)が「イヤ無常ノ世ノ中ノ」となっている。

村原の比屋の台詞「一やあく」(No.312)が「一ヤア」となっている。

母の台詞「一やあ村原」(No.324)が「一ヤア村原ヨ」となっている。

母の台詞「なる筈の者の」(No.326)が「ナル筈ナモンノ」となっている。

っている。

母の台詞「命のあたらしやひ、」(No.332)が「命ノアタラシヤニ」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝめしやいる」(No.336)が「一召セル事」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事」(No.339)が「思子ノ事ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「跡継の思子、」(No.346)が「御代継ノ思子」となっている。

村原の比屋の台詞「語ひのあれハ、」(No.349)が「知ラセ部ノアレバ」となっている。

村原の比屋の台詞「いきやし乙松」(No.370)が「イチヤス乙松ヤ」となっている。

乙樽の台詞「むたよいか迎も」(No.396)が「見ダ故カ」となっている。

乙樽の台詞「あん前に名付」(No.413)が「乳母ニ名付ケ」となっている。

乙樽の台詞「引とやひきやへら」(No.426)が「引取ヤイ来ヤビラニ」となっている。

役名「乙樽原」(No.437)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「氣ニまかちすにゆめ」(No.440)が「氣ニ任チスマン」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手にやらち」(No.453)が「敵ノ手ニ渡タチ」となっている。

乙樽の台詞「討死はすらな、」(No.464)が「討死ハスラニ」となっている。

母の台詞「やあ乙樽」(No.471)が「ヤア乙樽ヨ」となっている。

乙樽の台詞「思てやくたゝぬ」(No.487)が「思テ自由(ヤク)ナラヌ」となっている。

村原の比屋の台詞「分別もならぬ、」(No.500)が「分別ヤナラヌ」となっている。

乙樽の台詞「思たこと叶て」(No.506)が「願タ事叶テ」となっている。

乙樽の台詞「ほらしやとあゆる、」(No.507)が「仕合トヤヨル。」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「受返答」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」(No.534)が「了簡ヨスレヨ」となっている。

乙樽の台詞「我胸に留て」(No.536)が「我ガ肝ニ染メ

テ」となっている。

乙樽の台詞「ワか肝に染て」(No.537)が「我ガ肝ニ留メテ」となっている。

村原の比屋の台詞「切巧てをる次第、(切は見せ消ちカ)(No.538)が「巧デ居ル次第」となっている。

村原の比屋の台詞「白状よすれ、」(No.550)が「白状ヨスレヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「思子引とゆる」(No.555)が「思子引取ヨス」となっている。

乙樽の台詞「御素立めしやうち、」(No.594)が「御素立ヨ召チ」となっている。

村原の比屋の台詞「すと子の事や、」(No.600)が「姑子ノ為メニ」となっている。

乙樽の台詞「御待めしやうれ、」(No.607)が「待ヒイマウレ」となっている。

役名「門番」(No.642)が「下部」となっている。

乙樽の台詞「御素立のあんて」(No.660)が「御素立ヨテヤリ」となっている。

役名「門番」(No.668)が「下部」となっている。

事ヨ聞ケバ」となっている。

満納の子の台詞「首いれる仕形、」(No.694)が「首入レル姿」となっている。

谷茶の按司の台詞「一段な事よ／＼、」(No.704～705)が「一 ア、一段ナ事／＼」となっている。

谷茶の按司の台詞「ゆるす事ならぬ、」(No.718)が「許チ置ナラヌ」となっている。

谷茶の按司の台詞「せめて有筋」(No.723)が「責メテ有筋ニ」となっている。

石川の比屋の台詞「やあよしれとる女」(No.728)が「ヤア／＼寄リトル女」となっている。

下部の台詞「一 さあ／＼」(No.733)が「一 トウ／＼」となっている。

乙樽の台詞「かめ願よしちをて、」(No.783)が「神願ヨシチヨテ」となっている。

満納の子の台詞「一 勘違するな」(No.824)が「一 ア、勘違スルナ」となっている。

乙樽の台詞「隠ちをゆか、」(No.842)が「隠チ置チユガ」となっている。

乙樽の台詞「たゝこともないらぬ、」(No.844)が「似タ事モナラ

ヌ」となっている。

石川の比屋の台詞「はあ勘違するな」(No.848)が「ア、勘違スルナ」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれは」(No.858)が「真実ニ云ヤレス」となっている。

乙樽の台詞「島国よ豊む」(No.887)が「島国モ豊ム」となっている。

乙樽の台詞「いきやしおれほとも」(No.901)が「ヌヲデオレ程」となっている。

谷茶の按司の台詞「あなたになるやれは」(No.916)が「仇ニナルヤラバ」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこゝれしちをて」(No.932)が「オノ心得シチヨテ」となっている。

満納の子の台詞「多ひ差繩持ち」(No.934)が「エイ差繩モ持ツチ」となっている。

下部の台詞「後てやすまぬ」(No.945)が「イヤ後レテヤ済マヌ」となっている。

満納の子の台詞「はあ、つらつきも替て」(No.967)が「ア、面附モ変テ」となっている。

谷茶の按司の台詞「はあ云る事よ聞へ」(No.996)が「ア、

云ル事ヨ聞ケバ」となっている。

乙樽の台詞「我身よりも増て」(No.1016)が「我身ユヘモマサテ」となっている。

乙樽の台詞「百とまでちやうわれ」(No.1023)が「百トワリチヨマデ」となっている。

乙樽の台詞「拝てすてら」(No.1024)が「拝テスデヤベラ」となっている。

満納の子の台詞「こめておきやへら」(No.1100)が「先ヅ固メテ置チヤベラ」となっている。

石川の比屋の台詞「満納思寄も」(No.1102)が「満納思故モ」となっている。

満納の子の台詞「はあ、主人身の上」(No.1129)が「ア、主人身ノ上ノ」となっている。

満納の子の台詞「あゝおとろしやもしらぬ」(No.1134)が「サレ驚ルシヤモ知ラヌ」となっている。

満納の子の台詞「盛衰の」(No.1157)が「栄ヒ衰イヤ」となっている。

谷茶の按司の台詞「推参なやから」(No.1168)が「イヤ推参ナ族ラ」となっている。

石川の比屋の台詞「此涯よたひもの」(No.1173)が「ア、

此涯ヨデモノ」となっている。

谷茶の按司の台詞「語ひほしやあもの、」（No.1199）が「暮シ欲シヤアモノ」となっている。

乙樽の台詞「御ゆるせよめしやうれ、」（No.1210）が「御免チ賜レ」となっている。

谷茶の按司の台詞「やくめさもいらぬ」（No.1213）が「ヤグミサンスルナ」となっている。

谷茶の按司の台詞「ワ側ともをらへ」（No.1215）が「我側に居ラバ」となっている。

谷茶の按司の台詞「いやく」（No.1232）が「ア」となっている。

谷茶の按司の台詞「かたまとるむさや」（No.1234）が「カタマヨルンザヤ」となっている。

谷茶の按司の台詞「急ち戻やうれ、」（No.1236）が「急チ戻レ」となっている。

谷茶の按司の台詞「はあ肝ほれてをたら」（No.1270）が「ア、肝狂レテ居タラ」となっている。

乙樽の台詞「隠れやひをらぬ、」（No.1292）が「振り捨テ、居ラヌ」となっている。

乙樽の台詞「三年の内に、」（No.1294）が「三年ノ内ヤ」となっ

ている。

谷茶の按司の台詞「昔ほれもの、」（No.1302）が「ア、昔狂レ者ノ」となっている。

谷茶の按司の台詞「つらさ身に受て」（No.1308）が「難面身ニ受テ」となっている。

乙樽の台詞「ワ身の肝や、」（No.1325）が「我身ノ肝ノ」となっている。

谷茶の按司の台詞「はあ果報もつきゆすかと」（No.1327）が「ア、果報モ付チユシガド」となっている。

谷茶の按司の台詞「はあしたひ、」（No.1331）が「ア、シタイ」となっている。

乙樽の台詞「来る二月に」（No.1333）が「来ル二月ヤ」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」（No.1339）が「オノ内ヤ是非ヨ」となっている。

谷茶の按司の台詞「いや、是や」（No.1342）が「ア、是ヤ」となっている。

谷茶の按司の台詞「はあおれもよたしや」（No.1350）が「オレ是レモヨタシヤ」となっている。

乙樽の台詞「百といつまでも」（No.1358）が「百トワリチヨマデ」



となっている。

谷茶の按司の台詞「一 あゝ我身もほこらしやの」(No.1363)が

「一 我身モ誇ラシヤノ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいを<sup>て</sup>も」(No.1366)が「ナヤガ  
ヤイ居スガ」となっている。

谷茶の按司の台詞「浮世楽々と」(No.1376)が「夢ノ間ノ浮世」  
となっている。

谷茶の按司の台詞「此内やとかく」(No.1388)が「此間ヤ兎角」  
となっている。

谷茶の按司の台詞「一 はあきよらさく」(No.1400)が「一  
ア、美ラサく」となっている。

乙樽の台詞「<sup>て</sup>すてら」(No.1405)が「<sup>て</sup>すデヤビラ」と  
なっている。

村原の比屋の台詞「つまひ分別に」(No.1422)が「キマイ分別  
ニ」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ、心元なきの」(No.1427)が「心モトナ  
サノ」となっている。

村原の比屋の台詞「物売にやつれ」(No.1429)が「物売ニ名付ケ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「<sup>て</sup>出る」(No.1430)が「<sup>て</sup>出ラ」とな

っている。

音曲「替やへん」(No.1438)が「替ヤビラ」となっている。

村原の比屋の台詞「一 先物売に名付」(No.1454)が「一 トウ  
／＼物売に名付ケ」となっている。

泊の台詞「頼まつて行ん」(No.1470)が「頼マツテ居ン」とな  
っている。

村原の比屋の台詞「<sup>ち</sup>をやへん」(No.1476)が「<sup>ち</sup>居ヤビ  
スガ」となっている。

村原の比屋の台詞「<sup>上</sup>やへら」(No.1479)が「<sup>上</sup>ヤベ  
ラ」となっている。

泊の台詞「一 あゝ是や仕合な事」(No.1481)が「一 ム、是  
レヤ仕合ナ事」となっている。

村原の比屋の台詞「一 田舎江御通の」(No.1483)が「田舎御通  
ノ」となっている。

村原の比屋の台詞「<sup>上</sup>も上やへら」(No.1487)が「<sup>上</sup>レモ上  
ベラゲヤビラ」となっている。

泊の台詞「<sup>屋</sup>良村んかい」(No.1491)が「<sup>屋</sup>良村ンカイ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「旅の者」(No.1501)が「<sup>者</sup>ノ者ヨ」となっ  
ている。

村原の比屋の台詞「御休みのうちに」(No.1510)が「御休みの中」となっている。

泊の台詞「一 あゝいきやいは兄弟」(No.1524)が「へい〜行逢ワ兄弟」となっている。

泊の台詞「これや余り」(No.1526)が「ア、是レヤ余り」となっている。

泊の台詞「むゝあゝ」(No.1531)が「ア、」となっている。

泊の台詞「あゝいたわしい事」(No.1534)が「痛ワシイ事」となっている。

村原の比屋の台詞「いきやしちやる事か」(No.1537)が「イチヤスチャル事」となっている。

泊の台詞「一 むゝ、おの事てハ、」(No.1539)が「一 トウオノ事テワ」となっている。

泊の台詞「たう細々の次第」(No.1540)が「細々ノ次第」となっている。

泊の台詞「加勢頼て」(No.1555)が「加勢頼シ」となっている。

泊の台詞「扱も〜奇妙な事い」(の力。一部筆が途切れている) (No.1596)が「サテモ〜妙ナ」となっている。

泊の台詞「村原とじや」(No.1599)が「ダア村原ノアヤアヤ」となっている。

泊の台詞「むしやものやすんつひてや、」(No.1603)が「モンヤスン付テヤ」となっている。

泊の台詞「此按司の言葉」(No.1625)が「ア、此按司ノ言葉」となっている。

泊の台詞「むきやわらひしち」(No.1642)が「苦ガ笑シユテ」となっている。

泊の台詞「をかしやおほむる」(No.1655)が「ヲカシヤ、」となっている。

泊の台詞「あはあ(高笑)〜」(No.1658)が「ハ、ハ、ハ、ア」となっている。

泊の台詞「肝出ち」(No.1664)が「肝出チテ」となっている。

泊の台詞「死しいきゆる命」(No.1665)が「死ノル我ガ命」となっている。

泊の台詞「村原としや」(No.1669)が「村原妻モ」となっている。

泊の台詞「分別なもの」(No.1670)が「分別ナンザノ」となっている。

泊の台詞「あゝ無蔵さ」(No.1675)が「ア、無蔵サヤ」となっている。

泊の台詞「ほんの誠に」(No.1678)が「誠ニ」となっている。

泊の台詞「打かへし〜しゆて」(No.1718)が「折イ返シ〜」

シユテ」となっている。

泊の台詞「むな待しゆらむておもれん」(No.1719)が「ンナ待シユランデ思レエ」となっている。

泊の台詞「やつさ」(No.1727)が「ヤツサ主」となっている。

泊の台詞「あて性もないらぬ」(No.1736)が「当て相ヤ無ラヌ」となっている。

泊の台詞「おれほとしや(ち)」(No.1738)が「オレ程シヤガ」となっている。

泊の台詞「得と思てむてん」(No.1741)が「得ト思テ見レエ」となっている。

村原の比屋の台詞「いきやる事やとて」(No.1777)が「イチヤル便アテ」となっている。

泊の台詞「一むまやまあたやへるか」(No.1792)が「一サレコマヤマアダヤベルガ」となっている。

泊の台詞「来る十日に」(No.1806)が「来ル十日ニヤ」となっている。

泊の台詞「逃めしやいへる筈」(No.1809)が「逃ゲミセエビイ事」となっている。

泊の台詞「御使とやへる」(No.1813)が「御使ダヤビル」となっている。

村原の比屋の台詞「気張て呉れ」(No.1822)が「気張テ呉レヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「かたきうちとらん」(No.1824)が「仇敵討取ラバ」となっている。

村原の比屋の台詞「一むは是に思つきやる」(No.1837)が「是ニ思ミ付チャル」となっている。

村原の比屋の台詞「事の又あゆん」(No.1838)が「事ノ又アスヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「おの時にまかち」(No.1848)が「オノ時ニ出テ」となっている。

村原の比屋の台詞「おのときに出て」(No.1849)が「オノ時ニ負カチ」となっている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」(No.1897)が「村原ノヒヤ切リ寄セル」となっている。

松千代の台詞「かたへのあらは」(No.1900)が「知ラセ部ノアレバ」となっている。

音曲「打取なをしてころくと」(No.1919)が「追取り直ホシテクルくと」となっている。

役名「松千代」(No.1927)が「松寿」となっている。

村原の比屋の台詞「一出様ちやる者や」(No.1936)が「一是

ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ寔慈悲なさま」(No.1938)が「誠慈悲ナサヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「我按司の報ひ、」(No.1939)が「若按司ノ御果報」となっている。

村原の比屋の台詞「思ハすに武運」(No.1942)が「思ハズニ御運」となっている。

村原の比屋の台詞「立よ出ら、」(No.1961)が「ウチヨ出ラ」となっている。

村原の比屋の台詞「やあ喜瀬の大屋子や、」(No.1971)が「ヤア喜瀬ノ大屋子」となっている。

村原の比屋の台詞「念の入れ、」(No.1978)が「念ノ入レヨ」となっている。

村原の比屋の台詞「又西川の子や、」(No.1982)が「一西川ノ子ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「城の後ろの」(No.1985)が「城ノ南ノ」となっている。

村原の比屋の台詞「山に伏よかくれ」(No.1986)が「山ニ伏シ隠レ」となっている。

村原の比屋の台詞「城立出て、」(No.1988)が「城ヨ立出ヂテ」

となっている。

村原の比屋の台詞「城の門閉て、」(No.1992)が「城ノ門閉ヂテ(他はミチテイ)」となっている。

村原の比屋の台詞「やあ瀬底下こおりや、」(No.2000)が「瀬底下庫理ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「やあ泊井や、」(No.2032)が「一泊ヤ」となっている。

村原の比屋の台詞「引取ひ逃て、」(No.2036)が「奪ヒ取ヤイ逃ゲテ」となっている。

村原の比屋の台詞「逃忍て行す」(No.2039)が「盗ル取テ行チユス」となっている。

村原の比屋の台詞「高らかにつけて、」(No.2042)が「高々ニ告ゲテ」となっている。

村原の比屋の台詞「案内しやしやうれ、」(No.2046)が「案内ヨシヤウレ」となっている。

村原の比屋の台詞「腹の立まゝに」(No.2057)が「腹立ノ俣ニ」となっている。

村原の比屋の台詞「忍びく、能々勘忍」(No.2059)が「エイ能クく堪忍」となっている。

村原の比屋の台詞「一はあ揃ておる人数」(No.2064)が「一揃

テ居ル人数」となっている。

音曲「押しつれて互に」(No.2077)が「心晴々ト」となっている。

音曲「遊ふうれしや」(No.2078)が「遊デ戻ラ」となっている。

乙樽の台詞「一 思子取戻ち」(No.2080)が「一 思子守名付ケ」となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ」(No.2081)が「明キ間何ヤヒ」となっている。

乙樽の台詞「ましり、出ん」(No.2083)が「交リ出デラ」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一 鬼瀬たやく」(No.2086)が「一 喜瀬ダヤビル」となっている。

泊の台詞「一 むゝにや時分たひらう」(No.2089)が「一 ムゝナア時分デエドウ」となっている。

泊の台詞「逃めしやいへひたん」(No.2096)が「逃ゲミセビタン」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 あゝ扱もく」(No.2098)が「一 サテモく」となっている。

谷茶の按司の台詞「急けく」(No.2130)が「急ガく」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は忍になっている)(No.

2136)が「恩義忘却」となっている。

乙樽の台詞「原国のなし子」(No.2141)が「原国ガ産子」となっている。

乙樽の台詞「忍てきちをゆん」(No.2143)が「忍デ着チ居モノ」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は忍になっている)(No.2144)が「此間ノ恩ニ」となっている。

乙樽の台詞「つける事たひもの」(No.2145)が「告ゲル筈デモノ」となっている。

乙樽の台詞「切はたちとらさ」(No.2153)が「打果チトラサ」となっている。

村原の比屋の台詞「武運つきはてん」(No.2157)が「御運廻リ来テ」となっている。

原国兄弟の台詞「待受てをす」(No.2167)が「待受ケテ居スヤ」となっている。

原国兄弟の台詞「しつちをため」(No.2168)が「知ラニ」となっている。

村原の比屋の台詞「一 兄弟の手柄」(No.2179)が「一 アゝ兄弟ノ手柄」となっている。

村原の比屋の台詞「一 神妙なことく」(No.2187)が「一 アゝ

神妙ナ事ヨ〜」となっている。

若按司の台詞「一 やあ村原よ、」（No.2189）が「一 ヤア村原」  
となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ拝てなく事や」（No.2197）が「一 誠  
拝ヌシヤ」となっている。

乙樽の台詞「逃忍ぶ後に、」（No.2213）が「逃忍ブ内ニ」となっ  
ている。

乙樽の台詞「けふ拝事や」（No.2218）が「誠拝ヌシヤ」となっ  
ている。

村原の比屋の台詞「美御迎しちやん、」（No.2231）が「美御迎モ  
シチャン」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」（No.2235）が「敵ノ手ニ渡テ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ末代の手本」（No.2237）が「世ノ中ノ手  
本」となっている。

西川の子使の台詞「おれ〜の用意」（No.2244）が「オレ〜ノ  
用心シチノ」となっている。

西川の子使の台詞「美御迎たやへる、」（No.2245）が「御迎ダヤ  
ビル」となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ思子も拝て」（No.2249）が「思子モ

拝デ」となっている。

村原の比屋の台詞「かにある誇らしや〜」（No.2251）が「今日ノ  
誇ラシヤノ」となっている。

村原の比屋の台詞「ものにとららぬ、」（No.2252）が「物ニタ  
トラレメ」となっている。

村原の比屋の台詞「美よんつかい拝シヤ〜」（No.2254）が「美  
御ツカヒシヤビラ」となっている。

若按司の台詞「一 嬉しさや互に」（No.2256）が「一 嬉シサヤ  
村原」となっている。

音曲「しほらひふし」（No.2264）が「シヨライ（見せ消ち、カン  
チャイ）節」となっている。

#### 『戯曲集』

着付「谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に金磨之龍之角飴有ル太  
刀刀茶色緞子羅陳羽織錦之飴有ル脚胖足袋大团金入錦之細帯」（  
No.24）が「着付、谷茶の按司、髪金入錦之入道頭巾向に金磨  
之龍角飾有る刀差、緞子衣裳、羅陣羽織錦之飾有る脚絆、足袋、  
大团持。」となっている。

着付「石川満名黒縷子入道頭巾向に金欄に而飴有ル黒細袷衣裳  
刀脚胖足袋」（No.25）が「石川満納、髪黒縷子入道頭巾向に金欄

にて飾有る黒さや袷衣裳、刀差、脚絆、足袋。」となっている。  
着付「門番黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳脚絆足袋差繩」(No.286)  
が「門番、髪黒縮緬入道頭巾、黒さや袷衣裳、脚絆、足袋、差繩持。」となっている。

着付「きやうちやく持黒木綿単衣裳脚絆足袋」(No.287)が「きやうちやく持、髪かもろう、黒さや袷衣裳、脚絆、足袋、高つぶり。」となっている。

着付「若按司かしらひ板縮緬振袖単衣裳足袋風車こぶすい」(No.288)が「若按司、髪はあよをひいかしらへ、板縮緬振袖単衣裳、緋さや足袋、風車持。」となっている。

着付「村原黒縮緬入道頭巾向に金襴に而飭有ル黒紗綾袷衣裳縮緬子広袖羽織刀太刀足袋物賈之時黒縮緬入道頭巾縮笠細物加籠に入付陳賦之時羅陳羽織甲胸当脚絆金之磨」(No.289)が「村原、髪黒縮緬子入道頭巾向に金襴にて飾有る黒紗綾袷衣裳、縮緬子広袖羽織、刀差、足袋、但中入より黒縮緬子入道頭巾、あみ笠かつぎ、物売かごに細物入付、かたげ出る。陣賦之時より羅陳羽織、甲かつぎ、胸当、脚絆、足袋」となっている。

着付「原国兄弟長刀半向頭巾紺花青銅(ネ十同)衣裳脚絆足袋中入より入道頭巾綿」(No.30)が「原国兄弟、長刀持出る、髪半向頭巾、緋縮緬裏緋さや衣裳、脚絆、緋さや足袋、中入より黒

縮緬入道頭巾向に飾有る長刀持つ。」となっている。

着付「村原母并妻かもし紫長巾金銀水引熨斗作花助巾琉縫薄衣裳足袋妻谷茶城江参候時女笠杖持帰り候時長刀母黒地形付衣裳」(No.31)が「村原母並妻、垂髪紫長巾作花差、琉縫薄衣裳緋さや足袋。同人妻谷茶城江参候時、女笠かつぎ、杖持出る、控居候時笠はづし、且逃帰候時、途中にて喜瀬の大屋子長刀渡。」となっている。

着付「西川の子瀬底下こおり西川の支(ママ)喜瀬の大屋子四人黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳脚絆足袋」(No.32)が「西川の子瀬底下こおり西川の子喜瀬の大屋子、髪黒縮緬入道頭巾さや袷衣裳、刀差、脚絆、足袋。」となっている。

着付「泊井紺西洋巾黒木綿衣裳脚絆足袋陳賦之時黒西洋入道頭巾」(No.33)が「泊、緋縮緬巾にて、請八巻、玉色染木綿衣裳、脚絆、足袋、陣賦之時より黒縮緬入道頭巾、黒さや袷衣裳、刀差。」となっている。

着付「村原子紺縮緬衣裳」(No.34)が「附、村原妻、子抱き出る。子、緋縮緬衣裳、委細取控帳に相見得候。」となっている。

音曲「夢の心地」(No.92)が「夢のこころ。」となっている。  
乙樽の台詞「しらべのあれへ、」(No.111)が「知らしべのあれへ、」となっている。

乙樽の台詞「なく泪ともに」(No.117)が「なく泪と共に」となっている。

乙樽の台詞「人になちからや(に)」、「人になちからに」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.159)が「村原母並妻なし子三人道行仲間ぶし」となっている。

音曲「なかんかりふし」(No.175)が「なかんかりぶし(続き)」となっている。

乙樽の台詞「すと親のことも」、「すと親の事や」となっている。

乙樽の台詞「むたよいかとても」、「見だよりは迎も」となっている。

乙樽の台詞「跡方ハ頼て」(No.218)が「跡方や頼て」となっている。

役名「村原」(No.276)が「村原のひや 橋掛より出る」となっている。

村原の比屋の台詞「こねや夜深さく」、「こねや夜深く」となっている。

村原の比屋の台詞「死やならぬ」、「死やなやべらぬ」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)が「我肝落付ちゆて」となっている。

役名「乙樽原」(No.437)が「村原詞」となっている。

乙樽の台詞「討死はすらな」、「討死はすらに」となっている。

母の台詞「思子までかゝて」(No.476)が「思子まで掛けて」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「請返答能う」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」、「了簡よすれよ」となっている。

音曲「義理のみちやれハ」(No.612)が「義理の道だいの」となっている。

満納の子の台詞「引取んてやり」、「引取んてやりの」となっている。

谷茶の按司の台詞「一段な事よ／＼」、「一段な事、／＼」となっている。

満納の子の台詞「おの御肝きやへや」(No.760)が「おの御肝きやさや」となっている。

満納の子の台詞「あゝ好てこのまらぬ」(No.769)が「はあ、



好でこのまらぬ」となっている。

乙樽の台詞「色分てたはふれ」(No.788)が「色分ちたばうれ」となっている。

満納の子の台詞「重ならんしゆもの」(No.801)が「重ねらんしゆもの」となっている。

乙樽の台詞「たゝこともないらぬ」(No.844)が「たゝことも無いらぬ」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれば」(No.858)が「真実に言やれず」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこゝれしちをて」(No.932)が「たうく、おの心得しちをて」となっている。

満納の子の台詞「近く寄てをどて」(No.935)が「近く寄てからに」となっている。

乙樽の台詞「鬼無理にせまて」(No.988)が「鬼無理にしめて」となっている。

谷茶の按司の台詞「せまてある縄も」(No.1003)が「しめてある縄も」となっている。

谷茶の按司の台詞「高程もおちやて」(No.1046)が「丈程もおきやて」となっている。

満納の子の台詞「尋たんたひか」(No.1088)が「尋ねたんてや

りか」となっている。

満納の子の台詞「おの責にあてゝ」(No.1094)が「おの責めよあてゝ」となっている。

石川の比屋の台詞「按司や百ことの」(No.1126)が「按司や百事も」となっている。

満納の子の台詞「みよんにゆけややくか」(No.1135)が「みおんにゆけやべすが」となっている。

満納の子の台詞「外の出入も」(No.1144)が「外の出入」となっている。

谷茶の按司の台詞「糸の縁結て」(No.1197)が「縁の糸結で」となっている。

谷茶の按司の台詞「素立ひやならぬ」(No.1235)が「素立もならぬ」となっている。

乙樽の台詞「露程のいのち」(No.1265)が「露程も命」となっている。

乙樽の台詞「引されていきゆさ」(No.1324)が「引かされていきゆる」となっている。

乙樽の台詞「おしやけんしゆもの」(No.1338)が「おしやげらんしゆもの」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」(No.1339)が「おの内や是非よ」

となっている。

役名「谷茶」(No.1362)が「谷茶独語」となっている。

谷茶の按司の台詞「このたけにワ身や」(No.1365)が「此たけに  
我も」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをても」(No.1366)が「なやが  
やり居すが、」となっている。

音曲「さいんそるぶし」(No.1431)が「歌　さいんそるぶし」と  
なっている。

役名「泊井」(No.1458)が「泊詞　橋掛より出る」となっている。

泊の台詞「頼まつて行ん、」(No.1470)が「頼まつて居ん。」とな  
っている。

泊の台詞「谷屋良村んかい」(No.1491)が「北谷屋良村んかへ」  
となっている。

泊の台詞「まひか、」(No.1496)が「いまいが。」となっている。  
役名「同人」(No.1523)が「泊詞」となっている。

泊の台詞「ぬちやてひつ、」(No.1588)が「ぬちやてひぢ  
で知つち、」となっている。

泊の台詞「村原としも」(No.1592)が「村原とじのあやも」とな  
っている。

泊の台詞「扱も〜寄妙な事い」(の力。一部筆が途切れている)

(No.1596)が「さても〜妙なもの。」となっている。

泊の台詞「きんとやててん、」(No.1597)が「聞きんとやたん。」  
となっている。

泊の台詞「さつたる仕形もをかしや、」(No.1611)が「さつたる  
仕方のをかしやい。」となっている。

泊の台詞「あはあ(高笑)〜」(No.1658)が「あはは……………」  
となっている。

泊の台詞「分別なもの、」(No.1670)が「分別なむぎの、」となっ  
ている。

泊の台詞「あゝ無蔵さ」(No.1675)が「あゝ無蔵さい、」となっ  
ている。

泊の台詞「おんにゆけゆんむつ、」(No.1724)が「おんにゆけら  
むで、」となっている。

泊の台詞「あつまつさ」(No.1731)が「浅まつさ。」となってい  
る。

泊の台詞「おれほとしや(ち)」(No.1738)が「おれほとしやが。」  
となっている。

泊の台詞「誠に満納の子とやゆる、」(No.1744)が「誠に満納の  
子どやる。」となっている。

村原の比屋の台詞「あかと屋良むらに、」(No.1776)が「あがと

屋良村へ」となっている。

泊の台詞「逃めしやいへる筈」(No.1809)が「逃げめしやいる筈。」となっている。

泊の台詞「御使とやへくる」(No.1813)が「御使だやへる。」となっている。

役名「同人」(No.1836)が「同人詞 南表の幕に入る」となっている。

役名「原国兄弟」(No.1874)が「原国兄弟詞 北表の幕より出る」となっている。

音曲「揚口説」(No.1917)が「歌、原国兄弟口説」となっている。

役名「松千代」(No.1927)が「松千代詞 南表の幕に入る」となっている。

役名「村原」(No.1935)が「村原詞 南表の幕より出る」となっている。

原国兄弟の台詞「一 かつきやうの時節」(No.1963)が「かつきやうな時節。」となっている。

村原の比屋の台詞「山に伏よかくれ」(No.1986)が「山に伏しかくれ。」となっている。

村原の比屋の台詞「道の口立ふなむち」(No.2006)が「道の口塞

ぢ。」となっている。

村原の比屋の台詞「先の石ひや螺を」(No.2023)が「まづ、石火矢螺を」となっている。

乙樽の台詞「ましり、出ん」(No.2083)が「まぎれ出ぢる。」となっている。

役名「鬼瀬」(No.2084)が「喜瀬の大屋子 北表の幕より出る」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一 鬼瀬たやく」(No.2086)が「喜瀬だやへる。」となっている。

役名「泊井」(No.2088)が「泊詞 橋掛より出る」となっている。

泊の台詞「谷茶(石川)、誘ひたさう」(No.2091)が「谷茶誘出さう。」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は忍になっている)(No.2136)が「恩儀忘却」となっている。

乙樽の台詞「原国のなし子」(No.2141)が「原国がなし子」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は忍になっている)(No.2144)が「此間の恩に」となっている。

役名「谷茶」(No.2148)が「谷茶詞 北表の幕より出る」となっている。

役名「村原」(No.2154)が「村原詞 橋掛より出る」となっている。

役名「原国」(No.2164)が「原国兄弟詞 南表の幕より出る」となっている。

役名「谷茶」(No.2169)が「谷茶詞 北表の幕より出る」となっている。

役名「兄弟」(No.2172)が「原国兄弟詞 北表の幕江谷茶追入る」となっている。

原国兄弟の台詞「一 ひやひやひ」(No.2173)が「ひやあやひ」となっている。

役名「同人」(No.2174)が「同人 同所より出る」となっている。

役名「村原」(No.2178)が「村原詞 橋掛より出る」となっている。

役名「若按司」(No.2188)が「若按司詞 北表の幕より出る」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり」(No.2209)が「生れ日よてやり」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235)が「敵の手に渡る」となっている。

村原の比屋の台詞「一 一段な事よ〜」(No.2247)が「一段

な事〜」となっている。

「豊川家」

村原の比屋の台詞「今帰仁の城」(No.39)が「今帰仁城」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ谷茶あまやか」(No.43)が「はあ谷茶あまやか」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.159)が「三人道行子持ふし」となっている。

音曲「道行なかんかりふし」(No.170)が「子持ふし」となっている。

役名「母」(No.180)が「歌同ふし」となっている。

音曲「子持ふし」(No.186)が「母親」となっている。

音曲「一 冬の山嵐や」(No.187)が「一 冬の山嵐」となっている。

役名「同人」(No.205)が「乙樽」となっている。

乙樽の台詞「身すからになれ」(No.215)が「身すからにならは」となっている。

乙樽の台詞「なきつたる因果」(No.224)が「なされたる犬子(因果)」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松」(No.243)が「やあ乙松よ。」となっている。

乙樽の台詞「跡方へ頼て」(No.248)が「跡方や」となっている。

村原の比屋の台詞「撫素立しゆたる」(No.294)が「撫素立しきやる。」となっている。

母の台詞「主の恩忘ひ」(No.327)が「君の恩忘れ」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事」(No.339)が「思子の事や」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ思ひ世に残ち」(No.367)が「思ひ世に残ち」となっている。

乙樽の台詞「哀れなくくも」(No.397)が「あはりなくく」  
となっている。

乙樽の台詞「あん前に名付」(No.413)が「あん前にやつれ」となっている。

乙樽の台詞「抱(かげ)置積り」(No.422)が「抱置る積り」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)が「我肝落着て」となっている。

役名「乙樽原」(No.437)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「末代の恥辱」(No.454)が「あゝ末代の。恥辱」となっている。

乙樽の台詞「事す又やらへ」(No.460)が「事よまたやらへ」となっている。

村原の比屋の台詞「断やしちやる」(No.494)が「いちやる」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「受請答よう」となっている。

乙樽の台詞「肝願よしちをて」(No.606)が「肝の願しちをて」となっている。

乙樽の台詞「まちやひいまふれ」(No.618)が「御待めしやうれ」となっている。

音曲「伊野波ふし下句」(No.619)が「母親」となっている。

音曲「乙樽道行金武ふし」(No.628)が「乙樽道行野波ふし」となっている。

門番の台詞「一 はあく無作法く」(No.643)が「一 はあ無沙法く」となっている。

乙樽の台詞「一 やあく」(No.647)が「一 やく」となっている。

乙樽の台詞「大川の城」(No.652)が「大川の按司の」となっている。

いる。

門番の台詞「はあ云る」とよ聞へ、」(No.669)が「あ云事よ聞へ」となっている。

門番の台詞「無蔵なもの」(No.670)が「無蔵な者さらめ」となっている。

満納の子の台詞「一 され按司かなし、」(No.686)が「一 やあ按司かなし」となっている。

満納の子の台詞「計事便て」(No.698)が「計事便」となっている。

満納の子の台詞「多い事たやへる」(No.702)が「多い事とやよる」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 一段な事よ」(No.704～705)が「一 一段な事」となっている。

役名「石川」(No.725)が「満納」となっている。

下部の台詞「一 やあ」(No.733)が「一 やあ」となっている。

下部の台詞「御前寄て拝め」(No.734)が「御前寄て拝めやうれ」となっている。

満納の子の台詞「おかたちか巧」(No.744)が「いかたちか巧」となっている。

満納の子の台詞「聞答とやすか」(No.797)が「聞答とやよる」となっている。

満納の子の台詞「殺される者も」(No.831)が「殺される者」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれば」(No.858)が「真心よ言すん」となっている。

石川の比屋の台詞「のおめのあゆか、」(No.868)が「此外にあよめ」となっている。

乙樽の台詞「つくまてとやゆる、」(No.894)が「次まてとやよる」となっている。

乙樽の台詞「あ按司かなし御始」(No.895)が「按司かなし御始」となっている。

乙樽の台詞「鬼のことめしやうち」(No.900)が「鬼のことしちよそ」となっている。

満納の子の台詞「一 いや、此上に又も」(No.924)が「一 此上に又も」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこくれしちをて」(No.932)が「たうおのこくれしちよて」となっている。

満納の子の台詞「多差繩持ち」(No.934)が「やあ差繩持ち」となっている。

役名「下部」(No.938)が「案内聞」となっている。

下部の台詞「急ちおんにゆけやうれ」(No.946)が「急ちおんによけれ」となっている。

乙樽の台詞「我胸の内や」(No.959)が「我むねの内」となっている。

満納の子の台詞「屹度こむ責れ」(No.975)が「急ちこんしめれ」となっている。

役名「下部」(No.976)が「案内聞」となっている。

谷茶の按司の台詞「一はあ云る事よ聞ハ」(No.996)が「一あ云る事よ聞ハ」となっている。

谷茶の按司の台詞「急ちときゆるす」(No.1004)が「ふときとらす」となっている。

乙樽の台詞「此御思たうとさや」(No.1009)が「御思たうとさや」となっている。

谷茶の按司の台詞「思案より外の」(No.1039)が「思案故外の」となっている。

谷茶の按司の台詞「雪のしらはくき」(No.1048)が「雪の白ら第口」となっている。

谷茶の按司の台詞「我肝とも呉らハ」(No.1059)が「わ肝とんこひりハ」となっている。

谷茶の按司の台詞「おかとしちすまぬ」(No.1069)が「おつかつとしちおらぬ」となっている。

谷茶の按司の台詞「けふや立別て」(No.1070)が「今日や立戻て」となっている。

谷茶の按司の台詞「思案しちからに」(No.1072)が「思案しちをとて」となっている。

満納の子の台詞「愚痴の上に愚痴や」(No.1089)が「愚痴の上に愚痴」となっている。

石川の比屋の台詞「無理なものやても」(No.1109)が「愚痴な者やてん」となっている。

満納の子の台詞「おかとしちすまぬ」(No.1121)が「おつかつとしち済ん」となっている。

満納の子の台詞「命ち限り」(No.1132)が「命のある限り」となっている。

満納の子の台詞「みよんにゆけややへか」(No.1135)が「みよんにゆけやへか」となっている。

満納の子の台詞「一あ按司かなし天の」(No.1156)が「一はあ按司かなし天の」となっている。

満納の子の台詞「是非共牢舎」(No.1165)が「是非共に牢舎」となっている。

谷茶の按司の台詞「愚痴にかたまとめ」(No.1169)が「愚痴にかたまよめ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なけすてとどぶさ」(No.1171)が「切捨てとらさ」となっている。

乙樽の台詞「無理な事めしやうな」(No.1251)が「無理な人さらめ」となっている。

乙樽の台詞「恥もふりすて」(No.1263)が「はちん打捨て」となっている。

乙樽の台詞「引されていきゆき」(No.1324)が「引されて行く」となっている。

乙樽の台詞「おしやけんしゆもの」(No.1338)が「おしやけんしゆもの」となっている。

谷茶の按司の台詞「いつまでもまちゆん」(No.1351)が「早晚迄も待ん」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをて」(No.1366)が「なやかやい居すか」となっている。

音曲「やつれ出る」(No.1417)が「躍り出る」となっている。  
村原の比屋の台詞「思子取戻す」(No.1421)が「思子引取る」となっている。

音曲「きせるも宝蔵も」(No.1440)が「きせるん火縄ん宝蔵ん」

となっている。

泊の台詞「頼まつて行ん」(No.1470)が「頼まつてをん」となっている。

泊の台詞「一 あは是や仕合な事」(No.1481)が「一 あ是や仕合な事」となっている。

村原の比屋の台詞「是々」(No.1486)が「是」となっている。  
泊の台詞「谷谷屋良村んかい」(No.1491)が「北谷屋良村ん「欠」」となっている。

泊の台詞「かんのふも」(No.1529)が「のをんかん」となっている。

泊の台詞「国々の按司部うたんで」(No.1551)が「国々の按司部」となっている。

泊の台詞「以の外、火急な事」(No.1560)が「以の外火中な事」となっている。

泊の台詞「終にや思子や生捕られ」(No.1566)が「終にや嫡子生捕られ」となっている。

泊の台詞「行衛しれらぬ」(No.1569)が「行衛知りらんやすか」となっている。

泊の台詞「扱もく奇妙な事い」(の力。一部筆が途切れている)  
(No.1586)が「さても「欠」妙なもの」となっている。



泊の台詞「村(原)のあやゝ」(No.1620)が「村原あやゝ」となっている。

泊の台詞「おとちやん」(No.1630)が「無蔵さ」となっている。

泊の台詞「あはあ(高笑)〜」(No.1658)が「あは〜あ」となっている。

泊の台詞「待と嬉しこと」(No.1702)が「待と嬉しやこと」となっている。

泊の台詞「打かへしく〜しゆて」(No.1718)が「折かへしく〜しまて」となっている。

泊の台詞「度々御意見」(No.1723)が「度々意見」となっている。

泊の台詞「のふ目もみしらぬ」(No.1725)が「ぬを目めしうん」となっている。

泊の台詞「かひはうかつたん」(No.1726)が「かひはうかつて」となっている。

泊の台詞「やひち」(No.1727)が「ひやひち」となっている。

泊の台詞「あつまつさ」(No.1731)が「あさまいさ」となっている。

泊の台詞「おれほとしや(ち)」(No.1738)が「おり程しやが」となっている。

泊の台詞「あちしやつ所から」(No.1743)が「あちしや所から

と」となっている。

泊の台詞「誠に満納の子とやゆる」(No.1744)が「誠満納の子とやゆる」となっている。

泊の台詞「又も嘶さうやあ」(No.1771)が「又咄さうや」となっている。

泊の台詞「ちゆの用事問よすや」(No.1781)が「ちゆの用事問よたひ」となっている。

村原の比屋の台詞「聞ほしやよあすか」(No.1786)が「聞ほしやよあて」となっている。

村原の比屋の台詞「一 わ身や村原の」(No.1797)が「我身村原のひや」となっている。

村原の比屋の台詞「気張て呉れ」(No.1822)が「気張てこひれよ」となっている。

役名「同人」(No.1836)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「おのときに出て」(No.1849)が「おのときに向て」となっている。

松千代の台詞「一 なま出る二人や」(No.1875)が「一 兄弟の者や」となっている。

松千代の台詞「兼て聞及て」(No.1888)が「聞もはかなさや」となっている。

松千代の台詞「打捕んともて」(No.1892)が「打捕んともて押  
烈て」となっている。

松千代の台詞「思子の前と」(No.1895)が「若按司の事や」とな  
っている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」(No.1897)が「村原のひや取  
留らんでの」となっている。

音曲「揚口説」(No.1917)が「原国兄弟」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ寔慈悲なさま」(No.1938)が「あゝ誠あ  
る慈悲な」となっている。

村原の比屋の台詞「我按司の報ひ」(No.1939)が「我か按司の  
果報や」となっている。

村原の比屋の台詞「かたき討取ゆる」(No.1958)が「敵かたき打  
取る時節」となっている。

村原の比屋の台詞「御運廻り来て」(No.1959)が「武運廻り来  
て」となっている。

村原の比屋の台詞「けふのよかる日」(No.1960)が「けふかた  
き打よ出る」となっている。

役名「原国兄弟」の台詞 (No.1962～1966) が「総人数」の台詞  
となっている。

原国兄弟の台詞「一 ころきやうの時節」(No.1963)が「一 肝

要な時節」となっている。

村原の比屋の台詞「又西川の子や」(No.1982)が「一 又西川  
子や」となっている。

村原の比屋の台詞「けふの真夜中に」(No.1984)が「その真夜中  
に」となっている。

村原の比屋の台詞「城立出て」(No.1988)が「城よ立出て」  
となっている。

村原の比屋の台詞「差立っておけ」(No.1996)が「立っておけ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「原国の兄弟や」(No.2020)が「一 やあ原  
国の兄弟や」となっている。

村原の比屋の台詞「伏よ隠れとて」(No.2022)が「休しかくり  
となっている」。

村原の比屋の台詞「忍てむちおとて」(No.2034)が「忍てむち  
となっている」。

村原の比屋の台詞「城走登て」(No.2038)が「城走登居とて」  
となっている。

村原の比屋の台詞「高らかにつけて」(No.2042)が「たしかに  
つけて」となっている。

村原の比屋の台詞「北の山道に」(No.2045)が「北の」となって

いる。

村原の比屋の台詞「案内しやしやうれ<sup>レ</sup>」(No.2046)が「案内よしうれ」となっている。

村原の比屋の台詞「慥にきけ<sup>レ</sup>」(No.2052)が「たによ聞留り」となっている。

村原の比屋の台詞「腹の立ま<sup>レ</sup>」(No.2057)が「はら立る俣に」となっている。

村原の比屋の台詞「いそち打立に<sup>レ</sup>」(No.2072)が「急ちおし寄ら」となっている。

音曲「乙樽思子引取逃走はや作田ふし」(No.2074)が「思子出羽いちんたうふし」となっている。

乙樽の台詞「一 思子取戻ち」(No.2080)が「一 思子取戻そ」となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ<sup>レ</sup>」(No.2081)が「あけ間計やひ」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一 鬼瀬たや<sup>レ</sup>」(No.2086)が「鬼瀬大屋子たいや<sup>レ</sup>」(欠)となっている。

谷茶の按司の台詞「一 あ<sup>レ</sup>扱も<sup>レ</sup>」(No.2098)が「一 さても<sup>レ</sup>」となっている。

石川の比屋の台詞「一 やあ<sup>レ</sup>」(No.2112)が「一 はあ<sup>レ</sup>」

となっている。

石川の比屋の台詞「御供しやうれ<sup>レ</sup>」(No.2116)が「御供しや<sup>レ</sup>ら」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 あれよ<sup>レ</sup>」(No.2135)が「一 あり<sup>レ</sup>」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は忍になっている)(No.2136)が「恩賞も知らん」(注、「賞」の字は責に近い)となっている。

乙樽の台詞「原国のなし子<sup>レ</sup>」(No.2141)が「原国がなし子」となっている。

乙樽の台詞「思子、御迎に<sup>レ</sup>」(No.2142)が「思子御迎」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は忍になっている)(No.2144)が「此間の恩」となっている。

乙樽の台詞「つける事たひもの<sup>レ</sup>」(No.2145)が「送気か事たいもの」となっている。

乙樽の台詞「切はたちとらさ<sup>レ</sup>」(No.2153)が「果ちとらさ」となっている。

村原の比屋の台詞「武運つきはて<sup>レ</sup>」(No.2157)が「武運つきはて」となっている。

村原の比屋の台詞「廻てきぢやめ」(No.2159)が「廻り来る」となっている。

役名「同人」という村原の台詞 (No.2162～2163) が「谷茶」の台詞となっている。

役名「瀬底」の台詞が (No.2183～2185) が「谷茶供」の台詞となっている。

役名「村原」(No.2190) が「同人」となっている。

村原の比屋の台詞「ゆめかややくら」(No.2198) が「夢かやよら」となっている。

村原の比屋の台詞「過し按司添も」(No.2199) が「過し按司そへ」となっている。

村原の比屋の台詞「嬉しやめしやくら」(No.2200) が「しらしふしやの」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり」(No.2209) が「生れ日よてやひ」となっている。

乙樽の台詞「気のつかぬあれハ」(No.2211) が「気のつかんあ」となっている。

乙樽の台詞「けふ拝事や」(No.2218) が「又拝も事や」となっている。

村原の比屋の台詞「美御迎しぢやん」(No.2231) が「美御迎ん

しぢやん」となっている。

村原の比屋の台詞「女身の上に」(No.2233) が「女身の上の」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235) が「敵の手に」となっている。

西川の子使の台詞「一 され西川の子」(No.2240) が「一 さり／＼我身や」となっている。

西川の子使の台詞「使たやくる」(No.2241) が「西川の子使たやへる」となっている。

西川の子使の台詞「城乗取やひ」(No.2243) が「城乗取て」となっている。

村原の比屋の台詞「一 一段な事よ／＼」(No.2247) が「一 一段な事／＼」となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ思子も拝て」(No.2249) が「あゝ思子も拝ミ」となっている。

村原の比屋の台詞「ものたとららぬ」(No.2252) が「物に立らぬ」となっている。

役名「村原」の台詞 (No.2258～2259) が「総人数」の台詞となっている。

音曲「しほらひふし」(No.2264～2268) が「村原」の台詞となっ

ている。

音曲「一 御代つきよめしやうち」(No.2265)が「一 御代継にめしやうち」となっている。

音曲「本の御城に」(No.2266)が「御城」となっている。

「喜舎場本」

村原の比屋の台詞「一 出様ちやるものや」(No.36)が「是や」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ谷茶あまやか」(No.43)が「はあ谷茶あまやか」となっている。

村原の比屋の台詞「多勢(二無勢)」(No.58)が「多勢無勢」となっている。

村原の比屋の台詞「按司の跡つかち」(No.64)が「按司の跡継」となっている。

村原の比屋の台詞「有難さ思て」(No.66)が「難さ思て」となっている。

村原の比屋の台詞「計得とやゆる」(No.73)が「計得知よる」となっている。

村原の比屋の台詞「大川の御運」(No.76)が「大川の武運」となっている。

村原の比屋の台詞「村原か命ち」(No.82)が「村原か」となっている。

乙樽の台詞「しらへのあれハ」(No.111)が「知せ部の有は」となっている。

乙樽の台詞「なく泪ともに」(No.117)が「鳴く泪と共に」となっている。

母の台詞「花のおもかほの」(No.138)が「花の俵の」となっている。

乙樽の台詞「一 いらぬことめしやうな」(No.143)が「産子むなひ双れ」となっている。

乙樽の台詞「後れてや済ぬ」(No.144)が「治居んならん」となっている。

乙樽の台詞「程程になさハ」(No.152)が「程々にならハ」となっている。

乙樽の台詞「君親の事も」(No.153)が「君親の事や」となっている。

乙樽の台詞「たう／＼御気張よめしやうれ」(No.157)が「御気張よ召れ」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.159)が「三人道行子持ふし」となっている。

音曲「道行なかんかりふし」(No.170)が「子持ふし」となっている。

役名「母」(No.180)が「歌」となっている。

音曲「子持ふし」(No.186)が「母」となっている。

役名「同人」(No.205)が「乙樽」となっている。

乙樽の台詞「すと親のことも」(No.207)が「姑親の事や」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松」(No.243)が「やあ乙松よ」となっている。

乙樽の台詞「跡方ハ頼て」(No.248)が「跡方や尋て」となっている。

乙樽の台詞「尋ねやひ呉れよ」(No.249)が「計得呉よ」となっている。

乙樽の台詞「頓て喜名村や」(No.267)が「頓て喜名村」となっている。

村原の比屋の台詞「こねや夜深さ」(No.287)が「こねや夜深く」となっている。

村原の比屋の台詞「撫素立しゆたる」(No.294)が「撫素立しちやる」となっている。

村原の比屋の台詞「露霜と共に」(No.301)が「雪霜と共に」とな

っている。

村原の比屋の台詞「先にかゝら」(No.307)が「先に掛り」となっている。

村原の比屋の台詞「按司添と共に」(No.337)が「按司と諸共に」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事と」(No.339)が「思子の事や」となっている。

村原の比屋の台詞「此世界にをと」(No.364)が「此世界に」となっている。

村原の比屋の台詞「いきやし乙松」(No.370)が「いきやし乙松や」となっている。

乙樽の台詞「哀れなくも」(No.397)が「哀泣々に」となっている。

乙樽の台詞「我身に思つきやる」(No.411)が「我身に計とる」となっている。

乙樽の台詞「あん前に名付」(No.413)が「あ母前に躍(やつ)れ」となっている。

乙樽の台詞「抱(か)げ(置)積り」(No.422)が「抱置る積い」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)が「わ肝落着て」とな

ている。

役名「乙樽原」(No.437)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「義理の道曲い」(No.451)が「義理の道狂て」となっている。

乙樽の台詞「事す又やらハ」(No.460)が「事よ又やらハ」となっている。

乙樽の台詞「一刀も掛て」(No.463)が「一刀に掛て」となっている。

乙樽の台詞「討死はすらな」(No.464)が「討死よすらな」となっている。

母の台詞「やあ乙樽」(No.471)が「やあ乙樽よ」となっている。

母の台詞「はからやひくひれよ」(No.479)が「計得呉よ」となっている。

村原の比屋の台詞「きもの忍はらぬあてと」(No.493)が「肝の忍らん」となっている。

村原の比屋の台詞「断やしちやる」(No.494)が「むぼんてやりいちやる」となっている。

村原の比屋の台詞「今の心さし」(No.495)が「あゝ今の志し」となっている。

村原の比屋の台詞「気張て呉れよ」(No.503)が「働い呉れよ」

となっている。

乙樽の台詞「心ろつくさ」(No.509)が「心尽しやへら」となっている。

母の台詞「あけやう思盡す」(No.518)が「あけやう思盡ち」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「請返答やう」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」(No.534)が「了簡よすれよ」となっている。

乙樽の台詞「念のいらに」(No.539)が「念を入らに」となっている。

村原の比屋の台詞「切巧てをる次第」(注、切は見せ消ちカ)(No.546)が「巧て居る次第」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ繰返し〜」(No.551)が「はあ繰返し〜」となっている。

乙樽の台詞「生殺しされててやり」(No.575)が「活殺しされてたい」となっている。

乙樽の台詞「計やひたはふれ」(No.596)が「計得給り」となっている。

村原の比屋の台詞「気遣するな」(No.601)が「気遣よするな」

となっている。

乙樽の台詞「まちやひいまふれ」(No.618)が「御待召うれ」となっている。

音曲「伊野波ふし下句」(No.619)が「歌」となっている。

音曲「夢の世界や」(No.621)が「夢の浮世」となっている。

音曲「乙樽道行金武ふし」(No.638)が「乙樽道行饒火ふし」となっている。

乙樽の台詞「すかる方なひらぬ」(No.657)が「暮そ方ないらぬ」となっている。

門番の台詞「はあ云ることよ聞へ」(No.669)が「あ云る事よ聞へ」となっている。

門番の台詞「無蔵なもの」(No.670)が「無蔵なものさらめ」となっている。

門番の台詞「待ひをれよ」(No.672)が「待うれ」となっている。

満納の子の台詞「され按司かなし」(No.686)が「いやあ按司かなし」となっている。

満納の子の台詞「あゝあれほどの村原も」(No.691)が「はああり程の村原も」となっている。

満納の子の台詞「村原のひやか」(No.697)が「村原のひや」となっている。

谷茶の按司の台詞「やあ石川のひや」(No.706)が「やあ石川のひや」となっている。

役名「石川」(No.725)が「満納」となっている。

下部の台詞「さあ」(No.733)が「やあ」となっている。

満納の子の台詞「慥にきけ」(No.743)が「慥に聞入」となっている。

満納の子の台詞「おかたちか巧ミ」(No.744)が「たちか巧ミ」となっている。

満納の子の台詞「責もさぬこと」(No.751)が「責もさんことに」となっている。

満納の子の台詞「島知行もとらち」(No.758)が「島知行もとらさ」となっている。

満納の子の台詞「聞答とやすか」(No.797)が「聞答とよよる」となっている。

満納の子の台詞「科の上に科や」(No.800)が「科の上の科や」となっている。

乙樽の台詞「ワか命の外に」(No.840)が「我身の外に」となっている。

乙樽の台詞「たゝことないらぬ」(No.844)が「たゝ事やない」



らん」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれは」(No.858)が「真心にいやすん」となっている。

石川の比屋の台詞「美押をかてからに」(No.860)が「御押おかてからに」となっている。

石川の比屋の台詞「ちとてやすまぬ」(No.866)が「命とやい済ん」となっている。

石川の比屋の台詞「のおめのあゆか」(No.888)が「此外にあよミ」となっている。

石川の比屋の台詞「真肝うちわれて」(No.872)が「真肝打晴て」となっている。

乙樽の台詞「くる間の命ち」(No.892)が「来る間命ち」となっている。

乙樽の台詞「つくまてとやゆる」(No.894)が「継まてとやよる」となっている。

乙樽の台詞「あく按司かなし御始」(No.895)が「按司かなし御始」となっている。

乙樽の台詞「鬼のことめしやうち」(No.900)が「鬼のことしちゆて」となっている。

満納の子の台詞「一 いや、此上に又も」(No.924)が「一 此

上に又も」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこれしちをて」(No.932)が「たう／＼おのこくりしちゆて」となっている。

満納の子の台詞「多ひ差繩持ち」(No.934)が「やあ差繩も持い」となっている。

役名「下部」(No.938)が「案内者」となっている。

満納の子の台詞「一 いや、おなためもしらぬ」(No.949)が「おなためもしらぬ」となっている。

満納の子の台詞「こつてをゆめ」(No.950)が「こつて居よか」となっている。

満納の子の台詞「夫喰る悪生」(No.969)が「夫喰る悪蛇」となっている。

満納の子の台詞「是と鬼やゆる」(No.973)が「是と鬼さらめ」となっている。

役名「下部」(No.976)が「案内者」となっている。

乙樽の台詞「按司かなし上に」(No.991)が「按司添前上に」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 はあ、云る事よ聞へ」(No.996)が「一 あ、云る事よ聞へ」となっている。

谷茶の按司の台詞「急ちときゆるす」(No.1004)が「解きとら

す」となっている。

谷茶の按司の台詞「思案より外の」(No.1039)が「思案故外の」となっている。

谷茶の按司の台詞「雪のしらはくき」(No.1048)が「雪色の齒口ち」となっている。

谷茶の按司の台詞「物云さし聞ハ、」(No.1049)が「物云やす聞ハ」となっている。

谷茶の按司の台詞「おかとしちすまぬ」(No.1069)が「おつかとしちならん」となっている。

谷茶の按司の台詞「けふや立別て」(No.1070)が「けふや立戻て」となっている。

谷茶の按司の台詞「思案しちからに」(No.1072)が「思案しちおとて」となっている。

満納の子の台詞「めしやゝゝ」(No.1078)が「めしやゝゝ召いること」となっている。

満納の子の台詞「かたまゆる積り、」(No.1090)が「しる積りやれハ」となっている。

満納の子の台詞「牢に込置て」(No.1091)が「籠込にしちゆて」となっている。

満納の子の台詞「御思案の内や」(No.1099)が「先御思案の内や」

となっている。

石川の比屋の台詞「責もさぬこと」(No.1105)が「責もさぬこと」となっている。

石川の比屋の台詞「無理なものやても、」(No.1109)が「者やてん」となっている。

石川の比屋の台詞「先牢こめや」(No.1113)が「先籠込も」となっている。

満納の子の台詞「おかとしちすまぬ」(No.1121)が「おつかとしち済ん」となっている。

石川の比屋の台詞「はからやいをれハ、」(No.1125)が「計得をれハ」となっている。

石川の比屋の台詞「御計のあゆん、」(No.1127)が「御計へあゆん」となっている。

満納の子の台詞「あゝおとろしやもしらぬ」(No.1134)が「おとろしやんしらん」となっている。

満納の子の台詞「みよんにゆけややハ、」(No.1135)が「みおんにゆけやへすか」となっている。

満納の子の台詞「責さしゆること」(No.1136)が「責さしゆるこむの」となっている。

満納の子の台詞「あゝ按司かなし天の」(No.1156)が「あゝは

あ按司かなし天の」となっている。

満納の子の台詞「此涯よやれハ、」（No.1158）が「此涯に我身の」となっている。

満納の子の台詞「是非共牢舎」（No.1165）が「是非共に牢舎」となっている。

谷茶の按司の台詞「愚痴にかたまとめ、」（No.1169）が「愚痴にかたまとる」となっている。

谷茶の按司の台詞「なけすてとらさ、」（No.1171）が「切捨てとらさ」となっている。

谷茶の按司の台詞「ワか下知に背く」（No.1177）が「主の下知聞ぬ」となっている。

谷茶の按司の台詞「気任のやから、」（No.1178）が「いか俣の族ら」となっている。

乙樽の台詞「御ゆるせよめしやうれ、」（No.1210）が「宥ち給り」となっている。

谷茶の按司の台詞「ワ側ともをらハ」（No.1215）が「我か側に居らハ」となっている。

谷茶の按司の台詞「花に増姿、」（No.1216）が「花に増ひ姿た」となっている。

乙樽の台詞「女身の習の、」（No.1228）が「女身の慣や」となっ

ている。

乙樽の台詞「つかなれハ死にゆめ、」（No.1241）が「継ならハ死ミ」となっている。

谷茶の按司の台詞「頼て御情に」（No.1282）が「御情になれて」となっている。

谷茶の按司の台詞「なれて給ふれ、」（No.1283）が「宥ち給り」となっている。

乙樽の台詞「三年の内、」（No.1294）が「三年の内や」となっている。

乙樽の台詞「女身の習の、」（No.1298）が「女身の慣や」となっている。

乙樽の台詞「道のあるひ、」（No.1300）が「道のあよミ」となっている。

谷茶の按司の台詞「恋忍ぶ道の」（No.1306）が「恋忍ひてすん」となっている。

乙樽の台詞「引されていきゆさ」（No.1324）が「引されて行る」となっている。

乙樽の台詞「おしやけんしゆもの、」（No.1338）が「おしやけんしゆもの」となっている。

乙樽の台詞「おの内や是非に」（No.1339）が「おの内や気張て」

となっている。

谷茶の按司の台詞「い いや 〜 是 や」(No.1342)が「い いや 〜」となっている。

谷茶の按司の台詞「いつ までも まち ゆん」(No.1351)が「早 晩 まで ん 待 ん」となっている。

谷茶の按司の台詞「この たけ に ワ 身 や」(No.1365)が「あ この たけ に 我 身 や」となっている。

谷茶の按司の台詞「な やか や い を て も」(No.1366)が「な や や い を す か」となっている。

谷茶の按司の台詞「二 月 も 頓 て」(No.1373)が「二 月 頓 て」となっている。

谷茶の按司の台詞「よろ こ ひ も お く さ」(No.1379)が「喜 た ん 大 さ」となっている。

谷茶の按司の台詞「此 内 や と か く」(No.1388)が「此 間 や と か く」となっている。

谷茶の按司の台詞「此 間 の く つ き」(No.1392)が「此 間 の 苦 し や」となっている。

乙樽の台詞「御 側 む ち を か て」(No.1403)が「御 側 出 ち を と て」となっている。

音曲「や つ れ 出 る」(No.1417)が「躍 り 出 る」となっている。

音曲「さい ん そ る ぶ」(No.1431)が「同 人 道 行」となっている。

音曲「持 ち を や へ ん」(No.1439)が「持 や ひ ん」となっている。

音曲「持 つ を や へ ん」(No.1441)が「持 や ひ ん」となっている。

音曲「持 ち を や へ ん」(No.1443)が「持 や ひ ん」となっている。

音曲「か ふ や ひ た は ふ れ」(No.1452)が「是 か ふ や い 給 ふ り」となっている。

役名「泊 井」(No.1458)が「泊 や」となっている。

泊の台詞「ち き や 御 葉 た ん」(No.1462)が「近 か 御 身 葉 も」となっている。

泊の台詞「頼 ま つ て 行 ん」(No.1470)が「頼 て 居 ん」となっている。

泊の台詞「谷 谷 屋 良 村 ん か い」(No.1491)が「北 谷 屋 良 村 へ」となっている。

村原の比屋の台詞「や と も の み や け」(No.1512)が「宿 元 の 筈 ミ」となっている。

泊の台詞「む た し か に 村 原 の ひ や や す か」(No.1517)が「慥 に 村 原 の ひ や や す か」となっている。

泊の台詞「さ く て む だ う」(No.1522)が「探 て 見 た に」となっている。

泊の台詞「や す か」(No.1528)が「主 や す か」となっている。

泊の台詞「かんのふも」(No.1529)が「ぬらんかん」となっている。

泊の台詞「あゝいたわしい事」(No.1534)が「痛敷事」となっている。

泊の台詞「国々の按司部うたんで」(No.1551)が「国々の按司部」となっている。

泊の台詞「以外、火急な事」(No.1560)が「以外火中な事」となっている。

泊の台詞「大勢に無勢」(No.1564)が「大勢無勢」となっている。

泊の台詞「終にや思子や生捕られ」(No.1566)が「終にや嫡子や生捕られ」となっている。

泊の台詞「行衛しれらぬ」(No.1569)が「行衛知らんあすか」となっている。

泊の台詞「共につかなたはふれくむて」(No.1582)が「共に飼て呉りむて」となっている。

泊の台詞「満納の子なつくわひ」(No.1585)が「満納の子や」となっている。

泊の台詞「村原か計むて」(No.1587)が「村原か計事むて」となっている。

泊の台詞「ぬちやてひつしひち」(No.1588)が「急てから知ち」

となっている。

泊の台詞「問尋掛引段々」(No.1591)が「掛引段々しやすか」となっている。

泊の台詞「扱もく寄妙な事い」(注、の力。一部筆が途切れている)(No.1596)が「扱もく神妙なもの」となっている。

泊の台詞「きんことやてんでん」(No.1597)が「聞事やたん」となっている。

泊の台詞「小しほらしひかあげ」(No.1601)が「みしゆらしかけ」となっている。

泊の台詞「たあ按司や」(No.1604)が「按司や」となっている。

泊の台詞「ちやむとうちほれて」(No.1605)が「ちやと打ふれ」となっている。

泊の台詞「石川満納も追ぬけて」(No.1610)が「石川満納追のけて」となっている。

泊の台詞「むてしゆて」(No.1629)が「んて」となっている。

泊の台詞「わたの底まで」(No.1631)が「無蔵さはたの底まで」となっている。

泊の台詞「見済さつてをすや」(No.1633)が「見済さつ」となっている。

泊の台詞「すひちかゝたさ」(No.1639)が「すいち掛たれハ」

となっている。

泊の台詞「むきやわらひ」(No.1642)が「むぢや笑ひし」となっている。

泊の台詞「待と嬉しこと」(No.1702)が「あゝ待と嬉しこと」となっている。

泊の台詞「よろこひも大」(No.1703)が「嬉さん大ひさ」となっている。

泊の台詞「ひしやの指まで」(No.1717)が「夜昼ひしやの指まで」となっている。

泊の台詞「打かへし」(No.1718)が「折かへし」となっている。

泊の台詞「むな待しゆらむておもれ」(No.1719)が「待かんていしゆんて」となっている。

泊の台詞「戻てくるまで」(No.1769)が「行来る迄」となっている。

泊の台詞「こまんまひら」(No.1770)が「こまとん参ら」  
となっている。

泊の台詞「又も嘶さうやあ」(No.1771)が「又も嘶さう」  
となっている。

泊の台詞「ちゆの用事よすや」(No.1781)が「ひとの用事間

よすや」となっている。

村原の比屋の台詞「細々の次第」(No.1785)が「一やあ  
細々の次第」となっている。

村原の比屋の台詞「聞ほしやよあすか」(No.1786)が「聞ふし  
やよあて」となっている。

泊の台詞「さうひ拝んしやくらぬ」(No.1801)が「され拝んしや  
ひらん」となっている。

泊の台詞「御使とやゝへる」(No.1813)が「御使たやひる」と  
なっている。

村原の比屋の台詞「気張て呉れ」(No.1822)が「働きやい呉れ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「かたきうちとらへ」(No.1824)が「敵よ打  
とらへ」となっている。

役名「同人」(No.1836)が「村原」となっている。

村原の比屋の台詞「おの時にまかち」(No.1848)が「おの時に向  
て」となっている。

役名「原国兄弟」(No.1874)が「兄弟」となっている。

松千代の台詞「一なま出る二人や」(No.1875)が「一二人の  
者や」となっている。

松千代の台詞「弟子金松」(No.1880)が「弟子金松よ」となっ

ている。

松千代の台詞「兼て聞及て」(No.1888)が「聞ハ我かなさや」となっている。

松千代の台詞「ふたり命はまて」(No.1893)が「双り押列て」となっている。

松千代の台詞「思子の前と」(No.1895)が「若按司の事や」となっている。

松千代の台詞「村原のひや釣ゆる」(No.1897)が「村原のひや取留らんでの」となっている。

音曲「揚口説」(No.1917)が「兄弟道行口説」となっている。

音曲「たゞきりひらちわつて入」(No.1921)が「只切へたきわつと入る」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ寔慈悲なさや」(No.1938)が「あゝ有難さ慈悲な」となっている。

村原の比屋の台詞「我按司の報ひ」(No.1939)が「我按司の御果報」となっている。

村原の比屋の台詞「かたき討取ゆる」(No.1958)が「敵かたき討取ゆる」となっている。

村原の比屋の台詞「御運廻り来て」(No.1959)が「武運廻て来て」となっている。

村原の比屋の台詞「けふのよかる日」(No.1960)が「けふかたき打に」となっている。

役名「原国兄弟」の台詞 (No.1962～1966) が「総人数」の台詞となっている。

原国兄弟の台詞「一こびきやうの時節」(No.1963)が「一肝要な時節」となっている。

村原の比屋の台詞「忍て行をとつ」(No.1974)が「忍てむちをて」となっている。

村原の比屋の台詞「奪とやい逃る」(No.1976)が「奪取ひ出る」となっている。

村原の比屋の台詞「念の入れ」(No.1978)が「念を入」となっている。

村原の比屋の台詞「山に伏よかくれ」(No.1986)が「山に伏隠り」となっている。

村原の比屋の台詞「城立出て」(No.1988)が「城よ立出て」となっている。

村原の比屋の台詞「道の口立ふさち」(No.2006)が「道の口立塞き置き」となっている。

村原の比屋の台詞「山路真中」(No.2007)が「山の真中」となっている。

村原の比屋の台詞「島国も崩す」(No.2011)が「島国よ崩そ」となっている。

村原の比屋の台詞「若谷茶あまやか」(No.2013)が「若か谷茶か」となっている。

村原の比屋の台詞「原国の兄弟や、」(No.2020)が「一やあ原国の兄弟や」となっている。

村原の比屋の台詞「城走登て」(No.2038)が「城よ走登て」となっている。

村原の比屋の台詞「高らかにつけて」(No.2042)が「高らかにあけて」となっている。

村原の比屋の台詞「さそへ出からに」(No.2044)が「誘ひ出ち」となっている。

村原の比屋の台詞「北の山道に」(No.2045)が「北の山道」となっている。

村原の比屋の台詞「案内しやしやうれ」(No.2046)が「案内よしうれ」となっている。

村原の比屋の台詞「慥にきけ」(No.2052)が「たによ聞留れ」となっている。

村原の比屋の台詞「傍輩の中」(No.2053)が「傍輩中」となっている。

村原の比屋の台詞「腹の立まゝに」(No.2057)が「腹立る俣に」となっている。

村原の比屋の台詞「急ち立向ら」(No.2071)が「急ち立出ら」となっている。

村原の比屋の台詞「いそち打立に」(No.2072)が「急ち立寄らに」となっている。

音曲「乙樽思子引取逃走はや作田ふし」(No.2074)が「思子出羽いけんたうふし」となっている。

乙樽の台詞「すき間はからやひ、」(No.2081)が「明間計らやい」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一鬼瀬たやく」(No.2086)が「鬼瀬大屋子たやひる」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「御供しやくら、」(No.2087)が「たうく御供しやひら」となっている。

泊の台詞「谷茶(石川)、誘ひたさう、」(No.2091)が「谷茶誘ひ出さふ」となっている。

泊の台詞「思子引取て」(No.2094)が「思子引列て」となっている。

谷茶の按司の台詞「一あゝ扱もく、」(No.2098)が「一扱もく」となっている。



石川の比屋の台詞「一 やあ〜」(No.2112)が「一 はあ」  
となっている。

石川の比屋の台詞「御供しやうれ」(No.2116)が「御供しやひ  
ら」となっている。

谷茶の按司の台詞「一 あれよ〜」(No.2135)が「一 いや  
あり〜」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は忍になっている)(No.  
2136)が「恩賞も知らん」となっている。

乙樽の台詞「忍てきちをゆん」(No.2143)が「忍てまふちゆん」  
となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は忍になっている)(No.2144)  
が「此間の恩や」となっている。

役名「乙樽」の台詞(No.2151〜2153)が「鬼瀬」の台詞となっ  
乙樽の台詞「切はたちとらさ」(No.2153)が「打果たちとらさ」  
となっている。

村原の比屋の台詞「廻てきちやめ」(No.2159)が「廻り来か」  
となっている。

役名「同人」と村原の比屋の台詞が(No.2162〜2163)が「谷茶」  
の台詞となっている。

原国兄弟の台詞「原国兄弟か」(No.2166)が「原国の兄弟か」と

なっている。

原国兄弟の台詞「しつちをため」(No.2168)が「知らんあたシ」  
となっている。

原国兄弟の台詞「一 谷茶あまやや」(No.2175)が「一 ああ谷  
茶あまやや」となっている。

役名「瀬底」の台詞が(No.2183〜2185)が「谷茶供」の台詞と  
なっている。

村原の比屋の台詞「一 神妙なこと〜」(No.2187)が「一 神  
妙な事よ〜」となっている。

役名「村原」(No.2190)が「同人」となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ拝てなく事や」(No.2197)が「一  
あゝ拝てなつかしや」となっている。

村原の比屋の台詞「ゆめかやや〜いら」(No.2198)が「夢かや  
よら」となっている。

村原の比屋の台詞「嬉しやめしやいら」(No.2200)が「知らし  
ふしやの」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり」(No.2209)が「生れ日よてやひ」  
となっている。

乙樽の台詞「谷茶追掛て」(No.2214)が「谷茶追付て」となっ  
ている。

乙樽の台詞「けふ拝事や」(No.2218)が「又拝も事や」となっている。

村原の比屋の台詞「おの手組しちおて」(No.2230)が「おの手段しちゆて」となっている。

村原の比屋の台詞「美御迎しちやん」(No.2231)が「美御迎もしちやる」となっている。

村原の比屋の台詞「女身の上に」(No.2233)が「女身の上の」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235)が「敵の手に行ひ」となっている。

西川の子使の台詞「され西川の子」(No.2240)が「され〜我身や」となっている。

西川の子使の台詞「使たやへくる」(No.2241)が「西川の子使たやへる」となっている。

西川の子使の台詞「美御迎たやへくる」(No.2245)が「御待たやへる」となっている。

役名「村原」(No.2248)が「同人」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ思子も拝て」(No.2249)が「あゝ思子も拝ミ」となっている。

村原の比屋の台詞「美よんつかい拝ミやへくる」(No.2254)が「美

御つかい拝ま」となっている。

若按司の台詞「踊て戻ら」(No.2257)が「列て戻ら」となっている。

音曲「しほらひふし」(No.2264～2268)が「かんちやいふし」となっている。

「多良問本」

着付「谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に金磨之龍之角飭有ル太刀刀茶色緞子羅陳羽織錦之飭有ル脚胖足袋大団金入錦之細帯」

(No.24)が「着付谷茶の按司髪金入錦之入道頭巾向に金磨之龍角飾有ル刀差緞子衣裳羅陳羽織錦之飾有ル脚胖足袋大團羽持」となっている。

着付「石川満名黒綸子入道頭巾向に金欄に而飭有ル黒細袷衣裳刀脚胖足袋」(No.25)が「石川満納髪黒繻子入道頭巾向に金欄にて飾有ル絹布衣裳脚胖足袋」となっている。

着付「門番黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳脚胖足袋差繩」(No.26)が「門番髪黒めん入道頭巾絹布衣裳脚胖足袋差繩」となっている。

着付「きやうちやく持黒木綿単衣裳脚胖足袋」(No.27)が「ちやうちやく持髪かふう絹布衣裳脚胖足袋高つふひ」となっている。

る。

着付「若按司かしらひ板ノ縮緬振袖単衣裳足袋風車こふすい」  
(No.28)が「若按司髪角からかへ板ノ縮緬振袖袷衣裳緋紗綾足袋風車持」となっている。

着付「村原黒縷子入道頭巾向に金欄に而飭有ル黒紗綾袷衣裳縷子広袖羽織刀太刀足袋物賈之時黒縷子入道頭巾編笠細物加籠に入付陳賦之時羅陳羽織甲胸当脚胖金之磨」(No.29)が「村原髪黒縷子入道頭巾向ニ金欄ニて飾有ル絹布衣裳縷子広袖羽織刀差脚胖足袋但中入より黒縷子入道頭巾あみ笠かつき物売かくニ細物入付かたけ出ル陳賦之時より羅陳羽織甲かつき胸当脚胖足袋」となっている。

着付「原国兄弟長刀半向頭巾紕花青銅ネ十同」衣裳脚胖足袋中入より入道頭巾綿」(No.30)が「原国兄弟髪半向頭巾紕縮緬衣裳脚胖足袋中入より黒縮緬入道巾向ニ飾有ル長刀持」となっている。

着付「村原母并妻かもし紫長巾金銀水引熨斗作花助巾琉縫薄衣裳足袋妻谷茶城江参候時女笠杖持帰り候時長刀母黒地形付衣裳」(No.31)が「村原母并妻垂髪紫長巾作花差琉縫薄衣裳紕縮緬足袋同人妻谷茶城江参候時女笠かつき杖持出ル且逃帰候時途中にて喜瀬の大屋子長刀渡シ」となっている。

着付「西川の子瀬底下こおり西川の支(ママ)喜瀬之大屋子四人黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣刀脚胖足袋」(No.32)が「西川の子瀬底下庫(戸十東)理西川之使喜瀬大屋子髪黒縮緬入道頭巾絹布衣裳刀差脚胖足袋」となっている。

着付「泊井紕西洋巾黒木綿衣裳脚胖足袋陳賦之時黒西洋入道頭巾」(No.33)が「泊紕緬巾ニて請八巻玉色染木綿衣裳脚胖足袋陳賦之時より髪黒縮緬入道頭巾絹布衣裳刀差」となっている。

着付「村原子紕縮緬衣裳」(No.34)が「附村原妻子抱出ル子紕縮緬衣裳」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ谷茶あまやか」(No.43)が「はあ谷茶あまやか」となっている。

乙樽の台詞「しらへのあれハ」(No.111)が「しらへのありは」となっている。

乙樽の台詞「すと親のことも」(No.207)が「姑親の事や」となっている。

乙樽の台詞「身すからになれハ」(No.215)が「身すからにならハ」となっている。

乙樽の台詞「やあ乙松よ」(No.221)が「やあ乙松」となっている。

乙樽の台詞「頓て喜名村や」(No.267)が「頓て喜名村」となっている。

ている。

村原の比屋の台詞「あゝ身にかへて朝夕」(No.293)が「はあ身に替て朝夕」となっている。

母の台詞「主の恩忘ひ」(No.327)が「主人恩忘て」となっている。

村原の比屋の台詞「思子の事」と(No.339)が「思子の事や」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ此上とやすか」(No.401)が「あゝ此上よやりは」となっている。

乙樽の台詞「我肝落着やい」(No.423)が「我肝落つきゆて」となっている。

乙樽の台詞「心ゆるさやい」(No.424)が「心ゆるささやい」となっている。

役名「乙樽原」(No.437)が「村原」となっている。

母の台詞「事あらくしちや」(No.474)が「事あらくしゆすや」となっている。

村原の比屋の台詞「断やこちゆる」(No.494)が「断もしちゆる」となっている。

村原の比屋の台詞「分別もならぬ」(No.500)が「分別やにやらぬ」となっている。

母の台詞「行先の定め」(No.516)が「行先の寔」となっている。

母の台詞「あけやう思盡す」(No.518)が「あけやう思盡ち」となっている。

村原の比屋の台詞「請答よふ」(No.533)が「請返答やう」となっている。

村原の比屋の台詞「了簡よすれ」(No.534)が「了簡よすれよ」となっている。

村原の比屋の台詞「切巧てをる次第」(注、切は見せ消ちカ) (No.546)が「巧てをる次第」となっている。

村原の比屋の台詞「又事とやすか」(No.552)が「又事やすか」となっている。

乙樽の台詞「肝願よしちをて」(No.606)が「肝の願しちをて」となっている。

門番の台詞「はあ〜無作法〜」(No.643)が「はあ無作法〜」となっている。

門番の台詞「あれに居やうれ」(No.676)が「あまにいやうれ」となっている。

満納の子の台詞「あゝあれほと村原も」(No.691)が「はああれ程の村原も」となっている。

谷茶の按司の台詞「やあ石川のひや〜」(No.706)が「やあ石川

のひや」となっている。

満納の子の台詞「尋らぬ先に」(No.746)が「尋らね先に」となっている。

満納の子の台詞「一 あゝ好てこのまらぬ」(No.769)が「一 はあ好てこのまらぬ」となっている。

満納の子の台詞「聞答とやさか」(No.797)が「聞答とやさよる」となっている。

満納の子の台詞「重ねらんしゆもの」(No.801)が「重ねらんしゆもの」となっている。

役名「乙樽」(No.804)が「乙たち」となっている。

乙樽の台詞「たゞこどもないらぬ」(No.844)が「たら事もにやらぬ」となっている。

石川の比屋の台詞「堅談合も」(No.852)が「堅か談合も」となっている。

石川の比屋の台詞「真心にいやれは」(No.858)が「真心に言れす」となっている。

乙樽の台詞「只ひちゆいもの」(No.886)が「只ひちゆひもの」となっている。

乙樽の台詞「海山にかたて」(No.893)が「海山にかたて」となっている。

乙樽の台詞「石川と満納」(No.896)が「石川満納」となっている。

乙樽の台詞「村原のひや」(No.899)が「村原のひや」となっている。

満納の子の台詞「たうおのこゝれしちをて」(No.932)が「たう／＼おの心得しちをて」となっている。

満納の子の台詞「多ひ差繩持ち」(No.934)が「多ひ差繩も持ち」となっている。

満納の子の台詞「近く寄てをとて」(No.935)が「近く寄てからに」となっている。

満納の子の台詞「夫喰る悪生」(No.969)が「夫喰る畜生」となっている。

下部の台詞「一 せめられるうの」(No.977)が「一 せめられる咎の」となっている。

乙樽の台詞「死ゆくも是や」(No.993)が「死しにゆん是や」となっている。

谷茶の按司の台詞「義理の上の誘」(No.1000)が「義理の上に捌」となっている。

満納の子の台詞「肝のあくまゝや」(No.1131)が「肝の湧まゝや」となっている。

満納の子の台詞「あゝおとろしやもしらぬ」(No.1134)が「おとろしやんしらん」となっている。

満納の子の台詞「是非共牢舎」(No.1165)が「是非共に籠舎」となっている。

谷茶の按司の台詞「なけすてとらさ」(No.1171)が「切殺ち捨てら」となっている。

谷茶の按司の台詞「素立ひやならぬ」(No.1235)が「素立ひもならん」となっている。

乙樽の台詞「生々と命の」(No.1261)が「生々と命」となっている。

乙樽の台詞「惜む事ないらぬ」(No.1266)が「のよて我かおすも」となっている。

谷茶の按司の台詞「今のことしやすや」(No.1271)が「今のことしゆすや」となっている。

乙樽の台詞「道のあるひ」(No.1300)が「道のあよめ」となっている。

谷茶の按司の台詞「なやかやいをても」(No.1366)が「なやかやひをすか」となっている。

谷茶の按司の台詞「引寄て給ふれ」(No.1382)が「引寄たはうれ」となっている。

谷茶の按司の台詞「此内やとかく」(No.1388)が「此間や兎角」となっている。

音曲「こてふし」(No.1394)が「してふし」となっている。

乙樽の台詞「御側むちをかて」(No.1403)が「御側むちをとて」となっている。

音曲「衾れ商人に」(No.1416)が「あはれ売人に」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ心元なさの」(No.1427)が「はあゝろもとなさの」となっている。

泊の台詞「頼まつて行ん」(No.1470)が「たのまつてをん」となっている。

泊の台詞「谷谷屋良村んかい」(No.1491)が「小谷屋良村んかひ」となっている。

泊の台詞「まひか」(No.1496)が「いまひら」となっている。

村原の比屋の台詞「御無心もしらぬ」(No.1503)が「御無心のもしらん」となっている。

泊の台詞「かんのふも」(No.1529)が「のをもかん」となっている。

泊の台詞「むゝあゝ」(No.1531)が「むゝ」となっている。

泊の台詞「今や谷茶城むていふん」(No.1547)が「今や谷茶城むていよん」となっている。

泊の台詞「加勢頼て」(No.1555)が「加勢頼入」となっている。  
泊の台詞「降参しめらむて」(No.1576)が「降参よしめらむて」となっている。

泊の台詞「共につかなてたはふれ〜むて」(No.1582)が「共につかなてたふうれむて」となっている。

泊の台詞「ぬちやてひししち」(No.1588)が「ぬちやてひてしつち」となっている。

泊の台詞「扱も〜奇妙な事い」(注、の力。一部筆が途切れている)(No.1596)が「扱も〜妙なもの」となっている。

泊の台詞「やあ〜」(No.1612)が「あやあ〜」となっている。

泊の台詞「あはあ(高笑)〜」(No.1658)が「あは〜」となっている。

泊の台詞「肝出ち」(No.1664)が「きもんきも出ち」となっている。

泊の台詞「分別なもの」(No.1670)が「分別なむさの」となっている。

泊の台詞「のふ目もみしらぬ」(No.1725)が「のふもめみしらぬ」となっている。

泊の台詞「おれほとしや(ち)」(No.1738)が「おりふとすやか」

となっている。

村原の比屋の台詞「一む士の本意」(No.1748)が「士の本意」となっている。

村原の比屋の台詞「沙汰よしゆたる」(No.1751)が「沙汰よ残る」となっている。

村原の比屋の台詞「あん前と二人や」(No.1754)が「乳あん二人や」となっている。

泊の台詞「纏切ちややうなもの」(No.1760)が「つな切ちややうなもの」となっている。

泊の台詞「こまんまひら〜」(No.1770)が「こまとんまひら〜」となっている。

村原の比屋の台詞「いや〜まあむら」(No.1787)が「いや〜西村の」となっている。

村原の比屋の台詞「何かしかやゆら」(No.1788)が「泊ひやあらぬ」となっている。

泊の台詞「御使とや〜へる」(No.1813)が「御使たやへる」となっている。

村原の比屋の台詞「気張て呉れ」(No.1822)が「気張てこひれよ」となっている。

村原の比屋の台詞「谷茶あまや〜」(No.1844)が「谷茶まあや〜」

となっている。

松千代の台詞「弟子金松」(No.1880)が「弟子金松よ」となっている。

松千代の台詞「かたへのあらは」(No.1900)が「かたへのありは」となっている。

音曲「揚口説」(No.1917)が「歌」となっている。

村原の比屋の台詞「あゝ寔慈悲なさや」(No.1938)が「あゝ誠とある慈悲」となっている。

原国兄弟の台詞「一こつきやうの時節」(No.1963)が「一こつきやうな時節」となっている。

村原の比屋の台詞「念の入れ」(No.1978)が「念の入れよ」となっている。

村原の比屋の台詞「城の門閉て」(No.1992)が「城乗取て」となっている。

村原の比屋の台詞「討よとめれ」(No.2028)が「打とめり」となっている。

村原の比屋の台詞「北の山道」(No.2045)が「北の山道」となっている。

村原の比屋の台詞「傍輩の中」(No.2053)が「朋輩の中に」となっている。

村原の比屋の台詞「急ち立向ら」(No.2071)が「急ち立出ら」となっている。

村原の比屋の台詞「いそち打立に」(No.2072)が「急ち押寄ら」となっている。

喜瀬の大屋子の台詞「一鬼瀬たや」(No.2086)が「一喜瀬たやへる」となっている。

泊の台詞「逃めしやいひたん」(No.2096)が「逃めしやひたん」となっている。

谷茶の按司の台詞「忍義忘却」(注、字は忍になっている)(No.2136)が「恩義忘却」となっている。

乙樽の台詞「原国のなし子」(No.2144)が「原国かなし子」となっている。

乙樽の台詞「此間の忍に」(注、字は忍になっている)(No.2144)が「此間の恩に」となっている。

乙樽の台詞「切はたちとらざ」(No.2153)が「切果捨てら」となっている。

原国兄弟の台詞「一ひやひやひ」(No.2173)が「一ひやあやひ」となっている。

役名「同人」という原国兄弟の台詞(No.2174～2177)が「総人数」の台詞となっている。



役名「瀬底」の台詞 (No.2183～2185) が「総人数」の台詞となっている。

村原の比屋の台詞「一 神妙なことと〜」(No.2187) が「一 神妙なことよ〜」となっている。

村原の比屋の台詞「一 あゝ拝てなく事や」(No.2197) が「一 あゝ拝てなちかさや」となっている。

乙樽の台詞「生れ日てやり」(No.2209) が「生れ日よてやり」となっている。

村原の比屋の台詞「美御迎しちゃん」(No.2231) が「美御迎もしちゃん」となっている。

村原の比屋の台詞「敵の手ニ渡り」(No.2235) が「敵の手に渡る」となっている。

西川の子使の台詞「一 され西川の子」(No.2240) が「一 され我んや西川の子」となっている。

西川の子使の台詞「美御迎たやへる」(No.2245) が「美御迎待たやへる」となっている。

村原の比屋の台詞「一 一段な事よ〜」(No.2247) が「一 一段な事〜」となっている。

若按司の台詞「踊て戻ら」(No.2257) が「列て戻ら」となっている。

役名「村原」の台詞 (No.2258～2260) が「総人数」の台詞となっている。

全体的に、大川敵討は八重山に残る「組踊本」(「新本本」・「豊川本」・「喜舎場本」)が多くの異同や、『尚家本』の記載が見られない箇所、また対校本のみに見られる記載がおおく、またその箇所もこの三冊は共通しているところが多かった。対校本で着付の記載があるのは、『戯曲集』と「多良間本」のみで、『戯曲集』と「多良間本」でも着付の材質に異同が見られる。しかし、「多良間本」は『尚家本』よりも『戯曲集』に記載に近いことから、書写年代は伝わっていないが、『尚家本』よりも古い可能性が考えられる。また、着付が記載されているので、「多良間本」の親本は王府の「組踊本」に近いものから書写されたことも考えられる。しかし、「多良間本」には先に挙げた八重山に残る「組踊本」にしか見られない「原国兄弟道行口説」が記載されているため、八重山に残った「組踊本」の系統も視野に入れて考えなければならぬ。

## v 義臣物語

### ① 作者ならびに上演の歴史

「義臣物語」の作者は田里朝直である。田里は、「義臣物語」以外

の「万歳敵討」「大城崩」「北山崩」を含めた四作品を創作した。これは一九三四（昭和九）年十一月十七日の『琉球新報』に真境名安宜が投稿した『忠孝夫人』の作者は久手堅親雲上』の中に一七九九年の『躍方日記』が引用されており、その中から知ることができる。

この記事によって田里は四作品の組踊を創作していたことが、一七九九年時点で認識されていたことがわかる。田里の創作した作品を概観すると、「万歳敵討」は兄弟での仇討をテーマにしており、「大城崩」は放蕩者の大城按司が鮫川の按司に誅されるが、その息子たちは許される、という和睦をテーマにしている。「北山崩」は、「北山敵討」と同じ組踊で、北山の按司が弑され、その家臣と若按司が仇を討つ物語である。そしてこの「義臣物語」は「国吉の比屋」の活躍を描いた作品である。田里の創作した作品は、すべて「敵討」がテーマに関わっていることが特徴的であり、田里朝直以降の仇討物の組踊に多く見られる、忠臣・家臣の活躍する物語のモチーフを、田里は「義臣物語」で作り、「大城崩」で完成させたと見ることができ。

「義臣物語」は、朝直の創作した後、冊封の舞台に必ず演じられている作品である。戊年の『躍方日記』によると、一八〇〇年は諸宴、一八〇八年は諸宴と御膳進上に、一八三八年には諸宴と末吉社壇遊覧、そして冊封使が帰国して後に行われる大和衆への上覧にも

供されている。一八六六年の冊封は資料が少ないため確実に上演したかはわからないが、『寅年諸宴演戯故事』には漢訳が見えるため、おそらく上演したものと思われる。現在の上演は少ない作品であるが、琉球王府時代は好まれて上演されていた作品なのである。

## ② 内容について

「義臣物語」は、前項でも触れたが、自分の主人のために、家臣が奔走し、仇を討とうとする作品である。結果的に仇は討つことなく、若按司は許され、家は再興することができるとなる。この結果をもたらしたのも、主人公である「国吉の比屋」の忠臣ぶりが相手の鮫川の按司の心を動かしたからである。田里以前の組踊作者は玉城朝薫であり、朝薫は「二童敵討」を創作した。これは親を殺された兄弟が、親の仇討を行う、という趣向であり、田里の「万歳敵討」もこれと同じ趣向である。さらに田里は和睦を扱った「大城崩」や、集団で仇を討つ「北山崩」も創作し、敵討物のジャンルだけで趣向の違う作品を作っていることがわかる。作品的には、間の者（マルムン）らしい人物（夜回人）が登場する場面もある。さらには物語は「国吉の比屋」が中心となって進んでいる。これは、他の組踊には見られない特徴である。組踊の多くは、場面とともに登場人物が次々と入れ替わるが、「義臣物語」は「国吉の比屋」が中心

となって物語が展開する。多くの家臣集団で仇を討つ仇討物の組踊には必ず中心となる、知勇兼ね備えた忠臣が登場する。この義臣物語における「国吉の比屋」の演出は、その後の組踊に強い影響を与えていると思われる。結果的に田里朝直という作者は、「口説」「問の者」「忠臣」など、後の組踊に大きな影響を与えた作者だといえよう。

### ③ 底本と対校本について

第一次対校本：久志村所蔵本（以下「久志A本」）・語学材料第二（以下「語学材料」）・恩河本小祿御殿本（以下「恩河本」）・兼島信備所蔵本（以下「兼島本」）・比嘉信三本（以下「比嘉本」）・久志村所蔵本（三冊―2）（以下「久志B本」）

「義臣物語」は久志村所蔵本が二冊も残されている。しかし、両「組踊本」は一つが明治二十四年のもので、もう一つは書写年代が不明である。おそらく、どちらか一方が古い方の写本であると思われるが、年代の明記がされていないので、校合の際は一応、別本として扱う。『尚家本』以外の「組踊本」には着付がみられないのが特徴である。また、この「組踊本」は先島地域に写本が残っていない。琉球士族の家にあった「組踊本」と、その他の地域に伝承されたものの二種類の「組踊本」が残されている。また、田島利三郎が筆写

した『語学材料 第二』もある。

### ④ 校合結果

『尚家本』にみられて対校本にみられない記載のうち、対校本に共通して見られないものは「着付」（No.2～10）である。また、子持節の歌詞の一部「行先や迷て／あの岩にすかり／このき瀬にのほて／互に鳴明ち」（No.172～175）が、「久志A本」「比嘉本」「久志B本」には見られなかった。また、最後に歌われる歌詞「一、このえのうち／蒼て露まちゆす／嬉しこときくの／花とやゆる」（No.905～908）が「久志A本」「兼島本」「比嘉本」には見られない。

以下、各対抗本ごとに、尚家本に見られて対抗本に見られない記載を挙げていく。

「久志A本」

前述の「着付」（No.2～10）、子持節の歌詞の一部（No.172～175）、最後に歌われる歌詞（No.905～908）。役名「国吉」（No.491）、鮫川の按司の台詞「蛍火の須弥山／焼くつさてやりしゆる心、／流石武士の身の間や」（No.701～703）、

「語学材料」

前述の「着付」（No.2～10）、役名「若按司」と台詞「一、御気張

よめしやうれ／急ちもとやくら、」(No.162～164)、役名「国吉のひや」(No.244)、国吉の比屋の台詞「これ／＼」(No.332)、役名「国吉」(No.460・491・503・549・566)'

「恩河本」

前述の「着付」(No.2～10)、若按司の台詞「心実に今のことやれハ／誇らしやとあゆる、」(No.409～410)、役名「国吉」(No.491)、

「兼島本」

前述の「着付」(No.2～10)、役名「同人」(No.335)、役名「国吉」(No.491)、国吉の比屋の台詞「徒らに月日重ならハ、」(No.553)、夜回人の台詞「一、是や国吉の子、／夜も更てをもの／急ち火責に出立ん、」(No.626～628)、鮫川の按司の台詞「願事よ聞ハ、」(No.868)、役名「若按司」(No.896)、若按司の台詞「一、おしつれて互に／踊て戻やへら、」(No.897～898)、音曲「清屋ふし／一、けふの誇らしや／なをにきやなたてる／つほてをる花の／露きやたこと」(No.899～903)、音曲「同ふし／一、ここのえのうちに／蒼て露まちゆす／嬉し／ときくの／花とやゆる」(No.904～908)'

「比嘉本」

若按司の台詞「夜も暮てをれハ／見る人やをらぬ、」(No.92～93)、新垣の比屋の台詞「肝くれしやあても」(No.127)'

新垣の比屋の台詞「たう／＼」(No.130)'

新垣の比屋の台詞「よ所しらぬことに／かくれやひいまふれ、」(No.133～134)'

音曲「足本もやみゆひ／くら闇よやれハ／行先や迷て／あの岩にすかり／このき瀬にのほて／互に鳴明ち／鳥も啼すみて／夜や明てをれハ／この山にかくれ／けふやくらさ」(No.169～179)、村頭の台詞「一、やあ／＼、／つく／＼と御様子／拝てミやくれハ、／慥高嶺の／思子とやゆる、／御氣遣よめしやうな、／我身や多嘉良の村頭／崎本とや／へいる」(No.201～208)、役名「若按司」と台詞「一、やあ崎本の子、／二所の親に／捨られてふたり、／頼む方をらぬ／やとる方ないらぬ、／あの谷にかくれ／此山にやとて、／頓て消果る／露の身どやすか、／けふまでや死にやぬ／こまにをゆる、」(No.211～222)、役名「崎本」(No.223)、村頭の台詞「たう／＼／与所めなひぬうちに／御氣張よめしやうれ、」(No.232～234)、音曲「島の島々／里のさと／めくり／＼て」(No.259～261)、役名「童子」(No.309)、国吉の比屋の台詞「敵かたき討る／計よしやくら、」(No.362～363)'

思姉の台詞「一、頼む方をらぬ／かゝるかたないらぬ」(No.418～419)、国吉の比屋の台詞「あゝ拝てなつかしや／袖のなみた、」(No.425～426)、国吉の比屋の台詞「此よの中に」(No.428)、思姉の台詞「一、今のことやれハ／誇らしやとあゆる、」(No.432～433)、国吉の比屋の台詞「忍ひかくれとて／節待たんしゆもの、」(No.473～474)、崎本の子の台詞「一、あゝ今のことやれハ／誇らしやとあゆる、」(No.480～481)、国吉の比屋の台詞「ねふる目もねらぬ、」(No.530)、国吉の比屋の台詞「若かよ所しれて／からめ出さらよいや、」(No.556～557)、若按司の台詞「一、やあ国吉のひや、」(No.575)、夜回人の台詞「あけちやめやう、」(No.607)、夜回人の台詞「代官はい、／／／起て居ちをれ、／おふほん、／はひのふもあらぬさめ、」(No.621～624)、夜回人の台詞「夜も更てをもの」(No.627)、供の台詞「一、拝留やくて、」(No.671)、鮫川の按司の台詞「一、拝留やくて、」(No.693)、鮫川の按司の台詞「やあ／／と肝おして、」(No.763～764)、鮫川の按司の台詞「いやは聞留れ、」(No.766)、鮫川の按司の台詞「一、やあ国吉のひや、」(No.849)、役名「按司」と台詞「たう／／／こそけ／／」(No.856～858)、役名「国吉」(No.859)、鮫川の按司の台詞「理りよやれハ／肝くれしやあもの、」(No.871～872)、音曲「同ふし／一、こゝのえのうちに／荅て露まぢゆ

す／嬉しこときくの／花とやゆる」(No.904～908)、

「久志B本」

前述の「着付」(No.2～10)、音曲「行先や迷て／あの岩にすかり／このき瀬にのほて／互に鳴明ち」(No.172～175)、ト書き「国吉」(No.491)、鮫川の按司の台詞「螢火の須弥山／焼くつさてやりしゆる心、」(No.701～702)、

次に、対校本のみに見られ、尚家本に見られない記載を挙げる。

尚家本以外の対校本全てに見られる記載は、役名「若按司」(No.74・100)、新垣の比屋の台詞「いやならん／／」(No.155)、役名「国吉ひや」(No.507)である。また、役名「国吉の比屋」(No.11)、役名「若按司」(No.152)、若按司の台詞「やあ新垣の比屋」(No.153)、役名「国吉ひや」(No.488・625)、役名「供」(No.657)の六つの記載は、対校本のうち、「久志A本」「久志B本」はすべて、それ以外は「語学材料」「兼島本」「比嘉本」がそのうちの五つ、「恩河本」がそのうちの三つ記載があった。これらを概観すると、尚家本は役名を記載していない箇所が多くあることが指摘できる。

では次に、各対校本ごとに、対校本に見られて尚家本に見られない記載を挙げていく。

「久志 A 本」

役名「国吉の比屋」(No.11)、『役名「若按司」(No.74・100)』、新垣の比屋の台詞「あゝ拝てなつかしや／袖の泪た」(No.106～107)、『役名「若按司」と台詞「やあ新垣の比屋」(No.152～153)』、『役名「新垣のひや」と台詞「いやならん〜」(No.154～155)』、『役名「国吉ノ子」(No.322)』、国吉の比屋の台詞「としやらは呼出すをかま」(No.323)、『役名「童」と台詞「され若按司の前〜」(No.324～325)』、『役名「若按司」と台詞「やあわらくむきや」(No.333～334)』、『役名「国吉ノ子」(No.428)』、『役名「同人」(No.507)』、『夜回人の台詞「やかりまや〜や／人驚かき」(No.619～620)』、『役名「国吉ノ子」(No.625)』、『役名「供」(No.657)』、『供の台詞「拝ん留やびい」(No.761)』

「語学材料」

役名「国吉の比屋」(No.11)、『役名「若按司」(No.74・100・152)』、『若按司の台詞「やあ新垣の比屋」(No.153)』、『新垣の比屋の台詞「こやならん〜」(No.155)』、『役名「全人」(No.241)』、『役名「全人」(No.408)』、『役名「全人」(No.442)』、『役名「国吉の比屋」(No.507)』、『役名「国吉のひや」(No.625)』、『役名「供」(No.657)』、『役名「全」

(No.694)』、『役名「全人」(No.865)』、『ト書き「義臣物語り終る」(No.909)』

「恩河本」

役名「国吉の比屋」(No.11)、『役名「若按司」(No.74・100)』、『新垣の比屋の台詞「いやならん〜」(No.155)』、『役名「崎本子」(No.241)』、『役名「国吉ひや」(No.488・507・625)』、『ト書き「義臣物語り終」(No.909)』、『ト書き「桃原村／恩河朝祐」(No.910)』

「兼島本」

役名「国吉の比屋」(No.11)、『役名「若按司」(No.74・100・152)』、『若按司の台詞「やあ新垣の比屋」(No.153)』、『役名「新垣の比屋」と台詞「いやならん〜」(No.154～155)』、『役名「国吉の子」(No.331・488)』、『役名「同人」(No.507)』、『夜回人の台詞「錢蔵はこゝ〜／起て居きやうり／うほん」(No.612～614)』、『役名「供」(No.657)』、『鮫川の按司の台詞「物に譬らん」(No.893)』

「比嘉本」

役名「若按司」(No.74・No.100)』、『若按司の台詞「思姉と我身や／親に捨つられし」(No.110～111)』、『新垣の比屋の台詞「忍び隠れ

とて／時節待ち召れ」(No.135～136)・役名「若按司」と台詞「やあ新垣のひや」(No.152～153)・役名「新垣のひや」と台詞「いやならぬ〜」(No.154～155)・音曲「肝も肝ならぬ／あけやういちやなよら」(No.180～181)・役名「若按司」(No.341)・若按司の台詞「やあ国吉のひや」(No.342)・役名「国吉のひや」(No.343)・国吉の比屋の台詞「あゝ拝でなつかしや／袖の涙」(No.440～441)・国吉の比屋の台詞「此近方や／心もとなさよあもの」(No.445～446)・役名「国吉のひや」と台詞「今の如とやれば」(No.488～489)・国吉の比屋の台詞「誇らしやどあよる」(No.490)・役名「国吉のひや」(No.507)・国吉の比屋の台詞「ながらて居れば／何日もかねやらめ／今日や北方風も立ちゆい」(No.515～517)・役名「全人」(No.524)・国吉の比屋の台詞「やあ思子／やあ思姉の前」(No.525～526)・国吉の比屋の台詞「頼む方無らぬ」(No.532)・夜回人の台詞「銭倉へい〜／今日や北風も／ごう〜立ちゆいよ／起きて居ちよれ／あゝや」(No.612～616)・役名「国吉のひや」(No.625・652)・国吉の比屋の台詞「あゝ北風に便て／これから付けろう」(No.653～654)・役名「総人数」(No.655)・役名「供」(No.657)・鮫川の按司の台詞「やあ国吉のひや」(No.765)・鮫川の按司の台詞「殺しゆすに忍ばらぬ／助け欲しやあもの」(No.869～870)・

「久志B本」

役名「国吉の比屋」(No.11)・役名「若按司」(No.74・100)・新垣の比屋の台詞「あゝ拝でなつかしや／袖の泪た」(No.106～107)・役名「若按司」と台詞「やあ新垣の比屋」(No.152～153)・役名「新垣のひや」と台詞「いやならぬ〜」(No.154～155)・役名「国吉ノ子」(No.322)・国吉の比屋の台詞「としやは呼出すをかま」(No.323)・役名「童」と台詞「され若按司の前〜」(No.324～325)・役名「若按司」と台詞「やあわらへむきや」(No.333～334)・役名「国吉ノ子」(No.488)・役名「同人」(No.507)・夜回人の台詞「金蔵はい〜／起て居ちやうれ／おぶふん」(No.612～614)・夜回人の台詞「やかりまやゝ／人驚るか「欠」」(No.619～620)・役名「国吉ノ子」(No.625)・役名「供」(No.657)・

対校本のみに見られる記載で一番数が多かったのは、比嘉本であり、次いで「久志A本」「久志B本」であった。また、数が少なかったのは「恩河本」で、次に少なかったのは「兼島本」「語学材料」であった。

次に、尚家本と対校本の記載が異なる部分をみていく。各対校本に共通してみられる異同は、役名の「国吉」(No.284)が「国吉ひや」

もしくは「国吉のし」となっている。このような異同は他にも(297・315・580・674・708・840・884)と七箇所で見られた。また、同じような異動で役名「崎本」(No.457)が「崎本子」となっているところもあった。台詞の部分で異同が見られたのは、国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだにゆ」となっている、国吉の比屋の台詞「いらてとれよ」(No.288)が「いらてとり」となっている、鮫川の按司の台詞「あゝ感じてをゆる、」(No.707)が「あゝ感じてをゆる」となっている、国吉の比屋の台詞「一人の働に」(No.711)が「一人が働に」となっている。国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.53)が「若按司の行衛や」となっている。鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.786)が「誠と若按司に」となっている。鮫川の按司の台詞「やや若按司よ、」(No.866)が「ややあ若按司」となっている。いずれも大きく意味の異なる異同は見られなかった。

次に各対校本ごとに異同箇所を挙げる。

「久志A本」

国吉の比屋の台詞「一、出様ちやる者や」(No.12)が「是や」となっている。

国吉の比屋の台詞「歌三味線の」(No.16)が「歌や三味線の」となっている。

国吉の比屋の台詞「色々に異見」(No.22)が「色々に御意見」となっている。

国吉の比屋の台詞「忠言耳に逆て、」(No.24)が「忠言耳よさかて」となっている。

国吉の比屋の台詞「責圍てをれへ、」(No.32)が「責懸てをりは」となっている。

国吉の比屋の台詞「一人も又をらぬ、」(No.34)が「一人のをらん」となっている。

国吉の比屋の台詞「逃忍て与座近くいきゆる内、」(No.38)が「逃ち忍て与座近く行る内に」となっている。

国吉の比屋の台詞「道柴の露と消果て、」(No.41)が「道しはの露と共にきよ果て」となっている。

国吉の比屋の台詞「思なひかことや、」(No.43)が「思なひか行先や」となっている。

国吉の比屋の台詞「からめ出す者あらへ、」(No.46)が「捕出そものや」となっている。

国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだによ」となっている。

国吉の比屋の台詞「御行衛尋やい拜ま、」(No.63)が「若按司の御行衛尋やひをかめ」となっている。



国吉の比屋の台詞「細物人形売に」(No.93)が「細物の人形売に」となっている。

音曲「若按司思姉出羽干瀬ふし」(No.96)が「兩人出羽干瀬ふし」となっている。

音曲「一、おめけひとワ身や」(No.70)が「思けいやとわんや」となっている。

音曲「親にすてられて」(No.71)が「親に捨らて」となっている。  
音曲「をるか心気」(No.73)が「居る心気」となっている。

若按司「只足にまかち」(No.80)が「たゞ足に尽ち」となっている。

若按司の台詞「行先もしらぬ」(No.82)が「行先やしらぬ」となっている。

若按司の台詞「一、やあ〜」(No.101)が「やあ」となっている。

役名「新垣」(No.104・116)が「新垣のひや」となっている。  
若按司の台詞「頼む方なひらぬ」(No.112)が「頼のむ方居らぬ」となっている。

若按司の台詞「とまひ〜よきやもの」(No.113)が「とめてつちをもの」となっている。

新垣の比屋の台詞「隠しおくものあらん」(No.122)が「かくし

置ものや」となっている。

音曲「子持ふし」(No.165)が「歌子持節」となっている。

音曲「足本もやミゆひ」(No.169)が「足本んやめば」となっている。

役名「村頭」(No.182・200・238)が「崎本之子」となっている。  
村頭の台詞「上原んかい」(No.184)が「上原のやとりに」となっている。

村頭の台詞「耕作見廻にいきゆん」(No.185)が「用事あて行ん」となっている。

村頭の台詞「いきやることやと〜」(No.189)が「いきやることあとて」となっている。

村頭の台詞「ふたりみちをる」(No.190)が「二人居ちよか」となっている。

村頭の台詞「一、やあ〜」(No.201)が「あ〜」となっている。

村頭の台詞「慥高嶺の」(No.204)が「高嶺の思子」となっている。

村頭の台詞「思子とやゆる」(No.205)が「疑やならん」となっている。

若按司の台詞「露の身どやすか」(No.220)が「露の命どやすが」となっている。

役名「崎本」(No.223・457・479)が「崎本ノ子」となっている。  
村頭の台詞「此山にわかやとりの」(No.226)が「此山に我身かやとりの」となっている。

村頭の台詞「一、御急ぎよめしやうれ」(No.239)が「御急ぢよみやうり」となっている。

役名「国吉のひや」(No.244・272・749)が「国吉ノ子」となっている。

音曲「道輪口説」(No.248)が「歌」となっている。

音曲「ほうろん〜」(No.270)が「ふうろられ〜」となっている。

音曲「ほうろ〜ほうつと」(No.271)が「ふうろ〜ふうろと」となっている。

国吉の比屋の台詞「としひひやひ集めれよ」(No.274)が「とし呼び集り」となっている。

国吉の比屋の台詞「このほとけくひびだ」(No.275)が「この仏くいらね」となっている。

役名「童子」(No.276)が「童」となっている。

役名「国吉」(No.284・297・315・326・356・374・392・424・438・460・503・549・566・580・674・708・774・812・824・840・854・859・885)が「国吉ノ子」となっている。

国吉の比屋の台詞「いらてとれよ」(No.288)が「むらて取り」となっている。

役名「同」(No.291・293・295)が「童」となっている。

童の台詞「一、ワぬやおきれこふしとらに」(No.292)が「我身やおきれくふしとよん」となっている。

童の台詞「一、近方の村々に」(No.305)が「近方の村に」となっている。

役名「童子」(No.309)が「童一人」となっている。

童の台詞「このころ上原の」(No.311)が「頃日に上原の」となっている。

童の台詞「一、たう〜列ていかに」(No.320)が「たう〜烈り〜」となっている。

国吉の比屋の台詞「約束のこと此仏呉ん」(No.328)が「約束の事にこのふとけくいよん」となっている。

国吉の比屋の台詞「急ち村にいけ」(No.330)が「急ち村に戻り」となっている。

役名「同人」(No.335)が「国吉ノ子」となっている。

若按司の台詞「忍ひ隠れとす」(No.351)が「忍ひ隠りよつ」となっている。

若按司の台詞「親に捨られて」(No.366)が「親に捨て」となっ

ている。

国吉の比屋の台詞「討とらないたつらに」(No.376)が「討徒に」  
となっている。

若按司の台詞「是非共に此事や」(No.390)が「慈悲共に此事や」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「とまひつきやる心入、」(No.398)が「御めし  
ゆるこゝろ入」となっている。

若按司の台詞「やあ〜思なひよ、」(No.411)が「やあおめない  
よ」となっている。

思姉の台詞「親に捨てられて、」(No.417)が「親に捨てて」とな  
っている。

思姉の台詞「かゝるかたないらぬ、」(No.419)が「宿る方ないら  
ん」となっている。

思姉の台詞「是非よ情けあて」(No.422)が「慈悲よ情けあて」  
となっている。

思姉の台詞「親と頼ミゆもの、」(No.435)が「親とたのよ物の」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「あの宿に引越ひ」(No.451)が「宿に引越ひ」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「百情け故に」(No.464)が「百々情け故に」

となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ崎本、」(No.468)が「やあ崎本の子」と  
なっている。

国吉の比屋の台詞「共に肝揃て」(No.477)が「共に肝合ち」と  
なっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前、」(No.523)が「やあ思姉の  
前〜」となっている。

国吉の比屋の台詞「火責ともすらん」(No.539)が「火責とむす  
りは」となっている。

国吉の比屋の台詞「年月のいかん」(No.551)が「年月のいけは」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「からめ出さらよや、」(No.557)が「捕から  
故や」となっている。

思姉の台詞「思けひとわぬや」(No.564)が「思けへと二人や」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあ思姉の前よ、」(No.567)が「やあ思  
姉の前」となっている。

若按司の台詞「ワぬも列ていかに、」(No.577)が「わめん列りて  
いかに」となっている。

国吉の比屋の台詞「働やならぬ、」(No.585)が「働のならぬ」と

なっている。

思姉の台詞「武士の義理やれは」(No.592)が「武士の義理立て」  
となっている。

思姉の台詞「ものめつめて」(No.595)が「ものめつめらり」  
となっている。

音曲「東江ふし」(No.596)が「歌東江ふし」となっている。

音曲「一、おめきやひをても」(No.597)が「思きやいをすか」  
となっている。

夜回人の台詞「一、けふや北風もかうく立ひ」(No.602)が「け  
ふや北風やかうく立ひ」となっている。

夜回人の台詞「起て居ちをれ」(No.610)が「越て居ちやうれ」  
となっている。

夜回人の台詞「おふほん」(No.611)が「おふふん」となっ  
ている。

夜回人の台詞「はひたかくたかては」(No.617)が「はいたか  
くたるては」となっている。

夜回人の台詞「あまやあさめ」(No.618)が「あまやとやさ  
め」となっている。

夜回人の台詞「おふほん」(No.623)が「おふふん」となっ  
ている。

音曲「いならぬ」(No.637)が「いかならぬ」となっている。

音曲「軒端の下に」(No.643)が「軒の下に」となっている。  
音曲「すわや火をかけ」(No.650)が「するや火をかけ」とな  
っている。

音曲「火煙たつ」(No.651)が「煙たつ」となっている。

供の台詞「一、火事よく」(No.656)が「はあ火事よく」  
となっている。

供の台詞「されく按司加那志」(No.658)が「され按司加那志」  
となっている。

供の台詞「一、盗人や是たやへる」(No.664)が「盗人これたや  
へる」となっている。

鮫川の按司の台詞「是やよしのあるものとやゆる」(No.666)が  
「あ、是やよしのあるむのとやよる」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、銭金の盗人やあらぬ」(No.675)が「分  
金のふさぬ盗人やあらぬ」となっている。

国吉の比屋の台詞「城焼崩さてやりしちやん」(No.678)が「城  
く尽きたりしちん」となっている。

鮫川の按司の台詞「一人も又をらぬ」(No.685)が「一人の居ん」  
となっている。

供の台詞「御前に出やうれ」(No.696)が「御前に出様りく」

となっている。

鮫川の按司の台詞「あゝ感してをゆる」(No.707)が「あゝ感してとをよろ」となっている。

国吉の比屋の台詞「一人の働に」(No.711)が「一人が働に」となっている。

国吉の比屋の台詞「城焼くつち」(No.712)が「城焼ち尽き」となっている。

鮫川の按司の台詞「罪科やおかちある」(No.741)が「罪咎や殺ちある」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、あゝ乱軍の内をとて」(No.750)が「あゝ乱運の内をとて」となっている。

国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.752)が「若按司の行衛」となっている。

鮫川の按司の台詞「武士の事やれハ」(No.769)が「武士の者やれは」となっている。

鮫川の按司の台詞「殺しゆすに忍はらぬ」(No.770)が「殺や忍はらん」となっている。

鮫川の按司の台詞「奉公よすれ」(No.773)が「奉公よすれよ」となっている。

鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.786)が「誠若按司に」と

なっている。

鮫川の按司の台詞「かゝぬことしゆすと」(No.802)が「かゝぬもしゆすと」となっている。

国吉の比屋の台詞「武士の義理曲て」(No.833)が「武士の道曲て」となっている。

鮫川の按司の台詞「一、あゝ此願事も」(No.836)が「あゝ是願事ん」となっている。

鮫川の按司の台詞「さうてきやうれ」(No.853)が「列て来り」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、御供からめきやい」(No.860)が「され御供からめきやい」となっている。

鮫川の按司の台詞「やや若按司よ」(No.866)が「やあ若按司」となっている。

役名「若按司」(No.878)が「若按司并思ない兩人」となっている。

若按司の台詞「此御恩一期」(No.883)が「一期」となっている。

鮫川の按司の台詞「けふの誇らしやに」(No.892)が「今日の嬉しやに」となっている。

音曲「清屋ふし」(No.899)が「歌立雲節」となっている。

音曲「一、けふの誇らしや」(No.900)が「今日の嬉しや」と

なっている。

音曲「なをにきやなたてる」(No.901)が「なをにきやたてる」となっている。

「語学材料」

国吉の比屋の台詞「逃忍て与座近くいきゆる内、」(No.38)が「与座近く行る内に」となっている。

国吉の比屋の台詞「思なひかことや、」(No.43)が「思姉か行先や」となっている。

国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだによ」となっている。

国吉の比屋の台詞「やつれやいいてたちゆん、」(No.68)が「やつり出立ん」となっている。

音曲「若按司思姉出羽干瀬ふし」(No.69)が「高嶺の若按司出羽干瀬ふし」となっている。

若按司の台詞「行先もしらぬ、」(No.82)が「行先やしらん」となっている。

若按司の台詞「新垣のひやよ」(No.102)が「新垣の比屋」となっている。

役名「新垣」(No.116)が「新垣のひや」となっている。

新垣の比屋の台詞「一夜とても」(No.120)が「一夜や迎も」となっている。

新垣の比屋の台詞「ワか命に替てまての」(No.128)が「我が命と替て迄の」となっている。

音曲「足本もやミゆひ」(No.169)が「足本んやめば」となっている。

村頭の台詞「かにある山中に」(No.187)が「かにやある山中に」となっている。

村頭の台詞「ふたりみちをる、」(No.190)が「二人居きよが」となっている。

若按司の台詞「捨られてふたり、」(No.214)が「捨てられてをれば」となっている。

若按司の台詞「露の身どやすか、」(No.220)が「露の命どやすが」となっている。

役名「崎本」(No.223)が「村頭」となっている。

村頭の台詞「されわかやとりや是たやへる、」(No.242)が「さりやどや是だやびる」となっている。

音曲「世の中の習ひ」(No.251)が「世の中の習や」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあ童く、」(No.273)が「やあ〜童」

となっている。

国吉の比屋の台詞「一、このほとけくひらに」(No.275)が「此  
仏呉らん」となっている。

役名「童子」(No.276・309)が「童」となっている。

役名「国吉」(No.284・297・315・580・674・708・840・885)が  
「国吉のひや」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあわらへ」(No.285)が「やあ童のきや」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「いらてとれよ」(No.288)が「撰で取り」と  
なっている。

童の台詞「一、ワぬやこの馬乗ほとけとらに」(No.290)が「我  
んやなりく取らに」となっている。

童の台詞「一、ワぬやおきれこふしとらに」(No.292)が「我や  
此の若衆人形取よん」となっている。

童の台詞「一、ワぬや鳴子とらに」(No.294)が「我や此馬乗仏  
取らに」となっている。

童の台詞「一、ワ身や此若衆人形とゆん」(No.296)が「我んや  
うつきりくぶし取ん」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ童へのきや」(No.299)が「やあ〜童  
のきや」となっている。

国吉の比屋の台詞「此人形とびや」(No.303)が「此仏とびや」  
となっている。

童の台詞「やあとしのきや」(No.307)が「やあ〜友のきや」  
となっている。

童の台詞「このころ上原の」(No.311)が「頃日に上原の」とな  
っている。

国吉の比屋の台詞「一、やあわらへ」(No.316)が「やあ〜童」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「おのやとりにつれていけ」(No.317)が「う  
の宿に列ていけ」となっている。

国吉の比屋の台詞「約束のこと此仏呉ん」(No.328)が「約束の  
事に此仏呉ん」となっている。

若按司の台詞「あのかげに此やとりに」(No.354)が「あのかぎ  
に此宿に」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、親かなし敵かたき」(No.375)が「あ  
親加那志敵」となっている。

国吉の比屋の台詞「つく〜と此事や」(No.380)が「此事やみ  
すく」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、あゝ、此二月余るまでも」(No.393)が  
「あゝ、此六月なる迄ん」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.427)が「やあ思姉の前よ」となっている。

思姉の台詞「親と頼ミゆもの」(No.435)が「親とたいたのによもの」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.444)が「やあ思姉の前よ」となっている。

役名「崎本」(No.457)が「崎本の子」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.493)が「やあ思姉の前よ」となっている。

国吉の比屋の台詞「夜も暮てをれへ」(No.494)が「日ん暮てをれば」となっている。

国吉の比屋の台詞「内におんつかいしやへら」(No.506)が「たうく内におんつかいしやびら」となっている。

国吉の比屋の台詞「急ち火責しゆる」(No.520)が「急ち火攻よしよる」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.523)が「やあ思姉の前よ」となっている。

国吉の比屋の台詞「けふや北風やたちゆひ」(No.538)が「今日や北風んたきよへ」となっている。

国吉の比屋の台詞「としやよといきやひ」(No.569)が「歳や寄

ていきよい」となっている。

若按司の台詞「急ち火責しゆる」(No.578)が「急ち火攻よしよる」となっている。

国吉の比屋の台詞「働やならぬ」(No.585)が「働のならん」となっている。

役名「夜廻」(No.601)が「夜廻人」となっている。

夜回人の台詞「おふほん」(No.623)が「うふほん」となっている。

音曲「早口説」(No.629)が「口説」となっている。

音曲「いならぬ」(No.637)が「いかならん」となっている。

供の台詞「されく按司加那志」(No.658)が「さり按司加那志」となっている。

供の台詞「一、盗人や是たやへる」(No.664)が「さり盗人や是だやびる」となっている。

鮫川の按司の台詞「一、是やよしのあるものとやゆる」(No.666)が「あゝ是やよしのある者どやよる」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、銭金の盗人やあらぬ」(No.675)が「我身や銭金の盗人やあらん」となっている。

鮫川の按司の台詞「あゝ感じてをゆる」(No.707)が「あゝ感じてどをよる」となっている。



国吉の比屋の台詞「一人の働に」(No.711)が「一人が働に」となっている。

鮫川の按司の台詞「罪科のあとと」(No.727)が「罪咎のあとと」となっている。

役名「国吉のひや」(No.749)が「国吉」となっている。

国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.752)が「若按司の行衛」となっている。

鮫川の按司の台詞「やあ〜」(No.763)が「やあ」となっている。

鮫川の按司の台詞「ワか所存取受て」(No.772)が「我が所存受取て」となっている。

鮫川の按司の台詞「奉公よすれ」(No.773)が「奉公をすりよ」となっている。

鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.786)が「誠若按司に」となっている。

役名「按司」(No.856)が「鮫川の按司」となっている。

鮫川の按司の台詞「急ち呼よ〜」(No.864)が「呼びよ〜」となっている。

鮫川の按司の台詞「やや若按司よ」(No.866)が「やあ若按司よ」となっている。

若按司の台詞「いつし忘れゆか」(No.881)が「いきし忘やびが」となっている。

音曲「清屋ふし」(No.899)が「立雲ふし」となっている。

音曲「同ふし」(No.904)が「全歌」となっている。

「恩河本」

国吉の比屋の台詞「忠言耳に逆て」(No.24)が「忠言耳に逆ひ」となっている。

国吉の比屋の台詞「首里軍押寄て」(No.31)が「首里軍さ打寄て」となっている。

国吉の比屋の台詞「逃忍て与座近くいきゆる内」(No.38)が「逃げ忍て与座近く行る内に」となっている。

国吉の比屋の台詞「からめ出す者あらハ」(No.46)が「捕出り者あらは」となっている。

国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだにゆ」となっている。

国吉の比屋の台詞「人心やれハ」(No.56)が「人やれは」となっている。

国吉の比屋の台詞「弓ひきゆる此時よやれハ」(No.58)が「弓引る世の中よやれは」となっている。

国吉の比屋の台詞「頓て生とられ」(No.69)が「頓て」となっている。

国吉の比屋の台詞「からめ出されらとめへ」(No.60)が「からみ出さらとめは」となっている。

国吉の比屋の台詞「片時も急ぢ」(No.62)が「片時ん」となっている。

音曲「若按司思姉出羽干瀬ふし」(No.69)が「干瀬ぶし」となっている。

音曲「一、おめけひとワ身や」(No.70)が「思姉と我身や」となっている。

若按司の台詞「首里軍押よすて」(No.77)が「首里軍を打寄て」となっている。

役名「思なひ」(No.96)が「思妹」となっている。

若按司の台詞「一、やあ〜」(No.101)が「やあ」となっている。

役名「新垣」(No.104・116)が「新垣のひや」となっている。

新垣の比屋の台詞「浜の真砂程あすか」(No.119)が「浜の真砂程やすが」となっている。

若按司の台詞「狩人も助ゆんでやり【きけん】きんゆん」(No.140)が「狩人ん助ゆんでい聞は」となっている。

音曲「雪霜や降れば」(No.167)が「雪霜や降り」となっている。

音曲「足本もやみゆひ」(No.169)が「足本んやめば」となっている。

音曲「けふやくらむ」(No.179)が「今日やあかさ」となっている。

役名「村頭」(No.182・200・238)が「崎本子」となっている。

村頭の台詞「ふたりみちをる」(No.190)が「二人居きゆが」となっている。

役名「崎本」(No.223・457・479)が「崎本子」となっている。

役名「国吉のひや」(No.244・272・749)が「国吉の子」となっている。

音曲「ほうろ〜ほうひつ」(No.271)が「ほうろ〜ほうろ」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあ童く」(No.273)が「やあ〜童」となっている。

役名「童子」(No.276)が「一番童ひ」となっている。

役名「童子」(No.281)が「二番童ひ」となっている。

役名「国吉」(No.284・297・315・326・356・374・392・424・438・460・503・549・566・580・674・708・774・812・824・840・854・859・885)が「国吉ひや」となっている。

国吉の比屋の台詞「いらてとれよ」(No.288)が「いらてとり」となっている。

役名「童」(No.289)が「一番童」となっている。

役名「同」(No.291)が「二番童」となっている。

役名「同」(No.293)が「三番童」となっている。

役名「同」(No.295)が「四番童」となっている。

役名「童子」(No.304)が「二番童」となっている。

役名「童子」(No.309)が「一番童」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあわらへ」(No.316)が「やあへ童」となっている。

国吉の比屋の台詞「敵かたき討る」(No.362)が「敵かたち討取る」となっている。

国吉の比屋の台詞「わとやはから」(No.402)が「我どやはかやびら」となっている。

思姉の台詞「是非よ情けあて」(No.422)が「慈悲ゆ情けあて」となっている。

国吉の比屋の台詞「御打立めしやうれ」(No.497)が「御立召り」となっている。

音曲「長伊平屋ぶし」(No.498)が「長伊平ぶし」となっている。

国吉の比屋の台詞「内におんつかいしやくら」(No.506)が「た

うへ内におんつかいしやびら」となっている。

国吉の比屋の台詞「年月のいかへ」(No.551)が「年月のいけば」となっている。

国吉の比屋の台詞「働やならぬ」(No.585)が「働のならん」となっている。

夜回人の台詞「一、けふや北風もかうへ立ひ」(No.602)が「今日や北風やがうへ立え」となっている。

夜回人の台詞「夜廻り念入りよてやり」(No.603)が「夜廻念入てやり」となっている。

夜回人の台詞「はひたかへたかては」(No.617)が「はえ誰がへたがては」となっている。

夜回人の台詞「おふほん」(No.623)が「うほふん」となっている。

音曲「いならぬ」(No.637)が「いかならん」となっている。

音曲「寄かへて」(No.649)が「寄りかへり」となっている。

供の台詞「からめとやへたん」(No.660)が「からめ取てきやびたん」となっている。

役名「鮫川の按司」(No.661)が「鯉川(サミガハ)按司」となっている。

役名「按司」(No.665・679)が「鯉川(サミガハ)按司」となっている。

ている。

鮫川の按司の台詞「一人も又をらぬ」(No.685)が「をらん」となっている。

鮫川の按司の台詞「急ちこれに出す」(No.689)が「急ちこまに出す」となっている。

供の台詞「御前に出やうれ」(No.696)が「御前に出様りく」となっている。

鮫川の按司の台詞「あゝ感じてをゆる」(No.707)が「あゝ感じてをゆる」となっている。

国吉の比屋の台詞「助部もをらぬ」(No.710)が「助けびんをら」となっている。

国吉の比屋の台詞「一人の働に」(No.711)が「一人が働に」となっている。

鮫川の按司の台詞「諸臣下の難儀」(No.725)が「諸臣下の難事」となっている。

国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.752)が「若按司の行衛や」となっている。

鮫川の按司の台詞「殺しゆすに忍はらぬ」(No.770)が「殺すに忍ばらん」となっている。

鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.786)が「誠と若按司に」

となっている。

鮫川の按司の台詞「生残てをても」(No.795)が「生残てをたん」となっている。

国吉の比屋の台詞「天に飛のほり」(No.817)が「天に飛び登て」となっている。

国吉の比屋の台詞「地の底もくつて」(No.818)が「地の底んくたて」となっている。

鮫川の按司の台詞「急ち呼よく」(No.864)が「急ち呼ひよ」となっている。

鮫川の按司の台詞「やや若按司よ」(No.866)が「やあ若按司」となっている。

若按司の台詞「ちゝにかめら」(No.884)が「頂にかみやびら」となっている。

「兼島本」

国吉の比屋の台詞「歌三味線の」(No.19)が「歌や三味線の」となっている。

国吉の比屋の台詞「みよんにゆけたん」(No.23)が「んによけたん」となっている。

国吉の比屋の台詞「忠言耳に逆つ」(No.24)が「忠言耳に避て」

となっている。

国吉の比屋の台詞「逃忍て与座近くいきゆる内」(No.38)が「出忍で与座近く行る内に」となっている。

国吉の比屋の台詞「思なひかことや」(No.43)が「思姉か行先や」となっている。

国吉の比屋の台詞「また一夜迎も」(No.49)が「又一夜や迎ん」となっている。

国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだによ」となっている。

国吉の比屋の台詞「弓ひきゆる此時よやれへ」(No.58)が「弓引る世の中よやれば」となっている。

国吉の比屋の台詞「からめ出されらとめへ」(No.60)が「搦め出さら留ば」となっている。

国吉の比屋の台詞「与所の疑もたちゆら」(No.65)が「与所の疑んしよら」となっている。

国吉の比屋の台詞「やつれやいてたちゆん」(No.68)が「扮れやい出立つん」となっている。

音曲「若按司思姉出羽干瀬ふし」(No.69)が「干瀬節」となっている。

音曲「一、おめけひとワ身や」(No.70)が「思ないと我身や」と

なっている。

音曲「互になきくらち」(No.72)が「朝夕泣き暮ち」となっている。

音曲「をるか心気」(No.73)が「居るが気心(心気)」となっている。

若按司の台詞「首里軍押よすて」(No.77)が「首里軍打寄て」となっている。

若按司の台詞「思なひとワ身や」(No.79)が「思妹と我身や」となっている。

若按司の台詞「行先もしらぬ」(No.82)が「行先やしらん」となっている。

若按司の台詞「たゆるものはなち」(No.87)が「喰める食放ち」となっている。

役名「新垣」(No.104・116)が「新垣の比屋」となっている。

新垣の比屋の台詞「ワか命に替てまての」(No.128)が「我が命と替て迄の」となっている。

音曲「足本もやミゆひ」(No.169)が「足本んやめば」となっている。

音曲「くら闇よやれへ」(No.171)が「闇の夜どやれば」となっている。

音曲「けふやくへむ」(No.179)が「今日や暮らす」となっている。

役名「村頭」(No.182・200・238)が「岸本ノ子」となっている。

村頭の台詞「耕作見廻にいきゆん」(No.185)が「耕作見舞に行ん」となっている。

村頭の台詞「ふたりあちをる」(No.190)が「二人居よが」となっている。

若按司の台詞「てよく」(No.198)が「出よく」となっている。

若按司の台詞「一、やあ崎本の子」(No.212)が「やあ岸本の子」となっている。

若按司の台詞「捨られてふたり」(No.214)が「捨てられてをれば」となっている。

若按司の台詞「頼む方をらぬ」(No.215)が「頼む方無らん」となっている。

若按司の台詞「此山にやとて」(No.218)が「北山に宿て」となっている。

役名「崎本」(No.223・457・479)が「岸本ノ子」となっている。

村頭の台詞「此山にわかやとりの」(No.226)が「北山に我が宿の」となっている。

村頭の台詞「されわかやとりや是たやへる」(No.242)が「され宿や是だやびる」となっている。

役名「国吉のひや」(No.244・272・749)が「国吉の子」となっている。

音曲「道輪口説」(No.248)が「道行口説」となっている。

音曲「すそは結んで」(No.254)が「すればあもすんで」となっている。

音曲「ほうろくほうひと」(No.271)が「ほろろうんほうひと」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ童く」(No.273)が「やあく童」となっている。

役名「童子」(No.276・309)が「童」となっている。

役名「国吉」(No.284・297・315・326・356・374・392・424・438・460・503・549・566・580・674・708・774・812・824・840・854・859・885)が「国吉の子」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあむらぐ」(No.285)が「やあ童のちや」となっている。

国吉の比屋の台詞「むらつとれよ」(No.288)が「撰び取り」となっている。

童の台詞「一、ワぬやこの馬乗ほとけとらた」(No.290)が「我

身やなりく取らに」となっている。

童の台詞「一、ワぬやおきれこふしとらに」(No.292)が「我身や此若衆人形取らに」となっている。

童の台詞「一、ワぬや鳴子とらに」(No.294)が「我身や此馬騎り払い取らに」となっている。

童の台詞「一、ワ身や此若衆人形とゆん」(No.296)が「我身やうつりくぶし取らに」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ童へのきや」(No.299)が「やあ〜童のちやあ」となっている。

国吉の比屋の台詞「此人形とらさ」(No.303)が「此仏け取らさ」となっている。

童の台詞「宿かやひをやへひん」(No.314)が「宿取い居やびん」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあわらく」(No.316)が「やあ〜童」となっている。

国吉の比屋の台詞「おのやとりにつれていけ」(No.317)が「うの宿に列ていけ」となっている。

童の台詞「一、たう〜列ていかに」(No.320)が「とう〜列て行かな」となっている。

童の台詞「こまとやゆる」(No.321)が「是どやよる」となって

いる。

国吉の比屋の台詞「約速のこと此仏呉ん」(No.328)が「約束の事に此の仏け呉ゆん」となっている。

国吉の比屋の台詞「急ち村にいけ」(No.330)が「急ぎ村に行けよ」となっている。

若按司の台詞「此山のふもとに」(No.350)が「北山のふもとに」となっている。

若按司の台詞「あのかげに此やとりに」(No.354)が「彼の蔭に隠れ」となっている。

若按司の台詞「かくれやひをゆる」(No.355)が「此宿に隠れやい居よる」となっている。

国吉の比屋の台詞「敵かたき討る」(No.362)が「仇き打取よる」となっている。

若按司の台詞「一、やあ国吉のひや」(No.383)が「あゝ国吉の比屋」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、あゝ、此二月余るまつも」(No.393)が「あゝ此の二年の一周忌なる迄ん」となっている。

国吉の比屋の台詞「とまひつきやる心入」(No.398)が「尋参〜に着る心入り」となっている。

国吉の比屋の台詞「わとやはから」(No.402)が「我身や計やび

ら」となっている。

若按司の台詞「やあゝ思なひよ」(No.411)が「やあ思姉よ」となっている。

思姉の台詞「かゝるかたないらぬ」(No.419)が「宿る方無らん」となっている。

思姉の台詞「是非よ情けあて」(No.422)が「慈悲よ情け有て」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.427)が「やあ思姉の前よ」となっている。

思姉の台詞「親と頼ミゆもの」(No.435)が「親と頼む者」となっている。

思姉の台詞「万事いかことや」(No.436)が「万事如何程や」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、拝留やくて」(No.439)が「拝留めやびら」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.444)が「やあ思姉の前よ」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ崎本」(No.468)が「やあ崎本の子」となっている。

国吉の比屋の台詞「此近方や」(No.469)が「此の近方は」とな

っている。

国吉の比屋の台詞「心元なさよあれハ」(No.470)が「心元成さよ有もの」となっている。

崎本の子の台詞「一、あゝ今のことやれハ」(No.480)が「あゝ命の事やれば」となっている。

崎本の子の台詞「此としになてをても」(No.482)が「此年に成て居てん」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.493)が「やあ思姉の前よ」となっている。

国吉の比屋の台詞「御打立めしやうれ」(No.497)が「御立召り」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、され花城のひや宿や」(No.504)が「さい花城の比屋」となっている。

国吉の比屋の台詞「内におんつかいしやへら」(No.506)が「たうゝ内に御使いしやびら」となっている。

国吉の比屋の台詞「先謀ことあもの」(No.518)が「謀事有もの」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあゝ思子」(No.522)が「やあ思子」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.523)が「やあ思姉の



前よ」となっている。

国吉の比屋の台詞「ねふる目もねらぬ」(No.530)が「寝る夜ん寝らん」となっている。

国吉の比屋の台詞「先おんにゆけら」(No.537)が「先づ御にゆけやびら」となっている。

国吉の比屋の台詞「火責ともすらへ」(No.539)が「火責どんすれば」となっている。

若按司の台詞「一人の働や氣遣とやゆる」(No.548)が「一人が働や氣支どやよる」となっている。

思姉の台詞「思けひとわぬや」(No.564)が「思けいと二人や」となっている。

若按司の台詞「急ち火責しゆる」(No.578)が「急ぎ火責する」となっている。

音曲「むちたちゆるきハヤ」(No.599)が「立ち別る涯や」となっている。

役名「夜廻」(No.601)が「夜廻り」となっている。

夜回人の台詞「はひたかくたかては」(No.617)が「はい誰がては〜あ」となっている。

夜回人の台詞「おふほん」(No.623)が「うほん」となっている。

夜回人の台詞「はひのふもあらぬさめ」(No.624)が「あ、何をんあらん猫さめ」となっている。

音曲「いならぬ」(No.637)が「いかならん」となっている。

音曲「南無や八幡」(No.638)が「南無や八幅」となっている。

音曲「軒端の下に」(No.648)が「軒端の」となっている。

音曲「寄かゝて」(No.649)が「昂りかゝて」となっている。

音曲「すわや火をかけ」(No.650)が「すはや火付」となっている。

供の台詞「一、火事よ〜」(No.656)が「下に火事よ〜」となっている。

役名「按司」(No.665・697・718・754・782・821・835・848・856)が「鮫川の按司」となっている。

鮫川の按司の台詞「一、是やよしのあるものとやゆる」(No.666)が「あ、是やよしのある者どやよる」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、銭金の盗人やあらぬ」(No.675)が「我身や銭金の盗人やあらん」となっている。

国吉の比屋の台詞「首のふしやに」(No.677)が「首ど欲しやる」となっている。

国吉の比屋の台詞「城焼崩さてやりしちやん」(No.678)が「城く焼き崩さてやり仕来る」となっている。

鮫川の按司の台詞「急ちこれに出す」(No.689)が「急ぎ此処に出し」となっている。

供の台詞「さあ〜」(No.695)が「さあ」となっている。

鮫川の按司の台詞「あゝ感してをゆる」(No.707)が「あゝ感じてをよる」となっている。

国吉の比屋の台詞「一人の働に」(No.711)が「一人が働に」となっている。

鮫川の按司の台詞「あけてかそららぬ」(No.726)が「挙げて数ぞ知らん」となっている。

鮫川の按司の台詞「罪科のあとと」(No.727)が「罪咎のあとと」となっている。

鮫川の按司の台詞「やあ〜」(No.732)が「やあ」となっている。

鮫川の按司の台詞「此二年の」(No.736)が「此の二年」となっている。

鮫川の按司の台詞「音伝も聞ぬ」(No.738)が「音信ん無らん」となっている。

鮫川の按司の台詞「妻子まで罪に」(No.743)が「妻子迄咎に」となっている。

国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.752)が「若按司の行

衛」となっている。

鮫川の按司の台詞「縄よ解ゆる【す】さ」(No.759)が「縄よ解け免し」となっている。

鮫川の按司の台詞「奉公よすれ」(No.773)が「奉公をすれよ」となっている。

鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.786)が「誠若按司に」となっている。

鮫川の按司の台詞「泥てをて済ぬ」(No.800)が「泥らてや済まん」となっている。

国吉の比屋の台詞「天に飛のほり」(No.817)が「天に飛び登て」となっている。

国吉の比屋の台詞「地の底もく〜て」(No.818)が「地の底ん潜て」となっている。

鮫川の按司の台詞「急ち願事よ語れき〜ゆん」(No.823)が「急き願事よ語て聞かす」となっている。

国吉の比屋の台詞「高嶺の按司の」(No.828)が「高嶺の」となっている。

国吉の比屋の台詞「君家再興のためやれば」(No.832)が「国家再興の為やれば」となっている。

役名「按司」(No.862・890)が「鮫川按司」となっている。

鮫川の按司の台詞「やや若按司よ、」(No.86)が「やあ若按司」となっている。

若按司の台詞「此御恩たうとさや」(No.86)が「此の御恩たうとさい」となっている。

若按司の台詞「いつし忘れゆか、」(No.881)が「何つし忘やびが」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、あゝ此御恩たうとさや」(No.886)が「あゝ此の御恩たうとさい」となっている。

鮫川の按司の台詞「けふの誇らしやに、」(No.892)が「今日の誇らしや」となっている。

#### 「比嘉本」

国吉の比屋の台詞「また一夜逆も」(No.49)が「一夜逆も」となっている。

国吉の比屋の台詞「隠し置くものあらは、」(No.50)が「隠し置く者や」となっている。

国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだねよ」となっている。

国吉の比屋の台詞「あかりてた拝む」(No.55)が「あゝ上がい照拝む」となっている。

国吉の比屋の台詞「あゝ至極気の毒とやゆる、」(No.61)が「至極気の毒とやゆる」となっている。

若按司の台詞「思なひとワ身や」(No.79)が「思姉と二人や」となっている。

若按司の台詞「行先もしらぬ、」(No.82)が「行先や知らぬ」となっている。

若按司の台詞「一、やあゝ」(No.101)が「やあ」となっている。

役名「新垣」(No.104)が「新垣のひや」となっている。

若按司の台詞「たんでなさけあて」(No.114)が「情けあてたんで」となっている。

新垣の比屋の台詞「隠しおくものあらは、」(No.122)が「隠しおくものや」となっている。

新垣の比屋の台詞「一門やだにも」(No.123)が「一門やだねよ」となっている。

新垣の比屋の台詞「殺し尻さしゆんてやり」(No.125)が「殺ち捨られてやり」となっている。

若按司の台詞「雪霜や降ひ」(No.141)が「雪霜や降れば」となっている。

若按司の台詞「慈悲よ情あて」(No.143)が「頼で情けあて」と

なっている。

新垣の比屋の台詞「い、いや」(No.146)が「あ」となっている。

新垣の比屋の台詞「思子助やひ」(No.147)が「思子宿貸らち」となっている。

新垣の比屋の台詞「こまからや急ぢ」(No.150)が「急ぢ」となっている。

若按司の台詞「急ちもとや」(No.164)が「先にかやべら」となっている。

役名「村頭」(No.182・200・238)が「崎本の子」となっている。

村頭の台詞「かにある山中」(No.187)が「かにやる雪降りに」となっている。

村頭の台詞「童へあてなしの」(No.188)が「こがと山路に」となっている。

村頭の台詞「あと拝てなつかしや」(No.209)が「拝留やてあとと拝で泣かしや」となっている。

村頭の台詞「やあ思なひの前」(No.225)が「やあ思姉の前」  
となっている。

村頭の台詞「あやとひん」(No.227)が「あやびもの」となっている。

村頭の台詞「山深さあれ」(No.228)が「日も暮れて居れば」となっている。

村頭の台詞「見る人やをらぬ」(No.229)が「見る人も居らぬ」となっている。

若按司の台詞「い、慈悲よ情けあて」(No.236)が「頼で情あて」  
となっている。

若按司の台詞「助やい給ふれ」(No.237)が「隠し置賜れ」となっている。

村頭の台詞「い、御急きよめしやうれ」(No.239)が「とう」となっている。

村頭の台詞「されわかやとりや是たやへる」(No.242)が「され屋取やこれだやべる」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「急ち細物人形売に」(No.246)が「細物人形売に」となっている。

国吉の比屋の台詞「むちたちゆん」(No.247)が「やつれやい出立ちゆん」  
となっている。

音曲「ほうろん」(No.270)が「ぼろん」  
となっている。

音曲「ほうろと」(No.271)が「ぼろと」  
となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあ童く、」(No.273)が「えい童」となっている。

国吉の比屋の台詞「このほとけくひびに、」(No.275)が「此仏呉よん」となっている。

役名「童子」(No.276)が「童」となっている。

童の台詞「一、やあ〜としのきや、」(No.277)が「やあ友しのちや」となっている。

役名「国吉」(No.284・297・315・326・374・392・424・438・460・503・549・566・580・674・708・774・812・824・840・854・885)が「国吉のひや」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあわらく、」(No.285)が「えい童」となっている。

国吉の比屋の台詞「いらてとれよ」(No.288)が「撰らで取れ」となっている。

童の台詞「一、ワぬやおきれごふしとらに、」(No.292)が「我んや此のうつれごふし取らに」となっている。

童の台詞「一、ワぬや鳴子とびに、」(No.294)が「我んや此若衆人形取らに」となっている。

童の台詞「一、ワ身や此若衆人形とゆん、」(No.296)が「我んや此鳴子取らに」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、是むちやか〜、」(No.298)が「えいれ見ちやか〜」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ童くのきや、」(No.299)が「えい童のちや」となっている。

国吉の比屋の台詞「此村にしらぬわらくの、」(No.300)が「此近方に知らん童の二人」となっている。

国吉の比屋の台詞「此人形とらき、」(No.303)が「此仏とらき」となっている。

童の台詞「宿かやひをやくひん、」(No.314)が「隠れやい居やびいん」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあわらく、」(No.316)が「どう〜」となっている。

童の台詞「こまとやゆる、」(No.321)が「これぞやよる」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあわらく、」(No.327)が「えい童」となっている。

国吉の比屋の台詞「約束のこと此仏呉ん、」(No.328)が「約束の如くに此仏呉ん」となっている。

若按司の台詞「やとる方なひらぬ、」(No.349)が「助け部も居らぬ」となっている。

若按司の台詞「あのかけに此やとり」(No.354)が「あの蔭に此所に」となっている。

国吉の比屋の台詞「心もとなきよあれは」(No.359)が「心もとなきよあもの」となっている。

国吉の比屋の台詞「時節待受て」(No.361)が「時節待ちやびらみ」となっている。

若按司の台詞「片時も急ち」(No.369)が「一寸も片時も」となっている。

若按司の台詞「いきほしやよあもの」(No.371)が「急ぢ欲しやあもの」となっている。

国吉の比屋の台詞「討とらないたつらに」(No.376)が「討たな徒らに」となっている。

国吉の比屋の台詞「なからへてをからよいか」(No.400)が「保存てぬしよが」となっている。

若按司の台詞「やあ〜思なひよ」(No.411)が「やあ思姉よ」となっている。

思姉の台詞「思けいとわ身や」(No.416)が「思けいと二人や」となっている。

思姉の台詞「是非よ情けあて」(No.422)が「万事いか事や」となっている。

思姉の台詞「助けやひたはふれ」(No.423)が「計らやひ賜ぼれ」となっている。

思姉の台詞「万事いかことや」(No.436)が「よたしやある様に」となっている。

国吉の比屋の台詞「隠れやひをやくらに」(No.452)が「時節待ちやびらに」となっている。

役名「崎本」(No.457・479)が「崎本の子」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ崎本の子」(No.461)が「やあ崎本」となっている。

国吉の比屋の台詞「あゝ至極心入」(No.466)が「心入」となっている。

国吉の比屋の台詞「心元なきよあれは」(No.470)が「心もとなきよあもの」となっている。

国吉の比屋の台詞「かたき討めしやいる」(No.475)が「仇敵討召せる」となっている。

国吉の比屋の台詞「共に肝揃て」(No.477)が「互に肝揃て」となっている。

崎本の子の台詞「此としになてをても」(No.482)が「あゝ此年になても」となっている。

国吉の比屋の台詞「たう〜急ち」(No.496)が「たう〜」と

なっている。

国吉の比屋の台詞「あゝ此二度の」(No.509)が「此二年の」となっている。

国吉の比屋の台詞「先謀ことあもの」(No.518)が「計事あもの」となっている。

国吉の比屋の台詞「急ち火責しゆる」(No.520)が「急ち火責の」となっている。

国吉の比屋の台詞「謀よすらに」(No.521)が「用意せらに」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあく思子」(No.522)が「やあ思子」となっている。

国吉の比屋の台詞「あゝ此二度の」(No.527)が「此二年の」となっている。

国吉の比屋の台詞「けふや北風やたちゆひ」(No.538)が「今日や北風も立ちゆい」となっている。

国吉の比屋の台詞「急ちおの用意しやへら」(No.543)が「急ち火責しゆる用意しやべら」となっている。

若按司の台詞「火責【とも】しゆんやれへ」(No.546)が「火責どもやれば」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、めしやいるいと」(No.550)が「あゝ召

せる」となっている。

国吉の比屋の台詞「年月のいかへ」(No.551)が「年月の行けば」となっている。

国吉の比屋の台詞「ものきゝゆる世の中よやれへ」(No.555)が「物聞ちゆん世の中よやれば」となっている。

国吉の比屋の台詞「急ち火責の謀や」(No.558)が「急ち此企ちや」となっている。

国吉の比屋の台詞「思立ちやへたん」(No.559)が「思み立ちやべたる」となっている。

思姉の台詞「いきやかなゆり」(No.565)が「いちやがしゆよら」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあ思姉の前よ」(No.567)が「やあ思姉の前」となっている。

国吉の比屋の台詞「敵の首とらな」(No.570)が「按司の首取らな」となっている。

若按司の台詞「急ち火責しゆる」(No.578)が「急ち火責の」となっている。

国吉の比屋の台詞「働やならぬ」(No.585)が「働のならぬ」となっている。

国吉の比屋の台詞「敵の首とやい」(No.588)が「按司の首取や

い」となっている。

思姉の台詞「武士の義理やれは」(No.592)が「武士の義理やとて」となっている。

音曲「一、おめきやひをても」(No.597)が「武士の義理やとて」となっている。

音曲「是までよとめハ」(No.598)が「思切やい居すが」となっている。

音曲「むちたちゆるきハや」(No.599)が「別れよる涯や」となっている。

役名「夜廻」(No.601)が「夜廻り」となっている。

夜回人の台詞「按司のみよんきことやれハ」(No.604)が「按司の詔事拜で」となっている。

夜回人の台詞「先急ちとふら」(No.606)が「先づ通ら」となっている。

夜回人の台詞「米蔵はい、ハ」(No.608)が「れつくわんへいハ」となっている。

夜回人の台詞「けふや北風やかうハ立ひ」(No.609)が「今日や北風もこうハ立ちゆいよ」となっている。

夜回人の台詞「おふほハん」(No.611)が「あハふ」となっている。

夜回人の台詞「はひたかハたかては」(No.617)が「誰がてわたが」となっている。

夜回人の台詞「あハまやあさめ」(No.618)が「あハぬうんあらんまやあさめ」となっている。

音曲「拍子木しけく」(No.634)が「拍子木高く」となっている。

音曲「いならぬ」(No.637)が「いかならん」となっている。

音曲「力を合して」(No.640)が「力を合せて」となっている。

音曲「寄かハて」(No.649)が「寄りかハり」となっている。

供の台詞「一、火事よハ」(No.656)が「あハ火事よハ」となっている。

供の台詞「されハ按司加那志」(No.658)が「され按司加那志」となっている。

役名「鮫川の按司」(No.661)が「鮫川按司」となっている。

役名「按司」(No.665・679・697・718・754・782・821・848・862・890)が「鮫川按司」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、銭金の盗人やあらぬ」(No.675)が「あハ銭金の盗人やあらぬ」となっている。

国吉の比屋の台詞「首のふしやに」(No.677)が「首ど欲しやに」となっている。

国吉の比屋の台詞「城焼崩さてやりしちやん」(No.678)が「城



焼き崩さてやりしちやる」となっている。

鮫川の按司の台詞「一人も又をらぬ」(No.685)が「一人も居らぬ」となっている。

鮫川の按司の台詞「直に尋ゆん」(No.691)が「実に尋ねよん」となっている。

供の台詞「さあ〜」(No.695)が「あう〜」となっている。

供の台詞「御前に出やうれ」(No.696)が「御前に出やうれ〜」となっている。

鮫川の按司の台詞「忠義の心入」(No.706)が「忠節の志」となっている。

鮫川の按司の台詞「あゝ感じてをゆる」(No.707)が「あゝ感じてど居よる」となっている。

国吉の比屋の台詞「一人の働に」(No.711)が「一人が働に」となっている。

国吉の比屋の台詞「今の企とやたる」(No.715)が「今の企やせちやる」となっている。

鮫川の按司の台詞「罪科のあとと」(No.727)が「罪科のあとと」となっている。

鮫川の按司の台詞「高嶺のなし子」(No.733)が「高嶺のかんだ」となっている。

鮫川の按司の台詞「道ならぬあもの」(No.745)が「道ならぬやれば」となっている。

鮫川の按司の台詞「忍らぬあこと」(No.746)が「忍ばらぬあもの」となっている。

国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.752)が「若按司の行衛」となっている。

鮫川の按司の台詞「ワか所存取受て」(No.772)が「とう〜我所存取受て」となっている。

鮫川の按司の台詞「奉公よすれ」(No.773)が「奉公よせれよ」となっている。

鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.786)が「誠若按司に」となっている。

鮫川の按司の台詞「身の上に引受て」(No.790)が「身の上に引き当て〜」となっている。

鮫川の按司の台詞「たとひ若按司の」(No.794)が「跡に若按司の」となっている。

国吉の比屋の台詞「たちゆんともやらへ」(No.816)が「解ちゆんどんやらば」となっている。

国吉の比屋の台詞「四季の祭礼」(No.830)が「四時の祭礼」となっている。

鮫川の按司の台詞「急ち識名村いきやひ」(No.850)が「とう／＼識名村行きやひ」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、御供からめきやい」(No.860)が「され御供がらみちやひ」となっている。

鮫川の按司の台詞「急ち呼よ／＼」(No.864)が「これに呼べよ／＼」となっている。

鮫川の按司の台詞「やや若按司よ、」(No.866)が「やあ若按司」となっている。

若按司の台詞「ち／＼にかめら、」(No.884)が「ち／＼にかみれ」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、あ／＼此御恩たうとさや」(No.886)が「此御恩とをとさや」となっている。

鮫川の按司の台詞「けふの誇らしやに、」(No.882)が「今日の誇らしや／＼」となっている。

若按司の台詞「踊て戻や／＼」(No.898)が「踊て分かやびら」となっている。

「久志B本」

国吉の比屋の台詞「一、出様ちやる者や」(No.125)が「是や」となっている。

国吉の比屋の台詞「歌三味線の」(No.19)が「歌や三味線の」となっている。

国吉の比屋の台詞「色々に異見」(No.22)が「色々に御意見」となっている。

国吉の比屋の台詞「首里軍押寄て」(No.31)が「首里軍」となっている。

国吉の比屋の台詞「責圍てをれハ、」(No.32)が「責懸てをりは」となっている。

国吉の比屋の台詞「逃忍て与座近くいきゆる内、」(No.38)が「逃ち忍て与座近くいちよる内に」となっている。

国吉の比屋の台詞「道柴の露と消果て、」(No.41)が「道芝の露と共にきよ果て」となっている。

国吉の比屋の台詞「思なひかことや、」(No.43)が「思なひか行先や」となっている。

国吉の比屋の台詞「からめ出す者あらハ、」(No.46)が「捕出そのものや」となっている。

国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだによ」となっている。

国吉の比屋の台詞「御行衛尋やい拜ま、」(No.63)が「若按司の御行衛尋やひをかま」となっている。

国吉の比屋の台詞「与所の疑もたちゆら」（No.65）が「与所の疑ひ立ら」となっている。

音曲「若按司思姉出羽干瀬ふし」（No.96）が「兩人出羽干瀬ふし」となっている。

音曲「一、おめけひとワ身や」（No.70）が「思けいやとわんや」となっている。

音曲「親にすてられて」（No.71）が「親に捨らて」となっている。  
音曲「をるか心気」（No.73）が「居る心気」となっている。

若按司の台詞「行先もしらぬ」（No.82）が「行先やしらぬ」となっている。

若按司の台詞「一、やあ〜」（No.101）が「やあ」となっている。

役名「新垣」（No.104・116）が「新垣のひや」となっている。

若按司の台詞「頼む方なひらぬ」（No.112）が「頼の「欠」方居らぬ」となっている。

若按司の台詞「とまひ〜よきやもの」（No.113）が「とめてつちをもの」となっている。

新垣の比屋の台詞「隠しおくものあら〜」（No.122）が「かくし置ものや」となっている。

音曲「足本もやシゆひ」（No.169）が「足本んやめば」となっている。

いる。

役名「村頭」（No.182・200・238）が「崎本之子」となっている。

村頭の台詞「上原んかい」（No.184）が「上原のやとりに」となっている。

村頭の台詞「耕作見廻にいきゆん」（No.186）が「用事あて行ん」となっている。

村頭の台詞「いきやることやとつ」（No.189）が「いきやることあとて」となっている。

村頭の台詞「ふたりみちをる」（No.190）が「二人居ちよか」となっている。

若按司の台詞「急ち先に通ら」（No.199）が「急ち先よ通ら」となっている。

村頭の台詞「一、やあ〜」（No.201）が「あ〜」となっている。

村頭の台詞「慥高嶺の」（No.204）が「高嶺の思子」となっている。

村頭の台詞「思子とやゆる」（No.205）が「疑やならん」となっている。

若按司の台詞「こまにをゆる」（No.222）が「こまにをたる」となっている。

役名「崎本」（No.223・457・479）が「崎本ノ子」となっている。

村頭の台詞「此山にわかやとりの」(No.226)が「此山に我身かやとりの」となっている。

村頭の台詞「時節待めしやうれ」(No.231)が「時節待めしやうれ」となっている。

役名「国吉のひや」(No.244・749)が「国吉ノ子」となっている。

音曲「道輪口説」(No.248)が「歌」となっている。

音曲「ひとたひおとろふ」(No.250)が「ひとたひ衰ひ」となっている。

音曲「すそは結んで」(No.254)が「すいそはむすんで」となっている。

音曲「ほうろくん」(No.270)が「ふうろられ」となっている。

音曲「ほうろく」(No.271)が「ふうろ」となっている。

国吉の比屋の台詞「としよひやひ集めれよ」(No.274)が「ぶっ呼び集り」となっている。

役名「国吉」(No.284・297・315・326・374・392・424・438・460・503・549・566・580・674・708・774・812・824・840・854・859・885)が「国吉ノ子」となっている。

国吉の比屋の台詞「くらしてれよ」(No.288)が「くらして取り」

となっている。

役名「同」(No.291・293・295)が「童」となっている。

童の台詞「一、ワぬやおきれこふしとらに」(No.292)が「我身やこのおきれくふしとよん」となっている。

童の台詞「一、近方の村々に」(No.305)が「近方の村に」となっている。

役名「童子」(No.309)が「童一人に」となっている。

童の台詞「このころ上原の」(No.311)が「頃日に上原の」となっている。

童の台詞「一、たう列ていかに」(No.320)が「とう列り」となっている。

国吉の比屋の台詞「約速のこと此仏呉ん」(No.328)が「約速」  
とにこのふとけくいよん」ととなっている。

国吉の比屋の台詞「急ち村にいけ」(No.330)が「急ぢ村に戻り」  
となっている。

役名「同人」(No.335)が「国吉の子」となっている。

国吉の比屋の台詞「さきやるたよりあて」(No.345)が「さちや便りあて」となっている。

若按司の台詞「忍ひ隠れとす」(No.351)が「忍ひ隠りとす」と  
なっている。

若按司の台詞「親に捨られて」(No.366)が「親に捨て」となっている。

若按司の台詞「是非共に此事や」(No.390)が「慈悲共に此事や」となっている。

若按司の台詞「やあ〜思なひよ」(No.411)が「やあおめないよ」となっている。

思姉の台詞「親に捨てられて」(No.417)が「親に捨て」となっている。

思姉の台詞「かゝるかたないらぬ」(No.419)が「宿る方ないらん」となっている。

思姉の台詞「是非よ情けあて」(No.422)が「慈悲よ情けあて」となっている。

思姉の台詞「これからや朝夕」(No.434)が「このからや朝夕」となっている。

思姉の台詞「親と頼ミゆもの」(No.435)が「親とたのよ物の」となっている。

国吉の比屋の台詞「あの宿に引越ひ」(No.451)が「宿に引越ひ」となっている。

崎本の子の台詞「久しう押みやて」(No.459)が「久しよ押なひて」となっている。

国吉の比屋の台詞「思子二所の」(No.462)が「思子二所も」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ崎本」(No.468)が「やあ崎本の子」となっている。

国吉の比屋の台詞「共に肝揃て」(No.477)が「共に肝合ち」となっている。

国吉の比屋の台詞「御打立めしやうれ」(No.497)が「御立めしやれ」となっている。

国吉の比屋の台詞「内におんつかいしやへら」(No.506)が「とう〜内におんつかひしやへら」となっている。

国吉の比屋の台詞「やあ思なひの前」(No.523)が「やあ思姉の前〜」となっている。

国吉の比屋の台詞「年月のいかへ」(No.551)が「年月のいけは」となっている。

思姉の台詞「思けひとわぬや」(No.564)が「思けへと二人や」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、やあ思姉の前よ」(No.567)が「やあ思姉の前」となっている。

国吉の比屋の台詞「働やならぬ」(No.585)が「働のならぬ」となっている。

思姉の台詞「武士の義理やれは」(No.592)が「武士の義理立て」となっている。

思姉の台詞「ものめつめづ」(No.595)が「ものめつめらり」となっている。

音曲「東江ふし」(No.596)が「歌東江ふし」となっている。

音曲「一、おめきやひをすも」(No.597)が「思きやいをすか」となっている。

役名「夜廻」(No.601)が「夜廻り」となっている。

夜回人の台詞「一、けふや北風もかうく立ひ」(No.602)が「けふや北風やかうく立ひ」となっている。

夜回人の台詞「おふほん」(No.611)が「おふふん」となっている。

夜回人の台詞「あゝまやあさめ」(No.618)が「あゝまやとやさめ」となっている。

夜回人の台詞「おふほん」(No.623)が「おふふん」となっている。

音曲「いならぬ」(No.637)が「いからぬ」となっている。

音曲「軒端の下に」(No.648)が「軒の下に」となっている。

音曲「すわや火をかけ」(No.650)が「すかや火をかけ」となっている。

供の台詞「一、火事よく」(No.656)が「はあ火事よく」となっている。

供の台詞「されく按司加那志」(No.658)が「され按司加那志」となっている。

供の台詞「一、盗人や是たやへる」(No.664)が「盗人これたやへる」となっている。

鮫川の按司の台詞「一、是やよしのあるものとやゆる」(No.666)が「あゝ是やよしのあるむのとやゆる」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、銭金の盗人やあらぬ」(No.675)が「金の盗人やあらぬ」となっている。

国吉の比屋の台詞「城焼崩さてやりしちゃん」(No.678)が「城焼ち尽たりしちゃん」となっている。

鮫川の按司の台詞「一人も又をらぬ」(No.685)が「一人の居ん」となっている。

供の台詞「御前に出やうれ」(No.696)が「御前に出様り」となっている。

鮫川の按司の台詞「あゝ感じてをゆる」(No.707)が「あゝ感じてをよろ」となっている。

国吉の比屋の台詞「二人の働に」(No.711)が「一人が働に」となっている。

国吉の比屋の台詞「城焼くつち」(No.712)が「城焼ち尽き」となっている。

鮫川の按司の台詞「罪科やおかちある」(No.741)が「罪咎や殺ちある」となっている。

国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.752)が「若按司の行衛や」となっている。

鮫川の按司の台詞「武士の事やれハ」(No.769)が「武士の者やれハ」となっている。

鮫川の按司の台詞「殺しゆすに忍ハラぬ」(No.770)が「殺や忍はらん」となっている。

鮫川の按司の台詞「奉公よすれ」(No.773)が「奉公よすれよ」となっている。

鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.786)が「誠若按司に」となっている。

鮫川の按司の台詞「泥てをて済ぬ」(No.800)が「泥てやすまん」となっている。

国吉の比屋の台詞「地の底もくって」(No.818)が「地の底ん下て」となっている。

国吉の比屋の台詞「武士の義理曲て」(No.833)が「武士の道曲て」となっている。

鮫川の按司の台詞「さうてきやうれ」(No.853)が「列て来う」となっている。

国吉の比屋の台詞「一、御供からめきやい」(No.860)が「され御供からめきやい」となっている。

鮫川の按司の台詞「やや若按司よ」(No.866)が「やあ若按司」となっている。

役名「若按司」(No.878)が「若按司并思なひ兩人」となっている。

若按司の台詞「此御恩一期」(No.883)が「一期」となっている。

鮫川の按司の台詞「けふの誇らしやに」(No.892)が「今日の嬉しやに」となっている。

音曲「清屋ふし」(No.899)が「歌立雲節」となっている。

音曲「同ふし」(No.904)が「歌」となっている。

校合を通して対校本を概観してみると、「語学材料」が異同が少なく、次いで「恩河本」、「兼島本」となっている。一番移動の多かった対校本は「比嘉本」であった。特に注目できるのは「恩河本」は、「語学材料」より異同は多いが、異同の中でもその多くが役名の異同であり、作品の内容に関する異同は「語学材料」より少なかった。

## vi 天願若按司敵討

### ① 作者ならびに上演の歴史

「天願若按司敵討」は、別の外題で「久志の若按司」「久志の若按司敵討」があり、むしろそちらの方が有名とも言える。王府の冊封の記録を参考にすると、一七九九年の『躍方日記』の記録（注八三）には、作者と組踊名が記載されているが、そこには「天願若按司敵討」「久志の若按司」といういずれの作品も名が挙がっていない。戊年（一八三八年）の『躍方日記』では一八〇八年の諸宴に上演した演目の中に「久志之若按司敵討」が見え、このことから、この時が初演である可能性が高い。一八三八年の諸宴には「天願若按司敵討」とあり、この年の冊封が終わってあとに行われた御茶屋御殿での上演では「久志の若按司」と演目名が見える。一八六六年の『寅年諸宴演戯故事』には漢文のタイトル「幼君得救報仇継業」が見えることから、この年にも上演されたと思われる。外題は一八三八年の時点で「天願若按司敵討」「久志の若按司敵討」と別称が使われていることから、当初からどちらも使われていたことがうかがえる。作者ははっきりと伝わっておらず、不詳である。

### ② 内容について

仇討物の中でも、この作品は珍しい作品である。天願按司が弑さ

れ、その子である若按司が、従兄弟の久志の若按司の協力をもって、天願按司の仇を討つ、という内容である。本来であれば、天願若按司の仇討であるので「天願若按司敵討」という外題が適当である。しかし、劇中、活躍するのは久志の若按司であるため、その外題も「久志の若按司敵討」となっているものが多いのである。

このように二人の若按司が登場する作品は、他に「西南敵討」が挙げられる。「西南敵討」は王府の上演が確認できず、成立年代も不詳の作品である。しかし、名護市宮里で上演されているため、同じ名護市久志の若按司が活躍する「天願若按司敵討」を参考にしても考えられる。

「天願若按司敵討」は地方上演も盛んであり『沖繩の組踊（I）』では三十四カ所の地域で上演されている。これは伏山敵討と並び、上演地域は最多である。地域も本部・宜野座・名護・恩納・読谷・嘉手納・北谷・うるま市・宜野湾・西原・那覇・南城市・久米島・伊是名島・伊江島・与那国島など沖繩のほぼ全域で上演されている。

### ③ 底本と対校本について

第一次対校本…喜舎場孫進所蔵本（以下「喜舎場本」・今帰仁御殿本（以下「今帰仁本」）・久志公民館本（以下「久志本」）・恩河本小祿御殿本（以下「恩河本」）・東京教育大学所蔵本（以下「教育大本」）。



京都大学琉球資料（以下「京大本」）・兼島信備所蔵本（以下「兼島本」）・豊川善包所蔵本（以下「豊川本」）

別の外題は「久志の若按司」「久志の若按司敵討」などである。『尚家本』には着付けが見られ、他本では確認できない。

対校本のうち、『京都大学琉球資料』は、前後が欠けていて、一部分しか残っていない。その他の対校本は完全に残っているものである。「天願若按司敵討」は、『尚家本』以外、王府で編集した資料がないが、比較的多くの「組踊本」が残っている作品である。また、沖縄本島だけでなく石垣にも写本が数点残されており、「大川敵討」同様、書写関係を明らかにすることで、筆写系統が見える可能性が高い。

#### ④校合結果

まず、『尚家本』に見られて、対校本に見られない記載は、「着付」（No.2～13）である。前半部が欠落している「京大本」以外の対校本全てで見られない。次に多いのが、ト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」（No.539）である。これは「今帰仁本」が「附此時三味線手毎ニ而三人手配を以忍の手有ル」、「豊川本」が「此時たちおとして忍ある」となっており、それ以外の対校本にはみられない。「今帰仁本」には「瀧落」の記載がなく、「豊川本」には「三

人手配を以」の記載がないが、内容はほぼ同じであると考えられる。ここでの忍びの場面を行うト書きは、この他の対校本には見られない。

次に、各対校本ごとに尚家本にしか見られない記載を挙げていく。

#### 「久志本」

前述の「着付」（No.2～13）、ト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」（No.539）、富盛の台詞「城よ立出て」（No.103）、供の台詞「いきやか〜」（No.366）、役名「供」（No.414・449）、供の台詞「一 さあ〜急ぎ〜」（No.450）、久志の若按司の台詞「謀叛事巧て、／按司もをなちやらも」（No.459～460）、久志の若按司の台詞「はかなさや嫡子／千代松か事と、」（No.464～465）、役名「立川大主」と台詞「一 をかんちゆめやへて、」（No.499～500）、役名「立川」と台詞「一 たう〜／御供しやくら、」（No.510～512）、久志の若按司の台詞「やあ砂田の子、」（No.707）、久志の若按司の台詞「富盛大主の／露の身の命ち、」（No.730～731）、砂田の台詞「やあ大主、」（No.754）、富盛の台詞「やあ大主」（No.828）、立川の台詞「一 やあ富盛大主、／なまのことやれハ／誇らしやとあゆる、／謝名か首とゆす／疑やなひらぬ、／頼て此事や／計らやい給ふれ、」（No.861～867）、役名

「同人」(No.890)、役名「立川」(No.960)、平田の台詞「たう／＼居やうれ／＼」(No.995～996)、ト書き「文立川の大王江渡す」(No.1103)、久志の若按司の台詞「本門の内に／忍ひ隠れとて」(No.1166～1167)、役名「立川」と台詞「一 拝留やへて」(No.1172～1173)、役名「天願」と所作「一 一礼」(No.1203～1204)、役名「惣人数」(No.1256)、惣人数の台詞「一 ひやあひや／＼」(No.1257)、役名「富盛」と台詞「一 あゝ武運つき果て／生捕にとられ／武士の身の名折／面目もなひらぬ」(No.1287～1291)、役名「天願」と台詞「一 此やからむさや／見れハやすまらぬ」(No.1296～1298)、役名「浜崎国吉」と台詞「一 拝留や／＼」(No.1310～1311)、役名「立川」と台詞「一 やあ／＼」(No.1319～1320)、立川の台詞「おれ／＼の番手／油断するな」(No.1321～1322)、役名「浜崎国吉」と台詞「一 をかんちゆめや／＼」(No.1323～1324)、役名「同人」と浜崎国吉の台詞「一 さあ／＼たちやうれ／＼」(No.1325～1326)、役名「同人」と浜崎国吉の台詞「一 さあ／＼こそけ／＼」(No.1327～1328)。

「今帰仁本」

前述の「着付」(No.2～13)、天願の若按司の台詞「思なひもなけ／＼」(No.261)、天願の若按司の台詞「肝もきもならぬ」(No.262)、ト

書き「文立川の大王江渡す」(No.1103)、役名「天願の若按司」と所作「一礼」(No.1188～1189)。

「教育大本」

前述の「着付」(No.2～13)、ト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」(No.539)、役名「三人」(No.76)、供の台詞「一 拝留やへて」(No.77)、役名「富盛」(No.153)、音曲「なれぬ山路や／歩いてあゆまらぬ」(No.285～286)、天願の若按司の台詞「やあおめなひよ」(No.313)、音曲の「東江ふし／一 あけいきやかなゆら」(No.328～329)、役名「供」(No.414)、供の台詞「一 さあ／＼たちやうれ／＼」(No.415～416)、供の台詞「いきやか／＼」(No.428)、供の台詞「さあ／＼たちやうれ／＼」(No.430～431)、役名「供」と台詞「一 さあ／＼急き／＼」(No.449～450)、役名「立川大主」と台詞「一 をかんちゆめや／＼」(No.499～500)、役名「同人」と天願の若按司の台詞「一 やあ大主」(No.1101～1102)、ト書き「文立川の大王江渡す」(No.1103)、立川の台詞「はあ川崎のひやか／今のこやれ／＼」(No.1112～1113)、役名「天願の若按司」と所作「一礼」(No.1188～1189)、役名「天願」と所作「一 一礼」(No.1203～1204)、役名「浜崎国吉」と台詞「一 拝留や／＼」(No.1310～1311)、役

名「兩人」(No.1317)、役名「浜崎国吉」と台詞「一 をかんちゆめやへて」(No.1323～1324)、役名「同人」と浜崎国吉の台詞「一 さあ〜たちやうれ〜」(No.1325～1326)、役名「同人」と浜崎国吉の台詞「一 やあ〜いそけ〜」(No.1327～1328)。

「恩河本」

前述の「着付」(No.2～13)、ト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」(No.539)、ト書き「文立川の大主江渡す」(No.1103)、役名「天願の若按司」と所作「一礼」(No.1188～1189)。

「兼島本」

前述の「着付」(No.2～13)、ト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」(No.539)、謝名の台詞「夢の間の浮世／樂すらんともて、／色欲よ進め／明問うかゝやひ、」(No.27～30)、供の台詞「いきやか〜、」(No.366)、供の台詞「さあ〜」(No.430)、役名「富盛」と台詞「一 たう〜いそか〜、」(No.447～448)、久志の若按司の台詞「はかなさや嫡子／千代松か事と、」(No.454～465)、音曲「一 かにある引合や」(No.665)、役名「立川」(No.856)、立川の台詞「一 やあ富盛大主、／なまのことやれハ／誇らしやとあゆる、／「謝名か首とゆす／疑やなひらぬ、／頼

て此事や／計らやい給ふれ、」(No.861～867)、役名「同人」と天願の若按司の台詞「一 やあ大主」(No.1101～1102)、ト書き「文立川の大主江渡す」(No.1103)、富盛の台詞「急ち走寄ひ／時の声よあけら」(No.1230～1231)、久志の若按司の台詞「一 やあ謝名の大主」(No.1263)、久志の若按司の台詞「やあ千代松」(No.1303)、役名「浜崎国吉」と台詞「一 拝留や〜」(No.1310～1311)。

「京大本」

前述のト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」(No.539)、供の台詞「いきやか〜、」(No.366)、役名「供」と台詞「一 さあ〜／たちやうれ〜、」(No.414～416)、供の台詞「一 さあ〜急き〜、」(No.450)、役名「同」(No.451)、役名「久志」(No.453)、久志の若按司の台詞「はかなさや嫡子／千代松か事と、」(No.464～465)、役名「久志の若按司」(No.678)、立川の台詞「たう〜」(No.749)、ト書き「文立川の大主江渡す」(No.1103)、役名「按司」と台詞「一 やあ外間の子や／城の南の／小林に深く／伏よ隠れとて／謝名か軍勢の／城の門内に／ふみ入ゆる時分／相図のかねのならば／うしろからせめれ」(No.1152～1161)、役名「外間」と台詞「一 をかむちゆめやへて」(No.

1162～1163)'

「豊川本」

前述の「着付」(No.2～13)・天願の若按司の台詞「一 やあ〜、」  
(No.347)・天願の若按司の台詞「誠天願の／なし子ともやらハ、」  
(No.372～373)・天願の若按司の台詞「一 あゝ口惜や残念、」  
(No.418)・供の台詞「一 拝留や〜、」(No.427)・立川の台詞  
「一 や按司かなし、」(No.484)・天願の若按司の台詞「一 や  
あやき前よ、」(No.644)・立川の台詞「一 やあ按司かなし、」(No.  
715)・砂田の台詞「一 され按司かなし、／やあ大主、」(No.753  
～754)・富盛の台詞「謝名の大主や、」(No.836)・富盛の台詞「一  
やあ按司かなし、」(No.891)・砂田の台詞「一 され按司かなし、」  
(No.903)・平田の台詞「一 やあ按司かなし、」(No.1049)・卜書  
き「文立川の太主江渡す」(No.1103)・立川の台詞「一 やあ按  
司かなし、」(No.1105)・役名「いっし下(戸+東)理」と台詞「一  
拝留や〜、」(No.1128～1129)・久志の若按司の台詞「東原にの  
そ〜、」(No.1136)・役名「天願の若按司」と所作「一 札」(No.1188  
～1189)・天願の若按司の所作「一 一札」(No.1204)・役名「同  
人」(No.1234)・役名「惣人数」と台詞「一 ひやあひやい、」(No.  
1256～1257)・役名「同人」と浜崎国吉の台詞「一 さあ〜た

ちやうれ〜、」(No.1325～1326)・役名「同人」と浜崎国吉の台  
詞「一 さあ〜いそけ〜、」(No.1327～1328)・役名「久志」  
と台詞「一 やあ〜／かたき討捕る／けふの誇らしや／押つ  
れて互に／踊て戻ら」(No.1346～1351)・

「喜舎場本」

前述の「着付」(No.2～13)・卜書き「附此時瀧落にて三人手配を  
以忍の手ある」(No.539)・謝名の台詞「色欲よ進め」／明間うかゝ  
やひ、／討捕んでやり」(No.29～31)・役名「宿主」と台詞「一  
いや思子宿からち／ワか命ちとよめ、／たう〜急ち／出てた  
はふれ、」(No.265～269)・役名「富盛大主」(No.)・と台詞「一 是  
や富盛大主、／天願のなし子／さかいしあらために／夜昼もか  
けて／島々に行ん、／たう〜／いそか〜、」(No.330～337)・役  
名「供二人」(No.338)・供の台詞「一 御供しやくら、」(No.340)・供  
の台詞「いきやか〜、」(No.366)・役名「供」と台詞「一 さ  
あ〜／たちやうれ〜、」(No.414～416)・供の台詞「やあ〜  
／たちやうれ〜、」(No.430～431)・役名「供」と台詞「一 さ  
あ〜急き〜、」(No.449～450)・久志の若按司の台詞「はかな  
さや嫡子／千代松か事と、」(No.464～465)・立川の台詞「此事や  
い〜も／油断しや濟ぬ、」(No.485～486)・久志の若按司の台詞「謝

名の手にかゝて」(No.633)、久志の若按司の台詞「人に勝れとる、  
／＼つわものよやれハ」(No.943～944)、立川の台詞「敵よ待うけ  
る／計しやくら」(No.966～967)、川崎の台詞「山よりも高く」  
(No.1009)、久志の若按司の台詞「是とやゆる」(No.1094)、役名  
「天願の若按司」と台詞「一 やあやき前よ」(No.1095～1096)、役  
名「立川」と台詞「一 やあ按司かなし／此文よ見れハ」(No.1104  
～1106)、役名「天願の若按司」と所作「一 札」(No.1188～1189)、謝  
名の台詞「一 やあ／急ち責いやい／切殺ちすてら」(No.  
1254～1255)、役名「惣人数」と台詞「一 ひやあひやい」(No.  
1256～1257)、謝名の台詞「たしぬきにぬかれ」(No.1269)、役名  
「天願」と台詞「一 此やからむさや／見れハやすまらぬ」(No.  
1296～1298)、音曲「こやうんかないふし」(No.1360)、

次に、対校本のみに見られ、『尚家本』には見られない記載を挙げ  
る。一番多かったのは、音曲名(No.523)である。これは対校本で「道  
行口説(今帰仁本・兼島本・豊川本・喜舎場本)」「口説(久志本・  
恩河本)」「久志ノ若按司立川砂田三人道行口説(教育大本)」「忍口  
説(京大本)」と異なるが、『尚家本』には口説であることの下書き  
の記載が見られない。また、役名「久志の若按司」(No.662)、「謝名  
の大主」(No.1000)、「富盛大主」(No.1071)、の三つの記載と、富盛の

台詞「一 拝留やへて」(No.1072)、砂田の台詞「いきやか／＼」(No.  
539)、が見られなかった。

次に多かったのは、役名「謝名」(No.135)、「と」平田」(No.997)、  
である。これは「京大本」以外の対校本に見られなかった。「京大本」  
は前半部が欠落しているため(No.135)は見られず、(No.997)は記載  
が見られなかった。全体を通して、共通して見られないのは役名が  
多く、台詞や音曲などが見られない、という箇所は少ない。では、  
各対校本ごとに対校本のみに見られる記載を挙げる。

#### 「久志本」

役名「謝名の太主」(No.14)、役名「謝名」(No.135)、富盛?の台  
詞「一 此二三日内に／擲出ち」(No.156～157)、富盛の台詞「み  
よめかけやへら」(No.158)、天願の若按司の台詞「一 今出る我  
身や。」(No.167)、供の台詞「御急よめしやうれ」(No.339)、供の  
台詞「一 拝ん留やくて」(No.390)、役名「同人」(No.429)、久  
志の若按司の台詞「城内になし子／跡方ないらん」(No.462～  
463)、役名「兩人」と台詞「一 拝ん留やくて」(No.508～509)、音  
曲「口説」(No.513)、役名「久志の若按司」(No.563)、砂田の台  
詞「いきやか／＼」(No.599)、役名「久志」(No.662)、役名「久  
志」と台詞「一 こやしはしまし」(722 No.9～723)、立川の台詞

「一 はあ大主の肝合ち／なまの事やれば／かたき打取す／手の内とやよる」(No.857～860)、役名「富盛」と台詞「一 やあ按司かなし／立川の太主と／語らたる事に／前後から責て／取囲てからや／謝名か首取す／疑やあやへらん／二所の按司や／御城の内に／心安々と／御待めしやうれ」(No.868～879)、役名「平田」(No.997)、役名「謝名」(No.1000)、役名「富盛」(No.1071)、富盛の台詞「一 拝ん留や／へて」(No.1072)、役名「久志」(No.1142)、役名「惣人数」と台詞「一 拝ん留や／へて」(No.1201～1202)、役名「謝名」と台詞「一 たう／急け／急け」(No.1232～1233)、役名「謝名」(No.1253)、役名「外間」と台詞「一 さあ／急け／急け」(No.1258～1259)、役名「浜崎」と台詞「一 たう／急居やうれ／急」(No.1260～1261)、天願の若按司の台詞「誠あの世界の／此事あらは」(No.1342～1343)がとなっている。役名「総人数」と台詞「一 めしやいる事／押列て踊て／御供しや／ら」(No.1352～1355)。

「今帰仁本」

役名「謝名大主言葉」(No.14)、役名「謝名の太主言葉」(No.135)、音曲「道行口説」(No.513)、砂田の台詞「いきや／急」(No.599)、役名「久志の若按司言葉」(No.662)、役名「同人言葉」(No.997)。

役名「謝名の太主言葉」(No.1000)、役名「富盛大主言葉」と台詞「一 拝留や／へて」(No.1071～1072)、役名「久志の若按司言葉」(No.1142)、役名「謝名大主」(No.1239)、役名「謝名の太主」(No.1253)。

「教育大本」

役名「謝名」(No.14)、役名「謝名ノ太主」(No.135)、乙鶴の台詞「舎兄前ト二人ヤ／驚シヤヨアモノ。」(No.303～304)、富盛の台詞「急チ引立リ」(No.43)、音曲「久志ノ若按司立川砂田三人道行口説」(No.513)、立川砂田の台詞「一 御急チヨメシヤウリ」(No.558)、砂田の台詞「イチヤガ／急」(No.599)、役名「久志ノ若按司」(No.662)、役名「全人」(No.994)、役名「全人」(No.997)、役名「謝名」(No.1000)、役名「富盛大主」と台詞「一 拝留ヤヒテ。」(No.1071～1072)、役名「謝名」(No.1253)、役名「浜崎ヒヤ」と台詞「一 サア／急ウリ／急」(No.1356～1357)、役名「国吉ノ子」と台詞「一 サア／急ゲ／急」(No.1358～1359)、音曲(立雲節)「同フシ／一 今日ノ誇サヤ／物ニ譬ラ／ン／押列テ互ニ／躍テ戻ラ。」(No.1365～1369)、ト書き「久志若按司終」(No.1370)。

「恩河本」

役名「謝名之大主」(No.14)、役名「謝名」(No.135)、音曲「口説」(No.513)、砂田の台詞「イチヤガ〜」(No.599)、役名「久志若按司」(No.662)、役名「全人」(No.997)、役名「謝名大主」(No.1000)、役名「富盛大主」と台詞「一 拝留ヤヒテ」(No.1071〜1072)、役名「久志若按司」(No.1142)、役名「謝名」(No.1253)、ト書き「天願之若按司終／桃原村／恩河朝祐」(No.1370〜1372)、

「兼島本」

役名「謝名ノ大主」(No.14)、役名「謝名ノ大主」(No.135)、久志の若按司の台詞「城内ニ産子ノ跡方ン無ラン」(No.462〜463)、音曲(口説)「道行口説」(No.513)、砂田の台詞「イキヤガ〜」(No.599)、役名「久志ノ若按司」と台詞「一 ヤア千代松」(No.602〜603)、役名「久志ノ若按司」(No.662)、役名「同人」(No.997)、役名「謝名」(No.1000)、役名「富盛大主」と台詞「一 拝留ヤヒテ」(No.1071〜1072)、役名「久志若按司」(No.1142)、富盛の台詞「サア〜急ガ〜」(No.1228)、役名「謝名ノ大主」(No.1253)、役名「謝名ノ大主」と台詞「一 ヤア〜」(No.1329〜1330)、役名「浜崎ノ比屋外間ノ子両人」と台詞「一 イヤ物事ノ多サ」(No.1331〜1332)、天願の若按司の台詞「誠彼ノ世界ノ此世事

アレバ」(No.1342〜1343)、役名「立川ノ大主」(No.1352)、惣人数の台詞「一 召ル事ノ踊テ／御祝シヤビラ」(No.1353〜1355)、

「京大本」

乙鶴の台詞「私のんやち前の／側はににらに」(No.326〜327)、供の台詞「一 拝ん留やひつ」(No.390)、久志の若按司の台詞「城内になし子ノ跡方んないらん」(No.462〜463)、音曲「忍口説」(No.513)、砂田の台詞「いきやか〜」(No.599)、役名「久志」と台詞「一 やあ千代松やあ乙鶴よ」(No.602〜603)、役名「久志」(No.662)、役名「謝名の大主」(No.1000)、役名「富盛」と台詞「一 拝留やひつ」(No.1071〜1072)、役名「久志」(No.1142)、

「豊川本」

役名「謝名」(No.135)、天願の若按司の台詞「久志の城元や／あかり表てもの／てだ上るかたに／とまいて行ん」(No.196〜199)、音曲「道行口説」(No.513)、立川砂田の台詞「一 御急ちよみしやふり」(No.558)、砂田の台詞「いちやが〜」(No.599)、役名「久志」と台詞「一 やあ千代松やあ乙鶴」(No.602〜603)、役名「久志」(No.662)、平田の台詞「敵ときも合ち」(No.985)、役名「同人」(No.994)、役名「同人」(No.997)、役名「謝名」(No.1000)、

役名「富盛平田」と台詞「一 拝ん留やひつ」(No.1071～1072)、  
天願の若按司の台詞「拝留やひつ」(No.1205)、役名「富盛」と  
台詞「御急ちよめしやうれ／御供しやひら」(No.1218～1220)、  
役名「謝名」(No.1253)、天願の若按司の台詞「一 悪たくもや  
から」(No.1297)、天願の若按司の台詞「とてん一刀に／殺ち捨  
ら」(No.1299～1300)、天願の若按司の台詞「朝夕忘らん」(No.  
1338)、天願の若按司の台詞「心安く」と(No.1340)、

「喜舎場本」

役名「謝名」(No.135)、宿主の台詞「いや思子宿借ち／我か命ち  
とゆみ／たう／急ち／出て給り」(No.274～277)、久志の若按  
司の台詞「城内生子／跡方も無らん」(No.462～463)、音曲(口  
説)「道行口説」(No.513)、砂田の台詞「さあ／いきやか／」  
(No.599)、役名「久志の若按司」と台詞「一 やあ千代松よ」  
(No.602～603)、久志の若按司の台詞「数ならん者に」(No.632)、  
立川の台詞「今からの先や／御氣遣よめしやうな」(No.655～656)、  
役名「久志の若按司」(No.663)、久志の若按司の台詞「マてある  
縄ん」(No.769)、久志の若按司の台詞「尋らん先に」(No.928)、  
役名「同人」(No.997)、役名「謝名大主」(No.1000)、川崎の台詞  
「山よりも高や」(No.1011)、川崎の台詞「久志の若按司の／は

んにくてをてと／按司の手にかやひ／殺されんともて／富盛大  
主や／たしぬきにぬかり」(No.1015～1020)、役名「富盛」と台  
詞「一 拝留や／て」(No.1071～1072)、役名「久志の若按司」  
(No.1142)、役名「総人数」と台詞「一 めしやいる事／躍て／  
御供しやひら」(No.1352～1355)、

次に、『尚家本』と対校本で記載に異なる箇所を挙げる。『尚  
家本』と対校本で一番異なるのは、音曲「揚七尺ふし」(No.432)  
が「歌」、もしくは「七尺ふし」となっている。

音曲(口説)の台詞「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「慈悲  
の功德や千代松に」となっている。「切徳」という言葉はなく、対校  
本は「教育大本」・「京大本」・「喜舎場本」が「いころ」、それ以外の  
対校本は「功德」となっている。特に「豊川本」は「切」という字  
を「功」という字に改めていることから、これは『尚家本』が書き  
損じたものであると思われる。砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富  
盛大主の」となっているのは、単に「大主」という言葉を抜いてし  
まっていると思われる。台詞の音数律も「富盛の」では四音、「富盛  
大主の」では八音であるため、こちらの方が妥当である。したがっ  
てこちらも『尚家本』の書き損じであると思われる。天願の若按司  
の台詞「夢かやゆら」(No.626)が「夢かや／いら」となっている



のは、若按司の台詞の最後の句にあたるので、『尚家本』は「夢かやゆら」と六音で収めたのであろう。

次に各対校本ごとに『尚家本』との異同を挙げる。

「久志本」

謝名の台詞「一出様ちやる者や、」(No.15)が「一出やらちるものや。」となっている。

謝名の台詞「あゝ浅ましや此身」(No.19)が「あさましや此身」となっている。

謝名の台詞「煙りたかよいか」(No.24)が「煙焼よへか」となっている。

謝名の台詞「討捕んでやり」(No.31)が「打取らぬともて」となっている。

謝名の台詞「願事や叶ぬ」(No.35)が「はあ我か願やかなん」となっている。

謝名の台詞「あゝむちやる三日に」(No.37)が「いきやる三日に」となっている。

謝名の台詞「戻る道中に」(No.39)が「戻る道なかい」となっている。

謝名の台詞「思たこと按司や」(No.41)が「思たこと按司ん」と

なっている。

謝名の台詞「うちすまぢあすか」(No.42)が「打果あすか。」となっている。

謝名の台詞「気の毒とやゆる」(No.45)が「はあ気の毒とやゆる」となっている。

謝名の台詞「あとかたもなひらぬ」(No.57)が「跡方んめらん」となっている。

謝名の台詞「たゞやてやをらぬ」(No.61)が「只止やをらん」となっている。

平田の台詞「一はあめしやいること」(No.79)が「一はあめしや事」となっている。

富盛の台詞「時節計らやらひ」(No.113)が「時節計らやい」となっている。

川崎の台詞「先やみにめしやうち」(No.120)が「先やめよめしやうち」となっている。

謝名の台詞「ことわりとやゆる」(No.139)が「理るやよる」となっている。

音曲(散山)の台詞「天願の若按司思なひ出羽散山ふし」(No.161)が「歌さん山節」となっている。

天願の若按司の台詞「按司添か事や」(No.170)が「按司そい前

事や」となっている。

天願の若按司の台詞「忍ひ隠れやひ」(No.191)が「忍ひ隠れとて」となっている。

音曲「天願の若按司云は并道行きんふし」(No.200)が「歌」となっている。

乙鶴の台詞「足もひかれらぬ」(No.208)が「足本むやみは。」となっている。

宿主の台詞「切殺ちすてられんてやり」(No.253)が「切殺き捨れてやり」となっている。

宿主の台詞「たうく急ち」(No.268)が「さあく急ち」となっている。

音曲「やとるかたなひらぬ」(No.282)が「やとる木んらん」となっている。

乙鶴の台詞「村に出やくら」(No.306)が「村にかやくら」となっている。

天願の若按司の台詞「やあおめなひよ」(No.313)が「やあ思妹」となっている。

天願の若按司の台詞「いきやかしゆくら」(No.321)が「いきやかなよら」となっている。

富盛の台詞「いそかく」(No.337)が「急けく」となっている。

る。

役名「供二人」(No.338)が「供」となっている。

天願の若按司の台詞「此二人にのよて」(No.378)が「のよて此二人に」となっている。

富盛の台詞「いや、まかひもあらぬ」(No.383)が「いや人違んあらん」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしのこれや」(No.409)が「あてなしのあれや」となっている。

役名「富盛」(No.411)が「供」となっている。

富盛の台詞「いや推参なこといふな」(No.412)が供の台詞となっている。

天願の若按司の台詞「あく口惜や残念」(No.418)が供の台詞となっている。

供の台詞「たちやうれく」(No.431)が「あよめく」となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「歌」となっている。

音曲「敵の手にかくて」(No.434)が「敵の手にとられ」となっている。

富盛の台詞「里々よめくて」(No.440)が「里々よまはて」となっている。

富盛の台詞「一 たうくいそかく、」(No.448)が「一 たうく急けく」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の大主の」(No.458)が「謝名の大主に」となっている。

久志の若按司の台詞「身にかへて千代松や」(No.473)が「身に替へて千代松」となっている。

役名「立川砂田」(No.482)が「立川」となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「是非のこかうとく千代松に」となっている。

音曲「心に念し礼拝し」(No.523)が「心念じて礼拝し」となっている。

音曲「石川走川打渡て多ひ」(No.527)が「石川はい走渡てやい」となっている。

役名「砂田」(No.530)が「立川」となっている。

砂田の台詞「一 され美里伊波村に」(No.531)が立川の台詞となっている。

砂田の台詞「つきやへたん、」(No.532)が立川の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「残らずに忍は、」(No.536)が「残らずに忍ひ」となっている。

砂田の台詞「思妹の前や、」(No.542)が「思ないの前と」となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富盛大主の」となっている。

久志の若按司の台詞「願たこと叶て」(No.551)が「思たこと叶て」となっている。

役名「按司」(No.560)が「立川」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあく、」(No.561)が立川の台詞「一 たうく」となっている。

久志の若按司の台詞「東恩納番所につきやん、」(No.562)が立川の台詞「東恩納番所に着へたん」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ、砂田の子、」(No.564)が「やあ砂田子」となっている。

久志の若按司の台詞「大事あらむしゆもの、」(No.566)が「大事やらんしゆもの」となっている。

久志の若按司の台詞「たしぬきやひ出す、」(No.568)が「たしのうちに出す」となっている。

砂田の台詞「一 やあ富成大主、」(No.584)が「一 やあ富盛大主」となっている。

富盛の台詞「一 按司かなし御支や」(No.588)が「一 はあ按司かなし御使や」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ富盛」(No.591)が「一 やあ」となっている。

音曲「一 かにある引合や」(No.605)が「一 あけかにある引合や」となっている。

天願の若按司の台詞「さかひさしゆんであれば」(No.616)が「さかさしゆんてやり」となっている。

天願の若按司の台詞「夢かやゆら」(No.626)が「よめかやへいら」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の手にかくて」(No.633)が「謝名の大主に」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ千代松」(No.636)が「やあ千代松よ」となっている。

久志の若按司の台詞「敵よ打とらに」(No.642)が「敵よ打ね」となっている。

立川の台詞「一 あはてなつかしやと」(No.648)が「一 はあはてなつかしや」となっている。

立川の台詞「美腰たちすらへ」(No.652)が「御腰立すれは」となっている。

久志の若按司の台詞「生て置ならぬ」(No.665)が「生て置すまん」となっている。

久志の若按司の台詞「殺ち捨れ」(No.667)が「切殺ち捨れ」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるされめ」(No.682)が「よるきよるされが」となっている。

久志の若按司の台詞「殺ちすてれ」(No.685)が「切殺き捨り」となっている。

富盛の台詞「頼て願ことや」(No.689)が「又む我が願や」となっている。

富盛の台詞「謝名か悪欲の」(No.691)が「謝名の大主の」となっている。

富盛の台詞「罪深さあることや」(No.692)が「悪欲の罪や」となっている。

富盛の台詞「捨てすてららぬ」(No.697)が「あたは捨らん」となっている。

富盛の台詞「あなままきれる命ち」(No.699)が「はあなま切る命ち」となっている。

久志の若按司の台詞「得と此事や」(No.712)が「此事や得と」となっている。

久志の若按司の台詞「身の上に引当て」(No.728)が「身の上に引請て」となっている。

久志の若按司の台詞「義理背ちいぢやし」(No.734)が「のよて悪巧て」となっている。

久志の若按司の台詞「此事やつくくと」(No.736)が「こゝろ沈やい」となっている。

立川の台詞「あゝめしやいること」(No.739)が「はあめしやいる事」となっている。

立川の台詞「肝の忍へれめ」(No.748)が「肝のしのはらん」となっている。

立川の台詞「つくくといやも」(No.750)が「いゃんつくくと」となっている。

立川の台詞「考てむてよ」(No.751)が「考てんて」となっている。

砂田の台詞「され按司かなし」(No.753)が「やあ按司かなし」となっている。

砂田の台詞「籠舎しめおきゆて先」(No.755)が「牢舎しめ置て一稜」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ砂田の子」(No.760)が「やあ砂田子」となっている。

久志の若按司の台詞「是非に此事や」(No.765)が「此事や是非共に」となっている。

富盛の台詞「をかてすてやへら」(No.782)が「拝てすてら」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か悪欲の」(No.785)が「謝名の大主の」となっている。

久志の若按司の台詞「御情けやふかく」(No.788)が「御情や深さ」となっている。

久志の若按司の台詞「生楽よ好む」(No.792)が「生楽よ好て」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か頭役」(No.798)が「謝名の頭役」となっている。

久志の若按司の台詞「酒と色好シ」(No.801)が「酒と色好て」となっている。

久志の若按司の台詞「百姓したけやひ」(No.802)が「百姓したかやい」となっている。

久志の若按司の台詞「内通のあもの」(No.813)が「約束のあもの」となっている。

富盛の台詞「なまのことやれは」(No.825)が「命の事やりは」となっている。

富盛の台詞「謝名か首とゆす」(No.826)が「敵よ打とよす」となっている。

富盛の台詞「ワ身や立戻て」(No.829)が「急ち立戻て」となっている。

富盛の台詞「殺ちすてら」(No.855)が「殺ち捨て」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ富盛大主」(No.882)が「一 やあ大主」となっている。

久志の若按司の台詞「今のことやれハ」(No.882)が「互に肝合ち」となっている。

富盛の台詞「油断しや濟ぬ」(No.893)が「油断しやすにやへらん」となっている。

砂田の台詞「一 され按司かなし」(No.903)が「一 やあ按司かなし」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる」(No.913)が「偽とやよる」となっている。

砂田の台詞「急ち追付て」(No.914)が「急ち追掛て」となっている。

立川の台詞「一 はあくしはしまて」(No.917)が「一 いやしはしまて」となっている。

久志の若按司の台詞「計ひのならぬ」(No.948)が「計いやならん」となっている。

久志の若按司の台詞「此事や一期」(No.949)が「此事よ一期」となっている。

久志の若按司の台詞「気にかゝてをてと」(No.950)が「気に掛けてをてとる」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の手にかけて」(No.951)が「謝名の手かやい」となっている。

砂田の台詞「一 はあ今の御計の」(No.956)が「一 あゝなまの御計の」となっている。

立川の台詞「一 やあ按司かなし／此事やいへも／油断しや濟ぬ／片時も急ち／城に立戻て／敵よ待うける／計しやへら」(No.961～967)が砂田の台詞となっている。

平田の台詞「一 御万人のまきり」(No.981)が「一 はあおまん人の間切」となっている。

平田の台詞「此やからむさと」(No.983)が「此族むきや」となっている。

平田の台詞「せまてきやへたん」(No.999)が「列てきやへたん」となっている。

川崎の台詞「山よりも高く」(No.1009)が「海よいん深く」となっている。

川崎の台詞「海よりも深く」(No.1010)が「山よりん高さ」とな

っている。

謝名の台詞「口に花さかそ」(No.1027)が「口に花さかち」となっている。

川崎の台詞「あまた御万人も」(No.1040)が「余多御万人の」となっている。

役名「平田」(No.1048)が「供兩人」となっている。

平田の台詞「一 やあ按司かなし／謀叛しゆるやから／殺ちすてめしやうち／ワすた供つれも／誇らしやとあやへひる」(No.1049～1053)が富盛と平田兩人の台詞となっている。

謝名の台詞「世界取沙汰に」(No.1059)が「世界の取沙汰に」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ千代松」(No.1084)が「一 やあ千代松よ」となっている。

久志の若按司の台詞「只今の丈や」(No.1086)が「只今の使や」となっている。

久志の若按司の台詞「金武の嶽なかい」(No.1090)が「金武嶽に登て」となっている。

天願の若按司の台詞「今のことあれハ」(No.1097)が「なまの事やれば」となっている。

立川の台詞「手の内とやへひる」(No.1115)が「手の内とやよ

る」となっている。

役名と台詞「立川／一 拝留やへて」(No.1120～1121)が惣人数の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の大主の」(No.1135)が「謝名か軍勢」となっている。

久志の若按司の台詞「東原にのそて」(No.1136)が「東原に廻て」となっている。

久志の若按司の台詞「殺ち捨られと」(No.1171)が「殺ち捨り」となっている。

久志の若按司の台詞「物見走登て」(No.1177)が「物見いに走登て」となっている。

天願の若按司の台詞「一 札」(No.1189)が「一 拝ん留やへて」となっている。

音曲「揚作田ふし」(No.1190)が「はやつくたんふし」となっている。

音曲「一 朝夕たしなたる」(No.1191)が「一 忍ひ隠れて」となっている。

音曲「長刀の刃さき」(No.1192)が「習とたる手並」となっている。

音曲「てきのくひすちに」(No.1193)が「敵の首すしに」となっ

ている。

音曲「たたなおきゆめ」(No.1194)が「打な置め」となっている。

久志の若按司の台詞「嬉しさとあゆる」(No.1198)が「誇らしやとあゆる」となっている。

久志の若按司の台詞「城に立戻て」(No.1199)が「急ち立戻て」となっている。

謝名の台詞「一 やあ」(No.1207)が「一 やあ」となっている。

富盛の台詞「一 御急よめしやうれ」(No.1211)が「一 をかんとめやへて」となっている。

役名と台詞「謝名」(No.)が「同人／＼ はあ金武のたけミれハ／＼うすけふりたちゆん／伏勢の様子／疑やないらぬ／たう／＼急か／＼」(No.1212～1217)が富盛の台詞となっている。

富盛の台詞「あれ／＼御目掛れ」(No.1226)が「ありよおめかけれ」となっている。

富盛の台詞「急ち走寄ひ」(No.1230)が「さあ／＼急ち走寄やい」となっている。

富盛の台詞「時の声よあけら」(No.1231)が「時の声あけら」となっている。

富盛の台詞「実ともてをたら」(No.1239)が「たにともて聞ら」

となっている。

富盛の台詞「快く急ち」(No.1240)が「さあ／＼急ち首そ／＼て」となっている。

富盛の台詞「首よ渡す」(No.1241)が「出て拌み」となっている。

謝名の台詞「一 やあ／＼急ち責いやい」(No.1254)が「一 たう／＼急ち責入い」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ謝名の大主」(No.1263)が「一 やあ」となっている。

久志の若按司の台詞「しらぬあため」(No.1265)が「知ちをため」となっている。

謝名の台詞「運の末なたら」(No.1268)が「運んの末成は。」となっている。

謝名の台詞「首よとれ」(No.1276)が「首よ渡さ」となっている。

久志の若按司の台詞「十度ときゆるち」(No.1279)が「ふ二人解よるち」となっている。

久志の若按司の台詞「十度生とられ」(No.1280)が「ふたい生捕す」となっている。

久志の若按司の台詞「巧てある褒美」(No.1283)が「たこてをる褒美」となっている。

役名と台詞「謝名／＼ いやものことのおほさ／快く急ち／首



よ渡す」(No.1292～1295)が富盛の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「はあ／＼はしまつ」(No.1302)が「いやしはしまて」となっている。

久志の若按司の台詞「旗門にあけれ」(No.1309)が「はたものにあけら」となっている。

役名と台詞「久志／＼ やあ浜崎のひや／やあ国吉の子／急ち引立て／籠舎しめれ」(No.1312～1316)が天願の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「やあ国吉の子」(No.1314)が(天願の若按司の台詞「やあ外間の子」となっている。

役名と台詞「兩人／＼ 拝留や／て」(No.1317～1318)が供の台詞となっている。

天願の若按司の台詞「やあ大主」(No.1335)が「やあ大主よ」となっている。

天願の若按司の台詞「討捕るけふや」(No.1341)が「生捕に取す」となっている。

久志の若按司の台詞「踊て居ら」(No.1351)が「踊て居ら」となっている。

音曲「しやうんかないふし」(No.1360)が「歌」となっている。  
音曲「天のしら雲」(No.1363)が「過し二所ん」となっている。

「今帰仁本」

謝名の台詞「あむちやる三日に」(No.37)が「はあむちやる三日に」となっている。

役名「三人」(No.49・76)が「富盛川崎平田三人言葉」となっている。

富盛の台詞「軍押て」(No.106)が「軍押寄て」となっている。  
富盛の台詞「時節計らやらひ」(No.113)が「時節はからやい」となっている。

謝名の台詞「やあ川崎のひや」(No.137)が「やあ川崎」となっている。

謝名の台詞「一門やたにも」(No.147)が「一門やたによ」となっている。

音曲「天願の若按司云は并道行きんふし」(No.200)が「天願の若按司言葉并歌金武ふし」となっている。

宿主の台詞「やあいきやる」とやとて」(No.231)が「\*」となっている。

宿主の台詞「一門やたにも」(No.251)が「一門やたによ」となっている。

音曲「冬の夜のよすか」(No.283)が「冬のよとよすか」となっ

ている。

役名「供二人」(No.338)が「供兩人言葉」となっている。

天願の若按司の台詞「こまに居ちをる」(No.355)が「こまに居ゆる」となっている。

役名「供」(No.364・389・414・426)が「供兩人言葉」となっている。

供の台詞「たちやうれ」(No.431)が「あゆめ」となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「歌七尺ふし」となっている。

役名「供」(No.445)が「供兩人言葉」となっている。

役名「同」(No.451)が「供言葉」となっている。

立川の台詞「や按司かなし」(No.484)が「やあ按司かなし」となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「慈悲の功德や千代松に」となっている。

役名と台詞「兩人／＼一 拝留やへつ」(No.537～538)が砂田の台詞となっている。

ト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」(No.539)が「附此時三味線手每二而三人手配を以忍の手有ル」となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富盛大主の」となっている。

役名「兩人」(No.557)が「立川の大主砂田の子言葉」となっている。

役名と台詞「砂田／＼一 拝留やへつ」(No.573～574)が平田の台詞となっている。

砂田の台詞「やあ富成大主」(No.584)が「やあ富盛大主」となっている。

砂田の台詞「按司かなし御支に」(No.585)が「按司加那志御使に」となっている。

富盛の台詞「一 按司かなし御支や」(No.588)が「一 按司かなし御使や」となっている。

天願の若按司の台詞「夢かやゆら」(No.626)が「夢かやへいら」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ千代松」(No.636)が「やあ千代松よ」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるされめ」(No.682)が「ゆるちゆるされが」となっている。

久志の若按司の台詞「謀叛企ちゆか」(No.735)が「謀叛企ちゆる」となっている。

立川の台詞「あゝめしやいること」(No.739)が「一 あら

めしやいること」となっている。

立川の台詞「命ちより重さある」(No.740)が「命よか重さある」となっている。

久志の若按司の台詞「是非に此事や、」(No.765)が「是非よ此事や」となっている。

役名「富盛」(No.822)が「同人言葉」となっている。

富盛の台詞「かたひともすれハ」(No.835)が「語りともすれハ」となっている。

富盛の台詞「謝名か旗印、」(No.844)が「謝名の旗印」となっている。

立川の台詞「計らやい給ふれ、」(No.867)が「働ひ給り」となっている。

富盛の台詞「油断しや濟ぬ、」(No.893)が「油断しや濟へらぬ」となっている。

久志の若按司の台詞「肝も肝添て」(No.898)が「肝もきも濟て」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる、」(No.913)が「偽とやゆる」となっている。

立川の台詞「一 はあくしはしまて、」(No.917)が「一 はあしはしまて」となっている。

久志の若按司の台詞「計ひのならぬ、」(No.948)が「はからひやならぬ」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の手にかけて」(No.951)が「謝名の手にかゝて」となっている。

謝名の台詞「世界取沙汰に」(No.1059)が「世界の取沙汰に」となっている。

謝名の台詞「はあ思たすと替て」(No.1061)が「はあ思たこと替て」となっている。

謝名の台詞「よかる日よやれハ」(No.1066)が「よかる日よや」となっている。

役名「富盛」(No.1073)が「同人言葉」となっている。

役名「同人」(No.1101)が「同人言葉此時文立川の大主江渡ル」となっている。

久志の若按司の台詞「東原にのそて」(No.1136)が「東原のそて」となっている。

天願の若按司の台詞「一 一礼」(No.1204)が「一 おふう」となっている。

富盛の台詞「一 御急よめしやうれ」(No.1211)が「一 拝留やへて」となっている。

富盛の台詞「急ち走寄ひ／時の声よあけら」(No.1230～1231)が

謝名の台詞となっている。

役名「同人」(No.1234)が「富盛大主」となっている。

謝名の台詞「一 やあ〜急ち責いやい」(No.1254)が「一 やあ〜急ち責いやひ」となっている。

久志の若按司の台詞「ありかたさ思て」(No.1285)が「ありかたさ挿て」となっている。

謝名の台詞「一 いやものことのおほき」(No.1293)が「一 いやものことぬいらぬ」となっている。

久志の若按司の台詞「旗門にあけれ」(No.1309)が「かう門にあけれ」となっている。

役名「兩人」(No.1317)が「浜崎のひや国吉の子兩人」となっている。

役名と台詞「立川／一 やあ〜／おれ〜の番手／油断するな」(No.1319〜1322)が久志の若按司の台詞となっている。

役名「同人」(No.1325)が「浜崎のひや」となっている。

役名「同人」(No.1327)が「国吉の子」となっている。

「教育大本」

謝名の台詞「色欲よ進め」(No.29)が「色欲ニ進ヤイ」となっている。

謝名の台詞「気の毒とやたる」(No.36)が「気ノ毒ドヤユル」となっている。

謝名の台詞「あゝむちやる三日に」(No.37)が「ハア。去ル三日ニ」となっている。

謝名の台詞「伏勢よ置て」(No.40)が「伏勢ユシキユテ」となっている。

謝名の台詞「うちすまちあすか」(No.42)が「打果チアスガ」となっている。

謝名の台詞「跡形もなひらぬ」(No.44)が「跡方ノナイラン」となっている。

謝名の台詞「気障とやゆる」(No.46)が「気障トヤタル」となっている。

供の台詞「一 ふう」(No.50)が「一 ホフウヲ」となっている。

謝名の台詞「あとかたもなひらぬ」(No.57)が「跡方ノナイラン」となっている。

謝名の台詞「急ち若按司」(No.70)が「先久志ノ若按司」となっている。

平田の台詞「一 はあめしやいること」(No.79)が「アゝ召ル事」となっている。

平田の台詞「あのふたり世界に」(No.80)が「アノ二人ヤ世界ニ」

となっている。

富盛の台詞「人並やあらぬ」(No.91)が「人並やアヤヒラン。」となっている。

富盛の台詞「御万人の心」(No.101)が「御万人心」となっている。

富盛の台詞「軍押て」(No.106)が「軍押寄テ」となっている。

富盛の台詞「益や又なひさめ」(No.110)が「益ヤ又アラン。」となっている。

川崎の台詞「かへち渡さてやり」(No.128)が「引ヨ渡サテヤイ」となっている。

謝名の台詞「やあ川崎のひや」(No.137)が「ヤア川崎」となっている。

音曲「天願の若按司思なひ出羽散山ふし」(No.161)が「若按司出羽散山フシ」となっている。

音曲「あさゆちのなみた」(No.164)が「朝夕気ノ泪」となっている。

役名「若按司」(No.166・211・223・235・257・270・293)が「千代松」となっている。

天願の若按司の台詞「按司添が事や」(No.170)が「按司ソへ前事ヤ」となっている。

天願の若按司の台詞「忍ひ隠れやひ」(No.191)が「忍ビ隠トテ。」となっている。

音曲「天願の若按司云は井道行きんふし」(No.200)が「千代松言葉並歌金武ブシ」となっている。

役名「乙鶴」(No.205・289・299・322)が「思妹」となっている。

天願の若按司の台詞「行先も見らぬ」(No.227)が「行先見ラン」となっている。

宿主の台詞「一 はあ見れば此ふたり」(No.243)が「一 イヤ見リハ此二人」となっている。

宿主の台詞「一 門やたにも」(No.251)が「一 門ヤダニヨ」となっている。

宿主の台詞「一 いや思子宿からち」(No.266)が「一 イヤ思子宿カラキウチュテ」となっている。

宿主の台詞「たうく急ち」(No.268)が「クマカラヤ急チ」となっている。

音曲「子持ふし」(No.278)が「千代松子持フシ」となっている。

音曲「冬の夜のよすか」(No.283)が「冬ノ夜トヤスガ」となっている。

乙鶴の台詞「雪霜もふゆひ」(No.302)が「雪霜ヤ降へ。」とな

っている。

天願の若按司の台詞「村便てやり」(No.309)が「村使カテヤリ」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしのおめなひや」(No.320)が「アテナシノ思妹」となっている。

乙鶴の台詞「やあ舎兄前よ」(No.323)が「ヤア舎兄前ヨ」となっている。

役名「供二人」(No.338)が「供」となっている。

富盛の台詞「やあ、いきやることやとて」(No.342)が「ヤアイキル事ヤトテ」となっている。

天願の若按司の台詞「こまに居ちをる」(No.355)が「クマニヲユル」となっている。

富盛の台詞「疑やないらぬ」(No.361)が「疑ヤアラン」となっている。

天願の若按司の台詞「敵かたきやれハ」(No.371)が「敵方ヨヤリバ」となっている。

天願の若按司の台詞「みすく見分やひ」(No.380)が「メスク御見カケテ」となっている。

富盛の台詞「いや、まかひもあらぬ」(No.383)が「イヤ。人違ンアラン」となっている。

富盛の台詞「見すまちとをゆる」(No.384)が「見スマキドヲタル」となっている。

富盛の台詞「道中とやたる」(No.386)が「道中トヤヨル」となっている。

供の台詞「いきやか」(No.391)が「拝留ヤヒテ」となっている。

役名「按司」(No.392)が「若按司」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしのこれや」(No.409)が「アテナシノアリヤ」となっている。

富盛の台詞「いや推参なこといふな」(No.412)が「イヤ。推参ナ事云ナ」となっている。

富盛の台詞「生きかしむさの」(No.422)が「イヤ。生サカシンサノ」となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「七尺フシ」となっている。

役名「供」(No.435)が「供ノチャ」となっている。

久志の若按司の台詞「野山から下り」(No.466)が「野山カラ下テ」となっている。

久志の若按司の台詞「身にかへて千代松や」(No.473)が「身ニ替テ千代松」となっている。

役名「立川砂田」(No.481)が「立川大主」となっている。

立川の台詞「一や按司かなし」(No.484)が「一ヤア按司加那志」となっている。

役名「久志の若按司」(No.501)が「全人」となっている。

立川の台詞「一たうく」(No.511)が「一御急チヨメシヤウリ」となっている。

音曲「一命ち限りの出立」(No.514)が「一命限ノ出テ立ヤ」となっている。

音曲「御宮立寄伏し拝」(No.519)が「御宮立寄伏拝テ」となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「慈悲ノ心ヤ千代松ニ」となっている。

役名と台詞「兩人ノ一拝留やへて」(No.537～538)が砂田の台詞となっている。

砂田の台詞「一され、天願の若按司と」(No.541)が「一サリ按司加那志。天願ノ若按司ト」となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富盛大主ノ」となっている。

役名と台詞「兩人ノ一御供しやくら」(No.557～559)が立川の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「一やあく」(No.561)が「一ヤア」

となっている。

富盛の台詞「一はあのうち事かやゆら」(No.595)が「一ア、ノヲ事カヤユラ」となっている。

天願の若按司の台詞「野山から下り」(No.615)が「野山カラ下テ」となっている。

天願の若按司の台詞「さかひさしゆんであれは」(No.616)が「サカエサシヨンテヤリ」となっている。

天願の若按司の台詞「頼む方をらぬ」(No.617)が「頼モ方ナイラン」となっている。

天願の若按司の台詞「夢かやゆら」(No.626)が「夢ガヤ、ビイラ」となっている。

久志の若按司の台詞「御運つきはてゝ」(No.631)が「御運ツイハテゝ」となっている。

久志の若按司の台詞「敵よ打とら」(No.642)が「敵ヨウタニ」となっている。

立川の台詞「やあ若按司の前」(No.650)が「ヤア若按司ノ前ヨ」となっている。

富盛の台詞「願ことのも」(No.670)が「願事アモノ」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるやれめ」(No.682)が「免チヨ

ルサレカ」となっている。

久志の若按司の台詞「たうく急ち」(No.684)が「急ち」となっている。

富盛の台詞「兼てからワ身も」(No.693)が「兼テカラ我身ノ」となっている。

久志の若按司の台詞「了簡よされ」(No.737)が「了簡ヨシヤウリ」となっている。

砂田の台詞「決断やなやへらぬ」(No.756)が「決断ヤナラン」となっている。

久志の若按司の台詞「是非に此事や」(No.765)が「是非共ニ此事ヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「我身にうちまかち呉れ」(No.766)が「我メニ打マカチクイリヨ」となっている。

富盛の台詞「あゝたうと」(No.774)が「ア、ウタウト」となっている。

久志の若按司の台詞「生樂よ好む」(No.792)が「生樂ヨ好テ」となっている。

久志の若按司の台詞「天の御助けか」(No.796)が「天ノ御助ニ」となっている。

久志の若按司の台詞「神の引合しか」(No.797)が「神ノ引合ニ」

となっている。

久志の若按司の台詞「酒と色好ミ」(No.801)が「酒ト色好テ」となっている。

久志の若按司の台詞「おこりにまさて」(No.803)が「驕日マサテ」となっている。

役名「富盛」(No.822)が「全人」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる」(No.913)が「偽トヤオル」となっている。

砂田の台詞「急ち追付て」(No.914)が「急チ追カ、テ」となっている。

久志の若按司の台詞「あらわれてをてと」(No.937)が「見ワリテヲトテ」となっている。

久志の若按司の台詞「計ひのならぬ」(No.948)が「計ヤナラン」となっている。

久志の若按司の台詞「此事や一期」(No.949)が「此事ヨ一期」となっている。

砂田の台詞「はあ今の御計の」(No.956)が「ア、今ノ御計ノ」となっている。

役名「同人」(No.980)が「平田ノ子」となっている。

平田の台詞「急けく」(No.993)が「急ガく」となっている。



謝名の台詞「口に花さかそ」(No.1027)が「ロヤ花咲チ」となっている。

謝名の台詞「世界取沙汰に」(No.1059)が「世界ノ取沙汰ニ」となっている。

謝名の台詞「はあ思たすと替て」(No.1061)が「ア、思タ事叶テ」となっている。

謝名の台詞「一鼓にうちとゆす」(No.1063)が「一刀ニ打取ス」となっている。

謝名の台詞「よかる日よやれ」(No.1066)が「ヨカル日ヨヤクト」となっている。

役名「富盛」(No.1073)が「全人」となっている。

富盛の台詞「もたちやらしやへら」(No.1080)が「モタチキヤヒラ」となっている。

天願の若按司の台詞「よたしやあるやうに」(No.1099)が「ヨタシ有様ニ」となっている。

久志の若按司の台詞「一やあ大主」(No.1117)が「一ヤアノ大主」となっている。

久志の若按司の台詞「本門の東」(No.1132)が「本門ノ」となっている。

久志の若按司の台詞「伏よ隠れとて」(No.1134)が「隠リドテ」

となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の大主の」(No.1135)が「謝名カ」となっている。

久志の若按司の台詞「東原にのそて」(No.1136)が「東リ原ノゾデ」となっている。

久志の若按司の台詞「一やあ浜崎のひや」(No.1143)が「一ヤア浜崎ノヒヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「殺ち捨られ」(No.1171)が「殺チ捨リ」となっている。

久志の若按司の台詞「つわものゝまきり」(No.1246)が「張モノマジリ」となっている。

久志の若按司の台詞「金武嵩にやらち」(No.1247)が「金武ノ嵩ヤラチ」となっている。

謝名の台詞「切殺ちすてら」(No.1255)が「殺チ捨ラ」となっている。

惣人数の台詞「一ひやあひや」(No.1257)が「一ヒヤエヤエ」となっている。

久志の若按司の台詞「しらぬあため」(No.1265)が「知チヲタメ」となっている。

謝名の台詞「おかたちか手にかゝて」(No.1271)が「ウガガ手ニ」

カ、テ」となっている。

謝名の台詞「たう／＼快く急ち」(No.1275)が「タウ／＼急ち快ク」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ富盛」(No.1278)が「一 ヤア富盛大主」となっている。

久志の若按司の台詞「十度ときゆるち」(No.1279)が「一度トキヨルキ」となっている。

久志の若按司の台詞「二度生とられ」(No.1280)が「二度生捕ドラリ」となっている。

謝名の台詞「一 いやものことのおほき」(No.1293)が「一 イヤモノグトシイラン」となっている。

久志の若按司の台詞「一 はあ／＼しはしまて」(No.1302)が「一 ア、シバシマテ」となっている。

久志の若按司の台詞「旗門にあけれ」(No.1309)が「嶽門ニアケリ」となっている。

久志の若按司の台詞「籠舎しめれ」(No.1316)が「籠舎シメサセウリ」となっている。

久志の若按司の台詞「かたき討捕る」(No.1348)が「敵ユ打捕ル」となっている。

音曲「しやうんかないふし」(No.1360～1364)が「歌立雲フシ」

となっている。

音曲「一 かたきうちとたる」(No.1361)が「一 敵ヨ打捕タル」となっている。

「恩河本」

謝名の台詞「積るとしまても」(No.21)が「積ルトン迄ン」となっている。

謝名の台詞「煙りたかよいか、」(No.24)が「煙タ、ヨイカ」となっている。

謝名の台詞「色欲よ進め」(No.29)が「色欲ニス、ミ」となっている。

謝名の台詞「あゝむちやる三日に」(No.37)が「ハアンキヤル三日ニ」となっている。

富盛の台詞「おてつかぬ内に、」(No.102)が「ヲテツカシ内ニ」となっている。

富盛の台詞「軍押て、」(No.106)が「軍押寄テ」となっている。

川崎の台詞「先やみにめしやうち、」(No.120)が「先ヤミニ召リ」となっている。

謝名の台詞「やあ川崎のひや、」(No.137)が「ヤア川崎」となっている。

謝名の台詞「生責よしゆんで」(No.149)が「生責ヨシユンテヤリ」となっている。

役名「富盛」(No.153)が「富盛大主」となっている。

音曲「天願の若按司思なひ出羽散山ふし」(No.161)が「天願之若按司思ケイ出羽サン山ブシ」となっている。

役名「若按司」(No.166・211・223・413)が「天願若按司」となっている。

乙鶴の台詞「足もひかれらぬ」(No.208)が「アシンヒカレテン」となっている。

役名「同人」(No.218)が「天願若按司」となっている。

宿主の台詞「一門やたにも」(No.251)が「一門ヤダニヨ」となっている。

宿主の台詞「切殺ちすてられんてやり」(No.253)が「切殺チステリテヤリ」となっている。

乙鶴の台詞「御気張よめしやうれ」(No.305)が「イヒ気張召リ」となっている。

役名「供二人」(No.338)が「供兩人」となっている。

富盛の台詞「いや、まかひもあらぬ」(No.383)が「いや、人違ンアラン」となっている。

役名「按司」(No.392)が「若按司」となっている。

天願の若按司の台詞「実よあらわれて」(No.395)が「実ニアラワリテ」となっている。

天願の若按司の台詞「なわよかゝゆすや」(No.404)が「縄ヨヤケヨスヤ」となっている。

供の台詞「たちやうれ」(No.431)が「歩ミ」&dashrightarrow;となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「七尺フシ」となっている。

役名「同」(No.451)が「供」となっている。

立川の台詞「いや、按司かなし」(No.484)が「いや、ア按司加那志」となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.527)が「慈悲之巧徳ヤ千代松ニ」となっている。

役名「兩人」(No.537)が「沙田子」となっている。

役名「砂田」(No.540)が「同人」となっている。

砂田の台詞「思妹の前や」(No.542)が「思姉ノ前ト」となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富盛大主ノ」となっている。

役名「兩人」(No.557)が「立川砂田」となっている。

久志の若按司の台詞「いや、あ立川の大主や」(No.576)が「いや、ア立川大主ヤ」となっている。

砂田の台詞「按司かなし御支に」(No.585)が「按司加那志御使ニ」となっている。

富盛の台詞「一 按司かなし御支や」(No.588)が「一 按司加那志御使や」となっている。

役名「砂田」と台詞(No.596～598)が久志の若按司の台詞となっている。

天願の若按司の台詞「野山から下り」(No.615)が「野山カラクダテ」となっている。

天願の若按司の台詞「さかひさしゆんであれば」(No.616)が「サガイサシユンテヤリ」となっている。

天願の若按司の台詞「夢かやゆら」(No.626)が「夢ガヤノビエラ」となっている。

立川の台詞「一 あゝ拝てなつかしや」(No.648)が「一 アゝ 拝テナツカシヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるされめ」(No.682)が「免チ免サレガ」となっている。

久志の若按司の台詞「是非に此事や」(No.765)が「是非ユ此事ヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ富盛大主」(No.795)が「ヤア富盛」となっている。

久志の若按司の台詞「神の引合しか」(No.797)が「神ノ引合ニ」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か頭役」(No.798)が「謝名ノ頭役」となっている。

役名「富盛」(No.822)が「全人」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる」(No.913)が「偽トヤユル」となっている。

砂田の台詞「急ち追付て」(No.914)が「急チ追カヘチ」となっている。

立川の台詞「一 はあゝしはしまて」(No.917)が「一 ハアシハシマテ」となっている。

久志の若按司の台詞「計ひのならぬ」(No.948)が「ハカラエヤナラン」となっている。

久志の若按司の台詞「此事や一期」(No.949)が「此事ヨ一期」となっている。

立川の台詞「敵よ待うける」(No.966)が「敵ユ打トヨル」となっている。

平田の台詞「せまてきやへたん」(No.999)が「シバテキヤアヒタン」となっている。

謝名の台詞「口に花さかそ」(No.1027)が「ロヤ花咲チ」となっ

ている。

川崎の台詞「頓てやミ〜と」(No.1041)が「頓テヤミ〜ニ」となっている。

謝名の台詞「よかる日よやれハ」(No.1066)が「ヨカル日ユヤクト」となっている。

謝名の台詞「軍押寄テ」(No.1088)が「軍打寄テ」となっている。

役名「富盛」(No.1073)が「全人」となっている。

久志の若按司の台詞「伏勢よしちをテ」(No.1091)が「伏勢シチヲテ」となっている。

天願の若按司の所作「一礼」(No.1204)が「一ウヲ」となっている。

富盛の台詞「時の声よあけら」(No.1231)が「時ノ声ヨアゲリ」となっている。

謝名の台詞「一いやものことのおほき」(No.1293)が「一イヤモノゴトシイラン」となっている。

久志の若按司の台詞「一はあ〜しはしまつ」(No.1302)が「一ア、シハシマテ」となっている。

久志の若按司の台詞「旗門にあけれ」(No.1309)が「獄門ニアゲラ」となっている。

浜崎国吉の台詞「一拝留やへて」(No.1311)が「一ウヲ」と

なっている。

役名「浜崎国吉」(No.1323)が「兩人」となっている。  
役名「同人」(No.1325)が「浜崎国吉」となっている。

久志の若按司の台詞「けふの誇らしや」(No.1349)が「今日ノ誇ラシヤヤ」となっている。

「兼島本」

謝名の台詞「あゝむちやる三日に」(No.327)が「去ル三日ニ」となっている。

謝名の台詞「伏勢よ置いて」(No.5)が「伏勢ヨシキヨテ。」となっている。

平田の台詞「一はあめしやいること」(No.9)が「一ア、召ル事。」となっている。

富盛の台詞「立川の大主と」(No.93)が「立川ノ大主」となっている。

富盛の台詞「軍押寄テ」(No.106)が「軍押寄テ」となっている。  
富盛の台詞「益や又なひさめ」(No.110)が「益ヤ又無ラン」となっている。

富盛の台詞「堅打守て」(No.112)が「深く打守て」となっている。

富盛の台詞「時節計らやらひ」(No.113)が「時節計ヤイ」となっている。

謝名の台詞「やあ川崎のひや」(No.137)が「ヤア川崎。」となっている。

謝名の台詞「からめ出ちくう」(No.152)が「捕メ出チ来ウリ。」となっている。

音曲「天願の若按司思なひ出羽散山ふし」(No.161)が「若按司出羽散山節」となっている。

天願の若按司の台詞「消よはてめしやうち」(No.175)が「消果ヨ召チ」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしの思なひ」(No.178)が「当て無しノ思妹ヤ」となっている。

天願の若按司の台詞「うたな徒に」(No.186)が「打取ナ徒ラニ」となっている。

音曲「天願の若按司云は并道行きんふし」(No.200)が「千代松言葉並金武節」となっている。

宿主の台詞「一やあいきやることやとて」(No.231)が「一ヤアイキヤル事有トテ」となっている。

宿主の台詞「あゝむちやる目のいちやき」(No.247)が「ハア見ル目痛サ」となっている。

音曲「子持ふし」(No.278)が「長子持節」となっている。

音曲「冬の夜のよすか」(No.283)が「冬ノ夜トヤスガ」となっている。

乙鶴の台詞「あしまめきめしやうる」(No.292)が「足マミジ召ガ。」となっている。

乙鶴の台詞「雪霜もふゆひ」(No.302)が「雪霜ヤ降ヨイ」となっている。

乙鶴の台詞「一やあ舎兄前よく」(No.323)が「一ヤア舎兄前ヨ」となっている。

富盛の台詞「島々に行ん」(No.335)が「島々行ン」となっている。

役名「供二人」(No.338)が「供」となっている。

富盛の台詞「一やあ、いきやることやとて」(No.342)が「一ヤアく。如何ル事ヤトテ」となっている。

富盛の台詞「声立て鳴か」(No.345)が「泣ガ。」となっている。

天願の若按司の台詞「行先も見らぬ」(No.353)が「行先ヤ見ラシ」となっている。

天願の若按司の台詞「こまに居ちをる」(No.355)が「此処ニ居ヨル」となっている。

富盛の台詞「見れば此ふたり」(No.356)が「見レバ此ノ二人ヤ」

となっている。

天願の若按司の台詞「敵かたきやれハ」(No.371)が「敵仇ヤラバ」となっている。

富盛の台詞「一 いや、まかひもあらぬ」(No.383)が「一 イヤ人違ンアラン」となっている。

富盛の台詞「道中とやたる」(No.386)が「道中ドヤヨル」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしのこれや」(No.409)が「当テ無しの彼レヤ」となっている。

富盛の台詞「一 生きかしむきの」(No.422)が「一 イヤ生きサカシンザノ」となっている。

供の台詞「たちやうれ」(No.431)が「歩ミ」となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432～436)が「七尺節」となっている。

久志の若按司の台詞「野山から下リ」(No.466)が「野山カラ降テ」となっている。

久志の若按司の台詞「身にかへて千代松や」(No.473)が「身ニ替テ千代松」となっている。

役名「立川砂田」と台詞(No.481～482)が「立川ノ大主」の台詞となっている。

立川の台詞「一 や按司かなし」(No.484)が「一 ヤア按司加那志」となっている。

立川の台詞「たつねやひきやあ」(No.490)が「御尋ヨシヤビラ」となっている。

久志の若按司の台詞「忍ふ編笠に」(No.496)が「潜ノビ編笠ニ」となっている。

音曲「一 命ち限りの出立」(No.514)が「一 命限りノ出立ヤ」となっている。

音曲「深く面を隠してそ」(No.516)が「深く面ヲ隠シテド」となっている。

音曲「御宮立寄伏し拝ミ」(No.519)が「御宮ヤ立寄テ伏シ拝デ」となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「慈悲ノ功德ヤ千代松ニ」となっている。

音曲「心に念し礼拝し」(No.523)が「心ニ念ジテ礼拝シ」となっている。

役名「兩人」と台詞(No.537～538)が「砂田ノ子」の台詞となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富盛大主ノ」となっている。

役名「兩人」と台詞(No.557～559)が「砂田ノ子」の台詞とな

っている。

久志の若按司の台詞「列ていまふれ」(No.580)が「列テ来ウリ」  
となっている。

砂田の台詞「一 やあ富成大主」(No.584)が「一 ヤア富盛大  
主」となっている。

砂田の台詞「按司かなし御支に」(No.585)が「按司加那志御使  
ニ」となっている。

富盛の台詞「一 按司かなし御支や」(No.588)が「一 按司加  
那志御使ヤ」となっている。

音曲「夢かやゆら」(No.606)が「一 アヶ夢ガヤヨラ」とな  
っている。

天願の若按司の台詞「野山から下り」(No.615)が「野山カラ下  
テ」となっている。

天願の若按司の台詞「頼む方をらぬ」(No.617)が「頼ム方無ラ  
ン」となっている。

天願の若按司の台詞「あのやからむきに」(No.622)が「彼ノ族  
ランザノ」となっている。

天願の若按司の台詞「夢かやゆら」(No.626)が「夢ガヤノビノ  
ラ」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ千代松」(No.636)が「ヤア千代松ヨ」

となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ千代松」(No.663)が「一 ヤア  
千代松ヨ」となっている。

久志の若按司の台詞「肝合ちをたる」(No.680)が「肝合キ居ヨ  
ル」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるされめ」(No.682)が「免チ免  
サレガ」となっている。

久志の若按司の台詞「義理背ちいちゃし」(No.734)が「何ヨデ  
義理背キ」となっている。

立川の台詞「つくくといやも」(No.750)が「熟々ト」となっ  
ている。

砂田の台詞「一 され按司かなし」(No.753)が「一 ヤア按司  
加那志」となっている。

砂田の台詞「考てミヤへら」(No.758)が「一段考テ見ヤビラ」  
となっている。

久志の若按司の台詞「是非に此事や」(No.765)が「是非ヨ此ノ  
事ヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「我身にうちまかち呉れ」(No.766)が「我  
身ニ打任キ呉レヨ」となっている。

富盛の台詞「いのちたすかたる」(No.775)が「命助ケタル」と



なっている。

久志の若按司の台詞「生薬よ好む」(No.792)が「生薬ヨ好デ」となっている。

久志の若按司の台詞「凌きしのかれか」(No.794)が「凌ガレガ」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ富盛大主」(No.795)が「ヤア富盛」となっている。

久志の若按司の台詞「神の引合しか」(No.797)が「神ノ引合ニ」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か頭役」(No.798)が「謝名ノ頭役」となっている。

久志の若按司の台詞「敵討る計」(No.818)が「敵打ル事ニ」となっている。

富盛の台詞「せめかける筈」(No.838)が「責掛ル積リ」となっている。

砂田の台詞「一 され按司かなし」(No.903)が「一 ヤア按司加那志」となっている。

砂田の台詞「謝名の恩情や」(No.905)が「謝名ガ仕情ヤ」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる」(No.913)が「偽トヤヨル」となっている。

いる。

砂田の台詞「急ち追付て」(No.914)が「急ギ追掛ケテ」となっている。

立川の台詞「一 はあくしはしまて」(No.917)が「一 ア、暫シ待デ」となっている。

久志の若按司の台詞「あれ生ておきや」(No.946)が「生キ置カラヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「計ひのならぬ」(No.948)が「計ヒヤ成ラシ」となっている。

久志の若按司の台詞「此事や一期」(No.949)が「此事一期」となっている。

立川の台詞「油断しや済ぬ」(No.963)が「油断スヤ済ビラン」となっている。

立川の台詞「計しやへら」(No.967)が「計ヨシヤビラ」となっている。

平田の台詞「殺さしよめしやいん」(No.987)が「殺シヨスヤ召シ」となっている。

役名「川崎」(No.1006)が「川崎ノ比屋」となっている。

川崎の台詞「山よりも高く」(No.1009)が「海ヨリン深ク」となっている。

川崎の台詞「海よりも深く」(No.1010)が「山ヨリン高サ」となっている。

謝名の台詞「世界取沙汰に」(No.1059)が「世界ノ取沙汰ニ」となっている。

謝名の台詞「はあ思たすと替て」(No.1061)が「ハア思タ事叶テ」となっている。

謝名の台詞「一鼓にうちとゆす」(No.1063)が「一刃ニ打取ヨス」となっている。

謝名の台詞「よかる日よやれハ」(No.1066)が「吉ル日ヨヤクト」となっている。

富盛の台詞「内通の書状」(No.1077)が「内通ノ書状ヨ」となっている。

富盛の台詞「かきよ調やい」(No.1078)が「調ヤヒ」となっている。

久志の若按司の台詞「只今の丈や」(No.1086)が「只今ノ使ヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「軍寄ゆもの」(No.1088)が「軍押シ寄モノ。」となっている。

天願の若按司の台詞「今のことあれハ」(No.1097)が「今ノ事ヤレバ」となっている。

立川の台詞「疑やなひらぬ」(No.1111)が「疑ヤ無ヤビラン」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ砂田の子や」(No.1131)が「ヤア砂田ノ子」となっている。

久志の若按司の台詞「伏よ隠れとて」(No.1134)が「伏セ隠レトテ」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の大主の」(No.1135)が「謝名ノ大主ガ」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か西宿に」(No.1146)が「謝名ガ宿ニ」となっている。

久志の若按司の台詞「本門の内に」(No.1166)が「本門ノ内」となっている。

久志の若按司の台詞「殺ち捨られハ」(No.1171)が「殺チ捨リ」となっている。

音曲「揚作田ふし」(No.1190)が「歌」となっている。

音曲「一 朝夕たしなたる」(No.1191)が「一 朝夕習取タル」となっている。

富盛の台詞「御急よめしやうれ」(No.1211)が「一 拝留ヤビテ」となっている。

謝名の台詞「はあ金武のたけミれハ」(No.1213)が「一 ハ

ア金武嶽ヨ見レバ」となっている。

謝名の台詞「うすけふりたちゆん」(No.1214)が「ウス煙リ立ヒ」となっている。

富盛の台詞「本門も開ちをやへいん」(No.1227)が「本門ノン開キアヤビン」となっている。

富盛の台詞「快く急ち」(No.1240)が「サア〜急ギ」となっている。

謝名の台詞「一やあ〜急ち責いやい」(No.1254)が「一タウ〜急ギ責入イ」となっている。

役名「惣人数」と台詞 (No.1256〜1257) が「富盛大主」の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「此按司のはかりこと」(No.1264)が「一ヤア〜此按司ノ計事」となっている。

久志の若按司の台詞「しらぬあため」(No.1265)が「知チ居タメ」となっている。

謝名の台詞「運の末なたら」(No.1268)が「運ノ末ナレバ」となっている。

謝名の台詞「首よとれ」(No.1276)が「首ヨ渡サ」となっている。

久志の若按司の台詞「巧てある褒美」(No.1283)が「巧テ居ル褒美」となっている。

富盛の台詞「一あ〜武運つき果て」(No.1288)が「一ハア武運尽キ果テ」となっている。

富盛の台詞「生捕にとられ」(No.1289)が「出シ抜ニノガレ」となっている。

富盛の台詞「武士の身の名折」(No.1290)が「武士ノ名折」となっている。

天願の若按司の台詞「一此やからむさや」(No.1297)が「一ヤア〜彼ノ族ランザヤ」となっている。

久志の若按司の台詞「一はあ〜しはしまて」(No.1302)が「一ヤア千代松。暫シ待テ」となっている。

久志の若按司の台詞「罪あさ〜あもの」(No.1307)が「アキジヤラン有モノ」となっている。

久志の若按司の台詞「旗門にあけれ」(No.1309)が「獄門ニアゲラ」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ国吉の子」(No.1314)が「外間ノ子」となっている。

役名「浜崎国吉」と台詞 (No.1323) が「兩人」(崎山外間の台詞) となっている。

役名「同人」と台詞 (No.1325) が「外間ノ子」の台詞となっている。

浜崎国吉の台詞「一 さあ〜いそけ〜」(No.1328)が「一 サア〜歩メ〜」となっている。

天願の若按司の台詞「やあ大主」(No.1335)が「ヤア大主ヨ」となっている。

天願の若按司の台詞「討捕るけふや」(No.1341)が「生捕ニ取たす」となっている。

久志の若按司の台詞「踊て戻ら」(No.1351)が「踊テ遊バ」となっている。

音曲「しやうんかないふし」(No.1360〜1364)が「立雲節」となっている。

「京大本」

宿主の台詞「まかひいきゆか」(No.234)が「まかり行か」となっている。

宿主の台詞「一 はあ見れは此ふたり」(No.243)が「一 あゝ見れは此二人や」となっている。

宿主の台詞「一 門やたにも」(No.251)が「一 門やたによ」となっている。

宿主の台詞「切殺ちすてられんてやり」(No.253)が「殺き捨らしよんてやり」となっている。

天願の若按司の台詞「思なひもなけハ」(No.255)が「思なん鳴は」となっている。

宿主の台詞「たう〜急ち」(No.268)が「さあ〜急ち」となっている。

音曲「おめなひとワ身や」(No.280)が「思ないと二人や」となっている。

天願の若按司の台詞「一 やあ思なひよ」(No.294)が「一 やあ思なよ」となっている。

天願の若按司の台詞「此間のつかれ」(No.295)が「長通の疲れ」となっている。

乙鶴の台詞「雪霜もふゆひ」(No.302)が「雪霜も降は」となっている。

乙鶴の台詞「御気張よめしやうれ」(No.305)が「御気張りめしやうれ」となっている。

乙鶴の台詞「村に出やへら」(No.306)が「村に懸やへら」となっている。

天願の若按司の台詞「村便ててやり」(No.309)が「村使ててやり」となっている。

役名「供二人」(No.338)が「供三人」となっている。  
供の台詞「一 御供しや〜ら」(No.340)が「一 をかん留や〜」

て」となっている。

天願の若按司の台詞「あてといきやへすか」(No.351)が「あて  
る行やすか」となっている。

天願の若按司の台詞「こまに居ちをる」(No.355)が「こまに居  
ん」となっている。

富盛の台詞「見れば此ふたり」(No.358)が「見ればこの二人や」  
となっている。

天願の若按司の台詞「縄よかけめしやいか」(No.379)が「縄よ  
懸めしやり」となっている。

富盛の台詞「いや、まかひもあらぬ」(No.383)が「い  
や人違んあらん」となっている。

富盛の台詞「おかたちよとまいる」(No.385)が「おかたきよる  
尋る」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしのこれや」(No.409)が「あてな  
しのありや」となっている。

富盛の台詞「いや推参なこといふな」(No.412)が「い  
や〜すいさんな言葉」となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「七尺ふし」となっている。  
役名「供」(No.445・449)が「供三人」となっている。

久志の若按司の台詞「身にかへて千代松や」(No.473)が「身に

かいて千代松」となっている。

久志の若按司の台詞「島々よめくて」(No.476)が「島々に廻て」  
となっている。

役名「立川砂田」(No.481)が「供兩人」となっている。

立川の台詞「いや按司かなし」(No.484)が「い され按司加  
那志」となっている。

役名「立川大主」(No.499)が「供兩人」となっている。

役名「久志の若按司」(No.501)が「久志」となっている。

役名「立川」(No.510～511)が「供兩人」(立川砂田)の台詞と  
なっている。

音曲「有しさまかへ編笠に」(No.515)が「有しさまかい雨笠に」  
となっている。

音曲「南無や観音大菩薩」(No.520)が「南無やこわんじを大ぶ  
さつ」となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「是非のこゝろや千  
代松に」となっている。

音曲「急きいそひて忍てきやる」(No.529)が「急ち〜と忍て  
来る」となっている。

役名「若按司」(No.533)が「久志」となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富盛大主の」となっている。

砂田の台詞「細くきちやへたん」(No.548)が「細々聞ひたん」となっている。

役名「若按司」(No.549)が「久志」となっている。

役名「按司」(No.560)が「久志」となっている。

久志の若按司の台詞「一やあく」(No.561)が「一やあ」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の使てやり」(No.567)が「謝名か使てやり」となっている。

役名「按司」(No.575)が「久志」となっている。

久志の若按司の台詞「勝手から忍て」(No.577)が「勝手からめこて」となっている。

役名「砂田」(No.583～586)が「同人」(立川)の台詞となっている。

砂田の台詞「一やあ富成大主」(No.584)が「一やあ富盛大主」となっている。

砂田の台詞「按司かなし御支に」(No.585)が「按司加那志御支に」となっている。

富盛の台詞「一按司かなし御支や」(No.588)が「一按司加那志御遣や」となっている。

役名「按司」(No.590)が「久志」となっている。

砂田の台詞「なまとおめしゆら」(No.598)が「今と思知る」となっている。

音曲「一かにある引合や」(No.605)が「一あけかねる引合や」となっている。

天願の若按司の台詞「頼む方をらぬ」(No.617)が「頼も方ないらん」となっている。

天願の若按司の台詞「夢かやゆら」(No.626)が「夢かやゝひいら」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ乙鶴よ」(No.629)が「やあ乙鶴」となっている。

久志の若按司の台詞「互に思切ひ」(No.638)が「たかに思切は」となっている。

役名「天願の若按司」(No.643)が「千代松」となっている。

役名「天願」(No.657)が「千代松」となっている。

久志の若按司の台詞「生て置ならぬ」(No.665)が「生置ならん」となっている。

富盛の台詞「一やあ按司かなし」(No.669)が「一され按司加那志」となっている。

久志の若按司の台詞「肝合ちをたる」(No.680)が「肝合ち居とて」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるされめ、」(No.682)が「免ち免されか」となっている。

富盛の台詞「罪深さあることや、」(No.692)が「つみ深さあすや」となっている。

富盛の台詞「あゝなまきれる命ち」(No.699)が「はあゝ今切るいのち」となっている。

富盛の台詞「いつし忘やへか、」(No.702)が「早晚しわすやひる」となっている。

役名「立川」と台詞 (No.714～721) が「砂田子立川ノ大主」の台詞となっている。

立川の台詞「一やあ按司かなし、」(No.715)が「一され按司加那志」となっている。

立川の台詞「今のい云葉や、」(No.717)が「今の言葉や」となっている。

久志の若按司の台詞「思らねはすまぬ、」(No.729)が「思らなはならん」となっている。

久志の若按司の台詞「義理背ちいぢや、」(No.734)が「のよて義理背ち」となっている。

久志の若按司の台詞「了簡よされ、」(No.737)が「思てたほうれ」となっている。

立川の台詞「謀叛企ちゆる」(No.747)が「のよて義理背ち」となっている。

立川の台詞「肝の忍ハれめ、」(No.748)が「謀反企か」となっている。

砂田の台詞「決断やなやへらぬ、」(No.756)が「決断やならん」となっている。

久志の若按司の台詞「身に余るまでも」(No.789)が「身にあまり程ん」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ富盛大主、」(No.795)が「やあ富盛」となっている。

久志の若按司の台詞「神の引合しか、」(No.797)が「神の引合に」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か頭役」(No.798)が「謝名の頭役」となっている。

役名「富盛」(No.822)が「同人言葉」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる、」(No.913)が「偽とやよる」となっている。

砂田の台詞「急ち追付て」(No.914)が「急ち追かゝて」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の手にかけて」(No.951)が「謝名の手にかゝて」となっている。

役名「同人」(No.980)が「平田」となっている。

平田の台詞「せまてきやへたん」(No.999)が「シバテチャビタン」となっている。

謝名の台詞「口に花さかそ」(No.1027)が「口や花咲ち」となっている。

川崎の台詞「頓てやミく」と「頓てやめく」になっ  
てはいる。

謝名の台詞「世界取沙汰に」(No.1059)が「世界の取沙汰に」となっている。

謝名の台詞「よかる日よやれへ」(No.1066)が「よかる日よやこと」となっている。

役名「富盛」(No.1073)が「同人」となっている。

久志の若按司の台詞「只今の使や」(No.1086)が「只今の使や」となっている。

久志の若按司の台詞「待請れちやり」(No.1092)が「待請りてやり」となっている。

役名「同人」(No.1101)が「同人ことは この時文立川の大主江渡る」となっている。

立川の台詞「はあ川崎のひやか」(No.1112)が「はあ川崎のひひや」となっている。

役名「按司」(No.1130)が「久志」となっている。

役名「按司」(No.1164)が「久志」となっている。

久志の若按司の台詞「殺ち捨られん」(No.1171)が「殺ち捨ら」となっている。

役名「按司」(No.1174)が「久志」となっている。

#### 「豊川本」

謝名の台詞「あむちやる三日に」(No.37)が「ンヂヤル三日に」となっている。

謝名の台詞「伏勢よ置て」(No.40)が「伏勢よしきうて」となっている。

謝名の台詞「跡形もなひらぬ」(No.44)が「跡方ん見らん」となっている。

役名「三人」(No.49)が「供三人」となっている。

謝名の台詞「按司も打果ち」(No.53)が「按「欠」打すまち」となっている。

謝名の台詞「あとかたもなひらぬ」(No.57)が「跡方ん見らん」となっている。



富盛の台詞「立川の大主」(No.93)が「立川の大主」となっている。

富盛の台詞「軍押して」(No.106)が「軍押寄て。」となっている。

富盛の台詞「時節計らやらひ」(No.113)が「時節計やい」となっている。

川崎の台詞「くたてこんしゆもの」(No.132)が「下て(こんしゆものを消して)こる積り」となっている。

謝名の台詞「やあ川崎のひや」(No.137)が「やあ川崎。」となっている。

謝名の台詞「一門やたにも」(No.147)が「一門やだによ」となっている。

役名「富盛」と台詞(No.153～154)が「富盛川崎平田」の三人の台詞となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしの思なひ」(No.178)が「あてなしのおみないや」となっている。

天願の若按司の台詞「忍ひ隠れやひ」(No.191)が「忍ひかくり」となっている。

音曲「天願の若按司云は并道行きんふし」(No.200)が「兩人道行金武ふし」となっている。

宿主の台詞「たうく急ち」(No.268)が「たうくくまからや

急ち」となっている。

音曲「子持ふし」(No.278)が「哥子持ふし」となっている。

乙鶴の台詞「御気張よめしやうれ」(No.305)が「いひ気張めしやうれ」となっている。

天願の若按司の台詞「肝もきもならぬ」(No.405)が「肝ならんありは」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしのこれや」(No.409)が「あてなしのありや」となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「哥七尺ふし」となっている。

富盛の台詞「里々よめくて」(No.440)が「里々よまわて」となっている。

役名「同」(No.451)が「供」となっている。

役名「立川大主」と台詞(No.499～500)が「立川砂田」の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「手賦のこと」(No.504)が「手賦のを消して」云あはちやる事に」となっている。

立川の台詞「たうく」(No.511)が「御急ちよめしやふり」となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「慈悲の(切の横に)功德や千代松に」となっている。

役名「兩人」と台詞 (No.537) が「砂田兩人」(立川砂田の) 台詞となっている。

ト書き「附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある」(No.539) が「此時たちおとしにて忍ある」となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543) が「富盛大主の」となっている。

砂田の台詞「細くきちやへたん、」(No.548) が「細々聞びたん」となっている。

役名「兩人」(No.557) が「立川」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ〜」(No.561) が「一 たう〜」となっている。

久志の若按司の台詞「急ち千代松」(No.579) が「千代松と乙鶴」となっている。

砂田の台詞「一 やあ富成大主、」(No.584) が「一 やあ富盛大主」となっている。

音曲「東江ふし」(No.604) が「哥 東江ふし」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ乙鶴よ、」(No.629) が「やあ乙鶴」となっている。

久志の若按司の台詞「敵よ打とらに、」(No.642) が「敵よおたに」となっている。

天願の若按司の台詞「御計よめしやうれ、」(No.646) が「計へた

ふり」となっている。

天願の若按司の台詞「計らやひ給ふれ、」(No.659) が「計へたふり」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるされめ、」(No.682) が「よるちよるされが」となっている。

富盛の台詞「罪深さあることや、」(No.692) が「罪深さあすや」となっている。

富盛の台詞「受てをる故に、」(No.696) が「をてをかをる故に」となっている。

久志の若按司の台詞「義理背ちいちやし」(No.734) が「のよて義理背き」となっている。

立川の台詞「あめしやいること、」(No.739) が「一 みしやる事」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ富盛大主、」(No.795) が「やあ富盛」となっている。

久志の若按司の台詞「神の引合しか、」(No.797) が「神の引合しに」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か頭役」(No.798) が「謝名の頭役」となっている。

役名「富盛」(No.822) が「同人」となっている。

久志の若按司の台詞「細々のことや」(No.886)が「細々のことやを消して」文のかよわしに」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる」(No.913)が「偽とやよる」となっている。

砂田の台詞「急ち追付て」(No.914)が「急ちおへかけて」となっている。

立川の台詞「一 はあ／＼しはしまて」(No.917)が「一 はあせはしまて」となっている。

久志の若按司の台詞「計ひのならぬ」(No.948)が「計へやならん」となっている。

久志の若按司の台詞「此事や一期」(No.949)が「此の事と一期」となっている。

立川の台詞「城に立戻て」(No.965)が「御城立戻て」となっている。

平田の台詞「殺さしよめしやいん」(No.987)が「殺さしよめしよん」となっている。

川崎の台詞「海よりも深く」(No.1010)が「海よりん深さ」となっている。

謝名の台詞「世界取沙汰に」(No.1059)が「世界のとり沙汰に」となっている。

謝名の台詞「よかる日よやれへ」(No.1066)が「よかる日撰やく」となっている。

謝名の台詞「二人の按司打果ち」(No.1069)が「二人の按司(打果ちを消して)殺ち」となっている。

久志の若按司の台詞「只今の使や」(No.1086)が「只今の使や」となっている。

久志の若按司の台詞「内通の文や」(No.1093)が「内通書状」となっている。

役名「同人」(No.1101)が「同人立川に文渡」となっている。

役名「按司」(No.1130・1152・1164・1174)が「久志」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の大主の」(No.1135)が「謝名が東原に」となっている。

音曲「揚作田ふし」(No.1190)が「哥あきつくてん」となっている。

久志の若按司の台詞「嬉しさとあゆる」(No.1198)が「誇しやとあゆる」となっている。

富盛の台詞「一 御急よめしやうれ」(No.1211)が「御供しやひら」となっている。

謝名の台詞「一 はあ金武のたけミれへ」(No.1213)が「一 は

あ金武嶽よ見りは」となっている。

富盛の台詞「心うちゆるち」(No.1225)が「おちよだまさりて」となっている。

富盛の台詞「快く急ち」(No.1240)が「たう〜ころろよく急ち」となっている。

謝名の台詞「切殺ちすてら」(No.1255)が「殺ち捨ら」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ謝名の大主」(No.1263)が「やあ謝名」となっている。

久志の若按司の台詞「此按司のはかりこと」(No.1264)が「此按司の計」となっている。

謝名の台詞「運の末なたら」(No.1268)が「運んの末やたら」となっている。

謝名の台詞「たしぬきにぬかれ」(No.1269)が「出し抜きさりて」となっている。

謝名の台詞「おかたちか手にかゝて」(No.1271)が「おかたちが手に」となっている。

謝名の台詞「武士の身の恥辱」(No.1273)が「武士の身恥辱」となっている。

富盛の台詞「あゝ武運つき果て」(No.1288)が「はあゝ

武運つちはてて」となっている。

謝名の台詞「いやものことのおほさ」(No.1293)が「いやものくとんいらん」となっている。

謝名の台詞「快く急ち」(No.1294)が「急ち」となっている。

久志の若按司の台詞「久志浜に引出ち」(No.1308)が「久志浜に引出ち」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ国吉の子」(No.1314)が「国吉の子」となっている。

浜崎国吉の台詞「をかんちゆめやへて」(No.1324)が「御礼」となっている。

役名「天願」(No.1333)が「千代松」となっている。

天願の若按司の台詞「やあ大主」(No.1335)が「やあ大主よ」となっている。

天願の若按司の台詞「働きやる故に」(No.1337)が「働かよいに」となっている。

音曲「しやうんかないふし」(No.1360)が「哥」となっている。音曲「天のしら雲に」(No.1363)が「おし烈て互に」となっている。

「喜舎場本」

謝名の台詞「煙りたかよいか、」(No.24)が「(火+雲)立よひか」となっている。

謝名の台詞「あゝむちやる三日に」(No.33)が「はあ去ル三月二」となっている。

謝名の台詞「伏勢よ置て」(No.40)が「伏勢にしよて」となっている。

役名「三人」(No.49)が「供三人」となっている。

謝名の台詞「命ちふり捨て」(No.64)が「命ち捨て」となっている。

謝名の台詞「打果ちからに、」(No.71)が「打濟ちからに」となっている。

役名「三人」(No.76)が「供三人」となっている。

平田の台詞「御氣遣とやゆる」(No.83)が「御氣遣とめしやる」となっている。

富盛の台詞「城よ立出て」(No.103)が「立出て」となっている。

富盛の台詞「遙々と久志に」(No.105)が「はあ久志の城元に」となっている。

謝名の台詞「からめ出ちくう」(No.152)が「からめ出ときようれ」となっている。

役名「富盛」(No.153~154)が「富盛川崎」の台詞となっている。

音曲「天願の若按司思なひ出羽散山ふし」(No.161)が「天願の若按司出羽さん山ふし」となっている。

天願の若按司の台詞「あてなしの思なひ」(No.178)が「あてなしの思妹や」となっている。

天願の若按司の台詞「死にやんてやりしゆすか」(No.184)が「死なんてやいすれハ」となっている。

天願の若按司の台詞「親の敵かたき」(No.185)が「親の敵かたし」となっている。

天願の若按司の台詞「ワか従やれば」(No.189)が「我が徒くたいもの」となっている。

音曲「天願の若按司云は并道行きんふし」(No.200)が「金武ふし」となっている。

宿主の台詞「やあいきやることやとて」(No.231)が「やあゝいきやる事やとて」となっている。

宿主の台詞「まかひいきゆか」(No.234)が「まかひままひか」となっている。

宿主の台詞「あゝむちやる目のいちやさ」(No.247)が「はあ見ちやる目のいちやさ」となっている。

音曲「子持ふし」(No.278)が「道行子持ふし」となっている。  
音曲「冬の夜のよすか」(No.283)が「冬の夜とやすか」となっ

ている。

乙鶴の台詞「あしまめきめしやうる」(No.292)が「足まめじみやひか」となっている。

乙鶴の台詞「山路やくらさ」(No.301)が「山路のこらさ」となっている。

乙鶴の台詞「御気張よめしやうれ」(No.305)が「気張めしやうれ」となっている。

乙鶴の台詞「村に出やくら」(No.306)が「村に掛やくら」となっている。

音曲「一 あけいきやかなゆら」(No.329)が「一 あけひいちやかしゆら」となっている。

富盛の台詞「一 やあ、いきやることやとて」(No.342)が「一 やあ〜いきやる事やとて」となっている。

天願の若按司の台詞「こまに居ちをる」(No.355)が「こまに居よる」となっている。

音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「七尺ふし」となっている。

富盛の台詞「一 たう〜いそか〜」(No.448)が「一 たう〜急き〜」となっている。

役名「同」(No.451)が「供」となっている。

久志の若按司の台詞「按司もをなちやらも」(No.460)が「按司

もをなちやら」となっている。

久志の若按司の台詞「あゝ口惜や残念」(No.470)が「はあ口惜や残念」となっている。

久志の若按司の台詞「身にかへて千代松や」(No.473)が「身に替て千代松」となっている。

久志の若按司の台詞「はからやひ給ふれ」(No.480)が「計得給り」となっている。

役名「立川砂田」と台詞 (No.481〜482) が「立川の大主」の台詞となっている。

役名「立川」(No.483)が「同人」となっている。

立川の台詞「一 や按司かなし」(No.484)が「一 やあ按司かなし」となっている。

役名「立川」と台詞 (No.510〜512) が「立川砂田兩人」の台詞となっている。

音曲「慈悲の切徳や千代松に」(No.521)が「慈悲のこゝろは千代まつに」となっている。

久志の若按司の台詞「宿々の数や」(No.535)が「宿の宿数や」となっている。

役名「兩人」と台詞 (No.537〜538) が「砂田子」の台詞となっている。

役名「砂田」(No.540)が「同人」となっている。

砂田の台詞「富盛の」(No.543)が「富盛大主の」となっている。

砂田の台詞「細きちやへたん、」(No.548)が「細々聞やへたん」となっている。

役名「兩人」と台詞(No.557～558)が「立川」の台詞となっている。

砂田の台詞「一 やあ富成大主、」(No.584)が「一 やあ富盛大主」となっている。

砂田の台詞「按司かなし御支に」(No.585)が「按司かなし御使に」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ富盛、」(No.591)が「一 やあ富盛大主」となっている。

砂田の台詞「なまとおめしゆら、」(No.598)が「なまとおめしゆミ」となっている。

天願の若按司の台詞「野山から下り」(No.615)が「野山から下て」となっている。

天願の若按司の台詞「さかひさしゆんであれば、」(No.616)が「探さしゆんでやり」となっている。

天願の若按司の台詞「夢かやゆら、」(No.626)が「夢かやゝひら」となっている。

久志の若按司の台詞「一 やあ千代松」(No.638)が「一 やあ千代松よ」となっている。

久志の若按司の台詞「いそちわか城に」(No.639)が「急ち我か宿に」となっている。

立川の台詞「やあ若按司の前、」(No.650)が「やあ若按司の前よ」となっている。

天願の若按司の台詞「計らやひ給ふれ、」(No.659)が「計得給り」となっている。

富盛の台詞「露の身の命ち」(No.676)が「露の命の命ち」となっている。

久志の若按司の台詞「ゆるちゆるされめ、」(No.682)が「よるち免されか」となっている。

富盛の台詞「一 あゝ、押かへし〜」(No.687)が「はあ押返し〜」となっている。

富盛の台詞「おどろしやとあすか」(No.688)が「驚るしやとあもの」となっている。

富盛の台詞「此御恩美拜や」(No.701)が「此御恩御拜の」となっている。

富盛の台詞「いちし忘やへか、」(No.702)が「いちやし忘やひか」となっている。

久志の若按司の台詞「身の上に引当て」(No.728)が「身の上に引請て」となっている。

久志の若按司の台詞「此事やつくくと」(No.736)が「この事や実々と」となっている。

立川の台詞「ものやあやくらぬ」(No.741)が「物やないひらん」となっている。

立川の台詞「つくくといやも」(No.750)が「実々といやん」となっている。

砂田の台詞「決断やなやへらぬ」(No.756)が「聞付やなやへらん」となっている。

久志の若按司の台詞「我身にうちまかち呉れ」(No.766)が「我身任ち呉れよ」となっている。

久志の若按司の台詞「急ちときゆるす」(No.770)が「ふとちとらす」となっている。

富盛の台詞「此御恩美拝や」(No.776)が「此御恩御拝や」となっている。

富盛の台詞「肝もきも尽ち」(No.780)が「肝に肝添て」となっている。

久志の若按司の台詞「御情けやふかく」(No.788)が「御情や深さ」となっている。

久志の若按司の台詞「生楽よ好む」(No.792)が「生楽よ好て」となっている。

久志の若按司の台詞「罪科のいきやし」(No.793)が「罪科の」となっている。

久志の若按司の台詞「凌ぎしのかれか」(No.794)が「免ちよるされか」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名か頭役」(No.798)が「謝名の頭役」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名事と朝夕」(No.800)が「謝名か事と朝夕」となっている。

久志の若按司の台詞「酒と色好ミ」(No.801)が「酒と色好て」となっている。

久志の若按司の台詞「敵討る計ひ」(No.818)が「敵打ゆる計ひや」となっている。

役名「富盛」(No.822)が「同人」となっている。

富盛の台詞「万事敵討る」(No.833)が「有業か敵打ゆる」となっている。

富盛の台詞「おの時立川の大主と」(No.839)が「おの時に立川の大主と」となっている。

富盛の台詞「つわものよ引列て」(No.841)が「つは者よ列て」



となっている。

富盛の台詞「金武のたけなかひ」(No.842)が「金武嶽なかひ」となっている。

富盛の台詞「伊芸屋嘉のあたり」(No.845)が「伊芸や屋嘉の当り」となっている。

富盛の台詞「平責よされ」(No.850)が「平々にされ」となっている。

立川の台詞「計らやい給ふれ」(No.867)が「計得給れ」となっている。

砂田の台詞「きざまれやしちも」(No.909)が「刻まれやしゆてん」となっている。

砂田の台詞「偽とあゆる」(No.913)が「偽とやよる」となっている。

砂田の台詞「急ち追付て」(No.914)が「急ち追掛て」となっている。

立川の台詞「はあ／＼しはしまて」(No.917)が「はあしはしまて」となっている。

久志の若按司の台詞「あらわれてをてと」(No.937)が「顛れてをたん」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名に打ちちゆる」(No.947)が「謝名に

勝る」となっている。

久志の若按司の台詞「計ひのならぬ」(No.948)が「計得や絶らん」となっている。

久志の若按司の台詞「此事や一期」(No.949)が「此事よ一期」となっている。

久志の若按司の台詞「気にかゝてをてと」(No.950)が「気に掛けてをてと」となっている。

久志の若按司の台詞「殺さんともて」(No.952)が「殺されんともて」となっている。

立川の台詞「城に立戻て」(No.965)が「城に戻やひら」となっている。

平田の台詞「され川崎のひや」(No.998)が「され／＼川崎のひや」となっている。

謝名の台詞「島国のやから」(No.1028)が「島国の障り」となっている。

川崎の台詞「おしさ又ないらぬ」(No.1036)が「惜さ又思まん」となっている。

謝名の台詞「切殺ちすてら」(No.1047)が「殺ちすてら」となっている。

謝名の台詞「はあ思たすと替て」(No.1061)が「はあ思たこと叶

て」となっている。

役名「富盛」(No.1073)が「同人」となっている。

久志の若按司の台詞「内通の文や」(No.1093)が「内通の文」となっている。

天願の若按司の台詞「今のことあれ」(No.1097)が「事やりは」となっている。

天願の若按司の台詞「御計よめしやうれ」(No.1100)が「計得よめしやうれ」となっている。

天願の若按司の台詞「一 やあ大主」(No.1102)が「一 やあ大主よ」となっている。

ト書き「文立川の大主江渡す」(No.1103)が「此時の文立川江渡す」となっている。

立川の台詞「御計のこと」(No.1107～1115)が天願の若按司の台詞となっている。

役名「立川」と台詞 (No.1120～1121) が「伊豆味下庫理」の台詞となっている。

久志の若按司の台詞「本門の東」(No.1132)が「本門の東の」となっている。

久志の若按司の台詞「山中にふかく」(No.1133)が「山中」となっている。

久志の若按司の台詞「謝名の大主の」(No.1135)が「謝名の」となっている。

久志の若按司の台詞「殺ちすてれ」(No.1139)が「殺ち捨ら」となっている。

久志の若按司の台詞「相図のかねのならは」(No.1160)が「相図鐘のならは」となっている。

久志の若按司の台詞「嬉しさとあゆる」(No.1198)が「誇らしやとあゆる」となっている。

天願の若按司の所作「一 「礼」(No.1204)が「一 拝留やひて」となっている。

謝名の台詞「時うつち済ぬ」(No.1208)が「時おすて済ん」となっている。

富盛の台詞「一 御急よめしやうれ」(No.1211)が「一 拝留やひて」となっている。

富盛の台詞「一 はあ久志の若按司の」(No.1222)が「一 やあ久志の若按司の」となっている。

富盛の台詞「ワか謀ことに」(No.1224)が「我か計得の事に」となっている。

富盛の台詞「急ち走寄ひ」(No.1230)が「急ち走寄て」となっている。

久志の若按司の台詞「あゝ口惜や残念」（No.1252）が「はあ口惜や残念」となっている。

役名「久志」（No.1262）が「同人」となっている。

謝名の台詞「一 あゝ謝名ほどの名将も」（No.1267）が「一 はあ謝名程の名将も」となっている。

謝名の台詞「面目もなひらぬ」（No.1274）が「面目やならん」となっている。

謝名の台詞「首よとれ」（No.1276）が「首よ渡さ」となっている。

久志の若按司の台詞「十度生とられ」（No.1280）が「十度生とよる」となっている。

久志の若按司の台詞「あの世とつけ」（No.1286）が「あの世渡れ」となっている。

謝名の台詞「一 いやものことのおぼさ」（No.1293）が「いや物事んいらん」となっている。

謝名の台詞「首よ渡す」（No.1295）が「首よ渡さ」となっている。

久志の若按司の台詞「一 はあゝしはしまつ」（No.1302）が「一 あゝしはしまて」となっている。

久志の若按司の台詞「旗門にあげれ」（No.1309）が「拷問に揚り」となっている。

久志の若按司の台詞「やあ国吉の子」（No.1314）が「国吉の子」

となっている。

役名「兩人」（No.1317）が「浜崎国吉」となっている。

浜崎国吉の台詞「一 さあゝいそけゝ」（No.1328）が「一 さあゝ急ちゝ」となっている。

天願の若按司の台詞「討捕るけふや」（No.1341）が「打とたる事や」となっている。

校合結果を概観すると、異同が一番多いのは「久志本」で、次いで多いのは「喜舎場本」であった。また、「久志本」は『尚家本』に見られない記載が多く見られた。異同が少なかったのは「今帰仁本」・「恩河本」で、この二冊に共通して見られたことは、『尚家本』に見られない記載はほとんどが役名であり、台詞や音曲など、内容に大きく関わる記載で『尚家本』に見られない部分は二つの台詞しかなかった。ほとんど『尚家本』と内容的に変わらないことが指摘できる。

「久志の若按司」は対校本間において、同じ系統と思われる特徴的な異同箇所が見出だしくいのもこの校合を通して明らかになった。

### ① 作者ならびに上演の歴史

この作品は、王府での上演が一八六六年、つまり最後の御冠船である寅の御冠船しか上演が確認できない。しかも、それが確認できるのは池宮の論文で紹介されている資料である<sup>(注八三)</sup>。恐らく池宮は『尚家本』の収録内容を寅年の御膳進上の舞台に供された演目であると解釈している。『尚家本』は、寅年の翌年に書写されており、また二章二節1の「iv 『尚家旧蔵組踊集』における問題」でも述べたとおり、現時点での池宮の解釈は証拠を補強する必要がある。したがって、寅年の上演が確認できない場合、いつごろ創作されたのか、というのは断定できない。一八六七（同治六）年には写本があるので、それまでに創作されていることは間違いないが、もっと古い時代に創作されていた可能性も考えられる。また、『尚家本』の収録作品のうち、「二山和睦」のみに着付が見られない。これも何か関係があるか。他の作品は上演する予定であったから着付まで記載されているが、「二山和睦」は上演予定がなかったから着付が記載されていないのか、など疑問が多く残る。

### ② 内容について

この組踊はタイトルにもあるように「和睦」がテーマである。同じような内容を扱った作品には「大城崩」「義臣物語」などが挙げら

れるが、「大城崩」「義臣物語」などは、父親である按司が誅伐され、生き残った若按司や家臣が仇を討たず、相手に許され、和睦するという筋である。仇討と関係した和睦ものなのである。しかし、「二山和睦」は、南山の使いで北山に和睦を申入れに来た与座の大主が、「和睦は畏である」と考えた北山の謝名の犬主によってとらわれの身となってしまい、十年の歳月が経ったので、南山に残してきた与座の子どもたちが父を求めてやってくる。その様子に心打たれた北山の按司が、これからは北山と南山は和睦してこれから先、進んでいこう、という内容である。タイトル通り、和睦がメインであり、先に述べたような仇討の要素は入っていない。孝行物や仇討物が多い組踊において、特徴のある作品といつてよい。

### ③ 底本と対校本について

第一次対校本：今帰仁御殿本（以下「今帰仁本」）・与那覇政牛所蔵本（以下「与那覇本」）・恩河本小祿御殿本（以下「恩河本」）・兼島信備所蔵本（以下「兼島本」）・宮良殿内本（以下「宮良本」）

『尚家本』は、この「二山和睦」のみ、外題と着付が記載されなく、すぐ本文から始まっている。もともと外題と着付があり、冊子にまとめる際に落丁したのか、不明である。

対校本の内、『宮良殿内本』は後半部が欠落している。組踊の中で

は、琉球王国末期の成立と思われる、比較的新しい作品であるが、石垣島にも「組踊本」が残っていることから、組踊の伝播の速さについて一考することができよう。

次に、『尚家本』に収録されている各作品と、諸本との校合を起さない、異同の部分を取り上げる。

#### ④校合結果

まず、『尚家本』に見られて、対校本に見られない記載の中で一番多かったのは、与座の大王の台詞「此事よ主人按司」(No.428)、与座の大王の台詞「たかいにあらそいの」(No.422)という台詞の一部分の他に、まとまった台詞として、与座の大王の台詞「和睦なるやれは／御万人のまきり／上下もともに／いちこたのしみに／くらそてやりともて」(No.425～429)、役名「与座」と台詞「一 やあ／虎松もひと／振立ひ見せれ」(No.509～511)、役名「虎松」と台詞「一 おう」(No.512～513)という部分が対校本全てに見られなかった。

また、次に多かったのは住居人の台詞「与座引とめて」(No.290)、住居人の台詞「南山の様子／仔細聞合しゆる分別やて」(No.291～292)、住居人の台詞「あんし大王も」(No.301)、住居人の台詞「隙やないらぬ」(No.304)、役名「惣人数」と台詞「一 おう」(No.646～647)、が宮良本を除く四本に見られず、与座の大王の台詞「安て楽ミゆる

／時と又やすか」(No.411～412)、与座の大王の台詞「武士の身の習ひの／心うつしちをて／くらちをてひならぬ」(No.444～446)、役名「与座」と台詞「一 されは／」(No.478～479)は、恩河本を除く四本に見られなかった。また、役名「与座」と台詞「一 あゝ出来た／」(No.507～508)は、「与那覇本」以外の四本に見られない、という結果となった。

次に、対校本ごとく尚家本にしか見られない記載を挙げていく。

#### 「今帰仁本」

千代松の台詞「御素立よてやり／朝夕母親の／寄こと聞る」(No.20～22)、千代松の台詞「こめられてをれハ」(No.27)、母の台詞「一 今のことやれハ／誇らしやとあゆる」(No.127～128)、住居人の台詞「与座引とめて／南山の様子／仔細聞合しゆる分別やて」(No.290～292)、住居人の台詞「あんし大王も」(No.301)、住居人の台詞「隙やないらぬ」(No.304)、住居人の台詞「頓て夫婦の縁につなかつて」(No.308)、住居人の台詞「弥事六ヶ敷ない立」(No.311)、与座の大王の台詞「安て楽ミゆる／時と又やすか」(No.411～412)、与座の大王の台詞「此事よ主人按司」(No.418)、与座の大王の台詞「たかいにあらそいの」(No.422)、与座の大王の台詞「和睦なるやれは／御万人のまきり／上下も

ともに／いちたのしみに／くらそてやりともて」(No.425～429)、『与座の大主の台詞「武士の身の習ひの／心うつしちをて／くらちをてひならぬ」(No.444～446)、『役名「与座」と台詞「一 されは〜」(No.478～479) 役名「与座」と台詞「一 あゝ出来た〜」(No.507～508)、『役名「与座と台詞「一 やあ〜虎松もひとつ／振立ひ見せれ」(No.509～511)、『役名「虎松」と台詞「一 おう」(No.512～513)、『役名「惣人数」(No.)』と台詞「一 おう」(No.646～647)、『謝名の大主の台詞「拝て御万人や／有難き思て／目眉打笑て」(No.888～890)、『与座の大主の台詞「一 留やへて」(No.1011)、『役名「虎松」と台詞「一 わめもつれいかに／やあ父親よ」(No.1022～1024) 役名「虎千代と台詞「一 虎松もともに／つれて給ふれ」(No.1075～1077)、『役名「虎松」と台詞「一 舎兄前とワ身すて〜」(No.1078～1079)、『虎松の台詞「まかひいまひか」(No.1080)、『与座の大主の台詞「一 やあ 按司かなし」(No.1108)、『

「与那覇本」

母の台詞「一 今のことやれハ／誇らしやとあゆる」(No.127～128)、『住居人の台詞「与座引とめて／南山の様子／仔細聞合しゆる分別やて」(No.290～292)、『住居人の台詞「あんし大主も」

(No.301)、『住居人の台詞「隙やないらぬ」(No.304)、『

役名「亀千代」(No.327～)、『亀千代の台詞「一 やあやき前よ／兎角此国に／いちまでもともて／むすてある縁に／思ひ引きれて／妻なし子捨て／隠れやひいまひら／捨られる親子／いきやかしやへら」(No.328～336)、『与座の大主の台詞「安て楽ミゆる／時と又やすか」(No.411～412)、『与座の大主の台詞「此事よ主人按司」(No.418)、『与座の大主の台詞「たかいにあらそいの」(No.422～)、『与座の大主の台詞「和睦なるやれば／御万人のまきり／上下もともに／いちたのしみに／くらそてやりともて」(No.425～429)、『与座の大主の台詞「武士の身の習ひの／心うつしちをて／くらちをてひならぬ」(No.444～446)、『ト書き「与座道行言葉」(No.457)、『役名「同人」(No.464)、『役名「与座」と台詞「一 されは〜」(No.478～479)、『役名「与座」と台詞「一 やあ〜虎松もひとつ／振立ひ見せれ」(No.509～511)、『役名「虎松」と台詞「一 おう」(No.512～513)、『役名「与座」と台詞「一 あゝ出来た〜」(No.514～515)、『役名「惣人数」と台詞「一 おう」(No.646～647)、『北山の按司の台詞「踊てたちもとれ」(No.996)、『役名「千代松」(No.999)、『虎松の台詞「一 やあ父親よ」(No.1050)、『役名「虎松」と台詞「一 舎兄前とワ身すて〜／まかひいまひか」(No.1078～1080)、『音曲「さん山ふし／一 ふ

たつなひぬワ身の中にはさまれて／こゝろくら闇に／なるか  
しんき」(No.1088～1092)、『役名「千代松亀千代」と台詞「一や  
あ按司かなし／段々の御慈悲／いちも尽さらぬ／此御恩たうと  
さや／胸に思染て／按司かなし天の／百といつまでも／おかけ  
ほさへめしやいる／御願しやへら」(No.1125～1134)、『  
役名「按司」と台詞「一 たう／」(No.1203～1204)、『

「恩河本」

千代松「朝夕母親の／寄りと聞る」(No.21～22)、『千代松の台詞  
「こめられてをれへ」(No.27)、『住居人の台詞「与座引とめて／  
南山の様子／仔細聞合しゆる分別やて」(No.290～292)、『住居人  
の台詞「あんし大主も」(No.301)、『住居人の台詞「頓て夫婦の  
縁につなかつて」(No.308)、『住居人の台詞「隙やないらぬ」(No.  
304)、『与座の大主の台詞「此事よ主人按司」(No.418)、『与座の  
大主の台詞「たかいにあらそいの」(No.422)、『与座の大主の台  
詞「和睦なるやれば／御万人のまきり／上下もともに／いちこ  
たのしみに／くらそてやりともて」(No.425～429)、『役名「与座」  
と台詞「一 あゝ出来た／」(No.507～508)、『役名「与座」と  
台詞「一 やあ／／虎松もひとつ／振立ひ見せれ」(No.509～  
511)、『役名の台詞「虎松」と台詞「一 おう」(No.512～513)、『

与座の大主の台詞「一 拜留やへて」(No.1011)、『

「兼島本」

母の台詞「一 今のことやれへ／誇らしやとあゆる」(No.127～  
128)、『役名「舟筑」と台詞「一 いまひのかち」(No.169～170)、『  
住居人の台詞「与座引とめて／南山の様子／仔細聞合しゆる分  
別やて」(No.290～292)、『住居人の台詞「あんし大主も」(No.301)、『  
住居人の台詞「隙やないらぬ」(No.304)、『役名「住居人」(No.340)、『  
与座の大主の台詞「安て楽ミゆる／時と又やすか」(No.411～  
412)、『与座の大主の台詞「此事よ主人按司」(No.418)、『与座の  
大主の台詞「たかいにあらそいの」(No.422)、『与座の大主の台  
詞「和睦なるやれば／御万人のまきり／上下もともに／いちこ  
たのしみに／くらそてやりともて」(No.425～429)、『与座の大主  
の台詞「武士の身の習ひの／心うつしちをて／くらちをてひな  
らぬ」(No.444～446)、『役名「同人」(No.464)、『役名「与座」と  
台詞「一 されは／」(No.478～479)、『役名「与座」と台詞「一  
あゝ出来た／」(No.507～508)、『役名「与座」と台詞「一 や  
あ／／虎松もひとつ／振立ひ見せれ」(No.509～511)、『役名「虎  
松」と台詞「一 おう」(No.512～513)、『役名「亀千代」(No.559)、『  
役名「同人」(No.635)、『役名「惣人数」と台詞「一 おう」(No.

646～647)、『謝名の大王の台詞「一 やあ仲宗根のひや」(No.910)、『役名「仲宗根」(No.915)、『北山の按司の台詞「ふたり押列つ」(No.940)、『北山の按司の台詞「踊てたちもこれ」(No.996)、『虎松の台詞「一 やあ父親よ」(No.1050)、『役名「虎松」と台詞「一 舎兄前とワ身すつゝ／まかひいまひか」(No.1078～1080)、『役名「親子共」と与座親子五人の台詞「一 あゝたうと」(No.1105～1106)、『役名「千代松亀千代」と台詞「一 やあ按司かなし／段々の御慈悲／いちも尽さらめ／此御恩たうとさや／胸に思染て／按司かなし天の／百といつまでも／おかけほさへめしやいる／御願しやくら」(No.1125～1134)、『役名「与座」と台詞「一 いやれることさらめ／是からの先や／互にむつましく／取合よすらに」(No.1143～1147)、『

「宮良本」

音曲「千代松亀千代出羽干瀬節」(No.2)、『役名「千代松」(No.7)、『役名「亀千代」(No.45)、『役名「千代松」(No.62)、『音曲「仲間ふし」(No.64)、『役名「千代松」(No.69)、『役名「母親」(No.82)、『役名「千代松」(No.92)、『千代松の台詞「是非よ聞分て／頼て母親や／父親の御戻り／御待めしやうれ」(No.110～113)、『役名「舟筑」(No.169)、『音曲「伊計離ふし」(No.171)、『役名「舟筑」(No.

181)、『役名「千代松」(No.184)、『役名「舟筑」(No.189)、『役名「千代松」(No.191)、『役名「亀千代」(No.197)、『役名「千代松」(No.202)、『役名「住居人」(No.209)、『役名「千代松」(No.216)、『役名「住居人」(No.225)、『役名「千代松」(No.232)、『役名「住居人」(No.247)、『役名「千代松」(No.321)、『役名「亀千代」(No.327)、『役名「住居人」(No.340)、『役名「千代松」(No.379)、『役名「住居人」(No.383)、『与座の大王の台詞「あゝ国々「欠」按司部／勢ひ争やい／軍事起ち／国よ疲らしゆる／ワか主人按司／やすてやすまらぬ／南山十五ヶや／討よ平けて／先や四方の海／波風も立ぬ／按司の御喜ひ／御万人のまきり／安て楽ミゆる／時と又やすか／北山や今に／軍事やまぬ／殊に南山たはかゆる／含ミてやりあれは／此事よ主人按司／御氣の毒めしやうち／たかいにあらそいの／こゝろとりおさめ／北山と南山／和睦なるやれは／御万人のまきり／上下もともに／いちこたのしみに／くらそてやりともて／美よんきをかて／きやる事やすか／十年あまるまでも／ひきよとめられて／何分の御返事／たえて【なひぬ】(なひぬ)あれは／いたつらに年月／おくるしんき／いちやんでやりきやしゆか／武士の身の習ひの／心うつしちをて／くらちをてひならぬ」(No.399～446)、『ト書き「与座道行言葉」(No.457)、『役名「同人」(No.464)、『役名「虎千代」(No.470)、『



役名「与座」と台詞「一 されば〜」(No.478~479)・役名「与座」と台詞「一 やあ〜」(No.480~481)・役名「虎千代」(No.486)・役名「与座」(No.499)・役名「与座」と台詞「一 あゝ出来た〜」(No.507~508)・役名「与座」と台詞「一 やあ〜虎松もひとつ／振立ひ見せれ」(No.509~511)・役名「虎松」と台詞「一 おう」(No.512~513)・役名「与座」(No.514)・役名「虎千代」(No.518)・役名「与座」(No.522)・役名「虎松」(No.529)・役名「与座」(No.535)・音曲「恩納ふし」(No.545)・音曲「千代松亀千代出羽長金武ふし」(No.550)・役名「亀千代」(No.559)・役名「千代松」(No.563)・千代松の台詞「按司かなし押し」(No.568)・千代松亀千代の台詞「よたしや有様に／おんにゆけてたはふれ」(No.573~574)・役名「門番」(No.575)・役名「同人」(No.577)・

次に、対校本のみに見られて、『尚家本』に見られない箇所を挙げる。一番多かったのは「住居人」の台詞「先御入れめしやいへれ」(No.395)・と虎松・虎千代が武芸を見せる場面で歌われる揚作田節「一 武士の身や空に／とふ鳥のひいろ／みつめても手にや／取やならぬ」(No.490~493)である。これは対校本すべてに見られた。次に多かったのは、役名「母」(No.114)・役名「千代松亀千代」と

台詞「一 母親の御志／今のことやれハ／願て行先も／自由とやる」(No.122~126)・役名「母」(No.129)・役名「亀千代」(No.134)・役名「千代松」(No.146)・役名「千代松」(No.156)・役名「亀千代」(No.164)・住居人の台詞「一 くれや津口当」(No.210)・千代松の台詞「父親の事と／拾年余るまでん／御引留おかれ／別れやいをすか／いきやる有様に／なやいまたいまいか／しれめしやうきまいらは／かたてたはふり」(No.239~246)・住居人の台詞「与座の大主と／南山の名将／これとん取て置は／いかな南山の／物巧ミしちん／やうひに事や起さぬつもり／むての分別やて」(No.283~289)・住居人の台詞「やんとも古郷わすらぬ」(No.302)・住居人の台詞「御返事のさからぬ」(No.305)・音曲「上ケ七尺ふし／一 捨つられる親子／いきやかしや〜」(No.337~339)・役名「与座の大主」(No.396)・与座の大主の台詞「身にあまてを〜／よくしまの心」(No.420~421)・与座の大主の台詞「ハハ打合ち／四方の上下も／静なることに」(No.430~432)・与座の大主の台詞「あゝ口惜や」(No.441)・役名「与座の大主」(No.494)・役名「門番」(No.561)・役名「北山の按司／一 やあ〜／わらへあてなしの／二人押列て／いきやる願事／あとしてつちやか」(No.580~585)・北山の按司の台詞「また与座の大主の／親子急ち呼されれ」(No.899~900)・役名「千代松」(No.966)・亀千代の台詞「御立めしやうれ」(No.1066)・役名「子共」と

子四人の台詞「一 とう／＼御供しや／＼ら」(No.1215～1216)、以上は、「宮良本」以外の対校本に見られ、住居人の台詞「おの思子のきやにかゝられて」(No.349)、は「恩河本」以外の対校本で見られない。

次に、対校本ごとに前に挙げた以外の『尚家本』に見られない記載を挙げていく。

「今帰仁本」

千代松亀千代の台詞「別れやいをれは」(No.19)、音曲「伊野波節」(No.151)、音曲「一 波風の音も／＼静なてけふや／＼難安く渡る／＼やん波美崎」(No.172～175)、音曲「船筑言葉并伊計離ふし」(No.176)、役名「同人」(No.213)、与座の大主「やよれとも」(No.413)、与座の大主の台詞「無常の世の習や」(No.443)、与座の大主の台詞「一 あゝ出来た／＼」(No.495)、役名「虎千代虎松」と所作「一 御礼」(No.497～498)、与座の大主の台詞「一 今日の誇らしや／＼ものにとあられめ」(No.500～501)、役名「虎千代とら松」と所作「一 御礼」(No.504～505)、卜書き「附 此時虎千代唐手虎松鎌手島切手毎」(No.506)、役名「虎千代とら松」と所作「一 御礼」(No.516～517)、役名「謝名の大主」(No.738)、役名「謝名の大主」(No.758)、役名「按司」(No.

858)、役名「謝名の大主」(No.909)、役名「与座の大主」と台詞「一 とう／＼御暇よしや／＼ら」(No.1067～1068)、役名「虎千代とら松兩人」と台詞「一 我身もつり行に／＼やあ父親よ」(No.1069～1071)、役名「与座の大主」(No.1183)、

「与那覇本」

音曲「伊野波節」(No.151)、与座の大主の台詞「ヤヨリトモ」(No.413)、与座の大主の台詞「無常ノ世ノ習ヤ」(No.443)、与座の大主の台詞「一 ハアデケタ／＼」(No.495)、与座の大主の台詞「今ノ誇ラシヤ、ノ物ニタトラレメ」(No.500～501)、役名「千代松」と台詞「一 トウ／＼御取次スラニ」(No.557～558)、役名「謝名」(No.909)、役名「天底」と台詞「一 サリ烈デキヤヒタン」(No.945～946)、音曲「一 親子振合チヤス」(No.952)、役名「天底」と台詞「一 サレ上ゲヤビラ」(No.954～955)、役名「按司」と台詞「出来タ／＼」(No.956～957)、役名「虎松」と台詞「一 舎兄前ト我ン捨テ／＼マカイ、マイガ」(No.1072～1074)、北山の按司の台詞「ヤア大主」(No.1100)、役名「千代松」と台詞「一 ヤア按司加那志ノ段々ノ御慈悲ノ言モ尽サラヌ／＼此ノ御恩タウトサヤノ胸ニ思染テ／＼按司加那志天ノ／＼百トイツ迄モ／＼御掛フサイ召ル／＼御願シヤビラ」(No.1148～1157)、

役名「同人」(No.1183)´

「恩河本」

音曲「伊野波フシ」(No.151)´役名「全人」(No.213)´住居人の  
台詞「シユル内明テノ冬ニヤ」(No.309)´与座の大主の台詞「附  
此時虎千代虎松腰ニ鎌サシ鑓長刀待テル」(No.456)´ト書き「此  
時虎千代長刀 虎松鎌手」(No.488)´与座の大主の台詞「一  
ア、出来タ〜」(No.495)´役名「虎千代虎松」と台詞「一 御  
札」(No.497~498)´役名「子両人」(No.504)´虎千代虎松の台  
詞「一 御札」(No.505)´ト書き「附 此時虎千代唐手事 虎  
松鎌手島切手毎」(No.506)´役名「子両人」と虎千代虎松の所  
作「一 御札」(No.516~517)´役名「謝名ノ大主」(No.738)´  
役名「全人」(No.758)´役名「全人」(No.858)´役名「謝名」(No.  
909)´役名「全人」(No.987)´役名「与座大主」と台詞「一 タ  
ウ〜御暇ヨシヤユラ」(No.1067~1068)´北山の按司の台詞「ヤ  
ア大主」(No.1100)´ト書き「二山和睦終」(No.1228)´ト書き「桃  
原村 恩河朝祐」(No.1229)´

「兼島本」

音曲「伊野波節」(No.151)´与座の大主の台詞「ヤヨリドモ、」

(No.413)´与座の大主の台詞「無情ノ世ノ習ヤ、」(No.413)´与  
座の大主の台詞「附此ノ時虎松腰ニ鎌差シ鑓リ長刀持チ出ル」  
(No.456)´ト書き「但此ノ時虎千代虎松両人変リ〜立与座笛  
吹真似シテ鑓長刀手アリ、」(No.496)´与座の大主の台詞「一 今  
日ノ誇ラシヤ、ノ物ニ譬ラレメ、」(No.500~501)´ト書き「但  
シ此ノ時鎌手唐手アリ」(No.506)´役名「千代松」と台詞「一  
タウ〜御取次スラニ、」(No.557~558)´役名の台詞「二人」  
と千代松亀千代の台詞「「欠」 吉シヤ有ル様ニ」(No.572~573)´  
役名「謝花ノ大主」(No.738)´役名「仲宗根ノ比屋」(No.909)´  
役名「天底ノ子」と台詞「一 サレ列テ来ビタン、」(No.945~  
946)´音曲「一 親子振合チヤシ」(No.952)´役名「天底ノ子」  
と台詞「一 サレ上ゲヤユラ、」(No.954~955)´役名「按司」  
と台詞「一 出来タ〜、」(No.956~957)´役名「虎松」と台  
詞「一 舎兄前ト我身捨テノマイカイ在マイガ、」(No.1072~1074)´  
北山の按司の台詞「ヤア大主」(No.1100~)´役名「千代松」と  
台詞「一 ヤア按司加那志ノ段々ノ御慈悲ノ言ン尽サラン、ノ  
此ノ御恩トウトサヤノ胸ニ思染テ、ノ按司加那志天ノノ百トイ  
ツ迄ン、ノ御掛ケ幸召ルノ御願シヤユラ、」(No.1148~1157)´  
ト書き「二山和睦ノ巻終」(No.1228)´

「宮良本」

ト書き「附此時虎千代虎松腰ニ鎌差鑓長刀持出ル」(No.456)、  
虎千代の台詞「一 拝シ留ヒテ」(No.487)、ト書き「但此ノ時  
兩人替リ〜立与座笛吹ノ真似ニテ鑓長刀ノ手アル」(No.488)、  
千代松の台詞「一 タウ〜御取次スラニ」(No.558)、

次に、『尚家本』と対校本の記載に異同が見られる個所を挙げる。  
異同が対校本すべてに見られた個所は、次に挙げたとおりである。  
千代松の台詞「忍ていかに」(No.44)が「忍て行ん」となっている。  
千代松の台詞「母親と共に」(No.100)が「母親もともに」となっ  
ている。

亀千代の台詞「一 順風のけふや」(No.165)が「一 順風も今日や」  
となっている。

住居人の台詞「はひ〜ねったあや」(No.214)が「一 あいねった  
や」となっている。

住居人の台詞「一 あゝ宿かひめしやうらしゆや」(No.226)が「一  
むゝ宿かひめしやうらしよすや」となっている。

住居人の台詞「時分とやたひすか」(No.261)が「時分やたらはつや  
すか」となっている。

住居人の台詞「なしおとつて」(No.263)が「なし落さつて」となっ

ている。

住居人の台詞「親やのぶ」(No.264)が「親の御姿や」となっている。  
住居人の台詞「親拝みいかむて」(No.268)が「親拝みいかまいん」  
となっている。

住居人の台詞「なあおんさうかいや」(No.270)が「あゝ御無蔵かい  
やあ」となっている。

住居人の台詞「しめんしやうんな」(No.272)が「めしやうんな」と  
なっている。

住居人の台詞「女性方拝領やて」(No.296)が「女性拝領やて」とな  
っている。

住居人の台詞「鑓長刀不足なく」(No.353)が「鎌手とう手不足ない  
ん」となっている。

住居人の台詞「まる云しち」(No.371)が「度々諫事しち」となっ  
ている。

与座の太主の台詞「日も暮ていきゆひ」(No.543)が「日もさかてを  
もの」となっている。

亀千代の台詞「一 御門番取御取次頼ま」(No.560)が「一 御門  
番衆御取次頼ま」となっている。

千代松の台詞「兄【弟】子千代松」(No.566)が「嫡子千代松(亀千  
代詞)」となっている。

門番の台詞「これにいまふれ」(No.579)が「是に入れしやうれ」となっている。

合計で一八箇所であった。共通する対校本との異同が他の作品と比べると多い。次に、各対抗本ごとに上記以外の異同のある個所を挙げていく。

「今帰仁本」

音曲「千代松亀千代出羽干瀬節」(No.26)が「千代松亀千代出羽さん山ふし」となっている。

役名「千代松」の台詞(No.7~43)が「千代松亀千代」となっている。

亀千代の台詞「情けあるならひ」(No.49)が「誠とある習ひ」となっている。

亀千代の台詞「おとろしやよあもの」(No.55)が「安てをひなよめ」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.64)が「母出羽仲間ふし」となっている。

音曲「一のかす思童」(No.65)が「一のかす玉金」となっている。

千代松の台詞「哀れ父親よ」(No.78)が「哀り父親や」となっている。

役名「母親」(No.82)が「母」となっている。

千代松の台詞「のよておそれゆか」(No.99)が「のよて思きよか」となっている。

千代松の台詞「怪我のともあらハ」(No.103)が「軽我のまたあらは」となっている。

千代松の台詞「しのきしのからぬ」(No.107)が「しのからぬあれは」となっている。

千代松の台詞「重なゆるつもり」(No.109)が「重ねよるつもり」となっている。

亀千代の台詞「念力の太刀や」(No.137)が「念力のかたな」となっている。

千代松の台詞「時移ちすまぬ」(No.149)が「時移ちすにやへらぬ」となっている。

音曲「一義理とめて我身の」(No.152)が「一義理とめてわ身や」となっている。

亀千代の台詞「波も又ないらぬ」(No.166)が「波もまたたぬ」となっている。

亀千代の台詞「真臚押風に」(No.167)が「真ともうそ風と」となっている。

音曲「一真臚おす風に」(No.177)が「一真とも押風も」と

なっている。

音曲「運天のシなと」(No.179)が「かれよしの御船の」となっている。

音曲「なまどひきやる」(No.180)が「はるかきよらさ」となっている。

舟筑の台詞「一 され運天の湊」(No.182)が「一 され」運天の港と」となっている。

千代松の台詞「一 かほし舟筑」(No.185)が「一 かふし船筑よ」となっている。

千代松の台詞「あの村に便て」(No.194)が「あの村よ便て」となっている。

役名「住居人」(No.209・225・247・340・389)が「津口当」となっている。

住居人の台詞「一 むゝ舟の入ゆる様子」(No.211)が「むゝ船のちよる様子」となっている。

住居人の台詞「先出てむたねハならぬ」(No.212)が「出て見たねはならぬ」となっている。

千代松の台詞「旅のものやすか」(No.220)が「とまい」に「やすか」となっている。

千代松の台詞「知る人もをらぬ」(No.221)が「知る人やをらぬ」

となっている。

住居人の台詞「よう似ちいまひんしやいん」(No.253)が「よう似ちいまいんしやい」となっている。

住居人の台詞「あゝねつたあや挿てむてハ」(No.254)が「ねつたあや挿て見ては」となっている。

住居人の台詞「あゝさて」(No.256)が「ねつたあ」となっている。

住居人の台詞「先ものにたとてむてハ」(No.258)が「まつ物にたとてむたは」となっている。

住居人の台詞「ちやうとニ所共」(No.259)が「ニ所共」となっている。

住居人の台詞「いまひんしやうち」(No.269)が「しやうち」となっている。

住居人の台詞「又ねつたあ親かなしいと」(No.274)が「ねつたあ親加那志と」となっている。

住居人の台詞「又十七八の」(No.295)が「また拾七八なよる」となっている。

住居人の台詞「大主も果報な人たやへる」(No.300)が「果報な人たやへる」となっている。

住居人の台詞「御暇みよんにゆける」(No.303)が「度々御暇み」

よんによけよとん」となっている。

住居人の台詞「あけての冬にや」(No.309)が「しよる内明ての冬にや」となっている。

住居人の台詞「おれからや御めいとんたの中」(No.314)が「おれからや」となっている。

住居人の台詞「又思子のきやあの」(No.315)が「おの男子のきやあの」となっている。

住居人の台詞「かちすかりくしめしやうれ」(No.316)が「かきすかりく」となっている。

住居人の台詞「故郷の事も」(No.317)が「又古郷の妻子のこと」となっている。

住居人の台詞「あゝ至極哀れたやへる」(No.320)が「あゝ与所なからぬ至極哀れたやへる」となっている。

住居人の台詞「御世話あめしやうむな」(No.343)が「御世話やめしやうんな」となっている。

住居人の台詞「思子のきや引進の為」(No.350)が「あゝる思子のきや引進ミの為」となっている。

住居人の台詞「鎌手唐て」(No.352)が「鎗長刀」となっている。

住居人の台詞「子のきあかに」(No.359)が「思子のきやに」となっている。

住居人の台詞「からめかしゆる」(No.362)が「からめかしめしやいる」となっている。

住居人の台詞「此事や按司に」(No.364)が「どう此事や按司に」となっている。

住居人の台詞「按司の大将に」(No.368)が「按司の大将」となっている。

与座の大主の台詞「ワか主人按司」(No.403)が「我主人按司の」となっている。

与座の大主の台詞「やすてやすまらぬ」(No.404)が「捨置やならぬ」となっている。

与座の大主の台詞「南山十五ヶや」(No.405)が「南山の十五ヶや」となっている。

与座の大主の台詞「先や四方の海」(No.407)が「今や波風も」となっている。

与座の大主の台詞「波風も立ぬ」(No.408)が「静なてをれへ」となっている。

与座の大主の台詞「御万人のまきり」(No.410)が「御万人のあんど」となっている。

与座の大主の台詞「御気の毒めしやうち」(No.419)が「朝夕御気の毒」となっている。

与座の大主の台詞「こころとりおさめ」(No.423)が「互に取治め」となっている。

与座の大主の台詞「美よんきをかて」(No.433)が「みよんき事拝て」となっている。

与座の大主の台詞「きやる事やすか」(No.434)が「きやる事よやすか」となっている。

与座の大主の台詞「いちやんてやりきやしゆか」(No.442)が「いや言きやんてやりきやしよか」となっている。

ト書き「与座道行言葉」(No.457)が「与座の大主」となっている。

与座の大主の台詞「千種萌出て」(No.459)が「千原盛り出て」となっている。

与座の大主の台詞「やあなし子」(No.465)が「やあなし子」となっている。

与座の大主の台詞「春の草の葉や」(No.466)が「春の草の葉も」となっている。

虎千代の台詞「又も春来れハ」(No.472)が「めくて春くれは」となっている。

与座の大主の台詞「やあなし子」(No.481)が「やあなし子」となっている。

役名「虎千代」(No.486)が「虎千代とら松」となっている。

虎千代の台詞「おう」(No.487)が「御礼(虎千代虎松)」となっている。

役名「虎千代」(No.518)が「虎松」となっている。

虎千代の台詞「南山もけふや」(No.520)が「南山のけふや」となっている。

与座の大主の台詞「段々の遊び」(No.524)が「色々の遊び」となっている。

与座の大主の台詞「歌や舞ひ遊て」(No.526)が「歌や舞遊ひ」となっている。

役名「虎松」(No.529)が「虎千代」となっている。

虎松の台詞「おれ程の増る」(No.531)が「おれふともまざる」となっている。

虎松の台詞「沙汰よめしやら」(No.534)が「沙汰やめしやいら」となっている。

音曲「恩納ふし」(No.545～549)が「与座の大主」の台詞となっている。

音曲「千代松亀千代出羽長金武ふし」(No.550)が「千代松亀千代道行金武ふし」となっている。

役名「千代松」の台詞(No.563～574)が「亀千代」となっている。



る。

千代松の台詞「父親の事と」(No.591)が「父親の事や」となっている。

千代松の台詞「御引留られて」(No.593)が「御引留おかれ」となっている。

千代松の台詞「いきやるいきなひに」(No.595)が「いきやる有様に」となっている。

千代松の台詞「引よ留めしやうち」(No.608)が「御引留めしやうち」となっている。

北山の按司の台詞「やあ千代松亀千代」(No.626)が「やあ千代松やあ亀千代」となっている。

北山の按司の台詞「返事よさんしゆもの」(No.628)が「返事やさんしよもの」となっている。

北山の按司の台詞「きやああれハすミゆか」(No.642)が「いちやあれは済よか」となっている。

北山の按司の台詞「考てきかす」(No.643)が「考てむてよ」となっている。

親泊大主の台詞「呑込いをやへれハ」(No.653)が「呑んくみやいをれは」となっている。

親泊大主の台詞「若か南山の」(No.654)が「若か南山に」とな

っている。

親泊大主の台詞「引よ留置て」(No.661)が「引よ留置い」となっている。

仲宗根のひやの台詞「事洩てすまぬ」(No.673)が「事洩て済へらぬ」となっている。

仲宗根のひやの台詞「急ち此事や」(No.674)が「急ち此事に」となっている。

北山の按司の台詞「一段なことよ」(No.677)が「一段なことよ」となっている。

北山の按司の台詞「やあ」(No.678)が「やあ」となっている。

謝名の大主の台詞「北山の悪名」(No.710)が「北山や悪名」となっている。

謝名の大主の台詞「いらぬ慈悲尽ち」(No.720)が「あいらぬ慈悲尽ち」となっている。

謝名の大主の台詞「あなたるものも」(No.721)が「あなたるものも」となっている。

謝名の大主の台詞「亀千代か今の」(No.748)が「南山の按司の」となっている。

謝名の大主の台詞「取堅守て」(No.769)が「堅取守て」とな

ている。

謝名の大主の台詞「太刀かたなてすも」(No.776)が「刀刃よてすん」となっている。

謝名の大主の台詞「いさめこと好て」(No.786)が「荒ミ事嫌て」となっている。

謝名の大主の台詞「そさめこと嫌て」(No.787)が「諫事好て」となっている。

謝名の大主の台詞「人の肝あけて」(No.789)が「人の胸明て」となっている。

謝名の大主の台詞「海に舳渡」(No.804)が「海に船渡り」となっている。

天底の子の台詞「あゝ此上や存す」(No.826)が「あゝ此上や存寄」となっている。

親泊大主の台詞「大主の計」(No.830)が「大主の計事」となっている。

親泊大主の台詞「智高けなひぬあれハ」(No.837)が「智高ないぬあとて」となっている。

北山の按司の台詞「謀めたるこの」(No.851)が「計らたるこの」となっている。

北山の按司の台詞「此事にこゝも」(No.856)が「此事やこゝも」

となっている。

謝名の大主の台詞「ためし数あすか」(No.876)が「例し数あすや」となっている。

謝名の大主の台詞「あやまちのあとて」(No.877)が「あやまれのあとて」となっている。

謝名の大主の台詞「御慈悲ある御代の」(No.883)が「御慈悲ある御主の」となっている。

謝名の大主の台詞「あゝなまの御詔事」(No.887)が「あゝけふのみよんき事」となっている。

北山の按司の台詞「や大主」(No.896)が「やあ大主」となっている。

謝名の大主の台詞「おうやあ天底の子」(No.902)が「やあ天底の子」となっている。

天底の子の台詞「おう」(No.908)が「拝留やへて」となっている。

役名「千代松亀千代」(No.947)が「南山の兄子」となっている。

役名「与座」(No.958)が「父」となっている。

与座の大主の台詞「いやなあれハ」(No.965)が「いやなかあれハ」となっている。

千代松の台詞「とまひくにきやすか」(No.977)が「とまひ

「よきやすか」となっている。

役名「父千代松亀千代」(No.997)が「父并千代松亀千代」となっている。

北山の按司の台詞「一 やひ大主」(No.1005)が「一 多ひ大主」となっている。

役名「与座」(No.1010)が「父」となっている。

役名「北山ノ子兩人虎千代」の台詞が(No.1018～1021)が「北山の子兩人」の台詞となっている。

北山の按司の台詞「生れたるものよ」(No.1028)が「生れとるものよ」となっている。

北山の按司の台詞「道や又なひらぬ」(No.1030)が「道やまたないさめ」となっている。

北山の按司の台詞「我か側におちやひ」(No.1033)が「我か側に置て」となっている。

虎千代の台詞「素立をる事や」(No.1041)が「素立あることや」となっている。

虎千代の台詞「御臣下よやゆる」(No.1044)が「御臣下とやよる」となっている。

虎松の台詞「捨られて居とて」(No.1052)が「捨られてをすか」となっている。

虎松の台詞「やき前とワ身や」(No.1055)が「いきやし暮しやへか」となっている。

虎松の台詞「いきやかしやへら」(No.1056)が「舎兄前とわんや」となっている。

役名「千代松」(No.1057)が「千代松亀千代」となっている。

与座の大主の台詞「片時やならぬ」(No.1084)が「片付やならぬ」となっている。

音曲「さん山ふし」(No.1088)が「あけ七尺ふし」となっている。

音曲「ふたつなひぬワ身の」(No.1089)が「一 片付やならぬ」となっている。

音曲「中にはさまれて」(No.1090)が「中にはさまりて」となっている。

音曲「ころくら闇に」(No.1091)が「我きもくらやみに」となっている。

役名「親子共」(No.1105)が「父并子共惣人数」となっている。

役名「千代松亀千代」の台詞(No.1125～1134)が「千代松」の台詞となっている。

役名「与座」(No.1158)が「同人」となっている。

与座の大主の台詞「ふたり此御代に」(No.1162)が「二人この

世界に」となっている。

与座の大主の台詞「生れやいをれハ」(No. 1163)が「いきちを  
る間や」となっている。

与座の大主の台詞「国公安全」(No. 1166)が「不意の急難」と  
なっている。

与座の大主の台詞「疑やあやへらぬ」(No. 1167)が「絶てあや  
へらぬ」となっている。

北山の按司の台詞「あゝ大主の」(No. 1169)が「あゝ  
誠と大主の」となっている。

与座の大主の台詞「あゝ御情の御趣意」(No. 1181)が「  
御情の御趣意」となっている。

与座の大主の台詞「思きやけもすらぬ」(No. 1184)が「思  
きやけんないらぬ」となっている。

与座の大主の台詞「日も暮てをれハ」(No. 1195)が「夜もくれ  
てをらハ」となっている。

与座の大主の台詞「歩まらぬわミの」(No. 1196)が「歩らぬあ  
もの」となっている。

与座の大主の台詞「打立んしゆもの」(No. 1200)が「押列て登  
ら」となっている。

音曲「親子振合ひ」(No. 1206)が「親子道とまいて」

となっている。

音曲「石根ふし」(No. 1217)が「石根の道ふし」となっている。  
音曲「久志ミなどおりて」(No. 1220)が「古宇利港下りて」と  
なっている。

「与那覇本」

音曲「千代松亀千代出羽干瀬節」(No. 2)が「干瀬節」となっ  
ている。

音曲「つれなさやふたり」(No. 3)が「離面二人ヒ」となっ  
ている。

千代松の台詞「南山の頭役」(No. 10)が「南山頭役」となっ  
ている。

千代松の台詞「親の大主と」(No. 14)が「父親ノ事ド」となっ  
ている。

千代松の台詞「寄こと聞る」(No. 22)が「寄事ドヤヨル」とな  
っている。

千代松の台詞「此間のくれしや」(No. 28)が「此レ迄ノ苦シヤ」  
となっている。

千代松の台詞「子なゆるものや」(No. 30)が「子ナトル者ヤ」  
となっている。

亀千代の台詞「おとろしやよあもの」(No.55)が「驚シヤアモ  
ノ」となっている。

亀千代の台詞「道よたてら」(No.61)が「道立ラ」となってい  
る。

音曲「一のかす思童」(No.65)が「一ノガス玉金」とな  
っている。

千代松の台詞「哀れ父親よ」(No.78)が「哀リ父親ヤ」となっ  
ている。

千代松の台詞「是非よ聞分て」(No.80)が「是非ヨ聞トメテ」  
となっている。

千代松の台詞「おし列てむきゆて」(No.101)が「列テ行ヂヲト  
テ」となっている。

千代松の台詞「怪我のともあらハ」(No.103)が「怪我ノ又アラ  
バ」となっている。

千代松の台詞「不孝の罪報」(No.106)が「不孝罪報ヒ」となっ  
ている。

千代松の台詞「しのきしのからぬ」(No.107)が「凌ギ凌ガリミ」  
となっている。

千代松の台詞「時移ちすまぬ」(No.149)が「時移チスナビラン」  
となっている。

音曲「一義理とめて我身の」(No.152)が「一義理トモテ我  
身ヤ」となっている。

亀千代の台詞「波も又ないらぬ」(No.166)が「波モ又立ン」と  
なっている。

亀千代の台詞「真臚押風に」(No.167)が「マトモ押風ト」とな  
っている。

音曲「運天のミなと」(No.179)が「嘉礼ヨシノ御船」となっ  
ている。

音曲「なまときやる」(No.180)が「ハルガ清サ」となってい  
る。

千代松の台詞「廻り逢とき」(No.187)が「廻ルアウ時ニ」と  
なっている。

住居人の台詞「一むゝ舟の入ゆる様子」(No.211)が「シ、船  
ノキヤアウル様子」となっている。

住居人の台詞「まあからやひめしやいか」(No.215)が「マアカ  
ラヤイメシヤビガ」となっている。

千代松の台詞「旅のものやすか」(No.220)が「トマイ／＼ニキ  
ヤスガ」となっている。

千代松の台詞「知る人もをらぬ」(No.221)が「知ル人ヤ居ラヌ」  
となっている。

住居人の台詞「御二所の御様子一」(No.230)が「御二人ノ御様子」となっている。

役名「住居人」(No.247・340・389)が「居拾人」となっている。

住居人の台詞「あゝやう一」(No.256)が「ニツタア」となっている。

住居人の台詞「先ものにととてむ一」(No.258)が「先物ニタトテンタイ」となっている。

住居人の台詞「いまひんし一やうち」(No.269)が「イマインシヤウチヤンナ」となっている。

住居人の台詞「たうものさ一うすや」(No.271)が「トウ御シハヤ」となっている。

住居人の台詞「先おかんちうたや一くる」(No.273)が「先御岩重ダヤビンド」となっている。

住居人の台詞「又十七八の一」(No.295)が「又十七八成ル」となっている。

住居人の台詞「度々御酒盛一」(No.297)が「度々ノ御酒盛リ」となっている。

住居人の台詞「大主も果報な人たや一くる」(No.300)が「果報ナ人ダヤビル」となっている。

住居人の台詞「御暇みよんにゆける一」(No.303)が「度々御暇御

ニヨケンドン」となっている。

住居人の台詞「頓て夫婦の縁につなかつて一」(No.308)が「シヨル内ヤガテ夫婦ノ縁ニツナガレテ」となっている。

住居人の台詞「故郷の事も一」(No.317)が「故郷ノ妻子ノ事モ」となっている。

住居人の台詞「あゝ至極哀れたや一へる」(No.320)が「アゝ与所ナガラン至極哀リダヤビル」となっている。

住居人の台詞「御世話あめしやうむな一」(No.343)が「御世話ヤ召ンナ」となっている。

住居人の台詞「なまさきおんにゆけよたる一」(No.344)が「今先ウンノキイル」となっている。

住居人の台詞「思子のきや引進の為一」(No.350)が「イ、コル思子ノキヤ引進ノ為」となっている。

住居人の台詞「鎌手唐て一」(No.352)が「ヤイ長刀鎌手唐手」となっている。

住居人の台詞「跡先帰ゆすや一」(No.357)が「跡先マヘスヤ」となっている。

住居人の台詞「合点やこと一」(No.358)が「合点ヤテ」となっている。

住居人の台詞「子のきあかに一」(No.359)が「御思子ノチャニ」

となっている。

住居人の台詞「按司の御腰立」(No.361)が「南山ノ按司ノ美腰立」となっている。

住居人の台詞「御計むていやへん」(No.363)が「御計ンデイヤビンダウ」となっている。

住居人の台詞「按司の大將に」(No.368)が「按司ノ大將」となっている。

住居人の台詞「謝名の大主むていふる人の」(No.369)が「謝名ノ大主ンデイヨル人ノ」となっている。

千代松の台詞「段々の肝入」(No.385)が「段々ノ御肝入」となっている。

与座の大主の台詞「国よ疲らしゆる」(No.402)が「国ヨツカラシヨシ」となっている。

与座の大主の台詞「ワか主人按司」(No.403)が「我ガ主人按司ノ」となっている。

与座の大主の台詞「やすてやすまらぬ」(No.404)が「捨置ヤナラン」となっている。

与座の大主の台詞「南山十五ヶや」(No.405)が「南山ノ十五カヤ」となっている。

与座の大主の台詞「先や四方の海」(No.407)が「今ヤ波風ン」

となっている。

与座の大主の台詞「波風も立ぬ」(No.408)が「静ナテヲリバ」となっている。

与座の大主の台詞「御万人のまきり」(No.410)が「御万人ノアンド」となっている。

与座の大主の台詞「御気の毒めしやうち」(No.419)が「朝夕御気ノ毒」となっている。

与座の大主の台詞「こゝろとりおさめ」(No.423)が「互ニ取治メ」となっている。

与座の大主の台詞「美よんきをかて」(No.433)が「メヨンキ事拝テ」となっている。

与座の大主の台詞「きやる事やすか」(No.434)が「キヤル事ヨヤスガ」となっている。

与座の大主の台詞「いちやんてやりきやしゆか」(No.442)が「イヤ言キヤンテヤリキヤシヨガ」となっている。

与座の大主の台詞「やあ〜なし子」(No.465)が「ヤアナシ子」となっている。

与座の大主の台詞「春の草の葉や」(No.466)が「春ノ草ノ葉ン」となっている。

与座の大主の台詞「やあ〜」(No.481)が「ヤア〜」

産子」となっている。

与座の大主の台詞「けふ【や】(の)誇らしやん」(No.482)が「今日ノ誇ラシヤノ」となっている。

与座の大主の台詞「たうく習ひとたる手並」(No.484)が「ナリトタル手並」となっている。

与座の大主の台詞「振立て見せれ」(No.485)が「振りタキヤイ見シリ」となっている。

役名「虎千代」(No.486)が「二人」となっている。

虎千代の台詞「一 おう」(No.487)が「一 拝留ヤヒテ(虎千代虎松)」となっている。

与座の大主の台詞「一 あゝ出来たく」(No.508)が「一 ハアデケタく」となっている。

与座の大主の台詞「一 南山もけふや」(No.523)が「一 南山ノ今日ヤ」となっている。

役名「虎松」(No.529)が「虎千代」となっている。

音曲「千代松亀千代出羽長金武ふし」(No.550)が「長金武節」となっている。

役名「亀千代」(No.559)が「同人」となっている。

千代松の台詞「父親の事と」(No.591)が「父親ノ事ヤ」となっている。

千代松の台詞「いきやるいきなひに」(No.595)が「イキヤルアリ様ニ」となっている。

千代松の台詞「引よ留めしやうち」(No.608)が「御引留召チ」となっている。

北山の按司の台詞「やあ千代松亀千代」(No.626)が「ヤア千代松ヤア亀千代」となっている。

北山の按司の台詞「返事よさんしゆもの」(No.628)が「返事ヤサンシヨモノ」となっている。

仲宗根のひやの台詞「一 たうく」(No.636)が「一 タウトく」となっている。

北山の按司の台詞「今のこやれは」(No.641)が「今ノ願事ヤ」となっている。

北山の按司の台詞「きやああれハすミゆか」(No.642)が「イキヤアレバ済ガ」となっている。

北山の按司の台詞「考てきかす」(No.643)が「考テンデヨ」となっている。

親泊大主の台詞「呑込いをやくれハ」(No.653)が「呑ンコメイ居レバ」となっている。

親泊大主の台詞「引よ留置て」(No.661)が「引ヨ留置バ」となっている。



仲宗根のひやの台詞「事洩てすまぬ」(No.673)が「事洩テ済ビラヌ」となっている。

北山の按司の台詞「やあ〜」(No.678)が「ヤア」となっている。

謝名の大主の台詞「仕合やおまな」(No.704)が「仕合トウマナ」となっている。

謝名の大主の台詞「こまに肝寄る」(No.718)が「コマニ又クマニ肝寄ル」となっている。

謝名の大主の台詞「いらぬ慈悲尽ち」(No.720)が「ア、イラ慈悲尽チ」となっている。

謝名の大主の台詞「あなたとるものも」(No.721)が「アダナトル事ン」となっている。

天底の子の台詞「留ておきやへらに」(No.737)が「留テ置ヒラ」となっている。

謝名の大主の台詞「探りきる程の」(No.744)が「探シキル程ノ」となっている。

謝名の大主の台詞「亀千代か今の」(No.748)が「南山ノ按司ノ」となっている。

謝名の大主の台詞「御使の御趣意」(No.749)が「御使ノ御意趣」となっている。

謝名の大主の台詞「太刀かたなてすも」(No.776)が「刀刃ヨテスモ」となっている。

謝名の大主の台詞「御慎あとて」(No.779)が「御慎メアテモ」となっている。

謝名の大主の台詞「いさめこと好て」(No.786)が「ソザメ事嫌テ」となっている。

謝名の大主の台詞「そさめこと嫌て」(No.787)が「イサメ言好テ」となっている。

謝名の大主の台詞「跡影【も】よ隠す」(No.792)が「跡カジヨ隠キ」となっている。

天底の子の台詞「あゝ此上や存す」(No.826)が「ア、此ノ上や存寄」となっている。

親泊大主の台詞「大主の計」(No.830)が「大主ノ計事」となっている。

親泊大主の台詞「おとさあるゆへと」(No.833)が「ウトサアル故ニ」となっている。

親泊大主の台詞「目の前勇力の」(No.834)が「目ノ前勇ノ」となっている。

親泊大主の台詞「智高けなひぬあれへ」(No.837)が「智高ケナインアトテ」となっている。

親泊大主の台詞「をかんちゆめやへら」(No.841)が「拝留ヤビテ」となっている。

謝名の大主の台詞「沙汰されるものや」(No.874)が「沙汰サレモノヤ」となっている。

謝名の大主の台詞「御語よめしやうち」(No.879)が「ウサトヘメシヤウチ」となっている。

謝名の大主の台詞「御慈悲ある御代の」(No.883)が「御慈悲アル御主ノ」となっている。

北山の按司の台詞「や大主」(No.896)が「ヤア謝名ノ大主」となっている。

役名「謝名」(No.901)が「謝名グリ」となっている。

謝名の大主の台詞「おうやあ天底の子」(No.902)が「ヤア天底ノ子」となっている。

天底の子の台詞「おう」(No.908)が「拝留ヤビテ」となっている。

北山の按司の台詞「兄子千代松弟子亀千代」(No.933)が「兄子千代松弟子亀千代」となっている。

与座の大主の台詞「知りめしやうちいまひら」(No.936)が「知リ召チイマイガ」となっている。

与座の大主の台詞「父」(No.949)が「与座」となっている。

音曲「あけゆめかやゆら」(No.953)が「夢ガヤヨラ」となっている。

与座の大主の台詞「哀れ面影も」(No.962)が「今ノ面顔モ」となっている。

与座の大主の台詞「行逢ててやり知よめ」(No.964)が「行逢テ、ヤヒ知ラヌ」となっている。

北山の按司の台詞「やあ亀千代」(No.982)が「亀千代」となっている。

北山の按司の台詞「片付かぬあてと」(No.990)が「片付ノアテド」となっている。

役名「父千代松亀千代」(No.997)が「親子三人」となっている。

千代松の台詞「願たこと叶て誇らしやとあやへひる」此御恩一期／＼にかめやへら」(No.1000～1003)が親子三人の台詞となっている。

北山の按司の台詞「やひ大主」(No.1005)が「エイ大主」となっている。

与座の大主の台詞「あてなしのふたり」(No.1016)が「アテナシノ二人ヤ」となっている。

役名「北山ノ子兩人虎千代」(No.1018)が「虎千代」となっている。

虎千代の台詞「ワ身も諸共に」(No.1020)が「我身モ諸共」となっている。

北山の按司の台詞「南山にいきゆる」(No.1029)が「親烈テ行ル」となっている。

北山の按司の台詞「道や又なひらぬ」(No.1030)が「道ヤ又ナイサメ」となっている。

虎千代の台詞「素立をる事や」(No.1041)が「素立アル事ヤ」となっている。

虎松の台詞「捨てまひんやれハ」(No.1054)が「捨テマイルヤラバ」となっている。

虎松の台詞「やき前とワ身や」(No.1055)が「イチヤシ暮シヤヒガ」となっている。

虎松の台詞「いきやかしやへら」(No.1056)が「舎兄前ト我メヤ」となっている。

与座の大主の台詞「片時やならぬ」(No.1084)が「片付モナラヌ」となっている。

役名「親子共」(No.1103)が「親子三人」となっている。

与座の大主の台詞「いつし忘れゆか」(No.1116)が「イツシ忘ヤビガ」となっている。

与座の大主の台詞「ふたり此御代に」(No.1162)が「二人此ノ

世界ニ」となっている。

与座の大主の台詞「生れやいをれハ」(No.1163)が「生チ居ル間ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「国公安全」(No.1166)が「不意ノ急難」となっている。

与座の大主の台詞「疑やあやへらぬ」(No.1167)が「絶テアヤビラヌ」となっている。

与座の大主の台詞「あゝ御情の御趣意」(No.1181)が「御情ノ御趣意」となっている。

与座の大主の台詞「思きやけもすらぬ」(No.1184)が「思チヤケンナイラヌ」となっている。

与座の大主の台詞「嬉しさとあすか」(No.1187)が「誇ラシヤドアスガ」となっている。

与座の大主の台詞「日も暮てをれハ」(No.1195)が「夜モ暮テ行バ」となっている。

与座の大主の台詞「歩まらぬわミの」(No.1196)が「歩マラヌアモノ」となっている。

与座の大主の台詞「打立んしゆもの」(No.1200)が「押烈テ登ラ」となっている。

与座の大主の台詞「御暇よしやへら」(No.1202)が「御暇モシ

ヤビラ」となっている。

音曲「一 親子振合ひ」(No.1206)が「一 親子道トマイテ」となっている。

音曲「石根ふし」(No.1217)が「歌」となっている。

音曲「久志ミなどおりて」(No.1220)が「古宇利港ヲリテ」となっている。

音曲「名護渡まで見送り」(No.1225)が「名護渡迄送ラ」となっている。

「恩河本」

音曲「千代松亀千代出羽干瀬節」(No.2~6)が「千代松亀千代出羽散山フシ」となっている。

役名「千代松」(No.7~43)が「全両人」と兄弟の台詞になっている。

千代松の台詞「親の大主と」(No.14)が「親ノ大主父親之事ト」(千代松亀千代の台詞)となっている。

千代松の台詞「子なゆるものや」(No.30)が「子ナトルモノ、」(千代松亀千代の台詞)となっている。

千代松の台詞「やすてをられらぬ」(No.31)が「ヤステヲラレヨミ」(千代松亀千代の台詞)となっている。

千代松の台詞「助けほしやあもの」(No.40)が「助カブシヤノ」(千代松亀千代の台詞)となっている。

亀千代の台詞「子と成る道の」(No.52)が「子ナトル道之」となっている。

亀千代の台詞「人に生れたる」(No.60)が「人ニ生タタ」となっている。

音曲「仲間ふし」(No.64)が「母出羽仲間フシ」となっている。

音曲「一 のかす思童」(No.65)が「一 ノガス玉金」となっている。

千代松の台詞「しのきしのからぬ」(No.107)が「シノガラニアレバ」となっている。

母の台詞「云ること聞ハ」(No.116)が「言ルコトヨ聞ハ」となっている。

母の台詞「我身やまちゆか」(No.133)が「我ヤ待ガ」となっている。

亀千代の台詞「肝の願しちをて」(No.144)が「肝ノ願シチュテ」となっている。

音曲「一 義理とめて我身の」(No.152)が「一 義理トモテ我身ヤ」となっている。

亀千代の台詞「波も又ないらぬ」(No.166)が「波モ又シヅカ」

となっている。

亀千代の台詞「真臚押風に」(No.167)が「真臚押風ト」となっている。

千代松の台詞「一 かほし舟筑」(No.185)が「一 カフシ船筑ヨ」となっている。

千代松の台詞「あの村に便て」(No.194)が「アノ村ヨ便テ」となっている。

役名「住居人」(No.209・225・247・340・389)が「津口当」となっている。

住居人の台詞「一 むゝ舟の入ゆる様子」(No.211)が「ン、舟之チユル様子」となっている。

千代松の台詞「思事のあとて」(No.218)が「思事ノアテド」となっている。

千代松の台詞「旅のものやすか」(No.220)が「トマイ〜ニキヤスイガ」となっている。

千代松の台詞「知る人もをらぬ」(No.221)が「知ル人ヤヲラン」となっている。

住居人の台詞「御二所の御様子」(No.230)が「御二所之御様子カ」となっている。

住居人の台詞「一 あゝ与座の大主の」(No.248)が「一 ア、

与座の大主」となっている。

住居人の台詞「むゝ得と拝てむてハ」(No.251)が「モ、得ト拝テミヤビレバ」となっている。

住居人の台詞「あゝねつたあや拝てむてハ」(No.254)が「ネットアヤ拝テンデハ」となっている。

住居人の台詞「あゝさて」(No.256)が「ア、サテネットアヤ」となっている。

住居人の台詞「ちやうと二所共」(No.259)が「二所共」となっている。

住居人の台詞「いまひんしやうち」(No.269)が「シヤウチ」となっている。

住居人の台詞「たうものさうすや」(No.271)が「タウ御世話ヤ」となっている。

住居人の台詞「又ねつたあ親かなしいと」(No.274)が「ア、ネットア親加那志ド」となっている。

住居人の台詞「按司の御側に」(No.278)が「按司之御側」となっている。

住居人の台詞「又十七八の」(No.295)が「又十七八ナヨル」となっている。

住居人の台詞「大主も果報な人たやへる」(No.300)が「果報ナ

人ダヤビル」となっている。

住居人の台詞「御暇みよんにゆける」(No.303)が「度々御暇乞  
ミュンニケヨンドン」となっている。

住居人の台詞「おれからや御めいとんたの中」(No.314)が「ウ  
リカラヤ」となっている。

住居人の台詞「又思子のきやあの」(No.315)が「ウノ思子ノキ  
ヤアノ」となっている。

住居人の台詞「かちすかりくしめしやうれ」(No.316)が「カ  
キスガ／＼」となっている。

住居人の台詞「故郷の事も」(No.317)が「又古郷ノ妻子ノ事」  
となっている。

住居人の台詞「御世話あめしやうむな」(No.343)が「御世話ヤ  
召ンナ」となっている。

住居人の台詞「武芸の数々」(No.354)が「武芸の数々不足ナイ  
ン」となっている。

住居人の台詞「子のきあめに」(No.359)が「思子之キヤアニ」  
となっている。

住居人の台詞「按司の御腰立」(No.361)が「南山ノ按司ノ御腰  
立」となっている。

住居人の台詞「按司の大将に」(No.368)が「按司ノ大将」とな

っている。

住居人の台詞「謝名の大主むていふる人の」(No.369)が「謝名  
ノ大主ンデイヤレイル人ノ」となっている。

住居人の台詞「このころ按司に」(No.370)が「コノウチ按司ニ」  
となっている。

住居人の台詞「片時も早く」(No.377)が「片時ン早々」となっ  
ている。

住居人の台詞「願ひ立めいやいくれ」(No.378)が「願立ミセヤ  
イビリ」となっている。

住居人の台詞「明日にしち随分」(No.393)が「明日ニシチ」と  
なっている。

与座の大主の台詞「国よ疲らしゆる」(No.402)が「国ヨ疲ラシ  
ユス」となっている。

与座の大主の台詞「ワか主人按司」(No.403)が「我ガ主人按司  
ノ」となっている。

与座の大主の台詞「やすてやすまらぬ」(No.404)が「捨置ヤナ  
ラン」となっている。

与座の大主の台詞「南山十五ヶや」(No.405)が「南山ノ十五ヶ  
ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「先や四方の海」(No.407)が「今ヤ波風ン」

となっている。

与座の大主の台詞「波風も立ぬ」(No.408)が「静ナテヲレハ」となっている。

与座の大主の台詞「安て楽ミゆる」(No.411)が「ヤスク楽シミユル」となっている。

与座の大主の台詞「御気の毒めしやうち」(No.419)が「朝夕御気ノ毒」となっている。

与座の大主の台詞「こころとりおさめ」(No.423)が「互ニ取治ミ」となっている。

与座の大主の台詞「美よんきをかて」(No.433)が「ミュンチ事拝テ」となっている。

与座の大主の台詞「きやる事やすか」(No.434)が「キヤル事ヨヤスガ」となっている。

与座の大主の台詞「いちやんてやりきやしゆか」(No.442)が「イヤ言キヤンテヤリキヤシユガ」となっている。

与座の大主の台詞「虎松も押しつれて」(No.454)が「虎松ン列テ」となっている。

与座の大主の台詞「千種萌出て」(No.459)が「千草盛り出テ」となっている。

与座の大主の台詞「やあ〜なし子」(No.465)が「一ヤ

ア産子」となっている。

虎千代の台詞「又も春来れハ」(No.472)が「シグテ春クレハ」となっている。

役名「与座」(No.480)が「全人」となっている。

与座の大主の台詞「やあ〜」(No.481)が「一ヤア産子」となっている。

役名「虎千代」(No.486)が「虎千代虎松」となっている。

虎千代の台詞「おう」(No.487)が「一御礼」(虎千代虎松の所作)となっている。

虎千代の台詞「此遊ひあや〜ひめ」(No.521)が「此ノ遊ビシヤビミ」となっている。

与座の大主の台詞「段々の遊ひ」(No.524)が「色々ノ遊ビ」となっている。

与座の大主の台詞「歌や舞ひ遊」(No.526)が「歌ヤ舞ヒ遊ビ」となっている。

与座の大主の台詞「是よりも増」(No.527)が「是ヨリンマサテ」となっている。

虎松の台詞「沙汰よめしやら」(No.534)が「沙汰ヤ召ラ」となっている。

音曲「千代松亀千代出羽長金武ふし」(No.550)が「千代松亀千

代出羽金武ブシ」となっている。

役名「千代松」と台詞（No.563～574）が「亀千代」の台詞となっている。

千代松の台詞「父親の事と」（No.591）が「父親ノ事ヤ」となっている。

千代松の台詞「御引留られて」（No.593）が「御引留ウカリ」となっている。

千代松の台詞「いきやるいきなひに」（No.595）が「イキヤル有様ニ」となっている。

千代松の台詞「なやい又いまひら」（No.596）が「ナヤヒ又イマイガ」となっている。

千代松の台詞「引よ留めしやうち」（No.608）が「御引留召チ」となっている。

北山の按司の台詞「返事よさんしゆもの」（No.628）が「返事ヤサンシユモノ」となっている。

北山の按司の台詞「きやああれハすしゆか」（No.642）が「イチヤアレバ濟ガ」となっている。

北山の按司の台詞「考てきかす」（No.643）が「考テンデヨ」となっている。

親泊大主の台詞「呑込いをやへれハ」（No.653）が「呑クミヤ

イヲレバ」となっている。

親泊大主の台詞「若か南山の」（No.654）が「若カ南山ニ」となっている。

仲宗根のひやの台詞「事洩てすまぬ」（No.673）が「事洩チ濟ナヒラン」となっている。

仲宗根のひやの台詞「急ち此事や」（No.674）が「急チ此事ニ」となっている。

北山の按司の台詞「やあ〜」（No.678）が「ヤア」となっている。

天底の子の台詞「たゝ真肝しちをて」（No.730）が「タゝ真肝シチュテ」となっている。

天底の子の台詞「留ておきやへらに」（No.737）が「留テ置チヤビラナ」となっている。

謝名の大主の台詞「亀千代か今の」（No.748）が「南山ノ按司ノ」となっている。

謝名の大主の台詞「取よ定めとん」（No.757）が「〜」となっている。

謝名の大主の台詞「道直にあとて」（No.765）が「道直クアトテ」となっている。

謝名の大主の台詞「取堅守て」（No.769）が「堅ク取守テ」とな



っている。

謝名の大主の台詞「太刀かたなてすも」(No.776)が「刀刃ヨテスン」となっている。

謝名の大主の台詞「人の肝あけて」(No.789)が「人の胸開テ」となっている。

北山の按司の台詞「謀ゆる事や」(No.822)が「諫ミヨル言葉」となっている。

天底の子の台詞「あゝ此上や存す」(No.826)が「アゝ、此事や存寄」となっている。

親泊大主の台詞「大主の計」(No.830)が「大主ノ計事」となっている。

親泊大主の台詞「智高けなひぬあれハ」(No.837)が「智高ナインアトテ」となっている。

北山の按司の台詞「おれうれもよたしや」(No.844)が「ウレコレンヨタシヤ」となっている。

北山の按司の台詞「此事にいくも」(No.856)が「此事ヤイヒン」となっている。

謝名の大主の台詞「あやまちのあとて」(No.877)が「アヤマレノアトテ」となっている。

謝名の大主の台詞「御語よめしやうち」(No.879)が「ウサトリ

ヨ召チ」となっている。

謝名の大主の台詞「御慈悲ある御代の」(No.883)が「御慈悲アル御主之」となっている。

北山の按司の台詞「や大主」(No.896)が「ヤア大主」となっている。

北山の按司の台詞「南山に遣ハしゆる」(No.897)が「南山ニ遣ヒシユル」となっている。

謝名の大主の台詞「おうやあ天底の子」(No.902)が「ヤア天底ノ子」となっている。

天底の子の台詞「おう」(No.908)が「一 拝留ヤビテ」となっている。

与座の大主の台詞「知りめしやうちいまひら」(No.936)が「知リ召チイマイガ」となっている。

与座の大主の台詞「父」(No.949)が「与座」となっている。

役名「父千代松亀千代」(No.997)が「父并千代松亀千代」となっている。

北山の按司の台詞「やひ大主」(No.1005)が「一 エイ大主」となっている。

役名「北山ノ子兩人虎千代」(No.1018)が「虎千代」となっている。

北山の按司の台詞「我が側におちやひ」(No.1033)が「我が側ニウチユテ」となっている。

虎千代の台詞「御臣下よやゆる」(No.1044)が「御臣下ドヤユル」となっている。

虎松の台詞「母親にたひんす」(No.1051)が「母親ニダイン」となっている。

虎松の台詞「捨られて居とて」(No.1052)が「捨ラレテヲスガ」となっている。

虎松の台詞「やき前とワ身や」(No.1055)が「イチヤシ暮シヤビガ」となっている。

虎松の台詞「いきやかしやくら」(No.1056)が「舎兄前トワンヤ」となっている。

与座の大主の台詞「片時やならぬ」(No.1084)が「片付ヤナラシ」となっている。

役名「親子共」(No.1105)が「親子五人」となっている。

役名「千代松龜千代」の台詞 (No.1125～1134) が「千代松」の台詞となっている。

役名「与座」(No.1158)が「全人」となっている。

与座の大主の台詞「ふたり此御代に」(No.1162)が「二人コノ世界ニ」となっている。

与座の大主の台詞「生れやいをれへ」(No.1163)が「生キヲル間ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「国公安全」(No.1166)が「不意ノ急難」となっている。

与座の大主の台詞「疑やあやへらぬ」(No.1167)が「絶テアヤビラン」となっている。

北山の按司の台詞「あゝ大主の」(No.1169)が「ア、誠ト大主ノ」となっている。

与座の大主の台詞「嬉しさとあすか」(No.1187)が「誇ラシヤドアスガ」となっている。

与座の大主の台詞「打立んしゆもの」(No.1200)が「押列テ登ラ」となっている。

音曲「親子振合ひ」(No.1206)が「親子道トマイテ」となっている。

音曲「石根ふし」(No.1217)が「伊志根フシ」となっている。

音曲「久志ミなどおりて」(No.1220)が「久理港トウレテ」となっている。

音曲「名護渡まで見送ら」(No.1225)が「名護渡迄送ラ」となっている。

「兼島本」

音曲「千代松亀千代出羽干瀬節」(No.2)が「干瀬節」となっている。

千代松の台詞「親の大主と」(No.14)が「父親ノ事ド」となっている。

千代松の台詞「御詔事拝て」(No.16)が「詔ス事拝テ」となっている。

千代松の台詞「寄こと聞る」(No.22)が「寄事ドヤヨル、」となっている。

千代松の台詞「あけやうはかなさや」(No.24)が「アケヤウ我が成サヤ」となっている。

千代松の台詞「子なゆるものや」(No.30)が「子成トル者ヤ」となっている。

千代松の台詞「やすてをられらぬ」(No.31)が「安ステ居ラレヨメ、」となっている。

亀千代の台詞「生とる者や」(No.47)が「生レタル者ヤ、」となっている。

亀千代の台詞「鳥もけたものも」(No.48)が「鳥獣ノン」となっている。

亀千代の台詞「情けあるならひ」(No.49)が「誠アル習イ、」と

なっている。

音曲「一のかす思童へ」(No.65)が「一ノガス玉金」となっている。

音曲「ものめかほしちをる」(No.66)が「者思顔シチャル、」となっている。

千代松の台詞「語ゆることに」(No.73)が「語ヲヨル事ニ、」となっている。

千代松の台詞「哀れ父親よ」(No.78)が「哀れ、父親ヤ」となっている。

母の台詞「いきやし手はなしやひ」(No.88)が「如何シ手放サ伊」となっている。

千代松の台詞「あてなしとめしやうな」(No.96)が「アテ産子ト召シヨナ」となっている。

千代松の台詞「怪我のともあらへ」(No.103)が「軽(注：怪の誤記)我ノ又アラバ、」となっている。

千代松の台詞「しのきしのからぬ」(No.107)が「凌ガラン有レバ、」となっている。

母の台詞「云ること聞へ」(No.116)が「言ル事ヨ聞ケバ」となっている。

亀千代の台詞「頓て父親よ」(No.142)が「髟テ父親子」となっ

ている。

音曲「義理とめて我身の」(No.152)が「義理ト思テ我身ヤ」となっている。

亀千代の台詞「波も又ないらぬ」(No.166)が「波ン又立ン」となっている。

亀千代の台詞「真臚押風に」(No.167)が「真臚押風ト」となっている。

音曲「運天のミなと」(No.179)が「嘉礼吉ノ御舟」となっている。

音曲「なまとつきやる」(No.180)が「走ルガ清サ」となっている。

亀千代の台詞「いきやか又なゆら」(No.201)が「イキヤガ又成ヨガ」となっている。

住居人の台詞「まあからやひめしやいか」(No.215)が「マアカラガヤイ召ヤビ、ガ」となっている。

千代松の台詞「旅のものやすか」(No.220)が「ドマイノニ着スガ」となっている。

住居人の台詞「御二所の御様子」(No.230)が「御二人ノ、御様子」となっている。

住居人の台詞「細々と語てたはふれ」(No.231)が「細々語テ賜

り、」となっている。

住居人の台詞「あゝ与座の大主の」(No.248)が「ア、与座ノ大主」となっている。

住居人の台詞「よう似ちいまひんしやいん」(No.253)が「能ク似チ在マインシヤビイン」となっている。

住居人の台詞「あゝさて」(No.256)が「ニッター」となっている。

住居人の台詞「ちやうと二所共」(No.259)が「恰度二人共」となっている。

住居人の台詞「あてなしのきやの」(No.266)が「アテナシノキヤ」となっている。

住居人の台詞「いまひんしやうち」(No.269)が「イメンシヤウチヤンナ」となっている。

住居人の台詞「たうものさうすや」(No.271)が「トウ、シワヤ」となっている。

住居人の台詞「先おかんちうたやへる」(No.273)が「先ヅ御岩重ダヤビンドー」となっている。

住居人の台詞「度々御酒盛」(No.297)が「度々ノ御酒盛り」となっている。

住居人の台詞「大主も果報な人たやへる」(No.300)が「果報ナ

人ダヤビンドヲ、」となっている。

住居人の台詞「御暇みよんにゆける」(No.303)が「御暇乞度々御ニヨケヨンドン、」となっている。

住居人の台詞「明日のあさてなひ」(No.307)が「明日ノ明後日ナイシユル内ニ」となっている。

住居人の台詞「頓て夫婦の縁につなかつて」(No.308)が「頓テ夫婦ノ縁ニ繋ガレテ」となっている。

住居人の台詞「弥事六ヶ敷ない立」(No.311)が「愈ラ事ヤ六ヶ敷成イ立チ、」となっている。

住居人の台詞「又思子のきやあの」(No.315)が「又思子ノチャア、」となっている。

住居人の台詞「かちすかりくしめしやうれへ」(No.316)が「罹イ縫(ス)ガイシメシヤウレバ、」となっている。

住居人の台詞「故郷の事も」(No.317)が「故郷ノ妻子ノ事ン」となっている。

住居人の台詞「なしよたれしめしやいす聞へ」(No.319)が「泣チシヨダイシメシヤス聞ケバ、」となっている。

住居人の台詞「あゝ至極哀れたやへる」(No.320)が「ア、与所ナガラン至極哀レダヤビル」となっている。

住居人の台詞「あゝ人の上むてもおもあらぬ」(No.341)が

「ア、人ノ上デン思ラン、」となっている。

住居人の台詞「此世見捨やへて」(No.347)が「此ノ世見過ヤビテ、」となっている。

住居人の台詞「思子のきや引進の為」(No.350)が「イエクル思子ノチャア引キ進ノ為」となっている。

住居人の台詞「大原ニ出て」(No.351)が「大原ニ出ヂヤイ」となっている。

住居人の台詞「鎌手唐て」(No.352)が「長刀鎌手唐手」となっている。

住居人の台詞「跡先帰ゆすや」(No.357)が「跡先マイヨシヤ」となっている。

住居人の台詞「合点やこと」(No.358)が「合点ナ事、」となっている。

住居人の台詞「子のきああに」(No.359)が「御思子ノチャニ」となっている。

住居人の台詞「按司の御腰立」(No.361)が「南山ノ按司ノ御腰立」となっている。

住居人の台詞「済ぬかきりやきやしもならぬ」(No.366)が「済サン限りヤチャン成ラン、」となっている。

住居人の台詞「按司の大将に」(No.368)が「按司ノ大将」とな

っている。

住居人の台詞「御仕置も多ひころ取直ち」(No.372)が「置ンキ  
クル取直シ」となっている。

住居人の台詞「願ひ立めいやいへれ」(No.378)が「願立メシヤ  
ウリ」となっている。

千代松の台詞「拝む御情けに」(No.384)が「拝ム御情ケン」と  
なっている。

与座の大主の台詞「国よ疲らしゆる」(No.402)が「国ヨ疲ラシ  
ヨシ」となっている。

与座の大主の台詞「わか主人按司」(No.403)が「我が主人按司  
ノ」となっている。

与座の大主の台詞「やすてやすまらぬ」(No.404)が「捨テ置ヤ  
ナラン」となっている。

与座の大主の台詞「南山十五ヶや」(No.405)が「南山ノ十五ヶ  
ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「先や四方の海」(No.407)が「今ヤ波風ン」  
となっている。

与座の大主の台詞「波風も立ぬ」(No.408)が「静成テ居レバ、」  
となっている。

与座の大主の台詞「御万人のまきり」(No.410)が「御万人ノ安

堵」となっている。

与座の大主の台詞「軍事やまぬ」(No.415)が「軍事絶ラン、」  
となっている。

与座の大主の台詞「御気の毒めしやうち」(No.419)が「朝夕御  
気毒」となっている。

与座の大主の台詞「ころとりおさめ」(No.423)が「互ニ取り  
治メ」となっている。

与座の大主の台詞「美よんきをかて」(No.433)が「メヨチ事拝  
デ」となっている。

与座の大主の台詞「きやる事やすか」(No.434)が「来ル事ヨヤ  
スガ」となっている。

与座の大主の台詞「いちやんでやりきやしゆか」(No.442)が「イ  
ヤ言チヤテイ如何シヨガ」となっている。

ト書き「与座道行言葉」(No.457)が「与座ノ大主」となってい  
る。

与座の大主の台詞「一やあ／＼なし子」(No.465)が「一ヤ  
ア産子」となっている。

与座の大主の台詞「春の草の葉や」(No.466)が「春ノ草ノ葉ン」  
となっている。

虎千代の台詞「又も春来れハ」(No.472)が「廻テ春来レバ」と

なっている。

与座の大主の台詞「一やあ〜」（No.481）が「一ヤア〜産子、」となっている。

与座の大主の台詞「けふ【や】（の）誇らしや〜」（No.482）が「今日ノ誇ラシヤノ」となっている。

与座の大主の台詞「たう〜習ひとたる手並」（No.484）が「習レ取タル手並」となっている。

与座の大主の台詞「振立て見せれ」（No.485）が「振り立チヤイ見シリ、」となっている。

役名「虎千代」の台詞（No.486〜487）が「二人」（虎千代虎松）の台詞となっている。

虎千代の台詞「南山もけふや」（No.520）が「南山ノン今日ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「一南山もけふや」（No.523）が「一南山ノン今日ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「歌や舞ひ遊て」（No.526）が「歌ヤ舞ヒ遊ビ」となっている。

役名「虎松」の台詞（No.529〜534）が「虎千代」の台詞となっている。

与座の大主の台詞「おか達かおのほとこ」（No.537）が「ヲガ達

ガウノ程ン」となっている。

与座の大主の台詞「いちゆて慰シゆん」（No.540）が「言ユテ慰メヨン、」となっている。

音曲「恩納ふし」（No.545）が「日新節」となっている。

音曲「露とおきゆる」（No.549）が「露ドラツヨル」となっている。

音曲「千代松亀千代出羽長金武ふし」（No.550）が「長金武節」となっている。

音曲「ことの葉の匂ひ」（No.552）が「云言葉ノ匂ヒ、」となっている。

音曲「今と御城元」（No.555）が「御城元今ト」となっている。

千代松の台詞「父親の事と」（No.591）が「父親ノ事ヤ」となっている。

千代松の台詞「御引留られて」（No.593）が「御引留置カリヤイ」となっている。

千代松の台詞「別やいをれハ」（No.594）が「居レバ、」となっている。

千代松の台詞「いきやるいきなひに」（No.595）が「如何ル有様ニ」となっている。

千代松の台詞「引よ留めしやうち」（No.608）が「御引留召チ、」

となっている。

北山の按司の台詞「一 あゝ童へあてなしの」(No.622)が「一 ヤア童ビアテナシノ」となっている。

北山の按司の台詞「露とおきゆる」(No.625)が「露ド打ル、」となっている。

北山の按司の台詞「やあ千代松亀千代」(No.626)が「ヤア千代松ヤア亀千代」となっている。

北山の按司の台詞「屹度片付て」(No.627)が「敵ト片付テ」となっている。

北山の按司の台詞「きやああれハすミゆか」(No.642)が「如何アレバ濟ノガ」となっている。

北山の按司の台詞「考てきかす」(No.643)が「考デ見デヨ、」となっている。

親泊大主の台詞「呑込いをやへれハ」(No.653)が「呑込イ居レバ、」となっている。

親泊大主の台詞「若か南山の」(No.654)が「若シガ南山ニ」となっている。

親泊大主の台詞「物巧ミあらハ」(No.657)が「物巧メスラバ、」となっている。

親泊大主の台詞「引ヨ留置て」(No.661)が「引ヨ留置バ」とな

っている。

親泊大主の台詞「年月よ重ね」(No.662)が「年月日重ネ」となっている。

親泊大主の台詞「思はまる筈たひもの」(No.667)が「思シハマル筈ダヤビモノ」となっている。

仲宗根のひやの台詞「事洩てすまぬ」(No.673)が「事洩レテ済ビラン、」となっている。

仲宗根のひやの台詞「急ち此事や」(No.674)が「急ギ此ノ事ニ」となっている。

北山の按司の台詞「一段なごとよ」(No.677)が「一段大事」となっている。

北山の按司の台詞「やあ」(No.678)が「ヤア」となっている。

謝名の大主の台詞「心実の御相談」(No.703)が「真実御相談」となっている。

謝名の大主の台詞「仕合やおまな」(No.704)が「仕合ト思ナ、」となっている。

謝名の大主の台詞「北山の悪名」(No.710)が「北山ヤ悪名」となっている。

謝名の大主の台詞「いらぬ慈悲尺ち」(No.720)が「アノイラン



慈悲尽チ」となっている。

謝名の大主の台詞「あなたなるものも」(No.721)が「仇ダナトル事ン、」となっている。

天底の子の台詞「留ておきやへらに」(No.737)が「留テ置ビラナ、」となっている。

謝名の大主の台詞「探りきる程の」(No.744)が「探イ出ル程ノ」となっている。

謝名の大主の台詞「亀千代か今の」(No.748)が「南山ノ按司ノ」となっている。

謝名の大主の台詞「取堅守て」(No.769)が「堅ク取り守テ」となっている。

謝名の大主の台詞「露ちらすことに」(No.773)が「露照ソ事ニ」となっている。

謝名の大主の台詞「太刀かたなてすも」(No.776)が「刀刃ヨテスン、」となっている。

謝名の大主の台詞「御慎あとして」(No.779)が「御慎メアテン」となっている。

謝名の大主の台詞「いさめこと好て」(No.786)が「ソサメ言嫌テ」となっている。

謝名の大主の台詞「そさめこと嫌て」(No.787)が「諫メ言ス好

デ、」となっている。

謝名の大主の台詞「跡影よ隠す」(No.792)が「跡カテヨ隠チ、」となっている。

謝名の大主の台詞「海に舳渡」(No.804)が「海に船渡リ」となっている。

謝名の大主の台詞「ミつきものあけて」(No.806)が「メヅ、物上ゲテ」となっている。

天底の子の台詞「一 あゝ此上や存す」(No.826)が「一 ア、此ノ上ヤ存寄」となっている。

親泊大主の台詞「智高けなひぬあれ」(No.837)が「智高無ン有トテ、」となっている。

親泊大主の台詞「御耳聞らしやひ」(No.838)が「御耳穢ラシヤイ」となっている。

北山の按司の台詞「氣遣はしするな」(No.857)が「氣遣ハスルナ、」となっている。

北山の按司の台詞「たとひ氣にさかて」(No.862)が「譬ヒ氣ニ違テ」となっている。

北山の按司の台詞「押かへし〜」(No.864)が「押シ返ス〜」となっている。

北山の按司の台詞「此間のあやまり」(No.868)が「此ノ間ノ過

チ」となっている。

謝名の大主の台詞「御異見よすらへ」(No.878)が「御異見ヨスレバ、」となっている。

謝名の大主の台詞「御語よめしやうち」(No.879)が「御サトイエヨ召チ」となっている。

謝名の大主の台詞「御慈悲ある御代の」(No.883)が「御慈悲アル御主ノ」となっている。

謝名の大主の台詞「御名や朽やらぬ」(No.886)が「御名ヤ朽チヤビラン、」となっている。

謝名の大主の台詞「あゝなまの御詔事」(No.887)が「ア、今日ノメヨンチ事」となっている。

北山の按司の台詞「一や大主」(No.896)が「一ヤア謝名ノ大主、」となっている。

天底の子の台詞「一おう」(No.908)が「一拝留ヤビテ、」となっている。

役名「仲宗根」の台詞(No.913～917)が「天底ノ子」の台詞となっている。

北山の按司の台詞「尋ねほしやあてと」(No.922)が「尋欲シヤル事有トテ」となっている。

与座の大主の台詞「知りめしやうちいまひら」(No.936)が「知

リ召チイマイガ、」となっている。

北山の按司の台詞「遙々とこまに」(No.941)が「波路遙々ト」となっている。

与座の大主の台詞「父」(No.949)が「与座ノ大主」となっている。

与座の大主の台詞「哀れ面影も」(No.962)が「本ノ面顔ン」となっている。

与座の大主の台詞「行逢ててやり知よめ」(No.964)が「合テナイ知ラン」となっている。

与座の大主の台詞「いやなあれへ」(No.965)が「夢ヤアラニ」となっている。

千代松の台詞「肝もきもならぬ」(No.973)が「肝ナラン、」となっている。

北山の按司の台詞「やあ亀千代」(No.982)が「亀千代」となっている。

北山の按司の台詞「片付かぬあてと」(No.990)が「片付ノ有テド、」となっている。

役名「父千代松亀千代」(No.997)が「親子三人」となっている。

役名「千代松」の台詞(No.999～1003)が「子二人」の台詞となっている。

北山の按司の台詞「一 やひ大主」(No.1005)が「一 エイ大主」となっている。

与座の大主の台詞「誇らしやとあすか」(No.1015)が「嬉シ、ヤ有スガ、」となっている。

与座の大主の台詞「あてなしのふたり」(No.1016)が「アテナシノ二人ヤ」となっている。

役名「北山ノ子兩人虎千代」(No.1018)が「虎千代」となっている。

虎千代の台詞「一 やあ父親よ」(No.1019)が「一 ヤ、父親ヨ、」となっている。

虎松の台詞「一 わめもつれいかに」(No.1023)が「一 我身ン列レ行ン」となっている。

北山の按司の台詞「南山にいきゆる」(No.1029)が「親列テ行ル」となっている。

北山の按司の台詞「おの素立しちをとて」(No.1034)が「ウノ素立シチユテ、」となっている。

虎千代の台詞「こまに生れとて」(No.1040)が「此処ニ生レテド、」となっている。

虎千代の台詞「素立をる事や」(No.1041)が「素立有ル事ヤ」となっている。

虎千代の台詞「御臣下よやゆる」(No.1044)が「御臣下ドヤヨル、」となっている。

虎松の台詞「捨てまひんやれ」(No.1054)が「捨テマイシヤレバ、」となっている。

虎松の台詞「やき前とワ身や」(No.1055)が「如何シ暮シヤビガ」となっている。

虎松の台詞「いきやかしやへら」(No.1056)が「舎兄前ト我身ヤ、」となっている。

千代松の台詞「待兼ていまひん」(No.1060)が「待兼テ在マイラ、」となっている。

役名「虎千代」の台詞(No.1075～1077)が「虎松」の台詞となっている。

与座の大主の台詞「片時やならぬ」(No.1084)が「片付ン成ラ」となっている。

北山の按司の台詞「あゝ人の上とやすか」(No.1094)が「一 ヤア人ノ上ドヤスガ」となっている。

与座の大主の台詞「此御恩たうとさや」(No.1115)が「御恩タウトサヤ」となっている。

役名「謝名」の台詞(No.1135～1142)が「按司」の台詞となっている。

与座の大主の台詞「ふたり此御代に」(No.1162)が「二人コノ世界ニ」となっている。

与座の大主の台詞「生れやいをれハ」(No.1163)が「生き、居ル間ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「国公安全」(No.1166)が「不意ノ急難」となっている。

与座の大主の台詞「疑やあやへらぬ」(No.1167)が「絶テアヤビラン、」となっている。

北山の按司の台詞「一 あゝ大主の」(No.1169)が「一 アノ誠大主ノ」となっている。

北山の按司の台詞「謝名と大主ヤ」(No.1171)が「謝名ト大主ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「一 あゝ御情の御趣意」(No.1181)が「一 御情ノ御趣意」となっている。

与座の大主の台詞「思きやけもすらぬ」(No.1184)が「思ミチヤケン無ラン」となっている。

与座の大主の台詞「立別るけふや」(No.1186)が「立帰ル今日ヤ」となっている。

与座の大主の台詞「嬉しさにあすか」(No.1187)が「誇シヤド有スガ、」となっている。

与座の大主の台詞「誠御暇」(No.1188)が「誠御暇ン」となっている。

与座の大主の台詞「日も暮てをれハ」(No.1195)が「夜モ暮テ行バ」となっている。

与座の大主の台詞「歩まらぬわミの」(No.1196)が「歩マランアモノ、」となっている。

与座の大主の台詞「打立んしゆもの」(No.1200)が「押列テ登ラ、」となっている。

音曲「一 親子振合ひ」(No.1206)が「一 親子道尋参テ」となっている。

役名「与座」(No.1210)が「与座ノ大主」となっている。

音曲「石根ふし」(No.1217)が「石ノ根節」となっている。

音曲「久志ミなどおりて」(No.1220)が「古宇利港御リテ、」となっている。

音曲「名護渡まで見送り」(No.1225)が「名護ノ間送ラ、」となっている。

音曲「肝しやいや大主」(No.1226)が「肝シキヤ大主」となっている。

「宮良本」

千代松の台詞「御詔事<sup>レ</sup>拜<sup>テ</sup>」(No.16)が「詔イ御事拜<sup>テ</sup>、」となっている。

千代松の台詞「寄こと聞<sup>ル</sup>」(No.22)が「寄事トヤユル。」となっている。

千代松の台詞「やすてを<sup>レ</sup>られらぬ」(No.31)が「安テヲラレユメ。」となっている。

千代松の台詞「父親<sup>ヤ</sup>」(No.39)が「父親」となっている。

亀千代の台詞「情<sup>ケ</sup>あるならひ」(No.49)が「マコトアル習<sup>ヘ</sup>。」となっている。

音曲「ものめかほしちを<sup>ル</sup>」(No.66)が「物思ツラシチユル。」となっている。

千代松の台詞「哀れ父親<sup>よ</sup>」(No.78)が「衾<sup>リ</sup>父親<sup>ヤ</sup>、」となっている。

母の台詞「一やあなし<sup>子</sup>」(No.83)が「一ヤア」となっている。

母の台詞「我身も諸共<sup>ニ</sup>」(No.90)が「我<sup>ノ</sup>ン諸共<sup>ニ</sup>、」となっている。

千代松の台詞「おのとし<sup>ニ</sup>なれ<sup>ハ</sup>」(No.97)が「アノ歳ニナレバ。」となっている。

千代松の台詞「いかな刀刃<sup>も</sup>」(No.98)が「イ刀刃」となっている。

いる。

千代松の台詞「怪我のともあら<sup>ハ</sup>」(No.103)が「怪我之又アラバ。」となっている。

千代松の台詞「不孝の罪報<sup>」</sup>(No.106)が「不孝之罪報<sup>ヘ</sup>、」となっている。

母の台詞「云ること聞<sup>ハ</sup>」(No.116)が「云ル事ユ聞<sup>バ</sup>。(注:黒丸)」となっている。

母の台詞「物思<sup>つめ</sup>しちを<sup>テ</sup>」(No.120)が「物ユ思ツメシチユテ、」となっている。

亀千代の台詞「念力の太刀<sup>や</sup>」(No.137)が「念力ノ刀」となっている。

亀千代の台詞「肝の願<sup>し</sup>ちを<sup>テ</sup>」(No.144)が「肝ノ願召<sup>チ</sup>」となっている。

千代松の台詞「いやはいつきや<sup>ても</sup>」(No.148)が「イヤバイツマデン。」となっている。

亀千代の台詞「つれてい<sup>かに</sup>」(No.163)が「列<sup>テ</sup>行<sup>ン</sup>」となっている。

音曲「運天のミ<sup>なと</sup>」(No.179)が「佳例ユシノ御船、ノ」となっている。

音曲「なま<sup>と</sup>つき<sup>や</sup>る」(No.180)が「ハルカ清<sup>サ</sup>」となっている。

る。

舟筑の台詞「一 され運天の湊」(No.182)が「一 サレ、  
運天ノ湊ト、」となっている。

千代松の台詞「行衛尋ねらに」(No.196)が「行衛尋ラ。」とな  
っている。

住居人の台詞「一 む舟の入ゆる様子」(No.211)が「一 ム、  
船ノキヤウル様子、」となっている。

千代松の台詞「知る人もをらぬ」(No.221)が「知ル人ニヲラン、  
となっている。

千代松の台詞「隠ちかくをらぬ」(No.234)が「隠チカクサラ。  
となっている。

住居人の台詞「先ものにたとてむて」(No.258)が「先物ニ、  
タトテ見ラバ。」となっている。

住居人の台詞「先おかんちうたやくる」(No.273)が「先御顔重  
タヤベン」となっている。

住居人の台詞「南山の御使に」(No.276)が「南山ノ御使」とな  
っている。

住居人の台詞「まひんしやうちやれ」(No.277)が「イマンシ  
ヤウキヤレハ」となっている。

住居人の台詞「いやれる人の」(No.281)が「イヤレヘル人ノ

となっている。

住居人の台詞「仔細聞合しゆる分別やて」(No.292)が「委細聞  
合シユカ分別ヤテ」となっている。

住居人の台詞「けふの明日ない」(No.306)が「今日ノ明日ナ  
となっている。

住居人の台詞「明日のあさてなひ」(No.307)が「アサテナイ  
となっている。

住居人の台詞「頓て夫婦の縁につなかつて」(No.308)が「影テ  
夫婦ノ縁ニツナガリテ」となっている。

住居人の台詞「あけての冬にや」(No.309)が「明△ノ冬ニヤ  
となっている。

住居人の台詞「弥事六ヶ敷ない立」(No.311)が「彌事ユ六ヶ敷  
ナイ立」となっている。

住居人の台詞「又思子のきやあの」(No.315)が「又思子ノキキ  
ヤガ」となっている。

住居人の台詞「なしよたれしめしやいす聞ハ」(No.319)が「泣  
シユダリシメシヤス聞バ」となっている。

住居人の台詞「され此ことやいくも」(No.342)が「サレ此事ヤ  
イヒ」となっている。

住居人の台詞「御世話あめしやうむな」(No.343)が「御世話ヤ

メシヤウナン」となっている。

住居人の台詞「此世見捨やへて」(No.347)が「此見捨ヤベテ」となっている。

住居人の台詞「此事や按司に」(No.364)が「タウ此事ヤ按司ニ」となっている。

住居人の台詞「与座も早く国元に」(No.373)が「与座ン早ヤ国元ニ」となっている。

住居人の台詞「かへしめしやいることむて」(No.374)が「帰へシユル事ンテ」となっている。

住居人の台詞「おんにゆけしいる」(No.375)が「ウンニユケメシヤル」となっている。

住居人の台詞「場所むていやへん」(No.376)が「場ンテ云ヘイ事」となっている。

住居人の台詞「一 たうけふや先」(No.390)が「一 タウへ今日ヤ先」となっている。

住居人の台詞「我宿におんつかいしち」(No.391)が「我屋ニ御ン使シチ」となっている。

与座の家主の台詞「子共ひきつれて」(No.451)が「共引列テ」となっている。

与座の家主の台詞「一 野原出て見れへ」(No.458)が「一卓△

野原出て見レハ」となっている。

与座の家主の台詞「千種萌出て」(No.459)が「木草盛り出テ」となっている。

与座の家主の台詞「たうへ此辺にとて」(No.462)が「タウへ邊ニヲトテ」となっている。

虎千代の台詞「木草たいもしゆひ」(No.473)が「四木草タンシユヘ」となっている。

与座の家主の台詞「一 あへ出来たへ」(No.515)が「一 ハア出来タへ」となっている。

虎千代の台詞「南山もけふや」(No.520)が「南山ノン今日ヤ」となっている。

虎千代の台詞「此遊ひあやへひめ」(No.521)が「遊へアヤベイミ」となっている。

与座の家主の台詞「一 南山もけふや」(No.523)が「一 南山ノン今日ヤ」となっている。

虎松の台詞「沙汰よめしやら」(No.534)が「沙汰ユメシヤイル」となっている。

音曲「かたるいこと葉や」(No.547)が「語ル言ノ葉ヤ」となっている。

音曲「露とおきゆる」(No.549)が「露ト落ル」となっている。

音曲「今と御城元」(No.575)が「御城元今ト」となっている。  
音曲「尋て着る」(No.576)が「寄キヤル」となっている。

千代松の台詞「よしれやいをる次第」(No.570)が「ヨシリヤイ  
ヲモノ」となっている。

千代松の台詞「御取次頼ま」(No.571)が「好アル様ニ御取次タ  
ノマ」となっている。

門番の台詞「一やれ拝まれよめしやいん」(No.578)が「一サ  
レ御行合ヨメシヤン」となっている。

異同を概観すると、この作品は『尚家本』と対校本で異同が多い  
作品である。さらに、『尚家本』に役名が抜けている箇所が多く見ら  
れるため、『尚家本』に収録されている作品の中では、体裁が不十分  
である。『尚家本』の目次に「二山和睦」と記載されているため、他  
の作品と同時に書写されたと思われるが、体裁が不十分である理由  
がわからない。

対校本の中で異同が目立ったのは「兼島本」と「今帰仁本」であ  
るが、前半部分しか残っていない「宮良本」は、不完全でありなが  
らも、残っている箇所だけを見ると先の二冊に比べても異同が多い。  
また、「今帰仁本」と「恩河本」は同じ内容の記述が見られ、「与那  
覇本」と「兼島本」は、『尚家本』に見られない挿入箇所が同じであ

り、系統はうかがえないものの、写本間の類縁性はうかがえた。

#### 4 小括(『尚家旧蔵組踊集』の特性)

以上、『尚家本』と対校本とを作品別に校合した。概観すると、『尚  
家本』の特徴としては、収録中の七作品のうち、「辺戸之大主」「執  
心鐘入」「銘苅子」「大川敵討」「義臣物語」「天願若按司敵討」に「着  
付」が記載されていることがまず挙げられる。この「着付」の内容  
は、校合を行ったことと同じく王府の資料から書写された『戯曲集』  
の内容と完全に一致しないことが明らかとなった。例えば、「執心鐘  
入」の若松の着付を例にすると、

##### 『尚家本』

若松半向頭巾天鷲織花金銀水引はさら花笠板縮緬振袖袷衣裳  
脚胖足袋杖

##### 『戯曲集』

着付、若松、髪半向頭巾、金花並金銀水引差、あみ笠かつき、  
板縮緬振袖袷衣裳、裏緋さや脚絆、緋さや足袋、杖持。

『尚家本』の①は、半向頭巾の材料を表す言葉であり、ピロードで  
作られていたことがわかる。ピロードはパイル生地の一つで、表面  
に総(ふき)、輪奈(わな)、毳(けば)が柔らかく立毛している生  
地である。十三世紀のイタリアで発祥し、日本では豊臣秀吉の政策



によって一五八八年に京都の西陣で作られるようになったものである<sup>(注八四)</sup>。琉球へはどのルートで入ってきたのか不明であるが、中国・もしくは日本からであることは言えるであろう。現在の半向頭巾はビロードとよく似た、表面が毛羽立った化繊のものを使用しており、『尚家本』の記述に近い。

それから②は『戯曲集』と記載の異なる部分である。若松が笠をかぶって出てくるが、『戯曲集』は「編笠」で、『尚家本』は「花笠」である。現在の琉球芸能をみると、基本的に花笠は女性が道行の際に使うものである。また、組踊の着付でも、花笠は女性の持ち物であるため、ここでは『尚家本』が書き損じたのではないか、ということも伺えるのである。③・④は、着物の色が指定されている箇所である。着物の裏地、足袋のデザインは「緋さや」であり、緋色の紗綾型織りを施した生地を使用していることがわかる記述である。

もちろん、生地素材やデザインなど、同じ箇所も見られるが、全体を通して、着付の記載は着付の見られる、『尚家本』、『戯曲集』系統の「組踊本」、多良間本の三つの「組踊本」において完全に一致していない。

また、全体を通して、『尚家本』は役名が抜けている箇所が多くみられることが挙げられる。特に、作品の冒頭における役名が見られないことが多く、「辺土の大主」以外の六作品に見られない。さらに、

役名だけでなく、タイトルや着付まで記載のない「二山和睦」は、特に『尚家本』の中でも特異な作品と言える。別の「組踊本」が挿入されたのか、『尚家本』の底本となった「組踊本」にも記載がなかったのか、また、単に記載漏れなのか、不明である。

校合を通してわかったことは、『尚家本』にも他の「組踊本」と同様に、役名が記載されないという記載漏れがあること、書き損じと思われる箇所があること、の二点である。この二点は、『尚家本』で起こったミスなのか、その親本にも見られたミスなのかは不明であるが、『尚家本』も一部、校合した「組踊本」から補足しなければ、完全なテキストとして使用できない、という点がはっきりした。

### 第三節 『校註 琉球戯曲集』と諸本の校合

1 はじめに — 『校註 琉球戯曲集』の資料的価値と若干の問題提起—

本研究は、戦前に出版され、今もなお琉球芸能の研究の一級資料として扱われている『校註 琉球戯曲集』の、資料的価値がどれほどあるのかを検討するものである。その方法として、『校註 琉球戯曲集』と同じ底本を用いて編集されたと思われる資料と同書を校合し、その結果から、『校註 琉球戯曲集』を再考することを目的とする。

一九二九(昭和四)年に出版された伊波普猷の『校註 琉球戯曲集』(以下『戯曲集』とする)は、現在の琉球芸能を語る上で看過することのできない資料である。紅型の鮮やかな装丁に、太く、しっかりとした書名が背表紙に刻まれている。揮毫は最後の琉球国王、尚泰の四男である尚順の筆である。内容は一八三八(道光十八)年に行われた尚育王の冊封(戊戌年に行われたので、通称「戊の御冠船」といわれる)に供された、仲秋宴と重陽宴の芸能を中心とし、巻頭に折口信夫、巻末に知花朝章、真境名安興、末吉安恭、太田朝敷、東恩納寛淳らの芸能論考が納められている。

収録されている内容を詳述すると、仲秋宴では「神歌こねり」という演目から始まり、舞踊が六作品、組踊が三作品。重陽宴では「老人老女」という演目から始まり、舞踊が六作品、組踊が四作品、補遺に組踊が四作品。

本文の体裁は一ページを三段に分け、上段に語注や内容に関する注記、中段に本文、下段に本文の読みがローマ字で記されている。

組踊や舞踊の詞章のみならず、『戯曲集』には演目の着付と、当時の出演者の名前も記されている。『戯曲集』は、このように戊の御冠船に供された演目ばかりではなく、当時の衣装や踊り手などの細かい情報を知ることができ、琉球古典芸能、芸能文学を学ぶ上で最良のテキストと言われているのである。さらに、記載はもともとの古

文書で続け書きになっていたものを、琉歌形式の八・八・八・六音で分かち書きにしたのは伊波の編集が初めてである。現在も多くの「組踊本」でこの記載方法が用いられている。

ローマナイズで記された読みは、伊波よりも先に、岡倉由三郎が一九〇〇(明治三三)年に発表している<sup>(注八五)</sup>。岡倉は「銘苺子」の「組踊本」を『言語学雑誌』に紹介した。しかし、これは組踊を演劇として紹介したのではなく、「琉球語」を紹介することに主眼が置かれている。この頃は田島利三郎、伊波も上京しており、組踊の「組踊本」はおそらくこの二人が関係している可能性も考えられる。とまれ、日本の中央の学術雑誌に組踊の詞章が掲載されるのは、岡倉の「銘苺子」が初出といってもいいだろう。

『戯曲集』が最良のテキストであるという理由は、伊波が『戯曲集』の凡例に「冠船渡来毎に首里王府で編纂した「組踊本」即ち琉球戯曲集のテキストは、五六種もあつたが、今遺つてゐるのは、羽地本と小禄本の二部だけである。(中略)底本としては県立沖縄図書館所蔵の同書(筆者注・羽地本)を採用し、小禄本外民間流布の二三異本を参照して校訂する<sup>(注八六)</sup>」と記しているところを根拠としている。すなわち、「羽地本」というのは戊の御冠船の時に使用された「組踊本」で、その時の躍奉行であった羽地按司の名を採って通称として「小禄本」というのは一八六六(同治五)年の

丙寅年に行われた尚泰王の冊封（通称「寅の御冠船」）の時に使用された「組踊本」で、この時の躍奉行である小禄按司の名を採って通称としているのである。つまり、この凡例の文章から、伊波は王府が編纂したとされる戌の御冠船と、寅の御冠船の御冠船資料を底本として、民間流布の「組踊本」を数冊用い、校訂して『戯曲集』を編んだということになる。同書は王府ゆかりの「組踊本」を用いているということ、『戯曲集』の資料的価値を高めているのである。

しかし底本である「羽地本」「小禄本」は、沖繩戦によって文字通り灰燼に帰してしまっており、原本は現在確認することができない。したがって、「羽地本」「小禄本」の正式な書名が何であり、どのような体裁であったのかをはじめとして、収録されている演目内容や、筆写した人物、所蔵先の王府の機関はどこだったのか、などの細かな情報はわからないのである。以下、当時の資料をもとに少々考察してみたい。

先に挙げた『戯曲集』の凡例の記述からは、この「羽地本」「小禄本」は戦前の沖繩県立沖繩図書館（現在の沖繩県立図書館）に所蔵されていて、伊波はこの資料をもとに『戯曲集』を編んだことがわかる。そこで、戦前の沖繩図書館の『郷土資料目録』を確認すると、そこには「羽地本」「小禄本」という書名や、羽地按司、小禄按司の所蔵していた組踊集、さらには首里王府所蔵の組踊集はみられない

のである。伊波はいったいどの資料を「羽地本」「小禄本」と言っているのだろうか。

『郷土資料目録』に記載されている資料の中から、琉球芸能に関する項目の中で編集年がほぼ一致するものに、「冠船踊 道光十八年」と「冠船踊 上・中・下 同治六年」という二つの資料が挙げられる。戌の御冠船は道光十八年に終り、寅の御冠船は同治六年に終わっている<sup>（注八七）</sup>。したがってこれらの資料は、冠船終了時にまとめられたものである。しかし、資料の編集年が冠船の終了した年であるという理由だけで、「羽地本」「小禄本」の底本が「冠船踊」という資料である、という証明にはならない。だが、編集年から「羽地本」「小禄本」と関わりがありそうな資料であるという可能性は言えようである。

ここで『戯曲集』の内容をもう一度確認しよう。『戯曲集』は、仲秋・重陽宴の上演演目順に、組踊や舞踊の詞章が記載されている。『戯曲集』の目次には「前編（大清道光十八年八月十二日、仲秋之宴二付両勅使様御登城之時踊之次第）」、「後編（大清道光十八年八月廿四日、重陽之宴二付両勅使様御登城之時踊之次第）」とある。これは戌の御冠船の時に冊封正副使を首里城に招き、仲秋宴と重陽宴に上演した舞踊と組踊の次第、つまり踊りの順番などが収録されているということである。したがって収録されている舞踊と組踊の順番

は、上演した順番にそって収録されていることになる。

組踊だけを収録順に示すと、仲秋宴が「護佐丸敵討」「執心鐘入」「忠士身替の巻」、重陽宴が「銘苅子」「孝行之巻」「大川敵討」「大城崩」である。このあとには「補遺」として四演目が記されている。なぜ本編以外に「補遺」をつくったのだろうか。凡例には「そしてこれらの本（筆者注…小禄本その他民間流布本。）から、玉城の『女物狂』田里の『万歳敵討』、平敷屋の『手水の縁』及び高宮城の『花売の縁』をとって補遺とした<sup>（注八八）</sup>」とあるだけで、伊波は補遺の作品を収録する詳しい説明を行っていない。

普通の組踊集であれば、「補遺」という項目はない。だが『戯曲集』には補遺として、「女物狂」「手水之縁」「花売之縁」「万歳敵討」の順で組踊が収録されているのである。おそらくこれは、伊波普猷が何らかの理由をもとに行なったことであると推測できる。

この理由は推測の域を出ないが、前後編に朝薫の創作した組踊が四つ収録されており、補遺に「女物狂」が収録されている、ということを考えて、伊波がどうしても朝薫の五作品すべてを収録したかった、ということであろうか。それから「万歳敵討」については、本編に田里朝直の「大城崩」が収録されているので、もう一作品収録したい、という考えからか。しかし、田里が創作した他の「義臣物語」「大城崩」二作品が収録されていないことを考えると、「手水

之縁」「花売之縁」とともに、伊波普猷が組踊の作品自体を評価しているものを収録した、と推測したほうが良いか。いずれにせよ、凡例の後半に記されている「巡見の官」から「賢母三遷の巻」までの三九作品を「他日第二輯、第三輯として上梓する機会がある<sup>（注八九）</sup>」と書いているように、今後、伊波が出版する気持ちがあったので、その第一弾となる『戯曲集』に収めたかった作品を「補遺」に収録したと考えることができるのではないだろうか。

ここで補遺に収録されている「手水の縁」について疑問がある。『戯曲集』に収録された作品には着付と配役が記されているが、「手水の縁」だけそれが記されていないのである。伊波は、補遺について「小禄本」と「民間流布」の「組踊本」を底本として利用している、としているが、「手水の縁」以外の補遺の作品は、「女物狂」の小僧、「花売の縁」の猿引、「万歳敵討」の御鎖の供の三役をしている真栄田子や、「花売の縁」の森川の子、「万歳敵討」の慶運坊の二役をしている与儀筑登之など、出演している人物が共通している。このことから推測すると、「女物狂」「万歳敵討」「花売の縁」は「小禄本」から引用し、「手水の縁」は「民間流布」している「組踊本」から引用したと考えられる。

この着付と配役の記載についてであるが、着付については尚家に所蔵されていた同治六年の『組踊集』にも確認することができ、王

府で管理・保管されていた「組踊本」に記載されていることがわかっていて、しかし、配役については今のところ『戯曲集』と台湾大学に所蔵されている『琉歌大観』、宮城真治資料である一九二五（大正十四）年の「琉球新報」など、「羽地本」から書写されたと思われる資料にしか記載を確認することができない。配役が記されているということは「羽地本」の特徴としてあげられよう。そして『戯曲集』に収録されている配役の人物は、王府が冊封の時に任命する「躍奉行」の行政文書である『躍方日記』にも記されているのである。

『躍方日記』によると、戊の御冠船の前年、一八三七年の八月十六日に踊り手を任命している。踊り手のことを文書では「躍中」、「躍人数」と記載している。その中には『戯曲集』で「忠士身替の巻」の八重瀬の按司、「銘苅子」の天女、「大川敵討」の乙樽の合計三役をこなした小祿里之子や、「護佐丸敵討」の母、「忠士身替の巻」では門番と母の一人二役までこなし、合計三役をした本部子がこの日に任命されている。踊り手は一度に任命されるのではなく、さらに例を挙げると、『戯曲集』の仲秋宴の二番目の演目である「入子踊」の踊り手に「豊見城恵茶留金」という人物が記載されているが、『躍方日記』によると、「覚／故豊見城王子四男／恵茶留金／右冠船躍人数被仰付可被下候。以上。／西十月 奉行四人」とあって、一八三七年の十月に追加で任命されている。このように、『戯曲集』の特徴

といえる配役の記載は、行政文書である『躍方日記』と一致している。このことから、『戯曲集』の底本である「羽地本」は、組踊の詞章だけを記載している、一般的な組踊集とは異なるものであった、と考える事ができる。

もう一点、『戯曲集』の底本である「羽地本」は一般的な組踊集と異なる点がある。それは『戯曲集』の記載に「一番 神歌こねり」「二番 入子踊」といったように演目名の前に番号がふられていることや、組踊が上演される前に「此時組踊札懸る」のように、組踊のタイトルを中国語で書いた札を、舞台で掛けるタイミングの指示が書き込まれているところである。このような書き込みは、実際の組踊の内容とは関係なく、宴のプログラムや、進行上で必要な事項と判断できる。

これらをまとめると、『戯曲集』の底本は、芸能の詞章がまとめられた資料であることは間違いないが、「組踊本」を集めた組踊集という位置づけではなく、成年冊封の仲秋宴・重陽宴の上演プログラムならびに「組踊本」で構成されていることがいえよう。したがって、『戯曲集』の底本の書名が多く「組踊本」のタイトルとして使用される「組踊集」のような名前である可能性は低いと思われる。底本は御冠船に供した舞踊・組踊の内容を伝える資料と思われるため、現存していないため確認することはできないが、年代的にも一致す

る「冠船躍」という資料も「羽地本」と関係があると思われる。

『戯曲集』の底本が王府の「組踊集」ではない可能性が言えたとしても、王府の資料を参照したことは間違いなさそうである。しかし、上述したように、「冠船躍」という資料は現存していない。それから、「羽地本」「小禄本」という名前の資料も戦前の『郷土資料目録』からは見いだせない。『戯曲集』は確かに戌の御冠船の芸能資料としては好資料であることは言えるが、伊波は「外民間流布の二三本を参照」して内容を校訂している。そして、校訂した箇所がはっきりとわかるような体裁になっておらず、依然として底本をどの程度反映させたものなのか、という点が不明である。

そこで、本稿では『戯曲集』が編集される以前に伊波普猷・太田朝敷・当間嗣合・真境名安興ら当時の沖縄の知識人達が、明治・大正期の新聞に掲載した「組踊本」、および台湾大学に所蔵されている『琉歌大観』といった『戯曲集』と同じ「着付」「配役」が記載されている「羽地本」系の「組踊本」と『戯曲集』とを校合する。そして各テキストの底本を探るとともに、『戯曲集』がどの「組踊本」と近い関係にあるのか、「羽地本」はどのような「組踊本」であるのか、ということ明らかにすることを目的とする。

## 2 『戯曲集』以前の活字の「組踊本」と『琉歌大観』

『戯曲集』が発刊される前にも、活字の「組踊本」はいくつか紹介されている。現存する活字資料の最古のものは一八八九（明治二二）年の『琉球浄瑠璃』で、その次に古いものは一八九三（明治二六）年の『琉球踊狂言』である。これら二冊は純粹な「組踊本」ではなく、組踊の内容、詞章を標準語（歌舞伎言葉）に訳したものである。その次に古いものは、一九〇〇（明治三三）年に岡倉由三郎が『言語学雑誌』に紹介した「銘苺子」である。岡倉は詞章をローマナイズして紹介し、訳と注もつけてある。この体裁は『戯曲集』も同じであり、伊波が岡倉のこの体裁を取り入れたものであると考えられる。この外には一九〇二（明治三五）年の『國學院雑誌』、一九〇六（明治三九）年に加藤三吾の『琉球の研究』というように「組踊本」が紹介されているが、それらはすべて県外で発行されたものである。

県内で確認できる組踊の活字資料の現存最古のものは、一九〇七（明治四〇）年の『琉球新報』に掲載された「大川敵討」「銘苺子」「執心鐘入」である。しかも、このときの「組踊本」掲載には伊波普猷が関わっている。

この時掲載された「組踊本」は序文を正覚坊（大田朝敷）が担当し、「大川敵討」を瓢痴（富川盛睦）、「銘苺子」を物外（伊波普猷）、「執心鐘入」を梅山（当間嗣合）が担当して、四月四日から五月十

九日まで、十五回に分けて掲載されている。詳述すると、四月四日から「大川敵討」を十回、五月二日から「銘苅子」を三回、五月十八日から「執心鐘入」を二回というように掲載している。それぞれ第一回目は作品の短い解説を各執筆者が行なっている。序文を担当した太田朝敷は、第一回県費留学生として上京し、学習院・東京高等師範学校・慶応義塾を経て、帰沖後には『琉球新報』の創刊に関わり、「組踊本」を掲載したこの頃は、琉球新報社の主筆をつとめている<sup>(注九〇)</sup>。また、富川盛睦は琉球国最後の三司官をつとめた富川盛奎の四男で、慶応義塾に学び、帰沖後、一九一二(大正元)年まで琉球新報社の記者をつとめる。『古今琉歌集』の再刊にも関わった人物である。そして当間嗣合は、國學院に学び、帰沖後、琉球新報社の記者となる。一九一五(大正四)年には、末吉安恭らと『沖繩朝日新聞』を創刊し、のちは衆議院議員となる人物である<sup>(注九二)</sup>。いずれも近代沖繩の知識人ばかりであり、伊波普猷はこれらのメンバーとともに「組踊本」を掲載したのである。この掲載「組踊本」を下「琉球新報」とする。

その次に古い「組踊本」の活字資料は、一九一〇(明治四三)年の『琉球新報』に掲載された「花売の縁」「護佐丸敵討」「巡見官」の三作品である。この時は「藪の鶯」という雅号の人物が連続掲載しており、「護佐丸敵討」を掲載した後、その解説として「忠臣護佐

丸」という毛氏由来譚を掲載している。「藪の鶯」という人物が誰であるかを特定することはできないが、一九〇七年の新聞に組踊の「組踊本」を掲載したのが近代沖繩の知識人によるものであるもので、藪の鶯も近代沖繩の知識人である可能性が考えられる。この新聞掲載「組踊本」を仮に「琉球新報一九一〇年掲載『組踊本』」とする。上記の他に、「楽劇護佐丸公」という作品が一九一〇年の琉球新報に掲載されている。しかし、この作品は天野雄作の創作した新作組踊であるため、本稿では取り扱わない。

明治期における組踊の活字資料は、前掲の三つの「組踊本」のみ確認されるだけであり、他方、筆写本については多くの「組踊本」が残っている。以上から考察するに、明治期は『琉球新報』など新聞の創刊が行われ、活版の機械が沖繩に導入されたにもかかわらず、組踊の活字化はそれほどまでに行われていなかったといえる。「組踊本」の版本は見られず、活字資料は新聞掲載のみである。

大正期には、一九二〇(大正九)年に『琉球脚本組踊集』下巻が発刊されており、これ以前に上巻が発刊されていたはずであるが現存していない。また、一九二二(大正十一)年には大城活版所の『組踊』というタイトルの組踊集がシリーズ発刊される。この『組踊』は、このち一九二五年、一九二八年と合計三回も版をかえて出版されている。そして新聞では一九一五(大正十四)年三月十八日か

ら『琉球新報』に「組踊本」が掲載されている。演目は「手水の縁」「忠孝婦人（以下、本稿では「大川敵討」に統一する）」「花売の縁」「姉妹敵討」「執心鐘入」「銘苺子」「忠臣身替」の七作品である。この新聞資料は新聞全体が残っているのではなく、宮城真治の残したスクラップ資料しか現存していない。この新聞原稿を以下「新報・宮城」とする。

大正期は大城活版所の『組踊』に代表されるように、組踊の版本が出版されるようになる。また、新聞にも「組踊本」が掲載され、「組踊本」の活字化が一気に進んだと言える。

これらの組踊の活字資料のなかで、『戯曲集』の記載と一致する作品を収録しているものがある。「琉球新報」と「新報・宮城」である。どの作品が『戯曲集』と同じであるか、というと、両方に掲載されている「銘苺子」と「執心鐘入」である。この二つの新聞資料に掲載された二作品には、着付と配役が記されており、それは『戯曲集』と一致するのである。

「琉球新報」は前述したように、近代沖縄の知識人たちによる掲載であった。しかし、「新報・宮城」が掲載される一九二五年にはすでに「琉球新報」の掲載に関係がある、太田・富川・当間は琉球新報を辞めているので、前述の三名が掲載に関わったとは考えにくい。ではいったい誰が「新報・宮城」の掲載に関わったのであろうか。

「新報・宮城」は新聞の一部を切り取って、小冊子にできるような体裁になっており、該当の新聞全体が現存していないため、元々新聞にどのようなかたちで掲載されていたのか、または掲載に伴う関連記事があったのか、などの情報が不明である。さらには「新報・宮城」すべてを見渡してみても「組踊本」の執筆者が明記されていないのである。

大城學は「新報・宮城」に収録されている「執心鐘入」を真境名安興のものである、としている<sup>(注九三)</sup>。だが論文中に大城は真境名安興本としている明確な理由を提示していない。そこで、「新報・宮城」の中から、真境名安興と関わりがありそうな部分を抜き出してみる。

まず一点目は、一番目に掲載されている「手水の縁」について真境名安興が「かくの如き長編の代表的脚本が紹介されることは吾人の最も歓迎する美挙である」と、琉球新報で「組踊本」が掲載されることを賞賛している文章を寄せていること、二点目は二番目に掲載されている「大川敵討」を掲載する前に、以前から問題となっていたこの作品の作者について真境名安興の「組踊『忠孝夫人』について」という論文が掲載されていること、三点目は、三番目に掲載されている「花売の縁」の巻末に「作者の事や其他歴史的に観察した本組踊の事に就ては何れ真境名安興氏が書いて下さる事になつて」と、編集者からのコメントが掲載されていることである。以



上の三点には、真境名安興の名がはっきりと確認でき、このことから当時沖縄県立沖縄図書館の館長であった真境名安興が、この「組踊本」の新聞掲載に深く関わっている可能性がみえる。

しかし、真境名安興が新聞掲載に関わった、と仮に考えてみても、さらに疑問が残る。「新報・宮城」がどの資料を底本としているのか、という点である。この点について、記事中にも本文中にも記載されておらず不明である。しかし、「執心鐘入」と「銘苺子」の二作品の着付と配役が『戯曲集』のものと同じであることに加え、二作品の序文に「原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使かん林院修選正使林鴻年及びかん林院編修副使高人鑑を首里城に招請せし時演ぜしものによる」とあることを考えると、「執心鐘入」「銘苺子」の底本は伊波が『戯曲集』の底本として利用した「羽地本」を参考にしたことが考えられるのである。

大城は「新報・宮城」と『戯曲集』の「執心鐘入」の詞章を比較している。解題として比較した結果を数点挙げているが、大城の解題を見ると、やはり両者は非常に近い「組踊本」であることがうかがえる。もし、「新報・宮城」が真境名の手によるものであるならば、この新聞掲載前である明治末に、真境名が企画し編集した『琉歌大観』の草稿に収録されている「執心鐘入」「銘苺子」の「組踊本」と校合し、確かめる必要も出てくる。

『琉歌大観』とは真境名安興が中心となり、明治末から大正期にかけて構想されたものである。一九〇九（明治四十二）年十二月七日付の『沖縄毎日新聞』の記事に「琉歌大観の出版」と題してその内容が紹介されているので、構想はこの頃からあったことがうかがえる。その構想とは、奄美大島や宮古島、八重山を含めた琉球列島全島から集められた膨大な歌謡資料をまとめ、出版しようとしたものである。

『琉歌大観』の内容は『おもろさうし』の代表的な歌が五十編、琉歌が三千首、口説、南島歌謡のクエーナやテイルクグチ、宮古島の歌、奄美大島の歌など膨大なもので、その中に組踊も「執心鐘入」「銘苺子」の二作品が含まれているのである。この『琉歌大観』は一九一七（大正六）年ごろに出版しようとしたが、それは叶わず、草稿も行方不明となっていた。だが、草稿の写しが台湾大学図書館に所蔵されている事がわかり、現在確認することのできる貴重な資料のひとつとなっている。その後、島袋盛敏が琉歌を集めた『琉歌大観』を一九六四（昭和三九）年に出版したので、それと分けるため本稿では『台湾本琉歌大観』以下（「台湾本」と呼ぶこととする）。

これまで述べてきたように『戯曲集』は「羽地本」「小禄本」を底本と資料である、だが、『戯曲集』そのものを批判・再考した論文は見られない。現在見ることで『戯曲集』以前の、伊波普猷た

ちが紹介した明治期の「琉球新報」、真境名安興が「羽地本」を底本として利用した「台湾本」、また、真境名が掲載に関わったとみられる「新報・宮城」に共通して収録されている「大川敵討」「銘苺子」「執心鐘入」の三作品を校合することで、『戯曲集』を書誌的な部分で再考することができるのではないかと思われる。まず次節で三本の校合を行ない、『戯曲集』の書誌的な内容を分析し、その次に『戯曲集』と「琉球新報」との校合を行い、その結果を提示する。

### 3 『戯曲集』と「琉球新報一九〇七年掲載『組踊本』」「宮城真治スクラップ資料掲載『組踊本』」「台湾本琉歌大観」との校合

まず、校合を行う前に、それぞれの体裁の特徴を述べておく。

#### 「琉球新報」(図1-1/1-2/1-3)

「大川敵討」と「執心鐘入」は、詞章が続けて書き下して記載されており、ルビが振られている。詞章の切れ目がわかりやすいように工夫したのか、八音、六音の琉歌形式で区切ることのできる部分に、句読点が挿入されている。また、各詞章は鍵括弧「」で開始されているが、最後は鍵括弧で閉じられていない。音曲の節名とト書きは詞章より小さく書かれており、節名は（）で括られている。

「銘苺子」は八音の二句ごとに改行がなされている点と、ト書きが（）で括られている点を除けば「大川敵討」「執心鐘入」と体裁

が同じである。この体裁の若干の不統一からうかがえることは、各執筆者で組踊の詞章を記入する際、きまつた体裁がなかったため、それぞれのやり方で掲載されているということである。

#### 「新報・宮城」(図2)

詞章は八音の二句ごとに改行がなされているが、長い詞章については行が涉っている箇所も数箇所見られる。詞章にルビは振られていない。句読点も付されていない。詞章を述べる役名がすべて「」で括られている。音曲の節名とト書きは（）で括られている。収録されているすべての作品が共通した体裁で編集されている。

#### 「台湾本」(図3)

万年筆書きの写本である。詞章が続けて書き下して記載されており、ルビが振られている。句読点が付されている。詞章の部分は「」で括られており、ト書きの部分は（）で括られている。上段には頭注も掲載されていて、「組踊本」以外の情報も掲載されている。

#### 『戯曲集』(図4)

『戯曲集』は戌年冊封の仲秋宴、重陽宴のプログラムを伊波普猷が編集したものである。したがって、底本は墨書きの和書である。伊波普猷は『戯曲集』の上段に頭注を中段にルビが振られた組踊や舞踊の詞章を、切れ目がわかるように、琉歌形式の八・八・八・六音に区切って記載している。下段には詞章の発音がわかるように、

ローマナイズ記載が記されている。  
体裁をまとめると、以下の表のようになる。

書名	詞章の記載		ルビ	句読点	記号
	八音二句区切り	続け書き			
琉球新報一九〇七年掲載「組踊本」	あり	あり	あり	あり	あり
宮城真治スクラップ掲載「組踊本」	八音二句区切り	なし	なし	なし	あり
台湾本琉歌大観	続け書き	あり	あり	あり	あり
琉球戯曲集	八音二句区切り	あり	あり	あり	あり

『戯曲集』出版以前の新聞に掲載された「組踊本」は、①続け書き、②八音の二句ずつで改行、という二つの大きな記載方法があり、漢字にはルビが付けられたり、活字におこす際に、「」や（）といった記号や句読点が付されたりしている。「琉球新報」は「大川敵討」「執心鐘入」と「銘苺子」で体裁にばらつきがあり、体裁は執筆者が独自に決めていたことがうかがえる。「新報・宮城」は、「琉球新報」の「銘苺子」の体裁にルビが振られていないかたちである。「台湾本」は、活字本ではないので、新聞に掲載された「組踊本」の体

裁と直接比較することはできないが、「琉球新報」と似通った体裁となっている。

『戯曲集』の体裁は、前掲のテキストとは異なっており、詞章の区切れが一目で分かるようになっており、ローマナイズされた詞章の発音がわかりやすく記載されている。頭注には異本の記載と語句の意味が記載されていて、ただ単に上演するためのものとしての機能だけでなく、組踊や舞踊の歌詞・詞章を「読む」ための「組踊本」としても位置づけることができる。これまでの八音の二句目で改行するテキストと比べ、一句ずつ改行することで、対語・対句が一目で分かるようになっていいる。また、場面が変わる部分に「\* \* \*」とアスタリスクが記載されおり、筆写本では続け書きで書き下しになっていて、わかりにくい場面の転換がわかるようになっていいる。『戯曲集』出版後は様々な組踊集が『戯曲集』の体裁、特に詞章を八音に区切って一句ずつ改行をするといった形式を多くの「組踊本」が採用している。

大城學は前掲の論文の中で、『戯曲集』の見開きに付されている筆写本を「羽地本」であると仮定して、『戯曲集』本文と校合を行っている。その結果、大きな異同はないが、漢字を多く当て、記号などが挿入されている。よって、記号を多用する近代の活字本の校合の際には句読点のあるなし、記号の使用法の差異を異同と認めず、

詞章・ト書き・音曲の節名などを比較の対象とする。

### 校合の結果

校合するにあたって、以下の点に注意した。『戯曲集』『琉球新報』『新報・宮城』『台湾本』に収録されている「組踊本」は、それぞれ体裁が共通していないため、「」や（）などの記号を無視し、『戯曲集』の体裁にあわせて校合した。基本的に台詞の意味が異なる部分を異同と捉え、漢字、仮名の記載が異なっても発音が同じであれば基本的に同じ台詞とした（例：為ゆめⅡなよめ、如何がⅡいきやが、等）。また、『戯曲集』の体裁にあわせ、着付や配役の部分を除いた詞章の部分を一句毎に分ち書きにして、ト書き、節名なども一句として分けて校合を行った。

#### ① 「大川敵討」

『戯曲集』『琉球新報』『新報・宮城』の三本に収録されている。詞章の部分を分ち書きにすると合計で二一〇四句(行)となった。以下に各「組踊本」に見られる特徴、詞章の異同の順で提示する。

#### 【各本の特徴】

『戯曲集』にしか見られない特徴

イ) タイトルの下に「拍子木打候得者琴三味線手毎にて村原出る。敵討之時大鼓ひやうちやこ打、ぼらがい吹く。」と村原の出羽

と、敵討の場面での音曲指定がある。

ロ) 着付・配役が記されている。(例：若按司、髪はあよをひいかしらへ、板へ縮緬振袖単衣裳、緋さや足袋、風車持・谷茶の按司／元浜里之子親雲上／石川のひや／上地里之子親雲上など)

ハ) 役者の登退場する場所が記されている。(例：村原のひや詞 橋掛より出る・母並村原南表の幕に入る。乙樽北表の幕に入る。など)

ニ) 場面の転換を「\* \* \*」というようにアスタリスクで表している。

「琉球新報」にしか見られない特徴

イ) 場面が分けられ、その場面の登場人物が明記されている。(▲ 序幕／登場人物 大川按司の頭役村原の比屋・▲二幕／登場人物 一、村原の比屋 一、村原の母 一、村原妻乙樽 一、村原一子乙松 など)

ロ) 役者の登退場が記されているが、上手・下手の明記されているものは少ない。(此時村原の比屋登場す・此時乙樽は上手の幕に、又た村原は児を抱き母と相連れて下手の幕に入る。 など)  
ハ) 舞台上での状況がト書きのように記されている。(谷茶は首尾

よく石川満納の兩人を追払ひ乙樽と二人差向になり」「実の如き其甘言に鬼の如き谷茶も如何と小児の如く喜ばさらむ」など

「新報・宮城」にしか見られない特徴

イ) 原国兄弟口説という歌が見られる。(親と君との敵かたき／天のいたゝち兄弟の／岩やかん石やたんたゑい／只だ踏くつしふみやぶり／いかな鬼神やたんたゑい／すたすた刻なたゝ置め／人の念力岩を通す／誠昔のものかたり／聞は嬉しや有難や／兄弟心を打ち合／猪狩人に身をやつし／勇み進て立ち出づる)

#### 【記載の異同】

次に特徴的な詞章の異同の例を示す。ここでは純粹に詞章のみの異同を挙げ、先に挙げた特徴の部分は入らない。詞章の下には各書名の頭文字を示す。

『戯曲集』の異同箇所(五三)

・ 散山節の歌詞が異なる。

『戯曲集』……………「夢のこゝろ」

「琉球新報」……………「夢の心地」

「新報・宮城」……………「夢のこゝろ」

・ 谷茶が乙樽に迫る際の台詞が異なる。

『戯曲集』……………「縁の糸結で」

「琉球新報」……………「糸の縁結で」

「新報・宮城」……………「糸の縁結で」

・ 泊の出羽の台詞が一句ない部分がある。

『戯曲集』……………なし

「琉球新報」……………「油断すやすまぬ」

「新報・宮城」……………「油断しや済まぬ」

異同箇所のうち、「琉球新報」の記載だけが異なる箇所(合計五四)

・ 谷茶の名前が異なる。

『戯曲集』……………「あまや」

「琉球新報」……………「まあや」

「新報・宮城」……………「あまやあ・あまやゝ」

・ 村原の台詞に感嘆詞がない。

『戯曲集』……………「あゝ、身に替へて朝夕」

「琉球新報」……………「身に替へて朝夕」

「新報・宮城」……………「ああ身に替へて朝夕」

・ 満納が乙樽へ暴言を吐く際の台詞が異なる。

『戯曲集』……………「夫喰ゆる悪生」

「琉球新報」……………「夫喰はゆる畜生」

「新報・宮城」…「夫喰る悪相」

異同箇所のうち、「新報・宮城」の記載だけが異なる箇所（合計六一）

・冒頭の村原の台詞が異なる。

『戯曲集』……………「軍押寄せて」

「琉球新報」……………「軍押寄せて」

「新報・宮城」…「軍打寄て」

・谷茶の台詞が異なる。

『戯曲集』……………「責めのある限り」

「琉球新報」……………「折檻（せめ）の有る限り」

「新報・宮城」…「生責のたくひ」

・最後の音曲の節名が異なる。

『戯曲集』……………「歌 しゆらいぶし 橋掛に入る」

「琉球新報」……………「歌（しゆらいぶし）」

「新報・宮城」…「歌（よしやいなう節）又はしゆらいぶし」

#### 【小活】

以上の三冊での校合では『戯曲集』と異同の多い「組踊本」は「新報・宮城」であった。特に注目すべき異同は、他の「組踊本」で「石川」の台詞が「満名」になっていたたり、「下部」の台詞が「石川」となっているように、内容まで影響する、役名の異同が見られる。ま

た、最後の「しゆらいぶし」が「よしやいなう節」となっている点もはつきりとした異同がうかがえる。校合した三本の中で節名の異同が見られたのはこの部分のみであった。「琉球新報」は戯曲集との異同は少ないが、舞台の状況を伝えるト書きが「組踊本」に多く挿入されており、「組踊本」の体裁上では『戯曲集』と異なる部分が多い。そして『戯曲集』も他の「組踊本」にある詞章が抜けていたり、詞章が異なったりする部分が見られるため、総合すると、結果的には「琉球新報」「新報・宮城」は全体的な詞章は『戯曲集』と同じであるが、『戯曲集』により近い「組踊本」は「琉球新報」であるといえる。そして『戯曲集』に見られる着付・配役・ト書きの部分にある「橋掛り」などの出入りの記載がないため、「琉球新報」「新報・宮城」の底本は「羽地本」ではない可能性がうかがえる。

#### ② 「銘苺子」

『戯曲集』『琉球新報』『新報・宮城』『台湾本』の四本に収録されている。分ち書きにすると合計で四八三句（行）となった。

#### 【各本の特徴】

『戯曲集』にしか見られない特徴

イ）タイトルの下に「拍子木一段取俣而銘苺子出る」と銘苺子の出羽の際の指示が書かれている。

- ロ) 姉と弟の役名が「おめなり詞」「おめけり詞」と記されている。
- ハ) 場面の転換を「\* \* \*」というようにアスタリスクで表している。

「琉球新報」にしか見られない特徴

- イ) 節名が「歌」と書いてある部分に書かれておらず、歌詞の最後  
に示されている。「髪洗らは(通ひ水ぶし)」「遊ばはど呉ゆん  
だう(子持ぶし)」「母や見らぬ(東江ぶし)」など
- ロ) 舞台上の状況がト書きのように記されている。「この管絃樂の  
調べと共に天女現る」「この曲の賑ひにつれて天女羽衣を松が  
枝にかけて髪を洗ふ帰らんとする一利那農夫がその羽衣を盗  
み去るを見てあはたゞしく」「天女子等の寝たる後愁然として  
独語」など

「新報・宮城」にしか見られない特徴

- イ) タイトルが「羽衣(一名銘苺子)」となっている。
- ロ) 天女の登場する通水節のあと、早作田節で歌われる「今日のよ  
かる日や しちやの目もないらぬ 心安々と 洗てのほら」と  
いう歌詞を天女の台詞として述べる。

「台湾本」

- イ) 「玉城親方朝薫作」と作者の名前が記されている。

【記載の異同】

『戯曲集』の異同箇所(十三)

- ・ 天女の呼びかけの言葉が多い
- 『戯曲集』……………「やあ、なし子」
- 『琉球新報』……………「ヤア産子」
- 「新報・宮城」……………「やあ産子」
- 「台湾本」……………「やあなし子」
- ・ 姉の母親へよびかける台詞が異なる。
- 『戯曲集』……………「まかへ往きゆが」
- 『琉球新報』……………「まかいまいが」
- 「新報・宮城」……………「まかいまいか」
- 「台湾本」……………「まかいまいが」
- ・ 子持節の歌詞の一部が見られない
- 『戯曲集』……………「母親や見らぬ、母親やをらぬ。」
- 『琉球新報』……………「母親や見らぬ 母親や居らぬ 夜も暮れて行  
きゆり 足元も痛めば」
- 「新報・宮城」……………「母親や見らぬ 母親やをらぬ 夜も暮て行き

ゆい 足もともやめは」

「台湾本」……………「母親やみらぬ 母親や居らぬ 夜もくれていきゆい 足本もやめは」

異同箇所のうち、「琉球新報」の記載だけが異なる箇所（合計十五）

・ 登退場を示すト書きが見られない。

・ 「遊子持節」の歌詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「寝なせ、起きて泣くな」

「琉球新報」……………「寝なせ起きて泣くなやう」

「新報・宮城」……………「寝なし起きてなくな」

「台湾本」……………「寝なし起きてなくな」

・ 「子持節」の歌詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「こがと迄とまひて」

「琉球新報」……………「遠方来て求いて」

「新報・宮城」……………「こかときやとまいて」

「台湾本」……………「こがとぎやとまひて」

異同箇所のうち、「新報・宮城」の記載だけが異なる箇所（合計四）

・ 天女の台詞が異なる。

『戯曲集』……………「まかへ行きゆが」

「琉球新報」……………「まかい行きゆが」

「新報・宮城」……………「まあかひいまいか」

「台湾本」……………「まかひいきゆか」

・ 「子持節」の歌詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「十に足らぬ中に」

「琉球新報」……………「十に足らぬ」

「新報・宮城」……………「十にならぬ内に」

「台湾本」……………「十にたらぬ内に」

・ 上使の銘苺子に対しての台詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「首里のおゑか 賜べめしやいんてやりの」

「琉球新報」……………「首里の御位 賜召んてやりの」

「新報・宮城」……………「首里の親方へ 召しやいんてやりの」

「台湾本」……………「首里のおゑか たべめしやいんてやりの」

異同箇所のうち、「台湾本」の記載だけが異なる箇所（合計十三）

・ 銘苺子の台詞が異なる。

『戯曲集』……………「掛けて置きやが」

「琉球新報」……………「掛けて置きやが」

「新報・宮城」……………「かけておきやか」

「台湾本」……………「かけておきゆか」



・天女の台詞が見られない。

『戯曲集』…………「やあ、なし子、急ぢねれよ〜。」

「琉球新報」…………「やア産子 急ぎ寝れよ急ぎ寝れよ」

「新報・宮城」…………「やあなし子 急ぎ寝れよいそきねれよ」

「台湾本」…………なし

・銘苅子の子供たちへの台詞の一部がみられない。

『戯曲集』…………「ならぬ事思て、泣きくらち をすや 母の

為ならぬ、」

「琉球新報」…………「ならぬ事思て 泣きくらち をすや 母の為

ならぬ」

「新報・宮城」…………「ならぬこと思て 泣きくらち をすや 母の

ためならぬ」

「台湾本」…………なし

### 【小活】

『戯曲集』と「琉球新報」は伊波普猷が「組踊本」を作成しているが、かなりの異同が見られる。だが、「琉球新報」にみられる異同のほとんどは「橋掛へ入る」といったようなト書きを記していないことと、節名を歌の歌詞の末尾に示している体裁的な点である。それから、天女の台詞「ねなしちをるうちに／別れらなきやしゆが／

おぞで百すがり／すがると思ば」と同じ歌詞で歌われる東江節が続く部分が「琉球新報」と、「台湾本」では天女の台詞から東江節へ、『戯曲集』と「新報・宮城」では東江節から天女の台詞へと順序が真逆になっている。歌詞と台詞が同じであるためどちらかが間違っただものである。この部分は他の「組踊本」と校合して検討する必要がある、現時点では問題として示しておく。

『戯曲集』と校合した三本とは、詞章の面では先に校合した「大川敵討」より、詞章やト書きに内容を大きく左右するような異同は見られない。これは校合した四本の底本が同じである可能性が高いと推察できよう。ただ、「台湾本」の詞章の欠落については、元々の「台湾本」には記載されていて、それを現在のものに筆写した際に写し漏らした、という可能性も考えられる。

さらに校合して気づいたことは、「新報・宮城」に見られる説明文「登場人物と当時の演技者」や「演技者の服装」という部分が「台湾本」とほぼ同じである点と、「新報・宮城」にある東江節を歌う場面の説明「附りこのあがり江ぶしにつれて天女は高き松を上りて雲中に入り遙かに子供等を見下して涙に咽ぶとき五才の亀千代は目覚めて起き上り母の居らざるを見て四方を見廻し泣き叫んで母の雲中にあるを見母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰途につく処の場なり」と、「台湾本」の同じ部

分に見られる頭注「この悲しき東江節につれて天女は高き松を上りて空中に入り遙かに子等を見おろし涙に咽ぶとき五才の亀千代は目覚めて起き上り母の居らざるを見て四方を見廻はし泣き叫ぶ姑くして母の雲中にあ迫るを見、母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰途につく」の内容がほぼ同じであるという二つの点からも、「新報・宮城」「台湾本」は同じ人物の手によるものである可能性が高い、ということがいえそうである。

③ 「執心鐘入」

『戯曲集』『琉球新報』『新報・宮城』『台湾本』の四本に収録されている。分ち書きにすると合計で三五三句（行）となった

【各本の特徴】

『戯曲集』にしか見られない特徴

イ) タイトルの下に「拍子木打候得ば歌躍出る」と若松の出羽の際の指示が書かれている。

ロ) 「舞臺天井江走幕仕合、かね懸合せ之砌、幕釣り下げ鐘懸け仕舞次第早速引揚げ候也。」というト書きが記されている。

「琉球新報」にしか見られない特徴

イ) 舞台上の状況がト書きのように記されている。（若松人家に立

ち寄りて」「家の内より女の声にて」「此歌と共に女蠟燭を持つて登場し始めて男と顔をあはし」など）

「新報・宮城」にしか見られない特徴

イ) 三回歌われる干瀬節の最後の下句「ふり捨ていかは／一道たいもの」を述懐節で歌うというト書き「歌（述懐ぶし）（附り干瀬節の上句終ると同時に初める）」がみられる。

ロ) 鬼の配役の後に「附り当時は女の変して鬼と化するときよりは別人に演ぜしめたりと爰に宮里筑登之とあるもの是なり此役は武芸の達人を選んで出演せしめたと」という附がみられる。

ハ) 座主が小僧たちを呼ぶ場面で「座主ことば」とト書きが挿入されている。

「台湾本」にしか見られない特徴

イ) 「玉城（親方）朝薫作」と作者の名前が記されている。

ロ) 配役の一番末尾に「故老の談に依れば当時は女はその変して鬼となるときは別人にて演ぜしめたりと爰に宮里筑登之とあるものは是れなり此役は武芸の達人選ひしと云」という説明書きがある。

【記載の異同】

『戯曲集』の異同箇所（八）

・小僧二の台詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「いや、推参な小僧めが」

「琉球新報」……………「イヤ、推参な小僧」

「新報・宮城」……………「いや推参な小僧」

「台湾本」……………「イヤ推参な小僧」

・宿の女の台詞が異なる。

『戯曲集』……………「今（いま）に不審なあの鐘」

「琉球新報」……………「今（なま）に不審なあの鐘よ」

「新報・宮城」……………「なまにふしんなあの鐘よ」

「台湾本」……………「なまにふしんなあの鐘よ」

・女が鬼女となった報告を聞いた座主の台詞「ふれたか」の回数  
異なる。

『戯曲集』……………「ほれたか。」

「琉球新報」……………「ふれたかぐ。」

「新報・宮城」……………「ふれたかふれたか」

「台湾本」……………「ふれたかぐ」

・小僧（一）の台詞がみられない。

『戯曲集』……………なし

「琉球新報」……………「トウく免るち見せらう。」

「新報・宮城」……………「とうとうゆるち見せらう」

「台湾本」……………「とうくゆるち見せらう」

異同箇所のうち、「琉球新報」の記載だけが異なる箇所（合計二六）

・登退場を示すト書きが見られない。

・若松の台詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「旅に行暮れて」

「琉球新報」……………「旅に行き迷よて」

「新報・宮城」……………「旅に行暮て」

「台湾本」……………「たびに行暮て」

・女の台詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「をとこ生れても」

「琉球新報」……………「男生れとて、」

「新報・宮城」……………「おとこ生れても」

「台湾本」……………「おとこ生れても」

・若松の台詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「女生れても」

「琉球新報」……………「女生れとて、」

「新報・宮城」……………「女生れても」

「台湾本」……………「女生れても」

- ・ 寺の形容が異なっている。

『戯曲集』……………「行く末吉の」

「琉球新報」……………「嘉例吉の」

「新報・宮城」…「行末吉の」

「台湾本」……………「行末吉の」

異同箇所のうち、「新報・宮城」の記載だけが異なる箇所（合計六）

- ・ 若松の台詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「頼まば終に」

「琉球新報」……………「頼まば終ひに」

「新報・宮城」…「頼で終に」

「台湾本」……………「頼は終に」

- ・ 三回歌われる「干瀬節」の三回目は上句のみ「干瀬節」で歌う。

『戯曲集』……………「ふり捨てゝいかは、一道だいのもの。」

「琉球新報」……………「振り捨てゝ行かは 一道だいのもの」

「新報・宮城」…「歌(述懐ぶし)(附り干瀬節の上句終ると同時

に初める) 　ふり捨ていかは 一道だいのもの」

「台湾本」……………「ふり捨てゝいかは 一道だいのもの」

- ・ 小僧(二)の台詞が小僧(一)にあたる「年長小僧」の台詞にな

っている。

『戯曲集』……………「小僧(二)詞 あたまるめても 慈悲知らぬものや」

ぬものや」

「琉球新報」……………「中小ゾウ 頭丸めでも、慈悲知らぬものや。」

「新報・宮城」…「年長小僧」 　あたまるめても 慈悲知らぬものや」

ものや」

「台湾本」……………「小僧(中年) 　あたまるめても 慈悲しらぬものや、」

ぬものや、」

異同箇所のうち、「台湾本」の記載だけが異なる箇所（合計二）

- ・ 女の台詞の一部が異なる。

『戯曲集』……………「習や知らね」

「琉球新報」……………「習ひや知らに」

「新報・宮城」…「習やしらね」

「台湾本」……………「習やしらぬ」

- ・ いのりの一部が異なる。

『戯曲集』……………「娑婆多耶吽多羅叱干(牟十含)(そばたやうん

たらたかんまん)」

「琉球新報」……………「○頗吒也吽怛喇吒悍満、」

「新報・宮城」…「すはだやうんだらとかんまん」

「台湾本」……………「すはだすはだやうんだらとかんまん」

#### 【小活】

「琉球新報」は入退場のト書きが見られず、さらに、先に挙げたような詞章の異同が他本に比べおおい。「新報・宮城」と「台湾本」は比較的『戯曲集』と記載の異同が少なく、同じ底本を用いている事がうかがえる。ただし、「台湾本」の「下句のみ述懐節で歌う」という記載は、校合した他の「組踊本」に見られなかったため、今後さらに他の「組踊本」との校合が必要になる。

校合したすべての「組踊本」にいえる点は、「小僧」の記載が「大・中・小」「一・二・三」「年長・中年・年少」となっていて統一性がない。おそらく底本は「小僧」とだけ書かれていたのか、今後検討する必要がある。

校合をして気づいた点は、「銘苺子」と同じように「執心鐘入」でも「新報・宮城」と「台湾本」の記載が似通っている、という点である。先の「小僧」の記載は「年長小僧」「小僧（年長）」と転倒してはいるものの、分け方に「年長・中年・年少」をつかっている点はおなじである。さらに、本文が始まる前の説明文が酷似している。以下に示す。

「新報・宮城」

本組踊は斯道（スミチ）の開祖玉城（タマキ） 親方朝薫作として所謂五段の一に

て謡曲道成寺よりほん案構想せしものと称せらるる原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使かん林院修選正使林鴻年及びかん林院編修副使高人鑑を首里城に招請せし時演ぜしものによる（尚育王時代）而して文句は現代のものとは少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならんと

（附り淫女容貌相変じ笠なげ捨て鐘に入り替り段々の業有之）

「台湾本」

此組踊は斯道の開祖朝薫か作りし所謂五段の一にて謡曲道成寺より翻案構想せしものと称せらるる原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使翰林院修選正使林鴻年及翰林院編修副使高人鑑を首里城に招請せしとき演ぜしものに依る（尚育王時代）而して文句は現代のものとは少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならん歟、欄外の記事参照

附淫女容貌相変、笠なげ捨て、鐘に入替り段々の業有る

このように文体まで似ているという事は、この二本は同じ人物が作成した「組踊本」である可能性が高いのである。

#### 四 総括

以上の四本を校合した結果、「大川敵討」は『戯曲集』と「琉球新報」の記載が近く、「新報・宮城」とは記載が遠い事がいえる事がわ

かった。だがしかし、「銘苺子」「執心鐘入」については、『戯曲集』と「新報・宮城」「台湾本」の記載が近く、「琉球新報」とは記載が異なる部分が多いことがわかった。

さらに「新報・宮城」「台湾本」の記載はより近く、ほぼ同じ「組踊本」である事がいえる。おそらく、年代的にも古い「台湾本」をもとに「新報・宮城」の「銘苺子」「執心鐘入」が掲載された可能性がある。また、「新報・宮城」の「大川敵討」は「羽地本」からの書写である可能性は低いといえる事がわかった。

四本を校合した結果、『戯曲集』は確かに「羽地本」を書写している事は事実であるが、他の本に見られる記載の欠落などを考えると、伊波普猷が手を加えた可能性もうかがえる。今後、筆写本の校合を行い、『戯曲集』収録の「組踊本」と比べ、より詳しく検討する必要があることがいえる。

#### 第四節 まとめ

以上、『尚家本』と対校本の校合、ならびに戌の御冠船のテキストから写された戯曲集とその他の「組踊本」の校合を行った。詳しい校合結果は次章で述べるが、「組踊本」はその書写元を記載していないため、校合することでその系統を探ろうと試みた。結果として言えることは、写本の対校本どうしで完全に一致する組踊集は見られ

なかった。また、可能性として言えることは、写本を書写する際に、完全に親本をコピー（臨書）することはなく、書き手の裁量で書写していることが伺えた。それは、役名の記載でも「国吉のひや」「国吉の比屋」「国吉」「国吉の子」など、バラバラであり、組踊集によつては「謝名」「平田」「砂川」など「の子」「の大主」「の比屋」などの役職名を省く記載をしているものもある。組踊は同じ作品中に同じ苗字で役職名の異なる登場人物は登場しないため、そのような省略記載があっても問題はない。しかし、「書写」ということは通常親本の記載をそのまま再現するはずだが、「組踊本」の間で役名記載がバラバラであることが、それがされていない証拠とみなせると考えられる。

また、台詞にも同じようなことがいえる。「くやゆら」「くやよら」など、「ゆ」と「よ」など同音で発音される仮名の書き分けをしていない。組踊集によって規範的に「ゆ」を使う、「よ」を使う、というものなく、混在しているのである。このような仮名の書き分けなどもバラバラであるため、書写した人物が好きなようにまとめているとみなすことができる。

戯曲集を中心にした校合では、台湾本、宮城真治資料ともにほぼ内容は同じであった。伊波普猷、真境名安興など、戦前の研究者が親本から書写したばあい、体裁は異なれど、内容は親本と変わらな

いという結果が見られた。それと同時に、校合したことで戯曲集の価値がまたしつかりしたものになったといえる。

次章では、尚家本の各作品における特徴的な異同を挙げ、対校本間の類縁性や系統などを明らかにしていく。

(注二) 沖縄県立図書館『徐葆光 中山伝信録 上』(郷土史講座テキスト 下冊封使使録集 十) 一九七六年  
(注三) 原田禹雄『徐葆光 中山傳信録 新訳注版』榕樹書林 一九九九年

(注四) 諸橋轍次『大漢和辭典』大修館書店 一九七四年  
(注五) 前掲注一に同じ。徐葆光『中山伝信録』

(注六) 大城學『「長者の大主」考』『沖繩文化 第四八号』沖繩文化協会 一九七七年

(注七) 前掲注『徐葆光 中山伝信録 上』。  
(注八) 愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』大修館書店 一九七八年

(注九) 漢語大詞典編集委員会 漢語大詞典編纂所編『漢語大詞典』漢語大詞典出版社 一九九三年。ここでの訳文は、沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員の盧姜威・呉海燕の両氏に御教示いただいた。

(注一〇) 前掲注『徐葆光 中山伝信録 上』。  
(注一一) 前掲注『徐葆光 中山伝信録 上』。

(注一二) 沖縄県立図書館『周煌 琉球国志略 下』(郷土史講座テキスト 下冊封使使録集八―三) 一九七五年。なお本文を読み下す際に旧漢字は新漢字に改めた。

(注一三) 前掲注『周煌 琉球国志略 下』に同じ。

(注一四) 犬飼公之『琉球組踊 玉城朝薫の世界』瑞木書房 二〇〇四年。第四章、第一節より。

(注一五) 前掲注『周煌 琉球国志略 下』に同じ。

(注一六) 前掲注、犬飼公之『琉球組踊 玉城朝薫の世界』。

(注一七) 李鼎元『使琉球記』(『那覇市史 資料篇第1巻3』所収)によると八月一五日に「中秋例宴の會を嫌ひ、之を却くこと再びす」とある。また九月の一日に「舊例は、重陽の第四宴と爲し、龍舟を具して龍潭に競渡するも、已に之を辞す」とある。

(注一八) 『躍方日記』演目名の右肩に「辰年者花売之縁二繰替」とある

(注一九) 『躍方日記』演目名の右肩に「辰年ハ天願若按司ニ繰替」とある

(注二〇) 申年・辰年の演目は『躍方日記』一八三七年二月三日の項目より。

(注二一) 『躍方日記』一八三七年二月九日の項に「一 組躍之儀別紙辰年御例通拾三番仕組方／被仰付度奉存候」とあり、「辰年組踊」と書かれたあとにこの漢文の演目名と組踊名が記されている。

(注二二) 『躍方日記』一八三八年九月十日の項に「一 御膳進上組躍之儀先例通七番／被仰付度旨別紙通名護里之子親雲上／登 城喜舎場里之子親雲上御取次差出候処／其通被仰付候段被仰渡候事」とあり、その次に組踊作品名がある。この番組を九月二十日より勘定座で稽古する。

(注二三) 當間一郎「八重山に現存する組踊写本」(二五五ページ)『宮良當壯記念論集』石垣繁編 びるぎ社 二〇〇〇年

(注二四) 真境名安宜『忠孝婦人』の作者は久手堅親雲上。『琉球新報』一九三四年一月一七日掲載。ここには冊封使来琉の一年前である末(嘉慶四年)の九月二八日のこととして「新古組踊番數御用二付書調先達而評定所江差出置候處今日左之通拾參番仕組方被仰付

候事」として作者名・作品名の順で作品が列挙されている。池宮正治「組踊の作者は正しく伝えられたか」『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要 第二号』一九九六年）に同資料が引用されている。

(注二五) 前掲注『躍方日記』。

(注二六) 『躍方日記』一八三八年一月二一日の項目より。

(注二七) 『躍方日記』一八三八年一月五日の項目より。この後の記事にも踊方が那覇に向いて望舟宴を行ったと思われる記述がある。

(注二八) 池宮正治「首里城の舞台に供された組踊と知られざる組踊」

『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要 第七号』二〇〇一年

(注二九) 『丙寅冊封諸宴席前演戯故事』より

(注三〇) 前掲注、池宮正治「首里城の舞台に供された組踊と知られざる組踊」に同じ。

(注三一) 兪姓家譜（根路銘家）の五世恵員の項に「康熙五十四年乙未

五月八日就尚貞王御七年御回忌為那覇躍奉行」、その子である六世

恵勇の項に「康熙」五十三年甲午五月十七日就尚益王御三年御回忌

為那覇躍奉行」とある。『那覇市史 資料篇 第1巻8 家譜資料

(4) 那覇・泊系』那覇市企画部市史編集室編 一九八三年

(注三二) 『丙寅冊封那覇演戯故事』より

(注三三) 池宮正治「組踊とは」首里城普及書『御冠船舞踊―組踊と舞

踊―』財団法人海洋博覧会記念公園管理財団編 二〇〇二年

(注三四) 池宮正治「かぎやで風節と郭聖王」(三二ページ)平成 11・

12・13年度科学研究補助金「基盤研究」(B)(2)「研究報告書『琉

球・中国交流史研究』研究代表者 上里賢一 琉球大学 二〇〇二

年

(注三五) 池宮正治「組踊の作者は正しく伝わったか」(注三四論文)で

池宮は手水の縁の作者を平敷屋朝敏ではないという見解を示し、矢

野輝雄は「組踊『手水の縁』の作者について―池宮正治氏の諸説に

ふれて―」(『組踊を聴く』収録論文)でその逆の立場をとった。

(注三六) 最近の研究では、劉富林の「琉球組踊、日本能、中国戯曲の

比較」(沖繩藝能史研究 第九号 二〇〇六 所収)などがある。

(注三七) 『校註 琉球戯曲集』凡例 一頁。

(注三八) 比嘉春潮文庫所蔵『郷土志料目録』より

(注三九) 名護市立博物館所蔵の宮城真治新聞資料。この時期の琉球新報が現存していないため、どのような体裁であったかは推測するにとどめるが、一作品の「組踊本」を数日に分けて掲載している。「組踊本」が掲載されている部分を切り取って、小冊子にできるように仕立てられている。

(注四〇) 台湾大学蔵『琉歌大観』巻一、序文より。

(注四一) 田島利三郎『琉球文学研究』青山書店出版一九二五年 二頁。

(注四二) 『日本民俗』第12号 一九三九年六月一日発行。

(注四三) 『沖繩の組踊(II)』(沖繩県教育委員会編) 四五頁。

(注四四) 『日本民俗』第12号三一頁。

(注四五) 二〇一一年十二月十四日、宮里朝光氏宅でのインタビューより。

(注四六) 池宮正治『琉球文学論』沖繩タイムス社 一九七六年(二四

六頁)

(注四七) 復刻版『校註 琉球戯曲集』解題より。榕樹社 一九九二年

(注四八) 大城學『琉球芸能史概論』砂子屋書房 二〇〇〇年(二八八

頁)

(注四九) 矢野輝雄『組踊を聴く』瑞樹書房 二〇〇三年(一七五―一

八三頁)

(注五〇) 本来であれば原本を扱うのが妥当であるが、本研究に取り組

んでいる期間中、原本が修復処理に出されていたため、やむなくマ

イクロコピーを使うこととなった。

(注五一) 池宮正治「かぎやで風節と郭聖王」(三二ページ)平成 11・

12・13年度科学研究補助金「基盤研究」(B)(2)「研究報告書『琉



球・中国交流史研究』研究代表者 上里賢一 琉球大学 二〇〇二  
(注五) 尚家文書(通し番号 95 文書番号 160)『冠船付御膳進上日記』  
五頁。

(注五三) 尚家文書『踊方日記』(二一〇～二一二頁)

(注五四) 矢野輝雄『組踊への招待』(二八五頁)、當間一郎『沖繩の芸  
能』(一六二頁)

(注五五) 名護市史編さん委員会編『名護市史本編・8 芸能』二〇一  
二年(四一五頁)

(注五六) 『沖繩の組踊(II)』より。

(注五七) 二〇〇一年八月九日『沖繩タイムス』「100年前の組踊「組踊本」  
寄贈」

(注五八) 一九七一(昭和四十六)年四月二十九日付『沖繩タイムス』  
文化面 「組踊恩河本は小禄御殿本なり―仲吉良光」より。

(注五九) 池宮正治「台湾大学より真境名安興編『琉歌大観』とどく」  
琉球大学附属図書館報「びぶろお」30巻1号 一九九七年

(注六〇) 大城學「組踊「組踊本」は如何にして筆写されてきたのか」  
『琉球大学法文学部日本東洋文化論集』一九号 二〇一三年

(注六一) 「琉球作戯の鼻祖玉城朝薫年譜―組踊の発生―」校註琉球戯  
曲集』付録三三三頁参照。

(注六二) 矢野輝雄『組踊への招待』第二章 組踊の作者」二七頁。

(注六三) 尚家文書『踊方日記』八〇九頁。

(注六四) 『校註 琉球戯曲集』(二九九頁)。

(注六五) 外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』角川書店 一  
九九七年(二〇頁)

(注六六) 前掲注『定本 琉球国由来記』(二〇頁)

(注六七) 前掲注『定本 琉球国由来記』(四〇六頁)

(注六八) 前掲注『定本 琉球国由来記』(三六頁)

(注六九) 前掲注『定本 琉球国由来記』(四〇六～四〇七頁)

(注七〇) 伊波普猷 復刻版『校註 琉球戯曲集』榕樹社 一九九二年(六

七九頁)

(注七一) 『校註 琉球戯曲集』(六八八頁)

(注七二) 東恩納寛淳『東恩納寛淳全集』第八卷(四三八頁)

(注七三) 矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社 二〇〇一年(二二頁・  
一八〇頁)

(注七四) 原本を確認すると、欠字部分は「タン」と読めそうである。  
また、「ヨチ賜り」は「ヨルチ賜り」の「ル」が脱落したと思われる。

(注七五) 池宮正治『琉球芸能文学論』光文堂 一八八二年(三九〇頁)

(注七六) 那覇市企画部市史編集室『那覇市史資料編第1巻7家譜資料  
三』一九八二年(一七六頁)

(注七七) 『那覇市史資料編第1巻7家譜資料三』(一八五頁)

(注七八) 『校註 琉球戯曲集』(三四二頁)

(注七九) 当間清光『沖繩郷土古典芸能 組踊全集』三ツ星印刷 一九  
五五年。この本には作者が「摩文仁安祥」となっている。

(注八〇) 三隅治雄『沖繩の芸能』邦楽と舞踊出版部 一九六九年。こ  
の書では、仲井真元階が組踊の演目と作者を記しているが、作者は  
神谷厚順・数人合作としている。(五九九頁)

(注八一) 池宮正治「組踊の作者は正しく伝えられたか」『琉球大学法文  
学部日本東洋文化論集』第二号 一九九六年(八頁)

(注八二) 前掲注二四、真境名安宜『忠孝婦人』の作者は久手堅親雲  
上。

(注八三) 前掲注、池宮正治「かぎやで風節と郭聖王」(三二一ページ)平  
成 11・12・13年度科学研究補助金「基盤研究(B)」(2)「研究報  
告書『琉球・中国交流史研究』より。

(注八四) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目版』ブリタニカ・ジ  
ヤパン株式会社 二〇一一年。項目「ビロード」より。

(注八五) 言語学会編『言語学雑誌』第一巻七号・八号 一九〇〇年

(注八六) 『校註 琉球戯曲集』凡例より。

(注八七) 戌の冠船は、戌年の『躍方日記』の十月十八日の記事に「冠船首尾能被為濟勅使様御機嫌能宜御帰朝被成御満悦之御事候」とあり、寅年の冠船は『小禄親方日記』に日記が「大清同治六年丁卯」で終わっている記載がある。

(注八八) 前注『校註 琉球戯曲集』に同じ。(凡例より)

(注八九) 前注『校註 琉球戯曲集』に同じ。(凡例より)

(注九〇) 『太田朝敷選集』より。

(注九一) 『沖繩大百科事典』より。

(注九二) 大城學「組踊『執心鐘入』の「組踊本」―伊波本と真境名本の比較―」沖繩文化106号に掲載。

表A

作品名	上演年	申年		辰年		戌年	
		諸宴	御膳進上	諸宴	御膳進上	諸宴	御膳進上
1	執心鐘入	●		●	●	●	●
2	護佐丸敵討	●	●	●		●	
3	銘苺子	●	●	●		●	●
4	女物狂	●		●		●	
5	孝行之巻	●	●	●		●	●
6	万歳敵討	●		●		●	
7	義臣物語	●		●	●	●	
8	大城崩	●		●		●	
9	北山崩	●					
10	忠孝婦人	●		●	●	●	
11	巡見官	●		●		●	
12	忠士身替之巻	●		●		●	
13	東辺名夜討	●					●
14	辺土之大主		●		●		●
15	我数之子		●				
16	孝女布晒		●		●		
17	姉妹敵討		●		●		●
18	花売之縁			●		●	
19	天願若按司敵討			●		●	
20	本部大主				●		●
合計		13	7	13	7	13	7
		17		17		17	

表B

作品名	上演年	申年		辰年		戌年		寅年	
		諸宴	御膳進上	諸宴	御膳進上	諸宴	御膳進上	諸宴	御膳進上
1	執心鐘入	●		●	●	●	●	●	●
2	護佐丸敵討	●	●	●		●	○	●	
3	銘苺子	●	●	●		●	●	●	●
4	女物狂	●		●		●		●	
5	孝行之巻	●	●	●		●	●	●	
6	万歳敵討	●		●		●	○	●	
7	義臣物語	●		●	●	●	○	●	●
8	大城崩	●		●		●		●	
9	北山崩	●							
10	忠孝婦人	●		●	●	●	○	●	●
11	巡見官	●		●		●	○	●	
12	忠士身替之巻	●		●		●		●	
13	東辺名夜討	●					●		
14	辺土之大主		●		●		●		●
15	我数之子		●						
16	孝女布晒		●		●				
17	姉妹敵討		●		●		●		
18	花売之縁			●		●		●	
19	天願若按司敵討			●		●	○	●	●
20	本部大主				●		●		
21	瀬長按司							●	
22	伊祖之子							●	
23	手水之縁							●	
24	伏山敵討							●	
25	二山和睦								●
合計		13	7	13	7	13	13	17	7
		17		17		17		19	

※戌年の御膳進上の●は上演練習をする7演目、○は実際上演された演目を表す

図1-1: 1907年『琉球新報』掲載「大川敵討」

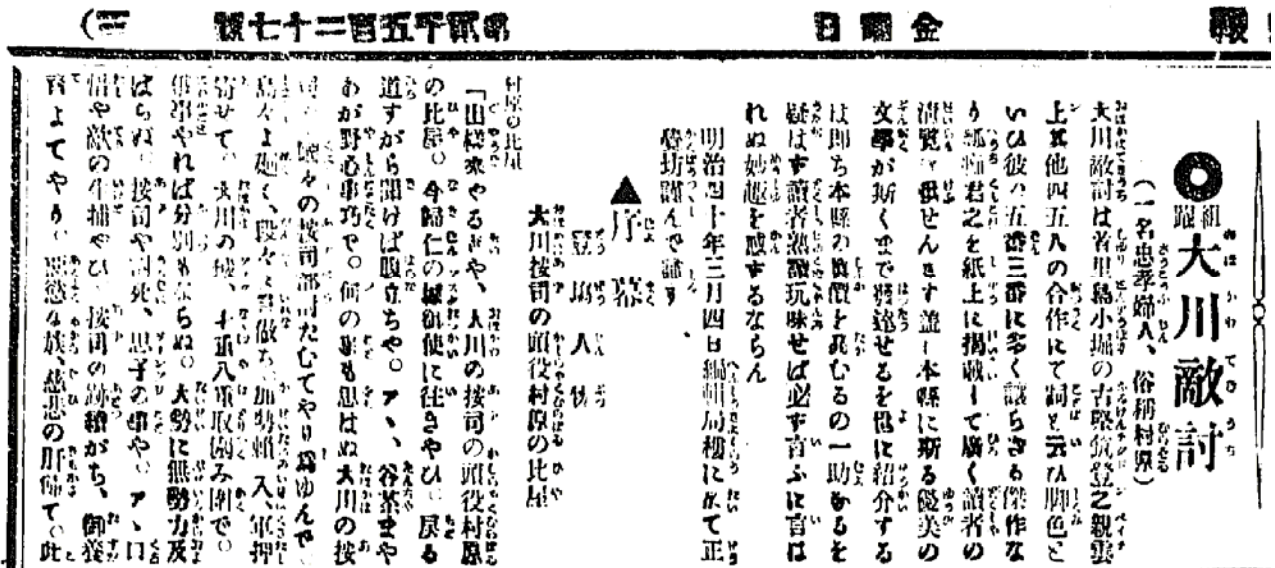


図1-2: 1907年『琉球新報』掲載「執心鐘入」



図1—3：1907年『琉球新報』掲載「銘苺子」

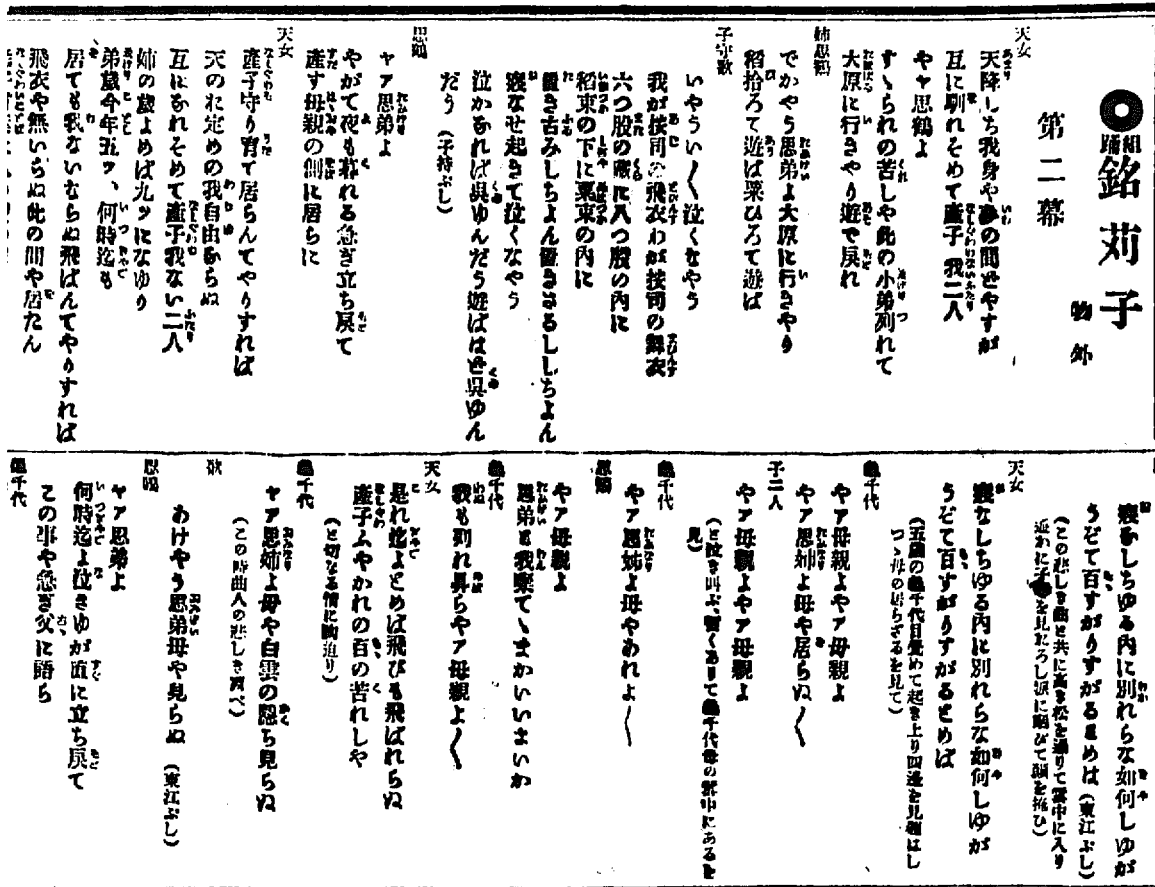


図2：1925年『琉球新報』掲載「忠孝婦人」



※おそらく上図のように見開きで掲載され、中央で折り曲げると袋綴りとなるように工夫されている。最上段には（一）と頁が打たれており、両端には千枚通しを通す「◇」の目印もついている。

图3：台湾大学所藏『琉歌大観』

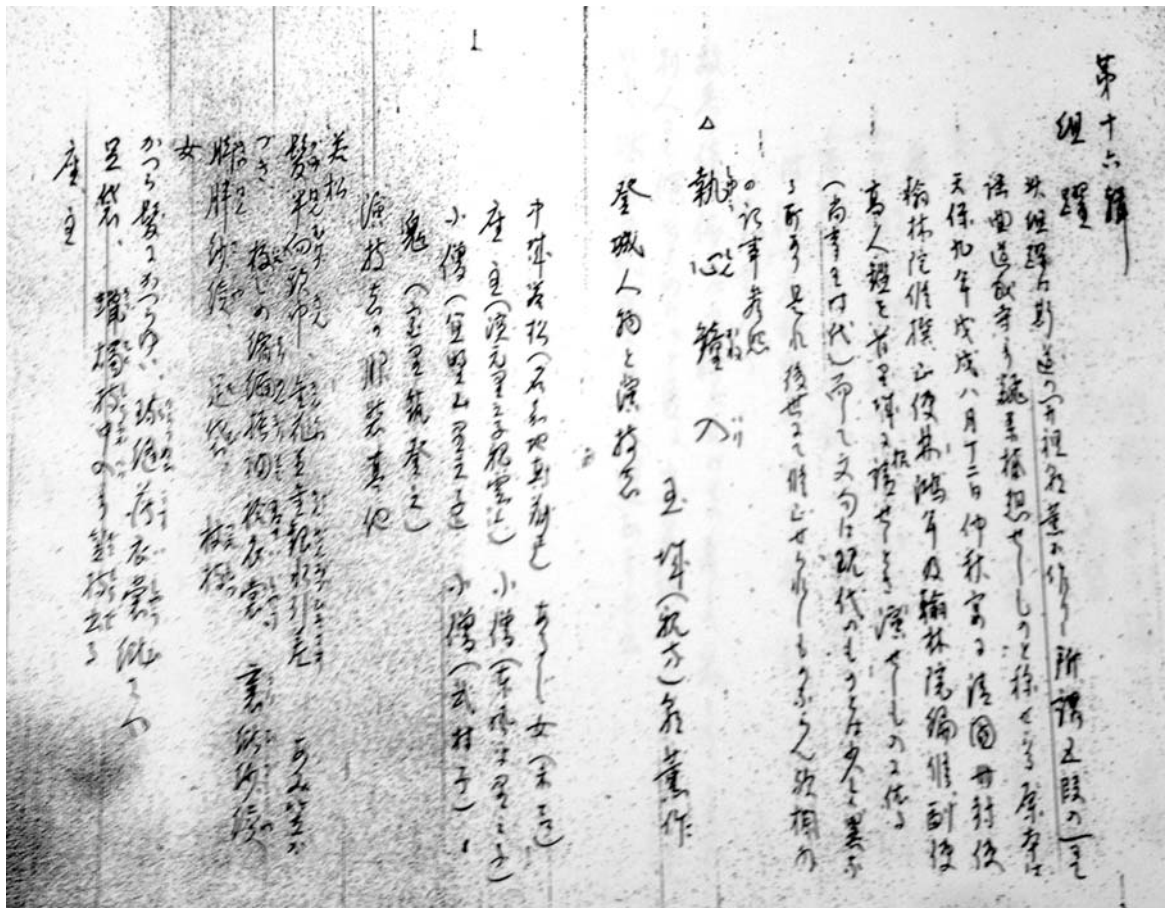
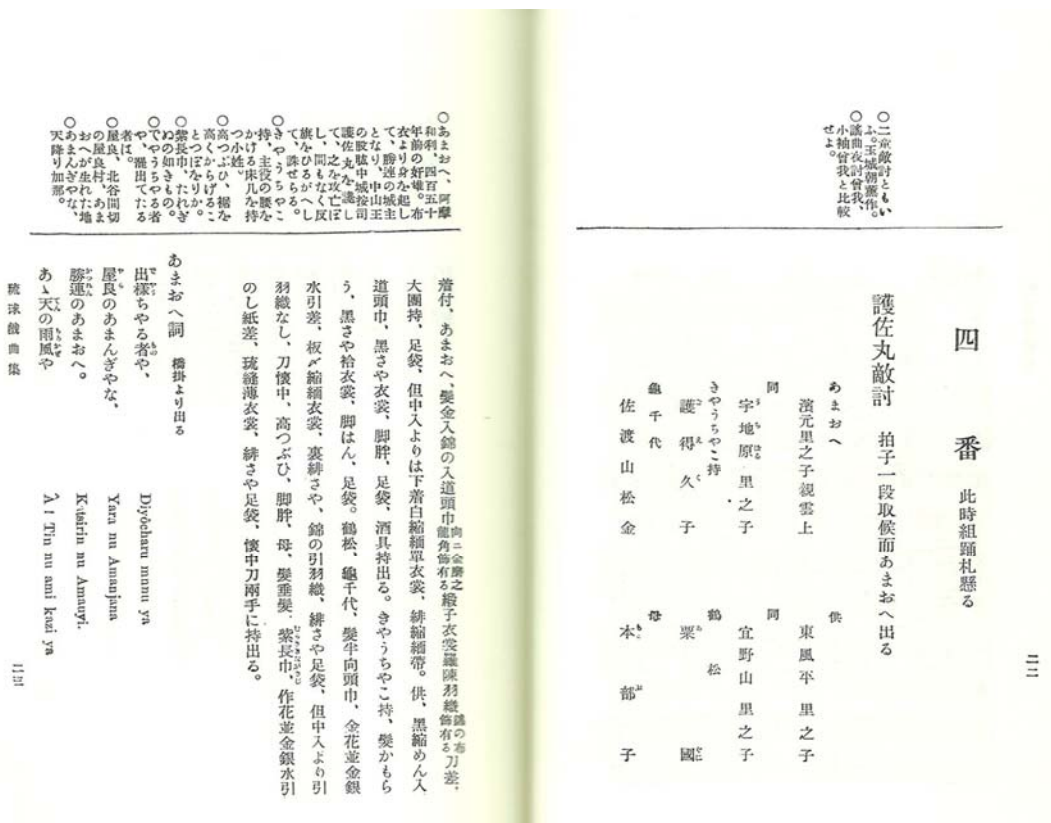


图4：『琉球戯曲集』



### 第三章 組踊の各作品にみられる異同

#### 第一節 はじめに（前章の校合を受けて）

前章では、底本である『「尚家本」組踊集』（以下「尚家本」とす）と各対校本とを校合し、その結果を明らかにした。本章では、前章の結果を受けて、作品ごとに対校本の異同の特性と対校本の特性から見えてくる、組踊本どうしの類縁性について明らかにする。

「尚家本」と校合を行った「組踊本」には、『恩河本小祿御殿本組踊集』や『今帰仁御殿本組踊集』などの首里の士族層の所有していた「組踊本」、『多良間村教育委員会所蔵本』『久志公民館所蔵本』といった地域の自治体が所有している「組踊本」、『豊川善豊所蔵本』『伊舎堂用八所蔵本』といった八重山士族の所有していた「組踊本」というように、大きく三つの「組踊本」の категорияがある。前章の校合で得られた、各「組踊本」の異同（音曲名の異同や台詞の異同）からは、これらの対校本で同じ場所に同じような異同が起こっているものがある。それを検討することで、「尚家本」や各対校本どうしの類縁性をはつきりと見えてくると思われる。

以下に異同の特性、対校本の類縁性をみていく。

#### 第二節 校合結果より得られた各作品の異同の特性

##### 1 辺戸之大主

対校本は『兼島信備所蔵本』（以下「兼島本」と『琉球脚本組踊集 下巻』（以下「琉脚」）の二冊である。この作品は、「兼島本」以外に筆写本が現存していない（注3）。よって活字本でも一冊のみ収録が確認できる「琉脚」を用いて検討した。

上記三本を校合し、結果としてみられた異同の中で特徴的なものをあげると、

- ① 「尚家本」では結末に四節歌われる「はやひくわいにや」節が対校本では三節しか歌われない。
  - ② 「兼島本」には役の幕の出入りがわかるようなト書きがみられるが、底本と他の対校本には見られない。
  - ③ 「兼島本」には劇中で踊られる舞踊の際に、踊りの採物を指定するト書きが見られる。底本と他の対校本にはみられない。
  - ④ 対校本は役名を一つも欠くことなく記載しているが、「尚家本」には数カ所脱落が見られる。
  - ⑤ 「尚家本」は「辺土のひや」「辺土の子」と繰り返し出てくる場合、共通する部分の「辺土の」を省略して記載している。
- 結果をまとめると、「尚家本」と「兼島本」は台詞の記載は近いが、「尚家本」には「兼島本」にみられるト書きが一切見られないため、「兼島本」は「尚家本」から書写されたのではなく、別の系統の組踊本から書写された可能性がうかがえる。

また、「琉脚」は「尚家本」「兼島本」と記載が異なる部分が多くみられるため、「尚家本」「兼島本」とは別系統の「組踊本」からの書写であるといえよう。しかし、「兼島本」と末尾の「はやひくわいにや」節の脱落が同じであるため、「兼島本」系統の「組踊本」を親本にして書写されたものであることも可能性として考えなければならぬ。

〈辺土の大主〉は、底本と対校本を概観すると、底本と対校本は書写の親子関係ではなく、対校本どうしは書写の兄弟関係の可能性が認められる。

## 2 執心鐘入

対校本は「今帰仁本」・「恩河本」・「兼島本」・「台湾本」・「比嘉本」・「新報・宮城」「戯曲集」・「宮良本」・「伊舎堂本」の九冊である。校合した作品の中でも、対校本の数も多く、首里・那覇の士族の家に所蔵されていた「組踊本」、先島の士族の家に所蔵されていた「組踊本」、研究者が発表した「組踊本」と、その種類も充実している。この作品にはおそらく少なくとも二つの種類の「組踊本」があることが矢野輝雄によって指摘されている。ひとつは「戯曲集」を代表とする戌の冠船の「組踊本」、もう一つは具志頭家本、「恩河本」の親本と思われる寅の冠船の時の「組踊本」である。矢野は『組踊への

招待』において若松の「女生れても 義理知らぬものや これど世の中 地獄だいもの」の台詞を揚げ、「この若松のセリフが寅の冠船では『をとこ生まれても』と変わっている。しばしば演者が言い間違えたと誤解されることがあるが、そうではなく「女」から「男」へと改訂されているのである<sup>(註三)</sup>とし、この部分の記載が、戌の冠船系統の「組踊本」では「女」であり、寅の冠船系統の「組踊本」では「男」となっていることを指摘している。そして「男と言われ女と言ひ換える問答には言葉の遊びがあり、それだけに気持ちの余裕が感じられる(中略)そのまま『男生まれても』と即座に受けた方がよいというのが、当時の躍奉行小禄親雲上らの考え方ではなかったか」と推察している。ここでいう当時の躍奉行は寅の冠船の躍奉行であった小禄親方であろう。矢野の推察からすると、躍奉行が独断的に「組踊本」の書き換えを行っている、ということになる。はたしてそうだろうか。校合結果からは十冊の「組踊本」の内、四冊が「男」、「比嘉本」一冊が「男」を見せ消ちにして「女」とし、その他の「台湾本」「新報・宮城」「戯曲集」「兼島本」四冊が「女」となっている。「伊舎堂本」は「男」「女」どちらも記載されていない。「女」と記載されている「組踊本」の内、「台湾本」「新報・宮城」「戯曲集」は戌の御冠船の資料を底本としてまとめられている。この点から言うと、戌の御冠船系統の「組踊本」はすべて「女」と記



載されていることから、矢野の推測とは逆に、戌の執心鐘入の「組踊本」だけ「女」となっている可能性も考えられる。

「兼島本」は校合結果から、「今帰仁本」「恩河本」などと共通の異同があまり見られず、戌の御冠船系統の「組踊本」とも異同箇所が異なる。「兼島本」が書写されたのは明治三九（一九〇六）年であるので、書写された当時は、もちろん戌の御冠船で使用された資料も現存している。したがって戌の御冠船の系統の「組踊本」を写した「組踊本」から書写されたことも考えられる。

また、八重山に残っている「組踊本」である「宮良本」と「伊舎堂本」は、干瀬節の歌詞の四句目「互にかたやへら」が「互に語ら」と六音に記載されており、同じ箇所でも同じ異同が見られる。さらには女の「深山鶯の／春の花毎に／そゆるよの中の／ならひやしらね」という問いかけに対して、底本ならびに他の対校本は「知らん」という若松の強い意志の表れた台詞となっているが、「浮世恋てすや／聞見ちんしらぬ／頼て此事や／ゆるちたふうれ」という、若松が女に対して許しを乞う表現の台詞となっている。

〈執心鐘入〉の「組踊本」の特徴として、「男」「女」の記載の異同、若松の台詞「知らん」などから、大きく三種類の「組踊本」の種類があることがうかがえるのである。

### 3 銘苅子

「尚家本」にみられて対校本にみられない記載は、天女の早作田節（No.50）の記載に「早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合」と所作を指示した内容が書かれているが、対校本は「兼島本」の「天女言バ早作田節」以外はすべて節名を記載しているだけである。それから、着付（No.216）が「教育大」「恩河本」「兼島本」「伊舎堂本」にはみられない。また、此の記載のうち「戯曲集」「台湾本」「新報・宮城」にみられる着付とは記載が異なる。

対校本にみられて「尚家本」にみられない記載は、「戯曲集」「台湾本」「新報・宮城」にみられる配役（No.519）は「尚家本」を含めた他本にはみられない。それから、役者の登退場を指示するト書き（No.19・40・112・115など）も「尚家本」を含めた他本にはみられない。これらは「羽地本」系統の組踊「組踊本」の特徴といえる。

記載の異同がみられる部分は、「尚家本」が「天女言葉並東江ふし」として、天女の台詞を唱えた後に、東江節を同歌詞で歌うという記載（No.216）は、「兼島本」「恩河本」は「尚家本」と同様であり、「伊舎堂本」「教育大」「台湾本」は「同節」系の記載、「戯曲集」「新報・宮城」は「天女詞」となっていて、記載にばらつきがある。また、「戯曲集」「新報・宮城」はこの台詞の後に「東江節」（No.221）以下の詞章が記載されている。「台湾本」は「天女台辞東江節に同じ」（No.

221)として詞章が記載されており、歌と台詞の順序が逆になっている。

上使の台詞にみられる「御素御取立めしやいん」(No.451)は、対校本はすべて「おの御取立めしやいん」の系統の記載となっている。

それから、銘苅子の台詞「胸に思染れ」(No.463)は「教育大」を除く対校本で「胸に思染て」の記載となっている。これらは「尚家本」の書き損じと思われる。「御素御取立めしやいん」(No.451)の場合、「御素御取立」の「御素」の意味が分からず、「おの御取立」であれば「その御取立」となって意味が通じる。「おの」という音と「御素(おそ)」という音も近い。そして「胸に思染れ」はその次の台詞が「肝に思留て」(No.464)となっており、「尚家本」とすべての対校本ともに記載が同じである。対語関係にある台詞であるので、この場合は「胸に思染て／肝に思留て」とした方がよい。したがって、「尚家本」の記載が誤っていると思われるのである。また、同様の表現は大川敵討にも、「我胸に留めて／我肝に染めて<sup>(注三)</sup>」とあることからここでは「留て」の方が良いと思われる。

対校本の特徴としてみられるものは、「新報・宮城」と「台湾本」には短い解説が二カ所記載されている。一つは(No.226)で、「新報・宮城」に

(附りこのあがり江ぶしにつれて天女は高き松を上りて雲中に

入り遙かに子供等を見下して涙に咽ぶとき五才の亀千代は目覚めて起き上り母の居らざるを見て四方を見廻し泣き叫んで母の雲中にあるを見母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰途につく処の場なり)

とあって、「台湾本」には頭注に

この悲しき東江節につれて天女は高き松を上りて空中に入り遙かに子供等を見おろし涙に咽ぶとき五才の亀千代は目覚めて起き上り母の居らざるを見て四方を見廻はし泣き叫ぶ姑くして母の雲中にあ迫るを見、母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰途につく

とあり、ほぼ同じ文章である。それからもう一カ所は(No.326)で「新報・宮城」に

(附り 以上の台詞に列れて二人の孤児は母の昇天せし松の下に座し相抱いて泣く)

「台湾本」の頭注には

此の台辞につれて二人の孤児は母の昇天せし松の下に座して相抱いて泣くとき、父なる銘苅子は児等の有様をみてひとしほ腸もちぎるゝばかりに思ひ之れを賺しなだめて家に帰らんとす

とあって、この部分は「台湾本」の方が長いが、前半部分はほぼ同じ文章である。この解説は他の組踊「組踊本」にはみられないこと

から、「新報・宮城」と「台湾本」は同じ人物によって書かれた組踊「組踊本」であると思われる。他にも役名の書き方が、「尚家本」「戯曲集」「教育大」「伊舎堂本」が、「おめなり・おめけり」系の記載であるのに対し、「兼島本」「恩河本」は「おめなり」のところは「思鶴」と娘の名前で記載されており、「新報・宮城」「台湾本」は「思鶴・亀千代」と両方とも名前で記載されており、この二本の組踊「組踊本」は共通点が多い。

前項で取り上げた〈執心鐘入〉でも共通点が多いことから、この二本は双子の関係にある「組踊本」であるといえる。

それから、最後に二節歌われる「立雲節」(No.477)は節名の異同は無かったが、「伊舎堂本」のみ一節しか歌われず、(No.482～486)を欠いている。また、一節めの歌詞が「尚家本」その他が「夢やちやうもむたぬ／百かほのつきやす／あの松と川の／ゆへとやゆる」であるのに対し「夢やちやうん見たぬ／百かふのつちやす／めくみある御代の／ゆへとやよる」となっており、三句目が異なっている。

さらに、「教育大」は二カ所詞章が抜けており (No.203・No.384) 最後に詞章が別筆で書き足されている。

全体的に〈銘苺子〉は他の組踊「組踊本」に比べ、目立った異同がみられない作品である。しかし、「羽地本」系の「組踊本」と「尚家本」系の「組踊本」は記載が異なるということが明らかである。

#### 4 大川敵討

〈大川敵討〉は十冊の対校本と校合を行った。「尚家本」に見られて共通して対校本に見られない記載は着付 (No.24～33) である。戯曲集と「多良間本」には着付が見られるが、「尚家本」と異なる記載であり、また、戯曲集と「多良間本」でも記載が異なる。それから、母の台詞「母／一 咲出ゆる花ハ／ワ身に思かへち、／のゝ肝のあとて／捨てあたか、」(No.372～376)は「新本本」「兼島本」「豊川本」「喜舎場本」の四冊には見られなかった。さらに、「新本本」「豊川本」「喜舎場本」の三冊は、役名「乙樽」(No.172)、音曲名「なかんかりふし」(No.175)、乙樽の台詞「一、やああや前よ、／くく」(No.203～204)、村原の比屋の台詞「引取んともつ」(No.351)、音曲「母言葉并伊野波ふし／一 義理のみちやれハ／留てとめららぬ、」(No.611～613)、門番の台詞「くく」(No.673)、役名「同人」(No.674)、門番の台詞「拝れよめしやいん／あれに居やうれ、」(No.675～676)、谷茶の按司の台詞「せめて有筋／白状よしめれ、」(No.723～724)、下部の台詞「御側よて拝め、」(No.735)、乙樽の台詞「一、のゝんとおおまぬ／女あてなしに、／罪科よかけて／うきくれしやしめゆすや、／村原かしワき／恨めてとをゆる、／のよて身にかへて／実よかくしやへか、／此事やつくく」とおもてたはふれ、」(No.813～

822) 役名「満納」(No.948) 谷茶の按司の台詞「たう〜」(No.1002)、満納の子の台詞「人やたまそとも、／いきやし此満納／たまかしのなゆか、」(No.1027〜1029)、谷茶の按司の台詞「一 いや〜、／今のこと愚痴に／かたまとるむさや、／素立ひやならぬ／急ち戻やうれ、」(No.1232〜1236)、谷茶の按司の台詞「ある間の浮世、／つらさ身に受て／思ひこかれやひ、／恋死はむくひ／たるにいきゆか、／たう〜／おれこれよおもて」(No.1307〜1313)、谷茶の按司の台詞「ならぬ〜、」(No.1343)、乙樽の台詞「百といつまでも／拜てすてやへら、」(No.1358〜1359)、谷茶の按司の台詞「一 たう〜、／けふや道中の／草臥もあらたひもの、／若按司の側にむち／休息よすれ、」(No.1407〜1411)、泊の台詞「一 是や心入とやる、」(No.1489)、泊の台詞「主やまあからまあんかひ／まひか、」(No.1496)、泊の台詞「大川の按司の」(No.1550)、泊の台詞「あらやらぬ事ハ／色々にいひ立て、」(No.1553〜1554)、村原の比屋の台詞「やあ〜、」(No.1752)、泊の台詞「まあかひいかわん／かもてい、」(No.1782〜1783)、村原の比屋の台詞「いや、まあむらの／何かしかやゆら、」(No.1787〜1788)、泊の台詞「一 むまやまあたやへるか、」(No.1792)、泊の台詞「細々の次第／おんにゆけやへら、」(No.1804〜1805)、松千代の台詞「父親の事と／按司添前みこし立、」(No.1885〜1886)、松千代の台詞「此事や急ち／村原につけて、／思子の前

／とりかへち／敵討んともて、／肝勇いさて／むちていきゆん、」(No.1909〜1916)、役名「松千代」(No.1927)、松千代の台詞「一 やあ金松よ、／急ち内いやひ／村原のひや拜ま、」(No.1928〜1930)、役名「金松」(No.1931)、金松の台詞「一 たう〜／急ちをかま、」(No.1932〜1933)、村原の比屋の台詞「願たこと叶て／誇らしやとあゆる、」(No.1946〜1947)、村原の比屋の台詞「内通のことに、」(No.1957)、村原の比屋の台詞「城の門閉て、」(No.1992)、村原の比屋の台詞「やあやあ、」(No.2050)、谷茶の按司の台詞「一 いや供列もいらぬ／急け〜、」(No.2129〜2130)、音曲「東江ふし」(No.2194)、音曲「一 あけ夢かやゆら」(No.2195)、という四十カ所が共通して見られなかった。この四十カ所の見られない箇所は、他の対校本にも役名が見られない箇所があるが、台詞や音曲がみられないのは、この三冊だけで共通している。

その他に対校本同士に見られなかった記載は、乙樽の台詞「一 やああや前よ、／頓て喜名村や／たよひ島たひもの、／御気張よめしやうれ／御供しやへら、」(No.266〜270)が「与那覇本」と「比嘉本」に共通して見られず、谷茶の台詞「さあ〜／いそけ〜、」(No.2109〜2110)が、「兼島本」と「比嘉本」に共通して見られなかった。

つぎに、「尚家本」に見られず対校本に見られる記載で、対校本同士に共通して見られたものは、村原の比屋の台詞「大川の城／七重

八重／取囲みかこで、」（No.53～55）である。これは「比嘉本」以外の対校本すべてに見られた。また、下部の台詞「たう／＼、むまに／居やうれ／＼。」（No.738～739）は「多良間本」を除くすべての対校本に見られた。この二つの記載は、「尚家本」が落としている可能性も考えられるものである。さらに興味深いのは、母の台詞「母詞／義理の道だいもの、／止めてとめらゝぬ。」（No.608～610）は、底本の「尚家本」「今帰仁本」「恩河本」「兼島本」「多良間本」に見られなかった。底本と共通して見られない対校本は、首里の士族の所有していたものと、地方に残っているが、着付の記載がある、しっかりとしたものであることが、「尚家本」との近親関係にあることを感じさせる結果である。また、村原の比屋が最後に手配りをする場面でも、同様な結果が見られた。「尚家本」「戯曲集」「今帰仁本」「恩河本」「兼島本」「多良間本」には、家臣ひとりひとりに手配りを言い渡した際の家臣の台詞「拝留やへて」という返答が共通して見られない。これも非常に特徴的だといえる。

そして、「尚家本」や首里に残っている組踊集には見られないが、八重山に残る組踊集には「原国兄弟口説」（No.1861～1873）という音曲が共通して見られる。これは八重山に残された組踊集の大きな特徴である。

つぎに「尚家本」と対校本の記載の異同について、特徴的な部分

を取り上げる。第二章でも述べたが、「尚家本」とすべての対校本に共通して見られる異同は、村原の比屋の台詞「請答よふ」（No.533）が「請返答」となっていることや、泊の台詞「谷谷屋良村んかい」（No.1491）など、「尚家本」が書き損じたものと思われる箇所であった。そのような書き損じと思われる箇所は全部で九カ所見られた。続いて、対校本どうしで共通して見られる異同を挙げると、八重山に残る組踊本に共通して見られる異同が顕著である。一部、例をとりあげる。

石川の比屋の台詞（No.868）

「尚家本」 のゝおめのあゆか、

「新本本」 此外にあよミ

「豊川本」 此外にあよめ

「喜舎場本」 此外にあよミ

乙樽の台詞（No.900）

「尚家本」 鬼のことめしやうち

「新本本」 鬼のことしちよて

「豊川本」 鬼のことしちよそ

「喜舎場本」 鬼のことしちゆて

乙樽の台詞（No.991）

「尚家本」 按司かなし上に

「新本本」 按司そへ前上に  
「豊川本」 按司そへ「欠」  
「喜舎場本」 按司添前上に

谷茶の按司の台詞 (No.1004)

「尚家本」 急ちときゆるす、  
「新本本」 ふとちとらす  
「豊川本」 ふときとらす  
「喜舎場本」 解きとらす

谷茶の按司の台詞 (No.1070)

「尚家本」 けふや立別て  
「新本本」 今日や立戻て  
「豊川本」 今日や立戻て  
「喜舎場本」 けふや立戻て

谷茶の按司の台詞 (No.1072)

「尚家本」 思案しちからに、  
「新本本」 思案しちをとて  
「豊川本」 思案しちをとて  
「喜舎場本」 思案しちおとて

谷茶の按司の台詞 (No.1171)

「尚家本」 なけすてゝとらさ、

「新本本」 切捨てとらさ  
「豊川本」 切捨てとらさ  
「喜舎場本」 切捨てとらさ

泊の台詞 (No.1566)

「尚家本」 終にや思子や生捕られ、  
「新本本」 終にや嫡子や生捕られ  
「豊川本」 終にや嫡子生捕られ  
「喜舎場本」 終にや嫡子や生捕られ

村原の比屋の台詞 (No.1959)

「尚家本」 御運廻り来て、  
「新本本」 武運廻り来て  
「豊川本」 武運廻り来て  
「喜舎場本」 武運廻り来て

村原の比屋の台詞 (No.2057)

「尚家本」 腹の立まゝに  
「新本本」 はら立る俣に  
「豊川本」 はら立る俣に  
「喜舎場本」 腹立る俣に

このように、この三冊には全く同じ記載の異同がみられる箇所があり、ここで揚げた以外にも見られる。

八重山に残っている組踊集以外の対校本どうしで、共通して見られる異同は次のようになっていいる。先に挙げた部分で見ていこう。

村原の比屋の台詞 (No.2057)

- |        |        |
|--------|--------|
| 「尚家本」  | 腹の立まゝに |
| 「戯曲集」  | 異同ナシ   |
| 「新本本」  | はら立る俣に |
| 「今帰仁本」 | 腹立のまゝに |
| 「与那覇本」 | 記載ナシ   |
| 「恩河本」  | 腹立ノ俣ニ  |
| 「兼島本」  | 異同ナシ   |
| 「比嘉本」  | 腹立ノ俣ニ  |
| 「豊川本」  | はら立る俣に |
| 「喜舎場本」 | 腹立る俣に  |
| 「多良間本」 | 異同ナシ   |
- 以上の様に「今帰仁本」「恩河本」「比嘉本」で「腹立のまゝに」という共通の異同が見られる。校合を行った結果、八重山の組踊集に見られるようなはっきりとした異同は、他の対校本どうしで特徴的なものはなかなか見いだすことができなかった。例えば「今帰仁本」と「恩河本」で同じ異同が見られても、ある部分は「今帰仁本」と「兼島本」に同じ異同があり、またある部分は「恩河本」と「兼島

本」が同じであるというふうには異同の箇所が対校本間に渡っている事がいえる。

## 5 義臣物語

〈義臣物語〉を概観し、特徴的な異同を揚げていく。この作品は八重山地域に作品が残っていない。すべて沖縄本島にしか組踊集が残っていないのも特徴的であろう。

まず、「尚家本」に見られ、対校本に見られない特徴的なものは、子持節の歌詞の一部「行先や迷て／あの岩にすかり／このき瀬にのほて／互に鳴明ち」(No.125～126)が、「久志A本」「比嘉本」「久志B本」には見られなかった。また、最後に歌われる歌詞「一、こゝのえのうち／蒼て露まちゆす／嬉しこときくの花とやゆる」(No.905～908)が「久志A本」「兼島本」「比嘉本」には見られない。

それから、「尚家本」に見られない記載で、対校本全てに共通して見られたものは、新垣の比屋の台詞「いやならん／」(No.151)であった。その次に多かったのは若按司の台詞「やあ新垣の比屋」(No.153)であり、「恩河本」を除く五冊に見られた。また、夜回人の台詞(No.612～614)は「兼島本」「比嘉本」「久志B本」に以下の特徴が見られた。

「兼島本」

錢蔵はいく／＼／起て居きやうり／うほん

「比嘉本」

錢倉へい／＼／今日や北風も／ごう／立ちゆいよ

「久志B本」

金蔵はいく／＼／起て居ちやうれ／おふふん

挿入されていることはこの三冊で共通している。しかし、「錢蔵はいく／＼」という台詞は同じであるが、「比嘉本」だけ「兼島本」「久志B本」と異なる。

また、「久志A本」と「久志B本」は以下の共通した挿入が見られた。

新垣の比屋の台詞「あ、拝てなつかしや／袖の泪た」(No.106)

107)、

役名「国吉ノ子」と台詞「としやは呼出すをかま」(No.322)

323)、

役名「童」と台詞「され若按司の前／＼」(No.324～325)、

役名「若按司」と台詞「やあわらへむきや」(No.333～334)、

夜回人の台詞「やかりまや／＼や／人驚かき」(No.619～620)、

同じ箇所と同じ挿入が見られ、同じ底本からの筆写か、この二本が親子関係である可能性が見える。

次に「尚家本」と対校本で異同がある箇所のなから、特徴的な

部分を挙げる。各対校本に共通してみられる異同は、

①国吉の比屋の台詞「一門やだにも」(No.51)が「一門やだにゆ」

②国吉の比屋の台詞「いらてとれよ」(No.288)が「いらてとり」

③鮫川の按司の台詞「あゝ感してをゆる」(No.707)が「あゝ感してどをゆる」

④国吉の比屋の台詞「一人の働に」(No.711)が「一人が働に」

⑤国吉の比屋の台詞「若按司の行末や」(No.752)が「若按司の行衛や」

⑥鮫川の按司の台詞「誠名按司に」(No.866)が「誠と若按司に」

⑦鮫川の按司の台詞「やや若按司よ、」(No.866)が「やあ若按司」

以上の七箇所である。⑥⑦は「尚家本」の書き損じと思われる、しかし、その他の異同も大きく意味の異なるものではなかった。

対校本どうしで共通する異同を挙げる。特徴的なのは、国吉の比屋が童たちに小物を渡す順序が異なる点である。「尚家本」が馬乗ほとけ・おきれこふし・鳴子・若衆人形の順で渡すのに対して、「兼島本」「語学材料」は鳴子・若衆人形・馬乗ほとけ・おきれこふし。「比嘉本」は馬乗ほとけ・おきれこふし・若衆人形・鳴子の順で渡している。また、最後の音曲は、「尚家本」が清屋節であるのに対して「久志A本」・「兼島本」・「久志B本」は立雲節となっている。また、「久志A本」と「久志B本」は、共通した異同が認められた。例を



挙げると、次のようなものである。

国吉の比屋の台詞「責囲てをれハ」(No.32)が「責懸てをりは」  
国吉の比屋の台詞「道柴の露と消果て」(No.41)が「道しはの  
露と共にきよ果て」

国吉の比屋の台詞「御行衛尋やい拝ま」(No.63)が「若按司の  
御行衛尋やひをかめ」

村頭の台詞「上原んかい」(No.184)が「上原のやとりに」国吉  
の比屋の台詞「としよひやひ集めれよ」(No.274)が「どし呼ひ  
集り」

童の台詞「一、近方の村々に」(No.305)が「近方の村に」国吉  
の比屋の台詞「あの宿に引越ひ」(No.451)が「宿に引越ひ」  
ここで取り上げた異同を含め、全体で六七カ所の共通した異同が見  
られた。また、内容の異同の一番多かったのは「比嘉本」であり、  
一番少なかったのは「恩河本」であった。

## 6 天願若按司敵討

「尚家本」にしか見られない記載は着付である。次に多いのは天  
願若按司の所作「一礼」(No.1189)は、「兼島本」以外は見られなか  
った。ちなみに「久志本」では「一 拝ん留やへて」と台詞になっ  
ていて、異同が見られる。また、ト書き「附此時瀧落にて三人手配

を以忍の手ある」(No.539)は、「今帰仁本」と「豊川本」以外の対校  
本には見られなかった。また、供の台詞「いきやか〜」(No.366)  
は、「今帰仁本」・「恩河本」・「豊川本」以外の対校本で見られなかっ  
た。

それから、供の台詞「一 さあ〜急き〜」は「久志本」・「教  
育大本」・「京大本」・「喜舎場本」の四冊に見られず、久志の若按司  
の台詞「はかなさや嫡子／千代松か事と、」(No.464〜465)は、「久志  
本」・「兼島本」・「京大本」・「喜舎場本」の四冊にみられなかった。  
この二カ所の異同は「久志本」・「京大本」・「喜舎場本」の三冊に共  
通している特徴である。

次に「尚家本」に見られず対校本のみに見られる記載で特徴的な  
ものは、砂田の台詞「いきやか〜」(No.539)、富盛の台詞「一 拝  
留やへて」(No.1072)、が対校本すべてに見られて、「尚家本」に見ら  
れなかった。対校本どうしで共通している箇所は久志の若按司の台  
詞「城内になし子／跡方ないらん」(No.462〜463)が、「久志本」・  
「兼島本」・「京大本」・「喜舎場本」の四冊だけにみられた。それか  
ら、役名「久志」と台詞「一 やあ千代松やあ乙鶴よ」(No.602〜603)、  
は、「兼島本」・「京大本」・「豊川本」・「喜舎場本」の四冊だけに見ら  
れた。この二カ所の異同は「兼島本」・「京大本」・「喜舎場本」の三  
冊に共通して見られる特徴である。また、役名「総人数」と台詞「一

めしやいる事／押列て踊て／御供しやくら」(No.1352～1355)は「久志本」・「兼島本」・「喜舎場本」のみに見られ、先に挙げた(No.622～463)の異同と同じく三冊に共通しているものである。

次に「尚家本」と対校本で記載に異同のある箇所は、音曲「揚七尺ふし」(No.432)が「歌」、もしくは「七尺ふし」となっている。これは対校本すべてに見られた特徴である。「歌」となっているのは「久志本」のみであり、「久志本」が「揚七尺節」を意味していたとしても、他の七冊は「七尺節」と明記しているため、異同の大きな箇所といえる。

また、音曲の異同は最後に歌われる「しよんがないふし」が、「教育大本」・「兼島本」で「立雲節」となっており、「豊川本」では「哥」となっており、どの節を使っているか不明である。しかし、前に揚げたような「揚七尺節」と「七尺節」であれば書き損じの可能性もあるが、このように明確に音曲の異同があるのは(天願若按司敵討)のなかでこの「しよんがないふし」の部分だけである。

対校本どうしで共通して見られる異同は以下のようなものである。

天願の若按司の台詞「さかひさしゆんであれは、」(No.616)

「教育大本」 サカエサシオンテヤリ。

「恩河本」 サガイサシウンテヤリ

「喜舎場本」 探さしゆんでやり

久志の若按司の台詞「嬉しさとあゆる」(No.1198)

「久志本」 誇らしやとあゆる

「豊川本」 誇しやとあゆる

「喜舎場本」 誇らしやとあゆる

謝名の台詞「首よとれ」(No.1276)

「久志本」 首よ渡さ

「兼島本」 首ヨ渡サ

「喜舎場本」 首よ渡さ

このように、対校本どうしで他の作品のように共通する異同が特定の組踊本でなく、全体にとどころ異同が共通しており、類縁性を決定するほどの同一例が見られない。

## 7 二山和睦

まず、この作品は、「尚家本」に収録されているものうち、体裁が不十分と言わざるを得ないものである。第一に着付がなく、第二に前半部の千代松らと母親のやり取りの部分に役名と音曲名の記載が見られない(No.114・122・129・134・146・151・156・164)。しかし、内容は台詞、音曲ともに最後まで収録されており、「尚家本」の他の収録作品と比べなければ、しっかりした組踊本といえる。「尚家本」に見られて、対校本に見られない記載の中で一番多かったのは、

与座の大主の台詞「此事よ主人按司」(No.428)、与座の大主の台詞「たかにあらしの」(No.422)という台詞の一部分。そしてまとまつた台詞として、与座の大主の台詞「和睦なるやれば御万人のまきり／上下もともに／いちこたのしみに／くらそてやりともて」(No.425～429)、役名「与座」と台詞「一 やあ／虎松もひとつ／振立ひ見せれ」(No.509～511)、役名「虎松」と台詞「一 おう」(No.512～513)という部分が対校本全てに見られなかった。次に対校本どうしで共通して見られなかった箇所を挙げる。

「宮良本」を除く「今帰仁本」・「与那覇本」・「恩河本」・「兼島本」の四本に見られなかったのは、母の台詞「一 今のことやれハ／誇らしやとあゆる」(No.127～128)住居人の台詞「与座引とめて」(No.290)、住居人の台詞「南山の様子／仔細聞合しゆる分別やて」(No.291～292)、住居人の台詞「あんし大主も」(No.301)、住居人の台詞「隙やないらぬ」(No.304)、の五カ所であった。

「今帰仁本」・「与那覇本」・「兼島本」・「宮良本」の四本に見られなかったのは、与座の大主の台詞「安て楽ミゆる／時と又やすか」(No.411～412)、与座の大主の台詞「武士の身の習ひの／心うつしちをて／くらちをてひならぬ」(No.444～446)、役名「与座」と台詞「一 されは／」(No.478～479)の三カ所であった。そして、役名「与座」と台詞「一 あゝ出来た／」(No.507～508)は、「与那覇本」以外

の四本に見られなかった。

役名「惣人数」と台詞「一 おう」(No.646～647)、役名「虎松」と台詞「一 舎兄前とワ身すて／まかひいまひか」(No.1078～1080)、の二箇所は、「今帰仁本」・「与那覇本」・「兼島本」に共通して見られなかった。それから、千代松「朝夕母親の／寄」と聞る」(No.21～22)、千代松の台詞「こめられてをれハ」(No.27)の二箇所は、「今帰仁本」と「恩河本」に共通して見られず、役名「千代松亀千代」と台詞「一 やあ按司かなし／段々の御慈悲／いちも尽さらめ／此御恩たうとさや／胸に思染て／按司かなし天の／百といつまでも／おかけほさへめしやいる／御願しやへら」(No.1125～1134)は「与那覇本」と「兼島本」に共通して見られなかった。

次に「尚家本」に見られず、対校本のみに見られる異同で共通しているものを挙げる。

次に、対校本のみに見られて、「尚家本」に見られない箇所を挙げる。まず、対校本全てに記載が見られたものは、住居人の台詞「先御入れめしやいへれ」(No.395)と、虎松・虎千代が武芸を見せる場面で歌われる揚作田節「一 武士の身や空に／とふ鳥のこゝろ／みつめても手にや／取やならぬ」(No.490～493)、である。

特に「今帰仁本」・「与那覇本」・「恩河本」・「兼島本」の四冊に共通して見られた部分は多く、役名「母」(No.114)、役名「千代松亀千

代」と台詞「一 母親の御志／今のことやれハ／願て行先も／自由とやよる」(No.122～126)、役名「母」(No.129)、役名「亀千代」(No.134)、役名「千代松」(No.146)、役名「千代松」(No.156)、役名「亀千代」(No.164)、住居人の台詞「一 これや津口当」(No.210)、千代松の台詞「父親の事と／拾年余るまでん／御引留おかれ／別れやいをすか／いきやる有様に／なやいまたいまいか／しれめしやうきまいらは／かたてたはふり」(No.239～246)、住居人の台詞「与座の大主と／南山の名将／これとん取こて置は／いかな南山の／物巧ミしちん／やうひに事や起きぬつもり／むての分別やて」(No.283～289)、住居人の台詞「やんとも古郷わすらぬ」(No.302)、住居人の台詞「御返事のさからぬ」(No.305)、音曲「上ヶ七尺ふし／一 捨てられる親子／いきやかしや／」(No.337～339)、役名「与座の大主」(No.396)、与座の大主の台詞「身にあまてをとて／よくしまの心」(No.420～421)、与座の大主の台詞「こゝ打合ち／四方の上下も／静なることに」(No.430～432)、与座の大主の台詞「あゝ口惜や」(No.441)、役名「与座の大主」(No.494)、役名「門番」(No.561)、役名「北山の按司／一 やあ／／わらへあてなしの／二人押列て／いきやる願事の／あとてちちやか」(No.580～585)、北山の按司の台詞「また与座の大主の／親子急ち呼されれ」(No.899～900)、役名「千代松」(No.966)、亀千代の台詞「御立めしやうれ」(No.1066)、役名「子共」と子四人の台詞

「一 とう／御供しやへら」(No.1215～1216)、とう／一箇所の共通する部分が見られた。なお、(No.580～585・899～900・966・1066・1215～1216)の五ヶ所については、「宮良本」に欠落している部分であるため、「宮良本」に記載があったかどうかはわからない。また、住居人の台詞「おの思子のきやにかゝられて」(No.349)は「恩河本」以外の対校本で共通して見られない。

「今帰仁本」・「与那覇本」・「兼島本」に共通して見られる箇所は、与座の大主の台詞「やよれども」(No.413)、与座の大主の台詞「無常の世の習や」(No.443)、与座の大主の台詞「一 あゝ出来た／」(No.495)、座の大主の台詞「一 今日の誇らしや／ものたにとられめ」(No.500～501)、の四ヶ所であった。

ト書き「附 此時虎千代唐手虎松鎌手島切手毎」(No.506)は「今帰仁本」・「恩河本」・「兼島本」の三冊にしか見られず、ト書き「附 此時虎千代虎松腰ニ鎌サシ鎧長刀待テル」(No.456)は「恩河本」・「兼島本」・「宮良本」にしかみられなかった。

「今帰仁本」と「恩河本」に共通して見られたのは、役名「虎千代虎松」と所作「一 御礼」(No.497～498)、役名「虎千代とら松」と所作「一 御礼」(No.504～505)、役名「虎千代とら松」と所作「一 御礼」(No.516～517)、役名「与座の大主」と台詞「一 とう／御暇よしやへら」(No.1067～1068)という所作の記載と台詞であった。

「与那覇本」と「兼島本」で共通して見られるのは、役名「天底」と台詞「一 サリ烈テキヤビタン」(No.945～946)、音曲「一 親子振合チヤス」(No.952)、役名「天底」と台詞「一 サレ上ゲヤビラ」(No.954～955)、役名「按司」と台詞「出来タ〜」(No.956～957)、役名「虎松」と台詞「一 舎兄前ト我ン捨テ／マカイ、マイガ」(No.1072～1074)、役名「千代松」と台詞「一 ヤア按司加那志／段々ノ御慈悲ノ言モ尽サラヌ／此ノ御恩タウトサヤ／胸ニ思染テ／按司加那志天ノ／百トイツ迄モ／御掛フサイ召ル／御願シヤビラ」(No.1148～1157)の六ヶ所であった。

「尚家本」と対校本で記載に異同がある台詞で、異同が対校本すべてに見られた箇所は全部で十八箇所もあった。以下に挙げる。

千代松「忍ていかに」(No.44)が「忍て行ん」、  
千代松「母親と共」(No.100)が「母親もとも」、  
亀千代「一 順風のけふや」(No.165)が「一 順風も今日や」、  
住居人「はひ〜ねつたあや」(No.214)が「一 あいねつたや」、  
住居人「一 あゝ宿かひめしやうらしゆや」(No.226)が「一 むゝ宿かひめしやうらしよすや」、  
住居人「時分とやたひすか」(No.261)が「時分やたらはつやすか」、  
住居人「なしおとつ」(No.263)が「なし落やつ」、

住居人「親やのふ」(No.264)が「親の御姿や」、  
住居人「親拜ミいかむて」(No.268)が「親拜みいかまいん」、  
住居人「なあおんさうかいや」(No.270)が「あゝ御無蔵かいやあ」、

住居人「しめんしやうんな」(No.272)が「めしやうんな」、  
住居人「女性方拝領やて」(No.296)が「女性拝領やて」、  
住居人「鑓長刀不足なく」(No.353)が「鎌手とう手不足ないん」、  
住居人「まる云しち」(No.371)が「度々諫事しち」、  
与座の大主「日も暮ついきゆひ」(No.543)が「日もさかてをもの」、

亀千代「一 御門番取御取次頼ま」(No.560)が「一 御門番衆御取次頼ま」、  
千代松「兄【弟】子千代松」(No.566)が「嫡子千代松(亀千代詞)」、  
門番「これにいまふれ」(No.579)が「是に入れしやうれ」、

対校本すべてで共通した異同の数は、他の収録作品より多い。つづいて対校本どうしに共通して見られる箇所を挙げる。

「今帰仁本」・「与那覇本」・「恩河本」・「兼島本」に共通して見られた異同は、以下の二十八箇所であった。

千代松の台詞「旅のものやすか」(No.220)が「とまご／＼にきやすか」となっている。

住居人の台詞「御暇みよんにゆける」(No.303)が「度々御暇みよんによけよとん」となっている。

住居人の台詞「子のきあめに」(No.359)が「思子のきやに」となっている。

与座の大主の台詞「やすてやすまらぬ」(No.404)が「捨置やならぬ」となっている。

与座の大主の台詞「先や四方の海」(No.407)が「今や波風も」となっている。

与座の大主の台詞「波風も立ぬ」(No.408)が「静なてをれへ」となっている。

与座の大主の台詞「御気の毒めしやうち」(No.419)が「朝夕御気の毒」となっている。

与座の大主の台詞「こゝろとりおさめ」(No.423)が「互に取治め」となっている。

与座の大主の台詞「美よんきをかて」(No.433)が「みよんき事拝て」となっている。

与座の大主の台詞「いちやんてやりきやしゆか」(No.442)が「いや言きやんてやりきやしよか」となっている。

与座の大主の台詞「一やあ／＼なし子」(No.465)が「一やあなし子」となっている。

千代松の台詞「いきやるいきなひに」(No.595)が「いきやる有様に」となっている。

千代松「引よ留めしやうち」(No.608)が「御引留めしやうち」となっている。

北山の按司「考てきかす」(No.643)が「考てむてよ」となっている。

親泊大主の台詞「呑込いをやへれへ」(No.653)が「呑んくみやいをれは」となっている。

北山の按司の台詞「やあ／＼」(No.678)が「やあ」となっている。

謝名の大主の台詞「亀千代か今の」(No.748)が「南山の按司の」となっている。

謝名の大主の台詞「太刀かたなてすも」(No.776)が「刀刃よてすん」となっている。

謝名の大主の台詞「御慈悲ある御代の」(No.883)が「御慈悲ある御主の」となっている。

天底の子の台詞「一おう」(No.908)が「一拝留やくて」となっている。

虎松の台詞「やき前とワ身や」(No.1035)が「いきやし暮しやへか」となっている。

虎松の台詞「いきやかしやへら」(No.1036)が「舎兄前とわんや」となっている。

与座の大主の台詞「ふたり此御代に」(No.1162)が「二人この世界に」となっている。

与座の大主の台詞「生れやいをれへ」(No.1163)が「いきちをる間や」となっている。

与座の大主の台詞「国公安全」(No.1166)が「不意の急難」となっている。

与座の大主の台詞「疑やあやへらぬ」(No.1167)が「絶てあやへらぬ」となっている。

与座の大主の台詞「打立んしゆもの」(No.1200)が「押列て登ら」となっている。

音曲の台詞「久志ミなどおりて」(No.1220)が「古宇利港下りて」となっている。

次に対校本どうして特徴的な異同は、台詞の役名が異なる異同である。「千代松」の台詞(No.7~43)が「千代松亀千代」となっている箇所、「千代松」の台詞(No.563~574)が「亀千代」となっている箇所、「千代松亀千代」の台詞(No.1125~1134)が「千代松」の台詞

となっている、この合計三箇所の異同は「今帰仁本」と「恩河本」に共通して見られる異同であった。

次に、「与那覇本」と「兼島本」に共通して見られる異同は、四ヶ所あった。与座の大主の台詞「たうく習ひとたる手並」(No.484)が「ナリトタル手並」、与座の大主の台詞「振立て見せれ」(No.485)が「振りタキヤイ見シリ」、謝名の大主の台詞「御慎あとつ」(No.779)が「御慎メアテモ」、北山の按司の台詞「南山にいきゆる」(No.1029)が「親烈テ行ル」となっている。また、完全に異同が一致していないが、千代松の台詞「願たこと叶て誇らしやとあやへひる／此御恩一期／ちゝにかめやへら」(No.1000~1003)が「与那覇本」では与座の南山の親子、三人の台詞となっており、「兼島本」では千代松亀千代二人の台詞になっている。「尚家本」・「今帰仁本」・「恩河本」はともに千代松の台詞であった。

「宮良本」は後半部が欠けているため、全体の校合にいたらなかったが、他の対校本と共通した異同は少ないながらもみられた。亀千代の台詞「念力の太刀や」(No.137)が「念力ノ刀」、虎千代の台詞「此遊ひあやへひめ」(No.521)が「遊へアヤベイミ」。この二箇所は「今帰仁本」と同じであった。それから亀千代の台詞「情けあるならひ」(No.49)が「マコトアル習へ。」、舟筑の台詞「一され運天の湊」(No.182)が「一サレく、運天ノ湊ト」、以上の二箇所

は、「今帰仁本」と「兼島本」と同じ異同であった。「宮良本」は全体的に、異同が他の特定の対校本と共通するのではなく、対校本全てに見られる異同は同じであるが、その他は「宮良本」のみに見られるのもが多かった。

### 第三節 校合結果よりみられる組踊集の関係および類縁性

第二章、ならびに前節の校合作業を通して明らかになったのは、各組踊集の中でも、収録作品において記載の異同は、組踊集ごとに類縁性が見られるのではなく、同じ組踊集に収録されている、ある作品は「〇〇本」と記載が似ており、またある作品は「〇〇本」に記載が似ているというような結果が見られた。結果を元に、本節では作品ひとつひとつにおける組踊集の関係や類縁性をみていく。その際を中心として見ていくのは、系統として「尚家本」に近いものを「尚家本系」、「尚家本」に近いが、異同が多いものは「尚家本系亜本」とし、その他の組踊本どうしで共通して異同が見られるグループは、その中の組踊本の名前を取って「〇〇本系」とする。そして、どの組踊本とも類縁性が認められないものは「その他の系統」とする。次に、各収録作品の類縁性を見ていく。

## 1 辺戸之大主

校合を行った底本は「兼島本」と琉脚の二冊である。結果としては、「尚家本」がこの二冊の親本である可能性は低い。「兼島本」には役の幕の出入りがわかるト書きが見られるが、「尚家本」には見られず、また、「尚家本」に見られる着付は底本にはみられなかった。対校本どうしでは、最後に四節うたわれる「はやひくわいにや」のうち、「尚家本」に見える三節目「一 九重のうちに／蒼て露まぢゆす／嬉しこと菊の／はなとやゆる」が見られなかった。それから、異同箇所総数は琉脚の方が多く、結果としては「兼島本」と琉脚も親子関係にあるとは断定できない。上記をまとめると「尚家本」と「兼島本」・琉脚は親子関係になく、「兼島本」と琉脚は若干の類縁性があることがいえる。以上をまとめると次のようになる。

尚家本系：なし  
その他の系統：「兼島本」「琉脚」

## 2 執心鐘入

対校本は「今帰仁本」・「恩河本」・「兼島本」・「台湾本」・「比嘉本」・「新報・宮城」・「戯曲集」・「宮良本」・「伊舎堂本」の九冊である。本研究で校合した作品の中でも、対校本の数も多く、首里・那覇の士族の家に所蔵されていたもの、先島の士族の家に所蔵されていたもの、研究者が編集したものと、校合するうえで、充実したものとな



っている。矢野輝雄は、執心鐘入の「組踊本」の系統には二種類あり、ひとつは戌の御冠船のものと、虎の御冠船のものであるという。矢野は『組踊への招待』において若松の「女生れても 義理知らぬものや これど世の中の 地獄だいもの」の台詞を揚げ、「この若松のセリフが寅の冠船では『をとこ生まれても』と変わっている。しばしば演者が言い間違えたと誤解されることがあるが、そうではなく「女」から「男」へと改訂されているのである」とし、この部分の記載が、戌の冠船系統の「組踊本」では「女」であり、寅の冠船系統の「組踊本」では「男」となっていることを指摘している。校合を行った結果は、「尚家本」「今帰仁本」「恩河本」「宮良本」の記載は「男」であり、「伊舎堂本」では「男」「女」の記載自体を欠いている。「比嘉本」では「男」を見せ消ちにして「女」と記載している。「女」と記載しているのは「兼島本」「台湾本」「琉新・宮城」「戯曲集」の四冊である。矢野の説を借りれば、この四冊は戌の御冠船の「組踊本」である『羽地本』を写していることになる。しかしここでの異同では、羽地本を書写した「台湾本」・「琉新・宮城」・「戯曲集」は着付の記載も、配役の記載もあるため、この三冊に類縁性があるとはっきりと言えるが、「兼島本」は着付や配役がなく、また異同箇所も若松の台詞「行先もなひらぬ」(No. 88)が「行先や迷て」、女の台詞「おとこ生れても」(No. 111)が「男生れとて」、若松の台詞

「男生れても」(No. 111)が「女生れとて」と、「比嘉本」と共通した異同が見られる。したがって、この二冊を羽地本系のものと類縁性があるとは断定できない。

つぎに、「男」と記載されている「尚家本」「今帰仁本」「恩河本」「宮良本」の四冊は同じ系統の「組踊本」と言えるであろうか。異同や挿入について各本をみると、「今帰仁本」が異同箇所が三四箇所と一番少なく、挿入箇所も対校本の中で一番少なかった。その次に少なかったのは「恩河本」である。異同箇所は四九箇所であった。しかし、「宮良本」は異同箇所が六七箇所、さらに「尚家本」にみられ、対校本に見られない箇所が七七箇所もあり、この三冊に類縁性があるとは言い難い。

また、「男」「女」の記載がなかった「伊舎堂本」は異同箇所が九十箇所も見られ、校合した対校本の中で一番多かった。そして異同箇所は羽地本系の組踊本と共通した箇所も、「今帰仁本」や「恩河本」と共通した箇所も見られ、この組踊本は、どの系統とも類縁性が薄いものであることがわかった。

これらをまとめると、〈執心鐘入〉は以下のような類縁性が見られた。

尚家本系：「今帰仁本」・「恩河本」  
尚家本系亜本：「宮良本」

羽地本系：「戯曲集」・「琉新・宮城」・「台湾本」

羽地本系亜本：「兼島本」・「比嘉本」

その他の系統：「伊舎堂本」

### 3 銘苅子

校合は「恩河本」・「兼島本」・新報（明治四十年）・「台湾本」・新報・宮城・「戯曲集」・「教育大本」・「豊川本」・「伊舎堂本」の九冊で行った。羽地本系の対校本と八重山に残るもの、首里の士族に伝わったものなど、その種類も多いのが特徴である。

まず、羽地本系の対校本である「戯曲集」「新報・宮城」「台湾本」の共通点は、着付と配役が記されている点である。これは他の対校本に見られない。また、音曲の記載は、「尚家本」が「東江節」など節名を直接書いていることに対して、「歌 早作田節」「歌 東江ぶし」など、羽地本系の「組踊本」は必ず「歌」と頭につけている。新報（明治四十年）は伊波普猷の編集によるものである。したがって、羽地本を底本として編集されているように思われるが、先の三冊に見られる配役や着付、役の出入りの記載が見られない。前章、第三節でも検討したが、天女の台詞（No.225～228）「ねなしちをるうち／別れらなきやしゆが／おぞで百すがり／すがると思ば」と同じ歌詞で歌われる東江節が続く部分が「新報（明治四十年）」と、「台

湾本』では天女の台詞から東江節へ、『戯曲集』と「新報・宮城」では東江節から天女の台詞へと順序が真逆になっている。対校本を見ると、「恩河本」「兼島本」「豊川本」が「尚家本」と同じく「天女言葉并東江ふし」と台詞が先で東江節が後と解釈できる内容になっており、「教育大本」「伊舎堂本」は「全フシ」もしくは「歌右同」となっており、台詞はなく音曲だけ演じられた可能性もある。全体的に見ると、「戯曲集」と「新報・宮城」の記載に問題がある。類縁性が認められる羽地本系統の写本間でも若干の問題があるのが結果として明らかになった。

羽地本系の対校本以外の対校本どうしで、異同に共通点のあるものはみられず、各対校本とも〈執心鐘入〉のように異同が少ない結果となった。羽地本系統以外の対校本を、「尚家本」の記載と出入りや異同が少ない順に揚げると、「恩河本」（出入り箇所十一・異同箇所三八）、「教育大本」（出入り箇所四二・異同箇所二八）、「伊舎堂本」（出入り箇所十九・異同箇所六九）、「兼島本」（出入り箇所二五・異同箇所八十）、「豊川本」（出入り箇所二〇六・異同箇所六五）となっており、対校本の中で「尚家本」と記載の近い底本は、「恩河本」と「教育大本」ということになった。「教育大本」は出入り箇所が多いようにみえるが、「尚家本」の記載が見られない二箇所の台詞（No.210～212・425～442）は作品の末尾に記載されており、該当の箇所と内

容の異同は見られない。抜け落ちている箇所と、末尾に記載している箇所には「△」「◎」と記号も入れていることから、書写する際に書き漏らし、その後訂正したと思われる。書写段階で抜け落ちていなかった場合、「恩河本」同様に、「尚家本」との異同の少ない対校本とみることができる。

羽地本系の対校本と、前記の「恩河本」「教育大本」を除く対校本は、他の作品を校合した際に見られる、異同や挿入にみられる共通点は〈銘苧子〉にかぎって見られなかった。たとえば、「兼島本」には以下のように、台詞を唱える人物に異同が見られる。

思なひの台詞 (No.198～203) が思けひの台詞になっている。

思けひの台詞 (No.207～209) が思なひの台詞になっている。

天女の台詞 (No.211～212) が思なひの台詞になっている。

天女の台詞 (No.215～218) が思なひの台詞になっている。

このような異同は他の対校本に見られなかった。それから、「豊川本」では、

「しちやの事ならぬ」(No.29) が「下のかめならん」となっている。

「かたはらにかくれ」(No.36) が「側に立い」となっている。

「傍らにたちやひ」(No.37) が「かたわらに隠り」となっている。

「わ身やこの世界の」(No.85) が「我身や此浮世の」となっている。

る。

「なし子わなひふたり」(No.124) が「なし子ふたり」となっている。

このような台詞の異同が二四箇所にみられた。「伊舎堂本」は、一部、「豊川本」と異同が同じ箇所 (No.184～185) と挿入が同じ箇所 (204～206) があつたが、それ以外は共通する箇所は見られず、類縁性が見られると考えたいが、「豊川本」には挿入箇所が多くあり、類縁性があると断定ができない。

〈銘苧子〉の対校本を別けると、以下になるう。

尚家本系亜本：「恩河本」・「教育大本」

羽地本系：「戯曲集」「新報・宮城」

羽地本系亜本：「台湾本」「新報 (明治四〇年)」

その他の系統：「兼島本」・「豊川本」・「伊舎堂本」

#### 4 大川敵討

〈大川敵討〉は校合をした作品の中でも、一番異同がはっきりと見える作品である。「尚家本」と異なる点の中でも、挿入や記載が見られない部分だけを比較しただけでも、「新本本」・「豊川本」・「喜舎場本」は共通した部分が多く見られ、類縁性の認められるものである。

特に、「原国兄弟口説」(No.1861～1873) は、八重山に残るこの三冊

の組踊集と「多良間本」にしか見られない記載である。また、下部の台詞（No.738～739）「一 たう／＼むまに／居やうれ／」は、八重山の三冊は「さあ／＼／居やうり／」と共通している。「多良間本」は上記の三冊同様、「原国兄弟口説」が挿入されているが、下部の台詞（No.738～739）は「尚家本」と同じく見られず、（No.262）の東江節も「尚家本」と同じく見られない。また、着付が記載されていることから、元々は王府上演に近い組踊本からの書写であることをおわせている。したがって、「多良間本」は八重山の組踊本と沖繩本島の組踊本、両方と共通点のある組踊本である。當間一郎は『多良間村史』芸能編、第三章で、「多良間本」の記載と「戯曲集」の異同箇所を挙げ、「組踊本」としては思ったほど出入りが無いといえるのではないか<sup>（注四）</sup>と述べ、結論として「筆者年代は不明であるが、これら（筆者注：「多良間本」と「戯曲集」を比べて）を比較して見た上でも、一八三八年、尚育王の冊封式典後の重陽宴の上演「組踊本」と同系統といってもいいすぎではないと考える<sup>（注五）</sup>」としている。しかし、「戯曲集」以外のテキストとも競合した結果では、大きな異同として「原国兄弟道行口説」の挿入など、八重山の組踊本との共通点は、首里の士族の「組踊本」と共通していないことから、當間の結論は「戯曲集」との校合のみで出された結論であり、結果として性急である。今後、「原国兄弟道行口説」が記載さ

れた首里や王府の組踊本が発見されないと、「多良間本」や八重山の組踊本の系統をさらに深く考察することはできない。現段階では、年代的に戌の御冠船以降の組踊本を用いて校合している。もしそれ以前の「組踊本」に「多良間本」や八重山本などの記載が認められれば、この系統は古い演出を残した組踊「組踊本」であるとも言え、現在はそれが発見されていないので、可能性を残している、としか結論づけられない。

次に、「尚家本」との異同が一番少なかったのは「今帰仁本」（出入り箇所三二・異同箇所八九）であった。その次に少ないのは「恩河本」（出入り箇所二九・異同箇所一一）、続いて「戯曲集」（出入り箇所五六・異同箇所一〇八）である。特に「今帰仁本」と「恩河本」は、「尚家本」との大きな内容の違いは見られず、「尚家本」との類縁性が考えられる組踊本である。また、「戯曲集」は、「兼島本」と類縁性が考えられる部分もある。例を挙げると、糾の場で乙樽が答えに窮して無言になる場面、「戯曲集」は「・・・」と記号で表現しているが、「兼島本」も「乙樽／＼ 無言」と記載している。これは三方所（No.766～767・876～877・942～943）ともに同じ場所での記載が確認できる。それから、「戯曲集」は二カ所（No.87・622）に場面の区切りを示す「\* \* \* \* \*」という記号が挿入されているが、「兼島本」にも「第二場」「第三場」という場面を区切る記載が

見られる。

「戯曲集」は外にも母の台詞(No.608～609)「母詞／義理の道だいもの、／止めてとめらゝぬ。」が挿入されており、これは「与那覇本」「比嘉本」と八重山の組踊集にも認められる。

そして、「与那覇本」「比嘉本」に共通して見られるのは、手配りの時に村原の指令を受けた家臣達が「拝留やへて」と返答している台詞である。これはこの二冊と八重山の組踊本だけに見られる結果となった。

さらに「与那覇本」は泊の台詞(No.1643～1646)「肝振テ居ヨラ／今ノ事シヤスヤ／無調法至極コク／ナイテタバウレンデイチ」と(No.1706～1707)「天ニ飛登ル／我身ノク、ツ」、(No.1729)「言ンデシヨル」が挿入されており、他の対校本には見られない特徴である。そして「比嘉本」には「比嘉本」にしかない記載もある。乙樽の台詞(No.194～197)「ヤアアヤ前ヨ／／頓テ喜納村ヤ／便イ島デモノ／御気張ヨ召レ／御供シヤベラ」や(No.352～354)「取戻チカラニ・時節待受ケテ／敵打タントモテ」など、「比嘉本」にしか見られない記載も確認できる。

以上の特徴から、各対校本の類縁性をみると、

尚家本系…「今帰仁本」・「恩河本」

羽地本系…「戯曲集」・「兼島本」

羽地本系亜本…「与那覇本」・「比嘉本」

新本系…「新本本」・「豊川本」・「喜舎場本」

その他の系統…「多良間本」

## 5 義臣物語

〈義臣物語〉は、「久志A本」・「語学材料」・「恩河本」・「兼島本」・「比嘉本」・「久志B本」の六冊で校合した。結果で特徴的だったのは、子持節の歌詞の一部「行先や迷て／あの岩にすかり／このき瀬にのほて／互に鳴明ち」(No.172～175)が、「久志A本」「比嘉本」「久志B本」には見られなかった。そして、最後の音曲は、「尚家本」が清屋節であるのに対して「久志A本」・「兼島本」・「久志B本」は「立雲節」で歌っており、国吉が小間物を渡す順序は「尚家本」が馬乗ほとけ・おきれこふし・鳴子・若衆人形の順で渡すのに対して、「兼島本」「語学材料」は鳴子・若衆人形・馬乗ほとけ・おきれこふし。「比嘉本」は馬乗ほとけ・おきれこふし・若衆人形・鳴子の順で渡している。さらに、最後に歌われる歌詞「一、このえのうちに／蒼て露まちゆす／嬉しこときくの／花とやゆる」(No.905～908)が「久志A本」「兼島本」「比嘉本」には見られない。

校合を概観すると、内容の面で一番異同が少なかったのは「恩河本」で、その次に「語学材料」、「久志A本」「久志B本」「兼島本」

「比嘉本」の順であった。「久志A本」「久志B本」は共通した異同や挿入、欠落が見られるため、同じ系統の写本、もしくは「久志B本」は「久志A本」からの書写であることが推測される。

「兼島本」は、先に挙げた、最後の音曲の異同と小間物の順序の異同で、「比嘉本」「語学材料」との共通点が見られるが、以下のように「恩河本」と共通する異同もみられる。

国吉の比屋の台詞 (No.58)

「尚家本」 弓ひきゆる此時よやれハ、

「恩河本」 弓引る世の中よやれハ

「兼島本」 弓引る世の中よやれハ

国吉の比屋の台詞 (No.60)

「尚家本」 からめ出されらとめハ、

「恩河本」 からみ出さらとめハ

「兼島本」 搦め出さら留ば

若按司の台詞 (No.77)

「尚家本」 首里軍押よすて

「恩河本」 首里軍さ打寄て

「兼島本」 首里軍打寄て

国吉の比屋の台詞 (No.817)

「尚家本」 天に飛のほり

「恩河本」 天に飛び登て

「兼島本」 天に飛び登て

このように「兼島本」は他の対校本といろいろな箇所共通する異同が見られるため、系統を断定することがむずかしい。

以上の結果をまとめると、類縁性は次のようになる。

尚家本系：「恩河本」・語学材料

「久志本」系：「久志A本」・「久志B本」

その他の系統：「兼島本」・「比嘉本」

## 6 天願若按司敵討

〈天願若按司敵討〉は「久志本」・「今帰仁本」・「教育大本」・「恩河本」・「兼島本」・「京大本」・「豊川本」・「喜舎場本」の八冊で校合を行った。「尚家本」と移動の少ない順に対校本をあげると、「今帰仁本」・「恩河本」・「豊川本」・「京大本」・「教育大本」・「喜舎場本」・「兼島本」・「久志本」であった。

「今帰仁本」・「恩河本」・「豊川本」は、供の台詞「いきやか／＼、」(No.366)が見られなかった箇所が共通する。そのほかに共通の異同が確認できる対校本は「久志本」・「兼島本」・「京大本」・「喜舎場本」である。この四冊は、久志の若按司の台詞「城内になし子／跡方んないらん」(No.462～463)が挿入されていることと、「はかなさや嫡

子／千代松か事と、」(No.464～465)が見られないことが共通している。その中でも「久志本」・「京大本」・「喜舎場本」の三冊は、供の台詞「一 さあ／＼急き／＼、」(No.450)が見られないことが共通している。また、役名「総人数」と台詞「一 めしやいる事／＼押列て踊て／＼御供しやへら」(No.1352～1353)は「久志本」・「兼島本」・「喜舎場本」のみに挿入が見られた。

対校本の中では、「久志本」・「喜舎場本」の類縁性が確認でき、「兼島本」・「京大本」は「久志本」・「喜舎場本」とも若干類縁性が確認できるといふ結論に至った。

「教育大本」は、異同箇所が他の対校本と一致する点がまばらであり、類縁性を推定するにいたらなかった。「豊川本」も異同箇所ほとんどは「久志本」・「喜舎場本」・「京大本」・「教育大本」に見られるため、「今帰仁本」・「恩河本」のグループと一緒にすることは難しい。以上をまとめると、次のようになる。

尚家本系…「今帰仁本」・「恩河本」  
尚家本系亜本…「豊川本」・「京大本」  
「久志本」系…「久志本」・「喜舎場本」  
その他の系統…「教育大本」・「兼島本」

## 7 二山和睦

《二山和睦》は「今帰仁本」「与那覇本」「恩河本」「兼島本」「宮良本」の五冊を対校本として校合した。「尚家本」と対校本で記載に異同がある台詞で、異同が対校本すべてに見られた箇所は全部で十八箇所もあり、それ以外にも各対校本で異同や、挿入などが多く、外観してみると、「尚家本」と対校本は類縁性が認められない。

対校本の中でも、「今帰仁本」と「恩河本」は、冒頭の千代松の台詞(No.7～8)が千代松亀千代の台詞となっている点や、以下のように異同の共通点が見られる。

謝名の大王の台詞(No.789)

「尚家本」 人の肝あけて

「今帰仁本」 人の胸明て

「恩河本」 人の胸開て

謝名の大王の台詞(No.877)

「尚家本」 あやまちのあとて

「今帰仁本」 あやまれのあとて

「恩河本」 アヤマレノアトテ

北山の按司の台詞(No.1033)

「尚家本」 我か側におちやひ

「今帰仁本」 我か側に置て

「恩河本」 我ガ側ニウチユテ

虎松の台詞 (No.1052)

「尚家本」 捨られて居とて

「今帰仁本」 捨られてをすか

「恩河本」 捨ラレテヲスガ

北山の按司の台詞 (No.1169)

「尚家本」 一 あゝ大主の

「今帰仁本」 一 あゝ誠と大主の

「恩河本」 一 アゝ誠ト大主ノ

さらに、この二冊のみに見られる記載が以下のようにある。

役名「虎千代虎松」と所作「一 御礼」(No.497～498)′

役名「虎千代とら松」と所作「一 御礼」(No.504～505)′

役名「虎千代とら松」と所作「一 御礼」(No.516～517)′

そして、「与那覇本」と「兼島本」には以下のような共通した挿入

が見られる。

役名「天底」と台詞「一 サリ烈テキヤビタン」(No.945～946)′

音曲「一 親子振合チヤス」(No.952)′

役名「天底」と台詞「一 サレ上ダヤヒラ」(No.954～955)′

役名「按司」と台詞「出来タ〜」(No.956～957)′

役名「虎松」と台詞「一 舎兄前ト我ン捨テ／マカイ、マイガ」

(No.1072～1074)′

役名「千代松」と台詞「一 ヤア按司加那志／段々ノ御慈悲／言モ尽サラヌ／此ノ御恩タウトサヤ／胸ニ思染テ／按司加那志天ノ／百トイツ迄モ／御掛フサイ召ル／御願シヤビラ」(No.1148～1157)′

そして、「宮良本」は後半部を欠いているが、残っている前半部(579行)の中でも、「尚家本」の記載が見られない箇所が九九箇所もあり、その他の対校本は欠損がないにもかかわらず、「尚家本」の記載が一番多く見られない「与那覇本」(五八箇所)よりも多く、校合した「組踊本」のどれとも類縁性が認められない。

〈二山和睦〉を概観すると、次のような結果となろう。

尚家本系…なし

「今帰仁本」系…「今帰仁本」・「恩河本」

「与那覇本」系…「与那覇本」・「兼島本」

その他の系統…「宮良本」

#### 第四節 対校本間の関係・類縁性のまとめ

以上、各収録作品ごとに「尚家本」と対校本の校合結果から、共通点を見出し、それぞれの類縁性ごとに分けた。一覧にすると以下のようなになる。



〈辺土の大主〉

尚家本系…なし

その他の系統…「兼島本」・「琉脚」

〈執心鐘入〉

尚家本系…「今帰仁本」・「恩河本」

尚家本系亜本…「宮良本」

羽地本系…「戯曲集」・「琉新・宮城」・「台湾本」

羽地本系亜本…「兼島本」・「比嘉本」

その他の系統…「伊舎堂本」

〈銘苺子〉

尚家本系亜本…「恩河本」・「教育大本」

羽地本系…「戯曲集」・「新報・宮城」

羽地本系亜本…「台湾本」・「新報（明治四〇年）」

その他の系統…「兼島本」・「豊川本」・「伊舎堂本」

〈大川敵討〉

尚家本系…「今帰仁本」・「恩河本」

羽地本系…「戯曲集」・「兼島本」

羽地本系亜本…「与那覇本」・「比嘉本」

八重山系…「新本本」・「豊川本」・「喜舎場本」

その他の系統…「多良間本」

〈義臣物語〉

尚家本系…「恩河本」・「語学材料」

「久志本」系…「久志A本」・「久志B本」

その他の系統…「兼島本」・「比嘉本」

〈天願若按司敵討〉

尚家本系…「今帰仁本」・「恩河本」

尚家本系亜本…「豊川本」・「京大本」

「久志本」系…「久志本」・「喜舎場本」

その他の系統…「教育大本」・「兼島本」

〈二山和睦〉

尚家本系…なし

「今帰仁本」系…「今帰仁本」・「恩河本」

「与那覇本」系…「与那覇本」・「兼島本」

その他の系統…「宮良本」

まず、「尚家本」を中心にみていくと、〈辺土の大主〉〈二山和睦〉は、校合した組踊本の中に「尚家本」の系統（「尚家本」に近い記載の組踊本）は見られなかった。理由として、〈辺土の大主〉には現存写本が少ないことが挙げられ、今後の発見によってこの結果は変わる可能性がある。〈二山和睦〉は「尚家本」の体裁も、ほかの収録作品と比べると不備な箇所もあるため、「尚家本」自体の書き損じなども視野にいれて今後考察しなければならない。

それ以外の〈執心鐘入〉〈銘苺子〉〈大川敵討〉〈義臣物語〉〈天願若按司敵討〉の五作品に言えるのは、「尚家本」と記載が近い組踊本は「恩河本」である。「今帰仁本」は、〈銘苺子〉と〈義臣物語〉を収録していないため、校合することができなかったが、〈執心鐘入〉〈大川敵討〉〈天願若按司敵討〉の三作品で「尚家本」の記載に近い組踊本だということがわかった。

「今帰仁本」「恩河本」は〈二山和睦〉の校合結果で、「尚家本」と記載は近くなかったが、両組踊本での記載が近いいため、この二冊は非常に近い関係にある組踊本といえる。

また、組踊本ごとに特徴のあるものも校合でわかった。例えば、「兼島本」は「尚家本」の全ての作品で対校本として扱ったが、作品によって羽地本に近いが、羽地本を書写した組踊本よりも異同が多い「羽地本系亜本」の作品や、〈銘苺子〉では「その他の系統」に

グループ分けされた。「兼島本」自体の収録作品が多いが、校合を通して「恩河本」「今帰仁本」のように一定の結果が出ていないので、組踊集をまるごと書写したのではなく、作品ごとに違う組踊集（もしくは一作品ごとの組踊本）を書写して編集されたものであると推測することができる。

〈大川敵討〉では、「尚家本」に近い記載の組踊本、羽地本に近い記載の組踊本の他に、八重山に残る写本に共通して見られる異同や台詞の出入りが見られた。これは他の作品には見られない、非常に特殊な結果となった。一部、「多良間本」にも同じ挿入箇所は見られたが、八重山に残る組踊本が、八重山土族の中で書写されていたことをうかがわせる結果となった。

〈義臣物語〉では、久志に所蔵されている二冊の「組踊本」が、同じ系統であることもはっきりした。そして、「尚家本」と系統の違い「組踊本」からの書写であることがわかった。

校合結果をもとに組踊本を考察すると、「尚家本」のグループ（「恩河本」・「今帰仁本」）、羽地本のグループ（「戯曲集」・新報・宮城・「台湾本」・新報（明治四〇年））、地方で書写されたグループ（大川敵討）における「新本本」・「豊川本」・「喜舎場本」、上記のどのグループにも属さないもの（「伊舎堂本」・「久志本」など）があることがわかった。

次章では、この結果をもとに、「尚家本」を中心として、羽地本のグループ、その他のグループの組踊本が対校本として見られた（「執心鐘入」の校本の作成を試みる）。

〔注二〕「演目の所在一覧」より。沖縄県文化財調査報告書八十二号『沖縄の組踊（Ⅱ）―無形民俗文化財記録作成―』 沖縄県教育委員会 一九八七年（五五頁）

〔注三〕矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社 二〇〇一年 一八五頁。

〔注四〕『校注 琉球戯曲集』（三四二頁）

〔注五〕『多良間村史』第五卷資料編4 芸能 多良間村史編集委員会 一九八八年（五九頁）。

〔注六〕『多良間村史』第五卷資料編4 芸能 多良間村史編集委員会 一九八八年（六十頁）。

#### 第四章 組踊校本作成の試み ―執心鐘入を題材として―

##### 第一節 はじめに（校本作成の意義）

前章までは「尚家本」を校合し、結果から「尚家本」や対校本のグループ（類縁性）を明らかにした。それによってわかったことは、「尚家本」のグループ（「恩河本」・「今帰仁本」）、羽地本のグループ（「戯曲集」・「新報・宮城」・「台湾本」・「新報（明治四〇年）」）、地方で書写されたグループ（大川敵討）における「新本本」・「豊川本」・「喜舎場本」、上記のどのグループにも属さないもの（「伊舎堂本」・「久志本」など）があることがわかった。本章では、校合した作品の中から、「尚家本」系・羽地本系・その他の系統の三グループの組踊本で校合することができた（執心鐘入）について、「校本」を作成することを目的とする。

現在の組踊では、ある一つの組踊本をもとにして台本が出来上がっていることがほとんどである。これは、組踊集や組踊本において、異同が見られることを実演家や組踊を上演する側が理解していないためであると思われる。さらに、これまで校合を行った研究は少なく、羽地本をもとに編集された「戯曲集」を盲目的にテキストとして利用している状況もある。「戯曲集」に収録されている作品であれば、上演に際して問題はないかと思われるが、収録されていない作

品については、どの組踊集をテキストとして採用したほうがいいのか、という疑問に答えた研究は未だない、といっても過言ではない。「尚家本」をもとに校本を作成するということは、羽地本系の記載やその他の系統の組踊本の記載をひと目で確認することができ、組踊本の異同や台詞、ト書きなどの出入りが分かるようになる。組踊のテキスト研究においても、このような試みは未だかつて見られず、校本を作成することで、最終的に組踊の上演における演出を助けるものとなる可能性もある。次節では校本作成における製作基準を設け、実際に校本を作成する。

##### 第二節 校本作成のための製作基準

校本を作成するにあたって以下のような製作基準を設けた。

- ① 「尚家本」は本文を続け書き流しているが、校本では本文の異同をわかりやすくするため、着付は衣裳や採物ごとに改行し、台詞は「戯曲集」の体裁のように「八・八・八・六」の琉歌形式で改行する。
- ② 「尚家本」本文をメインとして、下段に各対校本の異同を記載した。その際には「尚家本」の記載部分と対応するよう、すぐ下の行に続くように配置する。
- ③ 本文の上段には、対校本のみに記載のあった内容で、本文とは

直接関係はないが（執心鐘入）を上演するために参考になる情報（当時の配役や作品に関する情報）を掲載する。その際には記載されていた箇所が分かるように「+」の記号を示す。

④ 対校本に記載があり「尚家本」に記載の無い箇所は本文に行を空け、下段の対校本の異同は空欄の行の下に記載する。

⑤ 校合対象となった対校本は以下のように略記する。

- 今帰仁御殿本組踊集―――〔今〕
- 恩河本小祿御殿本組踊集―――〔恩〕
- 兼島信備所蔵本組踊集―――〔兼〕
- 台湾本 琉歌大観―――〔台〕
- 比嘉信三所蔵本組踊集―――〔比〕
- 琉球新報（大正十四年）宮城真治資料―――〔新・宮〕
- 校注 琉球戯曲集―――〔戯〕
- 宮良殿内本組踊集―――〔宮〕
- 伊舎堂用八所蔵組踊集―――〔伊〕

以上の基準を用いて、「尚家本」と対校本の違いを一目でわかるような体裁の校訂本を作成する。本文は三段に分け、上段に対校本に入っている注記や解説を示す。中段は大きな文字で「尚家本」の本文を記載する。下段は対校本の異同がわかるように、「尚家本」の本文と対照できるような形で掲載する。次説では実際の校訂本を掲載

する。

第三節 執心鐘入の校訂本

<p>①(台)一本組踊は斯道の開祖玉城親方朝蔵作として所謂五段の一にて謡曲道成寺より翻案構想せしものと称せらるる脚本は天保九年戊戌八月十二日仲秋暮に清国冊封使林院修正使林傳年及翰林院編修副使高入鑑を首里城に招請せしとき撰せしものによる(徳寶王時抄)而して文句は現代のものと少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならん</p>	<p>①(台)一書城人物と演技者 一新・宮一書城人物と当時の演技者</p> <p>②(台)一中城若松(名嘉地眞備戸) あるじ女(末世)</p> <p>座主(備前里之主親衆上) 小僧(東風平里之子)</p> <p>小僧(宜野山里之子) 小僧(武村子)</p> <p>鬼(宮里武登之)</p> <p>一新・宮一中城若松(名嘉地眞備戸) あるじ女(末世)</p> <p>座主(備前里之主親衆上) 小僧(東風平里之子)</p> <p>小僧(宜野山里之子) 小僧(武村子)</p> <p>鬼(宮里武登之) (附)当時は女の変して鬼と化するときはよりは別人に演せしめたりと爰に宮里武登之とあるもの是なり此役は若松の連入を兼ねて出演せしめられた</p> <p>一戯一中城若松 名嘉地眞備戸 あるじ女 末吉</p> <p>座主 備前里之主親衆上 小僧 東風平里之子</p> <p>同 宜野山里之子 同 武村子</p> <p>鬼 宮里武登之</p>
<p>尚家本組踊集</p> <p>執心鐘入</p> <p>若松</p> <p>半向頭巾天鷲織</p> <p>花金銀水引はさら</p> <p>花笠</p> <p>板ノ縮緬振袖袷衣裳</p> <p>脚胖</p> <p>足袋</p> <p>杖</p> <p>女</p> <p>かつら巾</p> <p>琉縫薄衣裳</p> <p>足袋</p> <p>蠟燭</p> <p>笠</p> <p>座主</p> <p>髪黒縮子もつ</p> <p>紫縮緬衣</p> <p>金欄けさ</p> <p>水晶の珠数</p> <p>末広</p> <p>足袋</p> <p>小僧三人</p> <p>黒縮子もつ</p>	<p>異同の一覧</p> <p>一新・宮一執心鐘入(名中城若松) 一宮一仲城若松</p> <p>一戯一六巻 此時相違無き。</p> <p>①(台)一執心鐘入 玉城(親方)朝蔵作 一戯一執心鐘入 拍子木打掃得ば歌謡出る</p> <p>②(台)漢作者の原稿其他 一新・宮一漢作者の原稿其他 一今一原一兼一比一宮一伊一書付ナシ</p> <p>③(台)若松 一新・宮一若松 一戯一書付、若松</p> <p>④(台)髪巾肉環巾 一新・宮一髪巾肉環巾、一戯一髪巾肉環巾</p> <p>⑤(台)花笠並銀水引巻 一新・宮一花笠並銀水引巻、一戯一金花笠並銀水引巻</p> <p>⑥(台)多々安かづる 一新・宮一編笠かづる 一戯一も多々安かづる</p> <p>⑦(台)板ノ縮緬振袖袷衣裳 裏附紗綾 一新・宮一板ノ縮緬振袖袷衣裳、裏附紗綾 一戯一板ノ縮緬振袖袷衣裳、裏附紗綾</p> <p>⑧(台)脚胖紗綾 一新・宮一脚胖 一戯一脚胖</p> <p>⑨(台)足袋 一新・宮一紗綾足袋 一戯一絹さる足袋</p> <p>⑩(台)杖持 一新・宮一杖を持 一戯一杖持</p> <p>⑪(台)女 一新・宮一女 一戯一女</p> <p>⑫(台)かつら髪巾からゆい 一新・宮一かつら髪巾から結び 一戯一かつら髪巾からゆい</p> <p>⑬(台)琉縫薄衣裳 一新・宮一琉縫薄衣裳 一戯一琉縫薄衣裳</p> <p>⑭(台)足袋の足袋 一新・宮一裳さや、足袋 一戯一絹さる足袋</p> <p>⑮(台)蠟燭持 一新・宮一蠟燭持 一戯一蠟燭持</p> <p>⑯(台)中入り寄持出る 一新・宮一中入り寄持出る 一戯一中入り寄持出る</p> <p>⑰(台)座主 一新・宮一座主 一戯一座主</p> <p>⑱(台)髪黒縮子もつ 一新・宮一髪黒縮子もつ、一戯一髪黒縮子もつ</p> <p>⑲(台)紫縮緬衣 一新・宮一紫縮緬衣、一戯一紫縮緬衣</p> <p>⑳(台)金欄けさ 一新・宮一紫縮緬衣、一戯一金欄けさ</p> <p>㉑(台)水晶珠数 一新・宮一水晶珠数、一戯一水晶珠数</p> <p>㉒(台)末廣持 一新・宮一末廣持、一戯一末廣持</p> <p>㉓(台)足袋 一新・宮一足袋、一戯一足袋</p> <p>㉔(台)小僧三人 一新・宮一小僧三人 一戯一小僧三人</p> <p>㉕(台)黒縮子もつ 一新・宮一黒縮子もつ、一戯一黒縮子もつ</p>

<p>①「鹿」鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災      雷速可振ひ候也。</p> <p>②「台」(四)鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災      鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災 故巻の      形依れ仕舞はほり強し鹿をさまをほり 別人に、進せしむたつて      鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災 故巻の      形依れ仕舞はほり強し鹿をさまをほり 別人に、進せしむたつて      鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災 故巻の      形依れ仕舞はほり強し鹿をさまをほり 別人に、進せしむたつて</p>	<p>玉色さや衣      足袋      鬼女      盤岩面      鉄丁      白羽二重銀之鱗形上着      鬼面      琉縫薄衣裳      足袋</p>	<p>〔台〕玉色さや衣 新・宮 玉色さや衣 一鹿 玉色さや衣      〔台〕三人袂敷袴 新・宮 三人袂敷袴 一鹿 三人袂敷袴      〔台〕足袋 新・宮 足袋 一鹿 足袋      〔台〕足袋 新・宮 足袋 一鹿 足袋      〔台〕鬼女 女の時 新・宮 鬼女 女の時 一鹿 鬼女の時      〔台〕盤岩面 新・宮 盤岩面 一鹿 盤岩面      〔台〕鉄丁 新・宮 鉄丁 一鹿 鉄丁      〔台〕下着白羽 重銀の鱗形上着 新・宮 下着白羽 重銀の鱗形 一鹿 下着白羽 重銀の鱗形      〔台〕上着琉縫薄衣裳 新・宮 上着琉縫薄衣裳 一鹿 上着 琉縫薄衣裳      〔台〕琉縫薄衣裳 新・宮 琉縫薄衣裳 一鹿 琉縫薄衣裳</p>
<p>③「台」(四)鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災      鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災 故巻の      形依れ仕舞はほり強し鹿をさまをほり 別人に、進せしむたつて      鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災 故巻の      形依れ仕舞はほり強し鹿をさまをほり 別人に、進せしむたつて      鹿屋井江井無江口 かる縣合と初 華約り下げ鐘懸け仕舞災 故巻の      形依れ仕舞はほり強し鹿をさまをほり 別人に、進せしむたつて</p>	<p>中城若松出羽金武ふし      一 照てたや西に      めのたけになても      首里みやたりやてと      ひちゆひ登る      一 フ身や中城      若松とやゆる      ミやたりことあてと      首里にのほる      廿日夜のくらさ      行先や迷て      ことに山路の      露もしけさ      あの村のはつれ      火の光たよて      立寄ひ今宵      明しほしやの</p>	<p>〔台〕若松出羽金武ふし 新・宮 若松出羽金武ふし 一鹿 若松出羽金武ふし      〔台〕照てたや西に 新・宮 照てたや西に 一鹿 照てたや西に      〔台〕めのたけになても 新・宮 めのたけになても 一鹿 めのたけになても      〔台〕首里みやたりやてと 新・宮 首里みやたりやてと 一鹿 首里みやたりやてと      〔台〕ひちゆひ登る 新・宮 ひちゆひ登る 一鹿 ひちゆひ登る      〔台〕フ身や中城 新・宮 フ身や中城 一鹿 フ身や中城      〔台〕若松とやゆる 新・宮 若松とやゆる 一鹿 若松とやゆる      〔台〕ミやたりことあてと 新・宮 ミやたりことあてと 一鹿 ミやたりことあてと      〔台〕首里にのほる 新・宮 首里にのほる 一鹿 首里にのほる      〔台〕廿日夜のくらさ 新・宮 廿日夜のくらさ 一鹿 廿日夜のくらさ      〔台〕行先や迷て 新・宮 行先や迷て 一鹿 行先や迷て      〔台〕ことに山路の 新・宮 ことに山路の 一鹿 ことに山路の      〔台〕露もしけさ 新・宮 露もしけさ 一鹿 露もしけさ      〔台〕あの村のはつれ 新・宮 あの村のはつれ 一鹿 あの村のはつれ      〔台〕火の光たよて 新・宮 火の光たよて 一鹿 火の光たよて      〔台〕立寄ひ今宵 新・宮 立寄ひ今宵 一鹿 立寄ひ今宵      〔台〕明しほしやの 新・宮 明しほしやの 一鹿 明しほしやの</p>

	<p>此宿の内に ものしられしやへら 旅に行暮て 行先もなひらぬ 御情に一夜 からち給ふれ</p> <p>一 女 たそよ夜深さに 宿からんていふすや 親の留主やれは 自由もならぬ</p> <p>若松 露たひんす花に 宿かゆる浮世 慈悲よ御情に からちたはふれ</p> <p>一 女 親の留主なかに 宿からちおきよて 与所しれて我身や 憂名たちゆめ</p> <p>若松 一 親の留主てやり 自由ならめていふすに 繰返ちまたや いひくれしやあすか わぬや中城 若松とやゆる みやたり事あてと 首里にのほる 廿日夜のくらさ 行先もなひらぬ</p>	<p>「新」宮「由」松と院</p> <p>「宮」旅「行」暮 「宮」行「先」も「ぬ」</p> <p>「白」女「南」表の「兼」四「行」 「今」三「台」「夜」な「そ」よ「深」さ「に」 「伊」宿「ら」ん「て」い「ふ」す「や」</p> <p>「新」宮「由」松と院「院」兼「宿」 「伊」兼「宿」</p> <p>「宮」親「御」情</p> <p>「新」宮「女」と院「院」兼「女」詞「伊」女「言」宮「ナ」シ 「宮」親「留」主「な」か「に」</p> <p>「新」宮「由」松と院「院」兼「宿」 「伊」兼「宿」</p> <p>「兼」目「由」松と院「兼」兼「宿」 「兼」兼「宿」又</p> <p>「宮」下「マ」ヤル 「宮」マ「ヤ」リ「等」シ「ル」</p> <p>「今」三「台」夜「な」そ「よ」深「さ」に「兼」行「先」も「ぬ」 「伊」行「先」も「ぬ」 「伊」行「先」も「ぬ」 「伊」行「先」も「ぬ」</p>
--	--	---



	<p>         戻る道なひらぬ          ゆきつまでをもの          たんで御情に          からちたはふれ          女出羽干瀬ふし          一里とめはのよて          いやていふめ御宿          冬の夜のよすか          互にかたやへら          若松          一 廿日夜のくらさ          道迷てをたん          御情の宿に          しはしやすま          一 女          まれの御行合さらめ          あまくかた時も          おけれく里よ          語ひほしやの          若松          一 けふのはつ御行逢に          語る事なひさめ          一 女          約速の御行合や          たにす又しちやれ          袖の振合しと          御縁さらめ          若松          一 御縁てすしらぬ          恋の道しらぬ          しはしまちかねる          夜明しら雲          女       </p>	<p>         「國」出羽干瀬中野のむらさき「白」女 出羽秋 千瀬「比」千瀬「新」宮「新」宮「新」宮          御宿をちり出瀬す「儀」女出羽秋 千瀬原のむらさき 千瀬の津の舟の舟「伊」宮「千瀬」原「比」          「宮」互「語」          「新」宮「由」伊「伊」兼「兼」言「言」言          「比」道「を」傳「す」          「新」宮「言」言「言」言「言」言「言」言「言」言「言」言          「新」宮「御」行「合」          「兼」た「し」す「又」も「も」あ「あ」る「も」の「も」          「新」宮「御」縁「を」          「新」宮「由」伊「伊」兼「兼」言「言」言「言」言          「兼」言「言」          「比」願「を」待「兼」伊「伊」伊「伊」兼「兼」言「言」言          今「今」夜「夜」明「明」し「し」ら「る」も「も」一「一」宮「宮」夜「夜」明「明」し「し」ら「る」も「も」兼「兼」言「言」言          「新」宮「言」言「言」言「言」言「言」言「言」言「言」言          「新」宮「言」言「言」言「言」言「言」言「言」言「言」言       </p>
--	---	---

<p>あ お</p>	<p>あ お</p>	<p>あ お</p>
<p>あ お</p>	<p>あ お</p>	<p>あ お</p>



	<p>思つもてからや のちもとよん かくすかたなひらぬ むはていやんすれハ 見ちやるめのいちやさ ワ肝くれしや</p> <p>若松 行先もなひらぬ 頼てわなひぎちやん 慈悲よワか命ち すくてたはふれ</p> <p>座主 一 いきやしかな童へ 花の顔かくち 露の身の命ち 助けほしやの 戻る道なひらぬ 恋のせめかこも あけて開鐘かねの 下にかくさ たうく いやうれく</p> <p>一 小僧共集め 番のしめさしやう 小僧共やう く</p> <p>座主 一 耳の根よあきて たによ間とめれ</p>	<p>【今】「伊」ひやくはやくすれな【一】「回」はやくはやくすれな【台】「白」ひやくはやくすれな【新・高】ひやくはやくすれな【殿】ひやくはやくすれな</p> <p>【新・高】「徳」ちほ【殿】徳徳【伊】若松言【高】すい</p> <p>【兼】頼て我言言やん</p> <p>【高】「羅」我言命ち</p> <p>【新・高】「座」まどほ【殿】座座【伊】座座言【高】すい</p> <p>【兼】知てが言や</p> <p>【高】れちうちらん</p> <p>【比】「扱」あひん</p> <p>【高】「戻」道道しん</p> <p>【兼】恋のしめかこも【台】恋のせめかこも</p> <p>【高】「マ」チ開鐘</p> <p>【兼】座主</p> <p>【回】「小」僧集【台】「小」僧ども集【ひ】しん【新・高】「小」僧ども集【伊】すい</p> <p>【兼】番のしめさしやう【高】番のしめさしやう【伊】すい</p> <p>【比】「座」やう</p> <p>【今】「回」小僧【兼】三比【小僧】入【台】小僧【北】表の兼より出【高】「新・高】「小僧」入【比】「北」表の兼より出【殿】小僧【北】表の兼より出【伊】小僧言</p> <p>【今】「台】「比】「新・高】「ひ」く【回】「兼】「ほ」く【殿】「高】「ひ」く【伊】「ひ」く【兼】「へ」く</p> <p>【殿】「座」言【伊】「座」言【高】「す」い</p> <p>【今】「回」兼よりあきて【回】「耳」の根の兼よりあきて【兼】耳の根の兼よりあきて【高】「耳」の根の兼よりあきて【伊】「耳」の根の兼よりあきて</p>
--	--	--

	<p>花盛り女 人とまひてぎょゆん 禁止よ此寺や 龕相にともするな たとひ寺内や さかひさはもはからひ 此鐘の近く そさうにするな く</p> <p>小僧 一 おう</p> <p>やかれよも座主か かちめたる若衆 留主ならは互に かたるうれしや</p> <p>小僧 一 あたら花盛り ひちゆひしちならぬ</p> <p>小僧 一 御縁つくかたと 匂やうつす</p> <p>小僧 一 いやすひさんな小僧 女道行七尺ふし 露の身はやとて 自由ならぬよひや 里とまいて互に 一道ならに</p> <p>小僧 一 女や法度く 戻れく</p> <p>七尺ふし</p>	<p>〔宮〕女侍かり 〔台〕人とまひてぎん 〔新・宮〕人まひきゆん 〔戯〕人まひきもち 〔宮〕人まひきもち 〔宮〕禁止よ此御寺 〔園〕つぎさはんはからひ 〔恩〕大僧 〔兼〕小僧三人 〔台〕小僧 〔念書〕 〔新・宮〕年暮小僧 〔戯〕小僧詩 〔伊〕小僧甚言 〔比〕宮一ナシ 〔恩〕うを 〔比〕宮一ナシ 〔兼〕兄弟小僧 〔比〕小僧 〔戯〕小僧 〔〇〕詞 〔比〕多から各座主の 〔宮〕座主も座主牙 〔今〕同 〔恩〕中僧 〔兼〕次小僧 〔台〕小僧 〔念書〕 〔新・宮〕中年小僧 〔戯〕小僧 〔〇〕詞 〔伊〕小僧甚言 〔宮〕ナシ 〔伊〕あた花盛り 〔兼〕可き可き遊ませ 〔今〕同 〔恩〕小僧 〔兼〕三男小僧 〔台〕小僧 〔念書〕 〔新・宮〕年少小僧 〔戯〕小僧 〔〇〕詞 〔伊〕四言 〔宮〕ナシ 〔今〕匂やうつす 〔宮〕匂や移ル 〔今〕同 〔恩〕大坊 〔兼〕兄弟小僧 〔台〕小僧 〔念書〕 〔新・宮〕年暮小僧 〔戯〕小僧 〔〇〕詞 〔伊〕四言 〔宮〕ナシ 〔伊〕いやすひさんな小僧 〔今〕女道行歌七尺ふし 〔回〕女道行歌七尺ふし 〔台〕女道行歌七尺ふし 〔聖〕の舞も出る 〔比〕七尺ふし 〔新・宮〕女道行歌七尺ふし 〔附〕聖舞も出陣 〔戯〕女道行七尺ふし 〔南〕の舞も出る 〔伊〕歌七尺ふし 〔兼〕宮一ナシ 〔伊〕露の身はやとて 〔比〕里とめて我妻や 〔宮〕道なう 〔恩〕中僧 〔台〕小僧 〔念書〕 〔新・宮〕中年小僧 〔戯〕小僧 〔〇〕詞 〔伊〕小僧 〔言〕 〔宮〕ナシ 〔今〕女法度く 〔兼〕あと禁止く 〔台〕女法度く 〔新・宮〕女法度く 〔戯〕伊女法度く 〔宮〕三女法度 〔今〕三台 〔伊〕歌七尺ふし 〔新・宮〕歌七尺ふし 〔戯〕歌七尺ふし 〔宮〕ナシ</p>
--	--	---

	<p>一 禁止のませかきも ことやればこと 花につくはへる きしのなゆめ</p> <p>小僧 一 昔から寺や 女きしさらめ いきやる事あどて とまひてきちやか</p> <p>一 女 七ツ重へたる としごろの里に おもことあてと とまひてきちやる</p> <p>小僧 尋ねゆる里や 夢やちやうもむたぬ 急ち立戻れ 女わらへ</p> <p>一 女 蟻虫の類ひ 情ある浮世 慈悲も定めらぬ 人のらめしや</p> <p>小僧 一 うらめゆすぎけは 理りとやゆる しらぬふりしちをて ゆるち見せら</p> <p>小僧 一 あたま丸めても 慈悲しらぬものや 石か朝夕さの</p>	<p>〔今〕禁止のまき頭や 〔宮〕禁中マツミヤヤ</p> <p>〔原〕水増(マ) 〔兼〕小僧 〔台〕小僧(年恋) 〔新〕宮 〔年長小僧〕一戯小僧(〇) 詞 〔伊〕小僧言 〔宮〕ナシ</p> <p>〔比〕昔ひ言るが</p> <p>〔新〕宮 〔伊〕女言 〔伊〕女言 〔宮〕ナシ</p> <p>〔兼〕要事の有とて</p> <p>〔比〕豊めて言るん</p> <p>〔原〕木小僧 〔兼〕兄小僧 〔台〕小僧(年恋) 〔新〕宮 〔年長小僧〕一戯小僧(〇) 詞 〔伊〕小僧言 〔宮〕ナシ</p> <p>〔宮〕花鳥部</p> <p>〔新〕宮 〔伊〕女言 〔伊〕女言 〔宮〕ナシ</p> <p>〔兼〕蟻虫の類ひ 〔宮〕蟻虫ノ類 〔伊〕あひ虫のたむ。</p> <p>〔新〕宮 〔せむせめらぬ〕一戯 〔是非も定めらぬ〕一宮 〔是非も定めらぬ〕一伊 〔せむせめらぬ〕</p> <p>〔原〕人の浦めしや</p> <p>〔原〕木小僧 〔兼〕兄小僧 〔台〕小僧(年恋) 〔新〕宮 〔年長小僧〕一戯小僧(〇) 詞 〔伊〕小僧言 〔宮〕ナシ</p> <p>〔宮〕ナシ</p> <p>〔宮〕ナシ</p> <p>〔比〕ゆるち見せれ 〔宮〕ナシ</p> <p>〔今〕同 〔原〕中僧 〔兼〕次小僧 〔台〕小僧(中年) 〔新〕宮 〔年長小僧〕一戯小僧(〇) 詞 〔伊〕小僧言 〔宮〕ナシ</p> <p>〔比〕あたま丸めても</p> <p>〔兼〕石の麻の</p>
--	---	---

	<p>薪木ころろ</p> <p>小僧      一とろくゆるちみせり      比二戲三宮ナシ</p> <p>小僧      一座主のとつけたる      ことや忘れとて      のよて寺内を      籠相にいれる</p> <p>小僧      一いや推参な小僧</p> <p>小僧      一あたままるめても      女花盛      匂にひかされて      をかしやく</p> <p>小僧      一いや推参な小僧</p> <p>小僧      一春のはな桜      色清さあすか      又も匂まざる      梅とやゆる</p> <p>散山節      一此世をて里や      御縁なひぬぎりめ      ひちゆひこかれとて      死ぬか心気</p> <p>座主      一はあ      たひんな事があつた      はやうむぢれく      たうく</p> <p>女</p>	<p>今二同「恩」中僧「兼」兄弟小僧「兼」三「新」宮「年」末小僧「伊」四言「比」二戲三宮ナシ</p> <p>今二同「恩」中僧「兼」兄弟小僧「兼」三「新」宮「年」末小僧「伊」四言「比」二戲三宮ナシ</p> <p>今二同「恩」小僧「兼」三男小僧「台」小僧「年」少「新」宮「年」少小僧「戲」小僧「三」言「宮」ナシ「伊」四言</p> <p>兼「何」を寺内を「比」のよて寺内よ「宮」ノミ寺内</p> <p>今二同「恩」大僧「兼」兄弟小僧「台」小僧「兼」三「新」宮「年」末小僧「戲」小僧「三」言「伊」四言「宮」ナシ</p> <p>伊「い」や、すいさん女小坊</p> <p>今二同「兼」三男小僧「台」小僧「年」少「新」宮「年」少小僧「戲」小僧「三」言「伊」四言「宮」ナシ</p> <p>今二同「恩」中僧「兼」兄弟小僧「台」小僧「由」年「新」宮「中」年小僧「戲」小僧「三」言「伊」四言「宮」ナシ</p> <p>兼「可」来く</p> <p>今二同「恩」推参な小僧「一」戲「い」や、推参な小僧「兼」三「伊」い、すいさん女小坊</p> <p>今二同「恩」大僧「兼」小僧問人「台」小僧「兼」三「新」宮「年」末小僧「戲」小僧「三」言「伊」四言「宮」ナシ</p> <p>宮「一」春、花、さ、かり</p> <p>宮「色」清、さ、あ、す、か</p> <p>宮「又」も、匂、ま、ざ、る</p> <p>宮「梅」と、や、ゆ、る</p> <p>今二同「恩」歌、を、た、は、り、て「比」散山「新」宮「歌」を、た、は、り、て「戲」歌、を、た、は、り、て「宮」ナシ「伊」歌、を、た、は、り、て「宮」ナシ</p> <p>兼「引」を、た、は、り、て「比」御、縁、な、ひ、ぬ、ぎ、り、め「宮」一、人、兼、り、す</p> <p>台「ひ」ち、ゆ、ひ、こ、か、れ、と、て「比」道、を、も、る「新」宮「死、た、ゆ、る、心、気</p> <p>新「宮」座、主「戲」座、主「伊」座、主「宮」ナシ</p> <p>兼「あ」は「比」あ「宮」ナシ</p> <p>比「大、事、な、事、が、あ、つ、た」</p> <p>今二「は、や、う、む、ぢ、れ、く」恩「は、や、う、む、ぢ、れ、く」兼「早、く、出、れ、く」比「早、く、出、れ、く」台「新」宮「戲」早、く、出、れ、く「伊」早、く、出、れ、く「宮」ナシ</p> <p>比「宮」ナシ</p> <p>新「宮」コ、ア、シ、テ「比」戲「女、謂」伊「女、言」宮「ナシ</p>
--	---	---

	<p>一 今にふしんな あの鐘よ 但此時女鐘に入鬼に成 座主 一 是や いきやしちやる事か く</p> <p>小僧 一 おにのく</p> <p>座主 一 ほれたかく</p> <p>小僧 一 鐘のく</p> <p>座主 一 ほれたかく</p> <p>小僧 一 さしもきしならぬ 留もとめならぬ 若衆尋ねたる 女わらへ 寺内をさかひち 逢ぬうらめしやに 鬼になて鐘に まどひつきやる</p> <p>座主 一 おれよく とつけたることを 鐘相だしぎをたて かにある事しぎをぎ いきをかしてゆゝひ たうく</p> <p>今からや らぎぢぢぢぢぢ</p>	<p>〔台〕新・宮「なまぢぢぢぢぢ」比今に本音の「宮」今にシゲル 〔兼〕彼の鐘「威」あの鐘。「宮」鐘や 〔今〕但此時鐘に入鬼を感じる。〔台〕但此時鐘に入鬼を感じる。〔比〕但し此時鐘になり鐘に入る。「宮」ナシ 〔新・宮〕座主「威」座主「威」座主「宮」ナシ 〔比〕あゝ「伊」これば</p> <p>〔原〕小僧「台」小僧「新・宮」二年集小僧「威」小僧「〇」宮ナシ</p> <p>〔新・宮〕座主「威」座主「伊」座主「宮」ナシ 〔威〕ほれため。 〔原〕中僧「台」小僧「中僧」新・宮「中僧小僧」威「小僧」〇「伊」小僧「宮」ナシ 〔新・宮〕座主「威」座主「伊」座主「宮」ナシ</p> <p>〔原〕小僧「台」小僧「新・宮」二年集小僧「威」小僧「〇」伊「小僧」宮ナシ 〔宮〕一 若衆尋ねたる 〔伊〕なまぢぢぢぢぢ</p> <p>〔原〕寺内をさかひち 〔台〕逢ぬうらめしやに 〔比〕寺内やむく 〔新・宮〕寺内をさかひち</p> <p>〔兼〕用は波の鐘で 〔兼〕まどひつきやる 〔新・宮〕まどひつきやる 〔比〕まどひつきやる 〔伊〕まどひつきやる</p> <p>〔原〕おれよく 〔兼〕とつけたることを 〔兼〕鐘相だしぎをたて 〔原〕かにある事しぎをぎ 〔比〕いきをかしてゆゝひ 〔伊〕たうく</p> <p>〔兼〕今からや 〔比〕らぎぢぢぢぢぢ</p>
--	--	---





#### 第四節 まとめ

前節で〈執心鐘入〉の校訂本の作成を試みた。今回作成した校訂本は、写本における異同を主眼として作成したので、舞台上での動きや、幕の出入りなどの舞台における所作ならびに上演に一番必要な要素であるこれらの情報が記載されていない。したがって、演劇における上演台本とは未だなり得ないものとなった。しかし、組踊集に収録されている同じ作品に、異同がこのように多く入っていることも理解できる物となっているので、上演に際して、どの台詞を採用するのか、どの音曲を演奏するのかなど、舞台上演における演出について、手助けとなる「台本」にはなるかと思われる。

まだまだ記載方法について研究の余地はあるが、舞台上の役者の立ち位置や、出入りの情報、所作を行うタイミング、役者の着付けの写真、採物の写真など、実際に上演された過去のデータを元に、これらのデータをこの校訂本に反映することで、組踊を上演するために必要な組踊の「台本」となることができるだろう。

#### 第五章 全体のまとめと今後の課題

本研究は、おもに詞章と音曲、ごく少数のものにはト書き、着付、当時の配役が記載されている、現在いうところの「組踊の台本」について考察した。まず、第一章では組踊集の校合の必要性を説いた。

組踊は創作された段階で「台本」を持った芸能であり、近世期に組踊の「台本」は沖縄本島だけでなく、多良間、石垣、与那国などの周辺離島まで伝播し、地方で上演もされている。組踊の「台本」は収録されている組踊集で記載が異なることが池宮正治、當間一郎、大城學ら先学が指摘し、その「定本」作りについても言及している。しかし、現存する組踊集がたくさんあり、また、定本作りに関してもその底本となり得る組踊集も選定が難しかった。しかし、尚家の資料が公開され、その中に「組踊集」が収録されており、尚家所蔵の組踊集の中には〈辺戸の大王〉〈執心鐘入〉〈銘苺子〉〈大川敵討〉〈義臣物語〉〈天願若按司敵討〉〈二山和睦〉の七作品が完全な形で収録されており、そのうち〈二山和睦〉以外の六作品には「着付」が記されている貴重なものであった。この「尚家本」を底本として、校合を行い、県内に残されている組踊集の系統や類縁性を探る環境が整ったことを説明した。

第二章では、第一節で王府上演された組踊作品を、冊封関係資料を基に再確認した。そこでは、これまで王府上演が確認できなかった〈手水の縁〉の漢訳が、『丙寅冊封那覇演戯故事』という資料に収められていることを確認することができた。この資料の詳細はまだ不明であるが、冊封の際に、冊封使に対して上演する琉球舞踊や組踊の梗概を記した「故事集」と体裁が似ているため、おそらく那覇

の天使館などで上演する芸能の内容を記したものと思われる。この資料から、〈手水の縁〉が冊封に供された可能性が強くなり、これらで作者の平敷屋朝敏が、友寄安乗と起こした「国家之御難題」によって上演されてこなかった、と言われてきた常識に疑問を投げかけることのできる結果となった。

第二節では「尚家本」の体裁や所蔵先から、「尚家本」について考察した。尚家に所蔵されており、現存する組踊集でありながら、寅年冊封の翌年に編集されている点や、その所蔵先が「評定所」ではなく、「近習方」になっており、冠船関係資料と別のものではないか、と結論づけた。そして、「尚家本」収録の各作品について、対校本を出し、諸家・地方伝来の組踊集について考察した。各対校本の体裁や収録内容を挙げたうえで、「尚家本」各収録作品と諸本の校合を行った。そして、「尚家本」と各対校本の異同箇所を挙げた。

第三節では「尚家本」と同じく王府に所蔵されていた芸能資料から編まれ、現在もなお組踊研究のテキストとして活用されている「戯曲集」について一考を試みた。「戯曲集」は戌の御冠船の際の仲秋宴・重陽宴の躍番組をもとに編まれ、補遺として四作品の組踊も収録されており、組踊の第一級のテキストとして扱われてきた。しかし、伊波普猷は「戯曲集」を編集するにあたって、どこをどの組踊集から参考にし、補ったのかを明記していない。そこで、明治、大正に

「戯曲集」と同じ「羽地本」を底本として発表された新聞掲載の台本と、同じく「羽地本」を底本として編集された「台湾本琉歌大観」を用いて〈執心鐘入〉〈銘苺子〉〈大川敵討〉の三作品を、「戯曲集」と校合して、「戯曲集」が羽地本をどの程度書写しているのかを検討した。結論として、「戯曲集」「台湾本」「新聞原稿」の〈執心鐘入〉〈銘苺子〉は異同がほとんどなく、いずれも同一の台本から書写された可能性が高いことがわかった。「戯曲集」は「羽地本」をきちんと書写している事がわかったのである。

第三章では第二章の校合結果を受けて、校合した各作品の「尚家本」との異同の特徴や、各対校本どうしの異同の共通性を明らかにした。そして、各作品ごとに「尚家本」に近い記載の組踊本を示した。七作品ある内の、〈辺土の大主〉と〈二山和睦〉は「尚家本」に近い組踊本は見つからなかった。〈辺土の大主〉は対校本が少ない、と言うのが第一の原因であるが、今後、台本が見つかり、「尚家本」に近い組踊本が出るかもしれない。〈二山和睦〉は「尚家本」の体裁も他の収録作品よりしっかりしていないので、「尚家本」の〈二山和睦〉の編集そのものにも疑問を持たねばなるまい。残りの五作品のなかで「尚家本」と記載が近かったのは「恩河本」と「今帰仁本」であることがわかった。また、〈大川敵討〉で明らかにしたのは、八重山士族が書写した組踊本は、八重山士族の中で書写されて広が

っている可能性がある、ということであった。これは、〈大川敵討〉の中に、「原国兄弟道行口説」という原国兄弟の出羽が八重山に残る組踊と、多良間に残る組踊集に見えたことや、同じところで同じような異同が多く見られた、と言うことである。同一台本からの書写であることがはっきりしたのである。また、各作品ごとに、「尚家本」に近い系統や、各対校本で記載が近い台本、「尚家本」や対校本と共通性が見られない組踊本など分類を行った。

第四章では校合結果から得られた内容を反映させた「校訂本」を製作することを試みた。試みた作品は〈執心鐘入〉である。〈執心鐘入〉は、「羽地本」系の組踊本、首里・那覇の土族が所有していた組踊本、八重山に残る組踊本と、対校本も多く、また系統がはっきりしている組踊本とも校合をしているため、「校訂本」を製作する上で良い対象と判断したためである。「校訂本」は、「尚家本」を中央にして、上段に対校本に記載されていた解説、下段に各対校本の異同を、本文の記載と対照させる形で編集した。結果として、組踊本の異同が一目でわかるようになったが、上演台本としてはまだまだ不十分であることがはっきりした。上演台本としては、舞台上の動きや幕の出入りなど、具体的な内容を記載しなければならず、今回の校訂本は台本を検討するためのもので、若干の演出の参考になる程度の台本として完成させる事しかできなかった。しかし、この校訂

本を頼りに、今後、上演台本といえる内容の台本を製作したいと思う。

最後に、本研究で指摘した「尚家本」との類縁性や、校合作業で気づいたことがある。「尚家本」といえど、役名の脱落や、書き損じなどの不適切と思われる箇所がいくつかあった、ということである。校合を行う前まで、尚家所蔵の組踊集は完全台本といえるほどの記載内容やト書きなど、上演に関する情報まで記載されていると想像していたが、現実はそのようではなかった。特に〈二山和睦〉は着付や役名を欠き、さらに対校本との異同がおおく、それがなぜなのかは未だ謎のままである。少しヒントとなりそうなのは、〈執心鐘入〉〈銘苺子〉など、朝薫が創作した作品、言い換えれば古い作品ほど細かな異同は少なく、創作された年代が下ることに異同箇所が増えていくように感じた。〈二山和睦〉は寅の御冠船から上演が確認できる組踊である。この年に創作されたのであれば、「尚家本」が編まれたのはその翌年であるため、新作の組踊であった、といえる。したがって着付もある程度決まっておらず、記載することができなかった。さらに新作であるため、台詞のやりとりも南山の長男が唱えるのか、次男が唱えるのか、不確定だったので、「尚家本」の記載も、対校本の記載も揺れている、と推測することもできる。

組踊本を書写する際に共通している点は、写本から臨書するので

はなく、書写する人物が、ある程度は台詞を記憶しており、書写元の台本は参考程度に見ながら書写していったのだらうかと思うほど、「やゆる」「やよる」などの三母音の記載方法の揺れや、漢字・平仮名の記載違い、「慈悲」「是非」の記載の違い、「心配」「世話」の方言の意味と音の当て字の違いなどが多く見られた。このような違いまで細かく見ていくと校合をほとんど先に進めることができず、困難である。結果的に組踊集は意味さえ同じであれば、記載に関してはある程度柔軟に書写されている、ということが研究を通して得られたものである。

今後はこの校合をもっと精密にし、組踊集ごとの性格をもっとはつきりさせ、試作した「校訂本」をもっと完成度の高いものにする。ことで、組踊の上演資料として活用できるようにしたい。

平成五年度と六年度の沖繩振興開発計画推進調査報告書には「組踊等沖繩伝統演劇の台本等に関する調査」として組踊の上演台本が収録されている。これは沖繩の本土復帰前に琉球政府文化財保護委員会や国立劇場で上演されたものを台本化したものである。台本の詞章は「戯曲集」を底本として、映像で異なるセリフを述べている箇所もわかるように示されている。上段には舞台図、中段に台詞とその読みをローマナイズしたもの、下段にト書きとして舞台上の動きや唱え方まで細かく説明されている。このような舞台を基にした

上演台本と、今回作成した「校訂本」を組み合わせることによって、より演出を考えることができると思う。

組踊はそもそも上演するために創作されたのである。したがって、上演資料として機能する「台本」を作成することが、組踊の基礎研究として大事であると思う。これからの研究では、「尚家本」との校合結果から得られた、「尚家本」と類縁性のある組踊本、羽地本と類縁性のある組踊本をもとに、王府上演の認められる作品を中心に校合を行い、同じように校訂本を製作していきたい。

【テキスト・参考文献・参考資料】

テキスト

- 『新本家所蔵本組踊集』八重山博物館所蔵 一八五九年  
尚家文書 31 『組躍』那覇市歴史博物館蔵 一八六七年  
『琉球詞曲』京都大学琉球資料 一八七九年  
『今帰仁御殿本組踊集』琉球大学附属図書館蔵 一八九一年  
『久志村所蔵本組踊集』久志公民館所蔵 一八九一年  
『琉球組踊』東京教育大学所蔵 一八九五年  
『与那覇政牛所蔵本組踊集』 一八九六年  
『語学材料第二』琉球大学伊波文庫 一八九六年  
『恩河本小祿御殿本組踊集』琉球大学附属図書館蔵 一八九八年  
『兼島信備所蔵本組踊集』一九〇六年  
『琉歌大観』台湾大学図書館蔵 一九〇九年  
『琉球脚本組踊集』下巻 ハワイ大学宝玲文庫 一九二〇年  
『比嘉信三本組踊集』一九二二年  
『琉球新報』(大正十四年三月十八日) 宮城真治資料・名護市博物館所蔵一九二五年  
伊波普猷『校註 琉球戯曲集』春陽堂 一九二九年  
『伊舎堂用八所蔵本組踊集』書写年代不明

辞書・事典類

- 『喜舎場孫進所蔵本組踊集』石垣市立図書館蔵 書写年代不明  
『組踊集』多良間村教育委員会所蔵 書写年代不明  
『豊川善包所蔵本組踊集』石垣市史編纂室 書写年代不明  
『組踊集』琉球大学宮良殿内文庫 書写年代不明  
『日本国語大辞典』小学館 一九七四年  
『大漢和辞典』大修館書店 一九七四年  
『中日大辞典』大修館書店 一九七八年  
『沖繩大百科事典』沖繩タイムズ社 一九八三年  
『日本大百科全書』小学館 一九八四年  
『琉球芸能事典』那覇出版社 一九九二年  
『漢語大詞典』漢語大詞典出版社 一九九三年  
『沖繩古語大辞典』角川書店 一九九五年  
『広辞苑 第六版』岩波書店 二〇〇八年  
『ブリタニカ国際大百科事典 小項目版』ブリタニカ・ジャパン株式会社 二〇一一年  
『新版 歌舞伎事典』平凡社 二〇一一年  
『琉球・沖繩芸能史年表』国立劇場おきなわ 二〇一二年

## 新聞資料

一九〇七年四月四日～五月十九日『琉球新報』「大川敵討（瓢痴）」  
「銘苜子（物外）」「執心鐘入（梅山）」  
一九三四年一月一七日『琉球新報』真境名安宜『忠孝婦人』の作者は久手堅親雲上

一九九五年五月十八日『琉球新報』夕刊「明治22年発刊『琉球浄瑠璃』松山伝十郎著／著者は福島出身で東京の市会議員―新城栄徳さんが東京朝日新聞で確認」

二〇〇一年八月九日『沖繩タイムス』「100年前の組踊台本寄贈」

## 論文

池宮正治「組踊の作者は正しく伝えられたか」『琉球大学法文学部日本東洋文化論集』第二号 一九九六年

池宮正治「台湾大学より真境名安興編『琉歌大観』とどく」琉球大学附属図書館報「びぶりお」30巻1号 一九九七年

池宮正治「首里城の舞台に供された組踊と知られざる組踊」『琉球大学法文学部日本東洋文化論集』第七号 二〇〇一年

池宮正治「かぎやで風節と郭聖王」平成 11・12・13年度科学研究補助金〔基盤研究（B）（2）〕「研究報告書」『琉球・中国交流史研究』研究代表者 上里賢一 琉球大学 二〇〇二年

池宮正治「組踊とは」首里城普及書『御冠船舞踊―組踊と舞踊―』財団法人海洋博覧会記念公園管理財団編 二〇〇二年

板谷徹「親雲上の鬚―御冠船踊りにおける芸の前提―」沖繩県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』11号 二〇一〇年

板谷徹「御冠船踊りを観る冊封使」沖繩県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』13号 二〇一二年

板谷徹「尚家文書解題抄―冠船関係資料―」沖繩県立芸術大学『沖繩県立芸術大学紀要』第21号 二〇一三年

板谷徹「故事としての御冠船踊り―尚敬冊封の画期―」沖繩県立芸術大学音楽学研究誌『ムーサ』14号 二〇一三年

大城學「『長者の大主』考」『沖繩文化』第48号 一九七七年

大城學「組踊『執心鐘入』の台本―伊波本と真境名本の比較―」沖繩文化106号 二〇〇九年

大城學「大和芸能の受容―『組踊』を中心に―」『うらそえ文藝』14号 二〇〇九年

大城學「組踊台本は如何にして筆写されてきたのか」『琉球大学法文学部日本東洋文化論集』一九号 二〇一三年

齋藤郁子「田島利三郎の沖繩研究―言語資料について―」『沖繩文化』

第90号 一九九九年

崎原綾乃「御冠船芸能の躍奉行と演目の全貌―戊の御冠船を中心に―」『沖繩文化』第101号 二〇〇七年

當間一郎「八重山に現存する組踊写本」『宮良當壯記念論集』ひるぎ社 二〇〇〇年

波平八郎『執心鐘入』の若松の役柄―戯男(コケット)としての若松―」沖繩県立芸術大学『沖繩県立芸術大学紀要』第17号 二〇〇九年

波照間永吉「薩摩入り後の大和“芸能”の受容」『うらそえ文藝』14号 二〇〇九年

山下重一「田島利三郎の生涯」『沖繩文化』第69号 一九八七年

吉岡英幸「岡倉由三郎と日本語教育」『講座日本語教育』早稲田大学日本語研究教育センター 一九九七年

劉富林「琉球組踊、日本能、中国戯曲の比較」『沖繩藝能史研究』第9号 二〇〇六年

劉富林「琉球に伝わった中国戯曲『和番』」『沖繩文化』第113号 二〇一三年

## 参考文献

池宮正治『琉球芸能文学論』光文堂 一九八二年

池宮正治『近世沖繩の肖像』ひるぎ社 一九八二年

池宮正治『琉球文学論』沖繩タイムス社 一九七六年

板谷徹『交錯する琉球と江戸の文化』榕樹書林 二〇一〇年

犬飼公之『琉球組踊 玉城朝薫の世界』瑞木書房 二〇〇四年

伊波普猷『校註 琉球戯曲集』春陽堂 一九二九年

大城學『沖繩芸能史概論』砂子屋書房 二〇〇〇年

大城學編『琉球・沖繩の芸能―その継承と世界へ拓く研究』彩流社

二〇一二年

金城厚『沖繩音楽入門』株式会社音楽之友社 二〇〇六年

加藤三吾『琉球之研究』(上中下)

加藤三吾『琉球之研究』文一路社 一九四一年

九芸出版『日本の芸談(第4巻) 舞踊・邦楽』九芸出版 一九七

九年

金武良章『御冠船夜話』若夏社 一九八三年

久万田晋『沖繩の民俗芸能論 神祭り、臼太鼓からエイサーまで』

ポーターインク 二〇一二年

國學院大學『國學院雑誌』一九〇二年

島袋光裕『石扇回想録―沖繩芸能物語』沖繩タイムス社 一九八二

年



- 田島利三郎『琉球文学研究』青山書店出版 一九二五年
- 當間一郎『組踊選集』沖繩風土記社 一九六八年
- 當間一郎『組踊の世界』錦友堂写植 一九七二年
- 當間一郎『沖繩の芸能』オリジナル企画 一九八二年
- 當間一郎『組踊写本の研究』第一書房 一九九九年
- 當間清光『沖繩郷土古典芸能 組踊全集』三ツ星印刷 一九五五年
- 日本民俗協会『日本民俗』第12号 日本民俗協会 一九三六年
- 原田禹雄『徐葆光 中山傳信録 新訳注版』榕樹書林 一九九九年
- 比屋根照夫・伊佐眞一編『太田朝敷選集』第一書房 一九九六年
- 藤本富士郎 編『下谷浅草自治功績録』日出新聞社 一九二七年
- 本田安次『南島探訪記』明善堂書店 一九六二年
- 松山伝十郎『琉球浄瑠璃』いろは家 一八八九年
- 三隅治雄『沖繩の芸能』邦楽と舞踊出版部 一九六九年
- 村崎長昶、豊好曼郎『琉球踊狂言』一八九三年
- 矢野輝雄『組踊を聴く』瑞木書房 二〇〇三年
- 矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社 二〇〇一年
- 琉球新報社 編『東恩納寛淳全集』琉球新報社 一九七八年
- 言語学会編『言語学雑誌』第一巻七号・八号 一九〇〇年

## 参考資料

- 池原厚道『工工四附 組踊集』一九四一年
- 伊波普猷先生記念論文集編纂委員『南島論叢』一九七〇年
- 大城彦五郎『組踊』大城活版所 一九二二年
- 大城彦五郎『組踊』大城活版所 一九二五年
- 大城彦五郎『組踊』大城活版所 一九二八年
- 沖繩県立沖繩図書館『郷土志料目録』沖繩県立図書館比嘉春潮文庫
- 沖繩県立図書館『徐葆光 中山伝信録 上』(郷土史講座テキスト冊封使録集 十) 一九七六年
- 沖繩県立図書館『周煌 琉球国志略 下』(郷土史講座テキスト冊封使録集 八―三) 一九七五年
- 沖繩県教育委員会『沖繩県史料 前近代 8 芸能 I』一九九五年
- 沖繩県教育委員会『沖繩県史料 前近代 11 芸能 II』一九九八年
- 沖繩県教育委員会『沖繩の組踊 (I)』一九八六年
- 沖繩県教育委員会『沖繩の組踊 (II)』一九八七年
- 沖繩県立芸術大学附属研究所『鎌倉芳太郎資料(ノート編 I) 美術・工芸』二〇〇四年
- 球陽研究会 編『球陽 読み下し編』一九七四年
- 金城朝永『金城朝永全集』沖繩タイムス社 一九七四年
- 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第十一巻 一九七五年
- 国立劇場おきなわ『国立劇場おきなわ10周年誌』二〇一四年

- 尚家文書『冠船躍方日記』那霸市博物館蔵
- 尚家文書 126 『冊封諸宴演戲故事 上』那霸市博物館蔵
- 尚家文書 127 『演戲故事』那霸市博物館蔵
- 尚家文書 160 『御膳進上日記』那霸市博物館蔵
- 尚家文書 198 『冠船躍奉行小祿按司日記』那霸市博物館蔵
- 尚家文書 248 『丙寅冊封諸宴席前演戲故事 上』那霸市博物館蔵
- 尚家文書 249 『丙寅冊封諸宴席前演戲故事 下』那霸市博物館蔵
- 尚家文書 250 『丙寅冊封那霸演戲故事』那霸市博物館蔵
- 田井等誌編纂委員会編『田井等誌』名護市字田井等 二〇〇八年
- 多良間村史編集委員会『多良間村史』第五卷資料編4 芸能 一九八八年
- 渡久地林爲法『組踊集 第一編』渡久地活版所 一九三六年
- 那霸市史編纂室『那霸市史 家譜資料(2) 久米系』一九八〇年
- 那霸市史編纂室『那霸市史 家譜資料(3) 首里系』一九八二年
- 那霸市史編纂室『那霸市史 家譜資料(4) 那霸・泊系』一九八三年
- 名護市史編さん委員会編『名護市史本編・8 芸能』名護市役所 二〇一二年
- 外間守善 波照間永吉編『定本 琉球國由来記』角川書店 一九九七年

本田安次『沖繩の古謡と舞踊』民俗芸能の会 一九五一年

真境名安興『真境名安興全集』琉球新報社 一九九三年

民俗芸能の会編『民俗芸能』第二卷第八号 一九三一年

### 【校合資料凡例】

- 本資料は、尚家本組踊集（以下、尚家本）とその他筆写本の組踊集を校合した資料である。上段中央に校合する作品名、左端に尚家本、中央、右側に対校本を記載した。
- 校合を行うにあたって、着付は役柄ごとに、詞章は琉歌形式に区切ってひとつの枠に入れた。校合箇所がわかるよう、一番左端には行番号（No.）を振った。
- 尚家本、対校本ともに空欄部分は、記載のない箇所である。
- 対校本の欄にある「\*」記号は、尚家本と表記が同じという意である。
- 文字数のわかる虫損・欠損部分には「■」を、文字のわからない欠損が見られる箇所には「[欠]」を記載した。
- 対校本に詞章などの記載がある箇所は、尚家本と記載に異同がある箇所である。
- 資料の都合上、1作品を横一列に掲載したかったが、用紙に出力できないため、1作品1～2冊の組踊集を掲載することとなった。

辺戸の大主 校合資料

No.	尚家旧蔵組踊集	兼島本組踊集	琉球脚本組踊集 下巻
1	辺戸之大主	*	辺戸の大主
2	大主青色金入錦之丸頭巾印籠黄古銅色緞子衣裳金入錦之大帯白ひけ足袋杖休卓		
3	辺戸之ひや黒縹子入道頭巾印籠黒紗綾衣裳采絹大帯足袋		
4	辺戸之子黒縹子入道頭巾黒紗綾衣裳采絹大帯足袋		
5	大あん作白毛縹子ネ同衣髪差裙白ネ同衣添差形付花紗綾衣裳かもし足袋久葉団羽		
6	男孫六人半向頭巾六人分作花六ツ金【入】銀水引はさら六通紕縮緬振袖衣裳六枚花脚胖六通足袋六足		
7	二才孫花染しほり巾六筋黒紗綾(裕)衣裳六枚脚胖六通足袋六足花車から式本		
8	女孫六人紫縮緬長巾八ツ助巾八ツ作花指金八対垂熨斗紙八通金銀水引八通足袋八足		
9	辺戸之ひや并同子妻琉縫薄衣裳老枚黒地形付裕衣裳老枚白ネ同衣式枚裙式着髪差式ツ添差式ツかもし足袋式足ネ同衣式枚		
10	辺戸のひや	辺土ノ比屋言葉橋掛ヨリ出ル	*
11	一 出様ちやる二人や、	*	出様来る者や
12	辺戸の大主の嫡子	*	*
13	辺戸のひや	*	*
14	嫡孫辺戸の子、	*	*
15	あゝ豊成御代や	*	*
16	願事も叶て、	*	*
17	父母の御歳	*	*
18	ことし百はたち、	*	*
19	我身や九十歳	*	*
20	いやあも七十に	*	*
21	なやひまたをれは、	*	*
22	父母の御果報	*	*
23	我々の悦ひ、	*	*
24	いこと葉に出ち	*	*
25	いちや尽さらぬ、	言ン尽サラヌ	言ちん尽さらぬ
26	やあなし子、	*	*
27	けふやよかる日よやれは、	*	*
28	父母の百はたち	*	*
29	祝ひふしやあもの、	*	*
30	孫子のきや	*	*
31	呼よ集めやひ、	*	*
32	思ひ/\の芸能	*	*
33	躍らしやひ御目かけれ、	*	*
34	辺戸の子	*	*
35	一 拜むちゆめやへて、	*	*
36	辺戸のひや	*	*
37	一 たう/\、	*	*
38	急ちおれ/\の	*	急ぎおれくれの
39	用意すれよ、	*	*
40	ひや	同人橋掛ヨリ出ル	*
41	一 やあ/\父親よ	*	*
42	やあ母親よ、	*	*
43	同人	*	全

No.	尚家旧蔵組踊集	兼島本組踊集	琉球脚本組踊集 下巻
44	一 やあ父親よ、	*	*
45	あゝけふや	*	*
46	よかる日撰(ひよひ)やれは、	吉日日選デアヤビレバ	よかる日よやれば
47	父母の百はたち	*	*
48	祝ひしやへら、	*	*
49	大主	*	*
50	一 あゝなまのことやれは	*	*
51	誇らしやとあゆる、	*	誇らしどやよる
52	たう/\	*	*
53	祝ふて呉れよ、	*	祝ひ呉よ
54	ひや	*	*
55	一 やあ孫のきや、	*	*
56	あしやけんかひ	*	*
57	おんつかひすれよ、	*	*
58	同人	*	*
59	一 やあなし子、	*	*
60	たう/\	*	*
61	急ちけふの	*	*
62	御祝ひ始めよ、	*	*
63	大主	*	*
64	一 はあ/\、	*	
65	やあなし子、	*	やあ/\産子
66	あのやうに	*	あのやうな
67	わらへに拘とらち、	*	*
68	ひや	*	*
69	一 たう/\	*	*
70	わぬ御杓とやへらに、	*	我身に御酌とやびらに
71	やあ父親よ、	*	*
72	甘酒よやれは	*	*
73	ひとつつきやへらに、	*	*
74	大主	*	*
75	一 たう/\、	*	*
76	けふやほこらしやの	*	*
77	一ツつけよ、	*	*
78	ひや	*	*
79	一 加ひてあけやへら、	*	*
80	母親も甘酒よやれは	*	*
81	ひとつつきやへら、	*	一つづじやびらに
82	たう/\	*	*
83	加ひてあけやへら、	加テ上ゲラ	加てあげら
84	辺戸のひや		
85	一 やあなし子、	*	*
86	今月や三月	*	*
87	花見月やれは、	*	*
88	孫子の■めやひ	子孫集ヤイ	*
89	梅の花挽躍	梅ノ花踊リ	梅の花踊り
90	おとらしやひおめかけれ、	*	*
91	子	辺土ノ子	*
92	一 おう	*	*
93	柳ふし	柳節橋掛ヨリ出ル	*
94	一 柳はみどり	*	*
95	花はくれなあ	*	*
96	人はたゝ情け	*	*
97	梅は匂ひ	*	*
98	ひや	*	*
99	一 あゝ出来た/\、	*	*
100	やあ孫のきや、	*	*
101	けふやあつさあもの、	*	*
102	あふきしやい、	*	*
103	御腰すたひ、	亦御腰スタへ	又御腰だい
104	たゝちやひしち	*	*
105	おしやけれよ■	*	*
106	二才孫	*	*
107	一 おう	*	*
108	子		*
109	一 やあ男童へのきや、		やあ男子のちや
110	梅の花おとり		*
111	おとて御目かけれ、		*
112	平敷ふし	*	*
113	一 梅や冬こもり	*	*
114	節よ待かねて	*	*
115	はなの咲くはるに、	*	*
116	あふか嬉しや	*	*
117	同ふし	*	

No.	尚家旧蔵組踊集	兼島本組踊集	琉球脚本組踊集 下巻
118	一 深山鶯も	*	*
119	さくやこの花の	*	*
120	匂おくる風の	*	*
121	たよりまちゆら	*	*
122	ひや	*	*
123	一 あゝ出来た / \、	*	*
124	やあ父親よ、	*	*
125	ことしや梅の花	*	*
126	咲るきよらさ、	*	*
127	深山鶯も	*	*
128	匂忍てやかて	*	*
129	とまひてこんしゆもの、	*	*
130	大主	*	*
131	一 あゝいふることに今年や	*	*
132	花咲のきよらさ	*	花咲くの美さ
133	子	辺土ノ比屋	*
134	一 やあ女童へのきや、	*	*
135	たう / \	*	*
136	なるこひき躍	*	*
137	おとて御目掛れ	踊り御目掛り	*
138	きんふし女孫六人なるこおとり	金武節女孫六人ナル子持ち踊り	*
139	一 首里おほひ国習ひや	*	*
140	びや三味線聞い	*	三味線も聞きゆひ
141	なるここゑときゝゆる	*	*
142	ワ山国や	*	*
143	同節	*	*
144	一 いつも山国や	*	*
145	なるこ声と聞■	*	*
146	うちならし / \	*	*
147	ときにしやへら	*	*
148	子	*	*
149	一 けふやほこらしやの	*	今日や誇らしや
150	ひとつおしやかれよ、	*	*
151	やあ女子のきや、	*	やあ女童のちや
152	たう / \	*	*
153	躍ておめかけれ、	*	*
154	ちるれんふし	チルレン節女孫兩人四ッ竹持踊	*
155	一 子むまかそろて	*	子や孫揃て
156	願たこと叶て	*	*
157	大主の百歳	*	*
158	御祝しやへら	*	*
159	同ふし	*	*
160	一 いかれかれけふや	*	*
161	たゝいかれ童へ	*	*
162	大主の御祝ひ	*	*
163	御伽やれば	*	*
164	大主	*	*
165	一 やあ大 (あ) む、	*	やあ大あんま
166	孫子の	噫孫子ノ	*
167	躍しゆすみれは	*	*
168	嬉しやほこらしやの	*	*
169	子	*	*
170	一 あゝ出来た / \、	*	*
171	やあ男子のきや	*	*
172	二才おとり	*	*
173	踊ておめかけれ、	*	*
174	二才	*	*
175	一 おう	*	*
176	前の浜ふし	*	*
177	一 前のはまに / \	一 ヤイ / \ 前ノ浜に / \	ゑいゑい前の浜に / \
178	雪雨のふゆひ	*	*
179	ゆきあめやあらぬ	*	*
180	雪の真米	*	*
181	同ふし	*	*
182	一 渡地の / \	一 ヤイ / \ 渡地の / \	ゑいゑい渡地の / \
183	浦波の浜ちとり	*	*
184	友よふ声や	*	どし呼ぶ声や
185	ちり / \ / \ / \	*	*
186	ひや	*	*
187	一 あゝ出来た / \、	*	*
188	やあ父母よ	*	*
189	あゝけふや	*	さゝ今日や
190	押し烈てたかいに	*	押しつりて互にて
191	躍てあすひやへら、	*	をどり遊びやびら

No.	尚家旧蔵組踊集	兼島本組踊集	琉球脚本組踊集 下巻
192		辺土ノ大主	辺戸の大主
193	一 たう / \	*	*
194	わぬもよらて	*	*
195	躍て遊は	*	遊ば
196	はやいくわひにや	早クワイニヤ節辺土ノ比屋以下手ヲ橋掛へ入ル	*
197	一 けふのいからしや	*	*
198	躍はね遊び	*	ををり羽あそぶ
199	大主の百歳	*	*
200	御祝ひたひもの	*	*
201	同ふし	*	
202	一 けふのほこらしやゝ	*	*
203	なをにきやなたてる	*	*
204	つほてをる花の	*	つぼで居るの花の
205	露きやたこと	*	*
206	同ふし	*	
207	一 九重のうちに		
208	荅て露まちゆす		
209	嬉しこと菊の		
210	はなとやゆる		
211	一 石にや子のいしの	*	*
212	大瀬成までも	*	*
213	おかけほさへめしやうれ	*	*
214	我御主かなし	*	*
215		辺土ノ大主終	「おほり」

執心鐘入校合資料(1)

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本組踊集	恩河本小祿御殿本組踊集
1	執心鐘入	執心鐘入	執心鐘入
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11	若松半向頭巾天鷲織花金銀水引はさら花笠板メ縮緬振袖袷衣裳脚胖足袋杖		
12	女かつら巾琉縫薄衣裳足袋蠟燭笠		
13	座主髪黒縹子もつ紫縮緬衣金襴けさ水晶の珠数末広足袋		
14	小僧三人黒縹子もつ玉色さや衣足袋		
15	鬼女盤若面鉄丁白羽二重銀之鱗形上着鬼面琉縫薄衣裳足袋		
16			
17			
18	中城若松出羽金武ふし	若松道行金武ふし	若松出羽金武ふし
19	照てたや西に	*	*
20	ぬのたけになても	*	布たけになてん
21	首里みやたりやと	*	*
22	ひちゆひ登る	*	一人ひ行る
23		若松	若松
24	ワ身や中城	*	我んや中城
25	若松とやゆる	*	*
26	みやたりことあてと	*	*
27	首里にのほる	*	*
28	廿日夜のくらさ	*	*
29	行先や迷て	*	*
30	ことに山路の	*	*
31	露もしけさ	*	*
32	あの村のはつれ	*	*
33	火の光たよて	*	*
34	立寄ひ今宵	*	*
35	明しほしやの	*	*
36			
37	此宿の内に	*	*
38	ものしられしやへら	*	*
39	旅に行暮て	*	*
40	行先もなひらぬ	*	*
41	御情に一夜	*	*
42	からち給ふれ	*	*
43	女	*	*
44	たそよ夜深さに	たるよ夜ふかさに	誰よ夜ぶかくに
45	宿からんていふすや	*	*
46	親の留主やれは	*	*
47	自由もならぬ	*	*
48	若松	*	*
49	露たひんす花に	*	*
50	宿かゆる浮世	*	*
51	慈悲よ御情に	*	*
52	からちたはふれ	*	*
53	女	*	*
54	親の留主なかに	*	*
55	宿からちおきよて	*	*
56	与所しれて我身や	*	*
57	憂名たちゆめ	*	*
58	若松	*	*
59	親の留主てやり	*	*
60	自由ならぬていふすに	*	*
61	繰返ちまたや	*	*
62	いひくれしやあすか	*	*
63	わぬや中城	*	*
64	若松とやゆる	*	*
65	みやたり事あてと	*	*
66	首里にのほる	*	*
67	廿日夜のくらさ	*	*



No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本組踊集	恩河本小祿御殿本組踊集
68	行先もなひらぬ	行先もみらぬ	*
69	戻る道なひらぬ	*	*
70	ゆきつまでをもの	*	*
71	たんで御情に	*	*
72	からちたはふれ	*	*
73	女出羽干瀬ふし	*	女出羽干瀬ふし (ママ) にいるとりふし
74	里とめはのよて	*	*
75	いやていふめ御宿	*	*
76	冬の夜のよすか	*	*
77	互にかたやへら	*	*
78	若松	*	*
79	廿日夜のくらさ	*	*
80	道迷てをたん	*	*
81	御情の宿に	*	*
82	しはしやすま	*	*
83	女	*	*
84	まれの御行合さらめ	*	*
85	あまくかた時も	*	*
86	おけれ / \ 里よ	*	うけり / \ 里よ
87	語ひほしやの	*	*
88	若松	*	*
89	けふのはつ御行逢に	*	*
90	語る事なひさめ	*	*
91	女	*	*
92	約速の御行合や	*	*
93	たにす又しちやれ	*	*
94	袖の振合しと	*	*
95	御縁さらめ	*	御縁さらみ
96	若松	*	*
97	御縁てすしらぬ	*	御縁てすしらん
98	恋の道しらぬ	*	*
99	しはしまちかねる	*	*
100	夜明しら雲	夜明しら雲よ	夜明しら雲よ
101	女	*	*
102	深山鶯の	*	*
103	春の花毎に	*	*
104	そゆるよの中の	吸る世の中の	吸る世の中の
105	ならひやしらね	*	*
106	若松	*	*
107			
108			
109			
110			
111	しらぬ	*	*
112			
113			
114			
115			
116	女	*	*
117	おとこ生れても	*	*
118	恋しらぬものや	*	*
119	玉の盃の	*	*
120	そこも見らぬ	*	*
121	若松	*	*
122	男生れても	*	*
123	義理しらぬものや	*	*
124	おれと世の中の	これと世の中の	これど世の中の
125	地獄たひもの	*	*
126	干瀬ふし	歌干瀬ふし	*
127	およほらぬ里と	*	*
128	かねてからしらは	*	*
129	のよて悪縁の	*	*
130	袖に結びやへか	*	袖にもすひやひる
131	若松	*	*
132	悪縁や袖に	*	*
133	むすはもはからひ	*	*
134	わ身や首里ミやたり	*	*
135	やてといきゆる	*	*
136	干瀬ふし	歌干瀬ふし	*
137	悪ゑんの結て	*	*
138	はなちはなされめ	*	*
139			
140	ふりすてゝいかは	*	*
141	一道たひもの	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本組踊集	恩河本小祿御殿本組踊集
142			
143	若松	*	*
144	され / \ 座主かなし	*	*
145	露の身の命ち	*	*
146	すくてたはふれ	*	*
147	座主	*	*
148	こねや夜ふかさに	*	こねや夜ふかくに
149	童へ声のあすか	*	*
150	いとふしきたひもの	*	*
151	急ちきかに	*	*
152	若松	*	*
153	一夜かりそめの	*	*
154	宿の女	*	*
155	悪縁のつなの	*	*
156	はなちはなさらぬ	*	*
157	終に一道と	*	*
158	あとから追つけて	*	跡からうへつけ
159	露の命ちを	露の身の命を	*
160	とらんとよ	*	*
161	行末吉の	*	*
162	此御寺	*	*
163	頼まは終に	*	*
164	我かいのち	*	*
165	頼て御助	*	*
166	わかいのち	*	*
167	座主	*	*
168	あゝ一だひんな事よ	*	*
169	/ \	*	*
170	命もふりすてゝ	命ふりすてゝ	*
171	恥も振捨て	*	*
172	とまひて来るはかり	*	*
173	たゝやいくまひ	*	*
174	女恋こゝろ	*	*
175	僮相にともおもな	*	*
176	思つもてからや	*	*
177	のちもとよん	*	*
178	かくすかたなひらぬ	*	*
179	むはていやんすれハ	むはていやにすれは	んばていやにすれは
180	見ちやるめのいちやさ	*	*
181	ワ肝くれしや	*	*
182	若松	*	*
183	行先もなひらぬ	*	*
184	頼てわなひきちやん	*	*
185	慈悲よワか命ち	*	*
186	すくてたはふれ	*	*
187	座主	*	*
188	いきやしかな童へ	*	*
189	花の顔かくち	*	*
190	露の身の命ち	*	*
191	助けほしやの	*	*
192	戻る道なひらぬ	*	*
193	恋のせめかこも	*	*
194	あけて開鐘かねの	*	*
195	下にかくさ	*	*
196	たう / \	*	*
197	いやうれ / \	*	*
198			
199	小僧共集め	*	小僧共集
200	番のしめさしやう	*	*
201			
202	小僧共やう	*	*
203	/ \	*	*
204		小僧	小僧
205		ふう	ふを
206	座主	*	*
207	耳の根よあさて	耳の根をあきて	耳の根ゆ明て
208	たによ聞とめれ	*	*
209	花盛り女	*	*
210	人とまひてきゝゆん	*	*
211	禁止よ此寺や	*	*
212	僮相にともするな	*	*
213	たとひ寺内や	*	*
214	さかひさはもはからひ	*	つ(ち)かさはんはからひ
215	此鐘の近く	*	*

執心鐘入校合資料(1)

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本組踊集	恩河本小祿御殿本組踊集
216	そさうにするな	*	*
217	/ \	*	*
218	小僧	*	大小増 (ママ)
219	おう	おふ	うを
220			
221	やかれよも座主か	*	*
222	かちめたる若衆	*	*
223	留主ならば互に	*	*
224	かたるうれしや	*	*
225	小僧	同	中僧
226	あたら花盛り	*	*
227	ひちゆひしちならぬ	*	*
228	小僧	同	小増 (ママ)
229	御縁つくかたと	*	*
230	匂やうつす	匂やうつる	*
231	小僧	同	大坊
232	いやすひさんな小僧	*	*
233	女道行七尺ふし	女道行歌七尺ふし	女出羽七尺ふし
234	露の身はやとて	*	*
235	自由ならぬよひや	*	*
236	里とまいて互に	*	*
237	一道ならに	*	*
238	小僧	*	中小僧
239	女や法度 / \	女ハ法度 / \	*
240	戻れ / \	*	*
241	七尺ふし	歌七尺ふし	*
242	禁止のませかきも	禁止のませ垣や	*
243	ことやれはことい	*	*
244	花につくはへる	*	*
245	きしのなゆめ	*	*
246	小僧	*	大小増 (ママ)
247	昔から寺や	*	*
248	女きしさらめ	*	*
249	いきやる事あとて	*	*
250	とまひてきちやか	*	*
251	女	*	*
252	七ツ重へたる	*	*
253	としころの里に	*	*
254	おもことのあてと	*	*
255	とまひてきちやる	*	*
256	小僧	*	大小僧
257	尋ねゆる里や	*	*
258	夢やちやうもむたぬ	*	*
259	急ち立戻れ	*	*
260	女わらへ	*	*
261	女	*	*
262	蟻虫の類ひ	*	*
263	情ある浮世	*	*
264	慈悲も定めらぬ	*	*
265	人のらめしや	*	人の浦みしや
266	小僧	*	大小僧
267	うらめゆすきけは	*	*
268	理りとやゆる	*	*
269	しらぬふりしちをて	*	*
270	ゆるち見せら	*	*
271	小僧	同	中僧
272	あたま丸めても	*	*
273	慈悲しらぬものや	*	*
274	石か朝夕さの	*	*
275	薪木こゝる	*	*
276	小僧	同	中僧
277	とう / \ ゆるちみせら	*	*
278	小僧	同	小僧
279	座主のとつけたる	*	*
280	ことや忘れとて	*	*
281	のよて寺内を	*	*
282	籠 (相) にいれる	*	*
283	小僧	同	大僧
284	いや推参な小僧	*	*
285	小僧	同	*
286	あたままるめても	*	*
287	女花盛	*	*
288	匂にひかされて	*	*
289	をかしや / \	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本組踊集	恩河本小祿御殿本組踊集
290	小僧	同	中僧
291	いや推参な小僧	*	いや推参な小僧みう
292	小僧	同	大僧
293	春のはな桜	*	*
294	色清さあすか	*	*
295	又も匂まさる	*	*
296	梅とやゆる	*	*
297	散山節	歌さん山ふし	*
298	此世をて里や	*	*
299	御縁なひぬさらめ	*	*
300	ひちゆひこかれとて	*	*
301	死ぬか心気	*	*
302	座主	*	*
303	はあ	*	*
304	たひんな事があつた	*	*
305	はやうむちれ / \	はやう出れ / \	早やう出り / \
306	たう / \	*	*
307	女	*	*
308	今にふしんな	*	*
309	あの鐘よ	*	*
310	但此時女鐘に入鬼に成	但此時女鐘に入鬼と成る	*
311	座主	*	*
312	是や	*	*
313	いきやしちやる事か	*	*
314	/ \	*	*
315	小僧	*	大小僧
316	おにの / \	*	*
317	座主	*	*
318	ほれたか / \	*	*
319	小僧	*	中小僧
320	鐘の / \	*	*
321	座主	*	*
322	ほれたか / \	*	*
323	小僧	*	大小僧
324	きしもきしならぬ	*	*
325	留もとめならぬ	*	*
326	若衆尋ねたる	*	*
327	女わらへ	*	*
328	寺内をさかひち	*	寺内をちがち
329	逢ぬうらめしやに	*	*
330	鬼になて鐘に	*	*
331	まとひつきやる	*	*
332	座主	*	*
333	おれよ / \	*	*
334	とつけたることや	*	*
335	龜相にしちをとて	*	龜相にしちよて
336	かにある事しちやち	*	*
337	いきやかしゆゝら	*	いきやがしよゆら
338	たう / \	*	*
339	今からや	*	*
340	いきやいちも	*	*
341	ならぬこと	*	*
342	法力を尽ち	*	*
343	祈のけらふよ	*	*
344	たう / \	*	*
345			
346	小僧	*	大小僧
347	おう	*	うを
348		座主	座主
349	東方に降三世明王。	東方にこんさんし明王	東方にごんさんじ明王
350	南方軍(口毛)利夜叉明王。	*	南方にこんたり夜叉明王
351	西方大威徳明王。	西方に大いとく明王	西方だいとく明王
352	北方金剛夜叉明王。	*	*
353	中央大聖不動明王。 / \。 / \	*	*
354	なまくさまんたはざらた。	*	なまこさまんたはさうた
355	せんたまかるしやた。	*	*
356	そはたやうんたうたかんまあ。	すはたやうんたらたかんまん	すはたやうんたらたかんまん
357	ちやうかせつしやとく大ちゑ。	*	ちやうりせつしやとく大ち
358	かじしつしや即身成佛	ちかしんしや即身成佛	えちりしんしや即身成佛
359			
360			
361			中城若松終
362			桃原村
363			恩河朝祐

執心鐘入校合資料(1)

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本組踊集	恩河本小禄御殿本組踊集
364			鬼速狂之極
365			心偏に鬼は愧字なり愧心面に見はれ鬼の如くなる
366			

執心鐘入校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	兼島信備所蔵本組踊集	台湾本 琉歌大観
1	執心鐘入	執心鐘入	執心鐘入
2			
3			本組踊は斯道の開祖玉城親方朝薫作として所謂五段の一にて謡曲道成寺より翻案構想せしものと称せらるる原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使翰林院修選正使林鴻年及翰林院編修副使高人鑑を首里城に招請せしとき演せしものに依る(尚育王時代)而して文句は現代のものとは少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならんか欄外の記事参照
4			執心鐘入 玉城(親方)朝薫作
5			登城人物と演技者
6			中城若松(名嘉地眞蒲戸) あるじ女(末吉)
7			座主(濱元里之主親雲上) 小僧(東風平里之子)
8			小僧(宜野山里之子) 小僧(武村子)
9			鬼(宮里筑登之)
10			演技者の服装其他
11	若松半向頭巾天鷲織花金銀水引はさら花笠板ノ縮緬振袖袷衣裳脚胖足袋杖		若松 髪半向頭巾(かみはんむけづきん)、金花並金銀水引差(きんくわ きんぎんみづひきさす)、あみ笠かづき板じめ縮緬振袖袷衣裳(あみがさ いたちりめんふりそであはせいしやう)、裏緋紗綾(うらひさや)、脚絆紗綾、足袋(きやはんさや、たび)、杖持(つえもつ)
12	女かつら巾琉縫薄衣裳足袋蠟燭笠		女 かつら髪にかつらゆい、琉縫薄衣裳(りゅうぬひうすいしやう) 緋さや足袋(ひ)、蠟燭持中入より笠持出る(ろうそくもちなかいり かさもちで)
13	座主髪黒縹もつ紫縮緬衣金襴けさ水晶の珠数末広足袋		座主 髪黒縹もつ(かみくろじゆし)、紫縮緬衣金襴けさ(むらさきちりめんいきんらん)、水唱珠数(すいしやうすず)、末廣持(すへひろもつ)、足袋
14	小僧三人黒縹もつ玉色さや衣足袋		小僧三人 黒髪黒縹もつ、玉色さや衣、三人珠数持、足袋
15	鬼女盤若面鉄丁白羽二重銀之鱗形上着鬼面琉縫薄衣裳足袋		鬼 女の時 盤若面(はんにやめん)、鉄丁(てつてう)、下着白羽二重銀の鱗形上着(したぎしろはふたへ うろこがた)、上着琉縫薄衣裳緋さや、足袋、
16			
17			附淫女容貌相変、笠なけ捨て、鐘に入替り段々の業有る 故老の談に依れば当時は女はその変して鬼となるときは、別人にて演せしめたりと爰に宮里筑登之とあるもの是れなり此役は武芸の達人選ひしと云
18	中城若松出羽金武ふし	*	第一幕 若松道行歌金武ぶし(橋掛より出つ)
19	照てたや西に	*	*
20	ぬのたけになても	*	*
21	首里みやたりやてと	*	*
22	ひちゆひ登る	*	ひちゆひいきゆる
23		若松	若松
24	ワ身や中城	*	*
25	若松とやゆる	*	*
26	ミやたりことあてと	*	*
27	首里にのほる	*	*
28	廿日夜のくらさ	*	*
29	行先や迷て	*	*
30	ことに山路の	*	*
31	露もしけさ	*	*
32	あの村のはつれ	*	*
33	火の光たよて	*	*
34	立寄ひ今宵	*	*
35	明しほしやの	*	*

執心鐘入校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	兼島信備所蔵本組踊集	台湾本 琉歌大観
36			
37	此宿の内に	*	*
38	ものしられしやへら	*	*
39	旅に行暮て	*	*
40	行先もなひらぬ	*	*
41	御情に一夜	*	*
42	からち給ふれ	*	*
43	女	*	女(南表の幕内にて)
44	たそよ夜深さに	誰るよ夜ん深に	たるよ夜(よ)ふかさに
45	宿からんていふすや	*	*
46	親の留主やれは	*	*
47	自由もならぬ	*	*
48	若松	*	*
49	露たひんす花に	*	*
50	宿かゆる浮世	*	*
51	慈悲よ御情に	*	*
52	からちたはふれ	*	*
53	女	*	*
54	親の留主なかに	*	*
55	宿からちおきよて	*	*
56	与所しれて我身や	*	*
57	憂名たちゆめ	*	*
58	若松	*	*
59	親の留主てやり	*	*
60	自由ならぬていふすに	自由成らんで言すや	自由(じゆ)ならぬていふすも
61	繰返ちまたや	繰帰ち又	*
62	いひくれしやあすか	*	*
63	わぬや中城	*	*
64	若松とやゆる	*	*
65	みやたり事あてと	*	*
66	首里にのほる	*	*
67	廿日夜のくらさ	*	*
68	行先もなひらぬ	行先や迷て	行先(いくさき)もならぬ
69	戻る道なひらぬ	*	*
70	ゆきつまでをもの	*	*
71	たんで御情に	*	*
72	からちたはふれ	*	*
73	女出羽干瀬ふし	*	女 出羽歌、干瀬にゐるとり節、南表の幕より出る
74	里とめはのよて	*	*
75	いやていふめ御宿	*	*
76	冬の夜のよすか	*	*
77	互にかたやへら	*	*
78	若松	*	*
79	廿日夜のくらさ	*	*
80	道迷てをたん	*	*
81	御情の宿に	*	*
82	しはしやすま	*	*
83	女	*	*
84	まれの御行合さらめ	*	*
85	あまくかた時も	*	*
86	おけれ/\里よ	*	*
87	語ひほしやの	*	*
88	若松	*	*
89	けふのはつ御行逢に	*	*
90	語る事なひさめ	*	*
91	女	*	*
92	約速の御行合や	*	*
93	たにす又しちやれ	たんす又しきやる	*
94	袖の振合しと	*	*
95	御縁さらめ	*	*
96	若松	*	*
97	御縁てすしらぬ		*
98	恋の道しらぬ		*
99	しはしまちかねる		*
100	夜明しら雲		*
101	女	*	*
102	深山鶯の	*	*
103	春の花毎に	*	*
104	そゆるよの中の	*	吸る世の中の
105	ならひやしらぬ	*	習(ならひ)やしらぬ
106	若松	*	*
107			
108			

No.	尚家本組踊集	兼島信備所蔵本組踊集	台湾本 琉歌大観
109			
110			
111	しらぬ	*	*
112			
113			
114			
115			
116	女	女	*
117	おとこ生れても	男生れとて	*
118	恋しらぬものや	*	*
119	玉の盃の	*	*
120	そこも見らぬ	*	*
121	若松	*	*
122	男生れても	女生れとて	女生れても
123	義理しらぬものや	*	*
124	おれと世の中の	*	これど世の中の
125	地獄たひもの	*	*
126	干瀬ふし	干瀬節並女言ば	歌 干瀬にゐる鳥節
127	およほらぬ里と	*	*
128	かねてからしらは	*	*
129	のよて悪縁の	何よて悪縁の	*
130	袖に結びやへか	袖に結まびが	袖にむすひやべる
131	若松	*	*
132	悪縁や袖に	*	*
133	むすはハもはからひ	*	*
134	わ身や首里ミやたり	*	*
135	やてといきゆる	*	*
136	干瀬ふし	*	歌 干瀬にゐる鳥節
137	悪多んの結て	*	*
138	はなちはなされめ	*	*
139			
140	ふりすてゝいかは	*	*
141	一道たひもの	*	*
142			第二幕
143	若松	*	若松 (北表の幕前にて案内)
144	され / \ 座主かなし	*	*
145	露の身の命ち	*	*
146	すくてたはふれ	*	*
147	座主	*	座主 (此表の幕より出る)
148	こねや夜ふかさに	*	*
149	童へ声のあすか	*	*
150	いとふしきたひもの	事不思議だいもの	*
151	急ちきかに	*	*
152	若松	*	*
153	一夜かりそめの	*	*
154	宿の女	*	*
155	悪縁のつなの	*	*
156	はなちはなさらぬ	*	*
157	終に一道と	*	*
158	あとから追つけて	*	*
159	露の命ちを	露の身の命	*
160	とらんとよ	*	*
161	行末吉の	*	*
162	此御寺	*	*
163	頼まは終に	頼 (タン) で終に	*
164	我かいのち	*	*
165	頼て御助	*	*
166	わかいのち	*	*
167	座主	*	*
168	あゝ一だひんな事よ	*	*
169	/ \	*	*
170	命もふりすてゝ	命ち振り捨て	命 (いのち) ふりすてゝ
171	恥も振捨て	*	*
172	とまひて来るはかり	尋て来るびかゐ	*
173	たゝやいくまひ	*	*
174	女恋こゝろ	*	*
175	僮相にともおもな	*	*
176	思つもてからや	*	*
177	のちもとよん	*	*
178	かくすかたなひらぬ	*	*
179	むばていやんすれハ	*	むばていやにすれば
180	見ちやるめのいちやさ	*	*
181	ワ肝くれしや	*	*
182	若松	*	*



執心鐘入校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	兼島信備所蔵本組踊集	台湾本 琉歌大観
183	行先もなひらぬ	*	*
184	頼てわなひきちやん	頼て我ね言ちやん	*
185	慈悲よわか命ち	是非よ我が命	*
186	すくてたはふれ	*	*
187	座主	*	*
188	いきやしかな童へ	如何しが童び	*
189	花の顔かくち	*	*
190	露の身の命ち	*	*
191	助けほしやの	*	*
192	戻る道なひらぬ	*	*
193	恋のせめかこも	恋のしみかたん	恋のせめかこも
194	あけて開鐘かねの	*	*
195	下にかくさ	*	*
196	たう / \	*	*
197	いやうれ / \	*	*
198		座主	
199	小僧共集め	*	小僧ども集(しゅう)
200	番のしめさしやう	番のしめさしやうり	番(ぼん)のしめさしやう
201			
202	小僧共やう	*	*
203	/ \	*	*
204		小僧三人	小僧(北表の幕より出る)
205		ほう / \	ふう
206	座主	*	*
207	耳の根よあさて	耳の根よ明て	*
208	たによ闇とめれ	*	*
209	花盛り女	*	*
210	人とまひてきゝゆん	*	人とまひてきちん
211	禁止よ此寺や	*	*
212	庵相にともするな	*	*
213	たとひ寺内や	*	*
214	さかひさはもはからひ	*	*
215	此鐘の近く	*	*
216	そさうにするな	*	*
217	/ \	*	*
218	小僧	小僧三人	小僧(年長)
219	おう	*	*
220		兄小僧	
221	やかれよも座主か	*	*
222	かちめたる若衆	*	*
223	留主ならば互に	*	*
224	かたるうれしや	*	*
225	小僧	次小僧	小僧(中年)
226	あたら花盛り	*	*
227	ひちゆひしちならぬ	引きよ引き済まん	*
228	小僧	三男小僧	小僧(年少)
229	御縁つくかたと	*	*
230	句やうつす	*	*
231	小僧	兄小僧	小僧(年長共)
232	いやすひきんな小僧	*	*
233	女道行七尺ふし		女道行歌 七尺ふし 南表の幕より出る
234	露の身はやとて		*
235	自由ならぬよひや		*
236	里とまいて互に		*
237	一道ならに		*
238	小僧	*	小僧(中年)
239	女や法度 / \	あゝ女禁止(はっと) / \	女は法度 / \
240	戻れ / \	*	*
241	七尺ふし	*	歌七尺ぶし
242	禁止のませかきも	*	*
243	ことやれはことい	*	*
244	花につくはへる	*	*
245	きしのなゆめ	*	*
246	小僧	兄小僧	小僧(年長)
247	昔から寺や	*	*
248	女きしさらめ	*	*
249	いきやる事あとて	*	*
250	とまひてきちやか	*	*
251	女	*	*
252	七ツ重へたる	*	*
253	としころの里に	*	*
254	おもことのアてと	思事の有とて	*
255	とまひてきちやる	*	とまいてきちやる
256	小僧	兄小僧	小僧(年長)

No.	尚家本組踊集	兼島信備所蔵本組踊集	台湾本 琉歌大観
257	尋ねゆる里や	*	*
258	夢やちやうもむたぬ	*	*
259	急ち立戻れ	*	*
260	女わらへ	*	*
261	女	*	*
262	蟻虫の類ひ	蟻虫な類ひ	*
263	情ある浮世	*	*
264	慈悲も定めらぬ	*	*
265	人のらめしや	*	*
266	小僧	兄小僧	小僧 (年長)
267	うらめゆすきは	*	*
268	理りとやゆる	*	*
269	しらぬふりしちをて	*	*
270	ゆるち見せら	*	*
271	小僧	次小僧	小僧 (中年)
272	あたま丸めても	*	*
273	慈悲しらぬものや	*	*
274	石か朝夕さの	石か麻 (あさ) の	*
275	薪木こゝろ	*	*
276	小僧	兄小僧	小僧 (年長)
277	とう / \ ゆるちみせら	*	*
278	小僧	三男小僧	小僧 (年少)
279	座主のとつけたる	*	*
280	ことや忘れとて	*	*
281	のよて寺内を	何よて寺内よ	*
282	籠 (相) にいれる	*	*
283	小僧	兄小僧	小僧 (年長)
284	いや推参な小僧	*	*
285	小僧	三男小僧	小僧 (年少)
286	あたままるめても	*	*
287	女花盛	*	*
288	匂にひかされて	*	*
289	をかしや / \	可笑 (ふかしや) / \	*
290	小僧	兄小僧	小僧 (中年)
291	いや推参な小僧	*	*
292	小僧	小僧兩人	小僧 (年長)
293	春のはな桜	*	*
294	色清さあすか	*	*
295	又も匂まさる	*	*
296	梅とやゆる	*	*
297	散山節	*	歌さん山ぶし
298	此世をて里や	*	*
299	御縁なひぬさらめ	*	*
300	ひちゆひこかれとて	引よ行くかどて	*
301	死ぬか心気	*	しぬる心気 (しんき)
302	座主	*	*
303	はあ	あゝ	*
304	たひんな事があつた	*	*
305	はやうむちれ / \	早く出り / \	早くにげれ / \
306	たう / \	*	*
307	女	*	*
308	今にふしんな	*	なまにふしんな
309	あの鐘よ	彼の鐘	*
310	但此時女鐘に入鬼に成	*	但此時女鐘に入り鬼と成る
311	座主	*	*
312	是や	*	*
313	いきやしちやる事か	*	*
314	/ \	*	*
315	小僧	*	小僧 (年長)
316	おにの / \	*	*
317	座主	*	*
318	ほれたか / \	*	*
319	小僧	*	小僧 (中年)
320	鐘の / \	*	*
321	座主	*	*
322	ほれたか / \	*	*
323	小僧	*	小僧 (年長)
324	きしもきしならぬ	*	*
325	留もとめならぬ	*	*
326	若衆尋ねたる	*	*
327	女わらへ	*	*
328	寺内をさかひち	*	寺の内をさがち
329	逢ぬうらめしやに	*	*
330	鬼になて鐘に	鬼に成い鐘に	*

執心鐘入校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	兼島信備所蔵本組踊集	台湾本 琉歌大観
331	まとひつきやる	まとつ来る	まどひきちやる
332	座主	*	*
333	おれよ / \	*	*
334	とつけたることや	*	*
335	俺相にしちをとて	*	*
336	かにある事しちやち	斯(か)にやる事しきよて	*
337	いきやかしゆゝら	*	*
338	たう / \	*	*
339	今からや	*	*
340	いきやいちも	言ん益	いきやもいちも
341	ならぬこと	無らん	*
342	法力を尽ち	*	*
343	祈のけらふよ	祈り除けら	*
344	たう / \		*
345			
346	小僧	小僧三人	
347	おう	うを	
348			座主
349	東方に降三世明王。	東方に御座んす明王	*
350	南方軍(口毛)利夜叉明王。	*	*
351	西方大威徳明王。	西方大徳明王	*
352	北方金剛夜叉明王。	北方こんぜふやじや明王	*
353	中央大聖不動明王。 / \。 / \	中央大徳不動明王 / \	*
354	なまくさまんたはさらた。		なまゝさまんたはさらた
355	せんたまかるしやた。		*
356	そはたやうんたうたかんまあ。		すはだすはだやうんだらとかんまん
357	ちやうかせつしやとく大ちゑ。		ちやうかせつとくやとく大ちゑ
358	かじしつしや即身成佛		ちかしんくや即身成佛
359			(附いのりに取付候時笛大鼓小鼓にて拍子有る橋掛にをさまる)
360			
361		執心鐘入終	
362			
363			
364			
365			
366			

執心鐘入校合資料 (3)

No.	尚家本組踊集	比嘉信三所蔵本組踊集	琉球新報 (大正十四年) 宮城真治資料
1	執心鐘入	執心鐘入	執心鐘入 (一名中城若松)
2			
3			本組踊は斯道の開祖玉城 親方朝薫作として所謂五段の一にて謡曲道成寺よりほん案構想せしものと称せらるる原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使かん林院修選正使林鴻年及びかん林院編修副使高人鑑を首里城に招請せし時演ぜしものによる (尚育王時代) 而して文句は現代のものとは少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならんと
4			
5			登場人物と当時の演技者
6			中城若松 (名嘉地眞蒲戸) あるじ女 (末吉)
7			座主 (濱元里之主宇親雲上) 小僧 (東風平里之子)
8			小僧 (宜野山里之子) 小僧 (武村子)
9			鬼 (宮里筑登之) (附り当時は女の変して鬼と化するときよりは別人に演ぜしめたりと爰に宮里筑登之とあるものは是なり此役は武芸の達人を選んで出演せしめたと)
10			演技者の服装其他
11	若松半向頭巾天鷲織花金銀水引はさら花笠板ノ縮緬振袖袷衣裳脚胖足袋杖		若松 髪半向頭巾 (かみはんむけづきん)、金花並金銀水引差す (きんくわきん/、みづひきさ)、編笠かづき板じめ縮緬振袖袷衣裳 (あみがさ いたちりめんふりそであはせいせう)、裏緋紗綾 (うらひさや)、脚絆紗綾足袋 (きやはんさやたび)、杖を持つ (つえも)
12	女かつら巾琉縫薄衣裳足袋蠟燭笠		女 かづら髪にかづら結び、琉縫薄衣裳 (りゅうぬいうすいしやう) 裳さや (ひさや)、足袋 (たび)、蠟燭持、中入より笠持出づる (ろうそく、なかいり かさもちい)
13	座主髪黒縹もつ紫縮緬衣金襴けさ水晶の珠数末広足袋		座主 髪黒縹もつ (かみくろじゆし)、紫縮緬衣裳、金らんげさ (むらさきちりめんいしやう、きんらん)、水晶■數 (すいせうせず)、末広持 (すえひろもつ)、足袋 (たび)
14	小僧三人黒縹もつ玉色さや衣足袋		小僧三人 髪黒縹もつ (かみくろじゆし)、玉色さや衣 (たまいろ い)、ずゆ數持、足袋 (たび)
15	鬼女盤若面鉄丁白羽二重銀之鱗形上着鬼面琉縫薄衣裳足袋		鬼 女の時 (をんな とき)、般若面 (はんにやめん)、鉄丁 (てつてう)、下着白羽二重銀之鱗形 (したぎしろはぶたへぎん うろこがた)、上着琉縫薄衣裳 (うはぎりうぬひうすいしやう) ひ紗綾 (さや)、足袋 (たび)、
16			
17			(附り淫女容貌相変じ笠なげ捨て鐘に入り替り段々の業有之)
18	中城若松出羽金武ぶし	金武ぶし	第一幕「若松出羽」歌 (金武ぶし) (附り橋掛より出場す)
19	照てたや西に	*	*
20	ぬのたけになても	*	*
21	首里みやたりやてと	*	*
22	ひちゆひ登る	一人行ちゆる	一人いきゆる
23		若松	「若松ことば」
24	ワ身や中城	*	*
25	若松とやゆる	*	*
26	ミやたりことあてと	*	*
27	首里にのほる	*	*
28	廿日夜のくらさ	*	*
29	行先や迷て	*	*
30	ことに山路の	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三所蔵本組踊集	琉球新報(大正十四年)宮城真治資料
31	露もしけさ	*	*
32	あの村のはつれ	*	*
33	火の光たよて	*	*
34	立寄ひ今宵	*	*
35	明しほしやの	*	*
36			「若松ことば」
37	此宿の内に	*	*
38	ものしられしやへら	*	*
39	旅に行暮て	*	*
40	行先もなひらぬ	*	*
41	御情に一夜	*	*
42	からち給ふれ	*	*
43	女	*	「女ことば」
44	たそよ夜深さに	*	たるよ夜深くに
45	宿からんていふすや	*	*
46	親の留主やれは	*	*
47	自由もならぬ	*	*
48	若松	*	「若松ことば」
49	露たひんす花に	*	*
50	宿かゆる浮世	*	*
51	慈悲よ御情に	*	*
52	からちたはふれ	*	*
53	女	*	「女ことば」
54	親の留主なかに	*	*
55	宿からちおきよて	*	*
56	互所しれて我身や	*	*
57	憂名たちゆめ	*	*
58	若松	*	「若松ことば」
59	親の留主てやり	*	*
60	自由ならぬていふすに	*	*
61	繰返ちまたや	*	*
62	いひくれしやあすか	*	*
63	わぬや中城	*	*
64	若松とやゆる	*	*
65	みやたり事あてと	*	*
66	首里にのほる	*	*
67	廿日夜のくらさ	*	*
68	行先もなひらぬ	行先や迷て	*
69	戻る道なひらぬ	*	*
70	ゆきつまでをもの	*	*
71	たんで御情に	*	*
72	からちたはふれ	*	*
73	女出羽干瀬ふし	干瀬節	「女出羽」歌(干瀬ぶし)(附り南表幕より出場す)
74	里とめはのよて	*	*
75	いやていふめ御宿	*	*
76	冬の夜のよすか	*	*
77	互にかたやへら	*	*
78	若松	*	「若松ことば」
79	廿日夜のくらさ	*	*
80	道迷てをたん	道迷て居たす	*
81	御情の宿に	*	*
82	しはしやすま	*	*
83	女	*	「女ことば」
84	まれの御行合さらめ	*	*
85	あまくかた時も	*	*
86	おけれ/ \ 里よ	*	*
87	語ひほしやの	*	*
88	若松	*	「若松ことば」
89	けふのはつ御行逢に	*	*
90	語る事なひさめ	*	*
91	女	*	「女ことば」
92	約速の御行合や	*	*
93	たにす又しちやれ	*	*
94	袖の振合しと	*	*
95	御縁さらめ	*	*
96	若松	*	「若松ことば」
97	御縁てすしらぬ	*	*
98	恋の道しらぬ	*	*
99	しはしまちかねる	頓て待兼る	*
100	夜明しら雲	*	*
101	女	*	「女ことば」
102	深山鶯の	*	*
103	春の花毎に	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三所蔵本組踊集	琉球新報 (大正十四年) 宮城真治資料
104	そゆるよの中の	すゆる世の中の	吸る世の中の
105	ならひやしらね	*	*
106	若松	*	「若松ことば」
107			
108			
109			
110			
111	しらぬ	*	*
112			
113			
114			
115			
116	女	*	「女ことば」
117	おとこ生れても	男生れとて	*
118	恋しらぬものや	*	*
119	玉の盃の	*	*
120	そこも見らぬ	*	*
121	若松	*	「若松ことば」
122	男生れても	男 (「男」見せ消ち) 女生れとて	女生れても
123	義理しらぬものや	*	*
124	おれと世の中の	是ど世の中の	これど世の中の
125	地獄たひもの	*	*
126	干瀬ふし	*	歌 (干瀬ぶし)
127	およはらぬ里と	*	*
128	かねてからしらは	*	*
129	のよて悪縁の	*	*
130	袖に結びやへか	*	袖に結びやへる
131	若松	*	「若松ことば」
132	悪縁や袖に	*	*
133	むすはハもはからひ	*	*
134	わ身や首里ミやたり	*	*
135	やてといきゆる	*	*
136	干瀬ふし	干瀬節 下句より述懐となる	歌 (干瀬ぶし)
137	悪ゑんの結て	*	*
138	はなちはなされめ	放ち放さらぬ	放ちはなさらぬ
139			歌 (述懐ぶし) (附り干瀬節の上句終ると同時に初める)
140	ふりすてゝいかは	*	*
141	一道たひもの	*	*
142			第二幕
143	若松	*	「若松ことば」 (此時北表の幕前にて案)
144	され / \ 座主かなし	*	*
145	露の身の命ち	*	*
146	すくてたはふれ	*	*
147	座主	*	「座主ことば」 (座主出場する同時に)
148	こねや夜ふかさに	あゝ こにや夜深かさに	こねや夜ふかくに
149	童へ声のあすか	童声のあすや	*
150	いとふしきたひもの	*	*
151	急ちきかに	出て見だに	*
152	若松	*	「若松ことば」
153	一夜かりそめの	*	*
154	宿の女	*	*
155	悪縁のつなの	*	*
156	はなちはなさらぬ	*	*
157	終に一道と	*	*
158	あとから追つけて	*	後から追いつけ
159	露の命ちを	*	*
160	とらんとよ	*	*
161	行末吉の	*	*
162	此御寺	*	*
163	頼まは終に	*	頼で終に
164	我かいのち	*	*
165	頼て御助	*	*
166	わかいのち	*	*
167	座主	*	「座主ことば」
168	あゝ一だひんな事よ	あゝ一大事な事よ	*
169	/ \	*	*
170	命もふりすてゝ	命振り捨てゝ	命ちふりすてゝ
171	恥も振捨て	*	*
172	とまひて来るはかり	*	*
173	たゝやいくまひ	*	*
174	女恋こゝろ	*	*
175	俺相にともおもな	俺相にどもするな	*
176	思つもてからや	*	*

執心鐘入校合資料(3)

No.	尚家本組踊集	比嘉信三所蔵本組踊集	琉球新報(大正十四年)宮城真治資料
177	のちもとよん	*	*
178	かくすかたなひらぬ	*	*
179	むはていやんすれハ	*	むはていやにすれは
180	見ちやるめのいちやさ	*	*
181	ワ肝くれしや	*	*
182	若松	*	「若松ことば」
183	行先もなひらぬ	*	*
184	頼てわなひきちやん	*	*
185	慈悲よワか命ち	*	*
186	すくてたはふれ	*	*
187	座主	*	「座主ことば」
188	いきやしかな童へ	*	*
189	花の顔かくち	*	*
190	露の身の命ち	*	*
191	助けほしやの	救てとらさ	*
192	戻る道なひらぬ	*	*
193	恋のせめかこも	*	*
194	あけて開鐘かねの	*	*
195	下にかくさ	*	*
196	たう/\	*	*
197	いやうれ/\	*	*
198			
199	小僧共集め	*	小僧とも集
200	番のしめさしやう	*	番のしめさしやう
201			「座主ことば」
202	小僧共やう	*	*
203	/\	*	*
204		小僧三人	「小僧三人ことば」(北表の幕より登場)
205		ふう	ふう
206	座主	*	*
207	耳の根よあさて		*
208	たによ聞とめれ		*
209	花盛り女	*	*
210	人とまひてきゆん	*	人とまいてきゆん
211	禁止よ此寺や	*	*
212	庵相にともするな	*	*
213	たとひ寺内や	*	*
214	さかひさはもはからひ	*	*
215	此鐘の近く	*	*
216	そさうにするな	*	*
217	/\	*	*
218	小僧		「年長小僧」
219	おう		*
220		小僧	
221	やかれよも座主か	やからよむ座主の	*
222	かちめたる若衆	*	*
223	留主ならば互に	*	*
224	かたるうれしや	*	*
225	小僧	*	「中年小僧」
226	あたら花盛り	*	*
227	ひちゆひしちならぬ	*	*
228	小僧	*	「年少小僧」
229	御縁つくかたと	*	*
230	匂やうつす	*	*
231	小僧	*	「年長小僧」
232	いやすひさんな小僧	*	*
233	女道行七尺ふし	七尺ぶし	「女道行」歌(七尺節)(附南表幕より出場)
234	露の身はやとて	*	*
235	自由ならぬよひや	自由ならぬ故や	*
236	里とまいて互に	里とめて我身や	*
237	一道ならに	*	*
238	小僧	*	「中年小僧」
239	女や法度/\	*	女は法度はつと
240	戻れ/\	*	*
241	七尺ふし	*	歌(七尺節)
242	禁止のませかきも	*	*
243	ことやれはことい	*	*
244	花につくはへる	*	*
245	きしのなゆめ	*	*
246	小僧	*	「年長小僧」
247	昔から寺や	*	*
248	女きしさらめ	*	*
249	いきやる事あとて	*	*

執心鐘入校合資料(3)

No.	尚家本組踊集	比嘉信三所蔵本組踊集	琉球新報(大正十四年)宮城真治資料
250	とまひてきちやか	まどひ着ちやが	*
251	女	*	「女ことば」
252	七ツ重へたる	*	*
253	とところの里に	*	*
254	おもことのあてと	*	*
255	とまひてきちやる	尋めて着ちやん	とまいてきちやる
256	小僧	*	「年長小僧」
257	尋ねゆる里や	*	*
258	夢やちやうもむたぬ	*	*
259	急ち立戻れ	*	*
260	女わらへ	*	*
261	女	*	「女ことば」
262	蟻虫の類ひ	*	*
263	情ある浮世	*	*
264	慈悲も定めらぬ	*	せひも定めらぬ
265	人のらめしや	*	*
266	小僧	*	「年長小僧」
267	うらめゆすきは	*	*
268	理りとやゆる	*	*
269	しらぬふりしちをて	*	*
270	ゆるち見せら	免ち見せれ	*
271	小僧	*	「年長小僧」
272	あたま丸めても	*	*
273	慈悲しらぬものや	恋知らぬ者や	*
274	石か朝夕さの	*	*
275	薪木こゝろ	*	*
276	小僧		「年長小僧」
277	とう / \ ゆるちみせら		*
278	小僧	*	「年少小僧」
279	座主のとつけたる	*	*
280	ことや忘れとて	*	*
281	のよて寺内を	のよて寺内よ	*
282	籠(相)にいれる	籠相[欠]	*
283	小僧	*	「年長小僧」
284	いや推参な小僧	*	*
285	小僧	*	「年少小僧」
286	あたままるめても	*	*
287	女花盛	*	*
288	匂にひかされて	*	*
289	をかしや / \	*	*
290	小僧	*	「中年小僧」
291	いや推参な小僧	*	*
292	小僧	*	「年長小僧」
293	春のはな桜	*	*
294	色清さあすか	*	*
295	又も匂まさる	*	*
296	梅とやゆる	*	*
297	散山節	散山	歌(さん山ぶし)
298	此世をて里や	*	*
299	御縁なひぬさらめ	*	*
300	ひちゆひこかれとて	振り捨てゝ行かば	*
301	死ぬか心気	一道でもの	死にゆる心気
302	座主	*	「座主」
303	はあ	あゝ	*
304	たひんな事があつた	大事な事があつた	*
305	はやうむちれ / \	早ふ出れ / \	早くにけれにけれ
306	たう / \		*
307	女	*	「女ことば」
308	今にふしんな	今に不審の	なまにふしんな
309	あの鐘よ	*	*
310	但此時女鐘に入鬼に成	但し此時女鬼になり鐘に入る	*
311	座主	*	「座主」
312	是や	あゝ	*
313	いきやしちやる事か	*	*
314	/ \	*	*
315	小僧	*	「年長小僧」
316	おにの / \	*	*
317	座主	*	「座主」
318	ほれたか / \	*	*
319	小僧	*	「中年小僧」
320	鐘の / \	*	*
321	座主	*	「座主」
322	ほれたか / \	ふりたか / \	*
323	小僧	*	「年長小僧」



No.	尚家本組踊集	比嘉信三所蔵本組踊集	琉球新報(大正十四年)宮城真治資料
324	きしもきしならぬ	*	*
325	留もとめならぬ	*	*
326	若衆尋ねたる	*	*
327	女わらへ	*	*
328	寺内をさかひち	寺内よとめて	寺内をさかち
329	逢ぬうらめしやに	*	*
330	鬼になて鐘に	*	*
331	まとひつきやる	まどひ着ちやん	まとひきちやる
332	座主	*	「座主」
333	おれよ / \	*	*
334	とつけたることや	*	*
335	儺相にしちをとて	*	*
336	かにある事しちやち	*	*
337	いきやかしゆゝら	*	*
338	たう / \	*	*
339	今からや	*	*
340	いきやいちも	*	いきやもいちも
341	ならぬこと	*	*
342	法力を尽ち	*	*
343	祈のけらふよ	祈りのけろう	*
344	たう / \	*	たうたう*
345			
346	小僧		
347	おう		
348			「座主」
349	東方に降三世明王。	東方にござんし明王	*
350	南方軍(口毛)利夜叉明王。	*	南方にこんたり夜叉明王
351	西方大威徳明王。	*	西方大徳明王
352	北方金剛夜叉明王。	*	*
353	中央大聖不動明王。 / \。 / \	中央大聖不動明王不動明王	*
354	なまくさまんたはざらた。	なうまくさんまんだばらだ	なまゝさまんたばざらた
355	せんたまかるしやた。	ちせんたまかるしやぐ	*
356	そはたやうんたうたかんまあ。	しおたやうんたやたかんまん	すはだすはだやうんだらとかんまん
357	ちやうかせつしやとく大ちゑ。	*	ちやう、かせつくやとく大ちゑ
358	かじしつしや即身成佛	ちがしんしや即身成仏	ちかしんしや即身成仏
359			(附祈に取付候時笛大鼓にて拍子有る橋掛にをさまる)
360			
361			(をはり)
362			
363			
364			
365			
366			

執心鐘入校合資料 (4)

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	宮良殿内本
1	執心鐘入	執心鐘入	仲城若松
2		六番 此時組躍札懸る	
3			
4		執心鐘入 拍子木打候得ば歌躍出る	
5			
6		中城若松 名嘉地眞蒲戸 あるじ女 末	
7		座主 濱元里之主親雲上 小僧 東風平里之子	
8		同 宜野山里之子 同 武村子	
9		鬼 宮里筑登之	
10			
11	若松半向頭巾天鷲織花金銀水引はさら花笠板メ縮緬振袖袷衣裳脚胖足袋杖	着付、若松、髪半向頭巾、金花並金銀水引差、あみ笠かつき、板メ縮緬振袖袷衣裳、裏緋さや脚絆、緋さや足袋、杖持。	
12	女かつら巾琉縫薄衣裳足袋蠟燭笠	女、かつら髪にかつら巾、琉縫薄衣裳、緋さや足袋、蠟燭持、中入より笠持出る	
13	座主髪黒縹子もつ紫縮緬衣金襴けさ水晶の珠数末広足袋	座主、髪黒縹子もつ、紫縮緬衣、金襴けさ、水晶珠数、末廣持、足袋、	
14	小僧三人黒縹子もつ玉色さや衣足袋	小僧三人、髪黒縹子もつ、玉色さや衣、三人珠数持、足袋。	
15	鬼女盤若面鉄丁白羽二重銀之鱗形上着鬼面琉縫薄衣裳足袋	鬼女の時、般若面鉄丁下着白羽二重銀之鱗形上着、琉縫薄衣裳、緋さや足袋。	
16		舞臺天井江走幕仕合、かね懸合せ之砌、幕釣り下げ鐘懸け仕舞次第早速引揚げ候也。	
17			
18	中城若松出羽金武ふし	若松道行歌、金武ぶし、橋掛より出る	
19	照てたや西に	*	*
20	ぬのたけになても	*	*
21	首里みやたりやてと	*	*
22	ひちゆひ登る	ひちより行 (い) きゆる	一人行ル
23		若松詞	
24	ワ身や中城	*	*
25	若松とやゆる	*	*
26	ミやたりことあてと	*	メヤデリ毎ヤテド
27	首里にのほる	*	*
28	廿日夜のくらさ	*	*
29	行先や迷て	*	*
30	ことに山路の	*	殊ニ山路ヤ
31	露もしけさ	*	*
32	あの村のはつれ	*	アノ村ノハツシ
33	火の光たよて	*	*
34	立寄ひ今宵	*	*
35	明しほしやの	*	*
36			
37	此宿の内に	*	*
38	ものしられしやへら	*	*
39	旅に行暮て	*	旅ニ行暗テ
40	行先もなひらぬ	*	行先ヤ見ラン
41	御情に一夜	*	*
42	からち給ふれ	*	*
43	女	女詞、南表の幕内にて	
44	たそよ夜深さに	たるゆ夜深 (よぶか) さに	*
45	宿からんていふすや	*	*
46	親の留主やれは	*	*
47	自由もならぬ	*	*
48	若松	若松詞	
49	露たひんす花に	*	*
50	宿かゆる浮世	*	*
51	慈悲よ御情に	*	頼テ御情ニ
52	からちたはふれ	*	*
53	女	女詞	
54	親の留主なかに	*	親ノ留主ナカヒ
55	宿からちおきよて	*	*
56	互所しれて我身や	*	*
57	憂名たちゆめ	*	*
58	若松	若松詞	
59	親の留主てやり	*	*
60	自由ならぬていふすに	*	自由ナランテ云スヤ
61	繰返ちまたや	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	宮良殿内本
62	いひくれしやあすか	*	*
63	わぬや中城	*	*
64	若松とやゆる	*	ドヤヨル
65	みやたり事あてと	*	メヤデリ 毎アテル
66	首里にのほる	*	*
67	廿日夜のくらさ	*	*
68	行先もなひらぬ	行先 (いくさき) も見 (み) らぬ、	行先ヤ見ラン
69	戻る道なひらぬ	*	*
70	ゆきつまでをもの	*	*
71	たんで御情に	*	*
72	からちたはふれ	*	*
73	女出羽干瀬ふし	女出羽歌、干瀬に居るとりぶし、南表の幕より出る。	
74	里とめはのよて	*	*
75	いやていふめ御宿	*	*
76	冬の夜のよすか	*	冬ノ夜ドヨスガ
77	互にかたやへら	*	互ニ語ラ
78	若松	若松詞	
79	廿日夜のくらさ	*	*
80	道迷てをたん	*	*
81	御情の宿に	*	*
82	しはしやすま	*	*
83	女	女詞	
84	まれの御行合さらめ	*	稀ノ御行合定ミ
85	あまくかた時も	*	*
86	おけれ / \ 里よ	*	*
87	語ひほしやの	*	*
88	若松	若松詞	
89	けふのはつ御行逢に	*	*
90	語る事なひさめ	*	*
91	女	女詞	
92	約連の御行合や	*	*
93	たにす又しちやれ	*	ダニス又シチヤガ
94	袖の振合しと	*	*
95	御縁さらめ	*	御縁定ミ
96	若松	若松詞	
97	御縁てすしらぬ	*	*
98	恋の道しらぬ	*	*
99	しはしまちかねる	*	*
100	夜明しら雲	*	夜明白雲ノ
101	女	女詞	
102	深山鶯の	*	*
103	春の花毎に	*	*
104	そゆるよの中の	吸 (す) ゆる世 (よ) の中 (なか) の	[欠]ル世ノ中ノ
105	ならひやしらぬ	*	*
106	若松	若松詞	
107			
108			
109			
110			
111	しらぬ	*	*
112			一 浮世恋テスヤ
113			聞ミテン知ン
114			タンテ此事ヤ
115			ヨチ賜リ
116	女	女詞	
117	おとこ生れても	*	一 男ク生トテ
118	恋しらぬものや	*	*
119	玉の盃の	*	*
120	そこも見らぬ	*	*
121	若松	若松詞	
122	男生れても	女生 (をんなうま) れても	一 男ク生トテ
123	義理しらぬものや	*	*
124	おれと世の中の	これど世 (よ) の中 (なか) の	*
125	地獄たひもの	*	地国サラミ
126	干瀬ふし	歌 干瀬に居るとりぶし	
127	およはらぬ里と	*	*
128	かねてからしらは	*	兼テドンシラバ
129	のよて悪縁の	*	ノヨ悪縁ノ
130	袖に結ひやへか	*	袖ニ結フ
131	若松	若松詞	
132	悪縁や袖に	*	*
133	むすははもはからひ	*	*
134	わ身や首里ミやたり	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	宮良殿内本
135	やてといきゆる	*	アテド行ル
136	干瀬ふし	歌 干瀬に居るとりぶし	
137	悪ゑんの結て	*	*
138	はなちはなされめ	*	*
139			
140	ふりすてゝいかは	*	*
141	一道たひもの	*	*
142			
143	若松	若松詞 北表の幕前にて案内	
144	され / \ 座主かなし	*	*
145	露の身の命ち	*	露ノ身命
146	すくてたはふれ	*	*
147	座主	座主詞 此表の幕より出る	
148	こねや夜ふかさに	*	ニニヤ夜深ニ
149	童へ声のあすか	*	童声ノアスヤ
150	いとふしきたひもの	*	*
151	急ちきかに	*	*
152	若松	若松詞	
153	一夜かりそめの	*	**
154	宿の女	*	**
155	悪縁のつなの	*	*
156	はなちはなさらぬ	*	*
157	終に一道と	*	*
158	あとから追つけて	後(あと)から追付(おつつ)き、	跡トカラ追テ
159	露の命ちを	*	露ノ身命チ
160	とらんとよ	*	*
161	行末吉の	*	行末添吉ノ
162	此御寺	*	*
163	頼まは終に	*	頼ム終ニ
164	我かいのち	*	*
165	頼て御助	*	*
166	わかいのち	*	*
167	座主	座主詞	
168	あゝ一だひんな事よ	*	一 一大事ナ事ヨ
169	/ \	*	*
170	命もふりすてゝ	命(いのち)ふりすてゝ、	命振捨テ
171	恥も振捨て	*	*
172	とまひて来るはかり	*	*
173	たゝやいくまひ	*	*
174	女恋こゝろ	*	*
175	龜相にともおもな	*	*
176	思つもてからや	思積(おめつも)てからや	*
177	のちもとよん	*	*
178	かくすかたなひらぬ	*	*
179	むはていやんすれハ	むばでいやにすれば、	*
180	見ちやるめのいちやさ	*	*
181	ワ肝くれしや	*	*
182	若松	若松詞	
183	行先もなひらぬ	*	*
184	頼てわなひきちやん	*	*
185	慈悲よワか命ち	*	是非ニ我カ命チ
186	すくてたはふれ	*	*
187	座主	座主詞	
188	いきやしかな童へ	*	*
189	花の顔かくち	*	花ノウモカラノ
190	露の身の命ち	*	*
191	助けほしやの	*	*
192	戻る道なひらぬ	*	戻ス道苗ラン
193	恋のせめかこも	*	*
194	あけて開鐘かねの	*	アケテ開鐘ノ
195	下にかくさ	*	*
196	たう / \	*	*
197	いやうれ / \	*	*
198			
199	小僧共集め	*	*
200	番のしめさしやう	*	番テシミサシヤウ
201			
202	小僧共やう	*	*
203	/ \	*	*
204		小僧詞 此表の幕より出る	
205		ほう。	一 フラ
206	座主	座主詞	
207	耳の根よあさて	*	一 耳ノ根ヲ明テ
208	たによ聞とめれ	*	*

執心鐘入校合資料(4)

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	宮良殿内本
209	花盛り女	*	女花サカリ
210	人とまひてきゝゆん	人(ひと)とまいてきちも、	人トマヒテクラバ
211	禁止よ此寺や	*	禁止下此御寺
212	庵相にともするな	*	*
213	たとひ寺内や	*	*
214	さかひさはもはからひ	*	*
215	此鐘の近く	*	*
216	そさうにするな	*	*
217	/ \	*	*
218	小僧	小僧共詞	
219	おう	*	
220		小僧(一)詞	
221	やかれよも座主か	*	一 族ラモノ座主ガ
222	かちめたる若衆	*	*
223	留主ならば互に	*	*
224	かたるうれしや	*	*
225	小僧	小僧(二)詞	
226	あたら花盛り	*	*
227	ひちゆひしちならぬ	*	*
228	小僧	小僧(三)詞	
229	御縁つくかたと	*	*
230	句やうつす	*	句ヤ移ル
231	小僧	小僧(一)詞	
232	いやすひさんな小僧	*	*
233	女道行七尺ふし	女道行 七尺ぶし 南表の幕より出る	
234	露の身はやとて	*	*
235	自由ならぬよひや	*	*
236	里とまいて互に	*	*
237	一道ならに	*	一道ナラナ
238	小僧	小僧(二)詞	
239	女や法度 / \	女(をんな)は法度(はつ「と」) /	一 ハア女ハ法度
240	戻れ / \	*	*
241	七尺ふし	歌 七尺ぶし	
242	禁止のませかきも	*	一 禁止ノマシカキヤ
243	ことやれはことい	*	*
244	花につくはへる	*	*
245	さしのなゆめ	*	*
246	小僧	小僧(一)詞	
247	昔から寺や	*	*
248	女きしさらめ	*	*
249	いきやる事あとて	*	*
250	とまひてきちやか	*	*
251	女	女詞	
252	七ツ重へたる	*	*
253	としころの里に	*	*
254	おもことのあてと	*	*
255	とまひてきちやる	*	*
256	小僧	小僧(一)詞	
257	尋ねゆる里や	*	*
258	夢やちやうもむたぬ	*	*
259	急ち立戻れ	*	*
260	女わらへ	*	花ノ童部
261	女	女詞	
262	蟻虫の類ひ	*	蟻虫ノ数ン
263	情ある浮世	*	*
264	慈悲も定めらぬ	是非(ぜひ)も定(さだ)めらぬ	是非ヨ定ラン
265	人のらめしや	*	*
266	小僧	小僧(一)詞	
267	うらめゆすきけは	*	
268	理りとやゆる	*	
269	しらぬふりしちをて	*	
270	ゆるち見せら	*	
271	小僧	小僧(二)詞	
272	あたま丸めても	*	*
273	慈悲しらぬものや	*	*
274	石か朝夕さの	*	*
275	薪木こゝろ	*	*
276	小僧		
277	どう / \ ゆるちみせら		
278	小僧	小僧(三)詞	
279	座主のとつけたる	*	*
280	ことや忘れとて	*	*
281	のよて寺内を	*	ノヨデ寺内ニ
282	庵(相)にいれる	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	宮良殿内本
283	小僧	小僧(一)詞	
284	いや推参な小僧	*	*
285	小僧	小僧(三)詞	
286	あたままるめても	*	*
287	女花盛	*	*
288	匂にひかされて	*	匂ニ引レル
289	をかしや/\	*	*
290	小僧	小僧(二)詞	
291	いや推参な小僧	いや、推参な小僧(こぞう)めが。	*
292	小僧	小僧(一)詞	
293	春のはな桜	*	一 春ノ花ザカリ
294	色清さあすか	*	色清サアテド
295	又も匂まさる	*	又ン匂ニ増ル
296	梅とやゆる	*	*
297	散山節	歌 さん山ぶし	
298	此世をて里や	*	此世ヲテ里ト
299	御縁なひぬさらめ	*	*
300	ひちゆひこかれとて	*	一人焦リテ
301	死ぬか心気	*	*
302	座主	座主詞	
303	はあ	*	
304	たひんな事があつた	*	
305	はやうむちれ/\	早(はや)くにげれ/\。	
306	たう/\	*	
307	女	女詞	
308	今にふしんな	*	一 今ニシヂノアル
309	あの鐘よ	あの鐘。	鐘ヤ
310	但此時女鐘に入鬼に成	*	
311	座主	座主詞	
312	是や	*	*
313	いきやしちやる事か	*	*
314	/\	*	*
315	小僧	小僧(一)	
316	おにの/\	*	*
317	座主	座主詞	
318	ほれたか/\	ほれたか。	*
319	小僧	小僧(二)詞	
320	鐘の/\	*	*
321	座主	座主詞	
322	ほれたか/\	*	*
323	小僧	小僧(一)詞	
324	きしもきしならぬ	*	一 禁止ン聞チナラン
325	留もとめならぬ	*	*
326	若衆尋ねたる	*	*
327	女わらへ	*	*
328	寺内をさかひち	寺(てら)の内(うち)を探(さが)	*
329	逢ぬうらめしやに	*	*
330	鬼になて鐘に	*	*
331	まとひつきやる	*	*
332	座主	座主詞	
333	おれよ/\	*	*
334	とつけたることや	*	*
335	儼相にしちをとて	*	*
336	かにある事しちやち	*	*
337	いきやかしゆゝら	*	*
338	たう/\	*	*
339	今からや	*	*
340	いきやいちも	*	*
341	ならぬこと	*	ナラン
342	法力を尽ち	*	法リツヲツクチ
343	祈のけらふよ	*	イノリドケトウ
344	たう/\	*	*
345			
346	小僧	小僧共詞	
347	おう	*	
348			
349	東方に降三世明王。	*	
350	南方軍(口毛)利夜叉明王。	*	一 南方ニ願ダリヤスミウヲ
351	西方大威徳明王。	*	キヨ王ニ願ダリ徳ミウヲ
352	北方金剛夜叉明王。	*	西方ニ東方ハ梁ミウヲ
353	中央天聖不動明王。/\。/\	*	/\/\
354	なまくさまんたはさらた。	*	
355	せんたまかるしやた。	旋多摩訶檀遮那(せんたまかるしや	

執心鐘入校合資料(4)

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	宮良殿内本
356	そはたやうんたうたかんまあ。	娑婆多耶咩多羅叱干(牟+含)(そばたやうんたらたかんまん)、	
357	ちやうかせつしやとく大ちゑ。	*	
358	かじしつしや即身成佛	知我身者即身成仏(ちがしんしやそくしんじやうぶつ)。	
359		附 いのりに取付候時、笛太鼓小鼓にて拍子有る。橋掛にをさまる。	
360			一 附 三男小増ニサソへ入
361			仲城若松寫完
362			
363			
364			
365			
366			仲地小樽金物也

執心鐘入校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵組踊集
1	執心鐘入	執心鐘入
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11	若松半向頭巾天鷲織花金銀水引はさら花 笠板メ縮緬振袖袷衣裳脚胖足袋杖	
12	女かつら巾琉縫薄衣裳足袋蠟燭笠	
13	座主髪黒緋子もつ紫縮緬衣金襴けさ水晶 の珠数末広足袋	
14	小僧三人黒緋子もつ玉色さや衣足袋	
15	鬼女盤若面鉄丁白羽二重銀之鱗形上着鬼 面琉縫薄衣裳足袋	
16		
17		
18	中城若松出羽金武ふし	歌恩納ふし
19	照てたや西に	*
20	ぬのたけになても	*
21	首里みやたりやと	*
22	ひちゆひ登る	ひちゆい行きゆる
23		若松言
24	ワ身や中城	*
25	若松とやゆる	*
26	みやたりことあてと	*
27	首里にのほる	*
28	廿日夜のくらさ	*
29	行先や迷て	*
30	ことに山路の	*
31	露もしけさ	*
32	あの村のはつれ	*
33	火の光たよて	*
34	立寄ひ今宵	*
35	明しほしやの	*
36		
37	此宿の内に	*
38	ものしられしやへら	*
39	旅に行暮て	*
40	行先もなひらぬ	*
41	御情に一夜	*
42	からち給ふれ	*
43	女	女言
44	たそよ夜深さに	くね夜ふかさに
45	宿からんていふすや	宿ならんていふす
46	親の留主やれは	*
47	自由もならぬ	*
48	若松	若松言
49	露たひんす花に	*
50	宿かゆる浮世	*
51	慈悲よ御情に	*
52	からちたはふれ	*
53	女	女言
54	親の留主なかに	*
55	宿からちおきよて	*
56	与所しれて我身や	*
57	憂名たちゆめ	*
58	若松	若松言
59	親の留主てやり	*
60	自由ならぬていふすに	自由ならぬ言すに
61	繰返ちまたや	*
62	いひくれしやあすか	*
63	わぬや中城	*
64	若松とやゆる	*
65	みやたり事あてと	*
66	首里にのほる	*
67	廿日夜のくらさ	*



執心鐘入校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵組踊集
68	行先もなひらぬ	*
69	戻る道なひらぬ	*
70	ゆきつまでをもの	*
71	たんで御情に	*
72	からちたはふれ	*
73	女出羽干瀬ふし	歌干瀬に居鳥ふし
74	里とめはのよて	*
75	いやていふめ御宿	*
76	冬の夜のよすか	*
77	互にかたやへら	互にかたら
78	若松	若松言
79	廿日夜のくらさ	*
80	道迷てをたん	*
81	御情の宿に	*
82	しはしやすま	*
83	女	女言
84	まれの御行合さらめ	*
85	あまくかた時も	*
86	おけれ / \ 里よ	*
87	語ひほしやの	*
88	若松	若松言
89	けふのはつ御行逢に	*
90	語る事なひさめ	*
91	女	女言
92	約速の御行合や	*
93	たにす又しちやれ	*
94	袖の振合しと	*
95	御縁さらめ	*
96	若松	若松言
97	御縁てすしらぬ	*
98	恋の道しらぬ	*
99	しはしまちかねる	しばし待兼か
100	夜明しら雲	*
101	女	女言
102	深山鶯の	*
103	春の花毎に	*
104	そゆるよの中の	*
105	ならひやしらね	ならひしらね
106	若松	若松言
107		浮世恋てすや
108		聞見ちんしらぬ
109		頼て此事や
110		ゆるちたふうれ
111	しらぬ	
112		
113		
114		
115		
116	女	女言
117	おとこ生れても	*
118	恋しらぬものや	*
119	玉の盃の	*
120	そこも見らぬ	*
121	若松	若松言
122	男生れても	生れても
123	義理しらぬものや	*
124	おれと世の中の	これと世の中の
125	地獄たひもの	*
126	干瀬ふし	歌干瀬に居鳥ふし
127	およはらぬ里と	*
128	かねてからしらは	*
129	のよて悪縁の	*
130	袖に結びやへか	袖にむすて
131	若松	若松言
132	悪縁や袖に	*
133	むすはもはからひ	むすははんはからひ、
134	わ身や首里ミやたり	*
135	やてといきゆる	*
136	干瀬ふし	歌干瀬に居鳥ふし
137	悪ゑんの結て	*
138	はなちはなされめ	*
139		
140	ふりすてゝいかは	*
141	一道たひもの	*

執心鐘入校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵組踊集
142		
143	若松	若松言
144	され / \ 座主かなし	*
145	露の身の命ち	*
146	すくてたはふれ	*
147	座主	座主言
148	こねや夜ふかさに	*
149	童へ声のあすか	*
150	いとふしきたひもの	*
151	急ちきかに	*
152	若松	若松言
153	一夜かりそめの	*
154	宿の女	*
155	悪縁のつなの	*
156	はなちはなさらぬ	*
157	終に一道と	*
158	あとから追つけて	*
159	露の命ちを	*
160	とらんとよ	*
161	行末吉の	*
162	此御寺	*
163	頼まは終に	*
164	我かいのち	*
165	頼て御助	*
166	わかいのち	*
167	座主	座主言
168	あゝ一だひんな事よ	たい一たいんな事
169	/ \	/ \ よ
170	命もふりすてゝ	命ちふり捨て
171	恥も振捨て	*
172	とまひて来るはかり	*
173	たゝやいくまひ	*
174	女恋こゝろ	*
175	僮相にともおもな	*
176	思つもてからや	*
177	のちもとよん	*
178	かくすかたなひらぬ	*
179	むはていやんすれハ	むはていやにすれは
180	見ちやるめのいちやさ	*
181	ワ肝くれしや	*
182	若松	若松言
183	行先もなひらぬ	行先もないらぬ
184	頼てわなひきちやん	*
185	慈悲よワか命ち	*
186	すくてたはふれ	*
187	座主	座主言
188	いきやしかな童へ	*
189	花の顔かくち	*
190	露の身の命ち	*
191	助けほしやの	*
192	戻る道なひらぬ	*
193	恋のせめかこも	*
194	あけて開鐘かねの	*
195	下にかくさ	*
196	たう / \	*
197	いやうれ / \	
198		
199	小僧共集め	
200	番のしめさしやう	
201		
202	小僧共やう	*
203	/ \	*
204		小増 (ママ) 共言
205		ふう / \
206	座主	座主言
207	耳の根よあさて	耳の根よあきて
208	たによ聞とめれ	*
209	花盛り女	*
210	人とまひてきゝゆん	*
211	禁止よ此寺や	*
212	僮相にともするな	*
213	たとひ寺内や	*
214	さかひさはもはからひ	*
215	此鐘の近く	*

執心鐘入校合資料(5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵組踊集
216	そさうにするな	*
217	/ \	*
218	小僧	小増(ママ)共言
219	おう	*
220		
221	やかれよも座主か	*
222	かちめたる若衆	*
223	留主ならば互に	*
224	かたるうれしや	*
225	小僧	小増(ママ)共言
226	あたら花盛り	あたゝ花盛り
227	ひちゆひしちならぬ	*
228	小僧	同言
229	御縁つくかたと	*
230	匂やうつす	*
231	小僧	同言
232	いやすひさんな小僧	いや、すいさんな小坊
233	女道行七尺ふし	歌七尺ふし
234	露の身はやとて	露の身はやとて
235	自由ならぬよひや	*
236	里とまいて互に	*
237	一道ならに	*
238	小僧	小増(ママ)言
239	女や法度 / \	女は法度 / \
240	戻れ / \	*
241	七尺ふし	歌七尺ふし
242	禁止のませかきも	*
243	ことやれはことい	*
244	花につくはへる	*
245	きしのなゆめ	*
246	小僧	小増(ママ)言
247	昔から寺や	*
248	女きしさらめ	*
249	いきやる事あとて	*
250	とまひてきちやか	*
251	女	女言
252	七ツ重へたる	*
253	としころの里に	*
254	おもことのあてと	*
255	とまひてきちやる	*
256	小僧	小増(ママ)言
257	尋ねゆる里や	*
258	夢やちやうもむたぬ	*
259	急ち立戻れ	*
260	女わらへ	*
261	女	女言
262	蟻虫の類ひ	あり虫のたぐひも
263	情ある浮世	*
264	慈悲も定めらぬ	せひも定めらぬ
265	人のらめしや	*
266	小僧	小増(ママ)言
267	うらめゆすきは	*
268	理りとやゆる	*
269	しらぬふりしちをて	*
270	ゆるち見せら	*
271	小僧	小増(ママ)言
272	あたま丸めても	*
273	慈悲しらぬものや	*
274	石か朝夕さの	*
275	薪木こゝる	*
276	小僧	同言
277	とう / \ ゆるちみせら	*
278	小僧	同言
279	座主のとつけたる	*
280	ことや忘れとて	*
281	のよて寺内を	*
282	籠(相)にいれる	*
283	小僧	同言
284	いや推参な小僧	いや、すいさんな小坊
285	小僧	同言
286	あたままるめても	*
287	女花盛	*
288	匂にひかされて	*
289	をかしや / \	*

執心鐘入校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵組踊集
290	小僧	同言
291	いや推参な小僧	いや、すいさんな小坊
292	小僧	同言
293	春のはな桜	*
294	色清さあすか	*
295	又も匂まざる	またもにふひまたる
296	梅とやゆる	*
297	散山節	歌さんやまふし
298	此世をて里や	*
299	御縁なひぬさらめ	*
300	ひちゆひこかれとて	*
301	死ぬか心気	*
302	座主	座主言
303	はあ	*
304	たひんな事があつた	*
305	はやうむちれ / \	はやくにきれ / \
306	たう / \	
307	女	女言
308	今にふしんな	*
309	あの鐘よ	*
310	但此時女鐘に入鬼に成	*
311	座主	座主言
312	是や	これは
313	いきやしちやる事か	*
314	/ \	*
315	小僧	*
316	おにの / \	*
317	座主	座主言
318	ほれたか / \	*
319	小僧	小僧言
320	鐘の / \	*
321	座主	座主言
322	ほれたか / \	*
323	小僧	小僧言
324	きしもきしならぬ	*
325	留もとめならぬ	とめもとらぬ
326	若衆尋ねたる	*
327	女わらへ	*
328	寺内をさかひち	寺の内をさかち
329	逢ぬうらめしやに	*
330	鬼になて鐘に	*
331	まとひつきやる	*
332	座主	座主言
333	おれよ / \	*
334	とつけたることや	*
335	龜相にしちをとて	*
336	かにある事しちやち	*
337	いきやかしゆゝら	*
338	たう / \	*
339	今からや	*
340	いきやいちも	*
341	ならぬこと	*
342	法力を尽ち	法力をつくし
343	祈のけらふよ	*
344	たう / \	*
345		いのり / \
346	小僧	小僧言
347	おう	おふ / \
348		
349	東方に降三世明王。	東方にこさんし明王
350	南方軍 (口毛) 利夜叉明王。	南方こんたり夜叉
351	西方大威徳明王。	西方大いとく明王
352	北方金剛夜叉明王。	*
353	中央大聖不動明王。 / \。 / \	中央大聖ふ動明王 / \ / \
354	なまくさまんたはさらた。	*
355	せんたまかるしやた。	*
356	そはたやうんたうたかんまあ。	すはたやうんしや
357	ちやうかせつしやとく大ちゑ。	
358	かじしつしや即身成佛	即身成佛
359		
360		
361		
362		
363		

執心鐘入校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵組踊集
364		
365		
366		

銘苅子校合資料(1)

1

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
1			
2	銘苅子	銘苅子	銘苅子
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11	銘苅子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳足袋扇子		
12	天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨之柄杓		
13	娘作花巾無(垂カ)時服ネ同衣ひさ取裙足袋		
14	男子はあゆひかしらい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物こほすい足袋		
15	上使繻子入道頭巾緞子衣裳錦之陳羽織末広足袋		
16	供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳足袋		
17			
18			
19	銘苅子	*	*
20	出様ちやるものや	*	*
21	銘苅子	*	*
22	原のいきもとり	*	*
23	はるのゆつきやひに	*	*
24	あの松尾見れば(尾は変体仮名と捉え	*	*
25	あの川の本に	*	*
26	天と地に光り	天ト地ノ光リ	天ト地ノ光リ
27	さしまはてからに	*	*
28	かはしや匂高さ	*	*
29	しちやの事ならぬ	*	*
30	肝ふしき思て	*	*
31	心付見れば	*	*
32	頭毛のあすか	*	*
33	しちやの髪ならぬ	*	シギヤノ髪アラン
34	けふのよかるに	今日ノ吉ル日ニ	今日ノ吉ル日ニ
35	けふの増る日に	*	*
36	かたはらにかくれ	*	*
37	傍らにたちやひ	*	*
38	待受てむたに	*	*
39	まちとめてむたに	*	*
40	通水ふし	*	*
41	若夏かなれば	*	*
42	心うかされて	*	*
43	玉水におりて	*	*
44	かしらあらは	*	*
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51	早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合	ハヤツクテンフシ	天女言バ早作田節
52	けふのよかる日や	*	*
53	しちやのめもなひらぬ	*	*
54	ころやす/\と	*	涼々ト頭ヲ
55	あらてのほら	*	*
56			
57	天女	*	同人
58	やあ/\	*	*
59	いきやる事あとして	イチヤル事ヤトテ	如何ル事ヤトテ
60	しらぬ思里か	*	*
61	羽衣をとやひ	羽衣トヤエ	*
62	まかひいきゆか	*	*
63	銘苅し	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
64	我か松とやゆる	*	*
65	わか川とやゆる	*	*
66	のよてはころもを	*	*
67	かけておちあか	*	掛テ置ユガ
68	天女	*	
69	里やものしらぬ	*	[欠]ヤ物知ラン
70	天と地のなさけ	*	*
71	ふやはちとめたる	*	振合ド見キヤル
72	松も玉水も	*	*
73	わかものといふすや	*	[欠]物ド言スヤ
74	無理やあらね	*	*
75	銘苺し	*	*
76	天と地の情け	*	*
77	振合(フヤワシユ)しゆる浮世	*	*
78	無蔵と縁むすて	*	*
79	互にそはに	互ニ吸ニ、	互ニ吸ワニ、
80	天女	*	*
81	御恥かしやあても	御 [欠]カシヤアテン	*
82	いやなまたなゆめ	*	*
83	御縁てすしらぬ	*	*
84	浮世てすしらぬ	*	*
85	わ身やこの世界の	*	*
86	人やあらぬ	*	*
87	銘苺子	*	*
88	天の雨てすも	*	*
89	下て水なゆひ	*	*
90	おりて世界くれは	*	*
91	世界の人よ	*	*
92	天女	*	*
93	里かい言葉や	*	*
94	此世界の習ひ	*	*
95	天の御定め	*	*
96	我自由ならぬ	*	*
97	銘苺子	*	*
98	世界のよすことや	*	*
99	たかしちやか始め	*	*
100	天の御定めと	*	*
101	世界のならひ	*	*
102	天女	*	*
103	玉水にほれて	*	*
104	飛衣やとられ	*	*
105	にや又自由ならぬ	*	*
106	里になれら	*	*
107	銘苺子	*	*
108	天の引合よ	ハア天ノ引合ユ	ア、天ノ引合ヨ
109	神の引合しよ	*	神ノ御助カ
110	定めたる女	*	*
111	わ身やまたをらぬ	*	*
112	けふからや互に	*	*
113	契る嬉しや	*	*
114			
115			
116			
117			
118			
119			
120	天女	*	*
121	あまおりしちわ身や	*	一 天下リシ我身ヤ
122	夢の間とやすか	*	*
123	互になれそめて	*	*
124	なし子わなひふたり	*	*
125	やあ思鶴よ	*	*
126	すゝられのくれしや	*	*
127	此をひけひつれて	*	*
128	大原にいきやひ	*	*
129	遊てもとれ	*	*
130	思なひ	思鶴	思鶴
131	てかよおめけひよ	*	*
132	大原にいきやひ	*	*
133	稲ひろて遊は	*	*
134	粟ひろてあすは	*	*
135	遊子持ふし	*	*
136	いやうひ / \	*	*
137	なくなやう	ナクナ	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
138	わか按司の飛御衣	*	*
139	我按司の舞御衣	*	*
140	六僕の蔵に	*	六ツ僕ノ蔵ニヤウ
141	八僕の内に	*	八ツ僕ノ内ニヤウ
142	稲束のしたに	*	稲束ノ下ニヤウ
143	粟束のうちに	*	粟束ノ内ニヤウ
144			
145	置ふるみしちやうん	*	置ボルミシキヤウンヤウ
146	おきさるししちやうん	*	置晒ルシ、キエンヤウ
147	ねなし起て啼なやう	子ナシ起テ鳴ナ	*
148	なかならはくひゆんたう	ナカナレバ呉ン	*
149	遊ははとくひゆんたう	遊バ、ト呉ン	*
150	思なひ	思鶴	思鶴
151	やあおめけひよ	*	*
152	頼て夜もくれる	*	*
153	急ち立戻て	*	*
154	すたし母親の	*	*
155	側にをらに	*	*
156			
157			
158	天女	*	*
159	なし子もり素立	*	*
160	をらんでやりすれは	*	*
161	天の御定め	*	*
162	我自由ならぬ	*	*
163	互になれそめて	*	互ニ押レ染テ
164	なし子わなひふたり	*	*
165	姉のとしよめは	*	兄ノ歳ヨメバ
166	九ツになよひ	*	*
167			
168	をひけひとしことし	*	ライケ歳ヨメバ
169	五ツいつきやても	*	五ツイツチヤラン
170	をてもわなひならぬ	*	*
171	とはんでやりすれは	*	飛■テヤリスレバ
172	飛衣やなひらぬ	*	飛衣や取ラリ
173	此間やをたん	*	*
174	なし子言葉に	産子言葉ニ	産[欠]ニ
175	八ツ僕の蔵に	*	*
176	もゝかくしかくち	*	*
177	ある事よ聞は	*	*
178	けふととまひつきやる	*	今日尋イ■■■
179	けふとわなひとたる	*	*
180	明日の明雲に	*	*
181	あちやのしら雲に	*	*
182	飛のやひのほら	*	*
183	とひのやひいかに	*	*
184	此事よ聞は	*	*
185	此事よしらは	此事知バ	此事知ラバ
186	もゝすかりすかて	*	*
187	はなす事ならぬ	*	*
188	わかなし子すかち	*	*
189	急ちねなしめて	*	*
190	夜明白雲と	*	*
191	つれてのほら	*	*
192			
193	やあやあなし子	*	*
194	今日明てあちやゝ	*	*
195	おしつれて遊は	*	押列テ遊ビ
196	いへも片時も	*	*
197	急ちねれよ	*	*
198	思なひ	思鶴	思ケイ
199	やあ母親よ	*	*(亀千代詞)
200	いきやしかなけふや	*	*(亀千代詞)
201	母親の側(に)	*	母親ノ御側(亀千代詞)
202	いへも片時も	*	*(亀千代詞)
203	離れくれしや	*	*(亀千代詞)
204			
205			
206			
207	思けひ	*	思鶴
208	わぬも母親の	*	*(思鶴言葉になっている)
209	側にねらに	*	*(思鶴言葉になっている)
210	天女	*	
211	やあなし子	*	*(思鶴言葉になっている)



銘苺子校合資料(1)

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
212	急ちねれよ / \	急ヂ子レヨ急ヂ / \	* (思鶴言葉になっている)
213			
214	天女	同人	
215	かにある憂苦しや	*	* (思鶴言葉になっている)
216	たかしちやることか	*	* (思鶴言葉になっている)
217	うらめてもきやしゆか	*	* (思鶴言葉になっている)
218	我肝さらめ	*	* (思鶴言葉になっている)
219	東江ふし	*	*
220	なし子ふやかれて	*	*
221	飛んてやりすれば	*	*
222	明日やはゝとまひて	*	*
223	なきゆらとめは	*	*
224	天女言葉并東江ふし	*	*
225	ねなしちをるうちに	*	寝ナシチュル内ニ
226	別れらなきやしゆか	*	*
227	おすてもゝすかり	*	*
228	すかるとめは	*	*
229			
230			
231			
232			
233			
234			
235			
236	思けひ	*	*
237	やあ母親よ	*	*
238	/ \	*	
239			
240	やあ思なひよ	*	*
241	母やをらぬ	母ヤヲラン / \	母ヤ居ラン / \
242	思姉思けひ	兩人	
243	やあ母親よ	*	
244	/ \ / \	/ \	
245			
246		思ケイ	
247	やあ思なひよ	*	
248	母親やあれよ / \	母ヤアリヨ / \	
249	思なひ	思鶴	思鶴
250	やあ母親よ	*	*
251	思けひとわぬすてゝ	*	*
252	まかひいきゆか	マカイイマイガ	マカイ行メガ
253	思けひ	*	*
254	わぬも列登ら	*	*
255	やあ母親よ	*	ヤア母親
256	/ \	*	
257	天女	*	*
258	是きやてよとめは	是ギヤデヨトメレ	*
259	飛もとはれらぬ	*	*
260	なし子ふやかれの	*	*
261	もゝのくれしや	*	*
262			
263		思ケイ	思ケイ
264			
265	やあ思なひよ	*	*
266	母やしら雲の	*	*
267	かくち見らぬ	*	*
268			
269	東江ふし	*	*
270	あけやうおめけよ	アケヤウ思ケイ	アケイイキヤガ成ヨラ
271	母見らぬ	母ヤ見ラン	
272	思なひ	*	思鶴
273	やあ思けひよ	*	*
274	いつきやてよなきゆか	*	*
275	互に立戻て	*	*
276	このことや急ち	*	*
277	父にかたら	*	*
278			
279			
280			
281			
282			
283			
284			
285			

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
286			
287			
288			
289			
290			
291			
292			
293			
294			
295	思けひ	*	*
296	おめなひや急ち	*	*
297	戻よらはもとれ	*	*
298	わ身や母とまひて	*	*
299	いかんしゆもの	*	*
300		思鶴	思鶴
301	やあ思けひよ	*	*
302	母やしら雲の	*	*
303	かくち自由ならぬ	*	*
304	明日や(押)列て	*	*
305	互にとまいら	*	*
306	けふや急ち立(戻)て	*	*
307	父にかたら	*	*
308	てかよ / \	*	*
309			
310			
311			
312			
313			
314			
315			
316	子持ふし	*	長子持節
317	思けひとわ身や	*	*
318	生れらぬむまれ	*	*
319	十にたらぬうちに	*	*
320	十にみたぬ内に	*	*
321	母にすてられて	*	*
322	わかれやひをれは	*	*
323	五ツ頃をひけひ	*	*
324	一期啼くらち	*	*
325	ねふる夜もねらぬ	*	*
326	たよる物はなち	*	*
327	互に母おもて	*	*
328	たかひになきくらち	*	*
329	すゝられもくれしや	*	*
330	すからても苦しや	スガラリンクリシヤ。	スガラレノ苦シヤ
331	思けひよつれて	*	*
332	母とまひて行ん	*	*
333	足まろひするな	*	*
334	つまころひするな	*	*
335	こかときやてとまひて	コガトキウテトマイテ	*
336	こかときやてきちも	*	*
337	母親や見らぬ	*	*
338	母親やをらぬ	*	*
339	夜もくれていきゆひ	*	夜ン暮レテ行ン
340	足本もやめは	*	足本ンヤニヨイ
341	ひきゆる足ひからぬ	引ユル足引リラン	足ン引カレラン
342	肝くれていきゆん	*	*
343	思なひ	*	思鶴
344	やあ思けひよ	*	*
345	此間のつかれ	*	*
346	足もひかれらぬ	*	*
347	目本くら / \ と	*	*
348	なるかしんき	*	*
349	思けひ	*	*
350	やあ思なひよ	*	*
351	足まろひするな	*	*
352	急ち立おけれ	*	*
353	/ \	*	*
354	やあ思なひよ	*	
355	/ \	*	
356	【のかす】のかす思なひや	*	*
357	ものい声もすらぬ	モノ言声ンナイラン	物言声ン無ラン
358			
359	銘苺子	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
360			
361	あゝ肝もきもならぬ	*	*
362	かにくれしやあるい	*	*
363	五ツ頃をひけひ	*	*
364	十にたらぬ姉	*	*
365	母に捨られて	*	*
366	別れやひをれは	*	*
367			
368			
369	ねふる夜もねらぬ	*	*
370	たゆるものはなち	*	*
371			
372			
373	あの松の下に	*	*
374	あの川の本に	*	*
375	朝夕いきくらち	*	*
376	足すとてなけは	*	*
377	肝もきもならぬ	*	*
378	けふや夜も暮る	*	*
379	急ち立寄ひ	*	*
380	わかなし子すかち	*	*
381	列戻ていかに	*	*
382	引つれていかに	*	押列テ戻ラ
383			
384	やあ / \ なし子	*	*
385	夜も暮て行ん	*	*
386			
387	いそちたちもとれ	*	*
388	思けひ	*	思鶴
389	やあ父親よ	*	* (思鶴言葉になっている)
390			
391			
392	すたし母親や	*	* (思鶴言葉になっている)
393	とまいはもをらぬ	*	* (思鶴言葉になっている)
394	おめなひとわ身や	*	* (思鶴言葉になっている)
395	いきやかしゆゝら	*	* (思鶴言葉になっている)
396	銘苺子	*	*
397	やあ思鶴よ	*	*
398	たによ聞留れ	*	*
399	けふからや明日からや	*	*
400	母の事思て	*	*
401	泣よ又するな	*	*
402	すたしはおやゝ	*	*
403	世界の人あらぬ	*	*
404	あまおりしやる女	*	*
405	あま下りしやる女	*	*
406	天登てからや	*	天マ登リテカラヤ
407			
408	下ることならぬ	*	*
409	ならぬ事思て	*	*
410	泣くらちをすや	*	*
411	母の為ならぬ	*	*
412	我か為にならぬ	*	*
413	思けひよすかち	*	*
414	互におひたちやひ	*	*
415	首里みやたりしゆすと	*	*
416	按司みやたりしゆすと	*	*
417	子の道たいもの	*	*
418	親の為やこと	*	*
419	たによきゝ留て	*	*
420	肝に思染て	*	*
421	けふからや明日からや	*	今 [欠] 明日カラヤ
422	母とまひてなくな	*	*
423	母呼びなくな	*	*
424			
425	思なひ	思鶴	思鶴
426	やあ父親よ	*	*
427			
428			
429			
430			
431	思尽ちをても	*	*
432	此世をて母に	*	此世居テ母ノ
433	また拝むことの	*	又拝ム事

銘苺子校合資料(1)

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
434	ならぬてよやれば	*	ナ [欠]デヨヤレバ
435	いきやし暮しやしゆゝか	イキヤシコラシヤビガ	如何シ暮ラシヤビガ
436	思けひと我身や	*	*
437			
438	銘苺子	*	*
439	い言葉にわぬも	*	*
440	面影のまさて	*	*
441	うらめてもきやしゆか	*	*
442	我肝さらめ	*	*
443			
444			
445			
446			
447			
448	上使	*	*
449	出様ちやる者や	*	*
450	首里の御使	*	*
451	あゝ銘苺子とちや	*	*
452	あまおりしやる女	*	*
453	天の御定め	*	*
454	自由ならぬあたら	*	*
455			
456			
457			
458			
459			
460			
461	五ツころをひけひ	*	*
462	十にみたぬをなひ	*	*
463	ふりすてゝ今や	*	*
464	飛うせてをらぬ	*	*
465	親とまひいまよて	*	*
466	高松の下に	*	*
467	朝夕つれ行ひ	*	*
468	啼暮ちをんてやり	*	*
469	首里城までも	*	*
470	取沙汰のあれは	取沙汰アレハ	
471			
472	思なひや	*	*
473	御城の内に	*	*
474	御素立よめしやいん	*	*
475	思けひや	*	嫡子亀千代ヤ
476	ほと／＼にならば	*	*
477	御取立めしやいん	*	*
478	御素立よめしやいん	*	*
479	又親の銘苺子や	*	*
480	首里の御位	*	*
481	たへめしやいんてやり	*	*
482	このみよんき拝て	*	*
483	なまと行る	*	*
484	高松の本も	*	*
485	道すからたひもの	*	*
486	直に立寄ひ	*	*
487	たつねやひむたに	*	*
488	同人	上使	上使
489	やあ／＼銘苺し	*	ヤア銘苺子、
490	首里の御使とやゆる	*	*
491			
492	銘苺子	*	*
493	あゝのふことかやゆら	*	*
494	上使	*	*
495			
496			
497			
498	銘苺子かなし子	*	*
499	母にすてられて	*	*
500	朝夕親とまひて	*	*
501	啼暮ちをる事や	*	*
502	首里城までも	*	首里迄ン
503			
504	取沙汰のあてと	取沙汰ノアトテ	取沙汰ノ有トテ、
505	世にかはてをれは	*	*
506	世に始やこと	*	*
507			

銘苺子校合資料(1)

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
508			
509			
510	なし子思鶴や	*	*
511	御城の内に	*	*
512	御素立よめしやいん	*	*
513	嫡子亀千代や	*	*
514	ほとほとにならば	*	*
515	御素御取立めしやいん	ウノ御取立召ン	ウノ御取立召ン
516	又銘苺子や	*	*
517			
518			
519			
520	首里のおゑか	*	*
521	たへめしやいんてやりの	*	*
522	御使とやゆる	*	*
523	銘苺子	*	*
524	あゝたうと	*	*
525	夢やちやうもむたぬ	*	*
526	もゝかほとつきやる	*	*
527	やあなし子	*	*
528	みすく聞拝め	*	*
529	此御恩たうとさや	*	*
530			
531			
532			
533			
534			
535	胸に思染れ	胸ニ思染テ	胸ニ思染テ
536	肝に思留て	*	*
537	けふからや明日からや	*	*
538	打笑て遊へ	*	*
539	うちほこて遊へ	*	*
540	大原とやゆる	*	*
541	先宿んかい	*	*
542	おんつかいしやへら	*	*
543			上使
544			
545			
546			
547			
548			
549	たう / \	*	* (上使言葉)
550	かほ事とやゆる	*	* (上使言葉)
551	すてことよたひもの	*	スデ事ヨヤレバ (上使言葉)
552	押列て宿に	*	* (上使言葉)
553	踊て戻ら	*	踊テ戻 (上使言葉)
554	立雲ふし	*	*
555	夢やちやうもむたぬ	*	*
556	百かほのつきやす	*	百果報ド着ヤル
557	あの松と川の	*	*
558	ゆへとやゆる	*	*
559	同ふし	*	*
560	百かほのあれは	*	*
561	あの松と川や	*	*
562	むかしくりもとち	*	*
563	見ほしやはかり	*	*
564		銘苺子終	銘苺子終
565		桃原村 恩河朝祐	
566			
567			
568			
569			
570			
571			
572			
573			
574			
575			
576			
577			
578			
579			
580			
581			

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
582			
583			
584			
585			
586			
587			
588			
589			

銘苺子校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
1			
2	銘苺子	組踊 銘苺子	銘苺子
3			玉城親方朝薫作
4		<p>銘苺子は百八十七年前に出来た五組の一である。作者玉城朝薫は少より楽童子として、或は賀慶使、恩謝使等の従官となつて慶江戸に往来した人で、徳川文学の造詣が深く、其上歌や音楽や舞の心得のあつた人であるから、所謂組踊を作るに相応しい人であつた。彼れは材料を自国の神話伝説にとり、古譜を復活させて韻文の戯曲を創作し、之を組踊と名けた。総合美術の意に解せられて面白い。総べて詞の用るさまといひ、舞ひかたといひ、各特色があつて其苦心の程が察せられる。世に楽劇を作る人は多いが、彼れのやうに詩歌も音楽も舞も共に出来る人が少い。吾が玉城の組踊は実にワグネルのチルテンドラマの様に音楽と詩歌とが充分調和して出来たのである。是から組踊を作る者輩出し、今日では殆ど百を以て数ふるに至つたが、忠孝婦人、手水の縁等の一二を除いては多くは技芸の点は全く顧みないで徒らに冗繁な文句を長々と連ねたばかり、其脚色も大方所謂敵討、然うでなければ継子苦めばかりが多い。若し最初に出来た組踊を能とすれば、是等は拙さ田舎歌舞伎のやうなものである。組踊は五組で始つて五組のみで終つたといつても差支がないと思ふ。こゝに紹介する銘苺子は、銘苺子といふ農夫、一日井戸の辺で天女が浴みしてゐるを見、傍なる松が技にかけた羽衣を奪うて飛行の道を絶ち、妻とすることが由來だ。居ること十年、一男一女を生んだ後、子等の子守歌で羽衣の在所を知り、子等に別れを告げて雲中に消え失せたといふ脚色である。子を残し行く天女の情、母に捨てられて子供及び其の子供の父の情を写した所が此組踊の眼目であらう。而して此間に奏せらるゝ音楽は一入サブライムな者である。ワグネルの考を借りて言へば、今日の沖繩のやうに世の中が段々末になつて来て、人間の心が腐敗している時には之を救ふ一手段としてかういふ楽劇を活きた俳優に演ぜしめ、聴衆の耳目に訴えてその心を高尚に導いて往くのもよからう。併し誰が之を演ずることが出来よう、よし演ずることが出来たにしても馬芝居を見て感心するやうな観客がどうして之を聴くことが出来ようか。読者は当分この劇詩のみを味つて満足せねばならぬ。(物外)</p>	
5			登場人物と演技者
6			銘苺子(浜川里之子) 天女(小禄里之
7			男子亀千代(豊見城真牛) 娘思鶴(幸
8			上使(宇地原里之子) 供(上地里之子
9			親雲上)
10			供(武村子) 供(護得久子)
11	銘苺子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳足袋扇子		銘苺子/髪金入錦入道頭巾 水色絵垣紗綾袷衣裳 足袋 扇子持
12	天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨之柄杓		天女/垂髪紫長巾 金銀水引熨斗紙差天冠琉縫薄衣裳 飛衣緋紗綾 足袋 金銀薄磨の柄杓持
13	娘作花巾無(垂か)時服ネ同衣ひさ取裙足袋		娘(思鶴)/髪作花差 巾無時服(ネ+同) 衣裏緋紗綾 ひさ取裙緋ざや 足袋
14	男子はあゆひかしらい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物こほすい足袋		男子(亀千代)/はあよひかしらへ 金銀水引差 絹布緒付小袖単衣裳 緞子貫物子ほすい 緋ざや足袋
15	上使縹子入道頭巾緞子衣裳錦之陳羽織末広足袋		上使/黒縹子入道頭巾 緞子衣裳 錦陳羽織 末広持 足袋
16	供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳足袋		供(従者のこと)/黒縮緬入道頭巾 黒さや袷衣裳 足袋
17			
18		第一幕	第一幕
19	銘苺子	*	銘苺子(橋掛より出づ)
20	出様ちやるものや	*	*
21	銘苺子	*	*
22	原のいきもとり	*	*
23	はるのゆつきやひに	原の往来に	*
24	あの松尾見れば(尾は変体仮名と捉え)	あの松よ見れば	*
25	あの川の本に	あの山井の辺に	*
26	天と地に光り	天と地の光	*

銘苺子校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
27	さしまはてからに	*	*
28	かはしや匂高さ	*	*
29	しちやの事ならぬ	*	*
30	肝ふしき思て	*	*
31	心付見れは	*	*
32	頭毛のあすか	*	*
33	しちやの髪ならぬ	*	*
34	けふのよかるに	今日の吉る日に	けふのよかる日に
35	けふの増る日に	*	*
36	かたはらにかくれ	*	*
37	傍らにたちやひ	*	*
38	待受てむたに	*	*
39	まちとめてむたに	*	*
40	通水ぶし	歌	歌 通水ぶし(橋掛より出づ)
41	若夏かなれは	*	*
42	心うかさされて	*	*
43	玉水におりて	*	*
44	かしらあらは	髪洗らは(通ひ水ぶし)	*
45		(この管絃楽の調べと共に天女現る)	
46			
47			
48			
49			
50			
51	早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合	歌	歌 早作田節
52	けふのよかる日や	*	*
53	しちやのめもなひらぬ	*	*
54	こゝろやす/ \と	*	*
55	あらてのほら	洗て昇ら(早作田ぶし)	*
56		この曲の賑ひにつれて天女羽衣を松が枝にかけて髪を洗ふ帰らんとする一刹那農夫がその羽衣を盗み去るを見てあはたゞしく)	
57	天女	*	*
58	やあ/ \	*	*
59	いきやる事あとして	如何る事やとして	*
60	しらぬ思里か	*	*
61	羽衣をとやひ	羽衣取やり	*
62	まかひいきゆか	*	*
63	銘苺し	*	*
64	我か松とやゆる	*	*
65	わか川とやゆる	*	*
66	のよてはころもを	のよで羽衣	*
67	かけておちあか	*	かけておきゆか
68	天女	*	*
69	里やものしらぬ	*	*
70	天と地のなさけ	*	*
71	ふやはちとめたる	振合ちど茂たる	*
72	松も玉水も	*	*
73	わかものといふすや	*	*
74	無理やあらね	*	無理やあらぬ
75	銘苺し	*	*
76	天と地の情け	*	*
77	振合(フヤワシユ)しゆる浮世	*	*
78	無蔵と縁むすて	*	無蔵縁むすて
79	互にそはに	*	*
80	天女	*	*
81	御恥かしやあても	*	*
82	いやなまたなゆめ	*	*
83	御縁てすしらぬ	*	*
84	浮世てすしらぬ	*	*
85	わ身やこの世界の	*	*
86	人やあらぬ	*	*
87	銘苺子	*	*
88	天の雨てすも	*	*
89	下て水なゆひ	*	*
90	おりて世界くれは	*	*
91	世界の人よ	*	*
92	天女	*	*
93	里かい言葉や	*	*
94	此世界の習ひ	*	*
95	天の御定め	*	*
96	我自由ならぬ	*	*



No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
97	銘苺子	*	*
98	世界のよすことや	*	*
99	たかしちやか始め	*	*
100	天の御定めと	*	*
101	世界のならひ	*	*
102	天女	*	*
103	玉水にほれて	*	*
104	飛衣やとられ	*	*
105	にや又自由ならぬ	*	*
106	里になれら	*	*
107	銘苺子	*	銘苺子(橋掛に入る)
108	天の引合よ	*	はあ、天の引合よ
109	神の引合しよ	*	*
110	定めたる女	*	*
111	わ身やまたをらぬ	*	*
112	けふからや互に	*	*
113	契る嬉しや	*	*
114		(銘苺子天女を携へて家に帰る)	
115		○組踊 銘苺子	
116		物外	
117			*
118			*
119		第二幕	第二幕
120	天女	*	天女(橋掛より出づ)
121	あまおりしちわ身や	*	あまりしちわ身や
122	夢の間とやすか	*	*
123	互になれそめて	*	*
124	なし子わなひふたり	*	*
125	やあ思鶴よ	やヤ思鶴よ	*
126	すゝられのくれしや	*	*
127	此をひけひつれて	*	*
128	大原にいきやひ	*	*
129	遊てもとれ	*	*
130	思なひ	姉思鶴	思鶴(娘)
131	てかよおめけひよ	*	*
132	大原にいきやひ	*	*
133	稲ひろて遊は	*	*
134	粟ひろてあすは	*	*
135	遊子持ふし	子守歌	歌 遊ひ子持ぶし
136	いやうひ/\	*	*
137	なくなやう	*	*
138	わか按司の飛御衣	*	*
139	我按司の舞御衣	*	*
140	六僕の蔵に	*	*
141	八僕の内に	*	*
142	稲束のしたに	*	*
143	粟束のうちに	*	*
144			
145	置ふるみしちやうん	置き古みしちよん	*
146	おきさるししちやうん	*	*
147	ねなし起て啼なやう	*	寝なし起きてなくな
148	なかならはくひゆんたう	泣かなれば呉ゆんたう	なかなればくいよん
149	遊ははとくひゆんたう	遊ばはど呉ゆんたう(子持ぶし)	*
150	思なひ	思鶴	思鶴(橋掛に入る)
151	やあおめけひよ	*	*
152	頓て夜もくれる	*	*
153	急ち立戻て	*	*
154	すたし母親の	*	*
155	側にをらに	*	*
156			
157			
158	天女	*	天女(橋掛より出づ)
159	なし子もり素立	*	*
160	をらんでやりすれは	*	*
161	天の御定め	*	*
162	我自由ならぬ	*	*
163	互になれそめて	*	*
164	なし子わなひふたり	*	*
165	姉のとしよめは	*	姉(おみなひ)の年よめは
166	九ツになよひ	*	*
167			
168	をひけひとしことし	*	*
169	五ツいつきやても	*	*
170	をてもわなひならぬ	*	*

銘苺子校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
171	とはんてやりすれば	*	*
172	飛衣やなひらぬ	*	*
173	此間やをたん	*	*
174	なし子い言葉に	産子言葉に	*
175	八ツ俣の蔵に	*	*
176	もゝかくしかくち	*	*
177	ある事よ聞は	*	*
178	けふととまひつきやる	*	*
179	けふとわなひとたる	*	*
180	明日の明雲に	*	*
181	あちやのしら雲に	*	*
182	飛のやひのほら	*	*
183	とひのやひいかに	乗やり行かに	*
184	此事よ聞は	*	*
185	此事よしらは	*	*
186	もゝすかりすかて	*	*
187	はなす事ならぬ	*	*
188	わかなし子すかち	*	*
189	急ちねなしめて	*	*
190	夜明白雲と	*	*
191	つれてのほら	*	*
192			
193	やあやあなし子	ヤア産子	やあなし子
194	今日明てあちやゝ	*	*
195	おしつれて遊は	*	*
196	いへも片時も	暫時も片時も	*
197	急ちねれよ	*	*
198	思なひ	*	思鶴
199	やあ母親よ	*	*
200	いきやしかなけふや	*	*
201	母親の側(に)	*	*
202	いへも片時も	暫時も片時も	*
203	離れくれしや	*	*
204			
205			
206			
207	思けひ	弟亀千代	亀千代(男子)
208	わぬも母親の	*	*
209	側にねらに	*	*
210	天女	*	*
211	やあなし子	*	*
212	急ちねれよ / \	*	*
213		(天女子等の寝たる後愁然として独語)	
214	天女	*	*
215	かにある憂苦しや	*	*
216	たかしちやることか	*	*
217	うらめてもきやしゆか	*	*
218	我肝さらめ	*	*
219	東江ふし	歌	歌 東江ぶし
220	なし子ふやかかれて	産子別かれて	*
221	飛んてやりすれば	*	*
222	明日やはゝとまひて	*	*
223	なきゆらとめは	泣きゆらとめば(東江ぶし)	*
224	天女言葉并東江ぶし	歌	同歌ぶし
225	ねなしちをるうちに	寝なしちゆる内に	寝なしちゆる
226	別れらなきやしゆか	*	*
227	おすてもゝすかり	*	*
228	すかるとめは	すがるとめば(東江ぶし)	*
229		(この悲しき曲と共に高き松を通りて雲中に入り遙かに子等を見おろし涙に咽びて顔を拵ひ)	
230		天女	天女台辞東江節に同じ
231		寝なしちゆる内に	寝なしちゆる内に
232		別れらな如何しゆが	
233		うぞて百すがり	
234		すがるとめば	

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
235		(五歳の亀千代目覚めて起き上り四辺を見廻はしつゝ、母の居らざるを見て)	(頭注) この悲しき東江節につれて天女は高き松を上りて空中に入り遙かに子等を見おろし涙に咽ぶとき五才の亀千代は目覚めて起き上り母の居らざるを見て四方を見廻はし泣き叫ぶ姑くして母の雲中にあ迫るを見、母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰途につく
236	思けひ	亀千代	亀千代
237	やあ母親よ	*	*
238	/ \	*	*
239			
240	やあ思なひよ	*	*
241	母やをらぬ	*	母や居らぬをらぬ
242	思姉思けひ	子二人	思鶴亀千代二人
243	やあ母親よ	*	*
244	/ \ / \	やア母親よ	*
245		(と泣き叫ぶ、暫くありて亀千代母の雲中にあるを見)	
246		亀千代	亀千代
247	やあ思なひよ	*	*
248	母親やあれよ / \	母やあれよ / \	*
249	思なひ	*	思鶴
250	やあ母親よ	*	*
251	思けひとわぬすてゝ	*	*
252	まかひいきゆか	まかいいまいが	まかいいまいが
253	思けひ	亀千代	亀千代
254	わぬも列登ら	*	*
255	やあ母親よ	*	*
256	/ \	*	*
257	天女	*	*
258	是きやてよとめは	*	*
259	飛もとはれらぬ	*	*
260	なし子ふやかれの	*	
261	もゝのくれしや	*	*
262		(と切なる情に胸迫り)	
263		亀千代	亀千代
264			
265	やあ思なひよ	*	*
266	母やしら雲の	*	*
267	かくち見らぬ	*	*
268		(この時曲人の悲しき調べ)	
269	東江ふし	歌	歌 東江ぶし
270	あけやうおめけよ	あけやう思弟	あけやうおみけいよ
271	母見らぬ	母や見らぬ(東江ぶし)	
272	思なひ	*	思鶴
273	やあ思けひよ	*	*
274	いつきやてよなきゆか	*	*
275	互に立戻て	直に立ち戻て	*
276	このことや急ち	*	*
277	父にかたら	*	*
278			
279			
280			
281			
282			
283			
284			
285			
286			
287			
288			
289			
290			
291			
292			
293			
294			
295	思けひ	亀千代	亀千代
296	おめなひや急ち	*	*
297	戻よらはもとれ	*	*

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
298	わ身や母とまひて	*	我身や母とまひ
299	いかんしゆもの	*	*
300		思姉	思鶴
301	やあ思けひよ	*	*
302	母やしら雲の	*	*
303	かくち自由ならぬ	*	*
304	明日や(押)列て	*	*
305	互にとまいら	*	*
306	けふや急ち立(戻)て	*	*
307	父にかたら	*	*
308	てかよ/\	*	*
309		○組踊 銘苺子	
310			*
311		第三幕	第三幕
312		(慢に哀れなる管絃樂にて幕明く)	
313			
314			
315			
316	子持ぶし	歌	歌 子持ぶし
317	思けひとわ身や	*	*
318	生れらぬむまれ	*	*
319	十にたらぬうちに	十に足らぬ	*
320	十にみたぬ内に	*	*
321	母にすてられて	*	*
322	わかれやひをれは	*	*
323	五ツ頃をひけひ	*	*
324	一期啼くらち	*	*
325	ねふる夜もねらぬ	*	*
326	たよる物はなち	*	*
327	互に母おもて	*	*
328	たかひになきくらち	*	*
329	すゝられもくれしや	*	*
330	すからても苦しや	すがられの苦しや	
331	思けひよつれて	*	*
332	母とまひて行ん	*	*
333	足まろひするな	*	*
334	つまころひするな	*	*
335	こかときやとまひて	遠方来ゆて求いて	*
336	こかときやてきちも	*	*
337	母親や見らぬ	*	*
338	母親やをらぬ	*	*
339	夜もくれていきゆひ	*	*
340	足本もやめは	*	*
341	ひきゆる足ひからぬ	引ゆる足引れらぬ	*
342	肝くれていきゆん	肝暮れて行きゆん(子持ぶし)	*
343	思なひ	思鶴	思鶴
344	やあ思けひよ	*	*
345	此間のつかれ	*	*
346	足もひかれらぬ	*	*
347	目本くら/\と	*	*
348	なるかしんき	*	*
349	思けひ	亀千代	亀千代
350	やあ思なひよ	*	*
351	足まろひするな	*	*
352	急ち立おけれ	*	*
353	/\	*	*
354	やあ思なひよ	*	*
355	/\	*	*
356	【のかす】のかす思なひや	*	*
357	ものい声もすらぬ	物言声も無いらぬ	物言声もないらぬ
358		(と二人母の昇天せし処にて座して相抱いて泣く)	(頭注) 此の台辞につれて二人の孤児は母の昇天せし松の下に座して相抱いて泣くとき、父なる銘苺子は兒等の有様をみてひとしほ腸もちぎるゝばかりに思ひ之れを賺しなだめて家に帰らんとす
359	銘苺子	*	*
360			
361	あゝ肝もきもならぬ	*	*
362	かにくれしやあるい	*	*
363	五ツ頃をひけひ	*	*
364	十にたらぬ姉	*	*

銘苺子校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
365	母に捨られて	*	*
366	別れやひをれは	*	*
367			
368			
369	ねふる夜もねらぬ	*	*
370	たゆるものはなち	*	*
371			
372			
373	あの松の下に	*	*
374	あの川の本に	あの井戸の辺に	*
375	朝夕いきくらち	*	*
376	足すとてなけは	*	*
377	肝もきもならぬ	*	*
378	けふや夜も暮る	*	*
379	急ち立寄ひ	*	*
380	わかなし子すかち	*	*
381	列戻ていかに	*	*
382	引つれていかに	*	*
383			
384	やあ / \ なし子	*	やあ産子
385	夜も暮て行ん	夜も暮れて行きゆり	
386			
387	いそちたちもとれ	*	
388	思けひ	亀千代	亀千代
389	やあ父親よ	やア父親よ	*
390			
391			
392	すたし母親や	*	*
393	とまいれはもをらぬ	*	*
394	おめなひとわ身や	*	*
395	いきやかしゆゝら	*	*
396	銘苺子	*	*
397	やあ思鶴よ	*	*
398	たによ聞留れ	*	*
399	けふからや明日からや	*	*
400	母の事思て	*	*
401	泣よ又するな	*	*
402	すたしはおやゝ	*	*
403	世界の人あらぬ	*	*
404	あまおりしやる女	*	*
405	あま下りしやる女	*	*
406	天登てからや	*	*
407			
408	下ることならぬ	*	*
409	ならぬ事思て	*	*
410	泣くらちをすや	*	*
411	母の為ならぬ	*	*
412	我が為にならぬ	*	*
413	思けひすかち	*	*
414	互におひたちやひ	*	*
415	首里みやたりしゆすと	*	*
416	按司みやたりしゆすと	*	*
417	子の道たいもの	*	*
418	親の為やこと	*	*
419	たによきゝ留て	*	*
420	肝に思染て	*	*
421	けふからや明日からや	*	*
422	母とまひてなくな	*	*
423	母呼ひなくな	*	*
424			
425	思なひ	思鶴	思鶴
426	やあ父親よ	*	*
427			
428			
429			
430			
431	思尽ちをても	*	*
432	此世をて母に	*	*
433	また拝むことの	*	*
434	ならぬてよやれは	*	*
435	いきやし暮しやしゆゝか	如何し暮しやべが	いきやし暮しやべが
436	思けひと我身や	*	*
437			
438	銘苺子	*	*

銘苺子校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
439	い言葉にわぬも	*	*
440	面影のまさて	*	*
441	うらめてもきやしゆか	*	*
442	我肝さらめ	*	*
443			
444			
445			
446			
447			
448	上使	*	上使(笛大鼓拍子一段取り出づ橋掛より)
449	出様ちやる者や	*	*
450	首里の御使	*	*
451	あゝ銘苺子とちや	*	*
452	あまおりしやる女	*	*
453	天の御定めの	*	*
454	自由ならぬあたら	*	*
455			
456			
457			
458			
459			
460			
461	五ツころをひけひ	*	*
462	十にみたぬをなひ	*	*
463	ふりすてゝ今や	*	*
464	飛うせてをらぬ	*	*
465	親とまひいまよて	*	*
466	高松の下に	*	*
467	朝夕つれ行ひ	*	*
468	啼暮ちをんてやり	*	*
469	首里城までも	*	*
470	取沙汰のあれは	取沙汰よあれば	取沙汰よあれば
471			
472	思なひや	*	*
473	御城の内に	*	*
474	御素立よめしやいん	*	*
475	思けひや	*	*
476	ほと／＼にならば	*	*
477	御取立めしやいん	*	*
478	御素立よめしやいん	*	*
479	又親の銘苺子や	*	*
480	首里の御位	*	*
481	たへめしやいんてやり	*	*
482	このみよんき拝て	此の勅命拜て	*
483	なまと行る	*	*
484	高松の本も	高松の下も	*
485	道すからたひもの	*	*
486	直に立寄ひ	*	*
487	たつねやひむたに	*	*
488	同人	上使	*
489	やあ／＼銘苺し	やア銘苺子	*
490	首里の御使とやゆる	*	*
491			
492	銘苺子	*	*
493	あゝのふことかやゆら	*	*
494	上使	*	*
495			
496			
497			
498	銘苺子かなし子	*	*
499	母にすてられて	*	*
500	朝夕親とまひて	*	*
501	啼暮ちをる事や	*	*
502	首里城までも	*	*
503			
504	取沙汰のあてと	取沙汰の有とて	*
505	世にかはてをれば	母にかわて居れば	*
506	世に始やこと	*	*
507			
508			
509			
510	なし子思鶴や	思鶴や	*
511	御城の内に	*	*
512	御素立よめしやいん	*	*

銘苺子校合資料(2)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大観
513	嫡子亀千代や	*	*
514	ほとほとにならば	*	*
515	御素御取立めしやいん	おの御取立召ん	おの御取立みしやいん
516	又銘苺子や	*	*
517			
518			
519			
520	首里のおゑか	*	*
521	たへめしやいんてやりの	*	*
522	御使とやゆる	*	*
523	銘苺子	*	*
524	あゝたうと	*	*
525	夢やちやうもむたぬ	*	*
526	もゝかほとつきやる	*	*
527	やあなし子	*	*
528	みすく聞拜め	*	*
529	此御恩たうとさや	*	*
530			
531			
532			
533			
534			
535	胸に思染れ	*	肝に思染て
536	肝に思留て	*	*
537	けふからや明日からや	*	*
538	打笑て遊へ	*	*
539	うちほこて遊へ	*	*
540	大原とやゆる	*	*
541	先宿んかい	*	*
542	おんつかいしやへら	*	*
543			
544			
545			
546			
547			
548			
549	たう / \	*	*
550	かほ事とやゆる	*	*
551	すてことよたひもの	*	*
552	押列て宿に	*	*
553	踊て戻ら	*	*
554	立雲ぶし	歌	歌 立雲ぶし(橋掛へ入る)
555	夢やちやうもむたぬ	*	*
556	百かほのつきやす	*	*
557	あの松と川の	*	*
558	ゆへとやゆる	故どやゆる(立雲ぶし)	*
559	同ふし	同	同
560	百かほのあれは	*	*
561	あの松と川や	*	*
562	むかしくりもとち	*	*
563	見ほしやはかり	見欲しやばかり(立雲ぶし)	*
564		(をほり)	
565			
566			
567			
568			
569			
570			
571			
572			
573			
574			
575			
576			
577			
578			
579			
580			
581			
582			
583			
584			
585			
586			

No.	尚家本組踊集	琉球新報(明治40年)	台湾本 琉歌大觀
587			
588			
589			



銘苺子校合資料(3)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
1			銘苺子 拍子木一段取俣而銘苺子出る
2	銘苺子	羽衣(一) (一名銘苺子)	銘苺子
3			
4		本組踊り銘苺子は執心鐘入と同じく玉城親方朝薫作にして五段の一にて謡曲羽衣より構想ほん案せしものといふ原本は天保九年戊戌八月十二日仲秋宴に清国冊封使かん林院修選正使林鴻年及びかん林院編修副使高人鑑を首里城に招請せし時演ぜしものによる(尚育王時代)而して文句は現代のものとは少しく異なる所あり是れ後世にて修正せられしものならんと	
5		登場人物と当時の演技者	
6		銘苺子(浜川里之子) 天女(小禄里之	銘苺子 浜川里之子 天女 小禄里之子
7		男子亀千代(豊見城真牛) 娘思鶴(幸	男子 豊見城真牛 娘 幸地
8		上使(宇地原里之子) 供(上地里之子親雲上)	上使 宇地原里之子 供 上地里之子親雲上
9		供(武村子) 供(護得久子)	同 武村子 きやうちやく持 護得久子
10		演技者の服装	
11	銘苺子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳足袋扇子	銘苺子/髪金入錦入道頭巾。水色絵垣紗綾袷衣裳。足袋。扇子持	着付、銘苺子、髪金入錦入道頭巾、水引色絵垣紗綾袷衣裳、足袋、扇子持。
12	天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨の柄杓	天女/垂髪紫長巾。金銀水引熨斗紙差。天冠琉縫薄衣裳。飛衣緋紗綾。足袋。金銀薄磨の柄杓を持つ	天女、垂髪、紫長巾、作花並金銀水引、熨斗低差、天冠、琉縫薄衣裳、飛衣、緋紗綾、足袋、金銀薄磨の柄杓持。
13	娘作花巾無(垂か)時服ネ同衣ひさ取裙足袋	娘思鶴/髪作花差。巾無時。服どう衣裏緋紗綾。膝取りかゝん緋紗綾。足袋	娘、髪作花差、巾垂時服(ネ+同)衣裏緋紗綾ひざ取裙、緋さや足袋。
14	男子はあゆひかしらい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物こほすい足袋	男子亀千代/はあよび頭へ。金銀水引差。絹布緒付小袖単衣裳。どん子貫物子ほすい。緋紗綾足袋	男子、はあゆひ、かしらへ金銀水引差、絹布緒付、小袖草衣裳、緞子貫物小ほそい、緋さや足袋。
15	上使縹子入道頭巾緞子衣裳錦之陳羽織末広足袋	上使/黒縹子入道頭巾。どん子衣裳。錦陳羽織。末広持	上使、黒縹子入道頭巾、緞子衣裳、錦陳羽織、末広持、足袋。
16	供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳足袋	供/黒縮緬入道頭巾。黒紗や袷衣裳。足袋	供、黒縮緬入道頭巾、黒さや袷衣裳、足袋。
17		羽衣(二)	
18		第一幕	
19	銘苺子	「銘苺子出羽」(附り橋掛より笛太鼓にて出場)	銘苺子詞 橋掛より出る
20	出様ちやるものや	*	*
21	銘苺子	*	*
22	原のいきもとり	*	*
23	はるのゆつきやひに	*	*
24	あの松尾見れば(尾は変体仮名と捉え)	あの松よ見れば	*
25	あの川の本に	*	*
26	天と地に光り	天と地の光	天と地に(の)光り
27	さしまはてからに	*	*
28	かはしや匂高さ	*	*
29	しちやの事ならぬ	*	*
30	肝ふしき思て	*	肝ふしきと思て
31	心付見れば	*	*
32	頭毛のあすか	*	*
33	しちやの髪ならぬ	*	*
34	けふのよかるに	今日のよかる日に	けふのよかる日に、
35	けふの増る目に	*	*
36	かたはらにかくれ	*	*
37	傍らにたちやひ	*	*
38	待受てむたに	*	*
39	まちとめてむたに	*	*
40	通水ふし	「天女出羽」歌(通水節)/ (附り橋掛より出場)	歌 通水ぶし 橋掛より出る
41	若夏かなれば	*	*
42	心うかされて	*	*
43	玉水におりて	*	*
44	かしらあらは	*	*
45			
46		「天女」	
47		今日のよかる日や	

銘苺子校合資料(3)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
48		しちやの目もないらぬ	
49		心安々と	
50		洗てのほら	
51	早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合	歌(早作田節)	歌 はやつくてんぶし
52	けふのよかる目や	*	*
53	しちやのめもなひらぬ	*	*
54	こゝろやす / \ と	*	*
55	あらてのほら	*	*
56			
57	天女	「天女」	天女詞
58	やあ / \	*	*
59	いきやる事あとて	*	*
60	しらぬ思里か	*	*
61	羽衣をとやひ	*	*
62	まかひいきゆか	まあかひいまいか	*
63	銘苺し	「銘苺子」	銘苺子詞
64	我か松とやゆる	*	*
65	わか川とやゆる	*	*
66	のよてはころもを	*	*
67	かけておちあか	*	*
68	天女	「天女」	天女詞
69	里やものしらぬ	*	*
70	天と地のなさけ	*	*
71	ふやはちとめたる	*	*
72	松も玉水も	*	*
73	わかものといふすや	*	*
74	無理やあらぬ	*	*
75	銘苺し	「銘苺子」	銘苺子詞
76	天と地の情け	*	*
77	振合(フヤワシユ)しゆる浮世	*	*
78	無蔵と縁むすて	*	*
79	互にそはに	*	*
80	天女	「天女」	天女詞
81	御恥かしやあても	*	*
82	いやなまたなゆめ	*	*
83	御縁てすしらぬ	*	*
84	浮世てすしらぬ	*	*
85	わ身やこの世界の	*	*
86	人やあらぬ	*	*
87	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞
88	天の雨てすも	*	*
89	下て水なゆひ	*	*
90	おりて世界くれは	*	*
91	世界の人よ	*	*
92	天女	「天女」	天女詞
93	里かい言葉や	*	*
94	此世界の習ひ	*	*
95	天の御定め	*	*
96	我自由ならぬ	*	*
97	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞
98	世界のよすことや	*	*
99	たかしちやか始め	*	*
100	天の御定めと	*	*
101	世界のならひ	*	*
102	天女	「天女」	天女詞
103	玉水にほれて	*	*
104	飛衣やとられ	*	*
105	にや又自由ならぬ	にや又自由ならぬ	*
106	里になれら	*	里になれらぬ。
107	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞 橋掛に入る
108	天の引合よ	はあ天の引合よ	はあ、天の引合せよ、
109	神の引合しよ	*	*
110	定めたる女	*	*
111	わ身やまたをらぬ	*	*
112	けふからや互に	*	*
113	契る嬉しや	*	*
114			
115			
116			
117		(附り橋掛に入る)	
118			* * * *
119		第二幕	
120	天女	「天女」(附り橋掛より出場)	天女詞 橋掛より出る
121	あまおりしちわ身や	*	*

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
122	夢の間とやすか	*	*
123	互になれそめて	*	*
124	なし子わなひふたり	*	*
125	やあ思鶴よ	*	*
126	すゝられのくれしや	*	*
127	此をひけひつれて	*	*
128	大原にいきやひ	*	*
129	遊てもとれ	*	*
130	思なひ	「思鶴」	おめなり詞
131	てかよおめけひよ	*	*
132	大原にいきやひ	*	*
133	稲ひろて遊は	*	*
134	粟ひろてあすは	*	*
135	遊子持ふし	歌(あそび子持節)	歌遊び子持ぶし
136	いやうひ/\	*	*
137	なくなやう	*	*
138	わか按司の飛御衣	*	*
139	我按司の舞御衣	*	*
140	六僕の蔵に	*	*
141	八僕の内に	*	*
142	稲束のしたに	*	*
143	粟束のうちに	*	*
144			
145	置ふるみしちやうん	*	*
146	おきさるししちやうん	*	*
147	ねなし起て啼なやう	寝なし起きてなくな	寝なせ、起きて泣くな。
148	なかならはくひゆんたう	泣なればくひよん	泣なれば、呉ゆんたう、
149	遊ははとくひゆんたう	*	*
150	思なひ	「思鶴」	おめなり詞 橋掛え入る
151	やあおめけひよ	*	*
152	頓て夜もくれる	*	*
153	急ち立戻て	*	*
154	すたし母親の	*	*
155	側にをらに	*	*
156		(附り橋掛に入る)	
157			* * * *
158	天女	「天女」(附り橋掛より出場)	天女詞 橋掛より出る
159	なし子もり素立	*	*
160	をらんでやりすれは	*	*
161	天の御定めの	*	*
162	我自由ならぬ	*	*
163	互になれそめて	*	*
164	なし子わなひふたり	*	*
165	姉のとしよめは	おみないの年よめは	*
166	九ツになよひ	*	*
167		羽衣(三)(一名銘苺子)	
168	をひけひとしことし	*	*
169	五ツいつきやても	*	*
170	をてもわなひならぬ	*	*
171	とはんでやりすれは	*	*
172	飛衣やなひらぬ	*	*
173	此間やをたん	*	*
174	なし子言葉に	*	*
175	八ツ僕の蔵に	*	*
176	もゝかくしかくち	*	*
177	ある事よ聞は	*	*
178	けふととまひつきやる	*	*
179	けふとわなひとたる	*	*
180	明日の明雲に	*	*
181	あちやのしら雲に	*	*
182	飛のやひのほら	*	*
183	とひのやひいかに	*	*
184	此事よ聞は	*	*
185	此事よしらは	*	*
186	もゝすかりすかて	*	*
187	はなす事ならぬ	*	*
188	わかなし子すかち	*	*
189	急ちねなしめて	*	*
190	夜明白雲と	*	*
191	つれてのほら	*	*
192			
193	やあやあなし子	やあ産子	*
194	今日明てあちやゝ	*	*
195	おしつれて遊は	*	*

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
196	いへも片時も	*	*
197	急ちねれよ	*	*
198	思なひ	「思鶴」	おめなり詞
199	やあ母親よ	*	*
200	いきやしかなけふや	*	*
201	母親の側(に)	*	*
202	いへも片時も	*	*
203	離れくれしや	*	*
204			
205			
206			
207	思けひ	「亀千代」	おめなり詞
208	わぬも母親の	*	*
209	側にねらに	*	*
210	天女	「天女」	天女詞
211	やあなし子	*	*
212	急ちねれよ / \	急ぎ寝れよいそきねれよ	*
213			
214	天女	「天女」	右同
215	かにある憂苦しや	*	*
216	たかしちやることか	*	*
217	うらめてもきやしゆか	*	*
218	我肝さらめ	*	*
219	東江ふし	歌(東江ぶし)	歌 東江ぶし
220	なし子ふやかかれて	*	*
221	飛んでやりすれば	*	*
222	明日やはとまひて	*	*
223	なきゆらとめは	*	*
224	天女言葉并東江ふし	「天女」	天女詞
225	ねなしちをるうちに	寝なしちゆる内に	*
226	別れらなきやしゆか	*	*
227	おすてもとすかり	*	*
228	すかるとめは	*	*
229			
230		歌(東江ぶし)	歌 東江ぶし
231		ねなしちやる内に	ねなしちをるうちに、
232		別れらなきやしゆか	わかれらなきやしゆが、
233		うそて百すかり	おぞでもとすかり
234		すかるとめは	すがるとめば。
235		(附りこのあがり江ぶしにつれて天女は 高き松を上りて雲中に入り遥かに子供等 を見下して涙に咽ぶとき五才の亀千代は 目覚めて起き上り母の居らざるを見て四 方を見廻し泣き叫んで母の雲中にあるを 見母子の情胸に迫るを見る思鶴は父に知 らせんとて幼弟をすかして涙ながらに帰	
236	思けひ	「亀千代」	おめけり詞
237	やあ母親よ	*	*
238	/ \	*	*
239			
240	やあ思なひよ	*	*
241	母やをらぬ	母や居らぬをらぬ	*
242	思姉思けひ	「思鶴亀千代」	おめなり並おめけり詞
243	やあ母親よ	*	*
244	/ \ / \	*	/ \。
245			
246		「亀千代」	おめけり詞
247	やあ思なひよ	*	*
248	母親やあれよ / \	*	*
249	思なひ	「思鶴」	おめなり詞
250	やあ母親よ	*	*
251	思けひとわぬすてと	*	*
252	まかひいきゆか	まかいとまいか	*
253	思けひ	「亀千代」	おめけり詞
254	わぬも列登ら	*	*
255	やあ母親よ	*	*
256	/ \	*	*
257	天女	「天女」	天女詞
258	是きやてよとめは	*	*
259	飛もとはれらぬ	*	*
260	なし子ふやかかれの	産子ふやかかれて	*
261	もとのくれしや	*	*
262			
263		「亀千代」	おめけり詞

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
264			
265	やあ思なひよ	*	*
266	母やしら雲の	*	*
267	かくち見らぬ	*	*
268			
269	東江ふし	歌(東江ふし)	歌東江ふし
270	あけやうおめけよ	あけやう思けいよ	あけやう、おめけり、
271	母見らぬ	母やみらぬ	母や見らぬ。
272	思なひ	「思鶴」	おめなり詞
273	やあ思けひよ	*	*
274	いつきやてよなきゆか	*	*
275	互に立戻て	*	*
276	このことや急ち	*	*
277	父にかたら	*	*
278			
279			
280			
281			
282			
283			
284			
285			
286			
287			
288			
289			
290			
291			
292			
293			
294			
295	思けひ	「亀千代」	おめけり詞
296	おめなひや急ち	*	*
297	戻よりはもとれ	*	*
298	わ身や母とまひて	*	*
299	いかんしゆもの	*	*
300		「思鶴」	おめなり詞
301	やあ思けひよ	*	*
302	母やしら雲の	*	*
303	かくち自由ならぬ	*	*
304	明日や(押)列て	*	*
305	互にとまいら	*	*
306	けふや急ち立(戻)て	今日や立戻て	*
307	父にかたら	*	*
308	てかよ / \	*	*
309			
310			* * * *
311		第三幕	
312			
313		「思鶴亀千代出羽」歌(子持ぶし)	
314		「思鶴」(附り母しに姉弟手を取りて出	
315		羽衣(四)(一名銘苧子)	
316	子持ふし	歌(子持ぶし)	歌子持ぶし
317	思けひとわ身や	*	*
318	生れらぬむまれ	*	*
319	十にたらぬうちに	十にならぬ内に	*
320	十にみたぬ内に	*	十に満ちぬ内に、
321	母にすてられて	*	*
322	わかれやひをれは	*	*
323	五ツ頃をひけひ	*	*
324	一期啼くらち	*	*
325	ねふる夜もねらぬ	*	*
326	たよる物はなち	*	*
327	互に母おもて	*	*
328	たかひになきくらち	*	*
329	すゝられもくれしや	*	*
330	すからても苦しや	すがられのくれしや	すがられのくれしや、
331	思けひよつれて	*	*
332	母とまひて行ん	*	*
333	足まろひするな	*	*
334	つまころひするな	*	*
335	こかときやてとまひて	*	*
336	こかときやてきちも	*	*
337	母親や見らぬ	*	*

銘苺子校合資料(3)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
338	母親やをらぬ	*	*
339	夜もくれていきゆひ	*	
340	足本もやめは	*	
341	ひきゆる足ひからぬ	*	引きゆる足引かれらぬ、
342	肝くれていきゆん	*	*
343	思なひ	「思鶴」	おめなり詞
344	やあ思けひよ	*	*
345	此間のつかれ	*	*
346	足もひかれらぬ	*	*
347	目本くら/と	*	*
348	なるかしんき	*	*
349	思けひ	「亀千代」	おめけり詞
350	やあ思なひよ	*	*
351	足まるひするな	*	*
352	急ち立おけれ	*	*
353	/	*	*
354	やあ思なひよ	*	*
355	/	*	*
356	【のかす】のかす思なひや	*	*
357	ものい声もすらぬ	物言声もないらぬ	物言ひ声も無いらぬ
358		(附り以上の台詞に列れて二人の孤児は母の昇天せし松の下に座し相抱いて泣	
359	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞
360		(附り)二人の児の有様を見て同じく苦しみつゝ)	
361	あゝ肝もきもならぬ	*	*
362	かにくれしやあるい	*	*
363	五ツ頃をひけひ	*	*
364	十にたらぬ姉	*	*
365	母に捨られて	*	*
366	別れやひをれは	*	*
367			
368			
369	ねふる夜もねらぬ	*	*
370	たゆるものはなち	*	*
371			
372			
373	あの松の下に	*	*
374	あの川の本に	*	*
375	朝夕いきくらち	*	*
376	足すとてなけは	*	*
377	肝もきもならぬ	*	*
378	けふや夜も暮る	*	*
379	急ち立寄ひ	*	*
380	わかなし子すかち	*	*
381	列展ていかに	*	*
382	引つれていかに	*	*
383			
384	やあ/なし子	*	*
385	夜も暮て行ん	夜も暮ていきやゆん	*
386			
387	いそちたちもとれ	急き立ちもとら	*
388	思けひ	「亀千代」	おめけり詞
389	やあ父親よ	*	*
390			
391			
392	すたし母親や	*	*
393	とまいれはもをらぬ	*	*
394	おめなひとわ身や	*	*
395	いきやかしゆゝら	*	*
396	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞
397	やあ思鶴よ	*	*
398	たによ聞留れ	*	*
399	けふからや明日からや	*	*
400	母の事思て	*	*
401	泣よ又するな	*	*
402	すたしはおやゝ	*	*
403	世界の人あらぬ	*	*
404	あまおりしやる女	*	*
405	あま下りしやる女	*	*
406	天登てからや	*	*
407			
408	下ることならぬ	*	*
409	ならぬ事思て	*	*

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
410	泣くらちをすや	*	*
411	母の為ならぬ	*	*
412	我か為にならぬ	*	*
413	思けひよすかち	*	*
414	互におひたちやひ	*	*
415	首里みやたりしゆすと	*	*
416	按司みやたりしゆすと	*	*
417	子の道たいもの	*	*
418	親の為やこと	*	*
419	たによきゝ留て	*	*
420	肝に思染て	*	*
421	けふからや明日からや	*	*
422	母とまひてなくな	*	*
423	母呼ひなくな	*	*
424			
425	思なひ	「思鶴」	おめなり詞
426	やあ父親よ	*	*
427			
428			
429			
430			
431	思尽ちをても	*	*
432	此世をて母に	*	*
433	また拜むことの	*	*
434	ならぬてよやれば	*	*
435	いきやし暮しやしゆゝか	いきやす暮しやへか	いきやし暮しゆゆが、
436	思けひと我身や	*	*
437			
438	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞
439	い言葉にわぬも	*	*
440	面影のまさて	*	*
441	うらめてもきやしゆか	*	*
442	我肝さらめ	*	*
443			
444			
445			
446			
447		「上使出羽」(附り大鼓拍子一段取り出づ橋掛より)	
448	上使	「上使」	上使詞
449	出様ちやる者や	*	*
450	首里の御使	*	*
451	あゝ銘苺子とちや	*	*
452	あまおりしやる女	*	*
453	天の御定め	*	*
454	自由ならぬあたら	*	*
455			
456			
457			
458			
459			
460			
461	五ツころをひけひ	*	*
462	十にみたぬをなひ	*	*
463	ふりすてゝ今や	*	*
464	飛うせてをらぬ	*	*
465	親とまひいまよて	*	*
466	高松の下に	*	*
467	朝夕つれ行ひ	*	*
468	啼暮ちをんてやり	*	*
469	首里城までも	*	*
470	取沙汰のあれは	取沙汰よあれは	*
471			
472	思なひや	*	*
473	御城の内に	*	*
474	御素立よめしやいん	*	*
475	思けひや	*	*
476	ほとゝゝにならば	*	*
477	御取立めしやいん	*	*
478	御素立よめしやいん	*	*
479	又親の銘苺子や	*	*
480	首里の御位	首里御位	*
481	たへめしやいんてやり	*	*
482	このみよんき揮て	*	*
483	なまと行る	*	*

銘苺子校合資料(3)

No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
484	高松の本も	*	*
485	道すからたひもの	*	*
486	直に立寄ひ	*	*
487	たつねやひむたに	*	*
488	同人	「上使」	上使詞
489	やあ / \ 銘苺し	*	*
490	首里の御使とやゆる	*	*
491		羽衣(五) (一名銘苺子)	*
492	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞
493	あゝのふことかやゆら	*	*
494	上使	「上使」	上使詞
495			
496			
497			
498	銘苺子かなし子	*	*
499	母にすてられて	*	*
500	朝夕親とまひて	*	*
501	啼暮ちをる事や	*	*
502	首里城までも	*	*
503			
504	取沙汰のあとと	取沙汰のあとと	取沙汰のあとと
505	世にかはてをれは	*	*
506	世に始やこと	*	世にはじめてやこと、
507			
508			
509			
510	なし子思鶴や	*	*
511	御城の内に	*	*
512	御素立よめしやいん	*	*
513	嫡子亀千代や	*	*
514	ほとほとにならば	*	*
515	御素御取立めしやいん	おの御取立めしやいん	おの御取立めしやいん、
516	又銘苺子や	*	*
517			
518			
519			
520	首里のおゑか	首里の親方へ	*
521	たへめしやいんてやりの	召しやいんてやりの	*
522	御使とやゆる	*	*
523	銘苺子	「銘苺子」	銘苺子詞
524	あゝたうと	*	*
525	夢やちやうもむたぬ	*	*
526	もゝかほとつきやる	*	*
527	やあなし子	*	*
528	みすく聞拝め	*	*
529	此御恩たうとさや	*	*
530			
531			
532			
533			
534			
535	胸に思染れ	肝に思染て	胸に思染めて、
536	肝に思留て	*	*
537	けふからや明日からや	*	*
538	打笑て遊へ	*	*
539	うちほこて遊へ	*	*
540	大原とやゆる	*	*
541	先宿んかい	*	*
542	おんつかいしやへら	*	*
543			
544			
545			
546			
547			
548			
549	たう / \	*	*
550	かほ事とやゆる	*	*
551	すてことよたひもの	*	*
552	押列て宿に	*	*
553	踊て戻ら	*	*
554	立雲ふし	歌(立雲ぶし)	歌 立雲ふし 橋掛に入る
555	夢やちやうもむたぬ	*	*
556	百かほのつきやす	*	*
557	あの松と川の	*	*



No.	尚家本組踊集	琉球新報(大正14年)宮城真治資料	校注 琉球戯曲集
558	ゆへとやゆる	*	*
559	同ふし	歌(立雲ぶし)	同
560	百かほのあれは	*	*
561	あの松と川や	*	*
562	むかしくりもとち	*	*
563	見ほしやはかり	*	*
564		(をわり)	
565			
566			
567			
568			
569			
570			
571			
572			
573			
574			
575			
576			
577			
578			
579			
580			
581			
582			
583			
584			
585			
586			
587			
588			
589			

銘苺子校合資料(4)

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
1			
2	銘苺子	銘苺子(苺は草冠に列)	銘苺子
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11	銘苺子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳足袋扇子		
12	天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨之柄杓		
13	娘作花巾無(垂カ)時服ネ同衣ひさ取裙足袋		
14	男子はあゆひかしらい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物こほすい足袋		
15	上使縹子入道頭巾緞子衣裳錦之陳羽織末広足袋		
16	供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳足袋		
17			
18			
19	銘苺子	*	
20	出様ちやるものや	*	*
21	銘苺子	*	*
22	原のいきもとり	*	*
23	はるのゆつきやひに	*	*
24	あの松尾見れば(尾は変体仮名と捉え)	*	*
25	あの川の本に	*	あの川のも[欠]りに
26	天と地に光り	天卜地ノ光リ	*
27	さしまはてからに	*	*
28	かはしや匂高さ	*	*
29	しちやの事ならぬ	*	下のかめならん
30	肝ふしき思て	*	*
31	心付見れば	*	*
32	頭毛のあすか	*	*
33	しちやの髪ならぬ	*	*
34	けふのよかるに	今日ノ吉日ニ	今日のよかる日に
35	けふの増る目に	*	*
36	かたはらにかくれ	*	側に立い
37	傍らにたちやひ	*	かたわらに隠り
38	待受てむたに	*	*
39	まちとめてむたに	*	待請て[欠]
40	通水ふし	天女出羽通水ホシ	女通水ふし
41	若夏かなれば	*	*
42	心うかされて	*	*
43	玉水におりて	*	玉水に[欠]
44	かしらあらは	*	*
45			
46			
47			
48			
49			
50	早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合	[欠]	はやちくてんふし
52	けふのよかる目や	*	*
53	しちやのめもなひらぬ	*	下の目も[欠]
54	こゝろやす/ \と	*	[欠]安/ \と
55	あらてのほら	*	*
56			
57	天女	*	*
58	やあ/ \	*	*
59	いきやる事あとて	*	*
60	しらぬ思里か	*	知らん思里よ
61	羽衣をとやひ	*	*
62	まかひいきゆか	*	*
63	銘苺し	*	*
64	我か松とやゆる	*	*
65	わか川とやゆる	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
66	のよてはころもを	*	*
67	かけておちあか	*	置ておちいか
68	天女	*	*
69	里やものしらぬ	*	*
70	天と地のなさけ	*	*
71	ふやはちとめたる	*	ふりあわちとめちやる
72	松も玉水も	*	*
73	わかものといふすや	*	[欠] か物てすや
74	無理やあらね	*	*
75	銘苺し	*	*
76	天と地の情け	*	*
77	振合(フヤワシユ)しゆる浮世	*	*
78	無蔵と縁むすて	*	*
79	互にそはに	*	*
80	天女	*	女
81	御恥かしやあても	*	*
82	いやなまたなゆめ	*	*
83	御縁てすしらぬ	*	*
84	浮世てすしらぬ	*	*
85	わ身やこの世界の	*	我身や此浮世の
86	人やあらぬ	*	*
87	銘苺子	*	*
88	天の雨てすも	天ノ雨ダンス	*
89	下て水なゆひ	*	*
90	おりて世界くれは	*	*
91	世界の人よ	*	*
92	天女	*	女
93	里かい言葉や	*	*
94	此世界の習ひ	*	*
95	天の御定め	*	*
96	我自由ならぬ	*	*
97	銘苺子	*	*
98	世界のよすことや	*	*
99	たかしちやか始め	*	*
100	天の御定めと	*	*
101	世界のならひ	*	*
102	天女	*	女
103	玉水にほれて	*	玉水におりて
104	飛衣やとられ	*	*
105	にや又自由ならぬ	*	*
106	里になれら	*	里になり[欠]
107	銘苺子	*	*
108	天の引合よ	*	天の引合か
109	神の引合しよ	神ノオタスケヨ	神の引合か
110	定めたる女	*	定めた[欠]
111	わ身やまたをらぬ	*	[欠]
112	けふからや互に	*	[欠]
113	契る嬉しや	*	[欠]
114			
115			
116			
117			
118			
119			
120	天女	*	女
121	あまおりしちわ身や	*	あまおりし[欠]
122	夢の間とやすか	*	[欠]
123	互になれそめて	*	[欠]馴染て
124	なし子わなひふたり	*	なし子ふたり
125	やあ思鶴よ	*	*
126	すゝられのくれしや	*	[欠]られのくりしや
127	此をひけひつれて	*	*
128	大原にいきやひ	*	*
129	遊てもとれ	*	遊び戻り
130	思なひ	*	*
131	てかよおめけひよ	*	出かよ / おめけい
132	大原にいきやひ	*	*
133	稲ひろて遊は	*	*
134	粟ひろてあすは	*	*
135	遊子持ふし	遊子持 [欠]	子抱哥
136	いやうひ / \	*	*
137	なくなやう	*	*
138	わか按司の飛御衣	*	*
139	我按司の舞御衣	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
140	六僕の蔵に	*	*
141	八僕の内に	*	*
142	稲束のしたに	*	*
143	粟束のうちに	*	*
144			百隠ち隠し
145	置ふるみしちやうん	*	置ふるみしちいん
146	おきさるししちやうん		さるししちやむ
147	ねなし起て啼なやう	子ナシ起テ啼ナ。	ねなし起て
148	なかならほくひゆんたう	ナカナレバクイヨン	*
149	遊ははとくひゆんたう	*	*
150	思なひ	*	*
151	やあおめけひよ	*	*
152	頓て夜もくれる	*	*
153	急ち立戻て	*	*
154	すたし母親の	*	*
155	側にをらに	*	*
156			
157			
158	天女	*	母
159	なし子もり素立	*	*
160	をらんでやりすれは	*	*
161	天の御定め	*	*
162	我自由ならぬ	*	*
163	互になれそめて	*	馴染て
164	なし子わなひふたり	*	*
165	姉のとしよめは	*	*
166	九ツになよひ	*	*
167			
168	をひけひとしことし	*	*
169	五ツいつきやても	*	*
170	をてもわなひならぬ	*	*
171	とはんでやりすれは	*	*
172	飛衣やなひらぬ	羽衣ヤナラン	*
173	此間やをたん	*	*
174	なし子い言葉に	*	*
175	八ツ僕の蔵に	*	*
176	もゝかくしかくち	*	百隠し隠■
177	ある事よ聞は	*	ある事[欠]
178	けふととまひつきやる	*	[欠]まいつちや[欠]
179	けふとわなひとたる	*	[欠]
180	明日の明雲に	*	[欠]
181	あちやのしら雲に	*	*
182	飛のやひのほら	*	*
183	とひのやひいかに	*	飛のやひいか■
184	此事よ聞は	*	此事よ知らは
185	此事よしらは	*	此事よ聞かは
186	もゝすかりすかて	*	*
187	はなす事ならぬ	*	*
188	わかなし子すかち	*	*
189	急ちねなしめて	*	*
190	夜明白雲と	*	*
191	つれてのほら	*	烈り登ら
192			天女
193	やあやあなし子	ヤア産子	*
194	今日明てあちやゝ	*	*
195	おしつれて遊は	*	*
196	いへも片時も	*	*
197	急ちねれよ	*	*
198	思なひ	*	*
199	やあ母親よ	*	*
200	いきやしかなけふや	*	*
201	母親の側(に)	*	*
202	いへも片時も	*	*
203	離れくれしや	*	*
204			天女
205			やあなし子
206			いそち寝りよ / \
207	思けひ	*	*
208	わぬも母親の	*	*
209	側にねらに	*	*
210	天女	△	*
211	やあなし子		*
212	急ちねれよ / \		*
213			

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
214	天女	*	同人
215	かにある憂苦しや	*	*
216	たかしちやることか	*	*
217	うらめてもきやしゆか	*	*
218	我肝さらめ	*	*
219	東江ふし	*	*
220	なし子ふやかれて	*	*
221	飛んてやりすれは	*	*
222	明日やはとまひて	*	*
223	なきゆらとめは	*	*
224	天女言葉并東江ふし	全フシ	天女云葉并哥
225	ねなしちをるうちに	子ナシチュル内ニ	*
226	別れらなきやしゆか	*	*
227	おすてもとすかり	*	*
228	すかるとめは	*	*
229			
230			
231			
232			
233			
234			
235			
236	思けひ	*	*
237	やあ母親よ	*	やあ母親[欠]
238	/ \	*	[欠]
239		全人	[欠]
240	やあ思なひよ	*	[欠]
241	母やをらぬ	母ヤヲラン / \	[欠]
242	思姉思けひ	思ナイ	思なへ
243	やあ母親よ	*	やあ母親[欠]
244	/ \ / \	/ \	/ \ [欠]
245			
246		思ケイ	[欠]
247	やあ思なひよ	*	やあ思な[欠]
248	母親やあれよ / \	母ヤアレヨ / \	[欠]れよ / \
249	思なひ	*	*
250	やあ母親よ	*	*
251	思けひとわぬすてゝ	*	*
252	まかひいきゆか	*	*
253	思けひ	*	*
254	わぬも列登ら	*	我のん烈りて登ら(思姉言葉)
255	やあ母親よ	*	*(思姉言葉)
256	/ \	*	/ \ / \ (思姉言葉)
257	天女	*	*
258	是きやてよとめは	*	*
259	飛もとはれらぬ	*	*
260	なし子ふやかれの	*	*
261	もゝのくれしや	*	*
262			
263		思ケイ	思けい
264			やあ母親よ
265	やあ思なひよ	*	*
266	母やしら雲の	*	母親や白雲の
267	かくち見らぬ	*	*
268			
269	東江ふし	*	兩人哥東江ふし
270	あけやうおめけよ	*	あけやう思けい
271	母見らぬ	母ヤ見ラン	母やめらん
272	思なひ	*	*
273	やあ思けひよ	*	*
274	いつきやてよなきゆか	*	*
275	互に立戻て	*	互にするな
276	このことや急ち	*	いそち立かけり
277	父にかたら	*	/ \
278			思なへ
279			やあおめけよ
280			肝も肝ならん
281			はちんはちならん
282			一 やあ思けいよ
283			/ \
284			思けいよ捨て
285			死は此■らに
286			いんまやのいちき
287			なよらとめは

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
288			思けい
289			やおめなひよ
290			/ \
291			影て夜もくれる
292			のかそ大原に
293			ねなす[欠]けり
294			烈りていりよ
295	思けひ	*	
296	おめなひや急ち	*	
297	戻よらはもどれ	*	
298	わ身や母とまひて	*	
299	いかんしゆもの	*	
300		思ナイ	
301	やお思けひよ	*	
302	母やしら雲の	*	
303	かくち自由ならぬ	*	
304	明日や(押)列て	*	
305	互にとまいら	*	
306	けふや急ち立(戻)て	*	
307	父にかたら	*	
308	てかよ / \	*	
309			
310			
311			
312			
313			
314			
315			
316	子持ふし	*	
317	思けひとわ身や	*	
318	生れらぬむまれ	*	
319	十にたらぬうちに	*	
320	十にみたぬ内に	*	
321	母にすてられて	*	
322	わかれやひをれば	*	
323	五ツ頃をひけひ	*	
324	一期啼くらち	*	
325	ねふる夜もねらぬ	*	
326	たよる物はなち	*	
327	互に母おもて	*	
328	たかひになきくらち	*	
329	すゝられもくれしや	*	
330	すからても苦しや	スガラリノクリシヤ。	
331	思けひよつれて	*	
332	母とまひて行ん	*	
333	足まるひするな	*	
334	つまころひするな	*	
335	こかときやてとまひて	*	
336	こかときやてきちも	*	
337	母親や見らぬ	*	
338	母親やをらぬ	*	
339	夜もぐれていきゆひ	夜ンクレテイキユン	
340	足本もやめは	*	
341	ひきゆる足ひからぬ	引ヨル足ヒカリラン、	
342	肝くれていきゆん	*	
343	思なひ	*	
344	やお思けひよ	*	
345	此間のつかれ	*	
346	足もひかれらぬ	*	
347	目本くら / \ と	*	
348	なるかしんき	*	
349	思けひ	*	
350	やお思なひよ	*	
351	足まるひするな	*	
352	急ち立おけれ	*	
353	/ \		
354	やお思なひよ	*	
355	/ \	*	
356	【のかす】のかす思なひや	*	
357	ものい声もすらぬ	物言声ナラン	
358			
359	銘苺子	*	*
360			
361	あゝ肝もきもならぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
362	かにくれしやあるい	*	*
363	五ツ頃をひけひ	*	
364	十にたらぬ姉	*	
365	母に捨られて	*	
366	別れやひをれは	*	
367			玉こかね二人
368			母の事思て
369	ねふる夜もねらぬ	*	*
370	たゆるものはなち	*	*
371			そかそわん鳴ん
372			朝夕さんし[欠]
373	あの松の下に	*	あの川のはたに
374	あの川の本に	*	あのまつの下[欠]
375	朝夕いきくらち	*	[欠]て
376	足すとてなけは	*	あし[欠]
377	肝もきもならぬ	*	[欠]
378	けふや夜も暮る	*	[欠]
379	急ち立寄ひ	*	いそち立よ■い
380	わかなし子すかち	*	[欠]
381	列戻ていかに	*	[欠]
382	引つれていかに	*	[欠]
383			銘苺子
384	やあ / \ なし子	*	やあなし子
385	夜も暮て行ん	*	夜も暮ておれは
386			こま居[欠]
387	いそちたちもとれ	急ち立戻ラ。	たう / \ いそち戻ら
388	思けひ	*	かめ十
389	やあ父親よ	*	*
390			思なひ■あまに
391			ねな[欠]らん
392	すたし母親や	*	
393	とまれはもをらぬ	*	
394	おめなひとわ身や	*	
395	いきやかしゆゝら	*	
396	銘苺子	*	*
397	やあ思鶴よ	*	*
398	たによ聞留れ	*	
399	けふからや明日からや	*	
400	母の事思て	*	
401	泣よ又するな	*	
402	すたしはおやゝ	*	母親の事や
403	世界の人あらぬ	*	*
404	あまおりしやる女	*	あまおりしやる■
405	あま下りしやる女	/ \	*
406	天登てからや	*	
407			なく浦めとてなちん
408	下ることならぬ	*	戻る事ならん
409	ならぬ事思て	*	
410	泣くらちをすや	*	
411	母の為ならぬ	*	*
412	我が為にならぬ	*	*
413	思けひよすかち	*	
414	互におひたちやひ	*	
415	首里みやたりしゆすと	*	
416	按司みやたりしゆすと	*	
417	子の道たいもの	*	
418	親の為やこと	*	
419	たによきゝ留て	*	
420	肝に思染て	*	
421	けふからや明日からや	*	*
422	母とまひてなくな	*	*
423	母呼ひなくな	*	
424			たう / \ いそち戻ら
425	思なひ	◎	*
426	やあ父親よ		*
427			母親の事や
428			世界の人あらん
429			白雲のかくち
430			自由ならん有は
431	思尽ちをても		
432	此世をて母に		
433	また拝むことの		
434	ならぬてよやれは		
435	いきやし暮しやしゆゝか		

銘苧子校合資料(4)

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
436	思けひと我身や		*
437			いちやかしよら
438	銘苧子		*
439	い言葉にわぬも		
440	面影のまさて		
441	うらめてもきやしゆか		
442	我肝さらめ		
443			なし子云葉に
444			わ身む母親の
445			面影のまさて
446			わすりくれしや
447			
448	上使	*	首里御使
449	出様ちやる者や	*	*
450	首里の御使	*	*
451	あゝ銘苧子とちや	*	銘苧子妻や
452	あまおりしやる女	*	あまおりしよる
453	天の御定め	*	*
454	自由ならぬあたら	*	自由ならんあとて
455			なし■□捨て
456			白雲に登り
457			なし子思つと
458			嫡子亀千代や
459			た[欠]わなち
460			朝夕鳴くらち居[欠]
461	五ツころをひけひ	*	
462	十にみたぬをなひ	*	
463	ふりすてゝ今や	*	
464	飛うせてをらぬ	*	
465	親とまひいまよて	*	
466	高松の下に	*	
467	朝夕つれ行ひ	*	
468	啼暮ちをんてやり	*	
469	首里城までも	*	首里[欠]
470	取沙汰のあれは	取沙汰ヨアリバ、	取沙汰の[欠]
471			世の始や[欠]
472	思なひや	*	[欠]
473	御城の内に	*	[欠]
474	御素立よめしやいん	*	[欠]よめやん
475	思けひや	*	嫡子亀千代や
476	ほと／＼にならば	*	をとく立め[欠]
477	御取立めしやいん	*	
478	御素立よめしやいん	*	
479	又親の銘苧子や	*	*
480	首里の御位	*	*
481	たへめしやいんてやり	*	*
482	このみよんき拝て	*	美御面事拝て
483	なまと行る	*	なまと行ん
484	高松の本も	*	高松の下や
485	道すからたひもの	*	*
486	直に立寄ひ	*	*
487	たつねやひむたに	*	見[欠]
488	同人	上使	御使
489	やあ／＼銘苧し	*	*
490	首里の御使とやゆる	*	首里の御使にきいちやん
491			
492	銘苧子	*	*
493	あゝのふことかやゆら	*	*
494	上使	*	首里之御使
495			やあ銘苧子
496			なし子思鶴と
497			かめ十か事や
498	銘苧子かなし子	*	
499	母にすてられて	*	
500	朝夕親とまひて	*	
501	啼暮ちをる事や	*	鳴くらち居事よ
502	首里城までも	*	首里まてん
503			御によかて
504	取沙汰のあてと	取沙汰ノアトテ	
505	世にかはてをれは	*	世の始やり
506	世に始やこと	*	*
507			銘苧子や
508			首里の御位
509			たへ免やん



銘苺子校合資料(4)

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
510	なし子思鶴や	*	
511	御城の内に	*	
512	御素立よめしやいん	*	
513	嫡子亀千代や	*	*
514	ほとほとにならば	*	程立免やいん
515	御素御取立めしやいん	ウノ御取立召ソ。	
516	又銘苺子や	*	
517			又娘思鶴や
518			御城の内に
519			御素立よ免やんての
520	首里のおゑか	*	
521	たへめしやいんてやりの	*	
522	御使とやゆる	*	*
523	銘苺子	*	*
524	あゝたうと	*	*
525	夢やちやうもむたぬ	*	
526	もゝかほとつきやる	*	
527	やあなし子	*	
528	みすく聞拜め	*	
529	此御思たうとさや	*	*
530			首里天加那志の
531			十百歳おかま■事
532			御か風
533			夜ひる■
534			神願よしやひ■わあ
535	胸に思染れ	*	
536	肝に思留て	*	
537	けふからや明日からや	*	
538	打笑て遊へ	*	
539	うちほこて遊へ	*	
540	大原とやゆる	*	*
541	先宿んかい	*	先内むかい
542	おんつかいしやへら	*	御つかいよしやへら
543			
544			やあなし子
545			今日の嘩らしや
546			者に立らり■
547			互に押烈て
548			■て遊わ
549	たう / \	*	
550	かほ事とやゆる	*	
551	すてことよたひもの	*	
552	押列て宿に	*	
553	踊て戻ら	*	
554	立雲ふし	*	
555	夢やちやうもむたぬ	*	
556	百かほのつきやす	*	
557	あの松と川の	*	
558	ゆへとやゆる	*	
559	同ふし	*	
560	百かほのあれは	*	
561	あの松と川や	*	
562	むかしくりもどち	*	
563	見ほしやはかり	*	
564		銘苺子終	
565			
566		△ヤーナシクワ	
567		イソチ子レヨ / \	
568		◎思姉	
569		や一父親よ	
570		おみつくちおてん	
571		この世をて母に	
572		またをかもことの	
573		ならんでよやれば	
574		いちやしくらしやびか	
575		おみけいとわみや	
576		銘苺子	
577		いことばにわみん	
578		おもかちのまさて	
579		うらみてんちやしゆが	
580		わちもさらめ	
581			今日の嘩ら [欠]
582			[欠]
583			[欠] おる花の

No.	尚家本組踊集	東京教育大本	豊川家本
584			露きやたくと
585			天女 義村里之子
586			銘苅子 識名親雲上
587			思ない 美里真三郎
588			首里御使 東風平里之子
589			思けい 幸地思武太

銘苧子校合資料(5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
1		
2	銘苧子	銘苧子
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11	銘苧子金入錦入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳足袋扇子	
12	天女かもし紫長巾作花金銀水引熨斗紙天冠琉縫薄衣裳飛衣足袋金銀薄磨之柄杓	
13	娘作花巾無(垂か)時服ネ同衣ひさ取裙足袋	
14	男子はあゆひかしらい金銀水引絹布緒付小袖単衣裳緞子貫物こほすい足袋	
15	上使縹子入道頭巾緞子衣裳錦之陳羽織末広足袋	
16	供式人黒縮緬入道頭巾黒紗綾袖(ママ)衣裳足袋	
17		
18		
19	銘苧子	[欠]
20	出様ちやるものや	*
21	銘苧子	*
22	原のいきもとり	*
23	はるのゆつきやひに	*
24	あの松尾見れば(尾は変体仮名と捉え	*
25	あの川の本に	*
26	天と地に光り	*
27	さしまはてからに	*
28	かはしや匂高さ	*
29	しちやの事ならぬ	*
30	肝ふしき思て	*
31	心付見れば	*
32	頭毛のあすか	*
33	しちやの髪ならぬ	*
34	けふのよかるに	けふのよかる日に
35	けふの増る目に	*
36	かたはらにかくれ	*
37	傍らにたちやひ	*
38	待受てむたに	*
39	まちとめてむたに	
40	通水ふし	歌通水ふし
41	若夏かなれば	*
42	心うかさされて	*
43	玉水におりて	*
44	かしらあらは	*
45		
46		
47		
48		
49		
50		
51	早作田ふし天女松に飛衣をかけ立直見合	歌はやつくやうふし
52	けふのよかる日や	*
53	しちやのめもなひらぬ	*
54	ころやす/と	*
55	あらてのほら	*
56		
57	天女	天女言
58	やあ/	*
59	いきやる事あとして	*
60	しらぬ思里か	*
61	羽衣をとやひ	*
62	まかひいきゆか	*
63	銘苧し	銘苧子言
64	我か松とやゆる	*
65	わか川とやゆる	*
66	のよてはころもを	*

銘苺子校合資料(5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
67	かけておちあか	*
68	天女	天女言
69	里やものしらぬ	*
70	天と地のなさけ	*
71	ふやはちとめたる	*
72	松も玉水も	*
73	わかものといふすや	*
74	無理やあらね	*
75	銘苺し	銘苺子言
76	天と地の情け	*
77	振合(フヤワシユ)しゆる浮世	*
78	無蔵と縁むすて	*
79	互にそはに	互にそ [欠]
80	天女	天女言
81	御恥かしやあても	*
82	いやなまたなゆめ	*
83	御縁てすしらぬ	*
84	浮世てすしらぬ	*
85	わ身やこの世界の	*
86	人やあらぬ	*
87	銘苺子	銘苺子言
88	天の雨てすも	*
89	下て水なゆひ	*
90	おりて世界くれは	*
91	世界の人よ	*
92	天女	天女言
93	里かい言葉や	*
94	此世界の習ひ	*
95	天の御定め	*
96	我自由ならぬ	*
97	銘苺子	銘苺子言
98	世界のよすことや	*
99	たかしちやか始め	*
100	天の御定めと	*
101	世界のならひ	*
102	天女	天女言
103	玉水にほれて	*
104	飛衣やとられ	*
105	にや又自由ならぬ	*
106	里になれら	*
107	銘苺子	銘苺し言
108	天の引合よ	*
109	神の引合しよ	*
110	定めたる女	*
111	わ身やまたをらぬ	*
112	けふからや互に	*
113	契る嬉しや	*
114		
115		
116		
117		
118		
119		
120	天女	
121	あまおりしちわ身や	*
122	夢の間とやすか	*
123	互になれそめて	*
124	なし子わなひふたり	*
125	やあ思鶴よ	*
126	すゝられのくれしや	*
127	此をひけひつれて	*
128	大原にいきやひ	*
129	遊てもとれ	*
130	思なひ	おめない言
131	てかよおめけひよ	*
132	大原にいきやひ	*
133	稲ひろて遊は	*
134	粟ひろてあすは	*
135	遊子持ふし	歌あそひ子持ふし
136	いやうひ / \	*
137	なくなやう	*
138	わか按司の飛御衣	*
139	我按司の舞御衣	*
140	六侯の蔵に	*

銘苺子校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
141	八僕の内に	*
142	稲束のしたに	*
143	粟束のうちに	*
144		
145	置ふるみしちやうん	*
146	おきさるししちやうん	*
147	ねなし起て啼なやう	*
148	なかならはくひゆんたう	なかなれはくいよむ
149	遊ははとくひゆんたう	*
150	思なひ	おめない言
151	やあおめけひよ	*
152	頓て夜もくれる	*
153	急ち立戻て	*
154	すたし母親の	*
155	側にをらに	*
156		
157		
158	天女	天女言
159	なし子もり素立	*
160	をらんでやりすれは	*
161	天の御定めの	*
162	我自由ならぬ	*
163	互になれそめて	*
164	なし子わなひふたり	*
165	姉のとしよめは	*
166	九ツになよひ	*
167		
168	をひけひとしことし	*
169	五ツいつきやても	*
170	をてもわなひならぬ	*
171	とはんでやりすれは	*
172	飛衣やなひらぬ	*
173	此間やをたん	*
174	なし子い言葉に	*
175	八ツ僕の蔵に	*
176	もゝかくしかくち	*
177	ある事よ聞は	*
178	けふととまひつきやる	*
179	けふとわなひとたる	*
180	明日の明雲に	*
181	あちやのしら雲に	*
182	飛のやひのほら	*
183	とひのやひいかに	*
184	此事よ聞は	此事としらハ
185	此事よしらは	此事よきかハ
186	もゝすかりすかて	*
187	はなす事ならぬ	*
188	わかななし子すかち	*
189	急ちねなしめて	*
190	夜明白雲と	*
191	つれてのほら	*
192		
193	やあやあなし子	*
194	今日明てあちやゝ	*
195	おしつれて遊は	*
196	いへも片時も	*
197	急ちねれよ	*
198	思なひ	おめない言
199	やあ母親よ	*
200	いきやしかなけふや	*
201	母親の側 (に)	*
202	いへも片時も	*
203	離れくれしや	*
204		天女言
205		やあなし子
206		急ちねれよ / \
207	思けひ	おめけい言
208	わぬも母親の	*
209	側にねらに	*
210	天女	天女言
211	やあなし子	*
212	急ちねれよ / \	*
213		
214	天女	歌東江ふし

銘苺子校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
215	かにある憂苦しや	* (東江節)
216	たかしちやることか	* (東江節)
217	うらめてもきやしゆか	* (東江節)
218	我肝さらめ	* (東江節)
219	東江ふし	歌右同
220	なし子ふやかれて	*
221	飛んでやりすれは	*
222	明日やはとまひて	*
223	なきゆらとめは	*
224	天女言葉并東江ふし	歌右同
225	ねなしちをるうちに	*
226	別れらなきやしゆか	*
227	おすてもとすかり	*
228	すかるとめは	*
229		
230		
231		
232		
233		
234		
235		
236	思けひ	おめけい言
237	やあ母親よ	*
238	/ \	*
239		
240	やあ思なひよ	やあ思なひ
241	母やをらぬ	*
242	思姉思けひ	おめない言
243	やあ母親よ	*
244	/ \ / \	/ \
245		
246		おめけい言
247	やあ思なひよ	*
248	母親やあれよ / \	*
249	思なひ	おめない言
250	やあ母親よ	*
251	思けひとわぬすてと	*
252	まかひいきゆか	*
253	思けひ	おめけい言
254	わぬも列登ら	*
255	やあ母親よ	*
256	/ \	*
257	天女	歌東江ふし
258	是きやてよとめは	*
259	飛もとはれらぬ	飛 [欠] れらぬ
260	なし子ふやかれの	*
261	もとのくれしや	*
262		
263		おめけい言
264		
265	やあ思なひよ	*
266	母やしら雲の	母親や白雲の
267	かくち見らぬ	*
268		
269	東江ふし	歌東江ふし
270	あけやうおめけよ	あけやうおめ [欠] りよ
271	母見らぬ	母やめらぬ、
272	思なひ	おめない言
273	やあ思けひよ	*
274	いつきやてよなきゆか	*
275	互に立戻て	*
276	このことや急ち	*
277	父にかたら	*
278		
279		
280		
281		
282		
283		
284		
285		
286		
287		
288		

銘苺子校合資料(5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
289		
290		
291		
292		
293		
294		
295	思けひ	おめけい言
296	おめなひや急ち	*
297	戻よらはもとれ	*
298	わ身や母とまひて	*
299	いかんしゆもの	*
300		おめない言
301	やあ思けひよ	*
302	母やしら雲の	*
303	かくち自由ならぬ	*
304	明日や(押)列て	*
305	互にとまいら	*
306	けふや急ち立(戻)て	*
307	父にかたら	*
308	てかよ / \	*
309		
310		
311		
312		
313		
314		
315		
316	子持ふし	歌子持ふし
317	思けひとわ身や	*
318	生れらぬむまれ	*
319	十にたらぬうちに	*
320	十にみたぬ内に	*
321	母にすてられて	*
322	わかれやひをれは	*
323	五ツ頃をひけひ	*
324	一期啼くらち	*
325	ねふる夜もねらぬ	*
326	たよる物はなち	*
327	互に母おもて	*
328	たかひになきくらち	*
329	すゝられもくれしや	*
330	すからても苦しや	すかられんくれしや、
331	思けひよつれて	*
332	母とまひて行ん	*
333	足まろひするな	*
334	つまころひするな	*
335	こかときやとまひて	*
336	こかときやてきちも	*
337	母親や見らぬ	*
338	母親やをらぬ	*
339	夜もくれていきゆひ	夜やくれていきゆ [欠]
340	足本もやめは	*
341	ひきゆる足ひからぬ	*
342	肝くれていきゆん	*
343	思なひ	おめない言
344	やあ思けひよ	*
345	此間のつかれ	*
346	足もひかれらぬ	*
347	目本くら / \ と	*
348	なるかしんき	*
349	思けひ	おめけい言
350	やあ思なひよ	*
351	足まろひするな	*
352	急ち立おけれ	*
353	/ \	*
354	やあ思なひよ	*
355	/ \	*
356	【のかず】のかず思なひや	*
357	ものい声もすらぬ	*
358		
359	銘苺子	銘苺子言
360		
361	あゝ肝もきもならぬ	*
362	かにくれしやあるい	*

銘苺子校合資料(5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
363	五ツ頃をひけひ	*
364	十にたらぬ姉	*
365	母に捨られて	*
366	別れやひをれば	*
367		
368		
369	ねふる夜もねらぬ	*
370	たゆるものはなち	*
371		
372		
373	あの松の下に	*
374	あの川の本に	*
375	朝夕いきくらち	*
376	足すとてなけは	*
377	肝もきもならぬ	*
378	けふや夜も暮る	*
379	急ち立寄ひ	*
380	わかなし子すかち	*
381	列戻ていかに	*
382	引つれていかに	*
383		
384	やあ / \ なし子	*
385	夜も暮て行ん	*
386		
387	いそちたちもとれ	*
388	思けひ	おめけい言
389	やあ父親よ	*
390		
391		
392	すたし母親や	*
393	とまれはもをらぬ	*
394	おめなひとわ身や	*
395	いきやかしゆゝら	*
396	銘苺子	銘苺子言
397	やあ思鶴よ	*
398	たによ聞留れ	*
399	けふからや明日からや	*
400	母の事思て	*
401	泣よ又するな	*
402	すたしはおやゝ	*
403	世界の人あらぬ	*
404	あまおりしやる女	*
405	あま下りしやる女	*
406	天登てからや	*
407		
408	下ることならぬ	*
409	ならぬ事思て	*
410	泣くらちをすや	*
411	母の為ならぬ	*
412	我が為にならぬ	*
413	思けひよすかち	*
414	互におひたちやひ	互おひたちやひ
415	首里みやたりしゆすと	*
416	按司みやたりしゆすと	*
417	子の道たいもの	*
418	親の為やこと	*
419	たによきゝ留て	*
420	肝に思染て	*
421	けふからや明日からや	*
422	母とまひてなくな	*
423	母呼ひなくな	*
424		
425	思なひ	おめない言
426	やあ父親よ	*
427		
428		
429		
430		
431	思尽ちをても	*
432	此世をて母に	*
433	また拝むことの	*
434	ならぬてよやれは	*
435	いきやし暮しやしゆゝか	いきやしくらしゆよか
436	思けひと我身や	*



銘苧子校合資料(5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
437		
438	銘苧子	銘苧子言
439	い言葉にわぬも	*
440	面影のまさて	*
441	うらめてもきやしゆか	*
442	我肝さらめ	*
443		
444		
445		
446		
447		
448	上使	上使言
449	出様ちやる者や	*
450	首里の御使	*
451	あゝ銘苧子とちや	*
452	あまおりしやる女	*
453	天の御定め	*
454	自由ならぬあたら	*
455		
456		
457		
458		
459		
460		
461	五ツころをひけひ	*
462	干にみたぬをなひ	*
463	ふりすてゝ今や	*
464	飛うせてをらぬ	*
465	親とまひいまよて	*
466	高松の下に	*
467	朝夕つれ行ひ	朝夕 [欠] いきやひ
468	啼暮ちをんてやり	*
469	首里城までも	*
470	取沙汰のあれは	*
471		
472	思なひや	おめ [欠] ひや
473	御城の内に	*
474	御素立よめしやいん	*
475	思けひや	*
476	ほと / \ にならハ	ふと / \ [欠] ならハ
477	御取立めしやいん	*
478	御素立よめしやいん	[欠] 素立よめしやいん
479	又親の銘苧子や	*
480	首里の御位	*
481	たへめしやいんてやり	*
482	このみよんき拝て	みおうんき事拝て
483	なまと行る	*
484	高松の本も	*
485	道すからたひもの	*
486	直に立寄ひ	*
487	たつねやひむたに	*
488	同人	上使言
489	やあ / \ 銘苧し	*
490	首里の御使とやゆる	*
491		
492	銘苧子	銘苧子言
493	あゝのふことかやゆら	*
494	上使	上使言
495		
496		
497		
498	銘苧子かなし子	*
499	母にすてられて	*
500	朝夕親とまひて	*
501	啼暮ちをる事や	*
502	首里城までも	*
503		
504	取沙汰のあてと	取沙汰のあとて
505	世にかはてをれは	*
506	世に始やこと	*
507		
508		
509		
510	なし子思鶴や	*

銘苺子校合資料 (5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
511	御城の内に	*
512	御素立よめしやいん	*
513	嫡子亀千代や	*
514	ほとほとにならば	*
515	御素御取立めしやいん	をの御取立めしやいん、
516	又銘苺子や	*
517		
518		
519		
520	首里のおゑか	*
521	たへめしやいんてやりの	*
522	御使とやゆる	*
523	銘苺子	銘苺子言
524	あゝたうと	*
525	夢やちやうもむたぬ	*
526	もゝかほとつきやる	*
527	やあなし子	*
528	みすく聞拜め	*
529	此御恩たうとさや	御恩たうとさや
530		
531		
532		
533		
534		
535	胸に思染れ	むねにおめそめて
536	肝に思留て	*
537	けふからや明日からや	けふからやあちやから [欠]
538	打笑て遊へ	*
539	うちほこて遊へ	*
540	大原とやゆる	*
541	先宿んかい	*
542	おんつかいしやへら	おんつかいよしやへら
543		
544		
545		
546		
547		
548		
549	たう / \	*
550	かほ事とやゆる	*
551	すてことよたひもの	*
552	押列て宿に	*
553	踊て戻ら	*
554	立雲ふし	歌立雲ふし
555	夢やちやうもむたぬ	*
556	百かほのつきやす	*
557	あの松と川の	めくミある御代の
558	ゆへとやゆる	*
559	同ふし	
560	百かほのあれは	
561	あの松と川や	
562	むかしくりもとち	
563	見ほしやはかり	
564		
565		
566		
567		
568		
569		
570		
571		
572		
573		
574		
575		
576		
577		
578		
579		
580		
581		
582		
583		
584		

銘苅子校合資料(5)

No.	尚家本組踊集	伊舎堂用八所蔵本
585		
586		
587		
588		
589		

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1	大川敵討	忠孝婦人	大川敵討
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24	谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に 金磨之龍之角飴有ル太刀刀茶色緞 子羅陳羽織錦之飴有ル脚胖足袋大 団金入錦之細帯		
25	石川満名黒綸子入道頭巾向に金欄 に而飴有ル黒細裕衣裳刀脚胖足袋		
26	門番黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣 裳脚胖足袋差縄		
27	きやうちやく持黒木綿単衣裳脚胖 足袋		
28	若按司かしらひ板ゞ縮緬振袖単衣 裳足袋風車こふすい		
29	村原黒綸子入道頭巾向に金欄に而 飴有ル黒紗綾裕衣裳綸子広袖羽織 刀太刀足袋物賈之時黒綸子入道頭 巾編笠細物加籠に入付陳賦之時羅 陳羽織甲胸当脚胖金之磨		
30	原国兄弟長刀半向頭巾紕花青銅ネ 同衣裳脚胖足袋中入より入道頭巾 綿		
31	村原母并妻かもし紫長巾金銀水引 熨斗作花助巾琉縫薄衣裳足袋妻谷 茶城江参候時女笠杖持帰り候時長 刀母黒地形付衣裳		
32	西川の子瀬底下こおり西川の支 (ママ)喜瀬之大屋子四人黒西洋 布入道頭巾黒木綿単衣刀脚胖足袋		
33	泊井紕西洋巾黒木綿衣裳脚胖足袋 陳賦之時黒西洋入道頭巾		

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
34	村原子紕縮緬衣裳		
35		村原のひや	村原のひや
36	一 出様ちやるものや、	一 是や	*
37	大川の按司の頭役	*	*
38	村原のひや、	*	*
39	今帰仁の城	今帰仁の御城	*
40	御使にいきやひ、	*	*
41	戻る道すから	*	*
42	聞ハ腹立や、	*	*
43	あゝ谷茶あまやか	はあ谷茶あまやか	*
44	野心事巧て、	*	*
45	のゝ事も思ぬ	*	*
46	大川の按司の、	*	*
47	国々の按司部	*	*
48	討たんでやりしゆんで、	*	*
49	島々よ廻て	*	*
50	段々にいなち、	*	*
51	加勢頼入	*	*
52	軍押寄すて、	*	軍打寄て
53		大川の城	大川の城
54		七重八重	七重八重
55		取囲みかくて。	取囲みかこて
56	俄事やれは	*	*
57	分別もならぬ、	*	*
58	多勢(三無勢)	*	*
59	力及はらぬ、	*	*
60	按司や討死	*	*
61	思子の事や、	*	*
62	あゝ口惜や	*	*
63	敵の生捕やい、	*	*
64	按司の跡つかち	*	*
65	御素立よてやり、	*	*
66	欲悪なやから	*	*
67	慈悲の肝饅て、	*	*
68	此村原か	*	*
69	有難さ思て	*	*
70	降参よすらハ、	*	*
71	思子諸ともに	*	*
72	打果さむての	*	*
73	計得とやゆる、	*	*
74	あゝ心れてとをゆる	*	*
75	仕合しとやゆる、	*	*
76	大川の御運	大川の武運	*
77	世に残てをれハ、	*	*
78	いきやしかな思子	*	*
79	取戻ちからに、	*	*
80	時節待受て	*	*
81	敵討んともて、	*	*
82	村原か命ち	*	*
83	なからへてをゆん、	*	*
84	あゝたうと	*	*
85	神仏そろて	*	*
86	助やひたはふれ、	*	*
87			
88	村原母妻子出羽散山ふし	*	*
89	一 まことかや実か	*	*
90	ワきもほれ / \ と	*	*
91	ねさめおとろきの	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
92	夢の心地	*	*
93		乙樽	乙樽
94	一 三人の者や	*	*
95	大川の按司の、	*	*
96	頭役村原か	*	*
97	母やとちなし子、	*	*
98	谷茶あまやか	*	*
99	野心事巧て、	*	*
100	のゝ事も思ぬ	*	*
101	大川の按司の、	*	*
102	国々の按司部	*	*
103	討んでやりしゆんで、	*	*
104	島々よ廻て、	*	*
105	色々に云なち、	*	*
106	加勢頼入	*	*
107	軍押寄て、	*	*
108	按司添と共に	*	*
109	村原のひやも、	*	*
110	討死よてやり	*	*
111	しらへのあれハ、	しらし部のありは。	*
112	夢現心	*	*
113	肝もきもならぬ、	*	*
114	無常の此世界や	*	*
115	かにもあるひ、	*	*
116	やああや前よ、	*	*
117	なく泪ともに	*	*
118	なひ【ほしやと】ほしやとあすか、	*	*
119	忍ひ隠れとて	*	*
120	一人子乙松【か】(や)、	*	*
121	取素立 / \	*	*
122	人になちからや(に)、	*	人になちからに
123	親ふしの跡や	*	*
124	継しほしやの、	*	*
125	たう / \ 落る露泪も	*	*
126	押はらへ / \、	*	*
127	御気張よめしやうれ	*	*
128	御供しやへら、	*	*
129	母	*	*
130	一 いらぬ年寄の	*	*
131	長生ハしちをて、	*	*
132	あけやうこの憂目	*	*
133	むるか心気、	*	*
134	迎ももろともに	*	*
135	ならんてやりすれハ、	ならんたいすりは	*
136	朝夕手はなさぬ	*	*
137	玉の乙松か、	*	*
138	花のおもかほの	*	*
139	名残立増て	*	*
140	いきやしわすれゆか	*	*
141	あの世までも、	*	*
142	乙樽	*	*
143	一 いらぬことめしやうな		*
144	後れてや済ぬ、		*
145		一 なし子わなひふたり	
146		いちをいならん。	
147	気にまかち三人	*	*
148	諸共にならハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
149	村原か跡に	*	*
150	残る者をらぬ、	*	*
151	乙松よ素立	*	*
152	程程になさハ、	程々にならば	*
153	君親の事も	君親の事や	*
154	すらな置め、	*	*
155		たう / \ いらぬ事めしやうな	
156		後りてやすまん	
157	たう / \ 御気張よめしやうれ	御気張よめしやうり	*
158	御供しやへら、	*	*
159	仲間ふし	三人道行子持ふし仲間ふし	村原母并妻なし子道行仲間ふし
160	一 あたら人間に	*	*
161	生れやひをすか	*	*
162	やす / \ とくらす	*	*
163	ひまもなひらぬ	*	*
164	乙樽	*	*
165	一 のゝ罪のあたか	*	*
166	つれなさや三人、	*	*
167	母	*	*
168	一 あげやう忍はらぬ	*	*
169	心くら闇に、	*	*
170	道行なかんかりふし	子持ふし	三人道行なかんかりふし
171	一 ゆきまよひ / \	*	*
172	乙樽		*
173	一 いく先やしらぬ	*	*
174	野山さくひらも、	*	*
175	なかんかりふし		*
176	一 たゝあしにまかち	*	*
177	乙樽	*	*
178	一 かゝる方なひらぬ	*	*
179	行来しら玉の、	*	*
180	母	歌 干瀬ふし	*
181	一 露なたやあられ	*	*
182	雪もふり増て、	*	*
183			
184			
185			
186	子持ふし	母	*
187	一 冬の山嵐や	*	*
188	あし本もつまて	*	*
189	肝もきもならぬ	*	*
190	あげやういきやなゆか	*	*
191	乙樽	*	*
192	一 御気張よめしやうれ	*	*
193	頓て夜もあける、	*	*
194			
195			
196			
197			
198			
199	母	*	*
200	一 肝お(う)すていきゆん	*	*
201	しはしやすま、	*	*
202	乙樽	*	*
203	一 やああや前よ、		*
204	/ \、		*
205	同人		*
206	一 此子たちをれは	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
207	すと親のことも、	姑親の事や	すと親の事や
208	肝の俣ならぬ	*	*
209	急ちいそからぬ、	*	*
210	うつかつとしちをて	*	*
211	敵におひつかれ、	*	*
212	三人共憂め	*	*
213	むたよいかとても、	*	*
214	此子ともすてゝ	*	*
215	身すからになれハ、	*	*
216	すと一人かことや	*	*
217	自由になゆん、	*	*
218			同人
219	一 義理の道たひもの	*	*
220	思きらなゝゆめ、	*	*
221	やあ乙松よ、	*	やあ乙松
222		/ \	/ \
223	ワぬことる親に	わんもある親に	*
224	なさつたる因果、	*	なつたる因果
225	是までよたひもの	*	*
226	母の面かほも、	*	*
227	夢現心	*	*
228	起てむてよ、	*	*
229	あけやうあてなしの	*	*
230	のゝこともおまぬ、	*	*
231	哀れ楽々と	*	*
232	ねるか心気、	*	*
233			
234			
235			
236			
237	やあ乙松よ、	*	*
238	誠後生あらハ、	*	*
239	父親の側に、	*	*
240	先立ひむちをて	*	*
241	まちやいをれよ、	*	*
242		乙樽	
243	やあ乙松	やあ乙松よ	*
244	天の引合しに	*	*
245	情けある人の、	*	*
246	素立やひ呉らハ	*	*
247	主人親ふしの、	*	*
248	跡方ハ頼て	跡方や頼て	跡方や頼て
249	尋ねやひ呉れよ、	*	*
250			
251			
252			
253			
254	あゝた【ち】(ウ)と、	あゝたうと。	*
255	神佛そろて	*	*
256	見守やひたはふれ、	*	*
257	思切ひをすか	*	*
258	誠つらむては、	*	*
259	我肝忍はらぬ		*
260	やみになゆさ、		*
261	東江ふし	歌 東江ふし	*
262			一 あゝけ
263	一 ワきもしのはらぬ	*	*
264	闇になゆさ	*	*



No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
265	乙樽	*	*
266	一 やああや前よ、	*	*
267	頓て喜名村や	頓て喜名村	*
268	たよひ島たひもの、	*	*
269	御気張よめしやうれ	*	*
270	御供しやへら、	*	*
271	やああや前よ、	*	*
272	/、	*	*
273	母	*	*
274	一 肝もきもならぬ	*	*
275	しはし休ま、	*	*
276	村原	*	*
277	一 是や村原のひや、	*	*
278	義理のませ垣に	*	*
279	かこまれてワ身の、	*	*
280	浅ましや露の	*	*
281	命ちやすか、	*	*
282	思子取戻す	*	*
283	念願のあとて、	*	*
284	ねふる夜もねらぬ	*	*
285	忍てまわる、	*	*
286		同人	
287	こねや夜深さに	*	*
288	童へ鳴声や、	*	*
289	いきやしちやる事か	*	*
290	立寄ひむたに、	立寄やい見たに	*
291			
292	やあ乙松、	*	*
293	あゝ身にかへて朝夕	*	*
294	撫素立しゆたる、	*	*
295	この一人子やすか	*	*
296	ミたれ世になれハ、	*	*
297	哀れこのなひに	*	*
298	なすか心気、	*	*
299	母と乙樽も	*	*
300	行来しら玉の、	*	*
301	露霜と共に	*	*
302	なたらとめハ、	*	*
303	あゝ浅ましや、	*	*
304	いや、無常の此世界の	*	*
305	習ひやしらね、	*	*
306	おくれてやすまぬ	*	*
307	先にかゝら、	*	*
308	乙樽	*	*
309	一 やああや前よ、	*	*
310	/、	*	*
311	村原	*	*
312	一 やあ/、	*	*
313	かにある雪降に	*	*
314	こかと山道に、	*	*
315	いきやしちやる事か	*	*
316	二人の者や、	*	*
317	乙樽	*	*
318	一 首里からとやすか	*	*
319	旅の上の習や、	*	*
320	村原	*	*
321	一 やあ母親	*	*
322	やあ乙樽	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
323	母	*	*
324	一 やあ村原、	*	*
325	按司添とゝもに	*	*
326	なる筈の者の、	*	*
327	主の恩忘ひ	*	*
328	孝の道しらぬ、	*	*
329	のゝつらのあとて	*	*
330	とまいてきちやか、	*	*
331	浅ましや村原	*	*
332	命のあたらしやひ、	*	*
333	妻子のなさけ	*	*
334	しのはらぬあため、	*	*
335	村原	*	*
336	一 あゝめしやいること、	*	*
337	按司添と共に	按司添と諸共に	*
338	なる筈とやすか、	*	*
339	思子の事と	思子の事や	思子の事や
340	敵の生捕やい、	*	*
341	村原も共に	*	*
342	打果さむての、	*	*
343	分別ハ出ち	*	*
344	いこと葉ハ饅て、	*	*
345	過し按司かなし	*	*
346	跡継の思子、	*	*
347	御素立よてやり	*	*
348			
349	語ひへのあれハ、	*	*
350	いきやしかな思子	*	*
351	引取んともて、		*
352		取戻ちからに	
353		時節待請て	
354		敵打んともて	
355	村原か命ち	*	*
356	なからへてをゆん、	*	*
357	母	*	*
358	一 今のことやれハ	*	*
359	誇らしやとあゆる、	*	*
360	肝にきもそへて	*	*
361	念の入れよ、	*	*
362	村原	*	*
363	一 村原かいきち	*	*
364	此世界にをとて、	*	*
365	思子取戻ち	*	*
366	敵討な置め、	*	*
367	あゝ思ひ世に残ち	*	*
368	死やならぬ、	*	*
369	やあ乙樽、	*	*
370	いきやし乙松	いきやし乙松や	*
371	すてゝあたか、	*	*
372	母		*
373	一 咲出ゆる花ハ		*
374	ワ身に思かへち、		*
375	のゝ肝のあとて		*
376	捨てあたか、		*
377	乙樽	*	*
378	一 大川の城	*	*
379	仕合の時に、	*	*
380	按司添と共に	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
381	討死によ(て)やり、	*	*
382	語ひへのあれハ、	*	*
383	沙汰よ聞及て、	*	*
384	三人逃忍て	三人共逃忍て	*
385	こまゝてやきやすか、	*	*
386			
387			
388	親かなし事や	*	*
389	なれぬ山道の、	*	*
390	さくひらのつかれ	*	*
391	足本もつまで、	*	*
392	急ちいそからぬ	*	*
393	うつかつとしちをて、	*	*
394	敵に追つかれ	*	*
395	三人共憂目、	*	*
396	むたよいか迎も	*	*
397	哀れなく/＼も、	*	*
398	すとおやのために	*	*
399	すてゝあたん、	*	*
400	村原	*	*
401	一 あゝ此上とやすか	*	一 あゝ此上よやりは
402	誇らしやとあゆる、	*	*
403	またも世に出る	*	*
404	運のめくひ	*	*
405	乙樽	*	*
406	一 やあ/＼、	*	*
407	思子の事や	*	*
408	御格護よてやり、	*	*
409	聞ハ、嬉しさや	*	*
410	仕合とやゆる、	*	*
411	我身に思つきやる	我身に斗とる	*
412	事の又あすや、	*	*
413	あん前に名付	*	*
414	忍てむちからに、	*	*
415	命救てたはふれてやり	*	*
416	誠たん/＼と、	*	*
417	色々にいやは、	*	*
418	欲悪な谷茶	*	*
419	巧てをることの、	巧てをる事や	*
420	便りはしともて	*	*
421	疑ひやなひらぬ、	*	*
422	抱(かげ一)置積り、	*	*
423	我肝落着やい	我肝落着て	我肝落つちゆて
424	心ゆるさしやい	*	*
425	思子守なつけ	*	*
426	引とやひきやへら、	*	*
427	村原	*	*
428	思子為てやり	*	*
429	女身ハひちゆひ、	*	*
430	敵の手にやらす	*	*
431	事やならぬ、	*	*
432	乙樽	*	*
433	一 女又やても	*	*
434	男またやても、	*	*
435	思子のために	*	*
436	肝やひとつ、	*	*
437	乙樽原(ママ)	村原	村原
438	一 肝の上の事や	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
439	おの筈とやすか、	*	*
440	気ニまかちすにゆめ	*	*
441	義理のならひ、	義理の習や	*
442	乙樽	*	*
443	一 義理の道てすも	*	*
444	君親の為に、	*	*
445	肝盡す外の	*	*
446	事やなひさめ、	*	*
447	村原	*	*
448	村原か生ち	*	*
449	此世界にをとて、	*	*
450	思子為てやり	*	*
451	義理の道曲て、	*	*
452	女あてなしハ	*	*
453	敵の手にやらち、	*	*
454	末代の恥辱	あゝ末代の恥辱	*
455	面目やきやしゆか、	*	*
456	曾て此事や	はあ曾て此事や	*
457	ゆるす事ならぬ、	*	*
458	乙樽		*
459	一 いちもやく立ぬ		*
460	事す又やらハ		事よ又やらは
461	わない、女やても		*
462	谷茶あまやに、		*
463	一刀も掛て		*
464	討死はすらな、		*
465	徒に命ち		*
466	なからへてのしゆか、		*
467	たう / \ ゆるちたはふれ、		*
468	母	*	*
469	一 あゝ事あらくするな	一 やあ / \。事あらくするな	*
470		事急ちするな	
471	やあ乙樽、	やあ乙樽よ	*
472	思子為やれハ	*	*
473	おの筈とやすか、	*	*
474	事あらくしちや	*	*
475	仕損しの基ひ、	*	*
476	思子までかゝて	*	思子まで掛て
477	大事あらんしゆもの、	*	*
478	細々とまたく	*	*
479	はからやひくひれよ、	*	はからやくいれよ
480	乙樽	*	*
481	一 肝ぬるさしちをて	*	*
482	若か谷茶か	*	*
483	手段引替ち	*	*
484	思子の上に、	*	*
485	あらし聲のあらハ	*	*
486	願てをることも、	*	*
487	思てやくたゝぬ	*	*
488	あたとなゆる	*	*
489	村原	*	*
490	一 やあ乙樽、	*	*
491	女只ひちゆひ	女只一人は	*
492	敵の手にやらず、	*	*
493	きもの忍はらぬあてと	*	*
494	断やしちやる、	むはんやいちやる	*
495	今の心さし	あゝ今の志	*
496	いちも盡さらぬ、	いちんつくさらハ	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
497	誠村原か	*	*
498	とちの本意、	*	*
499	此外に手段	*	*
500	分別もならぬ、	分別やないらん	*
501	たう / \	*	*
502	念に念添て	*	*
503	気張て呉れよ、	*	*
504	乙樽	*	*
505			
506	一 思たこと叶て	*	*
507	ほこらしやとあゆる、	*	*
508	命のあるかきり	*	*
509	こゝろつくさ、	心尽しやへら	*
510	母	*	*
511	一 やあ乙樽、	*	*
512	思子為てやり	*	*
513	命ちふりすてゝ、	*	*
514	今のこと云すや	*	*
515	誇らしやとあすか、	*	*
516	行先の定め	*	*
517	さたまらぬあれハ、	*	*
518	あけやう思盡す	*	*
519	かたもなひらぬ、	*	*
520	乙樽	*	*
521	一 人の願事の	一 人の願事や	*
522	あたに又なゆめ、	*	*
523	こゝろ安す / \と	*	*
524	御待めしやうれ、	*	*
525	村原	*	*
526	一 やあ乙樽、	*	*
527	あらく掛引も	*	*
528	有積りたひもの、	*	*
529	腹立ぬことに	*	腹立も事に
530	心しつめとて、	*	*
531	いこと葉に應し	*	*
532	取廻し / \、	*	*
533	請答よふ	請返答ゆう	請返答よを
534	了簡よすれ、	*	了簡よすれよ
535	乙樽	*	*
536	一 我胸に留て	*	*
537	ワか肝に染て、	*	*
538	仰す事まゝに	*	*
539	念のいらに、	*	*
540	村原	*	*
541	一 若か事洩て	*	*
542	ならぬおの涯や、	*	*
543	別に計とる	*	*
544	手段又あもの、	*	*
545	後れらぬことに	*	*
546	切巧てをる次第、(切は見せ消ちか)	巧てをる次第。	巧てをる次第
547	親子此三人	*	*
548	隠とる段、	*	*
549	一々細々	*	*
550	白状よすれ、	*	*
551	あゝ繰返し / \	*	*
552	又事とやすか、	*	*
553	互に面目や	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
554	失なワぬことに、	*	うしないぬ事に
555	思子引とゆる	*	*
556	要目ところ、	*	*
557	ゑひ能々分別	能々分別	*
558	題目とやゆる、	*	*
559	やあ乙樽、	*	*
560	やく立ぬ我身の	*	*
561	とじなたる因果、	*	*
562	あゝ口惜や、	*	*
563			
564			
565			
566			
567			
568			
569			
570			
571			
572			
573	乙樽	*	*
574	一 たとひ事洩て	*	*
575	生殺しされててやり、	*	*
576	思子為やれは	*	*
577	残る事なひらぬ、	*	*
578	心安す/ \と	*	*
579	極楽とやゆる、	*	*
580	村原	*	*
581	一 あゝいふる事よきけハ	*	*
582	肝にひし/ \と、	*	*
583	むかし物語り	*	*
584	聞ゆることに、	*	*
585	よの中の手本	*	*
586	沙汰と残る、	*	*
587	乙樽	*	*
588			
589			
590			
591			
592			
593	一 此子乙松や	*	*
594	御素立めしやうち、	*	御素立よめしやうち
595	人なゆることに	*	*
596	計やひたはふれ、	*	*
597	村原	*	*
598	一 念遣するな	*	*
599	おの素立しゆもの、	*	*
600	すと子の事や、	*	*
601	気遣するな、	*	*
602	乙樽	*	*
603	一 やああや前よ、	*	*
604	頓てワか思子	*	*
605	をかてこんしゆもの、	*	*
606	肝願よしちをて	肝の願しちゆて	*
607	御待めしやうれ、	*	*
608		母	
609		一 義理のみちやれハ	
610		留てとめらゝん	
611	母言葉并伊野波ふし		*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
612	一 義理のみちやれハ		*
613	留てとめららぬ、		*
614	乙樽	*	*
615	一 よ所しれ(て)からや	*	*
616	大事あらんしゆもの、	*	*
617	急ち立戻て	*	*
618	まちやひいまふれ、	御待めしやうれ	*
619	伊野波ふし下句	歌仲間ふし	伊野波ふし母并村原南表の幕に入 乙樽北表の幕二入
620	一 のかすとくかにある	一 ぬかすどくかにやる	*
621	夢の世界や	夢の浮世	*
622			
623		歌仲間ふし	
624		一 是迄かやよら	
625		又拝もことも	
626		今日の出立や	
627		定めくりしや	
628	乙樽道行金武ふし	乙樽道行饒波ふし	*
629	一 胸にものおめハ	*	*
630	歩む道ほとも	*	*
631	覚らすにつきやさ	*	*
632	本の城	*	*
633	乙樽	*	*
634	一 覚らすに谷茶	*	*
635	城元につきやん、	*	*
636	物めつめしちをて	*	*
637	案内よすらに、	*	*
638			
639	やあ/\、御取次頼ま	*	*
640	ものしられしやへら、	*	*
641			
642	門番	*	*
643	一 はあ/\無作法/\、	*	*
644	内原にいきやひ	*	*
645	御取次しやうれ、	*	*
646	乙樽	*	*
647	一 やあ/\、	*	*
648	我身や大川の	*	*
649	思子虎千代が、	*	*
650	乳親とやゆる	*	*
651	守あんとやゆる、	*	*
652	大川の城	*	*
653	仕合の時(に)	仕合の内に	*
654	あはてさま逃て	*	*
655	かくれやひをたん、	*	*
656	かゝる方なひらぬ	*	*
657	すかる方なひらぬ、	暮そ方ないらん	*
658	聞ハ御慈悲あて	*	*
659	守素立思子、	*	*
660	御素立のあんで	*	*
661	音信よをかて、	*	*
662	思子諸共に	*	*
663	命つかんともて、	*	*
664	よしれやひをもの	*	*
665	頼て御情に、	*	*
666	御取次めしやうち	*	*
667	助やひ給ふれ、	*	*
668	門番	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
669	一 はあ云ることよ聞ハ、	一 あゝ云 [欠] 事よ聞ハ	*
670	無蔵なもの、	無蔵な者のさらめ	*
671	たう / \、むまに	*	*
672	待ひをれよ	待より	*
673	/ \、		*
674	同人		*
675	拝れよめしやいん		*
676	あれに居やうれ、		*
677	谷茶	*	*
678	一 やあ / \、	*	*
679	大川のなし子	*	*
680	乳母てる女、	*	*
681	いきやあれはすにゆか	いちやあれは済め	*
682	考てみやうれ、	*	*
683			
684			
685	満納	*	*
686	一 され按司かなし、	一 やあ按司かなし	*
687	大川のなし子	*	*
688	引取んでやり、	*	*
689	村原のひやか	*	*
690	計得とやゆる、	*	*
691	あゝあれほどの村原も	はああれ程の村原も	はああれ程の村原も
692	運の未なれハ、	*	*
693	わにやかかけの内に	*	わ縄かけの内に
694	首いれる仕形、	*	*
695	こまや楽々と	*	*
696	足たくてをとて、	*	*
697	村原のひやか	*	*
698	計事便て、	*	*
699	村原からめゆる	村原 [欠] る	*
700	時節きやあへたん、	*	*
701	扱々御果報	さて / \ 此果報	*
702	急い事たやへる、	い急事とやよる	*
703	谷茶	*	*
704	一 一段な事よ	一 一段な事	一 一段な事
705	/ \、	/ \	/ \
706	やあ石川のひやゝ、	やあ石川の比屋	*
707	へつに了簡の	*	*
708	あひかしゆら、	*	*
709	石川	*	*
710	一 満納いやれること、	*	*
711	一々尤	*	*
712	同意たやへる、	*	*
713	谷茶	*	*
714	一 扱も / \、	*	*
715	分才もしらぬ	*	*
716	此按司に向て、	*	*
717	すひさんなやから	*	*
718	ゆるす事ならぬ、	*	*
719	急ち引出ち	*	*
720		生責のたこい	
721	責のあるかきり、	*	*
722		生責よしやうれ	
723	せめて有筋		*
724	白状よしめれ、		*
725	石川	満納	*
726	一 拝むちゆめやへて、	*	*



No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
727		同人	
728	やあよしれとる女	*	*
729	出す/、	*	*
730		案内聞	
731		一 拝留やひて	
732	下部	同人案内聞	*
733	一 さあ/、	一 やあ/、	*
734	御前寄て拝め	*	*
735	御側よて拝め、		*
736		出うり/、	
737			同人
738		さあ/、	一 たう/、むまに
739		居やうり/、	居やうれ/、
740	満納	*	*
741	一 やあ女、	*	*
742	得と肝ゐして	*	*
743	慥にきけ、	*	*
744	おかたちか巧ミ	いかたちか巧ミ	*
745	たくてをる事や、	*	*
746	尋らぬ先に	*	*
747	合点とやゆる、	*	*
748	直におの科に	直におの科や	*
749	当る筈やすか、	*	*
750	科もかんすらぬ	*	*
751	責もさぬことの、	責もさんことに	*
752	御慈悲ある天の	*	*
753	御情のあとて、	*	*
754	村原か行衛	*	*
755	おんにゆけるやらハ、	*	*
756	巧てをる事の	*	*
757	おの科もゆるち、	*	*
758	島知行もとらち	島知行とらち	*
759	引はらふしまても、	*	*
760	おの御肝きやへや	*	*
761	ある筈よたひもの、	*	*
762	御情の御肝	*	*
763	ミすく取請て、	*	*
764	肝われて實に	*	*
765	おんにゆけやうれ、	おんによけれ	*
766			
767			
768	同人	*	*
769	一 あゝ好てこのまらぬ	一 はあ好て好まらん	一 はあ好てこのまらぬ
770	天運のめぐり、	*	*
771	勘違するな	*	*
772	/、	*	*
773	乙樽	*	*
774	一 村原か事や	*	*
775	討死かしちやら、	*	*
776	音信もなひらぬ	*	*
777	沙汰もきかぬ、	*	*
778	女あてなしの	*	*
779	のゝ思のあゆか、	*	*
780	命のつれなさに	*	*
781	按司かなし天の	*	*
782	十百歳のおかほ	*	*
783	かめ願よしちをて、	*	*
784	御情にワ身の	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
785	露程の命ち、	*	*
786	いきやしかなともて	*	*
787	よしれやひをもの、	*	*
788	色分てたはふれ	*	*
789	天の御肝、	*	*
790	満納	*	*
791	一 いや / \、	*	*
792	かくしゆらハ隠す	*	*
793	つゝミゆらハ包め、	*	*
794	肝のあくまゝや	*	*
795	責の有限り、	*	*
796	おの責に当て	*	*
797	聞筈とやすか、	聞筈とやよか	*
798	責られてからに	*	*
799	おんにゆけるやらハ、	*	*
800	科の上に科や	*	*
801	重ならんしゆもの、	*	*
802	せめららぬうちに	*	*
803	おんにゆけやうれ、	*	*
804	乙樽	*	*
805		一 天のミちやたら	
806		殺されてをらん	
807		情け切族ら	
808		大川の按司に	
809		頼も方ないらぬ	
810		村原か為に	
811		包もかたないらぬ	
812		わ身の心ろ	
813	一 のゝこともおまぬ		*
814	女あてなしに、		*
815	罪科よかけて		*
816	うきくれしやしめゆすや、		*
817	村原かシワさ		*
818	恨めてとをゆる、		*
819	のよて身にかへて		*
820	実よかくしやへか、		*
821	此事やつく / \と		*
822	おもてたはふれ、		*
823	満納	*	*
824	一 勘違するな	*	*
825	不勘ともするな、	*	*
826	殺される科も	*	*
827	兼てしりなけな、	*	*
828	責の上(に) 向て	*	*
829	偽やならぬ、	*	*
830	有筋にいちゆて	*	*
831	殺される者も、	*	*
832	昔から今に	*	*
833	数やしらぬ	*	*
834	乙樽	*	*
835	一 村原か行衛	*	*
836	夢程もしらは	*	*
837	御尋の先に	*	*
838	おんにゆける積り、	*	*
839	のゝおめのあゆか	*	*
840	ワか命の外に、	*	*
841	のゝ思のあとて	*	*
842	隠ちをゆか、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
843	御言葉に應し	*	*
844	たゝこともないらぬ、	たら事やないらぬ	*
845	御返事御返答に	*	*
846	つまでをゆん、	*	*
847	石川	*	*
848	一 はあ勘違するな	*	*
849	とんなこといふな、	*	*
850	縦命限り	*	*
851	あらわすなてやり、	*	*
852	堅談合も	*	*
853	しちあたんてやりか、	*	*
854	満納いやれること	*	*
855	責のねつられめ、	*	*
856	たう / \、	*	*
857	今のこと細く	*	*
858	真心にいやれは、	*	真実に言れず
859	百すてやあらね	*	*
860	美拝をかてからに、	*	*
861	みすく取請て	*	*
862	包ますにいやうれ、	*	*
863	あゝ百果報や目の前	*	*
864	引よすてをとて、	*	*
865	人の為にあたら	*	*
866	のちとてやすまぬ、	*	*
867	人間の願の	*	*
868	のゝおめのあゆか、	此外にあよミ	*
869	思てやく立ぬ	*	*
870	村原もすてゝ、	*	*
871	天道のなし子	*	*
872	真肝うちわれて、	*	*
873	生れたるしるし	*	*
874	樂よすれよ	*	*
875	/ \、	*	*
876			
877			
878	石川		*
879	一 さあ / \	*	*
880	おんにゆけやうれ	*	*
881	/ \、	[欠]	*
882	乙樽	*	*
883	一 村原かなんと	*	*
884	やから者やても、	*	*
885	網の魚心	*	*
886	只ひちゆいものゝ、	*	*
887	こへな御城に	*	*
888	弓引のなゆめ、	*	*
889	たとひ生残て	*	*
890	かたすみのをても、	*	*
891	天の御定の	*	*
892	くる間の命ち、	*	*
893	海山にかゝて	[欠] 掛て	*
894	つくまでとやゆる、	*	*
895	あゝ按司かなし御始	*	*
896	石川と満納、	*	*
897	島国よ豊む	*	*
898	人々とやすか	*	*
899	村原のひやゝ	*	*
900	鬼のことめしやうち	鬼のことしちよて	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
901	いきやしおれほども	*	*
902	おとろしやよめしやいか、	*	*
903	谷茶	*	*
904	一 むゝ尤な不審	*	*
905	尤な事、	*	*
906	やあ女、	*	*
907	慈悲情尽ち	*	*
908	大川のなし子、	*	*
909	素立やひあすか	*	*
910	もしか村原か、	*	*
911	いらぬ義理立て	*	*
912	謀叛企(夕)ハ、	*	*
913	大川のなし子	*	*
914	生て置ならぬ、	*	*
915	(誠心實も)	*	*
916	あたになるやれば、	あたになるやらは	*
917	村原も共に	*	*
918	素立ほしやあてと、	*	*
919	細く問尋ね	*	*
920	しゆることよたひもの、	*	*
921	守子為ともて	*	*
922	かくさずに語れ、	真直に語り	*
923	満納	*	*
924	一 いや、此上に又も	一 此上に亦も	*
925	隠しともしゆらハ、	*	*
926	又事もいらぬ	*	*
927	直に引立て、	*	*
928	すねの砕けらハ	*	*
929	胸腹よまでも、	*	*
930	命の有限り	*	*
931	はさみきらしゆもの、	*	*
932	たうおのこゝれしちをて	たう / \ おのこゝりしゆて	*
933	おんにゆけやうれ、	*	*
934	急ひ差繩持ち	やあ差繩も持	急ひ差繩も持ち
935	近く寄てをとて、	*	近く寄てからに
936	又も隠しゆらハ	*	*
937	屹度こむせめれ、	急度こんしめ [欠]	*
938	下部	案内聞	*
939	一 さあ / \	*	*
940	おんにゆけやうれ	*	*
941	/ \、	*	*
942			
943			
944			同人
945	後てやすまぬ	*	*
946	急ちおんにゆけやうれ、	*	*
947			
948	満納		*
949	一 いや、おなためもしらぬ	*	*
950	こゝてをゆめ、	*	*
951		乙樽	乙樽
952	一 のゝこともしらぬ	*	*
953	女あてなしに、	*	*
954	段々の御間こと	*	*
955	御難儀とやゆる、	*	*
956	いちもやく立ぬ	*	*
957	是非に及はらぬ、	*	*
958	誠正直の	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
959	我胸の内や、	*	*
960	責てせめころち	*	*
961	あとに御目掛け、	*	*
962	近さ拝まれる	*	*
963	天の下をとて、	*	*
964	偽のなゆめ	*	*
965	人の肝の、	*	*
966	満納	*	*
967	一 はあ、つらつきも替て	*	*
968	悪魔やな女、	*	*
969	夫喰る悪生	夫喰る悪蛇	*
970	切支丹、	*	*
971	鬼むちやる人の	*	*
972	此世界にをゆめ、	*	*
973	是と鬼やゆる	是と鬼さらめ	*
974	さあ / \		*
975	屹度こむ責れ、	*	*
976	下部	案内聞	*
977	一 せめられるごうの	一 せめられるわざの	*
978	深さある女、	*	*
979	いきやか / \、	*	*
980	乙樽	*	*
981	一 ちりあくた心	*	*
982	数ならぬワ身の、	*	*
983	殺される事や	*	*
984	露程も思ぬ、	*	露程も思も
985	思切ひをすか	*	*
986	のゝこともしらぬ、	*	*
987	女あてなしは	*	*
988	鬼無理にせまて、	*	*
989	責殺す罪の	*	*
990	わかために廻て、	*	*
991	按司かなし上に	按司そへ前上に	*
992	いきゆらたひいとめは、	*	*
993	死ゆ / \も是や	*	*
994	気にかゝていきゆん、	*	*
995	谷茶	*	*
996	一 はあ云る事よ聞ハ	*	*
997	理りとやゆる、	*	*
998	縄も掛らすに	*	*
999	責もさぬことに、	*	*
1000	義理の上の嘯	*	*
1001	あらんしゆもの、	*	*
1002	たう / \		*
1003	せまてある縄も	*	*
1004	急ちときゆるす、	ふとちとらす	*
1005		案内者	
1006		一 拝留やへて	
1007	乙樽	*	*
1008	一 あゝたうと、	*	*
1009	此御恩たうとさや	御恩たうとさや	*
1010	女身のわぬも、	*	*
1011	よしれやひをれハ	*	*
1012	若か村原か、	*	*
1013	生残てをとて	*	*
1014	思子御素立の、	*	*
1015	事よとも聞ハ、	*	*
1016	我身よりも増て、	我んよいんまさゑ	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1017	時日移さすに	*	*
1018	うち笑ひ / \、	打 [欠] / \	*
1019	よしれらな置め	*	*
1020	人の肝の、	*	*
1021	御慈悲御情と	*	*
1022	ワ御主かなし、	*	*
1023	百とまでちやうわれ	*	*
1024	拝てすてら、	*	*
1025	満納	*	*
1026	一 いや、からすよも女	一 いやからす [欠] 女	*
1027	人やたまそとも、		*
1028	いきやし此満納		*
1029	たまかしのなゆか、		*
1030		なま [欠] 族ら	
1031	そんちむち牢に	そん [欠]	*
1032	たゝちむちおけ、	たゝちむち [欠]	*
1033	谷茶	*	*
1034	一 いや / \、	*	*
1035	あたまをてものや	*	*
1036	念入なしちをて、	*	*
1037	仕損してからや	*	*
1038	悔てやく立ぬ、	*	*
1039	思案より外の	思案故外の	*
1040	事やなひさめ、	*	*
1041	たう / \	*	*
1042	事急きするな	*	*
1043	短気するな、	*	*
1044			
1045	扱も / \、	扱て [欠]	*
1046	高程もおちやて	*	*
1047	目口やは / \ と、	*	*
1048	雪のしらはくき	雪色の歯口	*
1049	物云さし聞ハ、	物云やし聞ハ	*
1050	ごいんから替て	*	*
1051	花の清ら女、	*	*
1052	見れはみる毎に	*	*
1053	おめと増る、	*	*
1054	我が側ニおきやひ	*	*
1055	互に楽々と、	*	*
1056	夢のこの浮世	*	*
1057	暮しほしやの、	*	*
1058	誠真実の、	*	*
1059	我肝とも呉らハ、	*	*
1060	村原か事も	*	*
1061	いやな置め、	*	*
1062	石川と満納	*	*
1063	追ぬけてからに、	*	*
1064	ワ肝明々と	我肝明々と (ハリバリト)	*
1065	談合よすらに、	*	*
1066			
1067	やあ / \、	*	*
1068	此事や互に	*	*
1069	おかとしちすまぬ、	おつかつとしちならぬ	*
1070	けふや立別て	今日や立戻て	*
1071		☆御見合次第立方江打	
1072	思案しちからに、	思案しちをとて	*
1073	思ひきハまらハ	*	*
1074	呼す筈たひもの、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1075	戻てむち得と	*	*
1076	考てみやうれ、	*	*
1077	満納	*	*
1078	一 めしやいること、	一 あゝめしやいること	*
1079	ものやひとかたに	*	*
1080	おかとしちすまぬ、	*	*
1081	あの女てすや	*	*
1082	村原かとしの、	*	*
1083	乙樽よてやり	*	*
1084	たゝならぬやから、	*	*
1085	女てやりおかと	*	*
1086	ゆるち置ならぬ、	*	*
1087	責らすになんと	*	*
1088	尋たんたひか、	*	*
1089	愚痴の上に愚痴や	*	*
1090	かたまゆる積り、	しよる積いやりは	*
1091	牢に込置て	籠込よしちゆて	*
1092	おのくつさしめて、	*	*
1093	引出し / \	*	*
1094	おの責にあてゝ、	*	*
1095	漸々と気根	*	*
1096	疲ゆる時と、	*	*
1097	有筋に白状	*	*
1098	しゆる積りやれハ、	*	*
1099	御思案の内や	先御思案の内や	先御思案の内や
1100	こめておきやへら、	*	*
1101	石川	*	*
1102	一 満納思寄も	*	一 満納思案も
1103	尤とやすか、	*	*
1104	牢こめもいらぬ	[欠] んいらん	*
1105	責もさぬことの、	責もさんことに	*
1106	御慈悲御情けの	[欠] 悲御情けの	*
1107	按司の御計や、	按司 [欠] 計や	*
1108	いかな悪欲な	い [欠] 欲な	*
1109	無理なものやても、	愚 [欠] のやてん	*
1110	背く事なひさめ	背く [欠]	*
1111	義理の上ニ、	*	*
1112	たう / \	*	*
1113	先牢こめや	先籠込も	*
1114	ゆるちおかに、	よるち [欠]	*
1115	満納	*	*
1116	一 いや / \、	*	*
1117	村原のひやに	*	*
1118	ならふものをらぬ、	*	*
1119	巧てをる事や	*	*
1120	いか程かやゆら、	*	*
1121	おかとしちすまぬ	*	*
1122	女わらへ、	*	*
1123	石川	*	*
1124	一 我々の一事	*	*
1125	はからやいをれハ、	計得をりは	*
1126	按司や百ことの	*	*
1127	御計のあゆん、	*	*
1128	満納	*	*
1129	一 はあ、主人身の上の	*	*
1130	浮沈ミやれハ、	*	*
1131	肝のあくまゝや	*	*
1132	命ち限り、	命のある限り	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1133		やあ按司かなし	
1134	あゝおとろしやもしらぬ	*	*
1135	みよんにゆけややへか、	みおんにゆけやゝひすか	みよんにゆけやへすか
1136	責さしゆることの	*	しめさせるゆることの
1137	御肝きやさあらハ、	御肝ちやさ有りハ	*
1138	大川のなし子	*	*
1139	あのやからもとの、	*	*
1140	姿から形ち	*	*
1141	似ちをるもの撰て、	*	*
1142	大川のなし子てやり	*	*
1143	取沙汰よしめて、	*	*
1144	外の出入も	*	外の出入
1145	ゆるちあんてやり、	*	*
1146	村原か聞ハ	*	*
1147	疑やなひらぬ、	*	*
1148	はいとらんともて	*	*
1149	忍て来るつもり、	*	*
1150	おの手組しちをて	*	*
1151	からめとやへら、	*	*
1152	谷茶	*	*
1153	一 細事のたくひ	*	*
1154	聞きやくもなひらぬ、	*	*
1155	満納	*	
1156	一 あゝ按司かなし天の	一 はあ按司かなし天の	*
1157	盛衰の	*	*
1158	此涯よやれハ、	此涯に我 [欠]	*
1159	包てつゝまらぬ、	*	*
1160	おとろしやもしらぬ	*	*
1161	繰返し / \、	繰返 [欠]	*
1162	みよんきこと	[欠] よんきこと	*
1163	かへそ科や	*	*
1164	仰すめしやうち、	*	*
1165	是非共牢舎	是非共に [欠]	是非共に籠舎
1166	仰すめしやうれ、	仰すめ [欠] うり	*
1167	谷茶	*	*
1168	一 推参なやから	一 [欠] 族ら	*
1169	愚痴にかたまどめ、	愚痴にかたまよめ	*
1170	又事もいらぬ	*	*
1171	なけすてゝとらさ、	切捨てとらさ	*
1172	石川	*	*
1173	一 此涯よたひもの	*	*
1174	御勘忍めしやうれ、	*	*
1175	谷茶	*	*
1176	一 やあ石川、		*
1177	ワか下知に背く	主の下知聞ぬ	*
1178	気任のやから、	いか俣の族ら。	*
1179	急ち引立て	[欠] て	*
1180	そんちいけ、	*	*
1181	石川	*	*
1182		押留やへて	
1183	一 やあ満納	*	*
1184	御意背く道の	[欠] 道の	*
1185	此世界にあゆめ、	*	*
1186	おれこれも按司の	[欠] これも按司の	*
1187	御計にまかち、	*	*
1188	仰すことまゝに	[欠] すことま [欠]	*
1189	急ち戻ら、	*	*
1190			



No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1191		満納	
1192		一 あゝ口惜や	
1193	谷茶	[欠]	*
1194		一 いや推参な族ら	
1195	一 やあ / \	*	*
1196	振合の袖に		*
1197	糸の縁結て、		*
1198	夢の間の浮世		*
1199	語ひほしやあもの、		*
1200		望まゝ願や	
1201		進らんしゆ [欠]	
1202			
1203	ワか側にをとて	*	*
1204	樂よすれよ	*	*
1205	/ \、	*	*
1206	乙樽	*	*
1207	一 御情に御側	一 御情に [欠]	*
1208	をらんでやりすれハ、	*	*
1209	おやくめさあもの	*	*
1210	御ゆるせよめしやうれ、	よるちたふうり	*
1211	谷茶	*	*
1212	一 いや / \、	*	*
1213	やくめさもいらぬ	*	*
1214	斟酌もするな、	*	*
1215	ワ側ともをらハ	我 [欠] をらハ	*
1216	花に増姿、	*	*
1217	おの飴しめて	*	*
1218	をなちやらもされん、	*	*
1219	島国よ揃て	*	*
1220	あかめらんしゆもの、	*	*
1221	たう / \	*	*
1222	側にをれよ	*	*
1223	をれよ、	*	*
1224	乙樽	*	*
1225	一 按司もわなひすかぬ	*	*
1226	樂も又すかぬ、	*	*
1227	わすたつれやても	*	*
1228	女身の習の、	*	*
1229	義理曲てなれる	*	*
1230	道のあゆめ、	*	*
1231	谷茶	*	*
1232	一 いや / \、		*
1233	今のこと愚痴に		*
1234	かたまとるむさや、		*
1235	素立ひやならぬ		素立ひもならぬ
1236	急ち戻やうれ、		*
1237		なま愚痴の女	
1238		よるす事ならん	
1239	乙樽	*	*
1240	一 こまかゝて命や	*	*
1241	つかなれハ死にゆめ、	*	*
1242	もの乞になても	*	*
1243	のちやつきゆん、	のちや [欠]	*
1244	たう / \	*	*
1245	ゆるちたはふれ、	よるたふうり	*
1246	谷茶	*	*
1247	一 いや / \、	*	*
1248	乙樽	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1249	一 義理と按司やゆる	*	*
1250		義理と人あらに	
1251	無理な事めしやうな、	無理な事めしやう [欠]	*
1252		[欠] な事するな	
1253	谷茶	*	*
1254	一 いやこの按司の言葉	*	*
1255	きかならハそなた、	*	*
1256	一刀に命ち	*	*
1257	つふちとらさ、	*	*
1258	乙樽	*	*
1259	一 殺しゆらハ殺す	*	*
1260	おとろしやゝなひらぬ、	*	*
1261	生々と命の	*	*
1262	死もしにやれらぬ、	[欠] れらん	*
1263	恥もふりすてゝ	*	*
1264	此なひになとる、	此ないにな [欠]	*
1265	露程のいのち	*	*
1266	惜む事ないらぬ、	惜も [欠] ないらん	*
1267	仕合とやゆる	仕合と [欠] よる	*
1268	ころす / \、	く [欠] す [欠]	*
1269	谷茶	*	*
1270	一 はあ肝ほれてをたら	*	*
1271	今のことしやすや、	*	*
1272	無調法至極	*	*
1273	ゆるちたはふれ、	よる [欠] たふうり	*
1274	神仏ですも	*	*
1275	人の肝尽ち、		*
1276	祈る願事や		*
1277	御助のあもの、		*
1278		願事や聞よん	
1279		たう / \	
1280	みすく聞分て	*	*
1281	肝もきもそへて、	*	*
1282	頼て御情に	御情になりて	*
1283	なれて給ふれ、	よるちたふうり	*
1284			
1285			
1286			
1287			
1288	乙樽	*	*
1289	一 おはつかしやあても	*	*
1290	(いやな) 又なゆめ、	*	*
1291	ワか夫や此世	*	*
1292	隠れやひをらぬ、	*	*
1293	遺言しちあすや	*	*
1294	三年の内に、	*	*
1295	夫もとなてやり	*	*
1296	い言葉のあゆん、	*	*
1297	三年やたひんす	*	*
1298	女身の習の、	*	*
1299	夫ふたりもちゆる	*	*
1300	道のあるひ、	道のあよめ	*
1301	谷茶	*	*
1302	一 昔ほれものゝ	*	*
1303	いちやること守て、	*	*
1304	浮世くらされめ	*	*
1305	按司も下司も、	*	*
1306	恋忍ふ道の	恋忍ひてすん	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1307	ある間の浮世、		*
1308	つらさ身に受て		*
1309	思ひこかれやひ、		*
1310	恋死はむくひ		*
1311	たるにいきゆか、		たるにいきやか
1312	たう / \		*
1313	おれこれよおもて		*
1314		世界にある習へ	
1315		思ひ身余て	
1316	死にゆる我か命ち、	*	*
1317	頼て御情に	*	*
1318	救てたはふれ、	*	*
1319	乙樽	*	*
1320	一 思ひ究とる	*	*
1321	ワ身と又やすか、	*	*
1322	按司の御言葉や	*	*
1323	梓弓心、	*	*
1324	引されていきゆさ	ひかされて行る	*
1325	ワ身の肝や、	*	*
1326	谷茶	*	*
1327	一 はあ果報もつきゆすかと	一 あゝ [欠] 付すかと	*
1328	つきも付清さ、	*	*
1329	あた果報とつきやる	*	*
1330	果報な我身や、	*	*
1331	はあしたひ / \、		*
1332	乙樽	*	*
1333	一 来る二月に	*	*
1334	すきし我か夫の、	*	*
1335	三年忌たひもの	*	*
1336	吊や濟ち、	*	*
1337	よしあしの御返事	*	*
1338	おしやけんしゆもの、	*	*
1339	おの内や是非に	おの内や気張て	うの内や是非よ
1340	御待めしやうれ、	*	*
1341	谷茶	*	*
1342	一 いや / \ 是や	一 いや / \	*
1343	ならぬ / \、		*
1344	乙樽	*	*
1345	一 おれこれもゆるし	一 おり是もよるす	一 おれこれもゆるそ
1346	ならぬことやらハ、	*	*
1347	迎も一刀に	*	*
1348	殺ちたはふれ、	*	*
1349	谷茶	*	*
1350	一 はあおれ是もよたしや	*	*
1351	いつまでもまちゆん、	早晚までん待ん	*
1352	いやれること濟ゆん	*	*
1353	よたしや / \、	*	*
1354	乙樽	*	*
1355	一 あゝたうと、	一 あゝ [欠]	*
1356	御情の光	*	*
1357	てり増ひ / \、	てりま [欠] / \	*
1358	百といつまでも		*
1359	揮てすてやへら、		*
1360		願た事叶て	
1361		御拝とをかも	
1362	谷茶	*	*
1363	一 あゝ我身もほこらしやの	*	*
1364	物にとららぬ、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1365	このたけにワ身や	あゝこのたけにワ身や	*
1366	なやかやいをても、	なやかやいをすか	なやかやひをすか
1367	気に叶ふ女、	*	*
1368	側にまたをらぬ、	*	*
1369	是とワかふ足	*	*
1370	心くら闇に		*
1371	なやいをたん、	*	*
1372	今月も過て	*	*
1373	二月も頓て、	*	*
1374	おれからや互に	*	*
1375	枕うちならへ、	*	*
1376	浮世楽々と	*	*
1377	暮すとめハ、	*	*
1378	まちと嬉しこと	*	*
1379	よろこひもおへさ、	嬉しさん大さ	*
1380	天に飛登る	天に飛 [欠]	*
1381	ワ身の心地、	*	*
1382	引寄て給ふれ	*	*
1383	御月御てた、	*	*
1384	我自由しち浮世	*	*
1385	遊て暮さ、	*	*
1386		あゝたうと	谷茶
1387	一 やあ / \、	*	*
1388	此内やとかく	此間や兎角	*
1389	くつさしちをたら、	*	*
1390	心はれ / \と	*	*
1391	うち晴て躍て、	*	*
1392	此間のくつさ	此間の苦しや	*
1393	思ひ忘れ、	*	*
1394	こてふし	*	*
1395	一 御慈悲あるゆへと	*	*
1396	御万人のまきり	*	*
1397	上下もそろて	*	*
1398	あふきおかむ	*	*
1399	谷茶	*	*
1400	一 はあきよらさ / \、	一 あゝ清さ / \	*
1401	乙樽	*	*
1402	一 けふや思子の	*	*
1403	御側むちをかて、	御側出ちをとて	*
1404	明日か日に又も	*	*
1405	拝てすてら、	*	*
1406			谷茶
1407	一 たう / \、		*
1408	けふや道中の		*
1409	草臥もあらたひもの、		*
1410	若按司の側にむち		*
1411	休息よすれ、		*
1412			
1413	村原出羽大浦ふし	*	*
1414	思子取戻ち	*	*
1415	敵うたんともて	*	*
1416	衾れ商人に	あはれ物売に	*
1417	やつれ出る	*	*
1418			
1419		村原	村原
1420	一 是や村原のひや、	*	*
1421	思子取戻す	*	*
1422	つまひ分別に、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1423	乙樽かことや	*	*
1424	あむまへになつて、	*	*
1425	敵の城元に	*	*
1426	只ひちゆひやらち、	*	*
1427	あゝ、心元なさの	*	*
1428	我肝やすまらぬ、	*	*
1429	物売にやつれ	物売に躍り	*
1430	忍て出る、	*	*
1431	さいんそるふし	村原道行哥	哥さんそるふし
1432	一 唐や大和の	*	*
1433	珍らし物	*	*
1434	匂ひ髪附	*	*
1435	香しもの	*	*
1436	丁子白檀	*	*
1437	甘生姜	[欠] ましやうか	*
1438	刻多葉粉も	*	*
1439	持ちをやへん	持やひん	持ちゆやへん
1440	きせるも宝蔵も	きせるも火縄も宝蔵も	*
1441	持つをやへん	持やへん	持つゆやへん
1442	其外色々	*	*
1443	持ちをやへん	持やいん	持ちゆやへん
1444		かふやいたふうり	
1445	代もやすめて		*
1446	上やへら		*
1447	米とも粟とも	*	*
1448	替やへん	[欠] やひん	*
1449		代もやすみて	
1450		売上ら	
1451	御望の物や		*
1452	かふやひたはふれ	*	*
1453	村原	*	*
1454	一 先物売に名付	*	*
1455	此辺にをとて、	*	*
1456	往来の人の	*	*
1457	沙汰よきかに、	*	*
1458	泊井	*	*
1459	とんちたるものや	*	*
1460	村原のあやと	*	*
1461	むちやん一ツの	御神一ツ	*
1462	ちきや御葉たん、	*	*
1463	大川の思子	*	*
1464	引取らんで	*	*
1465	村原のあやゝ、	*	*
1466	谷茶城忍て	*	*
1467	いまふちやうすか、	*	*
1468	夫の村原なひ	*	*
1469	肝要なものいやひ	*	*
1470	頼まつて行ん、	頼まつてをん	たのまつてをん
1471	油断しや済ぬ	*	*
1472	先一足もいそかう、	*	*
1473	村原	*	*
1474	一 され / \、	*	*
1475	万細物	*	*
1476	持ちをやへん、	*	*
1477	これ / \	*	*
1478	御望の物や	*	*
1479	売上やへら、	*	*
1480	泊井	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1481	一 あゝ是や仕合な事、	*	*
1482	村原	*	*
1483	一 田舎江御通の	*	*
1484	御支度の御様子、	御支度の様子	*
1485	御中途の御用	御中の御用	*
1486	是々	*	*
1487	又是も上やへら、	*	*
1488	泊井	*	*
1489	一 是や心入とやる、		*
1490	いやれること	*	*
1491	谷谷屋良村んかい	北谷屋良村んかい	北谷屋良村んかい
1492	越ん、	*	*
1493	道中の重宝	*	*
1494	仕合な事、	仕合とやよる	*
1495	主やまあからまあんかひ		*
1496	まひか、		*
1497	村原	*	*
1498	一 我身や	*	*
1499	那覇若狭町から、	*	*
1500	今度初て	*	*
1501	旅の者、	*	*
1502	御急きもやゆら	*	*
1503	御無心もしらぬ、	御無心のも知 [欠]	*
1504	取つけもなひらぬ	*	*
1505	望事やすか、	*	*
1506	旅の上の御縁	*	*
1507	をかむ御情に、	*	*
1508	めつらしい事の	*	*
1509	此頃にあらハ、	*	*
1510	御休ミのうちに	*	*
1511	きかちたはふれ、	*	*
1512	やともとのみやけ	*	*
1513	ものかたりしやへら、	*	*
1514	泊井	*	*
1515	一 まゝてひしんさあ	*	*
1516	ちゆのいそげは、	*	*
1517	むゝたしかに村原のひややすか、	確に村原の比屋やすか	*
1518		あの支度やすん付てや	
1519	しかつと見覚のなひらぬ、	しかつと見分ないらん	*
1520		おつかつと [欠] すまん	
1521	先口ふて	*	*
1522	さくてむだう、	*	*
1523	同人		*
1524	一 あゝいきやいは兄弟	*	*
1525	のううちへたてのあか、	のう打隔の [欠]	*
1526	これや余り	*	*
1527	こは返事やつさあ、	*	*
1528	やすか	*	*
1529	かんのふも	ぬう [欠] ん	*
1530	珍らしひ事や、なひらぬ、	*	*
1531	むゝあゝ、	あゝ	むゝ
1532	満納の子や	*	*
1533	打殺さつて、	*	打殺て
1534	あゝいたわしい事、	*	*
1535	村原	*	*
1536	一 あたらしか満納	*	*
1537	いきやしちやる事か、	*	*
1538	泊井	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1539	一 むゝ、おの事てハ、	*	*
1540	たう細々の次第	*	*
1541	根から咄ちきかさう、	*	*
1542	あの城や、	*	*
1543	本今帰仁の別れ	*	*
1544	大川の按司の城やたすか、	*	*
1545	百姓上の按司部	*	*
1546	谷茶のおまへの打亡はち、	*	*
1547	今や谷茶城むていふん、	*	*
1548	先事のおこれや	*	*
1549	谷茶か野心巧て、	*	*
1550	大川の按司の		
1551	国々の按司部うたんで、	国々の按司部	*
1552			
1553	あらさらぬ事ハ		*
1554	色々にいひ立て、		*
1555	加勢頼て	*	*
1556	軍押寄たん、	*	*
1557	だあ大【城】川城や	*	*
1558	をなちやらの御吊の日に当て、	をなちやらの御吊の [欠] に当て。	*
1559	御取込の最中	*	*
1560	以の外、火急な事	*	*
1561	分別の分別ならぬ、	分別ならん	*
1562	按司も大将も	*	*
1563	急ひころ討死、	*	*
1564	大勢に無勢	*	*
1565	力及はらぬ、	*	*
1566	終にや思子や生捕られ、	終にや嫡子や生捕られ	*
1567	大将村原のひやゝ	大将村 [欠] の比屋や	*
1568	ぬけすまち	*	*
1569	行衛しれらぬ、	行衛知らぬあすか	*
1570		村原のひやんで云すや	
1571	世界の一人者	*	*
1572	急ひ武士やすんついてや、	*	*
1573	生捕てあるいねけ子	*	*
1574	物種子にしち、	*	*
1575	取付て	*	*
1576	降参しめらむて	*	*
1577	おの思子つかなてあん、	*	*
1578	おの段村原か聞付て	*	*
1579	思子引取らむて、	*	*
1580	村原のあやゝ	*	*
1581	あん前むて云ち、	*	*
1582	共につかなてたはふれ / \ むて	共に飼てこいりんで	*
1583	谷茶城よしれたん、	*	*
1584	あゝむちや	あゝ [欠] や	*
1585	満納の子なつくわひ	満納の子や	*
1586	もの、かはひ人、	*	*
1587	村原か計むて	村原か計事んで	*
1588	ぬちやてひつしつち、	急てから [欠] 知ち	*
1589	此涯取付てよんむて	此涯 [欠] 付よんで	*
1590	幸としち	*	*
1591	問尋掛引段々、	問掛引段々	*
1592	村原としも	*	*
1593	あひもおとらぬぬけた女、	*	*
1594	いちやひしちやひ	*	*
1595	色々様々の返事返答、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1596	扱も / \ 寄妙な事い (のカ。一部筆が途切れている)	扱も / \ 妙なもの	扱も / \ 妙なもの
1597	きゝことやててん、	*	*
1598	しゆたすか	*	*
1599	村原とじや	*	*
1600	目口やは / \ と	*	*
1601	小しほらしひかあげ、	*	*
1602	ほんのむちや		*
1603	むしやものやすんつひてや、		*
1604	たあ按司や	按司や	*
1605	ちやむとうちほれて、	ちやん打振て	*
1606	目いろは折しち	*	*
1607	さらさらあと	*	*
1608	正気やないらぬ、	*	*
1609	終にや	*	*
1610	石川満納も追ぬけて、	石川満納追のけて	*
1611	さつたる仕形もをかしや、	*	さつたる仕形のをかしやや
1612	やあ / \、	*	*
1613	ワか側にをらハ	*	わか側にをれよ / \
1614	をなちやらも、されん、	*	
1615			
1616			
1617	たう / \ 側に	*	
1618	居よをれよ	*	
1619	むていちやれハ、	*	*
1620	村(原)のあやゝ	*	*
1621	按司もすかぬ	*	*
1622	楽もすかぬむて	*	*
1623	つんはにむはしやん、	*	*
1624	谷茶や腹きりわき、	*	*
1625	此按司の言葉	*	*
1626	きかならハそなた、	*	*
1627	一刀にいのち	*	*
1628	つふちとらさ、	*	*
1629	むてしゆて	んて	*
1630	おとちやん、	*	*
1631	わたの底まで	無蔵さわたの底まで	*
1632		■入ら方い■見合	
1633	見済さつてをすや	見済さつたうすや	*
1634	以の外、	知らん	*
1635	村原のあやゝ	*	*
1636	ちやあんなひらぬ	*	*
1637			
1638	殺す / \ むて	*	*
1639	すひちかゝたさ、	すひちかゝ [欠]	*
1640	たあ殺しゆるいきや		*
1641	そつともなひらぬ、		*
1642	むきやわらひしち	[欠] 笑らいしち	*
1643		[欠] ふりてをたら	
1644		今のことしやすや	
1645		無調法至極	
1646			
1647		よるちたふうり	
1648		神仏てすん	
1649		願事や聞ん	
1650		御情に命ち	
1651		救てたふうり	
1652		/ \ むて	



No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1653	もとよたる仕形や、		*
1654	ほんの		*
1655	をかしやおほさる、		*
1656			
1657			
1658	あはあ(高笑) / \		あは / \
1659	立羽失て		*
1660	どつとさん / \ な事、		*
1661	あんしおれからや		*
1662	大首たうれて、	*	*
1663	みすく聞分て		*
1664	肝出ち		*
1665	死しいきゆる命		*
1666	救てたはふれ / \ むて、		*
1667	段々折たうれ		*
1668	しやつとちんや、		*
1669	村原としや		*
1670	分別なもの、		分別なむさの
1671	夫の仏事うちなち		*
1672	御返事上らの		*
1673	のふのくひのむて、		*
1674	たん / \ と云廻ちやれハ、		*
1675	あゝ無蔵さ		あゝ無蔵さひ
1676	縁のかたかしち		*
1677	あかさくらさもわからぬ、		*
1678	ほんの誠に		*
1679	たんしひきつち、		*
1680		折たうりしやりハ	
1681		村原のあやゝ	
1682		来る二月に	
1683		夫の三年忌の	
1684		吊濟ちから	
1685		谷悪の御返事	
1686		上らんむていちやりハ	
1687		又按司や	
1688		目はておとちやん	
1689		おり是もよるすならん事やらハ	
1690		迎も一刀に	
1691		殺ちたふうり	
1692		/ \ んで	
1693		すいちかゝりハ	
1694		おり是も濟ん	
1695		早晚迄も待ん	
1696		今月も過りて	
1697		二月も頓て	
1698		おりからや互に	
1699		枕ら打ならひ	
1700		浮世楽々と	
1701		暮そとみは	
1702	待と嬉しこと	あゝ待と嬉しこと	*
1703	よろこひも大(ヲへ)さ、	嬉さん大さ	*
1704	あた果報とつきやる		*
1705	果報なワ身や、		*
1706		天に飛登る	
1707		我身の心地	
1708		引寄てたふうり	
1709		御月うてたむて	
1710	なつくわひしち		*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1711	笑ひすひ / \		*
1712	躍羽しち、		*
1713	夜のねふしもねんたぬ、		*
1714			
1715			
1716			
1717	ひしやの指まで	夜昼足の指まで	*
1718	打かへし / \ しゆて、	折かへし / \	折かへし / \ しゆて
1719	むな待しゆらむておもれハ、	待かんでしゆんでて	*
1720	ほんのをかしやどおほさる、		*
1721	あんしまた		*
1722	満納の子や		*
1723	度々御意見		*
1724	おんにゆけゆんむて、		*
1725	のふ目もみしらぬ		*
1726	かひはうかつたん、		*
1727	やつさ		*
1728	【命】(人)の命てらもの		*
1729	云んてとしゆる、		*
1730	水つかゆすよか		水つかよすか
1731	あつまつさ		あさまつさ
1732			
1733	おそろしい畜生人、		驚しい畜生人
1734	また満納の子も		*
1735	満納の子、		*
1736	あて性もないらぬ		*
1737	のふむて		*
1738	おれほとしや(ち)		おれふとしやか
1739	いか身からと		*
1740	やひんしゆすか、		*
1741	得と思てむてハ、		*
1742	しゆかな / \ しい肝の		*
1743	あちしやつ所から、		*
1744	誠に満納の子とやゆる、		*
1745	村原	*	*
1746			
1747			
1748	一 むゝ土の本意	*	*
1749	世の中の手本、	*	*
1750	たんちゆ島国も	*	*
1751	沙汰よしゆたる、	*	*
1752	やあ / \		*
1753	大川のなし子	*	*
1754	あん前と二人や、	*	*
1755	いきやるいきなひに	*	*
1756	なやいをゆか、	*	*
1757	泊井	*	*
1758	一 やつさしう、	*	*
1759	やあつかぬ、犬の	*	*
1760	縄切ちややうなもの、	*	*
1761	一方引なて	*	*
1762	たんちやまで	*	*
1763	をすんついてや、	*	*
1764	頓てぬけすまち	*	*
1765	うちかへされる筈、	*	*
1766	はひ嘶にほれて	*	*
1767	日やさかたひ、	*	*
1768	たうつさしう、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1769	戻てくるまで	*	*
1770	こまんまひらハ、	こまとん参らは	*
1771	又も嘶さうやあ	ま [欠] はな [欠]	*
1772	たうしゆ、		*
1773	村原	*	*
1774	一 やあ / \	*	*
1775	日も暮てをすか、	*	*
1776	あかと屋良むらに、	*	*
1777	いきやる事やとて	*	*
1778	急ちいまひか、	*	*
1779	泊井	[欠]	*
1780	一 なあやのふしやる人か、	一 なあのふしやる人。	*
1781	ちゆの用事問やすや、	*	*
1782	まあかひいかわん		*
1783	かもてい、		*
1784	村原	*	*
1785	一 細々の次第	一 やあ / \ 細々の次第	*
1786	聞ほしやよあすか、	聞ふしやよあてと	*
1787	いやゝまあむらの		*
1788	何かしかやゆら、		*
1789		御急ちんやゆら	
1790		尋やいめゆる	
1791	泊	*	*
1792	一 むまやまあたやへるか、		*
1793		一 村原のあや前	
1794	村原	*	*
1795		一 やあいや西村の	
1796		泊ひやあらに	
1797	一 わ身や村原の	*	*
1798	ひやとやゆる、	ひやとやゆ [欠]	*
1799	泊	*	*
1800	一 あゝ	*	*
1801	さうひ拝んしやへらぬ	さり拝んしやへらん	*
1802	あや前の御使	*	*
1803	西村の泊井たやへる、	*	*
1804	細々の次第		*
1805	おんにゆけやへら、		*
1806	来る十日に	[欠] 十日に	*
1807	思子引取て	*	*
1808	北表の山路	[欠] し表の山道	*
1809	逃めしやいへる筈、	*	*
1810		[欠] ん付てや	
1811	おのおこゝれ	おのおこゝ [欠]	*
1812	めしやうれむての	[欠] しやうりむての	*
1813	御使とやゝへる、	御使た [欠]	御使たやへる
1814	村原	*	*
1815	一 あゝ天の引合か	*	*
1816	神の御助か、	*	*
1817	たう / \	*	*
1818			
1819	けふからや互に	*	*
1820	心打合ち、	*	*
1821	身の上のことに	*	*
1822	気張て呉れ、	働ちやいこいりよ	*
1823	思子取戻ち	*	*
1824	かたきうちとらハ、	敵よ打取は	*
1825	おの御取立や	*	*
1826	あらんしゆもの、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1827	たう / \		*
1828	気張てくひれよ、		*
1829		万事いか事や	
1830		斗やいこいり	
1831		泊	
1832		一 拝ん留やへて	
1833			
1834		細々の次第	
1835		耳のすけめしやいる	
1836	同人	村原	*
1837	一 むゝ是に思つきやる	*	*
1838	事の又あゆん、	*	*
1839	乙樽か思子	*	*
1840	取戻ちからに、	*	*
1841	逃忍ふ時や	*	*
1842	疑やなひらぬ、	*	*
1843			
1844	谷茶あまやゝ	*	*
1845	用心もすらぬ、	用心の「欠」ぬ	用心のんすらぬ
1846	あはてさま出て	*	*
1847	追掛る積り、	*	*
1848	おの時にまかち	*	*
1849	おのときに出て、	おの時に向て	*
1850	打かへず御運	*	*
1851	是に究たん、	*	*
1852	はあ肝要な時節	*	*
1853	おくれてや済ぬ、	*	*
1854	急ち立戻て	急ち「欠」	*
1855		☆供見分	
1856		戻て	
1857	手組すらに、	*	*
1858		泊	
1859		一 拝留やへて	
1860			
1861		原国兄弟出羽口説	
1862		一 君と親との敵かたち	
1863		天のいたゝき兄弟の	
1864		岩やかん石やたんたい	
1865		只踏こづしふみ破り	
1866		いかな鬼神やたんたい	
1867		すた / \ きさまな只置め	
1868		人の念力岩を通そ	
1869		誠むかしの物語り	
1870		聞ハ嬉しや有難や	
1871		兄弟心を打合ち	
1872		猪狩り人に身をやつし	
1873		勇ミ進て立出る	
1874	原国兄弟	原国兄弟云葉	*
1875	一 なま出る二人や	一 兄弟の者や	*
1876	大川の按司の	*	*
1877	頭役しゆたる	*	*
1878	原国のひやか、	*	原国のひやや
1879	兄子松千代	*	*
1880	弟子金松、	弟子金松よ	*
1881		大川の城	
1882		仕合の時に	
1883		親の原国も	
1884		按司そへと共に	

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1885	父親の事と		*
1886	按司添前みこし立、		*
1887	討死よてやり	*	*
1888	兼て聞及て、	聞ハはかなさや	*
1889		余〔欠〕しのはらん	
1890		打死と究め	
1891	君親のかたき		*
1892	打捕んともて、		*
1893	ふたり命はまで	二人押烈て	*
1894	出立る内に、	*	*
1895	思子の前と	若按司の子や	*
1896	敵のいきとやひ、	*	*
1897	村原のひや釣ゆる	村原の比屋取留らんでの	村原のひや釣寄る
1898	計得のあとて、	*	*
1899	御素立よてやり	*	*
1900	かたへへのあらは、	*	かたへやのあらは
1901		嬉しさや二人	
1902		村原のひやに	
1903		尋着からに	
1904		忍ひ隠りやい	
1905		思子取戻ち	
1906		君親の敵や	
1907		おたんたい願て	
1908		忍て出る	
1909	此事や急ち		*
1910	村原につけて、		*
1911	思子の前		*
1912	とりかへち		*
1913	敵討んともて、		*
1914	肝勇ミいさて		*
1915			
1916	むちていきゆん、		*
1917	揚口説	道行口説	原国兄弟口説
1918	一家の譲りの長刀を	*	*
1919	打取なをしてころ／＼と	*	*
1920	ころれ／＼と振立て	*	*
1921	たゝきりひらちわつて入	只切へらきわつと入	*
1922	水もたまらぬ谷茶が	*	*
1923	首打落すその手並み	首打落すその手並みに	*
1924	当るものなき其威勢	*	*
1925	扱も／＼と一声に	*	*
1926	てきや味方の目をさます	*	*
1927	松千代		*
1928	一 やあ金松よ、		*
1929	急ち内いやひ		*
1930	村原のひや拝ま、		*
1931	金松		*
1932	一 たう／＼		*
1933	急ちをかま、		*
1934			
1935	村原	*	*
1936	一 出様ちやる者や	*	*
1937	村原のひや、	*	*
1938	あゝ寔慈悲なさや	あゝ慈悲な	寔是非なさや
1939	我按司の報ひ、	我按司の御果報	*
1940	天の引合か	*	*
1941	神の御助か、	*	*
1942	思はずに武運	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
1943	打重ね/\	*	*
1944	散々になとる	*	*
1945	人々も揃て、	*	*
1946	願たこと叶て		*
1947	誇らしやとあゆる、		*
1948		今日かたき打に	
1949		おきよ出る	
1950	やあ/\、揃てをる人数	*	*
1951	出やうれ/\、	*	*
1952			
1953			
1954	村原		*
1955	一 やあ/\、乙樽か兼て		*
1956		やあ朝夕忘りらん族ら	
1957	内通のことに、		*
1958	かたき討取ゆる	敵かたけ打取る時節	*
1959	御運廻り来て、	武運廻り来て	*
1960	けふのよかる日ニ	今日かたけ打に	*
1961	立よ出ら、	*	*
1962	原国兄弟	総人数	*
1963	一 こつきやうの時節	一 肝要な時節	一 こつきやうな時節
1964	おくれてや済ぬ、	後りてや済ぬ	*
1965	片時も急ち	*	*
1966	御供しやへら、	*	*
1967	村原	*	*
1968	一 たう/\、	*	*
1969	手賦の次第	*	*
1970	とつけ渡さ、	*	*
1971	やあ喜瀬の大屋子や、	*	*
1972	敵の城元に	*	*
1973			
1974	忍て行をとて、	*	*
1975	乙樽か思子	*	*
1976	奮とやい逃る、	*	*
1977	御中途のけいこ	*	*
1978	念の入れ、	*	*
1979		鬼瀬	
1980		一 拝留やへて	
1981		村原	
1982	又西川の子や、	*	*
1983	頼てある加勢	*	*
1984	けふの真夜中に	*	*
1985	城の後ろの	*	*
1986	山に伏よかくれ	山に伏隠れ	山に伏しかくれ
1987	谷茶あまやか	*	*
1988	城立出て、	城よ立出	*
1989	北の山路	*	*
1990	いきつきゆる時分、	*	*
1991	一時に出て	*	*
1992	城の門閉て、		*
1993			
1994		城よ乗取て	
1995	大川の印旗	*	*
1996	差立ておけ、	*	*
1997		西川	
1998		一 拝留やへて	
1999		村原	
2000	やあ瀬底下こおりや、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
2001	北の山路の	*	*
2002	先にかくれとて、	*	*
2003	谷茶あまやか	*	*
2004			
2005	走通る後に、	*	*
2006	道の口立ふさち、	道の口立よ塞き置	*
2007	山路真中	山の真中	*
2008	走通る時分、	*	*
2009	螺や石ひや	*	*
2010	うちならし/\、	*	*
2011	島国も崩す	島国よ崩す	*
2012	気を立て、	*	*
2013	若谷茶あまやか	若か谷茶か	*
2014	逃戻る時や、	*	*
2015	唯並切に	*	*
2016	うちよ留れ、	打留り	*
2017		瀬底	
2018		一 拝留やひて	
2019		村原	
2020	原国の兄弟や、	*	*
2021	山道の中に	*	*
2022	伏よ隠れとて、	*	*
2023	先の石ひや螺を	*	*
2024	(オ+目) 図に躍出て、	*	*
2025	双方のきんそ	*	*
2026	中に引包て、	*	*
2027	あまそな洩そな	*	*
2028	討よとめれ、	*	*
2029		兄弟	
2030		一 兩人一礼	
2031		村原	
2032	やあ泊井や、	*	*
2033	先立ひ	*	*
2034	忍てむちおとて、	*	*
2035	乙樽か思子	*	*
2036	引取ひ逃て、	*	*
2037	半里程いかハ	半里程いか [欠]	*
2038	城走登て	城よ走登	*
2039	逃忍て行す	*	*
2040	見付たんでやり、	*	*
2041	誠たん/\と	*	*
2042	高らかにつけて、	たからかに上て	*
2043	谷茶石川	*	*
2044	さそへ出からに、	*	*
2045	北の山道に	北の山道	*
2046	案内しやしやうれ、	案内よしやうり	*
2047		泊	
2048		一 拝留やへて	
2049		村原	
2050	やあやあ、		*
2051	揃ておる人数	*	*
2052	髓にきけ、	たによ聞留り	*
2053	傍輩の中	傍輩中	*
2054	不和にともならハ、	*	*
2055	怪我事の基ひ	*	*
2056	事障りたひもの、	*	*
2057	腹の立まゝに	はら立る俣に	腹立のまゝに
2058	短気するな、	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
2059	ゑひ / \、能々勘忍	能々勘忍	ゑひよく / \ 勘忍
2060	題目とやゆる、	*	*
2061	惣人数		*
2062	一 拝む留やへて、		*
2063	村原	*	*
2064	一 はあ揃ておる人数	*	*
2065	肝合ちをれハ、	*	*
2066	誠勝子軍	*	*
2067	疑やなひらぬ、	*	*
2068	たう / \ 手配の通	*	*
2069	油断するな、	*	*
2070	さあ / \	*	*
2071	急ち立向ら	急ち立出り	*
2072	いそち打立に、	急ち立寄らに	*
2073			
2074	乙樽思子引取逃走はや作田ふし	思子出羽いきんたうふし	乙樽思子奪取逃走はやつくたいんふし
2075	一 おそ風もすたしや	一 おす風も涼しや	*
2076	風車とゝもに	*	*
2077	押つれて互に	*	*
2078	遊ふうれしや	*	*
2079	乙樽	*	*
2080	一 思子取戻ち	一 思子取戻そ	*
2081	すき間はからやひ、	明間斗やい	明間計やい
2082	むち入の人に	*	*
2083	ましり、出ん、	*	まざり出ら
2084	鬼瀬	*	*
2085		一 やあ思子我身や	
2086	一 鬼瀬たやへ	鬼瀬大屋子たやひん	一 喜瀬たやへる
2087	御供しやへら、	たう / \ 御供しやひら	*
2088	泊井	*	*
2089	一 むゝにや時分たひらう	一 むゝにや時分たいもの	*
2090	城走のほて、	*	*
2091	谷茶(石川)、誘ひたさう、	*	*
2092	され / \	*	*
2093	大川のあむ前や、	*	*
2094	思子引取て	思子引烈りて	*
2095	北表の山路	*	*
2096	逃めしやいへひたん、	*	逃めしやへたん
2097	谷茶	*	*
2098	一 あゝ扱も / \、	一 扱も / \	*
2099		ふんのか / \	
2100	やあ石川のひや	*	*
2101	/ \、	*	*
2102	石川	*	*
2103	一 ふう	*	*
2104	谷茶	*	*
2105	一 大川のなし子	*	*
2106	盗取て逃る、	*	*
2107	急ち追つけて	*	*
2108	奪取らに、	*	*
2109	さあ / \	*	*
2110	いそけ / \、	*	*
2111	石川	*	*
2112	一 やあ / \、	一 はあ	*
2113	大川のなし子	*	*
2114	盗取て逃る、	[欠]て逃る	*
2115	急ち立(出)て	*	*



No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
2116	御供しやうれ、	御供しやひら	*
2117			
2118		やあ按司かなし	
2119		敵の計得や	
2120		いか程かやゆら	
2121		用心[欠]すらぬ	
2122		追掛て済ん	
2123		こまからや戻て	
2124		おの計得しやへら	
2125	谷茶	*	*
2126		一 いや臆病な事云な	
2127		石川	
2128		一 やあ按司かなし	
2129	一 いや供列もいらぬ		*
2130	急け/\、		*
2131			
2132		谷茶	
2133		一 いや	
2134	同人		*
2135	一 あれよ/\、	一 あれ/\	*
2136	忍(注、字は忍になっている)義 忘却	恩[欠]も知らん	恩義忘却
2137	情切やから、	*	*
2138	乙樽	*	*
2139	一 やあ/\、	*	*
2140	村原よ始	*	*
2141	原国のなし子、	*	原国かなし子
2142	思子、御迎に	御迎に	*
2143	忍てきちをゆん、	忍て着ん	*
2144	此間の忍(注、字は忍になっ ている)に	此間恩に	此間の恩義
2145	つける事たひもの、	*	*
2146	急ち立戻て	*	*
2147	命ちとるな、	*	*
2148	谷茶	*	*
2149	一 いや仕合とやゆる	*	*
2150	村原もともに、	*	*
2151	乙樽	鬼瀬	*
2152	一 寄よらハよすれ	一 寄よらハ寄り	*
2153	切はたちとらさ、	切捨てとらさ	*
2154	村原	*	*
2155	一 やあ谷茶	*	*
2156	欲悪の報ひ	*	*
2157	武運つきはてゝ、	*	*
2158	村原【の】(か)前に	*	*
2159	廻てきちやめ、	廻て来たか	*
2160			
2161			
2162	同人	谷茶	*
2163	一 いやぬかすまひ、	一 いやのかすまい	*
2164	原国	*	原国兄弟言葉南表の幕より出ル
2165	一 やあ谷茶、	*	*
2166	原国兄弟か	*	*
2167	待受てをす	待請てをたす	待受てをたす
2168	しつちをため、	知らんあたす	*
2169	谷茶		谷茶言葉北表の幕よる出ル
2170	一 いや、ちゆつかぬもたらぬ		*
2171	すひさんなわらへ、		*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
2172	兄弟		原国兄弟言葉北表の幕江谷茶追入ル
2173	一 ひやひやひ		一 ひやあやひ
2174	同人	*	同人同所より出ル
2175	一 谷茶あまやや	一 いや谷茶あまやや	*
2176	原国兄弟か	原国兄弟 [欠]	*
2177	打取やへたん、	[欠] 取やびたん	*
2178	村原	*	*
2179	一 兄弟の手柄	*	*
2180	ならふものをらぬ、	*	*
2181			
2182			
2183	瀬底	谷茶供	*
2184	一 残てをる人数	*	*
2185	降参たやへる、	*	*
2186	村原	*	*
2187	一 神妙なこと / \、	一 一段な事 / \	*
2188	若按司	*	*
2189	一 やあ村原よ、	*	*
2190	村原	*	*
2191	一 やあ思子	*	*
2192			
2193			
2194	東江ふし		*
2195	一 あけ夢かやゆら		*
2196	村原	*	*
2197	一 あゝ拝てなく事や	一 あゝ拝てなつかしやゝ	*
2198	ゆめかややへいら、	夢かやゆら	*
2199	過し按司添も	*	*
2200	嬉しやめしやいら、	嬉しやめしや [欠]	*
2201	乙樽	*	*
2202	一 やあ / \、	*	*
2203	敵の島国や	*	*
2204	籠の鳥心、	*	*
2205	思て自由ならぬ	*	*
2206			
2207	待兼るけふや、	*	*
2208	谷茶あまやあか	谷茶あま [欠]	*
2209	生れ日てやり、	生れ日よてやい	生れ日よてやり
2210	世話にとひかかて	*	世話に取懸て
2211	気のかかぬあれハ、	*	*
2212	思子もり名付	*	*
2213	逃忍ふ後に、	*	*
2214	谷茶追掛て	谷茶追 [欠]	*
2215	のかるかたなひらぬ、	*	*
2216	是迄よとめハ	*	*
2217	美御迎ニいまふち、	*	*
2218	けふ拝事や	又拝事や	*
2219	夢かやゆら、	*	*
2220			
2221			
2222			
2223			
2224	村原	*	*
2225			
2226			
2227			
2228	一 おもはずに兼て	*	*

No.	尚家本組踊集	新本家本	今帰仁御殿本
2229	内通のあれハ、	*	*
2230	おの手組しちおて	*	*
2231	美御迎しちやん、	美御迎もしちやる	*
2232	やあ乙樽、	*	*
2233	女身の上に	女身の [欠]	*
2234	命ちふり捨て、	*	*
2235	敵の手ニ渡り	敵の手に行い	敵の手に渡る
2236	思子取戻ち、	*	*
2237	あゝ末代の手本	[欠]の手本	*
2238	沙汰とのこる、	*	*
2239		西川使石川のひや両勤	西川の子使
2240	一 され西川の子	一 さり / \ 我身や	*
2241	使たやへる、	石川の御使たやひる	*
2242		城取帰ち	
2243	城乗取やひ	城乗取て	*
2244	おれ / \ の用意	*	*
2245	美御迎たやへる、	御待たやひる	*
2246	村原	*	*
2247	一 一段な事よ / \、	一 一段な事 / \	一 一段な事 / \
2248	村原		*
2249	一 あゝ思子も拝て	一 あゝ思子も拝み	*
2250	敵もうちすまち、	*	*
2251	かにある誇らしやゝ	[欠] ふくらしやゝ	*
2252	ものにとららぬ、	物に立てらん	*
2253	たう / \、本の御城に	たう / \ 本の御城	*
2254	美よんつかい拝ミやへら、	美御つかへ拝ま	*
2255	若按司	*	*
2256	一 嬉しさや互に	一 嬉しさや村原	*
2257	踊て戻ら、	*	*
2258	村原	総人数	*
2259	一 うれしさや踊羽	一 嬉しや事躍り羽	*
2260	御供しやへら、	御供しやひら	*
2261			
2262			
2263			
2264	しほらひふし		*
2265	一 御代つきよめしやうち		*
2266	本の御城に		*
2267	おかけほさへめしやうれ		*
2268	玉の思子		*
2269		村原	
2270		やあ思 [欠] 大やかなや	
2271		われ刀よ上て	
2272		御め [欠] しやうり	

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本 忠孝婦人	恩河本
1	大川敵討	明治二十九年十一月五日編成	大川敵討
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24	谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に 金磨之龍之角飴有ル太刀刀茶色緞 子羅陳羽織錦之飴有ル脚胖足袋大 団金入錦之細帯		
25	石川満名黒綸子入道頭巾向に金欄 に而飴有ル黒細袷衣裳刀脚胖足袋		
26	門番黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣 裳脚胖足袋差繩		
27	きやうちやく持黒木綿単衣裳脚胖 足袋		
28	若按司かしらひ板メ縮緬振袖単衣 裳足袋風車こふすい		
29	村原黒綸子入道頭巾向に金欄に而 飴有ル黒紗綾袷衣裳綸子広袖羽織 刀太刀足袋物賈之時黒綸子入道頭 巾編笠細物加籠に入付陳賦之時羅 陳羽織甲胸当脚胖金之磨		
30	原国兄弟長刀半向頭巾紕花青銅ネ 同衣裳脚胖足袋中入より入道頭巾 綿		
31	村原母并妻かもし紫長巾金銀水引 熨斗作花助巾琉縫薄衣裳足袋妻谷 茶城江参候時女笠杖持帰り候時長 刀母黒地形付衣裳		
32	西川の子瀬底下こおり西川の支 (ママ)喜瀬之大屋子四人黒西洋 布入道頭巾黒木綿単衣刀脚胖足袋		
33	泊井紕西洋巾黒木綿衣裳脚胖足袋 陳賦之時黒西洋入道頭巾		

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
34	村原子紕縮緬衣裳		
35		村原	村原ノヒヤ
36	一 出様ちやるものや、	*	*
37	大川の按司の頭役	*	*
38	村原のひや、	*	*
39	今帰仁の城	*	*
40	御使にいきやひ、	*	*
41	戻る道すから	*	*
42	聞ハ腹立や、	*	*
43	あゝ谷茶あまやか	*	*
44	野心事巧て、	*	*
45	のゝ事も思ぬ	*	*
46	大川の按司の、	*	*
47	国々の按司部	*	*
48	討たんてやりしゆんて、	*	*
49	島々よ廻て	*	*
50	段々にいなち、	色々ニイナチ。	*
51	加勢頼入	*	*
52	軍押寄すて、	軍サ打寄テ	*
53		大川ノ城	大川ノ城
54		七重八重	七重八重
55		取囲メ囲デ	取囲ミカクテ
56	俄事やれは	*	*
57	分別もならぬ、	*	*
58	多勢(三無勢)	*	*
59	力及はらぬ、	*	*
60	按司や討死	*	*
61	思子の事や、	思子ノ事下。	*
62	あゝ口惜や	*	*
63	敵の生捕やい、	*	*
64	按司の跡つかち	*	*
65	御素立よてやり、	*	*
66	欲悪なやから	*	欲悪ノヤカラ
67	慈悲の肝饅て、	*	*
68	此村原か	*	*
69	有難さ思て	*	*
70	降参よすらハ、	*	*
71	思子諸ともに	*	*
72	打果さむての	*	*
73	計得とやゆる、	*	*
74	あゝ心れてとをゆる	*	*
75	仕合しとやゆる、	*	*
76	大川の御運	*	*
77	世に残てをれハ、	*	*
78	いきやしかな思子	*	*
79	取戻ちからに、	*	*
80	時節待受て	*	*
81	敵討んともて、	*	*
82	村原か命ち	*	*
83	なからへてをゆん、	*	*
84	あゝたうと	*	*
85	神仏そろて	*	*
86	助やひたはふれ、	*	*
87			
88	村原母妻子出羽散山ふし	サンカマ	*
89	一 まことかや実か	*	*
90	ワきもほれ / \ と	*	*
91	ねさめおとろきの	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
92	夢の心地	夢ノ心ル	*
93		乙樽	乙樽
94	一 三人の者や	*	*
95	大川の按司の、	*	*
96	頭役村原か	*	*
97	母やとちなし子、	*	*
98	谷茶あまやか	*	谷茶マヤアガ
99	野心事巧て、	*	*
100	のゝ事も思ぬ	*	*
101	大川の按司の、	*	*
102	国々の按司部	*	*
103	討んでやりしゆんで、	*	*
104	島々よ廻て、	島々廻テ	*
105	色々に云なち、	*	*
106	加勢頼入	*	*
107	軍押寄て、	*	*
108	按司添と共に	*	*
109	村原のひやも、	*	*
110	討死よてやり	*	*
111	しらへのあれハ、	知シ日ノアリバ、	シラシビノアレバ
112	夢現心	*	*
113	肝もきもならぬ、	*	*
114	無常の此世界や	*	*
115	かにもあるひ、	*	*
116	やああや前よ、	*	*
117	なく泪ともに	*	*
118	なひ【ほしやと】ほしやとあす か、	*	*
119	忍ひ隠れとて	*	*
120	一人子乙松【か】(や)、	*	*
121	取素立 / \	*	*
122	人になちからや(に)、	*	人ニナチカラニ
123	親ふしの跡や	*	*
124	継しほしやの、	*	*
125	たう / \ 落る露泪も	タウ / \ 落ル露泪	*
126	押はらへ / \、	打払エ / \	*
127	御気張よめしやうれ	*	*
128	御供しやへら、	*	*
129	母	*	*
130	一 いらぬ年寄の	*	*
131	長生ハしちをて、	*	*
132	あけやうこの憂目	*	*
133	むるか心気、	*	*
134	迎ももろともに	*	*
135	ならんてやりすれハ、	*	*
136	朝夕手はなさぬ	*	*
137	玉の乙松か、	*	*
138	花のおもかほの	*	*
139	名残立増て	*	*
140	いきやしわすれゆか	*	*
141	あの世までも、	アノ世迄	*
142	乙樽	*	*
143	一 いらぬことめしやうな	*	*
144	後れてや済ぬ、	*	*
145			
146			
147	気にまかち三人	*	*
148	諸共にならハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
149	村原か跡に	*	*
150	残る者をらぬ、	*	*
151	乙松よ素立	*	*
152	程程になさハ、	*	*
153	君親の事も	*	*
154	すらな置め、	*	*
155		タウ / \ イラ事召キ	
156		後レテヤ済シ、	
157	たう / \ 御気張よめしやうれ	御気張ユ召リ	*
158	御供しやへら、	*	*
159	仲間ふし	*	*
160	一 あたら人間に	*	*
161	生れやひをすか	*	*
162	やす / \ とくらす	*	*
163	ひまもなひらぬ	*	*
164	乙樽	*	*
165	一 のゝ罪のあたか	*	*
166	つれなさや三人、	*	*
167	母	*	*
168	一 あげやう忍はらぬ	*	*
169	心くら闇に、	*	*
170	道行なかんかりふし	*	*
171	一 ゆきまよひ / \	*	*
172	乙樽	*	*
173	一 いく先やしらぬ	*	*
174	野山さくひらも、	*	*
175	なかんかりふし	*	*
176	一 たゝあしにまかち	*	*
177	乙樽	*	*
178	一 かゝる方なひらぬ	*	*
179	行来しら玉の、	*	*
180	母	*	*
181	一 露なたやあられ	*	一 露泪タアラリ
182	雪もふり増て、	*	*
183			
184			
185			
186	子持ふし	子持	*
187	一 冬ノ山嵐や	一 冬ノ山嵐	*
188	あし本もつまて	*	*
189	肝もきもならぬ	*	*
190	あげやういきやなゆか	イキヤガナヨラ	*
191	乙樽	*	*
192	一 御気張よめしやうれ	*	*
193	頓て夜もあける、	*	*
194			
195			
196			
197			
198			
199	母	*	*
200	一 肝お(う)すていきゆん	*	*
201	しはしやすま、	*	*
202	乙樽	*	*
203	一 やああや前よ、	*	*
204	/ \、	*	*
205	同人	*	*
206	一 此子たちをれは	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
207	すと親のことも、	スト親ノ事ヤ	スト親ノ事ヤ
208	肝の俣ならぬ	*	*
209	急ちいそからぬ、	*	*
210	うつかつとしちをて	*	*
211	敵におひつかれ、	*	*
212	三人共憂め	*	*
213	むたよいかとても、	*	*
214	此子ともすてゝ	*	*
215	身すからになれハ、	*	*
216	すと一人かことや	*	*
217	自由になゆん、	*	*
218			同人
219	一 義理の道たひもの	*	*
220	思きらなゝゆめ、	*	*
221	やあ乙松よ、	*	ヤア乙松
222		/ \	/ \
223	ワぬことる親に	*	*
224	なさつたる因果、	*	*
225	是までよたひもの	*	*
226	母の面かほも、	*	*
227	夢現心	現心ル	*
228	起てむてよ、	*	*
229	あけやうあてなしの	アケヤウアテメシノ	*
230	のゝこともおまぬ、	*	*
231	哀れ楽々と	*	*
232	ねるか心気、	*	*
233			
234			
235			
236		同人	
237	やあ乙松よ、	*	*
238	誠後生あらハ、	*	*
239	父親の側に、	*	*
240	先立ひむちをて	*	*
241	まちやいをれよ、	*	*
242			
243	やあ乙松	ヤア乙松ヨ	ヤア乙松ヨ
244	天の引合しに	*	*
245	情けある人の、	*	*
246	素立やひ呉らハ	*	*
247	主人親ふしの、	*	*
248	跡方ハ頼て	*	*
249	尋ねやひ呉れよ、	*	*
250			
251			
252			
253			
254	あゝた【ち】(ウ)と、	*	*
255	神佛そろて	*	*
256	見守やひたはふれ、	*	*
257	思切ひをすか	*	*
258	誠つらむては、	*	*
259	我肝忍はらぬ	*	*
260	やみになゆさ、	*	*
261	東江ふし	*	*
262		一 ア、ケへ	一 ア、ケ
263	一 ワきもしのはらぬ	我肝忍バラ	*
264	闇になゆさ	*	*



No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
265	乙樽	同人	*
266	一 やああや前よ、		*
267	頓て喜名村や		*
268	たよひ島たひもの、		*
269	御気張よめしやうれ		*
270	御供しやへら、		*
271	やああや前よ、	*	*
272	/、	*	*
273	母	*	*
274	一 肝もきもならぬ	*	*
275	しはし休ま、	*	*
276	村原	*	*
277	一 是や村原のひや、	*	*
278	義理のませ垣に	*	*
279	かこまれてワ身の、	*	*
280	浅ましや露の	*	*
281	命ちやすか、	*	*
282	思子取戻す	*	*
283	念願のあとて、	*	*
284	ねふる夜もねらぬ	*	*
285	忍てまわる、	*	*
286			
287	こねや夜深さに	*	*
288	童へ鳴声や、	*	*
289	いきやしちやる事か	*	*
290	立寄ひむたに、	*	*
291			
292	やあ乙松、	ヤア乙松ヨ	*
293	あゝ身にかへて朝夕	*	*
294	撫素立しゆたる、	*	*
295	この一人子やすか	*	*
296	ミたれ世になれハ、	*	*
297	哀れこのなひに	*	*
298	なすか心気、	ナリガ心気	*
299	母と乙樽も	母ト乙樽ヤ	*
300	行来しら玉の、	*	*
301	露霜と共に	*	*
302	なたらとめハ、	*	*
303	あゝ浅ましや、	*	*
304	いや、無常の此世界の	*	*
305	習ひやしらね、	*	*
306	おくれてやすまぬ	*	*
307	先にかゝら、	*	*
308	乙樽	*	*
309	一 やああや前よ、	*	*
310	/、	*	*
311	村原	*	*
312	一 やあ/、	*	*
313	かにある雪降に	*	*
314	こかと山道に、	クガトウ	*
315	いきやしちやる事か	*	*
316	二人の者や、	*	*
317	乙樽	*	*
318	一 首里からとやすか	*	*
319	旅の上の習や、	*	*
320	村原	*	*
321	一 やあ母親	*	ヤア母親ヨ
322	やあ乙樽	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
323	母	*	*
324	一 やあ村原、	一 ヤア村原ヨ	*
325	按司添とゝもに	*	*
326	なる筈の者の、	成ル筈ナモノ	*
327	主の恩忘ひ	主ノ恩忘ス	*
328	孝の道しらぬ、	孝ノ道スラ	*
329	のゝつらのあとて	モノ、ツラノアトテ	*
330	とまいてきちやか、	*	*
331	浅ましや村原	*	*
332	命のあたらしやひ、	*	*
333	妻子のなさけ	*	*
334	しのはらぬあため、	忘ラ、モアタメ	*
335	村原	*	*
336	一 あゝめしやいること、	*	*
337	按司添と共に	*	*
338	なる筈とやすか、	*	*
339	思子の事と	思子ノ事ヤ	思子ノ事ヤ
340	敵の生捕やい、	*	*
341	村原も共に	村原シ共	*
342	打果さむての、	*	打果シデンノ
343	分別ハ出ち	*	分別ヤ出キ
344	いこと葉ハ饅て、	*	*
345	過し按司かなし	*	*
346	跡継の思子、	*	*
347	御素立よてやり	*	*
348			
349	語ひへのあれハ、	*	*
350	いきやしかな思子	*	*
351	引取んともて、	*	*
352			
353			
354			
355	村原か命ち	*	*
356	なからへてをゆん、	*	*
357	母	*	*
358	一 今のことやれハ	*	*
359	誇らしやとあゆる、	*	*
360	肝にきもそへて	*	*
361	念の入れよ、	*	*
362	村原	*	*
363	一 村原かいきち	*	*
364	此世界にをとて、	*	*
365	思子取戻ち	*	*
366	敵討な置め、	*	*
367	あゝ思ひ世に残ち	*	*
368	死やならぬ、	*	*
369	やあ乙樽、	ヤ乙樽	*
370	いきやし乙松	*	イチヤシ乙松ヤ
371	すてゝあたか、	*	*
372	母	*	*
373	一 咲出ゆる花ハ	*	*
374	ワ身に思かへち、	*	*
375	のゝ肝のあとて	*	*
376	捨てあたか、	*	*
377	乙樽	*	*
378	一 大川の城	*	*
379	仕合の時に、	*	*
380	按司添と共に	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
381	討死によ(て)やり、	*	*
382	語ひへのあれハ、	*	*
383	沙汰よ聞及て、	*	*
384	三人逃忍て	*	*
385	こまゝてやきやすか、	*	*
386			
387			
388	親かなし事や	*	*
389	なれぬ山道の、	*	*
390	さくひらのつかれ	*	*
391	足本もつまで、	*	*
392	急ちいそからぬ	*	*
393	うつかつとしちをて、	ウツカツトシキ居トテ	*
394	敵に追つかれ	*	*
395	三人共憂目、	*	*
396	むたよいか迎も	*	*
397	哀れなく/＼も、	*	*
398	すとおやのために	*	*
399	すてゝあたん、	*	*
400	村原	*	*
401	一 あゝ此上とやすか	*	*
402	誇らしやとあゆる、	*	*
403	またも世に出る	*	*
404	運のめくひ	*	*
405	乙樽	*	*
406	一 やあ/＼、	*	*
407	思子の事や	*	*
408	御格護よてやり、	*	*
409	聞ハ、嬉しさや	*	*
410	仕合とやゆる、	*	*
411	我身に思つきやる	*	*
412	事の又あすや、	*	*
413	あん前に名付	*	*
414	忍てむちからに、	*	*
415	命救てたはふれてやり	*	*
416	誠たん/＼と、	*	*
417	色々にいやは、	*	*
418	欲悪な谷茶	欲悪ノ谷茶	*
419	巧てをることの、	*	*
420	便りはしともて	*	*
421	疑ひやなひらぬ、	*	*
422	抱(かげ一)置積り、	*	抱ミ置ク積リ
423	我肝落着やい	我肝落ツキヨテ	我肝ウテツチヨテ
424	心ゆるさしやい	*	*
425	思子守なつけ	*	*
426	引とやひきやへら、	*	*
427	村原	*	4
428	思子為てやり	*	*
429	女身ハひちゆひ、	*	*
430	敵の手にやらす	*	*
431	事やならぬ、	*	*
432	乙樽	*	*
433	一 女又やても	*	*
434	男またやても、	*	*
435	思子のために	*	*
436	肝やひとつ、	*	*
437	乙樽原(ママ)	村原	村原
438	一 肝の上の事や	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
439	おの筈とやすか、	*	*
440	気ニまかちすにゆめ	*	*
441	義理のならひ、	義理ノ習ヤ	*
442	乙樽	*	*
443	一 義理の道てすも	一 義理ノ道テスヤ	*
444	君親の為に、	*	*
445	肝盡す外の	*	*
446	事やなひさめ、	*	*
447	村原	*	*
448	村原か生ち	*	*
449	此世界にをとて、	*	*
450	思子為てやり	*	*
451	義理の道曲て、	*	*
452	女あてなしハ	女アテナシノ	*
453	敵の手にやらち、	*	*
454	末代の恥辱	*	*
455	面目やきやしゆか、	*	*
456	曾て此事や	*	*
457	ゆるす事ならぬ、	*	*
458	乙樽	*	*
459	一 いちもやく立ぬ	*	*
460	事す又やらハ	*	*
461	わない、女やても	*	*
462	谷茶あまやに、	*	*
463	一刀も掛て	*	*
464	討死はすらな、	*	討死ユスラニ
465	徒に命ち	*	*
466	なからへてのしゆか、	*	*
467	たう / \ ゆるちたはふれ、	*	*
468	母	*	*
469	一 あゝ事あらくするな	*	*
470			
471	やあ乙樽、	*	*
472	思子為やれハ	*	*
473	おの筈とやすか、	*	*
474	事あらくしちや	*	*
475	仕損しの基ひ、	*	*
476	思子までかゝて	*	思子迄テ掛テ
477	大事あらんしゆもの、	*	*
478	細々とまたく	*	*
479	はからやひくひれよ、	*	*
480	乙樽	*	*
481	一 肝ぬるさしちをて	*	*
482	若か谷茶か	*	*
483	手段引替ち	*	*
484	思子の上に、	*	*
485	あらし聲のあらハ	*	*
486	願てをることも、	*	*
487	思てやくたゝぬ	*	*
488	あたとなゆる	*	*
489	村原	*	*
490	一 やあ乙樽、	*	*
491	女只ひちゆひ	*	*
492	敵の手にやらす、	*	*
493	きもの忍はらぬあてと	*	*
494	断やしちやる、	*	*
495	今の心さし	*	*
496	いちも盡さらぬ、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
497	誠村原か	*	*
498	とちの本意、	*	*
499	此外に手段	*	*
500	分別もならぬ、	*	*
501	たう / \	*	*
502	念に念添て	*	*
503	気張て呉れよ、	*	*
504	乙樽	*	*
505			
506	一 思たこと叶て	*	*
507	ほこらしやとあゆる、	*	*
508	命のあるかきり	命ノアル間ヤ	*
509	こゝろつくさ、	*	*
510	母	*	*
511	一 やあ乙樽、	*	*
512	思子為てやり	*	*
513	命ちふりすてゝ、	*	*
514	今のこと云すや	*	*
515	誇らしやとあすか、	*	*
516	行先の定め	*	*
517	さたまらぬあれハ、	*	*
518	あけやう思盡す	*	*
519	かたもなひらぬ、	*	*
520	乙樽	*	*
521	一 人の願事の	*	*
522	あたに又なゆめ、	*	*
523	こゝろ安す / \と	*	*
524	御待めしやうれ、	*	*
525	村原	*	*
526	一 やあ乙樽、	*	*
527	あらく掛引も	*	*
528	有積りたひもの、	*	*
529	腹立ぬことに	*	*
530	心しつめとて、	*	*
531	いこと葉に應し	*	*
532	取廻し / \、	*	*
533	請答よふ	請ケ返答	請返谷 (ママ) ヨヲ
534	了簡やすれ、	了簡ヨスリヨ	了簡ヨスレヨ
535	乙樽	*	*
536	一 我胸に留て	*	*
537	ワか肝に染て、	*	*
538	仰す事まゝに	*	*
539	念のいらに、	*	*
540	村原	*	*
541	一 若か事洩て	*	*
542	ならぬおの涯や、	*	*
543	別に計とる	*	*
544	手段又あもの、	*	*
545	後れらぬことに	*	*
546	切巧てをる次第、(切は見せ消ちか)	巧デ居ル次第。	巧テヲル次第
547	親子此三人	*	*
548	隠とる段、	*	*
549	一々細々	*	*
550	白状やすれ、	白状ヨスリヨ	*
551	あゝ繰返し / \	ハア繰り返シ / \	*
552	又事とやすか、	*	*
553	互に面目や	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
554	失なワぬことに、	*	*
555	思子引とゆる	思子引チ取ス	思子引取ル
556	要目ところ、	*	*
557	ゑひ能々分別	*	*
558	題目とやゆる、	*	*
559	やあ乙樽、	*	*
560	やく立ぬ我身の	*	*
561	とじなたる因果、	*	*
562	あゝ口惜や、	ハア口惜ヤ	*
563			
564			
565			
566			
567			
568			
569			
570			
571			
572			
573	乙樽	*	*
574	一 たとひ事洩て	*	*
575	生殺しされててやり、	*	*
576	思子為やれは	*	思子ノ為ヤレハ
577	残る事なひらぬ、	*	*
578	心安す/ \と	*	*
579	極楽とやゆる、	極楽ドシヤビル	*
580	村原	*	*
581	一 あゝいふる事よきけハ	*	*
582	肝にひし/ \と、	*	*
583	むかし物語り	*	*
584	聞ゆることに、	*	*
585	よの中の手本	*	*
586	沙汰と残る、	*	*
587	乙樽	*	*
588			
589			
590			
591			
592			
593	一 此子乙松や	*	*
594	御素立めしやうち、	御素立ヨ召チ	御素立ヨ召チ
595	人なゆることに	*	*
596	計やひたはふれ、	*	*
597	村原	*	*
598	一 念遣するな	*	*
599	おの素立しゆもの、	*	*
600	すと子の事や、	*	*
601	気遣するな、	*	*
602	乙樽	*	*
603	一 やああや前よ、	*	*
604	頓てワか思子	*	*
605	をかくてこんしゆもの、	*	*
606	肝願よしちをて	*	*
607	御待めしやうれ、	*	*
608		母	
609		一 義理ノ道ヤレバ	
610		留テ留ラ、ン	
611	母言葉并伊野波ふし	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
612	一 義理のみちやれハ	*	*
613	留てとめららぬ、	*	*
614	乙樽	*	*
615	一 よ所しれ(て)からや	*	*
616	大事あらんしゆもの、	*	*
617	急ち立戻て	*	*
618	まちやひいまふれ、	*	*
619	伊野波ふし下句	*	*
620	一 のかすとくかにある	*	*
621	夢の世界や	*	*
622			
623			
624			
625			
626			
627			
628	乙樽道行金武ふし	*	*
629	一 胸にものおめハ	*	*
630	歩む道ほども	*	*
631	覚らすにつきやさ	*	*
632	本の城	*	*
633	乙樽	*	*
634	一 覚らすに谷茶	*	*
635	城元につきやん、	*	*
636	物めつめしちをて	*	*
637	案内よすらに、	*	*
638			
639	やあ/\、御取次頼ま	*	*
640	ものしられしやへら、	*	*
641			
642	門番	*	*
643	一 はあ/\無作法/\、	*	*
644	内原にいきやひ	*	*
645	御取次しやうれ、	*	*
646	乙樽	*	*
647	一 やあ/\、	*	*
648	我身や大川の	*	*
649	思子虎千代が、	*	*
650	乳親とやゆる	*	*
651	守あんとやゆる、	*	*
652	大川の城	*	*
653	仕合の時(に)	*	仕合ノ時時(ママ)ニ
654	あへてさま逃て	*	*
655	かくれやひをたん、	*	*
656	かゝる方なひらぬ	*	*
657	すかる方なひらぬ、	*	*
658	聞ハ御慈悲あて	*	*
659	守素立思子、	*	*
660	御素立のあんて	*	*
661	音信よをかて、	*	*
662	思子諸共に	*	*
663	命つかんともて、	*	*
664	よしれやひをもの	*	*
665	頼て御情に、	*	*
666	御取次めしやうち	*	*
667	助やひ給ふれ、	*	*
668	門番	*	*
669	一 はあ云ることよ聞ハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
670	無蔵なもの、	ンザウナ者ヨ	*
671	たう/\、むまに	タウ/\クマニ	*
672	待ひをれよ	*	*
673	/\、	*	*
674	同人	*	*
675	拝れよめしやいん	*	*
676	あれに居やうれ、	アリニ居リヨ	*
677	谷茶	*	*
678	一 やあ/\、	*	*
679	大川のなし子	*	*
680	乳母てる女、	*	*
681	いきやあれはすにゆか	*	*
682	考てみやうれ、	*	*
683			
684			
685	満納	*	*
686	一 され按司かなし、	*	*
687	大川のなし子	*	*
688	引取んてやり、	*	引取ンテヤリノ
689	村原のひやか	*	*
690	計得とやゆる、	*	*
691	あゝあれほどの村原も	*	*
692	運の末なれハ、	*	*
693	わにやかかけの内に	*	ワ縄ガケノ内ニ
694	首いれる仕形、	*	*
695	こまや楽々と	*	*
696	足たくてをとて、	*	*
697	村原のひやか	*	*
698	計事便て、	*	*
699	村原からめゆる	*	*
700	時節きやあへたん、	*	*
701	扱々御果報	*	*
702	急い事たやへる、	*	*
703	谷茶	*	*
704	一 一段な事よ	*	一 一段ナ事
705	/\、	*	/\、
706	やあ石川のひやゝ、	ヤア石川ノヒヤ	ヤア石川ノヒヤン
707	へつに了簡の	*	*
708	あひかしゆら、	*	*
709	石川	*	*
710	一 満納いやれること、	*	*
711	一々尤	*	*
712	同意たやへる、	*	*
713	谷茶	*	*
714	一 扱も/\、	*	*
715	分才もしらぬ	*	*
716	此按司に向て、	*	*
717	すひさんなやから	*	*
718	ゆるす事ならぬ、	*	*
719	急ち引出ち	*	*
720			
721	責のあるかきり、	*	*
722			
723	せめて有筋	*	*
724	白状よしめれ、	白状ヨスリヨ	*
725	石川	*	*
726	一 拝むちゆめやへて、	*	*
727			



No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
728	やあよしれとる女	*	*
729	出す/\、	*	*
730			
731			
732	下部	*	*
733	一 さあ/\	*	*
734	御前寄て拝め	御前ニ寄テ拝メ	*
735	御側よて拝め、	*	*
736			
737		同人	同人
738		タウ/\シマニ	一 タウ/\シマニ
739		イヤウリ/\	居ヤウリ/\
740	満納	*	*
741	一 やあ女、	*	*
742	得と肝ゐして	*	*
743	慥にきけ、	*	*
744	おかたちか巧ミ	*	*
745	たくてをる事や、	*	*
746	尋らぬ先に	*	*
747	合点とやゆる、	*	合点ドヤスガ
748	直におの科に	*	真ニウノ科ニ
749	当る筈やすか、	*	*
750	科もかんすらぬ	*	*
751	責もさぬことの、	*	*
752	御慈悲ある天の	*	*
753	御情のあとて、	*	*
754	村原か行衛	*	*
755	おんにゆけるやらハ、	*	*
756	巧てをる事の	*	*
757	おの科もゆるち、	*	*
758	島知行もとらち	*	*
759	引はらふしまても、	*	*
760	おの御肝きやへや	*	*
761	ある筈よたひもの、	*	*
762	御情の御肝	*	*
763	ミすく取請て、	*	*
764	肝われて實に	*	*
765	おんにゆけやうれ、	*	*
766			
767			
768	同人	*	*
769	一 あゝ好てこのまらぬ	*	*
770	天運のめぐり、	*	*
771	勘違するな	*	*
772	/\、	*	*
773	乙樽	*	*
774	一 村原か事や	*	*
775	討死かしちやら、	*	*
776	音信もなひらぬ	*	*
777	沙汰もきかぬ、	*	*
778	女あてなしの	*	*
779	のゝ思のあゆか、	*	*
780	命のつれなさに	*	*
781	按司かなし天の	*	*
782	十百歳のおかほ	*	*
783	かめ願よしちをて、	*	神願ヨシチヲテ
784	御情にワ身の	*	*
785	露程の命ち、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
786	いきやしかなともて	*	*
787	よしれやひをもの、	*	*
788	色分てたはふれ	*	*
789	天の御肝、	*	*
790	満納	*	*
791	一 いや / \、	*	*
792	かくしゆらハ隠す	*	*
793	つゝミゆらハ包め、	*	*
794	肝のあくまゝや	*	肝ノアルマ、ヤ
795	責の有限り、	*	*
796	おの責に当て	*	*
797	聞管とやすか、	*	*
798	責られてからに	*	*
799	おんにゆけるやらハ、	*	*
800	科の上に科や	*	*
801	重ならんしゆもの、	*	*
802	せめららぬうちに	*	*
803	おんにゆけやうれ、	*	*
804	乙樽	*	*
805			
806			
807			
808			
809			
810			
811			
812			
813	一 のゝこともおまぬ	*	*
814	女あてなしに、	*	*
815	罪科よかけて	*	*
816	うきくれしやしめゆすや、	*	*
817	村原かしワさ	*	*
818	恨めてとをゆる、	*	*
819	のよて身にかへて	*	*
820	実よかくしやへか、	*	*
821	此事やつく / \と	*	*
822	おもてたはふれ、	*	*
823	満納	*	*
824	一 勘違するな	*	*
825	不勘ともするな、	*	*
826	殺される科も	*	*
827	兼てしりなけな、	*	*
828	責の上(に) 向て	*	*
829	偽やならぬ、	*	*
830	有筋にいちゆて	*	*
831	殺される者も、	殺サレル者ヤ	*
832	昔から今に	*	*
833	数やしらぬ	*	*
834	乙樽	*	*
835	一 村原か行衛	*	*
836	夢程もしらは	*	*
837	御尋の先に	*	*
838	おんにゆける積り、	*	*
839	のゝおめのあゆか		*
840	ワか命の外に、		*
841	のゝ思のあとて	*	*
842	隠ちをゆか、	*	*
843	御言葉に應し	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
844	たゝこともないらぬ、	タラ事ン無ン	*
845	御返事御返答に	*	御返事御返谷(ママ)ニ
846	つまてをゆん、	*	*
847	石川	*	*
848	一 はあ勘違するな	一 ア、勘違スルナ	*
849	とんなこといふな、	*	*
850	縦命限り	*	*
851	あらわすなてやり、	*	*
852	堅談合も	堅ク談合	*
853	しちあたんてやりか、	*	*
854	満納いやれること	*	*
855	責のねつられめ、	*	*
856	たう / \、	*	*
857	今のこと細く	*	今ノ如ト細ハ
858	真心にいやれは、	*	真心ニ言レス
859	百すてやあらね	*	*
860	美拝をかてからに、	*	*
861	みすく取請て	*	*
862	包ますにいやうれ、	*	*
863	あゝ百果報や目の前	*	*
864	引よすてをとて、	*	引寄テヲトヲ
865	人の為にあたら	*	*
866	のちとてやすまぬ、	*	*
867	人間の願の	*	*
868	のゝおめのあゆか、	*	*
869	思てやく立ぬ	*	*
870	村原もすてゝ、	村原捨テ	*
871	天道のなし子	*	*
872	真肝うちわれて、	真ト肝割テ	*
873	生れたるしるし	*	*
874	樂よすれよ	*	*
875	/ \、	*	*
876			
877			
878	石川	同人	同人
879	一 さあ / \	*	*
880	おんにゆけやうれ	*	*
881	/ \、	*	*
882	乙樽	*	*
883	一 村原かなんと	*	*
884	やから者やても、	*	*
885	網の魚心	*	*
886	只ひちゆいものゝ、	*	*
887	こへな御城に	*	*
888	弓引のなゆめ、	*	*
889	たとひ生残て	*	*
890	かたすみのをても、	*	*
891	天の御定の	*	*
892	くる間の命ち、	*	*
893	海山にかゝて	*	*
894	つくまでとやゆる、	*	*
895	あゝ按司かなし御始	*	*
896	石川と満納、	*	*
897	島国よ豊む	*	*
898	人々とやすか	*	*
899	村原のひやゝ	*	*
900	鬼のことめしやうち	*	*
901	いきやしおれほとも	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
902	おとろしやよめしやいか、	*	*
903	谷茶	*	*
904	一 むゝ尤な不審	一 尤ナ不審	*
905	尤な事、	*	*
906	やあ女、	*	*
907	慈悲情尽ち	*	*
908	大川のなし子、	*	*
909	素立やひあすか	*	*
910	もしか村原か、	*	*
911	いらぬ義理立て	*	*
912	謀叛企(夕)ハ、	*	*
913	大川のなし子	*	*
914	生て置ならぬ、	*	*
915	(誠心實も)	*	*
916	あたになるやれは、	*	*
917	村原も共に	*	*
918	素立ほしやあてと、	*	助ブシヤアテド
919	細く問尋ね	*	細、尋問
920	しゆることよたひもの、	*	*
921	守子為ともて	*	*
922	かくさずに語れ、	*	*
923	満納	*	*
924	一 いや、此上に又も	*	*
925	隠しともしゆらハ、	*	*
926	又事もいらぬ	*	*
927	直に引立て、	*	真ニ引立テ
928	すねの砕けらハ	*	*
929	胸腹よまでも、	*	*
930	命の有限り	*	*
931	はさみきらしゆもの、	*	*
932	たうおのこゝれしちをて	タウ / \ 肝ク、リシキヨテ	*
933	おんにゆけやうれ、	*	*
934	多ひ差繩持ち	*	*
935	近く寄てをとて、	近ク寄テカラニ	近ク寄テカラニ
936	又も隠しゆらハ	*	*
937	屹度こむせめれ、	*	*
938	下部	*	*
939	一 さあ / \	*	*
940	おんにゆけやうれ	*	*
941	/ \、	*	*
942			
943			
944		同人	同人
945	後てやすまぬ	*	*
946	急ちおんにゆけやうれ、	*	*
947		/ \	
948	満納		*
949	一 いや、おなためもしらぬ		*
950	こゝてをゆめ、		*
951		乙樽	*
952	一 のゝこともしらぬ	*	*
953	女あてなしに、	*	*
954	段々の御間こと	段々ノ御事	*
955	御難儀とやゆる、	*	*
956	いちもやく立ぬ	*	*
957	是非に及はらぬ、	*	*
958	誠正直の	*	*
959	我胸の内や、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
960	責てせめころち	*	*
961	あとに御目掛れ、	*	*
962	近さ拝まれる	*	*
963	天の下をとて、	*	*
964	偽のなゆめ	*	*
965	人の肝の、	*	*
966	満納	*	*
967	一 はあ、つらつきも替て	一 ア、ツラズチン替テ	*
968	悪魔やな女、	*	*
969	夫喰る悪生	*	*
970	切支丹、	切リスタ	*
971	鬼むちやる人の	*	*
972	此世界にをゆめ、	*	*
973	是と鬼やゆる	是ド鬼サラメ	*
974	さあ / \	*	*
975	屹度こむ責れ、	*	*
976	下部	*	*
977	一 せめられるごうの	*	*
978	深さある女、	*	*
979	いきやか / \、	*	*
980	乙樽	*	*
981	一 ちりあくた心	*	*
982	数ならぬワ身の、	*	数ナラン我身ヤ
983	殺される事や	*	*
984	露程も思ぬ、	*	*
985	思切ひをすか	*	*
986	のゝこともしらぬ、	*	*
987	女あてなしは	女アテナシニ	*
988	鬼無理にせまで、	鬼モレニ召チ	*
989	責殺す罪の	*	*
990	わかために廻て、	*	*
991	按司かなし上に	*	*
992	いきゆらたひいとめは、	イキヨラトメバ	*
993	死ゆ / \も是や	*	*
994	気にかゝていきゆん、	*	気ニ遣テ行ン
995	谷茶	*	*
996	一 はあ云る事よ聞ハ	一 ア、言ル事ヨ聞バ	*
997	理りとやゆる、	*	*
998	縄も掛らすに	*	*
999	責もさぬことに、	*	*
1000	義理の上の嘯	*	*
1001	あらんしゆもの、	*	*
1002	たう / \	*	*
1003	せまである縄も	*	*
1004	急ちときゆるす、	*	*
1005			
1006			
1007	乙樽	*	*
1008	一 あゝたうと、	*	*
1009	此御恩たうとさや	*	*
1010	女身のわぬも、	女身ノ我身ノ	*
1011	よしれやひをれハ	*	*
1012	若か村原か、	*	*
1013	生残てをとて	*	*
1014	思子御素立の、	*	*
1015	事よとも聞ハ、	*	*
1016	我身よりも増て、	我ン敵モ増テ	*
1017	時日移さすに	*	時日積サズニ

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1018	うち笑ひ/\、	*	*
1019	よしれらな置め	*	*
1020	人の肝の、	*	*
1021	御慈悲御情と	*	*
1022	ワ御主かなし、	*	*
1023	百とまでちやうわれ	百年迄長マデ	*
1024	拝てすてら、	拝デスデヤビラ	*
1025	満納	*	*
1026	一 いや、からすよも女	*	*
1027	人やたまそとも、	*	*
1028	いきやし此満納	*	*
1029	たまかしのなゆか、	*	*
1030			
1031	そんちむち牢に	*	*
1032	たゝちむちおけ、	*	*
1033	谷茶	*	*
1034	一 いや/\、	*	*
1035	あたまをてものや	*	*
1036	念入なしちをて、	*	*
1037	仕損してからや	*	*
1038	悔てやく立ぬ、	*	*
1039	思案より外の	*	*
1040	事やなひさめ、	*	*
1041	たう/\	*	*
1042	事急きするな	*	*
1043	短気するな、	*	*
1044			
1045	扱も/\、	*	*
1046	高程もおちやて	*	*
1047	目口やは/\と、	*	*
1048	雪のしらはくき	*	*
1049	物云さし聞ハ、	物イヨス聞バ	*
1050	ごいんから替て	*	*
1051	花の清ら女、	*	*
1052	見れはみる毎に	*	*
1053	おめと増る、	思テ増ル	*
1054	我か側ニおきやひ	*	*
1055	互に楽々と、	*	*
1056	夢のこの浮世	*	夢ノ間ノ浮世
1057	暮しほしやの、	*	*
1058	誠真実の、	*	*
1059	我肝とも呉らハ、	*	*
1060	村原か事も	*	*
1061	いやな置め、	*	*
1062	石川と満納	*	*
1063	追ぬけてからに、	*	*
1064	ワ肝明々と	*	*
1065	談合よすらに、	*	*
1066			
1067	やあ/\、	*	*
1068	此事や互に	*	*
1069	おかとしちすまぬ、	*	*
1070	けふや立別て	*	*
1071			
1072	思案しちからに、	*	*
1073	思ひきハマらは	*	*
1074	呼す筈たひもの、	*	*
1075	戻てむち得と	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1076	考てみやうれ、	*	*
1077	満納	*	*
1078	一 めしやいること、	*	*
1079	ものやひとかたに	*	*
1080	おかとしちすまぬ、	*	*
1081	あの女ですや	*	ア、女テスヤ
1082	村原かとしの、	*	*
1083	乙樽よてやり	*	*
1084	たゝならぬやから、	*	*
1085	女てやりおかと	*	*
1086	ゆるち置ならぬ、	*	*
1087	責らすになんと	*	*
1088	尋たんたひか、	*	*
1089	愚痴の上に愚痴や	*	*
1090	かたまゆる積り、	*	*
1091	牢に込置て	*	*
1092	おのくつさしめて、	*	*
1093	引出し / \	*	*
1094	おの責にあてゝ、	*	*
1095	漸々と気根	*	*
1096	疲ゆる時と、	疲リヨル時ヤ	*
1097	有筋に白状	有筋白状	*
1098	しゆる積りやれハ、	*	*
1099	御思案の内や	*	先御思案ノ内ヤ
1100	こめておきやへら、	*	*
1101	石川	*	*
1102	一 満納思寄も	*	*
1103	尤とやすか、	*	*
1104	牢こめもいらぬ	*	*
1105	責もさぬことの、	*	*
1106	御慈悲御情けの	*	*
1107	按司の御計や、	*	*
1108	いかな悪欲な	*	*
1109	無理なものやても、	*	愚痴ナモノヤテン
1110	背く事なひさめ	*	*
1111	義理の上ニ、	*	*
1112	たう / \	*	*
1113	先牢こめや	*	*
1114	ゆるちおかに、	*	*
1115	満納	*	*
1116	一 いや / \、	*	*
1117	村原のひやに	村原ノヒヤト	*
1118	ならふものをらぬ、	*	*
1119	巧てをる事や	*	*
1120	いか程かやゆら、	*	*
1121	おかとしちすまぬ	*	*
1122	女わらへ、	*	*
1123	石川	*	*
1124	一 我々の一事	*	*
1125	はからやいをれハ、	*	*
1126	按司や百ことの	*	*
1127	御計のあゆん、	*	*
1128	満納	*	*
1129	一 はあ、主人身の上の	*	*
1130	浮沈ミやれハ、	*	*
1131	肝のあくまゝや	*	*
1132	命ち限り、	*	*
1133			

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1134	あゝおとろしやもしらぬ	ア、驚(ウトラサ)シヤン	*
1135	みよんにゆけややへか、	美御シノケヤビスガ	*
1136	責さしゆることの	*	*
1137	御肝きやさあらハ、	*	*
1138	大川のなし子	*	*
1139	あのやからものと、	*	*
1140	姿から形ち	*	*
1141	似ちをるもの撰て、	*	*
1142	大川のなし子てやり	*	*
1143	取沙汰よしめて、	*	*
1144	外の出入も	外ノ出入	*
1145	ゆるちあんてやり、	*	*
1146	村原か聞ハ	*	*
1147	疑やなひらぬ、	*	*
1148	はいとらんともて	*	*
1149	忍て来るつもり、	*	*
1150	おの手組しちをて	*	*
1151	からめとやへら、	*	*
1152	谷茶	*	*
1153	一 細事のたくひ	*	*
1154	聞きやくもなひらぬ、	*	*
1155	満納	*	*
1156	一 あゝ按司かなし天の	*	*
1157	盛衰の	*	*
1158	此涯よやれハ、	*	*
1159	包てつゝまらぬ、	*	*
1160	おとろしやもしらぬ	驚シン知ラン	*
1161	繰返し/\、	クへ返し/\	*
1162	みよんきこと	*	*
1163	かへそ科や	*	*
1164	仰すめしやうち、	*	*
1165	是非共牢舎	是非共ニ籠合	*
1166	仰すめしやうれ、	*	*
1167	谷茶	*	*
1168	一 推参なやから	*	*
1169	愚痴にかたまどめ、	*	愚痴ニカタマヨミ
1170	又事もいらぬ	又事モ言ラン	*
1171	なけすてゝとらさ、	*	*
1172	石川	*	*
1173	一 此涯よたひもの	*	*
1174	御勘忍めしやうれ、	*	*
1175	谷茶	*	*
1176	一 やあ石川、	*	*
1177	ワか下知に背く	*	*
1178	気任のやから、	気任シナヤカラ	気任ナ族ラ
1179	急ち引立て	*	*
1180	そんちいけ、	*	*
1181	石川	*	*
1182			
1183	一 やあ満納	*	*
1184	御意背く道の	*	*
1185	此世界にあゆめ、	*	*
1186	おれこれも按司の	*	*
1187	御計にまかち、	*	*
1188	仰すことまゝに	*	*
1189	急ち戻ら、	*	*
1190			
1191			



No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1192			
1193	谷茶	*	*
1194			
1195	一 やあ / \	*	*
1196	振合の袖に	*	*
1197	糸の縁結て、	*	*
1198	夢の間の浮世	*	*
1199	語ひほしやあもの、	*	*
1200			
1201			
1202			
1203	ワか側にをとて	*	*
1204	楽よすれよ	*	*
1205	/ \、	*	*
1206	乙樽	*	*
1207	一 御情に御側	一 御情ノ御側	*
1208	をらんでやりすれハ、	*	*
1209	おやくめさあもの	ヤグメサヨオモノ	*
1210	御ゆるせよめしやうれ、	御免シ召リ	*
1211	谷茶	*	*
1212	一 いや / \、	*	*
1213	やくめさもいらぬ	ヤグメサンスルナ	*
1214	斟酌もするな、	シンシヤクスルナ	*
1215	ワ側ともをらハ	*	*
1216	花に増姿、	*	*
1217	おの飴しめて	*	*
1218	をなちやらもされん、	*	室ニサレン
1219	島国よ揃て	*	*
1220	あかめらんしゆもの、	*	*
1221	たう / \	*	*
1222	側にをれよ	*	*
1223	をれよ、	*	*
1224	乙樽	*	*
1225	一 按司もわなひすかぬ	*	*
1226	楽も又すかぬ、	*	*
1227	わすたつれやても	*	*
1228	女身の習の、	*	*
1229	義理曲てなれる	義理曲テ、ヤレ	*
1230	道のあゆめ、	*	*
1231	谷茶	*	*
1232	一 いや / \、	*	*
1233	今のこと愚痴に	*	*
1234	かたまとるむさや、	*	カタマヨルンザヤ
1235	素立ひやならぬ	*	*
1236	急ち戻やうれ、	急チ戻リ	*
1237			
1238			
1239	乙樽	*	*
1240	一 こまかゝて命や	*	*
1241	つかなれハ死にゆめ、	*	*
1242	もの乞になても	物乞ニシキン	*
1243	のちやつきゆん、	*	*
1244	たう / \	*	*
1245	ゆるちたはふれ、	*	*
1246	谷茶	*	*
1247	一 いや / \、	*	*
1248	乙樽	*	*
1249	一 義理と按司やゆる	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1250			
1251	無理な事めしやうな、	*	*
1252			
1253	谷茶	*	*
1254	一 いやこの按司の言葉	*	*
1255	きかならハそなた、	*	*
1256	一刀に命ち	*	*
1257	つふちとらさ、	*	*
1258	乙樽	*	*
1259	一 殺しゆらハ殺す	*	*
1260	おとろしやゝなひらぬ、	*	*
1261	生々と命の	*	*
1262	死もしにやれらぬ、	*	*
1263	恥もふりすてゝ	*	*
1264	此なひになとる、	*	*
1265	露程のいのち	*	*
1266	惜む事ないらぬ、	*	*
1267	仕合とやゆる	*	*
1268	ころすゝ、	*	*
1269	谷茶	*	*
1270	一 はあ肝ほれてをたら	一 ア、肝振テ居タラ	*
1271	今のことしやすや、	*	*
1272	無調法至極	*	*
1273	ゆるちたはふれ、	*	*
1274	神仏てすも	*	*
1275	人の肝尽ち、	*	*
1276	祈る願事や	*	*
1277	御助のあもの、	*	*
1278			
1279			
1280	みすく聞分て	*	*
1281	肝もきもそへて、	*	*
1282	頼て御情に	*	*
1283	なれて給ふれ、	*	*
1284			
1285			
1286			
1287			
1288	乙樽	*	*
1289	一 おはつかしやあても	*	*
1290	(いやな) 又なゆめ、	*	*
1291	ワか夫や此世	*	*
1292	隠れやひをらぬ、	隠ヤイ居ユン	*
1293	遺言しちあすや	*	*
1294	三年の内に、	*	*
1295	夫もとなてやり	*	*
1296	い言葉のあゆん、	*	*
1297	三年やたひんす	*	*
1298	女身の習の、	*	*
1299	夫ふたりもちゆる	*	*
1300	道のあるひ、	道ノ有ヨメ	*
1301	谷茶	*	*
1302	一 昔ほれものゝ	*	*
1303	いちやること守て、	*	*
1304	浮世くらされめ	*	*
1305	按司も下司も、	*	*
1306	恋忍ふ道の	*	*
1307	ある間の浮世、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1308	つらさ身に受て	*	*
1309	思ひこかれやひ、	*	*
1310	恋死はむくひ	*	*
1311	たるにいきゆか、	誰ガ上ニイキヨガ	*
1312	たう / \	*	*
1313	おれこれよおもて	*	*
1314			
1315			
1316	死にゆる我か命ち、	*	*
1317	頼て御情に	*	*
1318	救てたはふれ、	*	*
1319	乙樽	*	*
1320	一 思ひ究とる	*	*
1321	ワ身と又やすか、	*	*
1322	按司の御言葉や	*	*
1323	梓弓心、	*	*
1324	引されていきゆさ	引カサレテ行ル	*
1325	ワ身の肝や、	*	*
1326	谷茶	*	*
1327	一 はあ果報もつきゆすかと	一 ア、果報ンツキヨスガド	*
1328	つきも付清さ、	*	*
1329	あた果報とつきやる	*	*
1330	果報な我身や、	*	果報ノ我身ヤ
1331	はあしたひ / \、	ア、シタイ / \	*
1332	乙樽	*	*
1333	一 来る二月に	*	*
1334	すきし我か夫の、	*	*
1335	三年忌たひもの	*	*
1336	吊や濟ち、	*	*
1337	よしあしの御返事	*	*
1338	おしやけんしゆもの、	*	ウシヤゲランシヨモノ
1339	おの内や是非に	ウノ間ヤ是非ヨ	ウノ内ヤ是非ヨ
1340	御待めしやうれ、	*	*
1341	谷茶	*	*
1342	一 いや / \ 是や	*	*
1343	ならぬ / \、	*	*
1344	乙樽	*	*
1345	一 おれこれもゆるし	一 ウレクレン免ソ	*
1346	ならぬことやらハ、	*	*
1347	逆も一刀に	*	*
1348	殺ちたはふれ、	*	*
1349	谷茶	*	*
1350	一 はあおれ是もよたしや	*	*
1351	いつまでもまちゆん、	*	*
1352	いやれること濟ゆん	*	*
1353	よたしや / \、	*	*
1354	乙樽	*	*
1355	一 あゝたうと、	*	*
1356	御情の光	*	*
1357	てり増ひ / \、	*	*
1358	百といつまでも	*	*
1359	拝てすてやへら、	*	*
1360			
1361			
1362	谷茶	*	*
1363	一 あゝ我身もほこらしやの	*	*
1364	物にとららぬ、	*	*
1365	このたけにワ身や	此ノタケニ我身モ	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1366	なやかやいをても、	ナヤガイ居スガ	ナヤカヤヒラスガ
1367	気に叶ふ女、	気ニ合ウ女	*
1368	側にまたをらぬ、	*	*
1369	是とワかふ足	*	*
1370	心くら闇に	*	*
1371	なやいをたん、	*	*
1372	今月も過て	*	*
1373	二月も頓て、	二月頓テ	*
1374	おれからや互に	*	*
1375	枕うちならへ、	*	*
1376	浮世楽々と	浮世楽々	*
1377	暮すとめハ、	*	*
1378	まちと嬉しこと	*	*
1379	よろこひもおへさ、	*	*
1380	天に飛登る	*	*
1381	ワ身の心地、	*	*
1382	引寄て給ふれ	*	*
1383	御月御てた、	*	*
1384	我自由しち浮世	*	*
1385	遊て暮さ、	*	*
1386		同人	同人
1387	一 やあ / \、	*	*
1388	此内やとかく	*	*
1389	くつきしちをたら、	*	*
1390	心はれ / \と	*	*
1391	うち晴て躍て、	*	*
1392	此間のくつき	*	*
1393	思ひ忘れ、	*	*
1394	こてふし	*	*
1395	一 御慈悲あるゆへと	*	*
1396	御万人のまきり	*	*
1397	上下もそろて	*	*
1398	あふきおかむ	*	*
1399	谷茶	*	*
1400	一 はあきよらさ / \、	一 ア、清サ / \	*
1401	乙樽	*	*
1402	一 けふや思子の	*	*
1403	御側むちをかて、	*	*
1404	明日か日に又も	*	*
1405	拝てすてら、	*	*
1406		谷茶	谷茶
1407	一 たう / \、	*	*
1408	けふや道中の	*	*
1409	草臥もあらたひもの、	草臥ンアタラ	*
1410	若按司の側にむち	*	*
1411	休息よすれ、	*	*
1412			
1413	村原出羽大浦ふし	*	*
1414	思子取戻ち	*	*
1415	敵うたんともて	*	*
1416	衾れ商人に	*	*
1417	やつれ出る	*	*
1418			
1419		村原	村原
1420	一 是や村原のひや、	*	*
1421	思子取戻す	*	*
1422	つまひ分別に、	*	*
1423	乙樽かことや	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1424	あむまへになつて、	*	*
1425	敵の城元に	*	*
1426	只ひちゆひやらち、	*	*
1427	あゝ、心元なさの	*	*
1428	我肝やすまらぬ、	*	*
1429	物売にやつれ	*	*
1430	忍て出る、	*	*
1431	さいんそるふし	*	*
1432	一 唐や大和の	*	*
1433	珍らし物	*	*
1434	匂ひ髪附	*	*
1435	香しもの	*	*
1436	丁子白檀	*	*
1437	甘生姜	*	*
1438	刻多葉粉も	*	*
1439	持ちをやへん	*	*
1440	きせるも宝蔵も		*
1441	持つをやへん		*
1442	其外色々	*	*
1443	持ちをやへん	*	*
1444			
1445	代もやすめて	*	*
1446	上やへら	売上ラ	*
1447	米とも粟とも	*	*
1448	替やへん	*	*
1449			
1450			
1451	御望の物や	*	*
1452	かふやひたはふれ	*	*
1453	村原	*	*
1454	一 先物売に名付	*	*
1455	此辺にをとて、	*	*
1456	往来の人の	*	*
1457	沙汰よきかに、	*	*
1458	泊井	*	*
1459	とんちたるものや	*	*
1460	村原のあやと	*	*
1461	むちやん一ツの	*	*
1462	ちきや御葉たん、	*	*
1463	大川の思子	*	*
1464	引取らんで	*	*
1465	村原のあやゝ、	*	*
1466	谷茶城忍て	*	*
1467	いまふちやうすか、	*	*
1468	夫の村原なひ	*	*
1469	肝要なものいやひ	*	*
1470	頼まつて行ん、	頼テラン	タノマツテラン
1471	油断しや済ぬ	*	*
1472	先一足もいそかう、	*	*
1473	村原	*	*
1474	一 され / \、	*	*
1475	万細物	*	*
1476	持ちをやへん、	*	*
1477	これ / \	*	*
1478	御望の物や	*	*
1479	売上やへら、	*	*
1480	泊井	*	*
1481	一 あゝ是や仕合な事、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1482	村原	*	*
1483	一 田舎江御通の	一 田舎御通りノ	*
1484	御支度の御様子、	*	*
1485	御中途の御用	*	*
1486	是々	*	*
1487	又是も上やへら、	*	*
1488	泊井	*	*
1489	一 是や心入とやる、	*	*
1490	いやれること	*	*
1491	谷谷屋良村んかい	北谷屋良村ンカイ	北谷屋良村ンカへ
1492	越ん、	*	*
1493	道中の重宝	*	*
1494	仕合な事、	*	*
1495	主やまあからまあんかひ	*	*
1496	まひか、	イマイガ	イマヘガ
1497	村原	*	*
1498	一 我身や	*	*
1499	那覇若狭町から、	*	*
1500	今度初て	今年始テ	*
1501	旅の者、	*	*
1502	御急きもやゆら	*	*
1503	御無心もしらぬ、	*	*
1504	取つけもなひらぬ	*	*
1505	望事やすか、	*	*
1506	旅の上の御縁	*	*
1507	をかむ御情に、	*	*
1508	めつらしい事の	*	*
1509	此頃にあらハ、	*	*
1510	御休ミのうちに	*	*
1511	きかちたはふれ、	*	語テ給リ
1512	やともとのみやけ	*	*
1513	ものかたりしやへら、	*	*
1514	泊井	*	*
1515	一 まゝてひしんさあ	*	*
1516	ちゆのいそけは、	*	*
1517	むゝたしかに村原のひややすか、	*	*
1518			
1519	しかつと見覚のなひらぬ、	*	*
1520			
1521	先口ふて	*	*
1522	さくてむだう、	*	*
1523	同人	*	*
1524	一 あゝいきやいは兄弟	*	*
1525	のううちへたてのあか、	*	*
1526	これや余り	*	*
1527	こは返事やつさあ、	*	*
1528	やすか	*	*
1529	かんのふも	*	*
1530	珍らしひ事や、なひらぬ、	*	*
1531	むゝあゝ、	モゝ	*
1532	満納の子や	*	*
1533	打殺さつて、	*	*
1534	あゝいたわしい事、	*	*
1535	村原	*	*
1536	一 あたらしか満納	*	*
1537	いきやしちやる事か、	*	*
1538	泊井	*	*
1539	一 むゝ、おの事てハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1540	たう細々の次第	*	*
1541	根から咄ちきかさう、	*	*
1542	あの城や、	*	*
1543	本今帰仁の別れ	*	*
1544	大川の按司の城やたすか、	*	*
1545	百姓上の按司部	*	*
1546	谷茶のおまへの打亡はち、	*	*
1547	今や谷茶城むていふん、	*	*
1548	先事のおこれや	*	*
1549	谷茶か野心巧て、	*	*
1550	大川の按司の		
1551	国々の按司部うたんで、	*	*
1552			
1553	あらさらぬ事ハ	*	*
1554	色々にいひ立て、	*	*
1555	加勢頼て	加勢頼メ	*
1556	軍押寄たん、	*	*
1557	だあ大【城】川城や	*	*
1558	をなちやらの御吊の日に当て、	*	*
1559	御取込の最中	御込ノ最中	*
1560	以の外、火急な事	*	*
1561	分別の分別ならぬ、	*	*
1562	按司も大将も	*	*
1563	忽ひころ討死、	*	*
1564	大勢に無勢	*	*
1565	力及はらぬ、	*	*
1566	終にや思子や生捕られ、	*	*
1567	大将村原のひやゝ	*	*
1568	ぬけすまち	*	*
1569	行衛しれらぬ、	行衛知リラン	行衛シラン
1570			
1571	世界の一人者	*	*
1572	忽ひ武士やすんついてや、	*	*
1573	生捕であるいねけ子	*	*
1574	物種子にしち、	*	物種子シチ
1575	取付て	*	*
1576	降参しめらむて	*	*
1577	おの思子つかなてあん、	*	*
1578	おの段村原か聞付て	*	*
1579	思子引取らむて、	*	*
1580	村原のあやゝ	*	*
1581	あん前むて云ち、	*	*
1582	共につかなてたはふれ / \ むて	*	*
1583	谷茶城よしれたん、	*	*
1584	あゝむちや	*	ア、ンチチ
1585	満納の子なつくわひ	*	*
1586	もの、かはひ人、	*	*
1587	村原か計むて	*	*
1588	ぬちやてひつしつち、	*	*
1589	此涯取付てよんむて	*	*
1590	幸としち	*	*
1591	問尋掛引段々、	*	*
1592	村原としも	*	*
1593	あひもおとらぬぬけた女、	*	*
1594	いちやひしちやひ	*	*
1595	色々様々の返事返答、	*	*
1596	扱も / \ 寄妙な事い (のか。一部筆が途切れている)	扱モ / \ 妙ナ事	扱ム / \ 妙ナモノ

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1597	きゝことやててん、	*	*
1598	しゆたすか	*	*
1599	村原とじや	*	*
1600	目口やは / \ と	*	*
1601	小しほらしひかあげ、	*	*
1602	ほんのむちや	*	*
1603	むしやものやすんつひてや、	*	*
1604	たあ按司や	*	*
1605	ちやむとうちほれて、	*	*
1606	目いろは折しち	*	*
1607	さらざらあと	*	*
1608	正気やないらぬ、	*	*
1609	終にや	*	*
1610	石川満納も追ぬけて、	*	*
1611	さつたる仕形もをかしや、	*	サツタル仕形ノヲカシヤヒ
1612	やあ / \、	*	*
1613	ワか側にをらハ		*
1614	をなちやらも、されん、		*
1615			
1616			
1617	たう / \ 側に	我が側ニ	*
1618	居よをれよ	*	*
1619	むていちやれハ、	*	*
1620	村(原)のあやゝ	*	*
1621	按司もすかぬ	*	*
1622	樂もすかぬむて	*	*
1623	つんはにむはしやん、	*	*
1624	谷茶や腹きりわき、	*	*
1625	此按司の言葉	*	*
1626	きかならハそなた、	*	*
1627	一刀にいのち	*	*
1628	つふちとらさ、	*	*
1629	むてしゆて	ンデイチ	*
1630	おとちやん、	*	*
1631	わたの底まで	ワタノ底マデモ	*
1632			
1633	見濟さつてをすや	*	*
1634	以の外、	*	*
1635	村原のあやゝ	*	*
1636	ちやあんなひらぬ	*	*
1637			
1638	殺す / \ むて	*	*
1639	すひちかゝたさ、	シチカ、タン	*
1640	たあ殺しゆるいきや	*	*
1641	そつともなひらぬ、	*	*
1642	むきやわらひしち	*	*
1643		肝振テ居ヨラ	
1644		今ノ事シヤスヤ	
1645		無調法至極コク	
1646		ナイテタバウレンデイチ	
1647			
1648			
1649			
1650			
1651			
1652			
1653	もとよたる仕形や、	*	*
1654	ほんの	*	*



No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1655	をかしやおほさる、	*	*
1656			
1657			
1658	あはあ(高笑) / \	大笑	アハ / \
1659	立羽失て	*	ト立羽失テ
1660	どつとさんど\な事、	*	*
1661	あんしおれからや	*	*
1662	大首たうれて、	*	*
1663	みすく聞分て	*	*
1664	肝出ち	*	*
1665	死しいきゆる命	*	*
1666	救てたはふれ / \むて、	*	*
1667	段々折たうれ	*	*
1668	しやつとちんや、	シヤ時ント	*
1669	村原としや	*	*
1670	分別なもの、	分別ナンザノ	分別ナンザノ
1671	夫の仏事うちなち	*	*
1672	御返事上らの	*	*
1673	のふのくひのむて、	*	*
1674	たん / \と云廻ちやれハ、	*	*
1675	あゝ無蔵さ	*	アゝ無蔵サヤ
1676	縁のかたかしち	*	*
1677	あかさくらさもわからぬ、	*	*
1678	ほんの誠に	*	*
1679	たんしひきつち、	*	*
1680			
1681			
1682			
1683			
1684			
1685			
1686			
1687			
1688			
1689			
1690			
1691			
1692			
1693			
1694			
1695			
1696			
1697			
1698			
1699			
1700			
1701			
1702	待と嬉しこと	*	*
1703	よろこひも大(ヲへ)さ、	*	*
1704	あた果報とつきやる	*	*
1705	果報なワ身や、	*	*
1706		天ニ飛登ル	
1707		我身ノクハツ	
1708			
1709			
1710	なつくわひしち	*	*
1711	笑ひすひ / \	*	*
1712	躍羽しち、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1713	夜のねふしもねんたぬ、	夜ノネブル目ンニンダン	*
1714			
1715			
1716			
1717	ひしやの指まで		*
1718	打かへし / \ しゆて、		折カヘシ / \ シユテ
1719	むな待しゆらむておもれハ、		*
1720	ほんのをかしやどおほさる、		*
1721	あんしまた	アンシ	*
1722	満納の子や	満納ノ子	*
1723	度々御意見	*	*
1724	おんにゆけゆんむて、	ウンニヨケヨンデ	*
1725	のふ目もみしらぬ	*	*
1726	かひほうかつたん、	菊ヒハウカツテ	*
1727	やつさ	*	*
1728	【命】(人)の命てらもの	*	*
1729	云んてとしゆる、	言ンデドシヨル	*
1730	水つかゆすよか	*	*
1731	あつまつさ	*	アサマツサ
1732			
1733	おそろしい畜生人、	ウトルシイ畜生ン人	*
1734	また満納の子も	*	*
1735	満納の子、		*
1736	あて性もないらぬ	*	*
1737	のふむて	*	*
1738	おれほどしや(ち)	ウレ程シヤガ。	ウレ程シヤガ
1739	いか身からと	イガ身ドカラド	*
1740	やひんしゆすか、	*	*
1741	得と思てむてハ、	*	*
1742	しゆかな / \ しい肝の	*	シユカナ / \ エイ肝ノ
1743	あちしやつ所から、	*	*
1744	誠に満納の子とやゆる、	*	*
1745	村原	*	*
1746			
1747			
1748	一 むゝ士の本意	*	*
1749	世の中の手本、	*	*
1750	たんちゆ島国も	*	*
1751	沙汰よしゆたる、	*	*
1752	やあ / \	*	*
1753	大川のなし子	*	*
1754	あん前と二人や、	*	*
1755	いきやるいきなひに	*	*
1756	なやいをゆか、	*	*
1757	泊井	*	*
1758	一 やつさしう、	*	*
1759	やあつかぬ、犬の	*	*
1760	縄切ちややうなもの、	*	*
1761	一方引なて	*	*
1762	たんちやまで	*	*
1763	をすんついてや、	*	*
1764	頓てぬけすまち	*	*
1765	うちかへされる筈、	*	*
1766	はひ嘶にほれて	*	*
1767	日やさかたひ、	*	*
1768	たうつさしう、	*	*
1769	戻てくるまで	*	*
1770	こまんまひらハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1771	又も嘶さうやあ	*	*
1772	たうしゆ、		*
1773	村原	*	*
1774	一 やあ / \	ヤア	*
1775	日も暮てをすか、	*	*
1776	あかと屋良むらに、	*	アガト屋良村へ
1777	いきやる事やとて	*	*
1778	急ちいまひか、	*	*
1779	泊井	*	*
1780	一 なあやのふしやる人か、	*	*
1781	ちゆの用事問よすや、	*	*
1782	まあかひいかわん	*	*
1783	かもてい、	*	*
1784	村原	*	*
1785	一 細々の次第	*	*
1786	聞ほしやよあすか、	*	*
1787	いやゝまあむらの	*	*
1788	何かしかやゆら、	*	*
1789			
1790			
1791	泊	*	*
1792	一 むまやまあたやへるか、	一 ン、クマヤマアダヤビルガ	*
1793			
1794	村原	*	*
1795			
1796			
1797	一 わ身や村原の	*	*
1798	ひやとやゆる、	*	*
1799	泊	*	*
1800	一 あゝ	*	*
1801	さうひ拜んしやへらぬ	*	*
1802	あや前の御使	*	*
1803	西村の泊井たやへる、	*	*
1804	細々の次第	*	*
1805	おんにゆけやへら、	*	*
1806	来る十日に	*	*
1807	思子引取て	*	*
1808	北表の山路	北表ノ山路ニ	*
1809	逃めしやいへる筈、	逃メセビクト	*
1810			
1811	おのおこゝれ	*	*
1812	めしやうれむての	*	*
1813	御使とやゝへる、	御使ダヤビル	御使ダヤビル
1814	村原	*	*
1815	一 あゝ天の引合か	天ノ引合カ	*
1816	神の御助か、	*	*
1817	たう / \	*	*
1818			
1819	けふからや互に	*	*
1820	心打合ち、	*	*
1821	身の上のことに	*	*
1822	気張て呉れ、	*	*
1823	思子取戻ち	*	*
1824	かたきうちとらハ、	*	*
1825	おの御取立や	*	*
1826	あらんしゆもの、	*	*
1827	たう / \	*	*
1828	気張てくひれよ、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1829			
1830			
1831		泊リ	
1832		一 拝留ヤビテ	
1833			
1834			
1835			
1836	同人	村原	*
1837	一 むゝ是に思つきやる	一 是二思付ル	*
1838	事の又あゆん、	*	*
1839	乙樽か思子	*	*
1840	取戻ちからに、	*	*
1841	逃忍ふ時や	*	*
1842	疑やなひらぬ、	*	*
1843			
1844	谷茶あまやゝ	*	谷茶マヤゝ
1845	用心もすらぬ、	*	*
1846	あはてさま出て	*	*
1847	追掛る積り、	*	*
1848	おの時にまかち	*	*
1849	おのときに出て、	*	*
1850	打かへす御運	*	打カヘネ御運
1851	是に究たん、	*	*
1852	はあ肝要な時節	*	*
1853	おくれてや済ぬ、	*	*
1854	急ち立戻て	*	*
1855			
1856			
1857	手組すらに、	*	*
1858			
1859			
1860			
1861			
1862			
1863			
1864			
1865			
1866			
1867			
1868			
1869			
1870			
1871			
1872			
1873			
1874	原国兄弟	*	*
1875	一 なま出る二人や	*	*
1876	大川の按司の	*	*
1877	頭役しゆたる	*	*
1878	原国のひやか、	*	*
1879	兄子松千代	*	*
1880	弟子金松、	弟子金松ヨ	*
1881			
1882			
1883			
1884			
1885	父親の事と	*	*
1886	按司添前みこし立、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1887	討死よてやり	*	*
1888	兼て聞及て、	*	*
1889			
1890			
1891	君親のかたき	*	*
1892	打捕んともて、	*	*
1893	ふたり命はまで	*	*
1894	出立る内に、	*	*
1895	思子の前と	*	*
1896	敵のいきとやひ、	*	*
1897	村原のひや釣ゆる	村原ノヒヤツリ寄ル	村原ノヒヤ釣寄ル
1898	計得のあとて、	*	*
1899	御素立よてやり	*	*
1900	かたへへのあらは、	*	*
1901			
1902			
1903			
1904			
1905			
1906			
1907			
1908			
1909	此事や急ち	*	*
1910	村原につけて、	*	*
1911	思子の前	思子取戻チ	*
1912	とりかへち		*
1913	敵討んともて、	*	*
1914	肝勇ミいさて	*	肝急チ勇テ
1915			
1916	むちていきゆん、	*	*
1917	揚口説	*	原国兄弟口説
1918	一 家の譲りの長刀を	*	*
1919	打取なをしてころ / \ と	*	*
1920	ころれ / \ と振立て	*	*
1921	たゝきりひらちわつて入	*	*
1922	水もたまらぬ谷茶が	*	*
1923	首打落すその手並み	*	*
1924	当るものなき其威勢		*
1925	扱も / \ と一声に		*
1926	てきや味方の目をさます		*
1927	松千代	*	*
1928	一 やあ金松よ、	*	*
1929	急ち内いやひ	*	*
1930	村原のひや拝ま、	*	*
1931	金松	*	*
1932	一 たう / \	*	*
1933	急ちをかま、	*	*
1934			
1935	村原	*	*
1936	一 出様ちやる者や	一 是ヤ	*
1937	村原のひや、	*	*
1938	あゝ寔慈悲なさや	*	*
1939	我按司の報ひ、	*	*
1940	天の引合か	*	*
1941	神の御助か、	*	*
1942	思ハすに武運	*	*
1943	打重ね / \	*	*
1944	散々になとる	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
1945	人々も揃て、	*	*
1946	願たこと叶て	*	*
1947	誇らしやとあゆる、	*	*
1948			
1949			
1950	やあ/\、揃てをる人数	*	*
1951	出やうれ/\、	*	*
1952			
1953			
1954	村原	*	*
1955	一 やあ/\、乙樽か兼て	*	*
1956			
1957	内通のことに、	*	*
1958	かたき討取ゆる	*	*
1959	御運廻り来て、	*	*
1960	けふのよかる日ニ	*	*
1961	立よ出ら、	*	*
1962	原国兄弟	*	*
1963	一 こつきやうの時節	*	*
1964	おくれてや済ぬ、	*	*
1965	片時も急ち	*	*
1966	御供しやへら、	*	*
1967	村原	*	*
1968	一 たう/\、	*	*
1969	手賦の次第	*	*
1970	とつけ渡さ、	*	*
1971	やあ喜瀬の大屋子や、	*	*
1972	敵の城元に	*	*
1973			
1974	忍て行をとて、	*	*
1975	乙樽か思子	*	*
1976	奪とやい逃る、	*	*
1977	御中途のけいこ	*	*
1978	念の入れ、	*	*
1979		喜瀬	
1980		一 拝留ヤビテ	
1981		村原	
1982	又西川の子や、	*	*
1983	頼てある加勢	*	*
1984	けふの真夜中に	*	*
1985	城の後ろの	城ノ山中ニ	*
1986	山に伏よかくれ	伏ヨ隠リトテ	山ニ伏シ隠リ
1987	谷茶あまやか	*	谷茶マヤアガ
1988	城立出て、	城ヨ立出テ	*
1989	北の山路	*	*
1990	いきつきゆる時分、	出テキヨル時分	*
1991	一時に出て	*	*
1992	城の門閉て、	*	*
1993		内ニ踏入ヤイ	
1994			
1995	大川の印旗	*	*
1996	差立ておけ、	*	*
1997		西川	
1998		一 拝留ヤビテ	
1999		村原	
2000	やあ瀬底下こおりや、	*	*
2001	北の山路の	*	*
2002	先にかくれとて、	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
2003	谷茶あまやか	*	谷茶マヤアガ
2004			
2005	走通る後に、	*	*
2006	道の口立ふさち、	*	*
2007	山路真中	*	*
2008	走通る時分、	*	*
2009	螺や石ひや	*	*
2010	うちならし/\、	*	*
2011	島国も崩す	*	島国ヨ崩ス
2012	氣を立て、	*	*
2013	若谷茶あまやか	若カ谷茶ガ	若カ谷茶マヤアガ
2014	逃戻る時や、	*	*
2015	唯並切に	*	*
2016	うちよ留れ、	*	*
2017		瀬底	
2018		一 拝留ヤビテ	
2019		村原	
2020	原国の兄弟や、	*	*
2021	山道の中に	山道ノ中	*
2022	伏よ隠れとて、	伏隠トテ	*
2023	先の石ひや螺を	*	*
2024	(オ+目) 図に躍出て、	査図ニ踊イ出テ。	*
2025	双方のきんそ	*	*
2026	中に引包て、	*	*
2027	あまそな洩そな	*	*
2028	討よとめれ、	*	*
2029		兄弟	
2030		一 拝留ヤビテ	
2031		村原	
2032	やあ泊井や、	*	*
2033	先立ひ	*	*
2034	忍てむちおとて、	*	*
2035	乙樽か思子	*	*
2036	引取ひ逃て、	*	*
2037	半里程いかハ	*	*
2038	城走登て	城ヨ走登テ	*
2039	逃忍て行す	*	*
2040	見付たんでやり、	*	*
2041	誠たん/\と	*	*
2042	高らかにつけて、	*	*
2043	谷茶石川	*	*
2044	さそへ出からに、	*	*
2045	北の山道に	*	*
2046	案内しやしやうれ、	案内ヨシヤウリ	案内シヤウリ
2047		泊リ	
2048		一 拝留ヤビテ	
2049			
2050	やあやあ、		*
2051	揃ておる人数		*
2052	慥にきけ、		*
2053	傍輩の中		*
2054	不和にともならハ、		*
2055	怪我事の基ひ		*
2056	事障りたひもの、		*
2057	腹の立まゝに		腹立ノ俣ニ
2058	短気するな、		*
2059	急ひ/\、能々勘忍		エイヨク/\ 勘忍
2060	題目とやゆる、		題目ドヤルニ

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
2061	惣人数		*
2062	一 拝む留やへて、		*
2063	村原	*	*
2064	一 はあ揃ておる人数	一 ア、揃テ居ル人数	*
2065	肝合ちをれハ、	*	*
2066	誠勝子軍	*	*
2067	疑やなひらぬ、	*	*
2068	たう / \ 手配の通	*	*
2069	油断するな、	*	*
2070	さあ / \	*	*
2071	急ち立向ら	*	*
2072	いそち打立に、	*	*
2073			
2074	乙樽思子引取逃走はや作田ふし	*	*
2075	一 おそ風もすたしや	*	*
2076	風車とゝもに	花ノ風車ト	*
2077	押つれて互に	*	*
2078	遊ふうれしや	*	*
2079	乙樽	*	同人
2080	一 思子取戻ち	*	*
2081	すき間はからやひ、	アチマ計ラヤへ	明間計ラヤヒ
2082	むち入の人に	*	*
2083	ましり、出ん、	*	マジリ出ラ
2084	鬼瀬	*	*
2085			
2086	一 鬼瀬たやへ	一 喜瀬タヤビル	一 喜瀬ダヤビル
2087	御供しやへら、	*	*
2088	泊井	*	*
2089	一 むゝにや時分たひらう	一 ン、時分ダヒラウ	*
2090	城走のほて、	*	*
2091	谷茶(石川)、誘ひたさう、	*	谷茶誘ヒダサウ
2092	され / \	*	*
2093	大川のあむ前や、	*	*
2094	思子引取て	*	*
2095	北表の山路	*	*
2096	逃めしやいへひたん、	*	逃ミシヤビタン
2097	谷茶	*	*
2098	一 あゝ扱も / \、	*	*
2099			
2100	やあ石川のひや	*	*
2101	/ \、	*	*
2102	石川	*	*
2103	一 ふう	*	*
2104	谷茶	*	*
2105	一 大川のなし子	*	*
2106	盗取て逃る、	*	*
2107	急ち追つけて	*	*
2108	奪取らに、	*	*
2109	さあ / \	*	*
2110	いそけ / \、	*	*
2111	石川	*	*
2112	一 やあ / \、	*	*
2113	大川のなし子	*	*
2114	盗取て逃る、	*	*
2115	急ち立(出)て	*	*
2116	御供しやうれ、	*	*
2117			
2118			



No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
2119			
2120			
2121			
2122			
2123			
2124			
2125	谷茶	*	*
2126			
2127			
2128			
2129	一 いや供列もいらぬ	一 イヤ/\共烈モイラス	*
2130	急げ/\、	*	*
2131			
2132			
2133			
2134	同人	*	*
2135	一 あれよ/\、	*	*
2136	忍(注、字は忍になっている)義 忘却	恩義忘却	恩儀忘却
2137	情切やから、	*	*
2138	乙樽	*	*
2139	一 やあ/\、	*	*
2140	村原よ始	*	*
2141	原国のなし子、	*	原国ガ産子
2142	思子、御迎に	*	*
2143	忍てきちをゆん、	忍デキ、ヲモノ	*
2144	此間の忍(注、字は忍になっている)に	此ノ間ノ恩義	此間ノ恩ニ
2145	つける事たひもの、	*	*
2146	急ち立戻て	*	*
2147	命ちとるな、	*	*
2148	谷茶	*	*
2149	一 いや仕合とやゆる	一 イヤ村原ン共ニ	*
2150	村原もともに、	仕合ドヤヨル	*
2151	乙樽	*	*
2152	一 寄よらハよすれ	*	*
2153	切はたちとらさ、	*	切殺チトラサ
2154	村原	*	*
2155	一 やあ谷茶	*	*
2156	欲悪の報ひ	*	*
2157	武運つきはて、	*	*
2158	村原【の】(か)前に	*	*
2159	廻てきちやめ、	*	*
2160			
2161			
2162	同人		*
2163	一 いやぬかすまひ、	イヤノガス	*
2164	原国	*	*
2165	一 やあ谷茶、	*	*
2166	原国兄弟か	*	原国ノ兄弟カ
2167	待受てをす	*	待受テヲタス
2168	しつちをため、	*	*
2169	谷茶	*	*
2170	一 いや、ちゆつかぬもたらぬ	*	*
2171	すひさんなわらへ、	*	*
2172	兄弟		原国兄弟谷茶追入
2173	一 ひやひやひ		一 ヒヤアヒヤヒ
2174	同人	*	*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
2175	一 谷茶あまやや	*	一 谷茶マヤアヤ
2176	原国兄弟か	*	*
2177	打取やへたん、	*	*
2178	村原	*	*
2179	一 兄弟の手柄	*	*
2180	ならふものをらぬ、	*	*
2181			
2182			
2183	瀬底	共	*
2184	一 残てをる人数	*	*
2185	降参たやへる、	*	*
2186	村原	*	*
2187	一 神妙なこと / \、	一 神妙ナ事ヨ / \	*
2188	若按司	*	*
2189	一 やあ村原よ、	一 ヤア村原	*
2190	村原	*	*
2191	一 やあ思子	*	*
2192			
2193			
2194	東江ふし	*	*
2195	一 あけ夢かやゆら	*	*
2196	村原	*	*
2197	一 あゝ拝てなく事や	一 ア、拝テデナツカシヤ	*
2198	ゆめかややへいら、	*	*
2199	過し按司添も	*	*
2200	嬉しやめしやいら、	*	*
2201	乙樽	*	*
2202	一 やあ / \、	*	*
2203	敵の島国や	*	*
2204	籠の鳥心、	*	*
2205	思て自由ならぬ	*	*
2206			
2207	待兼るけふや、	*	*
2208	谷茶あまやあか	*	谷茶マヤアガ
2209	生れ日てやり、	生日ヨテヤリ	*
2210	世話にとひかかて	*	世話ニ取掛テ
2211	気のかかぬあれハ、	*	*
2212	思子もり名付	*	*
2213	逃忍ふ後に、	*	*
2214	谷茶追掛て	*	*
2215	のかるかたなひらぬ、	*	*
2216	是迄よとめハ	*	*
2217	美御迎ニいまふち、	*	*
2218	けふ拝事や	*	*
2219	夢かやゆら、	夢ガヤ、ピラ	*
2220			
2221			
2222			
2223			
2224	村原	*	*
2225			
2226			
2227			
2228	一 おもはずに兼て	*	*
2229	内通のあれハ、	*	*
2230	おの手組しちおて	*	ウノ手段シチュテ
2231	美御迎しちやん、	美御迎シキヤル	美御迎ヨシチヤン
2232	やあ乙樽、		*

No.	尚家本組踊集	与那覇政牛本	恩河本
2233	女身の上に	*	*
2234	命ちふり捨て、	*	*
2235	敵の手ニ渡り	敵ノ手ニ渡テ	敵ノ手ニ渡ル
2236	思子取戻ち、	*	*
2237	あゝ末代の手本	*	末代ノ手本
2238	沙汰とこのる、	*	*
2239		共	西川
2240	一 され西川の子	*	*
2241	使たやへる、	*	*
2242			
2243	城乗取やひ	*	*
2244	おれ / \ の用意	*	*
2245	美御迎たやへる、	*	*
2246	村原	*	*
2247	一 一段な事よ / \、	一 ア、一段ナ事ヨ / \	一 一段ナ事 / \
2248	村原	*	*
2249	一 あゝ思子も拝て	*	*
2250	敵もうちすまち、	*	*
2251	かにある誇らしやゝ	*	*
2252	ものにたとらぬ、	*	*
2253	たう / \、本の御城に	*	*
2254	美よんつかい拝ミやへら、	*	*
2255	若按司	*	*
2256	一 嬉しさや互に	*	*
2257	踊て戻ら、	*	*
2258	村原	*	*
2259	一 うれしさや踊羽	*	*
2260	御供しやへら、	*	*
2261			
2262			
2263			
2264	しほらひふし	立雲ブシ	*
2265	一 御代つきよめしやうち	*	*
2266	本の御城に	*	*
2267	おかけほさへめしやうれ	*	*
2268	玉の思子	*	*
2269			大川敵討終
2270			
2271			
2272			

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1	大川敵討	大川敵討	大川敵討
2		一名忠孝婦人 俗称村原	
3		第壹場	
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24	谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に 金磨之龍之角飴有ル太刀刀茶色緞 子羅陳羽織錦之飴有ル脚胖足袋大 団金入錦之細帯		
25	石川満名黒綸子入道頭巾向に金襴 に而飴有ル黒細裕衣裳刀脚胖足袋		
26	門番黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣 裳脚胖足袋差縄		
27	きやうちやく持黒木綿単衣裳脚胖 足袋		
28	若按司かしらひ板メ縮緬振袖単衣 裳足袋風車こふすい		
29	村原黒綸子入道頭巾向に金襴に而 飴有ル黒紗綾裕衣裳綸子広袖羽織 刀太刀足袋物買之時黒綸子入道頭 巾編笠細物加籠に入付陳賦之時羅 陳羽織甲胸当脚胖金之磨		
30	原国兄弟長刀半向頭巾紕花青銅ネ 同衣裳脚胖足袋中入より入道頭巾 綿		
31	村原母并妻かもし紫長巾金銀水引 熨斗作花助巾琉縫薄衣裳足袋妻谷 茶城江参候時女笠杖持帰り候時長 刀母黒地形付衣裳		
32	西川の子瀬底下こおり西川の支 (ママ) 喜瀬之大屋子四人黒西洋 布入道頭巾黒木綿単衣刀脚胖足袋		

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
33	泊井紕西洋巾黒木綿衣裳脚胖足袋 陳賦之時黒西洋入道頭巾		
34	村原子紕縮緬衣裳		
35		村原ノ比屋	村原
36	一 出様ちやるものや、	*	*
37	大川の按司の頭役	*	*
38	村原のひや、	*	*
39	今帰仁の城	*	ア、今帰仁ノ城
40	御使にいきやひ、	*	*
41	戻る道すから	*	*
42	聞ハ腹立や、	*	*
43	あゝ谷茶あまやか	噫谷茶マヤアガ	谷茶アマヤアガ
44	野心事巧て、	*	野心企チヤヒ
45	のゝ事も思ぬ	*	*
46	大川の按司の、	*	*
47	国々の按司部	*	*
48	討たんでやりしゆんで、	*	*
49	島々よ廻て	*	*
50	段々にいなち、	*	[欠]
51	加勢頼入	*	[欠]
52	軍押寄すて、	*	[欠]
53		大川ノ城	
54		七重八重	
55		取囲ミ囲デ。	
56	俄事やれは	*	[欠]
57	分別もならぬ、	*	[欠]
58	多勢(三無勢)	*	[欠]
59	力及はらぬ、	*	[欠]
60	按司や討死	*	[欠]
61	思子の事や、	*	[欠]
62	あゝ口惜や	*	[欠]
63	敵の生捕やい、	*	[欠]
64	按司の跡つかち	*	[欠]
65	御素立よてやり、	*	[欠]
66	欲悪なやから	*	[欠]
67	慈悲の肝餓て、	*	[欠]
68	此村原か	*	[欠]
69	有難さ思て	*	[欠]
70	降参よすらハ、	*	[欠]
71	思子諸ともに	*	[欠]
72	打果さむての	*	[欠]
73	計得とやゆる、	*	[欠]
74	あゝ心れてとをゆる	*	[欠]
75	仕合しとやゆる、	*	[欠]
76	大川の御運	*	[欠]
77	世に残てをれハ、	*	[欠]
78	いきやしかな思子	*	[欠]
79	取戻ちからに、	*	[欠]
80	時節待受て	*	[欠]
81	敵討んともて、	*	[欠]
82	村原か命ち	*	[欠]
83	なからへてをゆん、	*	[欠]
84	あゝたうと	*	[欠]
85	神仏そろて	*	[欠]
86	助やひたはふれ、	*	[欠]
87		第二場	
88	村原母妻子出羽散山ふし	*	[欠]
89	一 まことかや実か	*	[欠]

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
90	ワきもほれ / \ と	*	[欠]
91	ねさめおとろきの	*	[欠]
92	夢の心地	*	[欠]
93		*	[欠]
94	一 三人の者や	*	[欠]
95	大川の按司の、	*	[欠]
96	頭役村原か	*	[欠]
97	母やとちなし子、	母ト妻産子。	[欠]
98	谷茶あまやか	谷茶マヤアガ	[欠]
99	野心事巧て、	*	[欠]
100	のゝ事も思ぬ	*	[欠]
101	大川の按司の、	*	[欠]
102	国々の按司部	*	[欠]
103	討んでやりしゆんで、	*	[欠]
104	島々よ廻て、	*	[欠]
105	色々に云なち、	*	[欠]
106	加勢頼入	*	[欠] 勢頼ミ入レ
107	軍押寄て、	*	*
108	按司添と共に	*	[欠]
109	村原のひやも、	*	[欠] ヤモ
110	討死よてやり	*	*
111	しらへのあれハ、	知ラセ人(ビ)ノ有レバ。	取沙汰ノアレバ
112	夢現心	*	*
113	肝もきもならぬ、	*	*
114	無常の此世界や	*	*
115	かにもあるひ、	*	*
116	やああや前よ、	*	*
117	なく涙ともに	*	*
118	なひ【ほしやと】ほしやとあすか、	*	*
119	忍ひ隠れとて	*	*
120	一人子乙松【か】(や)、	*	一童乙松ヨ
121	取素立 / \	*	素立テ
122	人になちからや(に)、	*	程々ニナサイ
123	親ふしの跡や	*	*
124	継しほしやの、	*	*
125	たう / \ 落る露泪も	*	*
126	押はらへ / \、	*	*
127	御気張よめしやうれ	*	*
128	御供しやへら、	*	*
129	母	*	*
130	一 いらぬ年寄の	*	*
131	長生ハしちをて、	*	*
132	あけやうこの憂目	*	*
133	むるか心気、	*	*
134	迎ももろともに	*	*
135	ならんてやりすれハ、	*	*
136	朝夕手はなさぬ	*	*
137	玉の乙松か、	*	*
138	花のおもかほの	*	*
139	名残立増て	*	*
140	いきやしわすれゆか	*	*
141	あの世までも、	*	*
142	乙樽	*	*
143	一 いらぬことめしやうな	*	*
144	後れてや済ぬ、	*	*
145			
146			

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
147	気にまかち三人	*	*
148	諸共にならハ、	*	*
149	村原か跡に	*	*
150	残る者をらぬ、	残ル者居ラヌ	*
151	乙松よ素立	*	*
152	程程になさハ、	*	程々ニナラバ
153	君親の事も	*	*
154	すらな置め、	*	*
155			
156			
157	たう / \ 御気張よめしやうれ	*	*
158	御供しやへら、	*	*
159	仲間ふし	道行仲間節	*
160	一 あたら人間に	*	*
161	生れやひをすか	*	*
162	やす / \ とくらす	*	*
163	ひまもなひらぬ	*	暇ノ無ラヌ
164	乙樽	*	*
165	一 のゝ罪のあたか	*	*
166	つれなさや三人、	*	*
167	母	*	*
168	一 あげやう忍はらぬ	*	*
169	心くら闇に、	*	*
170	道行なかんかりふし	*	*
171	一 ゆきまよひ / \	*	*
172	乙樽	*	*
173	一 いく先やしらぬ	*	*
174	野山さくひらも、	*	*
175	なかんかりふし	*	*
176	一 たゝあしにまかち	*	*
177	乙樽	*	*
178	一 かゝる方なひらぬ	*	*
179	行来しら玉の、	*	*
180	母	*	*
181	一 露なたやあられ	一 露涙霰	*
182	雪もふり増て、	*	*
183			
184			
185			
186	子持ふし	*	*
187	一 冬の山嵐や	*	*
188	あし本もつまで	*	*
189	肝もきもならぬ	*	歩デ歩マラヌ
190	あげやういきやなゆか	*	*
191	乙樽	*	*
192	一 御気張よめしやうれ	*	
193	頓て夜もあける、	*	
194			ヤアアヤ前ヨ / \
195			頓テ喜納村ヤ
196			便イ島デモノ
197			御気張ヨ召レ
198			御供シヤベラ
199	母	*	*
200	一 肝お(う)すていきゆん	*	*
201	しはしやすま、	*	*
202	乙樽	*	*
203	一 やああや前よ、	*	*
204	/ \、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
205	同人		*
206	一 此子たちをれは	*	*
207	すと親のことも、	姫(シト)親ノ事ヤ	*
208	肝の俣ならぬ	*	*
209	急ちいそからぬ、	*	*
210	うつかつとしちをて	*	ウカツトシチュテ
211	敵におひつかれ、	*	*
212	三人共憂め	*	*
213	むたよいかとても、	見ダヨリバ迪モ	*
214	此子ともすてゝ	*	*
215	身すからになれハ、	*	身スガラニナラバ
216	すと一人かことや	*	*
217	自由になゆん、	*	自由ニナヨラ
218			
219	一 義理の道たひもの	*	
220	思きらなゝゆめ、	*	
221	やあ乙松よ、	ヤ、乙松	*
222		*	/ \
223	ワぬことる親に	*	
224	なさつたる因果、	*	
225	是までよたひもの	*	*
226	母の面かほも、	*	*
227	夢現心	*	*
228	起てむてよ、	*	起テ見レヨ
229	あけやうあてなしの	*	
230	のゝこともおまぬ、	*	
231	哀れ楽々と	*	
232	ねるか心気、	*	
233			
234			
235			
236			
237	やあ乙松よ、	*	*
238	誠後生あらハ、	*	*
239	父親の側に、	*	*
240	先立ひむちをて	*	*
241	まちやいをれよ、	*	*
242			
243	やあ乙松	ヤ、乙松ヨ。	ヤア乙松ヨ
244	天の引合しに	*	*
245	情けある人の、	*	*
246	素立やひ呉らハ	*	素立イ呉ラハ
247	主人親ふしの、	*	*
248	跡方ハ頼て	*	跡方ヤタンデ
249	尋ねやひ呉れよ、	*	*
250			アケヤウアテナシノ
251			ノ、事モ思マン
252			貪レ楽々ト
253			寝ガ心気
254	あゝた【ち】(ウ)と、	*	
255	神佛そろて	*	
256	見守やひたはふれ、	*	
257	思切ひをすか	*	*
258	誠つらむては、	*	誠ト面ヲ見レバ
259	我肝忍はらぬ	*	*
260	やみになゆさ、	*	*
261	東江ふし	*	*
262		一 ア、ケ	



No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
263	一 ワきもしのはらぬ	*	*
264	闇になゆさ	*	*
265	乙樽	*	*
266	一 やああや前よ、	*	
267	頓て喜名村や	*	
268	たよひ島たひもの、	*	
269	御気張よめしやうれ	*	
270	御供しやへら、	*	
271	やああや前よ、	*	*
272	/ \、	*	*
273	母	*	*
274	一 肝もきもならぬ	*	*
275	しはし休ま、	*	*
276	村原	*	*
277	一 是や村原のひや、	*	*
278	義理のませ垣に	*	*
279	かこまれてワ身の、	*	*
280	浅ましや露の	*	*
281	命ちやすか、	*	*
282	思子取戻す	*	*
283	念願のあとて、	*	*
284	ねふる夜もねらぬ	*	夜昼モカキテ
285	忍てまわる、	*	*
286			村原
287	こねや夜深さに	此様ル夜深ケニ	ア、コニヤ夜深クニ
288	童へ鳴声や、	*	*
289	いきやしちやる事か	*	*
290	立寄ひむたに、	*	*
291			
292	やあ乙松、	*	*
293	あゝ身にかへて朝夕	*	*
294	撫素立しゆたる、	*	*
295	この一人子やすか	*	*
296	ミたれ世になれハ、	*	*
297	哀れこのなひに	*	*
298	なすか心気、	*	*
299	母と乙樽も	*	*
300	行来しら玉の、	*	*
301	露霜と共に	*	*
302	なたらとめハ、	*	*
303	あゝ浅ましや、	*	*
304	いや、無常の此世界の	*	イヤ無常ノ世ノ中ノ
305	習ひやしらね、	風習ヤ知ラヌ	*
306	おくれてやすまぬ	*	*
307	先にかゝら、	*	*
308	乙樽	*	*
309	一 やああや前よ、	*	*
310	/ \、	*	*
311	村原	*	*
312	一 やあ / \、	*	一 ヤア
313	かにある雪降に	*	*
314	こかと山道に、	*	*
315	いきやしちやる事か	*	*
316	二人の者や、	*	*
317	乙樽	*	*
318	一 首里からとやすか	*	*
319	旅の上の習や、	*	*
320	村原	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
321	一 やあ母親	*	*
322	やあ乙樽	*	*
323	母	*	*
324	一 やあ村原、	*	一 ヤア村原ヨ
325	按司添とゝもに	*	*
326	なる筈の者の、	*	ナル筈ナモンノ
327	主の恩忘ひ	主ノ恩忘レ	*
328	孝の道しらぬ、	*	*
329	のゝつらのあとて	*	*
330	とまいてきちやか、	*	*
331	浅ましや村原	*	*
332	命のあたらしやひ、	*	命ノアタラシヤニ
333	妻子のなさけ	*	*
334	しのはらぬあため、	*	*
335	村原	*	*
336	一 あゝめしやいること、	*	一 召セル事
337	按司添と共に	*	*
338	なる筈とやすか、	*	*
339	思子の事と	思子ノ事ヤ	思子ノ事ヤ
340	敵の生捕やい、	*	*
341	村原も共に	村原ト共ニ	*
342	打果さむての、	*	*
343	分別ハ出ち	分別ヤ出ヂヤラ。	*
344	いこと葉ハ饅て、	云言葉ヤ節テ	*
345	過し按司かなし	*	*
346	跡継の思子、	*	御代継ノ思子
347	御素立よてやり	*	*
348			
349	語ひへのあれハ、	*	知ラセ部ノアレバ
350	いきやしかな思子	*	*
351	引取んともて、	*	
352			取戻チカラニ
353			時節待受ケテ
354			敵打タントモテ
355	村原か命ち	*	*
356	なからへてをゆん、	*	*
357	母	*	*
358	一 今のことやれハ	*	*
359	誇らしやとあゆる、	*	誇ラシヤドア [欠]
360	肝にきもそへて	*	[欠] ニ肝添ヘテ
361	念の入れよ、	念ヨ入レヨ。	*
362	村原	*	*
363	一 村原かいきち	*	*
364	此世界にをとて、	*	*
365	思子取戻ち	*	*
366	敵討な置め、	*	*
367	あゝ思ひ世に残ち	*	*
368	死やならぬ、	*	*
369	やあ乙樽、	*	*
370	いきやし乙松	如何シ乙松ヤ	イチヤス乙松ヤ
371	すてゝあたか、	*	*
372	母		*
373	一 咲出ゆる花ハ		*
374	ワ身に思かへち、		*
375	のゝ肝のあとて		*
376	捨てあたか、		*
377	乙樽	*	*
378	一 大川の城	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
379	仕合の時に、	*	*
380	按司添と共に	*	*
381	討死によ(て)やり、	*	*
382	語ひへのあれハ、	*	*
383	沙汰よ聞及て、	*	*
384	三人逃忍て	*	
385	こまゝてやきやすか、	*	
386			[欠]テ様出テ
387			逃忍ブ内ニ
388	親かなし事や	*	親加那志事ド
389	なれぬ山道の、	*	*
390	さくひらのつかれ	*	*
391	足本もつまで、	*	*
392	急ちいそからぬ	*	*
393	うつかつとしちをて、	*	*
394	敵に追つかれ	*	*
395	三人共憂目、	*	*
396	むたよいか逆も	*	見ダ故カ
397	哀れなく/ゝも、	*	*
398	すとおやのために	*	*
399	すてゝあたん、	*	*
400	村原	*	*
401	一 あゝ此上とやすか	一 噫此上ヨヤレバ	*
402	誇らしやとあゆる、	*	*
403	またも世に出る	*	*
404	運のめくひ	*	*
405	乙樽	*	*
406	一 やあ/ゝ、	*	*
407	思子の事や	*	*
408	御格護よてやり、	*	*
409	聞ハ、嬉しさや	*	*
410	仕合とやゆる、	*	*
411	我身に思つきやる	*	
412	事の又あすや、	*	
413	あん前に名付	乳母三名付	乳母三名付ケ
414	忍てむちからに、	*	*
415	命救てたはふれてやり	*	
416	誠たん/ゝと、	*	
417	色々にいやは、	*	
418	欲悪な谷茶	*	
419	巧てをることの、	*	
420	便りはしともて	*	
421	疑ひやなひらぬ、	*	
422	抱(かげ一)置積り、	*	
423	我肝落着やい	我肝落テ着キ居テ	
424	心ゆるさしやい	*	
425	思子守なつけ	*	*
426	引とやひきやへら、	*	引取ヤイ来ヤビラニ
427	村原	*	*
428	思子為てやり	*	*
429	女身ハひちゆひ、	*	*
430	敵の手にやらす	*	*
431	事やならぬ、	*	*
432	乙樽	*	*
433	一 女又やても	*	*
434	男またやても、	*	*
435	思子のために	*	*
436	肝やひとつ、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
437	乙樽原(ママ)	村原	村原
438	一 肝の上の事や	*	*
439	おの筈とやすか、	其ノ筈トヤスガ。	*
440	気ニまかちすにゆめ	*	気ニ任チスマン
441	義理のならひ、	*	*
442	乙樽	*	*
443	一 義理の道てすも	*	*
444	君親の為に、	*	*
445	肝盡す外の	*	*
446	事やなひさめ、	*	*
447	村原	*	*
448	村原か生ち	*	*
449	此世界にをとて、	*	*
450	思子為てやり	*	*
451	義理の道曲て、	*	*
452	女あてなしハ	*	*
453	敵の手にやらち、	*	敵ノ手ニ渡タチ
454	末代の恥辱	*	*
455	面目やきやしゆか、	*	*
456	曾て此事や	*	*
457	ゆるす事ならぬ、	*	*
458	乙樽	*	*
459	一 いちもやく立ぬ	*	*
460	事す又やらハ	*	*
461	わない、女やても	我女ヤテン	*
462	谷茶あまやに、	谷茶マヤアニ。	*
463	一刀も掛て	*	*
464	討死はすらな、	討死ヨ為ラナ。	討死ハスラニ
465	徒に命ち	*	*
466	なからへてのしゆか、	*	*
467	たう / \ ゆるちたはふれ、	*	*
468	母	*	*
469	一 あゝ事あらくするな	*	*
470			
471	やあ乙樽、	*	ヤア乙樽ヨ
472	思子為やれハ	*	
473	おの筈とやすか、	其ノ筈トヤスガ。	
474	事あらくしちや	*	*
475	仕損しの基ひ、	*	*
476	思子までかゝて	思子迄カケテ	*
477	大事あらんしゆもの、	*	*
478	細々とまたく	*	*
479	はからやひくひれよ、	*	*
480	乙樽	*	*
481	一 肝ぬるさしちをて	*	*
482	若か谷茶か	*	*
483	手段引替ち	*	*
484	思子の上に、	*	*
485	あらし聲のあらハ	*	*
486	願てをることも、	*	*
487	思てやくたゝぬ	*	思テ自由(ヤク)ナラヌ
488	あたとなゆる	*	*
489	村原	*	*
490	一 やあ乙樽、	*	*
491	女只ひちゆひ	*	*
492	敵の手にやらす、	敵ノ手ニ遣ラチ。	*
493	きもの忍はらぬあてと	*	*
494	断やしちやる、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
495	今の心さし	*	*
496	いちも盡さらぬ、	*	*
497	誠村原か		*
498	とちの本意、		*
499	此外に手段		*
500	分別もならぬ、		分別ヤナラヌ
501	たう / \	*	*
502	念に念添て	*	*
503	気張て呉れよ、	*	*
504	乙樽	*	*
505			ア、トウト
506	一 思たこと叶て	*	願夕事叶テ
507	ほこらしやとあゆる、	*	仕合トヤヨル。
508	命のあるかきり	*	*
509	こゝろつくさ、	*	*
510	母	*	
511	一 やあ乙樽、	*	
512	思子為てやり	*	
513	命ちふりすてゝ、	*	
514	今のこと云すや	*	
515	誇らしやとあすか、	*	
516	行先の定め	*	
517	さたまらぬあれハ、	*	
518	あけやう思盡す	*	
519	かたもなひらぬ、	*	
520	乙樽	*	
521	一 人の願事の	*	
522	あたに又なゆめ、	*	
523	こゝろ安す / \ と	*	
524	御待めしやうれ、	*	
525	村原	*	*
526	一 やあ乙樽、	*	
527	あらく掛引も	*	*
528	有積りたひもの、	*	*
529	腹立ぬことに	*	
530	心しつめとて、	*	
531	いこと葉に應し	*	*
532	取廻し / \、	*	*
533	請答よふ	受ケ返答能ウ	受返答
534	了簡やすれ、	料見ヨ為レヨ。	了簡ヨスレヨ
535	乙樽	*	*
536	一 我胸に留て	*	一 我ガ肝ニ染メテ
537	ワか肝に染て、	*	我ガ肝ニ留メテ
538	仰す事まゝに	*	*
539	念のいらに、	*	*
540	村原	*	*
541	一 若か事洩て	*	*
542	ならぬおの涯や、	成ラヌ其際ヤ	*
543	別に計とる	*	*
544	手段又あもの、	*	*
545	後れらぬことに	*	*
546	切巧てをる次第、(切は見せ消ちか)	巧デ居ル次第。	巧デ居ル次第
547	親子此三人	*	*
548	隠とる段、	*	*
549	一々細々	*	*
550	白状やすれ、	白状ヨ為レヨ。	白状ヨスレヨ
551	あゝ繰返し / \	噫押シ返ス / \	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
552	又事とやすか、	*	*
553	互に面目や	*	*
554	失なワぬことに、	*	*
555	思子引とゆる	*	思子引取ヨス
556	要目ところ、	*	*
557	ゑひ能々分別	*	
558	題目とやゆる、	*	
559	やあ乙樽、	*	*
560	やく立ぬ我身の	*	*
561	とじなたる因果、	*	妻ナタル因 [欠]
562	あゝ口惜や、	*	*
563			アヤ前
564			一 ヤア乙樽ヨ
565			女身ノ習ノ
566			命振イ捨テ、
567			今ノ如トヤレバ
568			誇ラシヤドアスガ
569			行先ノサダメ
570			定マランアレハ
571			アケヤウ思ミ尽ス
572			方ン無ラヌ
573	乙樽	*	
574	一 たとひ事洩て	*	
575	生殺しされててやり、	*	
576	思子為やれは	*	
577	残る事なひらぬ、	*	
578	心安す / \ と	*	
579	極楽とやゆる、	*	
580	村原	*	
581	一 あゝいふる事よきけハ	*	
582	肝にひし / \ と、	*	
583	むかし物語り	*	
584	聞ゆることに、	*	
585	よの中の手本	*	
586	沙汰と残る、	*	
587	乙樽	*	*
588			一 人ノ願事ノ
589			仇ニ又ナヨメ
590			心安タト
591			御待召レ
592			ヤア / \
593	一 此子乙松や	*	*
594	御素立めしやうち、	御育テヨ召シヨレ。	御素立ヨ召チ
595	人なゆることに	*	*
596	計やひたはふれ、	*	*
597	村原	*	*
598	一 念遣するな	*	*
599	おの素立しゆもの、	*	*
600	すと子の事や、	*	姑子ノ為メニ
601	気遣するな、	*	*
602	乙樽	*	*
603	一 やああや前よ、	*	*
604	頓てワか思子	*	*
605	をかてこんしゆもの、	*	*
606	肝願よしちをて	*	*
607	御待めしやうれ、	*	待ヒイマウレ
608			アヤ前
609			一 義理ノ道ヤレバ

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
610			留テトメラ、ヌ
611	母言葉并伊野波ふし	*	*
612	一 義理のみちやれハ	一 義理ノデモノ	*
613	留てとめららぬ、	*	*
614	乙樽	*	*
615	一 よ所しれ(て)からや	*	*
616	大事あらんしゆもの、	*	*
617	急ち立戻て	*	*
618	まちやひいまふれ、	*	*
619	伊野波ふし下句	*	*
620	一 のかすとくかにある	*	*
621	夢の世界や	*	*
622		第三場	
623			
624			
625			
626			
627			
628	乙樽道行金武ふし	*	*
629	一 胸にものおめハ	*	*
630	歩む道ほとも	*	*
631	覺らすにつきやさ	*	*
632	本の城	*	*
633	乙樽	*	*
634	一 覺らすに谷茶	*	*
635	城元につきやん、	城ニ着キヤン。	*
636	物めつめしちをて	*	*
637	案内よすらに、	*	*
638			
639	やあ/\、御取次頼ま	サア/\ 御取次頼マ	*
640	ものしられしやへら、	*	
641			案内ヨシヤビラ
642	門番	*	下部
643	一 はあ/\ 無作法/\、	*	*
644	内原にいきやひ	*	*
645	御取次しやうれ、	*	*
646	乙樽	*	*
647	一 やあ/\、	*	*
648	我身や大川の	*	*
649	思子虎千代が、	*	*
650	乳親とやゆる	*	*
651	守あんとやゆる、	*	*
652	大川の城	*	*
653	仕合の時(に)	*	*
654	あハてさま逃て	*	*
655	かくれやひをたん、	*	*
656	かゝる方なひらぬ	*	
657	すかる方なひらぬ、	*	
658	聞ハ御慈悲あて	*	*
659	守素立思子、	*	*
660	御素立のあて	*	御素立ヨテヤリ
661	音信よをかて、	*	*
662	思子諸共に	*	*
663	命つかんともて、	*	*
664	よしれやひをもの	*	*
665	頼て御情に、	*	*
666	御取次めしやうち	*	*
667	助やひ給ふれ、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
668	門番	*	下部
669	一 はあ云ることよ聞ハ、	*	一 云ル事ヨ聞ケバ
670	無蔵なもの、	*	*
671	たう / \、むまに	トウ / \ 其処ニ	*
672	待ひをれよ	*	*
673	/ \、	*	*
674	同人	*	*
675	拝れよめしやいん	*	*
676	あれに居やうれ、	*	*
677	谷茶	*	*
678	一 やあ / \、	*	*
679	大川のなし子	*	*
680	乳母てる女、	*	*
681	いきやあれはずにゆか	*	*
682	考てみやうれ、	*	*
683			石川
684			一 拝留ヤビテ
685	満納	*	*
686	一 され按司かなし、	*	*
687	大川のなし子	*	*
688	引取んでやり、	*	*
689	村原のひやか	*	*
690	計得とやゆる、	*	*
691	あゝあれほどの村原も	ハア彼レ程ノ村原モ	*
692	運の末なれハ、	*	*
693	わにやかかけの内に	*	*
694	首いれる仕形、	*	首入レル姿
695	こまや楽々と	*	*
696	足たくてをとて、	*	*
697	村原のひやか	*	*
698	計事便て、	*	*
699	村原からめゆる	*	*
700	時節きやあへたん、	*	*
701	扱々御果報	サア / \ 御果報	*
702	急い事たやへる、	*	*
703	谷茶	*	*
704	一 一段な事よ	一 一段ナ事	一 ア、一段ナ事
705	/ \、	/ \。	*
706	やあ石川のひやゝ、	ヤア石川ノ比屋。	*
707	へつに了簡の	*	*
708	あひかしゆら、	*	*
709	石川	*	*
710	一 満納いやれること、	*	*
711	一々尤	尤モ	*
712	同意たやへる、	*	*
713	谷茶	*	*
714	一 扱も / \、	*	*
715	分才もしらぬ	*	*
716	此按司に向て、	*	*
717	すひさんなやから	*	*
718	ゆるす事ならぬ、	*	許チ置ナラヌ
719	急ち引出ち	*	*
720			
721	責のあるかきり、	*	*
722			
723	せめて有筋	責テ有ル筋	責メテ有筋ニ
724	白状よしめれ、	*	*
725	石川	*	*



No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
726	一 拝むちゆめやへて、	*	*
727			
728	やあよしれとる女	*	ヤア / \ 寄リトル女
729	出す / \、	*	*
730			
731			
732	下部	*	*
733	一 さあ / \	*	一 トウ / \
734	御前寄て拝め	*	*
735	御側よて拝め、	*	*
736			
737			
738		トウ / \ 其処ニ	トウ / \ ウマニ
739		居ヤウレ / \。	居ヤウレ / \
740	満納	*	*
741	一 やあ女、	*	*
742	得と肝ゐして	*	*
743	慥にきけ、	*	*
744	おかたちか巧ミ	*	*
745	たくてをる事や、	*	*
746	尋らぬ先に	*	*
747	合点とやゆる、	*	*
748	直におの科に	*	*
749	当る筈やすか、	*	*
750	科もかんすらぬ	*	*
751	責もさぬことの、	*	*
752	御慈悲ある天の	*	*
753	御情のあとて、	*	*
754	村原か行衛	*	*
755	おんにゆけるやらハ、	*	*
756	巧てをる事の	*	*
757	おの科もゆるち、	*	*
758	島知行もとらち	*	*
759	引はらふしまても、	*	*
760	おの御肝きやへや	其ノ御肝如何	*
761	ある筈よたひもの、	*	*
762	御情の御肝	*	*
763	ミすく取請て、	*	*
764	肝われて實に	*	*
765	おんにゆけやうれ、	*	*
766		乙樽	
767		無言	
768	同人	*	
769	一 あゝ好てこのまらぬ	一 ハア好デ好ラヌ	*
770	天運のめぐり、	*	*
771	勘違するな	*	*
772	/ \、		*
773	乙樽	*	*
774	一 村原か事や	*	*
775	討死かしちやら、	*	*
776	音信もなひらぬ	*	*
777	沙汰もきかぬ、	*	*
778	女あてなしの	*	*
779	のゝ思のあゆか、	*	*
780	命のつれなさに	*	*
781	按司かなし天の	*	*
782	十百歳のおかほ	*	*
783	かめ願よしちをて、	*	神願ヨシチヨテ

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
784	御情にワ身の	*	*
785	露程の命ち、	*	*
786	いきやしかなともて	*	*
787	よしれやひをもの、	*	*
788	色分てたはふれ	*	*
789	天の御肝、	*	*
790	満納	*	*
791	一 いや / \、	*	*
792	かくしゆらハ隠す	*	*
793	つゝミゆらハ包め、	*	*
794	肝のあくまゝや	*	*
795	責の有限り、	*	*
796	おの責に当て	*	*
797	聞答とやすか、	*	*
798	責られてからに	*	*
799	おんにゆけるやらハ、	*	*
800	科の上に科や	*	*
801	重ならんしゆもの、	*	*
802	せめららぬうちに	*	*
803	おんにゆけやうれ、	御入聞ヤラレ。	*
804	乙樽	*	*
805			
806			
807			
808			
809			
810			
811			
812			
813	一 のゝこともおまぬ	*	*
814	女あてなしに、	*	*
815	罪科よかけて	*	*
816	うきくれしやしめゆすや、	憂苦シヤ為スヤ。	*
817	村原かしワさ	*	*
818	恨めてとをゆる、	*	*
819	のよて身にかへて	*	*
820	実よかくしやへか、	*	*
821	此事やつく / \と	*	*
822	おもてたはふれ、	*	*
823	満納	*	*
824	一 勘違するな	*	一 ア、勘違スルナ
825	不勘ともするな、	*	*
826	殺される科も	*	*
827	兼てしりなけな、	*	*
828	責の上(に)向て	*	*
829	偽やならぬ、	*	*
830	有筋にいちゆて	*	*
831	殺される者も、	*	*
832	昔から今に	*	*
833	数やしらぬ	*	*
834	乙樽	*	*
835	一 村原か行衛	*	*
836	夢程もしらは	*	*
837	御尋の先に	*	*
838	おんにゆける積り、	*	*
839	のゝおめのあゆか	*	*
840	ワか命の外に、	*	*
841	のゝ思のあとて	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
842	隠ちをゆか、	*	隠チ置チユガ
843	御言葉に應し	*	*
844	たゝこともないらぬ、	陀羅(ダラ)事モ無ラス。	似タ事モナラス
845	御返事御返答に	*	*
846	つまでをゆん、	*	*
847	石川	*	*
848	一 はあ勘違するな	*	一 ア、勘違スルナ
849	とんなこといふな、	*	*
850	縦命限り	*	*
851	あらわすなてやり、	*	*
852	堅談合も	堅ク談合ヤ	*
853	しちあたんてやりか、	為チ有タイテイカ。	*
854	満納いやれること	*	*
855	責のねつられめ、	*	*
856	たう / \、	*	*
857	今のこと細く	*	*
858	真心にいやれは、	真実ニ云ヤレス。	真実ニ云ヤレス
859	百すてやあらね	*	*
860	美拝をかてからに、	*	*
861	みすく取請て	*	*
862	包ますにいやうれ、	*	*
863	あゝ百果報や目の前	*	*
864	引よすてをとて、	*	*
865	人の為にあたら	*	*
866	のちとてやすまぬ、	*	*
867	人間の願の	*	*
868	のゝおめのあゆか、	*	*
869	思てやく立ぬ	*	*
870	村原もすてゝ、	*	*
871	天道のなし子	*	*
872	真肝うちわれて、	*	*
873	生れたるしるし	*	*
874	樂よすれよ	*	*
875	/ \、	*	*
876		乙樽	
877		一 無言	
878	石川	*	下部
879	一 さあ / \	一 ヤア / \	*
880	おんにゆけやうれ	*	*
881	/ \、	*	*
882	乙樽	*	*
883	一 村原かなんと	*	*
884	やから者やても、	*	*
885	網の魚心	*	*
886	只ひちゆいものゝ、	*	*
887	こへな御城に	*	*
888	弓引のなゆめ、	*	*
889	たとひ生残て	*	*
890	かたすみのをても、	*	*
891	天の御定の	*	*
892	くる間の命ち、	*	*
893	海山にかゝて	*	*
894	つくまでとやゆる、	*	*
895	あゝ按司かなし御始	噫按司加那志始メ	*
896	石川と満納、	*	*
897	島国よ豊む	*	島国モ豊ム
898	人々とやすか	*	*
899	村原のひやゝ	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
900	鬼のことめしやうち	*	*
901	いきやしおれほども	*	ヌヲデオレ程
902	おとろしやよめしやいか、	*	*
903	谷茶	*	*
904	一 むゝ尤な不審	*	*
905	尤な事、	*	*
906	やあ女、	*	*
907	慈悲情尽ち	*	*
908	大川のなし子、	*	*
909	素立やひあすか	*	*
910	もしか村原か、	*	*
911	いらぬ義理立て	*	*
912	謀叛企(夕)ハ、	*	*
913	大川のなし子	*	*
914	生て置ならぬ、	*	*
915	(誠心實も)	*	*
916	あたになるやれは、	*	仇ニナルヤラバ
917	村原も共に	*	*
918	素立ほしやあてと、	*	*
919	細く問尋ね	細々問ヒ尋ネ	*
920	しゆることよたひもの、	*	*
921	守子為ともて	*	*
922	かくさずに語れ、	*	*
923	満納	*	*
924	一 いや、此上に又も	*	*
925	隠しともしゆらハ、	*	*
926	又事もいらぬ	*	*
927	直に引立て、	*	*
928	すねの砕けらハ	*	*
929	胸腹よまでも、	胸腹迄モ。	*
930	命の有限り	*	*
931	はさみきらしゆもの、	*	*
932	たうおのこゝれしちをて	トウ其ノ心シチュヨテ	オノ心得シチュヨテ
933	おんにゆけやうれ、	*	*
934	ゑひ差繩持ち	差繩ン持ち来	エイ差繩モ持ツチ
935	近く寄てをとて、	近ク寄テカラニ。	*
936	又も隠しゆらハ	*	*
937	屹度こむせめれ、	*	屹度コン責 [欠]
938	下部	*	*
939	一 さあ / \	*	*
940	おんにゆけやうれ	御入聞ウヤレ。	*
941	/ \、	*	*
942		乙樽	
943		一 無言	
944		下部	[欠]
945	後てやすまぬ	*	イヤ後レテヤ済マヌ
946	急ちおんにゆけやうれ、	*	[欠] ニヨケヤウレ
947			
948	満納	*	*
949	一 いや、おなためもしらぬ	*	*
950	こゝてをゆめ、	含デ居テ居ヨメ	*
951		乙樽	乙ダル
952	一 のゝこともしらぬ	*	*
953	女あてなしに、	*	*
954	段々の御間こと	*	*
955	御難儀とやゆる、	*	*
956	いちもやく立ぬ	*	*
957	是非に及はらぬ、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
958	誠正直の	誠正実ノ	*
959	我胸の内や、	*	*
960	責てせめころち	*	*
961	あとに御目掛け、	*	*
962	近き拝まれる	*	*
963	天の下をとて、	*	*
964	偽のなゆめ	*	*
965	人の肝の、	*	*
966	満納	*	*
967	一 はあ、つらつきも替て	*	一 ア、面附モ変テ
968	悪魔やな女、	*	*
969	夫喰る悪生	夫喰ユル畜生	*
970	切支丹、	*	*
971	鬼むちやる人の	*	*
972	此世界にをゆめ、	*	*
973	是と鬼やゆる	*	*
974	さあ / \	*	*
975	屹度こむ責れ、	*	*
976	下部	*	*
977	一 せめられるごうの	*	*
978	深さある女、	*	*
979	いきやか / \、	*	*
980	乙樽	*	*
981	一 ちりあくた心	一 塵芥(チリアクタ)意	*
982	数ならぬワ身の、	*	*
983	殺される事や	*	*
984	露程も思ぬ、	*	*
985	思切ひをすか	*	*
986	のゝこともしらぬ、	*	*
987	女あてなしは	女アテナシニ	女アテナシ [欠]
988	鬼無理にせまて、	*	[欠] 無理ニ責メテ
989	責殺す罪の	*	*
990	わかために廻て、	*	我ガ為 [欠]
991	按司かなし上に	按司加那志天ニ	[欠] 司加那志上ニ
992	いきゆらたひいとめは、	*	*
993	死ゆ / \ も是や	*	死 [欠] ヤ
994	気にかゝていきゆん、	*	*
995	谷茶	*	*
996	一 はあ云る事よ聞ハ	*	一 ア、云ル事ヨ聞ケバ
997	理りとやゆる、	*	*
998	縄も掛らすに	*	*
999	責もさぬことに、	*	*
1000	義理の上の嘯	*	*
1001	あらんしゆもの、	*	*
1002	たう / \	*	*
1003	せまてある縄も	縛テ有ル縄	*
1004	急ちときゆるす、	*	*
1005			
1006			
1007	乙樽	*	*
1008	一 あゝたうと、	*	*
1009	此御恩たうとさや	*	*
1010	女身のわぬも、	*	*
1011	よしれやひをれハ	参上レヤイ居モノ	*
1012	若か村原か、	*	*
1013	生残てをとて	*	*
1014	思子御素立の、	*	*
1015	事よとも聞ハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1016	我身よりも増て、	*	我身ユヘモマサテ
1017	時日移さすに	*	*
1018	うち笑ひ / \、	*	*
1019	よしれらな置め	*	*
1020	人の肝の、	*	*
1021	御慈悲御情と	*	*
1022	ワ御主かなし、	*	*
1023	百とまでちやうわれ	*	百トワリチヨマデ
1024	拝てすてら、	*	拝デスデヤベラ
1025	満納	*	*
1026	一 いや、からすよも女	*	*
1027	人やたまそとも、	*	*
1028	いきやし此満納	*	*
1029	たまかしのなゆか、	*	*
1030			
1031	そんちむち牢に	*	*
1032	たゝちむちおけ、	*	*
1033	谷茶	*	*
1034	一 いや / \、	*	*
1035	あたまをてものや	*	*
1036	念入なしちをて、	*	*
1037	仕損してからや	*	*
1038	悔てやく立ぬ、	*	*
1039	思案より外の	思案スル外ノ	*
1040	事やなひさめ、	*	事ヤ無 [欠]
1041	たう / \	*	[欠]
1042	事急きするな	*	*
1043	短気するな、	*	*
1044		全人椅子ヲ離レ立テ独語	
1045	扱も / \、	*	*
1046	高程もおちやて	*	丈ケ [欠] チヤテ
1047	目口やは / \ と、	*	*
1048	雪のしらはくき	*	*
1049	物云さし聞ハ、	*	*
1050	ごいんから替て	*	*
1051	花の清ら女、	*	*
1052	見れはみる毎に	*	*
1053	おめと増る、	*	*
1054	我が側ニおきやひ	*	*
1055	互に楽々と、	*	*
1056	夢のこの浮世	*	*
1057	暮しほしやの、	*	*
1058	誠真実の、	*	*
1059	我肝とも呉らハ、	*	*
1060	村原か事も	*	*
1061	いやな置め、	*	*
1062	石川と満納	*	*
1063	追ぬけてからに、	*	*
1064	ワ肝明々と	*	*
1065	談合よすらに、	*	*
1066		全人元ノ椅子ニ着キ	谷茶
1067	やあ / \、	*	*
1068	此事や互に	*	*
1069	おかとしちすまぬ、	*	*
1070	けふや立別て	*	*
1071			
1072	思案しちからに、	*	*
1073	思ひきハまらハ	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1074	呼す筈たひもの、	*	*
1075	戻てむち得と	*	*
1076	考てみやうれ、	*	*
1077	満納	*	*
1078	一 めしやいること、	*	*
1079	ものやひとかたに	*	*
1080	おかとしちすまぬ、	*	*
1081	あの女てすや	*	*
1082	村原かとしの、	*	*
1083	乙樽よてやり	*	*
1084	たゝならぬやから、	*	*
1085	女てやりおかと	*	*
1086	ゆるち置ならぬ、	許子済マン	*
1087	責らすになんと	*	*
1088	尋たんたひか、	*	*
1089	愚痴の上に愚痴や	*	*
1090	かたまゆる積り、	*	*
1091	牢に込置て	*	*
1092	おのくつさしめて、	*	*
1093	引出し / \	*	*
1094	おの責にあてゝ、	*	*
1095	漸々と気根	*	*
1096	疲ゆる時と、	*	*
1097	有筋に白状	*	*
1098	しゆる積りやれハ、	*	*
1099	御思案の内や	*	*
1100	こめておきやへら、	*	先ヅ固メテ置チヤベラ
1101	石川	*	*
1102	一 満納思寄も	一 満納思寄りモ	一 満納思故モ
1103	尤とやすか、	*	*
1104	牢こめもいらぬ	*	*
1105	責もさぬことの、	*	*
1106	御慈悲御情けの	*	*
1107	按司の御計や、	*	*
1108	いかな悪欲な	*	*
1109	無理なものやても、	愚痴ナ者ヤテン。	*
1110	背く事なひさめ	*	*
1111	義理の上ニ、	*	*
1112	たう / \	*	*
1113	先牢こめや	*	*
1114	ゆるちおかに、	*	*
1115	満納	*	*
1116	一 いや / \、	*	*
1117	村原のひやに	*	*
1118	ならふものをらぬ、	*	*
1119	巧てをる事や	巧テ居ル事ノ	*
1120	いか程かやゆら、	*	*
1121	おかとしちすまぬ	*	*
1122	女わらへ、	*	*
1123	石川	*	*
1124	一 我々の一事	一 吾々一事	*
1125	はからやいをれハ、	計ヤライ居レバ。	*
1126	按司や百ことの	*	*
1127	御計のあゆん、	*	*
1128	満納	*	*
1129	一 はあ、主人身の上の	*	一 ア、主人身ノ上ノ
1130	浮沈ミやれハ、	*	*
1131	肝のあくまゝや	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1132	命ち限り、	*	*
1133			
1134	あゝおとろしやもしらぬ	*	サレ驚ルシヤモ知ラヌ
1135	みよんにゆけややへか、	御入聞ヤベズガ。	*
1136	責さしゆることの	*	*
1137	御肝きやさあらハ、	*	*
1138	大川のなし子	大川ノ産子タイ	*
1139	あのやからもとの、	其ノ奴者(ヤカラモノ)ト。	*
1140	姿から形ち	*	*
1141	似ちをるもの撰て、	*	*
1142	大川のなし子てやり	*	*
1143	取沙汰よしめて、	*	*
1144	外の出入も	*	*
1145	ゆるちあんでやり、	*	*
1146	村原か聞ハ	*	*
1147	疑やなひらぬ、	*	*
1148	はいとらんともて	*	*
1149	忍て来るつもり、	*	*
1150	おの手組しちをて	其手組ミ為チ居テ	*
1151	からめとやへら、	*	*
1152	谷茶	*	*
1153	一 細事のたくひ	*	*
1154	聞きやくもなひらぬ、	*	*
1155	満納	*	*
1156	一 あゝ按司かなし天の	*	*
1157	盛衰の	盛衰ヤ	栄ヒ衰イヤ
1158	此涯よやれハ、	*	*
1159	包てつゝまらぬ、	*	*
1160	おとろしやもしらぬ	*	*
1161	繰返し/、	*	*
1162	みよんきこと	*	*
1163	かへそ科や	*	*
1164	仰すめしやうち、	*	*
1165	是非共牢舎	是非共ニ牢舎	*
1166	仰すめしやうれ、	*	*
1167	谷茶	*	*
1168	一 推参なやから	*	一 イヤ推参ナ族ラ
1169	愚痴にかたまどめ、	*	*
1170	又事もいらぬ	又事モ無ラヌ	*
1171	なけすてゝとらさ、	*	*
1172	石川	*	*
1173	一 此涯よたひもの	一 此ノ際ヨデモノ	一 ア、此涯ヨデモノ
1174	御勤忍めしやうれ、	*	*
1175	谷茶	*	*
1176	一 やあ石川、	*	*
1177	ワか下知に背く	*	*
1178	気任のやから、	*	*
1179	急ち引立て	*	*
1180	そんちいけ、	*	*
1181	石川	*	*
1182			
1183	一 やあ満納	*	*
1184	御意背く道の	*	*
1185	此世界にあゆめ、	此世界ニ成ユメ。	*
1186	おれこれも按司の	*	*
1187	御計にまかち、	*	*
1188	仰すことまゝに	*	*
1189	急ち戻ら、	*	*



No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1190			
1191			
1192			
1193	谷茶	*	*
1194			
1195	一 やあ / \	*	*
1196	振合の袖に	*	*
1197	糸の縁結て、	*	*
1198	夢の間の浮世	*	*
1199	語ひほしやあもの、	*	暮シ欲シヤアモノ
1200			
1201			
1202			トウ / \
1203	ワか側にをとて	*	*
1204	樂よすれよ	*	*
1205	/ \、	*	*
1206	乙樽	*	*
1207	一 御情に御側	*	*
1208	をらんでやりすれハ、	*	*
1209	おやくめさあもの	*	*
1210	御ゆるせよめしやうれ、	*	御免チ賜レ
1211	谷茶	*	*
1212	一 いや / \、	*	
1213	やくめさもいらぬ	*	ヤグミサンスルナ
1214	斟酌もするな、	*	*
1215	ワ側ともをらハ	*	我側に居ラバ
1216	花に増姿、	*	*
1217	おの飴しめて	*	*
1218	をなちやらもされん、	*	*
1219	島国よ揃て	*	*
1220	あかめらんしゆもの、	*	*
1221	たう / \	*	*
1222	側にをれよ	*	*
1223	をれよ、	*	*
1224	乙樽	*	*
1225	一 按司もわなひすかぬ	*	*
1226	樂も又すかぬ、	樂ン我好カヌ	*
1227	わすたつれやても	我等達 (ワシタダチ) ヤテン	*
1228	女身の習の、	*	*
1229	義理曲てなれる	義理曲テ押レル	*
1230	道のあゆめ、	道ノ有ル乎 (イ)	*
1231	谷茶	*	*
1232	一 いや / \、	*	一 ア、
1233	今のこと愚痴に	*	*
1234	かたまとるむさや、	*	カタマヨルンザヤ
1235	素立ひやならぬ	育テモ成ラヌ	*
1236	急ち戻やうれ、	急ギ戻レ。	急ギ戻レ
1237			
1238			
1239	乙樽	*	*
1240	一 こまかゝて命や	*	*
1241	つかなれハ死にゆめ、	*	*
1242	もの乞になても	物云ヒニ成テン	*
1243	のちやつきゆん、	*	*
1244	たう / \	*	*
1245	ゆるちたはふれ、	*	*
1246	谷茶	*	*
1247	一 いや / \、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1248	乙樽	*	*
1249	一 義理と按司やゆる	*	*
1250			
1251	無理な事めしやうな、	義理ナ事召シヨナ。	*
1252			
1253	谷茶	*	*
1254	一 いやこの按司の言葉	*	*
1255	きかならハそなた、	*	*
1256	一刀に命ち	*	*
1257	つふちとらさ、	*	*
1258	乙樽	*	*
1259	一 殺しゆらハ殺す	*	*
1260	おとろしやゝなひらぬ、	*	*
1261	生々と命の	*	*
1262	死もしにやれらぬ、	死ニモ死ナレラメ。	*
1263	恥もふりすてゝ	*	*
1264	此なひになとる、	*	*
1265	露程のいのち	露程モ命	*
1266	惜む事ないらぬ、	*	*
1267	仕合とやゆる	*	*
1268	ころす／＼、	*	*
1269	谷茶	*	*
1270	一 はあ肝ほれてをたら	*	一 ア、肝狂レテ居タラ
1271	今のことしやすや、	*	*
1272	無調法至極	*	*
1273	ゆるちたはふれ、	*	*
1274	神仏てすも	*	*
1275	人の肝尽ち、	*	*
1276	祈る願事や	*	*
1277	御助のあもの、	*	*
1278			
1279			トウ／＼
1280	みすく聞分て	*	
1281	肝もきもそへて、	*	
1282	頼て御情に	*	
1283	なれて給ふれ、	押レテ給レ。	
1284			オレ是レヨ思テ
1285			死ノル我ガ命
1286			頼デ御情ニ
1287			救テ賜レ
1288	乙樽	*	*
1289	一 おはつかしやあても	*	*
1290	(いやな) 又なゆめ、	*	*
1291	ワか夫や此世	*	*
1292	隠れやひをらぬ、	*	振り捨テ、居ラヌ
1293	遺言しちあすや	*	*
1294	三年の内に、	*	三年ノ内ヤ
1295	夫もとなてやり	*	*
1296	い言葉のあゆん、	*	*
1297	三年やたひんす	*	*
1298	女身の習の、	*	*
1299	夫ふたりもちゆる	*	*
1300	道のあるひ、	*	*
1301	谷茶	*	*
1302	一 昔ほれものゝ	*	一 ア、昔狂レ者ノ
1303	いちやること守て、	*	*
1304	浮世くらされめ	*	*
1305	按司も下司も、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1306	恋忍ふ道の	恋忍ブ事ノ	*
1307	ある間の浮世、	*	*
1308	つらさ身に受て	*	難面身ニ受テ
1309	思ひこかれやひ、	*	*
1310	恋死はむくひ	*	*
1311	たるにいきゆか、	*	*
1312	たう / \	*	*
1313	おれこれよおもて	夫レ是レヨ思テ	*
1314			
1315			
1316	死にゆる我か命ち、	*	*
1317	頼て御情に	*	*
1318	救てたはふれ、	*	*
1319	乙樽	*	*
1320	一 思ひ究とる	*	*
1321	ワ身と又やすか、	*	*
1322	按司の御言葉や	*	*
1323	梓弓心、	*	*
1324	引されていきゆさ	引カサレテ行キユル	*
1325	ワ身の肝や、	*	我身ノ肝ノ
1326	谷茶	*	*
1327	一 はあ果報もつきゆすかと	*	一 ア、果報モ付チユシガド
1328	つきも付清さ、	*	*
1329	あた果報とつきやる	*	*
1330	果報な我身や、	果報ノ我身ヤ	*
1331	はあしたひ / \、	*	ア、シタイ / \
1332	乙樽	*	*
1333	一 来る二月に	*	一 来ル二月ヤ
1334	すきし我か夫の、	過世吾ガ夫ノ。	*
1335	三年忘たひもの	*	*
1336	吊や濟ち、	*	*
1337	よしあしの御返事	*	*
1338	おしやけんしゆもの、	御仕上(ヲシヤ)ゲラン為(シ)ユモノ。	*
1339	おの内や是非に	其(ウノ)内ヤ是非ユ	オノ内ヤ是非ヨ
1340	御待めしやうれ、	*	*
1341	谷茶	*	*
1342	一 いや / \ 是や	*	一 ア、是ヤ
1343	ならぬ / \、	*	*
1344	乙樽	*	*
1345	一 おれこれもゆるし	*	*
1346	ならぬことやらハ、	*	*
1347	逆も一刀に	*	*
1348	殺ちたはふれ、	*	*
1349	谷茶	*	*
1350	一 はあおれ是もよたしや	*	一 オレ是レモヨタシヤ
1351	いつまでもまちゆん、	*	*
1352	いやれること済ゆん	*	*
1353	よたしや / \、	*	*
1354	乙樽	*	*
1355	一 あゝたうと、	*	*
1356	御情の光	*	*
1357	てり増ひ / \、	*	*
1358	百といつまでも	*	百トワリチヨマデ
1359	拝てすてやへら、	*	*
1360			
1361			
1362	谷茶	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1363	一 あゝ我身もほこらしやの	*	一 我身モ誇ラシヤノ
1364	物にとららぬ、	*	*
1365	このたけにワ身や	此レダケニ我身ヤ	*
1366	なやかやいをても、	成上(ナヤガ)ヤイ居スガ。	ナヤガヤイ居スガ
1367	気に叶ふ女、	*	*
1368	側にまたをらぬ、	*	*
1369	是とワかふ足	*	*
1370	心くら闇に	*	*
1371	なやいをたん、	*	*
1372	今月も過て	*	*
1373	二月も頓て、	*	*
1374	おれからや互に	*	オレカラヤ [欠]
1375	枕うちならへ、	*	*
1376	浮世楽々と	*	夢ノ間ノ浮世
1377	暮すとめハ、	*	*
1378	まちと嬉しこと	*	*
1379	よろこひもおへさ、	*	*
1380	天に飛登る	天ニ登ル	*
1381	ワ身の心地、	*	*
1382	引寄て給ふれ	*	*
1383	御月御てた、	*	*
1384	我自由しち浮世	我自由シチ遊デ	*
1385	遊て暮さ、	浮世暮サ。	*
1386			
1387	一 やあ / \、	*	*
1388	此内やとかく	此ノ門(ママ)ヤ兎角	此間ヤ兎角
1389	くつさしちをたら、	*	*
1390	心はれ / \と	*	*
1391	うち晴て躍て、	打揃テ踊テ	*
1392	此間のくつさ	*	*
1393	思ひ忘れ、	*	*
1394	こてふし	*	*
1395	一 御慈悲あるゆへと	*	*
1396	御万人のまきり	*	*
1397	上下もそろて	*	*
1398	あふきおかむ	仰ギ拜マ。	*
1399	谷茶	*	*
1400	一 はあきよらさ / \、	*	一 ア、美ラサ / \
1401	乙樽	*	*
1402	一 けふや思子の	*	*
1403	御側むちをかて、	*	*
1404	明日か日に又も	*	*
1405	拝てすてら、	*	拝デスデヤビラ
1406		谷茶	谷茶
1407	一 たう / \、	*	*
1408	けふや道中の	*	*
1409	草臥もあらたひもの、	*	*
1410	若按司の側にむち	*	*
1411	休息よすれ、	休息ヨスレヨ	*
1412			
1413	村原出羽大浦ふし	*	*
1414	思子取戻ち	*	*
1415	敵うたんともて	*	*
1416	衾れ商人に	*	*
1417	やつれ出る	*	*
1418			
1419		村原ノ比屋	村原
1420	一 是や村原のひや、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1421	思子取戻す	*	*
1422	つまひ分別に、	*	キマイ分別ニ
1423	乙樽かことや	*	*
1424	あむまへになつて、	*	*
1425	敵の城元に	*	*
1426	只ひちゆひやらち、	*	*
1427	あゝ、心元なさの	*	心モトナサノ
1428	我肝やすまらぬ、	*	*
1429	物売にやつれ	*	物売ニ名付ケ
1430	忍て出る、	*	忍ビ出ラ
1431	さいんそるふし	*	*
1432	一 唐や大和の	*	*
1433	珍らし物	*	*
1434	匂ひ髪附	*	*
1435	香しもの	*	*
1436	丁子白檀	*	*
1437	甘生姜	*	*
1438	刻多葉粉も	*	*
1439	持ちをやへん	*	*
1440	きせるも宝蔵も	*	*
1441	持つをやへん	*	*
1442	其外色々	*	*
1443	持ちをやへん	*	*
1444			
1445	代もやすめて	*	*
1446	上やへら	*	*
1447	米とも粟とも	*	*
1448	替やへん	*	替ヤビラ
1449			
1450			
1451	御望の物や	御望者ヤ	*
1452	かふやひたはふれ	*	*
1453	村原	*	*
1454	一 先物売に名付	*	一 トウ / \ 物売に名付ケ
1455	此辺にをとて、	*	*
1456	往来の人の	*	往来 [欠]
1457	沙汰よきかに、	*	*
1458	泊井	*	*
1459	とんちたるものや	*	*
1460	村原のあやと	*	*
1461	むちやん一ツの	*	*
1462	ちきや御葉たん、	*	*
1463	大川の思子	*	*
1464	引取らんで	*	*
1465	村原のあやゝ、	*	*
1466	谷茶城忍て	*	*
1467	いまふちやうすか、	*	*
1468	夫の村原なひ	*	*
1469	肝要なものいやひ	*	*
1470	頼まつて行ん、	頼マテ居ン。	頼マツテ居ン
1471	油断しや済ぬ	*	*
1472	先一足もいそかう、	*	*
1473	村原	*	*
1474	一 され / \、	*	*
1475	万細物	*	*
1476	持ちをやへん、	*	持ち居ヤビスガ
1477	これ / \	*	
1478	御望の物や	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1479	売上やへら、	*	是々売上ヤベラ
1480	泊井	*	*
1481	一 あゝ是や仕合な事、	*	一 ム、是レヤ仕合ナ事
1482	村原	*	*
1483	一 田舎江御通の	*	田舎御通ノ
1484	御支度の御様子、	*	*
1485	御中途の御用	*	*
1486	是々	*	*
1487	又是も上やへら、	*	是レモ上ベラゲヤビラ
1488	泊井	*	*
1489	一 是や心入とやる、	*	*
1490	いやれること	*	*
1491	谷谷屋良村んかい	北谷屋良村ンカイ	北谷屋良村ンカイ
1492	越ん、	*	*
1493	道中の重宝	*	*
1494	仕合な事、	*	*
1495	主やまあからまあんかひ	*	*
1496	まひか、	、マヒガ	*
1497	村原	*	*
1498	一 我身や	*	*
1499	那覇若狭町から、	*	*
1500	今度初て	*	*
1501	旅の者、	*	旅ノ者ヨ
1502	御急きもやゆら	*	*
1503	御無心もしらぬ、	*	*
1504	取つけもなひらぬ	*	*
1505	望事やすか、	*	*
1506	旅の上の御縁	*	
1507	をかむ御情に、	*	
1508	めつらしい事の	*	*
1509	此頃にあらハ、	*	*
1510	御休ミのうちに	*	御休ミノ中
1511	きかちたはふれ、	*	*
1512	やとものみやけ	*	*
1513	ものかたりしやへら、	*	*
1514	泊井	*	*
1515	一 まゝてひしんさあ	*	*
1516	ちゆのいそけは、	*	*
1517	むゝたしかに村原のひややすか、	*	*
1518			
1519	しかつと見覚のなひらぬ、	*	*
1520			
1521	先口ふて	*	*
1522	さくてむだう、	*	*
1523	同人	*	
1524	一 あゝいきやいは兄弟	一 噫合ハ兄弟	へイ / \ 行逢ワ兄弟
1525	のううちへたてのあか、	*	*
1526	これや余り	*	ア、是レヤ余リ
1527	こは返事やつさあ、	*	*
1528	やすか	*	*
1529	かんのふも	*	*
1530	珍らしひ事や、なひらぬ、	*	*
1531	むゝあゝ、	*	ア、
1532	満納の子や	*	*
1533	打殺さつて、	*	*
1534	あゝいたわしい事、	*	痛ワシイ事
1535	村原	*	*
1536	一 あたらしか満納	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1537	いきやしちやる事か、	*	イチヤスチャル事
1538	泊井	*	*
1539	一 むゝ、おの事てハ、	*	一 トウオノ事テワ
1540	たう細々の次第	*	細々ノ次第
1541	根から咄ちきかさう、	*	*
1542	あの城や、	*	*
1543	本今帰仁の別れ	*	*
1544	大川の按司の城やたすか、	*	*
1545	百姓上の按司部	*	*
1546	谷茶のおまへの打亡はち、	*	*
1547	今や谷茶城むていふん、	*	*
1548	先事のおこれや	*	*
1549	谷茶か野心巧て、	*	*
1550	大川の按司の		
1551	国々の按司部うたんで、	国々ノ按司討ンデ	*
1552			
1553	あらさらぬ事ハ	*	*
1554	色々にいひ立て、	*	*
1555	加勢頼て	*	加勢頼ミ
1556	軍押寄たん、	軍打寄タン。	*
1557	だあ大【城】川城や	*	*
1558	をなちやらの御吊の日に当て、	*	*
1559	御取込の最中	*	*
1560	以の外、火急な事	*	*
1561	分別の分別ならぬ、	*	*
1562	按司も大将も	*	*
1563	ゑひころ討死、	*	*
1564	大勢に無勢	*	*
1565	力及はらぬ、	*	*
1566	終にや思子や生捕られ、	*	*
1567	大将村原のひやゝ	*	*
1568	ぬけすまち	*	*
1569	行衛しれらぬ、	*	*
1570			
1571	世界の一人者	*	*
1572	ゑひ武士やすんついてや、	*	*
1573	生捕てあるいねけ子	*	*
1574	物種子にしち、	*	*
1575	取付て	*	*
1576	降参しめらむて	*	*
1577	おの思子つかなてあん、	*	*
1578	おの段村原か聞付て	*	*
1579	思子引取らむて、	*	*
1580	村原のあやゝ	*	*
1581	あん前むて云ち、	*	*
1582	共につかenateたはふれ / \ むて	*	*
1583	谷茶城よしれたん、	*	*
1584	あゝむちや	*	*
1585	満納の子なつくわひ	*	*
1586	もの、かはひ人、	*	*
1587	村原か計むて	*	*
1588	ぬちやてひつしつち、	貫キ引き	*
1589	此涯取付てよんむて	*	*
1590	幸としち	*	*
1591	問尋掛引段々、	*	*
1592	村原としも	村原ガ妻ン	*
1593	あひもおとらぬぬけた女、	*	アイモ [欠] 抜ギタ女
1594	いちやひしちやひ	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1595	色々様々の返事返答、	*	*
1596	扱も / \ 寄妙な事い (の加。一部筆が途切れている)	扱モ / \ 妙ナモノ	サテモ / \ 妙ナ
1597	きゝことやててん、	聞コトヤテン	*
1598	しゆたすか	*	*
1599	村原とじや	*	ダア村原ノアヤアヤ
1600	目口やは / \ と	*	*
1601	小しほらしひかあげ、	*	*
1602	ほんのむちや	*	*
1603	むしやものやすんつひてや、	*	モンヤスン付テヤ
1604	たあ按司や	*	*
1605	ちやむとうちほれて、	*	*
1606	目いろは折しち	*	*
1607	さらざらあと	*	*
1608	正気やないらぬ、	*	*
1609	終にや	*	*
1610	石川満納も追ぬけて、	*	*
1611	さつたる仕形もをかしや、	サツタル仕形ノ可笑	*
1612	やあ / \、	*	*
1613	ワか側にをらハ	我ガ側ニ居レバ	*
1614	をなちやらも、されん、	*	*
1615			島国ヨ揃テ
1616			崇メラシユモノ
1617	たう / \ 側に	*	*
1618	居よをれよ	*	*
1619	むていちやれハ、	*	*
1620	村(原)のあやゝ	*	*
1621	按司もすかぬ	*	*
1622	楽もすかぬむて	*	*
1623	つんはにむはしやん、	*	*
1624	谷茶や腹きりわき、	*	*
1625	此按司の言葉	*	ア、此按司ノ言葉
1626	きかならハそなた、	ナラバソニアタ。	*
1627	一刀にいのち	*	*
1628	つふちとらさ、	*	*
1629	むてしゆて	*	*
1630	おとちやん、	*	*
1631	わたの底まで	*	腹ノ底マデモ
1632			
1633	見済さつてをすや	*	*
1634	以の外、	*	*
1635	村原のあやゝ	*	*
1636	ちやあんなひらぬ	*	*
1637			
1638	殺す / \ むて	*	*
1639	すひちかゝたさ、	*	*
1640	たあ殺しゆるいきや	*	*
1641	そつともなひらぬ、	*	*
1642	むきやわらひしち	*	苦ガ笑シユテ
1643			
1644			
1645			
1646			
1647			
1648			
1649			
1650			
1651			



No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1652			
1653	もとよたる仕形や、	*	戻 [欠] 方ノ
1654	ほんの	*	
1655	をかしやおほさる、	*	ヲカシヤ、
1656			
1657			
1658	あはあ(高笑) / \	アハ / \	ハ、、、、、ア
1659	立羽失て	*	*
1660	どつとさんど\な事、	*	*
1661	あんしおれからや	*	*
1662	大首たうれて、	*	*
1663	みすく聞分て	*	*
1664	肝出ち	*	肝出ヂテ
1665	死しいきゆる命	*	死ノル我ガ命
1666	救てたはふれ / \むて、	*	*
1667	段々折たうれ	*	*
1668	しやつとちんや、	*	*
1669	村原としや	*	村原妻モ
1670	分別なもの、	分別ナンザノ	分別ナンザノ
1671	夫の仏事うちなち	*	*
1672	御返事上らの	*	*
1673	のふのくひのむて、	*	*
1674	たん / \と云廻ちやれハ、	*	*
1675	あゝ無蔵さ	*	ア、無蔵サヤ
1676	縁のかたかしち	*	*
1677	あかさくらさもわからぬ、	*	*
1678	ほんの誠に	*	誠ニ
1679	たんしひきつち、	*	*
1680			
1681			
1682			
1683			
1684			
1685			
1686			
1687			
1688			
1689			
1690			
1691			
1692			
1693			
1694			
1695			
1696			
1697			
1698			
1699			
1700			
1701			
1702	待と嬉しこと	*	*
1703	よろこひも大(ヲへ)さ、	*	*
1704	あた果報とつきやる	アタ果報ト付	*
1705	果報なワ身や、	*	*
1706			
1707			
1708			
1709			

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1710	なつくわひしち	*	*
1711	笑ひすひ / \	*	*
1712	躍羽しち、	*	*
1713	夜のねふしもねんたぬ、	*	*
1714			
1715			
1716			
1717	ひしやの指まで	*	*
1718	打かへし / \ しゆて、	折返シ / \ シユテ	折イ返シ / \ シユテ
1719	むな待しゆらむておもれハ、	*	ンナ待シユランデ思レエ
1720	ほんのをかしやどおほさる、	*	*
1721	あんしまた	*	*
1722	満納の子や	*	*
1723	度々御意見	*	*
1724	おんにゆけゆんむて、	御エユケユンデ	*
1725	のふ目もみしらぬ	何目ン見ラン	*
1726	かひほうかつたん、	*	*
1727	やつさ	*	ヤツサ主
1728	【命】(人)の命てらもの	*	*
1729	云んてとしゆる、	*	*
1730	水つかゆすよか	*	*
1731	あつまつさ	*	*
1732			
1733	おそろしい畜生人、	驚ルシ、畜生人	*
1734	また満納の子も	*	*
1735	満納の子、	*	*
1736	あて性もないらぬ	*	当テ相ヤ無ラス
1737	のふむて	*	*
1738	おれほとしや(ち)	ウレ程シヤガ。	オレ程シヤガ
1739	いか身からと	*	*
1740	やひんしゆすか、	*	*
1741	得と思てむてハ、	*	得ト思テ見レエ
1742	しゆかな / \ しい肝の	*	*
1743	あちしやつ所から、	厚サ所カラ。	*
1744	誠に満納の子とやゆる、	*	*
1745	村原	*	*
1746			
1747			
1748	一 むゝ士の本意	*	*
1749	世の中の手本、	*	*
1750	たんちゆ島国も	ダンジュ島国ノ	*
1751	沙汰よしゆたる、	*	*
1752	やあ / \	*	*
1753	大川のなし子	*	*
1754	あん前と二人や、	*	*
1755	いきやるいきなひに	*	イチヤル [欠] ナエニ
1756	なやいをゆか、	*	*
1757	泊井	*	*
1758	一 やつさしう、	*	*
1759	やあつかぬ、犬の	*	*
1760	縄切ちややうなもの、	*	*
1761	一方引なて	*	*
1762	たんちやまで	*	*
1763	をすんついてや、	*	*
1764	頓てぬけすまち	*	*
1765	うちかへされる筈、	*	*
1766	はひ嘶にほれて	*	*
1767	日やさかたひ、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1768	たうつさしう、	*	*
1769	戻てくるまで	*	*
1770	こまんまひらハ、	*	*
1771	又も嘶さうやあ	*	*
1772	たうしゆ、	*	*
1773	村原	*	*
1774	一 やあ / \	*	
1775	日も暮てをすか、	*	*
1776	あかと屋良むらに、	アガト屋良村へ	*
1777	いきやる事やとて	*	イチャル便アテ
1778	急ちいまひか、	*	*
1779	泊井	*	*
1780	一 なあやのふしやる人か、	*	*
1781	ちゆの用事問よすや、	*	*
1782	まあかひいかわん	*	*
1783	かもてい、	*	*
1784	村原	*	*
1785	一 細々の次第	*	*
1786	聞ほしやよあすか、	*	*
1787	いやゝまあむらの	*	*
1788	何かしかやゆら、	*	*
1789			
1790			
1791	泊	*	*
1792	一 むまやまあたやへるか、	ンマヤマアダカベルガ。	一 サレコマヤマアダカベルガ
1793			
1794	村原	*	*
1795			
1796			
1797	一 わ身や村原の	*	*
1798	ひやとやゆる、	*	比屋ドヤスガ
1799	泊	*	*
1800	一 あゝ	*	*
1801	さうひ拝んしやへらぬ	*	*
1802	あや前の御使	*	*
1803	西村の泊井たやへる、	*	*
1804	細々の次第	*	*
1805	おんにゆけやへら、	*	*
1806	来る十日に	*	来ル十日ニヤ
1807	思子引取て	思子引取	*
1808	北表の山路	*	*
1809	逃めしやいへる筈、	*	逃ゲミセエビイ事
1810			
1811	おのおこゝれ	*	*
1812	めしやうれむての	召リデノ	*
1813	御使とやゝへる、	御使ダヤベル。	御使ダヤビル
1814	村原	*	*
1815	一 あゝ天の引合か	*	*
1816	神の御助か、	*	*
1817	たう / \	*	
1818			ヤア泊
1819	けふからや互に	*	*
1820	心打合ち、	*	*
1821	身の上のことに	*	*
1822	気張て呉れ、	*	気張テ呉レヨ
1823	思子取戻ち	*	*
1824	かたきうちとらハ、	*	仇敵討取ラバ
1825	おの御取立や	其取立ヤ	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1826	あらんしゆもの、	*	*
1827	たう / \	*	*
1828	気張てくひれよ、	*	*
1829			
1830			
1831			
1832			
1833			
1834			
1835			
1836	同人	*	
1837	一 むゝ是に思つきやる	*	是ニ思ミ付チヤル
1838	事の又あゆん、	*	事ノ又アスヤ
1839	乙樽か思子	*	*
1840	取戻ちからに、	*	
1841	逃忍ふ時や	*	
1842	疑やなひらぬ、	*	
1843			奪取ヤイ逃ゲル
1844	谷茶あまやゝ	谷茶マヤゝ	*
1845	用心もすらぬ、	*	*
1846	あはてさま出て	*	*
1847	追掛る積り、	*	*
1848	おの時にまかち	*	オノ時ニ出テ
1849	おのときに出て、	*	オノ時ニ負カチ
1850	打かへす御運	*	*
1851	是に究たん、	*	*
1852	はあ肝要な時節	*	*
1853	おくれてや済ぬ、	*	*
1854	急ち立戻て	*	*
1855			
1856			
1857	手組すらに、	*	*
1858			
1859			
1860			
1861			
1862			
1863			
1864			
1865			
1866			
1867			
1868			
1869			
1870			
1871			
1872			
1873			
1874	原国兄弟	*	*
1875	一 なま出る二人や	*	*
1876	大川の按司の	*	*
1877	頭役しゆたる	*	*
1878	原国のひやか、	*	*
1879	兄子松千代	*	*
1880	弟子金松、	*	*
1881			
1882			
1883			

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1884			
1885	父親の事と	*	*
1886	按司添前みこし立、	按司添ノ前御腰立	按 [欠] 御腰立
1887	討死よてやり	*	*
1888	兼て聞及て、	*	*
1889			
1890			
1891	君親のかたき	*	
1892	打捕んともて、	*	
1893	ふたり命はまて	*	二人命 [欠]
1894	出立る内に、	*	[欠] チヨル内ニ
1895	思子の前と	*	*
1896	敵のいきとやひ、	*	*
1897	村原のひや釣ゆる	村原ノ比屋釣寄ル	村原ノヒヤ切り寄セル
1898	計得のあとて、	*	*
1899	御素立よてやり	*	*
1900	かたへへのあらは、	*	知ラセ部ノアレバ
1901			
1902			
1903			
1904			
1905			
1906			
1907			
1908			
1909	此事や急ち	*	*
1910	村原につけて、	*	*
1911	思子の前	*	*
1912	とりかへち	*	*
1913	敵討んともて、	*	*
1914	肝勇ミいさて	*	
1915			二人命ハマテ
1916	むちていきゆん、	*	*
1917	揚口説	原国口説	*
1918	一家の譲りの長刀を	*	*
1919	打取なをしてころ / \ と	*	追取り直ホシテクル / \ ト
1920	ころれ / \ と振立て	コルレ / \ ト振り立テ	*
1921	たゝきりひらちわつて入	*	*
1922	水もたまらぬ谷茶が	*	*
1923	首打落すその手並み	*	*
1924	当るものなき其威勢	*	*
1925	扱も / \ と一声に	*	*
1926	てきや味方の目をさます	*	*
1927	松千代	*	松寿
1928	一 やあ金松よ、	*	*
1929	急ち内いやひ	*	*
1930	村原のひや拝ま、	*	*
1931	金松	*	*
1932	一 たう / \	*	*
1933	急ちをかま、	*	*
1934			
1935	村原	*	*
1936	一 出様ちやる者や	*	一 是ヤ
1937	村原のひや、	*	*
1938	あゝ寔慈悲なさや	*	誠慈悲ナサヤ
1939	我按司の報ひ、	*	若按司ノ御果報
1940	天の引合か	*	
1941	神の御助か、	*	

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
1942	思はずに武運	*	思はずニ御運
1943	打重ね/\	*	*
1944	散々になとる	*	*
1945	人々も揃て、	*	*
1946	願たこと叶て	*	*
1947	誇らしやとあゆる、	*	*
1948			
1949			
1950	やあ/\、揃てをる人数	*	*
1951	出やうれ/\、	*	*
1952			総人数
1953			一 拝留ヤベテ
1954	村原	*	
1955	一 やあ/\、乙樽か兼て	*	*
1956			
1957	内通のことに、	*	*
1958	かたき討取ゆる	*	*
1959	御運廻り来て、	*	*
1960	けふのよかる日ニ	*	*
1961	立よ出ら、	*	ウチヨ出ラ
1962	原国兄弟	*	*
1963	一 こつきやうの時節	*	*
1964	おくれてや済ぬ、	*	*
1965	片時も急ち	*	*
1966	御供しやへら、	*	*
1967	村原	*	*
1968	一 たう/\、	*	*
1969	手賦の次第	*	*
1970	とつけ渡さ、	*	*
1971	やあ喜瀬の大屋子や、	*	ヤア喜瀬ノ大屋子
1972	敵の城元に	*	
1973			先立チヤイ
1974	忍て行をとて、	*	*
1975	乙樽か思子	*	*
1976	奪とやい逃る、	奪イ取ヤ逃ル	*
1977	御中途のけいこ	*	*
1978	念の入れ、	*	念ノ入レヨ
1979			喜瀬
1980			一 拝留ヤビテ
1981			村原
1982	又西川の子や、	*	一 西川ノ子ヤ
1983	頼てある加勢	*	*
1984	けふの真夜中に	*	*
1985	城の後ろの	*	城ノ南ノ
1986	山に伏よかくれ	*	山ニ伏シ隠レ
1987	谷茶あまやか	谷茶マヤガ	*
1988	城立出て、	*	城ヨ立出デテ
1989	北の山路	*	*
1990	いきつきゆる時分、	*	*
1991	一時に出て	*	*
1992	城の門閉て、	*	城ノ門閉デテ (他はミチテイ)
1993			
1994			
1995	大川の印旗	*	*
1996	差立ておけ、	*	*
1997			西川ノ子
1998			一 拝留ヤビテ
1999			村原

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
2000	やあ瀬底下こおりや、	*	瀬底下庫理ヤ
2001	北の山路の	*	*
2002	先にかくれとて、	*	*
2003	谷茶あまやか	谷茶マヤガ	*
2004			城ヨ立出ヂテ
2005	走通る後に、	*	
2006	道の口立ふさち、	*	
2007	山路真中	*	*
2008	走通る時分、	*	*
2009	螺や石ひや	*	*
2010	うちならし/\、	*	*
2011	島国も崩す	*	*
2012	気を立て、	*	*
2013	若谷茶あまやか	若カ谷茶マヤアガ	*
2014	逃戻る時や、	*	*
2015	唯並切に	*	*
2016	うちよ留れ、	*	*
2017			瀬底
2018			一 拝留ヤビテ
2019			村原
2020	原国の兄弟や、	*	*
2021	山道の中に	*	*
2022	伏よ隠れとて、	*	*
2023	先の石ひや螺を	*	*
2024	(オ十目) 凶に躍出て、	*	*
2025	双方のきんそ	*	*
2026	中に引包て、	*	*
2027	あまそな洩そな	*	*
2028	討よとめれ、	*	*
2029			原国兄弟
2030			一 拝留ヤビテ
2031			村原
2032	やあ泊井や、	*	一 泊ヤ
2033	先立ひ	*	*
2034	忍てむちおとて、	*	*
2035	乙樽か思子	*	*
2036	引取ひ逃て、	*	奪ヒ取ヤイ逃ゲテ
2037	半里程いかハ	*	*
2038	城走登て	城ニ走登テ	*
2039	逃忍て行す	*	盗ル取テ行チユス
2040	見付たんでやり、	*	*
2041	誠たん/\と	*	*
2042	高らかにつけて、	*	高々ニ告ゲテ
2043	谷茶石川	*	*
2044	さそへ出からに、	*	*
2045	北の山道に	*	*
2046	案内しやしやうれ、	*	案内ヨシヤウレ
2047			泊
2048			一 拝留ヤビテ
2049			村原
2050	やあやあ、	*	
2051	揃ておる人数	*	*
2052	慥にきけ、	*	*
2053	傍輩の中	*	*
2054	不和にともならハ、	*	*
2055	怪我事の基ひ	怪我ノ基ヒ	*
2056	事障りたひもの、	*	*
2057	腹の立まゝに	*	腹立ノ俣ニ

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
2058	短気するな、	*	*
2059	忿ひ / \、能々勘忍	エイ能々堪忍	エイ能ク / \ 堪忍
2060	題目とやゆる、	*	*
2061	惣人数	*	*
2062	一 拝む留やへて、	*	*
2063	村原	*	*
2064	一 はあ揃ておる人数	*	一 揃テ居ル人数
2065	肝合ちをれハ、	*	*
2066	誠勝チ軍	*	*
2067	疑やなひらぬ、	*	*
2068	たう / \ 手配の通	*	*
2069	油断するな、	*	*
2070	さあ / \	*	*
2071	急ち立向ら	*	*
2072	いそち打立に、	*	*
2073			
2074	乙樽思子引取逃走はや作田ふし	乙樽思子奪取逃走出羽作田ン節	*
2075	一 おそ風もすたしや	*	*
2076	風車とゝもに	*	*
2077	押つれて互に	*	心晴々ト
2078	遊ふうれしや	*	遊デ戻ラ
2079	乙樽	*	*
2080	一 思子取戻ち	*	一 思子守名付ケ
2081	すき間はからやひ、	透 (アキ) 間計ヒ。	明キ間伺ヤヒ
2082	むち入の人に	*	*
2083	ましり、出ん、	*	交リ出デラ
2084	鬼瀬		*
2085			
2086	一 鬼瀬たやへ	一 喜瀬タヤベル	一 喜瀬ダヤビル
2087	御供しやへら、	*	*
2088	泊井	*	*
2089	一 むゝにや時分たひらう	*	一 ム、ナア時分デエドウ
2090	城走のほて、	*	*
2091	谷茶 (石川)、誘ひたさう、	*	*
2092	され / \	*	*
2093	大川のあむ前や、	*	*
2094	思子引取て	*	*
2095	北表の山路	*	*
2096	逃めしやいへひたん、	*	逃ゲミセビタン
2097	谷茶	*	*
2098	一 あゝ扱も / \、	*	一 サテモ / \
2099			
2100	やあ石川のひや	*	*
2101	/ \、	*	*
2102	石川	*	*
2103	一 ふう	*	*
2104	谷茶	*	*
2105	一 大川のなし子	一 ヤア / \ 大川ノ産子	*
2106	盗取て逃る、	*	*
2107	急ち追つけて	*	*
2108	奪取らに、	*	*
2109	さあ / \		
2110	いそけ / \、		
2111	石川	*	*
2112	一 やあ / \、	*	*
2113	大川のなし子	*	*
2114	盗取て逃る、	*	*
2115	急ち立 (出) て	*	*



No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
2116	御供しやうれ、	*	*
2117			
2118			
2119			
2120			
2121			
2122			
2123			
2124			
2125	谷茶	*	*
2126			
2127			
2128			
2129	一 いや供列もいらぬ	*	*
2130	急け / \、	*	急ガ / \
2131			
2132			
2133			
2134	同人	*	*
2135	一 あれよ / \、	*	*
2136	忍(注、字は忍になっている) 義 忘却	恩義忘却	恩義忘却
2137	情切やから、	*	*
2138	乙樽	*	*
2139	一 やあ / \、	*	*
2140	村原よ始	*	*
2141	原国のなし子、	原国ガ産子	原国ガ産子
2142	思子、御迎に	*	*
2143	忍てきちをゆん、	*	忍デ着子居モノ
2144	此間の忍(注、字は忍になっ ている)に	此間ノ恩ニ	此間ノ恩ニ
2145	つける事たひもの、	*	告ゲル筈デモノ
2146	急ち立戻て	*	*
2147	命ちとるな、	*	*
2148	谷茶	*	*
2149	一 いや仕合とやゆる	*	*
2150	村原もともに、	*	*
2151	乙樽	*	*
2152	一 寄よらハよすれ	*	*
2153	切はたちとらさ、	*	打果チトラサ
2154	村原	*	*
2155	一 やあ谷茶	*	*
2156	欲悪の報ひ	*	*
2157	武運つきはて、	*	御運廻リ来テ
2158	村原【の】(か)前に	*	*
2159	廻てきちやめ、	*	*
2160			谷茶
2161			一 イヤ推参ナ事云ナ
2162	同人	*	
2163	一 いやぬかすまひ、	*	
2164	原国	*	*
2165	一 やあ谷茶、	*	*
2166	原国兄弟か	*	*
2167	待受てをす	待受テ居タス	待受ケテ居スヤ
2168	しつちをため、	*	知ラニ
2169	谷茶	*	*
2170	一 いや、ちゆつかぬもたらぬ	*	*
2171	すひさんなわらへ、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
2172	兄弟	原国兄弟北表ノ幕へ谷茶追入	
2173	一 ひやひやひ	*	
2174	同人	*	*
2175	一 谷茶あまやや	一 谷茶マヤ、	*
2176	原国兄弟か	*	*
2177	打取やへたん、	*	*
2178	村原	*	*
2179	一 兄弟の手柄	*	一 ア、兄弟ノ手柄
2180	ならふものをらぬ、	*	*
2181			残テ居ル者ヤ
2182			居ラニ / \
2183	瀬底	*	*
2184	一 残てをる人数	*	*
2185	降参たやへる、	*	*
2186	村原	*	*
2187	一 神妙なこと / \、	*	一 ア、神妙ナ事ヨ / \
2188	若按司	*	*
2189	一 やあ村原よ、	*	一 ヤア村原
2190	村原	*	*
2191	一 やあ思子	*	*
2192			
2193			
2194	東江ふし	*	*
2195	一 あげ夢かやゆら	*	*
2196	村原	*	*
2197	一 あゝ揮てなく事や	*	一 誠拝ヌシヤ
2198	ゆめかややへいら、	*	*
2199	過し按司添も	過世按司添シ	
2200	嬉しやめしやいら、	*	
2201	乙樽	*	*
2202	一 やあ / \、	*	*
2203	敵の島国や	*	*
2204	籠の鳥心、	*	*
2205	思て自由ならぬ	*	
2206			急ヂ急ガラヌ
2207	待兼るけふや、	*	*
2208	谷茶あまやあか	谷茶マヤガ	*
2209	生れ日てやり、	生レ日ニテヤリ	*
2210	世話にとひかかて	*	*
2211	気のかかぬあれハ、	*	*
2212	思子もり名付	*	*
2213	逃忍ふ後に、	*	逃忍ブ内ニ
2214	谷茶追掛て	*	*
2215	のかるかたなひらぬ、	*	*
2216	是迄よとめハ	*	*
2217	美御迎ニいまふち、	*	*
2218	けふ拝事や	*	誠拝ヌシヤ
2219	夢かやゆら、	*	*
2220			
2221			
2222			
2223			
2224	村原	*	*
2225			
2226			
2227			
2228	一 おもはずに兼て	*	*
2229	内通のあれハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島本	比嘉新三本
2230	おの手組しちおて	*	*
2231	美御迎しちやん、	*	美御迎モシチヤン
2232	やあ乙樽、	*	*
2233	女身の上に	*	*
2234	命ちふり捨て、	*	*
2235	敵の手ニ渡り	敵ノ手ニ渡テ	敵ノ手ニ渡テ
2236	思子取戻ち、	*	*
2237	あゝ末代の手本	*	世ノ中ノ手本
2238	沙汰とのこる、	*	*
2239		西川ノ子使	西川ノ子使
2240	一 され西川の子	*	*
2241	使たやへる、	*	*
2242			
2243	城乗取やひ	*	*
2244	おれ / \ の用意	*	オレ / \ ノ用心シチノ
2245	美御迎たやへる、	*	御迎ダヤビル
2246	村原	*	*
2247	一 一段な事よ / \、	一 一段ナ事 / \	*
2248	村原	*	
2249	一 あゝ思子も拝て	*	思子モ拝テ
2250	敵もうちすまち、	*	*
2251	かにある誇らしやゝ	*	今日ノ誇ラシヤノ
2252	ものにたとらぬ、	*	物ニタトラレメ
2253	たう / \、本の御城に	*	*
2254	美よんつかい拝ミやへら、	*	美御ツカヒシヤビラ
2255	若按司	*	*
2256	一 嬉しさや互に	*	一 嬉シサヤ村原
2257	踊て戻ら、	*	*
2258	村原	*	*
2259	一 うれしさや踊羽	*	*
2260	御供しやへら、	*	*
2261			ヤア喜瀬ノ大屋子
2262			長刀ヨ上ゲテ
2263			御先張シヤウレ
2264	しほらひふし	*	シヨライ (消カンチャイ) 節
2265	一 御代つきよめしやうち	*	*
2266	本の御城に	*	*
2267	おかけほさへめしやうれ	*	*
2268	玉の思子	*	*
2269		大川敵討終	
2270			
2271			
2272			

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1	大川敵討	大川敵討	忠孝婦人
2		八番 此時組踊札懸る	
3			
4		拍子木打候得者琴三味線手毎にて村原出る。敵討之時大鼓ひやうちやこ打、ぼらが吹く。	
5		谷茶の按司 元浜里之子	
6		石川のひや 上地里之子親雲上	
7		満納の子 今帰仁里之子親雲上	
8		下部 東風平里之子	
9		門番 宮里筑登之	
10		きやうちやこ持 護得久子	
11		大川の若按司 佐久真	
12		村原のひや 桃原里之子親雲上	
13		母 伊良波子	
14		妻 小禄里之子	
15		原国兄弟、兄松千代 大村里之子	
16		同 弟金松 嘉味田里之子	
17		喜瀬の大屋子 波平親雲上	
18		西川の子 玉城里之子親雲上	
19		瀬底下ごおり 宜野山里之子	
20		西川の子使 立津里之子親雲上	
21		泊 宮里筑登之	
22		きやうちよこ持 喜舎場樽金	
23		金の磨持 幸地真牛	
24	谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に金磨之龍之角飾有ル太刀刀茶色緞子羅陣羽織錦之飾有ル脚絆足袋大団金入錦之細帯	着付、谷茶の按司、髪金入錦之入道頭巾向に金磨之龍角飾有る刀差、緞子衣裳、羅陣羽織錦之飾有る脚絆、足袋、大団持。	
25	石川満名黒綸子入道頭巾向に金欄に而飾有ル黒細袷衣裳刀脚絆足袋	石川満納、髪黒縹子入道頭巾向に金欄にて飾有る黒さや袷衣裳、刀差、脚絆、足袋。	
26	門番黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳脚絆足袋差繩	門番、髪黒縮緬入道頭巾、黒さや袷衣裳、脚絆、足袋、差繩持。	
27	きやうちやく持黒木綿単衣裳脚絆足袋	きやうちやこ持、髪かもろう、黒さや袷衣裳、脚絆、足袋、高つぶり。	
28	若按司かしらひ板ゞ縮緬振袖単衣裳足袋風車こふすい	若按司、髪はあよをひいかしらへ、板ゞ縮緬振袖単衣裳、緋さや足袋、風車持。	
29	村原黒綸子入道頭巾向に金欄に而飾有ル黒紗綾袷衣裳綸子広袖羽織刀太刀足袋物賈之時黒綸子入道頭巾編笠細物加籠に入付陳賦之時羅陣羽織甲胸当脚絆金之磨	村原、髪黒縹子入道頭巾向に金欄にて飾有る黒紗綾袷衣裳、縹子広袖羽織、刀差、足袋、但中入より黒縹子入道頭巾、あみ笠かつぎ、物売かごに細物入付、かたげ出る。陣賦之時より羅陣羽織、甲かつぎ、胸当、脚絆、足袋	

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
30	原国兄弟長刀半向頭巾紕花青銅ネ 同衣裳脚胖足袋中入より入道頭巾 綿	原国兄弟、長刀持出る、髪半向頭 巾、緋縮緬裏緋さや衣裳、脚絆、 緋さや足袋、中入より黒縮緬入道 頭巾向に飾有る長刀持つ。	
31	村原母並妻かもし紫長巾金銀水引 熨斗作花助巾琉縫薄衣裳足袋妻谷 茶城江参候時女笠杖持帰り候時長 刀母黒地形付衣裳	村原母並妻、垂髪紫長巾作花差、 琉縫薄衣裳緋さや足袋。同人妻谷 茶城江参候時、女笠かつぎ、杖持 出る、控居候時笠はづし、且逃帰 候時、途中にて喜瀬の大屋子長刀 渡。	
32	西川の子瀬底下こおり西川の支 (ママ)喜瀬之大屋子四人黒西洋 布入道頭巾黒木綿単衣刀脚胖足袋	西川の子瀬底下こおり西川の子喜 瀬の大屋子、髪黒縮緬入道頭巾さ や袷衣裳、刀差、脚胖、足袋。	
33	泊井紕西洋巾黒木綿衣裳脚胖足袋 陣賦之時黒西洋入道頭巾	泊、緋縮緬巾にて、請八巻、玉色 染木綿衣裳、脚胖、足袋、陣賦之 時より黒縮緬入道頭巾、黒さや袷 衣裳、刀差。	
34	村原子紕縮緬衣裳	附、村原妻、子抱き出る。子、緋 縮緬衣裳、委細取控帳に相見得 候。	
35		村原のひや詞 橋掛より出る	村原
36	一 出様ちやるものや、	*	一 是や
37	大川の按司の頭役	*	*
38	村原のひや、	*	*
39	今帰仁の城	*	今帰仁城
40	御使にいきやひ、	*	*
41	戻る道すから	*	*
42	聞ハ腹立や、	*	*
43	あゝ谷茶あまやか	*	はあ谷茶あまやか
44	野心事巧て、	*	*
45	のゝ事も思ぬ	*	*
46	大川の按司の、	*	*
47	国々の按司部	*	*
48	討たんでやりしゆんで、	*	*
49	島々よ廻て	*	*
50	段々にいなち、	*	*
51	加勢頼入	*	*
52	軍押寄すて、	*	*
53		大川の城	大川の城
54		七重八重	七重八重
55		取囲みかこで、	取囲ミかこて
56	俄事やれは	*	*
57	分別もならぬ、	*	*
58	多勢(二無勢)	*	*
59	力及はらぬ、	*	*
60	按司や討死	*	*
61	思子の事や、	*	*
62	あゝ口惜や	*	*
63	敵の生捕やい、	*	*
64	按司の跡つかち	*	*
65	御素立よてやり、	*	*
66	欲悪なやから	*	*
67	慈悲の肝餓て、	*	慈悲の肝 [欠]
68	此村原か	*	[欠]
69	有難さ思て	*	[欠]
70	降参よすらハ、	*	[欠]
71	思子諸ともに	*	[欠]

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
72	打果さむての	*	[欠]
73	計得とやゆる、	*	[欠]
74	あゝ心れてとをゆる	*	[欠]
75	仕合しとやゆる、	*	[欠]
76	大川の御運	*	[欠]
77	世に残てをれハ、	*	[欠]
78	いきやしかな思子	*	[欠]
79	取戻ちからに、	*	[欠]
80	時節待受て	*	[欠]
81	敵討んともて、	*	[欠]
82	村原か命ち	*	[欠]
83	なからへてをゆん、	*	[欠]
84	あゝたうと	*	[欠]
85	神仏そろて	*	[欠]
86	助やひたはふれ、	*	[欠]
87		* * * *	[欠]
88	村原母妻子出羽散山ふし	*	[欠]
89	一 まことかや実か	*	[欠]
90	ワきもほれ / \ と	*	[欠]
91	ねさめおとろきの	*	[欠]
92	夢の心地	夢のこゝろ。	[欠]
93		乙樽詞	[欠]
94	一 三人の者や	*	[欠]
95	大川の按司の、	*	[欠]
96	頭役村原か	*	[欠]
97	母やとちなし子、	*	[欠]
98	谷茶あまやか	*	[欠]
99	野心事巧て、	*	[欠]
100	のゝ事も思ぬ	*	[欠]
101	大川の按司の、	*	[欠]
102	国々の按司部	*	[欠]
103	討んてやりしゆんて、	*	[欠]
104	島々よ廻て、	*	[欠]
105	色々に云なち、	*	[欠]
106	加勢頼入	*	[欠]
107	軍押寄て、	*	[欠]
108	按司添と共に	*	[欠]
109	村原のひやも、	*	[欠]
110	討死よてやり	*	[欠]
111	しらへのあれハ、	知らしべのあれば、	[欠]
112	夢現心	*	[欠]
113	肝もきもならぬ、	*	[欠]
114	無常の此世界や	*	[欠]
115	かにもあるひ、	*	[欠]
116	やああや前よ、	*	[欠]
117	なく泪ともに	なく泪と共に	[欠]
118	なひ【ほしやと】ほしやとあすか、	*	[欠]
119	忍ひ隠れとて	*	[欠]
120	一人子乙松【か】(や)、	*	[欠]
121	取素立 / \	*	[欠]
122	人になちからや(に)、	人になちからに	[欠]
123	親ふしの跡や	*	[欠]
124	継しほしやの、	*	[欠]
125	たう / \ 落る露泪も	*	[欠]
126	押はらへ / \、	*	[欠]
127	御気張よめしやうれ	*	[欠]
128	御供しやへら、	*	[欠]

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
129	母	*	[欠]
130	一 いらぬ年寄の	*	[欠]
131	長生ハしちをて、	*	[欠]
132	あけやうこの憂目	*	[欠]
133	むるか心気、	*	[欠]
134	迎ももろともに	*	[欠]
135	ならんてやりすれハ、	*	[欠]
136	朝夕手はなさぬ	*	[欠]
137	玉の乙松か、	*	[欠]
138	花のおもかほの	*	[欠]
139	名残立増て	*	[欠]
140	いきやしわすれゆか	*	[欠]
141	あの世までも、	*	[欠]
142	乙樽	*	[欠]
143	一 いらぬことめしやうな	*	[欠]
144	後れてや済ぬ、	*	[欠]
145			[欠]
146			[欠]
147	気にまかち三人	*	[欠]
148	諸共にならハ、	*	[欠]
149	村原か跡に	*	[欠]
150	残る者をらぬ、	*	[欠]
151	乙松よ素立	*	[欠] 素立
152	程程になさハ、	*	程々に [欠]
153	君親の事も	*	[欠]
154	すらな置め、	*	[欠]
155			たう / \ いらぬ事めしやうな
156			後り
157	たう / \ 御気張よめしやうれ	*	はりよめしやうれ
158	御供しやへら、	*	*
159	仲間ふし	村原母並妻なし子三人道行仲間ぶし	三人道行子持ふし
160	一 あたら人間に	*	*
161	生れやひをすか	*	*
162	やす / \ とくらす	*	*
163	ひまもなひらぬ	*	*
164	乙樽	*	*
165	一 のゝ罪のあたか	*	*
166	つれなさや三人、	*	*
167	母	*	*
168	一 あけやう忍はらぬ	*	*
169	心くら闇に、	*	*
170	道行なかんかりふし	*	子持ふし
171	一 ゆきまよひ / \	*	*
172	乙樽	*	
173	一 いく先やしらぬ	*	*
174	野山さくひらも、	*	*
175	なかんかりふし	なかんかりぶし(続き)	
176	一 たゝあしにまかち	*	*
177	乙樽	*	
178	一 かゝる方なひらぬ	*	
179	行来しら玉の、	*	
180	母	*	歌同ふし
181	一 露なたやあられ	*	露泪やあられ
182	雪もふり増て、	*	雪や降まさて
183			乙樽
184			一 掛るかたないらぬ
185			行来白玉の

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
186	子持ふし	*	母親
187	一 冬の山嵐や	*	一 冬の山嵐
188	あし本もつまて	*	*
189	肝もきもならぬ	*	*
190	あけやういきやなゆか	*	*
191	乙樽	*	*
192	一 御気張よめしやうれ	*	*
193	頓て夜もあける、	*	*
194			
195			
196			
197			
198			
199	母	*	*
200	一 肝お(う)すていきゆん	*	*
201	しはしやすま、	*	*
202	乙樽	*	*
203	一 やああや前よ、	*	
204	/ \、	*	
205	同人	*	乙樽
206	一 此子たちをれは	*	*
207	すと親のことも、	すと親の事や	姑親の事や
208	肝の俣ならぬ	*	*
209	急ちいそからぬ、	*	*
210	うつかつとしちをて	*	*
211	敵におひつかれ、	*	*
212	三人共憂め	*	*
213	むたよいかとても、	見だよりは迎も	*
214	此子ともすてゝ	*	*
215	身すからになれハ、	*	身すからにならハ
216	すと一人かことや	*	*
217	自由になゆん、	*	*
218		乙樽詞	
219	一 義理の道たひもの	*	*
220	思きらなゝゆめ、	*	*
221	やあ乙松よ、	*	*
222		/ \。	/ \
223	ワぬことる親に	*	*
224	なさつたる因果、	*	なされたる犬子(因果)
225	是までよたひもの	*	*
226	母の面かほも、	*	*
227	夢現心	*	*
228	起てむてよ、	*	*
229	あけやうあてなしの	*	あ[欠]や[欠][欠]てましの
230	のゝこともおまぬ、	*	のゝ事[欠]
231	哀れ楽々と	*	[欠]
232	ねるか心気、	*	[欠]
233			[欠]
234			[欠]
235			[欠]
236			[欠]
237	やあ乙松よ、	*	*
238	誠後生あらハ、	*	
239	父親の側に、	*	
240	先立ひむちをて	*	[欠]むちよて
241	まちやいをれよ、	*	*
242			乙樽
243	やあ乙松	*	やあ乙松よ。



No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
244	天の引合しに	*	*
245	情けある人の、	*	*
246	素立やひ呉らハ	*	*
247	主人親ふしの、	*	*
248	跡方ハ頼て	跡方や頼て	跡方や
249	尋ねやひ呉れよ、	*	*
250			
251			
252			
253			
254	あゝた【ち】(ウ)と、	あゝたうと。	*
255	神佛そろて	*	*
256	見守やひたはふれ、	*	*
257	思切ひをすか	*	*
258	誠つらむては、	*	*
259	我肝忍はらぬ	*	
260	やみになゆさ、	*	
261	東江ふし	*	*
262		あゝけ	
263	一 ワきもしのはらぬ	*	*
264	闇になゆさ	*	*
265	乙樽	*	*
266	一 やああや前よ、	*	*
267	頓て喜名村や	*	*
268	たよひ島たひもの、	*	*
269	御気張よめしやうれ	*	*
270	御供しやへら、	*	*
271	やああや前よ、	*	*
272	/、	*	*
273	母	*	*
274	一 肝もきもならぬ	*	*
275	しはし休ま、	*	*
276	村原	村原のひや 橋掛より出る	*
277	一 是や村原のひや、	*	*
278	義理のませ垣に	*	*
279	かこまれてワ身の、	*	*
280	浅ましや露の	*	*
281	命ちやすか、	*	*
282	思子取戻す	*	*
283	念願のあとて、	*	*
284	ねふる夜もねらぬ	*	*
285	忍てまわる、	*	*
286			同人
287	こねや夜深さに	こねや夜深く	*
288	童へ鳴声や、	*	*
289	いきやしちやる事か	*	*
290	立寄ひむたに、	*	立寄ひ見たに。
291			
292	やあ乙松、	*	*
293	あゝ身にかへて朝夕	*	*
294	撫素立しゆたる、	*	撫素立しきやる。
295	この一人子やすか	*	*
296	ミたれ世になれハ、	*	*
297	哀れこのなひに	*	*
298	なすか心気、	*	*
299	母と乙樽も	*	*
300	行来しら玉の、	*	*
301	露霜と共に	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
302	なたらとめハ、	*	*
303	あゝ浅ましや、	*	*
304	いや、無常の此世界の	*	*
305	習ひやしらね、	*	*
306	おくれてやすまぬ	*	*
307	先にかゝら、	*	*
308	乙樽	*	*
309	一 やああや前よ、	*	*
310	/、	*	*
311	村原	*	*
312	一 やあ/、	*	*
313	かにある雪降に	*	*
314	こかと山道に、	*	こか [欠]
315	いきやしちやる事か	*	[欠] しちやる事が
316	二人の者や、	*	[欠]
317	乙樽	*	*
318	一 首里からとやすか	*	*
319	旅の上の習や、	*	*
320	村原	*	*
321	一 やあ母親	*	*
322	やあ乙樽	*	*
323	母	*	*
324	一 やあ村原、	*	*
325	按司添とゝもに	*	*
326	なる筈の者の、	*	*
327	主の恩忘ひ	*	君の恩忘れ
328	孝の道しらぬ、	*	*
329	のゝつらのあとて	*	*
330	とまいてきちやか、	*	*
331	浅ましや村原	*	*
332	命のあたらしやひ、	*	*
333	妻子のなさけ	*	*
334	しのはらぬあため、	*	*
335	村原	*	*
336	一 あゝめしやいること、	*	*
337	按司添と共に	*	*
338	なる筈とやすか、	*	*
339	思子の事と	*	思子の事や
340	敵の生捕やい、	*	*
341	村原も共に	*	*
342	打果さむての、	*	*
343	分別ハ出ち	*	*
344	いこと葉ハ飜て、	*	*
345	過し按司かなし	*	*
346	跡継の思子、	*	*
347	御素立よてやり	*	*
348			
349	語ひへのあれハ、	*	*
350	いきやしかな思子	*	*
351	引取んともて、	*	
352			取戻ちからに
353			時節待請て
354			敵討んともて
355	村原か命ち	*	*
356	なからへてをゆん、	*	*
357	母	*	母親
358	一 今のことやれハ	*	*
359	誇らしやとあゆる、	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
360	肝にきもそへて	*	*
361	念の入れよ、	*	*
362	村原	*	*
363	一 村原かいきち	*	*
364	此世界にをとて、	*	*
365	思子取戻ち	*	*
366	敵討な置め、	*	*
367	あゝ思ひ世に残ち	*	思ひ世に残ち
368	死やならぬ、	死やなやべらぬ	*
369	やあ乙樽、	*	*
370	いきやし乙松	*	*
371	すてゝあたか、	*	*
372	母	*	
373	一 咲出ゆる花ハ	*	
374	ワ身に思かへち、	*	
375	のゝ肝のあとて	*	
376	捨てあたか、	*	
377	乙樽	*	*
378	一 大川の城	*	*
379	仕合の時に、	*	*
380	按司添と共に	*	*
381	討死によ(て)やり、	*	*
382	語ひへのあれハ、	*	*
383	沙汰よ聞及て、	*	*
384	三人逃忍て	*	*
385	こまゝてやきやすか、	*	こままで [欠]
386			
387			
388	親かなし事や	*	[欠]
389	なれぬ山道の、	*	[欠]
390	さくひらのつかれ	*	さくひらの疲 [欠]
391	足本もつまで、	*	[欠]
392	急ちいそからぬ	*	[欠]
393	うつかつとしちをて、	*	*
394	敵に追つかれ	*	*
395	三人共憂目、	*	
396	むたよいか迎も	*	*
397	哀れなく / \ も、	*	あはりなく / \ に
398	すとおやのために	*	*
399	すてゝあたん、	*	*
400	村原	*	*
401	一 あゝ此上とやすか	*	*
402	誇らしやとあゆる、	*	*
403	またも世に出る	*	*
404	運のめくひ	*	*
405	乙樽	*	*
406	一 やあ / \、	*	*
407	思子の事や	*	*
408	御格護よてやり、	*	*
409	聞ハ、嬉しさや	*	*
410	仕合とやゆる、	*	*
411	我身に思つきやる	*	*
412	事の又あすや、	*	*
413	あん前に名付	*	あん前にやつれ
414	忍てむちからに、	*	*
415	命救てたはふれてやり	*	*
416	誠たん / \ と、	*	*
417	色々にいやは、	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
418	欲悪な谷茶	*	*
419	巧てをることの、	*	*
420	便りはしともて	*	*
421	疑ひやなひらぬ、	*	*
422	抱(かげ一)置積り、	*	抱置る積り
423	我肝落着やい	我肝落付ちゆて、	我肝落着て
424	心ゆるさしやい	*	*
425	思子守なつけ	*	*
426	引とやひきやへら、	*	*
427	村原	*	*
428	思子為てやり	*	*
429	女身ハひちゆひ、	*	*
430	敵の手にやらす	*	*
431	事やならぬ、	*	*
432	乙樽	*	*
433	一 女又やても	*	*
434	男またやても、	*	*
435	思子のために	*	*
436	肝やひとつ、	*	*
437	乙樽原(ママ)	村原詞	村原
438	一 肝の上の事や	*	*
439	おの筈とやすか、	*	*
440	気ニまかちすにゆめ	*	*
441	義理のならひ、	*	*
442	乙樽	*	*
443	一 義理の道てすも	*	*
444	君親の為に、	*	*
445	肝盡す外の	*	*
446	事やなひさめ、	*	*
447	村原	*	*
448	村原か生ち	*	*
449	此世界にをとて、	*	*
450	思子為てやり	*	*
451	義理の道曲て、	*	*
452	女あてなしハ	*	*
453	敵の手にやらち、	*	*
454	末代の恥辱	*	あゝ末代の。恥辱
455	面目やきやしゆか、	*	*
456	曾て此事や	*	*
457	ゆるす事ならぬ、	*	*
458	乙樽	*	*
459	一 いちもやく立ぬ	*	*
460	事す又やらハ	*	事よまたやらハ
461	わない、女やても	*	*
462	谷茶あまやに、	*	*
463	一刀も掛て	*	*
464	討死はすらな、	討死はすらに。	*
465	徒に命ち	*	[欠]
466	なからへてのしゆか、	*	存命てのしよ [欠]
467	たう / \ゆるちたはふれ、	*	たう / \よるち [欠]
468	母	*	母親
469	一 あゝ事あらくするな	*	一 やあ / \。事あら [欠]
470			
471	やあ乙樽、	*	[欠]
472	思子為やれハ	*	*
473	おの筈とやすか、	*	*
474	事あらくしちや	*	事あらく [欠]
475	仕損しの基ひ、	*	[欠] 損しの基へ

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
476	思子までかゝて	思子まで掛けて、	*
477	大事あらんしゆもの、	*	*
478	細々とまたく	*	*
479	はからやひくひれよ、	*	*
480	乙樽	*	*
481	一 肝ぬるさしちをて	*	*
482	若か谷茶か	*	*
483	手段引替ち	*	*
484	思子の上に、	*	*
485	あらし聲のあらハ	*	*
486	願てをること、	*	*
487	思てやくたゝぬ	*	*
488	あたとなゆる	*	*
489	村原	*	*
490	一 やあ乙樽、	*	*
491	女只ひちゆひ	*	*
492	敵の手にやらす、	*	*
493	きもの忍はらぬあてと	*	*
494	断やしちやる、	*	いちやる
495	今の心さし	*	*
496	いちも盡さらぬ、	*	*
497	誠村原か	*	*
498	とちの本意、	*	*
499	此外に手段	*	*
500	分別もならぬ、	*	*
501	たう／＼	*	*
502	念に念添て	*	*
503	気張て呉れよ、	*	*
504	乙樽	*	*
505			
506	一 思たこと叶て	*	*
507	ほこらしやとあゆる、	*	*
508	命のあるかきり	*	*
509	こゝろつくさ、	*	*
510	母	*	*
511	一 やあ乙樽、	*	*
512	思子為てやり	*	*
513	命ちふりすてゝ、	*	*
514	今のこと云すや	*	*
515	誇らしやとあすか、	*	*
516	行先の定め	*	*
517	さたまらぬあれハ、	*	*
518	あけやう思盡す	*	*
519	かたもなひらぬ、	*	*
520	乙樽	*	*
521	一 人の願事の	*	*
522	あたに又なゆめ、	*	*
523	こゝろ安す／＼と	*	*
524	御待めしやうれ、	*	*
525	村原	*	*
526	一 やあ乙樽、	*	*
527	あらく掛引も	*	*
528	有積りたひもの、	*	*
529	腹立ぬことに	*	*
530	心しつめとて、	*	*
531	いこと葉に應し	*	*
532	取廻し／＼、	*	*
533	請答よふ	請返答能う	受請答よう

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
534	了簡やすれ、	了簡やすれよ。	*
535	乙樽	*	*
536	一 我胸に留て	*	一 我かもねに留 [欠]
537	ワか肝に染て、	*	我かき [欠]
538	仰す事まゝに	*	[欠]
539	念のいらに、	*	ねんの入ら [欠]
540	村原	*	*
541	一 若か事洩て	*	*
542	ならぬおの涯や、	*	*
543	別に計とる	*	[欠]
544	手段又あもの、	*	*
545	後れらぬことに	*	*
546	切巧てをる次第、(切は見せ消ちか)	巧でをる次第	*
547	親子此三人	*	*
548	隠とる段、	*	*
549	一々細々	*	*
550	白状やすれ、	*	*
551	あゝ繰返し / \	*	*
552	又事とやすか、	*	*
553	互に面目や	*	*
554	失なワぬことに、	*	*
555	思子引とゆる	*	*
556	要目ところ、	*	*
557	急ひ能々分別	*	*
558	題目とやゆる、	*	*
559	やあ乙樽、	*	*
560	やく立ぬ我身の	*	*
561	とじなたる因果、	*	*
562	あゝ口惜や、	*	*
563			
564			
565			
566			
567			
568			
569			
570			
571			
572			
573	乙樽	*	*
574	一 たとひ事洩て	*	*
575	生殺しされててやり、	*	*
576	思子為やれは	*	*
577	残る事なひらぬ、	*	*
578	心安す / \と	*	*
579	極楽とやゆる、	*	*
580	村原	*	*
581	一 あゝいふる事よきけハ	*	一 [欠] 云る事よ聞ハ
582	肝にひし / \と、	*	*
583	むかし物語り	*	*
584	聞ゆることに、	*	*
585	よの中の手本	*	*
586	沙汰と残る、	*	*
587	乙樽	*	*
588			
589			
590			

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
591			
592			
593	一 此子乙松や	*	*
594	御素立めしやうち、	*	*
595	人なゆることに	*	*
596	計やひたはふれ、	*	*
597	村原	*	*
598	一 念遣するな	*	*
599	おの素立しゆもの、	*	*
600	すと子の事や、	*	*
601	気遣するな、	*	*
602	乙樽	*	*
603	一 やああや前よ、	*	*
604	頓てワか思子	*	*
605	をかてこんしゆもの、	*	*
606	肝願よしちをて	*	肝の願しちをて
607	御待めしやうれ、	*	*
608		母詞	母親
609		義理の道だいもの、	一 義理のみちやれは
610		止めてとめらゝぬ。	留てとめらゝん
611	母言葉并伊野波ふし	*	
612	一 義理のみちやれハ	義理の道だいもの、	
613	留てとめららぬ、	*	
614	乙樽	*	*
615	一 よ所しれ(て)からや	*	*
616	大事あらんしゆもの、	*	*
617	急ち立戻て	*	*
618	まちやひいまふれ、	*	御待めしやうれ
619	伊野波ふし下句	*	母親
620	一 のかすとくかにある	*	一 ぬかすとくか [欠]
621	夢の世界や	*	[欠]
622		* * * *	
623			仲間ふし
624			一 是迄か [欠]
625			[欠]
626			[欠] 出立や
627			定くれしや
628	乙樽道行金武ふし	*	乙樽道行野波ふし
629	一 胸にものおめハ	*	*
630	歩む道ほども	*	*
631	覚らすにつきやさ	*	*
632	本の城	*	*
633	乙樽	*	*
634	一 覚らすに谷茶	*	*
635	城元につきやん、	*	*
636	物めつめしちをて	*	*
637	案内よすらに、	*	*
638			同人
639	やあ / \、御取次頼ま	*	*
640	ものしられしやへら、	*	*
641			
642	門番	*	*
643	一 はあ / \ 無作法 / \、	*	一 はあ無沙法 / \
644	内原にいきやひ	*	*
645	御取次しやうれ、	*	*
646	乙樽	*	*
647	一 やあ / \、	*	一 やゝ
648	我身や大川の	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
649	思子虎千代が、	*	*
650	乳親とやゆる	*	*
651	守あんとやゆる、	*	*
652	大川の城	*	大川の按司の
653	仕合の時(に)	*	*
654	あへてさま逃て	*	*
655	かくれやひをたん、	*	*
656	かゝる方なひらぬ	*	*
657	すかる方なひらぬ、	*	*
658	聞ハ御慈悲あて	*	*
659	守素立思子、	*	*
660	御素立のあんで	*	*
661	音信よをかて、	*	*
662	思子諸共に	*	*
663	命つかんともて、	*	*
664	よしれやひをもの	*	*
665	頼て御情に、	*	*
666	御取次めしやうち	*	*
667	助やひ給ふれ、	*	*
668	門番	*	*
669	一 はあ云ることよ聞ハ、	*	一 あゝ云事よ聞ハ
670	無蔵なもの、	*	無蔵な者さらめ
671	たう / \、むまに	*	*
672	待ひをれよ	*	*
673	/ \、	*	
674	同人	*	
675	拝れよめしやいん	*	
676	あれに居やうれ、	*	
677	谷茶	*	*
678	一 やあ / \、	*	*
679	大川のなし子	*	*
680	乳母てる女、	*	*
681	いきやあれはすにゆか	*	*
682	考てみやうれ、	*	*
683			
684			
685	満納	*	*
686	一 され按司かなし、	*	一 やあ按司かなし
687	大川のなし子	*	*
688	引取んてやり、	引取んてやりの	*
689	村原のひやか	*	*
690	計得とやゆる、	*	*
691	あゝあれほどの村原も	*	はああれ程の「欠」
692	運の末なれハ、	*	「欠」の末なりハ
693	わにやかかけの内に	*	わ「欠」
694	首いれる仕形、	*	「欠」
695	こまや楽々と	*	「欠」 / \と
696	足たくてをとて、	*	ひしや「欠」
697	村原のひやか	*	「欠」
698	計事便て、	*	計事便
699	村原からめゆる	*	*
700	時節きやあへたん、	*	時節ちや「欠」
701	扱々御果報	*	*
702	急い事たやへる、	*	急ひ事とやよる
703	谷茶	*	*
704	一 一段な事よ	一段な事、	一 一段な事
705	/ \、	/ \。	/ \
706	やあ石川のひやゝ、	*	*



No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
707	へつに了簡の	*	*
708	あひかしゆら、	*	*
709	石川	*	*
710	一 満納いやれること、	*	*
711	一々尤	*	*
712	同意たやへる、	*	*
713	谷茶	*	*
714	一 扱も/\、	*	*
715	分才もしらぬ	*	*
716	此按司に向て、	*	*
717	すひさんなやから	*	*
718	ゆるす事ならぬ、	*	*
719	急ち引出ち	*	*
720			生責のたくひ
721	責のあるかきり、	*	*
722			生責よしやうれ
723	せめて有筋	*	
724	白状よしめれ、	*	
725	石川	*	満納
726	一 拝むちゆめやへて、	*	*
727			同人
728	やあよしれとる女	*	*
729	出す/\、	*	*
730			満納
731			拝ん留やひて
732	下部	*	
733	一 さあ/\	*	一 やあ/\
734	御前寄て拝め	*	御前寄て拝めやうれ
735	御側よて拝め、	*	
736			/\
737		同人詞	同人
738		たう/\、むまに	さあ/\
739		居やうれ/\。	居やうれ/\
740	満納	*	*
741	一 やあ女、	*	*
742	得と肝ゐして	*	*
743	慥にきけ、	*	*
744	おかたちか巧ミ	*	いかたちか巧ミ
745	たくてをる事や、	*	*
746	尋らぬ先に	*	*
747	合点とやゆる、	*	*
748	直におの科に	*	*
749	当る筈やすか、	*	*
750	科もかんすらぬ	*	*
751	責もさぬことの、	*	*
752	御慈悲ある天の	*	*
753	御情のあとて、	*	*
754	村原か行衛	*	*
755	おんにゆけるやらハ、	*	*
756	巧てをる事の	*	*
757	おの科もゆるち、	*	*
758	島知行もとらち	*	*
759	引はらふしまても、	*	*
760	おの御肝きやへや	おの御肝きやさや	*
761	ある筈よたひもの、	*	*
762	御情の御肝	*	*
763	ミスく取請て、	*	*
764	肝われて實に	*	肝[欠]

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
765	おんにゆけやうれ、	*	おんによけ [欠]
766		乙樽	
767		.....	
768	同人	*	*
769	一 あゝ好てこのまらぬ	はあ、好でこのまらぬ	一 はあ好て好 [欠]
770	天運のめぐり、	*	[欠]
771	勘違するな	*	[欠]
772	/、	*	[欠]
773	乙樽	*	*
774	一 村原か事や	*	*
775	討死かしちやら、	*	*
776	音信もなひらぬ	*	音信 [欠]
777	沙汰もきかぬ、	*	[欠] も聞ん。
778	女あてなしの	*	*
779	のゝ思のあゆか、	*	のゝ思のあよか
780	命のつれなさに	*	*
781	按司かなし天の	*	*
782	十百歳のおかほ	*	*
783	かめ願よしちをて、	*	*
784	御情にワ身の	*	*
785	露程の命ち、	*	*
786	いきやしかなともて	*	*
787	よしれやひをもの、	*	*
788	色分てたはふれ	色分ちたばうれ、	*
789	天の御肝、	*	*
790	満納	*	*
791	一 いや/、	*	*
792	かくしゆらハ隠す	*	*
793	つゝミゆらハ包め、	*	*
794	肝のあくまゝや	*	*
795	責の有限り、	*	*
796	おの責に当て	*	*
797	聞筈とやすか、	*	聞筈とやよる
798	責られてからに	*	*
799	おんにゆけるやらハ、	*	*
800	科の上に科や	*	*
801	重ならんしゆもの、	重ねらんしゆもの、	*
802	せめららぬうちに	*	*
803	おんにゆけやうれ、	*	*
804	乙樽	*	*
805			一 天のむきやたら
806			殺されてをらぬ
807			なさけ切やから
808			大川の按司に
809			頼も方ないらぬ
810			村原か為に
811			包も方ないらぬ
812			わ身のこゝろ
813	一 のゝこともおまぬ	*	
814	女あてなしに、	*	
815	罪科よかけて	*	
816	うきくれしやしめゆすや、	*	
817	村原かしワさ	*	
818	恨めてとをゆる、	*	
819	のよて身にかへて	*	
820	実よかくしやへか、	*	
821	此事やつく/と	*	
822	おもてたはふれ、	*	

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
823	満納	*	*
824	一 勘違するな	*	*
825	不勘ともするな、	*	*
826	殺される科も	*	*
827	兼てしりなけな、	*	*
828	責の上(に) 向て	*	*
829	偽やならぬ、	*	*
830	有筋にいちゆて	*	*
831	殺される者も、	*	殺される者
832	昔から今に	*	*
833	数やしらぬ	*	*
834	乙樽	*	*
835	一 村原か行衛	*	*
836	夢程もしらは	*	*
837	御尋の先に	*	*
838	おんにゆける積り、	*	*
839	のゝおめのあゆか	*	*
840	ワか命の外に、	*	*
841	のゝ思のあとて	*	*
842	隠ちをゆか、	*	*
843	御言葉に應し	*	*
844	たゝこともないらぬ、	たらことも無いらぬ	た [欠]
845	御返事御返答に	*	御返事御 [欠]
846	つまでをゆん、	*	つまで [欠]
847	石川	*	*
848	一 はあ勘違するな	*	一 はあ勘違 [欠]
849	とんなこといふな、	*	[欠]
850	縦命限り	*	[欠]
851	あらわすなてやり、	*	*
852	堅談合も	*	*
853	しちあたんてやりか、	*	しち [欠] いか
854	満納いやれること	*	*
855	責のねつられめ、	*	*
856	たう / \、	*	*
857	今のこと細く	*	*
858	真心にいやれは、	真実に言やれす、	真心よ言すん
859	百すてやあらね	*	*
860	美拝をかてからに、	*	*
861	みすく取請て	*	*
862	包ますにいやうれ、	*	*
863	あゝ百果報や目の前	*	*
864	引よすてをとて、	*	*
865	人の為にあたら	*	*
866	のちとてやすまぬ、	*	*
867	人間の願の	*	*
868	のゝおめのあゆか、	*	此外にあよめ
869	思てやく立ぬ	*	*
870	村原もすてゝ、	*	*
871	天道のなし子	*	*
872	真肝うちわれて、	*	*
873	生れたるしるし	*	*
874	楽よすれよ	*	*
875	/ \、	*	*
876		乙樽	
877		.....	
878	石川	*	*
879	一 さあ / \	*	*
880	おんにゆけやうれ	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
881	/、	*	*
882	乙樽	*	*
883	一 村原かなんと	*	*
884	やから者やても、	*	*
885	網の魚心	*	*
886	只ひちゆいものゝ、	*	*
887	こへな御城に	*	*
888	弓引のなゆめ、	*	弓引のなよめ
889	たとひ生残て	*	*
890	かたすみにをても、	*	*
891	天の御定の	*	*
892	くる間の命ち、	*	*
893	海山にかゝて	*	*
894	つくまでとやゆる、	*	次までとやよる
895	あゝ按司かなし御始	*	按司かなし御始
896	石川と満納、	*	*
897	島国よ豊む	*	*
898	人々とやすか	*	*
899	村原のひやゝ	*	*
900	鬼のことめしやうち	*	鬼のことしちよそ
901	いきやしおれほども	*	*
902	おとろしやよめしやいか、	*	*
903	谷茶	*	*
904	一 むゝ尤な不審	*	*
905	尤な事、	*	*
906	やあ女、	*	*
907	慈悲情尽ち	*	*
908	大川のなし子、	*	*
909	素立やひあすか	*	*
910	もしか村原か、	*	*
911	いらぬ義理立て	*	*
912	謀叛企(夕)ハ、	*	*
913	大川のなし子	*	*
914	生て置ならぬ、	*	*
915	(誠心實も)	*	*
916	あたになるやれば、	*	*
917	村原も共に	*	*
918	素立ほしやあてと、	*	素立ふしやあてと
919	細く問尋ね	*	*
920	しゆることよたひもの、	*	しゆる事よ [欠]
921	守子為ともて	*	もり子為 [欠]
922	かくさずに語れ、	*	[欠]
923	満納	*	*
924	一 いや、此上に又も	*	一 此上に又も
925	隠しともしゆらハ、	*	かく [欠]
926	又事もいらぬ	*	[欠]
927	直に引立て、	*	*
928	すねの砕けらハ	*	*
929	胸腹よまでも、	*	[欠] よまてん
930	命の有限り	*	*
931	はさみきらしゆもの、	*	*
932	たうおのこゝれしちをて	たう / 、おの心得しちをて	たう / おのこゝれしちよて
933	おんにゆけやうれ、	*	*
934	ゑひ差繩持ち	*	やあ差繩持ち
935	近く寄てをとて、	近く寄てからに、	*
936	又も隠しゆらハ	*	*
937	屹度こむせめれ、	*	*
938	下部	*	案内聞

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
939	一 さあ/\	*	*
940	おんにゆけやうれ	*	*
941	/\、	*	*
942		乙樽	
943		.....	
944		下部詞	
945	後てやすまぬ	*	*
946	急ちおんにゆけやうれ、	*	急ちおんによけれ
947			
948	満納	*	
949	一 いや、おなためもしらぬ	*	*
950	こゝてをゆめ、	*	*
951		乙樽詞	乙樽
952	一 のゝこともしらぬ	*	*
953	女あてなしに、	*	*
954	段々の御間こと	*	*
955	御難儀とやゆる、	*	*
956	いちもやく立ぬ	*	*
957	是非に及はらぬ、	*	*
958	誠正直の	*	*
959	我胸の内や、	*	我むねの内
960	責てせめころち	*	*
961	あとに御目掛れ、	*	*
962	近さ拝まれる	*	*
963	天の下をとて、	*	*
964	偽のなゆめ	*	*
965	人の肝の、	*	*
966	満納	*	*
967	一 はあ、つらつきも替て	*	*
968	悪魔やな女、	*	*
969	夫喰る悪生	*	*
970	切支丹、	*	*
971	鬼むちやる人の	*	*
972	此世界にをゆめ、	*	*
973	是と鬼やゆる	*	*
974	さあ/\	*	*
975	屹度こむ責れ、	*	急ちこんしめれ
976	下部	*	案内聞
977	一 せめられるごうの	*	*
978	深さある女、	*	*
979	いきやか/\、	*	*
980	乙樽	*	*
981	一 ちりあくた心	*	*
982	数ならぬワ身の、	*	*
983	殺される事や	*	*
984	露程も思ぬ、	*	*
985	思切ひをすか	*	*
986	のゝこともしらぬ、	*	*
987	女あてなしは	*	*
988	鬼無理にせまて、	鬼無理にしめて、	鬼無理に責 [欠]
989	責殺す罪の	*	[欠] 罪の
990	わかために廻て、	*	わか [欠]
991	按司かなし上に	*	按司そへ [欠]
992	いきゆらたひいとめは、	*	[欠]
993	死ゆ/\も是や	*	死よく [欠]
994	気にかゝていきゆん、	*	[欠]
995	谷茶	*	*
996	一 はあ云る事よ聞ハ	*	一 あゝ云る事よ聞ハ

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
997	理りとやゆる、	*	*
998	縄も掛らすに	*	な [欠]
999	責もさぬことに、	*	*
1000	義理の上の嘯	*	*
1001	あらんしゆもの、	*	*
1002	たう / \	*	
1003	せまである縄も	しめてある縄も	*
1004	急ちときゆるす、	*	ふときとらす
1005			案内者
1006			一 拝留やへて
1007	乙樽	*	[欠]
1008	一 あゝたうと、	*	*
1009	此御恩たうとさや	*	御恩たうとさや
1010	女身のわぬも、	*	*
1011	よしれやひをれハ	*	*
1012	若か村原か、	*	*
1013	生残てをとて	*	*
1014	思子御素立の、	*	*
1015	事よとも聞ハ、	*	*
1016	我身よりも増て、	*	*
1017	時日移さすに	*	*
1018	うち笑ひ / \、	*	*
1019	よしれらな置め	*	*
1020	人の肝の、	*	*
1021	御慈悲御情と	*	*
1022	ワ御主かなし、	*	*
1023	百とまでちやうわれ	*	*
1024	拝てすてら、	*	*
1025	満納	*	*
1026	一 いや、からすよも女	*	*
1027	人やたまそとも、	*	
1028	いきやし此満納	*	
1029	たまかしのなゆか、	*	
1030			なまくちのやから
1031	そんちむち牢に	*	*
1032	たゝちむちおけ、	*	*
1033	谷茶	*	*
1034	一 いや / \、	*	*
1035	あたまをてものや	*	*
1036	念入なしちをて、	*	*
1037	仕損してからや	*	*
1038	悔てやく立ぬ、	*	*
1039	思案より外の	*	思案故外の
1040	事やなひさめ、	*	*
1041	たう / \	*	*
1042	事急きするな	*	*
1043	短気するな、	*	*
1044		(谷茶独語)	谷茶
1045	扱も / \、	*	*
1046	高程もおちやて	丈程もおきやて、	*
1047	目口やは / \と、	*	*
1048	雪のしらはくき	*	雪の白ら第口
1049	物云さし聞ハ、	*	*
1050	ごいんから替て	*	*
1051	花の清ら女、	*	*
1052	見れはみる毎に	*	*
1053	おめと増る、	*	*
1054	我か側ニおきやひ	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1055	互に楽々と、	*	*
1056	夢のこの浮世	*	*
1057	暮しほしやの、	*	*
1058	誠真実の、	*	*
1059	我肝とも呉らハ、	*	わ肝とんこひりハ
1060	村原か事も	*	*
1061	いやな置め、	*	*
1062	石川と満納	*	*
1063	追ぬけてからに、	*	*
1064	ワ肝明々と	*	*
1065	談合よすらに、	*	*
1066		谷茶詞	[欠]
1067	やあ / \、	*	*
1068	此事や互に	*	*
1069	おかとしちすまぬ、	*	おつかつとしちおらぬ
1070	けふや立別て	*	今日や立戻て
1071			
1072	思案しちからに、	*	思案しちをとて
1073	思ひきハまらハ	*	*
1074	呼す筈たひもの、	*	[欠]
1075	戻てむち得と	*	戻てむち [欠]
1076	考てみやうれ、	*	[欠]
1077	満納	*	満納
1078	一 めしやいること、	*	一 あゝめしや [欠]
1079	ものやひとかたに	*	[欠]
1080	おかとしちすまぬ、	*	[欠]
1081	あの女てすや	*	*
1082	村原かとしの、	*	*
1083	乙樽よてやり	*	乙樽よ [欠]
1084	たゝならぬやから、	*	[欠] んやから
1085	女てやりおかと	*	*
1086	ゆるち置ならぬ、	*	*
1087	責らすになんと	*	*
1088	尋たんたひか、	尋ねたんてやりか、	*
1089	愚痴の上に愚痴や	*	愚痴の上に愚痴
1090	かたまゆる積り、	*	*
1091	牢に込置て	*	*
1092	おのくつさしめて、	*	*
1093	引出し / \	*	*
1094	おの責にあてゝ、	おの責めよあてゝ	*
1095	漸々と気根	*	*
1096	疲ゆる時と、	*	*
1097	有筋に白状	*	*
1098	しゆる積りやれハ、	*	*
1099	御思案の内や	*	*
1100	こめておきやへら、	*	*
1101	石川	*	*
1102	一 満納思寄も	*	*
1103	尤とやすか、	*	*
1104	牢こめもいらぬ	*	*
1105	責もさぬことの、	*	*
1106	御慈悲御情けの	*	*
1107	按司の御計や、	*	*
1108	いかな悪欲な	*	*
1109	無理なものやても、	*	愚痴な者やてん
1110	背く事なひさめ	*	*
1111	義理の上ニ、	*	*
1112	たう / \	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1113	先牢こめや	*	*
1114	ゆるちおかに、	*	*
1115	満納	*	*
1116	一 いや/、	*	*
1117	村原のひやに	*	*
1118	ならふものをらぬ、	*	*
1119	巧てをる事や	*	*
1120	いか程かやゆら、	*	*
1121	おかとしちすまぬ	*	おつかつとしち済ん
1122	女わらへ、	*	*
1123	石川	*	*
1124	一 我々の一事	*	*
1125	はからやいをれハ、	*	*
1126	按司や百ことの	按司や百事も	*
1127	御計のあゆん、	*	*
1128	満納	*	[欠]
1129	一 はあ、主人身の上の	*	*
1130	浮沈ミやれハ、	*	*
1131	肝のあくまゝや	*	*
1132	命ち限り、	*	命のある限り
1133			やあ按司かなし
1134	あゝおとろしやもしらぬ	*	*
1135	みよんにゆけややへか、	みおんにゆけやべすが、	みよんにゆけやへか
1136	責さしゆることの	*	*
1137	御肝きやさあらハ、	*	*
1138	大川のなし子	*	*
1139	あのやからものと、	*	*
1140	姿から形ち	*	姿から [欠]
1141	似ちをるもの撰て、	*	似ち [欠] 撰て
1142	大川のなし子てやり	*	大川の [欠] たい
1143	取沙汰よしめて、	*	[欠]
1144	外の出入も	外の出入	[欠]
1145	ゆるちあんでやり、	*	[欠]
1146	村原か聞ハ	*	村原か [欠]
1147	疑やなひらぬ、	*	[欠]
1148	はいとらんともて	*	[欠]
1149	忍て来るつもり、	*	[欠]
1150	おの手組しちをて	*	[欠]
1151	からめとやへら、	*	[欠]
1152	谷茶	*	[欠]
1153	一 細事のたくひ	*	[欠]
1154	聞きやくもなひらぬ、	*	[欠] ないらん
1155	満納	*	*
1156	一 あゝ按司かなし天の	*	一 はあ按司かなし天の
1157	盛衰の	*	*
1158	此涯よやれハ、	*	*
1159	包てつゝまらぬ、	*	*
1160	おとろしやもしらぬ	*	*
1161	繰返し/、	*	*
1162	みよんきこと	*	[欠]
1163	かへそ科や	*	*
1164	仰すめしやうち、	*	*
1165	是非共牢舎	*	是非共に牢舎
1166	仰すめしやうれ、	*	*
1167	谷茶	*	*
1168	一 推参なやから	*	*
1169	愚痴にかたまとめ、	*	愚痴にかたまよめ
1170	又事もいらぬ	*	*



No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1171	なけすてゝとらさ、	*	切捨てとらさ
1172	石川	*	*
1173	一 此涯よたひもの	*	*
1174	御勘忍めしやうれ、	*	*
1175	谷茶	*	[欠]
1176	一 やあ石川、	*	[欠]
1177	ワか下知に背く	*	[欠] ぬ
1178	気任のやから、	*	いか俣 [欠] 族
1179	急ち引立て	*	*
1180	そんちいけ、	*	*
1181	石川	*	[欠]
1182			[欠] ミ留やへて
1183	一 やあ満納	*	[欠] まんな。
1184	御意背く道の	*	*
1185	此世界にあゆめ、	*	*
1186	おれこれも按司の	*	おれこりも [欠]
1187	御計にまかち、	*	*
1188	仰すことまゝに	*	*
1189	急ち戻ら、	*	急ち [欠]
1190			
1191			満納
1192			一 あゝ口惜や
1193	谷茶	*	[欠]
1194			[欠] さんなやから
1195	一 やあ / \	*	[欠]
1196	振合の袖に	*	[欠]
1197	糸の縁結て、	縁の糸結て、	[欠]
1198	夢の間の浮世	*	[欠]
1199	語ひほしやあもの、	*	[欠]
1200			
1201			
1202			
1203	ワか側にをとて	*	我が側に [欠]
1204	樂よすれよ	*	[欠]
1205	/ \、	*	[欠]
1206	乙樽	*	[欠]
1207	一 御情に御側	*	[欠]
1208	をらんでやりすれハ、	*	[欠] すりハ
1209	おやくめさあもの	*	おや [欠] あもの
1210	御ゆるせよめしやうれ、	*	[欠]
1211	谷茶	*	[欠]
1212	一 いや / \、	*	[欠]
1213	やくめさもいらぬ	*	[欠]
1214	斟酌もするな、	*	*
1215	ワ側ともをらハ	*	我側 [欠]
1216	花に増姿、	*	[欠] 姿
1217	おの飴しめて	*	*
1218	をなちやらもされん、	*	を [欠]
1219	島国よ揃て	*	[欠]
1220	あかめらんしゆもの、	*	[欠]
1221	たう / \	*	*
1222	側にをれよ	*	側に [欠]
1223	をれよ、	*	/ \
1224	乙樽	*	[欠]
1225	一 按司もわなひすかぬ	*	[欠] わなへすかぬ
1226	樂も又すかぬ、	*	*
1227	わすたつれやても	*	わすた [欠] やてん
1228	女身の習の、	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1229	義理曲てなれる	*	義理曲て [欠]
1230	道のあゆめ、	*	道のあよ [欠]
1231	谷茶	*	[欠]
1232	一 いや / \、	*	
1233	今のこと愚痴に	*	
1234	かたまるとむさや、	*	
1235	素立ひやならぬ	素立もならぬ、	
1236	急ち戻やうれ、	*	
1237			[欠] まくちな女
1238			よるす事ならぬ
1239	乙樽	*	[欠]
1240	一 こまかゝて命や	*	*
1241	つかなれハ死にゆめ、	*	*
1242	もの乞になても	*	*
1243	のちやつきゆん、	*	*
1244	たう / \	*	*
1245	ゆるちたはふれ、	*	*
1246	谷茶	*	[欠]
1247	一 いや / \、	*	*
1248	乙樽	*	*
1249	一 義理と按司やゆる	*	*
1250			
1251	無理な事めしやうな、	*	無理な人さらめ
1252			[欠] するな
1253	谷茶	*	[欠]
1254	一 いやこの按司の言葉	*	[欠] いや此按司の言葉
1255	きかならハそなた、	*	*
1256	一刀に命ち	*	一刀 [欠]
1257	つふちとらさ、	*	つふちとら [欠]
1258	乙樽	*	[欠]
1259	一 殺しゆらハ殺す	*	[欠] しゆらハくるす
1260	おとろしやゝなひらぬ、	*	*
1261	生々と命の	*	[欠]
1262	死もしにやれらぬ、	*	[欠] 死れらん
1263	恥もふりすてゝ	*	はちん打捨て
1264	此なひになとる、	*	此なひ [欠]
1265	露程のいのち	露程も命	*
1266	惜む事ないらぬ、	*	惜む [欠]
1267	仕合とやゆる	*	仕合とやよ [欠]
1268	ころす / \、	*	*
1269	谷茶	*	*
1270	一 はあ肝ほれてをたら	*	一 はあ肝ふ [欠] おた [欠]
1271	今のことしやすや、	*	[欠] の [欠] すや
1272	無調法至極	*	無調 [欠]
1273	ゆるちたはふれ、	*	[欠] ちた [欠]
1274	神仏てすも	*	[欠] て
1275	人の肝尽ち、	*	
1276	祈る願事や	*	
1277	御助のあもの、	*	
1278			[欠] 聞ん
1279			た [欠]
1280	みすく聞分て	*	[欠] 分て
1281	肝もきもそへて、	*	肝も [欠]
1282	頼て御情に	*	たんで [欠]
1283	なれて給ふれ、	*	[欠]
1284			
1285			
1286			

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1287			
1288	乙樽	*	[欠]
1289	一 おはつかしやあても	*	一 おはつかしや [欠]
1290	(いやな) 又なゆめ、	*	[欠]
1291	ワか夫や此世	*	[欠]
1292	隠れやひをらぬ、	*	かくれ [欠]
1293	遺言しちあすや	*	[欠]
1294	三年の内に、	*	三 [欠]
1295	夫もとなてやり	*	[欠]
1296	い言葉のあゆん、	*	[欠]
1297	三年やたひんす	*	[欠]
1298	女身の習の、	*	[欠] 習の
1299	夫ふたりもちゆる	*	夫ふたひ [欠]
1300	道のあるひ、	*	[欠] のあ [欠]
1301	谷茶	*	*
1302	一 昔ほれものゝ	*	*
1303	いちやること守て、	*	いち [欠] 守て
1304	浮世くらされめ	*	[欠] されめ
1305	按司も下司も、	*	*
1306	恋忍ふ道の	*	[欠]
1307	ある間の浮世、	*	
1308	つらさ身に受て	*	
1309	思ひこかれやひ、	*	
1310	恋死はむくひ	*	
1311	たるにいきゆか、	*	
1312	たう / \	*	
1313	おれこれよおもて	*	
1314			世界に [欠]
1315			[欠] 身にあまて
1316	死にゆる我か命ち、	*	死 [欠]
1317	頼て御情に	*	[欠]
1318	救てたはふれ、	*	[欠] ふうれ
1319	乙樽	*	*
1320	一 思ひ究とる	*	*
1321	ワ身と又やすか、	*	わんと又 [欠]
1322	按司の御言葉や	*	[欠]
1323	梓弓心、	*	梓弓 [欠]
1324	引されていきゆさ	引かされていきゆる	引されて行る
1325	ワ身の肝や、	*	わ身の [欠]
1326	谷茶	*	[欠]
1327	一 はあ果報もつきゆすかと	*	[欠] 付すかと
1328	つきも付清さ、	*	*
1329	あた果報とつきやる	*	*
1330	果報な我身や、	*	果報 [欠] 身 [欠]
1331	はあしたひ / \、	*	*
1332	乙樽	*	[欠]
1333	一 来る二月に	*	[欠] 二月に
1334	すきし我か夫の、	*	*
1335	三年忌たひもの	*	*
1336	吊や濟ち、	*	吊や [欠]
1337	よしあしの御返事	*	[欠] しの御返事
1338	おしやけんしゆもの、	おしやげらんしゆもの、	おしやげらんしゆもの
1339	おの内や是非に	おの内や是非よ	おの内や [欠]
1340	御待めしやうれ、	*	[欠] めしやうれ
1341	谷茶	*	*
1342	一 いや / \ 是や	*	一 いや / \ [欠]
1343	ならぬ / \、	*	[欠]
1344	乙樽	*	[欠]

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1345	一 おれこれもゆるし	*	[欠] もよる [欠]
1346	ならぬことやらハ、	*	なら [欠] やらハ
1347	逆も一刀に	*	*
1348	殺ちたはふれ、	*	[欠] たふうれ
1349	谷茶	*	[欠]
1350	一 はあおれ是もよたしや	*	は [欠] 是も [欠] たしや
1351	いつまでもまちゆん、	*	早晚迄も待ん
1352	いやれること済ゆん	*	云れ [欠]
1353	よたしや / \、	*	*
1354	乙樽	*	[欠]
1355	一 あゝたうと、	*	[欠] たうと
1356	御情の光	*	*
1357	てり増ひ / \、	*	照りまさひ [欠]
1358	百といつまでも	*	
1359	拝てすてやへら、	*	
1360			[欠] かなて
1361			御拝と [欠]
1362	谷茶	谷茶独語	*
1363	一 あゝ我身もほこらしやの	*	一 あゝ我身ん誇 [欠]
1364	物にとららぬ、	*	*
1365	このたけにワ身や	此たけに我も	[欠] 我身や
1366	なやかやいをても、	なやがやり居すが、	なやかやい居すか
1367	気に叶ふ女、	*	気 [欠] 女
1368	側にまたをらぬ、	*	[欠] をらん
1369	是とワかふ足	*	是と我か [欠]
1370	心くら闇に	*	[欠]
1371	なやいをたん、	*	[欠]
1372	今月も過て	*	*
1373	二月も頓て、	*	[欠] 頓て
1374	おれからや互に	*	おれ [欠]
1375	枕うちならへ、	*	[欠] 打並へ
1376	浮世楽々と	*	*
1377	暮すとめハ、	*	暮そと [欠]
1378	まちと嬉しこと	*	[欠] 事
1379	よろこひもおへさ、	*	嬉し [欠] 大さ
1380	天に飛登る	*	*
1381	ワ身の心地、	*	我身 [欠] ち
1382	引寄て給ふれ	*	引寄て [欠]
1383	御月御てた、	*	[欠] おてた
1384	我自由しち浮世	*	[欠] ち浮世
1385	遊て暮さ、	*	*
1386		谷茶詞	
1387	一 やあ / \、	*	[欠] あ / \
1388	此内やとかく	*	*
1389	くつさしちをたら、	*	こつさしち [欠]
1390	心はれ / \と	*	[欠]
1391	うち晴て躍て、	*	*
1392	此間のくつさ	*	此間の [欠]
1393	思ひ忘れ、	*	[欠]
1394	こてふし	*	[欠]
1395	一 御慈悲あるゆへと	*	[欠] ある [欠]
1396	御万人のまきり	*	*
1397	上下もそろて	*	上下 [欠]
1398	あふきおかむ	*	*
1399	谷茶	*	*
1400	一 はあきよらさ / \、	*	一 あゝ [欠]
1401	乙樽	*	*
1402	一 けふや思子の	*	[欠] ふや思 [欠] の

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1403	御側むちをかて、	*	御側 [欠] をとて
1404	明日か日に又も	*	あちや [欠]
1405	拝てすてら、	*	[欠] てすてら
1406		谷茶詞	
1407	一 たう / \、	*	
1408	けふや道中の	*	
1409	草臥もあらたひもの、	*	
1410	若按司の側にむち	*	
1411	休息よすれ、	*	
1412		* * * *	
1413	村原出羽大浦ふし	*	*
1414	思子取戻ち	*	[欠] 取 [欠]
1415	敵うたんともて	*	[欠] 打んともて
1416	衾れ商人に	*	[欠] 物 [欠] に
1417	やつれ出る	*	躍り出る
1418			
1419		村原のひや詞	村原
1420	一 是や村原のひや、	*	*
1421	思子取戻す	*	思子引取る
1422	つまひ分別に、	*	つまひ分別 [欠]
1423	乙樽かことや	*	乙樽 [欠] や
1424	あむまへになつて、	*	あん [欠] 名付
1425	敵の城元に	*	*
1426	只ひちゆひやらち、	*	只 [欠] やらち
1427	あゝ、心元なさの	*	*
1428	我肝やすまらぬ、	*	我き [欠]
1429	物売にやつれ	*	[欠] 売に躍り
1430	忍て出る、	*	*
1431	さいんそるふし	歌 さいんするふし	*
1432	一 唐や大和の	*	*
1433	珍らし物	*	*
1434	匂ひ髪附	*	*
1435	香しもの	*	か [欠]
1436	丁子白檀	*	*
1437	甘生姜	*	あましやう [欠]
1438	刻多葉粉も	*	[欠]
1439	持ちをやへん	*	*
1440	きせるも宝蔵も	*	きせるん火縄ん宝蔵ん
1441	持つをやへん	*	持 [欠]
1442	其外色々	*	おの外 [欠]
1443	持ちをやへん	*	*
1444			[欠] ふやいたふうれ
1445	代もやすめて	*	
1446	上やへら	*	
1447	米とも粟とも	*	*
1448	替やへん	*	[欠]
1449			[欠] やすみて
1450			[欠] ら
1451	御望の物や	*	[欠]
1452	かふやひたはふれ	*	[欠] やた [欠]
1453	村原	*	[欠]
1454	一 先物売に名付	*	一 先物売 [欠]
1455	此辺にをとて、	*	[欠]
1456	往来の人の	*	[欠]
1457	沙汰よきかに、	*	沙汰よ [欠]
1458	泊井	泊詞 橋掛より出る	*
1459	とんちたるものや	*	*
1460	村原のあやと	*	村原のあや [欠]

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1461	むちやん一ツの	*	御神 [欠]
1462	ちきや御葉たん、	*	[欠] 御身葉 [欠]
1463	大川の思子	*	*
1464	引取らんで	*	*
1465	村原のあやゝ、	*	*
1466	谷茶城忍て	*	*
1467	いまふちやうすか、	*	いまふち [欠] すか
1468	夫の村原なひ	*	夫の村原 [欠]
1469	肝要なものいやひ	*	[欠] 物いやい
1470	頼まつて行ん、	頼まつて居ん。	頼まつてをん
1471	油断しや済ぬ		油断しや [欠]
1472	先一足もいそかう、	*	[欠] んいそかう
1473	村原	*	*
1474	一 され / \、	*	*
1475	万細物	*	*
1476	持ちをやへん、	*	[欠] ちをやへん
1477	これ / \	*	*
1478	御望の物や	*	[欠] ものや
1479	売上やへら、	*	*
1480	泊井	*	*
1481	一 あゝ是や仕合な事、	*	一 あ是や仕合な事
1482	村原	*	*
1483	一 田舎江御通の	*	*
1484	御支度の御様子、	*	*
1485	御中途の御用	*	御中途の [欠]
1486	是々	*	是
1487	又是も上やへら、	*	又是 [欠] 上やへら
1488	泊井	*	泊
1489	一 是や心入とやる、	*	
1490	いやれること	*	*
1491	谷谷屋良村んかい	北谷屋良村んかへ	北谷屋良村ん [欠]
1492	越ん、	*	*
1493	道中の重宝	*	*
1494	仕合な事、	*	*
1495	主やまあからまあんかひ	*	
1496	まひか、	いまいが。	
1497	村原	*	*
1498	一 我身や	*	*
1499	那覇若狭町から、	*	*
1500	今度初て	*	*
1501	旅の者、	*	*
1502	御急きもやゆら	*	*
1503	御無心もしらぬ、	*	*
1504	取つけもなひらぬ	*	*
1505	望事やすか、	*	*
1506	旅の上の御縁	*	*
1507	をかむ御情に、	*	拝も [欠]
1508	めつらしい事の	*	珍し事 [欠]
1509	此頃にあらハ、	*	此 [欠] あらハ
1510	御休ミのうちに	*	*
1511	きかちたはふれ、	*	*
1512	やともとのみやけ	*	宿元の [欠]
1513	ものかたりしやへら、	*	*
1514	泊井	*	*
1515	一 まゝてひしんさあ	*	*
1516	ちゆのいそけは、	*	*
1517	むゝたしかに村原のひややすか、	*	一 たしかに村原のひや [欠]
1518			[欠] やすん付 [欠] や

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1519	しかつと見覚のなひらぬ、	*	しかいと [欠]
1520			おつ [欠]
1521	先口ふて	*	*
1522	さくてむだう、	*	[欠]
1523	同人	泊詞	
1524	一 あゝいきやいは兄弟	*	[欠]
1525	のうちへたてのあか、	*	[欠] 打ひたてのあが
1526	これや余り	*	*
1527	こは返事やつさあ、	*	こは [欠]
1528	やすか	*	[欠] すか
1529	かんのふも	*	のをんかん
1530	珍らしひ事や、なひらぬ、	*	*
1531	むゝあゝ、	*	*
1532	満納の子や	*	*
1533	打殺さつて、	*	*
1534	あゝいたわしい事、	*	*
1535	村原	*	*
1536	一 あたらしか満納	*	*
1537	いきやしちやる事か、	*	いきやしちや [欠]
1538	泊井	*	*
1539	一 むゝ、おの事てハ、	*	*
1540	たう細々の次第	*	*
1541	根から咄ちきかさう、	*	根から [欠]
1542	あの城や、	*	*
1543	本今帰仁の別れ	*	本今帰仁の [欠]
1544	大川の按司の城やたすか、	*	大川の按司 [欠] 城やた [欠]
1545	百姓上の按司部	*	*
1546	谷茶のおまへの打亡はち、	*	*
1547	今や谷茶城むていふん、	*	今や谷茶城むて [欠]
1548	先事のおこれや	*	*
1549	谷茶か野心巧て、	*	谷茶か野心 [欠]
1550	大川の按司の	*	
1551	国々の按司部うたんで、	*	国々の按司部
1552			
1553	あらさらぬ事ハ	*	
1554	色々にいひ立て、	*	
1555	加勢頼て	*	*
1556	軍押寄たん、	*	*
1557	だあ大【城】川城や	*	*
1558	をなちやらの御吊の日に当て、	*	をなちやらぬ [欠] 日に当て
1559	御取込の最中	*	*
1560	以の外、火急な事	*	以の外火中な事
1561	分別の分別ならぬ、	*	*
1562	按司も大将も	*	*
1563	忽ひころ討死、	*	*
1564	大勢に無勢	*	*
1565	力及はらぬ、	*	*
1566	終にや思子や生捕られ、	*	終にや嫡子生捕られ
1567	大将村原のひやゝ	*	*
1568	ぬけすまち	*	*
1569	行衛しれらぬ、	*	行衛知りらんやすか
1570			村原のひやなつくわい
1571	世界の一人者	*	*
1572	忽ひ武士やすんついてや、	*	*
1573	生捕てあるいねけ子	*	*
1574	物種子にしち、	*	*
1575	取付て	*	*
1576	降参しめらむて	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1577	おの思子つかなてあん、	*	*
1578	おの段村原か聞付て	*	*
1579	思子引取らむて、	*	*
1580	村原のあやゝ	*	*
1581	あん前むて云ち、	*	あん前むて [欠]
1582	共につかなてたはふれ / \ むて	*	共に飼て [欠] むて
1583	谷茶城よしれたん、	*	*
1584	あゝむちや	*	あゝ [欠]
1585	満納の子なつくわひ	*	[欠] なつくわひ
1586	もの、かはひ人、	*	もの [欠]
1587	村原か計むて	*	[欠]
1588	ぬちやてひつしつち、	ぬちやでひぢで知つち、	[欠] 知つち
1589	此涯取付てよんむて	*	*
1590	幸としち	*	幸 [欠]
1591	間尋掛引段々、	*	[欠] 段々
1592	村原としも	村原とじのあやも	*
1593	あひもおとらぬぬけた女、	*	*
1594	いちやひしちやひ	*	*
1595	色々様々の返事返答、	*	*
1596	扱も / \ 寄妙な事い (のか。一部筆が途切れている)	さても / \ 妙なもの。	さても [欠] 妙なもの
1597	きゝことやててん、	聞きごとやたん。	*
1598	しゆたすか	*	*
1599	村原とじや	*	村原と [欠]
1600	目口やは / \ と	*	*
1601	小しほらしひかあげ、	*	*
1602	ほんのむちや	*	ほんの [欠]
1603	むしやものやすんつひてや、	*	*
1604	たあ按司や	*	*
1605	ちやむとうちほれて、	*	*
1606	目いろは折しち	*	*
1607	さらざらあと	*	*
1608	正気やないらぬ、	*	*
1609	終にや	*	*
1610	石川満納も追ぬけて、	*	*
1611	さつたる仕形もをかしや、	さつたる仕方のをかしやい。	*
1612	やあ / \、	*	*
1613	ワか側にをらハ	*	*
1614	をなちやらも、されん、	*	*
1615			
1616			
1617	たう / \ 側に	*	*
1618	居よをれよ	*	*
1619	むていちやれハ、	*	*
1620	村(原)のあやゝ	*	村原あやゝ
1621	按司もすかぬ	*	*
1622	楽もすかぬむて	*	*
1623	つんはにむはしやん、	*	*
1624	谷茶や腹きりわき、	*	*
1625	此按司の言葉	*	*
1626	きかならハそなた、	*	*
1627	一刀にいのち	*	*
1628	つふちとらさ、	*	*
1629	むてしゆて	*	*
1630	おとちやん、	*	無蔵さ
1631	わたの底まで	*	*
1632			
1633	見済さつてをすや	*	*



No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1634	以の外、	*	*
1635	村原のあやゝ	*	*
1636	ちやあんなひらぬ	*	*
1637			
1638	殺す / \ むて	*	*
1639	すひちかゝたさ、	*	*
1640	たあ殺しゆるいきや	*	たあ殺 [欠] いひきや
1641	そつともなひらぬ、	*	*
1642	むきやわらひしち	*	*
1643			肝狂てをたら
1644			なまのことしやすや
1645			無調法至極
1646			
1647			よるちたふうれ
1648			
1649			
1650			
1651			
1652			
1653	もとよたる仕形や、	*	
1654	ほんの	*	
1655	をかしやとおほさる、	*	
1656			むてしよたるが
1657			あけや
1658	あはあ(高笑) / \	あはは……………。	あは / \ あ
1659	立羽失て	*	*
1660	どつとさんど\な事、	*	*
1661	あんしおれからや	*	*
1662	大首たうれて、	*	*
1663	みすく聞分て	*	*
1664	肝出ち	*	肝 [欠]
1665	死しいきゆる命	*	[欠] いきよる命
1666	救てたはふれ / \ むて、	*	[欠]
1667	段々折たうれ	*	[欠]
1668	しやつとちんや、	*	*
1669	村原としや	*	[欠]
1670	分別なもの、	分別なむざの、	[欠]
1671	夫の仏事うちなち	*	[欠] 事おきにやさは
1672	御返事上らの	*	*
1673	のふのくひのむて、	*	[欠] むて
1674	たん / \ と云廻ちやれハ、	*	*
1675	あゝ無蔵さ	あゝ無蔵さい、	*
1676	縁のかたかしち	*	*
1677	あかさくらさもわからぬ、	*	*
1678	ほんの誠に	*	*
1679	たんしひきつち、	*	*
1680			
1681			
1682			
1683			
1684			
1685			
1686			
1687			
1688			
1689			
1690			
1691			

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1692			
1693			
1694			
1695			
1696			
1697			
1698			
1699			
1700			
1701			
1702	待と嬉しこと	*	待と嬉しやこと
1703	よろこひも大(ヲへ)さ、	*	*
1704	あた果報とつきやる	*	*
1705	果報なワ身や、	*	*
1706			
1707			
1708			
1709			
1710	なつくわひしち	*	*
1711	笑ひすひ / \	*	*
1712	躍羽しち、	*	*
1713	夜のねふしもねんたぬ、	*	*
1714			
1715			
1716			指の指折てむたらん
1717	ひしやの指まで	*	*
1718	打かへし / \ しゆて、	*	折かへし / \ しまて
1719	むな待しゆらむておもれハ、	*	*
1720	ほんのをかしやどおほさる、	*	*
1721	あんしまた	*	*
1722	満納の子や	*	*
1723	度々御意見	*	度々意見
1724	おんにゆけゆんむて、	おんにゆけらむて、	*
1725	のふ目もみしらぬ	*	ぬふ目めしうん
1726	かひほうかつたん、	*	かひほうかつて
1727	やつさ	*	いやさあ
1728	【命】(人)の命てらもの	*	*
1729	云んてとしゆる、	*	*
1730	水つかゆすよか	*	*
1731	あつまつさ	浅まつさ。	あさまいさ
1732			ふんのむきや
1733	おそろしい畜生人、	*	*
1734	また満納の子も	*	*
1735	満納の子、	*	*
1736	あて性もないらぬ	*	*
1737	のふむて	*	*
1738	おれほとしや(ち)	おれほとしやが。	おり程しやが
1739	いか身からと	*	*
1740	やひんしゆすか、	*	*
1741	得と思てむてハ、	*	*
1742	しゆかな / \ しい肝の	*	*
1743	あちしやつ所から、	*	あちしや所からと
1744	誠に満納の子とやゆる、	誠に満納の子どやる。	誠満納の子とやよる
1745	村原	*	*
1746			
1747			
1748	一 むゝ士の本意	*	*
1749	世の中の手本、	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1750	たんちゆ島国も	*	*
1751	沙汰よしゆたる、	*	*
1752	やあ / \	*	
1753	大川のなし子	*	*
1754	あん前と二人や、	*	*
1755	いきやるいきなひに	*	*
1756	なやいをゆか、	*	なやい [欠]
1757	泊井	*	*
1758	一 やつさしう、	*	*
1759	やあつかぬ、犬の	*	や [欠]
1760	縄切ちややうなもの、	*	[欠]
1761	一方引なて	*	[欠] 引なて
1762	たんちやまで	*	*
1763	をすんついてや、	*	をすん [欠]
1764	頓てぬけすまち	*	[欠] ぬけすまち
1765	うちかへされる筈、	*	*
1766	はひ嘶にほれて	*	*
1767	日やさかたひ、	*	*
1768	たうつさしう、	*	*
1769	戻てくるまで	*	*
1770	こまんまひらハ、	*	*
1771	又も嘶さうやあ	*	又咄さうや
1772	たうしゆ、	*	*
1773	村原	*	*
1774	一 やあ / \	*	*
1775	日も暮てをすか、	*	*
1776	あかと屋良むらに、	あがと屋良村へ	*
1777	いきやる事やとて	*	*
1778	急ちいまひか、	*	*
1779	泊井	*	*
1780	一 なあやのふしやる人か、	*	*
1781	ちゆの用事間よすや、	*	ちゆの用事間よたひ
1782	まあかひいかわん	*	
1783	かもてい、	*	
1784	村原	*	*
1785	一 細々の次第	*	*
1786	聞ほしやよあすか、	*	聞ほしやよあてと
1787	いやゝまあむらの	*	
1788	何かしかやゆら、	*	
1789			御急ちんやよら
1790			尋やひみよる
1791	泊	*	*
1792	一 むまやまあたやへるか、	*	
1793			一 村原のあや前あゑ
1794	村原	*	*
1795			一 やあいやゝ西村の
1796			泊ひやあらね
1797	一 わ身や村原の	*	我身村原のひや
1798	ひやとやゆる、	*	
1799	泊	*	*
1800	一 あゝ	*	*
1801	さうひ拝んしやへらぬ	*	*
1802	あや前の御使	*	*
1803	西村の泊井たやへる、	*	*
1804	細々の次第	*	
1805	おんにゆけやへら、	*	
1806	来る十日に	*	*
1807	思子引取て	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1808	北表の山路	*	*
1809	逃めしやいへる筈、	逃げめしやいる筈。	*
1810			やすん付てや
1811	おのおこゝれ	*	*
1812	めしやうれむての	*	*
1813	御使とやゝへる、	御使だやべる。	*
1814	村原	*	*
1815	一 あゝ天の引合か	*	*
1816	神の御助か、	*	*
1817	たう / \	*	*
1818			
1819	けふからや互に	*	*
1820	心打合ち、	*	*
1821	身の上のことに	*	*
1822	気張て呉れ、	*	気張てこひれよ
1823	思子取戻ち	*	*
1824	かたきうちとらハ、	*	*
1825	おの御取立や	*	*
1826	あらんしゆもの、	*	*
1827	たう / \	*	
1828	気張てくひれよ、	*	
1829			萬いか事や
1830			計やいひくひ [欠]
1831			泊
1832			一 拝留やへて
1833			同人
1834			細々の次第
1835			耳 [欠]
1836	同人	同人詞 南表の暮に入る	村原
1837	一 むゝ是に思つきやる	*	*
1838	事の又あゆん、	*	*
1839	乙樽か思子	*	乙 [欠]
1840	取戻ちからに、	*	[欠] からに
1841	逃忍ふ時や	*	*
1842	疑やなひらぬ、	*	*
1843			
1844	谷茶あまやゝ	*	谷茶あ [欠]
1845	用心もすらぬ、	*	*
1846	あはてさま出て	*	*
1847	追掛る積り、	*	*
1848	おの時にまかち	*	*
1849	おのときに出て、	*	おのときに向て
1850	打かへす御運	*	*
1851	是に究たん、	*	*
1852	はあ肝要な時節	*	*
1853	おくれてや済ぬ、	*	*
1854	急ち立戻て	*	*
1855			
1856			
1857	手組すらに、	*	*
1858			泊
1859			一 拝留やへて
1860		* * * *	
1861			原国兄弟出羽口説
1862			一 君と親とのてきかたき
1863			天のいたゝち兄弟の
1864			岩やかん石やたんたい
1865			只踏こつしふミ破り

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1866			いかな鬼神やたんたい
1867			すた / \ きさまな只置め
1868			人の念力岩を通す
1869			誠昔の物語り
1870			聞ハ嬉しや有難や
1871			兄弟心を合ち
1872			ししかり人に身をやつし
1873			勇躍て立出る
1874	原国兄弟	原国兄弟詞 北表の幕より出る	原国兄弟二人言葉
1875	一 なま出る二人や	*	一 兄弟の者や
1876	大川の按司の	*	*
1877	頭役しゆたる	*	*
1878	原国のひやか、	*	*
1879	兄子松千代	*	*
1880	弟子金松、	*	*
1881			大川の城
1882			仕合の時に
1883			親の原国ん
1884			按司添と共に
1885	父親の事と	*	
1886	按司添前みこし立、	*	
1887	討死よてやり	*	*
1888	兼て聞及て、	*	聞もはかなさや
1889			あまれしのはらぬ
1890			打死と究め
1891	君親のかたき	*	*
1892	打捕んともて、	*	打捕んともて押烈て
1893	ふたり命はまて	*	
1894	出立る内に、	*	*
1895	思子の前と	*	若按司の事や
1896	敵のいきとやひ、	*	*
1897	村原のひや釣ゆる	*	村原のひや取留らんての
1898	計得のあとて、	*	*
1899	御素立よてやり	*	*
1900	かたへへのあらは、	*	*
1901			嬉しさや二人
1902			村原のひや
1903			尋着からに
1904			
1905			思子取戻ち
1906			君親の [欠]
1907			
1908			願て出る
1909	此事や急ち	*	
1910	村原につけて、	*	
1911	思子の前	*	
1912	とりかへち	*	
1913	敵討んともて、	*	
1914	肝勇ミいさて	*	
1915			
1916	むちていきゆん、	*	
1917	揚口説	歌、原国兄弟口説	原国兄弟
1918	一 家の譲りの長刀を	*	一 家の譲りの長 [欠]
1919	打取なをしてころ / \ と	*	[欠]
1920	ころれ / \ と振立て	*	[欠] ふりたて
1921	たゞきりひらちわつて入	*	只 [欠] ひらちわつて入
1922	水もたまらぬ谷茶が	*	水 [欠] 谷茶が
1923	首打落すその手並み	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1924	当るものなき其威勢	*	*
1925	扱も / \ と一声に	*	*
1926	てきや味方の目をさます	*	*
1927	松千代	松千代詞 南表の幕に入る	
1928	一 やあ金松よ、	*	
1929	急ち内いやひ	*	
1930	村原のひや拝ま、	*	
1931	金松	*	
1932	一 たう / \	*	
1933	急ちをかま、	*	
1934		* * * *	
1935	村原	村原詞 南表の幕より出る	*
1936	一 出様ちやる者や	*	*
1937	村原のひや、	*	*
1938	あゝ寔慈悲なさや	*	あゝ誠ある慈悲な
1939	我按司の報ひ、	*	我が按司の果報や
1940	天の引合か	*	*
1941	神の御助か、	*	*
1942	思はずに武運	*	*
1943	打重ね / \	*	*
1944	散々になとる	*	*
1945	人々も揃て、	*	*
1946	願たこと叶て	*	
1947	誇らしやとあゆる、	*	
1948			けふかたき打に
1949			おきよ出る
1950	やあ / \、揃てをる人数	*	*
1951	出やうれ / \、	*	*
1952			
1953			
1954	村原	*	*
1955	一 やあ / \、乙樽か兼て	*	
1956			やあ朝夕わすらんやから
1957	内通のことに、	*	
1958	かたき討取ゆる	*	敵かたき打取る時節
1959	御運廻り来て、	*	武運廻り来て
1960	けふのよかる日ニ	*	けふかたき打よ出る
1961	立よ出ら、	*	
1962	原国兄弟	*	総人数
1963	一 こつきやうの時節	くつきやうな時節、	一 肝要な時節(総人数の台詞)
1964	おくれてや済ぬ、	*	後りて済ん(総人数の台詞)
1965	片時も急ち	*	* (総人数の台詞)
1966	御供しやへら、	*	* (総人数の台詞)
1967	村原	*	*
1968	一 たう / \、	*	*
1969	手賦の次第	*	*
1970	とつけ渡さ、	*	*
1971	やあ喜瀬の大屋子や、	*	*
1972	敵の城元に	*	*
1973			
1974	忍て行をとて、	*	*
1975	乙樽か思子	*	*
1976	奪とやい逃る、	*	*
1977	御中途のけいこ	*	*
1978	念の入れ、	*	*
1979			鬼瀬
1980			一 拝ん留やへて
1981			村原

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
1982	又西川の子や、	*	一 又西川子や
1983	頼てある加勢	*	*
1984	けふの真夜中に	*	その真夜中に
1985	城の後ろの	*	*
1986	山に伏よかくれ	山に伏しかくれ、	*
1987	谷茶あまやか	*	*
1988	城立出て、	*	城よ立出て
1989	北の山路	*	*
1990	いきつきゆる時分、	*	*
1991	一時に出て	*	*
1992	城の門閉て、	*	
1993			
1994			城乗取て
1995	大川の印旗	*	大川印旗
1996	差立ておけ、	*	立ておけ
1997			西川
1998			一 拝ん留やへて
1999			村原
2000	やあ瀬底下こおりや、	*	*
2001	北の山路の	*	*
2002	先にかくれとて、	*	*
2003	谷茶あまやか	*	谷 [欠]
2004			
2005	走通る後に、	*	*
2006	道の口立ふさち、	道の口塞ち、	道 [欠]
2007	山路真中	*	[欠]
2008	走通る時分、	*	[欠]
2009	螺や石ひや	*	*
2010	うちならし / \、	*	[欠]
2011	島国も崩す	*	[欠]
2012	氣を立て、	*	[欠]
2013	若谷茶あまやか	*	*
2014	逃戻る時や、	*	*
2015	唯並切に	*	只 [欠]
2016	うちよ留れ、	*	[欠]
2017			瀬底
2018			一 拝ん留やへて
2019			村原
2020	原国の兄弟や、	*	一 やあ原国の兄弟や
2021	山道の中に	*	*
2022	伏よ隠れとて、	*	休しかくり
2023	先の石ひや螺を	まづ、石火矢螺を	*
2024	(才十目) 図に躍出て、	*	*
2025	双方のきんそ	*	*
2026	中に引包て、	*	*
2027	あまそな洩そな	*	*
2028	討よとめれ、	*	*
2029			原国兄弟
2030			一 一礼
2031			村原
2032	やあ泊井や、	*	*
2033	先立ひ	*	*
2034	忍てむちおとて、	*	忍てむち
2035	乙樽か思子	*	*
2036	引取ひ逃て、	*	*
2037	半里程いかい	*	*
2038	城走登て	*	城走登居とて
2039	逃忍て行す	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
2040	見付たんでやり、	*	*
2041	誠たん / \と	*	*
2042	高らかにつけて、	*	たしかにつけて
2043	谷茶石川	*	*
2044	さそへ出からに、	*	*
2045	北の山道に	*	北の
2046	案内しやしやうれ、	*	案内よしうれ
2047			泊
2048			一 拝ん留やへて
2049			村原
2050	やあやあ、	*	
2051	揃ておる人数	*	*
2052	慥にきけ、	*	たによ聞留り
2053	傍輩の中	*	*
2054	不和にともならハ、	*	*
2055	怪我事の基ひ	*	*
2056	事障りたひもの、	*	*
2057	腹の立まゝに	*	はら立る俣に
2058	短気するな、	*	*
2059	ゑひ / \、能々勘忍	*	
2060	題目とやゆる、	*	
2061	惣人数	*	*
2062	一 拝む留やへて、	*	*
2063	村原	*	*
2064	一 はあ揃ておる人数	*	*
2065	肝合ちをれハ、	*	*
2066	誠勝子軍	*	*
2067	疑やなひらぬ、	*	*
2068	たう / \手配の通	*	*
2069	油断するな、	*	*
2070	さあ / \	*	*
2071	急ち立向ら	*	*
2072	いそち打立に、	*	急ちおし寄ら
2073		* * * *	
2074	乙樽思子引取逃走はや作田ふし	*	思子出羽いちんたうふし
2075	一 おそ風もすたしや	*	*
2076	風車とゝもに	*	*
2077	押つれて互に	*	*
2078	遊ふうれしや	*	*
2079	乙樽	*	*
2080	一 思子取戻ち	*	一 思子取戻そ
2081	すき間はからやひ、	*	あけ間計やひ
2082	むち入の人に	*	*
2083	ましり、出ん、	まぎれ出ぢる。	*
2084	鬼瀬	喜瀬の大屋子 北表の幕より出る	*
2085			一 やあ思子我身
2086	一 鬼瀬たやへ	喜瀬だやべる。	鬼瀬大屋子たいやへ [欠]
2087	御供しやへら、	*	[欠] 御供しや [欠]
2088	泊井	泊詞 橋掛より出る	*
2089	一 むゝにや時分たひらう	*	[欠]
2090	城走のほて、	*	[欠]
2091	谷茶(石川)、誘ひたさう、	谷茶誘出さう。	[欠]
2092	され / \	*	[欠]
2093	大川のあむ前や、	*	[欠]
2094	思子引取て	*	*
2095	北表の山路	*	[欠]
2096	逃めしやいへひたん、	*	[欠]
2097	谷茶	*	*



No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
2098	一 あゝ扱も/\、	*	一 さても/\
2099			ふんのか/\
2100	やあ石川のひや	*	やあ石川のひ [欠]
2101	/\、	*	[欠]
2102	石川	*	[欠]
2103	一 ふう	*	[欠]
2104	谷茶	*	*
2105	一 大川のなし子	*	*
2106	盗取て逃る、	*	*
2107	急ち追つけて	*	*
2108	奪取らに、	*	*
2109	さあ/\	*	*
2110	いそけ/\、	*	*
2111	石川	*	*
2112	一 やあ/\、	*	一 はあ
2113	大川のなし子	*	*
2114	盗取て逃る、	*	*
2115	急ち立(出)て	*	*
2116	御供しやうれ、	*	御供しやへら
2117			同人
2118			やあ按司かなし
2119			敵の計や
2120			いか程かやよら
2121			用心のんすらぬ
2122			追掛て済ん
2123			こまからや戻て
2124			おの計しやへら
2125	谷茶	*	*
2126			一 いや臆病な事云な
2127			石川
2128			一 やあ按司かなし
2129	一 いや供列もいらぬ	*	
2130	急け/\、	*	
2131			
2132			谷茶
2133			一 いや
2134	同人	*	*
2135	一 あれよ/\、	*	一 あり/\
2136	忍(注、字は忍になっている) 義 忘却	恩儀忘却	恩賞も知らん(注、「賞」の字は 責に近い)
2137	情切やから、	*	*
2138	乙樽	*	*
2139	一 やあ/\、	*	*
2140	村原よ始	*	*
2141	原国のなし子、	原国がなし子	原国がなし子
2142	思子、御迎に	*	思子御迎
2143	忍てきちをゆん、	*	*
2144	此間の忍(注、字は忍になっている) に	此間の恩に	此間の恩
2145	つける事たひもの、	*	送気か事たいもの
2146	急ち立戻て	*	*
2147	命ちとるな、	*	*
2148	谷茶	谷茶詞 北表の幕より出る	*
2149	一 いや仕合とやゆる	*	*
2150	村原もともに、	*	*
2151	乙樽	*	*
2152	一 寄よらハよすれ	*	*
2153	切はたちとらさ、	*	果ちとらさ

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
2154	村原	村原詞 橋掛より出る	*
2155	一 やあ谷茶	*	*
2156	欲悪の報ひ	*	*
2157	武運つきはてゝ、	*	武運つきはて
2158	村原【の】(か)前に	*	*
2159	廻てきちやめ、	*	廻り来る
2160			
2161			
2162	同人	*	谷茶
2163	一 いやぬかすまひ、	*	一 いやぬかすまい
2164	原国	原国兄弟詞 南表の幕より出る	*
2165	一 やあ谷茶、	*	*
2166	原国兄弟か	*	*
2167	待受てをす	*	待請て [欠]
2168	しつちをため、	*	[欠] あため
2169	谷茶	谷茶詞 北表の幕より出る	*
2170	一 いや、ちゆつかぬもたらぬ	*	一 いや一刀に [欠]
2171	すひさんなわらへ、	*	[欠]
2172	兄弟	原国兄弟詞 北表の幕江谷茶追入る	*
2173	一 ひやひやひ	ひやあやい。	一 いや [欠]
2174	同人	同人 同所より出る	*
2175	一 谷茶あまやや	*	[欠]
2176	原国兄弟か	*	[欠]
2177	打取やへたん、	*	[欠]
2178	村原	村原詞 橋掛より出る	[欠]
2179	一 兄弟の手柄	*	[欠]
2180	ならふものをらぬ、	*	[欠]
2181			
2182			
2183	瀬底	*	谷茶供
2184	一 残てをる人数	*	*
2185	降参たやへる、	*	*
2186	村原	*	*
2187	一 神妙なこと / \、	*	*
2188	若按司	若按司詞 北表の幕より出る	
2189	一 やあ村原よ、	*	
2190	村原	*	同人
2191	一 やあ思子	*	*
2192			若按司
2193			一 やあ村原よ
2194	東江ふし	*	
2195	一 あけ夢かやゆら	*	
2196	村原	*	*
2197	一 あゝ拝てなく事や	*	*
2198	ゆめかややへいら、	*	夢かやよら
2199	過し按司添も	*	過し按司そへ
2200	嬉しやめしやいら、	*	しらしふしやの
2201	乙樽	*	*
2202	一 やあ / \、	*	*
2203	敵の島国や	*	*
2204	籠の鳥心、	*	*
2205	思て自由ならぬ	*	*
2206			
2207	待兼るけふや、	*	*
2208	谷茶あまやあか	*	*
2209	生れ日てやり、	生れ日よてやり	生れ日よてやひ
2210	世話にとひかかて	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
2211	気のかぬあれハ、	*	気のかんあ
2212	思子もり名付	*	*
2213	逃忍ふ後に、	*	*
2214	谷茶追掛て	*	*
2215	のかるかたなひらぬ、	*	*
2216	是迄よとめハ	*	*
2217	美御迎ニいまふち、	*	*
2218	けふ拝事や	*	又拝も事や
2219	夢かやゆら、	*	*
2220			
2221			
2222			
2223			
2224	村原	*	*
2225			
2226			
2227			
2228	一 おもはずに兼て	*	*
2229	内通のあれハ、	*	*
2230	おの手組しちおて	*	*
2231	美御迎しちやん、	*	美御迎んしちやる
2232	やあ乙樽、	*	*
2233	女身の上に	*	女身の上の
2234	命ちふり捨て、	*	*
2235	敵の手ニ渡り	敵の手に渡る	敵の手に
2236	思子取戻ち、	*	*
2237	あゝ末代の手本	*	*
2238	沙汰とのこる、	*	*
2239		西川の子使詞 橋懸より出る	西川
2240	一 され西川の子	*	一 さり / \ 我身や
2241	使たやへる、	*	西川の子使たやへる
2242			城取帰ち
2243	城乗取やひ	*	城乗取て
2244	おれ / \ の用意	*	*
2245	美御迎たやへる、	*	*
2246	村原	*	*
2247	一 一段な事よ / \、	一段な事 / \。	一 一段な事 / \
2248	村原	*	
2249	一 あゝ思子も拝て	*	あゝ思子も拝ミ
2250	敵もうちすまち、	*	*
2251	かにある誇らしやゝ	*	*
2252	ものにたとらぬ、	*	物に立らぬ
2253	たう / \、本の御城に	*	[欠] 御城に
2254	美よんつかい拝ミやへら、	*	美御 [欠] 拝ま
2255	若按司	*	*
2256	一 嬉しさや互に	*	一 嬉しさや互 [欠]
2257	踊て戻ら、	*	列 [欠]
2258	村原	*	総人数
2259	一 うれしさや踊羽	*	*
2260	御供しやへら、	*	御供しやへ [欠]
2261			
2262			
2263			
2264	しほらひふし	*	村原
2265	一 御代つきよめしやうち	*	一 御代継にめしやうち
2266	本の御城に	*	御城
2267	おかけほさへめしやうれ	*	御掛ふさめし [欠] うれ
2268	玉の思子	*	*

No.	尚家本組踊集	校注 琉球戯曲集	豊川家(不明)
2269			
2270			
2271			
2272			

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1	大川敵討	忠孝婦人	忠孝婦人村原組
2			大川敵討
3			
4			拍子木打候得は琴三味線手毎にて 村原出ル／敵討之時大鼓ひやちや うちやく打ふらかい吹
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24	谷茶之按司金入錦之入道頭巾向に 金磨之龍之角飴有ル太刀刀茶色緞 子羅陳羽織錦之飴有ル脚胖足袋大 団金入錦之細帯		着付谷茶の按司髪金入錦之入道頭 巾向に金磨之龍角飾有ル刀差緞子 衣裳羅陳羽織錦之飾有ル脚胖足袋 大團羽持
25	石川満名黒綸子入道頭巾向に金欄 に而飴有ル黒細裕衣裳刀脚胖足袋		石川満納髪黒縹子入道頭巾向に金 欄にて飾有ル絹布衣裳脚胖足袋
26	門番黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣 裳脚胖足袋差繩		門番髪黒めん入道頭巾絹布衣裳脚 胖足袋差繩
27	きやうちやく持黒木綿単衣裳脚胖 足袋		ちやうちやく持髪かふうう絹布衣 裳脚胖足袋高つふひ
28	若按司かしらひ板ゞ縮緬振袖単衣 裳足袋風車こふすい		若按司髪角からかへ板ゞ縮緬振袖 裕衣裳緋紗綾足袋風車持
29	村原黒綸子入道頭巾向に金欄に而 飴有ル黒紗綾裕衣裳綸子広袖羽織 刀太刀足袋物質之時黒綸子入道頭 巾編笠細物加籠に入付陳賦之時羅 陳羽織甲胸当脚胖金之磨		村原髪黒縹子入道頭巾向に金欄に て飾有ル絹布衣裳縹子広袖羽織刀 差脚胖足袋但中入より黒縹子入道 頭巾あみ笠かつき物売かくに細物 入付かたけ出ル陳賦之時より羅陳 羽織甲かつき胸当脚胖足袋
30	原国兄弟長刀半向頭巾紕花青銅ネ 同衣裳脚胖足袋中入より入道頭巾 綿		原国兄弟髪半向頭巾紕縮緬衣裳脚 胖足袋中入より黒縮緬入道巾向に 飾有ル長刀持
31	村原母并妻かもし紫長巾金銀水引 熨斗作花助巾琉縫薄衣裳足袋妻谷 茶城江参候時女笠杖持帰り候時長 刀母黒地形付衣裳		村原母并妻垂髪紫長巾作花差琉縫 薄衣裳紕縮緬足袋同人妻谷茶城江 参候時女笠かつき杖持出ル且逃帰 候時途中にて喜瀬の大屋子長刀渡 シ

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
32	西川の子瀬底下こおり西川の支 (ママ)喜瀬之大屋子四人黒西洋 布入道頭巾黒木綿単衣刀脚胖足袋		西川之子瀬底下庫(广+東)理西 川之使喜瀬大屋子髪黒縮緬入道頭 巾絹布衣裳刀差脚胖足袋
33	泊井紕西洋巾黒木綿衣裳脚胖足袋 陳賦之時黒西洋入道頭巾		泊紕緬巾ニて請八卷玉色染木綿衣 裳脚胖足袋陳賦之時より髪黒縮緬 入道頭巾絹布衣裳刀差
34	村原子紕縮緬衣裳		附村原妻子抱出ル子紕縮緬衣裳
35		村原	村原
36	一 出様ちやるものや、	是や	*
37	大川の按司の頭役	*	*
38	村原のひや、	*	*
39	今婦仁の城	*	*
40	御使にいきやひ、	*	*
41	戻る道すから	*	*
42	聞ハ腹立や、	*	*
43	あゝ谷茶あまやか	はあ谷茶あまやか	はあ谷茶あまやか
44	野心事巧て、	*	*
45	のゝ事も思ぬ	*	*
46	大川の按司の、	*	*
47	国々の按司部	*	*
48	討たんでやりしゆんで、	*	*
49	島々よ廻て	*	*
50	段々にいなち、	*	*
51	加勢頼入	*	*
52	軍押寄すて、	*	*
53		大川の城	大川の城
54		七重八重	七重八重
55		取囲ミかくて	取囲めかくて
56	俄事やれは	*	*
57	分別もならぬ、	*	*
58	多勢(二無勢)	多勢無勢	*
59	力及はらぬ、	*	*
60	按司や討死	*	*
61	思子の事や、	*	*
62	あゝ口惜や	*	*
63	敵の生捕やい、	*	*
64	按司の跡つかち	按司の跡継	*
65	御素立よてやり、	*	*
66	欲悪なやから	*	*
67	慈悲の肝飭て、	*	*
68	此村原か	*	*
69	有難さ思て	難さ思て	*
70	降参よすらハ、	*	*
71	思子諸ともに	*	*
72	打果さむての	*	*
73	計得とやゆる、	計得知よる	*
74	あゝ心れてとをゆる	*	*
75	仕合しとやゆる、	*	*
76	大川の御運	大川の武運	*
77	世に残てをれハ、	*	*
78	いきやしかな思子	*	*
79	取戻ちからに、	*	*
80	時節待受て	*	*
81	敵討んともて、	*	*
82	村原か命ち	村原か	*
83	なからへてをゆん、	*	*
84	あゝたうと	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
85	神仏そろて	*	*
86	助やひたはふれ、	*	*
87			
88	村原母妻子出羽散山ふし	*	*
89	一 まことかや実か	*	*
90	ワきもほれ / \ と	*	*
91	ねさめおとろきの	*	*
92	夢の心地	*	*
93		乙樽	*
94	一 三人の者や	*	*
95	大川の按司の、	*	*
96	頭役村原か	*	*
97	母やとちなし子、	*	*
98	谷茶あまやか	*	*
99	野心事巧て、	*	*
100	のゝ事も思ぬ	*	*
101	大川の按司の、	*	*
102	国々の按司部	*	*
103	討んでやりしゆんで、	*	*
104	島々よ廻て、	*	*
105	色々に云なち、	*	*
106	加勢頼入	*	*
107	軍押寄て、	*	*
108	按司添と共に	*	*
109	村原のひやも、	*	*
110	討死よてやり	*	*
111	しらへのあれハ、	知せ部の有は	しらしへのありは
112	夢現心	*	*
113	肝もきもならぬ、	*	*
114	無常の此世界や	*	*
115	かにもあるひ、	*	*
116	やああや前よ、	*	*
117	なく泪ともに	鳴く泪と共に	*
118	なひ【ほしやと】ほしやとあすか、	*	*
119	忍ひ隠れとて	*	*
120	一人子乙松【か】(や)、	*	*
121	取素立 / \	*	*
122	人になちからや(に)、	*	*
123	親ふしの跡や	*	*
124	継しほしやの、	*	*
125	たう / \ 落る露泪も	*	*
126	押はらへ / \、	*	*
127	御気張よめしやうれ	*	*
128	御供しやへら、	*	*
129	母	*	*
130	一 いらぬ年寄の	*	*
131	長生ハしちをて、	*	*
132	あけやうこの憂目	*	*
133	むるか心気、	*	*
134	逆ももろともに	*	*
135	ならんてやりすれハ、	*	*
136	朝夕手はなさぬ	*	*
137	玉の乙松か、	*	*
138	花のおもかほの	花の俤の	*
139	名残立増て	*	*
140	いきやしわすれゆか	*	*
141	あの世までも、	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
142	乙樽	*	*
143	一 いらぬことめしやうな	産子むなひ双れ	*
144	後れてや済ぬ、	治居んならん	*
145			
146			
147	気にまかち三人	*	*
148	諸共にならハ、	*	*
149	村原か跡に	*	*
150	残る者をらぬ、	*	*
151	乙松よ素立	*	*
152	程程になさハ、	程々にならハ	*
153	君親の事も	君親の事や	*
154	すらな置め、	*	*
155		たう / \ 入らぬ事召うな	
156		後りてや済ん	
157	たう / \ 御気張よめしやうれ	御気張よ召れ	*
158	御供しやへら、	*	*
159	仲間ふし	三人道行子持ふし	*
160	一 あたら人間に	*	*
161	生れやひをすか	*	*
162	やす / \ とくらす	*	*
163	ひまもなひらぬ	*	*
164	乙樽	*	*
165	一 のゝ罪のあたか	*	*
166	つれなさや三人、	*	*
167	母	*	*
168	一 あげやう忍はらぬ	*	*
169	心くら闇に、	*	*
170	道行なかんかりふし	子持ふし	*
171	一 ゆきまよひ / \	*	*
172	乙樽		*
173	一 いく先やしらぬ	*	*
174	野山さくひらも、	*	*
175	なかんかりふし		*
176	一 たゝあしにまかち	*	*
177	乙樽		*
178	一 かゝる方なひらぬ	*	*
179	行来しら玉の、	*	*
180	母	歌	*
181	一 露なたやあられ	*	*
182	雪もふり増て、	*	*
183			
184			
185			
186	子持ふし	母	*
187	一 冬の山嵐や	*	*
188	あし本もつまで	*	*
189	肝もきもならぬ	*	*
190	あげやういきやなゆか	*	*
191	乙樽	*	*
192	一 御気張よめしやうれ	*	*
193	頓て夜もあける、	*	*
194			
195			
196			
197			
198			
199	母	*	*



No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
200	一 肝お(う)すていきゆん	*	*
201	しはしやすま、	*	*
202	乙樽		*
203	一 やああや前よ、		*
204	/、		*
205	同人	乙樽	*
206	一 此子たちをれは	*	*
207	すと親のことも、	姑親の事や	姑親の事や
208	肝の俣ならぬ	*	*
209	急ちいそからぬ、	*	*
210	うつかつとしちをて	*	*
211	敵におひつかれ、	*	*
212	三人共憂め	*	*
213	むたよいかとても、	*	*
214	此子ともすてゝ	*	*
215	身すからになれハ、	*	身すからにならハ
216	すと一人かことや	*	*
217	自由になゆん、	*	*
218			同人
219	一 義理の道たひもの	*	*
220	思きらなゝゆめ、	*	*
221	やあ乙松よ、	*	やあ乙松
222		/、	/、
223	ワぬことる親に	*	*
224	なさつたる因果、	*	*
225	是までよたひもの	*	*
226	母の面かほも、	*	*
227	夢現心	*	*
228	起てむてよ、	*	*
229	あけやうあてなしの	*	*
230	のゝこともおまぬ、	*	*
231	哀れ楽々と	*	*
232	ねるか心気、	*	*
233			東江ふし
234			一 衾楽/、と
235			ねるか心気
236		同人	乙たる
237	やあ乙松よ、		*
238	誠後生あらハ、		*
239	父親の側に、		*
240	先立ひむちをて		*
241	まちやいをれよ、		*
242		同人	
243	やあ乙松	やあ乙松よ	*
244	天の引合しに	*	*
245	情けある人の、	*	*
246	素立やひ呉らハ	*	*
247	主人親ふしの、	*	*
248	跡方ハ頼て	跡方や尋て	*
249	尋ねやひ呉れよ、	計得呉よ	*
250			
251			
252			
253			
254	あゝた【ち】(ウ)と、	あゝたうと	*
255	神佛そろて	*	*
256	見守やひたはふれ、	*	*
257	思切ひをすか	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
258	誠つらむては、	*	*
259	我肝忍はらぬ		*
260	やみになゆさ、		*
261	東江ふし	*	*
262			
263	一 ワきもしのはらぬ	*	*
264	闇になゆさ	*	*
265	乙樽	*	*
266	一 やああや前よ、	*	*
267	頓て喜名村や	頓て喜名村	頓て喜名村
268	たよひ島たひもの、	*	*
269	御気張よめしやうれ	*	*
270	御供しやへら、	*	*
271	やああや前よ、	*	*
272	/ \、	*	*
273	母	*	*
274	一 肝もきもならぬ	*	*
275	しはし休ま、	*	*
276	村原	*	*
277	一 是や村原のひや、	*	*
278	義理のませ垣に	*	*
279	かこまれてワ身の、	*	*
280	浅ましや露の	*	*
281	命ちやすか、	*	*
282	思子取戻す	*	*
283	念願のあとて、	*	念願のあとと
284	ねふる夜もねらぬ	*	*
285	忍てまわる、	*	*
286		同人	
287	こねや夜深さに	こねや夜深くに	*
288	童へ鳴声や、	*	*
289	いきやしちやる事か	*	*
290	立寄ひむたに、	*	*
291		同人	
292	やあ乙松、	*	やあ乙松よ
293	あゝ身にかへて朝夕	*	はあ身に替て朝夕
294	撫素立しゆたる、	撫素立しちやる	*
295	この一人子やすか	*	*
296	ミたれ世になれハ、	*	*
297	哀れこのなひに	*	*
298	なすか心気、	*	*
299	母と乙樽も	*	*
300	行来しら玉の、	*	*
301	露霜と共に	雪霜と共に	*
302	なたらとめハ、	*	*
303	あゝ浅ましや、	*	*
304	いや、無常の此世界の	*	*
305	習ひやしらね、	*	*
306	おくれてやすまぬ	*	*
307	先にかゝら、	先に掛り	*
308	乙樽	*	*
309	一 やああや前よ、	*	*
310	/ \、	*	*
311	村原	*	*
312	一 やあ / \、	*	*
313	かにある雪降に	*	*
314	こかと山道に、	*	*
315	いきやしちやる事か	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
316	二人の者や、	*	*
317	乙樽	*	*
318	一 首里からとやすか	*	*
319	旅の上の習や、	*	*
320	村原	*	*
321	一 やあ母親	*	*
322	やあ乙樽	*	*
323	母	*	*
324	一 やあ村原、	*	*
325	按司添とゝもに	*	*
326	なる筈の者の、	*	*
327	主の恩忘ひ	*	主人恩忘て
328	孝の道しらぬ、	*	*
329	のゝつらのあとて	*	*
330	とまいてきちやか、	*	*
331	浅ましや村原	*	*
332	命のあたらしやひ、	*	*
333	妻子のなさけ	*	*
334	しのはらぬあため、	*	*
335	村原	*	*
336	一 あゝめしやいること、	*	*
337	按司添と共に	按司と諸共に	*
338	なる筈とやすか、	*	*
339	思子の事と	思子の事や	思子の事や
340	敵の生捕やい、	*	*
341	村原も共に	*	*
342	打果さむての、	*	*
343	分別ハ出ち	*	*
344	いこと葉ハ饅て、	*	*
345	過し按司かなし	*	*
346	跡継の思子、	*	*
347	御素立よてやり	*	*
348		【時節待請て】	
349	語ひへのあれハ、	*	*
350	いきやしかな思子	*	*
351	引取んともて、		*
352		取戻ちからに	
353		時節待請て	
354		敵討んともて	
355	村原か命ち	*	*
356	なからへてをゆん、	*	*
357	母	*	*
358	一 今のことやれハ	*	*
359	誇らしやとあゆる、	*	*
360	肝にきもそへて	*	*
361	念の入れよ、	*	*
362	村原	*	*
363	一 村原かいきち	*	*
364	此世界にをとて、	此世界に	*
365	思子取戻ち	*	*
366	敵討な置め、	*	*
367	あゝ思ひ世に残ち	*	*
368	死やならぬ、	*	*
369	やあ乙樽、	*	*
370	いきやし乙松	いきやし乙松や	*
371	すてゝあたか、	*	*
372	母		*
373	一 咲出ゆる花ハ		*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
374	ワ身に思かへち、		*
375	のゝ肝のあとて		*
376	捨てあたか、		*
377	乙樽	*	*
378	一 大川の城	*	*
379	仕合の時に、	*	*
380	按司添と共に	*	*
381	討死によ(て)やり、	*	*
382	語ひへのあれハ、	*	*
383	沙汰よ聞及て、	*	*
384	三人逃忍て	*	*
385	こまゝてやきやすか、	*	*
386			
387			
388	親かなし事や	*	*
389	なれぬ山道の、	*	*
390	さくひらのつかれ	*	*
391	足本もつまで、	*	*
392	急ちいそからぬ	*	*
393	うつかつとしちをて、	*	*
394	敵に追つかれ	*	*
395	三人共憂目、	*	*
396	むたよいか迎も	*	*
397	哀れなく/ゝも、	哀泣々に	*
398	すとおやのために	*	*
399	すてゝあたん、	*	*
400	村原	*	*
401	一 あゝ此上とやすか	*	一 あゝ此上よやりは
402	誇らしやとあゆる、	*	*
403	またも世に出る	*	*
404	運のめくひ	*	*
405	乙樽	*	*
406	一 やあ/ゝ、	*	*
407	思子の事や	*	*
408	御格護よてやり、	*	*
409	聞ハ、嬉しさや	*	*
410	仕合とやゆる、	*	*
411	我身に思つきやる	我身に計とる	*
412	事の又あすや、	*	*
413	あん前に名付	あ母前に躍(やつ)れ	*
414	忍てむちからに、	*	*
415	命救てたはふれてやり	*	*
416	誠たん/ゝと、	*	*
417	色々にいやは、	*	*
418	欲悪な谷茶	*	*
419	巧てをることの、	*	*
420	便りはしともて	*	*
421	疑ひやなひらぬ、	*	*
422	抱(かげ)置積り、	抱置る積い	*
423	我肝落着やい	わ肝落着て	我肝落つきゆて
424	心ゆるさしやい	*	心ゆるささやい
425	思子守なつけ	*	*
426	引とやひきやへら、	*	*
427	村原	*	*
428	思子為てやり	*	*
429	女身ハひちゆひ、	*	*
430	敵の手にやらす	*	*
431	事やならぬ、	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
432	乙樽	*	*
433	一 女又やても	*	*
434	男またやても、	*	*
435	思子のために	*	*
436	肝やひとつ、	*	*
437	乙樽原(ママ)	村原	村原
438	一 肝の上の事や	*	*
439	おの筈とやすか、	*	*
440	気二まかちすにゆめ	*	*
441	義理のならひ、	*	*
442	乙樽	*	*
443	一 義理の道ですも	*	*
444	君親の為に、	*	*
445	肝盡す外の	*	*
446	事やなひさめ、	*	事やにやさめ
447	村原	*	*
448	村原か生ち	*	*
449	此世界にをとて、	*	*
450	思子為てやり	*	*
451	義理の道曲て、	義理の道狂て	*
452	女あてなしハ	*	*
453	敵の手にやらち、	*	*
454	末代の恥辱	*	*
455	面目やきやしゆか、	*	*
456	曾て此事や	*	*
457	ゆるす事ならぬ、	*	*
458	乙樽	*	*
459	一 いちもやく立ぬ	*	*
460	事す又やらハ	事よ又やらハ	*
461	わない、女やても	*	*
462	谷茶あまやに、	*	*
463	一刀も掛て	一刀に掛て	*
464	討死はすらな、	討死よすらな	*
465	徒に命ち	*	*
466	なからへてのしゆか、	*	*
467	たう / \ ゆるちたはふれ、	*	*
468	母	*	*
469	一 あゝ事あらくするな	*	*
470		事急ちするな	
471	やあ乙樽、	やあ乙樽よ	*
472	思子為やれハ	*	*
473	おの筈とやすか、	*	*
474	事あらくしちや	*	事あらくしゆすや
475	仕損しの基ひ、	*	*
476	思子までかゝて	*	*
477	大事あらんしゆもの、	*	*
478	細々とまたく	*	*
479	はからやひくひれよ、	計得呉よ	*
480	乙樽	*	*
481	一 肝ぬるさしちをて	*	*
482	若か谷茶か	*	*
483	手段引替ち	*	*
484	思子の上に、	*	*
485	あらし聲のあらハ	*	*
486	願てをることも、	*	*
487	思てやくたゝぬ	*	*
488	あたとなゆる	*	*
489	村原	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
490	一 やあ乙樽、	*	*
491	女只ひちゆひ	*	*
492	敵の手にやらず、	*	*
493	きもの忍はらぬあてと	肝の忍らん	*
494	断やしちやる、	むぼんてやりいちやる	断もしちやる
495	今の心さし	あゝ今の志し	*
496	いちも盡さらぬ、	*	*
497	誠村原か	*	*
498	とちの本意、	*	*
499	此外に手段	*	*
500	分別もならぬ、	*	分別やにやらぬ
501	たう / \	*	*
502	念に念添て	*	*
503	気張て呉れよ、	働い呉れよ	*
504	乙樽	*	*
505			
506	一 思たこと叶て	*	*
507	ほこらしやとあゆる、	*	*
508	命のあるかきり	*	*
509	こゝろつくさ、	心尽しやへら	*
510	母	*	*
511	一 やあ乙樽、	*	*
512	思子為てやり	*	*
513	命ちふりすてゝ、	*	*
514	今のこと云すや	*	*
515	誇らしやとあすか、	*	*
516	行先の定め	*	行先の寔
517	さたまらぬあれハ、	*	*
518	あけやう思盡す	あけやう思盡ち	あけやう思盡ち
519	かたもなひらぬ、	*	*
520	乙樽	*	*
521	一 人の願事の	*	*
522	あたに又なゆめ、	*	*
523	こゝろ安す / \と	*	*
524	御待めしやうれ、	*	*
525	村原	*	*
526	一 やあ乙樽、	*	*
527	あらく掛引も	*	*
528	有積りたひもの、	*	*
529	腹立ぬことに	*	*
530	心しつめとて、	*	*
531	いこと葉に應し	*	*
532	取廻し / \、	*	*
533	請答よふ	請返答やう	請返答やう
534	了簡よすれ、	了簡よすれよ	了簡よすれよ
535	乙樽	*	*
536	一 我胸に留て	*	*
537	ワか肝に染て、	*	*
538	仰す事まゝに	*	*
539	念のいらに、	念を入らに	*
540	村原	*	*
541	一 若か事洩て	*	*
542	ならぬおの涯や、	*	*
543	別に計とる	*	*
544	手段又あもの、	*	*
545	後れらぬことに	*	*
546	切巧てをる次第、(切は見せ消ちか)	巧て居る次第	巧てをる次第

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
547	親子此三人	*	*
548	隠とる段、	*	*
549	一々細々	*	*
550	白状よすれ、	*	*
551	あゝ繰返し / \	はあ繰返し / \	*
552	又事とやすか、	*	又事やすか
553	互に面目や	*	*
554	失なワぬことに、	*	*
555	思子引とゆる	*	*
556	要目ところ、	*	*
557	多ひ能々分別	*	*
558	題目とやゆる、	*	*
559	やあ乙樽、	*	*
560	やく立ぬ我身の	*	*
561	とじなたる因果、	*	*
562	あゝ口惜や、	*	*
563			
564			
565			
566			
567			
568			
569			
570			
571			
572			
573	乙樽	*	*
574	一 たとひ事洩て	*	*
575	生殺しされててやり、	活殺しされてたい	*
576	思子為やれは	*	*
577	残る事なひらぬ、	*	*
578	心安す / \と	*	*
579	極楽とやゆる、	*	*
580	村原	*	*
581	一 あゝいふる事よきけハ	*	*
582	肝にひし / \と、	*	*
583	むかし物語り	*	*
584	聞ゆることに、	*	*
585	よの中の手本	*	*
586	沙汰と残る、	*	*
587	乙樽	*	*
588			
589			
590			
591			
592			
593	一 此子乙松や	*	*
594	御素立めしやうち、	*	*
595	人なゆることに	*	*
596	計やひたはふれ、	計得給り	*
597	村原	*	*
598	一 念遣するな	*	*
599	おの素立しゆもの、	*	*
600	すと子の事や、	*	*
601	気遣するな、	気遣よするな	*
602	乙樽	*	*
603	一 やああや前よ、	*	*
604	頓てワか思子	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
605	をかてこんしゆもの、	*	*
606	肝願よしちをて	*	肝の願しちをて
607	御待めしやうれ、	御待召うれ	*
608		母	
609		一 義理のみちやれは	
610		留てとみらん	
611	母言葉并伊野波ふし		*
612	一 義理のみちやれハ		*
613	留てとめらんぬ、		*
614	乙樽	*	*
615	一 よ所しれ(て)からや	*	*
616	大事あらんしゆもの、	*	*
617	急ち立戻て	*	*
618	まちやひいまふれ、	御待召うれ	*
619	伊野波ふし下句	歌	*
620	一 のかすとくかにある	*	*
621	夢の世界や	夢の浮世	*
622			
623		仲間ふし	
624		一 是迄かやよら	
625		又拝む事ん	
626		今日の出立や	
627		定くれしや	
628	乙樽道行金武ふし	乙樽道行饒火ふし	*
629	一 胸にものおめハ	*	*
630	歩む道ほとも	*	*
631	覺らすにつきやさ	*	*
632	本の城	*	*
633	乙樽	*	*
634	一 覺らすに谷茶	*	*
635	城元につきやん、	*	*
636	物めつめしちをて	*	*
637	案内よすらに、	*	*
638			
639	やあ/\、御取次頼ま	*	*
640	ものしられしやへら、	*	*
641			
642	門番	*	*
643	一 はあ/\無作法/\、	*	一 はあ無作法/\
644	内原にいきやひ	*	*
645	御取次しやうれ、	*	*
646	乙樽	*	*
647	一 やあ/\、	*	*
648	我身や大川の	*	*
649	思子虎千代が、	*	*
650	乳親とやゆる	*	*
651	守あんとやゆる、	*	*
652	大川の城	*	*
653	仕合の時(に)	*	*
654	あへてさま逃て	*	*
655	かくれやひをたん、	*	*
656	かゝる方なひらぬ	*	*
657	すかる方なひらぬ、	暮そ方ないらぬ	*
658	聞ハ御慈悲あて	*	*
659	守素立思子、	*	*
660	御素立のあんで	*	*
661	音信よをかて、	*	*
662	思子諸共に	*	*



No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
663	命つかんともて、	*	*
664	よしれやひをもの	*	*
665	頼て御情に、	*	*
666	御取次めしやうち	*	*
667	助やひ給ふれ、	*	*
668	門番	*	*
669	一 はあ云ることよ聞ハ、	一 あゝ云る事よ聞ハ	*
670	無蔵なもの、	無蔵なものさらめ	*
671	たう/\、むまに	*	*
672	待ひをれよ	待うれ	*
673	/\、		*
674	同人		*
675	拝れよめしやいん		*
676	あれに居やうれ、		あまにいやうれ
677	谷茶	*	*
678	一 やあ/\、	*	*
679	大川のなし子	*	*
680	乳母てる女、	*	*
681	いきやあれはずにゆか	*	*
682	考てみやうれ、	*	*
683			
684			
685	満納	*	*
686	一 され按司かなし、	一 やあ按司かなし	*
687	大川のなし子	*	*
688	引取んてやり、	*	*
689	村原のひやか	*	*
690	計得とやゆる、	*	*
691	あゝあれほどの村原も	はああり程の村原も	はああれ程の村原も
692	運の未なれハ、	*	*
693	わにやかかけの内に	*	*
694	首いれる仕形、	*	*
695	こまや楽々と	*	*
696	足たくてをとて、	*	*
697	村原のひやか	村原のひや	*
698	計事便て、	*	*
699	村原からめゆる	*	*
700	時節きやあへたん、	*	*
701	扱々御果報	*	*
702	急い事たやへる、	*	*
703	谷茶	*	*
704	一 一段な事よ	*	*
705	/\、	*	*
706	やあ石川のひやゝ、	やあ石川のひや	やあ石川のひや
707	へつに了簡の	*	*
708	あひかしゆら、	*	*
709	石川	*	*
710	一 満納いやれること、	*	*
711	一々尤	*	*
712	同意たやへる、	*	*
713	谷茶	*	*
714	一 扱も/\、	*	*
715	分才もしらぬ	*	*
716	此按司に向て、	*	*
717	すひさんなやから	*	*
718	ゆるす事ならぬ、	*	*
719	急ち引出ち	*	*
720		生責のたくひ	

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
721	責のあるかきり、	*	*
722		生責よしやうり	
723	せめて有筋		*
724	白状よしめれ、		*
725	石川	満納	*
726	一 拝むちゆめやへて、	*	*
727		同人	
728	やあよしれとる女	*	*
729	出す/、	*	*
730		案内者	
731		一 拝留やひて	
732	下部		*
733	一 さあ/、	やあ/、	*
734	御前寄て拝め	御前寄て拝ミ	*
735	御側よて拝め、		*
736		出やうれ/、	
737			
738		さあ/、	
739		居やうれ/、	
740	満納	*	*
741	一 やあ女、	*	*
742	得と肝ゐして	*	*
743	慥にきけ、	慥に聞入	*
744	おかたちか巧ミ	たちか巧ミ	*
745	たくてをる事や、	*	*
746	尋らぬ先に	*	尋らぬ先に
747	合点とやゆる、	*	*
748	直におの科に	直におの科や	*
749	当る筈やすか、	*	*
750	科もかんすらぬ	*	*
751	責もさぬことの、	責もさんことに	*
752	御慈悲ある天の	*	*
753	御情のあとて、	*	*
754	村原か行衛	*	*
755	おんにゆけるやらハ、	*	*
756	巧てをる事の	*	*
757	おの科もゆるち、	*	*
758	島知行もとらち	島知行もとらさ	*
759	引はらふしまても、	*	*
760	おの御肝きやへや	*	*
761	ある筈よたひもの、	*	*
762	御情の御肝	*	*
763	ミすく取請て、	*	*
764	肝われて實に	*	*
765	おんにゆけやうれ、	*	*
766			
767			
768	同人	*	*
769	一 あゝ好てこのまらぬ	*	一 はあ好てこのまらぬ
770	天運のめぐり、	*	*
771	勘違するな	*	*
772	/、	*	*
773	乙樽	*	*
774	一 村原か事や	*	*
775	討死かしちやら、	*	*
776	音信もなひらぬ	*	*
777	沙汰もきかぬ、	*	*
778	女あてなしの	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
779	のゝ思のあゆか、	*	*
780	命のつれなさに	*	*
781	按司かなし天の	*	*
782	十百歳のおかほ	*	*
783	かめ願よしちをて、	*	*
784	御情にワ身の	*	*
785	露程の命ち、	*	*
786	いきやしかなともて	*	*
787	よしれやひをもの、	*	*
788	色分てたはふれ	*	*
789	天の御肝、	*	*
790	満納	*	*
791	一 いや / \、	*	*
792	かくしゆらハ隠す	*	*
793	つゝミゆらハ包め、	*	*
794	肝のあくまゝや	*	*
795	責の有限り、	*	*
796	おの責に当て	*	*
797	聞筈とやすか、	聞筈とやよる	聞筈とやよる
798	責られてからに	*	*
799	おんにゆけるやらハ、	*	*
800	科の上に科や	科の上の科や	*
801	重ならんしゆもの、	*	重ねらんしゆもの
802	せめららぬうちに	*	*
803	おんにゆけやうれ、	*	*
804	乙樽	*	乙たち
805		一 天の道やたら	
806		殺ておらん	
807		情切族ら	
808		大川の按司に	
809		頼方ないらん	
810		村原か為に	
811		包も方無らん	
812		我身のこゝろ	
813	一 のゝこともおまぬ		*
814	女あてなしに、		*
815	罪科よかけて		*
816	うきくれしやしめゆすや、		*
817	村原かしワさ		*
818	恨めてとをゆる、		*
819	のよて身にかへて		*
820	実よかくしやへか、		*
821	此事やつく / \と		*
822	おもてたはふれ、		*
823	満納	*	*
824	一 勘違するな	*	*
825	不勘ともするな、	*	*
826	殺される科も	*	*
827	兼てしりなけな、	*	*
828	責の上(に) 向て	*	*
829	偽やならぬ、	*	*
830	有筋にいちゆて	*	*
831	殺される者も、	*	*
832	昔から今に	*	*
833	数やしらぬ	*	*
834	乙樽	*	*
835	一 村原か行衛	*	*
836	夢程もしらは	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
837	御尋の先に	*	*
838	おんにゆける積り、	*	*
839	のゝおめのあゆか	*	*
840	ワか命の外に、	我身の外に	*
841	のゝ思のあとて	*	*
842	隠ちをゆか、	*	*
843	御言葉に應し	*	*
844	たゝこともないらぬ、	たゝ事やないらん	たら事ものにやらぬ
845	御返事御返答に	*	*
846	つまでをゆん、	*	*
847	石川	*	*
848	一 はあ勘違するな	*	*
849	とんなこといふな、	*	*
850	縦命限り	*	*
851	あらわすなてやり、	*	*
852	堅談合も	*	堅か談合も
853	しちあたんてやりか、	*	*
854	満納いやれること	*	*
855	責のねつられめ、	*	*
856	たう / \、	*	*
857	今のこと細く	*	*
858	真心にいやれば、	真心にいやすん	真心に言れす
859	百すてやあらね	*	*
860	美拝をかてからに、	御拝おかてからに	*
861	みすく取請て	*	*
862	包ますにいやうれ、	*	*
863	あゝ百果報や目の前	*	*
864	引よすてをとて、	*	*
865	人の為にあたら	*	*
866	のちとてやすまぬ、	命とやい済ん	*
867	人間の願の	*	*
868	のゝおめのあゆか、	此外にあよミ	*
869	思てやく立ぬ	*	*
870	村原もすてゝ、	*	*
871	天道のなし子	*	*
872	真肝うちわれて、	真肝打晴て	*
873	生れたるしるし	*	*
874	樂よすれよ	*	*
875	/ \、	*	*
876			
877			
878	石川		
879	一 さあ / \	*	
880	おんにゆけやうれ	*	
881	/ \、	*	
882	乙樽	*	*
883	一 村原かなんと	*	*
884	やから者やても、	*	*
885	網の魚心	*	*
886	只ひちゆいものゝ、	*	只ひちゆひもの
887	こへな御城に	*	*
888	弓引のなゆめ、	*	*
889	たとひ生残て	*	*
890	かたすミにをても、	*	*
891	天の御定の	*	*
892	くる間の命ち、	来る間命ち	*
893	海山にかゝて	*	海山にかたて
894	つくまでとやゆる、	継までとやよる	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
895	あゝ按司かなし御始	按司かなし御始	*
896	石川と満納、	*	石川満納
897	島国よ豊む	*	*
898	人々とやすか	*	*
899	村原のひやゝ	*	村原のひや
900	鬼のことめしやうち	鬼のことしちゆて	*
901	いきやしおれほとも	*	*
902	おとろしやよめしやいか、	*	*
903	谷茶	*	*
904	一 むゝ尤な不審	*	*
905	尤な事、	*	*
906	やあ女、	*	*
907	慈悲情尽ち	*	*
908	大川のなし子、	*	*
909	素立やひあすか	*	*
910	もしか村原か、	*	*
911	いらぬ義理立て	*	*
912	謀叛企(夕)ハ、	*	*
913	大川のなし子	*	*
914	生て置ならぬ、	*	*
915	(誠心實も)	*	*
916	あたになるやれは、	*	*
917	村原も共に	*	*
918	素立ほしやあてと、	*	*
919	細く問尋ね	*	*
920	しゆることよたひもの、	*	*
921	守子為ともて	*	*
922	かくさずに語れ、	真直に語れ	*
923	満納	*	*
924	一 いや、此上に又も	一 此上に又も	*
925	隠しともしゆらハ、	*	*
926	又事もいらぬ	*	*
927	直に引立て、	*	*
928	すねの砕けらハ	*	*
929	胸腹よまでも、	*	*
930	命の有限り	*	*
931	はさみきらしゆもの、	*	*
932	たうおのこゝれしちをて	たう / \ おのこくりしちゆて	たう / \ おの心得しちをて
933	おんにゆけやうれ、	*	*
934	ゑひ差繩持ち	やあ差繩も持	ゑひ差繩も持ち
935	近く寄てをとて、	*	近く寄てからに
936	又も隠しゆらハ	*	*
937	屹度こむせめれ、	*	*
938	下部	案内者	*
939	一 さあ / \	*	*
940	おんにゆけやうれ	*	*
941	/ \、	*	*
942			
943			
944			同人
945	後てやすまぬ	*	*
946	急ちおんにゆけやうれ、	*	*
947			
948	満納		*
949	一 いや、おなためもしらぬ	おなためもしらぬ	*
950	こゝてをゆめ、	こゝて居よか	*
951		乙樽	乙たる
952	一 のゝこともしらぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
953	女あてなしに、	*	*
954	段々の御問こと	*	*
955	御難儀とやゆる、	御難儀とやよる	*
956	いちもやく立ぬ	*	*
957	是非に及はらぬ、	*	*
958	誠正直の	*	*
959	我胸の内や、	*	*
960	責てせめころち	*	*
961	あとに御目掛れ、	*	*
962	近さ拝まれる	*	*
963	天の下をとて、	*	*
964	偽のなゆめ	*	*
965	人の肝の、	*	*
966	満納	*	*
967	一 はあ、つらつきも替て	*	*
968	悪魔やな女、	*	*
969	夫喰る悪生	夫喰よる悪蛇	夫喰る畜生
970	切支丹、	*	*
971	鬼むちやる人の	*	*
972	此世界にをゆめ、	*	*
973	是と鬼やゆる	是と鬼さらめ	*
974	さあ / \	*	*
975	屹度こむ責れ、	*	*
976	下部	案内者	*
977	一 せめられるごうの	*	一 せめられる咎の
978	深さある女、	*	*
979	いきやか / \、	*	*
980	乙樽	*	*
981	一 ちりあくた心	*	*
982	数ならぬワ身の、	*	*
983	殺される事や	*	*
984	露程も思ぬ、	*	*
985	思切ひをすか	*	*
986	のゝこともしらぬ、	*	*
987	女あてなしは	*	*
988	鬼無理にせまで、	*	*
989	責殺す罪の	*	*
990	わかために廻て、	*	*
991	按司かなし上に	按司添前上に	*
992	いきゆらたひいとめは、	*	*
993	死ゆ / \も是や	*	死しにゆん是や
994	気にかゝていきゆん、	*	*
995	谷茶	*	*
996	一 はあ云る事よ聞ハ	一 あゝ云る事よ聞ハ	*
997	理りとやゆる、	*	*
998	縄も掛らすに	*	*
999	責もさぬことに、	*	*
1000	義理の上の嘯	*	義理の上に捌
1001	あらんしゆもの、	*	*
1002	たう / \	*	*
1003	せまである縄も	*	*
1004	急ちときゆるす、	解きとらす	*
1005		案内者	
1006		一 拝留やひて	
1007	乙樽	*	*
1008	一 あゝたうと、	*	*
1009	此御恩たうとさや	*	*
1010	女身のわぬも、	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1011	よしれやひをれハ	*	*
1012	若か村原か、	*	*
1013	生残てをとて	*	*
1014	思子御素立の、	*	*
1015	事よとも聞ハ、	*	*
1016	我身よりも増て、	*	*
1017	時日移さすに	*	*
1018	うち笑ひ/\、	*	*
1019	よしれらな置め	*	*
1020	人の肝の、	*	*
1021	御慈悲御情と	*	*
1022	ワ御主かなし、	*	*
1023	百とまでちやうわれ	*	*
1024	拝てすてら、	*	*
1025	満納	*	*
1026	一 いや、からすよも女	*	*
1027	人やたまそとも、		*
1028	いきやし此満納		*
1029	たまかしのなゆか、		*
1030		なま愚痴の族ら	
1031	そんちむち牢に	*	*
1032	たゝちむちおけ、	*	*
1033	谷茶	*	*
1034	一 いや/\、	*	*
1035	あたまをてもものや	*	*
1036	念入なしちをて、	*	*
1037	仕損してからや	*	*
1038	悔てやく立ぬ、	*	*
1039	思案より外の	思案故外の	*
1040	事やなひさめ、	*	*
1041	たう/\	*	*
1042	事急きするな	*	*
1043	短気するな、	*	*
1044			
1045	扱も/\、	*	*
1046	高程もおちやて	*	*
1047	目口やは/\と、	*	*
1048	雪のしらはくき	雪色の歯口ち	*
1049	物云さし聞ハ、	物云やす聞ハ	*
1050	ごいんから替て	*	*
1051	花の清ら女、	*	*
1052	見れはみる毎に	*	*
1053	おめと増る、	*	*
1054	我が側ニおきやひ	*	*
1055	互に楽々と、	*	*
1056	夢のこの浮世	*	*
1057	暮しほしやの、	*	*
1058	誠真実の、	*	*
1059	我肝とも呉らハ、	*	*
1060	村原か事も	*	*
1061	いやな置め、	*	*
1062	石川と満納	*	*
1063	追ぬけてからに、	*	*
1064	ワ肝明々と	*	*
1065	談合よすらに、	*	*
1066			
1067	やあ/\、	*	*
1068	此事や互に	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1069	おかとしちすまぬ、	おつかとしちならん	*
1070	けふや立別て	けふや立戻て	*
1071			
1072	思案しちからに、	思案しちおとて	*
1073	思ひきハマらは	*	*
1074	呼す筈たひもの、	*	*
1075	戻てむち得と	*	*
1076	考てみやうれ、	*	*
1077	満納	*	*
1078	一 めしやいること、	一 あゝ召いること	*
1079	ものやひとかたに	*	*
1080	おかとしちすまぬ、	*	*
1081	あの女てすや	*	*
1082	村原かとしの、	*	*
1083	乙樽よてやり	*	*
1084	たゝならぬやから、	*	*
1085	女てやりおかと	*	*
1086	ゆるち置ならぬ、	*	*
1087	責らすになんと	*	*
1088	尋たんたひか、	*	*
1089	愚痴の上に愚痴や	*	*
1090	かたまゆる積り、	しる積りやれハ	*
1091	牢に込置て	籠込にしちゆて	*
1092	おのくつさしめて、	*	*
1093	引出し / \	*	*
1094	おの責にあてゝ、	*	*
1095	漸々と気根	*	*
1096	疲ゆる時と、	*	*
1097	有筋に白状	*	*
1098	しゆる積りやれハ、	*	*
1099	御思案の内や	先御思案の内や	*
1100	こめておきやへら、	*	*
1101	石川	*	*
1102	一 満納思寄も	*	*
1103	尤とやすか、	*	*
1104	牢こめもいらぬ	*	*
1105	責もさぬことの、	責もさぬことに	*
1106	御慈悲御情けの	*	*
1107	按司の御計や、	*	*
1108	いかな悪欲な	*	*
1109	無理なものやても、	者やてん	*
1110	背く事なひさめ	*	*
1111	義理の上三、	*	*
1112	たう / \	*	*
1113	先牢こめや	先籠込も	*
1114	ゆるちおかに、	*	*
1115	満納	*	*
1116	一 いや / \、	*	*
1117	村原のひやに	*	*
1118	ならふものをらぬ、	*	*
1119	巧てをる事や	*	*
1120	いか程かやゆら、	*	*
1121	おかとしちすまぬ	おつかつとしち済ん	*
1122	女わらへ、	*	*
1123	石川	*	*
1124	一 我々の一事	*	*
1125	はからやいをれハ、	計得をれハ	*
1126	按司や百ことの	*	*



No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1127	御計のあゆん、	御計へあゆん	*
1128	満納	*	*
1129	一 はあ、主人身の上の	*	*
1130	浮沈ミやれハ、	*	*
1131	肝のあくまゝや	*	肝の湧まゝや
1132	命ち限り、	*	*
1133		やあ按司かなし	やあ按司加那志
1134	あゝおとろしやもしらぬ	おとろしやんしらん	おとろしやんしらん
1135	みよんにゆけややへか、	みおんにゆけやへすか	*
1136	責さしゆることの	責さしよるこむの	*
1137	御肝きやさあらハ、	*	*
1138	大川のなし子	*	*
1139	あのやからものと、	*	*
1140	姿から形ち	*	*
1141	似ちをるもの撰て、	*	*
1142	大川のなし子てやり	*	*
1143	取沙汰よしめて、	*	*
1144	外の出入も	*	*
1145	ゆるちあんてやり、	*	*
1146	村原か聞ハ	*	*
1147	疑やなひらぬ、	*	*
1148	はいとらんともて	*	*
1149	忍て来るつもり、	*	*
1150	おの手組しちをて	*	*
1151	からめとやへら、	*	*
1152	谷茶	*	*
1153	一 細事のたくひ	*	*
1154	聞きやくもなひらぬ、	*	*
1155	満納	*	*
1156	一 あゝ按司かなし天の	一 はあ按司かなし天の	*
1157	盛衰の	*	*
1158	此涯よやれハ、	此涯に我身の	*
1159	包てつゝまらぬ、	*	*
1160	おとろしやもしらぬ	*	*
1161	繰返し/、	*	*
1162	みよんきこと	*	*
1163	かへそ科や	*	*
1164	仰すめしやうち、	*	*
1165	是非共牢舎	是非共に牢舎	是非共に籠舎
1166	仰すめしやうれ、	*	*
1167	谷茶	*	*
1168	一 推参なやから	*	*
1169	愚痴にかたまとめ、	愚痴にかたまとる	*
1170	又事もいらぬ	*	*
1171	なけすてゝとらさ、	切捨てとらさ	切殺ち捨てら
1172	石川	*	*
1173	一 此涯よたひもの	*	*
1174	御勘忍めしやうれ、	*	*
1175	谷茶	*	*
1176	一 やあ石川、		*
1177	ワか下知に背く	主の下知聞ぬ	*
1178	気任のやから、	いか俣の族ら	*
1179	急ち引立て	*	*
1180	そんちいけ、	*	*
1181	石川	*	*
1182		一 拝留やひて	
1183	一 やあ満納	*	*
1184	御意背く道の	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1185	此世界にあゆめ、	*	*
1186	おれこれも按司の	*	*
1187	御計にまかち、	*	*
1188	仰すことまゝに	*	*
1189	急ち戻ら、	*	*
1190		満納いやりること	
1191		満納	
1192		一 あゝ口惜や	
1193	谷茶	*	*
1194		一 いや推参な族ら	
1195	一 やあ / \	*	*
1196	振合の袖に		*
1197	糸の縁結て、		*
1198	夢の間の浮世		*
1199	語ひほしやあもの、		*
1200		望俣願や	
1201		進らんしゆもの	
1202			
1203	ワか側にをとて	*	*
1204	楽よすれよ	*	*
1205	/ \、	*	*
1206	乙樽	*	*
1207	一 御情に御側	*	*
1208	をらんでやりすれハ、	*	*
1209	おやくめさあもの	*	*
1210	御ゆるせよめしやうれ、	宥ち給り	*
1211	谷茶	*	*
1212	一 いや / \、	*	*
1213	やくめさもいらぬ	*	*
1214	斟酌もするな、	*	*
1215	ワ側ともをらハ	我が側に居らハ	*
1216	花に増姿、	花に増ひ姿た	*
1217	おの飭しめて	*	*
1218	をなちやらもされん、	*	*
1219	島国よ揃て	*	*
1220	あかめらんしゆもの、	*	*
1221	たう / \	*	*
1222	側にをれよ	*	*
1223	をれよ、	/ \	*
1224	乙樽	*	*
1225	一 按司もわなひすかぬ	*	*
1226	楽も又すかぬ、	*	*
1227	わすたつれやても	*	*
1228	女身の習の、	女身の慣や	*
1229	義理曲てなれる	*	*
1230	道のあゆめ、	*	*
1231	谷茶	*	*
1232	一 いや / \、		*
1233	今のこと愚痴に		*
1234	かたまとるむさや、		*
1235	素立ひやならぬ		素立ひもならん
1236	急ち戻やうれ、		*
1237		なま愚痴の女	
1238		よるす事ならん	
1239	乙樽	*	*
1240	一 こまかゝて命や	*	*
1241	つかなれハ死にゆめ、	継ならハ死ミ	*
1242	もの乞になても	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1243	のちやつきゆん、	*	*
1244	たう / \	*	*
1245	ゆるちたはふれ、	*	*
1246	谷茶	*	*
1247	一 いや / \、	*	*
1248	乙樽	*	*
1249	一 義理と按司やゆる	*	*
1250			
1251	無理な事めしやうな、	*	*
1252			
1253	谷茶	*	*
1254	一 いやこの按司の言葉	*	*
1255	きかならハそなた、	*	*
1256	一刀に命ち	*	*
1257	つふちとらさ、	*	*
1258	乙樽	*	*
1259	一 殺しゆらハ殺す	*	*
1260	おとろしやゝなひらぬ、	*	*
1261	生々と命の	*	生々と命
1262	死もしにやれらぬ、	*	*
1263	恥もふりすてゝ	*	*
1264	此なひになとる、	*	*
1265	露程のいのち	*	*
1266	惜む事ないらぬ、	*	のよて我かおすも
1267	仕合とやゆる	*	*
1268	ころす / \、	*	*
1269	谷茶	*	*
1270	一 はあ肝ほれてをたら	*	*
1271	今のことしやすや、	*	今のことしゆすや
1272	無調法至極	*	*
1273	ゆるちたはふれ、	*	*
1274	神仏てすも	*	*
1275	人の肝尽ち、		*
1276	祈る願事や		*
1277	御助のあもの、		*
1278		願事や聞よん	
1279		たう / \	
1280	みすく聞分て	*	*
1281	肝もきもそへて、	*	*
1282	頼て御情に	御情になれて	*
1283	なれて給ふれ、	宥ち給り	*
1284			
1285			
1286			
1287			
1288	乙樽	*	*
1289	一 おはつかしやあても	*	*
1290	(いやな) 又なゆめ、	*	*
1291	ワか夫や此世	*	*
1292	隠れやひをらぬ、	*	*
1293	遺言しちあすや	*	*
1294	三年の内に、	三年の内や	*
1295	夫もとなてやり	*	*
1296	い言葉のあゆん、	*	*
1297	三年やたひんす	*	*
1298	女身の習の、	女身の慣や	*
1299	夫ふたりもちゆる	*	*
1300	道のあるひ、	道のあよミ	道のあよめ

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1301	谷茶	*	*
1302	一 昔ほれものゝ	*	*
1303	いちやること守て、	*	*
1304	浮世くらされめ	*	*
1305	按司も下司も、	*	*
1306	恋忍ふ道の	恋忍ひてすん	*
1307	ある間の浮世、		*
1308	つらさ身に受て		*
1309	思ひこかれやひ、		*
1310	恋死はむくひ		*
1311	たるにいきゆか、		*
1312	たう / \		*
1313	おれこれよおもて		*
1314		世界にある習ひ	
1315		思ひ身に余て	
1316	死にゆる我か命ち、	*	*
1317	頼て御情に	*	*
1318	救てたはふれ、	*	*
1319	乙樽	*	*
1320	一 思ひ究とる	*	*
1321	ワ身と又やすか、	*	*
1322	按司の御言葉や	*	*
1323	梓弓心、	*	*
1324	引されていきゆさ	引されて行る	*
1325	ワ身の肝や、	*	*
1326	谷茶	*	*
1327	一 はあ果報もつきゆすかと	*	*
1328	つきも付清さ、	*	*
1329	あた果報とつきやる	*	*
1330	果報な我身や、	*	*
1331	はあしたひ / \、		*
1332	乙樽	*	*
1333	一 来る二月に	*	*
1334	すきし我か夫の、	*	*
1335	三年忌たひもの	*	*
1336	吊や濟ち、	*	*
1337	よしあしの御返事	*	*
1338	おしやけんしゆもの、	おしやけらんしゆもの	*
1339	おの内や是非に	おの内や氣張て	*
1340	御待めしやうれ、	*	*
1341	谷茶	*	*
1342	一 いや / \ 是や	一 いや / \	*
1343	ならぬ / \、		*
1344	乙樽	*	*
1345	一 おれこれもゆるし	*	*
1346	ならぬことやらハ、	*	*
1347	通も一刀に	*	*
1348	殺ちたはふれ、	*	*
1349	谷茶	*	*
1350	一 はあおれ是もよたしや	*	*
1351	いつまでもまちゆん、	早晚までん待ん	*
1352	いやれること濟ゆん	*	*
1353	よたしや / \、	*	*
1354	乙樽	*	*
1355	一 あゝたうと、	*	*
1356	御情の光	*	*
1357	てり増ひ / \、	*	*
1358	百といつまでも		*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1359	拝てすてやへら、		*
1360		願た事叶て	
1361		御拝と拝も	
1362	谷茶	*	*
1363	一 あゝ我身もほこらしやの	*	*
1364	物にとららぬ、	*	*
1365	このたけにワ身や	あゝこのたけに我身や	*
1366	なやかやいをても、	なややいをすか	なやかやひをすか
1367	気に叶ふ女、	*	*
1368	側にまたをらぬ、	*	*
1369	是とワかふ足	*	*
1370	心くら闇に		*
1371	なやいをたん、	*	*
1372	今月も過て	*	*
1373	二月も頓て、	二月頓て	*
1374	おれからや互に	*	*
1375	枕うちならへ、	*	*
1376	浮世楽々と	*	*
1377	暮すとめハ、	*	*
1378	まちと嬉しこと	*	*
1379	よろこひもおへさ、	喜たん大さ	*
1380	天に飛登る	*	*
1381	ワ身の心地、	*	*
1382	引寄て給ふれ	*	引寄たはうれ
1383	御月御てた、	*	*
1384	我自由しち浮世	*	*
1385	遊て暮さ、	*	*
1386			谷茶
1387	一 やあ / \、	*	*
1388	此内やとかく	此間やとかく	此間や兎角
1389	くつさしちをたら、	*	*
1390	心はれ / \と	*	*
1391	うち晴て躍て、	*	*
1392	此間のくつさ	此間の苦しや	*
1393	思ひ忘れ、	*	*
1394	こてふし	*	してふし
1395	一 御慈悲あるゆへと	*	*
1396	御万人のまきり	*	*
1397	上下もそろて	*	*
1398	あふきおかむ	*	*
1399	谷茶	*	*
1400	一 はあきよらさ / \、	*	*
1401	乙樽	*	*
1402	一 けふや思子の	*	*
1403	御側むちをかて、	御側出ちをとて	御側むちをとて
1404	明日か日に又も	*	*
1405	拝てすてら、	*	*
1406			谷茶
1407	一 たう / \、		*
1408	けふや道中の		*
1409	草臥もあらたひもの、		*
1410	若按司の側にむち		*
1411	休息よすれ、		*
1412			
1413	村原出羽大浦ふし	*	*
1414	思子取戻ち	*	*
1415	敵うたんともて	*	*
1416	衾れ商人に	*	あはれ売人に

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1417	やつれ出る	躍り出る	やつれ出ん
1418			/ \
1419		村原	村原
1420	一 是や村原のひや、	*	*
1421	思子取戻す	*	*
1422	つまひ分別に、	*	*
1423	乙樽かことや	*	*
1424	あむまへになつて、	*	*
1425	敵の城元に	*	*
1426	只ひちゆひやらち、	*	*
1427	あゝ、心元なさの	*	はあこゝろもとなさの
1428	我肝やすまらぬ、	*	*
1429	物売にやつれ	*	*
1430	忍て出る、	*	*
1431	さいんそるふし	同人道行	*
1432	一 唐や大和の	*	*
1433	珍らし物	*	*
1434	匂ひ髪附	*	*
1435	香しもの	*	*
1436	丁子白檀	*	*
1437	甘生姜	*	*
1438	刻多葉粉も	*	*
1439	持ちをやへん	持やひん	*
1440	きせるも宝蔵も	*	*
1441	持つをやへん	持やひん	*
1442	其外色々	*	*
1443	持ちをやへん	持やひん	*
1444			
1445	代もやすめて		*
1446	上やへら		*
1447	米とも粟とも	*	*
1448	替やへん	*	*
1449		代もやすめて	
1450		売上ら	
1451	御望の物や		*
1452	かふやひたはふれ	是かふやい給ふり	*
1453	村原	*	*
1454	一 先物売に名付	*	*
1455	此辺にをとて、	*	*
1456	往来の人の	*	*
1457	沙汰よきかに、	*	*
1458	泊井	泊や	*
1459	とんちたるものや	*	*
1460	村原のあやと	*	*
1461	むちやん一ツの	御神一ツの	*
1462	ちきや御葉たん、	近か御身葉も	*
1463	大川の思子	*	*
1464	引取らんで	*	*
1465	村原のあやゝ、	*	*
1466	谷茶城忍て	*	*
1467	いまふちやうすか、	*	*
1468	夫の村原なひ	*	*
1469	肝要なものいやひ	*	*
1470	頼まつて行ん、	頼て居ん	たのまつてをん
1471	油断しや済ぬ	*	*
1472	先一足もいそかう、	*	*
1473	村原	*	*
1474	一 され / \、	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1475	万細物	*	*
1476	持ちをやへん、	*	*
1477	これ / \	*	*
1478	御望の物や	*	*
1479	売上やへら、	*	*
1480	泊井	*	*
1481	一 あゝ是や仕合な事、	*	*
1482	村原	*	*
1483	一 田舎江御通の	*	*
1484	御支度の御様子、	*	*
1485	御中途の御用	*	*
1486	是々	*	*
1487	又是も上やへら、	*	*
1488	泊井	*	*
1489	一 是や心入とやる、		*
1490	いやれること	*	*
1491	谷谷屋良村んかい	北谷屋良村へ	小谷屋良村んかひ
1492	越ん、		*
1493	道中の重宝		*
1494	仕合な事、		*
1495	主やまあからまあんかひ		*
1496	まひか、		いまひら
1497	村原	*	*
1498	一 我身や	*	*
1499	那覇若狭町から、	*	*
1500	今度初て	*	*
1501	旅の者、	*	*
1502	御急きもやゆら	*	*
1503	御無心もしらぬ、	*	御無心のもしらん
1504	取つけもなひらぬ	*	*
1505	望事やすか、	*	*
1506	旅の上の御縁	*	*
1507	をかむ御情に、	*	*
1508	めつらしい事の	*	*
1509	此頃にあらハ、	*	*
1510	御休ミのうちに	*	*
1511	きかちたはふれ、	*	*
1512	やともとのみやけ	宿元の筈ミ	*
1513	ものかたりしやへら、	*	*
1514	泊井	*	*
1515	一 まゝてひしんさあ	*	*
1516	ちゆのいそけは、	*	*
1517	むゝたしかに村原のひややすか、	慥に村原のひややすか	*
1518		あの支度やすん付てや	
1519	しかつと見覚のなひらぬ、	*	*
1520		おつかつといちや済ん	
1521	先口ふて	*	*
1522	さくてむだう、	探て見たに	*
1523	同人		*
1524	一 あゝいきやいは兄弟	*	*
1525	のううちへたてのあか、	*	*
1526	これや余り	*	*
1527	こは返事やつさあ、	*	*
1528	やすか	主やすか	*
1529	かんのふも	ぬらんかん	のをもかん
1530	珍らしひ事や、なひらぬ、	*	*
1531	むゝあゝ、	*	むゝ
1532	満納の子や	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1533	打殺さつて、	*	*
1534	あゝいたわしい事、	痛敷事	*
1535	村原	*	*
1536	一 あたらしか満納	*	*
1537	いきやしちやる事か、	*	*
1538	泊井	*	*
1539	一 むゝ、おの事てハ、	*	*
1540	たう細々の次第	*	*
1541	根から咄ちきかさう、	*	*
1542	あの城や、	*	*
1543	本今帰仁の別れ	*	*
1544	大川の按司の城やたすか、	*	*
1545	百姓上の按司部	*	*
1546	谷茶のおまへの打亡はち、	*	*
1547	今や谷茶城むていふん、	*	今や谷茶城むていよん
1548	先事のおこれや	*	*
1549	谷茶か野心巧て、	*	*
1550	大川の按司の		
1551	国々の按司部うたんて、	国々の按司部	*
1552			そんむて
1553	あらさらぬ事ハ		*
1554	色々にいひ立て、		*
1555	加勢頼て	*	加勢頼入
1556	軍押寄たん、	*	*
1557	だあ大【城】川城や	*	*
1558	をなちやらの御吊の日に当て、	*	*
1559	御取込の最中	*	*
1560	以の外、火急な事	以の外火中な事	*
1561	分別の分別ならぬ、	*	*
1562	按司も大将も	*	*
1563	急ひころ討死、	*	*
1564	大勢に無勢	大勢無勢	*
1565	力及はらぬ、	*	*
1566	終にや思子や生捕られ、	終にや嫡子や生捕られ	*
1567	大将村原のひやゝ	*	*
1568	ぬけすまち	*	*
1569	行衛しれらぬ、	行衛知らんあすか	*
1570		村原のひやむて云すや	
1571	世界の一人者	*	*
1572	急ひ武士やすんついてや、	*	*
1573	生捕てあるいねけ子	*	*
1574	物種子にしち、	*	*
1575	取付て	*	*
1576	降参しめらむて		降参よしめらむて
1577	おの思子つかなたあん、		*
1578	おの段村原か聞付て		*
1579	思子引取らむて、	*	*
1580	村原のあやゝ	*	*
1581	あん前むて云ち、	*	*
1582	共につかなたたはふれ / \ むて	共に飼て呉りむて	共につかなたたふうれむて
1583	谷茶城よしれたん、	*	*
1584	あゝむちや	*	*
1585	満納の子なつくわひ	満納の子や	*
1586	もの、かはひ人、	*	*
1587	村原か計むて	村原か計事むて	*
1588	ぬちやてひつしつち、	急てから知ち	ぬちやてひてしつち
1589	此涯取付てよんむて	*	*
1590	幸としち	*	*



No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1591	問尋掛引段々、	掛引段々しやすか	*
1592	村原としも	*	*
1593	あひもおとらぬぬけた女、	*	*
1594	いちやひしちやひ	*	*
1595	色々様々の返事返答、	*	*
1596	扱も / \ 寄妙な事い (の九。一部筆が途切れている)	扱も / \ 神妙なもの	扱も / \ 妙なもの
1597	きゝことやててん、	聞事やたん	*
1598	しゆたすか	*	*
1599	村原とじや	*	*
1600	目口やは / \ と	*	*
1601	小しほらしひかあげ、	みしゆらしかけ	*
1602	ほんのむちや		*
1603	むしやものやすんつひてや、		*
1604	たあ按司や	按司や	*
1605	ちやむとうちほれて、	ちやと打ふれ	*
1606	目いろは折しち	*	*
1607	さらざらあと	*	*
1608	正気やないらぬ、	*	*
1609	終にや	*	*
1610	石川満納も追ぬけて、	石川満納追のけて	*
1611	さつたる仕形もをかしや、	*	*
1612	やあ / \、	*	あやあ / \
1613	ワか側にをらハ	*	*
1614	をなちやらも、されん、	*	*
1615			
1616			
1617	たう / \ 側に	*	*
1618	居よをれよ	*	*
1619	むていちやれハ、	*	*
1620	村(原)のあやゝ	*	*
1621	按司もすかぬ	*	*
1622	樂もすかぬむて	*	*
1623	つんはにむはしやん、	*	*
1624	谷茶や腹きりわき、	*	*
1625	此按司の言葉	*	*
1626	きかならハそなた、	*	*
1627	一刀にいのち	*	*
1628	つふちとらさ、	*	*
1629	むてしゆて	んて	*
1630	おとちやん、	*	*
1631	わたの底まで	無蔵さはたの底まで	*
1632			
1633	見済さつてをすや	見済さつ	*
1634	以の外、		*
1635	村原のあやゝ		*
1636	ちやあんなひらぬ		*
1637		たちすやしらん	
1638	殺す / \ むて	*	*
1639	すひちかゝたさ、	すいち掛たれハ	*
1640	たあ殺しゆるいきや		*
1641	そつともなひらぬ、		*
1642	むきやわらひしち	むぢや笑ひし	*
1643		肝ふれておたら	
1644		今のことしやすや	
1645		無調法至極	
1646			
1647		宥ち給り	

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1648		神仏てすん	
1649		願事や聞ぬ	
1650		御情に命ち	
1651		救て給り	
1652		/ \ むて	
1653	もとよたる仕形や、		*
1654	ほんの		*
1655	をかしやおほさる、		*
1656			
1657			
1658	あはあ(高笑) / \		あは / \
1659	立羽失て		*
1660	どつとさん / \ な事、		*
1661	あんしおれからや		*
1662	大首たうれて、	*	*
1663	みすく聞分て		*
1664	肝出ち		きもんきも出ち
1665	死しいきゆる命		*
1666	救てたはふれ / \ むて、		*
1667	段々折たうれ		段々打たうれ
1668	しやつとちんや、		*
1669	村原としや		*
1670	分別なもの、		分別なむさの
1671	夫の仏事うちなち		*
1672	御返事上らの		*
1673	のふのくひのむて、		*
1674	たん / \ と云廻ちやれハ、		*
1675	あゝ無蔵さ		*
1676	縁のかたかしち		*
1677	あかさくらさもわからぬ、		*
1678	ほんの誠に		*
1679	たんしひきつち、		*
1680		折たふりしやりハ	
1681		村原のあやゝ	
1682		来る三月に	
1683		夫の三年忌の	
1684		吊濟から	
1685		よしあしの御返事	
1686		上らむていちやりハ	
1687		又按司や	
1688		目はておとちやん	
1689		是もよるせならん事やは	
1690		逆も一刀に	
1691		殺ち給ふり	
1692		/ \ むて	
1693		すいち掛たれハ	
1694		おれ是も済ん	
1695		早晚までん待ん	
1696		今月も過て	
1697		二月も頓て	
1698		おれからや互に	
1699		枕打並ひ	
1700		浮世樂々と	
1701		暮そとみは	
1702	待と嬉しこと	あゝ待と嬉しこと	*
1703	よろこひも大(ヲへ)さ、	嬉さん大ひさ	*
1704	あた果報とつきやる		*
1705	果報なワ身や、		*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1706		天に飛登る	
1707		我身の心地	
1708		引寄て給ふり	
1709		御月うてたむて	
1710	なつくわひしち		*
1711	笑ひすひ / \		*
1712	躍羽しち、		*
1713	夜のねふしもねんたぬ、		*
1714			手の指まで
1715			打かへし / \
1716			
1717	ひしやの指まで	夜昼ひしやの指まで	*
1718	打かへし / \ しゆて、	折かへし / \	*
1719	むな待しゆらむておもれハ、	待かんでいしゆんてハ	*
1720	ほんのをかしやどおほさる、		*
1721	あんしまた		*
1722	満納の子や		*
1723	度々御意見		*
1724	おんにゆけゆんむて、		*
1725	のふ目もみしらぬ		のふもめみしらぬ
1726	かひほうかつたん、		*
1727	やつさ		*
1728	【命】(人)の命てらもの		*
1729	云んてとしゆる、		*
1730	水つかゆすよか		*
1731	あつまつさ		*
1732			
1733	おそろしい畜生人、		*
1734	また満納の子も		*
1735	満納の子、		*
1736	あて性もないらぬ		*
1737	のふむて		*
1738	おれほとしや(ち)		おりふとすやか
1739	いか身からと		*
1740	やひんしゆすか、		*
1741	得と思てむてハ、		*
1742	しゆかな / \ しい肝の		*
1743	あちしやつ所から、		*
1744	誠に満納の子とやゆる、		*
1745	村原	*	*
1746			一 むゝ命ふり捨て
1747			主人いさめやす
1748	一 むゝ土の本意	*	土の本意
1749	世の中の手本、	*	*
1750	たんちゆ島国も	*	*
1751	沙汰よしゆたる、	*	沙汰よ残る
1752	やあ / \		*
1753	大川のなし子	*	*
1754	あん前と二人や、	*	乳あんと二人や
1755	いきやるいきなひに	*	*
1756	なやいをゆか、	*	*
1757	泊井	*	*
1758	一 やつさしう、	*	*
1759	やあつかぬ、犬の	*	*
1760	縄切ちややうなもの、	*	つな切ちややうなもの
1761	一方引なて	*	*
1762	たんちやまて	*	*
1763	をすんついてや、	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1764	頓てぬけすまち	*	*
1765	うちかへされる筈、	*	*
1766	はひ嘶にほれて	*	*
1767	日やさかたひ、	*	*
1768	たうつさしう、	*	*
1769	戻てくるまで	行来る迄	*
1770	こまんまひらハ、	こまとん参らハ	こまとんまひらハ
1771	又も嘶さうやあ	又も嘶さう	*
1772	たうしゆ、		*
1773	村原	*	*
1774	一 やあ / \		*
1775	日も暮てをすか、	*	*
1776	あかと屋良むらに、	*	*
1777	いきやる事やとて	*	*
1778	急ちいまひか、	*	*
1779	泊井	*	*
1780	一 なあやのふしやる人か、	*	*
1781	ちゆの用事問よすや、	ひとの用事問よすや	*
1782	まあかひいかわん		*
1783	かもてい、		*
1784	村原	*	*
1785	一 細々の次第	一 やあ / \ 細々の次第	*
1786	聞ほしやよあすか、	聞ふしやよあてと	*
1787	いやゝまあむらの		いやゝ西村の
1788	何かしかやゆら、		泊ひやあらね
1789		御急ちんやよら	
1790		尋やひみよる	
1791	泊	*	*
1792	一 むまやまあたやへるか、		*
1793		一 村原のあや前あゑ	
1794	村原	*	*
1795		一 やあいやゝ西村の	
1796		泊やあらに	
1797	一 わ身や村原の	*	*
1798	ひやとやゆる、	*	*
1799	泊	*	*
1800	一 あゝ	*	*
1801	さうひ拝んしやへらぬ	され拝んしやひらん	*
1802	あや前の御使	*	*
1803	西村の泊井たやへる、	*	*
1804	細々の次第		*
1805	おんにゆけやへら、		*
1806	来る十日に	*	*
1807	思子引取て	*	*
1808	北表の山路	*	*
1809	逃めしやいへる筈、	*	*
1810		やすん付てや	
1811	おのおこゝれ	*	*
1812	めしやうれむての	*	*
1813	御使とやゝへる、	御使たやひる	御使たやへる
1814	村原	*	*
1815	一 あゝ天の引合か	*	*
1816	神の御助か、	*	*
1817	たう / \	*	*
1818			
1819	けふからや互に	*	*
1820	心打合ち、	*	*
1821	身の上のことに	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1822	気張て呉れ、	働きやい呉れ	気張てこひれよ
1823	思子取戻ち	*	*
1824	かたきうちとらハ、	敵よ打とらハ	*
1825	おの御取立や	*	*
1826	あらんしゆもの、	*	*
1827	たう / \	*	*
1828	気張てくひれよ、	*	*
1829		萬いか事や	
1830		計やへ呉り	
1831		泊	
1832		一 拝留やひて	
1833			
1834		細々の次第	
1835		☆のすけみしやいへり	
1836	同人	村原	*
1837	一 むゝ是に思つきやる	*	*
1838	事の又あゆん、	*	*
1839	乙樽か思子	*	*
1840	取戻ちからに、	*	*
1841	逃忍ふ時や	*	*
1842	疑やなひらぬ、	*	*
1843			
1844	谷茶あまやゝ	*	谷茶まあやゝ
1845	用心もすらぬ、	*	*
1846	あはてさま出て	*	*
1847	追掛る積り、	*	*
1848	おの時にまかち	おの時に向て	*
1849	おのときに出て、		*
1850	打かへす御運	*	*
1851	是に究たん、	*	*
1852	はあ肝要な時節	*	*
1853	おくれてや済ぬ、	*	*
1854	急ち立戻て	*	*
1855			
1856			
1857	手組すらに、	*	*
1858		泊	
1859		一 拝留やひて	
1860			
1861		原国兄弟口説	原国兄弟出羽
1862		一 君と親との敵かたき	一 君と親との敵かたき
1863		天のゑたゝけ兄弟の	ともに天かめ地やふまん
1864		岩やかん石やたんたひ	いかな岩石やたんたひ
1865		只踏崩しふミ破り	只踏崩しふみやふり
1866		いかな鬼神やたんたひ	いかな鬼神やたんたひ
1867		すた / \ 割まなた置ミ	すた / \ きさまなたゝうちゆめ
1868		人の念力岩を通そ	人の念力岩をとそ
1869		誠むかしの物語り	誠むかしの物語り
1870		聞ハ嬉しや有難や	聞ハ嬉しや有難や
1871		兄弟心を合ち	兄弟心を打合ち
1872		猪狩人に身をやつり	しゝかり人に身をやつし
1873		勇ミ進て立出る	勇ミすゝむて立出る
1874	原国兄弟	兄弟	*
1875	一 なま出る二人や	一 二人の者や	*
1876	大川の按司の	*	*
1877	頭役しゆたる	*	*
1878	原国のひやか、	*	*
1879	兄子松千代	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1880	弟子金松、	弟子金松よ	弟子金松よ
1881		大川の城	
1882		仕合の時に	
1883		親の原国も	
1884		按司添と共に	
1885	父親の事と		*
1886	按司添前みこし立、		*
1887	討死よてやり	*	*
1888	兼て聞及て、	聞ハ我かなさや	*
1889		余り忍らん	
1890		討死と究ミ	
1891	君親のかたき		*
1892	打捕んともて、		*
1893	ふたり命はまで	双子押列て	*
1894	出立る内に、	*	*
1895	思子の前と	若按司の事や	*
1896	敵のいきとやひ、	*	*
1897	村原のひや釣ゆる	村原のひや取留らんでの	*
1898	計得のあとて、	*	*
1899	御素立よてやり	*	*
1900	かたへへのあらは、	*	かたへへのありは
1901		嬉しさや双子	
1902		村原のひやに	
1903		尋着からに	
1904		忍ひ隠りやひ	
1905		思子取戻ち	
1906		君親の敵や	
1907		討んたひ願て	
1908		忍て出る	
1909	此事や急ち		*
1910	村原につけて、		*
1911	思子の前		*
1912	とりかへち		*
1913	敵討んともて、		*
1914	肝勇ミいさて		*
1915			
1916	むちていきゆん、		*
1917	揚口説	兄弟道行口説	歌
1918	一 家の譲りの長刀を	*	*
1919	打取なをしてころ／＼と	*	*
1920	ころれ／＼と振立て	*	*
1921	たゞきりひらちわつて入	只切へたきわつと入る	*
1922	水もたまらぬ谷茶が	*	*
1923	首打落すその手並み	*	*
1924	当るものなき其威勢	*	*
1925	扱も／＼と一声に	*	*
1926	てきや味方の目をさます	*	*
1927	松千代		*
1928	一 やあ金松よ、		*
1929	急ち内いやひ		*
1930	村原のひや拝ま、		*
1931	金松		*
1932	一 たう／＼		*
1933	急ちをかま、		*
1934			
1935	村原	*	*
1936	一 出様ちやる者や	*	*
1937	村原のひや、	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1938	あゝ寔慈悲なさや	あゝ有難さ慈悲な	あゝ誠とある慈悲
1939	我按司の報ひ、	我按司の御果報	*
1940	天の引合か	*	*
1941	神の御助か、	*	*
1942	思はずに武運	*	*
1943	打重ね/\	*	*
1944	散々になとる	*	*
1945	人々も揃て、	*	*
1946	願たこと叶て		*
1947	誇らしやとあゆる、		*
1948		けふかたき討に	
1949		をきよ出る	
1950	やあ/\、揃てをる人数	*	*
1951	出やうれ/\、	*	*
1952			
1953			
1954	村原		*
1955	一 やあ/\、乙樽か兼て		*
1956		やあ朝夕忘れらん族ら	
1957	内通のことに、		*
1958	かたき討取ゆる	敵かたき討取よる	*
1959	御運廻り来て、	武運廻て来て	*
1960	けふのよかる日ニ	けふかたき打に	*
1961	立よ出ら、	*	*
1962	原国兄弟	総人数	*
1963	一 こつきやうの時節	一 肝要な時節	一 こつきやうな時節
1964	おくれてや済ぬ、	後りてや済ん	*
1965	片時も急ち	片時も急ち	*
1966	御供しやへら、	御供しやひら	*
1967	村原	*	*
1968	一 たう/\、	*	*
1969	手賦の次第	*	*
1970	とつけ渡さ、	*	*
1971	やあ喜瀬の大屋子や、	*	*
1972	敵の城元に	*	*
1973			
1974	忍て行をとて、	忍てむちをて	*
1975	乙樽か思子	*	*
1976	奪とやい逃る、	奪取ひ出る	*
1977	御中途のけいこ	*	*
1978	念の入れ、	念を入	念の入れよ
1979		鬼瀬	
1980		一 拝留やひて	
1981		村原	
1982	又西川の子や、	*	*
1983	頼てある加勢	*	*
1984	けふの真夜中に	*	*
1985	城の後ろの	*	*
1986	山に伏よかくれ	山に伏隠り	*
1987	谷茶あまやか	*	*
1988	城立出て、	城よ立出て	*
1989	北の山路	*	*
1990	いきつきゆる時分、	*	*
1991	一時に出て	*	*
1992	城の門閉て、		城乗取て
1993			
1994		城よ乗取て	
1995	大川の印旗	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
1996	差立ておけ、	*	*
1997		西川	
1998		一 拝留やひて	
1999		村原	
2000	やあ瀬底下こおりや、	*	*
2001	北の山路の	*	*
2002	先にかくれとて、	*	*
2003	谷茶あまやか	*	*
2004			
2005	走通る後に、	*	*
2006	道の口立ふさち、	道の口立塞き置き	*
2007	山路真中	山の真中	*
2008	走通る時分、	*	*
2009	螺や石ひや	*	*
2010	うちならし / \、	*	*
2011	島国も崩す	島国よ崩そ	*
2012	気を立て、	*	*
2013	若谷茶あまやか	若か谷茶か	*
2014	逃戻る時や、	*	*
2015	唯並切に	*	*
2016	うちよ留れ、	*	*
2017		瀬底	
2018		一 拝留やひて	
2019		村原	
2020	原国の兄弟や、	一 やあ原国の兄弟や	*
2021	山道の中に	*	*
2022	伏よ隠れとて、	*	*
2023	先の石ひや螺を	*	*
2024	(オ+目) 図に躍出て、	*	*
2025	双方のきんそ	*	*
2026	中に引包て、	*	*
2027	あまそな洩そな	*	*
2028	討よとめれ、	*	打とめり
2029		兄弟	
2030		一 壺礼	
2031		村原	
2032	やあ泊井や、	*	*
2033	先立ひ	*	*
2034	忍てむちおとて、	*	*
2035	乙樽か思子	*	*
2036	引取ひ逃て、	*	*
2037	半里程いかハ	*	*
2038	城走登て	城よ走登て	*
2039	逃忍て行す	*	*
2040	見付たんでやり、	*	*
2041	誠たん / \と	*	*
2042	高らかにつけて、	高らかにあけて	*
2043	谷茶石川	*	*
2044	さそへ出からに、	誘ひ出ち	*
2045	北の山道に	北の山道	北の山道
2046	案内しやしやうれ、	案内よしうれ	*
2047		泊	
2048		一 拝留やひて	
2049		村原	
2050	やあやあ、		*
2051	揃ておる人数	*	*
2052	慥にきけ、	たによ聞留れ	*
2053	傍輩の中	傍輩中	朋輩の中に



No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
2054	不和にともならハ、	*	*
2055	怪我事の基ひ	*	*
2056	事障りたひもの、	*	*
2057	腹の立まゝに	腹立る俣に	*
2058	短気するな、	*	*
2059	ゑひ / \、能々勘忍		*
2060	題目とやゆる、		*
2061	惣人数	*	*
2062	一 拝む留やへて、	*	*
2063	村原	*	*
2064	一 はあ揃ておる人数	*	*
2065	肝合ちをれハ、	*	*
2066	誠勝千軍	*	*
2067	疑やなひらぬ、	*	*
2068	たう / \ 手配の通	*	*
2069	油断するな、	*	*
2070	さあ / \	*	*
2071	急ち立向ら	急ち立出ら	急ち立出ら
2072	いそち打立に、	急ち立寄らに	急ち押寄ら
2073			
2074	乙樽思子引取逃走はや作田ふし	思子出羽いけんたうふし	*
2075	一 おそ風もすたしや	*	*
2076	風車とゝもに	*	*
2077	押つれて互に	*	*
2078	遊ふうれしや	*	*
2079	乙樽	*	*
2080	一 思子取戻ち	*	*
2081	すき間はからやひ、	明間計らやい	*
2082	むち入の人に	*	*
2083	ましり、出ん、	*	*
2084	鬼瀬	*	*
2085		一 やあ思子我身や	
2086	一 鬼瀬たやへ	鬼瀬大屋子たやひる	一 喜瀬たやへる
2087	御供しやへら、	たう / \ 御供しやひら	*
2088	泊井	*	*
2089	一 むゝにや時分たひらう	*	*
2090	城走のほて、	*	*
2091	谷茶(石川)、誘ひたさう、	谷茶誘ひ出さふ	*
2092	され / \	*	*
2093	大川のあむ前や、	*	*
2094	思子引取て	思子引列て	*
2095	北表の山路	*	*
2096	逃めしやいへひたん、	*	逃めしやひたん
2097	谷茶	*	*
2098	一 あゝ扱も / \、	一 扱も / \	*
2099		ふんのか / \	
2100	やあ石川のひや	*	*
2101	/ \、	*	*
2102	石川	*	*
2103	一 ふう	*	*
2104	谷茶	*	*
2105	一 大川のなし子	*	*
2106	盗取て逃る、	*	*
2107	急ち追つけて	*	*
2108	奪取らに、	*	*
2109	さあ / \	*	*
2110	いそけ / \、	*	*
2111	石川	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
2112	一 やあ / \、	一 はあ	*
2113	大川のなし子	*	*
2114	盗取て逃る、	*	*
2115	急ち立(出)て	*	*
2116	御供しやうれ、	御供しやひら	*
2117			
2118		やあ按司かなし	
2119		敵の計ひや	
2120		いか程かやよら	
2121		用心もすらぬ	
2122		追掛て済ん	
2123		こまからや戻て	
2124		おの計得しやひら	
2125	谷茶	*	*
2126			
2127			
2128			
2129	一 いや供列もいらぬ		*
2130	急け / \、		*
2131		一 いや臆病な事いふな	
2132			
2133			
2134	同人	*	*
2135	一 あれよ / \、	一 いやあり / \	*
2136	忍(注、字は忍になっている)義 忘却	恩賞も知らん	恩義忘却
2137	情切やから、	*	*
2138	乙樽	*	*
2139	一 やあ / \、	*	*
2140	村原よ始	*	*
2141	原国のなし子、	*	原国かなし子
2142	思子、御迎に	*	*
2143	忍てきちをゆん、	忍てまふちゆん	*
2144	此間の忍(注、字は忍になっている) に	此間の恩や	此間の恩に
2145	つける事たひもの、	*	*
2146	急ち立戻て	*	*
2147	命ちとるな、	*	*
2148	谷茶	*	*
2149	一 いや仕合とやゆる	*	*
2150	村原もともに、	*	*
2151	乙樽	鬼瀬	*
2152	一 寄よらハよすれ	一 寄よらハ寄り	*
2153	切はたちとらさ、	打果たちとらさ	切果捨てら
2154	村原	*	*
2155	一 やあ谷茶	*	*
2156	欲悪の報ひ	*	*
2157	武運つきはてゝ、	*	*
2158	村原【の】(か)前に	*	*
2159	廻てきちやめ、	廻り来か	*
2160			
2161			
2162	同人	谷茶	
2163	一 いやぬかすまひ、	一 いやのかすまひ	
2164	原国	*	*
2165	一 やあ谷茶、	*	*
2166	原国兄弟か	原国の兄弟か	*
2167	待受てをす	*	*

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
2168	しつちをため、	知らんあたミ	*
2169	谷茶	*	*
2170	一 いや、ちゆつかぬもたらぬ	*	*
2171	すひさんなわらへ、	*	*
2172	兄弟		*
2173	一 ひやひやひ		一 ひやあやい
2174	同人	*	総人数
2175	一 谷茶あまやや	一 ああ谷茶あまやや	*
2176	原国兄弟か	*	*
2177	打取やへたん、	*	*
2178	村原	*	*
2179	一 兄弟の手柄	*	*
2180	ならふものをらぬ、	*	*
2181			
2182			
2183	瀬底	*	総人数
2184	一 残てをる人数	*	*
2185	降参たやへる、	降参たやひる	*
2186	村原	*	*
2187	一 神妙なこと / \、	一 神妙な事よ / \	一 神妙なことよ / \
2188	若按司		*
2189	一 やあ村原よ、		*
2190	村原	同人	*
2191	一 やあ思子	*	*
2192		若按司	
2193		一 やあ村原よ	
2194	東江ふし		*
2195	一 あけ夢かやゆら		*
2196	村原	*	*
2197	一 あゝ拝てなく事や	一 あゝ拝てなつかしや	一 あゝ拝てなちかさや
2198	ゆめかややへいら、	夢かやよら	*
2199	過し按司添も	*	*
2200	嬉しやめしやいら、	知らしふしやの	*
2201	乙樽	*	*
2202	一 やあ / \、	*	*
2203	敵の島国や	*	*
2204	籠の鳥心、	*	*
2205	思て自由ならぬ	*	*
2206			
2207	待兼るけふや、	*	*
2208	谷茶あまやあか	*	*
2209	生れ日てやり、	生れ日よてやひ	生れ日よてやり
2210	世話にとひかかて	*	*
2211	気のかぬあれハ、	*	*
2212	思子もり名付	*	*
2213	逃忍ふ後に、	*	*
2214	谷茶追掛て	谷茶追付て	*
2215	のかるかたなひらぬ、	*	*
2216	是迄よとめハ	*	*
2217	美御迎ニいまふち、	*	*
2218	けふ拝事や	又拝も事や	*
2219	夢かやゆら、	*	*
2220			やあ / \
2221			親かなし
2222			乙松か事や
2223			いちやかあやひら
2224	村原	*	*
2225			一 母親ん乙松ん

No.	尚家本組踊集	喜舎場孫進本	多良間村教育委員会所蔵本
2226			替る事にやあらん
2227			やあ乙樽
2228	一 おもはずに兼て	*	*
2229	内通のあれハ、	*	*
2230	おの手組しちおて	おの手段しちゆて	*
2231	美御迎しちやん、	美御迎もしちやる	美御迎もしちやん
2232	やあ乙樽、	*	*
2233	女身の上に	女身の上の	*
2234	命ちふり捨て、	*	*
2235	敵の手ニ渡り	敵の手に行ひ	敵の手に渡る
2236	思子取戻ち、	*	*
2237	あゝ末代の手本	*	*
2238	沙汰とのこる、	*	*
2239		西川使	西川の子使
2240	一 され西川の子	一 され / \ 我身や	一 され我んや西川の子
2241	使たやへる、	西川の子使たやへる	*
2242		城取替ち	
2243	城乗取やひ	*	*
2244	おれ / \ の用意	*	*
2245	美御迎たやへる、	御待たやひる	美御迎待たやへる
2246	村原	*	*
2247	一 一段な事よ / \、	*	一 一段な事 / \
2248	村原	同人	*
2249	一 あゝ思子も拝て	一 あゝ思子も拝ミ	*
2250	敵もうちすまち、	*	*
2251	かにある誇らしやゝ	*	*
2252	ものにたとらぬ、	*	*
2253	たう / \、本の御城に	*	*
2254	美よんつかい拝ミやへら、	美御つかい拝ま	*
2255	若按司	*	*
2256	一 嬉しさや互に	*	*
2257	踊て戻ら、	列て戻ら	列て戻ら
2258	村原	*	総人数
2259	一 うれしさや踊羽	*	*
2260	御供しやへら、	*	*
2261			
2262			
2263			
2264	しほらひふし	かんちやいふし	*
2265	一 御代つきよめしやうち	一 御代継よめ召うれ	*
2266	本の御城に	*	*
2267	おかけほさへめしやうれ	御掛ふさ召うれ	*
2268	玉の思子	*	*
2269			
2270			
2271			
2272			

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
1	義臣物語	義臣物語	義臣物語り
2	国吉のひや黒縹子入道頭巾金(糸蘭)にて 饒有ル黒紗綾袷衣裳縹子広袖羽織脚胖足袋 花加籠馬乗人壱ツおきれこふし壱ツ鳴子壱 ツ若衆人形壱ツ編笠炬手花		
3	若按司半向頭巾天鷲(糸爾)花金銀水引は さら縹子袷衣裳脚胖足袋		
4	姉かもし紫長巾作花水引はさら熨斗紙琉縫 薄衣裳足袋		
5	新垣のひ崎本の子兩人黒西洋布入道頭巾黒 木綿巢衣裳脚絆足袋		
6	崎本編笠白作ひげ鎌杖		
7	童子四人半向頭巾作花金銀水引はさら紙花 青銅振袖衣裳足袋		
8	鮫(字は鯉)川の按司金入綿の入道頭巾向 に金(糸蘭)龍之角饒有ル水色緞子衣裳羅 陳羽織錦にて饒有ル刀太刀足袋脚胖大團		
9	ちやうきやく持黒木綿単衣裳脚胖足袋		
10	夜廻白木綿長巾黒木綿巢衣裳脚絆足袋拍子		
11		国吉の比屋	国吉の比屋
12	一、出様ちやる者や	是や	*
13	本の国吉のひや	*	*
14	今や国吉の子、	*	*
15	あゝ島尻の世の主	*	*
16	高嶺の按司や、	*	*
17	色欲にほけて	*	*
18	朝夕酒盛ひ、	*	*
19	歌三味線の	歌や三味線の	*
20	絶ゆる間やなひらぬ、	*	*
21	昔物語引出ち、	*	*
22	色々に異見	色々に御意見	*
23	みよんにゆけたん、	*	*
24	忠言耳に逆て、	忠言耳よさかて	*
25	位剥とられやひをれハ、	*	*
26	おれからや日々に	*	*
27	御万人や背き、	*	*
28	弓引かんでやりしゆすや	*	*
29	露程も知らぬ、	*	*
30	きのふ暁や、	*	*
31	首里軍押寄て	*	*
32	責圍てをれハ、	責懸てをりは	*
33	出てたゝかたる者や	*	*
34	一人も又をらぬ、	一人のをらん	*
35	按司や切腹よめしやうち、	*	*
36	をなちやらと思子や	*	*
37	与座の子か引列て、	*	*
38	逃忍て与座近くいきゆる内、	逃ち忍て与座近く行る内に	与座近く行る内に
39	流矢に当て	*	*
40	をなちやらと与座の子や、	*	*
41	道柴の露と消果て、	道しはの露と共にきよ果て	*
42	哀れ若按司と	*	*
43	思なひかことや、	思なひか行先や	思姉か行先や
44	知人やをらぬ、	*	*
45	あゝ高嶺のかんた	*	*
46	からめ出す者あらハ、	捕出そものや	*
47	按司になち	*	*
48	島知行も呉ん、	*	*
49	また一夜迎も	*	*
50	隠し置くものあらは、	*	*
51	一門やだにも	一門やだによ	一門やだによ
52	引はらふしまても、	*	*
53	殺しつくさしゆんでやり	*	*
54	道々に高札のあれハ、	*	*
55	あかりてた拝む	*	*
56	人心やれハ、	*	*
57	御万人や敵となて	*	*
58	弓ひきゆる此時よやれハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
59	頓て生とられ	*	*
60	からめ出されらとめハ、	*	*
61	あゝ至極気の毒とやゆる、	*	*
62	片時も急ち	*	*
63	御行衛尋やい拝ま、	若按司の御行衛尋やひをかめ	*
64	此支度しゆてや	*	*
65	互所の疑もたちゆら、	*	*
66	あゝ今とおめつきやる、	*	*
67	細物人形売に	細物の人形売に	*
68	やつれやいいてたちゆん、	*	やつり出立ん
69	若按司思姉出羽干瀬ふし	兩人出羽干瀬ふし	高嶺の若按司出羽干瀬ふし
70	一、おめけひとワ身や	思けいやとわんや	*
71	親にすてられて	親に捨らて	*
72	互になきくらち	*	*
73	をるか心気	居る心気	*
74		若按司	若按司
75	一、我身や高嶺の	*	*
76	若按司とやゆる、	*	*
77	首里軍押よすて	*	*
78	父母や殺されて、	*	*
79	思なひとワ身や	*	*
80	只足にまかち、	たゝ足に尽ち	*
81	忍ひ出たすか	*	*
82	行先もしらぬ、	行先やしらぬ	行先やしらん
83	互座躰に登て	*	*
84	高き瀬の下に、	*	*
85	夜や鳴明ち	*	*
86	なまゝてやをすか、	*	*
87	たゆるものはなち	*	*
88	けふ三日なゆん、	*	*
89	やあ思なひよ、	*	*
90	新垣のひやゝやかあ	*	*
91	母方の祖父やれは、	*	*
92	夜も暮てをれハ	*	*
93	見る人やをらぬ、	*	*
94	立寄ひ頼て	*	*
95	かくれやひをらに、	*	*
96	思なひ	*	*
97	一、たう / \	*	*
98	山路よやれハ	*	*
99	急ち出ら、	*	*
100		若按司	若按司
101	一、やあ / \	やあ	*
102	新垣のひやよ	*	新垣の比屋
103	/ \、	*	*
104	新垣	新垣のひや	*
105	一、やあおめ子、	*	*
106		あゝ拝てなつかしや	
107		袖の泪た	
108	若按司	*	*
109	一、やあ新垣の比屋	*	*
110			
111			
112	頼む方なひらぬ	頼のむ方居らぬ	*
113	とまひ / \ ママやもの、	とめてつちをもの	*
114	たんでなさけあて	*	*
115	隠置たはふれ、	*	*
116	新垣	新垣のひや	新垣のひや
117	一、やあ思子、	*	*
118	隠し置ほしやゝ	*	*
119	涙の真砂程あすか、	*	*
120	一夜とても	*	一夜や迎も
121	高嶺のかんた	*	*
122	隠しおくものあらハ、	かくし置ものや	*
123	一門やたにも	*	*
124	引はらふし迄も、	引は [欠] らふし迄ん	*
125	殺し尽さしゆんでやり	*	*
126	道々に高札のあれは、	*	*
127	肝くれしやあても	*	*
128	ワカ命に替てまでの	*	我が命と替て迄の

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
129	肝いりやならぬ、	*	*
130	たう / \	*	*
131	遠く山原ニ	*	*
132	御下りよめしやうち、	*	*
133	よ所しらぬことに	*	*
134	かくれやひいまふれ、	*	*
135		*	*
136		*	*
137	若按司	*	*
138	一、やあ新垣のひや、	*	*
139	飛鳥も懐に入ハ、	*	*
140	狩人も助ゆんでやり【きけハ】きゝゆん、	*	*
141	雪霜や降ひ	*	*
142	行先やしらぬ、	*	*
143	慈悲よ情あて	*	*
144	一夜からち給ふれ、	*	*
145	新垣	*	*
146	一、いや / \	*	*
147	思子助やひ	*	*
148	わか命ちとよめ、	*	*
149	たう / \	*	*
150	こまからや急ち	*	*
151	出て給ふれ、	*	*
152		若按司	若按司
153		やあ新垣の比屋	やあ新垣の比屋
154		新垣のひや	
155		いやならん / \	いやならん / \
156	思姉	*	*
157	一、やあ思けひよ、	*	*
158	按司そへか恩義	*	*
159	忘て今のことやれハ、	*	*
160	こまをてやすまぬ	*	*
161	急ち戻ら、	*	*
162	若按司	*	
163	一、御気張よめしやうれ	*	
164	急ちもとやへら、	*	
165	子持ふし	歌子持節	*
166	一、たるかける山に	*	*
167	雪霜や降れは	*	*
168	いしやら山路や	*	*
169	足本もやみゆひ	足本んやめば	足本んやめば
170	歩てあゆまらぬ	*	*
171	くら闇よやれハ	*	*
172	行先や迷て		*
173	あの岩にすかり		*
174	このき瀬にのほて		*
175	互に鳴明ち		*
176	鳥も啼すみて	*	*
177	夜や明てをれハ	*	*
178	この山にかくれ	*	*
179	けふやくらさ	*	*
180			
181			
182	村【原】頭	崎本之子	*
183	一、是や多嘉良の村頭、	*	*
184	上原んかい	上原のやとりに	*
185	耕作見廻にいきゆん、	用事あて行ん	*
186	やあ / \、	*	*
187	かにある山中に	*	かにやある山中に
188	童へあてなしの、	*	*
189	いきやることやとて	いきやることあとて	*
190	ふたりあちをる、	二人居ちよか	二人居きよが
191	若按司	*	*
192	一、旅の者やすか	*	*
193	長路の疲れ、	*	*
194	足本もやめハ	*	*
195	歩てあゆまらぬ、	*	*
196	しはし休まてやり	*	*
197	こまにあちをる、	*	くまにをよる
198	てよ / \	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
199	急ち先に通ら、	*	*
200	村頭	崎本ノ子	*
201	一、やあ / \、	あゝ	*
202	つく / \ と御様子	*	*
203	拝てミやへれハ、	*	*
204	慥高嶺の	高嶺の思子	*
205	思子とやゆる、	疑やならん	*
206	御気遣よめしやうな、	*	*
207	我身や多嘉良の村頭	*	*
208	崎本とやゝへいる	*	*
209	あゝ拝てなつかしや	*	*
210	袖のなみた、	*	*
211	若按司	*	*
212	一、やあ崎本の子、	*	*
213	二所の親に	*	*
214	捨られてふたり、	*	捨てられてをれば
215	頼む方をらぬ	*	*
216	やとる方ないらぬ、	*	*
217	あの谷にかくれ	*	*
218	此山にやとて、	*	*
219	頓て消果る	*	*
220	露の身どやすか、	露の命どやすが	露の命どやすが
221	けふまでや死にやぬ	*	*
222	こまにをゆる、	*	*
223	崎本	崎本ノ子	村頭
224	一、やあ思子	*	*
225	やあ思なひの前、	*	*
226	此山にわかやとりの	此山に我身かやとりの	*
227	あやへひん、	*	*
228	山深さあれハ	*	*
229	見る人やをらぬ、	*	*
230	忍ひかくれとて	*	*
231	時節待めしやうれ、	*	*
232	たう / \	*	*
233	与所めなひぬうちに	*	*
234	御気張よめしやうれ、	*	*
235	若按司	*	*
236	一、慈悲よ情けあて	*	*
237	助やい給ふれ、	*	*
238	村頭	崎本ノ子	*
239	一、御急きよめしやうれ	御急ぢよみやうり	*
240	御供しやへら、	*	*
241			全人
242	されわかやとりや是たやへる、	*	さりやどや是だやびる
243	内におんつかいしやへら、	*	*
244	国吉のひや	国吉ノ子	
245	一、是や国吉の子、	*	*
246	急ち細物人形売ニ	*	*
247	むちたちゆん、	*	*
248	道輪口説	歌	*
249	一、一度榮へは	*	*
250	ひとたひおとるふ	*	*
251	世の中の習ひ	*	世の中の習や
252	思ひ知身の	*	*
253	哀れはかなや	*	*
254	すそは結んで	*	*
255	かたにうちかけ	*	*
256	やつれ出たる	*	*
257	姿言葉も	*	*
258	今に引かへ	*	*
259	島の島々	*	*
260	里のさと / \	*	*
261	めぐり / \ て	*	*
262	人形かひんしやうれ	*	*
263	ほとけかいんしやうれ	*	*
264	人形の数々	*	*
265	おきれこふしに	*	*
266	若衆人形	*	*
267	馬乗仏	*	*
268	是むて童へ	*	*



No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
269	なるこ鼓ミヤ	*	*
270	ほうろゝん/\	ふうろられ/\	*
271	ほうろ/\ほうつと	ふうろ/\ふうろと	*
272	国吉のひや	国吉ノ子	*
273	一、やあ童へ、	*	やあ/\童
274	としよひやひ集めれよ	どし呼ひ集り	*
275	このほとけくひらに、	この仏くいらね	此仏呉らん
276	童子	童	童
277	一、やあ/\としのきや、	*	*
278	仏呉ゆんでやり	*	*
279	いふる人のをもの、	*	*
280	たう/\急ち出れ、	*	*
281	童子	*	*
282	一、仏け呉ゆんでやりあらハ	*	*
283	急ち出ら、	*	*
284	国吉	国吉ノ子	国吉のひや
285	一、やあわらへ、	*	やあ童のきや
286	仏や望次第くひゆん、	*	*
287	たう/\	*	*
288	いらてとれよ	ゑらて取り	撰で取り
289	童へ	*	*
290	一、ワぬやこの馬乗ほとけとらに、	*	我んやなりく取らに
291	同	童	*
292	一、ワぬやおきれこふしとらに、	我身やこのおきれくふしとよん	我や此の若衆人形取よん
293	同	童	*
294	一、ワぬや鳴子とらに、	*	我や此馬乗仏取らに
295	同	童	*
296	一、ワ身や此若衆人形とゆん、	*	我んやうつきりくぶし取ん
297	国吉	国吉ノ子	国吉のひや
298	一、是むちやか/\、	*	*
299	やあ童へのきや、	*	やあ/\童のきや
300	此村にしらぬわらへの	*	*
301	かくれてやをらね、	*	*
302	正直にいふらは	*	*
303	此人形とらさ、	*	此仏とらさ
304	童子	*	*
305	一、近方の村々に	近方の村に	*
306	しらぬ童へやをやへらん、	*	*
307	やあとしのきや、	*	やあ/\友のきや
308	てよ/\急ち宿に戻ら、	*	*
309	童子	童一人	童
310	一、やあ/\、	*	*
311	このころ上原の	頃日に上原の	頃日に上原の
312	山やとりなかい、	*	*
313	しらぬ童へのふたり	*	*
314	宿かやひをやへひん、	*	*
315	国吉	国吉ノ子	国吉のひや
316	一、やあわらへ、	*	やあ/\童
317	おのやとりにつれていけ	*	うの宿に列ていけ
318	此ほとけとらさ、	*	*
319	わらへ	*	*
320	一、たう/\列ていかに、	たう/\烈り/\	*
321	こまとやゆる、	*	*
322		国吉ノ子	
323		としやは呼出すをかま	
324		童	
325		され若按司の前/\	
326	国吉	国吉ノ子	*
327	一、やあわらへ、	*	*
328	約束 <sup>ママ</sup> のこと此仏呉ん、	約束の事にこのふとけくいよん	約束の事に此仏呉ん
329	たう/\	*	*
330	急ち村にいけ、	急ち村に戻り	*
331			
332	これ/\、	*	
333		若按司	
334		やあわらへむきや	
335	同人	国吉ノ子	*
336	一、やあ思子/\、	*	*
337	御氣遣よめしやうな	*	*
338	みすく御目懸けれ、	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
339	ママ 我身の本の	*	*
340	国吉のひやとやゝへいる、	*	*
341			
342			
343			
344	やあ思子	*	*
345	いきやるたよりあて	*	*
346	こまにかくれやひいまひか、	*	*
347	若按司	*	*
348	世界や敵かたき	*	*
349	やとる方なひらぬ、	*	*
350	此山のふもとに	*	*
351	忍ひ隠れとす、	忍ひ隠りとて	*
352	多嘉良の村頭	*	*
353	崎本の子いきやて、	*	*
354	あのかげに此やとりに	*	あのかぎに此宿に
355	かくれやひをゆる、	*	*
356	国吉	国吉ノ子	*
357	一、やあ思子、	*	*
358	此近方や	*	*
359	心もとなさよあれは、	*	*
360	遠く逃忍て	*	*
361	時節待受て、	*	*
362	敵かたき討る	*	*
363	計よしやへら、	*	*
364	若按司	*	*
365	一、やあ国吉のひや、	*	*
366	親に捨られて	親に捨て	*
367	このなひよやれハ	*	*
368	いきちをてもいらぬ	*	*
369	片時も急ち、	*	*
370	父母よとまいて	*	*
371	いきほしやよあもの、	*	*
372	列立ることや	*	*
373	ゆるちたはふれ、	*	*
374	国吉	国吉ノ子	*
375	一、親かなし敵かたき	*	あ、親加那志敵
376	討とらないたつらに、	討徒に	*
377	肝ほれていまひめ	*	*
378	なまのことめしやうる、	*	*
379	たう／＼、	*	*
380	つく／＼と此事や	*	此事やみすく
381	御思案よめしやうれ、	*	*
382	若按司	*	*
383	一、やあ国吉のひや、	*	*
384	あちやか日もしらぬ	*	*
385	敵にとれられて、	*	*
386	哀れさま／＼の	*	*
387	憂めむたよいか、	*	*
388	いへも片時も	*	*
389	急ちほしやあもの、	*	*
390	是非共に此事や	慈悲共に此事や	*
391	ゆるち給ふれ、	*	*
392	国吉	国吉ノ子	*
393	一、あゝ、此二月餘るまでも	*	あ、此六月なる迄ん
394	ねふる目もねらぬ、	*	*
395	細物人形売に	*	*
396	姿引やつち、	*	*
397	村々よ廻て	*	*
398	とまひつきやる心入、	御めしゆるこゝろ入	*
399	あたになち此身	*	*
400	なからへてをからよいか、	*	*
401	迎も御前をとて	*	*
402	わとやはから、	*	*
403	若按司	*	*
404	一、やあ国吉のひや、	*	*
405	試ミとやたる	*	*
406	今のい云葉や、	*	*
407	ゆるち給ふれ、	*	*
408			全人

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
409	心実に今のことやれハ	*	*
410	誇らしやとあゆる、	*	*
411	やあ / \ 思なひよ、	やあおめないよ	*
412	国吉のひやとやゆる	*	*
413	出て御目かけれ、	*	*
414	思なひ	*	*
415	一、やあ国吉のひや、	*	*
416	思けいとわ身や	*	*
417	親に捨てられて、	親に捨てて	*
418	頼む方をらぬ	*	*
419	かゝるかたないらぬ、	宿る方ないらん	*
420	哀れこのなひに	*	*
421	なやひまたをもの、	*	*
422	是非よ情けあて	慈悲よ情けあて	*
423	助けやひたはふれ、	*	*
424	国吉	国吉ノ子	*
425	一、あゝ拜てなつかしや	*	*
426	袖のなみた、	*	*
427	やあ思なひの前	*	やあ思姉の前よ
428	此よの中に	*	*
429	国吉か生ちをる間たや	*	*
430	御気けやめしやうな、	*	*
431	思なひ	*	*
432	一、今のことやれハ	*	*
433	誇らしやとあゆる、	*	*
434	これからや朝夕	*	*
435	親と頼ミゆもの、	親とたのよ物の	親とたいたのによもの
436	万事いかことや	*	*
437	はからやひ給ふれ、	*	*
438	国吉	国吉ノ子	*
439	一、拝留やへて、	*	*
440			
441			
442			全人
443	やあ思子	*	*
444	やあ思なひの前、	*	やあ思姉の前よ
445			
446			
447	識名村花城のひやと	*	*
448	義理立のしほらしや、	*	*
449	兄弟の契約	*	*
450	結てあやへもの、	*	*
451	あの宿に引越ひ	宿に引越ひ	*
452	隠れやひをやへらに、	*	*
453	若按司	*	*
454	一、やあ崎本の子、	*	*
455	国吉のひやとやゆる	*	*
456	出ていまふれ、	*	*
457	崎本	崎本之子	崎本の子
458	一、国吉のひや	*	*
459	久しう拜ミやへて、	*	*
460	国吉	国吉ノ子	
461	一、やあ崎本の子、	*	*
462	思子二所の	*	*
463	消泉る命ち、	*	*
464	百情け故に	百〃情け故に	*
465	助やひ給ふち、	*	*
466	あゝ至極心入	*	*
467	感してとをゆる、	*	*
468	やあ崎本、	やあ崎本の子	*
469	此近方や	*	*
470	心元なさよあれハ、	*	*
471	識名村花城のひや宿に	*	*
472	おんつかいをかて、	*	*
473	忍ひかくれとて	*	*
474	節待たんしゆもの、	*	*
475	かたき討めしやいる	*	*
476	時節ともならハ、	*	*
477	共に肝揃て	共に肝合ち	*
478	働やひたはふれ、	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
479	崎本	崎本之子	*
480	一、あゝ今のことやれハ	*	*
481	誇らしやとあゆる、	*	*
482	此としになてをても	*	*
483	御主人の御為、	*	*
484	命ちふり捨て	*	*
485	御腰立さんしゆもの、	*	*
486	万事いかことや	*	*
487	はからやひたはふれ、	*	*
488		国吉ノ子	
489			
490			
491	国吉		
492	一、やあ思子	*	*
493	やあ思なひの前、	*	やあ思姉の前よ
494	夜も暮てをれハ	*	日ん暮てをれば
495	与所めなひぬあもの、	*	*
496	たう / \ 急ち	*	*
497	御打立めしやうれ、	*	*
498	長伊平屋ふし	*	*
499	一、いつし忘れゆか	*	*
500	身にあまる情け	*	*
501	袖にぬきとめて	*	*
502	別れくれしや	*	*
503	国吉	国吉ノ子	
504	一、され花城のひや宿や	*	*
505	是たやへる、	*	*
506	内におんつかいしやへら、	*	たう / \ 内にうんつかいしやびら
507		同人	国吉の比屋
508	一、是や国吉の子、	*	*
509	あゝ此二度の	*	*
510	急のい成迄も、	*	*
511	敵討んでやり	*	*
512	ねふる目も寝らぬ、	*	*
513	心尽くしゆす【や】か	*	*
514	助へやをらぬ、	*	*
515			
516			
517			
518	先謀ことあもの	*	*
519	思子おんにゆけて、	*	*
520	急ち火責しゆる	*	急ち火攻よしよる
521	謀よすらに、	*	*
522	やあ / \ 思子	*	*
523	やあ思なひの前、	やあ思姉の前 / \	やあ思姉の前よ
524			
525			
526			
527	あゝ此二度の	*	*
528	急のいなるまでも、	*	*
529	敵討んでやり	*	*
530	ねふる目もねらぬ、	*	*
531	心尽くしゆすか	*	*
532			
533	助へやをらぬ、	*	*
534	なからへてをらハ	*	*
535	いつもかにさらめ、	*	*
536	謀ことあもの	*	*
537	先おんにゆけら、	*	*
538	けふや北風やたちゆひ、	*	今日や北風んたきよへ
539	火責ともすらハ	火責とむすりハ	*
540	火のさわきにや、	*	*
541	敵の首とゆす	*	*
542	疑やないらぬ、	*	*
543	急ちおの用意しやへら、	*	*
544	若按司	*	*
545	一、やあ国吉のひや、	*	*
546	火責【とも】しゆんやれハ	*	*
547	勝ちもしゆらやすか、	*	*
548	一人の働や氣遣とやゆる、	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
549	国吉	国吉ノ子	
550	一、めしやいること、	*	*
551	年月のいかハ	年月のいけは	*
552	謀もあゆら、	*	*
553	徒らに月日重ならハ、	*	*
554	耳やないぬ壁の	*	*
555	ものきゝゆる世の中よやれハ、	*	*
556	若かよ所しれて	*	*
557	からめ出さらよいや、	捕から故や	*
558	急ち火責の謀や	*	*
559	思立ちやへたん、	*	*
560	思姉	*	*
561	一、やあ国吉のひや、	*	*
562	若か仕損て	*	*
563	嵐声のあらハ、	*	*
564	思けひとわぬや	思けへと二人や	*
565	いきやかなゆら、	*	*
566	国吉	国吉ノ子	
567	一、やあ思姉の前よ、	やあ思姉の前	*
568	此国吉か	*	*
569	としやよていきやひ、	*	歳や寄ていきよい
570	敵の首とらな	*	*
571	此からに死なは、	*	*
572	おの時やまた	*	*
573	いきやかめしやいら、	*	*
574	若按司	*	*
575	一、やあ国吉のひや、	*	*
576	たう / \	*	*
577	ワぬも列ていかに、	わめん列りていかに	*
578	急ち火責しゆる	*	急ち火攻よしよる
579	用意されゝ、	*	*
580	国吉	国吉ノ子	国吉の比屋
581	一、いや / \、	*	*
582	石垣よ越て	*	*
583	忍ひ入事やれハ、	*	*
584	思子御供からめきや	*	*
585	働やならぬ、	働のならぬ	働のならん
586	必ずこまに	*	*
587	御待めしやうれ、	*	*
588	敵の首とやい	*	*
589	頓てこんしゆもの、	*	*
590	思姉	*	*
591	一、やあ国吉のひや、	*	*
592	武士の義理やれは	武士の義理立てゝ	*
593	別れてやいまひい、	*	*
594	油断さぬことに	*	*
595	ものめつめて、	ものめつめらりゝ	*
596	東江ふし	歌東江ふし	*
597	一、おめきやひをても	思きやいをすか	*
598	是までよとめハ	*	*
599	むちたちゆるきハや	*	*
600	袖のなミた	*	*
601	夜廻	*	夜廻人
602	一、けふや北風もかう / \ 立ひ、	けふや北風やかう / \ 立ひ	*
603	夜廻り念入りよてやり	*	*
604	按司のみよんきことやれハ、	*	*
605	おとろしやゝあても	*	*
606	先急ちとふら、	*	*
607	あけちやめやう、	*	*
608	米蔵はい、 / \、	*	*
609	けふや北風やかう / \ 立ひ、	*	*
610	起て居ちをれ、	越(ママ)て居ちやうれ	*
611	おふほゝん、	おふふん	*
612			
613			
614			
615			
616			
617	はひたか / \ たかては、	はいたか / \ たるては	*
618	あゝまやあさめ、	あゝまやとやさめ	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
619		やかりまや / \ や	
620		人驚かき	
621	代官はい、 / \、	*	*
622	起て居ちをれ、	*	*
623	おふほん、	おふふん	うふほん
624	はひのふもあらぬさめ、	*	*
625		国吉ノ子	国吉のひや
626	一、是や国吉の子、	*	*
627	夜も更てをもの	*	*
628	急ち火責に出立ん、	*	*
629	早口説	*	口説
630	一、門に立寄	*	*
631	伺へは	*	*
632	用心きひしく	*	*
633	夜廻の	*	*
634	拍子木しけく	*	*
635	音すれハ	*	*
636	忍ふ思ひも	*	*
637	いならぬ	いかならぬ	いかならん
638	南無や八幡	*	*
639	大菩薩	*	*
640	力を合して	*	*
641	たひ給へ	*	*
642	北風はけしく	*	*
643	吹音に	*	*
644	まきれて石垣	*	*
645	飛越て	*	*
646	人目も今は	*	*
647	絶間ある	*	*
648	軒端の下に	軒の下に	*
649	寄かゝて	*	*
650	すわや火をかけ	するや火をかけ	*
651	火煙たつ	煙たつ	*
652			
653			
654			
655	供	*	*
656	一、火事よ / \、	はあ火事よ / \ / \	*
657		供	供
658	され / \ 按司加那志、	され按司加那志	さり按司加那志
659	火遣盗人	*	*
660	からめとやへたん、	*	*
661	鮫川の按司	*	*
662	一、あゝ出来た / \、	*	*
663	供	*	*
664	一、盗人や是たやへる、	盗人これたやへる	さり盗人や是だやびる
665	按司	*	*
666	一、是やよしのあるものとやゆる、	あゝ是やよしのあるむのとやよる	あゝ是やよしのある者どやよる
667	やあ供のきや、	*	*
668	たう / \	*	*
669	みすく尋やひ聞け、	*	*
670	供	*	*
671	一、押留やへて、	*	*
672	やあ盗人、	*	*
673	いきやしちやるものか、	*	*
674	国吉	国吉ノ子	国吉の比屋
675	一、銭金の盗人やあらぬ、	分金のふさぬ盗人やあらん	我身や銭金の盗人やあらん
676	鮫川の按司の	*	*
677	首のふしやに、	*	*
678	城焼崩さてやりしちやん、	城く尽さたりしちん	*
679	按司	*	*
680	一、やあ供のきや、	*	*
681	此世の中に	*	*
682	国吉のひや外に、	*	*
683	今のことおほ口に	*	*
684	ものいふすや	*	*
685	一人も又をらぬ、	一人の居ん	*
686	是や決して	*	*
687	国吉のひやとやゆる、	*	*
688	たう / \	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
689	急ちこれに出す	*	*
690	火遣の所存	*	*
691	直に尋ゆん、	*	*
692	供	*	*
693	一、拝留やへて、	*	*
694			全
695	さあ / \	*	*
696	御前に出やうれ、	御前に出様り / \	*
697	按司	*	*
698	一、やあ国吉のひや、	*	*
699	火事のさハきに	*	*
700	わぬ討てやりしゆすや、	*	*
701	螢火の須弥山		*
702	焼くつさてやりしゆる心、		*
703	流石武士の身の習や		*
704	おの笥とやゆる、	*	*
705	主人の恩義忘れらぬ	*	*
706	忠義の心入、	*	*
707	あゝ感してをゆる、	あゝ感してとをよろ	あゝ感じてどをよろ
708	国吉	国吉ノ子	国吉のひや
709	一、あゝ頼むかたなひらぬ	*	*
710	助部もをらぬ、	*	*
711	一人の働に	一人が働に	一人が働に
712	城焼くつち、	城焼ち尽き	*
713	按司の首とやい	*	*
714	冥途のみやけさんともて	*	*
715	今の企とやたる、	*	*
716	あゝ武運のちようさ	*	*
717	御果報とやゆる、	*	*
718	按司	*	*
719	一、やあ国吉のひや、	*	*
720	高嶺の按司と	*	*
721	気任に暮ち、	*	*
722	酒と色好ミ	*	*
723	おこり日に増て、	*	*
724	百姓の苦ミ	*	*
725	諸臣下の難儀、	*	*
726	あけてかそららぬ	*	*
727	罪科のあてと、	*	罪咎のあとて
728	島国の為に	*	*
729	討果ちあれハ、	*	*
730	ワか身しちまねちある	*	*
731	災とやゆる、	*	*
732	やあ / \、	*	*
733	高嶺のなし子	*	*
734	からめ出すてやり、	*	*
735	島々に堅く云渡ちあすか、	*	*
736	此二年の	*	*
737	糸のひ為迄も	*	*
738	音伝も聞ぬ、	*	*
739	今につく / \ と	*	*
740	考てむてハ、	*	*
741	罪科やおかちある	罪咎や殺ちある	*
742	本人にあてゝ、	*	*
743	妻子まで罪に	*	*
744	行ゆることや、	*	*
745	道ならぬあもの	*	*
746	忍らぬあこと、	*	*
747	隠し置あらハ	*	*
748	助けやひとらさ、	*	*
749	国吉のひや	国吉ノ子	国吉
750	一、あゝ乱軍の内をとて	あゝ乱運の内をとて	*
751	殺されかしちやら、	*	*
752	若按司の行末や	若按司の行衛	若按司の行衛
753	夢ほともしらぬ、	*	*
754	按司	*	*
755	一、やあ国吉のひや	*	*
756	静に心入	*	*
757	かたらひほしやあもの、	*	*
758	たう / \ 先	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
759	纏よ解ゆる【す】さ、	*	*
760		[欠](供力)	
761		拝ん留やびて	
762		[欠](按司力)	
763	やあ/\、	*	やあ
764	特と肝おして	*	*
765			
766	いやは聞留れ、	*	*
767	おかや島尻の一本柱、	*	*
768	智勇兼揃てをる	*	*
769	武士の事やれハ、	武士の者やれハ	*
770	殺しゆすに忍はらぬ	殺や忍はらん	*
771	助ほしやあもの、	*	*
772	ワか所存取受て	*	我が所存受取て
773	奉公よすれ、	奉公よすれよ	奉公をすりよ
774	国吉	国吉ノ子	*
775	一、あゝなまの仰すこと	*	*
776	みはいとやゝへすか、	*	*
777	ふたゝひ奉公の	*	*
778	望やあやへらぬ、	*	*
779	たう/\、	*	*
780	急ちおの支配	*	*
781	仰すめしやうれ、	*	*
782	按司	*	*
783	一、いや/\、	*	*
784	耳の根よあけて	*	*
785	たによ聞留れ、	*	*
786	誠名按司に	誠若按司に	誠若按司に
787	忠節よやらハ、	*	*
788	主人行末の	*	*
789	よしあしのことや、	*	*
790	身の上に引受て	*	*
791	思らねはあらぬ、	*	*
792	いらぬ義理たてゝ	*	*
793	殺されよすらハ、	*	*
794	たとひ若按司の	*	*
795	生残てをても、	*	*
796	たる頼て世界に	*	*
797	なからへてをひなゆか、	*	*
798	やあ国吉のひや、	*	*
799	ものや一方に	*	*
800	泥てをて済ぬ、	*	*
801	ことのおもさあす	*	*
802	かゝぬことしゆすと、	かゝぬもしゆすと	*
803	変に応しゆる	*	*
804	謀やあらね、	*	*
805	たう/\、	*	*
806	つく/\とおめわかち	*	*
807	真実に語れ、	*	*
808	若按司もいやも	*	*
809	共に助ゆん、	*	*
810	神仏かけて	*	*
811	偽やあらぬ、	*	*
812	国吉	国吉ノ子	*
813	一、あゝみよんきこと拝て	*	*
814	袖とぬらしやへる、	*	*
815	先わか願ことの	*	*
816	たちゆんともやらハ、	*	*
817	天に飛のほり	*	*
818	地の底もくゝて、	*	*
819	若按司の行衛	*	*
820	尋やひきやあへら、	*	*
821	按司	*	*
822	一、たう/\、	*	*
823	急ち願事よ語れきゝゆん、	*	*
824	国吉	国吉ノ子	*
825	一、先若按司に	*	*
826	一間切の地頭	*	*
827	按司の位添て、	*	*
828	高嶺の按司の	*	*



No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
829	跡目立て、	*	*
830	四季の祭礼	*	*
831	取行ゆんやらハ、	*	*
832	君家再興のためやれは、	*	*
833	武士の義理曲て	武士の道曲て	*
834	をかんちゆめやれハ、 ママ	*	*
835	按司	*	*
836	一、あゝ此願事も	あゝ是願事ん	*
837	むはや又ならぬ、	*	*
838	たう / \	*	*
839	望ミにまかさ、	*	*
840	国吉	国吉ノ子	国吉のひや
841	一、あゝたうと、	*	*
842	段々の御慈悲	*	*
843	なまのことやれハ、	*	*
844	心うちはれて	*	*
845	実よみよんにゆけら、	*	*
846	識名村なかひ	*	*
847	隠やひいまひん、	*	*
848	按司	*	*
849	一、やあ国吉のひや、	*	*
850	急ち識名村いきやひ	*	*
851	みすくいひ聞ち、	*	*
852	兄弟落つかち	*	*
853	さうてきやうれ、	列て来り	*
854	国吉	国吉ノ子	*
855	一、拝留やへて、	*	*
856	按司	*	鯨川の按司
857	たう / \	*	*
858	いそけ / \、	*	*
859	国吉	国吉ノ子	*
860	一、御供からめきやい	され御供からめきやい	*
861	きやへたん、	*	*
862	按司	*	*
863	一、たう / \	*	*
864	急ち呼よ / \、	*	呼ひよ / \
865			全人
866	ママ やあ若按司よ、	やあ若按司	やあ若按司よ
867	国吉のひやか	*	*
868	願事よ聞ハ、	*	*
869			
870			
871	理りよやれハ	*	*
872	肝くれしやあもの、	*	*
873	按司になち	*	*
874	嶋知行も、呉ゆん、	*	*
875	たう / \	*	*
876	けふからや三人	*	*
877	心安す / \とをりよ、	*	*
878	若按司	若按司并思ない両人	*
879	一、あゝたうと、	*	*
880	此御恩たうとさや	*	*
881	いつし忘れゆか、	*	いきし忘やびが
882	やあ国吉のひや	*	*
883	此御恩一期	一期	*
884	ちゝにかめら、	*	*
885	国吉	国吉ノ子	国吉のひや
886	一、あゝ此御恩たうとさや	*	*
887	石にや子のいしの、	*	*
888	大瀬成までも	*	*
889	おかけふさへめしやうれ、	*	*
890	按司	*	*
891	一、たう / \、	*	*
892	けふの誇らしやに、	今日の嬉しやに	*
893			
894	押列てたかひに	*	*
895	踊てもとれ、	*	*
896	若按司	*	*
897	一、おしつれて互に	*	*

No.	尚家本組踊集	久志村所蔵本(久志A本)	語学材料第二
898	踊て戻やへら、	*	*
899	清屋ふし	歌立雲節	立雲ぶし
900	一、けふの誇らしやゝ	今日の嬉しや	*
901	なをにきやなたてる	なをにきやたてる	*
902	つほてをる花の	*	*
903	露きやたこと	*	*
904	同ふし		*
905	一、こゝのえのうちに		*
906	答て露まちゆす		*
907	嬉しこときくの		*
908	花とやゆる		*
909			義臣物語り終る
910			

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
1	義臣物語	義臣物語	義臣物語
2	国吉のひや黒縹子入道頭巾金(糸蘭)にて 飴有ル黒紗綾袷衣裳縹子広袖羽織脚胖足袋 花加籠馬乗人老ツおきれこふし老ツ鳴子老 ツ若衆人形老ツ編笠炬手花		
3	若按司半向頭巾天鷲(糸爾)花金銀水引は さら縹子袷衣裳脚胖足袋		
4	姉かもし紫長巾作花水引はさら熨斗紙琉縫 薄衣裳足袋		
5	新垣のひ崎本の子兩人黒西洋布入道頭巾黒 木綿巢衣裳脚絆足袋		
6	崎本編笠自作ひげ鎌杖		
7	童子四人半向頭巾作花金銀水引はさら紺花 青銅振袖衣裳足袋		
8	鮫(字は鰻)川の按司金入綿の入道頭巾向 に金(糸蘭)龍之角飴有ル水色緞子衣裳羅 陳羽織錦にて飴有ル刀太刀足袋脚胖大團		
9	ちやうきやく持黒木綿単衣裳脚胖足袋		
10	夜廻白木綿長巾黒木綿巢衣裳脚絆足袋拍子		
11		国吉の比屋	国吉の比屋
12	一、出様ちやる者や	*	*
13	本の国吉のひや	*	*
14	今や国吉の子、	*	*
15	あゝ島尻の世の主	*	*
16	高嶺の按司や、	*	*
17	色欲にほけて	*	*
18	朝夕酒盛ひ、	*	*
19	歌三味線の	*	歌や三味線の
20	絶ゆる間やなひらぬ、	*	*
21	昔物語引出ち、	*	*
22	色々に異見	*	*
23	みよんにゆけたん、	*	んによけたん
24	忠言耳に逆て、	忠言耳に逆ひ	忠言耳に避て
25	位剥とられやひをれハ、	*	*
26	おれからや日々に	*	*
27	御万人や背き、	*	*
28	弓引かんでやりしゆすや	*	*
29	露程も知らぬ、	*	*
30	きのふ暁や、	*	*
31	首里軍押寄て	首里軍さ打寄て	*
32	責圍てをれハ、	*	*
33	出てたゝかたる者や	*	*
34	一人も又をらぬ、	*	*
35	按司や切腹よめしやうち、	*	*
36	をなちやらと思子や	*	*
37	与座の子か引列て、	*	*
38	逃忍て与座近くいきゆる内、	逃げ忍て与座近く行く内に	出忍て与座近く行く内に
39	流矢に当て	*	*
40	をなちやらと与座の子や、	*	*
41	道柴の露と消果て、	*	*
42	衰れ若按司と	*	*
43	思なひかことや、	*	思姉か行先や
44	知人やをらぬ、	*	*
45	あゝ高嶺のかんた	*	*
46	からめ出す者あらハ、	捕出り者あらハ	*
47	按司になち	*	*
48	島知行も呉ん、	*	*
49	また一夜連も	*	又一夜や連
50	隠し置くものあらは、	*	*
51	一門やだにも	一門やだにゆ	一門やだによ
52	引はらふしまても、	*	*
53	殺しつくさしゆんでやり	*	*
54	道々に高札のあれハ、	*	*
55	あかりてた拝む	*	*
56	人心やれハ、	人やれハ	*
57	御万人や敵となて	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
58	弓ひきゆる此時よやれハ、	弓引る世の中よやれは	弓引る世の中よやれば
59	頓て生とられ	頓て	*
60	からめ出されらとめハ、	からみ出さらとめは	搦め出さら留ば
61	あゝ至極気の毒とやゆる、	*	*
62	片時も急ち	片時ん	*
63	御行衛尋やい拜ま、	*	*
64	此支度しゆてや	*	*
65	与所の疑もたちゆら、	*	与所の疑んしよら
66	あゝ今とおめつきやる、	*	*
67	細物人形売に	*	*
68	やつれやいいてたちゆん、	*	扮れやい出立つん
69	若按司思姉出羽干瀬ふし	干瀬ぶし	干瀬節
70	一、おめけひとワ身や	思姉と我身や	思ないと我身や
71	親にすてられて	*	*
72	互になきくらち	*	朝夕泣き暮ち
73	をるか心気	*	居るが気心(心気)
74		若按司	若按司
75	一、我身や高嶺の	*	*
76	若按司とやゆる、	*	*
77	首里軍押よすて	首里軍さ打寄て	首里軍打寄て
78	父母や殺されて、	*	*
79	思なひとワ身や	*	思妹と我身や
80	只足にまかち、	*	*
81	忍ひ出たすか	*	*
82	行先もしらぬ、	*	行先やしらん
83	与座嶽に登て	*	*
84	高き瀬の下に、	*	*
85	夜や鳴明ち	*	*
86	なまゝてやをすか、	*	*
87	たゆるものはなち	*	喰める食放ち
88	けふ三日なゆん、	*	*
89	やあ思なひよ、	*	*
90	新垣のひやゝやかあ	*	*
91	母方の祖父やれは、	*	*
92	夜も暮てをれハ	*	*
93	見る人やをらぬ、	*	*
94	立寄ひ頼て	*	*
95	かくれやひをらに、	*	*
96	思なひ	思妹	*
97	一、たう / \	*	*
98	山路よやれハ	*	*
99	急ち出ら、	*	*
100		若按司	若按司
101	一、やあ / \	やあ	*
102	新垣のひやよ	*	*
103	/ \、	*	*
104	新垣	新垣のひや	新垣の比屋
105	一、やあおめ子、	*	*
106			
107			
108	若按司	*	*
109	一、やあ新垣の比屋	*	*
110			
111			
112	頼む方なひらぬ	*	*
113	とまひ / \よきやもの、	*	*
114	たんてなさけあて	*	*
115	隠置たはふれ、	*	*
116	新垣	新垣のひや	新垣のひや
117	一、やあ思子、	*	*
118	隠し置ほしやゝ	*	*
119	浜の真砂程あすか、	浜の真砂程やすが	*
120	一夜とても	*	*
121	高嶺のかんた	*	*
122	隠しおくものあらハ、	*	*
123	一門やたにも	*	*
124	引はらふし迄も、	*	*
125	殺し尽さしゆんでやり	*	*
126	道々に高札のあれは、	*	*
127	肝くれしやあても	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
128	ワか命に替てまでの	*	我が命と替て迄の
129	肝いりやならぬ、	*	*
130	たう / \	*	*
131	遠く山原ニ	*	*
132	御下りよめしやうち、	*	*
133	よ所しらぬことに	*	*
134	かくれやひいまふれ、	*	*
135		*	*
136		*	*
137	若按司	*	*
138	一、やあ新垣のひや、	*	*
139	飛鳥も懐に入ハ、	*	*
140	狩人も助ゆんでやり【きけハ】きゝゆん、	狩人ん助ゆんてい聞は	*
141	雪霜や降ひ	*	*
142	行先やしらぬ、	*	*
143	慈悲よ情あて	*	*
144	一夜からち給ふれ、	*	*
145	新垣	*	*
146	一、いや / \	*	*
147	思子助やひ	*	*
148	わか命ちとよめ、	*	*
149	たう / \	*	*
150	こまからや急ち	*	*
151	出て給ふれ、	*	*
152			若按司
153			やあ新垣の比屋
154			新垣の比屋
155		いやならん / \	いやならん / \
156	思姉	*	*
157	一、やあ思けひよ、	*	*
158	按司そへか恩義	*	*
159	忘て今のことやれハ、	*	*
160	こまをてやすまぬ	*	*
161	急ち戻ら、	*	*
162	若按司	*	*
163	一、御気張よめしやうれ	*	*
164	急ちもとやへら、	*	*
165	子持ふし	*	*
166	一、たるかける山に	*	*
167	雪霜や降れは	雪霜や降い	*
168	いしやら山路や	*	*
169	足本もやみゆひ	足本んやめば	足本んやめば
170	歩てあゆまらぬ	*	*
171	くら闇よやれハ	*	闇の夜どやれば
172	行先や迷て	*	*
173	あの岩にすかり	*	*
174	このき瀬にのほて	*	*
175	互に鳴明ち	*	*
176	鳥も啼すみて	*	*
177	夜や明てをれハ	*	*
178	この山にかくれ	*	*
179	けふやくらさ	今日やあかさ	今日や暮らす
180			
181			
182	村【原】頭	崎本子	岸本ノ子
183	一、是や多嘉良の村頭、	*	*
184	上原んかい	*	*
185	耕作見廻にいきゆん、	*	耕作見舞に行ん
186	やあ / \、	*	*
187	かにある山中に	*	*
188	童へあてなしの、	*	*
189	いきやることやとて	*	*
190	ふたりゐちをる、	二人居きゆが	二人居よが
191	若按司	*	*
192	一、旅の者やすか	*	*
193	長路の疲れ、	*	*
194	足本もやめハ	*	*
195	歩てあゆまらぬ、	*	*
196	しはし休まてやり	*	*
197	こまにゐちをる、	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
198	てよ / \	*	出よ / \
199	急ち先に通ら、	*	*
200	村頭	崎本子	岸本ノ子
201	一、やあ / \、	*	*
202	つく / \ と御様子	*	*
203	拜てミやへれハ、	*	*
204	樋高嶺の	*	*
205	思子とやゆる、	*	*
206	御気遣よめしやうな、	*	*
207	我身や多嘉良の村頭	*	*
208	崎本とやゝへいる	*	*
209	あゝ拜てなつかしや	*	*
210	袖のなみた、	*	*
211	若按司	*	*
212	一、やあ崎本の子、	*	やあ岸本の子
213	二所の親に	*	*
214	捨られてふたり、	*	捨てられてをれば
215	頼む方をらぬ	*	頼む方無らん
216	やとる方ないらぬ、	*	*
217	あの谷にかくれ	*	*
218	此山にやとて、	*	北山に宿て
219	頓て消果る	*	*
220	露の身どやすか、	*	*
221	けふまでや死にやぬ	*	*
222	こまにをゆる、	*	*
223	崎本	崎本子	岸本ノ子
224	一、やあ思子	*	*
225	やあ思なひの前、	*	*
226	此山にわかやとりの	*	北山に我が宿の
227	あやへひん、	*	*
228	山深さあれハ	*	*
229	見る人やをらぬ、	*	*
230	忍ひかくれとて	*	*
231	時節待めしやうれ、	*	*
232	たう / \	*	*
233	与所めなひぬうちに	*	*
234	御気張よめしやうれ、	*	*
235	若按司	*	*
236	一、慈悲よ情けあて	*	*
237	助やい給ふれ、	*	*
238	村頭	崎本子	岸本ノ子
239	一、御急きよめしやうれ	*	*
240	御供しやへら、	*	*
241		崎本子	
242	されわかやとりや是たやへる、	*	され宿や是だやびる
243	内におんつかいしやへら、	*	*
244	国吉のひや	国吉の子	国吉の子
245	一、是や国吉の子、	*	*
246	急ち細物人形売ニ	*	*
247	むちたちゆん、	*	*
248	道輪口説	*	道行口説
249	一、一度栄へは	*	*
250	ひとたひおとろふ	*	*
251	世の中の習ひ	*	*
252	思ひ知身の	*	*
253	哀れはかなや	*	*
254	すそは結んで	*	すればあもすんで
255	かたにうちかけ	*	*
256	やつれ出たる	*	*
257	姿言葉も	*	*
258	今に引かへ	*	*
259	島の島々	*	*
260	里のさと / \	*	*
261	めぐり / \ て	*	*
262	人形かひんしやうれ	*	*
263	ほどけかいんしやうれ	*	*
264	人形の数々	*	*
265	おきれこふしに	*	*
266	若衆人形	*	*
267	馬乗仏	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
268	是むて童へ	*	*
269	なるこ鼓ミヤ	*	*
270	ほうろゝん/\	*	*
271	ほうろ/\ほうつと	ふうろ/\ふうろと	ほろ、うんほうつと
272	国吉のひや	国吉子	国吉の子
273	一、やあ童へ、	やあ/\童	やあ/\童
274	としよひやひ集めれよ	*	*
275	このほとけくひらに、	*	*
276	童子	一番童び	童
277	一、やあ/\としのきや、	*	*
278	仏呉ゆんでやり	*	*
279	いふる人のをもの、	*	*
280	たう/\急ち出れ、	*	*
281	童子	二番童ひ	*
282	一、仏け呉ゆんでやりあらハ	*	*
283	急ち出ら、	*	*
284	国吉	国吉ひや	国吉の子
285	一、やあわらへ、	*	やあ童のちや
286	仏や望次第くひゆん、	*	*
287	たう/\	*	*
288	いらてとれよ	いらてとり	撰で取り
289	童へ	一番童	*
290	一、ワぬやこの馬乗ほとけとらに、	*	我身やなりく取らに
291	同	二番童	*
292	一、ワぬやおきれこふしとらに、	*	我身や此若衆人形取らに
293	同	三番童	*
294	一、ワぬや鳴子とらに、	*	我身や此馬騎り仏い取らに
295	同	四番童	*
296	一、ワ身や此若衆人形とゆん、	*	我身やうつりくぶし取らに
297	国吉	国吉ひや	国吉の子
298	一、是むちやか/\、	*	*
299	やあ童へのきや、	*	やあ/\童のちやあ
300	此村にしらぬわらへの	*	*
301	かくれてやをらね、	*	*
302	正直にいふらは	*	*
303	此人形とらさ、	*	此仏け取らさ
304	童子	二番童	*
305	一、近方の村々に	*	*
306	しらぬ童へやをやへらん、	*	*
307	やあとしのきや、	*	*
308	てよ/\急ち宿に戻ら、	*	*
309	童子	一番童	童
310	一、やあ/\、	*	*
311	このころ上原の	*	*
312	山やとりなかい、	*	*
313	しらぬ童へのふたり	*	*
314	宿かやひをやへひん、	*	宿取り居やびん
315	国吉	国吉ひや	国吉の子
316	一、やあわらへ、	やあ/\童	やあ/\童
317	おのやとりにつれていけ	*	うの宿に列ていけ
318	此ほとけとらさ、	*	*
319	わらへ	*	*
320	一、たう/\列ていかに、	*	とう/\列て行かな
321	こまとやゆる、	*	是どやよる
322			
323			
324			
325			
326	国吉	国吉ひや	国吉の子
327	一、やあわらへ、	*	*
328	約束のこと此仏呉ん、	*	約束の事に此の仏け呉ゆん
329	たう/\	*	*
330	急ち村にいけ、	*	急ぎ村に行けよ
331			国吉の子
332	これ/\、	*	*
333			
334			
335	同人	*	
336	一、やあ思子/\、	*	*
337	御氣遣よめしやうな	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
338	みすく御目懸けれ、	*	*
339	我身の本の ママ	*	*
340	国吉のひやとやゝへいる、	*	*
341			
342			
343			
344	やあ思子	*	*
345	いきやるたよりあて	*	*
346	こまにかくれやひいまひか、	*	*
347	若按司	*	*
348	世界や敵かたき	*	*
349	やとる方なひらぬ、	*	*
350	此山のふもとに	*	北山のふもとに
351	忍ひ隠れとす、	*	*
352	多嘉良の村頭	*	*
353	崎本の子いきやて、	*	*
354	あのかげに此やとりに	*	彼の蔭に隠れ
355	かくれやひをゆる、	*	此宿に隠れやい居よる
356	国吉	国吉ひや	国吉の子
357	一、やあ思子、	*	*
358	此近方や	*	*
359	心もとなさよあれは、	*	*
360	遠く逃忍て	*	*
361	時節待受て、	*	*
362	敵かたき討る	敵かたち討取よる	仇き打取よる
363	計よしやへら、	*	*
364	若按司	*	*
365	一、やあ国吉のひや、	*	*
366	親に捨られて	*	*
367	このなひよやれハ	*	*
368	いきちをてもいらぬ	*	*
369	片時も急ち、	*	*
370	父母よとまいて	*	*
371	いきほしやあもの、	*	*
372	列立ることや	*	*
373	ゆるちたはふれ、	*	*
374	国吉	国吉ひや	国吉の子
375	一、親かなし敵かたき	*	*
376	討とらないたつらに、	*	*
377	肝ほれていまひめ	*	*
378	なまのことめしやうる、	*	*
379	たう / \、	*	*
380	つく / \と此事や	*	*
381	御思案よめしやうれ、	*	*
382	若按司	*	*
383	一、やあ国吉のひや、	*	あ、国吉の比屋
384	あちやか日もしらぬ	*	*
385	敵にとれられて、	*	*
386	哀れさま / \の	*	*
387	憂めむたよいか、	*	*
388	いへも片時も	*	*
389	急ちほしやあもの、	*	*
390	是非共に此事や	*	*
391	ゆるち給ふれ、	*	*
392	国吉	国吉ひや	国吉の子
393	一、あゝ、此二月餘るまでも	*	あゝ、此の二年の一周忌なる迄ん
394	ねふる目もねらぬ、	*	*
395	細物人形売に	*	*
396	姿引やつち、	*	*
397	村々よ廻て	*	*
398	とまひつきやる心入、	*	尋参 / \に着る心入り
399	あたになち此身	*	*
400	なからへてをからよいか、	*	*
401	逆も御前をとて	*	*
402	わとやはから、	我どやはかやびら	我身や計やびら
403	若按司	*	*
404	一、やあ国吉のひや、	*	*
405	試ミとやたる	*	*
406	今のい云葉や、	*	*
407	ゆるち給ふれ、	*	*



No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
408			
409	心実に今のことやれハ		*
410	誇らしやとあゆる、		*
411	やあ / \ 思なひよ、	*	やあ思姉よ
412	国吉のひやとやゆる	*	*
413	出て御目かけれ、	*	*
414	思なひ	*	*
415	一、やあ国吉のひや、	*	*
416	思けいとわ身や	*	*
417	親に捨てられて、	*	*
418	頼む方をらぬ	*	*
419	かゝるかたないらぬ、	*	宿る方無らん
420	哀れこのなひに	*	*
421	なやひまたをもの、	*	*
422	是非よ情けあて	慈悲ゆ情けあて	慈悲よ情け有て
423	助けやひたはふれ、	*	*
424	国吉	国吉ひや	国吉の子
425	一、あゝ 拝てなつかしや	*	*
426	袖のなみた、	*	*
427	やあ思なひの前	*	やあ思姉の前よ
428	此よの中に	*	*
429	国吉か生ちをる間たや	*	*
430	御気けやめしやうな、	*	*
431	思なひ	*	*
432	一、今のことやれハ	*	*
433	誇らしやとあゆる、	*	*
434	これからや朝夕	*	*
435	親と頼ミゆもの、	*	親と頼む者
436	万事いかことや	*	万事如何程や
437	はからやひ給ふれ、	*	*
438	国吉	国吉ひや	国吉の子
439	一、拝留やへて、	*	拝留めやびら
440			
441			
442			
443	やあ思子	*	*
444	やあ思なひの前、	*	やあ思姉の前よ
445			
446			
447	識名村花城のひやと	*	*
448	義理立のしほらしや、	*	*
449	兄弟の契約	*	*
450	結てあやへもの、	*	*
451	あの宿に引越ひ	*	*
452	隠れやひをやへらに、	*	*
453	若按司	*	*
454	一、やあ崎本の子、	*	*
455	国吉のひやとやゆる	*	*
456	出ていまふれ、	*	*
457	崎本	崎本子	崎本の子
458	一、国吉のひや	*	*
459	久しう拝ミやへて、	*	*
460	国吉	国吉ひや	国吉の子
461	一、やあ崎本の子、	*	*
462	思子二所の	*	*
463	消果る命ち、	*	*
464	百情け故に	*	*
465	助やひ給ふち、	*	*
466	あゝ至極心入	*	*
467	感してとをゆる、	*	*
468	やあ崎本、	*	やあ崎本の子
469	此近方や	*	此の近方は
470	心元なさよあれハ、	*	心元成さよ有もの
471	識名村花城のひや宿に	*	*
472	おんつかいをかて、	*	*
473	忍ひかくれとて	*	*
474	節待たんしゆもの、	*	*
475	かたき討めしやいる	*	*
476	時節ともならハ、	*	*
477	共に肝揃て	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
478	働やひたはふれ、	*	*
479	崎本	崎本子	崎本の子
480	一、あゝ今のことやれハ	*	あゝ命の事やれば
481	誇らしやとあゆる、	*	*
482	此としになてをても	*	此年に成て居てん
483	御主人の御為、	*	*
484	命ちふり捨て	*	*
485	御腰立さんしゆもの、	*	*
486	万事いかことや	*	*
487	はからやひたはふれ、	*	*
488		国吉ひや	国吉の子
489			
490			
491	国吉		
492	一、やあ思子	*	*
493	やあ思なひの前、	*	やあ思姉の前よ
494	夜も暮てをれハ	*	*
495	与所めなひぬあもの、	*	*
496	たう / \ 急ち	*	*
497	御打立めしやうれ、	御立召り	御立召り
498	長伊平屋ふし	長伊平ぶし	*
499	一、いつし忘れゆか	*	*
500	身にあまる情け	*	*
501	袖にぬきとめて	*	*
502	別れくれしや	*	*
503	国吉	国吉ひや	国吉の子
504	一、され花城のひや宿や	*	さい花城の比屋
505	是たやへる、	*	*
506	内におんつかいしやへら、	たう / \ 内にうんつかいしやびら	たう / \ 内に御使いしやびら
507		国吉ひや	同人
508	一、是や国吉の子、	*	*
509	あゝ此二度の	*	*
510	糸のい成迄も、	*	*
511	敵討んでやり	*	*
512	ねふる目も寝らぬ、	*	*
513	心尽くしゆす【や】か	*	*
514	助へやをらぬ、	*	*
515			
516			
517			
518	先謀ことあもの	*	謀事有もの
519	思子おんにゆけて、	*	*
520	急ち火責しゆる	*	*
521	謀よすらに、	*	*
522	やあ / \ 思子	*	やあ思子
523	やあ思なひの前、	やあ思姉の前よ	やあ思姉の前よ
524			
525			
526			
527	あゝ此二度の	*	*
528	糸のいなるまでも、	*	*
529	敵討んでやり	*	*
530	ねふる目もねらぬ、	*	寝る夜ん寝らん
531	心尽くしゆすか	*	*
532			
533	助へやをらぬ、	*	*
534	なからへてをらハ	*	*
535	いつもかにきらめ、	*	*
536	謀ことあもの	*	*
537	先おんにゆけら、	*	先づ御にゆけやびら
538	けふや北風やたちゆひ、	*	*
539	火責ともすらハ	*	火責どんすれば
540	火のさわきにや、	*	*
541	敵の首とゆす	*	*
542	疑やないらぬ、	*	*
543	急ちおの用意しやへら、	*	*
544	若按司	*	*
545	一、やあ国吉のひや、	*	*
546	火責【とも】しゆんやれハ	*	*
547	勝ちもしゆらやすか、	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
548	一人の働や氣遣とやゆる、	*	一人が働や氣支どやよる
549	国吉	国吉ひや	国吉の子
550	一、めしやいること、	*	*
551	年月のいかハ	年月のいけば	*
552	謀もあゆら、	*	*
553	徒らに月日重ならハ、	*	*
554	耳やないぬ壁の	*	*
555	ものきゝゆる世の中よやれハ、	*	*
556	若かよ所しれて	*	*
557	からめ出さらよいや、	*	*
558	急ち火責の謀や	*	*
559	思立ちやへたん、	*	*
560	思姉	*	*
561	一、やあ国吉のひや、	*	*
562	若か仕損て	*	*
563	嵐声のあらハ、	*	*
564	思けひとわぬや	*	思けいと二人や
565	いきやかなゆら、	*	*
566	国吉	国吉ひや	国吉の子
567	一、やあ思姉の前よ、	*	*
568	此国吉か	*	*
569	としやよていきやひ、	*	*
570	敵の首とらな	*	*
571	此からに死なは、	*	*
572	おの時やまた	*	*
573	いきやかめしやいら、	*	*
574	若按司	*	*
575	一、やあ国吉のひや、	*	*
576	たう / \	*	*
577	ワぬも列ていかに、	*	*
578	急ち火責しゆる	*	急ぎ火責する
579	用意されゝ、	*	*
580	国吉	国吉ひや	国吉の子
581	一、いや / \、	*	*
582	石垣よ越て	*	*
583	忍ひ入事やれハ、	*	*
584	思子御供からめきや	*	*
585	働やならぬ、	働のならん	*
586	必ずこまに	*	*
587	御待めしやうれ、	*	*
588	敵の首とやい	*	*
589	頓てこんしゆもの、	*	*
590	思姉	*	*
591	一、やあ国吉のひや、	*	*
592	武士の義理やれは	*	*
593	別れてやいまひい、	*	*
594	油断さぬことに	*	*
595	ものめつめて、	*	*
596	東江ふし	*	*
597	一、おめきやひをても	*	*
598	是までよとめハ	*	*
599	むちたちゆるきハや	*	立ち別る涯や
600	袖のなミた	*	*
601	夜廻	*	夜廻り
602	一、けふや北風もかう / \ 立ひ、	今日や北風やがう / \ 立え	*
603	夜廻り念入りよてやり	夜廻念入てやり	*
604	按司のみよんきことやれハ、	*	*
605	おとろしやゝあても	*	*
606	先急ちとふら、	*	*
607	あけちやめやう、	*	*
608	米蔵はい、 / \、	*	*
609	けふや北風やかう / \ 立ひ、	*	*
610	起て居ちをれ、	*	*
611	おふほゝん、	*	*
612			錢蔵はい / \
613			起て居きやうり
614			うほん
615			
616			
617	はひたか / \ たかては、	はえ誰が / \ たがては	はい誰がては / \ あ

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
618	あゝまやあさめ、	*	*
619			
620			
621	代官はい、/\、	*	*
622	起て居ちをれ、	*	*
623	おふほん、	うほふん	うほん
624	はひのふもあらぬさめ、	*	あゝ何をんあらん猫さめ
625		国吉ひや	
626	一、是や国吉の子、	*	
627	夜も更てをもの	*	
628	急ち火責に出立ん、	*	
629	早口説	*	*
630	一、門に立寄	*	*
631	伺へは	*	*
632	用心きひしく	*	*
633	夜廻の	*	*
634	拍子木しけく	*	*
635	音すれハ	*	*
636	忍ふ思ひも	*	*
637	いならぬ	いかならん	いかならん
638	南無や八幡	*	南無や八幡 (ママ)
639	大菩薩	*	*
640	力を合して	*	*
641	たひ給へ	*	*
642	北風ほけしく	*	*
643	吹音に	*	*
644	まきれて石垣	*	*
645	飛越て	*	*
646	人目も今は	*	*
647	絶間ある	*	*
648	軒端の下に	*	軒端の
649	寄かゝて	寄りかゝり	昂りかゝて
650	すわや火をかけ	*	すはや火付
651	火煙たつ	*	*
652			
653			
654			
655	供	*	*
656	一、火事よ/\、	*	下に火事よ/\
657			供
658	され/\ 按司加那志、	*	*
659	火遣盗人	*	*
660	からめとやへたん、	からめ取てきやびたん	*
661	鯉川の按司	鯉川 (サミガハ) 按司	*
662	一、あゝ出来た/\、	*	*
663	供	*	*
664	一、盗人や是たやへる、	*	*
665	按司	鯉川 (サミガハ) 按司	鯉川の按司
666	一、是やよしのあるものとやゆる、	*	あゝ是やよしのある者どやよる
667	やあ供のきや、	*	*
668	たう/\	*	*
669	みすく尋やひ聞け、	*	*
670	供	*	*
671	一、押留やへて、	*	*
672	やあ盗人、	*	*
673	いきやしちやるものか、	*	*
674	国吉	国吉ひや	国吉の子
675	一、銭金の盗人やあらぬ、	*	我身や銭金の盗人やあらん
676	鯉川の按司の	*	*
677	首のふしやに、	*	首ど欲しやる
678	城焼崩さてやりしちやん、	*	城く焼き崩さてやり仕来る
679	按司	鯉川 (サミガハ) 按司	*
680	一、やあ供のきや、	*	*
681	此世の中に	*	*
682	国吉のひや外に、	*	*
683	今のことおほ口に	*	*
684	ものいふすや	*	*
685	一人も又をらぬ、	をらん	*
686	是や決して	*	*
687	国吉のひやとやゆる、	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
688	たう / \	*	*
689	急ちこれに出ず	急ちこまに出ず	急ぎ此処に出し
690	火遣の所存	*	*
691	直に尋ゆん、	*	*
692	供	*	*
693	一、拝留やへて、	*	*
694			
695	さあ / \	*	さあ
696	御前に出やうれ、	御前に出様り / \	*
697	按司	*	鯨川の按司
698	一、やあ国吉のひや、	*	*
699	火事のさハきに	*	*
700	わぬ討んでやりしゆすや、	*	*
701	螢火の須弥山	*	*
702	焼くつさてやりしゆる心、	*	焼くつさてやりしやる心
703	流石武士の身の習や	*	*
704	おの筈とやゆる、	*	*
705	主人の恩義忘れらぬ	*	*
706	忠義の心入、	*	*
707	あゝ感 <sup>ママ</sup> してをゆる、	あゝ感じてどをゆる	あゝ感じてどをよる
708	国吉	国吉子	国吉の子
709	一、あゝ頼むかたなひらぬ	*	*
710	助部もをらぬ、	助けびんをら	*
711	一人の働に	一人が働に	一人が働に
712	城焼くつち、	*	*
713	按司の首とやい	*	*
714	冥途のみやけさんともて	*	*
715	今の企とやたる、	*	*
716	あゝ武運のちようさ	*	*
717	御果報とやゆる、	*	*
718	按司	*	鯨川の按司
719	一、やあ国吉のひや、	*	*
720	高嶺の按司と	*	*
721	氣任に暮ち、	*	*
722	酒と色好ミ	*	*
723	おこり目に増て、	*	*
724	百姓の苦ミ	*	*
725	諸臣下の難儀、	諸臣下の難事	*
726	あけてかそららぬ	*	挙げて数ず知らん
727	罪科のあてと、	*	罪咎のあてと
728	島国の為に	*	*
729	討果ちあれハ、	*	*
730	ワカ身しちまねちある	*	*
731	災とやゆる、	*	*
732	やあ / \、	*	やあ
733	高嶺のなし子	*	*
734	からめ出すてやり、	*	*
735	島々に堅く云渡ちあすか、	*	*
736	此二年の	*	此の二年
737	急のひ為迄も	*	*
738	音伝も聞ぬ、	*	音信ん無らん
739	今につく / \と	*	*
740	考てむてハ、	*	*
741	罪科やおかちある	*	*
742	本人にあてゝ、	*	*
743	妻子まで罪に	*	妻子迄咎に
744	行ゆることや、	*	*
745	道ならぬあもの	*	*
746	忍らぬあこと、	*	*
747	隠し置あらハ	*	*
748	助けやひとらさ、	*	*
749	国吉のひや	国吉子	国吉の子
750	一、あゝ乱軍の内をとて	*	*
751	殺されかしちやら、	*	*
752	若按司の行末や	若按司の行衛や	若按司の行衛
753	夢ほともしらぬ、	*	*
754	按司	*	鯨川の按司
755	一、やあ国吉のひや	*	*
756	静に心入	*	*
757	かたらひほしやあもの、	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
758	たう / \ 先	*	*
759	縄よ解ゆる【す】さ、	*	縄よ解け免し
760			
761			
762			
763	やあ / \、	*	*
764	特と肝おして	*	*
765			
766	いやは聞留れ、	*	*
767	おかや島尻の一本柱、	*	*
768	智勇兼揃てをる	*	*
769	武士の事やれハ、	*	*
770	殺しゆすに忍はらぬ	殺すに忍ばらん	*
771	助ほしやあもの、	*	*
772	ワか所存取受て	*	*
773	奉公よすれ、	奉公をすれゆ	奉公をすれよ
774	国吉	国吉子	国吉の子
775	一、あゝなまの仰すこと	*	*
776	みはいとやゝへすか、	*	*
777	ふたゝひ奉公の	*	*
778	望やあやへらぬ、	*	*
779	たう / \	*	*
780	急ちおの支配	*	*
781	仰すめしやうれ、	*	*
782	按司	*	鯨川の按司
783	一、いや / \、	*	*
784	耳の根よあけて	*	*
785	たによ聞留れ、	*	*
786	誠名按司に	誠と若按司に	誠若按司に
787	忠節よやらハ、	*	*
788	主人行末の	*	*
789	よしあしのことや、	*	*
790	身の上に引受て	*	*
791	思らねはあらぬ、	*	*
792	いらぬ義理たてゝ	*	*
793	殺されよすらハ、	*	*
794	たとひ若按司の	*	*
795	生残てをても、	生残てをたん	*
796	たる頼て世界に	*	*
797	なからへてをひなゆか、	*	*
798	やあ国吉のひや、	*	*
799	ものや一方に	*	*
800	泥てをて済ぬ、	*	泥らてや済まん
801	ことのおもきあす	*	*
802	かゝぬことしゆすと、	*	*
803	変に応しゆる	*	*
804	謀やあらね、	*	*
805	たう / \、	*	*
806	つく / \ とおめわかち	*	*
807	真実に語れ、	*	*
808	若按司もいやも	*	*
809	共に助ゆん、	*	*
810	神仏かけて	*	*
811	偽やあらぬ、	*	*
812	国吉	国吉ひや	国吉の子
813	一、あゝみよんきこと拝て	*	*
814	袖とぬらしやへる、	*	*
815	先わか願ことの	*	*
816	たちゆんともやらハ、	*	*
817	天に飛のほり	天に飛び登て	天に飛び登て
818	地の底もくゝて、	地の底んくたて	地の底ん潜て
819	若按司の行衛	*	*
820	尋やひきやあへら、	*	*
821	按司	*	鯨川の按司
822	一、たう / \、	*	*
823	急ち願事よ語れきゝゆん、	*	急き願事よ語て聞かす
824	国吉	国吉ひや	国吉の子
825	一、先若按司に	*	*
826	一間切の地頭	*	*
827	按司の位添て、	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
828	高嶺の按司の	*	高嶺の
829	跡目立て、	*	*
830	四季の祭礼	*	*
831	取行ゆんやらハ、	*	*
832	君家再興のためやれば、	*	国家再興の為やれば
833	武士の義理曲て	*	*
834	をか <sup>ママ</sup> んちゆめやれハ、	*	*
835	按司	*	鮫川の按司
836	一、あゝ此願事も	*	*
837	むはや又ならぬ、	*	*
838	たう / \	*	*
839	望ミにまかさ、	*	*
840	国吉	国吉子	国吉の子
841	一、あゝたうと、	*	*
842	段々の御慈悲	*	*
843	なまのことやれハ、	*	*
844	心うちはれて	*	*
845	実よみよんにゆけら、	*	*
846	識名村なかひ	*	*
847	隠やひいまひん、	*	*
848	按司	*	鮫川の按司
849	一、やあ国吉のひや、	*	*
850	急ち識名村いきやひ	*	*
851	みすくいひ聞ち、	*	*
852	兄弟落つかち	*	*
853	さうてきやうれ、	*	*
854	国吉	国吉子	国吉の子
855	一、拝留やへて、	*	*
856	按司	*	鮫川の按司
857	たう / \	*	*
858	いそけ / \、	*	*
859	国吉	国吉子	国吉の子
860	一、御供からめきやい	*	*
861	きやへたん、	*	*
862	按司	*	鮫川按司
863	一、たう / \	*	*
864	急ち呼よ / \、	急ち呼ひよ	*
865			
866	や <sup>ママ</sup> あ若按司よ、	やあ若按司	やあ若按司
867	国吉のひやか	*	*
868	願事よ聞ハ、	*	
869			
870			
871	理りよやれハ	*	*
872	肝くれしやあもの、	*	*
873	按司になち	*	*
874	嶋知行も、具ゆん、	*	*
875	たう / \	*	*
876	けふからや三人	*	*
877	心安す / \とをりよ、	*	*
878	若按司	*	*
879	一、あゝたうと、	*	*
880	此御恩たうとさや	*	此の御恩たうとさい
881	いつし忘れゆか、	*	何つし忘やびが
882	やあ国吉のひや	*	*
883	此御恩一期	*	*
884	ちゝにかめら、	頂にかみやびら	*
885	国吉	国吉ひや	国吉の子
886	一、あゝ此御恩たうとさや	*	あゝ此の御恩たうとさい
887	石にや子のいしの、	*	*
888	大瀬成までも	*	*
889	おかけふさへめしやうれ、	*	*
890	按司	*	鮫川按司
891	一、たう / \、	*	*
892	けふの誇らしやに、	*	今日の誇らしや
893			物に譬らん
894	押列てたかひに	*	*
895	踊てもとれ、	*	*
896	若按司	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備所蔵本
897	一、おしつれて互に	*	
898	踊て戻やへら、	*	
899	清屋ふし	*	
900	一、けふの誇らしやゝ	*	
901	なをにきやなたてる	*	
902	つほてをる花の	*	
903	露きやたこと	*	
904	同ふし	*	
905	一、こゝのえのうちに	*	
906	答て露まちゆす	*	
907	嬉しこときくの	*	
908	花とやゆる	*	
909		義臣物語終	
910		桃原村/恩河朝祐	



No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本 (久志B本)
1	義臣物語	[欠]	義臣物語
2	国吉のひや黒縹子入道頭巾金 (糸蘭) にて 飴有ル黒紗綾袷衣裳縹子広袖羽織脚胖足袋 花加籠馬乗人壱ツおきれこふし壱ツ鳴子壱 ツ若衆人形壱ツ編笠炬手花	[欠]	
3	若按司半向頭巾天鷲 (糸爾) 花金銀水引は さら縹子袷衣裳脚胖足袋	[欠]	
4	姉かもし紫長巾作花水引はさら熨斗紙琉縫 薄衣裳足袋	[欠]	
5	新垣のひ崎本の子兩人黒西洋布入道頭巾黒 木綿巢衣裳脚絆足袋	[欠]	
6	崎本編笠白作ひげ鎌杖	[欠]	
7	童子四人半向頭巾作花金銀水引はさら紺花 青銅振袖衣裳足袋	[欠]	
8	鮫 (字は鯁) 川の按司金入綿の入道頭巾向 に金 (糸蘭) 龍之角飴有ル水色緞子衣裳羅 陳羽織錦にて飴有ル刀太刀足袋脚胖大團	[欠]	
9	ちやうきやく持黒木綿単衣裳脚胖足袋	[欠]	
10	夜廻白木綿長巾黒木綿巢衣裳脚絆足袋拍子	[欠]	
11		[欠]	国吉の比屋
12	一、出様ちやる者や	[欠]	是や
13	本の国吉のひや	[欠]	*
14	今や国吉の子、	[欠]	*
15	あゝ島尻の世の主	[欠]	*
16	高嶺の按司や、	[欠]	*
17	色欲にほけて	[欠]	*
18	朝夕酒盛ひ、	[欠]	*
19	歌三味線の	[欠]	歌や三味線の
20	絶ゆる間やなひらぬ、	[欠]	*
21	昔物語引出ち、	[欠]	*
22	色々に異見	[欠]	色々に御意見
23	みよんにゆけたん、	[欠]	*
24	忠言耳に逆て、	[欠]	*
25	位剥とられやひをれハ、	[欠]	*
26	おれからや日々に	[欠]	*
27	御万人や背き、	[欠]	*
28	弓引かんでやりしゆすや	[欠]	弓引んでやりしゆ [欠]
29	露程も知らぬ、	[欠]	*
30	きのふ暁や、	[欠]	きの [欠] 暁や
31	首里軍押寄て	[欠]	首里軍
32	責問てをれハ、	[欠]	責懸てをりは
33	出てたゝかたる者や	[欠]	*
34	一人も又をらぬ、	[欠]	[欠] をらん
35	按司や切腹よめしやうち、	[欠]	*
36	をなちやらと思子や	[欠]	*
37	与座の子か引列て、	[欠]	*
38	逃忍て与座近くいきゆる内、	[欠]	逃ち忍て与座近くいちよる内に
39	流矢に当て	[欠]	*
40	をなちやらと与座の子や、	[欠]	*
41	道柴の露と消果て、	[欠]	道芝の露と共にきよ果て
42	衰れ若按司と	[欠]	*
43	思なひかことや、	[欠]	思なひか行先や
44	知人やをらぬ、	[欠]	*
45	あゝ高嶺のかんた	[欠] 高嶺のかんだ	*
46	からめ出す者あらハ、	[欠]	捕出そのや
47	按司になち	[欠]	*
48	島知行も呉ん、	島知行 [欠] 呉よん	*
49	また一夜迎も	一夜迎も	*
50	隠し置くものあらは、	隠し置く者や	*
51	一門やだにも	一門やだねよ	一門やだによ
52	引はらふしまても、	*	*
53	殺しつくさしゆんでやり	*	*
54	道々に高札のあれハ、	*	*
55	あかりてた拜む	あゝ上がい照拜む	*
56	人心やれハ、	*	*
57	御万人や敵となて	*	*
58	弓ひきゆる此時よやれハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
59	頓て生とられ	*	*
60	からめ出されらとめハ、	*	*
61	あゝ至極気の毒とやゆる、	至極気の毒どやゆる	*
62	片時も急ち	*	*
63	御行衛尋やい拜ま、	*	若按司の御行衛尋やひをかま
64	此支度しゆてや	*	この[欠]度しちや
65	与所の疑もたちゆら、	*	与所の疑ひ立ら
66	あゝ今とおめつきやる、	*	あゝ今[欠]つちやる
67	細物人形売に	*	*
68	やつれやいいてたちゆん、	*	*
69	若按司思姉出羽干瀬ふし	[欠]瀬ふし	兩人出羽干瀬ふし
70	一、おめけひとワ身や	*	思けいやとわんや
71	親にすてられて	*	親に捨らて
72	互になきくらち	朝夕血[欠]	*
73	をるか心気	[欠]濡らち	居る心気
74		若按司	若按司
75	一、我身や高嶺の	*	*
76	若按司とやゆる、	*	*
77	首里軍押よすて	*	*
78	父母や殺されて、	*	*
79	思なひとワ身や	思姉と二人や	*
80	只足にまかち、	*	*
81	忍ひ出たすか	*	*
82	行先もしらぬ、	行先や知らぬ	行先やしらぬ
83	与座嶽に登て	*	*
84	高き瀬の下に、	*	*
85	夜や鳴明ち	*	*
86	なまゝてやをすか、	*	*
87	たゆるものはなち	*	*
88	けふ三日なゆん、	*	*
89	やあ思なひよ、	*	*
90	新垣のひやゝやかあ	*	*
91	母方の祖父やれは、	*	*
92	夜も暮てをれハ		*
93	見る人やをらぬ、		*
94	立寄ひ頼て	*	*
95	かくれやひをらに、	*	*
96	思なひ	*	*
97	一、たう / \	*	*
98	山路よやれハ	*	*
99	急ち出ら、	*	*
100		若按司	若按司
101	一、やあ / \	やあ	やあ
102	新垣のひやよ	*	*
103	/ \、	やあ新垣のひや	*
104	新垣	新垣のひや	新垣のひや
105	一、やあおめ子、	*	*
106			あゝ拜てなつかしや
107			袖の泪た
108	若按司	*	*
109	一、やあ新垣の比屋	*	*
110		思姉と我身や	
111		親に捨てられて	
112	頼む方なひらぬ	*	頼の[欠]方居らぬ
113	とまひ / \ ママやもの、	*	とめてつちをもの
114	たんでなさけあて	情けあてたんで	たんで情け[欠]
115	隠置たはふれ、	*	*
116	新垣	[欠]	新垣のひや
117	一、やあ思子、	[欠]	*
118	隠し置ほしやゝ	*	*
119	涙の真砂程あすか、	*	*
120	一夜とても	*	*
121	高嶺のかんた	*	*
122	隠しおくものあらハ、	隠しおくものや	かくし置ものや
123	一門やたにも	一門やだねよ	*
124	引はらふし迄も、	*	*
125	殺し尽さしゆんでやり	殺ち捨られんでやり	*
126	道々に高札のあれは、	*	*
127	肝くれしやあても		*
128	ワか命に替てまでの	我が命と替てまでの	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
129	肝いりやならぬ、	*	*
130	たう / \		*
131	遠く山原ニ	*	*
132	御下りよめしやうち、	*	*
133	よ所しらぬことに		*
134	かくれやひいまふれ、		*
135		忍び隠れとて	
136		時節待ち召れ	
137	若按司	*	*
138	一、やあ新垣のひや、	*	*
139	飛鳥も懐に入ハ、	*	*
140	狩人も助ゆんでやり【きけハ】きゝゆん、	*	*
141	雪霜や降ひ	雪霜や降れば	*
142	行先やしらぬ、	*	*
143	慈悲よ情あて	頼で情けあて	*
144	一夜からち給ふれ、	*	*
145	新垣	*	*
146	一、いや / \	あゝ	*
147	思子助やひ	思子宿貸らち	*
148	わか命ちとよめ、	*	*
149	たう / \	*	*
150	こまからや急ち	急ち	*
151	出て給ふれ、	*	*
152		若按司	若按司
153		やあ新垣のひや	やあ新垣の比屋
154		新垣のひや	新垣のひや
155		いやならぬ / \	いやならん / \
156	思姉	*	*
157	一、やあ思けひよ、	*	*
158	按司そへか恩義	*	*
159	忘て今のことやれハ、	*	*
160	こまをてやすまぬ	*	*
161	急ち戻ら、	*	*
162	若按司	*	*
163	一、御気張よめしやうれ	*	*
164	急ちもとやへら、	先にかゝやべら	*
165	子持ふし	*	*
166	一、たるかける山に	*	*
167	雪霜や降れば	*	*
168	いしやら山路や	*	*
169	足本もやみゆひ		足本んやめば
170	歩てあゆまらぬ	*	*
171	くら闇よやれハ		*
172	行先や迷て		
173	あの岩にすかり		
174	このき瀬にのほて		
175	互に鳴明ち		
176	鳥も啼すみて		*
177	夜や明てをれハ		*
178	この山にかくれ		*
179	けふやくらさ		*
180		肝も肝ならぬ	
181		あけやういちやなよら	
182	村【原】頭	崎本の子	崎本之子
183	一、是や多嘉良の村頭、	*	*
184	上原んかい	*	上原のやとりに
185	耕作見廻にいきゆん、	*	用事あて行ん
186	やあ / \、	*	*
187	かにある山中に	かにやる雪降りに	*
188	童へあてなしの、	こがと山路に	*
189	いきやることやとて	*	いきやることあとて
190	ふたりあちをる、	[欠]	二人居ちよか
191	若按司	[欠]	*
192	一、旅の者やすか	[欠]	*
193	長路の疲れ、	[欠]	*
194	足本もやめハ	[欠]	*
195	歩てあゆまらぬ、	[欠]	*
196	しはし休まてやり	[欠]	*
197	こまにあちをる、	[欠]	*
198	てよ / \	[欠]	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
199	急ち先に通ら、	[欠]	急ち先よ通ら
200	村頭	崎本ノ子	崎本のひや(ママ)
201	一、やあ、		あゝ
202	つく、と御様子		*
203	拝てミやへれハ、		*
204	樋高嶺の		高嶺の思子
205	思子とやゆる、		疑やならん
206	御氣遣よめしやうな、		*
207	我身や多嘉良の村頭		*
208	崎本とやゝへいる		*
209	あゝ拝てなつかしや	拝留やべてあゝ拝て泣かしや	*
210	袖のなみた、	*	*
211	若按司		*
212	一、やあ崎本の子、		*
213	二所の親に		*
214	捨られてふたり、		*
215	頼む方をらぬ		*
216	やとる方ないらぬ、		*
217	あの谷にかくれ		*
218	此山にやとて、		*
219	頓て消果る		*
220	露の身どやすか、		*
221	けふまでや死にやぬ		*
222	こまにをゆる、		こまにをたる
223	崎本		崎本ノ子
224	一、やあ思子	*	*
225	やあ思なひの前、	やあ思姉の前の	*
226	此山にわかやとりの	*	此山に我身かやとりの
227	あやへひん、	あやびもの	*
228	山深さあれハ	日も暮れて居れば	*
229	見る人やをらぬ、	見る人も居らぬ	*
230	忍ひかくれとて	*	*
231	時節待めしやうれ、	*	時節持(ママ)めしやうり
232	たう、		*
233	与所めなひぬうちに		*
234	御氣張よめしやうれ、		*
235	若按司	*	*
236	一、慈悲よ情けあて	頼で情あて	*
237	助やい給ふれ、	隠し置賜れ	*
238	村頭	崎本ノ子	崎本ノ子
239	一、御急きよめしやうれ	どう、	*
240	御供しやへら、	*	*
241			
242	されわかやとりや是たやへる、	され屋取やこれだやべる	*
243	内におんつかいしやへら、	*	*
244	国吉のひや	*	国吉ノ子
245	一、是や国吉の子、	*	*
246	急ち細物人形売ニ	細物人形売に	*
247	むちたちゆん、	やつれやい出立ちゆん	*
248	道輪口説	*	歌
249	一、一度榮へは	*	*
250	ひとたひおとるふ	*	ひとたひ衰ひ
251	世の中の習ひ	*	*
252	思ひ知身の	*	*
253	衰れはかなや	*	*
254	すそは結んで	*	すいそはむすんで
255	かたにうちかけ	*	*
256	やつれ出たる	*	*
257	姿言葉も	*	*
258	今に引かへ	*	*
259	島の島々		*
260	里のさと、		*
261	めぐり、て		*
262	人形かひんしやうれ	*	*
263	ほとけかいんしやうれ	*	*
264	人形の数々	*	*
265	おきれこふしに	*	*
266	若衆人形	*	*
267	馬乗仏	*	*
268	是むて童へ	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
269	なるこ鼓ミヤ	*	*
270	ほうろゝん/\	ぼろどん/\	ふうろられ/\
271	ほうろ/\ほうつと	ぼろ/\/\と	ふうろ/\ふうろと
272	国吉のひや	*	*
273	一、やあ童へ、	えい童	*
274	としよひやひ集めれよ	*	どし呼び集り
275	このほとけくひらに、	此仏呉よん	*
276	童子	童	*
277	一、やあ/\としのきや、	やあ友しのちや	*
278	仏呉ゆんでやり	*	*
279	いふる人のをもの、	*	*
280	たう/\急ち出れ、	*	*
281	童子	*	*
282	一、仏け呉ゆんでやりあらハ	*	*
283	急ち出ら、	*	*
284	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
285	一、やあわらへ、	えい童	*
286	仏や望次第くひゆん、	*	*
287	たう/\	*	*
288	いらてとれよ	撰らで取れ	急らて取り
289	童へ	*	*
290	一、ワぬやこの馬乗ほとけとらに、	*	*
291	同	*	童
292	一、ワぬやおきれこふしとらに、	我んや此のうつれこぶし取らに	我身やこのおきれくふしとよん
293	同	*	童
294	一、ワぬや鳴子とらに、	我んや此若衆人形取らに	*
295	同	*	童
296	一、ワ身や此若衆人形とゆん、	我んや此鳴子取らに	*
297	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
298	一、是むちやか/\、	えいこれ見ちやか/\	*
299	やあ童へのきや、	えい童のちや	*
300	此村にしらぬわらへの	此近方に知らん童の二人	*
301	かくれてやをらね、	*	*
302	正直にいふらは	*	*
303	此人形とらさ、	此仏とらさ	*
304	童子	*	*
305	一、近方の村々に	*	近方の村に
306	しらぬ童へやをやへらん、	*	*
307	やあとしのきや、	*	*
308	てよ/\急ち宿に戻ら、	*	*
309	童子		童一人に
310	一、やあ/\、	*	*
311	このころ上原の	*	頃日に上原の
312	山やとりなかい、	*	*
313	しらぬ童へのふたり	*	*
314	宿かやひをやへひん、	隠れやい居やびいん	*
315	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
316	一、やあわらへ、	とう/\	*
317	おのやとりにつれていけ	*	*
318	此ほとけとらさ、	*	*
319	わらへ	*	*
320	一、たう/\列ていかに、	*	とう/\烈り/\
321	こまとやゆる、	これどやゆる	*
322			国吉ノ子
323			としやは呼出すをかま
324			童
325			され若按司の前/\
326	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
327	一、やあわらへ、	えい童	*
328	ママ 約束のこと此仏呉ん、	約束の如とに此仏呉ん	約束(ママ)ことにこのふとけくいよん
329	たう/\	*	*
330	急ち村にいけ、	*	急ち村に戻り
331			
332	これ/\、	*	*
333			若按司
334			やあわらへむきや
335	同人	*	国吉の子
336	一、やあ思子/\、	*	*
337	御氣遣よめしやうな	*	*
338	みすく御目懸けれ、	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
339	ママ 我身の本の	*	*
340	国吉のひやとやゝへいる、	*	*
341		若按司	
342		やあ国吉のひや	
343		国吉のひや	
344	やあ思子	*	*
345	いきやるたよりあて	*	いちや便りあて
346	こまにかくれやひいまひか、	*	*
347	若按司	*	*
348	世界や敵かたき	*	*
349	やとる方なひらぬ、	助け部も居らぬ	*
350	此山のふもとに	*	*
351	忍ひ隠れとす、	*	忍ひ隠りとて
352	多嘉良の村頭	*	*
353	崎本の子いきやて、	*	*
354	あのかげに此やとりに	あの蔭に此所に	*
355	かくれやひをゆる、	*	*
356	国吉	*	*
357	一、やあ思子、	*	*
358	此近方や	*	*
359	心もとなさよあれは、	心もとなさよあもの	*
360	遠く逃忍て	*	*
361	時節待受て、	時節待ちやびらみ	*
362	敵かたき討る		*
363	討よしやへら、		*
364	若按司	*	*
365	一、やあ国吉のひや、	*	*
366	親に捨てられて	*	親に捨て
367	このなひよやれハ	*	このなひよや[欠]は
368	いきちをてもらぬ	*	*
369	片時も急ち、	一寸も片時も	*
370	父母よとまいて	*	*
371	いきほしやよあもの、	急ぢ欲しやあもの	*
372	列立ることや	*	*
373	ゆるちたはふれ、	*	*
374	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
375	一、親かなし敵かたき	*	*
376	討とらないたつらに、	討たな徒らに	*
377	肝ほれていまひめ	*	*
378	なまのことめしやうる、	*	*
379	たう／＼、	*	*
380	つく／＼と此事や	*	*
381	御思案よめしやうれ、	*	*
382	若按司	*	*
383	一、やあ国吉のひや、	*	*
384	あちやか目もしらぬ	*	*
385	敵にとれられて、	*	*
386	哀れさま／＼の	*	*
387	憂めむたよいか、	*	*
388	いへも片時も	*	*
389	急ちほしやあもの、	*	*
390	是非共に此事や	*	慈悲共に此事や
391	ゆるち給ふれ、	*	*
392	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
393	一、あゝ、此二月餘るまでも	*	*
394	ねふる目もねらぬ、	*	*
395	細物人形売に	*	*
396	姿引やつち、	*	*
397	村々よ廻て	*	*
398	とまひつきやる心入、	*	*
399	あたになち此身	*	*
400	なからへてをからよいか、	保存てぬしよが	*
401	迎も御前をとて	*	*
402	わとやはから、	*	*
403	若按司	*	*
404	一、やあ国吉のひや、	*	*
405	試ミとやたる	*	*
406	今のい云葉や、	*	*
407	ゆるち給ふれ、	*	*
408			

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
409	心実に今のことやれハ	*	*
410	誇らしやとあゆる、	*	*
411	やあ / \ 思なひよ、	やあ思姉よ	やあおめないよ
412	国吉のひやとやゆる	*	*
413	出て御目かけれ、	*	*
414	思なひ	*	*
415	一、やあ国吉のひや、	*	*
416	思けいとわ身や	思けいと二人や	*
417	親に捨てられて、	*	親に捨てて
418	頼む方をらぬ		*
419	かゝるかたないらぬ、		宿る方ないらん
420	哀れこのなひに	*	*
421	なやひまたをもの、	*	*
422	是非よ情けあて	万事いか事や	慈悲よ情けあて
423	助けやひたはふれ、	計らやひ賜ぼれ	*
424	国吉	国吉のひや	国吉之子
425	一、あゝ拜てなつかしや		*
426	袖のなみた、		*
427	やあ思なひの前	*	*
428	此よの中に		*
429	国吉か生ちをる間たや	*	*
430	御気けやめしやうな、	*	*
431	思なひ	*	*
432	一、今のことやれハ		*
433	誇らしやとあゆる、		*
434	これからや朝夕	*	このからや朝夕
435	親と頼ミゆもの、	*	親とたのよ物の
436	万事いかことや	よたしやある様に	*
437	はからやひ給ふれ、	*	*
438	国吉	国吉のひや	国吉之子
439	一、拝留やへて、	*	*
440		あゝ拜てなつかしや	
441		袖の涙	
442			
443	やあ思子	*	*
444	やあ思なひの前、	*	*
445		此近方や	
446		心もとなさよあもの	
447	識名村花城のひやと	*	*
448	義理立のしほらしや、	*	*
449	兄弟の契約	*	*
450	結てあやへもの、	*	*
451	あの宿に引越ひ	*	宿に引越ひ
452	隠れやひをやへらに、	時節待ちやびらに	*
453	若按司	*	*
454	一、やあ崎本の子、	*	*
455	国吉のひやとやゆる	*	*
456	出ていまふれ、	*	*
457	崎本	崎本の子	崎本之子
458	一、国吉のひや	*	*
459	久しう拝ミやへて、	*	久しよ拝なひて
460	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
461	一、やあ崎本の子、	やあ崎本	*
462	思子二所の	*	思子二所も
463	消泉る命ち、	*	*
464	百情け故に	*	*
465	助やひ給ふち、	*	*
466	あゝ至極心入	心入	*
467	感してとをゆる、	*	*
468	やあ崎本、	*	やあ崎本の子
469	此近方や	*	*
470	心元なさよあれハ、	心もとなさよあもの	*
471	識名村花城のひや宿に	*	*
472	おんつかいをかて、	*	*
473	忍ひかくれとて		*
474	節待たんしゆもの、		*
475	かたき討めしやいる	仇敵討召せる	*
476	時節ともならハ、	*	*
477	共に肝揃て	互に肝揃ろて	共に肝合ち
478	働やひたはふれ、	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
479	崎本	崎本の子	崎本之子
480	一、あゝ今のことやれハ		*
481	誇らしやとあゆる、		*
482	此としになてをても	あゝ此年になても	*
483	御主人の御為、	*	*
484	命ちふり捨て	*	*
485	御腰立さんしゆもの、	*	*
486	万事いかことや	*	*
487	はからやひたはふれ、	*	*
488		国吉のひや	国吉ノ子
489		今の如とやれば	
490		誇らしやとあゆる	
491	国吉		
492	一、やあ思子	*	*
493	やあ思なひの前、	*	*
494	夜も暮てをれハ	*	*
495	与所めなひぬあもの、	*	*
496	たう / \ 急ち	とう / \	*
497	御立めしやうれ、	*	御立めしやれ
498	長伊平屋ふし	*	*
499	一、いつし忘れゆか	*	*
500	身にあまる情け	*	*
501	袖にぬきとめて	*	*
502	別れくれしや	*	*
503	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
504	一、され花城のひや宿や	*	*
505	是たやへる、	*	*
506	内におんつかいしやへら、	*	とう / \ 内におんつかひしやへら
507		国吉のひや	同人
508	一、是や国吉の子、	*	*
509	あゝ此二度の	此二年の	*
510	急のい成迄も、	*	*
511	敵討てやり	*	*
512	ねふる目も寝らぬ、	*	*
513	心尽くしゆす【や】か	*	*
514	助へやをらぬ、	*	*
515		ながらへて居れば	
516		何目もかねさらめ	
517		今日や北方風も立ちゆい	
518	先謀ことあもの	計事あもの	*
519	思子おんにゆけて、	*	*
520	急ち火責しゆる	急ち火責の	*
521	謀よすらに、	用意せらに	*
522	やあ / \ 思子	やあ思子	*
523	やあ思なひの前、	*	やあ思姉の前 / \
524		全人	
525		やあ思子	
526		やあ思姉の前	
527	あゝ此二度の	此二年の	*
528	急のいなるまでも、	*	*
529	敵討てやり	*	*
530	ねふる目もねらぬ、	*	*
531	心尽しゆすか	*	*
532		頼む方無らぬ	
533	助へやをらぬ、	*	*
534	なからへてをらハ	*	*
535	いつもかにさらめ、	*	*
536	謀ことあもの	*	*
537	先おんにゆけら、	*	*
538	けふや北風やたちゆひ、	今日や北風も立ちゆい	*
539	火責ともすらハ	*	*
540	火のさわきにや、	*	*
541	敵の首とゆす	*	*
542	疑やないらぬ、	*	*
543	急ちおの用意しやへら、	急ち火責しゆる用意しやべら	*
544	若按司	*	*
545	一、やあ国吉のひや、	*	*
546	火責【とも】しゆんやれハ	火責どもやれば	*
547	勝ちもしゆらやすか、	*	*
548	一人の働や氣遣とやゆる、	*	*



No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
549	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
550	一、めしやいること、	あゝ召せるごと	*
551	年月のいかハ	年月の行けば	年月のいけは
552	謀もあゆら、	*	*
553	徒らに月日重ならハ、	*	*
554	耳やないぬ壁の	*	*
555	ものきゝゆる世の中よやれハ、	物聞ちゆん世の中よやれば	*
556	若かよ所しれて		*
557	からめ出さらいや、		*
558	急ち火責の謀や	急ち此企ちや	*
559	思立ちやへたん、	思み立ちやべたる	*
560	思姉	*	*
561	一、やあ国吉のひや、	*	*
562	若か仕損て	*	*
563	嵐声のあらハ、	*	*
564	思けひとわぬや	*	思けへと二人や
565	いきやかなゆら、	いちやがしゆよら	*
566	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
567	一、やあ思姉の前よ、	やあ思姉の前	やあ思姉の前
568	此国吉か	*	*
569	としやよていきやひ、	*	*
570	敵の首とらな	按司の首取らな	*
571	此からに死なは、	*	*
572	おの時やまた	*	*
573	いきやかめしやいら、	*	*
574	若按司	*	*
575	一、やあ国吉のひや、		*
576	たう / \	*	*
577	ワぬも列ていかに、	*	*
578	急ち火責しゆる	急ち火責の	*
579	用意されゝ、	*	*
580	国吉	国吉のひや	国吉之子
581	一、いや / \、	*	*
582	石垣よ越て	*	*
583	忍ひ入事やれハ、	*	*
584	思子御供からめきや	*	*
585	働やならぬ、	働のならぬ	働のならぬ
586	必ずこまに	*	*
587	御待めしやうれ、	*	*
588	敵の首とやい	按司の首取やい	*
589	頓てこんしゆもの、	*	*
590	思姉	*	*
591	一、やあ国吉のひや、	*	*
592	武士の義理やれは	武士の義理やとて	武士の義理立てゝ
593	別れてやいまひい、	*	*
594	油断さぬことに	*	*
595	ものめつめて、	*	ものめつめり / \
596	東江ふし	*	歌東江ふし
597	一、おめきやひをても	武士の義理やとて	思きやいをすか
598	是までよとめハ	思切やい居すが	*
599	むちたちゆるきハや	別れよる涯や	*
600	袖のなミタ	*	*
601	夜廻	夜廻り	夜廻り
602	一、けふや北風もかう / \ 立ひ、	*	けふや北風やかう / \ 立ひ
603	夜廻り念入りよてやり	*	
604	按司のみよんきことやれハ、	按司の詔事拜で	*
605	おとろしやゝあても	*	*
606	先急ちとふら、	先づ通ら	*
607	あけちやめやう、		*
608	米蔵はい、 / \、	れつくわんへい / \	*
609	けふや北風やかう / \ 立ひ、	今日や北風もごう / \ 立ちゆいよー	*
610	起て居ちをれ、	*	*
611	おふほゝん、	あゝふ	おふふん
612		銭倉へい / \	金蔵はい / \
613		今日や北風も	起て居ちやうれ
614		ごう / \ 立ちゆいよ	おふふん
615		起きて居ちよれ	
616		あゝふ	
617	はひたか / \ たかては、	誰がてわたが	*
618	あゝまやあさめ、	あゝぬうんあらんまやあさめ	あゝまやとやさめ

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
619			やかりまやゝ
620			人驚るか[欠]
621	代官はい、/\、		*
622	起て居ちをれ、		*
623	おふほゝん、		おふふん
624	ほひのふもあらぬさめ、		*
625		国吉のひや	国吉ノ子
626	一、是や国吉の子、	*	*
627	夜も更てをもの		*
628	急ち火責に出立ん、	*	*
629	早口説	*	*
630	一、門に立寄	*	*
631	伺へは	*	*
632	用心きひしく	*	*
633	夜廻の	*	*
634	拍子木しけく	拍子木高く	*
635	音すれハ	*	*
636	忍ふ思ひも	*	*
637	いならぬ	いかならん	いからぬ
638	南無や八幡	*	*
639	大菩薩	*	*
640	力を合して	力を合せて	*
641	たひ給へ	*	*
642	北風はけしく	*	*
643	吹音に	*	*
644	まきれて石垣	*	*
645	飛越て	*	*
646	人目も今は	*	*
647	絶間ある	*	*
648	軒端の下に	*	軒の下に
649	寄かゝて	寄りかゝり	*
650	すわや火をかけ	*	すかや火をかけ
651	火煙たつ	*	*
652		国吉のひや	
653		あゝ北風に便て	
654		これから付けろ	
655	供	総人数	*
656	一、火事よ/\、	あゝ火事よ/\	はあ火事よ/\ / \
657		供	供
658	され/\ 按司加那志、	され按司加那志	され按司加那志
659	火遣盗人	*	*
660	からめとやへたん、	*	*
661	鮫川の按司	鮫川按司	*
662	一、あゝ出来た/\、	*	*
663	供	*	*
664	一、盗人や是たやへる、	*	盗人これたやへる
665	按司	鮫川按司	*
666	一、是やよしのあるものとやゆる、	*	あゝ是やよしのあるむのとやよる
667	やあ供のきや、	*	*
668	たう/\	*	*
669	みすく尋やひ聞け、	*	*
670	供	*	*
671	一、押留やへて、		*
672	やあ盗人、	*	*
673	いきやしちやるものか、	*	*
674	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
675	一、銭金の盗人やあらぬ、	あゝ銭金の盗人やあらぬ	分金の盗人やあらん
676	鮫川の按司の	*	*
677	首のふしやに、	首ど欲しやに	*
678	城焼崩さてやりしちやん、	城焼き崩さてやりしちやる	城焼ち尽たりしちん
679	按司	鮫川按司	*
680	一、やあ供のきや、	*	*
681	此世の中に	*	*
682	国吉のひや外に、	*	*
683	今のことおほ口に	*	*
684	ものいふすや	*	*
685	一人も又をらぬ、	一人も居らぬ	一人の居ん
686	是や決して	*	*
687	国吉のひやとやゆる、	*	*
688	たう/\	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
689	急ちこれに出す	*	*
690	火遣の所存	*	*
691	直に尋ゆん、	実に尋ねよん	*
692	供	*	*
693	一、拝留やへて、		*
694			
695	さあ / \	どう / \	*
696	御前に出やうれ、	御前に出やうれ / \	御前に出様り / \
697	按司	鮫川按司	*
698	一、やあ国吉のひや、	*	*
699	火事のさハきに	*	*
700	わぬ討てやりしゆすや、	*	*
701	螢火の須弥山	*	
702	焼くつさてやりしゆる心、	*	
703	流石武士の身の習や	*	*
704	おの笥とやゆる、	*	*
705	主人の恩義忘れらぬ	*	*
706	忠義の心入、	忠節の志	*
707	あゝ感してをゆる、	あゝ感じてど居よる	あゝ感してとをよる
708	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
709	一、あゝ頼むかたなひらぬ	*	*
710	助部もをらぬ、	*	*
711	一人の働に	一人が働に	一人が働に
712	城焼くつち、	*	城焼ち尽き
713	按司の首とやい	*	*
714	冥途のみやけさんともて	*	*
715	今の企とやたる、	今の企やせちやる	*
716	あゝ武運のちようさ	*	*
717	御果報とやゆる、	*	*
718	按司	鮫川按司	*
719	一、やあ国吉のひや、	*	*
720	高嶺の按司と	*	*
721	気任に暮ち、	*	*
722	酒と色好ミ	*	*
723	おこり日に増て、	*	*
724	百姓の苦ミ	*	*
725	諸臣下の難儀、	*	*
726	あけてかそららぬ	*	*
727	罪科のあてと、	罪科のあてと	*
728	島国の為に	*	*
729	討果ちあれハ、	*	*
730	ワか身しちまねちある	*	*
731	災とやゆる、	*	*
732	やあ / \、	*	*
733	高嶺のなし子	高嶺のかんだ	*
734	からめ出すてやり、	*	*
735	島々に堅く云渡ちあすか、	*	*
736	此二年の	*	*
737	糸のひ為迄も	*	*
738	音伝も聞ぬ、	*	*
739	今につく / \ と	*	*
740	考てむてハ、	*	*
741	罪科やおかちある	*	罪咎や殺ちある
742	本人にあてと、	*	*
743	妻子まで罪に	*	*
744	行ゆることや、	*	*
745	道ならぬあもの	道ならぬやれば	*
746	忍らぬあこと、	忍ばらぬあもの	*
747	隠し置あらハ	*	*
748	助けやひとらさ、	*	*
749	国吉のひや	*	国吉ノ子
750	一、あゝ乱軍の内をとて	*	*
751	殺されかしちやら、	*	*
752	若按司の行末や	若按司の行衛	若按司の行衛や
753	夢ほともしらぬ、	*	*
754	按司	鮫川按司	*
755	一、やあ国吉のひや	*	*
756	静に心入	*	*
757	かたらひほしやあもの、	*	*
758	たう / \ 先	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
759	綱よ解ゆる【す】さ、	*	*
760			
761			
762			
763	やあ/\、		*
764	特と肝おして		*
765		やあ国吉のひや	
766	いやは聞留れ、		*
767	おかや島尻の一本柱、	*	*
768	智勇兼揃てをる	*	*
769	武士の事やれハ、	*	武士の者やれは
770	殺しゆすに忍はらぬ	*	殺や忍はらん
771	助ほしやあもの、	*	*
772	ワか所存取受て	とう/\我所存取受て	*
773	奉公よすれ、	奉公よせれよ	奉公よすれよ
774	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
775	一、あゝなまの仰すこと	*	*
776	みはいとやゝへすか、	*	*
777	ふたゝひ奉公の	*	*
778	望やあやへらぬ、	*	*
779	たう/\、	*	*
780	急ちおの支配	*	*
781	仰すめしやうれ、	*	*
782	按司	鮫川按司	*
783	一、いや/\、	*	*
784	耳の根よあけて	*	*
785	たによ聞留れ、	*	*
786	誠名按司に	誠若按司に	誠若按司に
787	忠節よやらハ、	*	*
788	主人行末の	*	*
789	よしあしのことや、	*	*
790	身の上に引受て	身の上に引き当てゝ	*
791	思らねはあらぬ、	*	*
792	いらぬ義理たてゝ	*	*
793	殺されよすらハ、	*	*
794	たとひ若按司の	跡に若按司の	*
795	生残てをても、	*	*
796	たる頼て世界に	*	*
797	なからへてをひなゆか、	*	*
798	やあ国吉のひや、	*	*
799	ものや一方に	*	*
800	泥てをて済ぬ、	*	泥てやすまん
801	ことのおもさあす	*	*
802	かゝぬことしゆすと、	*	*
803	変に応しゆる	*	*
804	謀やあらね、	*	*
805	たう/\、	*	*
806	つく/\とおめわかち	*	*
807	真実に語れ、	*	*
808	若按司もいやも	*	*
809	共に助ゆん、	*	*
810	神仏かけて	*	*
811	偽やあらぬ、	*	*
812	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
813	一、あゝみよんきこと拝て	*	*
814	袖とぬらしやへる、	*	*
815	先わか願ことの	*	*
816	たちゆんともやらハ、	解ちゆんどんやらば	*
817	天に飛のほり	*	*
818	地の底もくゝて、	*	地の底ん下て
819	若按司の行衛	*	*
820	尋やひきやあへら、	*	*
821	按司	鮫川按司	*
822	一、たう/\、	*	*
823	急ち願事よ語れきゝゆん、	*	*
824	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
825	一、先若按司に	*	*
826	一間切の地頭	*	*
827	按司の位添て、	*	*
828	高嶺の按司の	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
829	跡目立て、	*	*
830	四季の祭礼	四時の祭礼	*
831	取行ゆんやらハ、	*	*
832	君家再興のためやれば、	*	*
833	武士の義理曲て	*	武士の道曲て
834	をかんちゆめやれハ、 ママ	*	*
835	按司	鮫川按司	*
836	一、あゝ此願事も	*	*
837	むはや又ならぬ、	*	*
838	たう / \	*	*
839	望ミにまかさ、	*	*
840	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
841	一、あゝたうと、	*	*
842	段々の御慈悲	*	*
843	なまのことやれハ、	*	*
844	心うちはれて	*	*
845	実よみよんにゆけら、	*	*
846	識名村なかひ	*	*
847	隠やひいまひん、	*	*
848	按司	鮫川按司	*
849	一、やあ国吉のひや、	*	*
850	急ち識名村いきやひ	とう / \ 識名村行きやひ	*
851	みすくいひ聞ち、	*	*
852	兄弟落つかち	*	*
853	さうてきやうれ、	*	列て来う
854	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
855	一、拝留やへて、	*	*
856	按司		*
857	たう / \		*
858	いそけ / \、		*
859	国吉		国吉ノ子
860	一、御供からめきやい	され御供がらみちやひ	され御供からめきやい
861	きやへたん、	*	*
862	按司	鮫川按司	*
863	一、たう / \	*	*
864	急ち呼よ / \、	これに呼べよ / \	*
865			
866	ママ やあ若按司よ、	やあ若按司	やあ若按司
867	国吉のひやか	*	*
868	願事よ聞ハ、	*	*
869		殺しゆすに忍ばらぬ	
870		助け欲しやあもの	
871	理りよやれハ		*
872	肝くれしやあもの、		*
873	按司になち	*	*
874	嶋知行も、具ゆん、	*	*
875	たう / \	*	*
876	けふからや三人	*	*
877	心安す / \とをりよ、	*	*
878	若按司	*	若按司并思なひ兩人
879	一、あゝたうと、	*	*
880	此御恩たうとさや	*	*
881	いつし忘れゆか、	*	*
882	やあ国吉のひや	*	*
883	此御恩一期	*	一期
884	ちゝにかめら、	ちゝにかみれ	*
885	国吉	国吉のひや	国吉ノ子
886	一、あゝ此御恩たうとさや	此御恩をととさや	*
887	石にや子のいしの、	*	*
888	大瀬成までも	*	*
889	おかけふさへめしやうれ、	*	*
890	按司	鮫川按司	*
891	一、たう / \、	*	*
892	けふの誇らしやに、	今日の誇らしやゝ	今日の嬉しやに
893			
894	押列てたかひに	*	*
895	踊てもとれ、	*	*
896	若按司	*	*
897	一、おしつれて互に	*	*

No.	尚家本組踊集	比嘉信三本	久志村所蔵本(久志B本)
898	踊て戻やへら、	踊て分かやびら	*
899	清屋ふし	*	歌立雲節
900	一、けふの誇らしやゝ	*	*
901	なをにきやなたてる	*	*
902	つほてをる花の	*	*
903	露きやたこと	*	*
904	同ふし		歌
905	一、こゝのえのうちに		*
906	答て露まちゆす		*
907	嬉しこときくの		*
908	花とやゆる		*
909			
910			

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
1	天願之若按司敵討	久志之若按司	天願若按司敵討
2	着付謝名之大主髪錦之入道頭巾向に 金磨之龍角有ル水色緞子衣裳羅陳羽 織錦に而饒有ル太刀刀大団足袋脚胖		
3	富盛大主髪黒緇子入道頭巾向ニ金欄 に而饒有ル黒袖衣裳青緇子広袖羽織 刀脚胖足袋		
4	川崎之ひや平田の子髪黒西洋布入道 頭巾黒木綿単衣裳脚胖足袋		
5	ちやうちやく持かむらふ黒木綿単衣 脚胖足袋		
6	供髪黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳 脚胖足袋差繩		
7	天願の若按司髪半向頭巾金花并金銀 水引はさら糺綸子衣裳糺西洋布足袋 中入より錦入道頭巾錦に而饒有ル羅 陳羽織錦に而饒有ル脚胖足袋扇子持 出ル但戦之時甲胸当長刀		
8	同人妹板メ縮緬ネ同衣ひさ取裙糺西 洋布足袋		
9	宿元謝名之大主供同断		
10	久志之若按司髪錦之入道頭巾向ニ金 磨之龍角饒有ル青緇子衣裳羅陳羽織 錦に而饒有ル刀脚胖足袋但中入より 青緇子広袖羽織雨笠杖陳賦之時髪錦 之入道頭巾羅羽織扇子戦之時甲胸当		
11	立川の大主髪黒緇子入道頭巾黒袖衣 裳黒縮緬広袖羽織脚胖足袋		
12	砂田の子黒西洋布入道頭巾黒木綿衣 裳脚胖足袋但中入之時より立川砂田 黒縮めん広袖羽織編笠杖		
13	浜崎のひや伊豆味下(广+東)裏外 間の子金の磨持ちちやうちやく持謝名 の大主供支度同断		
14		謝名の大主	謝名大主言葉
15	一 出様ちやる者や、	一 出やらちるものや。	*
16	天願の按司の	*	*
17	頭役しゆたる	*	*
18	謝名の大主、	*	*
19	あゝ浅ましや此身	あさましや此身	*
20	黒髪に雪の、	*	*
21	積るとしまても	*	*
22	人の下知受て、	*	*
23	朝夕胸内に	*	*
24	煙りたかよいか、	煙焼よへか	*
25	主人打果ち	*	*
26	按司の身になやひ、	*	*
27	夢の間の浮世	*	*
28	楽すらんともて、	*	*
29	色欲よ進め	*	*
30	明間うかゝやひ、	*	*
31	討捕んでやり	打取らぬともて	*
32	様々にしやすか、	*	*
33	聞立もすらぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
34	義理守てをれハ、	*	*
35	願事や叶ぬ	はあ我が願やかなん	*
36	気の毒とやたる、	*	*
37	あゝむちやる三日に	いきやる三日に	はあむちやる三日に
38	原遊すゝめやひ、	*	*
39	戻る道中に	戻る道なかい	*
40	伏勢よ置て、	*	*
41	思たこと按司や	思たこと按司ん	*
42	うちすまぢあすか、	打果あすか。	*
43	城内になし子	*	*
44	跡形もなひらぬ、	*	*
45	気の毒とやゆる	はあ気の毒とやゆる	*
46	気障とやゆる、	*	*
47	やあ富盛大主	*	*
48	川崎のひや平田の子、	*	*
49	三人	*	富盛川崎平田三人言葉
50	一 ふう	*	*
51	謝名	*	謝名の大主言葉
52	一 やあ、思たこと叶て	*	*
53	按司も打果ち、	*	*
54	楽も楽いらて	*	*
55	誇らしやとあすか、	*	*
56	城内になし子	*	*
57	あとかたもなひらぬ、	跡方んめらん	*
58	又久志の若按司や	*	*
59	天願の別れ、	*	*
60	嫡家ふるふされ	*	*
61	たゝやてやをらぬ、	只止やをらん	*
62	天願の若按司	*	*
63	助けやひふたり、	*	*
64	命ちふり捨て	*	*
65	弓ひきゆらとめハ、	*	*
66	気障とやゆる	*	*
67	事障たひもの、	*	*
68	先久志の城元に	*	*
69	軍押寄すて	*	*
70	急ち若按司	*	*
71	打果ちからに、	*	*
72	天願のなし子	*	*
73	さかひし改て、	さ [欠]	*
74	根葉も茹捨て	*	*
75	我肝やすま、	*	*
76	三人	*	富盛川崎平田三人言葉
77	一 拝留やへて、	*	*
78	平田	平田のし	平田の子言葉
79	一 はあめしやいること、	一 はあめしや事	*
80	あのふたり世界に	*	*
81	いきて置からや、	*	*
82	跡々の障り	*	*
83	御気遣とやゆる、	*	*
84	片時も急ち	*	*
85	打とやいきやへら、	*	*
86	富盛	富盛大主	富盛大主言葉
87	一 やあ按司かなし、	*	*
88	久志の若按司や	*	*
89	世界に立ぬけて、	*	*
90	義理も分別も	*	*
91	人並やあらぬ、	*	*
92	又あの大親	*	*
93	立川の大主と	*	*
94	砂田の子二人や、	*	*
95	世間沙汰される	*	*



No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
96	つハものやれは、	*	*
97	自由に打捕ゆる	*	*
98	敵や又あらぬ、	*	*
99	天願の城	*	*
100	討よふろふしやい、	*	*
101	御万人の心	*	*
102	おてつかぬ内に、	*	*
103	城よ立出て		*
104	城よはなれやひ、	*	*
105	遙々と久志に	*	*
106	軍押て、	*	軍押寄て
107	もしか此城に	*	*
108	一大事のあらハ、	*	*
109	百悔ミしちも	*	*
110	益や又なひさめ、		*
111	今程や城に	*	*
112	堅打守て、	*	*
113	時節計ら <sup>ママ</sup> やらひ	時節計らやい	時節はからやい
114	軍寄やへら、	*	*
115	川崎	*	川崎のひや言葉
116	一 やあ按司かなし、	*	*
117	久志の城元に	*	*
118	軍寄ゆすや、	*	*
119	大主のいやれること	*	*
120	先やミにめしやうち、	先やめよめしやうち	*
121	急ち島々に、	*	*
122	廻文よ通ち、	*	*
123	天願のなし子	*	*
124	生捕にとやひ、	*	*
125	久志の若按司の	*	*
126	降参よしゆらハ、	*	*
127	天願のなし子	*	*
128	かへち渡さてやり、	*	*
129	久志の若按司に	*	*
130	文よつかハさは、	*	*
131	なく / \ もこまに	*	*
132	くたてこんしゆもの、	*	*
133	おの時にふたり	*	*
134	ころちすてやへら、	*	*
135		謝名	謝名の <sup>ママ</sup> 大主言葉
136	一 やあ大主	*	*
137	やあ川崎のひや、	*	やあ川崎
138	云ることよ聞ハ	*	*
139	ことハりとやゆる、	理るやよる	*
140	急ち手わかいに	*	*
141	島島よ廻て、	*	*
142	天願のなし子	*	*
143	からめ出すものや、	*	*
144	とり位も付て	*	*
145	島知行も呉ゆん、	*	*
146	若隠ち置ものや、	*	*
147	一門やたにも	*	一門やたによ
148	引はらふしまても	*	*
149	生責よしゆんて	*	*
150	堅く云渡ち、	*	*
151	片時もはやく	*	*
152	からめ出ちくう、	*	*
153	富盛	*	富盛大主言葉
154	一 押留やべて、	*	*
155		[欠]	
156		一 此二三日内に	
157		搦出ち	

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
158		みよめかけやへら	
159	謝名	*	謝名の大王言葉
160	一 たう / \ 急け / \、	*	*
161	天願の若按司思なひ出羽散山ふし	歌さん山節	*
162	一 生れらぬむまれ	*	*
163	おめなひとワ身や	*	*
164	あさゆちのなみた	*	*
165	袖よぬらち	*	*
166	若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
167		一 今出る我身や。	
168	一 天願のなし子	*	*
169	千代松とやゆる、	*	*
170	按司添か事や	按司そい前事や	*
171	謝名の大王に、	*	*
172	殺されよめしやうち	*	*
173	哀れあや前も	*	*
174	みたれ矢に当て	*	*
175	消よはてめしやうち、	*	*
176	二所の親に	*	*
177	捨られてをれハ、	*	*
178	あてなしの思なひ	*	*
179	朝夕鳴暮ち、	*	*
180	百すかひすかて	*	*
181	はなすことならぬ、	*	*
182	ワ肝きへ / \ と	*	*
183	互に袖しほて、	*	*
184	死にやんてやりしゆすか	*	*
185	親の敵かたき、	*	*
186	うたな徒に	*	*
187	死もまたならぬ、	*	*
188	久志の若按司や	*	*
189	ワか従やれば、	*	*
190	あれ頼てからに	*	*
191	忍ひ隠れやひ、	忍ひ隠れとて	*
192	時節待受て	*	*
193	敵討んともて、	*	*
194	おめなひよつれて	*	*
195	忍て行ん、	*	*
196			
197			
198			
199			
200	天願の若按司云は并道行きんふし	歌	天願の若按司言葉并歌金武ふし
201	一 久志の城元や	*	*
202	あかり表てもの、	*	*
203	てたあかるかたに	*	*
204	とまひていきゆん	*	*
205	乙鶴	*	乙鶴言葉
206	一 やあ舎兄前よ、	*	*
207	長道のつかれ	*	*
208	足もひかれらぬ、	足本むやみは。	*
209	こまにあしよとて	*	*
210	しはし休ミやへら、	*	*
211	若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
212	一 やあ思なひよ、	*	*
213	夜も暮ておれハ	*	*
214	こまをてやすまぬ、	*	*
215	あの村に便て	*	*
216	あしよやすま、	*	*
217	たう / \ 気張れ / \、	*	*
218	同人	天願若按司	同人言葉
219	一 此宿の内に	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
220	ものよおんにゆけら、	*	*
221	宿主	*	宿主言葉
222	一 たるかやゆら、	*	*
223	若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
224	一 哀れ首里方の	*	*
225	者とやゝへすか、	*	*
226	闇の夜のくらさ	*	*
227	行先も見らぬ、	*	*
228	御情に一夜	*	*
229	からちたはふれ、	*	*
230	宿主	*	宿主言葉
231	一 やあいきやることやとて	*	*
232	童へあてなしの、	*	*
233	たゝふたりつれて	*	*
234	まかひいきゆか、	*	*
235	若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
236	一 国頭に思事の	*	*
237	あてときやへすか、	*	*
238	闇の夜のくらさ	*	*
239	行先も見らぬ、	*	*
240	頼て御情に	*	*
241	からちたはふれ、	*	*
242	宿主	*	宿主言葉
243	一 はあ見れは此ふたり	*	*
244	只人やあらぬ、	*	*
245	慥か天願の	*	*
246	思子とやゆる、	*	*
247	あゝむちやる目のいちやさ	*	*
248	助けほしやあすか、	*	*
249	天願のなし子	*	*
250	隠ち置ものや、	*	*
251	一門やたにも	*	一門やたによ
252	ひきはらふしまても、	*	*
253	切殺ちすてられんてやり	切殺き捨れてやり	*
254	御触のあもの、	*	*
255	こまからや急ち	*	*
256	出てたはふれ、	*	*
257	若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
258	一 やあ / \、	*	*
259	闇の夜のくらさ	*	*
260	雪霜や降ひ、	*	*
261	思なひもなけハ	*	
262	肝もきもならぬ、	*	
263	たんで御情に	*	*
264	からちたはふれ、	*	*
265	宿主	*	宿主言葉
266	一 いや思子宿からち	*	*
267	ワか命ちとよめ、	*	*
268	たう / \ 急ち	さあ / \ 急ち	*
269	出てたはふれ、	*	*
270	若按司	天願	天願の若按司言葉
271	一 やあ / \、	*	*
272	宿主	*	宿主言葉
273	一 いやならぬ / \、	*	*
274			
275			
276			
277			
278	子持ふし	歌子持ふし	歌子持ふし
279	一 あきやう憂苦しや	*	*
280	おめなひとワ身や	*	*
281	巢なき鳥心	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
282	やとるかたなひらぬ	やとる木んならん	*
283	冬の夜のよすか	*	冬のよとよすか
284	雪霜にぬれて	*	*
285	なれぬ山路や	*	*
286	歩てあゆまらぬ	*	*
287	目本くら / \ と	*	*
288	なるか心気	*	*
289	乙鶴	*	乙鶴言葉
290	一 やあ舎兄前よ、	*	*
291	のかすやき前や	*	*
292	あしまめきめしやうる、	*	*
293	若按司	天願	天願の若按司言葉
294	一 やあ思なひよ、	*	*
295	此間のつかれ	*	*
296	足もひかれらぬ、	*	*
297	ワきもきえ / \ と	*	*
298	なやひ行ん、	*	*
299	乙鶴	*	乙鶴言葉
300	一 やあやき前よ、	*	*
301	山路やくらさ	*	*
302	雪霜もふゆひ、	*	*
303			
304			
305	御気張よめしやうれ	*	*
306	村に出やへら、	村にかゝやへら	*
307	若按司	天願	天願の若按司言葉
308	一 やあ思なひよ、	*	*
309	村便てやり	*	*
310	哀れこの二人に、	*	*
311	片時も宿よ	*	*
312	からしゆすやをらぬ、	*	*
313	やあおめなひよ、	やあ思妹	*
314	此間のつかれ	*	*
315	歩てあゆまらぬ、	*	*
316	頓て消果る	*	*
317	露の身とやすか、	*	*
318	闇の山路に	*	*
319	すてゝ先ならハ、	*	*
320	あてなしのおめなひや	*	*
321	いきやかしゆゝら、	いきやかなよら	*
322	乙鶴	*	乙鶴言葉
323	一 やあ舎兄前よ / \、	*	*
324	のかすやき前や	*	*
325	ものい声もなひらぬ、	*	*
326			
327			
328	東江ふし	[欠] ふし	歌東江ふし
329	一 あけいきやかなゆら	*	*
330	富盛大主	*	富盛大主言葉
331	一 是や富盛大主、	*	*
332	天願のなし子	*	*
333	さかいしあらために、	*	*
334	夜昼もかけて	*	*
335	島々に行ん、	*	*
336	たう / \	*	*
337	いそか / \、	急け / \	*
338	供二人	供	供兩人言葉
339		御急よめしやうれ	
340	一 御供しやへら、	*	*
341	富盛	*	富盛大主言葉
342	一 やあ、いきやることやとて	*	*
343	童へあてなしの、	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
344	かにある山路に	*	*
345	声立て鳴か、	*	*
346	若按司	天願	天願の若按司言葉
347	一 やあ / \、	*	*
348	哀れ此二人や	*	*
349	首里方の者よ、	*	*
350	国頭に思事の	*	*
351	あてといきやへすか、	*	*
352	闇の夜のくらさ	*	*
353	行先も見らぬ、	*	*
354	一夜明さてやり	*	*
355	こまに居ちをる、	*	こまに居ゆる
356	富盛	富盛大主	富盛大主言葉
357	一 やあ供のきや、	*	*
358	見れば此ふたり	*	*
359	只人やあらぬ、	*	*
360	天願のなし子	*	*
361	疑やないらぬ、	*	*
362	たう / \ 急ち	*	*
363	縄よかけれ、	*	*
364	供	*	供兩人言葉
365	一 拝留やへて、	*	*
366	いきやか / \、		*
367	若按司	天願	天願の若按司言葉
368	一 やあ / \ 天願の若按司や	*	*
369	謝名の太主の、	*	*
370	ゆるちゆるさらぬ	*	*
371	敵かたきやれハ	*	*
372	誠天願の	*	*
373	なし子ともやらハ、	*	*
374	縄もかけゆらハ	*	*
375	いか程もかけれ、	*	*
376	人まかいよめしやうち	*	*
377	罪科もなひらぬ、	*	*
378	此二人にのよて	のよて此二人に	*
379	縄よかけめしやいか、	*	*
380	みすく見分やひ	*	*
381	ゆるちたはふれ、	*	*
382	富盛	富盛大主	富盛大主言葉
383	一 いや、まかひもあらぬ	一 いや人違んあらん	*
384	見すまちとをゆる、	*	*
385	おかたちよとまいる	*	*
386	道中とやたる、	*	*
387	責縄のうるさ	*	*
388	にやへもこんせめれ、	*	*
389	供	*	供兩人言葉
390		一 拝ん留やへて	
391	一 いきやか / \、	*	*
392	按司	天願	天願の若按司言葉
393	一 此涯よやれハ	*	*
394	隠ちかくさらぬ、	*	*
395	実よあらわれて	*	*
396	願よおんにゆけら、	*	*
397	誠天願の	*	*
398	若按司とやゆる、	*	*
399	これや守やかあ	*	*
400	なし子乙鶴よ、	*	*
401	運たらぬワ身と	*	*
402	列てきやる故に、	*	*
403	罪科もなひらぬ	*	*
404	なわよかゝゆすや、	*	*
405	肝もきもならぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
406	ことよ又たひもの、	*	*
407	ワ身や責よらは	*	*
408	いか程もせめれ、	*	*
409	あてなしのこれや	あてなしのあれや	*
410	ゆるちたはふれ、	よ [欠] はうれ	*
411	富盛	供	富盛大主言葉
412	一 いや推参なこといふな、	一 いや / \ 推参な事言 [欠]	*
413			
414	供		供兩人言葉
415	一 さあ / \	*	*
416	たちやうれ / \、	*	*
417	若按司	天願	天願の若按司言葉
418	一 あゝ口惜や残念、	一 あは口おかしや残念	*
419	義理情けしらぬ	*	*
420	野心なやつはら、	*	*
421	富盛	*	富盛大主言葉
422	一 生きかしむさの	*	*
423	云ることのにくさ、	*	*
424	責縄のうるさ	*	*
425	にやへもこんせめれ、	*	*
426	供	*	供兩人言葉
427	一 押留やへて、	*	*
428	いきやか / \、	*	*
429		同人	
430	さあ / \	*	*
431	たちやうれ / \、	あよめ / \	あゆめ / \
432	揚七尺ふし	歌	歌七尺ふし
433	一 のゝつみもなひらぬ、	*	*
434	敵の手にかゝて	敵の手にとられ	*
435	あはれなまころし	*	*
436	されらとめハ	*	*
437	富盛	*	富盛大主言葉
438	一 やあ供のきや、	*	*
439	島々よ廻て	*	*
440	里々よめくて、	里々よまはて	*
441	此間の疲れ	*	*
442	足たるさあもの、	*	*
443	東恩納番所に	*	*
444	一夜明さ、	*	*
445	供	*	供兩人言葉
446	一 押留やへて	*	*
447	富盛	富盛大主	富盛大主言葉
448	一 たう / \ いそか / \、	一 たう / \ 急け / \	*
449	供		供言葉
450	一 さあ / \ 急き / \、		*
451	同	供	供言葉
452	一 さあ / \ あゆめ / \、	*	*
453	久志	*	久志の若按司言葉
454	一 出様ちやる者や	*	*
455	久志の若按司、	*	*
456	天願の按司や	*	*
457	御運つきはてゝ、	*	*
458	謝名の大主の	謝名の大主に	*
459	謀叛事巧て、		*
460	按司もをなちやらも		*
461	殺されよめしやうち、	*	*
462		城内になし子	
463		跡方ないらん	
464	はかなさや嫡子		*
465	千代松か事と、		*
466	野山から下り	*	*
467	さかいさしゆんてやり	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
468	語ひへのあとて	*	*
469	なまとわなひきちやる、	*	*
470	あゝ口惜や残念、	*	*
471	やあ大主、	*	*
472	やあ砂田の子、	*	*
473	身にかへて千代松や	身に替て千代松	*
474	助らんしゆもの、	*	*
475	片時も急ち	*	*
476	島々よめくて、	*	*
477	千代松か行衛	*	*
478	尋出ちからに、	*	*
479	敵討ることに	*	*
480	はからやひ給ふれ、	*	*
481	立川砂田	立川	立川の大主砂田の子言葉
482	一 拝留やへて、	*	*
483	立川	*	立川の大主言葉
484	一 や按司かなし、	*	一 やあ按司かなし
485	此事やいへも	*	*
486	油断しや済ぬ、	*	*
487	いそち手分りに	*	*
488	島々よ廻て、	*	*
489	若按司の御行衛	*	*
490	たつねやひきやあへら、	*	*
491	久志の若按司	*	久志の若按司言葉
492	一 やあ大主、	*	*
493	此支度しちや	*	*
494	尋ねいやならぬ、	*	*
495	互にうちやつれ	*	*
496	忍ふ編笠に	*	*
497	ふかく顔かくち	*	*
498	急ち出ら、	*	*
499	立川大主		立川の大主言葉
500	一 をかんちゆめやへて、		*
501	久志の若按司	*	久志の若按司言葉
502	一 やあ大主	*	*
503	やあ砂田のし、	*	*
504	手賦のことに	*	*
505	美里から越来、	*	*
506	具志川与那城	*	*
507	勝連に忍は、	*	*
508		兩人	
509		一 拝ん留やへて	
510	立川		立川の大主言葉
511	一 たう / \		*
512	御供しやへら、		*
513		口説	道行口説
514	一 命ち限りの出立に	*	*
515	有しさまかへ編笠に	*	*
516	深く面を隠してそ	*	*
517	久志の山路わけ出て	*	*
518	ゆけハ程なく金武の寺	*	*
519	御宮立寄伏し拜ミ	*	*
520	南無や観音大菩薩	*	*
521	慈悲の切徳や千代松に	是非のこかうとく千代松に	慈悲の功德や千代松に
522	急ち引合ちたはふれてやり	*	*
523	心に念し礼拝し	心念じて礼拝し	*
524	いさや / \ と立出て	*	*
525	伊芸や屋嘉村行過て	*	*
526	歩ミかねたる七日浜	*	*
527	石川走川打渡てゑひ	石川はい走渡てやい	*
528	なまと美里の伊波村に	*	*
529	急きいそひて忍てきやる	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
530	砂田	立川	砂田の子言葉
531	一 され美里伊波村に	*	*
532	つきやへたん、	*	*
533	若按司	久志	久志の若按司言葉
534	一 たう / \、	*	*
535	宿々の数や	*	*
536	残らずに忍は、	残らずに忍ひ	*
537	両人	*	砂田の子言葉
538	一 押留やへて、	*	*
539	附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある		附此時三味線手毎二而三人手配を以忍の手有ル
540	砂田	砂田し	砂田の子言葉
541	一 され、天願の若按司と	*	*
542	思妹の前や、	思ないの前と	*
543	富盛の	富盛大主の	富盛大主の
544	生捕にとやい、	*	*
545	東恩納番所に	*	*
546	宿かやいをんて、	*	*
547	此村の頭から	*	*
548	細くきちやへたん、	*	*
549	若按司	久志	久志の若按司言葉
550	一 あゝたうと、	*	*
551	願たこと叶て	思たこと叶て	*
552	今の引合や、	*	*
553	誠観音の	*	*
554	御助けとやゆる、	*	*
555	たう / \ 油断しやすまぬ	*	*
556	急か / \、	*	*
557	両人	*	立川の大主砂田の子言葉
558		たう / \ 御急よめしやり	
559	一 御供しやへら、	*	*
560	按司	立川	久志の若按司言葉
561	一 やあ / \、	一 たう / \	*
562	東恩納番所につきやん、	東恩納番所に着へたん	*
563		久志の若按司	
564	やあ、砂田の子、	やあ砂田子	*
565	事おへさしちや	*	*
566	大事あらむしゆもの、	大事やらんしゆもの	*
567	謝名の使てやり	*	*
568	たしぬきやひ出す、	たしのちに出す	*
569	我身やこまなかひ	*	*
570	待受てをとて、	*	*
571	にくひ生やから	*	*
572	切殺ちすてら、	*	*
573	砂田	砂田し	平田の子言葉
574	一 押留やへて、	*	* (平田詞)
575	按司	久志の若按司	久志の若按司言葉
576	一 やあ立川の大主や、	*	*
577	勝手から忍て	*	*
578	内にふミいやひ、	*	*
579	急ち千代松	*	*
580	列ていまふれ、	*	*
581	立川	*	立川の大主言葉
582	一 押留やへて、	*	*
583	砂田	砂田子	砂田の子言葉
584	一 やあ富成 <sup>ママ</sup> 大主、	一 やあ富盛大主	一 やあ富盛大主
585	按司かなし御支 <sup>ママ</sup> に	*	按司加那志御使に
586	くたてきやあへたん、	*	*
587	富盛	*	富盛大主言葉
588	一 按司かなし御支 <sup>ママ</sup> や	一 はあ按司かなし御使や	一 按司かなし御使や
589	たるかやゆら、	*	*



No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
590	按司	久志の若按司	久志の若按司言葉
591	一 やあ富盛、	一 やあ	*
592	久志の若按司	*	*
593	しつちをため、	*	*
594	富盛	*	富盛大主言葉
595	一 はあのう事かやゆら、	*	*
596	砂田	砂田し	砂田の子言葉
597	一 いや、悪慾のむくひ	*	*
598	なまとおめしゆら、	*	*
599		いきやか / \	いきやか / \
600	天願の若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
601	一 やあやき前よ、	*	*
602			
603			
604	東江ふし	*	歌東江ふし
605	一 かにある引合や	一 あけかにある引合や	*
606	夢かやゆら	*	*
607	天願の若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
608	一 やあやき前よ、	*	*
609	謝名の大主の	*	*
610	謀叛事巧て、	*	*
611	按司添もあや前も	*	*
612	殺されよめしやうち、	*	*
613	残る此二人も	*	*
614	ころさしゆんてやり、	*	*
615	野山から下り	*	*
616	さかひさしゆんであれば、	さかさしゆんてやり	*
617	頼む方をらぬ	*	*
618	やとる方ないらぬ、	*	*
619	思なひとふたり	*	*
620	やき前よとまひて、	*	*
621	よしれゆる道中に	*	*
622	あのやからむさに、	*	*
623	生捕にとられ	*	*
624	殺されるいのち、	*	*
625	かにある御助や	*	*
626	夢かやゆら、	よめかやゝへいら	夢かやゝへいら
627	久志の若按司	久志若按司	久志の若按司言葉
628	一 やあ千代松		*
629	やあ乙鶴よ、	*	*
630	按司添もあや前も	*	*
631	御運つきはてゝ、	*	*
632			
633	謝名の手にかゝて	謝名の太主に	*
634	殺されよめしやうち、	*	*
635	あゝ口惜や残念、	*	*
636	やあ千代松、	やあ千代松よ	やあ千代松よ
637	なきやんてやりきやしゆか	*	*
638	互に思切ひ、	*	*
639	いそちわか城に	*	*
640	立戻てをとて、	*	*
641	時節待受て	*	*
642	敵よ打とらに、	敵よ打ね	*
643	天願の若按司	天願若按司	天願の若按司言葉
644	一 やあやき前よ、	*	*
645	よたしやあるやうに	*	*
646	御計よめしやうれ、	*	*
647	立川	立川の大主	立川の大主言葉
648	一 あゝ揮てなつかしやゝ	一 はあ揮てなつかしや	*
649	袖のなみた、	*	*
650	やあ若按司の前、	*	*
651	互に肝揃て	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
652	美腰たちすらハ、	御腰立すれば	*
653	かたきうちとゆす	*	*
654	手の内とやゝへひる、	*	*
655			
656			
657	天願	*	天願の若按司言葉
658	一 よたしやあるやうに	*	*
659	計らやひ給ふれ、	*	*
660	立川	*	立川の大主言葉
661	一 をかんちゆめやへて、	*	*
662		久志	久志の若按司言葉
663	一 やあ千代松、	*	*
664	悪たくむやから	*	*
665	生て置ならぬ、	生て置すまん	*
666	肝のあくまゝに	*	*
667	殺ち捨れ、	切殺ち捨れ	*
668	富盛	*	富盛大主言葉
669	一 やあ按司かなし、	*	*
670	願ことのももの	*	*
671	おんにゆかて給ふれ、	*	*
672	けふからや心	*	*
673	引よ改て、	*	*
674	夜昼もミやたり	*	*
675	働かんしゆもの、	*	*
676	露の身の命ち	*	*
677	助けやひたはふれ、	*	*
678	久志の若按司	*	久志の若按司言葉
679	一 悪巧むゝさと	*	*
680	肝合ちをたる、	*	*
681	罪科のいきやし	*	*
682	ゆるちゆるされめ、	よるきよるされが	ゆるちよるされが
683	やあ千代松、	*	*
684	たう / \ 急ち	*	*
685	殺ちすてれ、	切殺ち捨り	*
686	富盛	富盛大主	富盛大主言葉
687	一 あゝ、押かへし / \	*	*
688	おとろしやとあすか	*	*
689	頼て願ことや	又む我が願や	*
690	おんにゆかて給ふれ、	*	*
691	謝名か悪欲の	謝名の太主の	*
692	罪深さあることや、	悪欲の罪や	*
693	兼てからワ身も	兼ねて[欠]我身	*
694	しりづゝとやすか、	*	*
695	あれかしなさけも	*	*
696	受てをる故に、	*	*
697	捨てすてららぬ	あたゝ捨らん	*
698	たのでをやへたる、	*	*
699	あゝなまきれる命ち	はあなま切る命ち	*
700	御助のあらハ、	*	*
701	此御恩美拝や	*	*
702	いつし忘やへか、	*	*
703	慈悲よ御情けに	*	*
704	ゆるち給ふれ、	*	*
705	久志の若按司	久志の	久志の若按司言葉
706	一 やあ大主	*	*
707	やあ砂田の子、		*
708	富盛大主の	*	*
709	願ことよきけハ、	*	*
710	殺しゆすや忍はらぬ	*	*
711	肝苦しやあもの、	*	*
712	得と此事や	此事や得と	*
713	考て給ふれ、	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
714	立川	立川大主	立川の大主言葉
715	一 やあ按司かなし、	*	*
716	此やからむさの	*	*
717	今のい云葉や、	*	*
718	偽とやゆる	*	*
719	ゆるちすミやへらぬ、	*	*
720	急ち引立て	*	*
721	殺ちすてやへら、	*	*
722		久志	
723		一 いやしはしまて	
724	久志の若按司	*	久志の若按司言葉
725	一 やあ大主、	*	*
726	人の生死に	*	*
727	かゝる願事や、	*	*
728	身の上に引当て	身の上に引請て	*
729	思らねはすまぬ、	*	*
730	富盛大主の		*
731	露の身の命ち、		*
732	慈悲よしちワ身の	*	*
733	助けゆる上に、	*	*
734	義理背ちいちやし	のよて悪巧て	*
735	謀叛企ちゆか、	*	謀叛企ちゆる
736	此事やつく / \ と	こゝろ沈やい	*
737	了簡よされゝ、	*	*
738	立川	立川大主	立川の大主言葉
739	一 あゝめしやいること、	一 はあめしやいる事	一 あらめしやいること
740	命ちより重さある	*	命よか重さある
741	ものやあやへらぬ、	*	*
742	やあ砂田の子、	*	*
743	仰すこと得と	*	*
744	考て見れハ、	*	*
745	是程の御慈悲	*	*
746	蒙てのうへに、	*	*
747	謀叛企ちゆる	*	*
748	肝の忍ハれめ、	肝のしのはらん	*
749	たう / \	*	*
750	つく / \ といやも	いやんつこ / \ と	*
751	考ておてよ、	考てんて	*
752	砂田	砂田の子	砂田の子言葉
753	一 され按司かなし、	一 やあ按司かなし	*
754	やあ大主、		*
755	こへな事俄に	*	*
756	決断やなやへらぬ、	*	*
757	籠舎しめおきゆて先	牢舎しめ置て一稜	*
758	考てミやへら、	*	*
759	久志の若按司	*	久志の若按司言葉
760	一 やあ砂田の子、	一 やあ砂田子	*
761	富盛大主の	*	*
762	命ち助けやひ、	*	*
763	敵討る計ひ	*	*
764	頼ほしやあもの、	*	*
765	是非に此事や、	此事や是非共に	是非よ此事や
766	我身にうちまから呉れ、	*	*
767	たう / \ 疑てやすまぬ、	*	*
768	ワか下知のことに	*	*
769			
770	急ちときゆるす、	*	*
771	砂田	砂田し	砂田の子言葉
772	一 拝留やへて、	*	*
773	富盛	*	富盛大主言葉
774	一 あゝたうと、	*	*
775	いのちたすかたる	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
776	此御恩美拝や、	*	*
777	胸におめ染て	*	*
778	肝に思留て、	*	*
779	夜昼もみやたり	*	*
780	肝もきも尽ち、	*	*
781	百とわれてふわれ	*	*
782	をかてすてやへら、	拝てすてら	*
783	久志の若按司	久志	久志の若按司言葉
784	一 やあ富盛大主、	*	*
785	謝名か悪欲の	謝名の大王の	*
786	罪深さあすや、	罪深さあす[欠]	*
787	天願の按司の	[欠]の按司の	*
788	御情けやふかく、	御情や深さ	*
789	身に余るまでも	*	*
790	かふむやひをとて、	*	*
791	謀叛企ちやひ	*	*
792	生楽よ好む、	生楽よ好て	*
793	罪科のいきやし	*	*
794	凌きしのかれか、	*	*
795	やあ富盛大主、	*	*
796	天の御助けか	*	*
797	神の引合しか、	*	*
798	謝名か頭役	謝名の頭役	*
799	川崎のひやか、	*	*
800	謝名事と朝夕	*	*
801	酒と色好ミ、	酒と色好て	*
802	百姓したけやひ	百姓したかやひ	*
803	おこり日にまさて、	*	*
804	御万人のまきり	*	*
805	なきよ恨めとて、	*	*
806	くりかへち本の	*	*
807	御代まちやいをもの、	*	*
808	時節【待受てを消して】計らやひ	*	*
809	謝名の首とやひ、	*	*
810	天願の御恥	*	*
811	すゝきあけらてやり、	*	*
812	文のかよはしに、	*	*
813	内通のあもの、	約束のあもの	*
814	大主や急ち	*	*
815	立戻てからに、	*	*
816	川崎のひやと	*	*
817	ふたりかたらやひ、	*	*
818	敵討る計ひ	*	*
819	内通よされゝ、	*	*
820	富盛	*	富盛大主言葉
821	一 をかん留やへて、	*	*
822	富盛	*	同人言葉
823	一 やあ立川の大王、	*	*
824	川崎のひやか	*	*
825	なまのことやれは、	命の事やりは	*
826	謝名か首とゆす	敵よ打とよす	*
827	疑やなひらぬ、	*	*
828	やあ大王	*	*
829	ワ身や立戻て	急ち立戻て	*
830	謝名に返答や、	*	*
831	天願の若按司や	*	*
832	久志の按司頼て、	*	*
833	万事敵討る	*	*
834	手組しゆんてやり、	*	*
835	かたひとますらハ	*	語りともすれハ
836	謝名の大王や、	*	*
837	さはき驚ひ	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
838	せめかける筈、	*	*
839	おの時立川の大主と	*	*
840	砂田の子二人や、	*	*
841	つわものよ引列て	*	*
842	金武のたけなかひ、	*	*
843	伏よ隠れとて	*	*
844	謝名か旗印、	*	謝名の旗印
845	伊芸屋嘉のあたり	*	*
846	走通る時 [欠]	はし通る時分	*
847	一時に出て	*	*
848	すゝむ道ふさき、	*	*
849	いきも [欠] さすに	いちもつかさすに	*
850	平責よされゝ、	*	
851	又川崎とワ [欠]	又川崎と我んや	*
852	謝名かひきかへち	*	*
853	逃よ走ゆらハ、	*	*
854	うし [欠] 取かこて	おしる取困て	*
855	殺ちすてら、	殺ち捨て	*
856	立川	*	立川大主言葉
857		一 はあ大主の肝合ち	
858		なまの事やれは	
859		かたき打取す	
860		手の内とやよる	
861	一 やあ富盛大主、		*
862	なまのこことやれハ		*
863	誇らしやとあゆる、		*
864	謝名か首とゆす		*
865	疑やなひらぬ、		*
866	頼て此事や		*
867	計らやい給ふれ、		働ひ給り
868		富盛	
869		一 やあ按司かなし	
870		立川の大主と	
871		語らたる事に	
872		前後から責て	
873		取困てからや	
874		謝名か首取す	
875		疑やあやへらん	
876		二所の按司や	
877		御城の内に	
878		心安ゝと	
879		御待めしやうれ	
880	久志	久志按司	久志の若按司言葉
881	一 やあ富盛大主、	一 やあ大主	*
882	今のこことやれハ	互に肝合ち	*
883	ほこらしやとあゆる、	*	*
884	川崎のひやと	*	*
885	ふたりかたらやひ、	*	*
886	細々のこことや	*	*
887	内通よされゝ	*	*
888	富盛	*	富盛大主言葉
889	一 をかんちゆめやへて、	*	*
890	同人		同人言葉
891	一 やあ按司かなし、	*	*
892	此事やいへも	*	*
893	油断しや済ぬ、	油断しやすにやへらん	油断しや済へらぬ
894	たう / \	*	*
895	御暇よしやへら、	*	*
896	久志	*	久志の若按司言葉
897	一 たう / \	*	*
898	肝も肝添て	*	肝もきも済て
899	働きやい給ふれ	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
900	富盛	*	富盛大主言葉
901	一 拝留やへて、	*	*
902	砂田	砂田子	砂田の子言葉
903	一 され按司かなし、	一 やあ按司かなし	*
904	富盛大主の	*	*
905	謝名の恩情や、	*	*
906	かそる数しらぬ	*	*
907	身に請てをれハ、	*	*
908	たとひ寸々に	*	*
909	きざまれやしちも、	*	*
910	謝名にうち背ち	*	*
911	のよてくたやへか、	*	*
912	今のいこと葉や	*	*
913	偽とあゆる、	偽とやよる	偽とやゆる
914	急ち追付て	急ち追掛て	*
915	殺ちすてやへら、	*	*
916	立川	*	立川の大主言葉
917	一 はあ / しはしまて、	一 いやしはしまて	一 はあしはしまて
918	やあ砂田の子、	*	*
919	富盛大主の	*	*
920	偽の上に、	*	*
921	ぬきかへちうちゆる	*	*
922	御計とやゆる。	*	*
923	久志	*	久志の若按司言葉
924	一 やあ、砂田の子、	*	*
925	大主のいやれること	*	*
926	富盛大主の、	*	*
927	たくてをることや	*	*
928			
929	合点とやゆる、	*	*
930	つわものゝまきり	*	*
931	金武嶽にやらち、	*	*
932	千代松とワ身や	*	*
933	城元に残ち、	*	*
934	打捕んでやり	*	*
935	たくてをることや、	*	*
936	い言葉の色に	*	*
937	あらわれてをてと、	*	*
938	偽の上に	*	*
939	計ことめくらしやひ、	*	*
940	ぬきかへち討る	*	*
941	分別とやゆる、	*	*
942	又川崎のひやゝ、	*	*
943	人に勝れとる、	*	*
944	つわものよやれハ、	*	*
945	跡々の障り、	*	*
946	あれ生ておきや	*	*
947	謝名に打ちゆる	*	*
948	計ひのならぬ、	計いやならん	はからひやならぬ
949	此事や一期	此事よ一期	*
950	気にかゝてをてと、	気に掛てをてとる	*
951	謝名の手にかけて	謝名の手かやい	謝名の手にかゝて
952	殺さゝんともて、	*	*
953	富盛大主	*	*
954	たしぬきにぬきやる、	*	*
955	砂田	砂田子	砂田の子言葉
956	一 はあ今の御計の	一 あゝなまの御計の	*
957	あることや我身の	*	*
958	兼て夢程も	*	*
959	しらぬあやへたん	*	*
960	立川		立川の大主言葉
961	一 やあ按司かなし	やあ按司かなし (砂田詞)	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
962	此事やいへも	此事やいへん (砂田詞)	*
963	油断しや済ぬ	油断しやすまん (砂田詞)	*
964	片時も急ち	片時ん急ち (砂田詞)	*
965	城に立戻て	城に立戻て (砂田詞)	*
966	敵よ待うける	敵よ待請る (砂田詞)	*
967	計しやへら	計いよしやへら (砂田詞)	*
968	久志の若按司	久志若按司	久志の若按司言葉
969	一 たう / \ 急か / \	*	*
970	謝名	謝名大主	謝名大主の言葉
971	一 やあ平田の子	*	*
972	川崎のひやや	*	*
973	敵と肝合ち	*	*
974	謀叛企ちやい	*	*
975	内通よしゆる族	*	*
976	生て置ならぬ	*	*
977	こんしまてきやうれ	*	*
978	平田	平田し	平田の子言葉
979	一 拝留やへて	*	*
980	同人	*	同人言葉
981	一 御万人のまきり	一 はあおまん人の間切	*
982	たによ聞留れ	*	*
983	此やからむさと	此族むきや	*
984	御主人に背ち	*	*
985			
986	謀叛しゆる科に	*	*
987	殺さしよめしやいん	*	*
988	たうたういそけ / \	*	*
989	川崎	*	川崎のひや言葉
990	一 やあ平田の子	*	*
991	平田	平田子	平田の子言葉
992	一 いやものことのおほさ	*	*
993	急け / \	*	*
994			
995	たう / \		*
996	居やうれ / \		*
997		平田	同人言葉
998	一 され川崎のひや	*	*
999	せまてきやへたん	列てきやへたん	*
1000		謝名	謝名の太主言葉
1001	一 やあ川崎	*	*
1002	いきやることやとて	*	*
1003	ワか恩義わすて	*	*
1004	敵と肝合ち	*	*
1005	謀叛企ちゆか	*	*
1006	川崎	*	川崎のひや言葉
1007	一 やあ按司かなし	*	*
1008	御主人の御恩	*	*
1009	山よりも高く	海よいん深く	*
1010	海よりも深く	山よりん高さ	*
1011			
1012	思しゆるワ身の	*	*
1013	のよて悪たくて	*	*
1014	謀叛企ちゆか	*	*
1015			
1016			
1017			
1018			
1019			
1020			
1021	神仏かけて	*	*
1022	偽やあやへらぬ	*	*
1023	頼てつく / \ と	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
1024	思てたはふれ	*	*
1025	謝名	*	謝名の大主言葉
1026	一 いや胸に悪巧て	*	*
1027	口に花さかそ	口に花さかち	*
1028	島国のやから	*	*
1029	生て置ならぬ	*	*
1030	急ち引立て	*	*
1031	殺ちきやうれ	*	*
1032	川崎	*	川崎のひや言葉
1033	一 あゝ口惜や残念	*	*
1034	やあ富盛大主	*	*
1035	落る此首や	*	*
1036	おしさ又ないらぬ	*	*
1037	あにあるてきかたに	*	*
1038	うちよたまされて	*	*
1039	主人かたくつら	*	*
1040	あまた御万人も	余多御万人の	*
1041	頓てやミ / \ と	*	*
1042	なゆらとめは	*	*
1043	謝名	*	謝名の大主
1044	一 いや押かへし / \	*	*
1045	過云しゆるやから	*	*
1046	迎も一刀に	*	*
1047	切殺ちすてら	*	*
1048	平田	供兩人	平田の子言葉
1049	一 やあ按司かなし	一 やあ按司かなし (富盛平田詞)	*
1050	謀叛しゆるやから	むふんしゆるやから (富盛平田詞)	*
1051	殺ちすてめしやうち	殺ち捨めしやうち (富盛平田詞)	*
1052	ワすた供つれも	わすた供つれん (富盛平田詞)	*
1053	誇らしやとあやへひる	ふくらしやとあやへいる (富盛平田詞)	*
1054	謝名	*	謝名の大主言葉
1055	一 やあ大主	*	*
1056	やあ平田の子	*	*
1057	久志の若按司や	*	*
1058	すくれものでやり	*	*
1059	世界取沙汰に	世界の取沙汰に	世界の取沙汰に
1060	肝さハきをたん	*	*
1061	はあ思たすと替て	*	はあ思たこと替て
1062	今のことやれハ	*	*
1063	一 鼓にうちとゆす	*	*
1064	疑やなひらぬ	*	*
1065	けふ明る廿日	*	*
1066	よかる日よやれハ	*	よかる日よやこと
1067	久志の城元に	*	*
1068	軍押寄て	*	*
1069	二人の按司打果ち	*	*
1070	我肝やすま	*	*
1071		富盛	富盛大主言葉
1072		一 拝ん留やへて	一 拝留やへて
1073	富盛	*	同人言葉
1074	一 やあ按司かなし	*	*
1075	久志の若按司と	*	*
1076	約速のことに	*	*
1077	内通の書状	*	*
1078	かきよ調やい	*	*
1079	急ち夜通しに	*	*
1080	もたちやらしやへら	*	*
1081	謝名	*	謝名の大主言葉
1082	一 たう / \ 急け / \	*	*
1083	久志の若按司	*	久志の若按司言葉
1084	一 やあ千代松	一 やあ千代松よ	*



No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
1085	富盛大主の	*	*
1086	只今の <small>マツ</small> や	只今の使や	*
1087	けふ <small>マツ</small> 明る廿日	*	*
1088	軍寄ゆもの	*	*
1089	約速 <small>マツ</small> のことに	*	*
1090	金武の嶽なかい	金武嶽に登て	*
1091	伏勢よしちをて	*	*
1092	待請 <small>マツ</small> れちやり	*	*
1093	内通の文や	*	*
1094	是とやゆる	*	*
1095	天願の若按司	天願	天願の若按司言葉
1096	一 やあやき前よ	*	*
1097	今のことあれハ	なまの事やれは	*
1098	誇らしやとあゆる	*	*
1099	よたしやあるやうに	*	*
1100	御計よめしやうれ	*	*
1101	同人	*	同人言葉此時文立川の大主江渡ル
1102	一 やあ大主	*	*
1103	文立川の大主江渡す		
1104	立川	*	立川の大主言葉
1105	一 やあ按司かなし	*	*
1106	此文よ見れハ	*	*
1107	御計のことに	*	*
1108	川崎のひやゝ	*	*
1109	大主の手にかゝて	*	*
1110	殺されよしちやす	*	*
1111	疑やなひらぬ	*	*
1112	はあ川崎のひやか	*	*
1113	今のことやれハ	*	*
1114	かたきうちとゆす	*	*
1115	手の内とやゝへひる	手の内とやよる	*
1116	久志の若按司	久志若按司	久志の若按司言葉
1117	一 やあ大主	*	*
1118	急ちおれ / \ の	*	*
1119	手組云渡さ	*	*
1120	立川	惣人数	立川の大主言葉
1121	一 拝留やへて	一 拝留やへて (惣人数詞)	*
1122	久志の若按司	久志若按司	久志の若按司言葉
1123	一 やあ伊豆味下こうりや	*	*
1124	金武の嶽なかひ	*	*
1125	薄煙立て	*	*
1126	伏勢の様子	*	*
1127	敵に見せれ	*	*
1128	いつミ下 (广+東) 理	*	伊豆味下こおり言葉
1129	一 拝留やへて	*	*
1130	按司	久志若按司	久志の若按司言葉
1131	一 やあ砂田の子や	*	*
1132	本門の東	*	本門の東り
1133	山中にふかく	*	*
1134	伏よ隠れとて	*	*
1135	謝名の大主の	謝名か軍勢	*
1136	東原にのそて	東原に廻て	東原のそて
1137	逃よ走ゆらハ	*	*
1138	一時に出て	*	*
1139	殺ちすてれ	*	*
1140	砂田	砂田子	砂田の子言葉
1141	一 をかんちゆめやへて	*	*
1142		久志	久志の若按司言葉
1143	一 やあ浜崎のひやゝ	*	*
1144	久志嵩に深く	*	*
1145	ふしよかくれとて	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
1146	謝名か西宿に	*	*
1147	逃よ走ゆらは	*	*
1148	すゝむ道ふさき	*	*
1149	殺ち捨れ	*	*
1150	浜崎	*	浜崎のひや言葉
1151	一 拝留やへて	*	*
1152	按司	久志	久志の若按司言葉
1153	一 やあ外間の子や	*	*
1154	城の南の	*	*
1155	小林に深く	*	*
1156	伏よ隠れとて	*	*
1157	謝名か軍勢の	*	*
1158	城の門内に	*	*
1159	ふミ入ゆる時分	*	*
1160	相図のかねのならば	*	*
1161	うしろからせめれ	*	*
1162	外間	*	外間の子言葉
1163	一 をかむちゆめやへて	*	*
1164	按司	久志	久志の若按司言葉
1165	一 やあ立川の大主や	*	*
1166	本門の内に		*
1167	忍ひ隠れとて		*
1168	謝名か門内に	*	*
1169	入ゆす見掛らハ	*	*
1170	七重八重かこて	*	*
1171	殺ち捨られゝ	殺ち捨り	*
1172	立川		立川の大主言葉
1173	一 拝留やへて		*
1174	按司	久志	久志の若按司言葉
1175	一 また千代松と我身や	*	*
1176	時の声よきかは	*	*
1177	物見走登て	物見いに走登て	*
1178	敵の軍勢	*	*
1179	さそへ入ら	*	*
1180	惣人数	*	*
1181	一 拝留やへて	*	*
1182	按司	久志	久志の若按司言葉
1183	一 やあ千代松	*	*
1184	手賦の濟ち	*	*
1185	誇らしやとあゆる	*	*
1186	習とたる手並	*	*
1187	振立て見せれ	*	*
1188	天願の若按司	千代松	
1189	一 礼	一 拝ん留やへて	
1190	揚作田ふし	はやつくたんふし	歌あけつくてやんふし
1191	一 朝夕たしなたる	一 忍ひ隠れて	*
1192	長刀の刃さき	習とたる手並	*
1193	てきのくひすちに	敵の首すしに	*
1194	たたなおきゆめ	打な置め	*
1195	久志	*	久志の若按司
1196	一 やあ千代松	*	*
1197	振立すみれハ	*	*
1198	嬉しさとあゆる	誇らしやとあよる	*
1199	城に立展て	急ち立展て	*
1200	敵よまたに	*	*
1201		惣人数	
1202		一 拝ん留やへて	
1203	天願		天願の若按司
1204	一 一礼		一 おふう
1205			
1206	謝名	*	謝名の太主
1207	一 やあ / \	一 やあ	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
1208	時うつち済ぬ	*	*
1209	急か / \	*	*
1210	富盛	*	富盛大主
1211	一 御急よめしやうれ	一 をかんとめやへて	一 拝留やへて
1212	謝名	同人 (富盛詞)	謝名の大王
1213	一 はあ金武のたけミれハ	一 はあ金武の嶽見れは (富盛詞)	*
1214	うすけふりたちゆん	薄煙り立ん (富盛詞)	*
1215	伏勢の様子	伏勢の様子 (富盛詞)	*
1216	疑やないらぬ	疑やないらん (富盛詞)	*
1217	たう / \ 急か / \	たう / \ 急か / \ (富盛詞)	*
1218			
1219			
1220			
1221	富盛	*	富盛大主言葉
1222	一 はあ久志の若按司の	*	*
1223	運の末なたら	*	*
1224	ワか謀ことに	*	*
1225	心うちゆるち	*	*
1226	あれ / \ 御目掛け	ありよおめかけれ	*
1227	本門も開ちをやへいん	*	*
1228			
1229			謝名大王
1230	急ち走寄ひ	さあ / \ 急ち走寄やい	一 急ち走寄へ (謝名詞)
1231	時の声よあけら	時の声あけら	時の声よ揚り (謝名詞)
1232		謝名	
1233		一 たう / \ 急け / \	
1234	同人	富盛	富盛大主
1235	一 やあ久志の若按司	*	*
1236	富盛大主の	*	*
1237	偽にいちやる	*	*
1238	い言葉や誠	*	*
1239	実ともてをたら	たにともて聞ら	*
1240	快く急ち	さあ / \ 急ち首そゝて	*
1241	首よ渡す	出て拝み	*
1242	久志	*	久志の若按司
1243	一 やあ富盛大主	*	*
1244	偽の巧ミ	*	*
1245	夢程もしらぬ	*	*
1246	つわものゝまきり	*	*
1247	金武嵩にやらち	*	*
1248	此城の内や	*	*
1249	千代松とふたり	*	*
1250	たゝかはぬすれハ	*	*
1251	力及はらぬ	*	*
1252	あゝ口惜や残念	*	*
1253		謝名	謝名の大王
1254	一 やあ / \ 急ち責いやい	一 たう / \ 急ち責入い	一 やあ / \ 急ち責いやひ
1255	切殺ちすてら	*	*
1256	惣人数		*
1257	一 ひやあひやい		*
1258		外間	
1259		一 さあ / \ 急け / \	
1260		浜崎	
1261		一 たう / \ 居やうれ / \	
1262	久志	*	久志の若按司
1263	一 やあ謝名の大王	一 やあ	*
1264	此按司のはかりこと	*	*
1265	しらぬあため	知ちをため	*
1266	謝名	*	謝名の大王
1267	一 あゝ謝名ほどの名将も	*	*
1268	運の末なたら	運んの末成は。	*
1269	たしぬきにぬかれ	*	*

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
1270	川崎もころち	*	*
1271	おかたちか手にかゝて	*	*
1272	生捕にとられ	*	*
1273	武士の身の恥辱	*	*
1274	面目もなひらぬ	*	*
1275	たう / \ 快く急ち	*	*
1276	首よとれ	首よ渡さ	*
1277	久志	*	久志の若按司
1278	一 やあ富盛	*	*
1279	十度ときゆるち	ふ二人解よるち	*
1280	十度生とられ	ふたい生捕す	*
1281	此按司に向て	*	*
1282	弓ひきゆんでやり	*	*
1283	巧である褒美	たこてをる褒美	*
1284	殺さゝんしゆもの	*	*
1285	ありかたさ思て	*	ありかたさ拝て
1286	あの世とつけ	*	*
1287	富盛		富盛大主
1288	一 あゝ武運つき果て		*
1289	生捕にとられ		*
1290	武士の身の名折		*
1291	面目もなひらぬ		*
1292	謝名	富盛	謝名の大王
1293	一 いやものことのおほさ	一 あゝもの事おふさ (富盛詞)	一 いやものことぬいらぬ
1294	快く急ち	心よく急ち (富盛詞)	*
1295	首よ渡す	首よ渡さ (富盛詞)	*
1296	天願		天願の若按司
1297	一 此やからむさや		*
1298	見れハやすまらぬ		*
1299			
1300			
1301	久志	*	久志の若按司
1302	一 はあ / \ しはしまて	一 いやしはしまて	*
1303	やあ千代松	*	*
1304	このやからむさの	*	*
1305	悪欲の罪や	*	*
1306	一刀にしちや	*	*
1307	罪あさゝあもの	*	*
1308	久志浜に引出ち	*	*
1309	旗門にあけれ	はたものにあけれ	かう門にあけれ
1310	浜崎国吉		浜崎のひや国吉の子兩人
1311	一 拝留やへて		*
1312	久志	天願	久志の若按司
1313	一 やあ浜崎のひや	一 やあ浜崎のひや (天願詞)	*
1314	やあ国吉の子	やあ外間の子 (天願詞)	*
1315	急ち引立て	急ち引立ゝ (天願詞)	*
1316	籠舎しめれ	牢舎しめれ (天願詞)	*
1317	兩人	供	浜崎のひや国吉の子兩人
1318	一 拝留やへて	一 拝ん留やへて (供詞)	*
1319	立川		久志の若按司
1320	一 やあ / \		* (久志の若按司詞)
1321	おれ / \ の番手		* (久志の若按司詞)
1322	油断するな		* (久志の若按司詞)
1323	浜崎国吉		浜崎のひや国吉の子兩人
1324	一 をかんちゆめやへて		*
1325	同人		浜崎のひや
1326	一 さあ / \ たちやうれ / \		*
1327	同人		国吉の子
1328	一 さあ / \ いそけ / \		*
1329			
1330			
1331			

No.	尚家本組踊集	久志公村所蔵本	今帰仁御殿本
1332			
1333	天願	天願若按司	天願の若按司
1334	一 やあやき前よ	*	*
1335	やあ大主	やあ大主よ	*
1336	互に肝揃て	*	*
1337	働きやる故に	*	*
1338			
1339	親の敵かたき	*	*
1340			
1341	討捕るけふや	生捕に取す	*
1342		誠あの世界の	
1343		此世事あらは	
1344	すきし二所も	*	*
1345	嬉しやめしやいら	*	*
1346	久志	*	久志の若按司
1347	一 やあ/\	*	*
1348	かたき討捕る	*	*
1349	けふの誇らしや	*	*
1350	押つれて互に	*	*
1351	踊て戻ら	踊て居ら	*
1352		総人数	
1353		一 めしやいる事	
1354		押列て踊て	
1355		御供しやへら	
1356			
1357			
1358			
1359			
1360	しやうんかないふし	歌	歌しやうんかないふし
1361	一 かたきうちとたる	*	*
1362	けふの誇らしや>	*	*
1363	天のしら雲に	過し二所ん	*
1364	のほるはかり	嬉[欠]	*
1365			
1366			
1367			
1368			
1369			
1370			
1371			
1372			
1373		子	
1374		八月	
1375		久志村	

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
1	天願之若按司敵討	久志ノ若按司	久志之若按司敵討
2	着付謝名之大主髪錦之入道頭巾向に 金磨之龍角有ル水色緞子衣装羅陳羽 織錦に而饒有ル太刀刀大団足袋脚胖		
3	富盛大主髪黒緇子入道頭巾向ニ金欄 に而饒有ル黒袖衣装青緇子広袖羽織 刀脚胖足袋		
4	川崎之ひや平田の子髪黒西洋布入道 頭巾黒木綿単衣裳脚胖足袋		
5	ちやうちやく持かむらふ黒木綿単衣 脚胖足袋		
6	供髪黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳 脚胖足袋差繩		
7	天願の若按司髪半向頭巾金花并金銀 水引はさら糺綸子衣裳糺西洋布足袋 中入より錦入道頭巾錦に而饒有ル羅 陳羽織錦に而饒有ル脚胖足袋扇子持 出ル但戦之時甲胸当長刀		
8	同人妹板メ縮緬ネ同衣ひさ取裙糺西 洋布足袋		
9	宿元謝名之大主供同断		
10	久志之若按司髪錦之入道頭巾向ニ金 磨之龍角饒有ル青緇子衣装羅陳羽織 錦に而饒有ル刀脚胖足袋但中入より 青緇子広袖羽織雨笠杖陳賦之時髪錦 之入道頭巾羅羽織扇子戦之時甲胸当		
11	立川の大主髪黒緇子入道頭巾黒袖衣 裳黒縮緬広袖羽織脚胖足袋		
12	砂田の子黒西洋布入道頭巾黒木綿衣 裳脚胖足袋但中入之時より立川砂田 黒縮めん広袖羽織編笠杖		
13	浜崎のひや伊豆味下(广+東)裏外 間の子金の磨持ちちやうちやく持謝名 の大主供支度同断		
14		謝名	謝名之大主
15	一 出様ちやる者や、	*	*
16	天願の按司の	*	*
17	頭役しゆたる	*	*
18	謝名の大主、	*	*
19	あゝ浅ましや此身	*	*
20	黒髪に雪の、	*	*
21	積るとしまても	*	積ルトン迄ン
22	人の下知受て、	*	*
23	朝夕胸内に	*	*
24	煙りたかよいか、	*	煙タ、ヨイカ
25	主人打果ち	*	*
26	按司の身になやひ、	*	*
27	夢の間の浮世	*	*
28	楽すらんともて、	*	*
29	色欲よ進め	色欲ニ進ヤイ	色欲ニス、ミ
30	明間うかゝやひ、	*	*
31	討捕んでやり	*	*
32	様々にしやすか、	*	*
33	聞立もすらぬ	*	*
34	義理守てをれハ、	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
35	願事や叶ぬ	*	*
36	気の毒とやたる、	気ノ毒ドヤユル	*
37	あゝむちやる三日に	ハア。去ル三日ニ	ハアンキヤル三日ニ
38	原遊すゝめやひ、	*	*
39	戻る道中に	*	*
40	伏勢よ置て、	伏勢ユシキユテ	*
41	思たこと按司や	*	*
42	うちすまぢあすか、	打果チアスガ	*
43	城内になし子	*	*
44	跡形もなひらぬ、	跡方ノナイラン	*
45	気の毒とやゆる	*	*
46	気障とやゆる、	気障トヤタル	*
47	やあ富盛大主	*	*
48	川崎のひや平田の子、	*	*
49	三人	*	*
50	一 ふう	一 ホフウヲ	*
51	謝名	*	謝名ノ大主
52	一 やあ、思たこと叶て	*	*
53	按司も打果ち、	*	*
54	楽も楽いらて	*	*
55	誇らしやとあすか、	*	*
56	城内になし子	*	*
57	あとかたもなひらぬ、	跡方ノナイラン。	*
58	又久志の若按司や	*	*
59	天願の別れ、	*	*
60	嫡家ふるふされ	*	*
61	たゝやてやをらぬ、	*	*
62	天願の若按司	*	*
63	助けやひふたり、	*	*
64	命ちふり捨て	*	*
65	弓ひきゆらとめハ、	*	*
66	気障とやゆる	*	*
67	事障たひもの、	*	*
68	先久志の城元に	*	*
69	軍押寄すて	*	*
70	急ち若按司	先久志ノ若按司	*
71	打果ちからに、	*	*
72	天願のなし子	*	*
73	さかひし改て、	*	*
74	根葉も茹捨て	*	*
75	我肝やすま、	*	*
76	三人		*
77	一 拝留やへて、		*
78	平田	平田ノ子	平田ノ子
79	一 はあめしやいること、	ア、召ル事	*
80	あのふたり世界に	アノ二人ヤ世界ニ	*
81	いきて置からや、	*	*
82	跡々の障り	*	*
83	御気遣とやゆる、	*	*
84	片時も急ち	*	*
85	打とやいきやへら、	*	*
86	富盛	富盛大主	富盛大主
87	一 やあ按司かなし、	*	*
88	久志の若按司や	*	*
89	世界に立ぬけて、	*	*
90	義理も分別も	*	*
91	人並やあらぬ、	人並ヤアヤヒラン。	*
92	又あの大親	*	*
93	立川の大主と	*	*
94	砂田の子二人や、	*	*
95	世間沙汰される	*	*
96	つハものやれば、	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
97	自由に打捕ゆる	*	*
98	敵や又あらぬ、	*	*
99	天願の城	*	*
100	討よふるふしやい、	*	*
101	御万人の心	御万人心	*
102	おてつかぬ内に、	*	ヲテツカシ内ニ
103	城よ立出て	*	*
104	城よはなれやひ、	*	*
105	遙々と久志に	*	*
106	軍押て、	軍押寄テ	軍押寄テ
107	もしか此城に	*	*
108	一大事のあらハ、	*	*
109	百悔ミしちも	*	*
110	益や又なひさめ、	益ヤ又アラン。	*
111	今程や城に	*	*
112	堅打守て、	*	*
113	時節計ら <sup>ママ</sup> やらひ	*	*
114	軍寄やへら、	*	*
115	川崎	川崎ノヒヤ	川崎ヒヤ
116	一 やあ按司かなし、	*	*
117	久志の城元に	*	*
118	軍寄ゆすや、	*	*
119	大主のいやれること	*	*
120	先やミにめしやうち、	*	先ヤミニ召リ
121	急ち島々に、	*	*
122	廻文よ通ち、	*	*
123	天願のなし子	*	*
124	生捕にとやひ、	*	*
125	久志の若按司の	*	*
126	降参よしゆらハ、	*	*
127	天願のなし子	*	*
128	かへち渡さてやり、	引ヨ渡サテヤイ	*
129	久志の若按司に	*	*
130	文よつかはさは、	*	*
131	なく / \ もこまに	*	*
132	くたてこんしゆもの、	*	*
133	おの時にふたり	*	*
134	ころちすてやへら、	*	*
135		謝名ノ大主	謝名
136	一 やあ大主	*	*
137	やあ川崎のひや、	ヤア川崎	ヤア川崎
138	云ることよ聞ハ	*	*
139	ことハりとやゆる、	*	*
140	急ち手わかいに	*	*
141	島島よ廻て、	*	*
142	天願のなし子	*	*
143	からめ出すものや、	*	*
144	とり位も付て	*	*
145	島知行も呉ゆん、	*	*
146	若隠ち置ものや、	*	*
147	一門やたにも	*	*
148	引はらふしまても	*	*
149	生責よしゆんて	*	生責ヨシユンテヤリ
150	堅く云渡ち、	*	*
151	片時もはやく	*	*
152	からめ出ちくう、	*	*
153	富盛		富盛大主
154	一 押留やべて、	*	*
155			
156			
157			
158			



No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
159	謝名	*	*
160	一 たう / \ 急け / \、	*	*
161	天願の若按司思なひ出羽散山ふし	若按司出羽散山フシ	天願之若按司思ケイ出羽サン山ブシ
162	一 生れらぬむまれ	*	*
163	おめなひとワ身や	*	*
164	あさゆちのなみた	朝夕気ノ泪	*
165	袖よぬらち	*	*
166	若按司	千代松	天願若按司
167			
168	一 天願のなし子	*	*
169	千代松とやゆる、	*	*
170	按司添か事や	按司ソへ前事ヤ	*
171	謝名の太主に、	*	*
172	殺されよめしやうち	*	*
173	哀れあや前も	*	*
174	みたれ矢に当て	*	*
175	消よはてめしやうち、	*	*
176	二所の親に	*	*
177	捨られてをれハ、	*	*
178	あてなしの思なひ	*	*
179	朝夕鳴暮ち、	*	*
180	百すかひすかて	*	*
181	はなすことならぬ、	*	*
182	ワ肝きへ / \ と	*	*
183	互に袖しほて、	*	*
184	死にやんでやりしゆすか	*	*
185	親の敵かたき、	*	*
186	うたな徒に	*	*
187	死もまたならぬ、	*	*
188	久志の若按司や	*	*
189	ワか従やれば、	*	*
190	あれ頼てからに	*	*
191	忍ひ隠れやひ、	忍ビ隠トテ。	*
192	時節待受て	*	*
193	敵討んともて、	*	*
194	おめなひよつれて	*	*
195	忍て行ん、	*	*
196			
197			
198			
199			
200	天願の若按司云は并道行きんふし	千代松言葉並歌金武ブシ	*
201	一 久志の城元や	*	*
202	あかり表てももの、	*	*
203	てたあかるかたに	*	*
204	とまひていきゆん	*	*
205	乙鶴	思妹	*
206	一 やあ舎兄前よ、	*	*
207	長道のつかれ	*	*
208	足もひかれらぬ、	*	アシンヒカレテン
209	こまにあしよとて	*	*
210	しはし休ミやへら、	*	*
211	若按司	千代松	天願若按司
212	一 やあ思なひよ、	*	*
213	夜も暮ておれハ	*	*
214	こまをてやすまぬ、	*	*
215	あの村に便て	*	*
216	あしよやすま	*	*
217	たう / \ 気張れ / \、	*	*
218	同人	千代松	天願若按司
219	一 此宿の内に	*	*
220	ものよおんにゆけら、	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
221	宿主	*	*
222	一 たるかやゆら、	*	*
223	若按司	千代松	天願若按司
224	一 哀れ首里方の	*	*
225	者とやゝへすか、	*	*
226	闇の夜のくらさ	*	*
227	行先も見らぬ、	行先見ラン	*
228	御情に一夜	*	*
229	からちたはふれ、	*	*
230	宿主	*	*
231	一 やあいきやることやとて	*	*
232	童へあてなしの、	*	*
233	たゝふたりつれて	*	*
234	まかひいきゆか、	*	*
235	若按司	千代松	*
236	一 国頭に思事の	*	*
237	あてといきやへすか、	*	*
238	闇の夜のくらさ	*	*
239	行先も見らぬ、	*	*
240	頼て御情に	*	*
241	からちたはふれ、	*	*
242	宿主	*	*
243	一 はあ見れは此ふたり	一 イヤ見リハ此二人	*
244	只人やあらぬ、	*	*
245	慥か天願の	*	*
246	思子とやゆる、	*	*
247	あゝむちやる目のいちやさ	*	*
248	助けほしやあすか、	*	*
249	天願のなし子	*	*
250	隠ち置ものや、	*	*
251	一門やたにも	一門ヤダニヨ	一門ヤダニヨ
252	ひきはらふしまても、	*	*
253	切殺ちすてられんてやり	*	切殺チステリテヤリ
254	御触のあもの、	*	*
255	こまからや急ち	*	*
256	出てたはふれ、	*	*
257	若按司	千代松	*
258	一 やあ / \、	*	*
259	闇の夜のくらさ	*	*
260	雪霜や降ひ、	*	*
261	思なひもなけハ	*	*
262	肝もきもならぬ、	*	*
263	たんで御情に	*	*
264	からちたはふれ、	*	*
265	宿主	*	*
266	一 いや思子宿からち	一 イヤ思子宿カラキウチュテ	*
267	ワか命ちとよめ、	*	*
268	たう / \ 急ち	クマカラヤ急チ	*
269	出てたはふれ、	*	*
270	若按司	千代松	*
271	一 やあ / \、	*	*
272	宿主	*	*
273	一 いやならぬ / \、	*	*
274			
275			
276			
277			
278	子持ふし	千代松子持フシ	*
279	一 あきやう憂苦しや	*	*
280	おめなひとワ身や	*	*
281	巢なき鳥心	*	*
282	やとるかたなひらぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
283	冬の夜のよすか	冬ノ夜トヤスガ	*
284	雪霜にぬれて	*	*
285	なれぬ山路や		*
286	歩てあゆまらぬ		*
287	日本くら／＼と	*	*
288	なるか心気	*	*
289	乙鶴	思妹	*
290	一 やあ舎兄前よ、	*	*
291	のかすやき前や	*	*
292	あしまめきめしやうる、	*	*
293	若按司	千代松	*
294	一 やあ思なひよ、	*	*
295	此間のつかれ	*	*
296	足もひかれらぬ、	*	*
297	ワきもきえ／＼と	*	*
298	なやひ行ん、	*	*
299	乙鶴	思妹	*
300	一 やあやき前よ、	*	*
301	山路やくらさ	*	*
302	雪霜もふゆひ、	雪霜ヤ降へ。	*
303		舎兄前ト二人ヤ	
304		驚ンヤヨアモノ。	
305	御気張よめしやうれ	*	イヒ気張召リ
306	村に出やへら、	*	*
307	若按司	*	*
308	一 やあ思なひよ、	*	*
309	村便ててやり	村使カテテヤリ	*
310	哀れこの二人に、	*	*
311	片時も宿よ	*	*
312	からしゆすやをらぬ、	*	*
313	やあおめなひよ、		*
314	此間のつかれ	*	*
315	歩てあゆまらぬ、	*	*
316	頓て消果る	*	*
317	露の身とやすか、	*	*
318	闇の山路に	*	*
319	すてゝ先ならハ、	*	*
320	あてなしのおめなひや	アテナシノ思妹	*
321	いきやかしゆゝら、	*	*
322	乙鶴	思妹	*
323	一 やあ舎兄前よ／＼、	一 ヤア舎兄前ヨ	*
324	のかすやき前や	*	*
325	ものい声もなひらぬ、	*	*
326			
327			
328	東江ふし		*
329	一 あけいきやかなゆら		*
330	富盛大主	*	*
331	一 是や富盛大主、	*	*
332	天願のなし子	*	*
333	さかいしあらために、	*	*
334	夜昼もかけて	*	*
335	島々に行ん、	*	*
336	たう／＼	*	*
337	いそか／＼、	*	*
338	供二人	供	供兩人
339			
340	一 御供しやへら、	*	*
341	富盛	富盛大主	富盛大主
342	一 やあ、いきやることやとて	一 ヤアイキル事ヤトテ	*
343	童へあてなしの、	*	*
344	かにある山路に	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
345	声立て鳴か、	*	*
346	若按司	*	*
347	一 やあ / \、	*	*
348	哀れ此二人や	*	*
349	首里方の者よ、	*	*
350	国頭に思事の	*	*
351	あてといきやへすか、	*	*
352	闇の夜のくらさ	*	*
353	行先も見らぬ、	*	*
354	一夜明さてやり	*	*
355	こまに居ちをる、	クマニヲユル	コマニヲヨル
356	富盛	富盛大主	富盛大主
357	一 やあ供のきや、	*	*
358	見れば此ふたり	*	*
359	只人やあらぬ、	*	*
360	天願のなし子	*	*
361	疑やないらぬ、	疑ヤアラン	*
362	たう / \ 急ち	*	*
363	縄よかけれ、	*	*
364	供	*	*
365	一 押留やへて、	*	*
366	いきやか / \、	*	*
367	若按司	*	*
368	一 やあ / \ 天願の若按司や	*	*
369	謝名の太主の、	*	*
370	ゆるちゆるさらぬ	*	*
371	敵かたきやれハ	敵方ヨヤリバ	*
372	誠天願の	*	*
373	なし子ともやらハ、	*	*
374	縄もかけゆらハ	*	*
375	いか程もかけれ、	*	*
376	人まかいよめしやうち	*	*
377	罪科もなひらぬ、	*	*
378	此二人にのよて	*	*
379	縄よかけめしやいか、	*	*
380	みすく見分やひ	メスク御見カケテ	*
381	ゆるちたはふれ、	*	*
382	富盛	富盛大主	富盛大主
383	一 いや、まかひもあらぬ	一 イヤ。人違ンアラン	一 イヤ / \ 人違ンアラン
384	見すまちとをゆる、	見スマキドヲタル	*
385	おかたちよとまいる	*	*
386	道中とやたる、	道中トヤヨル	*
387	責縄のうるさ	*	*
388	にやへもこんせめれ、	*	*
389	供	*	*
390			
391	一 いきやか / \、	一 押留ヤヒテ。	*
392	按司	若按司	若按司
393	一 此涯よやれハ	*	*
394	隠ちかくさらぬ、	*	*
395	実よあらわれて	*	実ニアラワリテ
396	願よおんにゆけら、	*	*
397	誠天願の	*	*
398	若按司とやゆる、	*	*
399	これや守やかあ	*	*
400	なし子乙鶴よ、	*	*
401	運たらぬワ身と	*	*
402	列てきやる故に、	*	*
403	罪科もなひらぬ	*	*
404	なわよかゝゆすや、	*	縄ヨヤケヨスヤ
405	肝もきもならぬ	*	*
406	ことよ又たひもの、	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
407	ワ身や責よらは	*	*
408	いか程もせめれ、	*	*
409	あてなしのこれや	アテナシノアリヤ	*
410	ゆるちたはふれ、	*	*
411	富盛	富盛大主	富盛
412	一 いや推参なこといふな、	一 イヤ/\。推参ナ事云ナ	*
413		急チ引立リ	
414	供		*
415	一 さあ/\		*
416	たちやうれ/\、		*
417	若按司	*	天願若按司
418	一 あゝ口惜や残念、	*	*
419	義理情けしらぬ	*	*
420	野心なやつはら、	*	*
421	富盛	富盛大主	富盛大主
422	一 生さかしむさの	一 イヤ。生サカシンサノ	*
423	云ることのにくさ、	*	*
424	責縄のうるさ	*	*
425	にやへもこんせめれ、	*	*
426	供	*	*
427	一 拝留やへて、	*	*
428	いきやか/\、		*
429			
430	さあ/\		*
431	たちやうれ/\、		歩ミ/\
432	揚七尺ふし	七尺フシ	七尺フシ
433	一 のゝつみもなひらぬ、	*	*
434	敵の手にかゝて	*	*
435	あはれなまころし	*	*
436	されらとめハ	*	*
437	富盛	*	富盛大主
438	一 やあ供のきや、	*	*
439	島々よ廻て	*	*
440	里々よめくて、	*	*
441	此間の疲れ	*	*
442	足たるさあもの、	*	*
443	東恩納番所に	*	*
444	一夜明さ、	*	*
445	供	供ノチヤ	*
446	一 拝留やへて	*	*
447	富盛	*	富盛
448	一 たう/\いそか/\、	*	*
449	供		*
450	一 さあ/\急き/\、		*
451	同	供	供
452	一 さあ/\あゆめ/\、	*	*
453	久志	久志ノ若按司	久志若按司
454	一 出様ちやる者や	*	*
455	久志の若按司、	*	*
456	天願の按司や	*	*
457	御運つきはてゝ、	*	*
458	謝名の大主の	*	*
459	謀叛事巧て、	*	*
460	按司もをなちやらも	*	*
461	殺されよめしやうち、	*	*
462			
463			
464	はかなさや嫡子	*	*
465	千代松か事と、	*	*
466	野山から下り	野山カラ下テ	*
467	さかいさしゆんでやり	*	*
468	語ひへのあとて	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
469	なまとわなひきちやる、	*	*
470	あゝ口惜や残念、	*	*
471	やあ大主、	*	*
472	やあ砂田の子、	*	*
473	身にかへて千代松や	身ニ替テ千代松	*
474	助らんしゆもの、	*	*
475	片時も急ち	*	*
476	島々よめくて、	*	*
477	千代松か行衛	*	*
478	尋出ちからに、	*	*
479	敵討ることに	*	*
480	はからやひ給ふれ、	*	*
481	立川砂田	立川大主	*
482	一 拝留やへて、	*	*
483	立川	立川大主	*
484	一 や按司かなし、	一 ヤア按司加那志	一 ヤア按司加那志
485	此事やいへも	*	*
486	油断しや済ぬ、	*	*
487	いそち手分りに	*	*
488	島々よ廻て、	*	*
489	若按司の御行衛	*	*
490	たつねやひきやあへら、	*	*
491	久志の若按司	*	久志若按司
492	一 やあ大主、	*	*
493	此支度しちや	*	*
494	尋ねいやならぬ、	*	*
495	互にうちやつれ	*	*
496	忍ふ編笠に	*	*
497	ふかく顔かくち	*	*
498	急ち出ら、	*	*
499	立川大主		立川
500	一 をかんちゆめやへて、		*
501	久志の若按司	全人	久志若按司
502	一 やあ大主	*	*
503	やあ砂田のし、	*	*
504	手賦のことに	*	*
505	美里から越来、	*	*
506	具志川与那城	*	*
507	勝連に忍は、	*	*
508			
509			
510	立川	立川大主	*
511	一 たう / \	一 御急ちヨメシヤウリ	*
512	御供しやへら、	*	*
513		久志ノ若按司立川砂田三人道行口説	口説
514	一 命ち限りの出立に	一 命限ノ出テ立ヤ	*
515	有しさまかへ編笠に	*	*
516	深く面を隠してそ	*	*
517	久志の山路わけ出て	*	*
518	ゆけハ程なく金武の寺	*	*
519	御宮立寄伏し拜ミ	御宮立寄伏拜テ	*
520	南無や観音大菩薩	*	*
521	慈悲の切徳や千代松に	慈悲ノ心ヤ千代松ニ	慈悲之巧徳ヤ千代松ニ
522	急ち引合ちたはふれてやり	*	*
523	心に念し礼拝し	*	*
524	いさや / \ と立出て	*	*
525	伊芸や屋嘉村行過て	*	*
526	歩ミかねたる七日浜	*	*
527	石川走川打渡てゑひ	*	*
528	なまと美里の伊波村に	*	*
529	急きいそひて忍てきやる	*	*
530	砂田	砂田ノ子	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
531	一 され美里伊波村に	*	*
532	つきやへたん、	*	*
533	若按司	久志ノ若按司	久志若按司
534	一 たう／＼、	*	*
535	宿々の数や	*	*
536	残らすに忍は、	*	*
537	兩人	砂田	沙田子
538	一 拝留やへて、	* (砂田詞)	* (砂田詞)
539	附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある		
540	砂田	砂田ノ子	同人
541	一 され、天願の若按司と	一 サリ按司加那志。天願ノ若按司ト	*
542	思妹の前や、	*	思姉ノ前ト
543	富盛の	富盛大主ノ	富盛大主ノ
544	生捕にとやい、	*	*
545	東恩納番所に	*	*
546	宿かやいをんて、	*	*
547	此村の頭から	*	*
548	細くきちやへたん、	*	*
549	若按司	久志ノ若按司	久志若按司
550	一 あゝたうと、	*	*
551	願たこと叶て	*	*
552	今の引合や、	*	*
553	誠観音の	*	*
554	御助けとやゆる、	*	*
555	たう／＼油断しやすまぬ	*	*
556	急か／＼、	*	*
557	兩人	立川ノ大主	立川砂田
558		一 御急チヨメシヤウリ (立川詞)	
559	一 御供しやへら、	御供シヤビラ。(立川詞)	*
560	按司	久志ノ若按司	久志若按司
561	一 やあ／＼、	一 ヤア	*
562	東恩納番所につきやん、	*	*
563			
564	やあ、砂田の子、	*	*
565	事おへさしちや	*	*
566	大事あらむしゆもの、	*	*
567	謝名の使てやり	*	*
568	たしぬきやひ出す、	*	*
569	我身やこまなかひ	*	*
570	待受てをとて、	*	*
571	にくひ生やから	*	*
572	切殺ちすてら、	*	*
573	砂田	砂田ノ子	沙田
574	一 拝留やへて、	*	*
575	按司	久志ノ若按司	久志若按司
576	一 やあ立川の大主や、	*	一 ヤア立川大主ヤ
577	勝手から忍て	*	*
578	内にふミいやひ、	*	内ニフミイカイ
579	急ち千代松	*	*
580	列ていまふれ、	*	*
581	立川	*	*
582	一 拝留やへて、	*	*
583	砂田	砂田ノ子	沙田
584	一 やあ <sup>マツ</sup> 富成 <sup>マツ</sup> 大主、	*	*
585	按司かなし御支に	*	按司加那志御使ニ
586	くたてきやあへたん、	*	*
587	富盛	富盛大主	富盛大主
588	一 按司かなし御支や	*	一 按司加那志御使ヤ
589	たるかやゆら、	*	*
590	按司	久志ノ若按司	久志若按司

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
591	一 やあ富盛、	*	*
592	久志の若按司	*	*
593	しつちをため、	*	*
594	富盛	*	富盛大主
595	一 はあのう事かやゆら、	一 アノヲ事カヤユラ	*
596	砂田	砂田ノ子	久志若按司
597	一 いや、悪慾のむくひ	*	*(久志の若按司詞)
598	なまとおめしゆら、	*	*(久志の若按司詞)
599		イチヤガ/\	イチヤガ/\
600	天願の若按司	*	天願若按司
601	一 やあやき前よ、	*	*
602			
603			
604	東江ふし	*	*
605	一 かにある引合や	*	*
606	夢かやゆら	*	*
607	天願の若按司	*	天願若按司
608	一 やあやき前よ、	*	*
609	謝名の大王の	*	*
610	謀叛事巧て、	*	*
611	按司添もあや前も	*	*
612	殺されよめしやうち、	*	*
613	残る此二人も	*	*
614	ころさしゆんてやり、	*	*
615	野山から下り	野山カラ下テ	野山カラクダテ
616	さかひさしゆんであれば、	サカエサシユンテヤリ。	サガイサシユンテヤリ
617	頼む方をらぬ	頼モ方ナイラン	*
618	やとる方ないらぬ、	*	*
619	思なひとふたり	*	*
620	やき前よとまひて、	*	*
621	よしれゆる道中に	*	*
622	あのやからむさに、	*	*
623	生捕にとられ	*	*
624	殺されるいのち、	*	*
625	かにある御助や	*	*
626	夢かやゆら、	夢ガヤ、ビエラ	夢ガヤ、ビエラ
627	久志の若按司	*	久志若按司
628	一 やあ千代松	*	*
629	やあ乙鶴よ、	*	*
630	按司添もあや前も	*	*
631	御運つきはてゝ、	御運ツイハテゝ。	*
632			
633	謝名の手にかゝて	*	*
634	殺されよめしやうち、	*	*
635	あゝ口惜や残念、	*	*
636	やあ千代松、	*	*
637	なきやんてやりきやしゆか	*	*
638	互に思切ひ、	*	*
639	いそちわか城に	*	*
640	立戻てをとて、	*	*
641	時節待受て	*	*
642	敵よ打とらに、	敵ヨウタニ	*
643	天願の若按司	*	天願若按司
644	一 やあやき前よ、	*	*
645	よたしやあるやうに	*	*
646	御計よめしやうれ、	*	*
647	立川	立川大主	*
648	一 あゝ拝てなつかしやゝ	*	一 ア、拝テナツカシヤ
649	袖のなみた、	*	*
650	やあ若按司の前、	ヤア若按司ノ前ヨ	*
651	互に肝揃て	*	*
652	美腰たちすらハ、	*	*



No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
653	かたきうちとゆす	*	*
654	手の内とやゝへひる、	*	*
655			
656			
657	天願	天願ノ若按司	天願若按司
658	一 よたしやあるやうに	*	*
659	計らやひ給ふれ、	*	*
660	立川	立川ノ大主	*
661	一 をかんちゆめやへて、	*	*
662		久志ノ若按司	久志若按司
663	一 やあ千代松、	*	*
664	悪たくむやから	*	*
665	生て置ならぬ、	*	*
666	肝のあくまゝに	*	*
667	殺ち捨れ、	殺チ捨ラ。	*
668	富盛	富盛大主	*
669	一 やあ按司かなし、	*	*
670	願ことのももの	願事アモノ	*
671	おんにゆかて給ふれ、	*	*
672	けふからや心	*	*
673	引よ改て、	*	*
674	夜昼もミやたり	*	*
675	働かんしゆもの、	*	*
676	露の身の命ち	*	*
677	助けやひたはふれ、	*	*
678	久志の若按司	*	久志若按司
679	一 悪巧むゝさと	*	*
680	肝合ちをたる、	*	*
681	罪科のいきやし	*	*
682	ゆるちゆるされめ、	免チヨルサレカ	免チ免サレガ
683	やあ千代松、	*	*
684	たう / \ 急ち	急ち	*
685	殺ちすてれ、	*	*
686	富盛	富盛大主	富盛大主
687	一 あゝ、押かへし / \	*	*
688	おとろしやとあすか	*	*
689	頼て願ことや	*	*
690	おんにゆかて給ふれ、	*	*
691	謝名か悪欲の	*	*
692	罪深さあることや、	*	*
693	兼てからワ身も	兼テカラ我身ノ	*
694	しりづゝとやすか、	*	*
695	あれかしなさけも	*	*
696	受てをる故に、	*	*
697	捨てすてららぬ	*	*
698	たのてをやへたる、	*	*
699	あゝなまきれる命ち	*	*
700	御助のあらハ、	*	*
701	此御恩美拝や	*	*
702	いつし忘やへか、	*	*
703	慈悲よ御情けに	*	*
704	ゆるち給ふれ、	*	*
705	久志の若按司	*	*
706	一 やあ大主	*	*
707	やあ砂田の子、	*	*
708	富盛大主の	*	*
709	願ことよきけハ、	*	*
710	殺しゆすや忍はらぬ	*	*
711	肝苦しやあもの、	*	*
712	得と此事や	*	*
713	考て給ふれ、	*	*
714	立川	立川ノ大主	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
715	一 やあ按司かなし、	*	*
716	此やからむさの	*	*
717	今のい云葉や、	*	*
718	偽とやゆる	*	*
719	ゆるちすミやへらぬ、	*	*
720	急ち引立て	*	*
721	殺ちすてやへら、	*	*
722			
723			
724	久志の若按司	*	久志若按司
725	一 やあ大主、	*	*
726	人の生死に	*	*
727	かゝる願事や、	*	*
728	身の上に引当て	*	*
729	思らねはすまぬ、	*	*
730	富盛大主の	*	*
731	露の身の命ち、	*	*
732	慈悲よしちワ身の	*	*
733	助けゆる上に、	*	*
734	義理背ちいちやし	*	*
735	謀叛企ちゆか、	*	*謀反企ガ
736	此事やつく／＼と	*	*
737	了簡よされゝ、	了簡ヨシヤウリ	*
738	立川	立川ノ大主	*
739	一 あゝめしやいること、	*	*
740	命ちより重さある	*	*
741	ものやあやへらぬ、	*	*
742	やあ砂田の子、	*	*
743	仰すこと得と	*	*
744	考て見れハ、	*	*
745	是程の御慈悲	*	*
746	蒙てのうへに、	*	*
747	謀叛企ちゆる	*	*
748	肝の忍ハれめ、	*	*
749	たう／＼	*	*
750	つく／＼といやも	*	*
751	考てむてよ、	*	*
752	砂田	砂田ノ子	*
753	一 され按司かなし、	*	*
754	やあ大主、	*	*
755	こへな事俄に	*	*
756	決断やなやへらぬ、	決断ヤナラン	*
757	籠舎しめおきゆて先	*	*
758	考てミやへら、	*	*
759	久志の若按司	*	久志若按司
760	一 やあ砂田の子、	*	*
761	富盛大主の	*	*
762	命ち助けやひ、	*	*
763	敵討る計ひ	*	*
764	頼ほしやあもの、	*	*
765	是非に此事や、	是非共ニ此事ヤ	是非コ此事ヤ
766	我身にうちまかち呉れ、	我メニ打マカチクイリヨ	*
767	たう／＼疑てやすまぬ、	*	*
768	ワか下知のことに	*	*
769			
770	急ちときゆるす、	*	*
771	砂田	砂田ノ子	砂田子
772	一 拝留やへて、	*	*
773	富盛	富盛大主	富盛大主
774	一 あゝたうと、	一 ア、ウタウト	*
775	いのちたすかたる	*	*
776	此御恩美拝や、	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
777	胸におめ染て	*	*
778	肝に思留て、	*	*
779	夜昼もみやたり	*	*
780	肝もきも尽ち、	*	*
781	百とわれてふわれ	*	*
782	をかてすてやへら、	*	*
783	久志の若按司	*	久志若按司
784	一 やあ富盛大主、	*	*
785	謝名か悪欲の	*	*
786	罪深さあすや、	*	*
787	天願の按司の	*	*
788	御情けやふかく、	*	*
789	身に余るまでも	*	*
790	かふむやひをとて、	*	*
791	謀叛企ちやひ	*	*
792	生楽よ好む、	生楽ヨ好テ。	*
793	罪科のいきやし	*	*
794	凌きしのかれか、	*	*
795	やあ富盛大主、	*	ヤア富盛
796	天の御助けか	天ノ御助ニ	*
797	神の引合しか、	神ノ引合ニ	神ノ引合ニ
798	謝名か頭役	*	謝名ノ頭役
799	川崎のひやか、	*	*
800	謝名事と朝夕	*	*
801	酒と色好ミ、	酒ト色好テ。	*
802	百姓したけやひ	*	*
803	おこり日にまさて、	驕日マサテ。	*
804	御万人のまきり	*	*
805	なきよ恨めとて、	*	*
806	くりかへち本の	*	*
807	御代まちやいをもの、	*	*
808	時節【待受てを消して】計らやひ	*	*
809	謝名の首とやひ、	*	*
810	天願の御恥	*	*
811	すゝきあけらてやり、	*	*
812	文のかよハしに、	*	*
813	内通のあもの、	*	*
814	大主や急ち	*	*
815	立戻てからに、	*	*
816	川崎のひやと	*	*
817	ふたりかたらやひ、	*	*
818	敵討る計ひ	*	*
819	内通よされゝ、	*	*
820	富盛	富盛大主	富盛大主
821	一 をかん留やへて、	*	*
822	富盛	全人	全人
823	一 やあ立川の大主、	*	*
824	川崎のひやか	*	*
825	なまのことやれは、	*	*
826	謝名か首とゆす	*	*
827	疑やなひらぬ、	*	*
828	やあ大主	*	*
829	ワ身や立戻て	*	*
830	謝名に返答や、	*	*
831	天願の若按司や	*	*
832	久志の按司頼て、	*	*
833	万事敵討る	*	*
834	手組しゆんてやり、	*	*
835	かたひとますらハ	*	*
836	謝名の太主や、	*	*
837	さはき驚 <sup>フトロキヤ</sup> ひ	*	*
838	せめかける筈、	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
839	おの時立川の大主と	*	*
840	砂田の子二人や、	*	*
841	つわものよ引列て	*	*
842	金武のたけなかひ、	*	*
843	伏よ隠れとて	*	*
844	謝名か旗印、	*	*
845	伊芸屋嘉のあたり	*	*
846	走通る時 [欠]	ハシ通ル時分	走通ル時分
847	一時に出て	*	*
848	すゝむ道ふさき、	*	*
849	いきも [欠] さすに	イツモツカサスニ	イキムツカサズニ
850	平責よされゝ、	*	*
851	又川崎とワ [欠]	又川崎ト我身ヤ	又川崎ト我身ヤ
852	謝名かひきかへち	*	*
853	逃よ走ゆらハ、	*	*
854	うし [欠] 取かこて	後トリ囲テ	後ル取囲デ
855	殺ちすてら、	*	*
856	立川	立川大主	*
857			
858			
859			
860			
861	一 やあ富盛大主、	*	*
862	なまのことやれハ	*	*
863	誇らしやとあゆる、	*	*
864	謝名か首とゆす	*	*
865	疑やなひらぬ、	*	*
866	頼て此事や	*	*
867	計らやい給ふれ、	*	*
868			
869			
870			
871			
872			
873			
874			
875			
876			
877			
878			
879			
880	久志	久志ノ若按司	*
881	一 やあ富盛大主、	*	*
882	今のことやれハ	*	*
883	ほこらしやとあゆる、	*	*
884	川崎のひやと	*	*
885	ふたりかたらやひ、	*	*
886	細々のことや	*	*
887	内通よされゝ	*	*
888	富盛	富盛大主	富盛
889	一 をかんちゆめやへて、	*	*
890	同人	*	*
891	一 やあ按司かなし、	*	*
892	此事やいへも	*	*
893	油断しや済ぬ、	*	*
894	たう / \	*	*
895	御暇よしやへら、	*	*
896	久志	久志ノ若按司	久志ノ若按司
897	一 たう / \	*	*
898	肝も肝添て	*	*
899	働きやい給ふれ	*	*
900	富盛	富盛大主	富盛

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
901	一 拝留やへて、	*	*
902	砂田	砂田ノ子	*
903	一 され按司かなし、	*	*
904	富盛大主の	*	*
905	謝名の恩情や、	*	*
906	かそる数しらぬ	*	*
907	身に請てをれハ、	*	*
908	たとひ寸々に	*	*
909	きざまれやしちも、	*	*
910	謝名にうち背ち	*	*
911	のよてくたやへか、	*	*
912	今のいこと葉や	*	*
913	偽とあゆる、	偽トヤヨル	偽トヤヨル
914	急ち追付て	急チ追カハテ	急チ追カヘチ
915	殺ちすてやへら、	*	*
916	立川	立川大主	*
917	一 はあ / \ しはしまて、	*	一 ハアシハシマテ
918	やあ砂田の子、	*	*
919	富盛大主の	*	*
920	偽の上に、	*	*
921	ぬきかへちうちゆる	*	*
922	御計とやゆる。	*	*
923	久志	久志ノ若按司	久志ノ若按司
924	一 やあ、砂田の子、	*	*
925	大主のいやれること	*	*
926	富盛大主の、	*	*
927	たくてをることや	*	*
928			
929	合点とやゆる、	*	*
930	つわものゝまきり	*	*
931	金武嶽にやらち、	*	*
932	千代松とワ身や	*	*
933	城元に残り、	*	*
934	打捕んでやり	*	*
935	たくてをることや、	*	*
936	い言葉の色に	*	*
937	あらわれてをてと、	見ワリテヲトテ	*
938	偽の上に	*	*
939	計ことめくらしやひ、	*	*
940	ぬきかへち討る	*	*
941	分別とやゆる、	*	*
942	又川崎のひやゝ、	*	*
943	人に勝れとる、	*	人ニスグレトル
944	つわものよやれハ、	*	*
945	跡々の障り、	*	*
946	あれ生ておきや	*	*
947	謝名に打ちゆる	*	*
948	計ひのならぬ、	計ヤナラン	ハカラエヤナラン
949	此事や一期	此事ヨ一期	此事ヨ一期
950	気にかゝてをてと、	*	*
951	謝名の手にかけて	*	*
952	殺さゝんともて、	*	殺サラントモチ
953	富盛大主	*	*
954	たしぬきにぬきやる、	*	*
955	砂田	砂田ノ子	*
956	一 はあ今の御計の	一 ア、今ノ御計ノ	*
957	あることや我身の	*	*
958	兼て夢程も	*	*
959	しらぬあやへたん	*	*
960	立川	立川ノ大主	*
961	一 やあ按司かなし	*	*
962	此事やいへも	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
963	油断しや済ぬ	*	*
964	片時も急ち	*	*
965	城に立戻て	*	*
966	敵よ待うける	*	敵ユ打トヨル
967	計しやへら	*	*
968	久志の若按司	*	久志若按司
969	一 たう / \ 急か / \	*	*
970	謝名	*	謝名大主
971	一 やあ平田の子	*	*
972	川崎のひやや	*	*
973	敵と肝合ち	*	*
974	謀叛企ちやい	*	*
975	内通よしゆる族	*	*
976	生て置ならぬ	*	*
977	こんしまてきやうれ	*	*
978	平田	平田ノ子	平田子
979	一 拝留やへて	*	*
980	同人	平田ノ子	*
981	一 御万人のまきり	*	*
982	たによ聞留れ	*	*
983	此やからむさと	*	*
984	御主人に背ち	*	*
985			
986	謀叛しゆる科に	*	*
987	殺さしよめしやいん	*	*
988	たうたういそけ / \	*	*
989	川崎	川崎ノヒヤ	*
990	一 やあ平田の子	*	*
991	平田	平田ノ子	*
992	一 いやものことのおほさ	*	*
993	急け / \	急ガ / \	*
994		全人	
995	たう / \	*	*
996	居やうれ / \	*	*
997		全人	全人
998	一 され川崎のひや	*	*
999	せまてきやへたん	*	シバテキヤアヒタン
1000		謝名	謝名大主
1001	一 やあ川崎	*	*
1002	いきやることやとて	*	*
1003	ワか恩義わすて	*	*
1004	敵と肝合ち	*	*
1005	謀叛企ちゆか	*	*
1006	川崎	川崎ノヒヤ	*
1007	一 やあ按司かなし	*	*
1008	御主人の御恩	*	*
1009	山よりも高く	*	*
1010	海よりも深く	*	*
1011			
1012	思しゆるワ身の	*	*
1013	のよて悪たくて	*	*
1014	謀叛企ちゆか	*	*
1015			
1016			
1017			
1018			
1019			
1020			
1021	神仏かけて	*	*
1022	偽やあやへらぬ	*	*
1023	頼てつく / \ と	*	*
1024	思てたはふれ	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
1025	謝名	謝名ノ大主	謝名大主
1026	一 いや胸に悪巧て	*	*
1027	口に花さかそ	口ヤ花咲チ	口ヤ花咲チ
1028	島国のやから	*	*
1029	生て置ならぬ	*	*
1030	急ち引立て	*	*
1031	殺ちきやうれ	*	*
1032	川崎	川崎ノヒヤ	*
1033	一 あゝ口惜や残念	*	*
1034	やあ富盛大主	*	*
1035	落る此首や	*	*
1036	おしさ又ないらぬ	*	*
1037	あにあるてきかたに	*	*
1038	うちよたまされて	*	*
1039	主人かたくつら	*	*
1040	あまた御万人も	*	*
1041	頓てやミ/\と	*	頓テヤミ/\ニ
1042	なゆらとめは	*	*
1043	謝名	謝名ノ大主	*
1044	一 いや押かへし/\	*	*
1045	過云しゆるやから	*	*
1046	逆も一刀に	*	*
1047	切殺ちすてら	*	*
1048	平田	平田ノ子	*
1049	一 やあ按司かなし	*	*
1050	謀叛しゆるやから	*	*
1051	殺ちすてめしやうち	*	*
1052	ワすた供つれも	*	*
1053	誇らしやとあやへひる	*	*
1054	謝名	*	*
1055	一 やあ大主	*	*
1056	やあ平田の子	*	*
1057	久志の若按司や	*	*
1058	すくれもてやり	*	*
1059	世界取沙汰に	世界ノ取沙汰ニ	*
1060	肝さハきをたん	*	*
1061	はあ思たすと替て	ア、思タ事叶テ	*
1062	今のことやれハ	*	*
1063	一 鼓にうちとゆす	一刀ニ打取ス	*
1064	疑やなひらぬ	*	*
1065	けふ明る廿日	*	*
1066	よかる日よれハ	ヨカル日ヨヤクト	ヨカル日ニヤクト
1067	久志の城元に	*	*
1068	軍押寄て	*	軍打寄テ
1069	二人の按司打果ち	*	*
1070	我肝やすま	*	*
1071		富盛大主	富盛大主
1072		一 拝留ヤヒテ。	一 拝留ヤヒテ
1073	富盛	全人	全人
1074	一 やあ按司かなし	*	*
1075	久志の若按司と	*	*
1076	約速のことに	*	*
1077	内通の書状	*	*
1078	かきよ調やい	*	*
1079	急ち夜通しに	*	*
1080	もたちやらしやへら	モタチキヤヒラ	*
1081	謝名	*	*
1082	一 たう/\急け/\	*	*
1083	久志の若按司	*	*
1084	一 やあ千代松	*	*
1085	富盛大主の	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
1086	只今の <sup>マ</sup> 丈や	只今ノ使ヤ	只今ノ使ヤ
1087	けふ <sup>マ</sup> 明る廿日	*	*
1088	軍 <sup>マ</sup> 寄ゆもの	*	*
1089	約 <sup>マ</sup> 速のことに	*	*
1090	金武の嶽 <sup>マ</sup> なかい	*	*
1091	伏 <sup>マ</sup> 勢よしちをて	*	伏勢シチヲテ
1092	待 <sup>マ</sup> 請れちやり	*	*
1093	内 <sup>マ</sup> 通の文や	*	*
1094	是 <sup>マ</sup> とやゆる	*	*
1095	天願の若 <sup>マ</sup> 按司	*	天願若按司
1096	一 <sup>マ</sup> やあやき前よ	*	*
1097	今 <sup>マ</sup> のことあれハ	*	*
1098	誇 <sup>マ</sup> らしやとあゆる	*	*
1099	よたしやあるやうに	ヨタシ有様ニ	*
1100	御 <sup>マ</sup> 計よめしやうれ	*	*
1101	同人		*
1102	一 <sup>マ</sup> やあ大主		*
1103	文立川の <sup>マ</sup> 大主江渡す		
1104	立川	立川大主	*
1105	一 <sup>マ</sup> やあ按司かなし	*	*
1106	此文よ見れハ	*	*
1107	御 <sup>マ</sup> 計のことに	*	*
1108	川崎のひや <sup>マ</sup>	*	*
1109	大 <sup>マ</sup> 主の手にかゝて	*	*
1110	殺 <sup>マ</sup> されよしちやす	*	*
1111	疑 <sup>マ</sup> やなひらぬ	*	*
1112	はあ川崎のひや <sup>マ</sup> か		*
1113	今 <sup>マ</sup> のことやれハ		*
1114	かたきうちとゆる	*	*
1115	手の内とや <sup>マ</sup> へひる	*	*
1116	久志の若 <sup>マ</sup> 按司	*	久志若按司
1117	一 <sup>マ</sup> やあ大主	一 ヤアノ大主	*
1118	急 <sup>マ</sup> ちおれノ	*	*
1119	手組云 <sup>マ</sup> 渡さ	*	*
1120	立川	立川大主	*
1121	一 <sup>マ</sup> 拝留やへて	*	*
1122	久志の若 <sup>マ</sup> 按司	*	久志若按司
1123	一 <sup>マ</sup> やあ伊豆味下こうりや	*	*
1124	金武の嶽 <sup>マ</sup> なかひ	*	*
1125	薄 <sup>マ</sup> 煙立て	*	*
1126	伏 <sup>マ</sup> 勢の様子	*	*
1127	敵 <sup>マ</sup> に見せれ	*	*
1128	いつミ下 (广+東) 理	*	伊豆味
1129	一 <sup>マ</sup> 拝留やへて	*	*
1130	按 <sup>マ</sup> 司	久志ノ若按司	久志若按司
1131	一 <sup>マ</sup> やあ砂田の子や	*	*
1132	本門の <sup>マ</sup> 東	本門ノ	*
1133	山中にふ <sup>マ</sup> かく	*	*
1134	伏 <sup>マ</sup> よ隠れとて	隠リドテ	*
1135	謝 <sup>マ</sup> 名の <sup>マ</sup> 大主の	謝名カ	*
1136	東原にの <sup>マ</sup> そて	東リ原ノソテ	*
1137	逃 <sup>マ</sup> よ走ゆらハ	*	*
1138	一 <sup>マ</sup> 時に出て	*	*
1139	殺 <sup>マ</sup> ちすてれ	*	*
1140	砂 <sup>マ</sup> 田	砂田ノ子	*
1141	一 <sup>マ</sup> をかんちゆめやへて	*	*
1142			久志若按司
1143	一 <sup>マ</sup> やあ浜崎のひや <sup>マ</sup>	一 ヤア浜崎ノヒヤ	*
1144	久志 <sup>マ</sup> 嵩に深く	*	*
1145	ふ <sup>マ</sup> しよかくれとて	*	*
1146	謝 <sup>マ</sup> 名か西宿に	*	*



No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
1147	逃よ走ゆらは	*	*
1148	すゝむ道ふさき	*	*
1149	殺ち捨れ	*	*
1150	浜崎	浜崎ノヒヤ	*
1151	一 拝留やへて	*	*
1152	按司	久志ノ若按司	久志若按司
1153	一 やあ外間の子や	*	*
1154	城の南の	*	*
1155	小林に深く	*	*
1156	伏よ隠れとて	*	*
1157	謝名か軍勢の	*	*
1158	城の門内に	*	*
1159	ふミ入ゆる時分	*	*
1160	相図のかねのならば	*	*
1161	うしろからせめれ	*	*
1162	外間	※不明	外間子
1163	一 をかむちゆめやへて	*	*
1164	按司	久志ノ若按司	久志若按司
1165	一 やあ立川の大主や	*	*
1166	本門の内に	*	*
1167	忍ひ隠れとて	*	*
1168	謝名か門内に	*	*
1169	入ゆす見掛らハ	*	*
1170	七重八重かこて	*	*
1171	殺ち捨られゝ	殺チ捨リ	*
1172	立川	立川大主	*
1173	一 拝留やへて	*	*
1174	按司	久志ノ若按司	久志若按司
1175	一 また千代松と我身や	*	*
1176	時の声よきかは	*	*
1177	物見走登て	*	*
1178	敵の軍勢	*	*
1179	さそへ入ら	*	*
1180	惣人数	*	*
1181	一 拝留やへて	*	*
1182	按司	久志ノ若按司	久志若按司
1183	一 やあ千代松	*	*
1184	手賦の落ち	*	*
1185	誇らしやとあゆる	*	*
1186	習とたる手並	*	*
1187	振立て見せれ	*	*
1188	天願の若按司		
1189	一礼		
1190	揚作田ふし	揚ツクタンブシ	アゲツクテンフシ
1191	一 朝夕たしなたる	*	*
1192	長刀の刃さき	*	*
1193	てきのくひすちに	*	*
1194	たたなおきゆめ	*	*
1195	久志	久志若按司	久志若按司
1196	一 やあ千代松	*	*
1197	振立すみれハ	*	*
1198	嬉しさとあゆる	*	*
1199	城に立戻て	*	*
1200	敵よまたに	*	*
1201			
1202			
1203	天願		天願若按司
1204	一 一礼		一 ウヲ
1205			
1206	謝名	*	謝名大主
1207	一 やあ / \	*	*
1208	時うつち済ぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
1209	急か / \	*	*
1210	富盛	*	富盛
1211	一 御急よめしやうれ	*	*
1212	謝名	*	*
1213	一 はあ金武のたけミれハ	*	*
1214	うすけふりたちゆん	*	*
1215	伏勢の様子	*	*
1216	疑やないらぬ	*	*
1217	たう / \ 急か / \	*	*
1218			
1219			
1220			
1221	富盛	*	富盛
1222	一 はあ久志の若按司の	*	*
1223	運の末なたら	*	*
1224	ワか謀ことに	*	*
1225	心うちゆるち	*	*
1226	あれ / \ 御目掛れ	*	*
1227	本門も開ちをやへいん	*	*
1228			
1229			
1230	急ち走寄ひ	*	*
1231	時の声よあけら	*	時ノ声ヨアゲリ
1232			
1233			
1234	同人	*	*
1235	一 やあ久志の若按司	*	*
1236	富盛大主の	*	*
1237	偽にいちやる	*	*
1238	い言葉や誠	*	*
1239	実ともてをたら	*	*
1240	快く急ち	*	*
1241	首よ渡す	*	*
1242	久志	久志ノ若按司	久志若按司
1243	一 やあ富盛大主	*	*
1244	偽の巧ミ	*	*
1245	夢程もしらぬ	*	*
1246	つわものゝまきり	張モノマジリ	*
1247	金武嵩にやらち	金武ノ嵩ヤラチ	*
1248	此城の内や	*	*
1249	千代松とふたり	*	*
1250	たゝかはぬすれハ	*	*
1251	力及はらぬ	*	*
1252	あゝ口惜や残念	*	*
1253		謝名	謝名
1254	一 やあ / \ 急ち責いやい	*	*
1255	切殺ちすてら	殺チ捨ラ	*
1256	惣人数	*	*
1257	一 ひやあひやい	一 ヒヤエヤエ	*
1258			
1259			
1260			
1261			
1262	久志	久志ノ若按司	久志若按司
1263	一 やあ謝名の犬主	*	*
1264	此按司のはかりこと	*	*
1265	しらぬあため	知チヲタメ	*
1266	謝名	*	謝名犬主
1267	一 あゝ謝名ほどの名将も	*	*
1268	運の末なたら	*	*
1269	たしぬきにぬかれ	*	*
1270	川崎もころち	*	*

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
1271	おかたちか手にかゝて	ウガガ手ニカゝテ	*
1272	生捕にとられ	*	*
1273	武士の身の恥辱	*	*
1274	面目もなひらぬ	*	*
1275	たう / \ 快く急ち	タウ / \ 急チ快ク	*
1276	首よとれ	*	*
1277	久志	久志ノ若按司	久志若按司
1278	一 やあ富盛	一 ヤア富盛大主	*
1279	十度ときゆるち	一度トキヨルキ	*
1280	十度生とられ	二度生捕ドラリ	*
1281	此按司に向て	*	*
1282	弓ひきゆんでやり	*	*
1283	巧である褒美	*	*
1284	殺さゝんしゆもの	*	*
1285	ありかたさ思て	*	*
1286	あの世とつけ	*	*
1287	富盛	富盛大主	富盛
1288	一 あゝ武運つき果て	*	*
1289	生捕にとられ	*	*
1290	武士の身の名折	*	*
1291	面目もなひらぬ	*	*
1292	謝名	謝名大主	謝名大主
1293	一 いやものことのおほさ	一 イヤモノゴトンイラン	一 イヤモノゴトンイラン
1294	快く急ち	*	*
1295	首よ渡す	*	*
1296	天願	天願ノ若按司	天願若按司
1297	一 此やからむさや	*	*
1298	見れハやすまらぬ	*	*
1299			
1300			
1301	久志	※不明	久志若按司
1302	一 はあ / \ しはしまて	一 ア、シバシマテ	一 ア、シハシマテ
1303	やあ千代松	*	*
1304	このやからむさの	*	*
1305	悪欲の罪や	*	*
1306	一刀にしちや	*	*
1307	罪あさゝあもの	*	*
1308	久志浜に引出ち	*	*
1309	旗門にあけれ	嶽門ニアケリ	嶽門ニアゲラ
1310	浜崎国吉		*
1311	一 拝留やへて		一 ウヲ
1312	久志	久志ノ若按司	*
1313	一 やあ浜崎のひや	*	*
1314	やあ国吉の子	*	*
1315	急ち引立て	*	*
1316	籠舎しめれ	籠舎シメサセウリ	*
1317	両人		*
1318	一 拝留やへて	*	*
1319	立川	立川ノ大主	*
1320	一 やあ / \	*	*
1321	おれ / \ の番手	*	*
1322	油断するな	*	*
1323	浜崎国吉		両人
1324	一 をかんちゆめやへて		*
1325	同人		浜崎国吉
1326	一 さあ / \ たちやうれ / \		*
1327	同人		*
1328	一 さあ / \ いそけ / \		*
1329			
1330			
1331			
1332			

No.	尚家本組踊集	東京教育大学本	恩河本小祿御殿本
1333	天願	天願ノ若按司	天願若按司
1334	一 やあやき前よ	*	*
1335	やあ大主	*	*
1336	互に肝揃て	*	*
1337	働きやる故に	*	*
1338			
1339	親の敵かたき	*	*
1340			
1341	討捕るけふや	*	*
1342			
1343			
1344	すきし二所も	*	*
1345	嬉しやめしやいら	*	*
1346	久志	久志若按司	*
1347	一 やあ / \	*	*
1348	かたき討捕る	敵ユ打捕ル	*
1349	けふの誇らしや	*	今日ノ誇ラシヤヤ
1350	押つれて互に	*	*
1351	踊て戻ら	*	*
1352			
1353			
1354			
1355			
1356		浜崎ヒヤ	
1357		一 サア / \ 立キウリ / \	
1358		国吉ノ子	
1359		一 サア / \ 急ゲ / \	
1360	しやうんかないふし	歌立雲フシ	*
1361	一 かたきうちとたる	一 敵ヨ打捕タル	*
1362	けふの誇らしや	*	*
1363	天のしら雲に	*	*
1364	のほるはかり	*	*
1365		同フシ	
1366		一 今日ノ誇サヤ	
1367		物ニ譬ラハシ	
1368		押列テ互ニ	
1369		躍テ戻ラ。	
1370		久志若按司終	天願之若按司終
1371			桃原村
1372			恩河朝祐
1373			
1374			
1375			

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
1	天願之若按司敵討	久志之若按司	[欠]
2	着付謝名之大主髪錦之入道頭巾向に 金磨之龍角有ル水色緞子衣装羅陳羽 織錦に而飭有ル太刀刀大団足袋脚胖		[欠]
3	富盛大主髪黒縹子入道頭巾向ニ金欄 に而飭有ル黒袖衣装青縹子広袖羽織 刀脚胖足袋		[欠]
4	川崎之ひや平田の子髪黒西洋布入道 頭巾黒木綿単衣裳脚胖足袋		[欠]
5	ちやうちやく持かむらふ黒木綿単衣 脚胖足袋		[欠]
6	供髪黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳 脚胖足袋差繩		[欠]
7	天願の若按司髪半向頭巾金花并金銀 水引はさら糺綸子衣裳糺西洋布足袋 中入より錦入道頭巾錦に而飭有ル羅 陳羽織錦に而飭有ル脚胖足袋扇子持 出ル但戦之時甲胸当長刀		[欠]
8	同人妹板メ縮緬ネ同衣ひさ取裙糺西 洋布足袋		[欠]
9	宿元謝名之大主供同断		[欠]
10	久志之若按司髪錦之入道頭巾向ニ金 磨之龍角飭有ル青縹子衣裳羅陳羽織 錦に而飭有ル刀脚胖足袋但中入より 青縹子広袖羽織雨笠杖陳賦之時髪錦 之入道頭巾羅羽織扇子戦之時甲胸当		[欠]
11	立川の大主髪黒縹子入道頭巾黒袖衣 裳黒縮緬広袖羽織脚胖足袋		[欠]
12	砂田の子黒西洋布入道頭巾黒木綿衣 裳脚胖足袋但中入之時より立川砂田 黒縮めん広袖羽織編笠杖		[欠]
13	浜崎のひや伊豆味下(广+東)裏外 間の子金の磨持ちちやうちやく持謝名 の大主供支度同断		[欠]
14		謝名ノ大主	[欠]
15	一 出様ちやる者や、	*	[欠]
16	天願の按司の	*	[欠]
17	頭役しゆたる	*	[欠]
18	謝名の大主、	*	[欠]
19	あゝ浅ましや此身	*	[欠]
20	黒髪に雪の、	*	[欠]
21	積るとしまても	*	[欠]
22	人の下知受て、	*	[欠]
23	朝夕胸内に	*	[欠]
24	煙りたかよいか、	*	[欠]
25	主人打果ち	*	[欠]
26	按司の身になやひ、	*	[欠]
27	夢の間の浮世		[欠]
28	楽すらんともて、		[欠]
29	色欲よ進め		[欠]
30	明間うかゝやひ、		[欠]
31	討捕んでやり	*	[欠]
32	様々にしやすか、	*	[欠]
33	聞立もすらぬ	*	[欠]

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
34	義理守てをれハ、	*	[欠]
35	願事や叶ぬ	*	[欠]
36	気の毒とやたる、	*	[欠]
37	あゝむちやる三日に	去ル三日ニ	[欠]
38	原遊すゝめやひ、	*	[欠]
39	戻る道中に	*	[欠]
40	伏勢よ置て、	伏勢ヨシキヨテ。	[欠]
41	思たこと按司や	*	[欠]
42	うちすまぢあすか、	*	[欠]
43	城内になし子	*	[欠]
44	跡形もなひらぬ、	*	[欠]
45	気の毒とやゆる	*	[欠]
46	気障とやゆる、	*	[欠]
47	やあ富盛大主	*	[欠]
48	川崎のひや平田の子、	*	[欠]
49	三人	*	[欠]
50	一 ふう	*	[欠]
51	謝名	謝名ノ大主	[欠]
52	一 やあ、思たこと叶て	*	[欠]
53	按司も打果ち、	*	[欠]
54	楽も楽いらて	*	[欠]
55	誇らしやとあすか、	*	[欠]
56	城内になし子	*	[欠]
57	あとかたもなひらぬ、	*	[欠]
58	又久志の若按司や	*	[欠]
59	天願の別れ、	*	[欠]
60	嫡家ふるふされ	*	[欠]
61	たゝやてやをらぬ、	*	[欠]
62	天願の若按司	*	[欠]
63	助けやひふたり、	*	[欠]
64	命ちふり捨て	*	[欠]
65	弓ひきゆらとめハ、	*	[欠]
66	気障とやゆる	*	[欠]
67	事障たひもの、	*	[欠]
68	先久志の城元に	*	[欠]
69	軍押寄すて	*	[欠]
70	急ち若按司	*	[欠]
71	打果ちからに、	*	[欠]
72	天願のなし子	*	[欠]
73	さかひし改て、	*	[欠]
74	根葉も茹捨て	*	[欠]
75	我肝やすま、	*	[欠]
76	三人	*	[欠]
77	一 拝留やへて、	*	[欠]
78	平田	平田ノ子	[欠]
79	一 はあめしやいること、	一 ア、召ル事。	[欠]
80	あのふたり世界に	*	[欠]
81	いきて置からや、	*	[欠]
82	跡々の障り	*	[欠]
83	御気遣とやゆる、	*	[欠]
84	片時も急ち	*	[欠]
85	打とやいきやへら、	*	[欠]
86	富盛	富盛大主	[欠]
87	一 やあ按司かなし、	*	[欠]
88	久志の若按司や	*	[欠]
89	世界に立ぬけて、	*	[欠]
90	義理も分別も	*	[欠]
91	人並やあらぬ、	*	[欠]
92	又あの大親	*	[欠]
93	立川の大主と	立川ノ大主	[欠]
94	砂田の子二人や、	*	[欠]
95	世間沙汰される	*	[欠]

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
96	つハものやれば、	*	[欠]
97	自由に打捕ゆる	*	[欠]
98	敵や又あらぬ、	*	[欠]
99	天願の城	*	[欠]
100	討よふろふしやい、	*	[欠]
101	御万人の心	*	[欠]
102	おてつかぬ内に、	*	[欠]
103	城よ立出て	*	[欠]
104	城よはなれやひ、	*	[欠]
105	遙々と久志に	*	[欠]
106	軍押て、	軍押寄テ	[欠]
107	もしか此城に	*	[欠]
108	一大事のあらハ、	*	[欠]
109	百悔ミしちも	*	[欠]
110	益や又なひさめ、	益ヤ又無ラン	[欠]
111	今程や城に	*	[欠]
112	堅打守て、	深ク打守て	[欠]
113	時節計ら <sup>ママ</sup> やらひ	時節計ヤイ	[欠]
114	軍寄やへら、	*	[欠]
115	川崎	川崎ノ比屋	[欠]
116	一 やあ按司かなし、	*	[欠]
117	久志の城元に	*	[欠]
118	軍寄ゆすや、	*	[欠]
119	大主のいやれること	*	[欠]
120	先やミにめしやうち、	*	[欠]
121	急ち島々に、	*	[欠]
122	廻文よ通ち、	*	[欠]
123	天願のなし子	*	[欠]
124	生捕にとやひ、	*	[欠]
125	久志の若按司の	*	[欠]
126	降参よしゆらハ、	*	[欠]
127	天願のなし子	*	[欠]
128	かへち渡さてやり、	*	[欠]
129	久志の若按司に	*	[欠]
130	文よつかハさは、	*	[欠]
131	なく / \ もこまに	*	[欠]
132	くたてこんしゆもの、	*	[欠]
133	おの時にふたり	*	[欠]
134	ころちすてやへら、	*	[欠]
135		謝名ノ大主	[欠]
136	一 やあ大主	*	[欠]
137	やあ川崎のひや、	ヤア川崎。	[欠]
138	云ることよ聞ハ	*	[欠]
139	ことハりとやゆる、	*	[欠]
140	急ち手わかいに	*	[欠]
141	島島よ廻て、	*	[欠]
142	天願のなし子	*	[欠]
143	からめ出すものや、	*	[欠]
144	とり位も付て	*	[欠]
145	島知行も呉ゆん、	*	[欠]
146	若隠ち置ものや、	*	[欠]
147	一門やたにも	*	[欠]
148	引はらふしまても	*	[欠]
149	生責よしゆんて	*	[欠]
150	堅く云渡ち、	*	[欠]
151	片時もはやく	*	[欠]
152	からめ出ちくう、	捕メ出チ来ウリ。	[欠]
153	富盛	富盛大主	[欠]
154	一 押留やべて、	*	[欠]
155			
156			
157			

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
158			
159	謝名	謝名ノ大主	[欠]
160	一 たう / \ 急げ / \、	*	[欠]
161	天願の若按司思なひ出羽散山ふし	若按司出羽散山節	[欠]
162	一 生れらぬむまれ	*	[欠]
163	おめなひとワ身や	*	[欠]
164	あさゆちのなみた	*	[欠]
165	袖よぬらち	*	[欠]
166	若按司	千代松	[欠]
167			
168	一 天願のなし子	*	[欠]
169	千代松とやゆる、	*	[欠]
170	按司添か事や	*	[欠]
171	謝名の太主に、	*	[欠]
172	殺されよめしやうち	*	[欠]
173	哀れあや前も	*	[欠]
174	みたれ矢に当て	*	[欠]
175	消よはてめしやうち、	消果ヨ召チ	[欠]
176	二所の親に	*	[欠]
177	捨られてをれハ、	*	[欠]
178	あてなしの思なひ	当テ無シノ思妹ヤ	[欠]
179	朝夕鳴暮ち、	*	[欠]
180	百すかひすかて	*	[欠]
181	はなすことならぬ、	*	[欠]
182	ワ肝きへ / \ と	*	[欠]
183	互に袖しほて、	*	[欠]
184	死にやんでやりしゆすか	*	[欠]
185	親の敵かたき、	*	[欠]
186	うたな徒に	打取ナ徒ラニ	[欠]
187	死もまたならぬ、	*	[欠]
188	久志の若按司や	*	[欠]
189	ワか従やれば、	*	[欠]
190	あれ頼てからに	*	[欠]
191	忍ひ隠れやひ、	*	[欠]
192	時節待受て	*	[欠]
193	敵討んともて、	*	[欠]
194	おめなひよつれて	*	[欠]
195	忍て行ん、	*	[欠]
196			
197			
198			
199			
200	天願の若按司云は并道行きんふし	千代松言葉並金武節	[欠]
201	一 久志の城元や	*	[欠]
202	あかり表てもの、	*	[欠]
203	てたあかるかたに	*	[欠]
204	とまひていきゆん	*	[欠]
205	乙鶴	*	[欠]
206	一 やあ舎兄前よ、	*	[欠]
207	長道のつかれ	*	[欠]
208	足もひかれらぬ、	*	[欠]
209	こまにあしよとて	*	[欠]
210	しはし休ミやへら、	*	[欠]
211	若按司	千代松	[欠]
212	一 やあ思なひよ、	*	[欠]
213	夜も暮ておれハ	*	[欠]
214	こまをてやすまぬ、	*	[欠]
215	あの村に便て	*	[欠]
216	あしよやすま、	*	[欠]
217	たう / \ 気張れ / \、	*	[欠]
218	同人	千代松	[欠]
219	一 此宿の内に	*	[欠]



No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
220	ものよおんにゆけら、	*	[欠]
221	宿主	*	[欠]
222	一 たるかやゆら、	*	[欠]
223	若按司	千代松	[欠]
224	一 哀れ首里方の	*	[欠]
225	者とやゝへすか、	*	[欠]
226	闇の夜のくらさ	*	[欠]
227	行先も見らぬ、	*	[欠]
228	御情に一夜	*	[欠]
229	からちたはふれ、	*	[欠]
230	宿主	*	[欠]
231	一 やあいきやることやとて	一 ヤアイキヤル事有トテ	*
232	童へあてなしの、	*	*
233	たゝふたりつれて	*	*
234	まかひいきゆか、	*	まかり行か
235	若按司	千代松	千代松
236	一 国頭に思事の	*	*
237	あてときやへすか、	*	*
238	闇の夜のくらさ	*	*
239	行先も見らぬ、	*	*
240	頼て御情に	*	*
241	からちたはふれ、	*	*
242	宿主	*	*
243	一 はあ見れは此ふたり	*	一 あゝ見れは此二人や
244	只人やあらぬ、	*	*
245	慥か天願の	*	*
246	思子とやゆる、	*	*
247	あゝむちやる目のいちやさ	ハア見ル目痛サ	*
248	助けほしやあすか、	*	*
249	天願のなし子	*	*
250	隠ち置ものや、	*	*
251	一門やたにも	*	一門やたによ
252	ひきはらふしまても、	*	*
253	切殺ちすてられんてやり	*	殺き捨らしよんてやり
254	御触のあもの、	*	*
255	こまからや急ち	*	*
256	出てたはふれ、	*	*
257	若按司	千代松	千代松
258	一 やあ / \、	*	*
259	闇の夜のくらさ	*	*
260	雪霜や降ひ、	*	*
261	思なひもなけハ	*	思なん鳴は
262	肝もきもならぬ、	*	*
263	たんで御情に	*	*
264	からちたはふれ、	*	*
265	宿主	*	*
266	一 いや思子宿からち	*	*
267	ワか命ちとよめ、	*	*
268	たう / \ 急ち	*	さあ / \ 急ち
269	出てたはふれ、	*	*
270	若按司	千代松	千代松
271	一 やあ / \、	*	*
272	宿主	*	全人
273	一 いやならぬ / \、	*	*
274			
275			
276			
277			
278	子持ふし	長子持節	*
279	一 あきやう憂苦しや	*	*
280	おめなひとワ身や	*	思ないと二人や
281	巢なき鳥心	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
282	やとるかたなひらぬ	*	*
283	冬の夜のよすか	冬ノ夜ドヤスガ	*
284	雪霜にぬれて	*	*
285	なれぬ山路や	*	*
286	歩てあゆまらぬ	*	*
287	目本くら / \ と	*	*
288	なるか心気	*	*
289	乙鶴	*	*
290	一 やあ舎兄前よ、	*	*
291	のかすやき前や	*	*
292	あしまめきめしやうる、	足マミジ召ガ。	*
293	若按司	千代松	千代松
294	一 やあ思なひよ、	*	一 やあ思なよ
295	此間のつかれ	*	長通の疲れ
296	足もひかれらぬ、	*	*
297	ワきもきえ / \ と	*	*
298	なやひ行ん、	*	*
299	乙鶴	*	*
300	一 やあやき前よ、	*	*
301	山路やくらさ	*	*
302	雪霜もふゆひ、	雪霜ヤ降ヨイ	雪霜も降は
303			
304			
305	御気張よめしやうれ	*	御気張りめしやうれ
306	村に出やへら、	*	村に懸やへら
307	若按司	千代松	千代松
308	一 やあ思なひよ、	*	*
309	村便ててやり	*	村使ててやり
310	哀れこの二人に、	*	*
311	片時も宿よ	*	*
312	からしゆすやをらぬ、	*	*
313	やあおめなひよ、	*	
314	此間のつかれ	*	*
315	歩てあゆまらぬ、	*	*
316	頓て消果る	*	*
317	露の身とやすか、	*	*
318	闇の山路に	*	*
319	すてゝ先ならハ、	*	*
320	あてなしのおめなひや	*	*
321	いきやかしゆゝら、	*	*
322	乙鶴	*	*
323	一 やあ舎兄前よ / \、	一 ヤア舎兄前ヨ	*
324	のかすやき前や	*	*
325	ものい声もなひらぬ、	*	*
326			我のんやち前の
327			側はににらに
328	東江ふし	*	*
329	一 あけいきやかなゆら	*	*
330	富盛大主	*	*
331	一 是や富盛大主、	*	*
332	天願のなし子	*	*
333	さかいしあらために、	*	*
334	夜昼もかけて	*	*
335	島々に行ん、	島々行ン	*
336	たう / \	*	*
337	いそか / \、	*	*
338	供二人	供	供三人
339			
340	一 御供しやへら、	*	一 をかん留やへて
341	富盛	*	富盛大主
342	一 やあ、いきやることやとて	一 ヤア / \。如何ル事ヤトテ	*
343	童へあてなしの、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
344	かにある山路に	*	*
345	声立て鳴か、	泣ガ。	*
346	若按司	千代松	千代松
347	一 やあ / \、	*	*
348	哀れ此二人や	*	*
349	首里方の者よ、	*	*
350	国頭に思事の	*	*
351	あてといきやへすか、	*	あてる行やすか
352	闇の夜のくらさ	*	*
353	行先も見らぬ、	行先ヤ見ラン	*
354	一夜明さてやり	*	*
355	こまに居ちをる、	此処ニ居ヨル	こまに居ん
356	富盛	富盛大主	*
357	一 やあ供のきや、	*	*
358	見れば此ふたり	見レバ此ノ二人ヤ	見ればこの二人や
359	只人やあらぬ、	*	*
360	天願のなし子	*	*
361	疑やないらぬ、	*	*
362	たう / \ 急ち	*	*
363	縄よかけれ、	*	*
364	供	*	*
365	一 押留やへて、	*	*
366	いきやか / \、		
367	若按司	千代松	千代松
368	一 やあ / \ 天願の若按司や	*	*
369	謝名の太主の、	*	*
370	ゆるちゆるさらぬ	*	*
371	敵かたきやれハ	敵仇ヤラバ	*
372	誠天願の	*	*
373	なし子ともやらハ、	*	*
374	縄もかけゆらハ	*	*
375	いか程もかけれ、	*	*
376	人まかいよめしやうち	*	*
377	罪科もなひらぬ、	*	*
378	此二人にのよて	*	*
379	縄よかけめしやいか、	*	縄よ懸めしやり
380	みすく見分やひ	*	*
381	ゆるちたはふれ、	*	*
382	富盛	富盛大主	*
383	一 いや、まかひもあらぬ	一 イヤ人違ンアラン	一 いや人違んあらん
384	見すまちとをゆる、	*	*
385	おかたちよとまいる	*	おかたきよる尋る
386	道中とやたる、	道中ドヤヨル	道中とやよる
387	責縄のうるさ	*	*
388	にやへもこんせめれ、	*	*
389	供	*	*
390			一 押ん留やひて
391	一 いきやか / \、	*	*
392	按司	千代松	千代松
393	一 此涯よやれハ	*	*
394	隠ちかくさらぬ、	*	*
395	実よあらわれて	*	*
396	願よおんにゆけら、	*	*
397	誠天願の	*	*
398	若按司とやゆる、	*	*
399	これや守やかあ	*	*
400	なし子乙鶴よ、	*	*
401	運たらぬワ身と	*	*
402	列てきやる故に、	*	*
403	罪科もなひらぬ	*	*
404	なわよかゝゆすや、	*	*
405	肝もきもならぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
406	ことよ又たひもの、	*	*
407	ワ身や責よりは	*	*
408	いか程もせめれ、	*	*
409	あてなしのこれや	当テ無シの彼レヤ	あてなしのありや
410	ゆるちたはふれ、	*	*
411	富盛	富盛大主	*
412	一 いや推参なこといふな、	*	一 いや / \ すいさんな言葉
413			
414	供	*	
415	一 さあ / \	*	
416	たちやうれ / \、	*	
417	若按司	[欠]	千代松
418	一 あゝ口惜や残念、	*	*
419	義理情けしらぬ	*	*
420	野心なやつはら、	*	*
421	富盛	富盛大主	*
422	一 生さかしむさの	一 イヤ生キサカシンザノ	*
423	云ることのにくさ、	*	*
424	責縄のうるさ	*	*
425	にやへもこんせめれ、	*	
426	供	*	*
427	一 押留やへて、	*	*
428	いきやか / \、	*	*
429			
430	さあ / \		*
431	たちやうれ / \、	歩ミ / \	*
432	揚七尺ふし	七尺節	七尺ふし
433	一 のゝつみもなひらぬ、	一 何ノ罪ン無ラン	*
434	敵の手にかゝて	敵ノ手ニ掛テ	*
435	あはれなまころし	哀レ生マ殺シ	*
436	されらとめハ	サレラ留メバ	*
437	富盛	富盛大主	*
438	一 やあ供のきや、	*	*
439	島々よ廻て	*	*
440	里々よめくて、	*	*
441	此間の疲れ	*	*
442	足たるさあもの、	*	*
443	東恩納番所に	*	*
444	一夜明さ、	*	*
445	供	*	供三人
446	一 押留やへて	*	*
447	富盛		*
448	一 たう / \ いそか / \、		*
449	供	*	供三人
450	一 さあ / \ 急き / \、	一 タウ / \ 急ゲ / \。	
451	同	供	
452	一 さあ / \ あゆめ / \、	*	*
453	久志	久志ノ若按司	
454	一 出様ちやる者や	*	*
455	久志の若按司、	*	*
456	天願の按司や	*	*
457	御運つきはてゝ、	*	*
458	謝名の大主の	*	*
459	謀叛事巧て、	*	*
460	按司もをなちやらも	*	*
461	殺されよめしやうち、	*	*
462		城内ニ産子	城内になし子
463		跡方ン無ラン	跡方んないらん
464	はかなさや嫡子		
465	千代松か事と、		
466	野山から下り	野山カラ降テ	*
467	さかいさしゆんてやり	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
468	語ひへのあとて	*	*
469	なまとわなひきちやる、	*	*
470	あゝ口惜や残念、	*	*
471	やあ大主、	*	*
472	やあ砂田の子、	*	*
473	身にかへて千代松や	身ニ替テ千代松	身にかいて千代松
474	助らんしゆもの、	*	*
475	片時も急ち	*	*
476	島々よめくて、	*	島々に廻て
477	千代松か行衛	*	*
478	尋出ちからに、	*	*
479	敵討ることに	*	*
480	はからやひ給ふれ、	*	*
481	立川砂田	立川ノ大主	供兩人
482	一 拝留やへて、	一 拝留ヤビテ (立川詞)	*
483	立川	立川ノ大主	立川の大主
484	一 や按司かなし、	一 ヤア按司加那志	一 され按司加那志
485	此事やいへも	*	*
486	油断しや済ぬ、	*	*
487	いそち手分りに	*	*
488	島々よ廻て、	*	*
489	若按司の御行衛	*	*
490	たつねやひきやあへら、	御尋ヨシヤビラ。	*
491	久志の若按司	*	久志
492	一 やあ大主、	*	*
493	此支度しちや	*	*
494	尋ねいやならぬ、	*	*
495	互にうちやつれ	*	*
496	忍ふ編笠に	潜ノビ編笠ニ	*
497	ふかく顔かくち	*	*
498	急ち出ら、	*	*
499	立川大主	立川ノ大主	供兩人
500	一 をかんちゆめやへて、	*	* (立川砂田詞)
501	久志の若按司	若按司	久志
502	一 やあ大主	*	*
503	やあ砂田のし、	*	*
504	手賦のことに	*	*
505	美里から越来、	*	*
506	具志川与那城	*	*
507	勝連に忍は、	*	*
508			
509			
510	立川	立川ノ大主	供兩人
511	一 たう / \	*	*
512	御供しやへら、	*	*
513		道行口説	忍口説
514	一 命ち限りの出立に	一 命限リノ出立ヤ	*
515	有しさまかへ編笠に	*	有しさまかい雨笠に
516	深く面を隠してそ	深く面ヲ隠シテド	*
517	久志の山路わけ出て	*	*
518	ゆけハ程なく金武の寺	*	*
519	御宮立寄伏し拜ミ	御宮ヤ立寄テ伏シ拜デ	*
520	南無や観音大菩薩	*	南無やこわんじを大ぶさつ
521	慈悲の切徳や千代松に	慈悲ノ功德ヤ千代松ニ	是非のこゝろや千代松に
522	急ち引合ちたはふれてやり	*	*
523	心に念し礼拝し	心ニ念ジテ礼拝シ	*
524	いさや / \ と立出て	*	*
525	伊芸や屋嘉村行過て	*	*
526	歩ミかねたる七日浜	*	*
527	石川走川打渡て急ひ	*	*
528	なまと美里の伊波村に	*	*
529	急きいそひて忍てきやる	*	急ち / \ と忍て来る

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
530	砂田	砂田ノ子	砂田の子
531	一 され美里伊波村に	*	*
532	つきやへたん、	*	*
533	若按司	久志ノ若按司	久志
534	一 たう／＼、	*	*
535	宿々の数や	*	*
536	残らすに忍は、	*	*
537	両人	砂田ノ子	供両人
538	一 押留やへて、	一 押留ヤビテ (砂田詞)	*
539	附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある		
540	砂田	砂田ノ子	砂田の子
541	一 され、天願の若按司と	*	*
542	思妹の前や、	*	*
543	富盛の	富盛大主ノ	富盛大主の
544	生捕にとやい、	*	*
545	東恩納番所に	*	*
546	宿かやいをんて、	*	*
547	此村の頭から	*	*
548	細くきちやへたん、	*	細々聞ひたん
549	若按司	久志ノ若按司	久志
550	一 あゝたうと、	*	*
551	願たこと叶て	*	*
552	今の引合や、	*	*
553	誠観音の	*	*
554	御助けとやゆる、	*	*
555	たう／＼油断しやすまぬ	*	*
556	急か／＼、	*	*
557	両人	砂田ノ子	供両人
558			
559	一 御供しやへら、	一 御供シヤビラ (砂田詞)	*
560	按司	久志ノ若按司	久志
561	一 やあ／＼、	*	一 やあ
562	東恩納番所につきやん、	*	*
563			
564	やあ、砂田の子、	*	*
565	事おへさしちや	*	*
566	大事あらむしゆもの、	*	*
567	謝名の使てやり	*	謝名か使てやり
568	たしぬきやひ出す、	*	*
569	我身やこまなかひ	*	*
570	待受てをとて、	*	*
571	にくひ生やから	*	*
572	切殺ちすてら、	*	*
573	砂田	砂田ノ子	砂田びし
574	一 押留やへて、	*	*
575	按司	久志ノ若按司	久志
576	一 やあ立川の大主や、	*	*
577	勝手から忍て	*	勝手からめこて
578	内にふミいやひ、	*	*
579	急ち千代松	*	*
580	列ていまふれ、	列テ来ウリ	*
581	立川	立川ノ大主	*
582	一 押留やへて、	*	*
583	砂田	砂田ノ子	同人
584	一 やあ <sup>ママ</sup> 富成大主、	一 ヤア富盛大主	一 やあ富盛大主 (立川詞)
585	按司 <sup>ママ</sup> かなし御支に	按司加那志御使ニ	按司加那志御使に (立川詞)
586	くたてきやあへたん、	*	* (立川詞)
587	富盛	富盛大主	*
588	一 按司 <sup>ママ</sup> かなし御支や	一 按司加那志御使ヤ	一 按司加那志御遣や
589	たるかやゆら、	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
590	按司	久志ノ若按司	久志
591	一 やあ富盛、	*	*
592	久志の若按司	*	*
593	しつちをため、	*	*
594	富盛	富盛大主	*
595	一 はあのう事かやゆら、	*	*
596	砂田	砂田ノ子	砂田の子
597	一 いや、悪慾のむくひ	*	*
598	なまとおめしゆら、	*	今と思知る
599		イキヤガ / \	いきやか / \
600	天願の若按司	千代松	千代松
601	一 やあやき前よ、	*	*
602		久志ノ若按司	久志
603		一 ヤア千代松	一 やあ千代松やあ乙鶴よ
604	東江ふし	*	*
605	一 かにある引合や		一 あげかねる引合や
606	夢かやゆら	一 ア、ケ夢ガヤヨラ (大アーキーのみ)	*
607	天願の若按司	千代松	千代松
608	一 やあやき前よ、	*	*
609	謝名の太主の	*	*
610	謀叛事巧て、	*	*
611	按司添もあや前も	*	*
612	殺されよめしやうち、	*	*
613	残る此二人も	*	*
614	ころさしゆんてやり、	*	*
615	野山から下り	野山カラ下テ	*
616	さかひさしゆんであれば、	*	*
617	頼む方をらぬ	頼ム方無ラン	頼も方ないらん
618	やとる方ないらぬ、	*	*
619	思なひとふたり	*	*
620	やき前よとまひて、	*	*
621	よしれゆる道中に	*	*
622	あのやからむさに、	彼ノ族ランザノ	*
623	生捕にとられ	*	*
624	殺されるいのち、	*	*
625	かにある御助や	*	*
626	夢かやゆら、	夢ガヤ、ビ、ラ	夢かや、ひいら
627	久志の若按司	*	久志
628	一 やあ千代松	*	*
629	やあ乙鶴よ、	*	やあ乙鶴
630	按司添もあや前も	*	*
631	御運つきはて、	*	*
632			
633	謝名の手にかゝて	*	*
634	殺されよめしやうち、	*	*
635	あゝ口惜や残念、	*	*
636	やあ千代松、	ヤア千代松ヨ	*
637	なきやんてやりきやしゆか	*	*
638	互に思切ひ、	*	たかに思切は
639	いそちわか城に	*	*
640	立戻てをとて、	*	*
641	時節待受て	*	*
642	敵よ打とらに、	*	*
643	天願の若按司	千代松	千代松
644	一 やあやき前よ、	*	*
645	よたしやあるやうに	*	*
646	御計よめしやうれ、	*	*
647	立川	立川ノ大主	*
648	一 あゝ揮てなつかしやゝ	*	*
649	袖のなみた、	*	*
650	やあ若按司の前、	*	*
651	互に肝揃て	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
652	美腰たちすらハ、	*	*
653	かたきうちとゆす	*	*
654	手の内とやゝへひる、	*	*
655			
656			
657	天願	千代松	千代松
658	一 よたしやあるやうに	*	*
659	計らやひ給ふれ、	*	*
660	立川	立川ノ大主	*
661	一 をかんちゆめやへて、	*	*
662		久志ノ若按司	久志
663	一 やあ千代松、	一 ヤア千代松ヨ	*
664	悪たくむやから	*	*
665	生て置ならぬ、	*	生置ならん
666	肝のあくまゝに	*	*
667	殺ち捨れ、	*	*
668	富盛	富盛大主	*
669	一 やあ按司かなし、	*	一 され按司加那志
670	願ことのももの	*	*
671	おんにゆかて給ふれ、	*	*
672	けふからや心	*	*
673	引よ改て、	*	*
674	夜昼もミやたり	*	*
675	働かんしゆもの、	*	*
676	露の身の命ち	*	*
677	助けやひたはふれ、	*	*
678	久志の若按司	*	
679	一 悪巧むゝさと	*	*
680	肝合ちをたる、	肝合キ居ヨル	肝合ち居とて
681	罪科のいきやし	*	*
682	ゆるちゆるされめ、	免子免サレガ	免ち免されか
683	やあ千代松、	*	*
684	たう / \ 急ち	*	*
685	殺ちすてれ、	*	*
686	富盛	富盛大主	*
687	一 あゝ、押かへし / \	*	*
688	おとろしやとあすか	*	*
689	頼て願ことや	*	*
690	おんにゆかて給ふれ、	*	*
691	謝名か悪欲の	*	*
692	罪深さあることや、	*	つみ深さあすや
693	兼てからワ身も	*	*
694	しりづゝとやすか、	*	*
695	あれかしなさけも	*	*
696	受てをる故に、	*	*
697	捨てすてららぬ	*	*
698	たのでをやへたる、	*	*
699	あゝなまきれる命ち	*	はあゝ今切るいのち
700	御助のあらハ、	*	*
701	此御恩美拝や	*	*
702	いつし忘やへか、	*	早晚しわすやひる
703	慈悲よ御情けに	*	*
704	ゆるち給ふれ、	*	*
705	久志の若按司	*	久志ノ
706	一 やあ大主	*	*
707	やあ砂田の子、	*	*
708	富盛大主の	*	*
709	願ことよきけハ、	*	*
710	殺しゆすや忍はらぬ	*	*
711	肝苦しやあもの、	*	*
712	得と此事や	*	得と此事 [欠]
713	考て給ふれ、	*	*



No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
714	立川	立川ノ大主	砂田子立川ノ大主
715	一 やあ按司かなし、	*	一 され按司加那志 (砂田立川詞)
716	此やからむさの	*	* (砂田立川詞)
717	今のい云葉や、	*	今の言葉や (砂田立川詞)
718	偽とやゆる	*	* (砂田立川詞)
719	ゆるちすミやへらぬ、	*	* (砂田立川詞)
720	急ち引立て	*	* (砂田立川詞)
721	殺ちすてやへら、	*	* (砂田立川詞)
722			
723			
724	久志の若按司	*	久志ノ
725	一 やあ大主、	*	*
726	人の生死に	*	*
727	かゝる願事や、	*	*
728	身の上に引当て	*	*
729	思らねはすまぬ、	*	思らなはならん
730	富盛大主の	*	*
731	露の身の命ち、	*	*
732	慈悲よしちワ身の	*	*
733	助けゆる上に、	*	*
734	義理背ちいちやし	何ヨデ義理背キ	のよて義理背ち
735	謀叛企ちゆか、	*	*
736	此事やつく / \ と	*	*
737	了簡よされゝ、	*	思てたほうれ
738	立川	立川ノ大主	*
739	一 あゝめしやいること、	*	*
740	命ちより重さある	*	*
741	ものやあやへらぬ、	*	*
742	やあ砂田の子、	*	*
743	仰すこと得と	*	*
744	考て見れハ、	*	*
745	是程の御慈悲	*	*
746	蒙てのうへに、	*	*
747	謀叛企ちゆる	*	のよて義理背ち
748	肝の忍ハれめ、	*	謀反企か
749	たう / \	*	
750	つく / \ といやも	熟々ト	*
751	考てむてよ、	*	*
752	砂田	砂田ノ子	砂田のし
753	一 され按司かなし、	一 ヤア按司加那志	*
754	やあ大主、	*	*
755	こへな事俄に	*	*
756	決断やなやへらぬ、	*	決断やならん
757	籠舎しめおきゆて先	*	*
758	考てミやへら、	一段考テ見ヤビラ	*
759	久志の若按司	*	*
760	一 やあ砂田の子、	*	*
761	富盛大主の	*	*
762	命ち助けやひ、	*	*
763	敵討る計ひ	*	*
764	頼ほしやあもの、	*	*
765	是非に此事や、	是非ヨ此ノ事ヤ	*
766	我身にうちまから呉れ、	我身ニ打任キ呉レヨ	*
767	たう / \ 疑てやすまぬ、	[欠]疑テヤ済ン	*
768	ワか下知のことに	*	*
769			
770	急ちときゆるす、	*	*
771	砂田	砂田ノ子	砂田の子
772	一 拝留やへて、	*	*
773	富盛	富盛大主	富盛大主
774	一 あゝたうと、	*	*
775	いのちたすかたる	命助ケタル	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
776	此御恩美拝や、	*	*
777	胸におめ染て	*	*
778	肝に思留て、	*	*
779	夜昼もみやたり	*	*
780	肝もきも尽ち、	*	*
781	百とわれてふわれ	*	*
782	をかてすてやへら、	*	*
783	久志の若按司	*	*
784	一 やあ富盛大主、	*	*
785	謝名か悪欲の	*	*
786	罪深さあすや、	*	*
787	天願の按司の	*	*
788	御情けやふかく、	*	*
789	身に余るまでも	*	身にあまる程ん
790	かふむやひをとて、	*	*
791	謀叛企ちやひ	*	*
792	生楽よ好む、	生楽ヨ好デ	*
793	罪科のいきやし	*	*
794	凌きしのかれか、	凌ガレガ	*
795	やあ富盛大主、	ヤア富盛	やあ富盛
796	天の御助けか	*	*
797	神の引合しか、	神ノ引合ニ	神の引合に
798	謝名か頭役	謝名ノ頭役	謝名の頭役
799	川崎のひやか、	*	*
800	謝名事と朝夕	*	*
801	酒と色好ミ、	*	*
802	百姓したけやひ	*	*
803	おこり日にまさて、	*	*
804	御万人のまきり	*	*
805	なきよ恨めとて、	*	*
806	くりかへち本の	*	*
807	御代まちやいをもの、	*	*
808	時節【待受てを消して】計らやひ	*	*
809	謝名の首とやひ、	*	*
810	天願の御恥	*	*
811	すゝきあけらてやり、	*	*
812	文のかよハしに、	*	*
813	内通のあもの、	*	*
814	大主や急ち	*	*
815	立戻てからに、	*	*
816	川崎のひやと	*	*
817	ふたりかたらやひ、	*	*
818	敵討る計ひ	敵打ル事ニ	*
819	内通よされゝ、	*	*
820	富盛	富盛大主	富盛大主
821	一 をかん留やへて、	*	*
822	富盛	富盛大主	同人言葉
823	一 やあ立川の太主、	*	*
824	川崎のひやか	*	*
825	なまのこことやれは、	*	*
826	謝名か首とゆす	*	*
827	疑やなひらぬ、	*	*
828	やあ大主	*	*
829	ワ身や立戻て	*	*
830	謝名に返答や、	*	*
831	天願の若按司や	*	*
832	久志の按司頼て、	*	*
833	万事敵討る	*	*
834	手組しゆんてやり、	*	*
835	かたひともすらハ	*	*
836	謝名の太主や、	*	*
837	さはき驚ひ <sup>フトロキヤ</sup>	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
838	せめかける筈、	責掛ル積り	*
839	おの時立川の大主と	*	*
840	砂田の子二人や、	*	*
841	つわものよ引列て	*	*
842	金武のたけなかひ、	*	*
843	伏よ隠れとて	*	*
844	謝名か旗印、	*	*
845	伊芸屋嘉のあたり	*	*
846	走通る時 [欠]	走イ通ル時分。	走通る時分
847	一時に出て	*	*
848	すゝむ道ふさき、	*	*
849	いきも [欠] さすに	イキンスカサズニ	いちんつくさすに
850	平責よされゝ、	*	*
851	又川崎とワ [欠]	又川崎ト我身ヤ	又川崎とわ身や
852	謝名かひきかへち	*	*
853	逃よ走ゆらハ、	*	*
854	うし [欠] 取かこて	後ル取囲デ	おしる取囲て
855	殺ちすてら、	*	*
856	立川		立川の大主
857			
858			
859			
860			
861	一 やあ富盛大主、		*
862	なまのこことやれハ		*
863	誇らしやとあゆる、		*
864	謝名か首とゆす		*
865	疑やなひらぬ、		*
866	頼て此事や		*
867	計らやい給ふれ、		*
868			
869			
870			
871			
872			
873			
874			
875			
876			
877			
878			
879			
880	久志	若按司	*
881	一 やあ富盛大主、	*	*
882	今のことやれハ	*	*
883	ほこらしやとあゆる、	*	*
884	川崎のひやと	*	*
885	ふたりかたらやひ、	*	*
886	細々のこことや	*	*
887	内通よされゝ	*	*
888	富盛	富盛大主	*
889	一 をかんちゆめやへて、	*	*
890	同人	富盛大主	富盛
891	一 やあ按司かなし、	*	*
892	此事やいへも	*	*
893	油断しや済ぬ、	*	*
894	たう / \	*	*
895	御暇よしやへら、	*	*
896	久志	久志ノ若按司	*
897	一 たう / \	*	*
898	肝も肝添て	*	*
899	働きやい給ふれ	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
900	富盛	富盛大主	*
901	一 拝留やへて、	*	*
902	砂田	砂田ノ子	*
903	一 され按司かなし、	一 ヤア按司加那志	*
904	富盛大主の	*	*
905	謝名の恩情や、	謝名ガ仕情ヤ	*
906	かそる数しらぬ	*	*
907	身に請てをれハ、	*	*
908	たとひ寸々に	*	*
909	きざまれやしちも、	*	*
910	謝名にうち背ち	*	*
911	のよてくたやへか、	*	*
912	今のいこと葉や	*	*
913	偽とあゆる、	偽トヤヨル	偽とやよる
914	急ち追付て	急ギ追掛ケテ	急ち追かゝて
915	殺ちすてやへら、	*	*
916	立川	立川ノ大主	*
917	一 はあ / \ しはしまて、	一 ア、暫シ待テ	*
918	やあ砂田の子、	*	*
919	富盛大主の	*	*
920	偽の上に、	*	*
921	ぬきかへちうちゆる	*	*
922	御計とやゆる。	*	*
923	久志	久志ノ若按司	*
924	一 やあ、砂田の子、	*	*
925	大主のいやれること	*	*
926	富盛大主の、	*	*
927	たくてをることや	*	*
928			
929	合点とやゆる、	*	*
930	つわものゝまきり	*	*
931	金武嶽にやらち、	*	*
932	千代松とワ身や	*	*
933	城元に残ち、	*	*
934	打捕んでやり	*	*
935	たくてをることや、	*	*
936	い言葉の色に	*	*
937	あらわれてをてと、	*	*
938	偽の上に	*	*
939	計ことめくらしやひ、	*	*
940	ぬきかへち討る	*	*
941	分別とやゆる、	*	*
942	又川崎のひやゝ、	*	*
943	人に勝れとる、	*	*
944	つわものよやれハ、	*	*
945	跡々の障り、	*	*
946	あれ生ておきや	生き置カラヤ	*
947	謝名に打ちゆる	*	*
948	計ひのならぬ、	計ヒヤ成ラン	*
949	此事や一期	此事ドー期	*
950	気にかゝてをてと、	*	*
951	謝名の手にかけて	*	謝名の手にかゝて
952	殺さゝんともて、	*	殺さらん [欠] もて
953	富盛大主	*	*
954	たしぬきにぬきやる、	*	*
955	砂田	砂田ノ子	*
956	一 はあ今の御計の	*	*
957	あることや我身の	*	*
958	兼て夢程も	*	*
959	しらぬあやへたん	*	*
960	立川	立川ノ大主	*
961	一 やあ按司かなし	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
962	此事やいへも	*	*
963	油断しや済ぬ	油断スヤ済ピラン	*
964	片時も急ち	*	*
965	城に立戻て	*	*
966	敵よ待うける	*	*
967	計しやへら	計ヨシヤピラ	*
968	久志の若按司	*	久志
969	一 たう / \ 急か / \	*	*
970	謝名	謝名ノ大主	*
971	一 やあ平田の子	*	*
972	川崎のひやや	*	*
973	敵と肝合ち	*	*
974	謀叛企ちやい	*	*
975	内通よしゆる族	*	*
976	生て置ならぬ	*	*
977	こんしまてきやうれ	*	*
978	平田	平田ノ子	平田ノ子
979	一 拝留やへて	*	*
980	同人	*	平田
981	一 御万人のまきり	*	*
982	たによ聞留れ	*	*
983	此やからむさと	*	*
984	御主人に背ち	*	*
985			
986	謀叛しゆる科に	*	*
987	殺さしよめしやいん	殺シヨスヤ召ン	*
988	たうたういそけ / \	*	*
989	川崎	川崎ノ比屋	川崎のひや
990	一 やあ平田の子	*	*
991	平田	平田ノ子	*
992	一 いやものことのおほさ	*	*
993	急け / \	*	*
994			
995	たう / \	*	*
996	居やうれ / \	*	*
997		同人	
998	一 され川崎のひや	*	*
999	せまてきやへたん	*	シバテチャビタン
1000		謝名	謝名の大主
1001	一 やあ川崎	*	*
1002	いきやることやとて	*	*
1003	ワか恩義わすて	*	*
1004	敵と肝合ち	*	*
1005	謀叛企ちゆか	*	*
1006	川崎	川崎ノ比屋	川崎のひや
1007	一 やあ按司かなし	*	*
1008	御主人の御恩	*	*
1009	山よりも高く	海ヨリン深ク	*
1010	海よりも深く	山ヨリン高サ	*
1011			
1012	思しゆるワ身の	*	*
1013	のよて悪たくて	*	*
1014	謀叛企ちゆか	*	*
1015			
1016			
1017			
1018			
1019			
1020			
1021	神仏かけて	*	*
1022	偽やあやへらぬ	*	*
1023	頼てつく / \ と	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
1024	思てたはふれ	*	*
1025	謝名	謝名ノ大主	*
1026	一 いや胸に悪巧て	*	*
1027	口に花さかそ	*	口や花咲ち
1028	島国のやから	*	*
1029	生て置ならぬ	*	*
1030	急ち引立て	*	*
1031	殺ちきやうれ	*	*
1032	川崎	川崎ノ比屋	川崎のひや
1033	一 あゝ口惜や残念	*	*
1034	やあ富盛大主	*	*
1035	落る此首や	*	*
1036	おしさ又ないらぬ	*	*
1037	あにあるてきかたに	*	*
1038	うちよたまされて	*	*
1039	主人かたくつら	*	*
1040	あまた御万人も	*	*
1041	頓てやミノと	*	頓てやめノに
1042	なゆらとめは	*	*
1043	謝名	謝名ノ大主	*
1044	一 いや押かへしノ	*	*
1045	過云しゆるやから	*	*
1046	迎も一刀に	*	*
1047	切殺ちすてら	*	*
1048	平田	平田ノ子	平田の子
1049	一 やあ按司かなし	*	*
1050	謀叛しゆるやから	*	*
1051	殺ちすてめしやうち	*	*
1052	ワすた供つれも	*	*
1053	誇らしやとあやへひる	*	*
1054	謝名	謝名ノ大主	*
1055	一 やあ大主	*	*
1056	やあ平田の子	*	*
1057	久志の若按司や	*	*
1058	すくれものでやり	*	*
1059	世界取沙汰に	世界ノ取沙汰ニ	世界の取沙汰に
1060	肝さハきをたん	*	*
1061	はあ思たすと替て	ハア思タ事叶テ	*
1062	今のことやれハ	*	*
1063	一 鼓にうちとゆす	一 刃ニ打取ヨス	*
1064	疑やなひらぬ	*	*
1065	けふ明る廿日	*	*
1066	よかる日よやれハ	吉尔日ヨヤクト	よかる日よやこと
1067	久志の城元に	*	*
1068	軍押寄て	*	*
1069	二人の按司打果ち	*	*
1070	我肝やすま	*	*
1071		富盛大主	富盛
1072		一 押留ヤビテ	一 押留やひて
1073	富盛	同人	同人
1074	一 やあ按司かなし	*	*
1075	久志の若按司と	*	*
1076	約速 <sup>ママ</sup> のことに	*	*
1077	内通の書状	内通ノ書状ヨ	*
1078	かきよ調やい	調ヤヒ	*
1079	急ち夜通しに	*	*
1080	もたちやらしやへら	*	*
1081	謝名	謝名ノ大主	*
1082	一 たうノ急けノ	*	*
1083	久志の若按司	*	久志
1084	一 やあ千代松	*	*
1085	富盛大主の	*	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
1086	只今の <sup>マツ</sup> 使や	只今ノ使ヤ	只今の使や
1087	けふ <sup>マツ</sup> 明る廿日	*	*
1088	軍寄ゆもの	軍押シ寄モノ。	*
1089	約速 <sup>マツ</sup> のことに	*	*
1090	金武の嶽なかい	*	*
1091	伏勢よしちをて	*	*
1092	待 <sup>マツ</sup> 請れちやり	*	待請りてやり
1093	内通の文や	*	*
1094	是とやゆる	*	*
1095	天願の若按司	千代松	*
1096	一 やあやき前よ	*	*
1097	今のことあれハ	今ノ事ヤレバ	*
1098	誇らしやとあゆる	*	*
1099	よたしやあるやうに	*	*
1100	御計よめしやうれ	*	*
1101	同人		同人ことは この時文立川の大主江渡る
1102	一 やあ大主		*
1103	文立川の大主江渡す		
1104	立川	立川ノ大主	立川ノ大主
1105	一 やあ按司かなし	*	*
1106	此文よ見れハ	*	*
1107	御計のことに	*	*
1108	川崎のひやゝ	*	*
1109	大主の手にかゝて	*	*
1110	殺されよしちやす	*	*
1111	疑やなひらぬ	疑ヤ無ヤビラン	*
1112	はあ川崎のひやか	*	はあ川崎のひひや
1113	今のことやれハ	*	*
1114	かたきうちとゆる	*	*
1115	手の内とやゝへひる	*	*
1116	久志の若按司	*	久志
1117	一 やあ大主	*	*
1118	急ちおれノの	*	*
1119	手組云渡さ	*	*
1120	立川	立川ノ大主	*
1121	一 拝留やへて	*	*
1122	久志の若按司	*	久志
1123	一 やあ伊豆味下こうりや	*	*
1124	金武の嶽なかひ	*	*
1125	薄煙立て	*	*
1126	伏勢の様子	*	*
1127	敵に見せれ	*	*
1128	いつミ下 (广+東) 理	*	*
1129	一 拝留やへて	*	*
1130	按司	久志ノ若按司	久志
1131	一 やあ砂田の子や	一 ヤア砂田ノ子	*
1132	本門の東	*	*
1133	山中にふかく	*	*
1134	伏よ隠れとて	伏セ隠レトテ	*
1135	謝名の大主の	謝名ノ大主ガ	*
1136	東原にのそて	*	*
1137	逃よ走ゆらハ	*	*
1138	一時に出て	*	*
1139	殺ちすてれ	*	*
1140	砂田	砂田ノ子	砂田の子
1141	一 をかんちゆめやへて	*	*
1142		久志若按司	久志
1143	一 やあ浜崎のひやゝ	*	*
1144	久志嵩に深く	*	*
1145	ふしよかくれとて	*	*
1146	謝名か西宿に	謝名ガ宿ニ	*

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
1147	逃よ走ゆらは	*	*
1148	すゝむ道ふさき	*	*
1149	殺ち捨れ	*	*
1150	浜崎	浜崎ノ比屋	浜崎のひや
1151	一 拝留やへて	*	*
1152	按司	久志若按司	
1153	一 やあ外間の子や	*	
1154	城の南の	*	
1155	小林に深く	*	
1156	伏よ隠れとて	*	
1157	謝名か軍勢の	*	
1158	城の門内に	*	
1159	ふミ入ゆる時分	*	
1160	相図のかねのならば	*	
1161	うしろからせめれ	*	
1162	外間	外間ノ子	
1163	一 をかむちゆめやへて	*	
1164	按司	久志若按司	久志
1165	一 やあ立川の太主や	*	*
1166	本門の内に	本門ノ内	*
1167	忍ひ隠れとて	*	*
1168	謝名か門内に	*	*
1169	入ゆす見掛らハ	*	*
1170	七重八重かこて	*	*
1171	殺ち捨られゝ	殺ち捨り	殺ち捨ら
1172	立川	立川ノ太主	*
1173	一 拝留やへて	*	*
1174	按司	久志ノ若按司	久志
1175	一 また千代松と我身や	*	*
1176	時の声よきかは	*	*
1177	物見走登て	*	*
1178	敵の軍勢	*	*
1179	さそへ入ら	*	*
1180	惣人数	*	*
1181	一 拝留やへて	*	*
1182	按司	久志若按司	[欠]
1183	一 やあ千代松	*	[欠]
1184	手賦の落ち	*	[欠]
1185	誇らしやとあゆる	*	[欠]
1186	習とたる手並	*	[欠]
1187	振立て見せれ	*	[欠]
1188	天願の若按司	千代松	[欠]
1189	一 礼	*	[欠]
1190	揚作田ふし	歌	[欠]
1191	一 朝夕たしなたる	一 朝夕習取タル	[欠]
1192	長刀の刃さき	*	[欠]
1193	てきのくひすちに	*	[欠]
1194	たたなおきゆめ	*	[欠]
1195	久志	久志若按司	[欠]
1196	一 やあ千代松	*	[欠]
1197	振立すみれハ	*	[欠]
1198	嬉しさとあゆる	*	[欠]
1199	城に立戻て	*	[欠]
1200	敵よまたに	*	[欠]
1201			
1202			
1203	天願	千代松	[欠]
1204	一 一礼	*	[欠]
1205			
1206	謝名	謝名ノ太主	[欠]
1207	一 やあ / \	*	[欠]
1208	時うつち済ぬ	*	[欠]



No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
1209	急か / \	*	[欠]
1210	富盛	富盛大主	[欠]
1211	一 御急よめしやうれ	一 拝留ヤビテ	[欠]
1212	謝名	謝名ノ大主	[欠]
1213	一 はあ金武のたけミれハ	一 ハア金武嶽ヨ見レバ	[欠]
1214	うすけふりたちゆん	ウス煙リ立ヒ	[欠]
1215	伏勢の様子	*	[欠]
1216	疑やないらぬ	*	[欠]
1217	たう / \ 急か / \	*	[欠]
1218			
1219			
1220			
1221	富盛	富盛大主	[欠]
1222	一 はあ久志の若按司の	*	[欠]
1223	運の末なたら	*	[欠]
1224	ワか謀ことに	*	[欠]
1225	心うちゆるち	*	[欠]
1226	あれ / \ 御目掛れ	*	[欠]
1227	本門も開ちをやへいん	本門ノ開キアヤビン	[欠]
1228		サア / \ 急ガ / \	
1229			[欠]
1230	急ち走寄ひ		[欠]
1231	時の声よあけら		[欠]
1232			
1233			
1234	同人	*	[欠]
1235	一 やあ久志の若按司	*	[欠]
1236	富盛大主の	*	[欠]
1237	偽にいちやる	*	[欠]
1238	い言葉や誠	*	[欠]
1239	実ともてをたら	*	[欠]
1240	快く急ち	サア / \ 急ギ	[欠]
1241	首よ渡す	*	[欠]
1242	久志	久志ノ若按司	[欠]
1243	一 やあ富盛大主	*	[欠]
1244	偽の巧ミ	*	[欠]
1245	夢程もしらぬ	*	[欠]
1246	つわものゝまきり	*	[欠]
1247	金武嵩にやらち	*	[欠]
1248	此城の内や	*	[欠]
1249	千代松とふたり	*	[欠]
1250	たゝかはぬすれハ	*	[欠]
1251	力及はらぬ	*	[欠]
1252	あゝ口惜や残念	*	[欠]
1253		謝名ノ大主	[欠]
1254	一 やあ / \ 急ち責いやい	一 タウ / \ 急ギ責入イ	[欠]
1255	切殺ちすてら	*	[欠]
1256	惣人数	富盛大主	[欠]
1257	一 ひやあひやい	一 拝留ヤビテ (富盛詞)	[欠]
1258			
1259			
1260			
1261			
1262	久志	久志若按司	[欠]
1263	一 やあ謝名の太主		[欠]
1264	此按司のはかりこと	一 ヤア / \ 此按司ノ計事	[欠]
1265	しらぬあため	知チ居タメ	[欠]
1266	謝名	謝名ノ大主	[欠]
1267	一 あゝ謝名ほどの名将も	*	[欠]
1268	運の末なたら	運ノ末ナレバ	[欠]
1269	たしぬきにぬかれ	*	[欠]
1270	川崎もころち	*	[欠]

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
1271	おかたちか手にかゝて	*	[欠]
1272	生捕にとられ	*	[欠]
1273	武士の身の恥辱	*	[欠]
1274	面目もなひらぬ	*	[欠]
1275	たう / \ 快く急ち	*	[欠]
1276	首よとれ	首ヨ渡サ	[欠]
1277	久志	久志若按司	[欠]
1278	一 やあ富盛	*	[欠]
1279	十度ときゆるち	*	[欠]
1280	十度生とられ	*	[欠]
1281	此按司に向て	*	[欠]
1282	弓ひきゆんでやり	*	[欠]
1283	巧てある褒美	巧テ居ル褒美	[欠]
1284	殺さゝんしゆもの	*	[欠]
1285	ありかたさ思て	*	[欠]
1286	あの世とつけ	*	[欠]
1287	富盛	富盛大主	[欠]
1288	一 あゝ武運つき果て	一 ハア武運尽キ果テ	[欠]
1289	生捕にとられ	出シ抜ニノガレ	[欠]
1290	武士の身の名折	武士ノ名折	[欠]
1291	面目もなひらぬ	*	[欠]
1292	謝名	謝名ノ大主	[欠]
1293	一 いやものことのおほさ	*	[欠]
1294	快く急ち	*	[欠]
1295	首よ渡す	*	[欠]
1296	天願	千代松	[欠]
1297	一 此やからむさや	一 ヤア / \。彼ノ族ランザヤ	[欠]
1298	見れハやすまらぬ	*	[欠]
1299			
1300			
1301	久志	久志若按司	[欠]
1302	一 はあ / \ しはしまて	一 ヤア千代松。暫シ待テ	[欠]
1303	やあ千代松		[欠]
1304	このやからむさの	*	[欠]
1305	悪欲の罪や	*	[欠]
1306	一刀にしちや	*	[欠]
1307	罪あさゝあもの	アキジヤラン有モノ	[欠]
1308	久志浜に引出ち	*	[欠]
1309	旗門にあけれ	獄門ニアゲラ	[欠]
1310	浜崎国吉		[欠]
1311	一 拝留やへて		[欠]
1312	久志	同人	[欠]
1313	一 やあ浜崎のひや	*	[欠]
1314	やあ国吉の子	外間ノ子	[欠]
1315	急ち引立て	*	[欠]
1316	籠舎しめれ	*	[欠]
1317	両人	*	[欠]
1318	一 拝留やへて	*	[欠]
1319	立川	立川ノ大主	[欠]
1320	一 やあ / \	*	[欠]
1321	おれ / \ の番手	*	[欠]
1322	油断するな	*	[欠]
1323	浜崎国吉	両人 (崎山外間)	[欠]
1324	一 をかんちゆめやへて	一 拝留ヤビテ	[欠]
1325	同人	外間ノ子	[欠]
1326	一 さあ / \ たちやうれ / \	一 サア / \ 立ヤウリ / \ (外間詞)	[欠]
1327	同人	浜崎ノ比屋	[欠]
1328	一 さあ / \ いそけ / \	一 サア / \ 歩メ / \	[欠]
1329		謝名ノ大主	
1330		一 ヤア / \	
1331		浜崎ノ比屋外間ノ子両人	
1332		一 イヤ物事ノ多サ	

No.	尚家本組踊集	兼島信備本	京都大学琉球資料
1333	天願	千代松	[欠]
1334	一 やあやき前よ	*	[欠]
1335	やあ大主	ヤア大主ヨ	[欠]
1336	互に肝揃て	*	[欠]
1337	働きやる故に	*	[欠]
1338			
1339	親の敵かたき	*	[欠]
1340			
1341	討捕るけふや	生捕ニ取たす	[欠]
1342		誠彼ノ世界ノ	
1343		此世事アレバ	
1344	すきし二所も	*	[欠]
1345	嬉しやめしやいら	*	[欠]
1346	久志	久志ノ若按司	[欠]
1347	一 やあノ	*	[欠]
1348	かたき討捕る	*	[欠]
1349	けふの誇らしや	*	[欠]
1350	押つれて互に	*	[欠]
1351	踊て戻ら	踊テ遊バ	[欠]
1352		立川ノ大主	[欠]
1353		一 召ル事	[欠]
1354		踊テ	
1355		御祝シヤビラ	[欠]
1356			[欠]
1357			[欠]
1358			[欠]
1359			[欠]
1360	しやうんかないふし	立雲節	[欠]
1361	一 かたきうちとたる	一 仇キ打取タル (立雲)	[欠]
1362	けふの誇らしやノ	今日ノ誇ラシヤ、 (立雲)	[欠]
1363	天のしら雲に	天ノ白雲ニ (立雲)	[欠]
1364	のほるばかり	登ルバカリ (立雲)	[欠]
1365			
1366			
1367			
1368			
1369			
1370		久志若按司終	
1371			
1372			
1373			
1374			
1375			

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
1	天願之若按司敵討	久志の若按司	久志の若按司
2	着付謝名之大主髪錦之入道頭巾向に 金磨之龍角有ル水色緞子衣裳羅陳羽 織錦に而飭有ル太刀刀大団足袋脚胖		
3	富盛大主髪黒縹子入道頭巾向ニ金欄 に而飭有ル黒袖衣裳青縹子広袖羽織 刀脚胖足袋		
4	川崎之ひや平田の子髪黒西洋布入道 頭巾黒木綿単衣裳脚胖足袋		
5	ちやうちやく持かむらふ黒木綿単衣 脚胖足袋		
6	供髪黒西洋布入道頭巾黒木綿単衣裳 脚胖足袋差繩		
7	天願の若按司髪半向頭巾金花并金銀 水引はさら糺綸子衣裳糺西洋布足袋 中入より錦入道頭巾錦に而飭有ル羅 陳羽織錦に而飭有ル脚胖足袋扇子持 出ル但戦之時甲胸当長刀		
8	同人妹板メ縮緬ネ同衣ひさ取裙糺西 洋布足袋		
9	宿元謝名之大主供同断		
10	久志之若按司髪錦之入道頭巾向ニ金 磨之龍角飭有ル青縹子衣裳羅陳羽織 錦に而飭有ル刀脚胖足袋但中入より 青縹子広袖羽織雨笠杖陳賦之時髪錦 之入道頭巾羅羽織扇子戦之時甲胸当		
11	立川の大主髪黒縹子入道頭巾黒袖衣 裳黒縮緬広袖羽織脚胖足袋		
12	砂田の子黒西洋布入道頭巾黒木綿衣 裳脚胖足袋但中入之時より立川砂田 黒縮めん広袖羽織編笠杖		
13	浜崎のひや伊豆味下(广+東)裏外 間の子金の磨持ちやうちやく持謝名 の大主供支度同断		
14			
15	一 出様ちやる者や、	*	*
16	天願の按司の	*	*
17	頭役しゆたる	*	*
18	謝名の大主、	*	*
19	あゝ浅ましや此身	*	*
20	黒髪に雪の、	*	*
21	積るとしまても	積る年 [欠]	*
22	人の下知受て、	*	*
23	朝夕胸内に	*	*
24	煙りたかよいか、	*	(火+雲) 立よひか
25	主人打果ち	*	*
26	按司の身になやひ、	*	*
27	夢の間の浮世	*	*
28	楽すらんともて、	*	*
29	色欲よ進め	*	
30	明間うかゝやひ、	*	
31	討捕んでやり	*	
32	様々にしやすか、	*	*
33	聞立もすらぬ	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
34	義理守てをれハ、	*	*
35	願事や叶ぬ	*	*
36	気の毒とやたる、	*	*
37	あゝむちやる三日に	ンヂヤル三日に	はあ去ル三月ニ
38	原遊すゝめやひ、	*	*
39	戻る道中に	*	*
40	伏勢よ置て、	伏勢よしきうて	伏勢にしよて
41	思たこと按司や	*	*
42	うちすまぢあすか、	*	*
43	城内になし子	*	*
44	跡形もなひらぬ、	跡方ん見らん	*
45	気の毒とやゆる	*	*
46	気障とやゆる、	*	*
47	やあ富盛大主	*	*
48	川崎のひや平田の子、	*	*
49	三人	供三人	供三人
50	一 ふう	*	*
51	謝名	*	謝名の大王
52	一 やあ、思たこと叶て	*	*
53	按司も打果ち、	按 [欠] 打すまち。	*
54	楽も楽いらて	*	*
55	誇らしやとあすか、	*	*
56	城内になし子	*	*
57	あとかたもなひらぬ、	跡方ん見らん。	*
58	又久志の若按司や	*	*
59	天願の別れ、	*	*
60	嫡家ふるふされ	*	*
61	たゝやてやをらぬ、	*	*
62	天願の若按司	*	*
63	助けやひふたり、	*	*
64	命ちふり捨て	*	命ち捨て
65	弓ひきゆらとめハ、	*	*
66	気障とやゆる	*	*
67	事障たひもの、	*	*
68	先久志の城元に	*	*
69	軍押寄すて	*	*
70	急ち若按司	*	*
71	打果ちからに、	*	打済ちからに
72	天願のなし子	*	*
73	さかひし改て、	*	*
74	根葉も茹捨て	*	*
75	我肝やすま、	*	*
76	三人	供三人	供三人
77	一 押留やへて、	*	*
78	平田	*	平田の子
79	一 はあめしやいること、	*	*
80	あのふたり世界に	*	*
81	いきて置からや、	*	*
82	跡々の障り	*	*
83	御気遣とやゆる、	*	御気遣とめしやいる
84	片時も急ち	*	*
85	打とやいきやへら、	打とやいきやへ [欠]	*
86	富盛	*	富盛大主
87	一 やあ按司かなし、	*	*
88	久志の若按司や	*	*
89	世界に立ぬけて、	[欠] たちのけて。	*
90	義理も分別も	*	*
91	人並やあらぬ、	*	*
92	又あの大親	*	*
93	立川の大主と	立川の大主	*
94	砂田の子二人や、	*	*
95	世間沙汰される	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
96	つハものやれは、	*	*
97	自由に打捕ゆる	*	*
98	敵や又あらぬ、	*	*
99	天願の城	*	*
100	討よふろふしやい、	*	*
101	御万人の心	*	*
102	おてつかぬ内に、	*	*
103	城よ立出て	*	立出て
104	城よはなれやひ、	*	*
105	遙々と久志に	*	はあ久志の城元に
106	軍押て、	軍押寄て。	*
107	もしか此城に	*	*
108	一大事のあらハ、	*	*
109	百悔ミしちも	*	*
110	益や又なひさめ、	*	*
111	今程や城に	*	*
112	堅打守て、	*	*
113	時節計ら <sup>ママ</sup> やらひ	時節計やい	*
114	軍寄やへら、	*	*
115	川崎	川崎のひや	川崎のひや
116	一 やあ按司かなし、	*	*
117	久志の城元に	*	*
118	軍寄ゆすや、	*	*
119	大主のいやれること	*	*
120	先やミにめしやうち、	*	*
121	急ち島々に、	*	*
122	廻文よ通ち、	*	*
123	天願のなし子	*	*
124	生捕にとやひ、	*	*
125	久志の若按司の	*	*
126	降参よしゆらハ、	*	*
127	天願のなし子	*	*
128	かへち渡さてやり、	*	*
129	久志の若按司に	*	*
130	文よつかハさは、	*	*
131	なく / \ もこまに	*	*
132	くたてこんしゆもの、	下て (こんしゆものを消して) ころ積り	*
133	おの時にふたり	*	*
134	ころちすてやへら、	*	*
135		謝名	謝名
136	一 やあ大主	*	*
137	やあ川崎のひや、	やあ川崎。	*
138	云ることよ聞ハ	*	*
139	ことハりとやゆる、	*	*
140	急ち手わかいに	*	*
141	島島よ廻て、	*	*
142	天願のなし子	*	*
143	からめ出すものや、	*	*
144	とり位も付て	*	*
145	島知行も呉ゆん、	*	*
146	若隠ち置ものや、	*	*
147	一門やたにも	一門やだによ	*
148	引はらふしまても	*	*
149	生責よしゆんて	*	*
150	堅く云渡ち、	*	*
151	片時もはやく	*	*
152	からめ出ちくう、	*	からめ出ときようれ
153	富盛	富盛川崎平田	富盛川崎
154	一 拝留やべて、	* (三人詞)	* (富盛川崎詞)
155			
156			
157			

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
158			
159	謝名	*	*
160	一 たう / \ 急げ / \、	*	*
161	天願の若按司思なひ出羽散山ふし	天願の若 [欠] 乙鶴 [欠] 出羽哥さん山ふ	天願の若按司出羽さん山ふし
162	一 生れらぬむまれ	*	*
163	おめなひとワ身や	*	*
164	あさゆちのなみた	*	*
165	袖よぬらち	袖よ [欠] らち	*
166	若按司	天願の若按司	天願の若按司
167			
168	一 天願のなし子	*	*
169	千代松とやゆる、	*	*
170	按司添か事や	*	*
171	謝名の大主に、	*	*
172	殺されよめしやうち	*	*
173	哀れあや前も	*	*
174	みたれ矢に当て	*	*
175	消よはてめしやうち、	*	*
176	二所の親に	*	*
177	捨られてをれハ、	*	*
178	あてなしの思なひ	あてなしのおみないや	あてなしの思妹や
179	朝夕鳴暮ち、	*	*
180	百すかひすかて	*	*
181	はなすことならぬ、	*	*
182	ワ肝きへ / \ と	*	*
183	互に袖しほて、	*	*
184	死にやんてやりしゆすか	*	死なんてやいすれハ
185	親の敵かたき、	*	親の敵かたし
186	うたな徒に	*	*
187	死もまたならぬ、	*	*
188	久志の若按司や	*	*
189	ワか従やれば、	*	我が徒くたいもの
190	あれ頼てからに	*	*
191	忍ひ隠れやひ、	忍ひかくりとして	*
192	時節待受て	*	*
193	敵討んともて、	*	*
194	おめなひよつれて	*	*
195	忍て行ん、	*	*
196		久志の城元や	
197		あかり表てももの	
198		てだ上るかたに	
199		とまいて行ん	
200	天願の若按司云は并道行きんふし	両人道行金武ふし	金武ふし
201	一 久志の城元や	*	*
202	あかり表てももの、	*	*
203	てたあかるかたに	*	*
204	とまひていきゆん	*	*
205	乙鶴	*	*
206	一 やあ舎兄前よ、	*	*
207	長道のつかれ	*	*
208	足もひかれらぬ、	*	*
209	こまにあしよとて	*	*
210	しはし休ミやへら、	*	*
211	若按司	*	*
212	一 やあ思なひよ、	*	*
213	夜も暮ておれハ	*	*
214	こまをてやすまぬ、	*	*
215	あの村に便て	*	*
216	あしよやすま、	*	*
217	たう / \ 気張れ / \、	*	*
218	同人	*	*
219	一 此宿の内に	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
220	ものよおんにゆけら、	*	*
221	宿主	*	*
222	一 たるかやゆら、	一 たるか [欠]	*
223	若按司	*	*
224	一 哀れ首里方の	*	*
225	者とやへすか、	*	*
226	闇の夜のくらさ	*	*
227	行先も見らぬ、	*	*
228	御情に一夜	*	*
229	からちたはふれ、	*	*
230	宿主	*	*
231	一 やあいきやることやとて	*	一 やあ / \ いきやる事やとて
232	童へあてなしの、	*	*
233	たふたりつれて	*	*
234	まかひいきゆか、	*	まかひゑまひか
235	若按司	*	*
236	一 国頭に思事の	*	*
237	あてときやへすか、	*	*
238	闇の夜のくらさ	*	*
239	行先も見らぬ、	*	*
240	頼て御情に	*	*
241	からちたはふれ、	*	*
242	宿主	*	*
243	一 はあ見れは此ふたり	*	*
244	只人やあらぬ、	*	*
245	慥か天願の	*	*
246	思子とやゆる、	*	*
247	あむちやる目のいちやさ	*	はあ見ちやる目のいちやさ
248	助けほしやあすか、	*	*
249	天願のなし子	*	*
250	隠ち置ものや、	*	*
251	一門やたにも	*	*
252	ひきはらふしまても、	*	*
253	切殺ちすてられんてやり	*	*
254	御触のあもの、	*	*
255	こまからや急ち	*	*
256	出てたはふれ、	*	*
257	若按司	*	*
258	一 やあ / \、	*	
259	闇の夜のくらさ	*	*
260	雪霜や降ひ、	*	*
261	思なひもなけハ	*	*
262	肝もきもならぬ、	*	*
263	たんで御情に	*	*
264	からちたはふれ、	*	*
265	宿主	*	
266	一 いや思子宿からち	*	
267	ワか命ちとよめ、	*	
268	たう / \ 急ち	たう / \ くまからや急ち	
269	出てたはふれ、	*	
270	若按司	*	*
271	一 やあ / \、	*	*
272	宿主	*	*
273	一 いやならぬ / \、	*	*
274			いや思子宿借ち
275			我が命ちとゆミ
276			たう / \ 急ち
277			出て給り
278	子持ふし	哥子持ふし	道行子持ふし
279	一 あきやう憂苦しや	*	*
280	おめなひとワ身や	*	*
281	巢なき鳥心	*	*



No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
282	やとるかたなひらぬ	[欠] る木ないらん、	*
283	冬の夜のやすか	*	冬の夜とやすか
284	雪霜にぬれて	*	*
285	なれぬ山路や	*	*
286	歩てあゆまらぬ	*	*
287	目本くら / \ と	目もとくら [欠]	*
288	なるか心気	*	*
289	乙鶴	*	*
290	一 やあ舎兄前よ、	*	*
291	のかすやき前や	*	*
292	あしまめきめしやうる、	[欠] まめじみしやる	足まめじみしやひか
293	若按司	*	*
294	一 やあ思なひよ、	*	*
295	此間のつかれ	*	*
296	足もひかれらぬ、	*	*
297	ワきもきえ / \ と	*	*
298	なやひ行ん、	*	*
299	乙鶴	*	*
300	一 やあやき前よ、	*	*
301	山路やくらさ	*	山路のこらさ
302	雪霜もふゆひ、	*	*
303			
304			
305	御気張よめしやうれ	いひ気張めしやうり	気張めしやうれ
306	村に出やへら、	*	村に掛やへら
307	若按司	*	*
308	一 やあ思なひよ、	*	*
309	村便てやり	*	*
310	哀れこの二人に、	*	*
311	片時も宿よ	*	*
312	からしゆすやをらぬ、	*	*
313	やあおめなひよ、	*	*
314	此間のつかれ	*	*
315	歩てあゆまらぬ、	*	*
316	頓て消果る	*	*
317	露の身とやすか、	*	*
318	闇の山路に	*	*
319	すてゝ先ならハ、	すてゝ先 [欠]	*
320	あてなしのおめなひや	*	*
321	いきやかしゆゝら、	*	*
322	乙鶴	*	*
323	一 やあ舎兄前よ / \ 、	*	*
324	のかすやき前や	*	*
325	ものい声もなひらぬ、	*	*
326			
327			
328	東江ふし	哥 [欠] ふし	*
329	一 あけいきやかなゆら	*	一 あけひいちやかしゆら
330	富盛大主	*	
331	一 是や富盛大主、	*	
332	天願のなし子	*	
333	さかいしあらために、	*	
334	夜昼もかけて	よるひるん [欠]	
335	島々に行ん、	[欠] 行ん	
336	たう / \	*	
337	いそか / \ 、	*	
338	供二人	*	
339			
340	一 御供しやへら、	*	
341	富盛	*	富盛
342	一 やあ、いきやることやとて	一 やあいちやる [欠] やとて	一 やあ / \ いきやる事やとて
343	童へあてなしの、	わら [欠] あてなしの	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
344	かにある山路に	*	*
345	声立て鳴か、	*	*
346	若按司	*	*
347	一 やあ/\、		*
348	哀れ此二人や	*	*
349	首里方の者よ、	*	*
350	国頭に思事の	*	*
351	あてといきやへすか、	*	*
352	闇の夜のくらさ	*	*
353	行先も見らぬ、	*	*
354	一夜明さてやり	*	*
355	こまに居ちをる、	*	こまに居よる
356	富盛	*	富盛
357	一 やあ供のきや、	*	*
358	見れば此ふたり	*	*
359	只人やあらぬ、	*	*
360	天願のなし子	*	*
361	疑やないらぬ、	*	*
362	たう/\急ち	*	*
363	縄よかけれ、	*	*
364	供	*	*
365	一 拝留やへて、	*	*
366	いきやか/\、	*	
367	若按司	*	*
368	一 やあ/\天願の若按司や	*	*
369	謝名の太主の、	*	*
370	ゆるちゆるさらぬ	*	*
371	敵かたきやれハ	*	*
372	誠天願の		*
373	なし子ともやらハ、		*
374	縄もかけゆらハ	*	*
375	いか程もかけれ、	*	*
376	人まかいよめしやうち	*	*
377	罪科もなひらぬ、	*	*
378	此二人にのよて	*	*
379	縄よかけめしやいか、	*	*
380	みすく見分やひ	*	*
381	ゆるちたはふれ、	[欠] ち [欠] り	*
382	富盛	[欠] 盛	富盛
383	一 いや、まかひもあらぬ	*	*
384	見すまちとをゆる、	*	*
385	おかたちよとまいる	*	*
386	道中とやたる、	*	*
387	責縄のうさ	*	*
388	にやへもこんせめれ、	[欠] ひんくんしめり	*
389	供	*	*
390			
391	一 いきやか/\、	*	*
392	按司	若 [欠]	若按司
393	一 此涯よやれハ	*	*
394	隠ちかくさらぬ、	*	*
395	実よあらわれて	*	*
396	願よおんにゆけら、	*	*
397	誠天願の	*	*
398	若按司とやゆる、	*	*
399	これや守やかあ	*	*
400	なし子乙鶴よ、	*	*
401	運たらぬワ身と	*	*
402	列てきやる故に、	烈てきやる [欠] に	*
403	罪科もなひらぬ	*	*
404	なわよかゝゆすや、	*	*
405	肝もきもならぬ	肝ならんありは	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
406	ことよ又たひもの、	忍らん [欠]	*
407	ワ身や責よりは	*	*
408	いか程もせめれ、	*	*
409	あてなしのこれや	あてなしのありや	*
410	ゆるちたはふれ、	*	*
411	富盛	*	富盛
412	一 いや推参なこといふな、	*	*
413			
414	供	*	
415	一 さあ / \	*	
416	たちやうれ / \、	*	
417	若按司	*	*
418	一 あゝ口惜や残念、		*
419	義理情けしらぬ	*	*
420	野心なやつはら、	*	*
421	富盛	*	富盛
422	一 生さかしむさの	*	*
423	云ることのにくさ、	*	*
424	責縄のうるさ	*	*
425	にやへもこんせめれ、	にやひ [欠] しめれ	*
426	供	*	*
427	一 押留やへて、		*
428	いきやか / \、	*	*
429			
430	さあ / \	[欠]	
431	たちやうれ / \、	*	
432	揚七尺ふし	哥七尺ふし	七尺ふし
433	一 のゝつみもなひらぬ、	一 のゝ [欠] ないらん	*
434	敵の手にかゝて	敵の [欠] にかゝて	*
435	あはれなまころし	*	*
436	されらとめハ	さりら [欠]	*
437	富盛	*	富盛
438	一 やあ供のきや、	*	*
439	島々よ廻て	*	*
440	里々よめくて、	里々よまわて	*
441	此間の疲れ	此あいた [欠]	*
442	足たるさあもの、	*	*
443	東恩納番所に	*	*
444	一夜明さ、	*	*
445	供	*	*
446	一 押留やへて	*	*
447	富盛	*	富盛
448	一 たう / \ いそか / \、	*	一 たう / \ 急き / \
449	供	*	
450	一 さあ / \ 急き / \、	*	
451	同	供	供
452	一 さあ / \ あゆめ / \、	*	*
453	久志	久志若按司	久志の若按司
454	一 出様ちやる者や	*	*
455	久志の若按司、	*	*
456	天願の按司や	*	*
457	御運つきはてゝ、	*	*
458	謝名の大主の	*	*
459	謀叛事巧て、	*	*
460	按司もをなちやらも	*	按司もをなちやら
461	殺されよめしやうち、	*	*
462			城内生子
463			跡方も無らん
464	はかなさや嫡子	*	
465	千代松か事と、	*	
466	野山から下り	*	*
467	さかいさしゆんてやり	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
468	語ひへのあとて	*	*
469	なまとわなひきちやる、	*	*
470	あゝ口惜や残念、	*	はあ口惜や残念
471	やあ大主、	*	*
472	やあ砂田の子、	*	*
473	身にかへて千代松や	身に [欠] 千代松	身に替て千代松
474	助らんしゆもの、	*	*
475	片時も急ち	*	*
476	島々よめくて、	嶋 [欠] 廻て	*
477	千代松か行衛	千代 [欠] 行衛	*
478	尋出ちからに、	*	*
479	敵討ることに	*	*
480	はからやひ給ふれ、	計 [欠] たふり	計得給り
481	立川砂田	[欠]	立川の太主
482	一 拝留やへて、	*	* (立川詞)
483	立川	*	同人
484	一 や按司かなし、		一 やあ按司かなし
485	此事やいへも	*	
486	油断しや濟ぬ、	*	
487	いそち手分りに	*	*
488	島々よ廻て、	*	*
489	若按司の御行衛	*	*
490	たつねやひきやあへら、	[欠] やいちやびら	*
491	久志の若按司	久志	*
492	一 やあ大主、	*	*
493	此支度しちや	*	*
494	尋ねいやならぬ、	*	*
495	互にうちやつれ	*	*
496	忍ふ編笠に	*	*
497	ふかく顔かくち	*	*
498	急ち出ら、	*	*
499	立川大主	立川砂田	立川の太主
500	一 をかんちゆめやへて、	* (立川砂田詞)	*
501	久志の若按司	久志	*
502	一 やあ大主	*	*
503	やあ砂田のし、	*	*
504	手賦のことに	(手賦のを消して) 云あはちやる事に	*
505	美里から越来、	*	*
506	具志川与那城	*	*
507	勝連に忍は、	*	*
508			
509			
510	立川	*	立川砂田兩人
511	一 たう / \	一 御急ちよめしやふり	* (立川砂田詞)
512	御供しやへら、	*	* (立川砂田詞)
513		道行口説	道行口説
514	一 命ち限りの出立に	*	*
515	有しさまかへ編笠に	*	*
516	深く面を隠してそ	*	*
517	久志の山路わけ出て	*	*
518	ゆけ八程なく金武の寺	*	*
519	御宮立寄伏し拜ミ	*	*
520	南無や観音大菩薩	*	*
521	慈悲の切徳や千代松に	慈悲の (切の横に) 功德や千代松に	慈悲のこゝろは千代まつに
522	急ち引合ちたはふれてやり	*	*
523	心に念し礼拝し	*	*
524	いさや / \ と立出て	*	*
525	伊芸や屋嘉村行過て	*	*
526	歩ミかねたる七日浜	*	*
527	石川走川打渡て急ひ	*	*
528	なまと美里の伊波村に	*	*
529	急きいそひて忍てきやる	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
530	砂田	*	砂田の子
531	一 され美里伊波村に	*	*
532	つきやへたん、	*	*
533	若按司	久志	久志の若按司
534	一 たう / \、	*	*
535	宿々の数や	*	宿の宿数や
536	残らすに忍は、	*	*
537	両人	砂田両人	砂田子
538	一 押留やへて、	* (立川砂田詞)	* (砂田詞)
539	附此時瀧落にて三人手配を以忍の手ある	此時たちおとしにて忍ある	
540	砂田	*	同人
541	一 され、天願の若按司と	*	*
542	思妹の前や、	*	*
543	富盛の	富盛大主の	富盛大主の
544	生捕にとやい、	*	*
545	東恩納番所に	*	*
546	宿かやいをんて、	*	*
547	此村の頭から	*	*
548	細くきちやへたん、	細々聞びたん	細々聞やへたん
549	若按司	久志	久志の若按司
550	一 あゝたうと、	*	*
551	願たこと叶て	*	*
552	今の引合や、	*	*
553	誠観音の	*	*
554	御助けとやゆる、	*	*
555	たう / \ 油断しやすまぬ	*	*
556	急か / \、	*	*
557	両人	立川	立川
558		一 御急ちよみしやふり	
559	一 御供しやへら、	*	* (立川詞)
560	按司	久志	久志の若按司
561	一 やあ / \、	一 たう / \	*
562	東恩納番所につきやん、	*	*
563			
564	やあ、砂田の子、	*	*
565	事おへさしちや	*	*
566	大事あらむしゆもの、	*	*
567	謝名の使てやり	*	*
568	たしぬきやひ出す、	*	*
569	我身やこまなかひ	我身やくまな [欠]	*
570	待受てをとて、	待請て [欠]	*
571	にくひ生やから	*	*
572	切殺ちすてら、	*	*
573	砂田	*	砂田の子
574	一 押留やへて、	*	*
575	按司	久志	久志の若按司
576	一 やあ立川の大主や、	一 やあ立 [欠] 主や	*
577	勝手から忍て	*	*
578	内にふミいやひ、	*	*
579	急ち千代松	千代松と乙鶴	*
580	列ていまふれ、	*	*
581	立川	*	*
582	一 押留やへて、	*	*
583	砂田	*	砂田子
584	一 やあ <sup>ママ</sup> 富成大主、	一 やあ富盛大主	一 やあ富盛大主
585	按司かなし御支に	*	按司かなし御使に
586	くたてきやあへたん、	*	*
587	富盛	*	富盛
588	一 按司かなし御支 <sup>ママ</sup> や	*	*
589	たるかやゆら、	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
590	按司	久志	久志若按司
591	一 やあ富盛、	*	一 やあ富盛大主
592	久志の若按司	*	*
593	しつちをため、	*	*
594	富盛	*	富盛
595	一 はあのう事かやゆら、	*	*
596	砂田	*	砂田子
597	一 いや、悪慾のむくひ	*	*
598	なまとおめしゆら、	*	なまとおめしゆミ
599		いちやが / \	さあ / \ いきやか / \
600	天願の若按司	*	*
601	一 やあやき前よ、	*	*
602		久志	久志の若按司
603		一 やあ千代松やあ乙鶴	一 やあ千代松よ
604	東江ふし	哥 東江ふし	*
605	一 かにある引合や	*	*
606	夢かやゆら	*	*
607	天願の若按司	*	*
608	一 やあやき前よ、	*	*
609	謝名の犬主の	*	*
610	謀叛事巧て、	*	*
611	按司添もあや前も	*	*
612	殺されよめしやうち、	*	*
613	残る此二人も	*	*
614	ころさしゆんてやり、	*	*
615	野山から下り	*	野山から下て
616	さかひさしゆんであれば、	*	探さしゆんてやり
617	頼む方をらぬ	*	*
618	やとる方ないらぬ、	*	*
619	思なひとふたり	*	*
620	やき前よとまひて、	*	*
621	よしれゆる道中に	*	*
622	あのやからむさに、	あの [欠] さに	*
623	生捕にとられ	*	*
624	殺されるいのち、	*	*
625	かにある御助や	*	*
626	夢かやゆら、	[欠] めがやゝびいら	夢かやゝひら
627	久志の若按司	久志	*
628	一 やあ千代松	*	一 やあ千代松よ
629	やあ乙鶴よ、	やあ乙鶴	*
630	按司添もあや前も	*	*
631	御運つきはてゝ、	*	*
632			数ならん者に
633	謝名の手にかゝて	*	*
634	殺されよめしやうち、	*	*
635	あゝ口惜や残念、	*	*
636	やあ千代松、	*	*
637	なきやんてやりきやしゆか	*	*
638	互に思切ひ、	*	*
639	いそちわか城に	*	急ち我が宿に
640	立戻てをとて、	*	*
641	時節待受て	*	*
642	敵よ打とらに、	敵よおたに	*
643	天願の若按司	*	*
644	一 やあやき前よ、		*
645	よたしやあるやうに	*	*
646	御計よめしやうれ、	計へたふり	*
647	立川	*	*
648	一 あゝ揮てなつかしやゝ	*	*
649	袖のなみた、	*	*
650	やあ若按司の前、	*	やあ若按司の前よ
651	互に肝揃て	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
652	美腰たちすらハ、	*	*
653	かたきうちとゆす	*	*
654	手の内とやゝへひる、	*	*
655			今からの先や
656			御氣遣よめしやうな
657	天願	*	天願の若按司
658	一 よたしやあるやうに	*	*
659	計らやひ給ふれ、	計へたふり	計得給り
660	立川	*	*
661	一 をかんちゆめやへて、	*	*
662		久志	久志の若按司
663	一 やあ千代松、	*	*
664	悪たくむやから	*	*
665	生て置ならぬ、	*	*
666	肝のあくまゝに	*	*
667	殺ち捨れ、	*	*
668	富盛	*	富盛
669	一 やあ按司かなし、	*	*
670	願ことのももの	*	*
671	おんにゆかて給ふれ、	*	*
672	けふからや心	*	*
673	引よ改て、	*	*
674	夜昼もミやたり	*	*
675	働かんしゆもの、	*	*
676	露の身の命ち	*	露の命の命ち
677	助けやひたはふれ、	*	*
678	久志の若按司	久志	*
679	一 悪巧むゝさと	*	*
680	肝合ちをたる、	*	*
681	罪科のいきやし	*	*
682	ゆるちゆるされめ、	よるちよるされが	よるち免されか
683	やあ千代松、	*	*
684	たう / \ 急ち	*	*
685	殺ちすてれ、	*	*
686	富盛	*	富盛
687	一 あゝ、押かへし / \	*	はあ押返し / \
688	おとろしやとあすか	*	驚るしやとあもの
689	頼て願ことや	*	*
690	おんにゆかて給ふれ、	*	*
691	謝名か悪欲の	*	*
692	罪深さあることや、	罪深さあすや	*
693	兼てからり身も	*	*
694	しりづゝとやすか、	*	*
695	あれかしなさけも	*	*
696	受てをる故に、	をてをかをる故に	*
697	捨てすてららぬ	*	*
698	たのでをやへたる、	頼てをやび [欠]	*
699	あゝなまきれる命ち	*	*
700	御助のあらハ、	*	*
701	此御恩美拝や	*	此御恩御拝の
702	いつし忘やへか、	*	いちやし忘やひか
703	慈悲よ御情けに	*	*
704	ゆるち給ふれ、	*	*
705	久志の若按司	久志	*
706	一 やあ大主	*	*
707	やあ砂田の子、	*	*
708	富盛大主の	*	*
709	願ことよきけハ、	*	*
710	殺しゆすや忍はらぬ	*	*
711	肝苦しやあもの、	肝 [欠] やあもの	*
712	得と此事や	得と [欠]	*
713	考て給ふれ、	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
714	立川	*	*
715	一 やあ按司かなし、		*
716	此やからむさの	此のやからむ [欠]	*
717	今のい云葉や、	*	*
718	偽とやゆる	*	*
719	ゆるちすミやへらぬ、	*	*
720	急ち引立て	*	*
721	殺ちすてやへら、	*	*
722			
723			
724	久志の若按司	久志	*
725	一 やあ大主、	*	*
726	人の生死に	*	*
727	かゝる願事や、	*	*
728	身の上に引当て	*	身の上に引請て
729	思らねはすまぬ、	*	*
730	富盛大主の	*	*
731	露の身の命ち、	*	*
732	慈悲よしちワ身の	*	*
733	助けゆる上に、	*	*
734	義理背ちいちやし	のよて義理背き	*
735	謀叛企ちゆか、	*	*
736	此事やつく / \ と	*	この事や実々と
737	了簡よされゝ、	*	*
738	立川	*	*
739	一 あゝめしやいること、	一 みしやる事	*
740	命ちより重さある	*	*
741	ものやあやへらぬ、	*	物やないひらん
742	やあ砂田の子、	*	*
743	仰すこと得と	*	*
744	考て見れハ、	*	*
745	是程の御慈悲	*	*
746	蒙てのうへに、	*	*
747	謀叛企ちゆる	*	*
748	肝の忍ハれめ、	*	*
749	たう / \	*	*
750	つく / \ といやも	*	実々といやん
751	考てむてよ、	*	*
752	砂田	[欠]	砂田のし
753	一 され按司かなし、		*
754	やあ大主、		*
755	こへな事俄に	*	*
756	決断やなやへらぬ、	*	聞付やなやへらん
757	籠舎しめおきゆて先	*	*
758	考てミやへら、	*	*
759	久志の若按司	久志	*
760	一 やあ砂田の子、	*	*
761	富盛大主の	*	*
762	命ち助けやひ、	*	*
763	敵討る計ひ	*	*
764	頼ほしやあもの、	*	*
765	是非に此事や、	是非 [欠] 此の事や	*
766	我身にうちまから呉れ、	*	我身任ち呉れよ
767	たう / \ 疑てやすまぬ、	*	*
768	ワか下知のことに	*	*
769			メてある縄ん
770	急ちときゆるす、	*	ふとちとらす
771	砂田	*	砂田のし
772	一 拝留やへて、	*	*
773	富盛	*	富盛
774	一 あゝたうと、	*	*
775	いのちたすかたる	*	*



No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
776	此御恩美拝や、	*	此御恩御拝や
777	胸におめ染て	*	*
778	肝に思留て、	*	*
779	夜昼もみやたり	*	*
780	肝もきも尽ち、	*	肝に肝添て
781	百とわれてふわれ	*	*
782	をかてすてやへら、	*	*
783	久志の若按司	久志	*
784	一 やあ富盛大主、	*	*
785	謝名か悪欲の	*	*
786	罪深さあすや、	*	*
787	天願の按司の	*	*
788	御情けやふかく、	*	御情や深さ
789	身に余るまでも	*	*
790	かふむやひをとて、	*	*
791	謀叛企ちやひ	*	*
792	生楽よ好む、	*	生楽よ好て
793	罪科のいきやし	*	罪科の
794	凌きしのかれか、	*	免ちよるされか
795	やあ富盛大主、	やあ富盛	*
796	天の御助けか	*	*
797	神の引合しか、	神の引合しに	*
798	謝名か頭役	謝名の頭役	謝名の頭役
799	川崎のひやか、	*	*
800	謝名事と朝夕	*	謝名か事と朝夕
801	酒と色好ミ、	*	酒と色好て
802	百姓したけやひ	*	*
803	おこり日にまさて、	*	*
804	御万人のまきり	*	*
805	なきよ恨めとて、	な [欠] みとて	*
806	くりかへち本の	*	*
807	御代まちやいをもの、	*	*
808	時節【待受てを消して】計らやひ	*	*
809	謝名の首とやひ、	*	*
810	天願の御恥	*	*
811	すゝきあけらてやり、	*	*
812	文のかよはしに、	*	*
813	内通のあもの、	*	*
814	大主や急ち	*	*
815	立戻てからに、	*	*
816	川崎のひやと	*	*
817	ふたりかたらやひ、	*	*
818	敵討る計ひ	*	敵打ゆる計ひや
819	内通よされゝ、	*	*
820	富盛	*	富盛
821	一 をかん留やへて、	*	*
822	富盛	同人	同人
823	一 やあ立川の太主、	*	*
824	川崎のひやか	*	*
825	なまのこことやれは、	*	*
826	謝名か首とゆす	*	*
827	疑やなひらぬ、	*	*
828	やあ大主	*	*
829	ワ身や立戻て	*	*
830	謝名に返答や、	*	*
831	天願の若按司や	*	*
832	久志の按司頼て、	*	*
833	万事敵討る	*	有業か敵打ゆる
834	手組しゆんてやり、	*	*
835	かたひとますらハ	*	*
836	謝名の太主や、	*	*
837	さはき驚ひ <sup>フトロキヤ</sup>	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
838	せめかける筈、	*	*
839	おの時立川の大主と	*	おの時に立川の大主と
840	砂田の子二人や、	*	*
841	つわものよ引列て	*	つは者よ列て
842	金武のたけなかひ、	*	金武嶽なかひ
843	伏よ隠れとて	*	*
844	謝名か旗印、	*	*
845	伊芸屋嘉のあたり	*	伊芸や屋嘉の当り
846	走通る時 [欠]	走通る時分	走通る時分
847	一時に出て	*	*
848	すゝむ道ふさき、	*	*
849	いきも [欠] さすに	いちんつがさすに	いちんつかさすに
850	平責よされゝ、	*	平ゞにされゝ
851	又川崎とワ [欠]	又川崎と我身や	又川崎と我身や
852	謝名かひきかへち	*	*
853	逃よ走ゆらハ、	*	*
854	うし [欠] 取かこて	うしる取かくて	おしる取かくて
855	殺ちすてら、	*	*
856	立川	*	*
857			
858			
859			
860			
861	一 やあ富盛大主、	*	*
862	なまのことやれハ	*	*
863	誇らしやとあゆる、	*	*
864	謝名か首とゆす	*	*
865	疑やなひらぬ、	*	*
866	頼て此事や	*	*
867	計らやい給ふれ、	*	計得給れ
868			
869			
870			
871			
872			
873			
874			
875			
876			
877			
878			
879			
880	久志	*	久志の若按司
881	一 やあ富盛大主、	*	*
882	今のことやれハ	*	*
883	ほこらしやとあゆる、	*	*
884	川崎のひやと	*	*
885	ふたりかたらやひ、	*	*
886	細々のことや	(細々のことやを消して) 文のかよわしに	*
887	内通よされゝ	*	*
888	富盛	*	富盛
889	一 をかんちゆめやへて、	*	*
890	同人	[欠]	*
891	一 やあ按司かなし、		*
892	此事やいへも	*	*
893	油断しや済ぬ、	*	*
894	たう / \	*	*
895	御暇よしやへら、	*	*
896	久志	*	久志の若按司
897	一 たう / \	*	*
898	肝も肝添て	*	*
899	働きやい給ふれ	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
900	富盛	*	富盛
901	一 拝留やへて、	*	*
902	砂田	*	砂田のし
903	一 され按司かなし、		*
904	富盛大主の	*	*
905	謝名の恩情や、	*	*
906	かそる数しらぬ	*	*
907	身に請てをれハ、	*	*
908	たとひ寸々に	*	*
909	きざまれやしちも、	*	刻まれやしゆてん
910	謝名にうち背ち	*	*
911	のよてくたやへか、	*	*
912	今のいこと葉や	*	*
913	偽とあゆる、	偽とやよる	偽とやよる
914	急ち追付て	急ちおへかけて	急ち追掛て
915	殺ちすてやへら、	*	*
916	立川	*	*
917	一 はあ / \ しはしまて、	一 はあせはしまて	一 はあしはしまて
918	やあ砂田の子、	*	*
919	富盛大主の	*	*
920	偽の上に、	*	*
921	ぬきかへちうちゆる	*	*
922	御計とやゆる。	*	*
923	久志	*	久志の若按司
924	一 やあ、砂田の子、	*	*
925	大主のいやれること	*	*
926	富盛大主の、	*	*
927	たくてをることや	*	*
928			尋らん先に
929	合点とやゆる、	*	*
930	つわものゝまきり	*	*
931	金武嶽にやらち、	*	*
932	千代松とワ身や	*	*
933	城元に残ち、	*	*
934	打捕んでやり	*	*
935	たくてをることや、	*	*
936	い言葉の色に	*	*
937	あらわれてをてと、	*	頭れてをたん
938	偽の上に	*	*
939	計ことめくらしやひ、	*	*
940	ぬきかへち討る	*	*
941	分別とやゆる、	*	*
942	又川崎のひやゝ、	*	*
943	人に勝れとる、	*	
944	つわものよやれハ、	*	
945	跡々の障り、	*	*
946	あれ生ておきや	*	*
947	謝名に打ちゆる	*	謝名に勝る
948	計ひのならぬ、	計へやならん	計得や絶らん
949	此事や一期	此の事と一期	此事よ一期
950	気にかゝてをてと、	*	気に掛てをとて
951	謝名の手にかけて	*	*
952	殺さゝんともて、	*	殺されんともて
953	富盛大主	*	*
954	たしぬきにぬきやる、	*	*
955	砂田	*	砂田のし
956	一 はあ今の御計の	*	*
957	あることや我身の	*	*
958	兼て夢程も	*	*
959	しらぬあやへたん	*	*
960	立川	*	*
961	一 やあ按司かなし	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
962	此事やいへも	*	*
963	油断しや済ぬ	*	*
964	片時も急ち	*	*
965	城に立戻て	御城立戻て	城に戻やひら
966	敵よ待うける	*	
967	計しやへら	*	
968	久志の若按司	久志	*
969	一 たう / \ 急か / \	*	*
970	謝名	謝名の犬主	*
971	一 やあ平田の子	*	*
972	川崎のひやや	*	*
973	敵と肝合ち	*	*
974	謀叛企ちやい	*	*
975	内通よしゆる族	内通よ [欠] やから	*
976	生て置ならぬ	*	*
977	こんしまてきやうれ	*	*
978	平田	平田の子	平田のし
979	一 拝留やへて	*	*
980	同人	*	*
981	一 御万人のまきり	*	*
982	たによ聞留れ	*	*
983	此やからむさと	*	*
984	御主人に背ち	*	*
985		敵ときも合ち	
986	謀叛しゆる科に	*	*
987	殺さしよめしやいん	殺さしよみしよん	*
988	たうたういそけ / \	*	*
989	川崎	*	川崎のひや
990	一 やあ平田の子	*	*
991	平田	*	平田のし
992	一 いやものことのおほさ	*	*
993	急け / \	*	*
994		同人	
995	たう / \	*	*
996	居やうれ / \	*	*
997		同人	同人
998	一 され川崎のひや	*	一 され / \ 川崎のひや
999	せまてきやへたん	*	*
1000		謝名	謝名犬主
1001	一 やあ川崎	*	*
1002	いきやることやとて	*	*
1003	ワか恩義わすて	*	*
1004	敵と肝合ち	*	*
1005	謀叛企ちゆか	*	*
1006	川崎	*	*
1007	一 やあ按司かなし	*	*
1008	御主人の御恩	*	*
1009	山よりも高く	*	
1010	海よりも深く	海よりん深さ	*
1011			山よりも高さ
1012	思しゆるワ身の	*	*
1013	のよて悪たくて	*	*
1014	謀叛企ちゆか	*	*
1015			久志の若按司の
1016			はんにくてをてと
1017			按司の手にかやひ
1018			殺されんともて
1019			富盛大主や
1020			たしぬきにぬかり
1021	神仏かけて	*	*
1022	偽やあやへらぬ	*	*
1023	頼てつく / \ と	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
1024	思てたはふれ	*	*
1025	謝名	*	*
1026	一 いや胸に悪巧て	*	*
1027	口に花さかそ	*	*
1028	島国のやから	*	島国の障り
1029	生て置ならぬ	*	*
1030	急ち引立て	*	*
1031	殺ちきやうれ	*	*
1032	川崎	*	*
1033	一 あゝ口惜や残念	*	*
1034	やあ富盛大主	*	*
1035	落る此首や	*	*
1036	おしさ又ないらぬ	*	惜さ又思まん
1037	あにあるてきかたに	*	*
1038	うちよたまされて	*	*
1039	主人かたくつら	主人 [欠]	*
1040	あまた御万人も	[欠] また御万人ん	*
1041	頓てやミ / \ と	*	*
1042	なゆらとめは	*	*
1043	謝名	*	*
1044	一 いや押かへし / \	*	*
1045	過云しゆるやから	[欠] るやから	*
1046	迎も一刀に	*	*
1047	切殺ちすてら	*	殺ちすてら
1048	平田	平田子	平田のし
1049	一 やあ按司かなし		*
1050	謀叛しゆるやから	*	*
1051	殺ちすてめしやうち	[欠] めし [欠] ち	*
1052	ワすた供つれも	*	*
1053	誇らしやとあやへひる	誇とあや [欠]	*
1054	謝名	[欠]	*
1055	一 やあ大主	[欠] あ大主	*
1056	やあ平田の子	*	*
1057	久志の若按司や	*	*
1058	すくれもてやり	すぐり [欠]	*
1059	世界取沙汰に	世界のとり沙汰に	*
1060	肝さハきをたん	*	*
1061	はあ思たすと替て	*	はあ思たこと叶て
1062	今のことやれハ	*	*
1063	一 鼓にうちとゆす	*	*
1064	疑やなひらぬ	*	*
1065	けふ明る廿日	*	*
1066	よかる日よやれハ	よかる日撰やくと	*
1067	久志の城元に	*	*
1068	軍押寄て	*	*
1069	二人の按司打果ち	二人の按司 (打果ちを消して) 殺ち	*
1070	我肝やすま	*	*
1071		富盛平田	富盛
1072		一 拝ん留やひて	一 拝留やへて
1073	富盛	*	同人
1074	一 やあ按司かなし	*	*
1075	久志の若按司と	*	*
1076	約速のことに	*	*
1077	内通の書状	*	*
1078	かきよ調やい	*	*
1079	急ち夜通しに	*	*
1080	もたちやらしやへら	*	*
1081	謝名	*	*
1082	一 たう / \ 急け / \	*	*
1083	久志の若按司	久志	*
1084	一 やあ千代松	*	*
1085	富盛大主の	*	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
1086	只今の <sup>マ</sup> 丈や	只今の使や	*
1087	けふ <sup>マ</sup> 明る廿日	*	*
1088	軍寄ゆもの	*	*
1089	約速 <sup>マ</sup> のことに	*	*
1090	金武の嶽なかい	*	*
1091	伏勢よしちをて	*	*
1092	待 <sup>マ</sup> 請れちやり	*	*
1093	内通の文や	内通書状	内通の文
1094	是とやゆる	*	
1095	天願の若按司	天願	
1096	一 やあやき前よ	*	
1097	今のことあれハ	*	事やりは
1098	誇らしやとあゆる	*	*
1099	よたしやあるやうに	*	*
1100	御計よめしやうれ	*	計得よめしやうれ
1101	同人	同人立川に文渡	*
1102	一 やあ大主	*	一 やあ大主よ
1103	文立川の <sup>マ</sup> 大主江渡す		此時の文立川江渡す
1104	立川	*	
1105	一 やあ按司かなし		
1106	此文よ見れハ	*	
1107	御計のことに	*	事に (天願詞)
1108	川崎のひやゝ	*	* (天願詞)
1109	大主の手にかゝて	*	* (天願詞)
1110	殺されよしちやす	*	* (天願詞)
1111	疑やなひらぬ	*	* (天願詞)
1112	はあ川崎のひやか	*	はあ川崎のひや (天願詞)
1113	今のことやれハ	*	* (天願詞)
1114	かたきうちとゆる	*	* (天願詞)
1115	手の内とやゝへひる	*	* (天願詞)
1116	久志の若按司	久志	*
1117	一 やあ大主		*
1118	急ちおれ / \ の	*	*
1119	手組云渡さ	*	*
1120	立川	*	伊豆味下庫理
1121	一 拝留やへて	*	* (伊豆味詞)
1122	久志の若按司	久志	*
1123	一 やあ伊豆味下こうりや	*	*
1124	金武の嶽なかひ	*	*
1125	薄煙立て	*	*
1126	伏勢の様子	*	*
1127	敵に見せれ	*	*
1128	いつミ下 (广+東) 理		伊豆味下庫理
1129	一 拝留やへて		*
1130	按司	久志	久志の若按司
1131	一 やあ砂田の子や	*	*
1132	本門の東	*	本門の東の
1133	山中にふかく	*	山中に
1134	伏よ隠れとて	*	*
1135	謝名の <sup>マ</sup> 大主の	謝名が東原に	謝名の
1136	東原にのそて		東り原逃て
1137	逃よ走ゆらハ	*	*
1138	一時に出て	*	*
1139	殺ちすてれ	*	殺ち捨ら
1140	砂田	*	砂田のし
1141	一 をかんちゆめやへて	*	*
1142			久志の若按司
1143	一 やあ浜崎のひやゝ	*	*
1144	久志嵩に深く	*	*
1145	ふしよかくれとて	*	*
1146	謝名か西宿に	謝名が西 [欠]	*

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
1147	逃よ走ゆらは	*	*
1148	すゝむ道ふさき	*	*
1149	殺ち捨れ	*	*
1150	浜崎	*	浜崎のひや
1151	一 拝留やへて	*	*
1152	按司	久志	久志の若按司
1153	一 やあ外間の子や	*	*
1154	城の南の	*	*
1155	小林に深く	*	*
1156	伏よ隠れとて	*	*
1157	謝名か軍勢の	*	*
1158	城の門内に	*	*
1159	ふミ入ゆる時分	*	*
1160	相図のかねのならば	*	相図鐘のならば
1161	うしろからせめれ	*	*
1162	外間	*	外間し
1163	一 をかむちゆめやへて	*	*
1164	按司	久志	久志の若按司
1165	一 やあ立川の大主や	*	*
1166	本門の内に	*	*
1167	忍ひ隠れとて	*	*
1168	謝名か門内に	*	*
1169	入ゆす見掛らハ	*	*
1170	七重八重かこて	*	*
1171	殺ち捨られゝ	*	*
1172	立川	*	*
1173	一 拝留やへて	*	*
1174	按司	久志	久志の若按司
1175	一 また千代松と我身や	*	*
1176	時の声よきかは	*	*
1177	物見走登て	*	*
1178	敵の軍勢	*	*
1179	さそへ入ら	*	*
1180	惣人数	*	*
1181	一 拝留やへて	*	*
1182	按司	*	久志の若按司
1183	一 やあ千代松	*	*
1184	手賦の落ち	*	*
1185	誇らしやとあゆる	*	*
1186	習とたる手並	*	*
1187	振立て見せれ	*	*
1188	天願の若按司		
1189	一礼		
1190	揚作田ふし	哥あきつくてん	あけつくてんふし
1191	一 朝夕たしなたる	*	*
1192	長刀の刃さき	*	*
1193	てきのくひすちに	*	*
1194	たたなおきゆめ	*	*
1195	久志	*	久志の若按司
1196	一 やあ千代松	*	*
1197	振立すみれハ	*	*
1198	嬉しさとあゆる	誇しやとあゆる	誇らしやとあゆる
1199	城に立戻て	*	*
1200	敵よまたに	*	*
1201			
1202			
1203	天願	[欠]	天願の若按司
1204	一 一礼		一 拝留やひて
1205		拝留やひて	
1206	謝名	*	*
1207	一 やあ / \	*	*
1208	時うつち済ぬ	*	時おすて済ん

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
1209	急か / \	*	*
1210	富盛	*	*
1211	一 御急よめしやうれ	御供しやひら	一 拝留やひて
1212	謝名	*	*
1213	一 はあ金武のたけミれハ	一 はあ金武嶽よ見りは	*
1214	うすけふりたちゆん	*	*
1215	伏勢の様子	*	*
1216	疑やないらぬ	*	*
1217	たう / \ 急か / \	*	*
1218		富盛	
1219		御急ちよめしやうれ	
1220		御供しやひら	
1221	富盛	*	富盛
1222	一 はあ久志の若按司の	*	一 やあ久志の若按司の
1223	運の末なたら	*	*
1224	ワか謀ことに	*	我か計得の事に
1225	心うちゆるち	おちよだまさりて	*
1226	あれ / \ 御目掛れ	*	*
1227	本門も開ちをやへいん	*	本門ん開ちをやひもの
1228			
1229			
1230	急ち走寄ひ	*	急ち走寄て
1231	時の声よあけら	*	*
1232			
1233			
1234	同人		*
1235	一 やあ久志の若按司	*	*
1236	富盛大主の	*	*
1237	偽にいちやる	*	*
1238	い言葉や誠	*	*
1239	実ともてをたら	*	*
1240	快く急ち	たう / \ こゝろよく急ち	*
1241	首よ渡す	*	*
1242	久志	*	久志の若按司
1243	一 やあ富盛大主	*	*
1244	偽の巧ミ	*	*
1245	夢程もしらぬ	*	*
1246	つわものゝまきり	*	*
1247	金武嵩にやらち	*	*
1248	此城の内や	*	*
1249	千代松とふたり	*	*
1250	たゝかはぬすれハ	*	*
1251	力及はらぬ	*	*
1252	あゝ口惜や残念	*	はあ口惜や残念
1253		謝名	
1254	一 やあ / \ 急ち責いやい	一 やあ / \ [欠] ふみいやへ	
1255	切殺ちすてら	殺ち捨ら	
1256	惣人数		
1257	一 ひやあひやい		
1258			
1259			
1260			
1261			
1262	久志	*	同人
1263	一 やあ謝名の犬主	一 やあ謝名	*
1264	此按司のはかりこと	此按司の計	*
1265	しらぬあため	*	*
1266	謝名	*	*
1267	一 あゝ謝名ほどの名将も	*	一 はあ謝名程の名将も
1268	運の末なたら	運んの末やたら	*
1269	たしぬきにぬかれ	出し抜きさりて	
1270	川崎もころち	*	*



No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
1271	おかたちか手にかゝて	おかたちが手に	*
1272	生捕にとられ	*	*
1273	武士の身の恥辱	武士の身恥辱	*
1274	面目もなひらぬ	*	面目やならん
1275	たう / \ 快く急ち	*	*
1276	首よとれ	*	首よ渡さ
1277	久志	*	久志の若按司
1278	一 やあ富盛	*	*
1279	十度ときゆるち	*	*
1280	十度生とられ	*	十度生とよる
1281	此按司に向て	*	*
1282	弓ひきゆんでやり	*	*
1283	巧てある褒美	*	*
1284	殺さゝんしゆもの	*	*
1285	ありかたさ思て	*	*
1286	あの世とつけ	*	あの世渡れ
1287	富盛	*	富盛
1288	一 あゝ武運つき果て	一 はあ / \ 武運つちはてて	*
1289	生捕にとられ	*	*
1290	武士の身の名折	*	*
1291	面目もなひらぬ	*	*
1292	謝名	*	*
1293	一 いやものことのおほさ	一 いやものくとんいらん	いや物事んいらん
1294	快く急ち	急ち	*
1295	首よ渡す	*	首よ渡さ
1296	天願	天願若按司	
1297	一 此やからむさや	一 悪たくもやから	
1298	見れハやすまらぬ	*	
1299		とてん一刀に	
1300		殺ち捨ら	
1301	久志	*	久志の若按司
1302	一 はあ / \ しはしまて	*	一 あゝしはしまて
1303	やあ千代松	*	*
1304	このやからむさの	*	*
1305	悪欲の罪や	*	*
1306	一刀にしちや	*	*
1307	罪あさゝあもの	*	*
1308	久志浜に引出ち	久志浜に出ち	*
1309	旗門 <sup>マタ</sup> にあけれ	極もんにあけれ	拷問に揚り
1310	浜崎国吉	*	浜崎国吉兩人
1311	一 拜留やへて	*	*
1312	久志	*	久志の若按司
1313	一 やあ浜崎のひや	*	*
1314	やあ国吉の子	国吉の子	国吉の子
1315	急ち引立て	*	*
1316	籠舎しめれ	*	*
1317	兩人	*	浜崎国吉
1318	一 拜留やへて	*	*
1319	立川	*	*
1320	一 やあ / \	*	*
1321	おれ / \ の番手	*	*
1322	油断するな	*	*
1323	浜崎国吉	*	*
1324	一 をかんちゆめやへて	一 御礼	*
1325	同人		*
1326	一 さあ / \ たちやうれ / \		*
1327	同人		*
1328	一 さあ / \ いそけ / \		一 さあ / \ 急ち / \
1329			
1330			
1331			
1332			

No.	尚家本組踊集	豊川家本	喜舎場孫進本
1333	天願	千代松	天願の若按司
1334	一 やあやき前よ	*	*
1335	やあ大主	やあ大主よ	*
1336	互に肝揃て	*	*
1337	働きやる故に	働かよいに	*
1338		朝夕忘りらん	
1339	親の敵かたき	*	*
1340		心安 / \ と	
1341	討捕るけふや	*	打とたる事や
1342			
1343			
1344	すきし二所も	*	*
1345	嬉しやめしやいら	*	*
1346	久志		久志の若按司
1347	一 やあ / \		*
1348	かたき討捕る		*
1349	けふの誇らしや		*
1350	押つれて互に		*
1351	踊て戻ら		*
1352			総人数
1353			一 めしやいる事
1354			躍て
1355			御供しやひら
1356			
1357			
1358			
1359			
1360	しやうんかないふし	哥	
1361	一 かたきうちとたる	*	*
1362	けふの誇らしや	*	*
1363	天のしら雲に	おし烈て互に	*
1364	のほるはかり	おとて戻ら	*
1365			
1366			
1367			
1368			
1369			
1370			
1371			
1372			
1373			
1374			
1375			

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
1		二山和睦	二山和睦
2	千代松亀千代出羽千瀬節	千代松亀千代出羽さん山ふし	千瀬節
3	一 つれなさやふたり	* (散山節)	離面二人ヒ
4	親に捨られて	* (散山節)	*
5	互にふやかかれて	* (散山節)	*
6	をるか心気	* (散山節)	*
7	千代松	千代松亀千代	*
8	一 哀れ知りめしやうれ	* (千代松亀千代)	*
9	今出る二人や	* (千代松亀千代)	*
10	南山の頭役	* (千代松亀千代)	南山頭役
11	与座の大主の	* (千代松亀千代)	*
12	兄子千代松	* (千代松亀千代)	*
13	弟子亀千代	* (千代松亀千代)	*
14	親の大主と	父親の事と (千代松亀千代)	父親ノ事ド
15	按司かなし御使に	* (千代松亀千代)	*
16	御詔事拜て	* (千代松亀千代)	*
17	北山にいまふち	* (千代松亀千代)	*
18	引よ留られて	* (千代松亀千代)	*
19		別れやいをれは (千代松亀千代)	
20	御素立よてやり		*
21	朝夕母親の		*
22	寄こと聞る		寄事ドヤヨル
23			
24	あけやうはかなさや	* (千代松亀千代)	*
25	千とあまるまでも	* (千代松亀千代)	*
26	敵の手にいまふち	* (千代松亀千代)	*
27	こめられてをれハ		*
28	此間のくれしや	* (千代松亀千代)	此レ迄ノ苦シヤ
29	いきやか又めしやいら	* (千代松亀千代)	*
30	子なゆるものや	* (千代松亀千代)	子ナトル者ヤ
31	やすてをられらぬ	やすてをられよめ (千代松亀千代)	*
32	亀千代とふたり	* (千代松亀千代)	*
33	命ちおめはまで	* (千代松亀千代)	*
34	しらぬ山国に	* (千代松亀千代)	*
35	とまひてむちからに	* (千代松亀千代)	*
36	北山の按司の	* (千代松亀千代)	*
37	御肝取直ち	* (千代松亀千代)	*
38	二人か身にかへて	* (千代松亀千代)	*
39	父親や	* (千代松亀千代)	*
40	助けほしやあもの	* (千代松亀千代)	*
41	母親にこのやう	* (千代松亀千代)	*
42	暇乞よかたて	* (千代松亀千代)	*
43	片時も急ち	* (千代松亀千代)	*
44	忍ていかに	忍て行ん (千代松亀千代)	忍デ行ン
45	亀千代	*	*
46	一 天と地の中に	*	*
47	生とる者や	*	*
48	鳥もけたものも	*	*
49	情けあるならひ	誠とある習ひ	*
50	やき前とふたり	*	*
51	人に生れとて	*	*
52	子と成る道の	*	*
53	たゝなあてからや	*	*
54	大事あらんすれば	*	*
55	おとろしやよあもの	安てをひなよめ	驚シヤアモノ
56	片時も急ち	*	*
57	とまひて行からに	*	*
58	哀れ父親よ	*	*
59	取帰ちふたり	*	*
60	人に生れたる	*	*
61	道よたてら	*	道立ラ
62	千代松	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
63	一 やあ母親よ / \	*	*
64	仲間ふし	母出羽仲間ふし	*
65	一 のかす思童へ	一 のかす玉金	一 ノガス玉金
66	ものめかほしちをる	*	*
67	おもことのあらは	*	*
68	語てきかす	*	*
69	千代松	*	*
70	一 すたし母親も	*	*
71	聞留てたはふれ	*	*
72	朝夕思尽ち	*	*
73	語ゆることに	*	*
74	亀千代とふたり	*	*
75	命ちおめはまて	*	*
76	北山の城	*	*
77	とまひて行からに	*	*
78	哀れ父親よ	哀り父親や	哀り父親ヤ
79	助けらんしゆもの	*	*
80	是非よ聞分て	*	是非ヨ聞トメテ
81	暇 <sup>マ</sup> てたはふれ	*	*
82	母親	母	母
83	一 やあなし子	*	*
84	今のことやれハ	*	*
85	誇らしやとあすか	*	*
86	あてなしのふたり	*	*
87	知らぬ山国に	*	*
88	いきやし手はなしやひ	*	*
89	ゆるちやらされか	*	*
90	我身も諸共に	*	*
91	つれていかに	*	*
92	千代松	*	*
93	一 やあ母親よ	*	*
94	男生れとて	*	*
95	年の十二三	*	*
96	あてなしとめしやうな	*	*
97	おのとしになれハ	*	*
98	いかな刀刃も	*	*
99	のよておそれゆか	のよて思きよか	*
100	母親と共に	母親もともに	母親ン共ニ
101	おし列てむきゆて	*	列テ行ヂヲトテ
102	若か路ふちに	*	*
103	怪我のともあらハ	軽我のまたあらは	怪我ノ又アラバ
104	願ておる事も	*	*
105	あたになててやり	*	*
106	不孝の罪報	*	不孝罪報ヒ
107	しのきしのからぬ	しのからぬあれは	凌ギ凌ガリミ
108	科の上に咎や	*	*
109	重なゆるつもり	重ねよるつもり	*
110	是非よ聞分て	*	*
111	頼て母親や	*	*
112	父親の御戻り	*	*
113	御待めしやうれ	*	*
114		母	母
115	一 やあなし子	*	*
116	云ること聞ハ	*	*
117	理とやゆる	*	*
118	願のことふたり	*	*
119	暇取らしゆもの	*	*
120	物思つめしちをて	*	*
121	油断するな	*	*
122		千代松亀千代	二人
123		一 母親の御志	一 母親ノ御志
124		今のことやれハ	今ノ事ヤレバ

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
125		願て行先も	願デ行先ン
126		自由とやよる	自由ドヤヨル
127	一 今のことやれハ		
128	誇らしやとあゆる		
129		母	母
130	一 親の為ともて	*	*
131	ゆるちやらしゆすか	*	*
132	いきやし思くらち	*	*
133	我身やまちゆか	*	*
134		亀千代	亀千代
135	一 やあ母親よ	*	*
136	親に孝行の	*	*
137	念力の太刀や	念力のかたな	*
138	岩やかんしきも	*	*
139	当る方ワれて	*	*
140	のよて真実の	*	*
141	あたに又なゆか	*	*
142	頓て父親よ	*	*
143	列てこんしゆもの	*	*
144	肝の願しちをて	*	*
145	御待めしやうれ	*	*
146		千代松	千代松
147	一 互に云語や	*	*
148	いやはいつきやても	*	*
149	時移ちすまぬ	時移ちすにやへらぬ	時移チスナビラン
150	御暇よしやへら	*	*
151		伊野波ふし	伊野波節
152	一 義理ともて我身の	一 義理ともてわ身や	一 義理トモテ我身ヤ
153	思きやいをすか	*	*
154	わかれゆるきハや	*	*
155	袖のなみた	*	*
156		千代松	千代松
157	一 やあ亀千代	*	*
158	陸からや今帰仁	*	*
159	程遠さあれハ	*	*
160	しらぬ山路に	*	*
161	いつし尋ねゆか	*	*
162	舟路漕渡て	*	*
163	急ちふしやの	*	*
164		亀千代	亀千代
165	一 順風のけふや	一 順風も今日や	一 順風ン今日ヤ
166	波も又ないらぬ	波もまたたゝぬ	波モ又立ン
167	真艦押風に	真ともうそ風と	マトモ押風ト
168	つれていかに	*	*
169	舟筑	*	*
170	一 いまひのから		*
171	伊計離ふし	*	*
172		一 波風の音も	
173		静なてけふや	
174		難安く渡る	
175		ざん波美崎	
176		船筑言葉并伊計離ふし	
177	一 真艦おす風に	一 真とも押風も	*
178	なみもおしそへて	*	*
179	運天のミなど	かれよしの御船の	嘉礼ヨシノ御船
180	なまとつきやる	はるかきよらさ	ハルガ清サ
181	舟筑	*	*
182	一 され運天の湊	一 され / \ 運天の港と	*
183	着へたん	*	*
184	千代松	*	*
185	一 かほし舟筑	一 かふし船筑よ	*
186	渡ちたはふち	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
187	廻り逢とぎに	*	廻ルアウ時ニ
188	またもたのま	*	*
189	舟筑	*	*
190	一 またもをかミやへら	*	*
191	千代松	*	*
192	一 やあ亀千代	*	*
193	片時も急ち	*	*
194	あの村に便て	あの村よ便て	*
195	あはれ父親の	*	*
196	行衛尋ねらに	*	*
197	亀千代	*	*
198	一 互に思尽ち	*	*
199	尋ねやひきやすか	*	*
200	若かあたならハ	*	*
201	いきやか又なゆら	*	*
202	千代松	*	*
203	一 命ちふり捨て	*	*
204	君親の為に	*	*
205	肝尽すことの	*	*
206	のよてあたなゆか	*	*
207	油断そな互に	*	*
208	物めつめて	*	*
209	住居人	津口当	居拾人
210		一 これや津口当	一 是ヤ津口當
211	一 む>舟の入ゆる様子	む>船のちよる様子	ン、船ノキヤアウル様子
212	先出てむたねハならぬ	出て見たねはならぬ	*
213		同人	
214	はひ / \ ねつたあや	一 あいねつたや	ハイニツタアヤ
215	まあからやひめしやいか	*	マアカラヤイメシヤビガ
216	千代松	*	*
217	一 哀れ此二人や	*	*
218	思事のあとて	*	*
219	遠方の島から	*	*
220	旅のものやすか	とまい / \ にきやすか	トマイ / \ ニキヤスガ
221	知る人もをらぬ	知る人やをらぬ	知ル人ヤ居ラヌ
222	頼む方なひらぬ	*	*
223	御情にしはし	*	*
224	宿からちたはふれ	*	*
225	住居人	津口当	居住人
226	一 あ>宿かひめしやうらしゆや	一 む>宿かいめしやうらしよすや	一 ン、宿カイメシヤウラシユスヤ
227	手易ひ事	*	*
228	先まあの国のうむて	*	*
229	いやれめしやいる人のきやあか	*	*
230	御二所の御様子	*	御二人ノ御様子
231	細々と語てたはふれ	*	*
232	千代松	*	*
233	一 此上よやれハ	*	*
234	隠ちかくさらぬ	*	*
235	南山の頭役	*	*
236	与座の大主の	*	*
237	兄子千代松	*	*
238	弟子亀千代	*	*
239		父親の事と	父親ノ事ド
240		拾年余るまでん	拾年余ル迄モ
241		御引留おかれ	御引トメウカリ
242		別れやいをすか	別レヤイ居レバ
243		いきやる有様に	イチヤル有リ様ニ
244		なやいまたいまいか	ナヤヒ又イマイガ
245		しれめしやうきまいらは	知り召チマメラハ
246		かたてたはふり	語テ賜リ
247	住居人	津口当	居拾人
248	一 あ>与座の大主の	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
249	思子のきやあと	*	*
250	やいめしやいるひ	*	*
251	むゝ得と拝てむてハ	*	*
252	まあもかはらぬ	*	*
253	よう似ちいまひんしやいん	よう似ちいまいんしやいへいん	*
254	あゝねつたあや拝てむてハ	ねつたあや拝て見ては	*
255	年頃十二三の御様子	*	*
256	あゝさて	ねつたあ	ニツタア
257	親かなしとの別れかたや	*	*
258	先ものにととてむてハ	まつ物にととてむたは	先物ニタトテンタイ
259	ちやうと二所共	ニ所共	*
260	鳥小のひや / \ しゆる	*	*
261	時分とやたひすか	時分やたらはつやすか	時分トヤタラ管ヤスガ
262	人の親子やたいんなもの	*	*
263	なしおとつて	なし落さつて	ナシウトサツテ
264	親やのふ	親の御姿や	親ノ御姿タヤ
265	あてもなひらぬしゆて	*	*
266	あてなしのきやの	*	*
267	こかとふついもしらぬ所んかひ	*	*
268	親拝ミいかむて	親拝みいかまいん	親拝メイガ
269	いまひんしやうち	しやうち	イマインシヤウチヤンナ
270	なあおんさうかいや	あゝ御無蔵かいやあ	アヽンザウガヘヤ
271	たうものさうすや	たう御世話や	トウ御シハヤ
272	しめんしやうんな	めしやうんな	召ンナ
273	先おかんちうたやへる	まつ御岩重たやへん	先御岩重ダヤビンド
274	又ねつたあ親かなしいと	ねつたあ親か那志と	*
275	十一年なての三四月頃	*	*
276	南山の御使に	*	*
277	まひんしやうちやれハ	*	*
278	按司の御側に	*	*
279	物巧ミしやうる	*	*
280	親泊大主むて	*	*
281	いやれる人の	*	*
282	按司に色々美よんにゆけて	*	*
283		与座の大主と	与座ノ大主ト
284		南山の名将	南山ノ名将
285		これとん取こて置は	是ドン取込デ置ケバ
286		いかな南山の	イカナ南山ノ
287		物巧ミしちん	物巧シチン
288		やうひに事や起さぬつもり	容易ニ事ヤ起ン積リ
289		むての分別やて	ンデノ分別ヤテ
290	与座引とめて		
291	南山の様子		
292	仔細聞合しゆる分別やて		
293	按司からの御心実	*	*
294	段々のこと	*	*
295	又十七八の	また拾七八なよる	又十七八成ル
296	女性方拝領やて	女性拝領やて	真盛ノ女性カタ拝領ヤテ
297	度々御酒盛	*	度々ノ御酒盛り
298	大主の御取持	*	*
299	大粧至極むちや	*	*
300	大主も果報な人たやへる	果報な人たやへる	果報ナ人ダヤビル
301	あんし大主も		
302		やんとも古郷わすらぬ	ヤンドン故郷ヤ忘ラン
303	御暇みよんにゆける	度々御暇みよんによけよとん	度々御暇御ニヨケンドン
304	隙やないらぬ		
305		御返事のさからぬ	御返事ノサガラン
306	けふの明日ない	*	*
307	明日のあさてなひ	*	*
308	頓て夫婦の縁につなかつて		シヨル内ヤガテ夫婦ノ縁ニツナガレテ
309	あけての冬にや	しよる内明ての冬にや	*
310	男子繁昌	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
311	弥事六ヶ敷ない立		*
312	又々次年にや	*	*
313	次男迄なし出しめしやうち	*	*
314	おれからや御めいとんたの中	おれからや	*
315	又思子のきやあの	おの男子のきやあの	*
316	かちすかり / \ しめしやうれハ	かきすかり / \	*
317	故郷の事も	又古郷の妻子のこと	故郷ノ妻子ノ事モ
318	思出し / \	*	*
319	なしよたれしめしやいす聞ハ	*	*
320	あゝ至極哀れたやへる	あゝ与所なからぬ至極哀れたやへる	アゝ与所ナガラン至極哀リダヤビル
321	千代松	*	*
322	一 やあ亀千代	*	*
323	ふたり命はまで	*	*
324	とまひ / \ にきやすか	*	*
325	今のことやれハ	*	*
326	いきやかしゆら	*	*
327	亀千代	*	
328	一 やあやき前よ	*	
329	兎角此国に	*	
330	いちまてもとまで	*	
331	むすてある縁に	*	
332	思ひ引されて	*	
333	妻なし子捨て	*	
334	隠れやひいまひら	*	
335	捨られる親子	*	
336	いきやかしやへら	*	
337		上ケ七尺ふし	揚七尺ブシ
338		一 捨てられる親子	一 捨ラレル親子
339		いきやかしやへら	イチヤガシヤビラ
340	住居人	津口当	居拾人
341	一 あゝ人の上むてもおもあらぬ	*	一 アゝ人ノ上ンデン思ラヌ
342	され此ことやいへも	*	*
343	御世話あめしやうむな	御世話やめしやうんな	御世話ヤ召ンナ
344	なまさきおんにゆけよたる	*	今先ウンノキイル
345	大主のあやあと	*	*
346	むちゆなての若夏に	*	*
347	此世見捨やへて	*	*
348	おれからや大主も	*	*
349		おの思子のきやにかゝられて	ウノ思子ノチヤニカハラッテ
350	思子のきや引進の為	ゑこる思子のきや引進ミの為	イ、コル思子ノキヤ引進ノ為
351	大原ニ出て	*	*
352	鎌手唐て	鎌長刀	ヤイ長刀鎌手唐手
353	鎌長刀不足なく	鎌手とう手不足ないん	不足無ク
354	武芸の数々	*	*
355	御嗜ミの御様子	*	*
356	おの事と大主や	*	*
357	跡先帰ゆすや	*	跡先マヘスヤ
358	合点やこと	*	合点ヤテ
359	子のきあかに	思子のきやに	御思子ノチヤニ
360	武芸御指南めしやうち	*	*
361	按司の御腰立	*	南山ノ按司ノ美腰立
362	からめかしゆる	からめかしめしやいる	*
363	御計むていやへん	*	御計ンデイヤビンダウ
364	此事や按司に	とう此事や按司に	*
365	願筋美よんにゆけて	*	*
366	済ぬかきりやきやしもならぬ	*	*
367	なまつんとゑひ拍子やすや	*	*
368	按司の大將に	按司の大將	按司ノ大將
369	謝名の太主むていふる人の	*	謝名ノ大主ンデイヨル人ノ
370	このころ按司に	*	*
371	まる云しち	度々諫事しち	度々諫事シキ
372	御仕置もゑひころ取直ち	*	御仕置井ヘクル取直キ



No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
373	与座も早く国元に	*	*
374	かへしめしやいることむて	*	*
375	おんにゆけめしいる	*	*
376	場所むていやへん	*	*
377	片時も早く	*	*
378	願ひ立めいやいへれ	*	*
379	千代松	*	*
380	一 今のことやれハ	*	*
381	誇らしやとあゆる	*	*
382	やあ / \	*	*
383	引合しの御縁	*	*
384	拝む御情けに	*	*
385	段々の肝入	*	段々ノ御肝入
386	いちも尽さらぬ	*	*
387	此御恩一期	*	*
388	ちゝにかめら	*	*
389	住居人	津口当	居住人
390	一 たうけふや先	*	*
391	我宿におんつかいしち	*	*
392	御休 [欠] めしやうち	御休息めしやうち	御休息メシヤウチ
393	明日にしち随分	*	*
394	御願濟しめしやい [欠]	御願濟ましめしやいへれ	御願濟シメシヤビリ
395		先御入れめしやいへれ	先御入メシヤビレ
396		与座の大主	与座
397	一 是や南山の臣下	*	*
398	与座の大主	*	*
399	あゝ国々 [欠] 按司部	あゝ国々の按司部	アゝ国々ノ按司部
400	勢ひ争やい	*	*
401	軍事起ち	*	*
402	国よ疲らしゆる	*	国ヨツカラシヨシ
403	ワか主人按司	我主人按司の	我ガ主人按司ノ
404	やすてやすまらぬ	捨置やならぬ	捨置ヤナラン
405	南山十五ヶや	南山の十五ヶや	南山ノ十五カヤ
406	討よ平けて	*	*
407	先や四方の海	今や波風も	今ヤ波風ン
408	波風も立ぬ	静なてをれハ	静ナテヲリバ
409	按司の御喜び	*	*
410	御万人のまきり	御万人のあんど	御万人ノアンド
411	安て楽ミゆる		
412	時と又やすか		
413		やよれとも	ヤヨリトモ
414	北山や今に	*	*
415	軍事やまぬ	*	*
416	殊に南山たはかゆる	*	*
417	含ミてやりあれは	*	*
418	此事よ主人按司		
419	御気の毒めしやうち	朝夕御気の毒	朝夕御気ノ毒
420		身にあまてをとて	身ニアマテヲトテ
421		よくしまの心	ヨクシマノ心
422	たかいにあらそいの		
423	こゝろとりおさめ	互に取治め	互ニ取治メ
424	北山と南山	*	*
425	和睦なるやれは		
426	御万人のまきり		
427	上下もともに		
428	いちこたのしみに		
429	くらそてやりともて		
430		こゝ打合ち	心打合チ
431		四方の上下も	四方ノ上下モ
432		静なることに	静ナル事ニ
433	美よんきをかて	みよんき事拝て	メヨンキ事拝テ
434	きやる事やすか	きやる事よやすか	キヤル事ヨヤスガ

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
435	十年あまるまでも	*	*
436	ひきよとめられて	*	*
437	何分の御返事	*	*
438	たえて【なひぬ】(なひぬ) あれは	*	*
439	いたつらに年月	*	*
440	おくるしんき	*	*
441		あゝ口惜や	ア、口惜ヤ
442	いちやんてやりきやしゆか	いや言きやんてやりきやしよか	イヤ言キヤンテヤリキヤシヨガ
443		無常の世の習や	無常ノ世ノ習ヤ
444	武士の身の習ひの		
445	心うつしちをて		
446	くらちをてひならぬ		
447	けふや名にたちゆる	*	*
448	三月の三日	*	*
449	なれしふるさとの	*	*
450	名残たちまさて	*	*
451	子共ひきつれて	*	*
452	遊てわすら	*	*
453	やあ / \ 虎千代	*	*
454	虎松も押つれて	*	*
455	出やうれ / \	*	*
456			
457	与座道行言葉	与座の大主	
458	一 野原出て見れハ	*	*
459	千種萌出て	千原盛り出て	*
460	吹送る風の	*	*
461	匂のしほらしや	*	*
462	たう / \ 此辺にをとて	*	*
463	花よ詠めらに	*	*
464	同人	*	
465	一 やあ / \ なし子	一 やあなし子	ヤアナシ子
466	春の草の葉や	春の草の葉も	春ノ草ノ葉ン
467	みとりさしそひて	*	*
468	見れハとし寄も	*	*
469	わかくなゆさ	*	*
470	虎千代	*	*
471	一 やあ父親よ	*	*
472	又も春来れハ	めくて春くれは	*
473	木草たいもしゆひ	*	*
474	やかて父親も	*	*
475	むかしくり戻ち	*	*
476	花さきゆる節も	*	*
477	あひとしやへる	*	*
478	与座		
479	一 されば / \		
480	与座	与座の大主	*
481	一 やあ / \	一 やあなし子	一 ヤア / \ 産子
482	けふ【や】(の) 誇らしやゝ		今日ノ誇ラシヤノ
483	物にたとられめ	*	*
484	たう / \ 習ひとたる手並	*	ナリトタル手並
485	振立て見せれ	*	振りタキヤイ見シリ
486	虎千代	虎千代とら松	二人
487	一 おう	一 御礼(虎千代虎松)	一 拝留ヤヒテ(虎千代虎松)
488			
489		あけつくていんふし	アケツクタンフシ
490		一 武士の身や空に	一 武士ノ身ヤ空ニ
491		とふ鳥のこゝろ	飛鳥ノ心
492		みつめても手にや	ミツメテン手ニヤ
493		取やならぬ	取ヤナラン
494		与座の大主	与座
495		一 あゝ出来た / \	一 ハアデケタ / \
496			

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
497		虎千代虎松	
498		一 御礼	
499	与座	与座の大主	同人
500		一 今日の誇らしやゝ	今ノ誇ラシヤゝ
501		ものにたとられめ	物ニタトラレメ
502	一 たう / \ 習ひとたる手並	*	*
503	残らすに見せれ	*	*
504		虎千代とら松	
505		一 御礼	
506		附 此時虎千代唐手虎松鎌手島切手毎	
507	与座		同人
508	一 あゝ出来た / \		一 ハアデケタ / \
509	与座		
510	一 やあ / \ 虎松もひとつ		
511	振立ひ見せれ		
512	虎松		
513	一 おう		
514	与座	与座の大主	
515	一 あゝ出来た / \	*	
516		虎千代とら松	
517		一 御礼	
518	虎千代	虎松	*
519	一 やあ父親よ	*	*
520	南山もけふや	南山のけふや	*
521	此遊びあやへひめ	*	*
522	与座	与座の大主	*
523	一 南山もけふや	*	一 南山ノ今日ヤ
524	段々の遊び	色々の遊び	*
525	野原から浜辺	*	*
526	歌や舞ひ遊て	歌や舞遊ひ	*
527	是よりも増る	*	*
528	にきやかとやゆる	*	*
529	虎松	虎千代	虎千代
530	一 やあ父親よ	*	*
531	おれ程の増る	おれふともまさる	*
532	国やてと兎角	*	*
533	一期南山の	*	*
534	沙汰よめしやら	沙汰よめしやいら	*
535	与座	与座の大主	*
536	一 いや / \	*	*
537	おか達かおのほとに	*	*
538	なやいまたをれハ	*	*
539	南山の事も	*	*
540	いちゆて慰ミゆん	*	*
541	互に云語ひや	*	*
542	いつまでもあかぬ	*	*
543	日も暮ていきゆひ	日もさかてをもの	日モサガテヲモノ
544	てよ / \ 宿に戻ら	*	*
545	恩納ふし	与座の大主	*
546	一 戻る道すから	*	*
547	かたるいこと葉や	*	*
548	きゝゆる袖までも	*	*
549	露とおきゆる	*	*
550	千代松亀千代出羽長金武ふし	千代松亀千代道行金武ふし	長金武節
551	一 情けある人の	*	*
552	ことの葉の匂ひ	*	*
553	便て行先や	*	*
554	頼む親泊	*	*
555	今と御城元	*	*
556	尋て着る	*	*
557			千代松
558			一 トウ / \ 御取次スラニ

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
559	亀千代	*	同人
560	一 御門番取御取次頼ま	一 御門番衆御取次頼ま	一 御門番衆御取次頼ま
561		門番	門番
562	一 たるかやいめしやいら	*	*
563	千代松	亀千代	*
564	一 南山の臣下	*(亀千代詞)	*
565	与座の大主の	*(亀千代詞)	*
566	兄【弟】子千代松	嫡子千代松(亀千代詞)	嫡子千代松
567	弟子亀千代	*(亀千代詞)	*
568	按司かなし拝て	*(亀千代詞)	*
569	願事のあとて	*(亀千代詞)	*
570	よしれやいをる次第	*(亀千代詞)	*
571	御取次頼ま	*(亀千代詞)	*
572			
573	よたしや有様に	*(亀千代詞)	*
574	おんにゆけてたはふれ	*(亀千代詞)	*
575	門番	*	*
576	一 此様御取次しやへら	*	*
577	同人	*	門番
578	一 され拝まれよめしやいん	*	*
579	これにいまふれ	是にぬめしやうれ	是レニ入レ召リ
580		北山の按司	按司
581		一 やあ/\	一 ヤア/\
582		わらへあてなしの	童ビアテナシノ
583		二人押列て	二人押烈テ
584		いきやる願事の	イチヤル願事ノ
585		あとてつちやか	アトテ着ガ
586	千代松	*	*
587	一 哀此二人や	*	*
588	与座の大主の	*	*
589	兄子千代松	*	*
590	弟子亀千代	*	*
591	父親の事と	父親の事や	父親ノ事ヤ
592	十と余る道も	*	*
593	御引留られて	御引留おかれ	*
594	別やいをれハ	*	*
595	いきやるいきなひに	いきやる有様に	イキヤルアリ様ニ
596	なやい又いまひら	*	*
597	思ひ身にあまて	*	*
598	肝もきもならぬ	*	*
599	亀千代とふたり	*	*
600	命ち思はまて	*	*
601	波路はる/\と	*	*
602	よしれやいきやへたる	*	*
603	慈悲よ父親や	*	*
604	ゆるち給ふれ	*	*
605	若かおゆるしの	*	*
606	ならぬ事やらハ	*	*
607	此二人やこまに	*	*
608	引よ留めしやうち	御引留めしやうち	御引留召チ
609	是非共に父親や	*	*
610	ゆるち給ふれ	*	*
611	亀千代	*	*
612	一 やあ按司かなし	*	*
613	やき前とふたり	*	*
614	人に生れとて	*	*
615	子と成道の	*	*
616	立なあてからや	*	*
617	天道の下をとて	*	*
618	おとろしやよあもの	*	*
619	頼て願事や	*	*
620	美よんにゆかてたはふれ	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
621	按司	*	*
622	一 あゝ童へあてなしの	*	*
623	願事のしほらしや	*	*
624	聞る袖造も	*	*
625	露とおきゆる	*	*
626	やあ千代松亀千代	やあ千代松やあ亀千代	ヤア千代松ヤア亀千代
627	屹度片付て	*	*
628	返事よさんしゆもの	返事やさんしよもの	返事ヤサンシヨモノ
629	おの内や先	*	*
630	客屋に扣てをれ	*	*
631	やあ仲宗根のひや	*	*
632	急ち客屋につれていけ	*	*
633	仲宗根のひや	*	*
634	一 をかんちゆめやへて	*	*
635	同人	*	*
636	一 たう / \	*	一 タウト / \
637	御供しやへら	*	*
638	按司	*	*
639	一 やあ / \	*	*
640	ふたりおしつれて	*	*
641	今のことやれは	*	今ノ願事ヤ
642	きやああれはすミゆか	いちやあれは済よか	イキヤアレバ済ガ
643	考てきかす	考てむてよ	考テンデヨ
644	【惣人数】		
645	【一 おう】		
646	惣人数		
647	一 おう		
648	親泊大主	*	親泊
649	一 され按司かなし	*	*
650	与座の大主と	*	*
651	此国の様子	*	*
652	細々の事も	*	*
653	呑込いをやへれハ	呑んくみやいをれは	呑ンコメイ居レバ
654	若か南山の	若か南山に	*
655	取帰ち後に	*	*
656	御恩うち背ち	*	*
657	物巧ミあらハ	*	*
658	事や六ヶ敷	*	*
659	成る積り	*	*
660	親子諸共に	*	*
661	引よ留置て	引よ留置い	引ヨ留置バ
662	年月よ重ね	*	*
663	御恩蒙らハ	*	*
664	世々の御譜代	*	*
665	同前に思て	*	*
666	按司かなし御奉公	*	*
667	思はまる筈たひもの	*	*
668	此筋に御片付	*	*
669	およたしやゝあやへらに	*	*
670	仲宗根のひや	*	仲宗根
671	一 親泊いやれること	*	*
672	此国の仕置	*	*
673	事洩てすまぬ	事洩て済へらぬ	事洩テ済ビラヌ
674	急ち此事や	急ち此事に	*
675	御究よめしやうれ	*	*
676	按司	*	*
677	一 一段なことよ / \	一 一段なこと / \	*
678	やあ / \	やあ	ヤア
679	謝名の大王や	*	*
680	いきやか / \	*	*
681	謝名の大王	*	謝名
682	一 され此事や兼々	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
683	美よんにゆけることに	*	*
684	南山の御所存	*	*
685	考てミヤへれハ	*	*
686	北山と南山や	*	*
687	共に天かめて	*	*
688	互に地やふまぬ	*	*
689	敵や又あらぬ	*	*
690	一時の威勢	*	*
691	争の為に	*	*
692	国よ疲らしやひ	*	*
693	人よそくなとて	*	*
694	軍事しゆすや	*	*
695	道ならぬあれハ	*	*
696	互に此間の	*	*
697	恨ミ打忘て	*	*
698	島国の為に	*	*
699	御計のあすと	*	*
700	御是非ある御代の	*	*
701	御主人の印し	*	*
702	急い道に向て	*	*
703	心実の御相談	*	*
704	仕合やおまな	*	仕合トウマナ
705	肝くらさ巧て	*	*
706	親子諸共に	*	*
707	引よ留置ハ	*	*
708	光ある御名や	*	*
709	南山にあとて	*	*
710	北山の悪名	北山や悪名	*
711	流ゆる程り	*	*
712	又いかな按司添の	*	*
713	慈悲の肝かさて	*	*
714	色々の情け	*	*
715	たへめしやうちてやり	*	*
716	人の御臣下の	*	*
717	誠絶果て	*	*
718	こまに肝寄る	*	コマニ又クマニ肝寄ル
719	事や又なひさめ	*	*
720	いらぬ慈悲尽ち	あゝいらぬ慈悲尽ち	ア、イラ慈悲尽チ
721	あたなとるものも	あたちよるものも	アダナトル事ン
722	むかしから今に	*	*
723	数やしらぬ	*	*
724	片時も急ち	*	*
725	御暇よたはふれ	*	*
726	天底の子	*	天底
727	一 やあ大主	*	*
728	計略偽の	*	*
729	世の中よやれハ	*	*
730	たゝ真肝しちをて	*	*
731	たまされてすまぬ	*	*
732	南山の様子	*	*
733	みすく取究め	*	*
734	兎角片付や	*	*
735	ある筈よたひもの	*	*
736	おの内やまつ	*	*
737	留ておきやへらに	*	留テ置ヒラ
738		謝名の大王	
739	一 やあ天底の子	*	*
740	人のことの葉や	*	*
741	胸内の割府	*	*
742	いこと葉の上に	*	*
743	肝の底までも	*	*
744	探りきる程の	*	探シキル程ノ

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
745	智高けなひぬあれハ	*	*
746	いきやし島国の	*	*
747	治め又なゆか	*	*
748	亀千代か今の	南山の按司の	南山ノ按司ノ
749	御使の御趣意	*	御使ノ御意趣
750	又千代松亀千代か	*	*
751	今の願立や	*	*
752	誠真実の	*	*
753	心から出て	*	*
754	偽の巧ミ	*	*
755	絶てないぬあすや	*	*
756	取よ究めとん	*	*
757	取よ定めとん	*	*
758		謝名の大王	
759	され按司かなし	*	*
760	むかしから今に	*	*
761	治まとる御代や	*	*
762	君臣下ともに	*	*
763	義理の道守て	*	*
764	島国の治	*	*
765	道直にあとて	*	*
766	御万人もおれ / \ の	*	*
767	願事も遂て	*	*
768	義理の道筋も	*	*
769	取堅守て	堅取守て	*
770	御主人の御為	*	*
771	島国の為に	*	*
772	命ち捨ゆすや	*	*
773	露ちらすことに	*	*
774	思果そゆへと	*	*
775	いかな武士国の	*	*
776	太刀かたなてすも	刀刃よてすん	刀刃ヨテスモ
777	のよておそれゆか	*	*
778	誠天道の	*	*
779	御慎あとて	*	御慎メアテモ
780	島国の仕置	*	*
781	御念入めしやうち	*	*
782	人のよしあしも	*	*
783	さやか照りワかち	*	*
784	よたしやすや揚て	*	*
785	わるさすや捨て	*	*
786	いさめこと好て	荒ミ事嫌て	ソザメ事嫌テ
787	そさめこと嫌て	諫事好て	イサメ言好テ
788	人の口開ち	*	*
789	人の肝あけて	人の胸明て	*
790	義理の御捌の	*	*
791	道広てからや	*	*
792	跡影【も】よ隠す	*	跡カジヨ隠キ
793	深山住人も	*	*
794	走よ集まやひ	*	*
795	ワか御主の御為	*	*
796	誠肝尽ち	*	*
797	働かな置め	*	*
798	照り増る光	*	*
799	出る日のことに	*	*
800	四方の海山も	*	*
801	洩るかたなひらぬ	*	*
802	恵ミ照渡て	*	*
803	諸離や諸島	*	*
804	海に舳渡	海に船渡り	*
805	山に橋かけて	*	*
806	みつきものあけて	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
807	御詔事拝て	*	*
808	異変事なひらぬ	*	*
809	そむくものをらぬ	*	*
810	御万人のまきり	*	*
811	生楽よ誇て	*	*
812	弓矢取治め	*	*
813	軍さ事やめて	*	*
814	上下の治め	*	*
815	かためやい置は	*	*
816	いきやし道背ち	*	*
817	弓引のされか	*	*
818	急ち此事や	*	*
819	御究めよめしやうれ	*	*
820	按司	*	*
821	一 あゝ義理情け尽ち	*	*
822	謀ゆる事や	*	*
823	肝にひし／＼と	*	*
824	感してとをゆる	*	*
825	天底	天底の子	*
826	一 あゝ此上や存す	一 あゝ此上や存寄	一 ア、此ノ上ヤ存寄
827	絶てあやへらぬ	*	*
828	親泊	親泊大主	*
829	一 され按司かなし	*	*
830	大主の計	大主の計事	大主ノ計事
831	気のつかぬあやへたぬん	*	*
832	誠我々の	*	*
833	おとさあるゆへと	*	ウトサアル故ニ
834	目の前勇力の	*	目ノ前勇ノ
835	只一事たので	*	*
836	遠く計ゆる	*	*
837	智高けなひぬあれハ	智高ないぬあとて	智高ケナインアトテ
838	御耳聞らしやひ	*	*
839	御肝つてあもの	*	*
840	御咎めやひらに	*	*
841	をかんちゆめやへら	*	押留ヤビテ
842	按司	*	*
843	一 いや／＼	*	*
844	おれうれもよたしや	*	*
845	いつれ肝そろて	*	*
846	忠節の心	*	*
847	ふかさあるゆへと	*	*
848	はめて諫ゆる	*	*
849	肝の根のしほらしや	*	*
850	又互に胸くたち	*	*
851	謀めたることの	計らたることの	*
852	たちたゝぬことや	*	*
853	我身に又あれハ	*	*
854	のよておかたちに	*	*
855	咎のかけられか	*	*
856	此事にいへも	此事やいへも	*
857	気遣はしするな	*	*
858		按司	*
859	やあ謝名の大主	*	*
860	くらさある主人	*	*
861	頼てをるやれハ	*	*
862	たとひ気にさかて	*	*
863	腹立よしちも	*	*
864	押かへし／＼	*	*
865	諫めやい呉れよ	*	*
866	闇の灯火の	*	*
867	道しるへ頼ま	*	*
868	此間のあやまり	*	*



No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
869	気の毒とやゆる	*	*
870	謝名	謝名の大王	*
871	一 あゝ美よんきこと拝て	*	*
872	袖とぬらしやへる	*	*
873	人の御主人の	*	*
874	沙汰されるものや	*	沙汰サレモノヤ
875	昔から今に	*	*
876	ためし数あすか	例し数あすや	*
877	あやまのあとて	あやまれのあとて	*
878	御異見よすらハ	*	*
879	御語よめしやうち	*	ウサトヘメシヤウチ
880	御肝あらためて	*	*
881	御油断のないらぬ	*	*
882	御守りのあすと	*	*
883	御慈悲ある御代の	御慈悲ある御主の	御慈悲アル御主ノ
884	光あらはれて	*	*
885	世々のよゝとゝめ	*	*
886	御名や朽やらぬ	*	*
887	あゝなまの御詔事	あゝけふのみよんき事	*
888	拝て御万人や		*
889	有難さ思て		*
890	目眉打笑て		*
891	向て来る顔も	*	*
892	目の前引寄て	*	*
893	北山の榮る	*	*
894	しるしたやへる	*	*
895	按司	*	*
896	一 や大王	一 やあ大王	一 ヤア謝名ノ大王
897	南山に遣ハしゆる	*	*
898	返書調らす	*	*
899		また与座の大王の	又与座ノ大王ノ
900		親子急ち呼されれ	親子急チ呼サレハ
901	謝名	謝名の大王	謝名グリ
902	一 おうやあ天底の子	一 やあ天底の子	一 ヤア天底ノ子
903	急ち調やひ	*	*
904	上てきやうれ	*	*
905	又千代松亀千代	*	*
906	列てくう	*	*
907	天底	天底の子	*
908	一 おう	一 拝留やへて	一 拝留ヤビテ
909		謝名の大王	謝名
910	一 やあ仲宗根のひや	*	*
911	与座の大王	*	*
912	急ち呼てきやうれ	*	*
913	仲宗根	仲宗根のひや	*
914	一 拝留やへて	*	*
915	仲宗根	同人	同人
916	一 与座の大王	*	*
917	列てきやへたん	*	*
918	按司	*	*
919	一 やあ大王	*	*
920	つかいしめたすや	*	*
921	別事やあらぬ	*	*
922	尋ねほしやあてと	*	*
923	呼ちむちやる	*	*
924	与座	与座の大王	*
925	一 あゝのふ事か急ち	*	*
926	仰すめしやうれ	*	*
927	按司	*	*
928	一 大王や南山に	*	*
929	なし子いくたひか	*	*
930	与座	与座の大王	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
931	一 男子ふたりたやへる	*	*
932	按司	*	*
933	一 兄子千代松弟子亀千代へ	*	一 兄子千代松弟子亀千代
934	与座	与座の大主	*
935	一 扱々いきやし按司かなし	*	*
936	知りめしやうちいまひら	*	知り召チイマイガ
937	按司	*	*
938	一 おの事とやゆる	*	*
939	大主よ尋ひて	*	*
940	ふたり押列て	*	*
941	遙々とこまに	*	*
942	渡てきちをん	*	*
943	呼寄てあれハ	*	*
944	頓てこんしゆもの	*	*
945			天底
946			一 サリ烈テキヤビタン
947	千代松亀千代	南山の兄子	*
948	一 やあ父親よ	*	*
949	父	*	与座
950	一 やあなし子	*	*
951	東江ふし	*	*
952			一 親子振合チヤス
953	一 あけゆめかやゆら	*	夢ガヤヨラ
954			天底
955			一 サレ上ゲヤビラ
956			按司
957			出来タ / \
958	与座	父	*
959	一 やあなし子	*	*
960	赤子の時分	*	*
961	別れやいをれハ	*	*
962	哀れ面影も	*	今ノ面顔モ
963	夢現心	*	*
964	行逢ててやり知よめ	*	行逢テ、ヤヒ知ラス
965	いやなあれハ	いやなかあれハ	*
966		千代松	千代
967	一 やあ父親よ	*	*
968	赤さての内に	*	*
969	振別れてをれハ	*	*
970	いきやかなたいまひら	*	*
971	音伝もなひらぬ	*	*
972	思ひ身に余て	*	*
973	肝もきもならぬ	*	*
974	亀千代とふたり	*	*
975	命ち思はまで	*	*
976	しらぬ此国に	*	*
977	とまひ / \ にきやすか	とまい / \ よきやすか	*
978	誠拜ゆすや	*	*
979	夢かやゝへひら	*	*
980	按司	*	*
981	一 やあ千代松	*	*
982	やあ亀千代	*	亀千代
983	親の為ともて	*	*
984	波路遙々と	*	*
985	渡てきある心	*	*
986	感してとをゆる	*	*
987			
988	やあ大主	*	*
989	此間やおれ / \ の	*	*
990	片付かぬあてと	*	片付ノアテド
991	留置もあたる	*	*
992	にやゝかたつきて	*	*

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
993	暇とらしゆもの	*	*
994	親子押列て	*	*
995	誇て立戻れ	*	*
996	踊てたちもとれ	*	
997	父千代松亀千代	父并千代松亀千代	親子三人
998	一 あゝたうと	*	*
999	千代松	*	
1000	一 願たこと叶て	*	願タ事計テ(親子三人詞)
1001	誇らしやとあやへひる	*	*(親子三人詞)
1002	此御恩一期	*	*(親子三人詞)
1003	ちゝにかめやへら	*	*(親子三人詞)
1004	按司	*	*
1005	一 やひ大主	一 彘ひ大主	一 エイ大主
1006	国元にかは	*	*
1007	按司に首尾方や	*	*
1008	是々よたしやある様に	*	*
1009	計やひ給ふれ	*	*
1010	与座	父	*
1011	一 拝留やへて		*
1012	親子ふやハしやひ	*	*
1013	錦うち重ね	*	*
1014	立帰るけふや	*	*
1015	誇らしやとあすか	*	*
1016	あてなしのふたり	*	アテナシノ二人ヤ
1017	いきやかしゆゝら	*	*
1018	北山ノ子兩人虎千代	北山の子兩人	虎千代
1019	一 やあ父親よ	*(虎千代虎松詞)	*
1020	ワ身も諸共に	*(虎千代虎松詞)	我身モ諸共
1021	列て給ふれ	*(虎千代虎松詞)	*
1022	虎松		*
1023	一 わめもつれいかに		*
1024	やあ父親よ		*
1025	按司	*	*
1026	一 やあ / \	*	*
1027	おか達やこまに	*	*
1028	生れたるものよ	生れとるものよ	*
1029	南山にいきゆる	*	親烈テ行ル
1030	道や又なひらぬ	道やまたないさめ	道ヤ又ナイサメ
1031	たう / \	*	*
1032	けふからや明日からや	*	*
1033	我が側におちやひ	我が側に置て	*
1034	おの素立しちをとて	*	*
1035	楽よ誇らしゆん	*	*
1036	思とまでをりよ	*	*
1037	虎千代	*	*
1038	一 やあ按司かなし	*	*
1039	哀れ此二人や	*	*
1040	こまに生れとて	*	*
1041	素立をる事や	素立あることや	素立アル事ヤ
1042	めしやいることやすか	*	*
1043	親や南山の	*	*
1044	御臣下よやゆる	御臣下とやよる	*
1045	素立てやり一期	*	*
1046	をいの又なゆめ	*	*
1047	是非よ知めしやうち	*	*
1048	ゆるちたはふれ	*	*
1049	虎松	*	*
1050	一 やあ父親よ	*	
1051	母親にたひんす	*	*
1052	捨られて居とて	捨られてをすか	*
1053	又も父親の	*	*
1054	捨てまひんやれハ	*	捨テマイルヤラバ

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
1055	やき前とワ身や	いきやし暮しやへか	イチヤシ暮シヤヒガ
1056	いきやかしやへら	舎兄前とわんや	舎兄前ト我メヤ
1057	千代松	千代松亀千代	*
1058	一 やあ父親よ	*	*
1059	すたし母親も	*	*
1060	待兼ていまひん	*	*
1061	片時も急ち	*	*
1062	御暇よしやへら	*	*
1063	亀千代	*	*
1064	一 たう / \	*	*
1065	御暇よしやへら	*	*
1066		御立めしやうれ	御立召リ
1067		与座の大主	
1068		一 とう / \ 御暇よしやへら	
1069		虎千代とら松兩人	
1070		一 我身もつりに	
1071		やあ父親よ	
1072			虎松
1073			一 舎兄前ト我シ捨テ
1074			マカイ、マイガ
1075	虎千代		*
1076	一 虎松もともに		*
1077	つれて給ふれ		*
1078	虎松		
1079	一 舎兄前とワ身すてゝ		
1080	まかひいまひか		
1081	与座	与座の大主	*
1082	一 あゝ哀れはかなさや	*	*
1083	ふたつなひぬワ身の	*	*
1084	片時やならぬ	片付やならぬ	片付モナラヌ
1085	中にはさまれて	*	*
1086	我肝くら闇に	*	*
1087	なるか心気	*	*
1088	さん山ふし	あけ七尺ふし	
1089	一 ふたつなひぬワ身の	一 片付やならぬ	
1090	中にはさまれて	中にはさまりて	
1091	こゝろくら闇に	我きもくらやみに	
1092	なるかしんき	*	
1093	按司	*	*
1094	一 あゝ人の上とやすか	*	*
1095	かにもつれなさめ	*	*
1096	互に鳴暮ち	*	*
1097	くつさしちをれは	*	*
1098	誠留置る	*	*
1099	肝の忍はらぬ	*	*
1100			ヤア大主
1101	二人共にいとま	*	*
1102	ゆるちやらしゆもの	*	*
1103	親子諸共に	*	*
1104	押列ていまふれ	*	*
1105	親子共	父并子共惣人数	親子三人
1106	一 あゝたうと	*	*
1107	与座	与座の大主	*
1108	一 やあ按司かなし		*
1109	身に余る御恩	*	*
1110	打重 / \	*	*
1111	誠かや実か	*	*
1112	嬉しさのあまり	*	*
1113	誠てもおまぬ	*	*
1114	やあ按司かなし	*	*
1115	此御恩たうとさや	*	*
1116	いつし忘れゆか	*	イツシ忘ヤビガ

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
1117	国元にかかは	*	*
1118	年々の始	*	*
1119	ワか主人按司の	*	*
1120	十百歳のおかほ	*	*
1121	願て又親子	*	*
1122	この国に向て	*	*
1123	按司かなしおかけほさへ	*	*
1124	願よあけやへら	*	*
1125	千代松亀千代	千代松	
1126	一 やあ按司かなし	*(千代松詞)	
1127	段々の御慈悲	*(千代松詞)	
1128	いちも尽さらめ	*(千代松詞)	
1129	此御恩たうとさや	*(千代松詞)	
1130	胸に思染て	*(千代松詞)	
1131	按司かなし天の	*(千代松詞)	
1132	百といつまでも	*(千代松詞)	
1133	おかけほさへめしやいる	*(千代松詞)	
1134	御願しやへら	*(千代松詞)	
1135	謝名	謝名の大王	*
1136	一 やあ大主	*	*
1137	此からの先や	*	*
1138	船の往来も	*	*
1139	しけくあらたひもの	*	*
1140	文の通ハしに	*	*
1141	互に睦ましく	*	*
1142	取合よすらに	*	*
1143	与座	与座の大王	*
1144	一 いやれることさらめ	*	*
1145	是からの先や	*	*
1146	互にむつましく	*	*
1147	取合よすらに	*	*
1148			千代松
1149			一 ヤア按司加那志
1150			段々ノ御慈悲
1151			言モ尽サラヌ
1152			此ノ御恩タウトサヤ
1153			胸ニ思染テ
1154			按司加那志天ノ
1155			百トイツ迄モ
1156			御掛フサイ召ル
1157			御願シヤビラ
1158	与座	同人	*
1159	一 やあ按司かなし	*	*
1160	北山に謝名	*	*
1161	南山に与座	*	*
1162	ふたり此御代に	二人この世界に	二人此ノ世界ニ
1163	生れやいをれハ	いきちをる間や	生チ居ル間ヤ
1164	弓矢とりをさめ	*	*
1165	軍事やめて	*	*
1166	国公安全	不意の急難	不意ノ急難
1167	疑やあやへらぬ	絶てあやへらぬ	絶テアヤビラヌ
1168	按司	*	*
1169	一 あゝ大主の	一 あゝ誠と大主の	*
1170	智高あらわれて	*	*
1171	謝名と大主や	*	*
1172	割府こゝろ	*	*
1173	やあ天底の子	*	*
1174	明日や大主の	*	*
1175	船送さんしゆもの	*	*
1176	急ちおれ／＼の	*	*
1177	用意しやうれ	*	*
1178	天底	天底の子	天底ノ子

No.	尚家本組踊集	今帰仁御殿本	与那覇政牛本
1179	一 拝留やへて	*	*
1180	与座	与座の大主	*
1181	一 あゝ御情の御趣意	一 御情の御趣意	一 御情ノ御趣意
1182	美拝とをかミやへる	*	*
1183		与座の大主	同人
1184	思きやけもすらぬ	一 思きやけんないらぬ	思チヤケンナイラヌ
1185	親子振合ひ	*	*
1186	立別るけふや	*	*
1187	嬉しさとあすか	*	誇ラシヤドアスガ
1188	誠御暇	*	*
1189	みよんにゆける涯や	*	*
1190	此間の名残	*	*
1191	袖に貫留て	*	*
1192	立別れ兼る	*	*
1193	馴し御側	*	*
1194	やあなし子	*	*
1195	日も暮てをれハ	夜もくれてをらハ	夜モ暮テ行バ
1196	歩まらぬわみの	歩らぬあもの	歩マラヌアモノ
1197	けふや我が宿に	*	*
1198	押列てむきゆて	*	*
1199	明日のあけ / \ に	*	*
1200	打立んしゆもの	押列て登ら	押烈テ登ラ
1201	たうたう	*	*
1202	御暇よしやへら	*	御暇モシヤビラ
1203	按司	*	
1204	一 たう / \	*	
1205	立雲ふし	*	歌立雲ブシ
1206	一 親子振合ひ	一 親子道とまいて	一 親子道トマイテ
1207	もとていくけふや	*	*
1208	よろこひの中の	*	*
1209	なこりさらめ	*	*
1210	与座	与座の大主	*
1211	一 やあなし子	*	*
1212	御暇もすまち	*	*
1213	残ることなひらぬ	*	*
1214	たう / \ 急か / \	*	*
1215		子共	子共
1216		一 どう / \ 御供しやへら	一 タウ / \ 御供シヤビラ
1217	石根ふし	石根の道ふし	歌
1218	一 大主や先から	*	*
1219	按司添やあとから	*	*
1220	久志ミなどおりて	古宇利港下りて	古宇利港ヲリテ
1221	舟元に登て	*	*
1222	片手しや首たち	*	*
1223	かたてしや酌とて	*	*
1224	目のしやいや大主	*	*
1225	名護渡まで見送ら	*	名護渡迄送ラ
1226	肝しやいや大主	*	*
1227	御宿までおくら	*	*
1228			
1229			

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
1		二山和睦	二山和睦ノ巻
2	千代松亀千代出羽干瀬節	千代松亀千代出羽散山フシ	干瀬節
3	一 つれなさやふたり	* (散山節)	*
4	親に捨られて	* (散山節)	*
5	互にふやかかれて	* (散山節)	*
6	をるか心気	* (散山節)	*
7	千代松	全兩人	*
8	一 哀れ知りめしやうれ	* (千代松亀千代)	*
9	今出る二人や	* (千代松亀千代)	*
10	南山の頭役	* (千代松亀千代)	*
11	与座の大主の	* (千代松亀千代)	*
12	兄子千代松	* (千代松亀千代)	*
13	弟子亀千代	* (千代松亀千代)	*
14	親の大主と	親ノ大主父親之事ド (千代松亀千代)	父親ノ事ド
15	按司かなし御使に	(千代松亀千代)	*
16	御詔事拜て	(千代松亀千代)	詔ス事拜デ
17	北山にいまふち	(千代松亀千代)	*
18	引よ留られて	(千代松亀千代)	*
19			
20	御素立よてやり	* (千代松亀千代)	*
21	朝夕母親の		*
22	寄こと聞る		寄事ドヤヨル、
23		肝ン肝ナラン	
24	あけやうはかなさや	* (千代松亀千代)	アケヤウ我ガ成サヤ
25	干とあまるまでも	* (千代松亀千代)	*
26	敵の手にいまふち	* (千代松亀千代)	*
27	こめられてをれハ		*
28	此間のくれしや	* (千代松亀千代)	*
29	いきやか又めしやいら	* (千代松亀千代)	*
30	子なゆるものや	子ナトルモノヽ (千代松亀千代)	子成トル者ヤ
31	やすてをられらぬ	ヤステヲラレヨミ (千代松亀千代)	安ステ居ラレヨメ、
32	亀千代とふたり	* (千代松亀千代)	*
33	命ちおめはまで	* (千代松亀千代)	*
34	しらぬ山国に	* (千代松亀千代)	*
35	とまひてむちからに	* (千代松亀千代)	*
36	北山の按司の	* (千代松亀千代)	*
37	御肝取直ち	* (千代松亀千代)	*
38	二人か身にかへて	* (千代松亀千代)	*
39	父親や	* (千代松亀千代)	*
40	助けほしやあもの	助カブシヤノ (千代松亀千代)	*
41	母親にこのやう	* (千代松亀千代)	*
42	暇乞よかたて	* (千代松亀千代)	*
43	片時も急ち	* (千代松亀千代)	*
44	忍ていかに	忍テ行ン (千代松亀千代)	忍デ行ン、
45	亀千代	*	*
46	一 天と地の中に	*	*
47	生とる者や	*	生レタル者ヤ、
48	鳥もけたものも	*	鳥獣ノン
49	情けあるならひ	*	誠アル習イ、
50	やき前とふたり	*	*
51	人に生れとて	*	*
52	子と成る道の	子ナトル道之	*
53	たゝなあてからや	*	*
54	大事あらんすれば	*	*
55	おとろしやよあもの	*	*
56	片時も急ち	*	*
57	とまひて行からに	*	*
58	哀れ父親よ	*	*
59	取帰ちふたり	*	*
60	人に生れたる	人ニ生タタ	*
61	道よたてら	*	*
62	千代松	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
63	一 やあ母親よ / \	*	*
64	仲間ふし	母出羽仲間フシ	*
65	一 のかす思童へ	一 ノガス玉金	一 ノガス玉金
66	ものめかほしちをる	*	者思顔シチャル、
67	おもことのあらは	*	*
68	語てきかす	*	*
69	千代松	*	*
70	一 すたし母親も	*	*
71	聞留てたはふれ	*	*
72	朝夕思尽ち	*	*
73	語ゆることに	*	語ラヨル事ニ、
74	亀千代とふたり	*	*
75	命ちおめはまて	*	*
76	北山の城	*	*
77	とまひて行からに	*	*
78	哀れ父親よ	*	哀れ、父親ヤ
79	助けらんしゆもの	*	*
80	是非よ聞分て	*	*
81	暇 <sup>マ</sup> てたはふれ	*	*
82	母親	母	*
83	一 やあなし子	*	*
84	今のことやれハ	*	*
85	誇らしやとあすか	*	*
86	あてなしのふたり	*	*
87	知らぬ山国に	*	*
88	いきやし手はなしやひ	*	如何シ手放サイ
89	ゆるちやらされか	*	*
90	我身も諸共に	*	*
91	つれていかに	*	*
92	千代松	*	*
93	一 やあ母親よ	*	*
94	男生れとて	*	*
95	年の十二三	*	*
96	あてなしとめしやうな	*	アテ産子ト召シヨナ
97	おのとしになれハ	*	*
98	いかな刀刃も	*	*
99	のよておそれゆか	*	*
100	母親と共に	母親シトモニ	母親シ共ニ
101	おし列てむきゆて	*	*
102	若か路ふちに	*	若シカ道淵ニ
103	怪我のともあらハ	*	軽(注:怪の誤記カ)我ノ又アラバ、
104	願ておる事も	*	*
105	あたになててやり	*	*
106	不孝の罪報	*	*
107	しのきし <sup>の</sup> からぬ	シノガランアレバ	凌ガラン有レバ、
108	科の上に咎や	*	*
109	重なゆるつもり	*	*
110	是非よ聞分て	*	*
111	頼て母親や	*	*
112	父親の御戻り	*	*
113	御待めしやうれ	*	*
114		母	母親
115	一 やあなし子	*	*
116	云ること聞ハ	言ルコトヨ聞ハ	言ル事ヨ聞ケバ
117	理とやゆる	*	*
118	願のことふたり	*	*
119	暇取らしゆもの	*	*
120	物思つめしちをて	*	*
121	油断するな	*	*
122		千代松	二人
123		一 母親ノ御志	一 母親ノ御志
124		今ノ如トヤレハ	今ノ事ヤレバ、



No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
125		頼テ行先シ	願テ行先シ
126		自由ドヤヨル	自由ドヤヨル、
127	一 今のことやれハ		
128	誇らしやとあゆる		
129		母	母親
130	一 親の為ともて	*	*
131	ゆるちやらしゆすか	*	*
132	いきやし思くらち	*	*
133	我身やまちゆか	我ヤ待ガ	*
134		亀千代	亀千代
135	一 やあ母親よ	*	*
136	親に孝行の	*	*
137	念力の太刀や	*	*
138	岩やかんしきも	*	*
139	当る方ワれて	*	*
140	のよて真実の	*	*
141	あたに又なゆか	*	*
142	頼て父親よ	*	影テ父親子
143	列てこんしゆもの	*	*
144	肝の願しちをて	肝ノ願シチュテ	*
145	御待めしやうれ	*	*
146		千代松	千代松
147	一 互に云語や	*	*
148	いやはいつきやても	*	*
149	時移ちすまぬ	*	*
150	御暇よしやへら	*	*
151		伊野波フシ	伊野波節
152	一 義理ともて我身の	一 義理トモテ我身ヤ	一 義理ト思テ我身ヤ
153	思きやいをすか	*	*
154	わかれゆるきハや	*	*
155	袖のなみた	*	*
156		千代松	千代松
157	一 やあ亀千代	*	*
158	陸からや今帰仁	*	*
159	程遠さあれハ	*	*
160	しらぬ山路に	*	*
161	いつし尋ねゆか	*	*
162	舟路漕渡て	*	*
163	急ちふしゃの	*	*
164		亀千代	亀千代
165	一 順風のけふや	一 順風モ今日ヤ	一 順風ニ今日ヤ
166	波も又ないらぬ	波モ又シヅカ	波シ又立シ、
167	真艦押風に	真艦押風ト	真艦押風ト
168	つれていかに	*	*
169	舟筑	*	
170	一 いまひのから	*	
171	伊計離ふし	*	*
172			
173			
174			
175			
176			
177	一 真艦おす風に	*	*
178	なみもおしそへて	*	*
179	運天のミなど	*	嘉礼吉ノ御舟
180	なまどつきやる	*	走ルガ清サ、
181	舟筑	*	*
182	一 され運天の湊	*	一 サレノ運天港
183	着へたん	*	*
184	千代松	*	*
185	一 かほし舟筑	一 カフシ船筑ヨ	*
186	渡ちたはふち	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
187	廻り逢とぎに	*	廻り逢フ時ン
188	またもたのま	*	*
189	舟筑	*	*
190	一 またもをかミやへら	*	*
191	千代松	*	*
192	一 やあ亀千代	*	*
193	片時も急ち	*	*
194	あの村に便て	アノ村ヨ便テ	*
195	あはれ父親の	*	*
196	行衛尋ねらに	*	*
197	亀千代	*	*
198	一 互に思尽ち	*	*
199	尋ねやひきやすか	*	*
200	若かあたならハ	*	*
201	いきやか又なゆら	*	イキヤガ又成ヨガ、
202	千代松	*	*
203	一 命ちふり捨て	*	*
204	君親の為に	*	*
205	肝尽すことの	*	*
206	のよてあとなゆか	*	*
207	油断そな互に	*	*
208	物めつめて	*	*
209	住居人	津口当	*
210		一 是ヤ津口当	一 是ヤ津口當
211	一 むゝ舟の入ゆる様子	ン、舟之チユル様子	*
212	先出てむたねハならぬ	*	*
213		全人	
214	はひ / \ ねつたあや	一 ハイネツタアヤ	ハイニツタアヤ
215	まあからやひめしやいか	*	マアカラガヤイ召ヤビ、ガ、
216	千代松	*	*
217	一 哀れ此二人や	*	*
218	思事のあとて	思事ノアテド	*
219	遠方の島から	*	*
220	旅のものやすか	トマイ / \ ニキヤスイガ	ドマイ / \ ニ着スガ、
221	知る人もをらぬ	知ル人ヤヲラン	知ル人ヤ居ラン
222	頼む方なひらぬ	*	*
223	御情にしはし	*	*
224	宿からちたはふれ	*	*
225	住居人	津口当	*
226	一 あゝ宿かひめしやうらしゆや	一 ン、宿カイミシヤウラシユスヤ	一 ン、宿借イメシヨウラシユスヤ
227	手易ひ事	*	*
228	先まあの国のうむて	*	*
229	いやれめしやいる人のきやあか	*	云レル人ノチヤアガ、
230	御二所の御様子	御二所之御様子カ	御二人ノ、御様子
231	細々と語てたはふれ	*	細々語テ賜リ、
232	千代松	*	*
233	一 此上よやれハ	*	*
234	隠ちかくさらぬ	*	*
235	南山の頭役	*	*
236	与座の大主の	*	*
237	兄子千代松	*	*
238	弟子亀千代	*	*
239		父親之事ド	父親ノ事ド
240		拾年余ル迄ン	十年余ル迄ン、
241		御引留ウカリ	御引止メ置カリ
242		別リヤヒラスガ	別レヤイ居レバ、
243		イチャル有様ニ	如何ル有様ニ
244		ナヤヒイマイガ	成ヤイ又在イガ、
245		知り召チマイラハ	知り召ウチマイラバ
246		語テ給リ	語テ賜リ、
247	住居人	津口当	*
248	一 あゝ与座の大主の	一 ア、与座之大主	一 ア、与座ノ大主

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
249	思子のきやあと	*	*
250	やいめしやいるひ	*	*
251	むゝ得と拝てむてハ	モ、得ト拝テミヤビレバ	*
252	まあもかはらぬ	*	*
253	よう似ちいまひんしやいん	*	能ク似チ在マインシヤビイン、
254	あゝねつたあや拝てむてハ	ネツタアヤ拝テンデハ	*
255	年頃十二三の御様子	*	*
256	あゝさて	ア、サテネツタアヤ	ニツター
257	親かなしとの別れかたや	*	*
258	先ものにととてむてハ	*	*
259	ちやうと二所共	二所共	恰度二人共
260	鳥小のひや、しゆる	*	*
261	時分とやたひすか	時分ヤタラ筈ヤスガ	時分ドヤタル筈ヤスガ、
262	人の親子やたいんなもの	*	*
263	なしおとつて	ナシ落サツテ	産落去て
264	親やのふ	親之御姿ヤ	親ノ御姿ヤ
265	あてもなひらぬしゆて	*	*
266	あてなしのきやの	*	アテナシノキヤ、
267	こかとふついもしらぬ所んかひ	*	*
268	親拝ミいかむて	親拝ミイガメイン	親拝メガ
269	いまひんしやうち	シヤウチ	イメンシヤウチヤンナ、
270	なあおんさうかいや	ア、御無蔵カイヤア	アハアヲンザウガイヤ
271	たうものさうすや	タウ御世話ヤ	トウ、シワヤ
272	しめんしやうんな	召シナ	メシヤメシヤウンナ
273	先おかんちうたやへる	*	先ヅ御岩重ダヤビンドー
274	又ねつたあ親かなしいと	ア、ネツタア親加那志ド	*
275	十一年なての三四月頃	*	*
276	南山の御使に	*	*
277	まひんしやうちやれハ	*	*
278	按司の御側に	按司之御側	*
279	物巧ミしやうる	*	*
280	親泊大主むて	*	*
281	いやれる人の	*	*
282	按司に色々美よんにゆけて	*	*
283		与座之大主ド	与座ノ大主ド
284		南山之名将	南山ノ名将、
285		是ドン取テウケバ	是ドン取込テ置ケバ
286		イカナ南山ノ	如何ナ南山ノ
287		物巧ミシチン	物巧ミシチン
288		ヤウヒニ事ヤ起サン積リ	容易ニ事ヤ起ラン積リ
289		ンデノ分別ヤテ	ンデノ分別ヤテ、
290	与座引とめて		
291	南山の様子		
292	仔細聞合しゆる分別やて		
293	按司からの御心実	*	*
294	段々のこと	*	*
295	又十七八の	又十七八ナヨル	*
296	女性方拝領やて	真盛ノ女性方拝領ヤテ	真盛ノ女性方拝領ヤテ、
297	度々御酒盛	*	度々ノ御酒盛り、
298	大主の御取持	*	*
299	大粧至極むちや	*	*
300	大主も果報な人たやへる	果報ナ人ダヤビル	果報ナ人ダヤビンドラ、
301	あんし大主も		
302		ヤンドン古郷忘ラン	ヤンドン故郷ン忘ラン
303	御暇みよんにゆける	度々御暇乞ミユンニユケヨンドン	御暇乞度々御ニユケヨンドン、
304	隙やないらぬ		
305		御返事ノワカラシ	御返事ノ下ラン、
306	けふの明日ない	*	*
307	明日のあさてなひ	*	明日ノ明後日ナイシユル内ニ
308	頓て夫婦の縁につなかつて		頓テ夫婦ノ縁ニ繋ガレテ
309	あけての冬にや	シユル内明テノ冬ニヤ	*
310	男子繁昌	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
311	弥事六ヶ敷ない立	*	愈ラ事ヤ六ヶ敷成イ立ち、
312	又々次年にや	*	*
313	次男迄なし出しめしやうち	*	*
314	おれからや御めいとんたの中	ウリカラヤ	*
315	又思子のきやあの	ウノ思子ノキヤアノ	又思子ノチヤア、
316	かちすかり / \ しめしやうれハ	カキスガ / \	罹イ縫 (ス) ガイシメシヤウレバ、
317	故郷の事も	又古郷ノ妻子ノ事	故郷ノ妻子ノ事シ
318	思出し / \	*	*
319	なしよたれしめしやいす聞ハ	*	泣チシヨダイシメシヤス聞ケバ、
320	あゝ至極哀れたやへる	*	ア、与所ナガラン至極哀レダヤビル
321	千代松	*	*
322	一 やあ亀千代	*	*
323	ふたり命はまで	*	*
324	とまひ / \ にきやすか	*	*
325	今のことやれハ	*	*
326	いきやかしゆら	*	*
327	亀千代	*	*
328	一 やあやき前よ	*	*
329	兎角此国に	*	*
330	いちまてもとまで	*	*
331	むすてある縁に	*	*
332	思ひ引されて	*	*
333	妻なし子捨て	*	*
334	隠れやひいまひら	*	*
335	捨られる親子	*	*
336	いきやかしやへら	*	*
337		上七尺フシ	揚七尺節
338		一 捨ラレル親子	一 捨ラレル親子
339		イキヤガシヤビラ	如何ガシヤビラ、
340	住居人	津口当	
341	一 あゝ人の上むてもおもあらぬ	*	一 ア、人ノ上デン思ラン、
342	され此ことやいへも	*	*
343	御世話あめしやうむな	御世話ヤ召シナ	*
344	なまさきおんにゆけよたる	*	*
345	大主のあやあと	*	*
346	むちゆなての若夏に	*	*
347	此世見捨やへて	*	此ノ世見過ヤビテ、
348	おれからや大主も	*	*
349			ウノ思子チヤニ罹ラツテ、
350	思子のきや引進の為	*	イエクル思子ノチヤア引キ進ノ為
351	大原ニ出て	*	大原ニ出ヂヤイ
352	鎌手唐て	*	長刀鎌手唐手
353	鐘長刀不足なく	鐘長刀不足ナイン	不足ナク
354	武芸の数々	武芸の数々不足ナイン	*
355	御嗜みの御様子	*	*
356	おの事と大主や	*	*
357	跡先帰ゆすや	*	跡先マイヨシヤ
358	合点やこと	*	合点ナ事、
359	子のきあかに	思子之キヤアニ	御思子ノチヤニ
360	武芸御指南めしやうち	*	*
361	按司の御腰立	南山ノ按司ノ御腰立	南山ノ按司ノ御腰立
362	からめかしゆる	*	*
363	御計むていやへん	*	*
364	此事や按司に	*	*
365	願筋美よんにゆけて	*	*
366	濟ぬかきりやきやしもならぬ	*	濟サン限りヤチヤン成ラン、
367	なまつんとゑひ拍子やすや	*	*
368	按司の大將に	按司ノ大將	按司ノ大將
369	謝名の太主むていふる人の	謝名ノ太主ンデイヤレイル人ノ	*
370	このころ按司に	コノウチ按司ニ	*
371	まる云しち	度々諫事シチ	度々諫言シチウシ、
372	御仕置もゑひころ取直ち	*	置ンキクル取直シ

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
373	与座も早く国元に	*	*
374	かへしめしやいることむて	*	*
375	おんにゆけめしいる	*	*
376	場所むていやへん	*	*
377	片時も早く	片時シ早々	*
378	願ひ立めいやいへれ	願立ミセヤイビリ	願立メシヤウリ、
379	千代松	*	*
380	一 今のことやれハ	*	*
381	誇らしやとあゆる	*	*
382	やあ / \	*	*
383	引合しの御縁	*	*
384	拝む御情けに	*	拝ム御情ケン
385	段々の肝入	*	*
386	いちも尽さらぬ	*	*
387	此御恩一期	*	*
388	ちゝにかめら	*	*
389	住居人	津口当	*
390	一 たうけふや先	*	*
391	我宿におんつかいしち	*	*
392	御休 [欠] めしやうち	御休息召チ	御休息召セウチ、
393	明日にしち随分	明日ニシチ	*
394	御願濟しめしやい [欠]	御願スマシミセヤイビリ	御願立召セリ、
395		先御入ミセヤイビリ	先ヅ御入メシヤビレ、
396		与座之大主	与座ノ大主
397	一 是や南山の臣下	*	*
398	与座の大主	*	*
399	あゝ国々 [欠] 按司部	ア、国々ノ按司部	ア、国々ノ按司部
400	勢ひ争やい	*	*
401	軍事起ち	*	*
402	国よ疲らしゆる	国ヨ疲ラシユス	国ヨ疲ラシヨシ、
403	ワか主人按司	我ガ主人按司ノ	我ガ主人按司ノ
404	やすてやすまらぬ	捨置ヤナラン	捨テ置ヤナラン、
405	南山十五ヶや	南山ノ十五カヤ	南山ノ十五ヶヤ
406	討よ平けて	*	*
407	先や四方の海	今ヤ波風シ	今ヤ波風シ
408	波風も立ぬ	静ナテヲレハ	静成テ居レバ、
409	按司の御喜び	*	*
410	御万人のまきり	*	御万人ノ安堵
411	安て楽ミゆる	ヤスク楽シミユル	
412	時と又やすか	*	
413			ヤヨリドモ、
414	北山や今に	*	*
415	軍事やまぬ	*	軍事絶ラン、
416	殊に南山たはかゆる	*	*
417	含ミてやりあれは	*	*
418	此事よ主人按司		
419	御気の毒めしやうち	朝夕御気ノ毒	朝夕御気毒
420		身ニ余テヲトテ	身ニ余テ居トテ、
421		ヨクシマノ心	邪マノ心
422	たかいにあらそいの		
423	こゝろとりおさめ	互ニ取治ミ	互ニ取り治メ
424	北山と南山	*	*
425	和睦なるやれは		
426	御万人のまきり		
427	上下もともに		
428	いちこたのしみに		
429	くらそてやりともて		
430		心打合チ	心打合チ
431		四方ノ上下シ	四方ノ上下モ
432		静ナルゴトニ	静カナル事ニ
433	美よんきをかて	ミュンチ事拝テ	メヨチ事拝デ
434	きやる事やすか	キヤル事ヨヤスガ	来ル事ヨヤスガ、

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
435	十年あまるまでも	*	*
436	ひきよとめられて	*	*
437	何分の御返事	*	*
438	たえて【なひぬ】(なひぬ) あれは	*	*
439	いたつらに年月	*	*
440	おくるしんき	*	*
441		ア、口惜ヤ	ア、口惜ヤ、
442	いちやんてやりきやしゆか	イヤ言キヤンテヤリキヤシユガ	イヤ言チヤテイ如何シヨガ
443			無情ノ世ノ習ヤ、
444	武士の身の習ひの	*	
445	心うつしちをて	*	
446	くらちをてひならぬ	*	
447	けふや名にたちゆる	*	*
448	三月の三日	*	*
449	なれしふるさとの	*	*
450	名残たちまさて	*	*
451	子共ひきつれて	*	*
452	遊てわすら	*	*
453	やあ、虎千代	*	*
454	虎松も押つれて	虎松ン列テ	*
455	出やうれ、	*	*
456		附此時虎千代虎松腰ニ鎌サシ鍵長刀待テル	附此ノ時虎松腰ニ鎌差シ鍵リ長刀持チ出ル
457	与座道行言葉	*	与座ノ大主
458	一 野原出て見れハ	*	*
459	千種萌出て	千草盛り出テ	*
460	吹送る風の	*	*
461	匂のしほらしや	*	*
462	たう、此辺にをとて	*	*
463	花よ詠めらに	*	*
464	同人	*	
465	一 やあ、なし子	一 ヤア産子	一 ヤア産子
466	春の草の葉や	*	春ノ草ノ葉ン
467	みとりさしそひて	*	*
468	見れハとし寄も	*	*
469	わかくなゆさ	*	*
470	虎千代	*	*
471	一 やあ父親よ	*	*
472	又も春来れハ	ミグテ春クレハ	廻テ春来レバ
473	木草たいもしゆひ	*	*
474	やかて父親も	*	*
475	むかしくり戻ち	*	*
476	花さきゆる節も	*	*
477	あひとしやへる	*	*
478	与座	*	
479	一 されば、	*	
480	与座	全人	与座ノ大主
481	一 やあ、	一 ヤア産子	一 ヤア、産子、
482	けふ【や】(の) 誇らしや、		今日ノ誇ラシヤノ
483	物にとられめ	*	*
484	たう、習ひとたる手並	*	習レ取タル手並
485	振立て見せれ	*	振り立チヤイ見シリ、
486	虎千代	虎千代虎松	二人
487	一 おう	一 御礼(虎千代虎松)	一 押シ留ヤビテ(虎千代虎松)
488		此時虎千代長刀 虎松鎌手	
489		アケツクテン	揚作田節
490		一 武士ノ身ヤ空ニ	一 武士ノ身ヤ空ニ
491		トブ鳥ノ心	飛鳥ノ心、
492		ミツミテン手ニヤ	見詰テン手ニヤ
493		取ヤナラン	取ヤナラン
494		与座	呉屋の大主
495		一 ア、出来タ、	*
496			但此ノ時虎千代虎松兩人変リ、立与座笛吹真似シテ鍵長刀手アリ、

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
497		虎千代虎松	
498		一 御礼	
499	与座	*	与座ノ大主
500			一 今日ノ誇ラシヤ、
501			物ニ譬ラレメ、
502	一 たう / \ 習ひとたる手並	*	*
503	残らすに見せれ	*	*
504		子兩人	
505		一 御礼	
506		附 此時虎千代唐手事 虎松鎌手島切手毎	但シ此ノ時鎌手唐手アリ
507	与座		
508	一 あゝ出来た / \		
509	与座		
510	一 やあ / \ 虎松もひとつ		
511	振立ひ見せれ		
512	虎松		
513	一 おう		
514	与座	*	与座ノ大主
515	一 あゝ出来た / \	*	*
516		子兩人	
517		一 御礼	
518	虎千代	*	*
519	一 やあ父親よ	*	*
520	南山もけふや	*	南山ノン今日ヤ
521	此遊ひあやへひめ	此ノ遊ビシヤビミ	*
522	与座	*	与座ノ大主
523	一 南山もけふや	*	一 南山ノン今日ヤ
524	段々の遊ひ	色々ノ遊ビ	*
525	野原から浜辺	*	*
526	歌や舞ひ遊て	歌ヤ舞ヒ遊ビ	歌ヤ舞ヒ遊ビ
527	是よりも増る	是ヨリンマサテ	*
528	にきやかとやゆる	*	*
529	虎松	*	虎千代
530	一 やあ父親よ	*	* (虎千代詞)
531	おれ程の増る	*	* (虎千代詞)
532	国やてと兎角	*	* (虎千代詞)
533	一期南山の	*	* (虎千代詞)
534	沙汰よめしやら	沙汰ヤ召ラ	* (虎千代詞)
535	与座	*	与座ノ大主
536	一 いや / \	*	*
537	おか達かおのほとに	*	ヲガ達ガウノ程ン
538	なやいまたをれハ	*	*
539	南山の事も	*	*
540	いちゆて慰ミゆん	*	言ユテ慰メヨン、
541	互に云語ひや	*	*
542	いつまでもあかぬ	*	*
543	日も暮ていきゆひ	日ンサガテヲモノ	日下テ居モノ
544	てよ / \ 宿に戻ら	*	*
545	恩納ふし	*	日新節
546	一 戻る道すから	*	*
547	かたるいこと葉や	*	*
548	きゝゆる袖までも	*	*
549	露とおきゆる	*	露ドラツヨル
550	千代松亀千代出羽長金武ふし	千代松亀千代出羽金武ブン	長金武節
551	一 情けある人の	*	*
552	ことの葉の匂ひ	*	云言葉ノ匂ヒ、
553	便て行先や	*	*
554	頼む親泊	*	*
555	今と御城元	*	御城元今ド
556	尋て着る	*	*
557			千代松
558			一 タウ / \ 御取次スラニ、

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
559	亀千代	*	
560	一 御門番取御取次頼ま	一 御門番衆御取次頼マ	御門番衆御取次頼マ、
561		門番	門番
562	一 たるかやいめしやいら	*	*
563	千代松	亀千代	*
564	一 南山の臣下	*(亀千代詞)	*
565	与座の大主の	*(亀千代詞)	*
566	兄【弟】子千代松	*(亀千代詞)	嫡子千代松
567	弟子亀千代	*(亀千代詞)	*
568	按司かなし拝て	*(亀千代詞)	*
569	願事のあとて	*(亀千代詞)	*
570	よしれやいをる次第	*(亀千代詞)	寄セレヤイ居ル次第
571	御取次頼ま	*(亀千代詞)	*
572			二人
573	よたしや有様に	*(亀千代詞)	[欠] 吉シヤ有ル様ニ
574	おんにゆけてたはふれ	ミュンニユケテ給り (亀千代詞)	*
575	門番	*	*
576	一 此様御取次しやへら	*	*
577	同人	*	*
578	一 され拝まれよめしやいん	*	*
579	これにいまふれ	是ニ入り召リ	是ニ入り召セウリ、
580		北山之按司	按司
581		一 ヤア/\	一 ヤア/\、
582		童アテナシノ	童ピアテナシノ
583		二人押列テ	二人押シ列テ、
584		イキヤル願事ノ	如何ル願事ノ
585		アトテツチャガ	有トテ来ガ
586	千代松	*	*
587	一 哀此二人や	*	*
588	与座の大主の	*	*
589	兄子千代松	*	*
590	弟子亀千代	*	*
591	父親の事と	父親ノ事ヤ	父親ノ事ヤ
592	十と余る道も	*	*
593	御引留られて	御引留ウカリ	御引留置カリヤイ
594	別やいをれハ	*	居レバ、
595	いきやるいきなひに	イキヤル有様ニ	如何ル有様ニ
596	なやい又いまひら	ナヤヒ又イマイガ	*
597	思ひ身にあまて	*	*
598	肝もきもならぬ	*	*
599	亀千代とふたり	*	*
600	命ち思はまて	*	*
601	波路はる/\と	*	*
602	よしれやいきやへたる	*	*
603	慈悲よ父親や	*	*
604	ゆるち給ふれ	*	*
605	若かおゆるしの	*	*
606	ならぬ事やらハ	*	*
607	此二人やこまに	*	*
608	引よ留めしやうち	御引留召チ	御引留召チ、
609	是非共に父親や	*	*
610	ゆるち給ふれ	*	*
611	亀千代	*	*
612	一 やあ按司かなし	*	*
613	やき前とふたり	*	*
614	人に生れとて	*	*
615	子と成道の	*	*
616	立なあてからや	*	*
617	天道の下をとて	*	*
618	おとろしやよあもの	*	*
619	頼て願事や	*	*
620	美よんにゆかてたはふれ	*	御ニユカテ賜り、



No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
621	按司	北山之按司	*
622	一 あゝ童へあてなしの	*	一 ヤア童ビアテナシノ
623	願事のしほらしや	*	*
624	聞る袖造も	*	*
625	露とおきゆる	*	露下打ル、
626	やあ千代松亀千代	*	ヤア千代松ヤア亀千代
627	屹度片付て	*	敵ト片付テ
628	返事よさんしゆもの	返事ヤサンシユモノ	*
629	おの内や先	*	*
630	客屋に扣てをれ	*	*
631	やあ仲宗根のひや	*	*
632	急ち客屋につれていけ	*	*
633	仲宗根のひや	仲宗根	*
634	一 をかんちゆめやへて	*	*
635	同人	*	
636	一 たう / \	*	*
637	御供しやへら	*	*
638	按司	北山之按司	*
639	一 やあ / \	*	*
640	ふたりおしつれて	*	*
641	今のことやれは	*	*
642	きやああれはずみゆか	イチヤアレバ済ガ	如何アレバ済ノガ
643	考てきかす	考テンデヨ	考デ見デヨ、
644	【惣人数】		
645	【一 おう】		
646	惣人数	*	
647	一 おう	*	
648	親泊大主	*	*
649	一 され按司かなし	*	*
650	与座の大主と	*	*
651	此国の様子	*	*
652	細々の事も	*	*
653	呑込いをやへれハ	呑シクミヤイヲレバ	呑込イ居レバ、
654	若か南山の	若カ南山ニ	若シガ南山ニ
655	取帰ち後に	*	*
656	御恩うち背ち	*	*
657	物巧ミあらハ	*	物巧メスラバ、
658	事や六ヶ敷	*	*
659	成る積り	*	*
660	親子諸共に	*	*
661	引よ留置て	*	引ヨ留置バ
662	年月よ重ね	*	年月日重ネ
663	御恩蒙らハ	*	*
664	世々の御譜代	*	*
665	同前に思て	*	*
666	按司かなし御奉公	*	*
667	思はまる筈たひもの	*	思ミハマル筈ダヤビモノ
668	此筋に御片付	*	*
669	およたしやゝあやへらに	*	*
670	仲宗根のひや	仲宗根ヒヤ	*
671	一 親泊いやれること	*	*
672	此国の仕置	*	*
673	事洩てすまぬ	事洩チ済ナヒラン	事洩レテ済ヒラン、
674	急ち此事や	急チ此事ニ	急ギ此ノ事ニ
675	御究よめしやうれ	*	*
676	按司	北山之按司	*
677	一 一段なことよ / \	*	一 一段大事 / \
678	やあ / \	ヤア	ヤア
679	謝名の犬主や	*	*
680	いきやか / \	*	*
681	謝名の犬主	*	*
682	一 され此事や兼々	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小禄御殿本	兼島信備本
683	美よんにゆけることに	*	*
684	南山の御所存	*	*
685	考てミヤへれハ	*	*
686	北山と南山や	*	*
687	共に天かめて	*	*
688	互に地やふまぬ	*	*
689	敵や又あらぬ	*	*
690	一時の威勢	*	*
691	争の為に	*	*
692	国よ疲らしやひ	*	*
693	人よそくなとて	*	*
694	軍事しゆすや	*	*
695	道ならぬあれハ	*	*
696	互に此間の	*	*
697	恨ミ打忘て	*	*
698	島国の為に	*	*
699	御計のあすと	*	*
700	御是非ある御代の	*	*
701	御主人の印し	*	*
702	急い道に向て	*	*
703	心実の御相談	*	真実御相談
704	仕合やおまな	*	仕合ド思ナ、
705	肝くらさ巧て	*	*
706	親子諸共に	*	*
707	引よ留置ハ	*	*
708	光ある御名や	*	*
709	南山にあとて	*	*
710	北山の悪名	北山ヤ悪名	北山ヤ悪名
711	流ゆる程り	*	*
712	又いかな按司添の	*	*
713	慈悲の肝かさて	*	*
714	色々の情け	*	*
715	たへめしやうちてやり	*	*
716	人の御臣下の	*	*
717	誠絶果て	*	*
718	こまに肝寄る	*	*
719	事や又なひさめ	*	*
720	いらぬ慈悲尽ち	*	ア、イラン慈悲尽チ
721	あたなとるものも	*	仇ダナトル事ン、
722	むかしから今に	*	*
723	数やしらぬ	*	*
724	片時も急ち	*	*
725	御暇よたはふれ	*	*
726	天底の子	*	*
727	一 やあ大主	*	*
728	計略偽の	*	*
729	世の中よやれハ	*	*
730	たゝ真肝しちをて	タゝ真肝シチュテ	*
731	たまされてすまぬ	*	*
732	南山の様子	*	*
733	みすく取究め	*	*
734	兎角片付や	*	*
735	ある筈よたひもの	*	*
736	おの内やまつ	*	*
737	留ておきやへらに	留テ置チヤビラナ	留テ置ビラナ、
738		謝名ノ大主	謝花ノ大主
739	一 やあ天底の子	*	*
740	人のことの葉や	*	*
741	胸内の割府	*	*
742	いこと葉の上に	*	*
743	肝の底までも	*	*
744	探りきる程の	*	探イ出ル程ノ

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
745	智高けなひぬあれハ	*	*
746	いきやし島国の	*	*
747	治め又なゆか	*	*
748	亀千代か今の	南山ノ按司ノ	南山ノ按司ノ
749	御使の御趣意	*	*
750	又千代松亀千代か	*	*
751	今の願立や	*	*
752	誠真実の	*	*
753	心から出て	*	*
754	偽の巧ミ	*	*
755	絶てないぬあすや	*	*
756	取よ究めとん	*	*
757	取よ定めとん	/ \	*
758		全人	
759	され按司かなし	*	*
760	むかしから今に	*	*
761	治まとる御代や	*	*
762	君臣下ともに	*	*
763	義理の道守て	*	*
764	島国の治	*	*
765	道直にあとて	道直クアトテ	*
766	御万人もおれ / \ の	*	*
767	願事も遂て	*	*
768	義理の道筋も	*	*
769	取堅守て	堅ク取守テ	堅ク取り守テ
770	御主人の御為	*	*
771	島国の為に	*	*
772	命ち捨ゆすや	*	*
773	露ちらすことに	*	露照ソ事ニ
774	思果そゆへと	*	*
775	いかな武士国の	*	*
776	太刀かたなてすも	刀刃ヨテスン	刀刃ヨテスン、
777	のよておそれゆか	*	*
778	誠天道の	*	*
779	御慎あとて	*	御慎メアテン
780	島国の仕置	*	*
781	御念入めしやうち	*	*
782	人のよしあしも	*	*
783	さやか照りワかち	*	*
784	よたしやすや揚て	*	*
785	わるさすや捨て	*	*
786	いさめこと好て	*	ソサメ言嫌テ
787	そさめこと嫌て	*	諫メ言ス好デ、
788	人の口開ち	*	*
789	人の肝あけて	人の胸開テ	*
790	義理の御捌の	*	*
791	道広てからや	*	*
792	跡影【も】よ隠す	*	跡カテヨ隠チ、
793	深山住人も	*	*
794	走よ集まやひ	*	*
795	ワか御主の御為	*	*
796	誠肝尽ち	*	*
797	働かな置め	*	*
798	照り増る光	*	*
799	出る日のことに	*	*
800	四方の海山も	*	*
801	洩るかたなひらぬ	*	*
802	恵ミ照渡て	*	*
803	諸離や諸島	*	*
804	海に舳渡	*	海に船渡リ
805	山に橋かけて	*	*
806	みつきものあけて	*	メヅ、物上ゲテ

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
807	御詔事拝て	*	*
808	異変事なひらぬ	*	*
809	そむくものをらぬ	*	*
810	御万人のまきり	*	*
811	生楽よ誇て	*	*
812	弓矢取治め	*	*
813	軍さ事やめて	*	*
814	上下の治め	*	*
815	かためやい置は	*	*
816	いきやし道背ち	*	*
817	弓引のされか	*	*
818	急ち此事や	*	*
819	御究めよめしやうれ	*	*
820	按司	*	*
821	一 あゝ義理情け尽ち	*	*
822	謀ゆる事や	諫ミヨル言葉	*
823	肝にひし／＼と	*	*
824	感してとをゆる	*	*
825	天底	天底ノ子	天底ノ子
826	一 あゝ此上や存す	一 ア、此事ヤ存寄	一 ア、此ノ上ヤ存寄
827	絶てあやへらぬ	*	*
828	親泊	*	*
829	一 され按司かなし	*	*
830	大主の計	大主ノ計事	*
831	気のつかぬあやへたぬん	*	*
832	誠我々の	*	*
833	おとさあるゆへと	*	*
834	目の前勇力の	*	*
835	只一事たので	*	*
836	遠く計ゆる	*	*
837	智高けなひぬあれハ	智高ナインアトテ	智高無ン有トテ、
838	御耳聞らしやひ	*	御耳穢ラシヤイ
839	御肝つてあもの	*	*
840	御咎めやひらに	*	*
841	をかんちゆめやへら	*	*
842	按司	*	*
843	一 いや／＼	*	*
844	おれうれもよたしや	ウレコレンヨタシヤ	*
845	いつれ肝そろて	*	*
846	忠節の心	*	*
847	ふかさあるゆへと	*	*
848	はめて諫ゆる	*	*
849	肝の根のしほらしや	*	*
850	又互に胸くたち	*	*
851	謀めたることの	*	*
852	たちたゝぬことや	*	*
853	我身に又あれハ	*	*
854	のよておかたちに	*	*
855	答のかけられか	*	*
856	此事にいへも	此事ヤイヒン	*
857	気遣はしするな	*	気遣ハスルナ、
858		全人	
859	やあ謝名の大主	*	*
860	くらさある主人	*	*
861	頼てをるやれハ	*	*
862	たとひ気にさかて	*	譬ヒ気ニ違テ
863	腹立よしちも	*	*
864	押かへし／＼	*	押シ返ス／＼
865	諫めやい呉れよ	*	*
866	闇の灯火の	*	*
867	道しるへ頼ま	*	*
868	此間のあやまり	*	此ノ間ノ過チ

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
869	気の毒とやゆる	*	*
870	謝名	*	謝名ノ大主
871	一 あゝ美よんきこと拝て	*	*
872	袖とぬらしやへる	*	*
873	人の御主人の	*	*
874	沙汰されるものや	*	*
875	昔から今に	*	*
876	ためし数あすか	*	*
877	あやまちのあとて	アヤマレノアトテ	*
878	御異見よすらハ	*	御異見ヨスレバ、
879	御語よめしやうち	ウサトリヨ召チ	御サトイエヨ召チ
880	御肝あらためて	*	*
881	御油断のないらぬ	*	*
882	御守りのあすと	*	*
883	御慈悲ある御代の	御慈悲アル御主之	御慈悲アル御主ノ
884	光あらはれて	*	*
885	世々のよゝとゝめ	*	*
886	御名や朽やらぬ	*	御名ヤ朽チヤビラン、
887	あゝなまの御詔事	*	ア、今日ノメヨンチ事
888	拝て御万人や	*	*
889	有難さ思て	*	*
890	目眉打笑て	*	*
891	向て来る顔も	*	*
892	目の前引寄て	*	*
893	北山の榮る	*	*
894	しるしたやへる	*	*
895	按司	*	*
896	一 や大主	一 ヤア大主	一 ヤア謝名ノ大主、
897	南山に遣ハしゆる	南山ニ遣ヒシユル	*
898	返書調らす	*	*
899		又与座ノ大主ノ	又与座ノ大主ノ
900		親子急ギ呼サレリ	親子急ギ呼バサレハ、
901	謝名	*	謝名ノ大主
902	一 おうやあ天底の子	一 ヤア天底ノ子	*
903	急ち調やひ	*	*
904	上てきやうれ	*	*
905	又千代松亀千代	*	*
906	列てくう	*	*
907	天底	*	天底ノ子
908	一 おう	一 拝留ヤビテ	一 拝留ヤビテ、
909		謝名	仲宗根ノ比屋
910	一 やあ仲宗根のひや	*	
911	与座の大主	与座大主	一 与座ノ大主
912	急ち呼てきやうれ	*	*
913	仲宗根	*	天底ノ子
914	一 拝留やへて	*	一 拝留ヤビテ、
915	仲宗根	全人	
916	一 与座の大主	*	与座ノ大主(天底詞)
917	列てきやへたん	*	列テ来ビタン、(天底詞)
918	按司	*	*
919	一 やあ大主	*	*
920	つかいしめたすや	*	*
921	別事やあらぬ	*	*
922	尋ねほしやあてと	*	尋欲シヤル事有トテ
923	呼ちむちやる	*	*
924	与座	*	与座ノ大主
925	一 あゝのふ事か急ち	*	*
926	仰すめしやうれ	*	*
927	按司	*	*
928	一 大主や南山に	*	*
929	なし子いくたひか	*	*
930	与座	*	与座ノ大主

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
931	一 男子ふたりたやへる	*	*
932	按司	*	*
933	一 兄子千代松弟子亀千代へ	*	*
934	与座	*	与座ノ大主
935	一 扱々いきやし按司かなし	*	*
936	知りめしやうちいまひら	知り召チイマイガ	知り召チイマイガ、
937	按司	*	*
938	一 おの事とやゆる	*	*
939	大主よ尋ひて	*	*
940	ふたり押列て	*	
941	遙々とこまに	*	波路遙々ト
942	渡てきちをん	*	*
943	呼寄てあれハ	*	*
944	頓てこんしゆもの	*	*
945			天底ノ子
946			一 サレ列テ来ビタン、
947	千代松亀千代	*	*
948	一 やあ父親よ	*	*
949	父	与座	与座ノ大主
950	一 やあなし子	*	*
951	東江ふし	*	*
952			一 親子振合チヤシ
953	一 あけゆめかやゆら	*	*
954			天底ノ子
955			一 サレ上ゲヤビラ、
956			按司
957			一 出来タ / \、
958	与座	*	与座ノ大主
959	一 やあなし子	*	*
960	赤子の時分	*	*
961	別れやいをれハ	*	*
962	哀れ面影も	*	本ノ面顔シ
963	夢現心	*	*
964	行逢ててやり知よめ	*	合テナイ知ラン
965	いやなあれハ	*	夢ヤアラニ
966		千代松	千代松
967	一 やあ父親よ	*	*
968	赤さての内に	*	*
969	振別れてをれハ	*	*
970	いきやかなたいまひら	*	*
971	音伝もなひらぬ	*	*
972	思ひ身に余て	*	*
973	肝もきもならぬ	*	肝ナラン、
974	亀千代とふたり	*	*
975	命ち思はまで	*	*
976	しらぬ此国に	*	*
977	とまひ / \ にきやすか	*	*
978	誠拜ゆすや	*	*
979	夢かやゝへひら	*	*
980	按司	*	*
981	一 やあ千代松	*	*
982	やあ亀千代	*	亀千代
983	親の為ともて	*	*
984	波路遙々と	*	*
985	渡てきある心	*	*
986	感してとをゆる	*	*
987		全人	
988	やあ大主	*	*
989	此間やおれ / \ の	*	*
990	片付かぬあてと	*	片付ノ有テド、
991	留置もあたる	*	*
992	にやゝかたつきて	*	*

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
993	暇とらしゆもの	*	*
994	親子押列て	*	*
995	誇て立戻れ	*	*
996	踊てたちもとれ	*	
997	父千代松亀千代	父并千代松亀千代	親子三人
998	一 あゝたうと	*	*
999	千代松	*	子二人
1000	一 願たこと叶て	*	*(千代松亀千代詞)
1001	誇らしやとあやへひる	*	*(千代松亀千代詞)
1002	此御恩一期	*	*(千代松亀千代詞)
1003	ちゝにかめやへら	*	*(千代松亀千代詞)
1004	按司	*	*
1005	一 やひ大主	一 エイ大主	一 エイ大主、
1006	国元にかは	*	*
1007	按司に首尾方や	*	*
1008	是々よたしやある様に	*	*
1009	計やひ給ふれ	*	*
1010	与座	*	与座ノ大主
1011	一 拝留やへて		*
1012	親子ふやハしやひ	*	*
1013	錦うち重ね	*	*
1014	立帰るけふや	*	*
1015	誇らしやとあすか	*	嬉シハヤ有スガ、
1016	あてなしのふたり	*	アテナシノ二人ヤ
1017	いきやかしゆゝら	*	*
1018	北山ノ子兩人虎千代	虎千代	虎千代
1019	一 やあ父親よ	*	一 ヤハ父親ヨ、
1020	ワ身も諸共に	*	*
1021	列て給ふれ	*	*
1022	虎松	*	*
1023	一 わめもつれいかに	*	一 我身ノ列レ行ン
1024	やあ父親よ	*	*
1025	按司	*	*
1026	一 やあ / \	*	*
1027	おか達やこまに	*	*
1028	生れたるものよ	*	*
1029	南山にいきゆる	*	親列テ行ル
1030	道や又なひらぬ	*	*
1031	たう / \	*	*
1032	けふからや明日からや	*	*
1033	我が側におちやひ	我が側ニウチュテ	*
1034	おの素立しちをとて	*	ウノ素立シチュテ、
1035	楽よ誇らしゆん	*	*
1036	思とまでをりよ	*	*
1037	虎千代	*	*
1038	一 やあ按司かなし	*	*
1039	哀れ此二人や	*	*
1040	こまに生れとて	*	此処ニ生レテド、
1041	素立をる事や	*	素立有ル事ヤ
1042	めしやいることやすか	*	*
1043	親や南山の	*	*
1044	御臣下よやゆる	御臣下ドヤユル	御臣下ドヤヨル、
1045	素立てやり一期	*	*
1046	をいの又なゆめ	*	*
1047	是非よ知めしやうち	*	*
1048	ゆるちたはふれ	*	*
1049	虎松	*	*
1050	一 やあ父親よ	*	
1051	母親にたひんす	母親ニダイン	*
1052	捨られて居とて	捨ラレテラスガ	*
1053	又も父親の	*	*
1054	捨てまひんやれハ	*	捨テマイシヤレバ、

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
1055	やき前とワ身や	イチヤシ暮シヤビガ	如何シ暮シヤビガ
1056	いきやかしやへら	舎兄前トワシヤ	舎兄前ト我身ヤ、
1057	千代松	*	*
1058	一 やあ父親よ	*	*
1059	すたし母親も	*	*
1060	待兼ていまひん	*	待兼テ在マイラ、
1061	片時も急ち	*	*
1062	御暇よしやへら	*	*
1063	亀千代	*	*
1064	一 たう / \	*	*
1065	御暇よしやへら	*	*
1066		御立召リ	御立チ召リ、
1067		与座大主	
1068		一 タウ / \ 御暇ヨシヤビラ	
1069			
1070			
1071			
1072			虎松
1073			一 舎兄前ト我身捨テ
1074			マカイ在マイガ、
1075	虎千代	*	虎松
1076	一 虎松もともに	*	* (虎松詞)
1077	つれて給ふれ	*	* (虎松詞)
1078	虎松	*	
1079	一 舎兄前とワ身すてゝ	*	
1080	まかひいまひか	*	
1081	与座	*	与座ノ大主
1082	一 あゝ哀れはかなさや	*	*
1083	ふたつなひぬワ身の	*	*
1084	片時やならぬ	片付ヤナラン	片付ン成ラン
1085	中にはさまれて	*	*
1086	我肝くら闇に	*	*
1087	なるか心気	*	*
1088	さん山ふし	*	*
1089	一 ふたつなひぬワ身の	*	*
1090	中にはさまれて	*	*
1091	こゝろくら闇に	*	*
1092	なるかしんき	*	*
1093	按司	*	*
1094	一 あゝ人の上とやすか	*	一 ヤア人ノ上ドヤスガ
1095	かにもつれなさめ	*	*
1096	互に鳴暮ち	*	*
1097	くつさしちをれは	*	*
1098	誠留置る	*	*
1099	肝の忍はらぬ	*	*
1100		ヤア大主	ヤア大主
1101	二人共にいとま	*	*
1102	ゆるちやらしゆもの	*	*
1103	親子諸共に	*	*
1104	押列ていまふれ	*	*
1105	親子共	親子五人	
1106	一 あゝたうと	*	
1107	与座	*	与座ノ大主
1108	一 やあ按司かなし	*	*
1109	身に余る御恩	*	*
1110	打重 / \	*	*
1111	誠かや実か	*	*
1112	嬉しさのあまり	*	*
1113	誠てもおまぬ	*	*
1114	やあ按司かなし	*	*
1115	此御恩たうとさや	*	御恩タウトサヤ
1116	いつし忘れゆか	*	*



No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
1117	国元にかは	*	*
1118	年々の始	*	*
1119	ワか主人按司の	*	*
1120	十百歳のおかほ	*	*
1121	願て又親子	*	*
1122	この国に向て	*	*
1123	按司かなしおかけほさへ	*	*
1124	願よあけやへら	*	*
1125	千代松亀千代	千代松	
1126	一 やあ按司かなし	*(千代松詞)	
1127	段々の御慈悲	*(千代松詞)	
1128	いちも尽さらめ	*(千代松詞)	
1129	此御恩たうとさや	*(千代松詞)	
1130	胸に思染て	*(千代松詞)	
1131	按司かなし天の	*(千代松詞)	
1132	百といつまでも	*(千代松詞)	
1133	おかけほさへめしやいる	*(千代松詞)	
1134	御願しやへら	*(千代松詞)	
1135	謝名	*	按司
1136	一 やあ大主	*	*(按司詞)
1137	此からの先や	*	*(按司詞)
1138	船の往来も	*	*(按司詞)
1139	しけくあらたひもの	*	*(按司詞)
1140	文の通ハしに	*	*(按司詞)
1141	互に睦ましく	*	*(按司詞)
1142	取合よすらに	*	*(按司詞)
1143	与座	*	
1144	一 いやれることさらめ	*	
1145	是からの先や	*	
1146	互にむつましく	*	
1147	取合よすらに	*	
1148			千代松
1149			一 ヤア按司加那志
1150			段々ノ御慈悲
1151			言ン尽サラン、
1152			此ノ御恩トウトサヤ
1153			胸ニ思染テ、
1154			按司加那志天ノ
1155			百トイツ迄ン、
1156			御掛ケ幸召ル
1157			御願シヤビラ、
1158	与座	全人	与座ノ大主
1159	一 やあ按司かなし	*	*
1160	北山に謝名	*	*
1161	南山に与座	*	*
1162	ふたり此御代に	二人コノ世界ニ	二人コノ世界ニ
1163	生れやいをれハ	生キヲル間ヤ	生き、居ル間ヤ
1164	弓矢とりをさめ	*	*
1165	軍事やめて	*	*
1166	国公安全	不意ノ急難	不意ノ急難
1167	疑やあやへらぬ	絶テアヤビラン	絶テアヤビラン、
1168	按司	*	*
1169	一 あゝ大主の	一 ア、誠ト大主ノ	一 ア、誠大主ノ
1170	智高あらわれて	*	*
1171	謝名と大主や	*	謝名ト大主ヤ
1172	割府こゝろ	*	*
1173	やあ天底の子	*	*
1174	明日や大主の	*	*
1175	船送さんしゆもの	*	*
1176	急ちおれ／＼の	*	*
1177	用意しやうれ	*	*
1178	天底	天底ノ子	天底ノ子

No.	尚家本組踊集	恩河本小祿御殿本	兼島信備本
1179	一 拝留やへて	*	*
1180	与座	*	与座ノ大主
1181	一 あゝ御情の御趣意	*	一 御情ノ御趣意
1182	美拝とをかミやへる	*	*
1183			
1184	思きやけもすらぬ	*	思ミチャケン無ラン
1185	親子振合ひ	*	*
1186	立別るけふや	*	立帰ル今日ヤ
1187	嬉しさとあすか	誇ラシヤドアスガ	誇シヤド有スガ、
1188	誠御暇	*	誠御暇ン
1189	みよんにゆける涯や	*	*
1190	此間の名残	*	*
1191	袖に貫留て	*	*
1192	立別れ兼る	*	*
1193	馴し御側	*	*
1194	やあなし子	*	*
1195	日も暮てをれハ	*	夜モ暮テ行バ
1196	歩まらぬわみの	*	歩マラソニアモノ、
1197	けふや我が宿に	*	*
1198	押列てむきゆて	*	*
1199	明日のあけ / \ に	*	*
1200	打立んしゆもの	押列テ登ラ	押列テ登ラ、
1201	たうたう	*	*
1202	御暇よしやへら	*	*
1203	按司	*	*
1204	一 たう / \	*	*
1205	立雲ふし	*	*
1206	一 親子振合ひ	一 親子道トマイテ	一 親子道尋参テ
1207	もとていくけふや	*	*
1208	よろこひの中の	*	*
1209	なこりさらめ	*	*
1210	与座	与座ノ大主	与座ノ大主
1211	一 やあなし子	*	*
1212	御暇もすまち	*	*
1213	残ることなひらぬ	*	*
1214	たう / \ 急か / \	*	*
1215		子四人	子四人
1216		一 タウ / \ 御供シヤビラ	一 トウ / \ 御供シヤビラ、
1217	石根ふし	伊志根フシ	石ノ根節
1218	一 大主や先から	*	*
1219	按司添やあとから	*	*
1220	久志ミなどおりて	久理港トウレテ	古宇利港御リテ、
1221	舟元に登て	*	*
1222	片手しや首たち	*	*
1223	かたてしや酌とて	*	*
1224	目のしやいや大主	*	*
1225	名護渡まで見送ら	名護渡迄送ラ	名護ノ間送ラ、
1226	肝しやいや大主	*	肝シキヤ大主
1227	御宿までおくら	*	*
1228		二山和睦終	二山和睦ノ巻終
1229		桃原村 恩河朝祐	

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
1		
2	千代松亀千代出羽千瀬節	
3	一 つれなさやふたり	*
4	親に捨られて	*
5	互にふやかかれて	*
6	をるか心気	*
7	千代松	
8	一 哀れ知りめしやうれ	*
9	今出る二人や	*
10	南山の頭役	*
11	与座の大主の	*
12	兄子千代松	*
13	弟子亀千代	*
14	親の大主と	*
15	按司かなし御使に	*
16	御詔事拜て	詔イ御事拜テ、
17	北山にいまふち	*
18	引よ留られて	*
19		
20	御素立よてやり	*
21	朝夕母親の	*
22	寄こと聞る	寄事トヤユル。
23		
24	あけやうはかなさや	*
25	千とあまるまでも	*
26	敵の手にいまふち	*
27	こめられてをれハ	*
28	此間のくれしや	*
29	いきやか又めしやいら	*
30	子なゆるものや	*
31	やすてをられらぬ	安テヲラレユメ。
32	亀千代とふたり	*
33	命ちおめはまで	*
34	しらぬ山国に	*
35	とまひてむちからに	*
36	北山の按司の	*
37	御肝取直ち	*
38	二人か身にかへて	*
39	父親や	父親
40	助けほしやあもの	*
41	母親にこのやう	*
42	暇をよかたて	*
43	片時も急ち	*
44	忍ていかに	忍テ行ン。
45	亀千代	
46	一 天と地の中に	*
47	生とる者や	*
48	鳥もけたものも	*
49	情けあるならひ	マコトアル習へ。
50	やき前とふたり	*
51	人に生れとて	*
52	子と成る道の	*
53	たゝなあてからや	*
54	大事あらんすれば	*
55	おとろしやよあもの	*
56	片時も急ち	*
57	とまひて行からに	*
58	哀れ父親よ	*
59	取帰ちふたり	*
60	人に生れたる	*
61	道よたてら	*
62	千代松	

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
63	一 やあ母親よ / \	*
64	仲間ふし	
65	一 のかす思童へ	*
66	ものめかほしちをる	物思ツラシチユル。
67	おもことのあらは	*
68	語てきかす	*
69	千代松	
70	一 すたし母親も	*
71	聞留てたはふれ	*
72	朝夕思尽ち	*
73	語ゆることに	*
74	亀千代とふたり	*
75	命ちおめはまて	*
76	北山の城	*
77	とまひて行からに	*
78	哀れ父親よ	衾リ父親や、
79	助けらんしゆもの	*
80	是非よ聞分て	*
81	暇 <sup>ママ</sup> 乞てたはふれ	*
82	母親	
83	一 やあなし子	一 ヤア
84	今のことやれハ	*
85	誇らしやとあすか	*
86	あてなしのふたり	*
87	知らぬ山国に	*
88	いきやし手はなしやひ	*
89	ゆるちやらされか	*
90	我身も諸共に	我ノン諸共ニ、
91	つれていかに	*
92	千代松	
93	一 やあ母親よ	*
94	男生れとて	*
95	年の十二三	*
96	あてなしとめしやうな	*
97	おのとしになれハ	アノ歳ニナレバ。
98	いかな刀刃も	イ刀刃
99	のよておそれゆか	*
100	母親と共に	母親ン共ニ、
101	おし列てむきゆて	*
102	若か路ふちに	*
103	怪我のともあらハ	怪我之又アラバ。
104	願ておる事も	*
105	あたになててやり	*
106	不孝の罪報	不孝之罪報へ、
107	しのきしのからぬ	*
108	科の上に咎や	*
109	重なゆるつもり	*
110	是非よ聞分て	
111	頼て母親や	
112	父親の御戻り	
113	御待めしやうれ	
114		
115	一 やあなし子	*
116	云ること聞ハ	云ル事ユ聞バ、 (注:黒丸)
117	理とやゆる	*
118	願のことふたり	*
119	暇取らしゆもの	*
120	物思つめしちをて	物ユ思ツメシチユテ、
121	油断するな	*
122		
123		
124		

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
125		
126		
127	一 今のことやれハ	*
128	誇らしやとあゆる	*
129		
130	一 親の為ともて	*
131	ゆるちやらしゆすか	*
132	いきやし思くらち	*
133	我身やまちゆか	*
134		
135	一 やあ母親よ	*
136	親に孝行の	*
137	念力の太刀や	念力ノ刀
138	岩やかんしきも	*
139	当る方ワれて	*
140	のよて真実の	*
141	あたに又なゆか	*
142	頓て父親よ	*
143	列てこんしゆもの	*
144	肝の願しちをて	肝ノ願召チ
145	御待めしやうれ	*
146		
147	一 互に云語や	*
148	いやはいつきやても	イヤバイツマデン。
149	時移ちすまぬ	*
150	御暇よしやへら	*
151		
152	一 義理ともて我身の	*
153	思きやいをすか	*
154	わかれゆるきハや	*
155	袖のなみた	*
156		
157	一 やあ亀千代	*
158	陸からや今帰仁	*
159	程遠さあれハ	*
160	しらぬ山路に	*
161	いつし尋ねゆか	*
162	舟路漕渡て	*
163	急ちふしゃの	*
164		
165	一 順風のけふや	一 順風ノ？、
166	波も又ないらぬ	*
167	真艦押風に	*
168	つれていかに	列テ行ン
169	舟筑	
170	一 いまひのから	*
171	伊計離ふし	
172		
173		
174		
175		
176		
177	一 真艦おす風に	*
178	なみもおしそへて	*
179	運天のミなど	佳例ユシノ御船、ノ
180	なまとつきやる	ハルカ清サ
181	舟筑	
182	一 され運天の湊	一 サレノ、運天ノ湊ト、
183	着へたん	*
184	千代松	
185	一 かほし舟筑	*
186	渡ちたはふち	*

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
187	廻り逢とぎに	*
188	またもたのま	*
189	舟筑	
190	一 またもをかミやへら	*
191	千代松	
192	一 やあ亀千代	*
193	片時も急ち	*
194	あの村に便て	*
195	あはれ父親の	*
196	行衛尋ねらに	行衛尋ラ。
197	亀千代	
198	一 互に思尽ち	*
199	尋ねやひきやすか	*
200	若かあたならハ	*
201	いきやか又なゆら	*
202	千代松	
203	一 命ちふり捨て	*
204	君親の為に	*
205	肝尽すことの	*
206	のよてあたなゆか	*
207	油断そな互に	*
208	物めつめて	*
209	住居人	
210		
211	一 むゝ舟の入ゆる様子	一 ム、船ノキヤウル様子、
212	先出てむたねハならぬ	*
213		
214	はひ / \ ねつたあや	一 ハイ子ツタアヤ、
215	まあからやひめしやいか	*
216	千代松	
217	一 哀れ此二人や	*
218	思事のあとて	*
219	遠方の島から	*
220	旅のものやすか	*
221	知る人もをらぬ	知ル人ニヲラン、
222	頼む方なひらぬ	*
223	御情にしはし	*
224	宿からちたはふれ	*
225	住居人	
226	一 あゝ宿かひめしやうらしゆや	一 ア、宿カヘメシヤウラシユスヤ、
227	手易ひ事	*
228	先まあの国のうむて	*
229	いやれめしやいる人のきやあか	*
230	御二所の御様子	*
231	細々と語てたはふれ	*
232	千代松	
233	一 此上よやれハ	*
234	隠ちかくさらぬ	隠チカクサラ。
235	南山の頭役	*
236	与座の大主の	*
237	兄子千代松	*
238	弟子亀千代	*
239		
240		
241		
242		
243		
244		
245		
246		
247	住居人	
248	一 あゝ与座の大主の	*

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
249	思子のきやあと	*
250	やいめしやいるひ	*
251	むゝ得と拝てむてハ	*
252	まあもかはらぬ	*
253	よう似ちいまひんしやいん	*
254	あゝねつたあや拝てむてハ	*
255	年頃十二三の御様子	*
256	あゝさて	*
257	親かなしとの別れかたや	*
258	先ものにととてむてハ	先物ニ、タトテ見ラバ。
259	ちやうと二所共	*
260	鳥小のひや／＼しゆる	*
261	時分とやたひすか	時分ト、ヤテヤスガ。
262	人の親子やたいんなもの	*
263	なしおとつて	彦(注:産の誤記カ)ウトサツテ、
264	親やのふ	親ヤ、
265	あてもなひらぬしゆて	*
266	あてなしのきやの	*
267	こかとふついもしらぬ所んかひ	*
268	親拝ミいかむて	親拝ヘカ、
269	いまひんしやうち	*
270	なあおんさうかいや	ナ。ア、ウンサカウカイヤ
271	たうものさうすや	*
272	しめんしやうんな	シメシヤウナン
273	先おかんちうたやへる	先御顔重タヤバン
274	又ねつたあ親かなしいと	*
275	十一年なての三四月頃	*
276	南山の御使に	南山ノ御使
277	まひんしやうちやれハ	イマンシヤウキヤレハ
278	按司の御側に	*
279	物巧ミしやうる	*
280	親泊大主むて	*
281	いやれる人の	イヤレヘル人ノ
282	按司に色々美よんにゆけて	*
283		
284		
285		
286		
287		
288		
289		
290	与座引とめて	*
291	南山の様子	*
292	仔細聞合しゆる分別やて	委細聞合シユカ分別ヤテ
293	按司からの御心実	*
294	段々のこと	*
295	又十七八の	*
296	女性方拝領やて	マサカリノ女性方拝領ヤテ
297	度々御酒盛	*
298	大主の御取持	*
299	大粧至極むちや	*
300	大主も果報な人たやへる	*
301	あんし大主も	*
302		
303	御暇みよんにゆける	*
304	隙やないらぬ	*
305		
306	けふの明日ない	今日ノ明日ナ
307	明日のあさてなひ	アサテナイ
308	頓て夫婦の縁につなかつて	影テ夫婦ノ縁ニツナガリテ
309	あけての冬にや	明△ノ冬ニヤ
310	男子繁昌	*

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
311	弥事六ヶ敷ない立	彌事ユ六ヶ敷ナイ立
312	又々次年にや	*
313	次男迄なし出しめしやうち	次男迄彦(注:産カ)出シメシシヤウチ
314	おれからや御めいとんたの中	*
315	又思子のきやあの	又思子ノキキヤガ
316	かちすかり / \ しめしやうれハ	*
317	故郷の事も	*
318	思出し / \	*
319	なしよたれしめしやいす聞ハ	泣シユダリシメシヤス聞バ
320	あゝ至極哀れたやへる	*
321	千代松	
322	一 やあ亀千代	*
323	ふたり命はまで	*
324	とまひ / \ にきやすか	*
325	今のことやれハ	*
326	いきやかしゆら	*
327	亀千代	
328	一 やあやき前よ	*
329	兎角此国に	*
330	いちまでもともて	*
331	むすてある縁に	*
332	思ひ引されて	*
333	妻なし子捨て	*
334	隠れやひいまひら	*
335	捨られる親子	*
336	いきやかしやへら	*
337		
338		
339		
340	住居人	
341	一 あゝ人の上むてもおもあらぬ	*
342	され此ことやいへも	サレ此事ヤイヒ
343	御世話あめしやうむな	御世話ヤメシヤウナン
344	なまさきおんにゆけよたる	*
345	大主のあやあと	*
346	むちゆなての若夏に	三年ナテノ若夏ニ
347	此世見捨やへて	此見捨ヤベテ
348	おれからや大主も	*
349		ウト思子ノキヤニカハラレテ
350	思子のきや引進の為	*
351	大原ニ出て	*
352	鎌手唐て	*
353	鎧長刀不足なく	不足ナク
354	武芸の数々	*
355	御嗜みの御様子	*
356	おの事と大主や	*
357	跡先帰ゆすや	*
358	合点やこと	*
359	子のきあかに	*
360	武芸御指南めしやうち	*
361	按司の御腰立	*
362	からめかしゆる	*
363	御計むていやへん	*
364	此事や按司に	タウ此事ヤ按司ニ
365	願筋美よんにゆけて	*
366	済ぬかきりやきやしもならぬ	*
367	なまつんとゑひ拍子やすや	*
368	按司の大將に	*
369	謝名の太主むていふる人の	*
370	このころ按司に	*
371	まる云しち	度々諫言シチ
372	御仕置もゑひころ取直ち	*



No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
373	与座も早く国元に	与座シ早ヤ国元ニ
374	かへしめしやいることむて	帰ヘシユル事シテ
375	おんにゆけめしいる	ウシニユケメシヤル
376	場所むていやへん	場シテ云ヘイ事
377	片時も早く	*
378	願ひ立めいやいへれ	*
379	千代松	
380	一 今のことやれハ	*
381	誇らしやとあゆる	*
382	やあ / \	*
383	引合しの御縁	*
384	拝む御情けに	*
385	段々の肝入	*
386	いちも尽さらぬ	*
387	此御恩一期	*
388	ちゝにかめら	*
389	住居人	
390	一 たうけふや先	一 タウ / \ 今日ヤ先
391	我宿におんつかいしち	我屋ニ御ン使シチ
392	御休 [欠] めしやうち	御休息召チ
393	明日にしち随分	*
394	御願濟しめしやい [欠]	御願スマシメシヤイバル
395		先御入メシヤヘビリ
396		
397	一 是や南山の臣下	*
398	与座の大王	*
399	あゝ国々 [欠] 按司部	
400	勢ひ争やい	
401	軍事起ち	
402	国よ疲らしゆる	
403	ワか主人按司	
404	やすてやすまらぬ	
405	南山十五ヶや	
406	討よ平けて	
407	先や四方の海	
408	波風も立ぬ	
409	按司の御喜び	
410	御万人のまきり	
411	安て楽ミゆる	
412	時と又やすか	
413		
414	北山や今に	
415	軍事やまぬ	
416	殊に南山たはかゆる	
417	含ミてやりあれば	
418	此事よ主人按司	
419	御気の毒めしやうち	
420		
421		
422	たかいにあらそいの	
423	こゝろとりおさめ	
424	北山と南山	
425	和睦なるやれは	
426	御万人のまきり	
427	上下もともに	
428	いちこたのしみに	
429	くらそてやりともて	
430		
431		
432		
433	美よんきをかて	
434	きやる事やすか	

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
435	十年あまるまでも	
436	ひきよとめられて	
437	何分の御返事	
438	たえて【なひぬ】(なひぬ) あれは	
439	いたつらに年月	
440	おくるしんき	
441		
442	いちやんてやりきやしゆか	
443		
444	武士の身の習ひの	
445	心うつしちをて	
446	くらちをてひならぬ	
447	けふや名にたちゆる	*
448	三月の三日	*
449	なれしふるさとの	*
450	名残たちまさて	*
451	子共ひきつれて	共引列テ
452	遊てわすら	*
453	やあ/\虎千代	*
454	虎松も押つれて	*
455	出やうれ/\	*
456		附此時虎千代虎松腰ニ鎌差鑓長刀持出ル
457	与座道行言葉	
458	一 野原出て見れハ	一卓△ 野原出テ見レハ
459	千種萌出て	木草盛り出テ
460	吹送る風の	*
461	匂のしほらしや	*
462	たう/\此辺にをとて	タウ/\辺ニヲトテ
463	花よ詠めらに	*
464	同人	
465	一 やあ/\なし子	*
466	春の草の葉や	*
467	みとりさしそひて	*
468	見れハとし寄も	*
469	わかくなゆさ	*
470	虎千代	
471	一 やあ父親よ	*
472	又も春來れハ	*
473	木草たいもしゆひ	四木草タンシユヘ
474	やかて父親も	*
475	むかしくり戻ち	*
476	花さきゆる節も	*
477	あひとしやへる	*
478	与座	
479	一 されは/\	
480	与座	
481	一 やあ/\	一 ヤア/\彦(注:産カ)子
482	けふ【や】(の)誇らしや>	*
483	物にたとられめ	*
484	たう/\習ひとたる手並	*
485	振立て見せれ	*
486	虎千代	
487	一 おう	一 拝ン留ヒテ
488		但此ノ時兩人替リ/\立与座笛吹ノ真似ニ テ鑓長刀ノ手アル
489		
490		一 武士ノ身ヤ空ニ
491		飛鳥ノ心
492		見詰テン手ニヤ
493		取ヤナラン
494		
495		

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
496		
497		
498		
499	与座	
500		
501		
502	一 たう / \ 習ひとたる手並	*
503	残らすに見せれ	*
504		
505		
506		
507	与座	
508	一 あゝ出来た / \	
509	与座	
510	一 やあ / \ 虎松もひとつ	
511	振立ひ見せれ	
512	虎松	
513	一 おう	
514	与座	
515	一 あゝ出来た / \	一 ハア出来タ / \
516		
517		
518	虎千代	
519	一 やあ父親よ	*
520	南山もけふや	南山ノン今日ヤ
521	此遊ひあやへひめ	遊ヘアヤバイミ
522	与座	
523	一 南山もけふや	一 南山ノン今日ヤ
524	段々の遊ひ	*
525	野原から浜辺	*
526	歌や舞ひ遊て	*
527	是よりも増る	是ヨリン増テ
528	にきやかとやゆる	*
529	虎松	
530	一 やあ父親よ	*
531	おれ程の増る	*
532	国やてと兎角	*
533	一期南山の	*
534	沙汰よめしやら	沙汰ユメシヤイル
535	与座	
536	一 いや / \	*
537	おか達かおのほとに	*
538	なやいまたをれハ	*
539	南山の事も	*
540	いちゆて慰ミゆん	*
541	互に云語ひや	*
542	いつまでもあかぬ	*
543	日も暮ていきゆひ	日ンサカテヲモノ
544	てよ / \ 宿に戻ら	*
545	恩納ふし	
546	一 戻る道すから	*
547	かたるいこと葉や	語ル言ノ葉ヤ
548	きゝゆる袖までも	*
549	露とおきゆる	露ト落ル
550	千代松亀千代出羽長金武ふし	
551	一 情けある人の	*
552	ことの葉の匂ひ	*
553	便て行先や	*
554	頼む親泊	*
555	今と御城元	御城元今ト
556	尋て着る	寄キヤル
557		

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
558		一 タウ / \ 御取次スラニ
559	亀千代	
560	一 御門番取御取次頼ま	一 御門番記御取次頼マ
561		
562	一 たるかやいめしやいら	*
563	千代松	
564	一 南山の臣下	*
565	与座の大主の	*
566	兄【弟】子千代松	嫡子千代松
567	弟子亀千代	*
568	按司かなし拝て	
569	願事のあとて	*
570	よしれやいをる次第	ヨシリヤイヲモノ
571	御取次頼ま	好アル様ニ御取次タノマ
572		
573	よたしや有様に	
574	おんにゆけてたはふれ	
575	門番	
576	一 此様御取次しやへら	*
577	同人	
578	一 され拝まれよめしやいん	一 サレ御行合ヨメシヤン
579	これにいまふれ	是ニ扣テイマイリ
580		[欠]
581		[欠]
582		[欠]
583		[欠]
584		[欠]
585		[欠]
586	千代松	[欠]
587	一 哀此二人や	[欠]
588	与座の大主の	[欠]
589	兄子千代松	[欠]
590	弟子亀千代	[欠]
591	父親の事と	[欠]
592	十と余る道も	[欠]
593	御引留られて	[欠]
594	別やいをれハ	[欠]
595	いきやるいきなひに	[欠]
596	なやい又いまひら	[欠]
597	思ひ身にあまて	[欠]
598	肝もきもならぬ	[欠]
599	亀千代とふたり	[欠]
600	命ち思はまて	[欠]
601	波路はる / \ と	[欠]
602	よしれやいきやへたる	[欠]
603	慈悲よ父親や	[欠]
604	ゆるち給ふれ	[欠]
605	若かおゆるしの	[欠]
606	ならぬ事やらハ	[欠]
607	此二人やこまに	[欠]
608	引よ留めしやうち	[欠]
609	是非共に父親や	[欠]
610	ゆるち給ふれ	[欠]
611	亀千代	[欠]
612	一 やあ按司かなし	[欠]
613	やき前とふたり	[欠]
614	人に生れとて	[欠]
615	子と成道の	[欠]
616	立なあてからや	[欠]
617	天道の下をとて	[欠]
618	おとろしやよあもの	[欠]
619	頼て願事や	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
620	美よんにゆかてたはふれ	[欠]
621	按司	[欠]
622	一 あゝ童へあてなしの	[欠]
623	願事のしほらしや	[欠]
624	聞る袖詰め	[欠]
625	露とおきゆる	[欠]
626	やあ千代松亀千代	[欠]
627	屹度片付て	[欠]
628	返事よさんしゆもの	[欠]
629	おの内や先	[欠]
630	客屋に叩てをれ	[欠]
631	やあ仲宗根のひや	[欠]
632	急ち客屋につれていけ	[欠]
633	仲宗根のひや	[欠]
634	一 をかんちゆめやへて	[欠]
635	同人	[欠]
636	一 たう / \	[欠]
637	御供しやへら	[欠]
638	按司	[欠]
639	一 やあ / \	[欠]
640	ふたりおしつれて	[欠]
641	今のことやれは	[欠]
642	きやああれハすみゆか	[欠]
643	考てきかす	[欠]
644	【惣人数】	[欠]
645	【一 おう】	[欠]
646	惣人数	[欠]
647	一 おう	[欠]
648	親泊大主	[欠]
649	一 され按司かなし	[欠]
650	与座の大主と	[欠]
651	此国の様子	[欠]
652	細々の事も	[欠]
653	呑込いをやへれハ	[欠]
654	若か南山の	[欠]
655	取帰ち後に	[欠]
656	御恩うち背ち	[欠]
657	物巧ミあらハ	[欠]
658	事や六ヶ敷	[欠]
659	成立る積り	[欠]
660	親子諸共に	[欠]
661	引よ留置て	[欠]
662	年月よ重ね	[欠]
663	御恩蒙らハ	[欠]
664	世々の御譜代	[欠]
665	同前に思て	[欠]
666	按司かなし御奉公	[欠]
667	思はまる筈たひもの	[欠]
668	此筋に御片付	[欠]
669	およたしやゝあやへらに	[欠]
670	仲宗根のひや	[欠]
671	一 親泊いやれること	[欠]
672	此国の仕置	[欠]
673	事洩てすまぬ	[欠]
674	急ち此事や	[欠]
675	御究よめしやうれ	[欠]
676	按司	[欠]
677	一 一段なことよ / \	[欠]
678	やあ / \	[欠]
679	謝名の大主や	[欠]
680	いきやか / \	[欠]
681	謝名の大主	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
682	一 され此事や兼々	[欠]
683	美よんにゆけることに	[欠]
684	南山の御所存	[欠]
685	考てミやへれハ	[欠]
686	北山と南山や	[欠]
687	共に天かめて	[欠]
688	互に地やふまぬ	[欠]
689	敵や又あらぬ	[欠]
690	一時の威勢	[欠]
691	争の為に	[欠]
692	国よ疲らしやひ	[欠]
693	人よそくなとて	[欠]
694	軍事しゆすや	[欠]
695	道ならぬあれハ	[欠]
696	互に此間の	[欠]
697	恨ミ打忘て	[欠]
698	島国の為に	[欠]
699	御計のあすと	[欠]
700	御是非ある御代の	[欠]
701	御主人の印し	[欠]
702	急い道に向て	[欠]
703	心実の御相談	[欠]
704	仕合やおまな	[欠]
705	肝くらさ巧て	[欠]
706	親子諸共に	[欠]
707	引よ留置ハ	[欠]
708	光ある御名や	[欠]
709	南山にあとて	[欠]
710	北山の悪名	[欠]
711	流ゆる程り	[欠]
712	又いかな按司添の	[欠]
713	慈悲の肝かさて	[欠]
714	色々の情け	[欠]
715	たへめしやうちてやり	[欠]
716	人の御臣下の	[欠]
717	誠絶果て	[欠]
718	こまに肝寄る	[欠]
719	事や又なひさめ	[欠]
720	いらぬ慈悲尽ち	[欠]
721	あたなとるものも	[欠]
722	むかしから今に	[欠]
723	数やしらぬ	[欠]
724	片時も急ち	[欠]
725	御暇よたはふれ	[欠]
726	天底の子	[欠]
727	一 やあ大主	[欠]
728	計略偽の	[欠]
729	世の中よやれハ	[欠]
730	たゝ真肝しちをて	[欠]
731	たまされてすまぬ	[欠]
732	南山の様子	[欠]
733	みすく取究め	[欠]
734	兎角片付や	[欠]
735	ある筈よたひもの	[欠]
736	おの内やまつ	[欠]
737	留ておきやへらに	[欠]
738		[欠]
739	一 やあ天底の子	[欠]
740	人のことの葉や	[欠]
741	胸内の割府	[欠]
742	いこと葉の上に	[欠]
743	肝の底までも	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
744	探りきる程の	[欠]
745	智高けなひぬあれハ	[欠]
746	いきやし島国の	[欠]
747	治め又なゆか	[欠]
748	亀千代か今の	[欠]
749	御使の御趣意	[欠]
750	又千代松亀千代か	[欠]
751	今の願立や	[欠]
752	誠真実の	[欠]
753	心から出て	[欠]
754	偽の巧ミ	[欠]
755	絶てないぬあすや	[欠]
756	取よ究めとん	[欠]
757	取よ定めとん	[欠]
758		[欠]
759	され按司かなし	[欠]
760	むかしから今に	[欠]
761	治まとる御代や	[欠]
762	君臣下ともに	[欠]
763	義理の道守て	[欠]
764	島国の治	[欠]
765	道直にあとて	[欠]
766	御万人もおれ / \ の	[欠]
767	願事も遂て	[欠]
768	義理の道筋も	[欠]
769	取堅守て	[欠]
770	御主人の御為	[欠]
771	島国の為に	[欠]
772	命ち捨ゆすや	[欠]
773	露ちらすことに	[欠]
774	思果そゆへと	[欠]
775	いかな武士国の	[欠]
776	太刀かたなてすも	[欠]
777	のよておそれゆか	[欠]
778	誠天道の	[欠]
779	御慎あとて	[欠]
780	島国の仕置	[欠]
781	御念入めしやうち	[欠]
782	人のよしあしも	[欠]
783	さやか照りワかち	[欠]
784	よたしやすや揚て	[欠]
785	わるさすや捨て	[欠]
786	いさめこと好て	[欠]
787	そさめこと嫌て	[欠]
788	人の口開ち	[欠]
789	人の肝あけて	[欠]
790	義理の御捌の	[欠]
791	道広てからや	[欠]
792	跡影【も】よ隠す	[欠]
793	深山住人も	[欠]
794	走よ集まやひ	[欠]
795	ワか御主の御為	[欠]
796	誠肝尽ち	[欠]
797	働かな置め	[欠]
798	照り増る光	[欠]
799	出る日のことに	[欠]
800	四方の海山も	[欠]
801	渡るかたなひらぬ	[欠]
802	恵ミ照渡て	[欠]
803	諸離や諸島	[欠]
804	海に舳渡	[欠]
805	山に橋かけて	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
806	ミつきものあけて	[欠]
807	御詔事拝て	[欠]
808	異変事なひらぬ	[欠]
809	そむくものをらぬ	[欠]
810	御万人のまきり	[欠]
811	生楽よ誇て	[欠]
812	弓矢取治め	[欠]
813	軍さ事やめて	[欠]
814	上下の治め	[欠]
815	かためやい置は	[欠]
816	いきやし道背ち	[欠]
817	弓引のされか	[欠]
818	急ち此事や	[欠]
819	御究めよめしやうれ	[欠]
820	按司	[欠]
821	一 あゝ義理情け尽ち	[欠]
822	謀ゆる事や	[欠]
823	肝にひし／＼と	[欠]
824	感してとをゆる	[欠]
825	天底	[欠]
826	一 あゝ此上や存す	[欠]
827	絶てあやへらぬ	[欠]
828	親泊	[欠]
829	一 され按司かなし	[欠]
830	大主の計	[欠]
831	気のつかぬあやへたぬん	[欠]
832	誠我々の	[欠]
833	おとさあるゆへと	[欠]
834	目の前勇力の	[欠]
835	只一事たので	[欠]
836	遠く計ゆる	[欠]
837	智高けなひぬあれハ	[欠]
838	御耳聞らしやひ	[欠]
839	御肝つてあもの	[欠]
840	御答めやひらに	[欠]
841	をかんちゆめやへら	[欠]
842	按司	[欠]
843	一 いや／＼	[欠]
844	おれうれもよたしや	[欠]
845	いつれ肝そろて	[欠]
846	忠節の心	[欠]
847	ふかさあるゆへと	[欠]
848	はめて諫ゆる	[欠]
849	肝の根のしほらしや	[欠]
850	又互に胸くたち	[欠]
851	謀めたることの	[欠]
852	たちたゝぬことや	[欠]
853	我身に又あれハ	[欠]
854	のよておかたちに	[欠]
855	答のかけられか	[欠]
856	此事にいへも	[欠]
857	氣遣はしするな	[欠]
858		[欠]
859	やあ謝名の太主	[欠]
860	くらさある主人	[欠]
861	頼てをるやれハ	[欠]
862	たとひ気にさかて	[欠]
863	腹立よしちも	[欠]
864	押かへし／＼	[欠]
865	諫めやい呉れよ	[欠]
866	闇の灯火の	[欠]
867	道しるへ頼ま	[欠]



No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
868	此間のあやまり	[欠]
869	気の毒とやゆる	[欠]
870	謝名	[欠]
871	一 あゝ美よんきこと拝て	[欠]
872	袖とぬらしやへる	[欠]
873	人の御主人の	[欠]
874	沙汰されるものや	[欠]
875	昔から今に	[欠]
876	ためし数あすか	[欠]
877	あやまちのあとて	[欠]
878	御異見よすらハ	[欠]
879	御語よめしやうち	[欠]
880	御肝あらためて	[欠]
881	御油断のないらぬ	[欠]
882	御守りのあすと	[欠]
883	御慈悲ある御代の	[欠]
884	光あらハれて	[欠]
885	世々のよゝとゝめ	[欠]
886	御名や朽やらぬ	[欠]
887	あゝなまの御詔事	[欠]
888	拝て御万人や	[欠]
889	有難さ思て	[欠]
890	目眉打笑て	[欠]
891	向て来る顔も	[欠]
892	目の前引寄て	[欠]
893	北山の榮る	[欠]
894	しるしたやへる	[欠]
895	按司	[欠]
896	一 や大主	[欠]
897	南山に遣ハしゆる	[欠]
898	返書調らす	[欠]
899		[欠]
900		[欠]
901	謝名	[欠]
902	一 おうやあ天底の子	[欠]
903	急ち調やひ	[欠]
904	上てきやうれ	[欠]
905	又千代松亀千代	[欠]
906	列てくう	[欠]
907	天底	[欠]
908	一 おう	[欠]
909		[欠]
910	一 やあ仲宗根のひや	[欠]
911	与座の大主	[欠]
912	急ち呼てきやうれ	[欠]
913	仲宗根	[欠]
914	一 拝留やへて	[欠]
915	仲宗根	[欠]
916	一 与座の大主	[欠]
917	列てきやへたん	[欠]
918	按司	[欠]
919	一 やあ大主	[欠]
920	つかいしめたすや	[欠]
921	別事やあらぬ	[欠]
922	尋ねほしやあてと	[欠]
923	呼ちむちやる	[欠]
924	与座	[欠]
925	一 あゝのふ事か急ち	[欠]
926	仰すめしやうれ	[欠]
927	按司	[欠]
928	一 大主や南山に	[欠]
929	なし子いくたひか	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
930	与座	[欠]
931	一 男子ふたりたやへる	[欠]
932	按司	[欠]
933	一 兄子千代松弟子亀千代へ	[欠]
934	与座	[欠]
935	一 扱々いきやし按司かなし	[欠]
936	知りめしやうちいまひら	[欠]
937	按司	[欠]
938	一 おの事とやゆる	[欠]
939	大主よ尋ひて	[欠]
940	ふたり押列て	[欠]
941	遙々とこまに	[欠]
942	渡てきちをん	[欠]
943	呼寄てあれハ	[欠]
944	頓てこんしゆもの	[欠]
945		[欠]
946		[欠]
947	千代松亀千代	[欠]
948	一 やあ父親よ	[欠]
949	父	[欠]
950	一 やあなし子	[欠]
951	東江ふし	[欠]
952		[欠]
953	一 あけゆめかやゆら	[欠]
954		[欠]
955		[欠]
956		[欠]
957		[欠]
958	与座	[欠]
959	一 やあなし子	[欠]
960	赤子の時分	[欠]
961	別れやいをれハ	[欠]
962	哀れ面影も	[欠]
963	夢現心	[欠]
964	行逢ててやり知よめ	[欠]
965	いやなあれハ	[欠]
966		[欠]
967	一 やあ父親よ	[欠]
968	赤さての内に	[欠]
969	振別れてをれハ	[欠]
970	いきやかなたいまひら	[欠]
971	音伝もなひらぬ	[欠]
972	思ひ身に余て	[欠]
973	肝もきもならぬ	[欠]
974	亀千代とふたり	[欠]
975	命ち思はまて	[欠]
976	しらぬ此国に	[欠]
977	とまひ / \ にきやすか	[欠]
978	誠拜ゆすや	[欠]
979	夢かやゝへひら	[欠]
980	按司	[欠]
981	一 やあ千代松	[欠]
982	やあ亀千代	[欠]
983	親の為ともて	[欠]
984	波路遙々と	[欠]
985	渡てきある心	[欠]
986	感してとをゆる	[欠]
987		[欠]
988	やあ大主	[欠]
989	此間やおれ / \ の	[欠]
990	片付かぬあてと	[欠]
991	留置もあたる	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
992	にやゝかたつきて	[欠]
993	暇とらしゆもの	[欠]
994	親子押列て	[欠]
995	誇て立戻れ	[欠]
996	踊てたちもとれ	[欠]
997	父千代松亀千代	[欠]
998	一 あゝたうと	[欠]
999	千代松	[欠]
1000	一 願たこと叶て	[欠]
1001	誇らしやとあやへひる	[欠]
1002	此御恩一期	[欠]
1003	ちゝにかめやへら	[欠]
1004	按司	[欠]
1005	一 やひ大主	[欠]
1006	国元にかは	[欠]
1007	按司に首尾方や	[欠]
1008	是々よたしやある様に	[欠]
1009	計やひ給ふれ	[欠]
1010	与座	[欠]
1011	一 押留やへて	[欠]
1012	親子ふやハしやひ	[欠]
1013	錦うち重ね	[欠]
1014	立帰るけふや	[欠]
1015	誇らしやとあすか	[欠]
1016	あてなしのふたり	[欠]
1017	いきやかしゆゝら	[欠]
1018	北山ノ子兩人虎千代	[欠]
1019	一 やあ父親よ	[欠]
1020	ワ身も諸共に	[欠]
1021	列て給ふれ	[欠]
1022	虎松	[欠]
1023	一 わめもつれいかに	[欠]
1024	やあ父親よ	[欠]
1025	按司	[欠]
1026	一 やあ / \	[欠]
1027	おか達やこまに	[欠]
1028	生れたるものよ	[欠]
1029	南山にいきゆる	[欠]
1030	道や又なひらぬ	[欠]
1031	たう / \	[欠]
1032	けふからや明日からや	[欠]
1033	我が側におちやひ	[欠]
1034	おの素立しちをとて	[欠]
1035	楽よ誇らしゆん	[欠]
1036	思とまでをりよ	[欠]
1037	虎千代	[欠]
1038	一 やあ按司かなし	[欠]
1039	哀れ此二人や	[欠]
1040	こまに生れとて	[欠]
1041	素立をる事や	[欠]
1042	めしやいることやすか	[欠]
1043	親や南山の	[欠]
1044	御臣下よやゆる	[欠]
1045	素立てやり一期	[欠]
1046	をいの又なゆめ	[欠]
1047	是非よ知めしやうち	[欠]
1048	ゆるちたはふれ	[欠]
1049	虎松	[欠]
1050	一 やあ父親よ	[欠]
1051	母親にたひんす	[欠]
1052	捨られて居とて	[欠]
1053	又も父親の	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
1054	捨てまひんやれハ	[欠]
1055	やき前とワ身や	[欠]
1056	いきやかしやへら	[欠]
1057	千代松	[欠]
1058	一 やあ父親よ	[欠]
1059	すたし母親も	[欠]
1060	待兼ていまひん	[欠]
1061	片時も急ち	[欠]
1062	御暇よしやへら	[欠]
1063	亀千代	[欠]
1064	一 たう/\	[欠]
1065	御暇よしやへら	[欠]
1066		[欠]
1067		[欠]
1068		[欠]
1069		[欠]
1070		[欠]
1071		[欠]
1072		[欠]
1073		[欠]
1074		[欠]
1075	虎千代	[欠]
1076	一 虎松もともに	[欠]
1077	つれて給ふれ	[欠]
1078	虎松	[欠]
1079	一 舎兄前とワ身すてゝ	[欠]
1080	まかひいまひか	[欠]
1081	与座	[欠]
1082	一 あゝ哀れはかなさや	[欠]
1083	ふたつなひぬワ身の	[欠]
1084	片時やならぬ	[欠]
1085	申にはさまれて	[欠]
1086	我肝くら闇に	[欠]
1087	なるか心気	[欠]
1088	さん山ふし	[欠]
1089	一 ふたつなひぬワ身の	[欠]
1090	申にはさまれて	[欠]
1091	こゝろくら闇に	[欠]
1092	なるかしんき	[欠]
1093	按司	[欠]
1094	一 あゝ人の上とやすか	[欠]
1095	かにもつれなさめ	[欠]
1096	互に鳴暮ち	[欠]
1097	くつさしちをれは	[欠]
1098	誠留置る	[欠]
1099	肝の忍はらぬ	[欠]
1100		[欠]
1101	二人共にいとま	[欠]
1102	ゆるちやらしゆもの	[欠]
1103	親子諸共に	[欠]
1104	押列ていまふれ	[欠]
1105	親子共	[欠]
1106	一 あゝたうと	[欠]
1107	与座	[欠]
1108	一 やあ按司かなし	[欠]
1109	身に余る御恩	[欠]
1110	打重/\	[欠]
1111	誠かや実か	[欠]
1112	嬉しさのあまり	[欠]
1113	誠でもおまぬ	[欠]
1114	やあ按司かなし	[欠]
1115	此御恩たうとさや	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
1116	いつし忘れゆか	[欠]
1117	国元にかは	[欠]
1118	年々の始	[欠]
1119	ワか主人按司の	[欠]
1120	十百歳のおかほ	[欠]
1121	願て又親子	[欠]
1122	この国に向て	[欠]
1123	按司かなしおかけほさへ	[欠]
1124	願よあけやへら	[欠]
1125	千代松亀千代	[欠]
1126	一 やあ按司かなし	[欠]
1127	段々の御慈悲	[欠]
1128	いちも尽さらめ	[欠]
1129	此御恩たうとさや	[欠]
1130	胸に思染て	[欠]
1131	按司かなし天の	[欠]
1132	百といつまでも	[欠]
1133	おかけほさへめしやいる	[欠]
1134	御願しやへら	[欠]
1135	謝名	[欠]
1136	一 やあ大主	[欠]
1137	此からの先や	[欠]
1138	船の往来も	[欠]
1139	しけくあらたひもの	[欠]
1140	文の通ハしに	[欠]
1141	互に睦ましく	[欠]
1142	取合よすらに	[欠]
1143	与座	[欠]
1144	一 いやれることさらめ	[欠]
1145	是からの先や	[欠]
1146	互にむつましく	[欠]
1147	取合よすらに	[欠]
1148		[欠]
1149		[欠]
1150		[欠]
1151		[欠]
1152		[欠]
1153		[欠]
1154		[欠]
1155		[欠]
1156		[欠]
1157		[欠]
1158	与座	[欠]
1159	一 やあ按司かなし	[欠]
1160	北山に謝名	[欠]
1161	南山に与座	[欠]
1162	ふたり此御代に	[欠]
1163	生れやいをれハ	[欠]
1164	弓矢とりをさめ	[欠]
1165	軍事やめて	[欠]
1166	国公安全	[欠]
1167	疑やあやへらぬ	[欠]
1168	按司	[欠]
1169	一 あゝ大主の	[欠]
1170	智高あらわれて	[欠]
1171	謝名と大主や	[欠]
1172	割府こゝろ	[欠]
1173	やあ天底の子	[欠]
1174	明日や大主の	[欠]
1175	船送さんしゆもの	[欠]
1176	急ちおれ/\の	[欠]
1177	用意しやうれ	[欠]

No.	尚家本組踊集	宮良殿内本
1178	天底	[欠]
1179	一 拝留やへて	[欠]
1180	与座	[欠]
1181	一 あゝ御情の御趣意	[欠]
1182	美拝とをかミやへる	[欠]
1183		[欠]
1184	思きやけもすらぬ	[欠]
1185	親子振合ひ	[欠]
1186	立別るけふや	[欠]
1187	嬉しさとあすか	[欠]
1188	誠御暇	[欠]
1189	みよんにゆける涯や	[欠]
1190	此間の名残	[欠]
1191	袖に貫留て	[欠]
1192	立別れ兼る	[欠]
1193	馴し御側	[欠]
1194	やあなし子	[欠]
1195	日も暮てをれハ	[欠]
1196	歩まらぬわミの	[欠]
1197	けふや我か宿に	[欠]
1198	押列てむきゆて	[欠]
1199	明日のあけ / \ に	[欠]
1200	打立んしゆもの	[欠]
1201	たうたう	[欠]
1202	御暇よしやへら	[欠]
1203	按司	[欠]
1204	一 たう / \	[欠]
1205	立雲ふし	[欠]
1206	一 親子振合ひ	[欠]
1207	もとていくけふや	[欠]
1208	よるこひの中の	[欠]
1209	なこりさらめ	[欠]
1210	与座	[欠]
1211	一 やあなし子	[欠]
1212	御暇もすまち	[欠]
1213	残ることなひらぬ	[欠]
1214	たう / \ 急か / \	[欠]
1215		[欠]
1216		[欠]
1217	石根ふし	[欠]
1218	一 大主や先から	[欠]
1219	按司添やあとから	[欠]
1220	久志ミなどおりて	[欠]
1221	舟元に登て	[欠]
1222	片手しや首たち	[欠]
1223	かたてしや酌とて	[欠]
1224	目のしやいや大主	[欠]
1225	名護渡まで見送ら	[欠]
1226	肝しやいや大主	[欠]
1227	御宿までおくら	[欠]
1228		[欠]
1229		[欠]